

FGORPG ノンケがエンジョイプレイ

秋の自由研究

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

皆様こんにちは、ノンケです。

偉大なるRTA先駆者様に感銘を受けつつ、その後ろをただ走るだけでは満足できなかったので独自にエンジョイプレイ風小説です。初心者で、文章も拙い若輩の身ですが、楽しんで書いていきたいです。みんなも、エンジョイプレイ風小説書いて、増やそう！

Fate／RTA小説の偉大なる先駆者の皆様  
でち公様

<https://syosetu.org/novel/2136>

90／

八雲 紅様

<https://syosetu.org/novel/2155>

70／

胡椒こしよこしよ様

<https://syosetu.org/novel/2142>

47／

お月見桜様

<https://syosetu.org/novel/2148>

71／

暁真様

<https://syosetu.org/novel/2149>

00 /

mobimobi様

86 / <https://syosetu.org/novel/2149>

ほわいとぬう様

97 / <https://syosetu.org/novel/2198>

リメイク版投稿し始めました。

FGO DLC実績『鬼血の継承者』獲得

87 / <https://syosetu.org/novel/2797>

## 目次

### 番外編纏め

番外編：竜殺しを討ち果たせ	その一	1
番外編：竜殺しを討ち果たせ	その二	6
幕間の物語：XXの事件簿・新宿編	その一	11
幕間の物語：XXの事件簿・新宿編	その二	17
幕間の物語：XXの事件簿・新宿編	その三	22
幕間の物語：XXの事件簿・新宿編	その四	28
ゲーム開始〜カルデア入り直前		
趣旨説明とキャラクター		35
ゲーム開始		40
事前準備	その一	45
事前準備	その二	50
事前準備	その三	55
カルデア入り〜特異点F		
カルデア入り	その一	60
カルデア入り	その二	65
藤丸視点：炎の海の中で		71
特異点F	その一	77
特異点F	その二	83
特異点F	その三	90
特異点F	その四	96
藤丸視点：今、ここに生きる俺達が		102
Grand Order	その一	111
Grand Order	その二	117

拠点フェイズ

拠点フェイズ その一

拠点フェイズ その二

拠点フェイズ その三

拠点フェイズ その四

第一特異点 邪竜百年戦争 オルレアン

欠けた聖女 その一

欠けた聖女 その二

欠けた聖女 その三

欠けた聖女 その四

騎剣強襲 その一

騎剣強襲 その二

特異点に行く その一

特異点に行く その二

特異点に行く その三

ティーエルにて その一

ティーエルにて その二

藤丸視点：竜魔対蛇盾

鬼と鬼 その一

鬼と鬼 その二

鬼と鬼 その三

影よりの一手 その一

影よりの一手 その二

騎兵と語らう その一

騎兵と語らう その二

251

246

240

234

228

222

215

210

204

198

192

186

180

174

168

162

156

150

145

140

135

129

123

388	エンドロール・オルレアン	その二
383	エンドロール・オルレアン	その一
377	竜の魔女	その二
372	竜の魔女	その一
365	藤丸視点：アンタは一体誰なんだ	
360	行け、聖女よ	その三
355	行け、聖女よ	その二
350	行け、聖女よ	その一
344	悪竜騎士	その六
337	悪竜騎士	その五
331	悪竜騎士	その四
326	悪竜騎士	その三
320	悪竜騎士	その二
314	悪竜騎士	その一
308	オルレアンへ	その三
303	オルレアンへ	その二
298	オルレアンへ	その一
292	???視点：竜の騎士	
286	藤丸視点：復活の朝	
281	言える言葉	その二
276	言える言葉	その一
271	天空の激闘	その四
266	天空の激闘	その三
261	天空の激闘	その二
256	天空の激闘	その一

イベント特異点

拠点フェイズ その一

拠点フェイズ その二

拠点フェイズ その三

拠点フェイズ その四

賈作逆襲画廊 ルーブル その一

賈作逆襲画廊 ルーブル その二

賈作逆襲画廊 ルーブル その三

賈作逆襲画廊 ルーブル その四

賈作逆襲画廊 ルーブル その五

賈作逆襲画廊 ルーブル その六

賈作逆襲画廊 ルーブル その七

賈作逆襲画廊 ルーブル その八

賈作逆襲画廊 ルーブル その九

賈作逆襲画廊 ルーブル その十

賈作逆襲画廊 ルーブル その十一

賈作逆襲画廊 ルーブル その十二

賈作逆襲画廊 ルーブル その十三

賈作逆襲画廊 ルーブル その十四

賈作逆襲画廊 ルーブル その十五

賈作逆襲画廊 ルーブル その十六

賈作逆襲画廊 ルーブル その十七

賈作逆襲画廊 ルーブル その十八

賈作逆襲画廊 ルーブル その十九

賈作逆襲画廊 ルーブル その二十

393

399

404

409

415

421

427

432

437

443

449

454

459

464

470

475

481

487

492

498

504

510

517

522

鷹作逆襲画廊 ルーブル その二十一 528

幕間の物語：竜騎士対燕返し 534

幕間の物語：希欧神話対戦 540

鷹作逆襲画廊 ルーブル その二十二 546

鷹作逆襲画廊 ルーブル その二十三 552

鷹作逆襲画廊 ルーブル その二十四 558

エンドロール・ルーブル その一 564

エンドロール・ルーブル その二 569

### 拠点フェイズ

拠点フェイズ その一 575

拠点フェイズ その二 581

拠点フェイズ その三 586

拠点フェイズ その四 592

### 第二特異点 永続狂気帝国 セプテム

紅い少女 その一 598

紅い少女 その二 604

狂乱の渦 その一 610

狂乱の渦 その二 616

ローマ帝国の崩壊 その一 621

ローマ帝国の崩壊 その二 627

ローマ帝国の崩壊 その三 633

ローマ守護チーム その一 639

ローマ守護チーム その二 644

ローマ守護チーム その三 650

作戦開始 その一 656



神というモノ	その二	800
神というモノ	その一	795
猫と和解せよ	その二	789
猫と和解せよ	その一	783
形ある島へ	その二	777
形ある島へ	その一	771
ローマの進撃	その四	765
ローマの進撃	その三	760
ローマの進撃	その二	754
ローマの進撃	その一	748
幕間の物語：目覚めの兆し		742
ガリア戦役	その五	736
ガリア戦役	その四	729
ガリア戦役	その三	722
ガリア戦役	その二	715
ガリア戦役	その一	709
デオンの潜入作戦	その二	704
デオンの潜入作戦	その一	699
攻勢前夜	その二	694
攻勢前夜	その一	688
女王と筋肉	その四	683
女王と筋肉	その三	678
女王と筋肉	その二	672
女王と筋肉	その一	667
作戦開始	その二	661

嵐の覚醒	その一	935
藤丸視点：巨壁の前で		930
デオンの潜入作戦	その六	925
デオンの潜入作戦	その五	920
蘇れ嵐	その四	915
蘇れ嵐	その三	910
蘇れ嵐	その二	905
蘇れ嵐	その一	900
ローマ（特異点）の休日	その三	894
ローマ（特異点）の休日	その二	889
ローマ（特異点）の休日	その一	884
嘗ての後悔	その三	878
嘗ての後悔	その二	873
嘗ての後悔	その一	868
デオンの潜入作戦	その四	863
デオンの潜入作戦	その三	858
勝利への道を	その四	853
勝利への道を	その三	846
勝利への道を	その二	840
勝利への道を	その一	833
愛憎の洞	その四	827
愛憎の洞	その三	822
愛憎の洞	その二	817
愛憎の洞	その一	811
神というモノ	その三	805

嵐の覚醒	その二	940
嵐の覚醒	その三	945
???サイド：征服の鼓動		950
決戦へ向け	その一	955
決戦へ向け	その二	960
決戦へ向け	その三	966
万夫不当の猛将	その一	971
万夫不当の猛将	その二	976
次なる目覚め	その一	981
次なる目覚め	その二	986
幕間の物語：瓦解の時		991
連合ローマの崩壊	その一	996
連合ローマの崩壊	その二	1001
連合ローマの崩壊	その三	1006
連合ローマの崩壊	その四	1011
メドゥーサ・キャットサイド：破壊の申し子		1016
ネロ・ジャンヌオルタサイド：我こそがローマである		1021
レオニダス・ダレイオスサイド：激突の砂原		1026
メドゥーサ・キャットサイド：キャットの魔術		1031
ネロ・ジャンヌオルタサイド：余こそがローマである		1037
レオニダス・ダレイオスサイド：決着の咆哮		1043
特異点征服	その一	1048
特異点征服	その二	1054
特異点征服	その三	1059
エンドロール・セプテム	その一	1064

エンドロール・セプテム その二

拠点フェイズ

拠点フェイズ その一

拠点フェイズ その二

拠点フェイズ その三

拠点フェイズ その四

拠点フェイズ その五

拠点フェイズ その六

拠点フェイズ その七

拠点フェイズ その八

第三特異点 英雄艦隊封海 オケアノス

孤独な船出 その一

孤独な船出 その二

大海賊のシマヘ その一

大海賊のシマヘ その二

大海賊のシマヘ その三

大海賊のシマヘ その四

大乱の跡 その一

大乱の跡 その二

魔の海 その一

魔の海 その二

黒髭惨状 その一

黒髭惨状 その二

黒髭惨状 その三

黒髭惨状 その四

1069

11091104109910941089108410791074

11831178117311681163115711521147114211361130112511201114

荒れる大海 その一

荒れる大海 その二

荒れる大海 その三

傷付いた雷光 その一

傷付いた雷光 その二

傷付いた雷光 その三

王の領域へ その一

王の領域へ その二

幕間の物語：イスカンダル 本拠地にて

嘗ての大戦から その一

嘗ての大戦から その二

嘗ての大戦から その三

嘗ての大戦から その四

逃れし者たち その一

逃れし者たち その二

逃れし者たち その三

女神の旗の下に その一

女神の旗の下に その二

海賊の宴 その一

海賊の宴 その二

悪魔の証明 その一

悪魔の証明 その二

悪魔の証明 その三

悪魔の証明 その四

悪魔の証明 その五

悪魔の証明	その六	
作家の見る海原	その一	
???視点：海賊島にて		
作家の見る海原	その二	
――に宿る	その一	
――に宿る	その二	
苦悩を許さぬ双戟	その一	
苦悩を許さぬ双戟	その二	
苦悩を許さぬ双戟	その三	
苦悩を許さぬ双戟	その四	
苦悩を許さぬ双戟	その五	
苦悩を許さぬ双戟	その六	
幕間：海神の都へと		
伝説の都を目指して	その一	
伝説の都を目指して	その二	
伝説の都を目指して	その三	
伝説の都を目指して	その四	
薄暗い海の底に	その一	
薄暗い海の底に	その二	
大準備	その一	
大準備	その二	
大準備	その三	
幕間の物語：女流作家の葛藤		
大準備	その四	
大準備	その五	

大準備 その六

其の船の名は その一

其の船の名は その二

幕間：煮えたぎる海賊

其の船の名は その三

其の船の名は その四

其の船の名は その五

1484147914741469146414591454

## 番外編纏め

### 番外編：竜殺しを討ち果たせ その一

皆さんこんにちは、ノンケ（特別編）です。

さあ、やってまいりました没データ有効活用回。別名録画データが尽きたので過去の録画で誤魔化す回。いやあ、実際二回分くらいは誤魔化し利く位にはたつぷりと量があるので積極的に誤魔化してイケー、ホライケー。

「さあ、死力を尽くしてくるが良い！」

さて、開始の画面。ジークフリートさんが堂々と仁王立ちしながら此方を待ち構えている訳ですが……止まっているなら全力攻撃って事で、速攻ブチかますズエと言わんばかりに私、この時サーヴァント香子さん以外の二人を突撃させるといふ脳死プレイを展開。

正直、この時忘れてたんですよ、ジークさんの防御性能……馬鹿じゃねえのかお前よお!? お陰でデオン君ちゃんの攻撃は僅かな傷、メドゥーサさんのの攻撃に至っては全然通じず弾き返されるっていうね。間抜け過ぎない？

『ダメだ！ ジークフリートは背中以外の弱点以外はほぼ無敵って言うても良いくらいの硬さを誇ってる！ 真つ向からじゃ勝負にもならないよー！』

このドクターのアドバイスで漸く思い出して、メドゥーサさんとデオン君ちゃん退かせようとしたんですけど、間に合いませんよそりやあ！ ジークさんの太い！ 剣術が光る光る（恐怖）

「させません……！」

「っ！ 凌がれたかつ！」

ここでマシユちゃんの迫真の割り込みがなかったら普通にメドゥーサさん達ザツクリいかれてたと思います。スツゲエ大上段……（恐怖）マシユちゃんの盾にぶつかる音もマジで迫真で、顔が青くなりました（半ギレ）

「見事な守り、なれど我が主の命により押し通らせてもらう！ はあ



「ああっ！」

「っ！ させま、せん！」

とはいえ、ジークフリートさん相手じゃ、マシユちゃん一人ではどうにも不利の様ですね。普通に遜色ない強さなんですけど、贗作英霊とは（禅問答）

「——その隙、突かせて頂きます！」

けどマシユちゃんだけだったのはジークフリートさんの隙を突く為だ。その隙を誰が突くと思う？ レオニダスだよ（EVLIT）マシユちゃんの作った隙に乗り、回り込んでいたんだよ！ 背後になあ！

正直、ここで勝ったと思いましたよ。如何にジークさんとてサーヴァント連合軍の全力攻撃なら打ち破れる、と思っていきましたから。

「貰った！」

「……そうはいかん！」

「なにっ!？」

この一瞬で、マシユの盾を剣で抑え、僅かに体を傾けるだけでレオニダスの必殺の一撃の芯をずらすとか……ホント、背中的一点以外全て無敵っていうチート権能ありとはいえそんな賭けにも等しい事するとか、やはりヤバイ（確信）

「何と……！」

「流石に人数の不利を覆すことは出来ないがそれでも。足掻くだけは……足掻かせてもらうとする！ すまないが、覚悟を決めてくれ……！」

おおっと（感嘆符） ここでジークフリート氏、まさかの回転攻撃ですぞwwwwまるで子供の様な動きですが回転力がダンチでマジでコマ染みてますぞwwww喰らったら死にそう（小並感） 子供の様な動きでもセイバー最強クラスがやるとこれだよ（真顔）

「くっ！ 皆さん、ご無事ですか?!」

「問題はありません！」

「……まさか、本当に刃が欠片も通らないとは！」

「よしんば石にした所で、アレは破壊できませんか……！」

「四者がほぼ同時に打ち掛かってなお、未だ無傷。完璧な不意打ちを退けるだけの起点と実力は、オルレアンで見せたそのままである、贗作であっても全く衰えてはいない。」

「下がるか……？ ならば今度は此方から行かせていただく！」

「衰えるどころか寧ろこつちに押し切るつもりで来るんですよえコレが！ 一気に踏み込んで来ちゃ……つたあ！」

「マスター！ 下がるんだ！」

しかしここで筋力Aのデオン君ちゃんが乱入！ 何気にジークさんよりも上なんですよね。盾役とかこれマ？ 普通にアタッカーにする方が良いだろこれ……

その辺りはほんへにマルタさん並の暴力で文句を言うとして、スゴイですよデオン君ちゃん、あのジークさんの大剣の一撃を突きで捌いてるんですから。パワーも技量もとか贅沢なしーちきんだ……

「如何に竜殺しの英雄とはいえ、このシユヴァリエ・デオンが居る限り、好き勝手にはさせないさー！」

「竜騎士たる貴殿が相手とは……！」

オルレアンでは果たされなかつたもう一人の竜殺し対竜騎士の決闘！ これは痺れるあこがれるウ！ とか一瞬興奮しきって指揮を忘れてるんですよこの私。思考がガバガバやねん……暫くデオン君ちゃんとジークさんの剣舞を見守つちやつてました（正直）

ここにマシユとレオニダス王が援護に割り込んで、初めて再起動したんですよ……馬鹿かな？

「やあああああつー！」

「くつ、ううー！」

「この後にはまだバーサーカーも控えております！ 申し訳ないが、ここで消耗する訳にも行きません！ 一気に仕留めさせてもらいましようー！」

さあここでマシユちゃんのシールドチャージから繋げて、二連シールドバツシユ体を崩し、がら空きのジークフリートさんの胴体に槍の一撃がヒットオ！ 手際があまりにも鮮やか+114514NP

『本造院君！ 一気に畳みかけようー！』

◇了解！

ここです(暗黒微笑) とばかり、ロマニの指示に便乗！ 私も香子さんの援護攻撃を添えて、メドゥーサさんを実撃させて、今度こそ背中  
中の弱点を突くう！ つもりだったんですけど……下がるかと思っ  
たらまさかの前に出てくるっていうね……ジークフリートさん用の  
AI組んでるとしか思えない位に躊躇なく前に出てきましたよねえ  
……

「なっ!?」

『嘘だろ!? 直撃するのに全く躊躇しないとか!』

怪物……! (レイザー並感) 実際香子さんの魔術直撃なんざ躊躇  
しないとか幾らなんでも肝が据わり過ぎてませんか? 実際俺が  
ジークさんの能力持つってても間違いなくビビって逃げると思います  
(ダークソウル履修並感)

「抜かせはしません!」

「丸い盾に、この槍捌き……成程、確かに容易く抜けるとは思えないな  
……!」

しかしそれに怯まないレオニダスさんの漢具合よ。一步も下がら  
ず盾で衝撃を上手く逃がす辺りとか、やっぱりデオン君ちゃんとは違  
う巧さを感じますねえ!アレだけの大剣の一発を往なしつつ、脇に  
槍を叩き込んで一步下がらせるっていうやり取り、正に互角のやり取  
りって感じで、カッコ良くないですかあ?

「——私の事を見落としてはいませんか?」

でももうメドゥーサさんの鎖が回り込んでるんだよなあ?! 伸ば  
した腕を完全に鎖で確保! グググつと縛り上げて行動不能! 俺  
の勝ち。なんで負けたか、明日までに考えといてください。とか煽っ  
て居た覚えがあります(死亡フラグ)

「甘い!」

ここで引つ張られるのに逆らわず、寧ろ逆に高く飛んだッ! その  
ままメドゥーサさんの上を取り、宙を舞ってその背後に逆に回る姿は  
南斗水鳥拳を彷彿とさせるような。う、美しい……ハッ!

「滅茶苦茶な……っ!」

「この程度の……窮地を、乗り越えられないようでは……」

＜宙を舞いながら鎖を振り払い、そのままの勢いで着地する。伏せていたその瞳が此方を射抜いた時、ゾツとする。まるで、この程度些事であるかのように、瞳には余裕すらあるのだ。

「邪竜を討ち果たす事等出来はしないさ」

ヒーロー着地から顔を上げつつこつちに視線向けるのとか、もう完全に向こうがヒーローではありませんか？ 翻ってこつち、多人数でジークさんをフルボッコ。(品性が)糞だあ……！

「康友、コイツは……！」

＜あぁ、純粹に強いぞ！

＜ギヤハハハハハハ！ いいぜえ、攻勢倍プツシユだあ……！

蛮族思考止めるオ！（本音） ナイスウ（棒読み） 兎に角ここでは選択肢上を選んでましたね。一瞬下選んでせんぐんとつげきー、わー、とかやっても良かったですけど。もうそれ、わーじゃなくてワー、q、になりそうだから自重汁。

『……検証をする時かな。例の件の』

「検証?！」

『絵が彼らの楔になって居る、という件さ……待っていてくれ、直ぐに位置を割り出すから、場所がわかったら何人かをジークフリートの抑えとして回し、残りでそこを叩く!』

＜それが突破口になるかは、果たして分からない。しかし、可能性があるのであれば、そこに賭けるしかない。貴方達が領き、それぞれ構えを取るのと同じくして……ジークフリートもまた、その剣を正眼に構えた。受けて立つ、とでも言いたげに。

「……そう簡単に、やらせるつもりは無い……！」

さあ、更なる激闘の様相を呈して来たところで、今回はここまで。ご視聴、ありがとうございます。結構カットと編集で誤魔化してますがホントは倍近く

## 番外編：竜殺しを討ち果たせ その二

皆さんこんにちは。ノンケ（特別編その二）です。

さあ前回から続くジークフリートさんとの死闘コレで二回目。果たして編集で何処までコレだけの量の録画データを料理できるか、心してご覧ください。因みにもう投稿者は色々限界を超えています。

「ジークフリートはマシユ殿と私が！」

「私も行く！ 三人で抑え込めば流石に、邪魔も出来ないだろう！」

〈援護を香子に任せ、ここの指揮はロマニと立香に。そして残る貴方とメドゥーサは、楔の絵を発見した直後に破壊を試みる為に構える。〉

「頼む、三人共！ ジークさんを何とか抑えてくれ！」

「了解！ 皆様参りますぞ、全軍突撃！」

さあレオニダス王の号令に応えマシユ、デオン君ちゃんも突撃！

さあ最初にぶつかっただのはマシユちゃんですね。腰の入ったジークさんの剣をしっかりと凌いでいきます。マシユちゃんの硬い防御が好きだったんだよ！（大胆な告白）

「ヌー！」

「マシユ、ナイスセーブ……！ そこだ！ 喰らえジークフリート！」

デオン君ちゃんの剣がヒット！ 刃が立ってきちゃったよ……（恍惚）

ダメージは全く通ってませんが、それでもマシユへの注意を逸らすくらいは余裕です。そして一瞬の隙を突いてマシユちゃんがジークさんを弾き飛ばしました。

「くっ！」

「申し訳ありませんが、邪魔はさせません！」

ジークさん邪魔とかしてないですけど、まあ楔を破壊しようとしたら絶対妨害して来ると思うのでこれが先制防御ちゃんですよ（護身完成）

『ええつと……良し、特定できた！ 壁際にかかっている……竜の絵だ！』

「竜の絵?! えつと……」

壁際となると、絵の場所は……ありました。アレ、ファブニールの絵と思わゆるんですね、アレ。黒いですし、模様も入ってますから。成程ジークフリートさんならあの絵が一番相応しいじゃないですか（満面の笑み） よーしぶち殺してやるぜ！（マジキチスマイル）

「康友！ 絵の破壊頼んだ！」

よっしゃ任せろー（バリバリ） と、ここでホモ君を操作しようとしたんですけど、しかしジークさんが三人からバックステップで撤退！で……さあ構えを取りました。アポクリファ履修済みマスター君にはおなじみのアレです。

「っ！ 済まんが、そう簡単に終わらせる訳にも行かんのな……！」  
<ジークフリートがその剣の柄を回転させ……そこに現れたのは青い宝玉。現れたその途端に、剣から迸る膨大な魔力。踏み出そうとした足が、止まる。一步でも踏み出せばそれは解き放たれる事を、理解した！

「こ、これは……!?!」

「撃たせるなよ。万が一、ここを打ち破り同胞を巻き込むのは、此方とて気が済まない」

『全員気を付けて！ 間違いなく宝具だ！ しかも大出力だぞ！』

要するに『絵を攻撃するな、やったらこつちも自爆覚悟でぶつ放す』って事なんですよね。いやあ、ビビった。マシユの防御があるとはいえそんないきなりぶっこまれたら全滅もあり得る大出力宝具です。ほんへでは違うって？ ほんへが可笑しいんだよ（絶望）

「……そんな事したら、楔諸共消し飛ぶぞ！」

「どうせ楔を破壊されたらマトモに戦えはしない。ならば、そうなる前に諸共に打ち砕くのも一つの策ではある」

発想の物騒さがあまりにも薩摩なんだよなあ……もうちよつと自重してくださいジークさんお願いします！ 貴方の後輩にそんな姿見せたら泣きますよ！ 薄幸クソ可愛ホームンクルス君とか！ 自称天才天女剣士サーヴァントちゃんとか！

「ドクター！ この狭い場所で、敵に宝具なんて使われたら先輩方が

……!」

『……マスター達の安全を考えれば、向こうの言葉に従うしかないか』

ジークさんが『お? やんのか? こっちにはバブルムンクあるんやぞ?』みたいなヤクザ的な脅しをするなんて解釈違いです(真顔)

「随分と、えげつない脅しをするじゃないか……!」

「俺もここを守るように任された身だ。どのような手でも取る。生憎と、聖人君子という訳でも無い凡夫なのでな。俺は」

そういうセリフをポンとくれるのは凡夫とは呼ばないんですがそれは。覚悟ガンギマリ勢はこれだから……! 知ってるんだぞ、そのセリフの裏には『俺を犠牲にしても役目を果たす』とかいう自分を捧げるのに躊躇いを持たない大英雄ソウルが隠れているんやろ、騙されんぞ(ジョージ)

「悪いが、真っ向勝負を強いらせてもらう……!」

「ジークフリートを抑えてくれ! 皆!」

ここで勝利への一点弱点狙いが実質光の護封剣(概念)されました。マシユちゃんレオニダス王とデオン君ちゃんが引き続き足止めし、香子さんが援護、メドゥーサさんは隙を伺う感じになってますが、状況は停滞……あまりに停滞……ツ! こんなんじゃ、全然満足出来ねえぜ……!

「……マスター、ここは出し惜しみをしている時ではありません」

〈言葉を呟いたのはメドゥーサ。彼女が見つめる先には自分の右手。すなわち……令呪。

「小細工をしてもダメなら、真正面から削り切るしかないでしょう」

『だ、ダメだ。さつき言っただろう! 彼は真っ向からの攻撃なんて殆ど受け付けないんだぞ!』

「生半可な攻撃なら……でしよう? 生半可でなければいいのです。宝具を使用します」

メドゥーサさんからこんな積極的な提案が出るとかこの時はお、オツパゲドン……! どっちかと言えば受け身、命令を待つタイプのメドゥーサさんですから。

「あのサーヴァント相手に通じそうな宝具を持っているのは私だけな

ので……シキブの宝具では出力不足でしょう」

「あう……申し訳ありません」

「……分かった。ジークフリートに目に物見せてやるさ。」

「ダメだ。通じるかどうか分からない一手を打つわけにはいかない。」

「で、この選択肢な訳ですが……ここで日和るとか男じゃない。という事で当然選択肢正位置（選択肢上）今はロマン厨の様に令呪切り……！」

『た、確かに宝具なら可能性はあるけど……しくじったら!?!』

『こっちの負けが濃厚になるだけさロマニ。やらなかったらこの苦しい状況がずっと続くだけ。どっちがマシだい?』

ダ・ヴィンチちゃんの悪魔的囁きがキモチクテ……タマラナイ……（ダ・ヴィンチちゃん押し）でもみんな好き（掌返し）山菜野郎は絶対に俺の手で殴り倒す（掌大回転ゲッター2）

『……よーしやるぞ！ 綱渡りなんて特異点なら何時もの事……だと思おう！』

『まだ回数が少ないからねえ。という事でこっちに異存はない。存分にやりたまへ』

「許可が下りた。であれば、後は万全の状況で直撃させるのがマスターとしての仕事だった。出し惜しみはしない。貴方は歩き出し、立香の隣に並んだ。視線が合う。一瞬の視線のやり取りで、大雑把ではあるが意図を伝え……立香が動く。」

「三人共！ こころからは全力で！ 対処させる暇を与えないで！」

さあさここから藤丸君の鋭い指令が光る！ 先ずマシユちゃんに突撃を指示。大盾を構えてチャージを抑え込むジークさんですが、その脇から二人のサーヴァント、レオニダス王デオン君ちゃんが乱入し、追撃！ 効いてないにしても全く反撃を許す様子なし！ おっ……すうっげ……（感心）

「っ！」

「申し訳ありませんが、反撃を許せば此方がさらに不利になるのは明確！」



「突き抜けさせてもらおう……！」

さあ押し込む押し込む、ジークさんはここまで反撃できず……と、思っていたんですよここまででは。しかしながらここで、ジークさんが尋常を遥かに超えた大英雄の意地を見せてくれたんですよね……(戦慄)

「——ならば、突き抜ければいいさ！」

ここからが、マグマなんです(注目) 突撃してきたマシユの一撃を、まさかの上体逸らして力を逃し……しかしこれで終わらない。

上体を逸らすにしても、グインとこう、頭で弧を描く様に、しかもその勢いに任せ、剣を振り回してデオン君ちゃん、レオニダス王を纏めて切り払う！ さっきの回転攻撃に上体逸らしを組み込んだ絶技。上体逸らしてるから背中を見せない防御も兼ねてる。さっすがジークフリートさんだア……(恍惚)

ㄨㄨつ、今だ！

しかし 逃 さぬ(躊躇ZERO) 三人の攻勢を凌ぐためのその絶技こそが隙なんだよなあ……(全力)

「優しく、蹴散らしてあげましょう……『<sup>ベルレフオーン</sup>騎英の手綱』！」

さあここから、メドウーサさんが流星となって低い軌道から、上半身を押し潰す様に天馬の突進が突き刺さり……ばあくはっ！(師匠並感) 三人はすでに撤退し、ジークさんの運命は！

……って所で、カットして繋げた部分に至るんですよ。いやあー、何とか収めました……(疲労困憊) しかし、これを丸ごとぶち込むとなると、やっぱりキツイっす……(素直) カットした部分も一杯あるんだよなあ……と言った所で、ジークフリートさんのバトルシーンは、こんな感じですよ。

ご視聴、ありがとうございました。

幕間の物語：XXの事件簿・新宿編 その一

「早速ですがマスター君！ 逮捕です！」  
「なんでさ」

思わず、といった様子の言葉を、本造院康友は零すしかなかった。そりゃあ、朝食堂に言ったら速攻で逮捕の一言である。ボケている頭も絡まってそう言わざるを得ない。人として生を受けて十数年、おてんとさんに顔向けできない部分など……まあ、文字通り顔は向けられるかどうかわからないが。

「……なんだ、女性サーヴァントから『カルデアに妙なチンピラが！』とか通報でもあったか？ 誤解を解きたいからその人の元へ連れて行ってくれ」

「あ、いえすみません。逮捕というのは言葉のアヤです。実際マスター君は私に逮捕されても文句言えない顔してるとは思いますけれど」

「おいゴラ」

思わず傍らのバットを掴んでしまう。もはやそれは周知の事実とは言えど、ここまでドストレートに言うのはちよつと……流石に悲しいというか。言い方を考えて欲しかった。

「付き合って欲しいだけですよ。ちよつと、検挙したい所があつて」  
「検挙お？」

「そうです。実はとある特異点にて、不審なアルトリウム反応がですね……この反応は私としても、見逃すわけにはいかないというか」

もうこの時点で帰リたかった。アルトリウム反応とかいう、下手するとぐだぐだ粒子以上の厄ネタ。こういうのは立香の担当だろう、と周りを見回せば……最近加入して来た謎のグッパイセンに絡まれている。取り敢えず頼りにならない事だけは分かった。

「というか、初対面からセイバーウォーズ2まで。バディを組んだ私の誘いですよ？ 素直に乗ってくれたっていいじゃないですか」

「だからだよ。お前さん、どれだけハチャメチャしたかももう忘れたと申すか」

目の前の女性サーヴァント……謎のヒロインXXとは、喜ぶべきなのか、嘆くべきなのかは分からないが、どうにも合縁奇縁で結ばれている。サバフェスの頃合いから始まりそして、あのトンチキ特異点でも、立香を救う為に共闘した。その高い実力は確かに頼りになる。なるのだが……

『うう……お願いします……養ってください……事件解決まで……』  
『フォーリナー反応！ え？ 目的の奴とは違う？ いいえフォーリナー反応を叩くのが私の任務ですので！ あ、ちよ、腰にしがみ付かないでください！』

だの。

『いやぁ頼りになる助手を携えての宇宙の旅は最高ですねえ！ あ、マスター君ご飯の準備お願いします！』

『あれ？ マスター君どうして念仏なんか唱えてるんですか？ おーい？』（風呂上り）

だの……抱いた苛立ちは天井知らずである。思わず怒りゲージでご無礼も辞さぬ。

このXXというサーヴァント。その実力でも補え切れない程に残念な部分もまた多い。完璧な人物など存在しない、その見本のような人物なのである。因みに上記四つ目だけは本気と書いてガチの説教をかました。嫁入り前の女が肌を晒すとは何事か。まあ人それぞれだとしてもせめて、せめて最低限肌を隠せ、と。

『うーん……じゃあおねーさんの事、マスター君が貰ってください？』  
とか言う一言で説教の量は僅か一瞬で五倍近く増加した。発言に気を付けると、後で会話ログを見直したら三十回くらい言っていた。  
「……記憶がありません！」

そしてこれである。残念の見本市の様な人ではあるのだが……しかし、何の根拠もないような事を突然言い出す様な悪辣さは無いのは知っている。なんだかんだ言っただけで真面目でサバフェスの時も、セイバーウォーズの時も、黒幕への強力な一矢になってくれた。

「……つたく、分かった分かった！ 特異点に関しては俺も見逃す訳にやいかんからな。付き合うよ！」

「本当ですか！ やりました！ マスター君が付いてるなら百人力ですとも！」

故に、こう言ってしまうのは必然というか……しかし、流石にこのサーヴァントと二人つきりで事件解決、となると間違いなく自分の健康レベルは低下するだろうと。

「で、何処なんだ其処は。場所を教えろ。茶々と解決して帰るぞ」

「あの大阪の子ですか？」

「遠からず……じゃなくて、関係ないから。うん」

どうにもカルデアに沢山のサーヴァントが増え、その個性も強いためか……何とか頭に残ってしまう事があるので。今回はその一例だと思いたい。

「まあでもちやちやつとは無理だと思いますよ？」

「……なんでだよ」

「いやー、実はその特異点の規模なんですけどもね？ あのー……新宿って所があるじゃないですか。あそこの地下丸々、何かに使われているみたいで」

……？

「はあ!？」

「XXちゃんの言う事は紛れも無い事実なんだよねえ。いや、立香君か君に解決を依頼しようと思っていた時に急に飛び出して行っちゃったから説明が遅れたけど」

「マジで新宿の地下に、新宿の特異点の半分を丸々使って……」

頭が痛くなってきた。それだけの場所を使って、作るのがアルトリウムとは。いや希少な物資であることは間違いないのだろうが、しかし何かが間違ってる気がしないでもないと思う。

「……なんで新宿なんだ？ ダ・ヴィンチちゃん」

「新宿を根城にしていた悪徳魔術使い達、居ただろう？ なんていうか、完全に野良の輩達とかがさ」

「あー……居たなそんなん」

「居たんですか？ もしかしてそれも私が仕事しなければならない案

件ですか？」

それは間違いないと思うが……しかしながら今回はそれ『も』ではなく、それ『を』だとは思う。ダ・ヴィンチの喋り方からして。

「で、その悪徳魔術使い君達はどんな物でも使う主義だ。あのアルトリウムとかいう謎物質でもあっても。まあ寧ろ、あの悪食新宿じゃなければ多分、あんなバカな物が有っても捨てられるだけだったと思うよ」

「つまり何でも使う主義がアカン方向で出て来ちゃったと……ぐだぐだ粒子なんかも渡しちやいけねえなあれは」

渡した途端にぐだぐだ新宿く幻想英霊七番勝負くとか開始しかねない。なんか混ぜっついている気がする。気にしない。泣きたい。

「で、それでスペース・レオナルド。そのアルトリウムの量なのですか」

「スペース・レオナルドって結構カッコいいよね。まあそれは兎も角、アルトリウムの量だっけ？ いやあ聞いて驚かないですよ？ ギルガメッシュの全力全開の宝具に匹敵……いや多分凌駕するレベルのエネルギーを発する量が貯蔵されると来た！」

チート筆頭ルみたいな金ピカガのあの宝具……思わず隣のXXと目を見合わせた。

「……もうそれは違法所持とかそういうレベル越えてますよ!？」

「私としては速攻この危険物質をどうにかして欲しいわけ。今の新宿は特異点全部核爆弾みたいなもんだから、起爆したらまーた人理焼却だねはっはっはっ」

笑いごとではない。XXもここまでの事態は全く想像していなかったようで、頭を抱えてしゃがみ込んでいる始末。あのあっけらかんとした性格が特徴のXXが、である。

「これはコスモ刑事として最低限の職務を全うしないと……フォーリナーハンターやってる場合じゃないですよ……!？」

「というかアルトリウムってユニヴァースでもドチャクソ希少なもんじゃないのかXX姉さんよお!? なんて新宿の地下にそんなもんがパンパンに埋まつてるんだ！ 説明してくれ頼むから!？」

「あ、お姉さんっていうのいいですね。今度からはそう呼んでください。年上ですし」

「今んな事言ってる場合かあ!？」

「やっぱりいつも通りだった……とはいえ、流石に彼女も現状の危険さは理解しているのか調子を取り戻して尚、少々顔色は良くない。弱りましたね……これだけ大規模な摘発になるとは。マスター君だけでは人手が足りないかもしれません」

「応援呼ぶか？」

「そうした方が良いでしょうね。でも、誰を呼びましょうか」

彼の禿げた脳裏に浮かぶのは……白百合の騎士、妖艶な女怪、誰よりも頼りになる女流作家、その他自分が一番頼りにしているサーヴァント達なのだが。生憎とその誰もが予定があると言っていた。それ故に、今日は久しぶりに自分も一人で過ごそうと考えていた位で……

「XX、誰か候補は？」

「マスター君こそ、あのフランスセイバーとか、スネークウーマンとか、それこそ紫式部先生とか、他にも居るじゃないですか」

「全員今日は非番を謳歌してるよ。邪魔は出来ない」

「人理の危機なのに……」

確かに人理の危機だが、こんなスカポンタンな人理の危機で折角の非番を潰すのは流石に可愛そうな気がした。本造院康友君はサーヴァント達に優しいのである。

「……仕方ないですねコレは。何とかこの人理の危機を共に救ってくれる頼もしいサーヴァントを探すしかないでしょう!」

「つつても、誰を誘うかねえ……」

思考を回す。誰が良いだろうか。こんな、スットコドツコイな人理の危機に巻き込んでもいいサーヴァントが良い。巻き込んでも罪悪感の無いサーヴァントが良いのだが。そう上手く行くのかは、神のみぞ知る、と言った所である。

くという事でく

その神はどうかやらハゲの嫌いなクソツたれビツチな女神さまだった模様で……このようなメンツが、三十分程後には集っていた。

「ねーねーヤスー。わたしたち、これ終わったら何か食べたい」

「おう。任せろジャック。こんな事に巻き込まれた詫びだ、すつからかんになるまでやってやるからな……！」

「わーい」

「まあマスター。そこまで思いつめるな、気楽にいこうぜ？」

「いや、この明らかにヤバい雰囲気で気楽にっつて方が無理じゃないっすかね……伝説の狩人はやっぱ違うんだなあ……」

「そういうのは違うと思うわよ？ でもアルトリウム……実際にマハトマを感じる名前、楽しそうね！」

「なんじゃこれカオスワロタ。沖田にラインしたらろ」

「こんなスカポンタンな人理の危機に巻き込んでしまい、本当に申し訳ない。二人を除き彼は、参加している全員に土下座したくなった。」

## 幕間の物語：XXの事件簿・新宿編 その二

新宿の夜闇、電気すらない深夜。月の光に照らされる白い髪。肌。そして幼い体軀には余りにも不相応な……大振りのナイフ。それをまるで見せつけるように腰に下げて、楽しそうにゆらゆらと少女は揺れている。

その少し先には、広大な地下へと続く底見えぬ階段が一つ。

「……じゃあまあ、これより状況を開始するかね。まずはジャック！早速令呪の大盤振る舞いだ。地下を霧の都に沈めてやりな」

「——おっけい」

にやりと笑い、まずはアサシン、ジャック・ザ・リツパーが前に出る。直後、彼女の近くに現れたランタン、そこから湧き出したスモッグがゆつくりと階段を伝い、シウルシウルと地下へと流れていった。「どれくらいかかる？」

「んー、すぐには無理、だと思う」

「オーケイ、気楽に待とうじゃないか。じゃあ今の内に作戦の確認をしたい。構わないな諸君」

——作戦といっても、シンプルである。

要するに相手に一切の抵抗を許さない電撃戦。ジャックの宝具で弱体化&視界を封じて一気に地下に居る敵に打撃を加え、突破。最悪倒さなくてもいい、ダメージを与えジャックの宝具、暗黒霧都ザ・ミストでも十分倒し切れる程度に弱体化させれば此方の勝利である。

「前衛はXX、信長公。中衛にマンドリカルド。後衛にエレナさん、テルさん。遊撃をジャックが担当する。速度が重要だ、足を止めずに駆け抜けるから、逸れないようにするのが注意事項。大丈夫かな？」

「えつと……因みに俺が中衛の理由は？」

「前衛、後衛をカバーできそうな君に任せたいんだ、期待してるぜマイフレンド」

「プレッシャーが重ええええええええええ！」

因みにこの人選は、取り合えず人材を探す為に雑に頼った信長(水着)がやってくれた。コレをどう生かすかはお主ら次第、との事だった。



「わはは、とはいえワシを前衛に置くとは余りに奇抜過ぎてノツブもビックリじゃ！」

「信長公にはあのギターでのガリガリ突撃あるし、突進力はあるかなと」

「まあ悪くは無いと思うぞ。XXに合わせられるのもワシくらいじゃろうし」

稀代の戦略家、信長にそう言つて貰えると悪い気はしなかった。とはいえ後衛に関しては完全に遠距離持ちの二人を固めただけである。伝説の猟師にして狙撃の天才、ウィリアム・テル。マハトマに通じる新機軸の魔術師、エレナ・ブラヴァツキー。この二人のスペックを果たして生かし切れるのだろうか。

「お二人共、宜しく」

「おう。随分とお膳立てして貰つてるからな。やれるだけはやるさ」

「敵の索敵と火力支援。何処迄両立できるかは分からないけど……頑張ってみるわ！」

一応二人の能力を最大限生かす為のジャックの宝具である。此方を隠しながら相手を一方的に弱らせ、エレナに索敵をお願いし、発見した敵をテルが確実に射貫く。見えてない敵でも位置が分かれば当たるか、問いかければ「まあ行けるだろう」との事だった。

「あの、私だけ指示無いんですけどマスター君」

「アンタは好き勝手に突っ込んで破壊していつてくれ。俺達が付いていくから。先頭でアルトリウムを悪用しているロクデナシ共をドンドンしよつ引いてくれ。俺もついていくからさ」

「成程！ 考える必要が無いのは良いですね！」

指示は出していない。出していないが、しかしながらここで一番重要なのはXXなのである。実はこの中で一番破壊力、突破力、機動力、あらゆる攻撃面ですば抜けているのはXX、彼女が一气呵成に突撃するだけの事が十分戦略になるのである。

正直な所、彼女一人でも突撃役としては十分に過ぎるのだ。

「……自分、あの人のカバーできるんでしょうか」

「頑張れマイフレンド。お前の慎重派な所を俺は信じてる」

「期待も重ええええええええ!?!」

尚、行かせるままに突撃させると止まらなくなってしまうのでカバーは必須ではあるのだが。等々、色々考えての配置な訳だ。

「ヤスー、おわったよー」

「お、サンキユなジャック。じゃあ後は皆について行って、好き勝手暴れてくれ」

「はーい」

後は何処まで敵の戦力が居るか。余りにも多い場合は、撤退も視野に入れないといけない。要するに、後は自分の指揮次第。前線で鉄砲玉やってる方が性に合っているだけにどうにも気が重い。

「じゃあXXの姐さん。不法アルトリウム所持でガサ入れの時間だ。全員しよつ引いてやってくれ。遠慮はいらない」

「了解! 地球、ニホン時間で夜一時……全員、突入です!」

その一言と共に、XXが普段の軽装から、重装備……フルアーマーモードへと換装し地下へと突っ込んでいき、その後に皆続く。足元も見えない霧の中だがそこは皆サーヴァントである。この程度の事でこけたりはしない。尚エレナだけは康友が抱えて行っている。

「ごめんなさいね」

「移動になれてないからしようがないですよつと」

全員がガンガンと音を立てて降りて行ってるが、特に何か反応が有る訳ではない。やはりこの霧で大分内部は混乱しているのだろう。そうしている内に階段を下り終え、広い空間へと全員が到着した。

「到着! じゃあこつちから行きますか!」

「了解じゃ!」

一応灯りは灯っているようだが、殆ど霧で機能していない。目の前の仲間の背を追うだけの視界しか確保されていない。それでも。

「——い、一体何なんだコレは……!?!」

「はーい逮捕ですよスラーツシユ!」

「それ追撃のノツブフレイムじゃあ!」

「な、げえべえ!?!」

XXの尋常ではない能力は、全く関係なく向かう先の敵を捉え、撃

破する。狙ったかのように敵の塊に斬り込み、蹴散らし、その散った相手を信長が軽く薙ぎ払って駆け抜けていく。

「ええい、進路確保確保……っ！　後ろ、大丈夫すか!？」

「問題ない……そこだっ！」

「次、右から2時、12時、9時よ！　後方にあぶれたのは私が！」

「了解した！」

その残りは、中衛、後衛のメンバーが迅速に処理。マンドリカルドの慎重な性格が確実に後衛の邪魔を排除。安心して索敵を行うエレナの指示を受け、テルが狙撃で手早く処理して、残りへの牽制はエレナが行う。

全くもって隙も、油断も無い。最大の力である数の強みを、ジャツクの宝具でほぼ封じられてしまっているような相手には余りにも過剰な暴力だった。

「XX！　今の所どんな感じだ!？」

「あらかじめマッピングしてある新宿地下の構造が間違っつて無ければ、もう半分以上は制圧したと思いますよ！　多分ですけど！」

「順調じゃな！」

順調、というのも少し弱いレベルであっさり突破は行われていた。信長の千里眼の如き戦略眼の空恐ろしさを知った。指揮が得意でない自分ですら、ここまでの成果を出せるのだから。

「信長公が力を貸してくれて助かったよ！　お陰で楽に済む！」

「褒めるのは当然じゃが、気を抜くでないぞ！」

「はいはい！　まだ終わってないからな！」

とはいえ、もう制圧もそろそろ終わる頃合いだ。そろそろ気を抜けるようになると思うのだが……そこであなたは、ある一つの疑問を口にした。

「そういえば、なんでバーサーカーのままだったんだ？」

「ああん？」

「アーチャーで良いじゃないか、と思ったんだよ。XXの破壊力があれば、一人でも前衛は十分熟せたはずだし！」

先も言った通り、XXのパワーは尋常ではない。一人でも十分戦略

兵器となる様な彼女なら、一人でも十分前衛を熟す事は出来て……態々信長がその隣に立つ必要は無い。康友は、助言だけした後、彼女はこのトラブル解決には出向かないのではないかとすら考えていた……彼女の性格的に。

だが、それどころか彼女は自らこの特異点に来ることを進言したのである。

「……妙じゃと思わんか!？」

「妙?」

「ダ・ヴィンチの奴は、XXの奴にアルトリウム反応の事を聞いた、という話じゃ。だがあ奴そこまでアルトリウム反応に拘っておった訳でも無い。謎刑事の勘が発動するきっかけがあったとすれば、奴が反応するのはセイバーか若しくは……」

——フ・ォー・リ・ナー。

「……」

「しかもアルトリウム、というのは探る事は出来ても作り出せぬものと聞いた。ここはサーヴァント・ユニヴァースとやらではないから探掘場所などある気がせん。ではアルトリウムは何処から来たのかのう!」

そう言われれば……と思考を回そうとした、その時だった。

「待つてくくださいマスター君コレ……」

「どうした?」

「いえ、気のせいだったらいんですけど……フ・ォー・リ・ナー反応らしきものが」

背筋が凍る。信長を振り向けばその顔を間違いなく顰めていた。バーサーカー信長、という単騎相手に強い状態になったのは、コレを考えての事だったのか。

「場所?」

「(ここ)……新宿地下ですよ!」

## 幕間の物語：XXの事件簿・新宿編 その三

調査を続行する。

それが、想定外の事態に対する、ダ・ヴィンチの回答だった。

『一度撤退して態勢立て直して……つていうのがベターだとは思いうんだけどね。流石にフォーリナーの反応を見逃すつて訳にはいかない。その唐突なアルトリウム反応と、関連が無いとは言えないし』

「当然です！ フォーリナーを狩ればボーナスが出ますし！」

フルアーマーを解除し、眩しい笑顔を浮かべるXXに、いやそれは君だけだと思うよ。と、康友は思っていたが……口にする事はしない。お賃金の為に身を粉にして働く、というのは社会人として立派な心掛けであり、それを口に出してどうこう言う、というのは流石に宜しくない。

「しかし、狩るにしても少々厳しいかもしれないな。さっきまでの魔術師連中に関しては情報もあったが……そのフォーリナーとやらは情報も一切なしと来た」

「ふふん、そこはフォーリナーハンターたる私にお任せを！ 初見相手なんてそれこそ幾らでもあったので、慣れていきますとも！」

「それで今まで通じて来たのが不思議なくらいだな……」

腐つても鯛、だらしのないOLでも上位者狩りである。通常でもその出力は相当だが、更に専門の仕事となればその頼り甲斐は凄まじいものがある。

「実際、ルルハワの黒幕を打ち倒したのはXXだし、頼りになるよ」

「……すげーな、XXさん。だらしのないOL、とか言われてるけどやっぱり只者じゃねえんだな。そりゃそうか、凄いロイヤルな顔してるし……俺みたいな地味なのとは格が違うよなやっぱり」

「はいはい、マンドリカルドは変に拗らせないの。その援護を私達ができるんだから」

「そうでしょうとも！ と胸を張るXXだが……確かに彼女の能力は頼りになる。だが万が一、という事もあり得るので、一応信長にその視線を向けた。」

「まあ十中八九いける。万が一あ奴が破れたとして、ワシが時間を稼いでいる内に全員の宝具を叩き込めばまあ大丈夫じやろ。じやからあのマハトマキヤスター以外は単体宝具で固めてある」

「そういわれれば。マンドリカルド、テル、ジャック。どれも単体を相手取るタイプの宝具だ。数で押しして来る、という訳でないのなら、この編成は正に完璧と言えた。」

「後は……集めたこ奴らの全力攻撃で仕留め切れる事を祈るしかないのう」

「……突然姿を……いや、アルトリウムを発見した時点で、彼女の異次元的な勘が捉えていたフォーリナー。その実力は、未だ未知数だった。」

「あ……あああ……こ、こつちくんじやねええええええ！」

「またですか！ そおいー！」

「あひゅい!?!」

フォーリナー反応の方に足を向ければ、それに比例するかのようになり敵の数が増えていった。そして……同時に、通路に転がっているアルトリウムの量も。どうやら信長の邪推、ダ・ヴィンチの想像は見事バチ当たりしてしまったようだった。

間違いなく、フォーリナーと不法アルトリウム、この両者は何らかの形で関わっている、と。

「ほーぐ、使わなくていいの?」

「ジャックはこの先で思いつきり暴れて貰うかもしれないからな。温存温存」

「……なんでXXさんのアホ毛がこんなに転がってんだ……? これがアルトリウム……だとしたらアルトリウムっていったい……?」

「考えるな、感じるのじや、マンドリ」

マンドリカルドの両手には、一応サンプルとして持って帰ってきてもらう用のアルトリウムが。そんな風に雑に回収しても構わない程に、アルトリウムは無数に、雑に放置されていた。

「……しかし、可笑しいな」

「何がかしら？ ウィリアムさん」

「いや、敵が来たら警戒するのは自然、だとは思うんだが……幾らなんでもビビり過ぎじゃねえか？ 特に、あのXXの姉ちゃんに関して  
は」

そう言ったテルの視線の先、件のアルトリウムを蹴散らしてズンズンと進むXXは確かに遭遇する敵に、敵に、兎に角過剰反応されていた。見ただけで悲鳴を上げて襲い掛かってくるなんて言うのはザラで、見ただけで逃げ出した者まで居る。

「まるで……見た事がある、みたいなの？」

「そんな感じだな」

「……因みに俺も見られただけで腰抜かされたけど、さつき」

「そりゃあマスターの顔のせいだろうな。うん。暗がりで見たらお前さんの顔、迫力倍増してると思うぜ」

テルに冗談めかして言われ、康友は音もなく崩れ落ちた。昔からさらに顔の傷は増え、もう完全に堅気には見えない顔になってしまったので、もう何も言えないのである。

「……つらい」

「ヤスのかお、怖くないよー？ むしろかつこいいい！」

「ジャックには一杯ご飯買ってあげような……！」

——と言ったような茶番を挟みながらも、貴方達はズンズンとフォーリナー反応へと突き進み……そこへたどり着いた。どの場所より明らかに広く、そしてどこよりもアルトリウムの溢れた、大部屋に。

「……なんですか？ アレ」

「黄金の巨人……か？」

「とういかミッチーが変状したアレの黄金バージョンにしか見えんのじゃが、じゃが？」

広い広い空間の中心……そこに蹲っていたのは、黄金に輝く巨人。ボタリ、ボタリと黄金の雫を零し、それがばらける度にアルトリウムに変わっていく。

「あ、アルトリウムを生み出してるわよアレ!？」

「此奴が元凶か……で、ここに居るって事は！」

「アルトリウム不法製造するフォーリナーとかコレは即伐採ですね！」

幸い強そうにも見えないので一発で仕留めます！」

それを確認したXXがやったのは、速攻の宝具展開。令呪を必要としない程に魔力を既に高めていた彼女の手、双頭の槍の両側に、エーテルの眩い輝きが灯る。

「ちよ、おい！ 大丈夫なのか?！」

「いけます！ 万が一カウンター持ちとかでもゴリ押しで切れます！」

そういう相手も纏めてバツサリして来たんで！」

流星にそれを見逃す事は出来なかったのか、黄金の巨人がそれを止めようとゆっくりと動き始め……同じくらいに巨大な骸骨の腕に迎撃される。信長の宝具の一部を限定展開し、その動きを一瞬止めたのだ。

「未知の敵を速攻で屠るその意気や良し！ やれXX！」

「ナイスですノツブ！ いきますよお！ 『蒼輝銀河即ちコスモス  
エーテル宇宙然るに秩序  
!!』」

一切の容赦、やり取り、余裕なし。速攻も速攻のXXの全力攻撃。銀河すら両断しかねない、一種の斬撃の極致。輝ける伝説の切り札が……なんともあつさりや黄金の巨人を縦に割った。

「うわスゲエ!? あんな凶体のをあつさり!?」

「……ははっ、こりやあスゲエ。ハンターってのは、伊達じゃないか」  
「キレ——！」

「うーん、もうちよつと観察してみたけど……まあ仕方ないわね」

周りが勝利を疑わない程に、その巨体を軽々と引き裂いたエーテルの輝きを収め、XXはピースサインを浮かべ、此方へと戻ってくる。

「いやーやりました！ 出自不明のフォーリナー撃退！ これはボーンナスにも期待が出来そうですねえ！」

「いやー流石謎のヒロイン族、一切のストーリーとか、そういうののないー」

言わんとする事は分かるが、しかしそれがXXの強みでもある。あ



らゆる攻撃を、一切の油断、様子見無く全力で叩き込める。不意打ち、闇討ちすらも躊躇いない。それでいて明るく澆瀨。稀有な人材、と間違ひなく呼べるだろう。

今回はそんな彼女のお陰で、あほらしい惨劇を事前に防ぐことが出来た。ありがとう。そう、彼女に声をかけようとして……

「――」  
「――XXウ!! 後ろだ! 避けるおおおお!」

叫んだ。咄嗟だった。間に合うかも分からないが跳んだ。彼女に体当たりを決め……何をするのか、といった表情の彼女と目が合つて……直後、その真上を、黄金の雷が走り抜ける。まるで、アルトリウムの輝きそのものの様な、そんな輝きが。

「っ!」  
「危ねえ!」

その直線状、もう一人居たのは……ジャック。完全に不意打ち、彼女が雷電を視認した時には既に雷電は目の前に。

しかしその刹那、雷電が直撃するより僅かに早く、少女の前にマンドリカルドが立ち塞がった。その盾と木刀を壁として構え、その雷を凌ぎ切るその姿に、何時もの自信なさげな姿は欠片も見えない。

「つと、大丈夫かジャック」  
「ん! ありがとう!」  
「おう、なら良い」

マンドリカルドが居なければ、瞬間でジャックがやられていた。何という速攻。XXとどっこいだろう。一体、誰が……その視線の先。貴方は、信じられないモノをみた。

「……は?」  
「ちよ、マスター君どいてください! なんだか良く分かりませんけど、敵なんでしょう!? ボーっとしてないで……?」

つられて、XXもその方向を見つめ……同じようにその動きを止めてしまう。黄金の巨人の亡骸、そこから現れたその姿は……小柄な体躯だった。黒いフード。色素の薄い、白に限りなく近いブロンドの髪。服に走るラインは、赤から黄金に変わっていて、構える双頭の剣

もまた、目に痛い程の黄金。

「……えっ……ちゃん？」

XXが零した言葉に反応するかのようには、少女は真つすぐに駆け出す。その進行方向に居るのは……康友と、XX。

「っ！ アブねえ!？」

「き、緊急離脱！ アーヴァロン！」

その言葉に応え、XXの聖槍甲冑が二人の命をギリギリで救う。暫く引き摺られてから、後方で待機していた四騎の元に、二人纏めて転がり込んだ。

「だ、大丈夫!？」

「俺は、なんとかか……！ 信長は!？」

「ここに居るわい。つたく、ワシの事なんか眼中に非ずじゃからのう、逃げ出すのに苦労は無かったわ」

そう言って、信長が視線を向ける先……僅かな違いはあれど、それは間違いなくかの暗黒の騎士団「ダーク・ラウンズ」に連なる最後の生き残り。付与されし称号はペンドラゴン卿。対・対セイバー用決戦兵器。

謎のヒロインXオルタ。その人の姿をしていた。

「ど、どうしてえっちゃんがここに?! まさか自力で特異点に!？」

「んな訳あるかあ! ダ・ヴィンチちゃん!」

『確認したよ! 件の文系バーサーカーなら食堂で若かりし頃のフォーリナーハンターと茶をシバイてるよ!』

「それは何よりです!」

……少なくとも、アレはカルデアの文系バーサーカーと人違いである事は確認できた。しかし、では、とXXが困惑した声を漏らす。当然だ。他人の空似というには余りにも、目の前の少女は謎のヒロインXオルタと似通った姿をしていたのだから。

「あれって……誰ですか!？」

## 幕間の物語：XXの事件簿・新宿編 その四

『——解析結果が出たけど……聞く余裕はなさそうだねコレは！』  
「ある様に見えたら万能の天才の目はとんだ節穴だよ！」

叫びつつ、自らに対し振るわれた黒い霞の様な爪を辛うじて回避に成功する。大暴れするは、正体不明の影の如き悪鬼。部屋に充満していたアルトリウムを媒介に、黄金のXオルタが呼び出したそれは只管に康友達に向けて殺到する。

「もうっ！ しつこいよ！ ええいつ！」

「つたく、尽きる事ない獲物つてのは一度は夢見るもんだが……実際に悪夢だな！」

「この馬鹿みたいな数相手じゃジリ貧つすよ！」

決して動きが良い訳では無いが、しかし数が数。頭数自体も多いが、減った傍からオルタ擬きが雑に数を増やす。一度全力で突破を試みたのだが、逆に数に圧され……こうして分断されてしまっている訳である。

「でええい埒が明かん！ エレナさんに令呪切るか!？」

「馬鹿者一時的に数を減らしても同じ事！ 兎も角、今は堪えるしか……！」

「それよりも先ず……彼女を救出しないと危ないわ！」

そして最悪の事態なのは……XXがこの闇の軍勢の中心で孤立してしまっている事。孤軍奮闘の活躍を見せ、今の所は無事であるようだが、それも何処まで持つのか。

「つええい！ 最優先はXXの救出、及びあ奴の撃破じゃ！ こやつ等を殲滅する事ではない！ どうするマスター！」

「なら……マンドリカルドお！」

彼が欲したのは、騎馬による突進力。すなわち、マンドリカルドとその愛馬、ブリリアードーロである。離れている彼に、絶叫にも等しい声を上げた。この乱戦の中でも届く様にと、右手を掲げ二画目の令呪を切った。

「令呪を持ってライダー、マンドリカルドに命ずる！ 令呪の魔力を

喰らい、影の軍勢を蹴散らし友軍を救え！」

「——了解っ！ ジャック、テルさんすいません！ ここ抜けます！  
駆ける、ブリリアドオオオオオオオオ！」

右手が赤く輝いたその直後、数体の影が、宙を舞った。更に続けて幾体もの影が次々と蹴散らされていく。陰を割る陽の一筋は、嘗て九偉人ヘクトールの鎧を継承するにふさわしいと言われた英傑、マンドリカルド。

木刀を振り回し、XXへと一直線に向かっていくが、しかし。やはり数が数。そう容易く突破、とはいかない。どうしても、突撃の勢いは少しずつではあるが、落ちていく。

「クツッ、もうちよつとだつてのに……！」

「」

「っ?! しまっ——!?!」

速度が落ちて来た、そこを狙ったかのように飛び掛かる黒い影。迎撃しては突破する勢いはさらに落ちてしまうだろう、だがマンドリカルドがその判断を下す前に、とびかかってきたその影を赤い一射が射抜く。

「行け！ 援護は俺がする！」

「申し訳ないっす！ 行きます！」

もはやマンドリカルドの動きに迷いは無く……もうXXを目の前に捉えたこの状況、ブリリアドローの勢いが落ち切る前に思い切りその木刀を振りかぶり、声を上げた。

「駆ける、ブリリアドロー！ 虹の彼方にて光を放て！ 絶世無くとも幻想は我が手に……『不帯剣の誓い』！」

極光の一撃が、最後の壁を断ち、一筋の道を作り出す。その一瞬、ブリリアドローが再度加速……否、華麗に跳躍した。そのまま黒い影達を飛び越し渦中のXXを見事に救い上げ、ブリリアドローの背に跨らせた。

「っ！ すいませんマンドリ君！」

「問題ないっす！ マスター！ 指示頼む！」

——指示は、初めから決まっている。相手がフォーリナーなら、そ

の相手はやはりただ一人……上位者を借る者、フォリナーハンター、謎のヒロインXX！ 二人を

「XXを敵性フォリナーの元へ！ 全員、二人を全力で援護してくれ！」

「了解！」

エレナが魔導書を開き、文言を唱える……その直後、信長の手に持った大得物の唸りが一段と上がった。ここまで温存、というより使う暇も無かった強化スキルを乗せて、振り下ろした一撃は、影を二つに割り……その先には、ジャックと、テル。

「合流じゃあ！ ばらけていても援護は十全に出来ん！」

「よし行くぞジャック！」

「おっけい！」

影が閉じる寸前で、テルとジャックが滑り込んで合流に成功、そして言葉を交わす事すらせず、テル、エレナを中心にして、信長、ジャック、康友が護衛の陣を展開。マンドリカルドとXXに向けて援護射撃の雨が降り注ぎ始める。

「へへっ、エレナさんの援護が入ってから矢も好調だ！」

「油断しちゃダメよ！」

「私たちがざくって暗殺してきちやだめ？」

「数が数だから多分無理！ オジサンとエレナさんをまもってくれな！」

「マンドリイ！ 止まるんじゃない！ その先にワシらは居るぞおおお！」

なんか変なミームが混ざったがそれは兎も角。援護射撃の雨は、確実に二人を乗せたブリリアード口の傷害を取り除けている。曲がる事も、止まる事もせず、真つすぐに、最短距離を！

「——捉えた！ XXさん！」

「ありがとうございますマンドリ君！ 後で缶チューハイ奢ります！」

そして影の中心、空白の輪、その直前。初めて輪の弧を擦るように曲がりを入れ……その直後、ブリリアード口の背からXXが飛び出し



ダ・ヴィンチは喋るのをやめはしない。

『オルトリアクター。彼女が、謎のヒロインXオルタである所以。ここが同じなら彼女と類似している、姉妹か何かか……と類推する事も出来ただけど』

「……だけど?」

『それ以外だ。それ以外の9割の彼女の霊基は、此方でも解析不能なブラックボックスと置き換えられている。あらゆるサーヴアントのデータ、当然Xオルタ当人のデータとも参照したけれど……そもそも生物としての系統が違うような、そんな手応えだったよ』

ピクリ。

その言葉を聞いた直後、XXの肩が……僅かに跳ねた。

『バーサーカーからフォーリナーに霊基が変わった、Xオルタとそっくりな彼女……フォーリナーハンターの君なら、想像は——』

「ええ。ピンとききましたよ。えっちゃんの事は、調べてなかった訳でも無いので。それにフォーリナー共のやり方も……知らない訳じゃありません。成程、そういう事ですか。ええええ。分かりましたとも……!」

ダ・ヴィンチの言葉を遮って、XXが声を上げる。その横顔は……まるで何時もの彼女とは違う、迫力の有る、眼光鋭い狩人の顔。

「廃棄されてたから。使っても良いじゃないかと。そう思ってたんですか?」

「——」

「彼女は眠っていたんですよ。作られて、でも完成させることは出来なかったから。せめて安らかにと、そう願われて……それを、掘り出して、改造して、好き勝手に、端末に作り替えて……!」

まるで真剣みが違う。コメディドラマの主人公、などと評されていた若き日の彼女。しかし今の彼女の凄みは、そんな雰囲気など欠片も見当たらず、歴戦の上位者狩りとしてのソレだ。

「貴方達の好き勝手になんかさせません! 私、居る限り!」

鏢競り合っていた剣を、気合一閃で弾き飛ばす。一瞬、目を見開いたようなオルタ擬きに更に槍を振るう。縦切り、横の払い、突き、そ

の鋭さも速さも全てが、貴方の眼には一段階上がったようにすら見え  
て。

「——っ!？」

「マスター君、援護を！ 彼女をもう一度、眠らせる、為に！」

詳しい事情は分からなかった。だが、今のXXは間違いなく、真剣  
に怒っている。目の前の彼女の為に。真っ直ぐに。ならば、その援護  
をするのは……！

「——瞬間強化に、令呪も入れる！ 一撃で決めろ！ フォーリナー  
ハンター、XX！」

「了解です！ 来なさいアーヴァロン！ 乗着して、一気に決めます  
！」

瞬間、XXの声に応え、再び聖槍装甲が彼女の全身を纏う。XXを  
退ける為の雷撃はその装甲に阻まれ、届かない。真っ向から、力押し  
で、上位者に迫るその姿。正に上位者を狩る者！

そして……その狩人に、上位者もまた、その黄金の得物をさらに輝  
かせ、迎え撃つ。返り討ちにしてやろう、とでも言わんばかりの、全  
力全開！

「蒼輝銀河即ちコスモス！」

「——臨界、突破」

蒼輝と黄金が唸りを上げる。

「エーテル宇宙然るに秩序！」

「——素粒子に、還れ」

エーテルとアルトリウムが、喰らい合う。

「最果ての正義を以て……征くぞ！ ツインミニアド・デイズスタ  
アアア！」

「クロスツ……カリバアアアアア!!」

双方一撃必殺。対フォーリナー最強の斬撃と、上位者の牙が噛み合  
わさる。

そして……

「……」



私室を覗いて見ると、カップ麺を前に撃沈しているOLが居た。その眼の前には、もう一個のカップ麺と、おろおろとしているXオルタの姿。

先の一戦から、色々と何かが切れて、会いに行きたくなつたのだろうか。

「あ、あの。本造院さん。えっと、その……」

「——まあ、その。なんだ。付き合つてやってくれ。今は、ちょっと……甘えたい気分だろうしき」

そう言つて、踵を返す。

『——ありがとうございます。マスター君。無念を、晴らせたと思います』

自分は、あの一言だけで十分。後は、彼女とXXの問題だろう。この後は、事件解決メンバーとの祝勝会もある。楽しみだ。

康友が後にしたその私室で、XXがぼつりぼつりと、今回の一件を話し始めたのは……祝勝会が始まる、直前。大分経つてからの頃だった。

## ゲーム開始〜カルデア入り直前 趣旨説明とキャラクリ

皆様こんにちは。ノンケです。

今回はスマートフォンゲームの禁じ塔、Fate／Grand OrderのRPGバージョン。FGORPGのRTA……ではなく、エンジョイプレイをやっていきたいと思います。宜しく願います。

は？ RTAじゃないとかつかえ。やめたらこの仕事？ とか思ってる皆様、申し訳ありません。私はRTAをしないと天に誓った身ですのでRTAをするとホモに掘られます（謎の超展開）。私はノンケなのでホモに掘られたくないので誓いを守りたく思います。単純にRTAする腕を持っていないとも言います。

はい。という事で今回私が遊んでいくFGORPGですが。簡単に言えば『ここに、人類史あるんだけど……焼いてかない？』に対して『ふぎけんな！（声だけ迫真）』するゲームです。はい。分からないと思うので詳しく説明したく思います。

ですがあまりにもゲームの概要が豊富すぎるので、ここはお忙しいであろう視聴者のみいなあさまあめえにいく？

甥の木村、加速します。

〜114倍速〜

という事で概要はこんな感じですが。分からなかった人は『コミケ力モンスターと可愛い茄子と一緒に世界を救うゲーム』と覚えておきましょう。難易度は遊び方によって『赤ちゃん』から『人類悪』まで幅広く変化するのが特徴です。

そしてこのゲーム、当然ながら（意味不明）DLCも結構豊富で、スマホゲームの頃と違い様々なコラボDLCも登場しています。有名

なもので言えば『人理修復吸血譚〜月姫〜』や『ORT撃退光の巨人パック〜ウルトラマン〜』など。ゲームのバランスを壊し過ぎない程度の神DLCがワンサカあるので皆、ダウンロードして、やろう！  
はい。ステマが過ぎたので少し自重したく思います。

という事で私が今回遊んでいくのは『生まれは十人十色追加コンテンツ〜ギャングから宇宙人まで〜』ですね。

このDLCをダウンロードすると、主人公君の生まれはもちろんですが、なんと原作主人公である藤丸君の生まれも馬鹿みたく増えます。具体的には千を軽く超えます。私は数えてません（怠惰の獣）。遊び方に更なる幅が増える、DLCの中でも巨大コンテンツの一つでもあります。

このDLCを入れ、生まれをランダムで出てきたキャラでエンジョイプレイしよう！ というのが本プレイ動画の目的です。他の実況走者にして偉大なるRTA奏者の皆さまとはこの辺りで差別化していくノンケの鑑、もつと褒めてホラホラ（人間の屑）。

という事でゲーム起動。開始画面に映る立香くんちゃんがかわい、い、い、な、あ、？ だい、ぢぐん（視聴者に同意を求める実況者の屑）。

はい。原作主人公の可愛さに見とれたところでキャラクリ画面です。で、キャラを作っている間に本プレイの目的を説明します。といってもね。シンプルです。人理修復。大きな目的はこれ一本。見どころさんはアドリブとトラブルとハプニングで作っていきます（N敗） エンジョイするんだから死ぬのも多少はね？

後サブ的な目標で、出会いたいサーヴァントに会う。これですね。

FGOは魅力的なキャラクターが売りのゲームですから、やっぱりRPGの中で楽しげに過ごす皆さんが見たい。具体的にはぐっさんとか（パイセン弄り勢）

後は、やっぱり王道の邪ンヌ、熱血歓迎俺達黒ひげ、鬼さんこちらな茨木、アヤコを用意してあげたいライダーさん、そういう所どころカ、ルナ、男女関係なく、全キャラ見たいですがそんな事したら年をまたいでも尺が足りないので自重します（断腸）

そして、藤丸立香くんちゃんと良き友情を築く。これ。

RTAではランダム要素が多いゆえに、どうしてもデメリットな部分が出てきてしまう彼or彼女ですが、エンジョイプレイなら安心！めっちゃ触れ合ったり、バカやったり、突っ込んだり突っ込まれたりして良き友情を築こう！ きよひーに焼かれるくらい誤差だよ誤差（N敗）

という事でFGORPGを精一杯楽しむんだよ！ 分かったか！

はい、暴言申し訳なく。はい、そんなこんなでキャラクリ終了です。と言っても男子で高身長坊主の三白眼ですけど。チンピラかな。チンピラだよ。

名前は……『本造院康友』。略してホモくん。やっぱりホモじゃないかって？ 名前は伝統みたいなもんやし……（目逸らし）。

さて、タイムを計る訳ではありませんが一応タイマーはセットしておきます。エンジョイプレイをする時の参考として頂ければ幸いです。

では、ゲーム開始ボタンを押すと同時にスタート。

エンジョイプレイで、ユクゾツ！ デツデツデデデ！カーンデデデデ！

さて画面始まりまして、最初のセリフで生まれが分かりますが……希望は追加された生まれの『一般人（アイドル志望）』とかですかね。エリちゃんとライブしてえなく俺もな〜

〜山の中、木の根元で目を覚ます。昨日は山の中ではしやぎ過ぎた。これは、両親にこっぴどく絞られても文句は言えないだろうと貴方は思う。だが、どうしてか都会よりはこうして山の中にいる方が、なんとも落ち着いてしまう故、仕方ないともいえる。野生児か何かなのだろうか。

……ファツ!?

この文面は、確か……ちょ、ちょっと（予想と）ズレてるかな？

DLCで増えた生まれには、FGOなら当然のレア度が存在するのですが、その中でもぶつちぎりでレアなのが『鬼種の魔所持』です。

分かりやすく言うとKMNライダーHBKになれるのがコレです。

この生まれ確定の会話は幾つかあるのですが、これは結構な高ランク時のセリフだった気がします。嘘やろ、こんな所でいらんふといしーちきんを……

えー……この生まれ、ヤバいですね。ちよつと困りました。

この生まれなのですが、メリットとデメリットが当然ありまして。

メリット。サーヴァントと同レベルの戦いができるタイ！ 幻想種も頑張れば殴り倒せるタイ！ えー、要するに普通に強いって事です。そりゃあそうですよ、高ランクの鬼種の魔なんぞサーヴァントが持つべきものですし。全力を發揮できれば主人公君が死ぬことは先ずなくなるでしょう。とはいえその力を十全に發揮する為にはこわれる（ソプラノ）様な努力が必要ですが。

デメリット……は、後述します。藤丸君とカルデアに行つてからでも説明は、イけるイけるって、安心しろよ。

さて次のセリフですが、このルートだと大抵一人ぼっちでスタートなので現状確認になるかと。その後はすぐ山を下りる事になると予想します。山の中でボツチとかお前孤高の求道者か何か？ ここは山のどのあたりなのでしょう。

▽——その感慨を打ち破る様に突然、流星の如く石が此方に飛んでくる。貴方は、とつさに拾った枝で撃ち落とした。

……ファツ!? (二撃決殺)

ちよ、ちよつと待つてくれ。いきなりバトルイベントですか!? いや、無い事はないんですよこのルートだと。山籠もりチックな事をしている所為か、偶に猿が殴り掛かってくるんです。山育ちの猿、魔剣使いそう（小次郎並み感）。

それは冗談としてこのイベント。出てくる敵の強さはピンキリで、強い幻想種に片足突っ込んだ猿とか出てくる事もあります。それクラスが序盤で出てくるのは割とキツイですのでちよつとダイスの女神さまに祈りを捧げたいと思います。

死んでサイソウは嫌だ、サイソウは嫌だ……

▽腕が痺れる。全力だったのだが、相殺されたらしい。



## ゲーム開始

皆様こんにちは。ノンケ（騎士オオン!）です。

今回は前回の続き、何故か藤丸君が……すうすうすう……  
フウウウウウウ……ホモ君と一緒に修行場に……すうすうすう……  
……フウウウウウウ……殴り合ってたところの、続きから……  
すうすうすう……フウウウウウ……はい、すいません。ちよつと  
取り乱しています。

どういう事だつてばよ……なんで藤丸君がホモ君と一緒に山に居るんだ……どういう流れでそうなったんだ……ゲームは一体俺に何をさせたいんだ……ジエツトコースター展開なんか必要ねえんだよ！  
ハプニングを好機に変えることが出来る腕をお持ちなのはRTA  
A兄貴姉貴だけで僕は違います（半ギレ）

＜貴方は、にやりと笑い、打ち合わせていた拳を下す。立香も、それに倣って拳を下ろしあなたと視線を合わせる。奇襲は卑怯じゃないか、といえは、立香は更に笑った。

「山にいる間は何でもありって言ったのはそつちだろ？」

＜そうだったか、と貴方は頭を掻いた。

掻く髪がないから頭皮を撫せているだけだが。このハゲエエエエエエ！

……さて、とりあえず落ち着きましょう。ここは数々のRTA奏者姉貴兄貴達を見てきた私の迫真考察の出番。状況を正しく把握しなければエンジョイプレイなんて出来ませんからね。私のピンク色の脳味噌、見たけりや見せてやるよ（震え声）。

又ウン！ヘツ！ヘツ！

アアアアアアアアアアアア →ア →ア →ア →ア →ア  
アアアアアアアアアアアア ウアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアア フウウウウウウウウウウ  
フウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ  
!!!!!! (大迫真)

……考察完了です。

さて、考察の結論を言えば、恐らくこれはとんでもない奇跡を引い

たと思われます。(曖昧) 先に言った通り、このDLICはがわい、藤丸君の生まれもいっぱいいっぱい裕次郎……しますので、アレも存在します……そう、『天性の肉体』所持も！

サーヴァント御用達のスーパー肉体スキル、天性の肉体の初期所持を引くと、大抵何かしら鍛えてるシーンからスタートするのですが、藤丸君もそれが適用されるでしょう。故に、二人とも山スタートな生まれを引くと……お互いに切磋琢磨するような感じの邂逅になる。これです(確信)

しかし、これではいけませんね？ 先ほど言ったデメリット、これが結構効いてくるんですよ。後で説明すると言ったな、あれは嘘だ。今から説明、解説をしよう(提案)

デメリット。あらかななかやるじゃない!? じゃあ藤丸君へのリソース集中のためにサーヴァント無しで戦ってくれ、ゴメン！ となる事。要するに運命の鯖無しでポツチ確定という事です。まあ、人理の危機ですし、限られたリソースの節約も多少はね？

……そうなると、俺たち二人ともサーヴァント召喚しない孤高の霸王ルートとかでしょうか。嘘だろ承太郎……何のためのFGORPGエンジンプレイなんだ。シヨックを受けていても仕方ないので、こうなれば特異点で現れるサーヴァントの皆さんと絆を深める事にしましょう。静謐ちゃん、カエサルの日那、エミヤママと人理を修復したかった……

エンジンプレイのコツは臨機応変に、柔軟に、フォーク准将のを忘れない事。ここで慌ててリセットなど、RTAという苦行に挑んだ先人兄貴姉貴達に申し訳が立たぬ……立たぬ……藤丸君と幼馴染になれたことは望外の幸運ですから、そこをプラスとしよう(低い壁)後名前呼びが普通なので好感度はバリバリのようだから安心！

「そういうえば、今日で一週間の山籠もりは終わりだよな。」

「いや、本当は昨日で終わりだったんだ、と貴方はがっくりした態度で告げた。断罪を待ち望む死刑囚のような貴方の姿に、立香もその表情を歪める。」

「……昨日、もしかして言いたかった事っていうのは」



〈重く、重く、貴方は首を振る。

1週間の山籠もりってなんだよお前ら本当に現代人か？ 力抜  
よ……

ともあれまさかの主人公二人ががつり肉体派野菜人になった所  
で、いよいよ山を下ります。二人の温度は絶望的に冷えています、  
エンジョイプレイに問題はないので当然続行です。いきなり反応に  
困る奇跡を引き起こしやがったお仕置に、二人にはしばらく落ち込ん  
でいて貰いましょう。

〈二人して無言の時間が続く。明らかに約束の時間を過ぎているの  
だから、お説教が確定している、まずこつてり絞られるだろう。そう  
思うと、体が重くなってくる気すらする。

〈ストレス値が上昇しました

おいYOU、流れるようにストレス値を上げるな。後は帰るだけな  
んですけど、なんか理不尽なストレス値を押し付けられて……もう許  
せるぞオイ！ とはいえこういうハプニングもエンジョイプレイの  
醍醐味、許せサスケして甘んじて受け入れるとしましょう(掌ドリル)  
……アーナキソ。

「あ、あんまり暗くなり過ぎたって良くない。ここは、ちゃんと謝っ  
て、最小限で済ませて貰おう。せつかくの予定の前に、ガツカリする  
のも良くない」

〈予定。という立香の言葉に首を傾げる。今日の修業の後、何か  
あっただろうか。そんな貴方を見て、立香は少し呆れているようだ。  
「おいおい忘れちゃったのか康友。来週の日曜、割れちゃった茶碗の  
代わり探しに近くの骨董市見に行くって約束、してたじゃないか。つ  
いでになんか、いい感じのインテリアとかあったら買おうって、お前  
も言ってたのに」

はえへ、そんな約束してたんすねえ……まあカルデア行くまでの  
間の期間は、藤丸君とユウジョウ深める予定だったんで、このイベン  
トは好都合です。っと、選択肢が出てきましたね。

〈おお、そうだったそうだった。すっかり忘れてたよ

〈骨董品を砕くのが怖いからやっぱりやめにしないか？

下の選択肢、ホモ君はゴリラかなんか何ですかね。まあ実際、YO！（剛力）の掛け声で茶碗位粉々に出来そうではありますけど。さっきの藤丸君の体、絞り込まれた細マツチヨの完成形みたいな筋肉してましたし、ホモ君もそんなんでしょ（適当）

まあ選択肢は当然上かな？ 上だよね……

「なんだよ、相変わらずどっか抜けてるな、康友は」

＜貴方の返事に、立香は気の抜けたような顔で笑っている。

ああ、いいっすねえ、藤丸君可愛い。食べちゃいたい（カニバル）。これからどんどん仲良くなつて、一緒に人理修復して？ 嫌っていてもするんだよ（豹変）

あ。後ですね、藤丸君の好感度は、恐らく元からそれなりにあると思います。しよっぱなから名前呼びですし、だからこんなイベントも起きたんじゃないですかね。知らんけど。

「……まあ、その予定もこの先の修羅場を潜り抜けてからだな」

＜そうやって苦笑いする立香に、つられて笑いが漏れる。この先のお説教は辛いけど、こうして友人と話している間は、それを忘れるくらい楽しい。

＜ストレス値が減少した

ええ……自分で増やしたストレス値を自分で減らしていくのか……（困惑）。これももう分かんないですね。視聴者さんはどう？

「よし、覚悟も決まった。お互い、がつつり絞られて来ようぜ。来週の日曜、お互い生きて逢おうな、相棒！」

＜そう言つて拳を突き出す立香に、貴方も拳を合わせる。二人でするいつもの仕草に、何となく安心感すら浮かんだ。

……ホモ君にガチでホモ疑惑が出ていますが進行に問題はないのでスルーします。当たり前だよなあ？ エンジョイプレイをするのならホモ程度は看過します。寧ろそっち方向で見所さん!! を作ってもらえるとありがたいです。

しっかしたただエンジョイプレイするつもりだったのですけど、ロケットスタートにも程がありませんかねえ。いやーもう（ハプニングは）十分堪能したよ……申し訳ないがこれ以上のハプニングはNG。

のんびりエンジョイさせてくれよなく頼むよ

えー、私のエンジョイプレイは最初っからほのぼのプレイ環境は大崩壊し、見所さん盛り沢山、サーヴァントと出会う可能性大暴落なこれ（F G Oである意味あるの？ マジ？）的な状況になりました。

でもF G Oの魅力はサーヴァントの皆さんの個性にあるのでなんとしてもサーヴァントの皆さんとは絡みたいと思います。（鋼の意思） どうするかって？ 先述の通り特異点とかで召喚された人たちと絡めば、ママエアロ……他のR T A兄貴姉貴とは違って急ぐ必要はない。のんびりやっていけ、く？

今回はここまでです。ご視聴、ありがとうございました。

## 事前準備 その一

皆さんこんにちは。ノンケ（狛犬ランサー）です。

今回は、前回からの続き、家に帰宅したところからです。山での会話の内容から鬼種の魔所持、要するに鬼の混血は確定だとしても、どうしてそうなったかは、これもうわかんねえ状況なので、ここで確認したく思います。こういう理由をチェックするのもエンジョイプレイの醍醐味だと思うんですけど（名推理）

さて、玄関を開けたら一体だれが……

「康友、何か言い残すことはある？」

＜扉の向こうに立っていた母親は、まるで二本の角が生えているようにも見える異様な迫力を醸し出していた。貴方は理解した、今日が、自分の命日になる事を。

ヒエツ……凄いいオーラっすねえ……やはり混血の母、これはゆうさくも注意喚起するレベルですよクオレハ。良し！

＜命を懸けて逃走する

＜全てを捨てて逃走する

どっちも同じじゃねえかお前ん選択肢い！ これはFGO特有の終わりは一つな選択肢ですな間違いない……

「逃げられると思ってるの？」

＜貴方は一步を踏み出そうとしたその時、先んじて襟を掴まれ、同時に膝裏を蹴られ崩されてしまう。こうなると、如何に力で優つていようと、簡単に抑え込まれてしまうのは確定事項だった。

強い（確信） 一応鬼種の魔をもってるフィジカルお化けの筈なんですけど、こういうことなの……（レ）。兎も角、これでお母様からのお説教は確定です。やめてほしいですよ説教く

「覚悟決めな、それだけの事したんだから」

＜ずるずると引き摺られていく……あまりの絶望に、貴方はそっと目を閉じて、これからの圧倒的なお説教に耐え忍ぶ準備を始める事にした。

あ、画面が暗転しましたね。これは裏でホモ君こっぴり絞られてる

でしような。とはいえ暗転画面を見せつけられ続けるのはアレなのであくしろよ。

〈三〇分後、貴方はようやくお説教の嵐から解放された

三十分で五万!? (難視)

それは兎も角、割と短かったつすねお説教。どれだけ怖くても人の親、そこまでおつそろしい事はしないんやなって。やさしいせかい

〈濃密な説教は、一言一言に、念入りな怒りと、愛情が込められた、胸やけのするような内容だった。もう二度と約束を豪快に破る事はしないと誓った

あつ (察し)

……長くしない代わりに密度の濃いお説教とか斬新では？ お説教をすっかりするお母様は母親の神 (全面降伏)。つまり主人公の母親はG Oである可能性が微粒子レベルで存在している……?」

「全く、そんなだらしないと、またお爺ちゃんに『ご先祖様に申し訳が立たん』とか言われてお説教よ」

〈母の言葉に、貴方は思わず顔を顰める。祖父は好きだが、そこから始まるお説教の長さは一番よく知っていた。もし喰らおうものなら、その日はもう凹みっぱなしで終わるだろう事も。

お母様のお説教より凄いのか…… (困惑)。

「まあご先祖様ご先祖さまって、お爺ちゃんも拘り過ぎだと思っけど。昔に源氏の家系だったからってそれがどうって訳でも無いのに」

〈母は額に手を当てて、一つ、ため息をつく。内心では、貴方も同意している。源氏の棟梁の親戚筋の家系というのは、誇れるものなのだろうかと思ってしまう。

お、これはホモ君の出自に関してですね。源氏の血を引く混血……これは災厄の香りがプンプンするぜえっ! (SPDWGN並感) やーこういう出身の所まで作りこまれてるって、冷静に考えると凄いなあ、このDLC。皆も買って、やろう! (ステマ)

さて真面目に考えると、源氏の家系というのはそれだけでも触媒になる可能性があります。忠犬義経公、頼光ママ、金時、騎ん時、巴さ

ん等々、日本出身鯖の呼び水になりえるのですが……このゲームは原作に忠実なので、血よりも現物が優先されますので呼びたい鯖が居るなら触媒探しはちゃんとやりましょう。その為の触媒？ 後その為の触媒？（二重の極み）

「兎も角、いい？ アンタも、もういい年なんだし、しつかりしなさいよ。ただでさえその怖い見た目なんだから……だらしくしていると、不良と間違われるわよ」

「あんまりな物言いに貴方は思わず文句を言った。しかし、それを聞いてなお母親は哀れという表情を一切崩しはしない。」

「この前、中学生の女の子に道案内してたら職質されたでしょ」

「貴方は轟沈した。」

「称号『お巡りさん、この人です』を獲得しました。」

「なんだこの称号!?!（驚愕）」

野獸先輩BB並みにFGORPGの称号は多く、未だ発掘されていない称号も全然あるとは聞いていましたが、こんなどうでも良い称号もあるんすねえ……ってというかこれじゃあ称号じゃなくて不名誉ですね、恥ずかしくないのかよ？ ストレス値が上がらなかつたのはゲーム側の慈悲でしょうか。

「母に完膚なきまでに叩きのめされ、貴方は部屋に戻ってきた。」

さてそんな傷心のホモ君は自分の部屋に戻ってきました。自分の部屋、要するにマイルームですね。カルデアに到着する前は、ここで自分のスキルの確認や、持っているアイテム等が確認できます。今はアイテムはスマホと財布位なものですけど。

とりあえず今やるべきはスキルポイントの確認でしょうか。今のスキルポイントの量で今後、藤丸君との骨董市迄の行動が決まるのですが。ええつと、スキルポイントは？ おっ、いいゾこれ。これくらいあれば、問題なくスキル獲得までもつていけそうです……これは山籠もりの成果ですね……

とはいえスキルが予定通りでも特異点Fを突破できるかは五分五分……普通だな！（感覚麻痺） 備えはしておきたいので色々と買っていくきたいと思います。

買いに行くのはやっぱり、安心と安定のドラッグストア810。アイテム数が114514364364品目はあるので大抵の物は買えます。待ちきれないよ、さっさと行こうぜ！

でも行く前に、今度は怒られない様にママに断りを入れましょう。許してくれよなく頼むよ

「はあ、早めに帰ってきなさいよ」

はい。無事許可貰えたのでいってきましよう。何を買いましたよかね、あ。でも面白い物風景なんて地味なだけで。

今回買い込むアイテムについて、お話しします。

まずは包帯。回復アイテムですね。必須です。

続いて携帯食料。スタミナ回復アイテムですね。必須です。

そして飲料水。水分補給アイテムですね。必須です。

これだけ。

簡単でしよう？ さあコレを出来る限り買い込んで、特異点Fへの対策と……ちよつと待って!?

▽財布内残金 810円

ほ、ホモ君の財布の残金が貧弱すぎる。1000円以下しかないとかマジ？ 他RTA奏者兄貴姉貴は一万円くらい軽く入ってたのに……はえ、こういふ所にもふとい剛運が必要になるんすねえ（感心）

している場合ではありませんね？（豹変）やべえよ、やべえよ……どうするよ……これじゃあ特異点Fを確実に突破するだけの物資が得られないだろオオ!? 少なくともダース単位で買い込むつもりだったんだけどチャートが崩壊しました（申し訳程度のRTA要素）さて、これは困りました。千円以内で節約して上手い事買い込まないと、いよいよ特異点Fでアーイキソになってしまいますので、新たにチャートを構築してこれに対応します。今からチャート構築とかお前RTA奏者みてえだな。

さてまずは包帯！ 食料！ 水！ って感じで激安の品の確認です。品質によっても効果は変わるので、今はそんな事言ってもらえません。最低品質でも構わないのでコスパ優先です。

▽ 包帯を入手した

▽ 飲料水を入手した

▽ せんべいを入手した

という事で最低品質の商品、工事完了です……食料に関してはせんべいが一番コスパが良かったのでそれを買い込みました。一袋百円とかそれマジ？ ちなみに810円は綺麗にゼロになりました。

残金ゼロとか週末の日曜日どうするんですかね。最悪、母上に金を集める事になるのでしょうか。死ぬ未来しか見えない……見えなくな  
い？

まあ、その辺りはホモ君の耐久性を信じて堪える事を信じましょ  
う。

今回はここまでになります。ご視聴、ありがとうございました。



## 事前準備 その二

皆さんこんにちは、ノンケ（抑止の守護者オカン）です。

今回は前回の続き、家に帰って来てから暫く後、藤丸君とのデートの日になります。カルデアに出発する前の最後のクソデカイイベントかと思われまので、行きませんか？行きましようよ（断固たる決意）。お前、絶対成功させたるからなあ？ あ、お金に関しては母上に小遣いの前借に成功しました（満身創痍）

さて要するに買い物イベントですが、骨董市となるとなんか攻略に使えるアイテムとかのラインナップはナオキなので、ここは一発、ふといしーちきんを見つけたる事に終始したいと思います。要するに掘り出し物を探します。

とはいえ簡単にはきもちーの…あげるわあなたに…とはならないので、ここは足で探しましょう。足だよ、ヨツンヴァインになるんだよ（意味不明）。

∠今日は藤丸と出かける日だ。いい感じの茶碗が見つければいいのだが。結構大きな骨董市なのだから、期待してしまう自分が居た。

期待してんの？ そんなんじや甘いよ。もつと疑ってホラホラ。

ちなみに私はアホのように期待してます。掘り出し物出せオラツ！

相反する矛盾精神は、遂に危険な領域に突入する…まあこの後マジで危険な領域に突っ込むわけですが。ケツデカピングーになるかナオキになるかはこの準備期間次第です。

今回狙っていききたいのは…：…やっぱり触媒い…：…ですかねえ…：…路地裏武器商人君にも会えず、事前準備が半端な私が唯一用意できるものと言えばそれくらいですはい。召喚できないって自分で言ってたじゃないかって？ いいだろお前成人の日だぞ（意味不明）

まあ真面目な話をするとい前のRTA奏者の兄貴の中でクソ強プレイヤー君を作ってなお鯖をホイホイ召喚してた方とかも居るので、そういった超ふとい剛運を期待して。一応。それに抜け道もあるにはあるので。

「あんた！ 藤丸君来たよ。いつもみたいに待たせないで、さつさと行きな。今日は時間かかるんだから……この前の一件、まだ忘れてないからね」

＜母からの叱責に、貴方は急いで走り出す。一日帰りが遅れてしまい、相当に心配させてこつてりと叱られてしまったとはいえ、ここ数日は特に厳しい。愛の鞭ではあるのだが些かに痛すぎるとも思う。

お母様相変わらずっすね。キビシイ……キビシイ……

「康友！ 迎えに来たぜ」

＜立香は玄関であなたを待っていた。

あ……目をキラキラさせてる藤丸君がわっいっい。Fateの原作主人公って結構愛嬌ある顔してること多いっすよね。そんなんだからホモに狙われるんやぞ。

とはいえ藤丸君の愛嬌は恐らくFateシリーズの中でも随一かもしれません。(スマホゲーとかいう万人受け狙いのコンテンツの主人公なら)そりやそう(ホモにも好まれる愛嬌ある顔にも)なるよ。藤丸ちゃん？ 同人誌が量産されてるあたりから察して……シコレ。対抗できるのってジーク君くらいじゃなからうか。

＜貴方はすまないと立香に一言声をかけて、玄関に走り着いた。使い古し、履き心地が良い靴を履いて、朝と昼の中間の日差しの中に、身を晒す。

「今日は早かったな。あ、さては叔母さんに相当絞られて、ちよつと懲りたか」

＜立香は揶揄うように笑う。貴方が時間にルーズである事を、幼馴染である彼は知っているからだ。貴方は、ちよつと拗ねた様子で立香に言葉を返した。

「あそこまで言われれば流石に懲りるって、そこまで言われないと懲りないのがお前らしいっていうか……まあいいか。行こう」

手を差し出して「行こう」って誘ってくれる藤丸君を見れるのはF G O R P G だけ！ ちなみに作者はノンケなので悪しからず(意味深)。調子こいてんじゃねえぞこの野郎！ホモのくせによお、何がノンケだあ、お前はホモだよという苛立ち兄貴は落ち着いたりしなかつ

たりしてください（解決放棄）

さて、道中の楽しい楽しい移動会話は力……ツトオ！（BRLY）  
します。まあ見所さんが無いので仕方ないね。見たい人は、買って、  
やろう！　なので骨董市に着いたところから再開です。

＜骨董市の規模は、想像を超えて巨大だった。ここなら、目当ての  
モノも見つかるだろう。しかしここまで広いと見て回るだけでも随  
分と楽しい時間になるのではないか。立香にそう同意を求めると、彼  
も頷いてくれた。

「でも二人でのんびり見て回るっていうのも、それはそれで楽しそう  
だけど時間かかりそうだからなあ……取り合えず最初は手分けして  
目当てのものをパパッと探して、余った時間で見つかったら二人で一  
緒に冷やかしながら自由に回ろうぜ」

＜それがいいな。面倒は先に終わらせるに限る。

＜あえて今日は二人分かれて回る、って言う手もある。

また選択肢ですね。これは、上を選ぶと藤丸君の好感度が上がり、  
下を選ぶと自由に行動が出来る、と言った所でしょうか。下を選べば  
ランダムポップのレアNPC武器屋さんにも立ち寄りそうですが  
……私のクソ雑魚ナメクジな運では武器屋さんをポップさせるのは  
無理そうなので、ここは無難に上を選びましょう。情けない保身、恥  
ずかしくないの？

「そうだよな。さっさと終わらせて、今日を目一杯楽しもう！」

＜立香はにかつと笑っている。

藤丸君はノンケです。悪しからず。（ホモの兄ちゃんたちの餌食に  
はならないです。ぐだ男でこれなんでぐだ子の愛され具合も納得が  
いきます。

さて、ここからはパパパッと目的のアイテムを探すだけの時間なの  
で、藤丸君と合流するま、え、に〜？

これから狙っていくスキルについて、お話します。

FGORPGでは主人公もスキルを獲得できます。その中でも、今

回狙っていきたいスキルの筆頭は『逆境』ですね。

逆境は体力が減ると大幅にステータスにふとい補正がかかり、ストレス値が一時的に消し飛ぶ強スキル……ではなく、その代わり体力がナオキにならないと発動しないとかが言う諸刃スキルの筆頭です。使いこなすと馬鹿みたく強いですけど。マジで某迫真空手師匠みたくなります。

しかしこのスキル、私が採用するという事はお察しの通り（意味不明）RTA奏者姉貴兄貴からは不評のスキルです。

逆境は、確かに出力は上がるスキルなのですが、そもそもその発動が暴力！ 暴力！ 暴力！ のタイムロス三重唱でRTAではひで並に嫌われているスキルです。FGORTAではまず、（攻撃食らうくらいならチャートを進めるのが兄貴姉貴なので使われてるのを見た事が）ないです。

まあ我がエンジョイプレイでは鬼種の魔のステータス上昇による頑強さと合わせ、割と死ぬこともなく攻撃を貰うだけでお手軽に出力を叩き出せるスキルとして狙っていきたいと思います。タイムさえ気にしなければ有能なスキルなんです。タイムさえ気にしなければ。

後、逆境に関連してやはりこのスキルのお供、戦闘続行も取りたくはありますが、これは相当スキルポイントを貯めないと取れない高ランクスキルなので、甥の木村、割愛します。

で、今優先したい二つ目のスキルですが、これは二つの候補の内から迷っています。

一つ目は、やっぱり王道を征く……喧嘩慣れ、ですかね。喧嘩慣れは戦闘系マスター必須と言ってもいいスキルで、文字通り戦闘でこなれた動きが出来るようになります。分かりやすく言えば、戦闘でストレスを負いにくくなり、命中率が僅かに上昇します。ちなみに当然の如く兄貴姉貴には不評です。（RTAする技術とふとい運さえあればそんな僅かな補正なんて）必要ねえんだよ！

二つ目、30分で、5万！ 的なお手軽スキル、蛮人。耐久がこれマジ？ になる代わりに腕力がご立派ア！ になります。こちらもRTA兄貴姉貴達からは不評です。（死ぬリスクを負うくらいなら腕

力なんて）必要ねえんだよ！

エンジヨイプレイ、且つ戦闘マスターという状況下で選択したこの二つですが、どちらにも長所があり短所があり……これもう（どっちが最適解か）わかんねえな？

という事で状況に合わせ臨機応変に突うずるつ込んでやる事にします（問題の先送り）

っと、画面ではお茶碗探しが終わりますね。では一旦ここらで切り上げて、と。

「よし、茶碗も見つけたし。後はもう自由時間だ。好き勝手巡ろう」

∨立香の言葉に貴方は頷く。まだ日も高い。一体何が見つかるか、これから楽しみになってきた。話題になるようなものが見つかればいいな、と貴方は思った。

ときめき与えちゃったかな？

さて、ここからは触媒、というか、まあ掘り出し物探しに入ります。骨董市ならまだ何かあるかもしれないのでテンションがフワー→気持ちいいいゝとなるようなクソデカしーちきんを希望します。

今回はここまでです。ご視聴、ありがとうございました。

## 事前準備 その三

皆さんこんにちは、ノンケ（百合好き眼帯美女）です。

今回は前回からの続き、骨董市で世界一や！ と言えるような品を探し出し、感動で目から男汁を流したく思います。

ではさっそく藤丸君と骨董市を巡る訳ですが、どの店もぱつと見ガラクタしか置いてないように見えませんか？ 見えますよ〜！ 骨董市い〜！ とはいえ品物は十四万三千個くらいありそう（誇張）なので、その中からゴツイ玉を探すとしましょう。

「うーん……お、これなんてどうだ？ 結構良い色してないか？」

＜立香が早速、店頭に置かれていたその古そうなツボを持ち上げる。確かに骨董品と考えるのであれば、ここまで綺麗に残っているのは見事なものだと貴方も思う。

＜＜……いや、ここまで綺麗ならむしろ骨董品ではないのでは？ 新品なのでは？

＜余程保存状態が良かったんじゃないか、これおっとここで選択肢。何方へ行ってシコればいいでしょうか。

よし、ここは私の頭脳が唸りを上げるポイントでしょう。ステハゲや大先輩とは違う有能KMR並みの推理のキレを見せて差し上げましょう。勝手に見せて差し上げるとか言ってる視聴者兄貴はもう少し優しさをください、寄こせ（豹変）

では……

ヌウン！ヘッ！ヘッ！

アッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッ  
アッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッ  
アッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッ  
アッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッ  
フウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ  
!!!! (大迫真)

……考察完了です。

骨董品にしては保存状態が良すぎる。つまりそれは骨董品ではないのではないか？ つまりこの会話の正解は上、これです（確信）。この推理の冴えはついに覚醒しましたね間違いない……推理の嵌り方

が気持ち良すぎて114514回も男汁を出した。

「……なるほどな!? 言われてみればそうだわ! やーこれ雰囲気呑まれたって奴だな! やられたー!」

▽二人して騙されそうになっていた事に気がつき、思わず笑いが込み上げてきてしまつて。立香と一緒に、貴方は笑つた。

これは友好度爆上がりですね。カルデアでもなかようやろやあ……(ねつとり) つとなんか会話の後に……

▽スキルポイントが手に入った

はえ〜、選択肢次第ではスキルポイントも手に入るすねえ(関心) これからは選択肢も二チ二チ丁寧に攻めていかないといけませんねえ! (執心) なんなら選択肢のスキルポイントだけでスキル取るのも悪くないかもしれませんね!! (好奇心)

はい。では改めてこの店の品ぞろえを

……キャンセルだ(掌返し)

なんかさっきの選択肢のプラスを帳消しにするみたいな酷いラインナップでした。

全部壺ですよ、全部! しかもうわあ、これは偽物ですな……つて特に骨董にも詳しくないホモ君でもあつさり見破れるくらい。これは(掘り出し物発見伝するのは)ダメみたいですね。他の所にも微妙に期待しずらくなつてきましたが、少なくとも藤丸君の好感度は稼げるので予定調和です(大嘘)

という事で一つ目の淫夢君(最弱)でしたが、今度の店は興奮させてくれるような品ぞろえである事をいのりま

〜カ……ツトオ!(BR L Y)〜

ふざけんな!(声だけ迫真) 五つ目まで全部壺じゃねえかお前んちい! これじゃ、全然(運が)足りないんじゃないですか? 特異点Fを無事突破したいんだよなあ、良い触媒候補をなあ〜頼むよ〜。「おつ、漸く壺オンリーじゃなくなつたぞ」

▽立香が指さす先、黒いフードを被った男の目の前、そこには根付や文鎮、鉄瓶などが無造作に置かれていた。

ヌツ!(迫真集中) 来た来た来ました! これです、私がここに来

たわけ！ いやあ良いですねこういう店を探してたんですよ！ しかもRTA奏者御用達の黒フード！ 勝ちましたね。あ、因みに武器屋の黒フードが優秀なだけでこの人自体はごくごく普通の黒フードなのでそこは間違えない様に（戒め）

「……らっしやい」

＜フードの男が愛想もなく言う。貴方は、その言葉に促されるように店の店頭の商品を眺めた。

では品ぞろえを確認……取り合えず、値段からアタリを判別するのは不可能なようです。全部一律三千円とか剛毅すぎませんか。どれも値段が同じならどれ買っても恨みっこ無し……よし、ここはリアルダイスで決める事にします（狂気の沙汰） 決めました（速攻） 購入するのは筆になります。お前作家みてえだな？

＜貴方が店頭に置かれていた年代者らしい筆を掴み、代わりに三千円を渡す。すると、男は隣に置いてあった瓢箪も渡してきた。

「……ついでだ、持ってけ」

ええ……（困惑） そんな豪快なおまけ付けていいんですかね……いや触媒ガチャはマジで運なんで、触媒の数が多ければ多い程特定の鯖を呼びやすくもなるとは思いますが（エンジンヨイ勢特有の脳筋思考）

とはいえ貰えるものは貰ってきましょう。フードのお兄さんありがとうございます！

＜『年代物の筆』を手に入れた。

＜『真っ赤な瓢箪』を手に入れた

という事で、掘り出し物かはサッパリですが、良い感じの筆と瓢箪をゲットです。普通にインテリアにも使えそうで良いと思った（小並感）

「お、それ買うのか？ どれどれ……わあ、筆も、瓢箪も、さつきの壺と違ってこう、なんだ。積み重ねてきた歴史を感じるような」

＜立香は、貴方の買った品に言い知れぬ歴史を感じているようだ。

一度人類を救った男の発言。これは大当たりですね間違いない……（根拠なき理論） これはレア度最高の強力なサーヴァントを召



喚すると期待していいかもしれません。そもそも召喚出来るかがこのルートの場合運次第ですが。

「そういうの見ちゃうと、俺もなんか買いたくなるなあ……なな、康友。なんかいい感じの奴とかないか？ お前が選んでくれよ」

＜立香は、どうやらここで買いい物をしていくことに決めたようだが。しかし、品物を選ぶような自信は貴方にはない。どうしたものだろうか。

＜親友の頼みだ。ここはひとつ頑張ってみるとしよう

＜親友に下手な品を掴ませるのもマズイ、断るとしよう。

上だよな？（縮地） 当然藤丸君の好感度は稼ぎたいのがつつり選んでいきます。相手に物を選ぶときはキツチリ自分の目で、当たり前だよなあ？

「よし、じゃあ任せるよ、相棒！」

おお、初めての相棒呼び。でも君の相棒はこのハゲチンピラじゃなくてアメジストの白亜の少女だからそこを勘違いしちゃあ、いけないよ？（DVNC）

ですがその呼び方には応えなきゃ……（使命感） ここは心を込めてダイスロール！

えー……出ました。藤丸君に選んだ品は……こちらっ！

「お、これか。コインをアクセサリーにしていると、なんかおしやれだな。汚れも結構いい味出してるし……よし、これ買います！」

＜立香は、コインの首飾りを購入した。

首飾りですね。金貨、とかではない、珍しい鉄貨です。銀貨でもありません。結構な年代物に見えますけど、ガチで鉄貨の骨董品だとすると、相当古い代物ではないのでしょうか。うーむこっちの方が触媒としては良い気も……

「……毎度」

「ありがとうございます……うわ、見かけに寄らずスツと来る」

まあ藤丸君が喜んでるので何でもいいですけども。気に入ってくれたようで、選んだ甲斐があるという物です。こうやって積極的に好感度を稼いでいく、ほんへ近いからね、しょうがないね。

そこまでには本心をドバーツと出し合えるような仲になっておきたいですね。もうなってる？ ならもつと距離を詰めて幸せな友情を築いて終了しないと（義務感）

「いやー、良い買い物したかも。ありがとな、康友」

▽問題ない、と貴方は返す。笑う立香の首元で鉄貨が鈍く輝いていた。

お前彼女みてえだな（直球勝負）でもホモ君はホモではないので親友ポジは確定的に明らか。エンジヨイプレイならこういう時何の遠慮もなく仲良くできていいですね。でもRTAはプレイヤー自身の腕を輝かせることが出来るから一長一短だと思う（実況者並感）  
「よし、他にもいい物あるかもしれないし、行ってみようぜ」

▽立香の言葉に頷き、貴方は再び歩き出した……のだが。残念ながらこの後はどれだけ探しても有益そうな品を見つけることは出来なかった。しかし、相当端から端まで走り回ったので、相当な運動にはなった気がする。

▽スキルポイントを獲得しました。

RTA奏者姉貴兄貴はここでスキルを獲得する剛運がありました。がエンジヨイ勢クソ雑魚淫夢君の私ではこんなもんのようです。とはいえ当初の目的の触媒になりそうな品はゲットできているので、その辺りでふといしーちきんになる事を祈りましょう。

さて、次回にはカルデア入り。残る時間は兎に角スキルポイントをかき集め、最低限狙っているスキルを獲得することに費やしたいと思います。後は……准将に祈りましょう（N敗）

今回はここまですになります。ご視聴、ありがとうございました。

## カルデア入りく特異点F カルデア入り その一

皆さんこんにちは、ノンケ（イアソンの憧れ）です。

皆さん。いよいよここまで来ました。そうです。カルデア入りです。血液採取の辺りは豪快にカツ……トオ！ しまったので、昏睡レ……誘拐から場所詳細不明のカルデアへハイエース（ネタバレへの配慮）、そして主人公と藤丸君は離れ離れ、藤丸君はマシユちゃんに起こされて、目が覚めるところから……の、筈なんですけど。

「ああ……良く寝た」

＜隣で立香が目を覚ます。急に眠くなつて、ここに居たのだが……自分がさつきまでどうしていたかがどうにも思い出せない。

「つて、あれ。ここは……康友、ここ何処か分かるか？」

＜さつぱり分からない。と、貴方は返す事しかできなかった。

なんか二人してカルデアに着いた瞬間に起きてスタートしたんですけど……これが天性の肉体と鬼種の魔持ち特有イベントちゃんですか？（無知） え、これ無事にマシユちゃんとは知り合えるんでしょうか。知り合えなかつたら修羅の道ルートかなあ、怖いねえ（未知なる険しい道に震える投稿者）

とりあえず、二人して乗物から降りて、探索パート……と思ったら、藤丸君が早速離脱しました。これは例のシミュレートですね。バツサリカツ……トオ！（BRLY） 因みになんとか勝ちました。

さて、シミュレートが終つていよいよ自由行動。どうやら案内も無いので、手分けして探索をするようです。藤丸君も単独行動、つまりこれでマシユちゃんにも会えるでしょうから安心！

さて、一人ぼっちのホモ君はどうしましょうか。と言っても二人が予想以上に早く起きてしまったのでイベントが始まるまでの余裕はガバガバなので、のんびりやっても問題は無いでしょう。ホモ君はマイペースに動きましょう

という事で、ホモ君の自由行動の間に、獲得したスキル一覧を載せ

ておきますね。

・鬼種の魔(初期所持) 全体的なステータスアップ&瞬間的な出力上昇

・逆境・体力が一定の割合を下回った場合ステータス上昇

・ケンカ慣れ↓喧嘩師・回避力、命中力に補正(中)

こんな感じです。やっぱ鬼種の魔が優秀つすね……あ、後ケンカ慣れで予想以上にスキルポイント消費しなかったので、一つ上位のランクのスキルを取得しました。

ちなみにケンカ慣れ系のスキルを極めると武芸百般というぶつこわれスキルに化けますが、獲得には余程の運かスキルポイントが889464点くらいは軽く必要なのでエンジョイプレイの私にはまづ取れないでしょう。

つと、画面で動きがあつたようです。

〈真つ白な廊下を進んでいると、その中に別の色がようやく混じる。そこに誰かが立っているのが分かった。

「おや? 君は……」

〈亜麻色の長い髪、目の飛び出るような美人なのだが、何処か既視感が拭えない。何処かでこの人と会った事があるだろうか、と貴方は思考する。しかし、どうしても思い出せない。仕方なく、無礼とは分かつていても、貴方は問いかけを返した。

「何処か? ああいや、君とはこれが初対面だとも。心配しなくていい……そうだね、まずは自己紹介からだ。私は、レオナルド・ダ・ヴィンチ。レオナルドでも、気軽にダヴィンチちゃんとも、好きに呼んでくれたまえ」

ホモ君は天才ではないので畳みかけるのはやめて差し上げろ(慈悲)

はい。皆さんご存知、そして皆さん大好き万能の天才、ダ・ヴィンチちゃんです。ここで会えるとは幸先がいいですねえ。時間もあるので、ダ・ヴィンチちゃんとも仲良くしておきましょう。やっぱり主要キャラとは仲良うせんとエンジョイプレイとは言えへんわ(クソ寒関西弁)

「貴方は、その名前に聞き覚えがあった。言わずと知れた万能の人だ。しかしその名前を勝手に名乗るといふのはどうなのだろう、本人に失礼ではないだろうか、と思ってしまう。」

「……ふむ、君の考えを当ててあげようか、少年。その名前を名乗るのは本人に失礼じゃないか？ 違うかい」

「ばちこり当てられてて草生えますよ。ホモ君顔に出るタイプなんですかね。まあキャラの表情とか見えないんで推測ですけど。画面でも考えがバツチリ当てられたことにホモ君が驚き、ダ・ヴィンチちゃんも笑ってます。」

「ははっ、全く揶揄い甲斐のある新人君でよかった。うん、一般からの補欠要員だからまあ何も知らないだろうし、ここまで純粹なものも頷ける。よし、ちよつと興が乗ったぞう」

「おっと、ダ・ヴィンチちゃん的にはホモ君の反応は百点満点の様です。ダ・ヴィンチちゃん、藤丸君とは確実に仲良くなるんですけど、主人公君とは、気が合わないと全然ダメですからねえ……お眼鏡になつて一安心。」

「じゃあまず、君が何故こんな所に居るのか。そして、私を見た事がある気がするのは何故なのか。その二つを一挙に説明する為の、基礎から行こうじゃないか」

「そう言つて、掌をこちらに向けるダ・ヴィンチ。そこに突如として、赤い焔が立ち上がり貴方は後ずさりをする。尋常ではありえない事態に動揺する貴方。その様子を、ダ・ヴィンチはいたずらが成功した子供の様な瞳で見つめていた。」

さてこつから、ダ・ヴィンチちゃんの楽しい楽しい魔術、人理講座（実演も交えて）が始まるのですが、この辺りは皆さま目が腐るほど見たと思うのでカツ……トオ！ します。ダ・ヴィンチちゃんの透き通るような声での説明に、昇天する程酔いしれたいノンケはFGORPG買って、どうぞ。」

「……と、こつまでが前提だ。君がここに来たわけ、この機関の目的、まあざつとだけ説明してみたよ。ふふん、この私の分かりやすい解説、如何だったかな？」

＜＜理解は出来たが、あまりの話で脳が追い付いていない

＜＜もう一度説明して欲しい

上だよね（先手必勝） ホモ君の頭脳では猿でもわかる魔術と人理修復は厳しかったようです。そりゃあスケール大きいし、仕方ないね。このホモ君はRTA奏者姉貴兄貴の様に優秀な魔術師でも、ずば抜けた一般人でもないごくごく普通（混血）の少年なので、しっかり調教しないとこれから先にはついてこれません。チャオズかな？

「まあそんなもんさ。天才の様に、一を聞いて十を理解するっていうのは、難しい事だからね。私はそれくらい朝飯前だけど」

＜＜だが、大切な事だというのは分かった。何が出来るか分からないが、やれる事があれば何でもやらせてほしい、と貴方はダ・ヴィンチに言った。

はええ……ホモ君も主人公らしいこと言うんすねえ……

「へえ、いきなり連れてこられて。それでも文句は言わない、か」

＜＜拉致という強引な手段を使った文句は後で所長とやらにしこたま言うつもりである。それにここに居ること自体は、突発的な海外旅行だと思えばなんて事は無いと貴方は返す。

「うんうん凶太いねえ君。気に入ったよ、困ったことがあれば、このダ・ヴィンチちゃんにどんどん頼り給え。この機関に協力するのは少しアレだけど、個人的に誰かに手を貸すのは、やぶさかじゃないしね」

お、これは……会話終了と同時に、カルデアのマップにダ・ヴィンチちゃんの工房が追加されていますね。アアーイイ！アツイイヨイイヨイイヨ……

これでいつでもダ・ヴィンチちゃんの元に言つて、オセロの相手をして貰えます。というのは冗談で、ここに来ればダ・ヴィンチちゃんと会話することが出来るようになりました。好感度上げは会話から、実家の様な安心感の工房でダ・ヴィンチちゃんと話そう！

「まったく、他の人員も、君の様に可愛げのある子ばかりだと、私もやる気が上がるんだけどねえ。あ、それでどうする？ もう少しここで駄弁っていくかい？ 珍しく私は暇だから、付き合えるよ？」

ここでダ・ヴィンチちゃんともう少しお話しできるようですが、そ

れはまた今度。そろそろ藤丸君と合流しないとヤバイヤバイ……

「ん？ 連れがいる？ あー、お友達諸共拉致されちゃったのかい。全く、ここへの評価がまた一段階下がりそうだよ……まあそのお友達共々、頑張ってくれたまえ」

◇ダ・ヴィンチからからの声援を受け、貴方はまた白一色の廊下を歩きだした。

ダ・ヴィンチちゃんありがとナス！ これからもたっぷりお世話になるぜ〜？ さて、この後は藤丸君を探してFGO最可愛後輩マシユやレノフとも接触できるかもしれません。後半はどうでも良いとして、マシユともちゃんと後輩先輩として仲良くしたいですね。もちろん最終的には藤丸君と幸せなキスをして終了してもらいますが。

しかし……問題は藤丸君が何処にいるか分からない事です（致命的）二人つてどのあたりで出会ったんやろなあ。とりあえず何処を探したのか。あー、ダ・ヴィンチちゃんに館内の地図でも貰えばよかったですね（届かぬ後悔）

今回はここまでになります。ご視聴、ありがとうございました。

## カルデア入り その二

皆さんこんにちは。ノンケ（山門の守護者）です。

前回は藤丸君と別れて探索を始めたところです。その後探索を続けた結果、何とか情報を得る事が出来ました。どうやらマシユと藤丸君はレ／フと別れた後にカルデアツアーに出かけたそうで、まだその時間は経っていないそうです。今から急げば、二人に追いつけるでしょう。ユクゾツ！ デツデツデデデ！カーンデデデデ！

という事で軽く二倍速で追跡した結果、割とあっさり追いつけました。

「お、康友。どうだったそっちは」

「先輩、そちらの方は」

「マシユ、此奴は俺の友達の本造院康友だ。一緒にここに来たんだ。康友、この子は……」

「先輩のお友達でしたか。初めまして、マシユ・キリエライトと申します」

そして来ました、FGO最強の盾にしてFGO黄金タッグの片割れ、藤丸立香の正ヒロイン、マシユ・キリエライトちゃんです。徹底的に可愛がって、飯を奢ったり、イベント一緒に解決してやるからなあ？ 愛される覚悟をしておくがよい（誤解を招くような発言）

私はマシユちゃんの彼氏は藤丸君ちゃん以外認めない過激派なので、絶対に藤丸君とくつつける積りでもいます。だが頼りになる先輩ポジションは共有したい。

＜薄い紫の、白い少女だった。立香と一緒に居るのがとても似合う。貴方は何故だか直感的に、彼女は信頼できる人間だと感じる。それは、とても純粹そうに見える瞳を見たからか。それとも。

＜本造院康友だ。気軽にやっさんと呼んでくれ。

＜本造院康友だ。気軽に本造院さんと呼びたまえ。

下は何処のANSNINさんなんですかね……当然、上だよね（常識）

「分かりました。やっさん」





ですが、当然ながらホモ君と藤丸君の部屋は別です。一緒だと何か間違いが起こるかもしれないからね、しようがないね。さてホモ君の部屋は？

「やっさんのお部屋はここです」

「マシユの連れてきてくれた場所。そこは貴方にとつて見覚えのある場所だった。というかさつきこころら辺で、自称歴史上の偉人と話したばかりなのだが。」

「ファッ!? ダヴィンチちゃんの向かいなのか……環境音煩そう（小並感）」

「この部屋の向かいの部屋にはカルデア技術顧問の方がいらつしやるんですが……」

「へえ、技術顧問。そりやあ凄い頭の良い、理知的な人なんだろうね、マシユ」

「いえ。私はあまりお会いしたことが無くて、どんな方かは良く知らないんです」

「立香の質問に、少し申し訳なさそうに返すマシユに、問題ないと貴方は言う。この人とはさつき知り合ったばかりだ、と。」

「そうなのですか?」

「どんな奴だったんだ、康友」

「一言でいえば……天才?」

「一言でいえば……変態!」

「下だよね?（雷速） そりやあダ・ヴィンチちゃんを表すなら上より下。当たり前だよなあ? という事でダ・ヴィンチちゃんは今日から変態です。」

「へ、変態!」

「変態……生物の変化に伴う変化から、常とは違う人を指してそう呼ぶ事もある、と聞いています。えっと、つまり……そうとうな、変わり者、ということなのでしょう?」

二人して戸惑ってますけど完全に戸惑い方のニュアンスが違うのが笑えますね。まあそれだけ藤丸君が汚れていて、マシユが純粹という事でもあります。まあ無菌培養のマシユと逞しい野生種の藤丸君

だし、多少はね？

さて、ここでホモ君は離脱。我らがDrに先に会うのは藤丸君だけです。まあ、ホモ君は先にダ・ヴィンチちゃんに会っているのでお相手ですね。

「康友。なんかこう、トラブルがあつたら、俺も力になるからな！」  
「えっと、私も出来る限りは。職員同士のトラブルは無い方が良くと思いますから」

〈そう言つて去つていく二人を見送る貴方。その後ろで、狙つたかのように扉が開いてダ・ヴィンチが姿を現した。

「変態とは言つてくれるね。まあ、私にとってそれは誉め言葉だけだ」

〈悪い意味で言つたつもりは無い、と貴方は返す。ダ・ヴィンチは酷く愉快そうな笑顔で応えた。

「じゃあその変態とのおしゃべりに付き合つてくれたまえ。どうせ暇なんだから」

という事でこつからイベントが始まるまではダ・ヴィンチちゃんとの会話イベントで埋めます。会話の中で何か閃いてくれれば御の字です。FGORPGはどんな時にでも成長チャンスのフラグが立つので、エンジョイプレイなら何でもやる価値があります。といっても会話とかでフラグが立つ可能性はゴミの様に低いです。

因みにRTAでは確率が低すぎるので狙う事はいつきいありませんでした。流石RTA奏者姉貴兄貴は修羅の国に生きていらつしやる……僅かな希望にすぎるよりも自分で切り開いた王道を征く(騎士王並み感) プレイヤーとしての格が違いますね。

「つと、そう言えば。君、ここに連れてこられた時、何か持ち込んでないかい？ バレると所長に絞られるから、そう言うモノがあつたら報告しといたほうがいいよ？」

おや、イベント会話がぶつちぎられましたか、これはダ・ヴィンチちゃんの持ち物チェックですか。出自の分からないアイテムを持つてるとダ・ヴィンチちゃんが持ち物チェックして鑑定してくれます。

恐らくは、持つてきている触媒候補の二つに反応したと思われま

す。流石は万能の天才、ダ・ヴィンチちゃんじゃなきや見逃したね。因みにこれマジ？ こんな酷い偽物買っちゃってさ、恥ずかしくないのかよ？ とか言われたら一生ネットの晒し物になるような絶叫上げて失踪します（予告逆KO）

〈持つていて怒られそうなのはこれくらいだが、と貴方は筆と瓢箪を差し出す。

「……へえ？ ちょっとそれ、見せてくれないかな」

どうやら一発で偽物と断定されるレベルの贋作ではなかったようです。失踪は免れましたがさて、問題はここからですね。お前、クビヤ（偽物判定）された時点で疾走して失踪（激ウマギャグ）するので、頼むよ。

「ふむふむ、成程。ざっと見た限りだけど、二つとも相当古いものに間違いないね。特にその東洋のペン……筆、といったかな？ それは、見事な作りをしている。間違いなく高級品だよ」

ああ……たまらねえぜ！（完全勝利UC）瓢箪の方はまだ分かりませんが、筆は大当たりだったようです。一体どなたの持ち物かは知りませんが、筆で何かしらをしそうな人。中国系、特にふーやーちゃんや始皇帝陛下とか、日本ならなきこさんやワンチャンおつきーを召喚する触媒になり得ます。もしかしたら柳生さんの様なガチ戦闘系サーヴァントを呼べるかもしれません。大戦果です。

「瓢箪の方は……良く分からないな。私でも、これをしっかり鑑るには時間がかかるかも」

瓢箪の方はまだアンノウンのままですが、取り合えず年代物だという事は分かりましたので満足です（エンジンヨイ勢特有の妥協）もし筆がダメだったら此方を触媒として使いましょうか。

〈貴方は、この二つは報告しておいた方がいいか、とダ・ヴィンチに問うた。

「微妙な所だねえ。触媒として使えない事も無いから、所長は欲しがるかも……？ って、この音は」

そして……いよいよ外からサイレンの音お……が聞こえて来ました。始まりましたかね、レ／フのテロ。となればマシユちゃんを放つ

ておくわけにはいきません、助けに行きましょう  
今回はここまでとなります。ご視聴、ありがとうございました。

## 藤丸視点：炎の海の中で

——走る。走る。

Drロマニが、管制室で何か起きたといった。そこには確か、自分を案内してくれた少女、マシユが居たはずだ。嫌な胸騒ぎがする。とにかく、急ぐしかない。

「立香！」

向かいの通路から、一番頼りになる男が走ってきた。どうやら彼女も気が付いたらしい。

——本造院康友。互いを良く知る、長い付き合いの親友。

「康友！ 管制室だ！」

「管制室って……おい、まさかマシユって子に何か」

「何があったか分かんないけど、兎に角警報が鳴ってるって」

「ああ!? 最高に良くない情報だな！」

鋭い三白眼が、管制室に続く通路を睨み、同時に駆け出す。特に何をしに行くか。此奴は言わなくても走り出してくれる、俺と一緒に。だから此奴の事は信じられる。ハゲでチンピラみたいだけど、そんな見かけなんか気にならないくらい、内面は熱い奴だから。

「後ろで置いてかれてる人は？」

「医療班のトップの人！」

「そうかい、後で世話になりそうだな！」

「その予感当たって欲しくない……！」

目の前に管制室の扉が……。いや、先ほどとは違う。中の色は、青じゃない。全てを舐め尽くし、消し去る、絶対の赤。アレは、焔だ。管制室が火に包まれている！

「誤作動じゃないみたいだな……！」

「立香！ 一気に突っ切るぞ！」

「当然！」

止まっている暇はない。入口に立ちふさがる焔の壁に向けて、顔だけは覆って突っ込む。一瞬熱を感じたが、一瞬なら焦げもしない。問題は無い。火を抜けたところでストップ。首を回して周りを見舞わせ

ば端から端まで、隙間の一つもない火の海だ。

〈隔壁が閉鎖するまで、三十秒です〉

「酷え……」

「マシユ、無事で居てくれよ、頼むぞ……っ」

そう思ったのも、正に一瞬。居た。探し人は。部屋の真ん中。自分の目線の先に。

「——マシユッ！」

見つけた。ああだが、畜生。最悪だ。悪い方向に予想を超えてくれやがった。マシユは、火の海の真ん中に、寝っ転がっている。でも……ああ、クソツたれ！

「何っ!? 何処だ……ああ、おい、悪い夢でも見てんのか!」

巨大な岩と、床に挟まれて。上半身だけが見えている。その下は？ 想像もしたくない。この世の理不尽に吐き気がしてくるから。

「兎に角助けるぞ」

「了解、立香、合わせるから好きにやれ!」

「分かった!」

とにかく、まずは彼女を引きずり出さねば。しかし下に手を挟んで、持ち上がるか？ それならば、と頭の中で答えを導き出す。必要なのは、一瞬の爆発的な力だ。

「棒と土台! 秒でいいから隙間を! その隙に!」

「上等、思いつきりやって動くかどうかだなあ!」

瞬間、康友が下がり、俺が前に出る。マシユの近くで、フオウと呼ばれていた子が鳴いている。大丈夫だ、きつと、お前の友達は助ける。でも声に出す余裕はない、直ぐにマシユの近くで待機する。ああ……チクシヨウ、岩の下で、血が滲んでるのが見えた。

「マシユ、大丈夫か?」

「……せん、ばい」

「大丈夫、もう大丈夫だぞ……」

「立香! 準備出来たぞ!」

康友が、何処からか拾ってきた太い金属製の棒らしきものを抱えている。近くの残骸を蹴って飛ばし、巨石の隙間の近くへ。康友がその残骸に棒を乗せ、巨石と床の間に斜めに差し込んだ。これで、二人とも準備完了だ。

「任せたっ！」

「よっしや、どっこいしょおおおおー！」

親友が金属棒を思い切り下へと押し込む。筋肉が膨張する、体が僅かに膨らんだかと錯覚するほどに。ギギギ、と軋む音が少し響いて。

直後、ほんの僅か、指一本分ほどだが、巨石が持ち上がった。マシユとの間に隙間ができた。ここだ。抵抗はない、一気にマシユを引きずり出した。

「っしー！」

「あっ……」

見たくは無いが、確認。足は欠けてはいない。潰されて、肌が裂けて、骨も……だが、まだ大丈夫だ。絶望的だが、助かる可能性はゼロではなくなった。

そしてマシユが引つ張り出された瞬間に、巨石は重たい音を立てて大地を叩く。康友の使っていた金属棒は限界だったらしく、ひしゃげていた。一瞬、遅れていたらと思うと、ゾツとする。

「はあ……はあ……っああ！ マシユちゃんは無事か!？」

「無事じゃないが、生きてる。今、ドクターの所に連れて行く。他の人は？」

「……向こうからざつと見たが、容器の中の何人かはそこまで重症じゃないように見えた。助かるかもしれないぞ」

「よし、マシユを届けたら次はその人たちだな」

出来る事は幾らでもある。とはいえ、あんまり急いでマシユを揺らすとケガが余計に悪化するかもしれない。落ち着いて、移動するべきだろう。

後は、誰か託せる人が……あ。

「ふ、藤丸君、走るの速すぎ……って、これは……!」

入口の向こう、今一番必要な人が来てくれた。



「ドクター！ こつちです！」

「藤丸君！ それと……」

「本造院です。藤丸とおんなじ攫われですよ。それより、この子を！」  
マシユをDr.ロマニに早く託さないで。一秒ごとに助かる希望が薄れていく。出来るだけ、マシユに負担をかけないように、でも出来るだけ急いで……！

〈中央隔壁、緊急封鎖します。館内洗浄まであと百八十秒〉

「えっ！」

「何ッ!?」

……最悪だ。

マシユを助ける事が出来る、最後の希望が壁の向こうに消えていった。二重に、分厚そうな壁が、ここを完全な密室にしてくれやがった……クソ、恨むよ神様。なにも、こんな完璧なタイミングで！

「つぎけんな、なんでもう少し……！」

「こんなもん、蹴破ってやる！」

康友が蹴りつけたが、さっきの石とはまるで別物。僅かに震えもしない。その壁に、康友は拳を叩き付けて。顔は、うつむいていて見えない。だが分かる気がした。俺も今、同じ顔をしているだろうから。  
「……駄目だ」

「そうか……もう俺は神には祈らない」

「同意だ。こんな子を見捨てるような神だったら、祈る価値ないだろう」

そのまま、康友は隔壁に背を預け、ずるずると座り込んでしまう。こうなってしまうっては仕方ない、背負っているだけでもマシユには負担になる。そつと、出来るだけ衝撃の無いように床に降ろした。

「……でられなく、なっちゃいましたね」

「大丈夫だ。まだ、まだ助かるかもしれない。諦めちゃダメだぞ」

「そうだけ。確かに今は脱出できなくなったが……もう少ししたら開くかもしれない」

弱音を見せる訳にはいかない。今一番辛いのはマシユだ。五体満足の俺達が彼女を励まさなきゃいけない。彼女が助かる事を、諦めちゃいけない。絶対に。

「あ、カルデ、あすが」

「カルデアス……？」

「……おお、こいつはまあ」

マシユが視線を向ける先。そこにあつたのは、真つ赤な球体。さつき見た時は、青い地球の姿だったのが、まるでこの部屋の様に、全て炎に包まれて。

カルデアスは、この世界の姿だと所長は言っていた。じゃあアレは。

「……いや、今はいいか」

そんな事より、今は、目の前の彼女の命だ。

「なあ、マシユ」

「せん……ぱい」

「不安なんだ。少し、抱きしめても、いいかな」

マシユが、目を少し開いた。驚いているのだろうか。でも、今は一人じゃないと、せめて彼女に伝えたかったから。ややあつて、頷いた彼女の体を、出来るだけ優しく抱きしめる。まだ暖かい。命の温もりは、まだ彼女に宿っている。大丈夫、彼女はきつと助かると、己に言い聞かせる。

へコフィン内マスターの バイタル 基準値に達していません。レイシフト定員に 達していません 該当マスターを 検索中  
発見しました

「ヒュウ、お熱いな二人とも」

「黙ってるこのハゲ」

「あいあい……じゃ、俺は頭でも」

康友が手を伸ばして、マシユの頭をそつと撫でた。こいつも、出来る限り不安を取り去ってやりたいんだらう。俺達の不器用な鼓舞は、届いただろうか。こんな絶望的な状況でも生きる事を諦めて欲しくないという願いは、届いただろうか。

「……せんぱい、やつさん」

「ん？」

「あたたかいです……こんなときなのに、なんだか……」

〈適応番号48 藤丸立香 補充適応番号01 本造院康友の

2名をマスターとして再設定します アンサモンプログラムスター

ト 霊子変換を 開始します〉

〈レイシフトまで〉

〈3〉

〈2〉

〈1〉

〈全行程 クリア ファーストオーダー 実証を 開始します〉

## 特異点F その一

皆さんこんにちは、ノンケ（冬木一の若奥様）です。

前回はレイシフトまでのイベントをほぼ垂れ流し（大嘘）でお送りしましたが、今回はがつつりFGORPG、プレイしていきますよ〜イクイク。

さて前回の冬木へのレイシフト直後からプレイ再開ですが……周辺確認、ヨシ！ 誰も居ませんね。安定のボツチスタートです。はーつつかえ！ まあ主人公君は高確率で逸れるので仕方ないといえそうですが。仕方ないのでやりますやります。

〜周りはまた炎の海。しかし先ほどとは違い、屋外の様だ。どうやら何処かの広場らしいが何故こんな所に自分は居るのか。貴方は理解できない。

えっと、広場。初代の対バーサーカー戦の公園でしょうか。マップが確認できればいいんですけど、そんなものは存在しない（甘えを許さない型月ゲームの鑑）……あ、でもこの一枚絵、見覚えがあります。ここは……新都じゃな？（ほろーやりこみ勢）

〜近くに居ない藤丸とマッシュが心配だ。探しに行こうかと思っただが、それを許さないように、貴方の前に影が立つ。それは、貴方がおとぎ話の中でしか見た事の無かった、動く骸骨、という化け物だった。〜ストレス値が上昇しました。

未知との遭遇での緊張ストレス上昇はやめちくり〜（苦難） 鬼種の魔ケンカ慣れ持ちホモ君でも一般人なので、こんな普通のスケルトン相手でも油断しすぎると死にます。全力でぶっ潰しに行きましょう。

なお見所さんは無かったのでカ……ツトオ！（BRLY）します。だって予想以上にスケルトン君達が脆過ぎて。これマジ？ 登場した時の禍々しいインパクトに比べて実力が貧弱すぎるだろ……（落胆）

とはいえこんな雑魚エネミーでも経験値と素材は欲しいので地道にやりましょう。なお五人以上固まってたら逃げます。一對五だと

一気に難易度が跳ね上がるので（三敗）　ダークソウルみたいな難易度してんなお前な。

さて、冬木での最終的な目標は黒セイバー撃破ですが、私の目標はもう一つあります。それは……英霊召喚！　え？　出生の縛りから出来ないって自分で言っただろこの池沼？　とつとと失踪しろ？　しません（鋼の意思）

実は召喚は出来ない、と言いましたが、それはこの冬木が終わってから。カルデアが稼働し始めてからの話です。この冬木でなら、自力で石を探し出して召喚が出来るのです。

けど出生補正で発見率は通常より全然下がってますけどね、初見さん（諦め）

そして探し出せたとしても三つが限界。一人しか召喚出来ません。でも一人も召喚出来ないよりはマシなので、僅かな可能性にかけて探索してみましょう。

〜十倍速〜

何の成果も……得られませんでしたあ！

とりあえず新都エリアはガンガン探しましたが、全部空振りです。泣きたいです。やっぱり出生補正はクソ、はつきり分かんだね（憤怒）　ただ泣き言吐いても仕方ないので、頑張って探索に精を出しましょう。

〜 貴方はシヨッピングモールを探索した。

〜 金属バットを発見した。

おや、初めての成果ですが……どうやら石ではないようです。とはいえ武器はありがたい。ホモ君、ゲーム開始時の様子から武器を扱うのがお得意なようですので。拳でも普通にダメージは出せますけど（畏怖）

とりあえず金属バットを装備し、探索を続けます。そういえば、最初の広場は特に調べてないですね。探索してみましょう。

〜 貴方は広場を探索した。

〜——すると、上からキラキラと光る、七色の石が転げ落ちてきた。ヌツ（不意打ち）　嘘やろ……最初のエリアにあったんかい！　こ



「ですが、少しは楽しめそうですので……存分に苦しめてから、殺してあげましょう」

しかし彼女が居るといふのに石像が一人もいません。間違えて全部壊しちゃったのかなメドウーサちゃん（ホモ特有の保父面） だとしたらドジっ子メドウーサちゃん可愛いで済むのですが、いや、済みませんね（自戒）

兎も角ここからは死なないよう逃走しないと。鎌に斬られれば二度と傷は治りません。ネバーエンドデバフです。

〳何者かは分からない。唯、このフードの女とマトモに戦えば、死ぬ。戦ってすらいなくても貴方は理解できた。相手は、それ程の圧倒的強者だと。

〳〳この辺りを逃げ回る。

〳〳橋の向こうへ逃げる。

片方は単独逃走ルート、もう片方は合流ルートでしょうか。とはいえ向こうに合流して藤丸君にハルペーが当たった日にや目も当てられないのでナオキです。マシユちゃんに恨まれない為にも、上だよね（決断）

なお一人ぼっちルートは修羅の道です。でもエンジョイプレイだし、こういうピンチで見所さんを生むのも多少はね？

とはいえ、やる事は全力で回避し、祈るだけ。正直メドウさんに見つかった時点で運勢は冷え切ってるのであとは上るだけだと信じています。当たらないでくれよなあ、頼むよ

ふ、とはいえ回避に補正もついているホモ君をそう簡単に捉えられない……

おつぶえ!? け、結構ギリギリじゃねえかお前。幾ら回避に補正がついているとはいえシャドウサーヴァント相手、逃げ出すのも一苦労つすねコレはつてあばばば鎖が鎖がTKGWサマ逃げては逃げでは駄目ですよ（二重人格） アカン患者が死ぬう!

許し亭許して（絶望先生） 回避一択だというのにさつきからいつ当たっても可笑しくない気がします。メドウさんは甚振るために当然手加減してくれています、何時豹変して昏睡レイプ並みのダー





石が、そして懐から、一本の筆が転がり落ちる。その向かう先には……何か、文様が描かれているのが見えた。

「……………?!? 召喚陣！ 貴方、それを承知でここにっ！」

等と絶望してたらメドウさんが動きを止めてくれました。召喚陣知ってたんすねえ……勘違いで生まれたこの一瞬の隙、頼む、何か逆転の一手を閃いてくれホモ君……！

＜貴方は、それを目の前の女が警戒している事に何とか気が付くことが出来た。まだ微妙に鈍い体を最大限動かして、召喚陣のそばに近寄る。頭から垂れる血は気にしていられない。貴方は、まだ生き残る事を諦めていなかった。

＜まだ、こんな所じゃ死ねないんだよおおお！

ホモ君迫真の絶叫。そして……来ました来ました！ 血と、聖召石！ 召喚陣！ 出来スギイ！ な展開ですがこれくらいないと普通に死んでました（紙一重）そして、三つの輪っかが……虹回転？！

＜放たれた光が収まった先。燃える炎に照らされて、雅な藤の服が、翻る。抜けるような白い肌と、全ての光を飲み込むような黒髪。この世の物とは思えぬ、艶姿。

「まさか本当に、サーヴァントを！」

「——サーヴァント、キャスター。紫式部と申します。文に親しみ、詞に焦がれ、ひとの想いに寄り添う女にて……ご無事でしょうか？ マスター」

運命に出会った所で、今回はここまですになります。ご視聴、ありがとうございました。

## 特異点F その二

皆様こんにちは、ノンケ（金ぴか）です。

前回は、見事虹回転でサーヴァントを引き当てました。紫式部さんが、どうやらホモ君の運命だった模様です。筆が触媒になったんでしょうか。細い腰と、憂いのある表情がセクシー……エロいつ、人ですが、魔性特攻持ちという雑魚処理バリ有能な人でもあります。反面、近接戦闘とかはいやくキツイつす（素）

「キャスターのサーヴァント。ふん、此方に歯向かうのは、どれもこれもキャスターばかり」

「正規のサーヴァント、ではないようですね。マスター、体の方は？」  
〈目の前に立つ女性、紫式部に問われ、体を動かしてみる。先ほどまで痺れていた体は、どうやら元に戻ったようだった。

「大丈夫そうですね……走ってくださいマスター。いったん、安全な場所に身を隠しましょう」

〈彼女の手の中に、短冊と、筆が現れたのを、貴方は見た。一瞬、人間には不可能ではないかと思う程の早業で書き込まれた文字が、短冊から滑り出てフードの女を取り囲み。まるで縄の様に、女を縛り上げたのだ！

足止めナイスウ！（賞賛） ナイスウ！（喝采） 流石キャスター、こういうのはお手の物ですね。かつこいい（小並感）

「今の内！」

さあ今の内に早く帰って宿題しなきゃ（使命感）

ヨシ、扉も閉めて逃走成功です……（余韻） これで館諸共吹っ飛ばすような攻撃でもしてこなければ暫くは時間も稼げるでしょう（樂觀視）

「はあ、危なかったです……」

〈助けてくれてありがとう。

〈貴女は……

下を選ぶともう一回あの素敵な名乗り上げを聞けそうですが上だよね（断固） そもそもお礼を言わないとか人間の屑なんだよなあ

……ハッキリ分かんかね。

「いいえ、どういたしまして。マスター」

「貴方は、マスターと呼ばれ戸惑う。そもそも、あそこにいきなり現れた女性が一体何者かも分かっていなかった。紫式部と名乗ってはいたが、ダ・ヴィンチの話にあった、嘗ての英雄の複製、サーヴァントという存在なのだろうか。」

「え？ マスターは、マスターだからそう呼ばせて……もしかして、サーヴァントの事をご存じないのですか？」

（あんまり良くは知ら）ないです。教えてくれよなあ〜頼むよ〜。

「分かりました。ですが、アレを封じ込めて置ける時間はそう長くありません。手短にご説明します。私の事も含めて」

ありがとナス！

でもカ……ツトオ！（BRLY）なんですよけれどね。要するに『昔のすっごい人達をそのまま呼ぶとか、むーりーもうむりい……良しっ！ ちよつとくらい格落して召喚しても……バレへんか』って感じですよ。

「お分かりいただけましたでしょうか」

「良く分かった。」

「もう一度頼む。」

上だよね（速攻）

「良かったです……それでは、ここから先の方策を練らないと。もう時間がありません」

はい。ホモ君が余計な説明を求めた分時間が無くなりました。馬鹿かオイ！（自業自得）ここからはアレをどうにかしなければいけません。

FGORPGには1145143643641919通りのルート分岐やイベントがあるとされていますが、式部さんでランサーメドウちゃんを攻略するルートは初見です。どんな感じになるんすかね。

「正直な話、私ではアレを打倒するのは、難しいです……その手に書かれた、先程説明した令呪、それを使えば、なんとかなるかもしれませ

んが。それは軽々には切れない札です。それは温存を」

「じゃあ、どうする、と貴方は紫式部に問いかけた。

「私が囷になって戦えば、マスターの逃げる時間は稼げるかと」  
「フアツ!？」

まさかの囷作戦。囷は当然私が行く。です。どこぞの卑劣様は先ず言わないでしょう(風評被害) はえ、要するに恩人の女の子を残して逃げるんすねえ……

「大丈夫です。私もサーヴァント、そう簡単には死にません。時間を稼いだら私も離脱しますので、何処かで落ち合しましょう」

「……本当に、大丈夫なんだよね？」

「……いいや、駄目だ。そんな選択肢はハナから無しだ。

下だよ(覚悟の選択) 上を選んだらなんだかんだ言ってるホモ君は逃走するんでしょうが、ホモ君にそんなゆうたはさせられません(見事な例え) ここでイモ引いたら漢が廃ると思うんですけど(バンカラ並感)

「マスター、私を信じて。それに、サーヴァントの事も知らずに召喚した無辜の民を死地に置いたままにするなどと、私には出来ません。マスターは、一刻も早く、安全な所に」

無辜の民かどうかなんて知らんわいwよw……アンタを助けたいから助けるって言うてんだルルオオ!?(言ってる)

「俺には、貴女をここに呼び出してしまった責任がある。逃げ出すわけにはいかない。

「あの女を野放しにする訳にはいかない。彼奴を倒すことは出来ないか？」

どつちにせよ逃げるのは無しってことなんですけど……上は人情、下は事実、それぞれで逃走を拒んでいますが……ここは合理的な理由なんて無粋に過ぎるので下だよ(純情派)

さあ、いよいよ頼りになるサーヴァントと共闘確定、体勢も立て直せたのでここから反撃に移りたいと思います。やっちやうよ? やっちやうよ?

「マスター……ですが、私ではアレを倒し切れません。令呪を使うの

ですか？」

「聞いてかけてくる紫式部に、貴方は一つ気になっていたことを思い出す。もしもそれが正しいなら、自分が居ればもしかすれば、勝てるかもしれないと。」

「それは……？」

あ、画面が暗転した。どうやって何をやるか教えてくれよなく頼むよ……

なんていつても仕方ないのでプレイに集中しましょう。あ、画面が外の背景になってランサーメドゥーサちゃん出てきた。

「ふふ、私の拘束が解かれた丁度その時に現れるとは、随分と間抜けです……あるいはサーヴァントの価値を知らず諦めたか、」

「どれでもない、と貴方はフードの女に告げる。」

「では、まさか私と戦いに来た、とでもいうつもりですか？」

「それと否定し、貴方は——お前に勝ちに来たのだ、と声を上げた。お、戦闘パート突入……前に勝利条件。一定時間の経過が条件の耐久戦の様ですね。そりゃあホモ君に対面でメドゥーサちゃんに勝てとか、野獣がAKYSに真つ向から勝利するのと同レベルで無謀ですし、多少はね？」

「……言うではありませんか。その減らず口、一刻も早く縫い合わせたくまりました」

おっと早速突っ込んでできますか。避ける一択なんだよなあ……（弱気）

で、状態変化の画面に、これは……式部姉貴がバフをかけてくれるみたいですね。美人からの応援、これでやる気が出ないとかお前ホモかよお!! とかいう謂れのない疑いをかけられそうなので頑張ります（半ギレ）

とはいえやる事は基本的には最初の遭遇時と何も変わりません。

回避！ 回避！ 回避！ っって感じで逃げの一手です。しかし。

「っ！ その得物、キャスターがエンチャントをしましたか。多少はマシになっていますね」

鎖ぶつけたかっただろルオ!! でも残念でしたあ！

このバットに式部さんがエンチャントをしてきてくれます。スキルではなく陰陽術での簡単な強化……と思われるので（詳細不明）赤のキャスター程ではありませんが、それでもメドゥーサちゃん鎖を受けてもひしゃげたりはしません。

ついでに殴る事も出来ませんが、一発殴りを入れても、ちよつと揺らぐくらいでノーダメージの文字が躍るのもうやめませう（悲哀）

「……何度か受けてみましたが、威力はないですね。あのキャスターの強化で、何とか私の動きについてきているようですが、それもどこまで持つでしょうか」

どこまでもはもたないから、早く時間経過してくれよなく頼むよ……あ、漸く残り時間僅か！　ここは全力を振り絞らないと（最後の全力）

「それに……貴方にはまだ見せていない、切り札もあるので」

えっ、あつちよ、奇襲攻撃!?　よけられな

ポツチャマ……（致命傷）

ああ〜（ダメージが）たまらねえぜ……もう気が狂うほど、ダメージがヤバいんじゃないや（昇天寸前）生きてますけどもうダメみたいです。ねこの体力……おまけにまたもスタンがガッツリ入っております。

「如何ですか？　私の髪は。体の芯に、響くでしょうか？」

髪を鎖に変質させての打撃攻撃……一度も見てなかったから奇襲攻撃で確定直撃とあいになりました。クソですか？（全ギレ）皆さんは奇襲攻撃に気を付けよう！

「さて、貴方は石像にする前に……じっくり、血を吸ってから、殺して差し上げます」

〜フードの女が、貴方に向けて近寄ってくる。体がいう事を効かない。このままいけば自分は間違いなく死ぬだろう……だが、出来る事はやったと、貴方は後悔していない。

「ではまず……喉を引き裂いて、頂くとしましょう」

「——そうはさせませんー」

〜自分の時間稼ぎは、きつと無駄にはなっていないだろうからと、信じているから。

すげえハリケーン!? (疑問詞淫夢) 実際ハリケーンみたいな文字が非常にハリケーンで、非常にハリケーンの(我修院様) メドゥーサちゃんがあぶつ飛ばされました。

「ガツ……!?!? こ、の威力は」

「本当に、正気を失っておいでなのでですね。私の事を見落とすとは」

「キャスターのサーヴァント、まさかあの僅かな間に、陣を!?!」

「幸運でした。この館、どうやら元々、魔術工房としても使えるよう、設計がされていたようで、私の拙い腕でも短時間で、それなりの物が」

要するに、ホモ君の考えというのは、式部姉貴に陣を設置させることだった模様です。確かにキャスターのサーヴァントというのは自分が有利に戦える陣を敷いてから戦うのが基本、それ一番言われてるから。

とはいえ反撃の準備は完了しました。じゃあ今までのちかえしをたっぷりとさせてもらおうじゃないか!

「っ」

「逃げようとしても無駄です。今の一撃で、退路は経ちました」

もう始まってる!?! (出遅れる戦闘民族の屑) デカイ金色の雲……いや、霞っていうんですかねあの模様。それがメドゥーサちゃんの手を遮っています。これは逃げ切れませんね……

「まさか初めから、この積りで!?! たった一人、囷を」

∠自分を助けてくれた、彼女を信じていた、と貴方はフードの女に告げ、武器を構えなおした。

「……ありがとうございますマスター、その期待に応え一息に書き上げて魅せましょう」

式部様!! 困ります!! あーっ!!! 式部様!! 困ります!! そのようなキュツとした口元あーっ!!! 萌えます!!! あーっ!!! 可愛い

(確信) 式部姉貴の決意したような表情可愛くない……? (懐疑的)

「まさかこのようなマスターとサーヴァント一人に……しかしっ!?!」  
「ここはこれこれ、このように……っ!?!」

あ、文字がまたハリケーンしてる。これは終わりましたねえ……でもホモ君やることねえなあ、どうするよ暇だよ……いや暇

してる場合じやねえな鎌が飛んできてる！ 死ぬ！（語録放棄）

∟ 咄嗟に貴方は、此方に向かって飛んできた鎌を、バットで弾き飛ばした――

やったぜ（完全勝利UC）

∟――だが、人外の膂力で放たれたそれを、完全に弾く事は出来ない。頬を浅く刃が撫で、一文字の傷を開いてしまう。

フアツ!?

「っ……ふ、ふふ。死ぬ前に、消えない、傷を……刻みましたよ」

「マスターっ!？」

∟大丈夫だ、と貴方は紫式部に告げる。傷は深くなく、致命傷ではない。傷を撫でながら見つめる先、フードの女が消えていく。

「……もし、生き残った、その時には……」

あ、消滅しました。と、言う事は。

生きてるゝゝ→ 勝てたゝゝ！ 生きてる、あっはっはっはっ！ あ

あゝゝ生きてるよおゝ！ ちゃんちゃちゃちゃん!! FOO!

（勝利の凱歌）

ランサーメドゥーサちゃんに勝った所で、今回はここまでです。ご視聴、ありがとうございました。





！ でなんとかかしてしまおうのでそもそも戦えません。通常エネミー殺しの魔性特攻は伊達ではないようです。

「危険ですから！ お願いです、前に出ないでくださいマスター！」  
それでも三回くらい戦闘に参加しようとしたら泣き顔でポンポンされました。そんなん承知するしかないだろ！ とまあ、サーヴァントが一緒にいるときに前に出ると、式部姉貴みたいなタイプのキャラはちゃんと叱ってくれたりします。何度でも叱ってくれます。まるでママみたいダア……（直喩）

「うう、マスターが血気盛ん過ぎて、困ります……」

泣かないで（そもそもの原因） 良し、コレからはバレないように骸骨狩りしますよ～するする（反省をしないマスターの屑）

しかしこのままずっと二人で歩き続ける訳にも行きません。というかこのままだとレイシフトから帰れずゲームオーバーとかもあります（食い気味）（4敗） そろそろ合流して特異点Fクリアを確実にしておきたいですが。

＜——ふと、遠くで何かがぶつかり、壊れるような音を聞いた。それに続く喧噪。間違いない、この先に誰かいる。

「これは、誰かが戦っている……マスター！」

当然行きますよーイクイク。ぶっちゃけこの冬木で戦闘音となると、もう彼ら以外居ないので実質クリアです（早すぎた感想）

＜見つけたのは、四つの影と無数の軀。盾を構えた少女が敵の群れを割り、焰を携えた人影が割れたその二つを焼き尽くす。そして、鉄パイプを構え、あぶれた群れに向かって特攻をかけ、軀を一つ一つ、一撃で砕いて回る少年と、それを信じられない目で見える女性の姿。

「マスター！ 危険ですから私の後ろに！」

「一体、二体、三体！ 一匹も逃しはしないぞ、覚悟しろ！」

「おい坊主は一体どうしたんだ狂犬の病でも貰ったのか!？」

「藤丸!? 藤丸!? ちょよ、戻りなさい死にたいのアンタ!？」

はえー藤丸君もバーサーカーしてる……（感銘） ヨシッ！ ここは原作主人公に倣ってホモ君もぶち込んでやるぜ！ スケルトン覚悟しろよなくお前らもな〜

「あ、あの……マスター、お仲間、というのは……」

〈アレに間違いはない

〉〈いや、ちよつと人違いですね……

〉〈派手にやるじゃないか立香！ 俺も付き合おうぞ！

(一番) 下だよね(暴力) あ、式部姉貴がストップ掛けてるけど今はスルー。さあスケルトン狩りじゃあ！ 経験値持つてんだろ？

なあ、スケルトンだろお前？ 経験値置いてけ！(OTY)

〈戦場の真ただ中、貴方は立香の背後に着地し、後ろに迫っていたスケルトンの頭を空高く吹っ飛ばす。先ほどのフードの女に比べれば、容易かった。

「康友！ やっぱ生きてたな！ さあ行くぞ！」

「やつさん！ ご無事で何よりです！ 早速で申し訳ないのですが、血気盛んな先輩を止めてください！」

〈当然。その一言だけで、貴方と立香の間には何もいらなかった。二人して周辺に見えるスケルトンに突っ込んでいく。勝てると思えない相手にも囷を買って出るくらいの貴方の友人だ、血の気は当然多い。

「康友！ 背中には任せる！ 行くぞお！」

「やつさん?!?!」

「駄目だ嬢ちゃん！ そいつもどうやらご同輩らしい！」

やっぱ薩摩が一番！(脳筋) スケルトンなんて雑魚ですよ雑魚！

ホラホラホラホラどんどん行くぜえ？ バットのヒット(激ウマガヤグ)でポーンと髑髏が彼方へ飛んでくの結構ユニークつすね(無慈悲)

「マスター……！ 駄目ですったら……！」

お、式部姉貴も追いつきました。これでもう後は掃討戦です。手早く片付けて特異点攻略を進めるとしましょう。という事でここから先は作業なので、甥の木村、加速します。

〜810倍速〜

加速が終わりましたね。スケルトンの掃討戦終了。さあ特異点攻略スタートや！

「……先輩、お話があります」

「マスター……っ、無茶をしてはいけないとあれほど……！」

「とりあえずだ、坊主共。お前らちよつとそこに座れ」

「……藤丸、それに其処のアンタ、分かっているわよね」

『……えつと、僕はしばらく黙っておくね』

あつ、ふーん……じゃ俺、ギヤラ貰って帰るから、つて操作が出来ませんこれは強制お説教タイムですね間違いない……あ、おせんべ食べます？ 要らない、そう……（無慈悲）

好き勝手は出来たので、甘んじて受け入れるとしましょう。後、通信向こうのDr, ロマンニキオツスオツス！

〈〈三十分後〉〉

かかりスギイ!? こんな非常事態の中で三十分もお説教とか暢気すぎでビックリしますよ……悪いのはホモ君と藤丸君なんですけどね、初見さん。仕方ないね。

「分かりましたか、先輩。マスター自らが前線に態々出て戦うというのは非常に危険な行為なんです。間違っても、鉄パイプを構えてスケルトンの頭をホームランする、という行為は推奨されるべきものではないんです」

「マスター、お願いしますから、お願いしますから、危ない事はしないでください……バット一本だけ構えてアレだけの数の前に飛び込んで行くなんて……本当に……」

マシユちゃんは真顔、式部姉貴はちよつと泣いています。マジで罪悪感しかありませんがこれからもマスター突撃はやる所存です（突撃脳）ホモ君はそれなりに強くなるし、藤丸君もそうですね。使えるものは使う、当たり前だよなあ（合理主義）

〈二人して正座しての説教など、何年ぶりだろうか。マシユと紫式部の言葉があまりにも真摯で、余計に辛くなってくる。正直調子に乗り過ぎた、とは思う。〉

「ったく、嬢ちゃんに指示出してる時は冷静で、良い判断してるじゃねえかと思ってたんだが……まさか猫被ってるとは」

「いい！ これからは直接戦闘禁止！ 破れば禁固も辞さないわよ」

所長と術ニキにすら怒られる始末。そんなにマスターが戦うのが悪いんですかね……特に術ニキの元マスター二人なんてバリバリの戦闘マスター勢だと思っただけです。しかも片方なんてサーヴァント殴り倒せるんですよ、素手で。

とはいえ実際ホモ君が死んだら実況も終わりなんで流石に無謀過ぎる真似とかはしませんよ。単騎で鯖と殴り合いとか、そういうのはしません。藤丸君も自重、しよう！

あ、そうだ(唐突) 今の内に藤丸君のステータスもチェックしておかないといけませんね。普段のプレイと違い、藤丸君のステータスにもいろいろ違いがあるでしょうし。

「全く……それと、アンタ。補充要員一番、確か……ホンゾーイン、だったかしら。まさか正規のサーヴァントを召喚してるなんて……」  
『やー、ビックリですよねえ……あ、一応は本造院君は後でバイタルチェックね。何か影響あったら危ないし』

運なんだよなあ……所長も特異点F駆けずり回って、どうぞ。

「やつさんはどうやってこの方を召喚したんですか？」

しようがねえなあ(寛大) マシユちゃんの頼みだし、聞きたけりや聞かせてやるよ(英雄譚)

＜貴方は、とある館での一連の出来事を皆に語った。

「キャスター、紫式部さんを召喚し、同じくここに召喚されていたサーヴァントを撃退。これは、俗にいう大金屋、というものでは」

「それじゃ済まないわよ……全く、補欠要員がそんな大手柄を上げるなんて」

『いやそれどころじゃないですよ所長！ そんな無茶して、バイタルチェックどころか精密検査もしないと！』

所長に褒めて貰えたゾ。これはやる気上がりますねえ！ やーこれからもいつぱい褒めてもらえるように活躍しないといけません(悲運の定め)

あと精密検査をお願いします(素) ロマンの医療チェックがないと普通に死ぬんだよなあ……

「こっちの小僧は上等な指揮で竜骨兵の群れを突破したりしてたが、

そっちのハゲの坊主も中々のもんじゃねえか。小僧に言われて探した甲斐があつたぜ」

「……これで、準備は万端、つてことでもいいのかしらね。キャスターのサーヴァント」

「おう。万端かどうかは分らんが、これ以上は望めねえ……いよいよ、本番だ」

そして全員集合からの、いよいよ冬木の大ボスを攻略する時です。よーしやっちゃうよ？ やっちゃうよ？

∨……ここで、貴方はある事に気が付き。声を上げる。皆が此方を見ている中で、自分は立香側の事情をサツパリ把握してない、と貴方は正直に報告したのだった。

『……取り合えず、お互いの事情の説明をしておこうか』

……ホモ君さあ。

突入前に思いつきり躓いた所で今回はここまでです。ご視聴、ありがとうございました。

## 特異点F その四

皆さんこんにちは。ノンケ（最弱サーヴァントの一角）です。

前回はいざ鎌倉、しようとした所でホモ君がガッツリ猛ブレイキをかけるという最高に空気の読めないプレーをしたところからの続きです。ホモ君さあ……

それは兎も角、ちゃんと説明も終わり、いよいよ冬木の洞窟内に侵入です。とはいえここから先は大分原作寄りになるので見所さんはあまりないと思いますが、それでも実況者の責任として、しっかり実況していきたいと思います（黄金の意思）

「……ここだ。この寺の先の洞窟の中にセイバーは陣取ってやがる」

そして、決戦の場。原作でもラストステージになる事が多かった柳洞寺にやってまいりました。寺だというのに禍々しさしか感じません。怖いねえ……

「キャスター、勝算は？」

「俺抜きで……まあいいとこ五分か」

「はあ!? 貴方ここまで来てセイバーのサーヴァントと戦わないつもりなの! 相手はあの……!」

「いいや、戦いたいのは山々だが……熱烈な信奉者の相手をしなかりやならいんでな」

はい。ここでキャスニキ離脱イベです。当然、お相手はあの人。

『信奉しているつもりは無いがね。唯、彼女に降りかかる些事を払う、露払い程度の役割はしている積りではあるが』

「その割には四六時中彼奴の周りで睨み聞かせやがって、猟犬が」

「……それは君の事だと思うが、キャスター」

〈キャスターが視線を向けた木の上。人影が急に現れる。その手に持っているのは、変わった形をしてはいるが、弓に間違いはない。〉

「アーチャーのサーヴァント……!」

「はっ、相変わらず辛気臭い顔してんな、アーチャー」

木の上に降り立ちますはF a t e弓兵の代名詞、超英霊級のドンファン（風評被害）アーチャーさんです。余程の事が無い限り、この

人とは戦う事はありません。キヤスニキが引き受けてくれます。

とうかアーチャーさん、実はこの特異点じゃ一番厄介なプレイヤーキラーなんですよね。サーヴァントが居ても、まるで無関心でマスター狙撃狙いのアーチャーさんは初心者殺しの筆頭にして狙撃手の鏡。素直にキヤスニキに任せましょう。

「キヤスター！」

「行きな。此奴を倒したら後を追うからよ」

ちなみにキヤスニキは有言実行の人なので、大概アーチャーさんを下しちやんと援軍に駆けつけてくれます。まるで大英雄見たいダア……（事実）

∨不敵な笑みが、まるで負けるつもりが彼に無い事を、貴方に如実に感じさせる。それを立香も感じ取ったのだろう。言葉を吐くこともなく、頷いただけでキヤスターに背を向けた。

「坊主、盾の嬢ちゃん。お前らは良いコンビだ。やつこさんにも十分対抗できるだろうよ……勝ってこい！」

「っ、はい！」

「……ご武運を！ キヤスターさん！」

粹スギイ！ やつぱり型月で一番カッコいいのは殺人貴でもギリシャの大英雄でも英雄王でもなく光の御子だってハツキリ分かんかね（戦争開始）キヤスニキが槍ニキだったらもうこの特異点は始まる前に終わってるってそれ一番言われてるから。

「……そうだ、おいハゲの坊主！」

酷過ぎい!? また髪の話してる……

「その血、使う時は注意しな。呑まれんなよ」

っと、ここで混血について初めて言及が入りました。特になんにも言っていないしそもそもホモ君は混血のこと知らないんですけど……光の御子には分かるんすねえ（感動）アドバイスありがとナス！

さて、いよいよ冬木の最終ボス、セイバー戦です。RTA奏者兄貴姉貴の最初の泣き所さん!? を、無事ホモ君は突破できるのでしようか……それでは、ご覧ください。

∟到着まで力……ツトオ！（BRLY）∟



いつものはいけい。

つていう位、FGOのラストバトルでは良く使われる背景ですね。多分玉座の間とトントン位良く使われてるんじゃないでしょうか。初代からの伝統の背景でもあります。

「これが大聖杯……超抜級の魔術炉心じゃない……なんで極東の島国に、こんな……」

『制作したのはアインツベルンという家だそうですが……相当の家だったんでしょうね』

「……私がキャスタークラスだから、でしょうか。分かります。あの凄まじい、力。マッシュさん、マスター達も、どうかお気を付けて」

「紫式部さん、私の後ろに。万が一の時は、先輩達のフオローを」

〈肌にはビリビリと伝わってくる、この空気。否応なく理解させられる圧倒的な脅威。しかし、貴方が感じ取っているのは、聖杯のそれではない。〉

「康友……覚えてるか？ 山籠もりの時さ、熊とかとやり合ったよな。あん時も、二人がかりで、そんなデカイサイズでも無かったけど、バカみたいに苦戦した」

え、ホモ君そんな過去あったんすか……武闘派な生まれだとそういう感じの過去も追加されるのですかね。つていうかスケルトン<sup>化物</sup>相手に普通に暴られる二人相手とか、その熊が不憫……不憫じゃない？

成仏して？

「正直、あれでも割と死ぬんじゃないかと思っただけど……でも、コレ、その比じゃねえぞ」

〈立香の言う通りだった。洞窟の奥で、たった一人だけ立っていた黒い影……そこに居るだけだというのに、貴方も、立香も、完全に足が竦んでしまっていた。〉

しかし聖杯の事はサツパリなのにラスボスの事は嗅ぎ付けるとは、武闘派系一般人っぽいムーブですねホモ君と藤丸君。

〈通信先のロマニに、貴方は告げる。奥に何者かが居る。感じ取ったあの脅威は、すぐさま知らせねば危ない。アレ一人に全滅させられる未来が見える。〉

『えっ？ ……あ、ホントだ！ 聖杯の魔力にばかり気が行って気が付かなかったよ。っていうか、この反応も結構デカい!? 間違いない、そこに居るのが件の……!』  
「……」

さあ来ました。本特異点ラスボスのセイバー（オルタ）さんです。クツソ強い正統派ボスで、ぶっちゃけチュートリアルも良い所の特異点Fに配備しちゃあ、駄目だろ！ ってレベルの敵です。イベントで突破したり、そもそも相手する事をしなかったりと、多くのRTA奏者姉貴兄貴達がスルーした化け物ですが私は戦う事を諦めません（鉄の意思）

「っ！」

「ほう、面白いサーヴァントが居るな」

ちなみにこの場面ですが、兄貴と一緒に居ると原作通りの面白い反応を見せてくれます。が、今は居ないです。キヤスニキがんばえー（他人事）

「セイバー……アーサー王、アーサー・ペンドラゴン、ブリテンの騎士王！」

『明らかに普通の様子じゃない！ 聖杯の魔力で、異常に変質しているのかもしれないですよ所長!』

「そんなん見れば分かるでしょう!」

そうだよ（便乗）

「構えるがいい、名も知らぬ娘。その守りが真実かどうか、我が剣で確かめてやろう」

「来ます……マスターツ!」

「ああ、一緒に戦おう!」

＜立香とマシユが氣勢をあげる。目の前の強敵に向けて、負けるものかと吠えたてる。貴方も、もう怯えに支配されてはいない。友の氣勢に活が入った。心の奥から、力が湧いてくるのが分かった。

＜俺達が、決着をつける!＞

＜俺達で、終わらせよう!＞

信仰の関係で上を選びます（TDN直感）

「……はい！ マスター！」

さて、いよいよセイバー（オルタ）戦です。多分これだけの人数を相手取ってなおランサーメドウちゃんより強いです。チュートリアル章でしょwwwwとか思っているとやさしい暴力（大嘘）で処断されま

す。  
ここの攻略方法は、基本マシユ頼り。か弱い女の子に頼っちゃってさあ、恥ずかしくないの？ とか言っていると瞬殺も余裕なので全力で防御を任せましょう。

ここの攻略はマシユの宝具で攻撃を凌ぎつつ、マシユ、および主人公が召喚したサーヴァントで兎に角ボコるのが基本です。

とはいえ相手は普通に地を這う衝撃波とか、マシユを軽々吹っ飛ばせる重たい斬撃とかをポンポ放ってくるので、迂闊に削りに行くと普通に死にます。まるで某フロムゲームみたいダア……

慎重にヒット&ウェイ。立ち回りには常に注意しましょう。という事でさあ行け式部姉貴、ワシ（53歳）のサーヴァントは最強や。

＜マシユと紫式部の攻撃は続いたが、それでもセイバーの力は全く衰える様子が無い。圧倒的に、力をもって、二人の攻勢を凌いでいる。攻勢の鋭さは槍衾の如く、そして守勢に取って代われば砦のように、正に桁の違う怪物、という言葉がよく似合う。

……つつつても真面にやると当然式部姉貴が負けるんですけどね。そりゃあ素のセイバーさんが強いうえに、聖杯からのバックアップを貰ってる。鬼に金棒です。改めて最初のボスの強さじゃないですよ  
(震え声)

そして、メツセージが出たという事は……来ますね、マシユの花形イベントが。

＜いや、それどころか……貴方はその事実を瞠目する。上がっているのだ。セイバーの出力は、確実に。戦っている間にも、僅かに。そして今、格段に体から放たれる圧力は膨れ上がっている！

「応えよう、その瞳に……主を守らんとする、その境界に！」

こっからは藤丸君とマシユの独壇場なんで、ホモ君と式部姉貴は観

戦モードです。いや観戦モードっていうか、いよいよやる事がなくなるだけなんですけど。

さあピツチャールタ、構えて……

『エクスカリバー・モルガン約束された勝利の剣』!!』

マシユちゃんの盾に向けてドバーつと出して来たっ！ 太いぜ（絶望） 普通に食らったら消滅確定の一発です。そりゃあ聖杯のバックアップ受けてるセイバーさんなのでこの程度は楽勝ですが……今回ばかりは相手が悪かったですね。あの聖剣と盾の相性は最悪だ（理解者面）

「マシユ……せめて、支えさせてくれ」

「っ……はい」

＜立香が、マシユの傍らに立ち、その手をマシユの手に添える。支えている。前に出ることが出来ないなら、せめてそれくらいは。彼なら、そう言いそうだ。

やーマシユちゃん硬いですね。あんな化け物砲撃でも全く怯んでおりません。寧ろこつから押し返すんだから……あ、もうはじき返しましたね。いいダメージ（推測）デア……

さて、こつからは後半戦です。果たして、ホモ君とカルデアの愉快な仲間たちは、セイバーオルタを攻略できるのでしょうか。

＜翻つて、自分は、どうだろうか。ただ、紫式部の後ろで立っているだけではないか。貴方は、情けなさに、手を握りしめた。

＜ストレス値が上昇しました。

……えっ？

えっと、今回はここまでです。ご視聴、ありがとうございました……なんでストレス値上がってるんですかね……？

## 藤丸視点：今、ここに生きる俺達が

——信じられない。信じたくない。

「……見事、ではあるが……僅かに足りぬ」

アレだけの力の奔流を跳ね返されてなお、黒いセイバーはそこに健在だった。通じていない訳ではない。アレだけの一撃、通じない訳がない。重症の筈だ。つまりそれだけの力を食らってなお、相応の傷を負ってなお、倒れるを良しとしていないだけだ。

強い。肉体だけではなく、心も！

「まだ、です。私、やれます。先輩」

「マシユ……」

ああ、分かっている。今すぐにも倒れそうなこの子を背に庇い、目の前の相手に挑むというのは……正しい事じゃない。自分は、弱い。自分が死ねば、いいや、誰か一人でも欠ければ終わりだと、専門家の所長やマシユが言っていた。

どれだけマシユが傷ついて、辛そうでも、俺には、支える事は出来ても、隣に立つ事は許されない。彼女に、任せるしか……

「……っ！ ああ畜生、もう無理だ！」

——でも、でも。

それでも、康友は飛び出した。

「……ほう？」

「吹っ飛べっ！」

振り下ろした金属バットは、あっさりと黒い籠手に受け止められて、全く効いた様子も無く、あっさりと払われて宙を飛ぶ。やはり、俺達の攻撃なんて、蚊が止まった程度でしかないのだろう。

「マスター！ 前に出てはいけません！ 相手は——」

「……相手が、どうかじゃないんだ。違うんだよ、式部さん」

「え？」

効かないと分かかって、地面を転がって、それでも……康友は目を逸らさない。立ち上がって、セイバーを睨んでる。

「分かったんだ。俺はカスだ」

「マスター……う？」

「これは現代の、俺達の問題の筈なんだよ。これをやったのは誰であれ、被害を被ってるのは俺達だ……それを元はといえば怪我人と、引退した大先輩に頼って、解決しました？ 笑えねえ、どんだけ他人任せだ……ふざけるなよ……！」

「今、ここに生きる俺達が！ 戦わないで！ どうすんだよ！」

——ああ、その言葉に。どうしようもなく、納得した。

マシユが戦ってる時。前に出ようとした体を、足手まといになるからと、必死に言い聞かせて止めた。ここに居る事こそが戦いだ。

マシユの所に行ったのも、彼女がどうしようもなく、ピンチになっ  
てからだ。

無力さに歯噛みした。じゃあ、それはどうしてだ。

「……決まってる、だろ。俺」

「せん、ぱい？」

「ありがとう、マシユ。休んで。その時間位は……俺が稼ぐよ」

全部、全部！ 誰かに、人任せにしてたからだ。自分が無力だつていう、そんな言葉に甘えて……俺は、奥に引っ込んで、傍観者見たく振舞ってた！ あんなに、酷い大けがした女の子を、その子が強くなったからって……！

「康友」

「立香……やつぱ、俺ら賢くねえな」

「賢かったら、この状況に納得できてたかな」

「いいや、無理じゃねえかな」

そうだ。所長は言っていた。これは、今を守る戦いだ。

じゃあ今を生きる俺達が、戦いもせず後ろに引っ込んでるだけなんて、そんな道理に合う訳ない。立っている事が責任？ 死ぬのは足手まとい？

甘えるなよ、俺。だったら絶対に死なずに前に立て。

「でも俺は、バカでよかったと思う」

「ああ……式部さん！」

「は、はい!？」

「俺達で全力で時間を稼ぐ……此奴にとどめ刺すだけの、強烈なのを頼む！ 任せるよ！」

相手は英雄。自分達より遥か格上の怪物。

怖いけど……でも、不思議と足は竦まない。

「無謀だな。貴様ら二人、万に一つもなく死ぬぞ」

「なら億に「くらいならあるか？ ゼロじゃなきゃいい。俺の頭皮はゼロだがな」

「ゼロじゃなけりや、その一を掴み取ればいいだけだ。隣の頭ほど絶望じゃない」

軽いジョークで緊張をほぐす。自然体を保つ、その上で全力を引き出して、二対一。これでようやく僅かな時間を稼げるかどうか。だが、ここでやらないという選択肢はない。

「あ、アンタら！ 何を馬鹿なことやっているの！ 戻りなさい！

これは命令よ！」

「所長、援護頼みます！」

「後、始末書？ は後でどっさり書きますんで！」

「っ！ ……ここ、いつら……！」

やっぱ、所長は賢い。こういう人が上に立ってれば……俺達も、安心して好き勝手出来るってもんだ。

鉄パイプを構える。剣とぶつかり合ったらまず持たない。殴り合うっていうより、必殺の一撃を出させないよう注意して、邪魔する、つてのが正しいか。

「……ん？」

そう思ってたら手元の鉄パイプに、お札が絡みついた。見ると、紫式部さんが続いて康友のバットにも飛ばしてくれている。

「式部さん」

「少なくとも、それでお二人の得物は暫くは簡単には折れたりしません……マスター！ 藤丸様！ 必ず！ 必ず！ ご無事で！」

「——あいよー！」

内心はビビってるだろうけど、返す笑みはあくまで不敵に。ハゲにあの眼付、頬の傷が追加されて、それこそその筋の人にしか見えない

けど、今は……その笑いが凄く心強く感じる。

「つーわけで、最後はそのつちのハゲと俺、二人がお相手するよ」

「力不足もいい所だけどな。まあ、出来るだけ時間は稼がせてもらおう」  
視線は目の前の黒い騎士に。無表情だったその顔はなぜか今、少し  
笑みを浮かべていた。

「行くぜえ！」

「……ああ、来るがいい！」

「オウリヤッ！」

「甘いっ！」

康友の攻撃を剣で払おうとして、体重が左に乗っている。そこに合  
わせて、右から左へ、殴るんじゃないかと、相手を押し込むように……っ  
！

「っ」

「——隙だらけだっ！」

狙い通り。体勢を崩すまでは行かなくても、僅かによろけた。値千  
金の隙。ここから、一気に叩き込む！

「オラッ！」

「せえい！」

左によろけたセイバー目掛けて、康友がバットを盾にしてぶつか  
る。あくまで相手の重心を崩す動き。ぶつかった勢いをそのままに、  
地面を転がる康友の上、鉄パイプを振りかぶり、狙いを定める。

「っくー！」

「足元がお留守だぜ」

「な」

だがそれじゃ終わらない。足元には、転がって、セイバーの足裏に  
回り込んだ康友。そして目の前には俺。徹底的に行く。そうじゃな  
いと、此奴相手は安心できない！



「そらー！」

「転べー！」

康友は踵、俺は顎に。上を後ろに、下を前に……当然、結果は決まってる。

「う」

すつころんで仰向き転倒！ 良し今だっ！ 急いで離脱っ！

「ひゅう、あつぶねえ……これで三回目か？」

「四回目だよ。マジで綱渡りだな。汗が止まらねえ」

「へ、髪なんて持つてるから汗かくんだよ」

「冷や汗だからお前もかいてるぞ」

マジか、なんて言っつて禿げ頭を撫ぜる友人に、ちよつと笑えて来てしまう。

命を張ってるギリギリの喧嘩だ。相手はボロボロの重体だということに、あるのは、いつ死んでもおかしく無いという緊張感だけ。

どれだけすつころんでも、何でも無いように立ち上がる。ダメージなんてゼロ。俺らがやってんのは真面目な話、見戯だ。足引つかけるだけ。これが……これが、英雄。これがサーヴァントかと、嫌でも理解する。

「……こうも私が地に転ぶとは。力、技、速さ、全てが未熟、否、それ以下とはいえ……その方らの連携は実に見事。それらを補つて余りあるだろう」

「お褒めに預かり光栄至極……か？」

「喜んでどうすんだっ！」

突っ込まれてしまった、だって、なんか黒いけど、あのアーサー王に褒められてるんだから。ちよつとくらい喜んだっていい気がする。まあ、そんな呑気な場合じゃないのは事実だけでも。

「——故に、手加減はしない」

「今までもしてないだろうが……っ!」

直後だった。セイバーから、何かがあふれ出す……これは、見間違えようがない！ マシユを襲ったあの……黒い光を撃つ直前の！

「康友！」

「分かってる！ 黙って撃たせる訳ねえだろ！」

問答無用で直行！ なんとしても止めたいところだけど……！

「そらっ！」

「しゃあっ！」

まず康友、続いて俺。二人でそろって片腕狙い！ これで、どうだ!?

「っ、駄目かっ！」

「クツソ、マジで鋼で出来てんのか此奴！」

「こうして動かなければ、先程の様な真似も出来まい」

……畜生、駄目か。悔しいが予想通り、今度は揺らぎもしない。

さつきまではどっちかが攻撃を引き付けてる間に、重心の寄ってる方へ押して体勢を崩してたけど、相手が攻撃するために重心を崩さなきゃ……無理だ！ 何か、何かないか！

「アンタら、避けなさい！ 大きいのいくわよ」

「所長!？」

「そりゃあ頼もしいっ……う？」

——そうか、まだ所長が居る！ こういった事態の専門家、所長の攻撃なら、俺達よりはまだ効果が……いや、待て。

「いや所長！ まだ打たないで！」

「はあ!？」

「立香お前何言ってるんだよ!？」

所長も康友も、『此奴、とうとう頭おかしくなったか?』みたいな顔を向けないで欲しいんだが。一応俺にも考え位あるのだ。

「合図に合わせて！」

「合図って！」

「いいから！」

「……あーもう分かったわよ！」

後ろを振り返れば、黒い、禍々しい何かを指の先つちよに貯めた所長の姿。なるほど、アレは相当効きそうだ……っ！

「何の積りかは知らないが、この一撃を止められるとでも?」

「……しくじったら恨むぜ、立香」

「もどから一步間違ったら死んでたろ。そう言うな」  
一応、勝算はあるつもりである。まあ、多分失敗したら消し炭だけ  
ど。

力が溜まっていく。膨れ上がっていく……ヤバい。ちよつと足震  
えて来た。この作戦で本当にいいんだろうか……さつき、マシユが全  
力で止めて、やっとだったっていうのに。

俺達で、どうにかできるのか……いいや、やるんだ！ 覚悟決めろ、  
男だろう！

「覚悟は良いか、少年達……止める術があるというのなら全霊を賭け  
て成し遂げて見せろ」

「上等……！」

「ここまで来たんだ、やってやる……！」

セイバーが、黒い剣を腰に寄せて、構えた。マシユを追い詰めたあ  
の光が、もう一度放たれようとしている。けどマシユは。傷一つな  
かった全開のセイバーの一撃を、弾き返して見せたんだ。それに比べ  
りやあ……！

「なんて事は無い……っ！」

「卑王鉄槌、極光は反転する……」

「行くぞ康友！」

「よっしやああ！」

突っ込む！ まっすぐ！ 放たれる直前だ！ そこに、滑り込まな  
きゃ意味がない！

「光を呑め！」

来る、アレが来る！ 狙いは、力を貯め切った瞬間だ……っ！ 間  
違えるなよ！ 俺！

「エクスカリバー……ッ!？」

「康友！ 担ぎ上げろ！」

「……なるほどなあ！」

狙いは足元……ただし、攻撃する為じゃない。

しつかり二人で両足掴んで、地面から引っこ抜いて投げ飛ばすた  
めに！

「しまっ！」

発射する前に持ち上げようとしても、逃げられるかもしれない……けど、撃つ直前なら？ アレだけの凄い力が、溜まり切った直前なら？ どんだけ凄いパンチも、打つ最中は何処にも逃げられない。

「つしやあつ！ 所長！ お願いします！」

「飛んでけ馬鹿野郎が！」

正直、持ち上がらなかつたら終わりだった。けどちよつと重いくらいで、投げるのに支障はない！ 後は思いつきり上へ放り投げるだけだ！

「私に命令しないで！」

無防備な空中。後方から飛来する黒い弾丸。直撃したそれは、小規模な爆発を巻き起こした。だが煙の中……まだ、あの黒い騎士は健在だろうと、確信がある。

「康友！」

「立香！」

たがいに頷き、飛ぶ。徹底的にやらないと、反撃を許す。そんな気がした。跳躍して煙の中へ、抜けた先に、黒い姿を捉えた。

——隣の康友と目が合う。なんか、角が額から生えてる。気迫が見せる幻覚だろうか。それなら最高だ。そんだけの気迫を込めた一発、叩き込んでくれるんだからなあ！

「落ちろおっ！」

黒い胸板に、パイプとバットが突き刺さる。

ズシツとした感触が一瞬あつて、そのまま振り切った。

黒い騎士が地面に吸い込まれるように飛んでいく。俺が見れたのはそこまで。全部力を使い切っちゃって、もう体が動かないし、もう落ちるだけで……

「……か、髪があつてよかつた」

「はっ、禿でもそこまできたかないわい」

「やせ我慢するんじゃない、痛いだろ……」

お陰で思いつきり頭打った……膝から上に力入んない。もう立えない……康友の奴も、膝が完全に笑ってる。向こうももうピクリとも

動けないだろう。

けど、なんとか時間は稼げたようで。

「マスター、藤丸様、お見事でした。漸く陣も敷き終わりまして、後は、私が」

「……」

「——限りあれば 薄墨衣 浅けれど 涙ぞ袖を 淵となしける」

俺の目の前に、洋装の文豪が座す。康友の隣、寄り添うように。文机に向かい、筆が躍る。唯何かを書いている様にしか見えない、というのに……立ち上がった目の前の黒い騎士から、明らかに先ほどまでの迫力が、消え失せていつているのが、分かった。

『源氏物語 葵 物の怪』

言葉が終ると同時、筆の動きも止まり……セイバーを一目見ても、変わっているようには見えないけど。でも、終わったのは、分かった。「……呪詛、か」

「そのままでは、貴女を討ち取れるかどうか、分からぬものですが。マスター達が時間を稼いでくれたおかげで……拙いながら、呪詛を増幅する陣を、敷くことが出来ました……これはここに居る皆の、勝利です」

「ああ。そして私の……敗北だな」

頭はふらつく。もう限界に近いだろう……けど。

俺達は、あの強大な敵に打ち勝った、という事だけは。妙にハッキリと理解することが出来たのだ。

## Grand Order その一

皆さんこんにちは、ノンケ（薔薇のワガママ皇帝）です。

えー……今回は、キヤスニキが居ないままの後半戦に入ったわけですが、まさかのマシユちゃんも限界で、戦線離脱で地獄みたいな戦いを繰り広げました。兎に角時間を稼ぐ戦いで、まさか地面から引っこ抜いてモルガンをキャンセル、とかいうウルトラC（疲労困憊）で切り抜けましたが私は元気です。ラストの鬼種の魔緊急ブーストが無かったら死んでたぜ……

「ま、マスター、今のは……あ、いえ。その……なんでもないです」

あ、式部姉貴お疲れ様です。え？ ホモ君の額になんか見えた？（言つてない） なんのこったよ。

「待たせたな、つておい……マジか、セイバーの奴、ありや死にかけてじゃねえか!？」

エミヤさん見てるー!? キヤスニキー! キヤスニキー!

オーオー→オーオー←（緊急サイレン） ランサーメドウス! ランサーメドウス! ランサーメドウス! ランサーメドウス! キヤスニキありがとう! フラーツシュ!

はい（鎮火） エミヤはキヤスニキがキツチリ仕留めてくれました。偶にエミヤさんが覚醒してキヤスニキを突破して来るんですけど、今回はそんな事は無かったぜ!

〜キヤスターが近寄ってくる。上半身の衣装は無い。それだけの激戦だったのだろうか。

「マスター付きのサーヴァント二人がかりとはいえ、彼奴相手じゃ耐え忍ぶのも精一杯だと思ってたんだが……ふたを開けてみりゃ、お前らの大戦果と来た!」

ぶつちやけ死にかけた（正直） 余裕持って勝ちたかったけどなく俺もなく。今回は運悪くマシユちゃんのダメージ大きかったからね。仕方ないね。

「見事だ。誇つていいぜ、お前らはあの騎士王に……坊主に小僧、お前らなんでそんなボロボロになつてる」

「そこは気づいて欲しくなかった、と、貴方はキャスターから目を逸らす。そのまま隣を見れば、同じようにしていたのだろう立香と目が合った。」

「……成程、文字通りの総力戦で、全部ぶち込んで勝った、ってところか」

「ああ、キャスニキが白い目で我々を見ている……そうでもしなくちや勝てなかったんです、許してください何でもしますから！」

「まあ今はいい。どうだセイバー、若い奴らに負ける気分は」

「悪くは無い。結局、私一人では、結局どう足掻いても終わりは変えられなかったという事が分かって、いっそ清々とした気分だ」

「ああん？ そいつあどういう意味だ」

「これから知る事になる……グラウンドオーダー。——聖杯を巡る戦いは、まだ始まったばかりだという事をな」

「さあ皆様、特異点Fの大ボスを見事務め上げたセイバーさんの御帰還です。拍手でお送りください。」

「ふと、セイバーが、藤丸と貴方に視線を向ける。殺気に満ちたものではない。何処かやり遂げたかのような、澄んだ瞳だった。」

「己が手で、成すと、言ったな」

「ああ、言ったよ」

「然らば強くあるがいい。今は若き、獅子達よ」

最後に騎士王様からのエールを頂きました。ありがとナス！

「……つたく、らしくない事言いやがってあのヤロウ、って、オイオイ消えるの俺もかよ！いくらなんでも早すぎや、あ、ちよ、おい坊主に小僧！ 次呼ぶときh——」

「あ、兄貴も御帰還です。言われずとも次はランサーで呼びましょうね（理解）」

「これで特異点Fでの主なプレイは終了ですが、ここからまだ一つ、イベントが残っています、ハア~~~~~（クソデカ溜息）」

「いや、まさか君たちがここまでやるとはね。計画の想定外にして、私の寛容さの許容外だ。四十八人目、そして補充要員。どちらも全く見込みのない子供だからと、善意で見逃してあげた私の失態だよ」

「レフ教授!？」

ハイ来ました。汚いイキ杉田ことレフ教授です。因みにホモ君はお初です。こんな事態を引き起こした張本人でもあります。人間の屑がこの野郎……って人間じゃなかった。

「レフ……ああ、レフ、レフ、生きていたのね！ 良かった、貴方が居なくなったら、私これから先どうやってカルデアを守ればわからなかった!？」

「やあ、オルガ。元気そうで何よりだ。君も大変だったようだね」

「所長がレフ、と名乗った男に走り寄る。しかし、貴方は初めて見たはずのあの男に、最大級の警戒心を抱いていた。先ほどのセイバーともまた違う、放射能でも放つ危険物が目の前に鎮座したかのような。」

あつ…… (察し)

こつから先は、オルガマリー所長最後の見せ場にして、多くのFGO、およびRPGプレイヤーがああ海産物に復讐を誓った場面です。

「——このまま殺すのは簡単だが、それではあまりにも芸がない。最後に君の望みを叶えてあげよう。君の宝物とやらに触れるといい。なに、感謝はいらないよ。私からの最期の慈悲だと思ってくれたまえ」

「ちよ——なに言ってるの、レフ？ わたしの宝物って……カルデアスの、こと？ や、止めて……！ お願い……！ だってカルデアスよ？ 高密度の情報体よ？ 次元が異なる領域、なのよ……？？」

「ああ。ブラックホールと何も変わらない。それとも太陽かな？ まあどちらにせよ。人間が触れば分子レベルで分解される地獄の具現だ。遠慮なく、生きたまま無限の死を味わいたまえ」

「いや——いや、いや、助けて、誰か助けて！ わたし、こんな所で死にたくない!？」

「だってまだ褒められてない……！ まだ、誰も私を認めてくれてないじゃない!？」

「どうして!？ どうしてこんなことばかりなの!？」

「誰も私を評価してくれなかった！ みんな私を嫌っていた!？」



「やだ、やめて。いやいやいやいやいや……！　だつてまだ何もしてない！」

「――生まれてからずっと、ただの一度も、誰にも認めてもらえなかったのにい！」

＜吸い込まれていく。燃えるような球体に。助けを求める少女が。「所長……！」

＜貴方は、所長を追うために走り出そうとした立香に組み付き、その動きを止めた。振り向いて睨む立香に、睨み返ししながら言う。もう、間に合わない、と

因みに、所長への好感度次第で、止める側と止められる側が変わります……尚、所長をこの悲劇から助けるにはRTA奏者兄貴姉貴のような実力が必要です。私にはそんなものではありません……

すうううう……ウッウッアッアッ……（無念の慟哭）  
アッアッウッ！！ウッアッ……

そして……所長も、ご臨終です……王大人に是非とも死亡確認してもらいたいです。死亡確認して？　しろ（血涙の懇願）

＜お前の目的はなんだ、クズ野郎

ホモ君も怒りのオンリー選択肢です。お前マジで許さねえからなこの変態糞土方……

「随分と怖い顔をするじゃないか、補充要員一番君。そんなに睨まずとも教えてあげよう」

＜そう言つて、レフと名乗った男は笑う。人であるかのような笑みは、しかし悪意に満ちている様にしか、貴方には見えない。

「君達、人類の処理。それが2015年担当者である私、レフ・ライノール・フラウノスの役割だ」

さて、ここからレ／フの長い自分語りが始まりますが……聞いていても恨み辛みを誘発するような妄言ばかりなんですよね。レ／フひで。

お前のセリフなんか必要ねえんだよ！

＜怒りの一千倍速＞

うるせえ！（理不尽）　全カットは流石に哀れだから一瞬に圧縮し

たのを流してやったから、大丈夫だつて感謝しろよ！　しろ（豹変）  
要するに『ここに、世界あるんだけど……全部焼いてかない？』つ  
てだけの話です。長いし一人の神経逆撫でして来るしと本当に余  
計な事しかしませんねこの海産物。頭にきますよ！　さっさと殺そ  
うぜ！

「おつと、この特異点もそろそろ限界か……これでも忙しい身だ、私は  
先に帰らせてもらおうとしよう。では、さらばだロマニ。そしてマ  
シユ、愚かなマスター二人」

＜そのゴミを見るような視線に、貴方の中にあつた何か切れた。  
人一人、殺しておいて。世界を丸ごと、焼いておいて。何をほざくと。  
「……一つの命の尊さも知らない哀れなケダモノが。お前に、何時か  
教えてやる。お前が何をやったのか」

＜その激情が爆発する前に、立香が声を上げた。立香らしくない暴  
言に、貴方は思わず目を見開いたが、しかし。

＜＜そうだな。命の価値も知らない哀れな畜生以下。何時か、思い知ら  
せてやる。

＜貴方も、做つて声を上げた。レフは、目を見開いている。驚いて  
いるのか、それとも。知りたくも無いが、どうやら一矢程度は報いる  
ことが出来たようだ。

「……良いだろう、そこまで言うなら君達は私が念入りに、消すとしよ  
うじゃないか」

レ／フ冷えてるか？　ばっちえ冷えてますよ！（煽り）　悔し  
かったら秒でホモ君達を倒せよホラホラ。あ、やらないで消えてつ  
た。冷えてつかう!?　F O O 気持ちいい〜！

「ドクター！　緊急レイシフトを！」

「マシユさん！　盾を！　洞窟の崩落に巻き込まれたら、レイシフト  
する以前にマスター達が持ちません！」

「わ、分かりました！　マスター！　こちらに！」

うつつお願いしまゝ……さて、画面では緊急レイシフトが行われ  
ておりますが、レ／フをどれだけ煽った所で所長は帰ってきません。  
悲しいなあ……仇は取りますよ〜取る取る。

悲しみを背負った所で今回はここまでです。ご視聴、ありがとうございました。

## Grand Order その二

皆様こんにちは、ノンケ（良妻巫女狐）です。

今回は特異点Fを見事攻略。カルデアへ帰ってきました。とりあえずはセプテムでレ／フするのが最大の目標となった所です。後、最後の方のレフ煽りはもしかしたら不快に感じてしまった方がいるかもしれません。申し訳ない。だが私は謝らない。

さあ画面では、どうやらホモ君が目覚めたようですが……おっと、ダヴィンチちゃんが居ますね。ダヴィンチちゃんの可愛さであるの海産物でささくれた心が浄化されますよ〜されますされます（食い気味）

「やあ、目覚めたかね。本造院君。まあ随分とハチャメチャやってたらしいね。ああ、天才らしく、君が質問する前に応えよう。ここは君の部屋だ。君は見事、あの時代から生きて帰ってきたわけだ。おめでとう」

〈まるで強奪するような回答の仕方に、貴方は少し笑ってしまった。それと同時に、ある事が気になった。マシユも、立香も、紫式部も、姿が見えない。貴方は、ダヴィンチにその事を尋ねた。

「マシユと藤丸君は、先に目覚めて管制室さ。君は二人以上に消耗してたからね。ああ、それと君が召喚した紫式部ちゃんだけど、彼女なら今、部屋の外に……」

「――マスターっ」

お、式部姉貴も来てくれました。式部姉貴オツスオツス！ あまり鮮も上がってない状態まだ特異点突破直後だというのに案外心配してくれてウレシイ……ウレシイ……

〈紫式部は、酷く慌てた様子だった。心配してくれていたのだろうか。貴方は何か返事をしようと立ち上がった、が。膝に力が入らず、足から崩れ落ちてしまう。

「はわっ!？」

〈倒れる寸前、紫式部が受け止めてくれた。

「……マスター、お疲れなのですから無茶をしてはいけません」

ハイ！（某ドイツ親衛隊） 式部姉貴が受け止めてくれるとかご褒美……ご褒美じゃない？ とはいえホモ君は疲労が酷そうですね。まあ、サーヴァントと一騎打ち（唯の囀）を繰り広げましたから「いやー僅かな時間でそこまで仲良くなれている、っていうのは良い事だね。やっぱり共に死線を超えると、それだけ絆も深まるって事かな」

「っ、あ、いえ、その……」

テレ顔も可愛いっすね。あー心が癒えていくんじゃあ、く……ぶつちやけ、式部姉貴って綺麗枠でもあり癒し枠でもありますよね。なおチンピラ顔のホモ君と合わせると……見た目の相性はナオキです。

「でもまあ、ちよつと自重してくれないかな。ちよつと、童貞の先生には厳しい雰囲気か漂って入り辛くなってるから」

「ちよ、レオナルド!?! 何を適当な事言ってるの!?!」

あ、Drオツスオツス！ オツスオツスしか言わねえなお前な。

「あー……んんっ、本造院君。おはよう。意識は、まあはつきりしてるよだね」

〓オレンジの髪をした、何処か気の弱そうな男性。たしか、立香が医師と言っていた人だと、貴方は思い出す。

「二応、寝ている間にバイタルチェックはしておいた。とりあえず、疲労以外に特に異常とかは見つからなかったから、安心して欲しい。いやあ、サーヴァントと小競り合いしたにしては元氣すぎるくらいだね」

なんのこつたよ（すつとぼけ） ……まあ、腐っても混血ですし、再生能力自体は高いと思います。ただ、戦闘中に瞬時回復とかは無理ですけど。やっぱり天性の肉体おかしいよ（ホモ並の感想）

「まあ、万が一もあるし、暫くはここで生活してもらおうけどね。担当は僕、ロマニ・アーキマンがする。これでも医療部門のトップだ。改めて宜しく、本造院康友君」

〓宜しく、えつと……Drロマニ？

〓〓じゃあ食事も貴方に任せようかな？

上だよね（当然の帰結）

「うん。呼びにくければ、Drロマンって呼んでくれ」

じゃあ変態糞土方で（外道） うそだよ（陽気な嘘） ロマン兄貴って呼びましょう。やっぱり……それが一番いいねんな（先への布石）  
「さて本造院君も目覚めたし。ちよつと二人を呼んでこようか。待っていてくれ」

さてロマニが藤丸君とマシユちゃんを呼びに行つたところでいったん画面を止め。

現状について、お話しします。

今回お話しすべき問題は藤丸君のステータスです。特異点Fでのセイバー戦内で、どさくさ紛れに確認したところ、ファツ！（驚愕）となつてクウーン……（死亡）しました。

藤丸君スキル一覧

・天性の肉体（初期所持） 全体的なステータス上昇&体力回復

・直感 クリティカル率に補正（中）

・集中 クリティカル率とクリティカル威力を瞬

間的に上昇（中）

なんだこのスキル構成！（驚愕） こんな一点特化な能力しちやつてさあ、誇らしくないの？ 上手い事使うとほとんどの攻撃がクリティカルとかいうクリティカル番長と化します。怖いねえ……

直感は言わずもがな、集中は成長の仕方によって様々なスキルに化けるスキルですが藤丸君は鷹の目方向に成長を取つたようです。

どうやら藤丸君も勝手にスキルを獲得してくれるようですが、ランダムでこれだとすれば結構幸運です。良く分からんスキル引いて『つかえー』となつていた可能性も十分ありますし。

とはいえコレからもスキル獲得は行われるでしょうから、出来れば選ばせてほしい……欲しくない？

現状は二人ともそこそこ戦闘系マスターとして仕上がってきているので、このまま順調にいききたい所さんです。目指すは某封印指定執行者……ですかねえ……？

さて藤丸君の状況をお話ししたところで、ゲームに戻りましょう

か。

「ロマンが出て行って暫く。扉が再び空き、当人が戻ってくる。その後ろには、立香と、マシユの姿が。」

「康友！ 良かった、目が覚めたか！」

「やっさん、ご無事そうで何よりです」

（無事なのは）当たり前だよなあ？（強気な一言）

「まったく、寝坊助だな。お前は本当に」

「余計なお世話だと口で返すが、貴方は笑っていた。こうしてあの場所から、二人そろって帰還出来た事、喜ばしい事だと感じていたから。」

「あー、いいつすねえへ〜 仲良きことは良き事かな、つてやつです。ちよつとズレてるかな？（不安げ） こうやって好感度は高めदैいて、どんどんイベントに巻き込んでもらいますよう。俺も巻き込むからな！（迷惑）」

「友情を深め合うのも良いけど……つて、さつきもこんな風にしてなかつたつて。まあいいか。まあ、二人揃つたしちよつと話をしようと思っただけど、良いかな。ちよつと、このタブレットを見て欲しい」  
「あ、いいつすよ（快諾） とはいえ、話がめっちゃ長いので途中まではカットなんですけどね、視聴者さん（掌返し） あ、レフの話なんかより全然聞き甲斐があるから聞きたい人は買つてみて、どうぞ。」

「カットした部分を要約すると『歴史改変された、歴史的にめっちゃ重要な場所が七か所出てきたで！ これを特異点と呼ぶで！ 特異点Fとは規模桁違いやで！ これ放つておくとマジで手遅れになるで！』つて事です。」

「——結論を言おう。二人のマスター。君達がこの七つの特異点にレシフトし、歴史を正しいカタチに戻す。それが人類を救う唯一の手段だ」

「人類を、救う」

「途方もない話だった。人類を救う。言葉にするのは容易いが、その規模は、あまりにも膨大で、果てはない。」

「けれど僕らに力は無い……君たち二人のマスターと、特異点で奇跡

的に契約が出来た英霊、紫式部。そして、デミ・サーヴァントとして覚醒したマシユが、現状の僕らに残された戦力。正直、あまりにも頼りない、と言わざるを得ない」

言われて見ると割と絶望的ですね（他人事）

「それでも、この状況で君達に言うのは、強制に近い、いや、それそのものだとは分かっていても。僕は君たちに言わざるを得ない」

「マスター適正者48番、藤丸立香。そして、紫式部のマスター、本造院康友」

「君たちが人類を、世界を、そして2016年より先の未来を、取り戻したいのなら」

「この絶望的な今を、君たちは打開しなければならぬ」

「その、覚悟はあるか？ 君たちにカルデアの、人類の未来を背負う覚悟はあるか？」

◇……当然！ 俺達の世界は、俺達で取り戻す！

当たり前だよなあ？ 大丈夫だって安心しろよ、パパパッと人類史救って、終わりっ！

◇ 貴方と立香の声が揃う。全てはゼロになった。それを、許しておける訳がない。ならまずは怒るよりも、嘆くよりも、まずは、まずは、自分達で何かを始めなければならない。二人の心は、まっすぐに前を向いている。

「——ありがとう。予想以上に、君達は強い子だったようだね。それなら僕も、遅まきながら覚悟を決めよう」

◇ Drロマニが襟を直し、真つすぐに立つ。

「これよりカルデアは、前所長オルガマリー・アニムスファイアの悲願を受け継ぎ、人理継続の使命を完遂する。目的は、人類史の保護、及び奪還。探索対象は七つの特異点、及びその原因と思われる聖遺物、聖杯」

◇ いつの間にか、立香の隣にはマシユが寄り添っていた。貴方の手を、紫式部が握っていた。

「我々が戦うべきは歴史その物、立ちはだかるのは、多くの英雄、伝説になる。それは挑戦であると同時に、過去に殴り込みをかける冒険



だ。人類を守るために人類史に立ち向かう以上、当然だろう」

「人類史に立ち向かう、か……燃えて来た！」

◁男なら、燃えない方がおかしいフリーズだな！

◁男なら、一度はでつかい事、成し遂げないと！

上だよねえ！（着火）

「せ、先輩が物凄い元気そうです」

「マスターも……益荒男、と呼ぶべきなのでしょうかね？」

「……ははっ！ 全く、頼もしいコンビだ！ ならば告げよう！ 例

えどのような結末が待っていても！」

「カルデア最大にして最初の使命、人理守護指定グランドオーダー、魔術世界において最高位の使命をもって、我々は未来を取り戻す！」

◁上等お！

◁その大号令に、二人のマスターは、再び声を揃え、威風堂々と応えた。

「……まあ、本造院君の回復を待たなきゃいけないから、まだ出発できないけど。出発は1週間後になるかなあ……流石に、ボロボロの重体の人間を送り込んで、無駄死にはさせられないし」

……ロマン君さあ……したところで今回はここまでになります。ご視聴、ありがとうございます。

## 拠点フェイズ 拠点フェイズ その一

皆さんこんにちは、ノンケ（太陽を落とした女）です。

前回はいよいよグラウンドオーダースタート……する直前に思いつきりズコー、したところからの続きです。ダヴィンチちゃんがサーヴァントであると判明する下りはカ……ットオ！（BRLY）して、拠点フェイズです。

「とりあえず本造院君は、今日はベッドから出ないように。それじゃあ、お大事に」

「じゃねえ」

「また明日な」

「それでは、失礼します。式部さん。やつさんを宜しくお願いします」

（皆）「いっちゃったよ……寂しいねえ。でも式部姉貴が一緒なので問題ないです。サーヴァントとマスターは一心同体（理想）だからね、（一人で残るのも）多少はね？」

〈紫式部と貴方だけが残された室内。人が減って、途端に静けさに包まれた。何となく会話がないというのが気まづかったのか、紫式部が口を開いた。

「……えっと、その。マスター。改めて、紫式部。キャスターです」

〈お見合いか。あまりにもそれっぽい言い方に、貴方は突っ込みを入れてしまった。

初心な式部姉貴可愛い（ニチャア）

「ああいえ！ そうではなくて……その、お疲れさま、でした。マスター」

労りのお言葉をくれる式部姉貴可愛い（全肯定）

〈ありがとう、とお礼を一言。そこから完全に会話が途切れ、何となく、貴方も気まづくなってきてしまう。何かしら話題を振らねば、と貴方は頭を回した。

〈……ここはお礼を言うのが先決

〈とところでこのハゲ頭、どう思う？〉

上だよね（自明の理） お礼を言わない人間の屑にはなりたくないです。後、自分のハゲ頭の感想聞いてどうするんですかね……光ってますねとか言われたいのかな、唯の変態だと思っただけです（正論）

「あ、その……ど、どういたしまして」

〈……再び会話が停止した。

お前らマジでお見合いじゃねえんだぞオラ（暴言） 初々しくていいじゃねえか（一転寛容） とはいえずっとこのままだと話が進みません。困りましたねえ。

「……マスター。あの、ですね。そもそもマスターは、どうしてここに？」

〈紫式部が、そう貴方に尋ねて来た。そういえば、彼女は出会ったばかりでそんな話もしていなかったのだった。貴方は、紫式部に自分がカルデアに来るまでの事を語った。

「はあそれで献血に行つて、気が付けば……って、ええ!? それって、誘拐という奴では!」

そうだよ（肯定） でも結果的に助かったから結果オーライという奴です。誘拐されてなかったらホモ君は燃え尽きハゲになっていた訳です。でも犯罪には変わりないと思います。つまり殺すのよ。

（唐突）

「なんと……マスターも大変だったのですね」

〈同情されてしまった。結果として生き残った身としては、文句を言い難い身ではあるのだが。しかしそれを態々言う必要は無い。貴方は黙って頷くことにした。

ここは式部姉貴に黙って同情される為にも、下手な事は言わないでおきましょう。仕方ないね（レ） 言葉というのは、沈黙も雄弁も金玉袋ですからね（超理論） 使い分けが大事という事です。分かったか！

「その、えっと、すとれす？ で、御髪や、その、お顔が……そのような、感じに？」

それは素です（半ギレ） ……実を言えばキャラクリもほぼランダ

ムなんで、こうなったのは私の所為ではありません（責任逃れ）いや、このチンピラハゲは気に入っているんですけどね……頬の傷が追加されて余計に敵つくってますし、やっぱり受けは悪いんでしょうか。

「えっ!? 素!? は、はわわわわ……! も、申し訳ありません!」

〳少しガクツと来たが、正直もう慣れていた。この顔が怖いと言われたりするのはいつもの事だし、女性なら猶更だろう。貴方の心は悲しい記憶で鍛え上げられていたのだ。

私のキャラクターは悲しみを背負うフレンズの様です。ハゲと三白眼だけでここまで言われる主人公も珍しいんじゃないですかね……でもこれが個性になっていいんじゃないでしょうか（ポジティブ）

「え、と……けど! お、雄々しい顔つきかと思えます! はい!」

〳貴方は、フォローを受けるとするのは心の慰めになるとは限らないという事を知った。

〳称号『心は辛いよ』を獲得しました。

「……! はわわわわっ!」

なんかホモ君悲しみを背負いそうな称号ばっか手に入れている気がします。まあまあこれも個性! なんでも受け入れてみるもんさ! ところでなんで式部姉貴はそんなに慌ててるんですかね。ホモ君落ち込んでいるようには見えませんが、そこまで慌てる事か?

それともホモ君の見えないものが式部姉貴には見えている可能性が……?

〳このままだと悲しみを背負って奥義を開眼しそうだったので、貴方は取り合えず顔の話を切り上げ、紫式部の話を聞くことにした。

〳それより貴方の話が聞きたい。好きな事は?

〳禿げた男についてどう思う?

上だよね（一閃） っていうか下は話切り上げてないと思うんですけど（凡推理） 何なら掘り下げてるんだよなあ。ここは無難に好きな事を効いていくのが一番でしょう。まあ大体わかってるんですけどね（下衆顔）

「え、私の好きな物、ですか？ えつと……竹取物語が好きです。伊勢物語も。古今集は毎晩でも読み返せますし、後撰集もそう、ですね。本を読むこと全般が、好きです」

「それなら、と貴方は、ダヴィンチに頼んで何か本を用意してもらう事を提案する。」

「読み物を、ですか？」

「貴方は、助けてもらったお礼がしたい、コレから共に戦う貴方への挨拶としての贈り物も兼ねて、と紫式部に話した。紫式部と、相互に理解し合う為の、第一歩として。」

名前がホモなのにノンケ臭が凄いですねホモ君。とはいえサーヴァントと仲良くする分には全然大丈夫です。それこそがFGOR PGの醍醐味。藤丸君では見られなかった様々な道のりは間違いなく見所さんになりますので（見所ばかり気にする人間の屑）

「ご迷惑になるのでは？」

「なんの、どんとこい！」

「いいからオネダリしろオラァ！」

下は私をどうしたいんですかね……混沌・悪とかにしたいんですかね。一応そういうルートも無きにしも非ずですが、そのルートは偶然大惨事カルデア大戦に発展するから上だよ（論理的な結論）

「特異点ではずつと大変な思いをさせていたので、せめてここでくらはいは笑顔でいて欲しい。こんな顔に似合わない事を言うのは流石に気恥ずかしいので、心の奥に秘めておくことにした。」

「あ……うふふ。はい。マスターは律儀な方ですね。はい。ありがとうございます。うごぎいます。その好意に甘えたいと思います」

「彼女が浮かべた笑顔を見る限り、その思いは届いたようだった。」

「こういうサーヴァントの皆さんの表情を見るのが好きだったんだよ！（大胆な告白）」

「ええ、そうですね……ハムレット、リア王、紅楼夢。人魚姫、雪の女王。現代に生まれた多くの名作達に、目を通したいです。その時はマスターも、ご一緒にどうですか？」

「是非、と一も二も無く、貴方は即答した。」

まるでホモ君が式部さんに惚れてるみたいだあ……なお特に恋愛とかは絡んでません。その状態でさてはこのテンションの高さ。ホモ君、陽キャだな？ ホモで陽キャでハゲで悲しみを背負う。これはキャラが濃すぎる。胸やけしそう（小並感）

でもこうやってサーヴァントの皆さんと軽快に会話するのは見所さんですからもつとやれ（超高速掌返し）

「……マスター。私は、特異点でも言った通り。戦うのが得意な英霊ではございません。それでも、この窮地。少々呪に通じるだけの私ですが、心を、綴る事であれば。多少はお役に立てると思います」

〈紫式部が、此方に向き直る。その眼は、真剣そのもの。彼女が英雄である、貴方に感じさせる強い瞳。先ほどのころころと笑う姿とのギャップに、少し驚いてしまう。〉

「マスター。真つすぐな貴方。現世の影法師を思う貴方。私は、貴方に力を貸したいと、そう思いました。強い思いをもって、難題に挑もうとする貴方。貴方を、応援したいと思えました」

式部姉貴に応援してもらえるとか（以下略） こういうセリフと一緒に戦ってくれるサーヴァントの方から聞かされると嬉しいっすねえ〜（恍惚） 因みに敵対したサーヴァントの皆様にも言ってもらおうと泣けてきます（異聞帯並感）

「マスター、本造院康友殿。契約に従い、我が身は御身の鋒となりましょう。共に、人類を救う物語を、紡ぎましょう」

〈式部さん、と貴方は言葉を零す。勿体ない言葉だと続けようとしたが、目の前にかざされた紫式部の手に、口を閉ざした。〉

「出来れば、香子、と。貴方が私に寄り添おうとしてくれた事への、返礼に」

アツ……（昇天） 香子呼びオツケーとかやりました（KG） もう

これで人理修復、終わりでいいんじゃないかな……だめです（自戒）  
〈紫式部——香子とこうして話したのは、間違いではないと貴方は思う。共に世界を救う仲間だ。こうして通じ合えるのは、きっと悪い事ではないと。〉

「マスター。では、共に世界を救うためにも、体は大切にせねばなりま

せん。そろそろ横になるべきかと」

∨……だが通じ合ったその直後に、予想外の一手が飛んできた。まだ眠るつもりも、休むつもりも無かったのを見通したかのように先手を打たれ、貴方は沈黙する。一応賄賂としてせんべいを渡してみたが、効果は無かった。

ホモ君があつと言う間に香子姉貴の尻に敷かれてて草生えますよ！ 女の子には弱いんですかねえ……いや、大人の女の人に弱い可能性も存在している……？

今回はここまでになります。ご視聴、ありがとうございました。

## 拠点フェイズ その二

皆様こんにちは、ノンケ（ハロウインのやべー奴）です。

前回は香子さんと仲良くなれたところからです。藤丸君にとってのマシユみたいな関係になれるといいですね。なる（強い意志）とはいえ香子さんだけと仲良くするのもちよつと寂しいので、今回から一週間使つて、別のメンバーにもちよつかいをかけていきたいと思いません。仲良くやろうぜ？

起床。起きろー。おはようございます。

さて、誰に粉かけましようかね。香子姉貴は見当たりませんね……つと、部屋の外で藤丸君と遭遇しました。Good Morning（ネイティブ）

「おはよう康友。もう大丈夫なのか？」

＜余裕だ、と腕をグルングルン回し貴方はアピールする。体はもうすっかり回復していて元気だ。何ならスキップだってできるだろう。「元気そうでよかった。で、その……マシユの様子が気になるんだけど。昨日の傷だし大丈夫かかって。会いたいんだ。見かけたら俺が探してたつていつておいてくれないか？」

＜何を水臭い。今から一緒に探しに行こうじゃないか。

＜分かった。ちゃんと伝えておくよ。

ちよつと迷いましたが、上だよね（後輩優先）

「そうか……ありがとう、康友」

＜気にするな、と伝える。というより、立香がマシユを気にしているのは丸わかりだ。そんな友人を助けてやりたい、と思うのは、ごく自然な事だった。

「じゃあ心当たりがありそうなところを探すでしょう。まずは……医務室からだ」

マシユちゃんと藤丸君の絆を深めるのは最優先事項なんだよなあ……穢された色彩とかいう悲しいトロフィーは、申し訳ないがNGや。やっぱり藤丸君の正ヒロインはマシユちゃんて終わりっ、閉廷！

以上！



え？ メルト？ 藤丸君はハーレム許可証持ってるやろ（錯乱）

〈辿り着いた部屋は医療室と記された部屋。立香の予想が当たっているならここにマシユが居ると思われる。〉

「えっと、確かこの部屋だった気が……失礼します。Dr！ Drはいますか！」

『ああ、藤丸君かい？ 今、マシユのバイタルチェックが終った所でね。昨日の心配は杞憂だったよ。マシユは健康体だ』

「やったぜ（完全勝利FGO） まあデミ化して健康体じゃなかったら相当ヤバいと思うので当然ですけど。つていうかロマンにも話してたんすねマシユの事。過保護やなあ（ニチャア）」

「本当ですか!? じゃあマシユに会っても大丈夫ですね!？」

『ああ、それはいいけど、藤丸君？ ちよつと一旦待って……』

〈失礼します。〉

〈……バイタルチェック……詳細確認……いやな予感がする。ストップだ。〉

おつとコレは……又ウン！ヘッ！ヘッ！（短縮版） ミコツと（閃き）きました。これは下ですね間違いない……じゃあ藤丸君には折角の機会を楽しんでもらおうと思います。こういう原作にないシーンもFGORPG特有の楽しみですね。

「失礼しますって……うわあああああつ!? ましゅ、そのつ、ごめんっ!？」

「せ、先輩!？」

おつと藤丸君が飛び出してきました。やっぱラッキースケベつすねえ……藤丸君は主人公の鏡。ハッキリ分かんだけだ。

「……康友。俺、なんて事を……お、女の子の……その……って、なんでお前笑ってるんだ」

〈貴方は咄嗟に顔を逸らした。立香を生贄にしたなどと、口が裂けても言えなかったがこの態度だけで察しがついたのか、立香は般若のような顔で襲い掛かってきた。〉

「おまええええええ！ 止めろよお！ マシユが！ 綺麗で！ 柔らかそうだなああアアアアア！」

お草生えますわ（愉悦） いやーやっぱりこういう甘酸っぱいエピソードがぐだマシユには必要。それ一番言われてるから。お前らマジでお似合いのカップルにしてやるから覚悟しろ〜？

「あー……藤丸君、その、気持ちは分らないけど、落ち着いて」

「止めないでドクター！ この外道を！ この外道ハゲをぶっ飛ばさない！」

だれが外道ハゲじゃい！ 頭に来ますよ！（笑顔） やっぱりエンジョイプレイの醍醐味はコレですね。カルデアの日常が新鮮で、非常に美味しい。皆もエンジョイプレイ、しよう！

と、画面が暗転。再開はマシユちゃんのちよつと赤ら顔からです。可愛い（確信）

「え、つと。その。お見苦しいものを」

「いや、いいんだ。確認を入れなかったのと、この外道ハゲが全部悪いんだから」

＜結局、立香に徹底的にボコられた。こういう時、ブチ切れた立香は異常に強く、貴方もブチ切れてないと止められた試しがない。

はえ〜藤丸君強いっすね……ってマジで体力ゲージが減ってる!?! ちよ、赤ゲージになってるんですがそれは。包帯で回復しなきゃ……（緊急事態）

良しっ（確認猫）

「えつと、やっさん。大丈夫ですか？」

＜＜なんてことはない。

＜君の先輩はTーレックスか何かなのかな。

いつもは上だけど、今回は徹底的に、下だよね（おふぎけ並感）

「え？ 先輩はホモ・サピエンス種だと思いますけど……？」

「まだ躰が足りないらしいなハゲ野郎」

＜上等だ。いい加減殴られっぱなしで貴方も頭に來ていた、と立ち上がる。あわや睨み合いになるかという所で、遂にマシユが間に入っ

た。  
「せ、先輩落ち着いて……！ やっさんも、煽るような発言は……！」  
可愛い。健気。やっぱりFGOの正ヒロインはマシユなんやなっ

て。おい野郎共、マシユ泣かせてんじやねえぞ（ガチ勢）

「つたく、マシユが居てくれて助かったな」

〳それは此方のセリフだ、と言い返す。とはいえ、ここらが落としてどころだろうというのは分かっていた。向こうも同じだろうから、あつさり引いたのだろう。

「せ、先輩方は血の気が多い方なんですネ……」

ケンカする程仲が良いって奴だよ。マシユちゃんはその辺りも学びましようねえ。いっぱい学んで、逞しい藤丸のお嫁さんになるんだよ！（少女趣味）

「それで、その、私に御用でしょうか、先輩」

「あ、いや、そのマシユが……凄いやがで、大丈夫かな、つて」

「私が……心配してくれたんですね。ありがとうございます」

〳なんとも初々しく、甘い空気が漂っている。これは自分の居る場所なのかと一瞬思ってしまうが付き合うといった以上、ここで逃げ出すというのは流石にはばかられた。

「俺だけじゃないさ。康友も心配してたよ」

「やつさんも、ありがとうございます」

お礼をと思うならぐだマシユを寄せ（乞食） こちとらぐだマシユに常に飢えてる系実況者なんだよ！ 過剰供給位で丁度いいくらいだし、もつとぐだマシユして♡ しろ（過激オタク）

「そういえば、気になっていたので……やつさんと先輩は、どれくらいのお付き合いなのでしょう」

「俺達か？ うーん……どれくらいだっけ？」

〳まあ幼稚園くらいから？」

〳〳まあ中学生くらいから？」

上だよね（ユウジョウウー） ここで長い方を選ぶのは、趣味です。幼い頃から背中を預け合う親友とか、欲しかったなあ……（届かぬ願い）「そうだったそうだった。結構付き合い長いよなあ」

「な、なんと。そこまで長いのですか……なんでしょう、何となく、一番の強敵はヤツさんのような気がします」

〳マシユの言葉に、貴方と立香は二人して首を傾げた。

こんなチンピラハゲに対抗心燃やさなくていいから（良心）もつと魅力的なヒロイン居るからそつちを警戒、しよう！（推奨）　どうかマシユちゃんの梓はたぶん誰もかすめ取れないと思いますよ。多分唯一対抗できるのはメルトぐらいなものかと。

「まあ、兎も角マシユが元氣そうで良かったよ」

「はい。サーヴァントとしての運用に支障はありません。お任せください」

＜その一言に、どうにも貴方と立香の顔は曇る。自分達より圧倒的にマシユが強いのは分かっているのだが、それでも彼女を前線に引つ張り出す、というのは、あの光景を見た後だと素直には領けなかった。

「……うん。頼もしいよ」

「わぶつ？　あの、先輩、何故頭を？」

＜藤丸に続いて、貴方もマシユの頭に手を伸ばす。困惑するマシユを他所に、貴方と立香は暫くマシユを撫で続けていた。序にマシユにはせんべいを渡しておいた。

あー……マシユには幸せになって欲しいノンケです。

さて、マシユと藤丸君とはここでお別れ。ホモ君は一旦医療室に戻り、今パートの最後にドクターにお礼をしておきましょう。

「おや本造院君。どうしたんだい？　あのまま藤丸君と一緒に行動すると思ってたけど」

＜マシユを治療してくれた事のお礼に

＜自分を治療してくれた事のお礼に

＜自分の頭皮の相談に

……っ！　し、し……う……しっ……うえ、だよねっ……（満身創痍）

「ああいや、別に特に何かした訳じゃないんだけど……でも、彼女を気にするのは当然だとも。彼女は僕の患者だ。最後まで面倒は見るとも」

＜優しい視線だが、一本筋の通った強い瞳にも見える。信頼に足る人物だと、貴方には見えた。これからも自分たちの健康をお任せします、と貴方がいうと、ロマンは笑った。

「はい、お任せされました……あれ、おせんべい。くれるの？」  
くついでにせんべいを渡すと、ニコツと笑って一言札を言いそれを  
頼張った。

リスか何か？（困惑）　こんなんだからホモに狙われるんやで……  
ホモ君の部屋でのロマンはカツコ良かったんですけど、普段のロマン  
てどうにも男らしくないですよね。まあそれも魅力っちゃそうです  
けど。

今回はここまでになります。ご視聴、ありがとうございました。

## 拠点フェイズ その三

皆さんこんにちは。ノンケ（串刺し公）です。

前回はダヴィンチちゃん、香子姉貴以外のメンバーと絆を深めました。香子姉貴とはもう大分絆を深めたので、今回は残るダヴィンチちゃんの所を訪れようと思っています。因みに藤丸君にマシユちゃんが着いていて、自分には誰も居ないのは寂しいので、香子さんを伴って行こうと思います。寂しいんだ、YO！（台バン）

という事で香子さんを探しましょう。

〜810倍速〜

結構、早めに見つかんじゃねえか……

「あら、マスター。おはようございます。どうなさったのですか？」

「昨日の話、香子さんに渡す本について早速相談しに行こうと思っている、と貴方は言った。」

「まあ、それはそれは。是非お供させてください！」

香子姉貴が嬉しそうで俺もソーナノ。結局香子姉貴と絆を深めるけどママエアロ。早めにカルデア大図書館建設したくもありますし。ここらでフラグを作っておくのもいいでしょう。

あ、そういえば（唐突） 香子姉貴つてとある施設と紐づいた鯖なんですよね。

香子姉貴が居て、尚且つダヴィンチちゃんと話す機会があるとカルデア大図書館が出来るフラグが立ちます。そこから暫くすると大図書館が工事完了します。様々な蔵書の他に、ゲーム内の様々な記録（普通に見れない奴）が見れるようになって、なんか芸術的。そういうば桃鉄で似たような物件ありましたよね。

「香子を伴って辿り着いた……というか、戻ってきたのだが。ダヴィンチの部屋の扉を軽く叩く。開いたその中は、やはり先日と変わりなく、色々な発明品らしき品でごちゃごちゃとしている。その中でダヴィンチは、優雅にくつろいでいた。」

「おや？ 本造院君じゃないか。このカルデア一のビックリ箱、レオナルド・ダヴィンチちゃんの工房に何か用かな？」

この背景好き(唐突)　ここは結構お世話になる事が多くなります。詳しくはオルレアン後になるとは思いますが。ところで私室兼工房とか、寝る場所あるんですかねダ・ヴィンチちゃん。

「それで?　ここに何か用かな?」

「貴方は、香子が本を読みたいと言っていて、早速ダ・ヴィンチの力を借りたい旨を伝えた。」

「ほうほう、本か。なるほど、君が言っているのは電子の物ではなくて、紙の媒体の書物って事だね?　それを紫式部の為に、と」

正直ダ・ヴィンチちゃん頼りとかいうクツソ情けないプレゼントですけどね。レイシフト先から本を持って帰って来る事が出来ればうま味なのですがそんな事をするところから怒られちゃうので自重します。

「私頼りなのがちよつと情けないけど、彼女の力になりたいというその気概は買ったよ。今回は初回サービスで、ただで仕事をしてあげようじゃないか」

ありがとナス!　(ダ・ヴィンチちゃんの慈悲が)　なんか……あつたかい……

「ただ、次からは対価を貰うから、その辺りは覚えておいてくれたまえ」

はい。という事でいよいよダ・ヴィンチちゃん工房本格稼働のフラグが立ちました。ここに素材を持つてくると魔術礼装を開発してもらえます。カルデア戦闘服なんかも、ここで開発する事になります。因みにホモ君はそれ以外でもお世話になる予定です。

「で、本の事だけ……ちよつと考えがあつてね。紫式部、アイデアが纏まったら連絡するから、この部屋に来てもらえないかな?」

「は、はい。分かりました。連絡お待ちしております」

そして、同時にカルデア大図書館の開設フラグも立ちました。一部のプレイヤーはダ・ヴィンチちゃん工房と同レベルでお世話になる場所ですが、私は雰囲気が好きなので絶対に作ります(見た目重視全一)「ああそうだ……本造院君、次の特異点突入前にやる事があるから、明日、起きたらロマニの所に行ってくれないかい?」

あ、いいつすよ(快諾) にしてもなんですかね。ミーティングですかね? それにしてはちよつとタイミング早い気が……あつ、そうだ(唐突) 折角ダ・ヴィンチちゃん居るし、せんべいプレゼントしておきましようね。

〽翌日までカツ……トオ! (BR L Y) 〽

あの後には順調にせんべいを配り歩いてました(おじさん) で、ダ・ヴィンチちゃんの言う通り、管制室に呼び出されました。藤丸君とマシユ、ダ・ヴィンチちゃんにロマン、ホモ君と香子さんと勢ぞろいです。あ、スタッフさんも待機してますけど。なんなんすかね?

〽ロマニが、一歩前に出る。何故か凄い疲れたような顔をしている。「えー……カルデア職員で話し合った結果、次の特異点に進む前に、戦力を増強する、という結論になった。という事で、これから君達二人には、サーヴァントの召喚を行ってもらおう」

………フアツ!?

ちよつと待ちましよう。いったん画面止めて……スウ……ふう……よし落ち着きました。えつと、マジで予想外の事態が起きたので困惑しています。ホモ君の出生からして召喚は絶望的な筈でゲームがバグったとかそういう事でしょうか? なんで? (ガチ困惑)

「理由としては……正直、君たち二人があそこ迄戦える、というのを利用しない手はないんだけど、そうすると君たちが死ぬリスクが高くなるし、一人なら兎も角、二人もカバーするには今のままでは人手が足りない……結局サーヴァントを呼ぶのが手っ取り早いと」

草草の草。要するに俺達が出ること必然的に数揃えてカバーせざるを得ない、という事ですか……スゲエ、ホモ君だけならボツチ確定だったのが藤丸君も脳筋になった事で結果が裏返りました。ゆで理論かな? 根本から何かが間違つて居る気がしないでもない。

「君達には、最低でもそれぞれ二人ずつサーヴァントについて貰う。二人はもう一人ずつサーヴァントと契約しているから、召喚は一人一回だ」

とはいえこれで多くのサーヴァントの皆さんと交流できる可能性が出てきてああ……たまらねえぜ! 早く召喚しようや!



「じゃあ先ずは……」

∟立香に譲る。

∟自分が志願する。

でも謙虚なのは悪い事じゃないから上だよね（掌グリングルン）  
みたーい、みたーい。藤丸君のいいところがみたーい。

「……分かりました。俺やってみます！」

召喚するにも全力なんてマジメだなあ……良し、やってやれない事はない。一気にぶち込むんだっぴー！（マスコット） っていうかマシユの盾が床に直置きされてるの結構シユールっすね……

「はいこれ。召喚の為に使うリソース。三つ揃えて投げ込んでね」

「分かりました」

さあ召喚サークルの中に聖晶石くんが入って……さあ回る回る！  
出てくるサーヴァントは一体……って、藤丸君、鉄貨のアクセサリ、  
こんな時にまで着けてくれてるんすねえ。アレが触媒になったりしたら運命感じちゃいますけど。

「——告げる！」

くカツ……トオ！（BRLY）く

「サーヴァント、ランサー！ スパルタ王、レオニダス！ ここに推参  
！」

大当たりキタコレ！ いや、FGOほんへでは星2のアンコモン枠  
ですが、RPGではキャラのステータスがフルに発揮されるので、相  
当強力なサーヴァントです。その上防戦を得意とする将でもありま  
すし、盾鯖としてマシユとの相性も抜群です。いやー、やっぱり主人  
公だけあつて持つてますね藤丸君。

「す、スパルタの語源！ スパルタ国の王！」

「ペルシャ軍一万人を三百人で食い止めたっていう、あの!？」

解説役はロマンだと思つてたら、ここの藤丸君は歴史に詳しい方な  
んですね。ほんへじゃ選択肢次第で何方にでもなれますけど。

「おや、私の事をご存知で！」

「はい！ 貴方の様な英雄に力を貸してもらえるなんて、光栄です」  
「ここまで真つ直ぐな瞳を見るのは、なんとも久しい！ 私、今回はマ

スターに恵まれたようですね！　これからよろしくムアスター！」  
すつごいイイ！　これです、私がエンジョイ実況始めた訳！　こんな爽やかな英雄との交流を見れるなんてF〇〇！　尊さがご立派ア  
！（意味不明な供述）

「うん。藤丸君が呼び寄せたレオニダス王は凄い頼りになるサーヴァントだ。これは幸先が良いなあ。よし、勢いに乗って次は本造院君！  
召喚行ってみよう！」

おっしや、見とき。世界一のサーヴァントを呼び寄せたる！

「……どうやら、無事召喚に応じることが出来ましたか。あの特異点での借り、返させてもらいますよ。マスター？」

ヌツツツツツ（心停止）

「こ、このサーヴァント……霊基はライダー、そしてこの見た目は、本造院君が報告してくれた、冬木のランサーと符合する！」

「ええ、冬木でランサーをしていました。メドゥーサと申します……その頬の傷に思い切り恨みを込めたので。それが触媒となりました。随分と情熱的に倒してくださったので、ええ折角ですし、と」

コワイ！　余計にコワイ！　この頬の傷ってそんな感じの奴だったの!?　唯の治らない傷でアクセ位なもんだと思ってたのに!?　執念深さにオツパゲドン……！

「メドゥーサ、ギリシャにおける伝説の……こ、これは大当たり、かな？」

〽たすけてどくたー　めっちゃにげたい

〽旅に出ます。探さないでください

「……逃げないで、頑張ってコミュニケーションを取ってくれ」

アアアア　ツ……！ア　アアア　ア!!ア　ア!!!アア……！

今回は……ここまでアアアア　ツ……！　ご視聴……ふううう  
うううん　……ありが、とうご、ございました……っ！



君にかっこつけさせてあげる人間の鏡。

「ええ、まあ。協力しない理由は余りありませんし、協力する理由は、一応はあるので」

ライダーさんのクールな態度すっごい好き……好きじゃない？

初代からのファンなんだよなあ。でも一番好きなのは小次郎さん！

ぶっちゃけ初代勢は全員好きなんですよ。かっこいいですよ。

あ、初代様も好きです。バビロニアアニメ好き。

△であるならば、自分も変に警戒する意味はない、これからよろしく。

「はい。宜しく、マスター」

△貴方は緊張を解いた……つもりだったのだが、どうしても一歩腰が引けてしまう。体にあの時の死闘の記憶がこびりついているからだろうか

「……どうにも芳しくありませんね。冬木での印象が強いのでしょうか……その辺りはおいおい、慣れていってください」

ハイ！（某親衛隊） まあ貴重な超強力サーヴァントの方なんで、ちよつと怖いくらいでとづまりしてばかりいると勿体ないです。絆を深めて、一緒に本でも読もうじゃねえか。すつぺすつぺ。

「……つと、そこに居るのは、確か私を倒した」

「ど、どうも。紫式部、と申します」

「そちらからも警戒されているのですか。それは構いませんが、警戒をするのであれば真名を明かさず、クラス名を名乗るのが良いのでは？」

「……あつ」

可愛い（確信） 香子さん可愛い。ぐだマシユも推しだけど香子さんも推しなんだよ。結局全推しになる……ならない？ 全推し野郎に人権はないとか言われてますけど馬鹿野郎俺は勝つぞお前（天下無双）

「新入りの私がいいうのもなんですが、大丈夫なんですか？」

「何をおっしゃる！ 大丈夫でないのなら！ 我々皆で補えば宜しいのです！ メドゥーサ殿！」

「はあ」

「そちらのマスターも、実に誠実な方とお見受けする！ マスター、サーヴァント、共に人材には恵まれました！ 我らが確と一致団結し、二人のマスターやそちらの盾の少女を支えれば恐ろしい物はない、と！ 私の頭脳がはじき出しております！」

「それ、信用できるんでしょうか……？」

レオニダス王は学者系や軍師系サーヴァントを除けばカルデアでも一二を争う知能派だから……思考が脳筋気味？ なんのこったよ（すつとぼけ）

「な、なんだか個性的な人？ が来たな？」

「さらさら」に禿げそうだよ……

「他人事にはさせんぞお前、覚悟しろ」

悲しみを背負いつつも、上だよ（確信）

「育毛剤、ダ・ヴィンチちゃんに作ってもらおうか？ あの人は、それくらい出来そう」

「確かに、万能の人と呼ばれるかの偉人であれば……やっさん、期待してもいいのではないだろうか」

「真っ直ぐなマシユの視線に、思わず貴方は床に蹲りたくなった。

マシユちゃんの心遣いがありがたいのと辛いのももうホモ君の心はめちやくちやや。あゝ、たまらねえぜ（悲哀）

「あのマスター、大丈夫です。人の価値は、髪型では決まりませんから」

「髪が豊かな貴女に言われても、慰めにはならないのでは？」

「はわっ!？」

でもとりあえずは香子さんとメドゥーサさんの仲も良好そうなので安心しました。やっぱり出来るだけ仲間内の不和は少ない方がいいと思う私です。とはいえ相性というものは存在するので、出来得る限りメデイアさんとかはお呼びしたくないです。

魅力的なただけどねえ……メドゥーサさんとの相性がナオキなんですよねえ……

さて、ここからはメドゥーサさんとレオニダス王をお部屋に案内するだけなのでオルレアンまでカツ……トオ！（BRLY）です。

は？　と思う方申し訳ありません。

というかね、見所さんが、ありませんでした。メドゥーサさんやレオニダス王と会話くらいはしたのですが、他には何も特になし。という事であつと言う間にレイシフトのお時間です。悲しいなあ……あ、一応サーヴァントの皆さんは鍛えました。金腕はうめえなあ。

「——やあ皆。この一週間、きつと英気を養った事だろう」

英気っていうか、殺気をみなぎらせて周回してました（マスターの鏡）　ちよつとはサーヴァントの皆さんも強化されたと思います。

「という事で、これより我ら人理継続機関カルデアはいよいよ、七つの特異点の攻略に移る。で、その最初の一步として今回選んだのは、もつとも人理として揺らぎの少ないポイント。ここ、フランスはオルレアンだ」

オルレアン。

FGOのドル箱の一人を生み出した特異点にして、恐らくプレイヤーがとあるクラスに吐き気がする程苦戦し、同時に泣くほどお世話になった土地でもあります。私も当時は若くラスボスの一步手前で徹底的にボコボコにされました……（悲哀）

「ここで君たちがやる事を、改めて説明しておこう」

はい。例によって説明が長いのでカット……トオ！（BRLY）します。そろそろ岩盤がなくなりそう（小並感）

要約すると、特異点がそうだった理由の調査と解決。その理由に携わっていると思われる凄いパワーの塊、聖杯。そしてベースキャンプの設置。これが主な行動目的となります。前にも説明していましたが、分かりやすく説明してみました。

「前回より戦力も増えた。我々としても、準備できる最大の戦力で作戦に臨んでいるつもりだ。藤丸立香、本造院康友両名は、この特異点の原因究明にあたり、解決に当たって欲しい」

「了解！」

〈〈了解！

〈〈了解……それはそれとしてロマン。忘れてないぞう。

偶には下も選んであげましょう（優しみ）　前回の事はもう許せる

ぞオイ！ 貴様の為に、ワシは宇宙塩を味噌鮎だぞ！ 悔い改めて、どうぞ。

「……いや、その、申し訳ないとは思ってるんだよ。本当に」

「ま、マスター。それくらいで……」

香子さんによしよしされたので許します（傲慢の獣）

「ここ、フランスで起きた重要な出来事といえば……藤丸君、分かるかな」

「えつと、フランス革命と後は……ジャンヌ・ダルクの処刑された、百年戦争？」

「そう。藤丸君、後者が正解だ。今回レイシフトする年代は、イングランドとフランスが領土をめぐるって骨肉の争いを繰り広げた百年戦争、その終戦前後という事になる」

藤丸君賢いつすね……一発で百年戦争出るのはやっぱりインテリの証拠。天性の肉体って頭脳にも適用されるんですかね。

「間違いなくこの特異点の原因は、その百年戦争にあると思われる。その事を中心に君達には特異点で調査を進めて欲しい」

〈藤丸と貴方は、揃って領いた。いまさら躊躇う理由は存在しない。いい返事だ。では第一特異点、オルレアンへのレイシフトをこれより実行する。皆、事前の説明の通り準備をしてくれ」

さあて、いよいよオルレアン攻略です。

特異点Fより難易度が上がった分、見所さんもガバも増えるでしょうが、その分エンジョイとガバ運で乗り切っていきたい所存です。だからめちやくちやな凶運とかは……やめようね！（恐怖）

〈アンサモンプログラムスタート 霊子変換を 開始します〉

〈レイシフトまで〉

〈3〉

〈2〉

〈1〉

〈全行程 クリア グランドオーダー 実証を 開始します〉

今回はここまで。視聴、ありがとうございました。

## 第一特異点 邪竜百年戦争 オルレアン 欠けた聖女 その一

皆さんこんにちは。ノンケ（月姫）です。

前回は、新しい仲間のレオニダス王やメドゥーサさんを迎え入れ、準備も満タン。いよいよオルレアンへのレイシフトを実行した所からの続きです。いやあね、これだけお強い味方が居ればね、攻略も余裕でしょ（慢心） そんなんだから特異点Fでランメドゥーさんに瞬殺されかけるんだよなあ……引き締めてどうぞ。

背景はレイシフトのあの突っ込んでいく画面から、のどかなオルレアンの平原の背景に切り替わりました。おお、緑が綺麗ねえ。

因みにちよつと前までこの辺りも地獄絵図でした。怖いねえ……

「……つと、着いたか。おおちゃんと康友も一緒だ。イエーイ」  
◇◇イエーイ

◇◇ハゲ頭で受けるッ！

上だよね（ユウジヨウ！） 下は遊戯王か何か？ こんなんウケ狙ってるのかしか思えないんですけど。こんな選択肢まであるとかこのゲーム作った奴相当変態だぜえ？

「はい。今回はコフィンによる正常なレイシフトなので、皆さん一緒の場所に来ることが出来ました。体も正常、問題ありません」

「フオウ、フオウ！」

「あ、フオウさん!? また付いて来てしまったのですか!？」

そしてフオウ君も当然のように同行。特異点Fではあんまり取り上げられなくて済まない……これからはちゃんとフオウ君のセリフも取り上げるからな……

さて、ここから行動開始イーツ！ 先ずは道なりに進んでいくのが定石ですが……ここでちよつと面白い要素をご紹介したいと思います。特定のサーヴァントを味方につけていると実行できるコマンドがあるのです。

◇メドゥーサに偵察をお願いする。



これです。敏捷B以上の行動力のあるサーヴァント、又はアサシンのクラスのサーヴァントが居ると周辺の索敵をして貰えます。F G O R P G、こういう要素、あるッ！ アッ！ このゲーム、「深い」ッ！！

「了解しました。少しお待ちください」

後は待機してるだけでメドゥーサさんの集めてきてくれた情報が手に入ります。うん、おいしい！（無二打）因みにどんな情報であれ有益な物には変わりないので実質完全勝利です。うんうん、おいしい！！（二撃決殺）

「では、メドゥーサ殿が帰って来るまで！ ここで待機及び、当面の行動の指針を決めると致しましょう！」

「うん……そういえば、さつきから気になってたんだけど」

＜立香が空を指さす。つられて見てみれば、貴方の目にも入った。空に浮かぶ、不気味な光の円が。空のほとんどにかかる巨大なそれは、何処か、空に開いた穴のようにも見える。

「あれ、なにかな」

おお、ほんへでは一部しか見えない光の環君じゃないか！ 全体が見えるようになる余計に不気味ですねえ……あれはコレから追々明かされていく重要要素ですが、今はロマンやカルデアにも分からないナオキです。

と言った所でメドゥーサさんが戻ってくるまでカ……ットオ！（B R L Y）です。

「只今戻りました」

＜ありがとうございます。何かわかった？

「はい。簡単に、ですが。まず、ここら近辺には町などは見えませんが、砦を一つ発見することが出来ました。周辺に兵士の集団がうろついていますので、その砦所属の兵士かと思われます」

大戦果です（歓喜）

『その兵士と情報交換することは出来ないかな。現地人の情報は何よりも貴重だ』

＜確かに。コンタクトを取ってみよう。

「……こんな怪しい集団に声かけられて、ビックリしないだろうか。やったぜ（バリトン） 下の選択肢が出た時点で我々の勝利です。」

ほんへでは兵士たちと殴り愛地上をやらかしてしまいましたが私のようなクソ雑魚エンジョイプレイヤーには無駄な戦いをしている余裕はありません。出来得る限り体力を温存しつつ行きたいので、フランス軍との殴り愛はキャンセルだ。

その時必要なのが、先にフランス軍の事を把握しておくこと。出会い頭だとコンタクトを取る以外の選択肢が出ません。咄嗟の事だし、仕方ないね。

「……控えめに言っても、警戒される未来しか見えません」

「紫式部、それに藤丸は恐らく平気。マシユはギリギリ大丈夫でしょうが、私とレオニダスはアウトですね」

「本造院殿もダメでしょうな！ 明らかに相手を威圧する顔をされておいでですー！」

やめて！ ホモ君のライフはもうゼロよ！

「……康友。泣いて良いんだぞ」

「フオーウ……」

「貴方は、歯を食いしばって、泣くもんかと空を見上げた。ここで泣いたら、色んなモノに負ける気がしたから。それはそれとして、立香の気遣いとフオーウ君の肉球は優しく、嬉しかった。」

「称号「強面の宿命」を獲得しました。」

これからホモ君ってこんななんぼっかりなんですかね。まあメドゥーサちゃんが付けてくれた頬の傷と相まって、ホモ君の形相がマジでヤクザ染みてきてますけど。TDNが鳴いて謝るレベルですよ。やべえよ……やべえよ……

「……とはいえ、式部さんと先輩だけで向かわせるのも」

『僕はお勧めできないなあ。嫌な予感しかしないよ』

ウース異本不可避ですねえ。この時代の兵士なんて獣みたいなもんやし（風評被害） ジルがめっちゃやまともな人だったという事実。

「……そういえば、ここら辺で」

「先輩？ どうなされたんですか？」

「うん。思いついたかも。作戦」

ここで藤丸君の頭脳が冴え渡るかと思つたら普通に画面が暗転しました（半ギレ） 作戦内容を聞かせろつつってんだルルオ!?

でもつてちよつとしたら画面が戻りました。藪の中から砦方向を見るメドウーサさんとホモ君。視線の先に藤丸君と香子さん、二人を守る様にマシユちゃん。そしてその傍に見慣れないフランス兵が居ますね……

「オオオイ！ 門を開けてくれ！ 旅の者を保護しましたぞお！」

あつ（察し）

周りにはレオニダス王が居ない……つまりそういう事でしょう。つい最近は……（レオニダス王が）鎧に隠れとったんか？（疑問形）  
というか藤丸君、アレどっから調達したんでしようか。

「分かった……ちよつと待ってくれ。今扉を開く」

一発う！ チョロ過ぎやしませんかねこの砦……

「上手くいききましたね」

〈完璧、と言つていいだろう。後は内部に潜入した香子達が情報を集め、折を見て脱出し、レオニダスも周辺の警戒と称して退散する。立香の作戦。〉

「レオニダスは既に戻って来ている最中、あとはマシユと藤丸、そして式部の三人がどこまで情報を集めてきてくれるかによります」

はえ〜くしっかり出来た作戦ですねえ。シンプルで、非常に美味しい。

「ところで……なぜ煎餅をこんなに持ち歩いているのですか？」

〈こういう時の為だ、と貴方はせんべいを齧りながら返した。〉

「そうですか。まあ、折角なので頂いておきます」

藪の中、しゃがんで男女二人が煎餅パーティーとか雰囲気欠片もありませんか……つておや？ レオニダス王の足が止まっていますけど。あ、今見えましたよ。なんか遠くから来てますねえ。

「レオニダスからの念話です。竜牙兵を発見。作戦の支障にならないよう、此方に引き寄せて殲滅するとの事」

〈特異点での初戦闘、貴方は気を引き締める。決して英雄たちの背

に隠れるだけではなくしつかりと、戦えるように。

「……全く、冬木の時もそうでしたが、無謀と言うべきなのか、それとも人任せにしないと言うべきなのか。無茶だけはしないように」

オッスオッス！ あ、そう言えばホモ君の武装ですが、ちゃんと冬木で見つけたバットを携帯しております。よっしゃ、スケルトン狩りの始まりや！ イクデッ！ デッデッデデデ！カーンデデデデ！  
〜百倍速〜

終わりっ！ 閉廷っ！ 以上！ チエイテ解散！

流石に後方のレオニダス王、前方からメドウーサさんとオマケのハゲで攻撃されたらあつと言う間でしたね。あ、メドウーサさんとハゲのキル比率は8対2です。

「終わりましたね……存外、脆かったと言うべきか」

「ですが本来の歴史ではこの様な輩は居なかった！ これは明らかかな異常でしょう！ この特異点に関わっていると考えると宜しいのですね！ ドクター・ロマニー！」

『はい、レオニダス王。それは間違いなく、しかし……確かに特異点を揺るがすような要因としては弱すぎる、とも思います』

大人組が凄い大人な会話している……ホモ君は何もすることがありません。冬木とおんなじじゃねえかお前よオオン!? でも実際こう、全員が知能派というか、賢いんですよねサーヴァントの皆さん。だからこういう考察ターンではお空キレイしてるしかないです。

……ホモ君と一緒に黄昏てくれる仲間が欲しいです。

『となれば他にもつと……つと!? 内部の藤丸君から連絡。有力な情報を聞き出せたと同時に、砦を襲撃する生物アリだって、しかも、これは……ワイバーン!?』

つと、そんな落ち込んでいる場合ではなさそうですね。急いで砦の方のワイバーンに対応しなければ。よーし、僕だってカッコいい所見せてやるぞ！

そんな決意をしたところで今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。

## 欠けた聖女 その二

皆さんこんにちは、ノンケ（森の見えない人）です。

前回はオルレアン、ワイバーン襲撃イベントの続きから。ところでワイバーンって美味しいんですかね？ とある Fate のスピノフではドラゴンの肉を美味そうに食べていた記憶があるのですが……まあそれは今は良いか。

さて、現在ホモ君達は砦側とはワイバーンを挟んで反対。丁度、ワイバーン達のルツを取った形になります。退路を断った上にどりやあああああっつ！ つと出してやったらイイ声で鳴く位置につけてはいますがまだだ、まだ焦るような時間じゃない……

「藤丸達はどうかやら上手い事対応できているようですね」

「はい！ 我々も後ろから攻め立て、一気呵成に討ち滅ぼしましょう！」

〈頷いて武器を構える貴方だが、その時気付いた。マシユ、立香、香子の三人の横にもう一人。見た事のない人物が立ち、陣頭で戦っている。どうやら立香達が戦えているのはその人のお陰でもあるらしい。

おっと慌てる時間じゃないか（一転攻勢） あの人が出ていたなら話は別です。もう用もないのでさっさとぶちのめしましょう。あああつ！ ワイバーン狩りはたまんねえぜ！（クサイヤ人）

〜二十倍速〜

メドゥーサさんとのキル比率が8対2になりました（完全敗北UC） なあくにが、いけなかつたんでしようねえ……とりあえず、ワイバーンの素材は拾っておきましょう。

「終わりましたか……我々も、撤収しましょうか」

「合流ポイントにですな！」

「ええ」

しかしレオニダス王硬いですね。一人で十匹ぐらい引き受けてビクともしませんでした。立ち回りも計算され尽くしていて、偶にワイバーン同士の自滅とか狙ってました。脳筋とか嘘つけ絶対知将だゾ。そして引き付けたワイバーンをメドゥーサさんが鎖でドーン。息

ピッタリです。

〈〉ありがとうございます、レオニダス王。

〈〉お疲れ様、メドゥーサ。

おっとこれは選択肢、どちらの好感度を上げに行くかですが……ここ無難に自分のサーヴァントの好感度を上げておきましょう。下だよね。

「いえ。仕事ですから」

塩ア！ でもホモはめげない。何時か、カルデア大図書館で背中合わせで本を読む日を目指して行きませんか？ 行きましょうよ！

「さあお二人とも参りましょう！ マスターと一緒に居る、見慣れぬ女性についても話を聞かねばならない模様ですしー！」

「そうですね。参りましょうか……ああ、そう言えばマスター」  
ん？

「別に一々、お礼はいりませんよ……貴方のサーヴァントなのですから、当然の事をしているまでです」

……ええ？ 耳元で囁いて先に行つたぞあの初代の色気担当ライダー……ホモ君との距離、これもう分かんねえなあ。香子さんと違って読めない人です。そこ好き（デビルマン） 声も好き（デビルマン） 髪も好き（デビルマン） 分かるマーン！（自己完結）

私の性癖は放っておくとして、さっさと合流場所に急ぎましょう。くという事でカ……ツトオ！（BRLY）く

はい、ご覧の背景はFGO野宿おなじみの洞窟です。

因みに洞窟に入る前に雑魚が山積みになっていたんですけど、アレもしかしくなくても香子さんですかね……藤丸君凄いビックリした目で香子さん見えますし。

「なあ、康友……式部さんて、強いんだな」

雑魚専番長とか、伊達に揶揄されてる訳ではないので……マジで雑魚キャラ、というか一般エネミー相手は強いんですよその人。

〈今、この洞窟には全員が集合している。取り敢えず、先ずは立香とマシユ、香子が収集してきた情報を皆で共有する事になった。

藤丸君達が調べてきたのは、オルレアンで蘇った竜の魔女、ジャン

又ダルクについてです。分かりやすく言うと『なんか無茶苦茶な理由で火炙りにされて頭に来ますよ！ 邪剣故郷のおフランスでも滅ぼしておきましょうね』って感じでバリバリ暴れてるらしいですよ。怖いねえ……

『その自称ジャンヌ・ダルクが特異点の成立に関わっている事は間違いないだろう』

「そう、それで……そのジャンヌ・ダルクの話を聞こうと思って、この人と一緒に来たんだ」

＜その言葉に続いて一同が目を向けたのは、藤丸と一緒に居る金髪の女性。彼女が何故か砦の兵士から逃げられているのを貴方は見ていた。

「この方の名前は、ジャンヌ・ダルク。だそうです」

「……ほう？」

「なんと！」

はい。皆さまお待たせいたしました、オルレアンの案内役サーヴァントにして超重要人物のルーラー、ジャンヌ・ダルクちゃんの御登場です！ ハイ皆拍手！（高校の自己紹介）

ヒロインみたいな顔えしてんなあ？ 実際外伝のヒロインなんだよなあ……ジーク君と幸せになって、どうぞ……もうなってる！（即時決着）

＜思わず目を見開いた。目の前に、このオルレアンで起きている問題の元凶と言われている人物が座って、焚火を囲んでいるのだから。＜> どういう事なのか、ちゃんと説明してくれると嬉しい。

＜> 竜の魔女というより、カラー的にはサイっぽいが

ホモ君は感性どうなってるんですかね……？ 当然、上だよ（英断）サイっぽいってなんだよお前、実際ジャンヌってサイぐらいタフだけど……高難易度でお世話になってナス！

「……分かりました。ですがその前に。貴方達の名前を、教えていただけませんか？」

あつ、そっかあ（納得） 自己紹介もまだでしたねホモ君達。初対面の人はまず挨拶と自己紹介。分かってんのかオイ？ しかし自己

紹介の映像はキャンセルだ（無慈悲）

『デミ・サーヴァント……聞きなれない言葉ですね』

「正式なサーヴァントではないのです。ご存知ないのですか？」

「……そこからハッキリさせるべきでしょうね」

そしてジャンヌちゃんの自己紹介もキャンセルだ（二連撃） 分かりやすく言えば『（聖杯からの）サポートが入ってないやん！どうしてくれんのこれ（弱体化）』って感じですねえ！ えっ、何それは……（困惑）

「先ほどの兵士の方は、ジャンヌ・ダルクは竜の魔女として蘇った、と言っていました」

「……私も現界したばかりで詳細は分からないのですが、どうやらこのフランスに今、二人のジャンヌ・ダルクが居るようです」

「先ほど、兵士の方が言っていた、仏蘭西の王を殺害した、という……？」

「はい」

「じゃ、ジャンヌ・ダルクって量産型だったんですか……!?!」

藤丸君から飛び出す量産型ジャンヌ・ダルクとかいうパワーワード。実際そうなりかねないから怖すぎい!?!（後のイベント） 因みに私はカレーの四女さんは風評被害だと思ってます（弁護）

「りよっ!?! 急に量産型って何ですか!?!」

『ちよ、藤丸君!?! 何を失礼な事言ってるんだ!?!』

「すみません！ つい思った事が口をついて！」

この藤丸君、さてはイベント時空の藤丸君やな……? こんな頭吹っ飛んだワードが出てくるなんてそれぐらいしか考えられないんだよ、分かる? この罪の重さ。まあでもほんへとイベント時空の藤丸君は同一人物だし……

『……と、兎に角。その特異点の成立した理由は分かった。その竜の魔女がこの時代のフランスを破壊しつくしているのが原因だと思われる』

まあおフランスって大国だし、地図上から消え去ってしまったら、まあ歴史もめちゃくちやになりますよねえ。滅びた? あ ほく



さ　とか言っただけで無視できるような国じゃないんだよなあ。  
あ、カエル料理は滅びても良いと思います（過激な差別発言）

で、後は……

＜自分たちがやるべき事を貴方は理解した。後は……全員の視線が、ジャンヌに向かう。彼女の意思をまだ聞いていない。

「ジャンヌさん、貴女はこれからどうするのですか」

「……私は、オルレアンに向かい、竜の魔女を止めねばなりません。主からの啓示はなく為すべき事は分かりませんが……見捨てる事は出来ませんから」

よう言うた！　それでこそ男や！　でも女だ（前言撤回）

「じゃあ俺達も、それに協力するのがよさそうだ」

「ええ。今後の方針は彼女と協力して、特異点修復にあたるべきかと」  
「ジャンヌ殿と我々の目的、幸いにも一切の矛盾は致しません！　任務に沿わずとも助ける以上、目的があっているのは幸運というべきでしょうな！」

＜立香が、マシユが、レオニダスが。ジャンヌのオルレアンを助ける、という願いに呼応する。誰かを見捨てる、という選択肢はそもそも彼らには存在しない。

「ジャンヌ様のお心、確と受け止めました。私に出来る事であれば」

「私はマスターに命じられたことをするだけなので」

＜竜の魔女をぶつとばすのに協力させてくれ。

＜貴方を助けるよ、ジャンヌ・ダルク。

という事で、ホモ君らしいのは上だよ（暴力）　やっぱり何事も暴力で解決するのが一番！　ハッキリ分かんかね。あとメドゥーサさんが割と事なかれの返事をしたのは原作再現でいいと思った（小並感）

＜この場に居る誰も、ジャンヌを一人で行かせるつもりは無かったようだ。

「……そんな、私の方からお願いしたいくらいなのに。こちらこそ、皆さんのお力をお借り出来てありがとうございます。これからよろしくお願ひします！」

たよりになる ルーラー が なかまになった！ F O O !  
ジャンヌが味方についた所で今回はここまでです。ご視聴、ありが  
とうございました。

## 欠けた聖女 その三

皆様こんにちはノンケ（覚り者）です。

前回は、ジャンヌ・ダルクを味方に迎え、オルレアン攻略の方針を打ち立てた所まで進めました。皆で一致団結！ という事でね、即席パーティとはいえ、結構いい感じになったと思います（曖昧） 一人団結っていうより便乗してる騎兵がいた？ なんのこったよ（すつとぼけ）

では行きますよ！イクイク、ヌツ！ とはならないのが世の常。とりあえずは犬のように駆け巡って情報収集をする事になりました。もう待ちきれないよ、早く（情報を）出してくれ！

で、どこ行くんすかね。へえ、ラ・シャリテ。

あつ、ふーん……（察し）

〜移動はカ……ツトオ！（BRLY）〜

『……駄目だ、その街に生命と呼べるものは残っていない』

悲しいなあ……（嗚咽）サーヴァント反応だ！ どっか行った！

マチガモエテル！（棒読み）した直後にこれです。ジャンヌの顔も曇り顔。泣かないで……（届かぬ願い）

「ひどい……どうして、こんな真似が」

「一切の容赦がありませんね。まさに、憎しみで焼き尽くした、と呼べるような」

メドウーサさんスツゲエCOLつすね……まあ何方かと言えば人間さんは苦手な部類だと思っし、その集落が燃えたくらいじゃ動揺しないのも、多少はね？

さて画面ではジャンヌさんが生存者を諦めきれず、生存者を探し始めたようです。ホモ君達も探しますよ！探す探す……見つかるかどうか？ 誤差だよ誤差！

〜視界の端に何かが動く。生存者だろうか。そう思っって、瓦礫を退けた瞬間……立ち上がったのは、恐らくここの住人だったであろう、動く人骨だった。

〜っ！

◁ 奇跡的に残った生存者とかじゃないのかよ！ 吹っ飛べ！

え、ええ……速攻で World War (ネイティブ) とか下の選  
択肢が薩摩過ぎる。とはいえここでモタモタするのも宜しくないの  
で……今日はお前らの根性叩き直してやっから、俺が直々に、空手を  
教える (選択肢下)

「つておい康友!! お前何いきなりガイコツホームランしてるんだよ  
!?!」

◁ 生存者が居ない、というドクターの言葉を信じるのなら。貴方に  
躊躇いは無かった。万が一にも生き残りが居る可能性は捨てないが  
……それ以外に、一切の容赦は要らない。

◁ 寝かせてやろう。起こしたままにするのも酷だろう。

◁ ◁ ◁ に居る動く奴らは、全員狩り殺して良いって事だよな!

流星に上だよね…… (消耗) 下まで行くとマジで混沌・悪ルート一  
直線になっちゃうヤバイヤバイ。因みに混沌・悪ルートは非常に新鮮  
で、非常に美味しい……ので一回ハマっちゃうと抜け出しにくくなり  
ます (経験者)

ゴルゴンさんと敵を蹂躪するのは、ああっ! たまんねえぜえ!!

(外道)

「……それもそうだな。眠らせるのは、大切だよな」

そういえば藤丸君ですが、武装は変わらず鉄パイプ……では流星に  
ないです。あんな脆い物特異点の時点ですべて折れちゃつ……  
たあ! その代わりこの特異点で兵士の剣を拾って装備してます。

「マシユ! レオニダス王! 守りを固めつつ敵のせん滅!」

「承知! マシユ殿、私に合わせて進軍を! 盾の使い方、参考にして  
いただければ!」

「あ、ありがとうございますレオニダス王!」

因みに今回の MVP は藤丸君チームです。突撃して来る骨がどん  
どん溶けていきました。あのチーム無敵と違いますかね? マシユ  
とレオニダス王の鉄壁の守りとか抜ける気しない……しなくない?

あ、藤丸君も活躍しました。一応。

「終わりました、けど……何故か途中からワイバーンも混ざってきて、

マシユ様達も大変そうでしたね……群がられて」

「死体を漁ろうとしていたのを阻止出来て良かったのでは？」

いやこつちにも来てたしスツゲエキツかったゾ……なんか勝手に難易度が上がった気もしますが、これも誤差だよ誤差！（鈍感）

あ、牙とか素材は集めておきましょう。後でダ・ヴィンチちゃんの手元に届けてなんか作ってもらえるかガチャガチャしましょう。

「……これをやったのは、もう一人の『私』、なのでしょね」

「ジャンヌ様。そうと決まったわけでは……」

「いいえ分かります。確信のようなものが、あります……分からないのは一つ。どこまで憎めば、このような……慈悲の無い殲滅が、出来るのか。私には理解できません」

まあその辺りは追々理解できるし、というか直ぐにでも理解できると思います。

『……待った、去っていったサーヴァントの反応が戻ってきた！こちらに気付いたらしいぞ！』

それから来ました。こつからがこの特異点の本当のスタートみたいなもんやし……

『数は……六騎！ それにサーヴァントじゃない巨大な反応も……皆、警戒を怠らないでくれ！ 不利だと思ったら、即時撤退を、いいね！』

「ジャンヌさん」

「ええ……真意を、問いただします！」

そしていま目の前に……敵 将 入 場（堂々参戦）

∨地響きと共に現れたのは、巨大な怪物、その周りを固めるように立つ五人の人影。

あ、ファブニールじゃなくて巨大な怪物（タラスク）に乗って来るとですね大ボスさん。亀に乗って登場とは、これでは竜の魔王の名が泣くな（挑発） 巨大な怪物（タラスク）は亀じゃない？ 亀ですよ？ ただそこらのワイバーンを皆殺し余裕なモンスタータワートルなだけですよ（全ギレ）

「なんて、事。まさか、まさかこんな事がおこるなんて……ねえ、願

い。だれか私の顔を張って。思い切り！ 遠慮なんていりません！  
まずいの、やばいの、本気でおかしくなりそうなの——だって！」  
　　〽そしてその怪物に誰かが乗っている。こちらに居る少女と、あまりにも似ている黒い少女が浮かべるのは。驚きか、いいや違う、彼女が浮かべたその顔は。

「——頭が沸騰しそうなくらい、あれが滑稽すぎて笑えてくるのよ！  
死んでしまいそうなくらいに！ ほら、見てくださいジル！ あの  
哀れな村娘を！ この私が、うっかり慈悲をかけそうなくらいじゃありませんか！」

　　〽——嘲笑だった。目の前の存在を、心の底から馬鹿にしていなければ、出来ないようなそんな……歪んだ哄笑が、口の中から漏れている。

「こんな小娘にすぎるしかなかったなんて、私がこうして手ずから滅ぼすまでもなく、こんな国はとつくに終わっていたって事じゃない！

ねえジル！ って……ああ、ジルは今、居ないのよね。つまらない  
はい。この特異点の大ボス（ラスボスに非ず）、ジャンヌ・オルタさんです。型月最強のドル箱セイバーさんの足元を揺るがすほどの人気をF G Oだけで叩き出した化け物、逃げるんだあ……（人気で）勝てるわけがないっ……！」

「黒い、私……貴女は本当に、私……なのですか？」

「呆れた、ここまで分かりやすく演じてあげたのに、そんな疑問を持つなんて。——」

「——違うよジャンヌ。君と、彼女は違うと思う」

　　〽当然だな。アンタは俺達が倒すべき敵だ。

　　〽敵だな！ 命置いてけよ竜の魔女！

だから下は混沌・悪一直線だって言ってるんだルルオ!? 当然、上だよね（常識） 　　というかホモ君をマジで島津化しようとするのはやめないか！

「——へえ？」

「藤丸さん、本造院さん……」

「私とその奴は、まあ確かに格の違いというモノはありますが……」

私の言葉を遮るのは感心しないわね、そのちっぽけなマスター二人——燃やすわよ?」

〽黒いジャンヌが一睨み、その瞬間、貴方達の目の前の地面が燃える。恫喝か。されど立香も、貴方も。怯みもしない。とつくに戦闘準備は終わっていた。寧ろ、竜の魔女を睨み返してみせた。

「アンタはここを亡ぼす。俺達はここを守る。どちらも譲れないと分かった今、少なくとも今はこれ以上の言葉は無用じゃないのか?」

そして藤丸君の更なる追撃。確実に煽ってますねコレは間違いない……

とはいえこれ以上の会話は無駄というのは同意です。白ジャン黒ジャンが向かい合って戦場に立つ、もはや事ここに至った今、言葉は無粋! 押し通れ! (ZOD)

「——いいわよ、そんなに死にたいのなら……我がサーヴァント達! 奴らを血の霧にでも変えなさい!」

『忘れちゃダメだよ藤丸君、本造院君、ダメそうなら撤退する事!』

「分かりました! マシユ! 行くよ!」

「はい、先輩!」

〽総勢十騎のサーヴァントが地を蹴り、貴方達もその渦へと足を向ける。ラ・シャリテにて始まったこの会戦は、あまりにも激しいスタートを切った。

という事で始まりました! オルレアン前哨戦、ラ・シャリテ戦です。ぶっちゃけこの戦いは、とあるサーヴァントが戦線を切り上げさせるまでの時間稼ぎですが、それでもやるだけの事はやりましょう。じゃあ特別な稽古つけてやるか!

相手戦力は、まさかの初手からエンジン全開! 敵サーヴァントは五……ほんへでは、ランサー公、アサシンさん、セイバー君ちゃん、ライダーさんの五騎(四騎)しかいませんでしたが、今回はもう一人、怪人(仮称)もちゃんとして五騎、加えて巨大な怪物(タラスク)までいます。オルタは観戦の模様です。

こちらの戦力も十全と呼べるレベルですが、これは特異点Fを超える、すいませへええくん! アツアツアツ、アツエ! アツエ! アツ、アツ、熱

いつす！熱いつ大戦になる事間違いなし。気合を入れてプレイしないといけません。その為の右手？ 後、その為の拳？  
今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。



## 欠けた聖女 その四

皆様こんにちは。ノンケ（月の蝶）です。ちゃんねる。

さて今回は、オルレアン開始直後に凄まじい気合の入った激戦がスタートしました。敵はジャンヌ・オルタ率いる英霊軍団五騎十巨大な亀、迎え撃つはカルデアとジャンヌダルクのフランス守護リチーム（MTB） うわあ、なんだか凄い事になっちゃってるぞ……（孤独なグルメ）

めっちゃあつな展開にしたる！

……前中で、こんな感じでめっちゃ気合入れといてなんですけど……なにこれ？（呆れ）

＜貴方は少し、いや結構驚いていた。向かってくる五人のサーヴァント。その何れも強い。冬木のシャドウランサーとは格が違う事は明確。だが……

「つち、ランサー！ 杭を見境なく放つな！」

「我が杭の範囲内に居た其方の失策ではないのか？」

「ちよ、杭で興奮した竜がこつちに！ どうにかしなさいライダー！」  
「危ないと思うなら避けなさい。制御している余裕はないわ」

＜驚いているのはそこではない。それだけ強い五人が好き勝手に暴れまわっては、互いを妨害してすら居る事だった。

「れ、連携も何もありませんね、マスター」

「全く！ まるで、ただ狂ったように暴れる事を定められているよう  
なっ……！」

連携が取れてないのもそうですが、なんていうか、そもそも戦い方が致命的にダメな気がするんですがそれは。ランサー公は範囲攻撃を誰彼構わずブチかましていますし、それに反応した巨大なドラゴン君が勝手に暴れますし……脅威が半減してないか？（困惑）

というかアポクリの知将ランサー公の欠片も見えないんですが、もしかしてバーサークさせたいで知性が大先輩化してるんですかね……？

「好き勝手にはさせませんっ！ アサシン！」

「……おお、クリスティヌ。私は孤独……」

まじめに仕事してるのは怪人さんだけです。かわいそう（直球）  
なお迫真のマスター狙いも、めっちゃジャンヌさんに阻止されてま  
す。凄いかわいそう（ド直球）

「兎に角、あの守りを突破しないと……くっ」

「おっと、ここは通しません！ マシユ殿！」

「はい、カウンター、突貫します！」

「この大盾が……ああつ、邪魔よ！」

対して此方はマシユとレオニダス王を中心に守りは盤石、マシユが  
守りの主軸を固め、経験豊富なレオニダス王が牽制を行っています。  
すっげえ硬くなってんぜ？（誇らしげ） セイバー君ちゃんが抜こう  
としても抜けず、近くに居たアサシンさん諸共、後ろに押し戻してい  
ます。連携！ 連携！ 連携！ つて感じで？ なんか……心強い  
（温もり）

「それに、力が、うまく発揮できないのよ……呪詛の所為で！」

「奴らのキャスターの仕業か。ならば先にそちらを……っ！」

「——させると思えますか？ ランサー」

「っ、味な真似を」

で、その二人の守りの後ろでは広範囲に影響を及ぼせるキャス  
ター、香子さんが敵に根流しでもしています（妨害行為） 加えて、機  
動力のあるライダー、メドゥーサさんがちよくちよく突うずるっ込む  
為に味方の妨害がなくてもあんまり自由に行動が出来ません。

スマブラ（淫夢）くらいの激戦になるかと思ったら、肉丸相手に  
ちよつとヤキ入れてやるくらいには順調です。これこそ食通だな！  
（確信）

……と思っていたのかあ？（BRLY）

やってる内に分かったんですけど、結構この状況結構キツイっす  
……なんで？（困惑）と思われる方もいるでしょうが、食通の方はも  
うお気づきでしょう。

「しかし、相手の連携が皆無に近くても。その勢いは凄まじい事を、貴方は認めざるを得ない。現に、完璧な連携を取れている此方が反撃も出来ていないのだから。流れは明らかに向こうに握られている。」

「そう、こちらからの攻撃がとんだナオキだという事に……！ 向こうは全員バーサーカーみたいなものだし、攻め手が多いし、仕方ないね（諦観）」

「な、何とか持ちこたえてるけど……突破の糸口がない！ こんな時どうすれば……そうだ！ ここはマジ☆マリのお悩み相談箱に……」

「ドクター！ 真面目にやってください！」

『ほかあずつと真面目だけど!?』

（真面目じゃ）ないです。真面目だったらこんなピンチをアイドルに相談はせんでしょ（正論） あ、でもただ混乱している可能性も微レ存……？

「兎に角、このままではジリ貧なので、早く一転攻勢の切欠を……！  
「そう、そうよ。そのまま追い詰めて……全ての首を切り落とさなさい。胴と、念入りに分けるのですよ。特に、そのマスター二人のものは」

「——この街の有様も、思想も、主義も、宜しくないわ」

ダイナマイツ！（大胆な歓声）

「っ」

「何!?!」

「これは……ガラスの薔薇?」

とんでもねえ（お方を）待つてたんだ。マシユちゃんがつけたガラスの薔薇が戦闘終了のトリガー。

「突如、そこに現れた少女に、全ての視線が奪われた。そこに立っていた、どこまでも堂々と、然れど可憐な。キラキラと何よりも輝く、薔薇の様な乙女に。」

「こうして正義の味方として、名乗りを上げたなら、貴方がこの国を侵すというのなら。私はこのドレスを破つても、戦いを挑みます。黒い聖女様」

「貴女、は……!」

「セイバー、アレを知っているの？」

「……この殺戮の熱に浮かされる精神でも分かる。あの輝きは間違いなく……ヴェルサイユの華と謡われた王妃、マリー・アントワネット様」

「やったぜ！ 美しい王妃様がどりやあああああつっ！ つと飛び出してきたあ！（クサイヤ人）王者の風格が漂ってますよクオレハ……皆さまご存氏、マリー王妃の御入場です。ラ・シャリテ戦は彼女が乱入してくる事で強制終了となります。

結構追い詰められてたのでマジで助かりました……（下手くそ）

「おっと、マリアに見とれている場合かな？」

「っ！ マスター！ もう一人居るわよ！」

「礼儀も何もないやり方だが、礼儀知らず相手ならむしろこれくらいで丁度いいだろう……クソのように地面を舐めな！」

『死神のための葬送曲』！』

＜そしてもう一人。細い体の男。彼が奏でた豪華な音が戦場へ響き渡った途端に、黒いジャンヌ、彼女が引きつれていたサーヴァント達の動きが鈍る。

そしてミスター……無礼、謎のモーツアルト？（疑問形）も参戦！ 容赦ゼロの不意打ち宝具ありがとナス！ これでスタコラサツサです（丁寧）

「さあ、白いジャンヌ。こちらに。皆様も！」

「あ、ありがとうございます……？」

「——これは好機！ 撤退と参りましょう！」

＜互い領き、先ずジャンヌの手を取った少女を先頭に、殿を引き受けたのはレオニダス。追い打ちの杭も全て打ち払う。守勢において、スパルタの偉大なる王、レオニダス一世はそうそう負けはしない。

レオニダス王酷使され過ぎでは？（心配）どんな危険な領域でも天下無双できるレオニダス王は神だから仕方ないね。ゆうさくなら死んでた場所で、レオニダス王なら逆転勝利は愚か完全無欠の勝利まで持っていくってそれ一番言われているから。

「どうだい？ アンコールは必要かな？」

「お願いいたします、異国の楽師様。私の言の葉を乗せて、少しでも！」

「——ほう、東洋の詩人と共演できるとは。ちよつと気分が乗ってきた。いいとも、即興のアンサンブルだ！」

〈そして守勢の天才を守るのは、瀑布に等しい音と水滴の如き言葉。二つが交差し、英霊達の動きを絡めとる。暴力ではない、確かな力がそこにある。

ファッ!? モーツアルトと香子さんの共演!? 鑑賞しなきや(使命感) というかこんなイベントもあるんすねえ……夢の共演これから楽しみ(呑気)

「……っ! あの子吸血鬼に、渡すくらいならっ!」

ドファッ!? (二撃決殺) デオン君ちゃんのスゲエガッツ!? 呑気してる場合じゃなかった!

〈突入して来るサーヴァントが一騎。その狙いは間違はなく、マリーと呼ばれていた少女。立香はレオニダスとマシユにかかりきりで、気付いていない。直線状に居るのは、貴方唯一人だ。

〈……やるしかない!

〈〈ライダー!

上だよね(反射) ……あつ(今頃) 馬鹿ですか?(罵倒) 普通にメドウーサさんがフリーだから呼んで対処させればいいと思うんですけど(凡推理) これはホモ君死んだんじゃないでしょうか。

「邪魔だっ!」

〈サーヴァント、凄まじい力を持った英霊。だが、向かってきている騎士の動きはそれを十分に発揮しているとは思えない。二人の力で、動きが鈍っているのだろう。貴方が割り込んで振り切ったバッドの一撃を防ぐだけで、あっさりとその進撃を止めてしまった。

「く、くそっ……!」

「マスター! 鎖に捕まって!」

こ、こええ! なんとか止められましたけど、普通にサーヴァントと一騎打ちしてるんだよなあ……冬木で無茶しないとかなってたのはどこの誰なんですかね。

あ、メドゥーサさんヘルプありがとナス！ さあ逃げるんだよお！

（移動はカ……ツトオ！（BRLY））  
近くの森まで避難してきました。やー凄い豪華なコラボにオラ  
わつくわくして来たぞ！ え、もう終わってる？ そんなー。

「ふう……もう、アマデウスったら悪い人。不意打ちなんて、紳士のする事じゃないわ」

「アハハ！ いやー、僕ってば、紳士とは程遠い存在だからね！ 許しておくれ王妃様」

「それもそうね！」

「いや、そんなにあっさり納得されてもちよつとショックだけど……」

＜息を整える貴方の前で、突如現れた二人が漫才染みた事をやっている。片方は、あのフランスの王妃、マリー・アントワネット。もう一人は……アマデウス、と呼ばれている。

「あの。あなた方は」

「あら、あらあら。そうですね。自己紹介も碌にせず、ごめんなさい。改めまして皆さん。マリーよ。さあ、一緒に。ヴィヴ・ラ・フランスー！」

Vive la France！（轟咆） 私は名誉フランス人なので当然返事は返さない（使命感） 因みに日本のローマ市民であり、秦の民であり、ウルクの臣であり、オプリチニキでもあるのでこの所よろしくお願いします（怪人二十面相）

「で、僕がアマデウス、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト。天才さ。宜しく願いますよ、諸君」

という事で、この特異点のもう一組の案内人がご登場です。オルレアンで一番大好きなコンビでもあります。皆も好きかい？ 僕は大好きさ！（チャー研）

「それで、皆さまのご用事はなにかしら？」

今回はここまでとなります。ご視聴、ありがとうございました。

## 騎剣強襲 その一

皆さんこんにちは。ノンケ（スーリヤの子）です。

前回はジャンヌオルタと衝突中にマリーさんと合流、見事戦線から離脱してきたところ迄です。可愛さならもう向こうの比じゃないくらい戦力が揃いました。イケメン度数だとヴラド公やまだ見ぬイケメンが居る分まだまだ勝負は分かりませんが、こっから巻き返していきます……何の話をしてるんですかね。

『——以上の状況分析から、僕はまず、発見した霊脈にサークルを確立するのを優先するべきだと思うよ』

そんなバカみたいな話を私がしている間に、ドクターが方針を示してくれました。霊脈のある森へ向かうみたいですね。

「ではえっと、マリーさん？ もそれで宜しいでしょうか……」

「マリーさん！ ですって！」

「あ、あのすいません！ 何かお気に障るようなことを……」

「とても可愛らしいわ！ 羊さんみたい！ ぜひそう呼んでくださいね！」

「は、はい」

めっちゃマシユちゃんが追い詰められててかわいい……可愛くない？ 美少女の絡みつてのはそれだけでも心が癒される。ハッキリ分かるんだよなあ。名誉フランス市民でありマシユのファンでもあるから癒しは更に加速する。

「おいおいマリア。あんまり興奮してその子を困らせちゃいけないよ」

「あ、あらゴメンなさい……私、つい舞い上がってしまったって」

「いえ、大丈夫です。ちょっとびっくりしましたけど」

＜マリー・アントワネット。史実から抱いたイメージとは少し違う、少女のような天真爛漫さに、先程の戦闘の緊張感が薄れていくのを感じる。

「そして、そちらが……ジャンヌ。ジャンヌ・ダルク。我がフランスを守らんと立ち上がった聖女。生前より、お会いしたかったわ」

「ど、どうも。マリー・アントワネット王妃。えっと、私は聖女ではな  
くて……」

「マリーさん」

「え？」

「マリーさん、又はマリーと呼んで。そうじゃないと返事しないわ」

「は、はあ……じゃあ、マリー」

「ええ、宜しく！ ジャンヌ！」

ああ〜！ くそッ！ 尊いッ！ 尊いッ！ 尊いッ！ 尊いッ

！（J O J O） こんなに尊い行動して、誇らしくないのかよ？ え？

唯話してるだけ？ 私の耐性がないだけ？ 否定はしません（その  
時意外に素直）

「それにそちらのマスターさん二人も。こんにちは！」

「あ、こんにちは。えっと、藤丸立香、です」

〽 本造院康友だ。宜しく、マリーさん

〽 本造院さんと呼びたまえ、レディ。

だから上だつたつてんだろ（激ギレ） なんだってそう teme は A  
NSNIN さんに対して執着しかねえんだ。もしかしてあの子の事、  
好きなのか？

「立香に、康友ね。よろしくお願いするわ！」

「……はい、よろしく！」

〽 ちよつと緊張したように見えた立香だが、それでも少しすればそ  
んな素振りを一切見せない。つくづくコミュニケーション能力が高  
いな、と貴方は思う。

藤丸君一番のスキルだと思います正直。コミュ力は。どんな相手  
にもズケズケ物言えるのは一種どころかハリケーンな才能なんだよ  
なあ……

「それにそちらの方々は」

「レオニダスと申します！ クラスはランサー！ よろしくお願いい  
たします、マリー・アントワネット王妃！」

「紫式部、と申します。クラスはキャスター。どうぞ、よしなに」

〽 サーヴァント達が名乗った時、レオニダスの名に反応したのはマ



リー、紫式部の名にはアマデウスが反応した。

「まあ、まあまあ！ あのスパルタの硬き王、レオニダス一世！ お噂はかねがね！」

「ほう、我が名をご存知でしたか！」

「当然ですわ。私、本を読むのも好きで。ペルシヤの大勢を僅か三百人で押し返した大物食い、男の子でなくても、心が躍りました」

「そう言つて頂けると何より！」

「レオニダスをキラキラとした瞳で見つめるマリア。それに対し、アマデウスが香子に示した反応は、実に紳士な物だった。

「……ふふ、なんとまあ。こうして死んだ後に、世界最古の小説を描いた大文豪と、こんな奇妙な場所で出会う事になるとは。汚泥の如き人間の中で、なれど美しきものを生み出す事を諦めなかつた人。はじめまして、ヴォルフガング・アマデウス・モーツアルトだ」

「そ、そんな！ 頭をお上げくださいモーツアルト様！ あ、貴方様の大偉業に比べれば私のやった事なんて大したことでは……！」

誰だコイツ（困惑） あれ？ マーリンとグランドクソ野郎の椅子を奪い合うようなロクデナシ、モーツアルトは何処へ行った。もしかして芸術系サーヴァントには比較的アタリが弱いとか？

『流石にこんなちよつとした事で手折れそうな、めつちや感受性の高そうなマダムに普段のペースで対処はしない。それくらいの常識はある。他の芸術家系よりもそれなりに配慮が出来る男だからな僕は、とモーツアルトは嘆息した』

……ヌツ（絶命） 最悪のタイミングで、最悪の技がさく裂しました。ああ式部さんも思わず顔を覆っています。えつと……反応的に見えてるのはホモ君とマリーさんだけみたいですね。

「……アマデウス？ 貴方、そんな技、何処で身に着けたのかしら？」  
「ん？ 何のことだい？」

「とぼけてもダメよ。だつてそこにモゴモゴ」

「速攻で香子がマリーにとびかかり、その口を封じる。申し訳ありませんと凄いい勢いで頭を下げながら、香子は下がっていった。流石にそれを放っておく気にもなれず、貴方も二人を追う事にした。」

えーつとですね。さっきのアレですが。めっちゃ分かりやすく言うとうと香子さんの第三宝具ですね(大嘘) 真面目に言うとうと『制御の利かない心の暴露能力』です。一発で分かるこの恐ろしさよ。

「えつと、つまりあれは」

「……申し訳ありません……本当に……申し訳ありません」

香子さんが真つ赤です。可愛い(小並感)

〈〈なんて恐ろしい能力だ……

〈〈俺の思考も見た事ある？ もしかして。

……あつ。下なんだよなあ(かつての疑問) そういえば香子さんと初めてじっくり話した時、そんな感じの反応してましたよねえ(ねつとり)

「ほ、本当に……申し訳ありません！」

〈貴方は、自分の顔が少し赤くなったのが分かった。思考が読まれる、というのはこういう気持ちなのか。知りたくもあり知りたくもない、なんともいえない気持ちだった。

まあ香子さんを仲間にしてるとこういう事もあるって感じですよ。まあ特に問題がある訳でも無い(大嘘) 能力なので、気にしないで行きましょう(寛大)

アマデウスが不思議そうな顔してるのもスルー。で、もう一人自己紹介してない方が居ますけど(余計なお世話)

「あの、それでそちらの美しい髪の方は」

「ライダーです。それでは……」

「あの」

うーん此方の反応は結構クール。でもライダーさんって割とかわいい系の美少女好みなのだった気がするのですが、あまり反応は芳しくありません……まあ、後々仲良くしてくれたら嬉しいですねえ！

さて取り合えず近場の見所さんは終わったのでカ……ットオ！(BRLY)します。長い長い、もう夜なんだよなあ……とりあえずその間にあった重要なポイントとしては『マリーやアマデウスみたいな野良サーヴァントが特異点解決する為に呼ばれてるから探してもいいかも?』、位です。

「サークルの設置は終わりましたし、皆さんの自己紹介も終わりました。そうしたら」

『次は向こうのサーヴァントへの対策だね。正直、一筋縄じゃ行かないぞう』

「僕も同意見だね。頭数じゃこつちが勝ってるかもしれないけど、正直それでもアレ等との差を埋められたとは思えないなあ」

さて初っ端から悲観的な言葉が飛んできましたが問題ありません（大嘘） なんとかしたいねえ……

「広い範囲に杭を展開する、男性サーヴァント。巨大な拷問器具を利用する女性サーヴァント、どっちも強敵。特に男性の方の杭は、マシユとレオニダスの二人がかりじゃないと止められなかったと思う」

あ、因みに 【悲報】こちらはヴラド公、カーミラさんの真名を知らず【無知】

一騎打ちじゃなくて乱戦だったからね、仕方ないね（意気消沈）

「そしてあのセイバーと思われるサーヴァントは、マリーさんに過剰な反応を示していました。生前のお知合いですか？」

「……ええ、恐らくは。彼はデオン。シユヴァリエ・デオンよ」

『デオン・ド・ボーモン卿か！ ルイ十五世が設立した諜報機関で活躍したスパイにして竜騎兵、こりやあともない大物だ』

という事で、こちらが現状所有しているのはデオン君ちゃんの情報だけです。情報戦が弱すぎる（直球）

「それに……あと一人」

「——あの女性のサーヴァント。それに関してなのですが……」

◇メドゥーサ、何かある？

◇もしかして、同じライダーだったり？

上だよね（伝統芸能）

「はい。恐らく、アレは私と同じライダーではないかと思えます」

「分かるのですか？」

「ええ。戦場で適当に暴れていたあの巨獣。アレは、あまり積極的には暴れず、あの女性の周りを守っていたように見えました」

「……彼女がその巨獣を従えている、という事ですか？ メドゥー

サ殿」

「可能性は高いかと。そしてあの巨獣は、個人的には、相当な脅威ではないかと思えます」

メドウーサさん有能つすね……（感心） まあ初代から戦闘も頭脳もどつちも優秀ですからねメドウーサさん。こういう序盤では凄く助かります。終盤でも凄く助かります。つまり凄く助かります。

『その仮称ライダー、確かに気になるね……よし、先ずはそのライダーに関して、現状持っている情報から、対策と予測を——』

「いや……そうしている余裕はなさそうだな。ゲロでも吐きそうなの、闘争の音がする」

おや？

「——いい耳を持つてる奴がいるじゃない」

こ、この声はっ！

一体だれが来たのか、次回に続くという事で今回はここまでです。ご視聴、ありがとうございました。

## 騎剣強襲 その二

皆様こんにちは、ノンケ（恋する白鳥）です。

前回は、マリィ、アマデウスと合流、交流し、その後作戦フェイズに入った直後に作戦立てる暇も無く向こうからカチコミかけてきました。血の気が多すぎないか？（困惑） まあカチコミかけて来た人が人なんて仕方ないと思いますけど（諦観）

「あの時の……！」

「ええ。私は壊れた聖女の……いいえ、竜の魔女の使いっ走り。けど、微かに残った理性が囁くのだよ。貴方達を試せ、と。ごきげんよう皆さま、良い夜ね」

という事で来ました。バーサーク・ライダー。皆さん誰かはもうお分かりでしょうけど今は伏せておきます（遊戯王並感） やっぱり伏せ札っていうのはここぞと言う時まで取っておくものだよ（ドウエリスト並感）

▽貴方達の前に、まるで散歩でもしていたかのようにふらりと現れた女性。そしてその後ろに現れる、巨大な亀の様な怪物。間違いない、あの竜の魔女と共に居た、あのサーヴァントに違いなかった。

「俺達を、試す？」

「ええ、そうよ。あの究極の竜種を倒せるかを……私、マルタがね——」

『聖女マルタ！ あの悪竜タラスクを祈りのみで鎮めた伝説の……つて事は、あの巨大な怪物はそのタラスクか！』

伏せ札が一ターンも持たなかったんですけど（激ギレ） もうちよつと遠慮というか余裕をもって名乗ってくれよなく頼むよ（懇願）

「とまあ、試すだけのつもりだったのだけど」

ん？（確変）

「もう一人、付いて来てしまったのがいるのよ。それに関しては……ごめんなさいね」

「——見つけました。王妃」

ヌツ！（確認） ファツ!?!（崩壊する原作） んんんん（状況把握）  
ンアアアアアアツ！（難易度UP） なんでデオン君ちゃんまで来て  
るんですかね……?？」

「あの吸血鬼に、翩られるような真似は……けっして……!」

＜先ほど自分が一瞬、交戦したセイバー。だが、明らかに様子がおかしい。まるで獣のような形相でこちらに視線を向けている。理性と呼べるものは、もう見えなかった。

「デオン……貴方」

「やー、これは振り切ってるね。聞こえる音がもうグチャグチャだ！  
アレ、マリアに近づけたら間違いなくヤバい事になる!」

でしようねえ！ 明らかにバーサーク化が進行してないか？ この  
ままだとメガロスもびつくりな超変身するんじゃないでしょうか  
デオン君ちゃん。止めなきや（使命感）

＜立香、セイバーは任せろ。

＜立香、セイバーは任せろ。

上だよ（決戦） もうさっきの突撃を阻んだ時点で因縁は結ばれて  
るじゃんアゼルバイジャン。だったら相手しなきやウツソだろお  
前www

「ああ！ あのライダーは、俺達で倒す。頼むぞ!」

＜立夏がライダーへ向けて走っていくのを横目に、マリーとセイ  
バーの間に、貴方は立った。傍らには、メドゥーサが。

「君は……ランサーが言っていた……退け、狙いは君じゃない」

＜嫌だね。押し通ってみろ。

「っ！ どけえっ!」

という事でデオン君ちゃんの絶叫アップ顔からバトル開始です。  
ほんへどおりワイバーンもちやつかり連れてきてるので数では負け  
てますが、サーヴァント数では負けていませんので確実に勝利を目指  
しましょう。

「では、東と西、夢のコラボレーション第二幕と行こうか」

「はい……! 先ほどの無礼のお詫びも兼ねて、全力で参ります!」

「いやだからその無礼、僕知らないんだけど?」

〈後方から音と言の葉が響き渡る。戦闘開始と同時にサーヴァント、ワイバーンと敵の全てに響き渡った狂奏が、その力を奪う。

おっ、デバフは継続でかけてくれるようです。いい援護してんねえ、道理でねえ!

という事で配置は決まりました。援護組の香子さんとアマデウス、そしてマリーさんを後ろに下げて、藤丸君は頼もしいサーヴァントのお三方と一緒にマルタさんとガチンコ。ホモ君はデオン君とタイムン、全体のワイバーン処理と援護をメドゥーサさんです。

〈貴方は目の前の騎士に向けてバットを構えた。それぞれに役割がある上、殴り合いに強いデオンの相手を真つ向から出来るような、ケンカに多少の慣れのあるのは自分以外居ない。

「マスター! 苦しいと思ったら直ぐにお引きを! 後は私が引き受けます!」

〈香子の言葉に、一つ頷いて返す。それでも、貴方に退くつもりは無い。自分が果たす役割を、放棄するつもりは毛頭ない。

さてホモ君とデオン君ちゃんの一騎打ちに入りましたが……別にそこまで心配してません。これに関しては、正直無茶な一騎打ちとは呼べません。

「……この、歌と、呪詛が……っ、それに、想像以上に動きも……っ!」

〈アマデウスと香子の妨害が、相手の動きを致命的に鈍らせている。幾ら魔術世界最高峰の力を持つサーヴァントとはいえ、同じサーヴァント二騎からの妨害を受けては、力を十全に発揮することは出来ない。そして――

「――下手に動いて隙を見せれば、石化の餌食」  
「っ!」

「しかし、だからと言ってマスターと戦いながら様子を伺ってればいつまでも王妃に辿り着けないばかりか、ライダーが倒され一網打尽に会う……さあ、好きな方を選んでください」

はい。ぶっちゃけデオン君ちゃんは大分詰んでます。

〈アマデウスと香子の妨害、メドゥーサの魔眼、二重の動きの封印が、シユヴァリエ・デオンと貴方を、この場限り拮抗させていた。

魔力とか気にせずタラスク大暴れさせてるマルタさんと違って、幾ら強いと言ってもデオン君ちゃんはどうしたって個人。複数の妨害を受けてたら自由に動けるわけない……わけなくない？ 剣を使っでの攻撃も、大分鈍いですね。今のステータスのホモ君でもギリギリ対応できています。

という事でデオン君ちゃんには良い感じの練習相手になってもらいます。サーヴァントとのタイマンは良い感じの経験値になるから多少はね？

「くっ、僕が、王妃をつ……なのにつ！」

「悪いが、ここは譲れない。」

「さあ来い、俺を殺して見せろ。」

上だよね（優先） 下とか何処のワノ国のKIDUなんですかね……というかホモ君がそんな事言ったら秒で殺害されると思うんですけど（名推理）

「つ……邪魔を、するなあっ！」

つてあ、そう言えばデバフ解除スキル持ってましたねデオン君ちゃ……あかんまってこれじゃホモ君がしぬう！（弱気） 下みたいな選択肢用意するからこういう事になる、分かる？ この罪の重さ。ここは鬼種の魔ブースト発動一択。当たり前だよなあ？

冬木でも発動していましたが、今回は回避率上昇を狙っての発動です。様々なステータスに瞬間的に補正が掛かるのでいろいろと便利です。ね。

「死が目の前に迫る。ここで終わるのかと貴方は自らに問いかけて……否定した。咆哮と共に飛び下がり、バットを振り払う。剣の横腹を僅かに弾き、切っ先は心臓から肩口へ。」

「何ッ!? その動きは……」

「まさに奇跡だった。バットの衝撃でそれた切っ先は、一步下がった事で浅く左の肩口を捉えただけで終わったのだ。一步間違っただらば、死んでいただろう。」

あつぶえ！ ギリギリ回避できました。なおダメージはたっぷり入りました（絶望） サーヴァントの攻撃って痛いんだよお！ もう



ちよいで逆境発動しそうなんだよなあ……（戦慄）

しかし此方で時間稼ぎをしている内に、どうやらマルタさんの方は決着が付きそうです。

「レオニダス！ マシユ！ 合わせて攻撃を！」

「はい！」

「承知しました！」

おお、マシユとレオニダス王のシールドチャージVSタラスクとかスツゲエ貴重だぜえ？ ちよつとここだけ録画を……録画禁止圏内でした（ぶち切れ）

あ、バカやつてる間に藤丸君がマルタさんにタツクル！ 一瞬揺らいだ所にジャンヌが旗の先をマルタさんの胸へ……！

「……見事ね。ええ、合格よ。アンタ達」

そしてジャンヌの旗の一撃が止めだったようです。マルタさんが消滅を始めました。お見事……お見事にございます！

「つたく、聖女に虐殺させんじやないわよつて感じ。ありがとう。良い根性してたわよ」

「つち、ライダー……っ！」

「後はお前一人だぞ。」

「さあこい。まだ味方が一人やられただけだろう。」

だから上だつつつつてんだろ！ いい加減にしろ！ 下とか混沌・悪とか以前にどこぞの神父なんだよ、分かる？ この罪の重さ。

「王妃、貴女を、汚させはしません……何れ、必ず僕の手でっ！」

「一瞬、周辺を見回し、セイバーが森の奥へと走り出す。それを止めようとしたメドゥーサにデオンは、近くを飛んでいたワイバーンの喉首を引き裂いて、血を撒き散らした。メドゥーサが怯んだその僅かな一瞬で——

「っ！……逃げましたか」

「——シユヴァリエ・デオンはその場より逃走した。」

……無事マルタさんは倒せましたが、デオン君ちゃんも逃がしてしまいました。この後何処でも現れるお邪魔キャラとかにならないといいんですけど（戦慄の想像）

今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。

## 特異点に行く その一

皆様こんにちは、ノンケ（愛憎ロマンス）です。ギューツつてきたくない？

前回はマルタさん襲来、そしてデオン君ちゃんが不穏な雰囲気を残して撤退しました。マジであるまま突発タイプの襲撃イベントキャラとかになるのはマジでNG。オルレアンの難易度が爆上がりしそうですねだよなあ……

「マスター！ あれほど無茶はしてはいけないと申しましたのに！」

お慈悲い〜〜→お慈悲い〜〜→ 香子さん許し亭許して……しよ  
うがなかったんや！ 前衛は全員タラスク君とスマブラ（誤字に非ず）してたから仕方なかったんや！

「幸い、傷は浅いですけど……！」

『本造院君は戦線離脱だ。これ以上の無茶は許可できないよ……』とはいえ、あの最後のセイバーの突撃を凌いでくれたのは本当に助かった。多分、アレが成功してたら此方の陣容は崩壊していたかもしれない』

もつと褒めてもええんやで（歓喜） とはいえ包帯で治療しないと普通に死にますね間違いがない……

「包帯よりも私の宝具を！ 多少の傷であれば、治療も可能です！」

『ええ!? マリー王女の宝具ってそんな事できるんですか!?』

「少々と目立ってしまいますけど……今、そんな事を言っている場合ではありませんわ。『百合の王冠に栄光あれ』！」

〈マリーの呼びかけに応え、虚空より現れるのは雄々しくも煌めく、ガラスの馬。高く嘶きを上げて、貴方の傍らにゆっくりと腰を下ろした。その途端に……傷の痛みが鈍くなったのをはつきり感じた。

あ、そう言えばマリーさまってそんな宝具持っていましたねえ！ 流

石王妃様アーイイ アーイイヨイヨイヨイヨイヨ

「けれど直ぐに回復できるわけではありませんので……康友は、しばらくお休みね」

ファッ!? あ、おい、待てい（素）それ以上はいけない（孤独のグ

ルメ) 一応ホモ君もマスターだし、戦力もなるし、何よりも見所さん!?! が減るから休息だけはお姫さん許して! 見所壊れちゃ〜う!

「分かりました。康友、安静にしてろよ。回復したら、また合流してくれ」

「やっさんが居ないのは少し寂しいですし、戦力的にも多少辛いものがあります。大丈夫です。何とか頑張ってみます!」

「その、あまり無茶はなされない方がいいとおもいます。大丈夫です。出来ないサーヴァントですが、私も彼らと共に戦いますので」  
〜どうやら、貴方はここで療養に努める事になるらしかった。

ポツチャマ…… (陥落)

こうなつては仕方ありませんね。休憩中でも何とかして見所さんを作らなければならないのが辛い所さんです。会話でつなぐのにも限度があるんだよなあ……

「それで……聖女マルタは、竜殺しを探すように言っていました。それ程の強敵を、あの黒い私は従えているという事なのでしょうか」

「それを知る為にも先ずはリヨンへ! という事ですな!」

「じゃあその間に、康友は療養だな」

残念ながらリヨンには居ないんだよなあ……まあそれでも情報を得るには必要なので、行かざるを得ないですよ。心配の種は怪人さんとの殴り合いです。まあ今の藤丸君なら何とかしてくれると信じたいです。

「宝具を使わないといけないから、私はここから離れられないけど……ごめんさい」

「マリアがここに居るなら僕もここに残るよ」

「マスターを残していくわけにもいかないので、メドゥーサさん、私は此方に」

「分かりました。カルデア式の召喚式に呼ばれた私なら、多少の単独行動も問題ないでしょう。藤丸の援護には、私が」

〜そうして、既に夜遅い事から出発は朝という事になり——かくして。翌朝、貴方を残し立香達はリヨンへと出発した。

こうなつては仕方ないです。藤丸君達を信じて、ここは大人しくホモ君が看病されてるところでも……ちよつと待って!?(戦慄の閃き) デオン君ちゃんの動きが不穏なのはさつき分かりましたが、それで襲撃される可能性が高いのつて、マリーさんと一緒に居るここなのは……?(名推論) え、待って、療養中のホモ君が一番危ないとかどういふ事なの……(レ)

「藤丸様達が、良き知らせを得て帰ってくると宜しいですね」

「まあそう上手くいくとは限らないだろうけど。人生なんて大抵酷い選択肢しか来ないもんだし。それだから面白いつて部分もあるんだけど」

「それは流石に悲観的過ぎよアマデウス」

「君は楽観的に過ぎると思うんだけどね、マリア」

美男美女しかいない中に目つきの悪いハゲ一人……ヤバい、顔面偏差値を一人で下げてしまっている(絶望) 藤丸君だったらこうはならなかったんですが。

「まあ兎に角、日本のコトワザ曰く、果報は寝て待て。だっけかマダム・式部?」

「あ、ええ。そうですね……」

「まあ、気長に待とうじゃないか。上手くいくことを祈つて、さ」

▽——全員居ればそうして祈る必要も、少しは減ったのではないか。自分が怪我をしなければ、こうして戦力を二分しなくても良かったのではないか。

それどころか下手すると怪人アサシンにボコボコとかもあり得るのがこのF G O R P G。そんなに高くないですが、独立行動だと確率で返り討ちに会うんですね。あんこスレで熱血歓迎俺達引く位には確率あるので油断は出来ません。

▽それは思いついた考えかとも思ったがしかし、実際マリーは、傷を癒すためこうして残ると言ってくれたのだ。自分が原因であることは疑いようもない。貴方は自分が情けなくて仕方がなかった。

▽ストレス値が上昇しました。

しかもホモ君のストレス値が上がってんよ(心配) 戦闘面では

鋼メンタルになった分、全然別の所であっさりストレスたまるんですよ。いや〜キツイつす、こっちの事情（エンジヨイプレイ）も考えてよ。

「……マスター」

〽その時だった。隣に、香子が腰を下ろしたのは。

「大丈夫、でしょうか。あまり顔色が宜しくない、と申しますか」

〽ありがとう。傷の方は順調に治ってる。

〽貴女のその心配の言葉が万の薬より俺の心に届きますよ。

上だよね（溜息） もう下とか唯のナンパ野郎なんですけどそれは。こんなチンピラ傷者ハゲがそんな事しても薄ら寒いだけだってハッキリ分かんだね。

「そうですか。それなら、宜しいのですが……」

〽彼女は、言い淀んでいる様にも見える。

〽何かあったのか？

〽……考えたい事があるから、これで。

上に決まってるんだよなあ！ 下とか選ぶ奴人間の屑なんですけどそれは。絶対「あ……」とか気まずい空気になると思いませんか？

そりゃあホモ君の悩みと香子さんの悩みだったら香子さんの悩みを優先するに決まってるんだよなあ。百人のホモが百人YESって答えると思います。ホモは情に厚い。

「その……先ほど、また、泰山解説祭が……」

〽……？ 泰山解説祭？

〽フランスにそんな日本風な祭りが……！

上だよね（呆れ） フランスにそんな気合の入った日本の祭りなんて存在する訳ないだろ、いい加減にしろ！ いや自由の国フランスであればそう言った祭りが存在している可能性も微レ存……？

「あ、その、先程申し上げた、心を読む力の、名前で……その、マスターの考えていることが、見えた、と言いますか」

〽そこまで言うと、香子は貴方の頭に手を置いた。

ハゲ頭に手を!?（ホモコップ）

「……マスター。自分を、責めないで、などとありきたりな事は申しま

せん。ご自分をすっかりと、責めましょう、そして、その上で」

〽頭を撫ぜながら、子供に言い聞かせるように、優しい声で香子は貴方に語り掛ける。

「傷つかないように。傷を負わないように。反省をしましょう。責めるだけで終わらないように。次に繋げられる様に。もう一度、立ち上がる為に」

おく、ええ（こという）やん。気に入った。人間っていうのは反省して強くなる生き物だって、それ一番言われてるから。

「大丈夫です。藤丸様達も、きつと無事に戻ってきます。悲観的に落ち込むよりも、前向きに、先を見据えましょう。マスター。私もついておきます」

〽香子の言葉に、貴方の目の前が一瞬滲む。情けない失態を見せたというのに、こうして慰めてもらうのが情けなくもあり……しかし、確かに嬉しくもあった。誰かに思ってもらえるというのはこんなにもありがたいのだと、実感できた。

〽ストレス値が、少し低下した。

〽ありがとうございます。本当に、もう大丈夫だ。

〽情けないところを見せた。詫びに猪の一匹でも

なんで選択肢でちよける必要があるんですか（正論） 当然上にするとして、若干ストレスを低下させられて良かった。こうやって交流するだけでもストレス値は下げられるから（エンジンプレイ特有のコミュパートは）やはりヤバイ……ん？

あつ（失態）

「い、猪?! そんな事する前に休んでください! もう!」

〽香子の平手が頭を打つ。最後に一言余計な事を言ってしまったよ。うだった。

こ、これ……事故だよ……（そんなミスするようなら実況）やめてください!（辛辣）ほんまひでなんだよなあ。悔い改めて、どうぞ。

「もう……」

「うふふ、仲が宜しいのね。お二人とも」

「……ええ。良いマスターです。ちょっと、やんちゃですけど」  
（優しい香子さんに）狂いそう…！（内なる歓喜）  
今回はここまで。っ視聴、ありがとうございました。



## 特異点に行く その二

皆さんこんにちはノンケ（子安キャスター）です。

前回は、目も当てられない駄作ぶりなホモ君を、香子さんが優しく慰めた（意味深）所迄でした。薄い本展開は一切なかったので立っているノンケ兄貴はご着席して、どうぞ。この実況プレイは全年齢対応（大嘘）なんだよなあ……

さて藤丸君と別れ、霊脈周りで傷の回復を図っているホモ君がもう回復してる！（ホモガキ）予想以上に傷の治りが早いっすね。さては宝具5やなマリーさん（ほんへ並感）

「良かったわ！ もう大丈夫そうね！」

「これで自由に行動できそうかな。と言つても僕らが行く先なんてリヨン、だっけ？ そこ以外ない訳だけど……」

『方が一各個撃破とかされたら冗談じゃないよね……僕は、藤丸君達の方が順調に旅を続けているから、それを待つのもおススメではあるけど』

戦力の分散はリスクを孕むってそれ一番言われてるから。あ、ロマーン兄貴はホモ君と藤丸君の両方をサポートしてるから、通信が繋がってる時と繋がってない時があります。今は繋がってますね。

＜実際、現状で下手に動くのは良策ではないが……貴方には、一つ懸念があった。

＜セイバーの言っていた事が、気になる。

＜このままここに居たら、危険な気がする。

（より具体的なのは）上だよね。

「……成程、マリアか」

「私？」

「そうだ。マリアがここに居る、という事は彼奴にもう割れている。ここでジツとしてたら何れ、全員あの世行きにされるだろう」

『ああ、そうかシュヴァリエ・デオン！ 彼はマリー王妃に執着しているような言動をしていた、彼がここをまた狙って襲撃して来ても何ら不思議じゃない！ ダメだ、ここにはいられないぞ……！』

〈そうだ。向こうには王妃を付け狙う狂気の騎士が居る。彼の行動を考えつつ、冷静に動く必要があった。であれば……

〉〈やはりリヨンに合流するしかないか。

〉〈こっちはこっちで頭数を増やしてみる、とか。

これは……ルート分岐じゃな？

上は原作ルートに途中合流。下は、カウンターとして呼ばれているサーヴァントとの合流を目指すと言った所でしようか。リスクを考えたら当然上なんですけど……ここは見所さんを生み出すためにも下だよ（修羅の巻）

「頭数……なるほど。カウンターとして呼ばれている方々を集める、と」

「それは良さそうね！」

『確かに。ただ根本的な問題は』

「ここに居る僕らが、そこに居るマスターを除いて悉く殴り合いに弱い事くらいか！ 行けるんじゃないか！ アハハハハハ！」

それは致命的な問題なんだよ、どうすんだよ……（TDN課題） 実際見所さんを求めて勢いで下選んでしまいましたけど、どう落とし前つけるんだよ。な、なんか……（この選択肢の道のりは）駄目だな……「けどこうしているだけでは何も変わらないわ、アマテウス」

「そう言われてもなあ……実際、絶望的な事は間違いないだろう。だってこの中でケンカ慣れしているのがマスター、強さ的には僕がドクケツ、マダム・式部と君も戦闘に慣れている訳じゃあない。強いて言うならマダム・式部がそれなりだろうけど……」

「……私も、微力ながら全力を尽くします……！」

「ほら見なよ、重責の余りジャパニーズ・ハラキリでもしそうな勢いじゃないか」

〈決して敵に見つかからないよう行動をするしかないだろう。貴方は結論付けた。今のメンバーでは、敵に見つかれば勝ち目はまずない。

止まるんじゃない。虫のように駆け巡るんだ（隠密） まあこのメンバーで隠密やれっていうのが無茶って話なんですけど、その辺りはやろうと思えば（王者の風格）

「目立たないように手早くって事かい？ やれやれ、休む暇も無い旅になりそうだ」

「でも、そういう忙しい旅も少しあこがれるわ。私」

「君はあの馬があるからいいだろうよ。僕ら三人は置いてきぼりにあうだろうけども」

馬による高機動……あっ（閃き）

ちよつと待つて、目的地リストに確か……ありました（完全勝利）

よし、行き先は決まりました。目的地は最初に襲撃のあった砦、ヴオークルールです。後はそこまで敵に捕捉されない事を祈りましょう（天任せ）

く移動は力……ツトオ！く

何度かワイバーンの襲撃には会いましたが、流石にトカゲ風情には負けずに無事砦に到着です。そして……確かこちら辺で各地のふらんすへをとある人がまじめ始める頃なので運が良ければここ←こも。

「あら、確かこの砦は……」

「人の気配もないけど、放棄された砦？ こんな所に何の用なんだい？」

「立派ねえ」

く 貴方は砦に向けて歩みを進める。本来は話し合いで譲ってもらう、最悪力づくでお借りしていくつもりだったのだが、ラッキーだったのか、アンラッキーなのか。

く 放棄されたか……あるかな。

く 最悪作る事になるかね。

下を選んだら日曜大工をさせられるんですかね……それは流石にNG。今からそんなスキル取り始めた日にや戦闘系マスターどころかTDN器用貧乏でフィニッシュ！ 痛いですねコレは痛い……

く 貴方は一縷の望みをかけて砦を見回したが……杞憂に終わった。拠点を捨てるという選択肢を取った時点で、拠点内の物資はある程度諦めていたのだろう。

「あれは……荷台か」

「それに、あらあら。お馬さんも！」

「マスターはもしかして、これを探しに？」

「まあ、足は必要だと思ったから。」

「うんにゃ？ 唯の勘。」

下は完全なご都合主義と間違われるだろルオ!? いやしかし、マジでラツキーでした。そうなんですよ。確かオルレアンはある一定タイミングからフランス軍の残党がある人物の元に合流を始めるんですよ。いやあ、それに乗じて火事場泥棒してみたんですけど。バチアタリしましたよ！ F O ！

「近づいてみてみれば、馬はまだ血色も良い。ここに立ち寄ったのがつい先日の事だがその直後に引き払ったのだろうか。」

「これは良いアイデアだ！ これさえあれば、王妃の騎乗スキルをフルに生かせるぞう！ フランスを縦横無尽だ！」

ロマニの言う通り、これさえあれば見つかったてもそう簡単には追いつかれないでしょう。普通の馬車なら微妙ですがこっちは騎乗A＋という破格（ライダーの基本）のスキルを持つマリーさんが付いています。クルルアにも匹敵する機動を維持できるでしょう。

「マリーさん！」

「ええ、マダム・式部！ 私、頑張りますわ！」

「急いで荷台と馬を繋げる。何頭かいたが、その中でも比較的走れそうな馬を二頭選んで貴方達は走り出した——しかし、その直後だった。」

「気を付けて！ 敵性サーヴァント反応が急速に接近してる！ これは例の……！」

「——逃がすかあつ！」

「その真正面、鬼気迫る表情の何者かが馬車をめがけて突撃して来る。間違いない、アレはライダー撃破直後に撤退した、あのセイバーだ。」

「ファツ?! ウーン……（絶命）（してる場合じゃ）ないです。やっべえ恐れていた事態が……！ デオン君ちゃんが彷徨うマリーさんゼッコロマシーンと化してしまいました。逃げてはいけませんよとか呟くデオン君ちゃんはみとうなかつた……（寂寥）」

「デオン!？」

「あのサイコセイバー、いよいよ殺人鬼染みて来たなホント!」

「——マスター! 令呪を! カルデアの令呪は回復すると聞きました! であれば!」

◇——令呪を持つて命ずる! 藤原香子! 宝具を開放せよ!

じゃけんそんなデオン君ちゃんはさつきと追い払いましたよねえ  
(キチスマ) 令呪装填速攻宝具! こ→こ←はホモ君のオルレア  
ン攻略の一つの分水嶺と見ました、大盤振る舞いで行きますよーイク  
イク

「はい……!——限りあれば 薄墨衣 浅けれど 涙ぞ袖を 淵となしける」

『源氏物語 葵 物の怪』

◇香子の宝具が、呪詛が。バーサーク・セイバーへと向かう。貴方の令呪のバックアップを受け、全開の出力。そして当然、これを援護する者もある。

「宝具ではないけど、僕の演奏も持っていきな! 流石にこれだけのモノに合わせるとなると、僕ですら若干苦労するけど……!」

そしてアマデウスとのコラボ。これで三度目っすねお二人さん。ぶっちゃけ妨害だけならこのお二人の相性はヤバいと思うんだよなあ……どちらも詩を使う職業だし、芸術家だしキャスターだしで。

「……っ、前とは出力が……っ!? だが、そう簡単には!」

「——いいえ、デオン。行かせてもらうわ」

◇それでも、彼は一瞬で不調を跳ね除けるだろう。この前、聖女マルタを倒した時のように。しかしその一瞬があれば十分だった。マリーの騎乗スキルによつて、とんでもない軌道を描いた馬車がデオンの真横をすり抜ける。

という事でこっちが態々デオン君ちゃんの必死の襲撃に付き合う意味は無いので逃げます。クヤシイカ? クヤシイ!! ダロ? f  
or Iphonee?

◇そして、鈍くなった体を立て直す頃には、既に馬車は遙か後方へバーサーク・セイバーを置き去りにしている。この距離は、追

つけるものではない。

「こりやあいいい！ 流石マリアだ！」

「ありがとうアマデウス！」

「香子さん、ありがとう。凄かったよ。」

「香子さん、ありがとう。今度は俺が突っ込むな。」

上だよね（怯え） 下を選んだらいいよ香子さんが何かに覚醒し  
そうで怖いねえ……

「いいえ。マスターの援護あつてこそです。こちらこそ、お見事でした。マスター」

興奮させてくれるねえ！ 好きだよ、そういう（笑）顔！ とはいえ喜んでるばかりもいられないですね。まさかマジでデオン君ちゃんが王妃殺害マシーンと化すとは……オルレアンの難易度が爆上がりした気がする……気がしない？

「でも、デオン。こんな所まで追いかけて来るなんて」

「こりやあ迂闊に街には長居出来ない。サーヴァント探しも、楽にはいかないだろうな」

「それでも諦めるといふ選択肢は無しよ、アマデウス。さあ、行きましょう」

とはいえマリーさんの言う通り。実況者に諦めるといふ選択肢はありません。FGORPGをクリアするその時まで、止まるんじやねえぞ……

と言った所で、今回はここまでとなります。ご視聴、ありがとうございました。

## 特異点に行く その三

皆さんこんにちは、ノンケ(ありす)です。救いが欲しいんだよなあ……

さて前回は思い切って此方も単独行動する事に致しました。藤丸君達の合流を待った方が良いんじゃないかって？ ヘーキヘーキ、向こうも合流する余裕なんてないでしょうし(千里眼) 強く当たって後は流れでいいだろ上等だよ。なおデオン君ちゃんに強く当たったら首がポーンです。

さて馬車での移動でどうにかデオン君ちゃんをぶつちぎりましたが、下手すると追いつかれそうなのでマリーさんには出来るだけ飛ばしてもらいましょう。

「つたく、コレだから真面目過ぎる奴は嫌なんだ！ 悩んで苦惱して、結局最悪の手段選んでたら世話も無い！ マリアを助けようとして殺そうとするとか、ヤバすぎるだろう!？」

「兎に角、デオンに出会わないように動かないといけないわね」

＜貴方と香子も、マリーの言葉に首肯する。戦える戦力はほぼ向こうに回している。状況に即しての判断だったとはいえ、今の自分達は対抗する手立てを持っていないまま逃げ回っているのだ。

デオン君ちゃんの扱いが、他からも黒塗りの高級車並で草。実際、バアン！（迫真）なんて追突でもしたら間違いないく示談の条件を突きつけられるまでもなく全員の末路は決まってしまうので、デオン君ちゃんは悔い改めて此方に寝返って(ささやかな願い)

「でもデオンは……私っていうより……」

「ん？ どうしたんだいマリア」

「……いいえ、なんでもないわ。デオンに出会わないようにサーヴァントの情報を探す、だったわよね」

そうですね。やっぱり、緊急性のある、殲滅型の敵(奇妙な供述)……なんで。味方は多いに越したことはありません。

『そうなると、最低限の行動でさっさと動き続けるのが良いかな。情報収集も手当たり次第に、というより、ある一点、情報を集めやすい

場所を狙ってやった方がいい気がする』

「となりますと……人通りの多い、街道などが良いのでしょうか」

「街道沿いに移動し続ければ敵にも出くわし難いかもしれない。見つからないように情報収集を行うなら中々に適した場所ではないだろうか。」

「いいんじゃないかい？ 僕は異論ないよ。っていうか、それ以外に思いつかないし」

「道沿いに人を探すのね！ 任せて！」

お二人からも承認を得られたのでじゃけん向かいましようね。さて、到着するまではカ……ットオ！（BRLY）

「着いたわよ。後はここを道なりに行けばいいのかしら」

『お願いしますマリー王妃』

「荷台の上から、貴方達も四方を見回しつつ馬車は動き出す。セイバーへの警戒、旅人の搜索、それにもしワイバーンなどが居れば、それにも対処せねばならない。」

話の途中だがワイバーンだ！ がまだ出てませんからねえ。藤丸君には間違いなく襲い掛かっているであろうそれも、ホモ君に出てこないとは限りません。FGOを象徴するフレーズなんだから、早く出てどうぞ（欲しがり）

「いやーしかし、こうして見ていると、ここが滅びを迎えそうな国とは思えないくらい長閑だ。<sup>のどか</sup> 退屈のぎに一曲書き上げてしまう位には、なんも面白みも無い光景だ」

「平和なのが一番よ」

「まあ僕らは平和なのが一番良いくらいには弱いけど……」

「だが、アマデウスの言う事にも一理ある。こうして周りを見回しているが、今は特に見つかるモノも無し。ここは戦乱の土地だということに、あまりにも平和な景色だ。一瞬、自分はただフランス旅行しているものだど勘違いしてしまいそうになる。」

そりゃあ四方八方に幾らでもドバーツとワイバーン展開できるわけじゃないでしょうしねえ。っていうかそんな事したら特異点こわれる（確信）



「<<こうやって、落ち着いて景色を見るのは久しぶりな気がする。」

「<< 退屈だ……俺の手は闘争を求めているというのに。」

もうお前は格闘家グラップラーにでもなればいいじゃないですかね……（選択肢下） 当然ながら上なんだよなあ。

「そうですね。カルデアは、景色を眺めるといふのには不向きでしたし。最初の特異点はそもそも燃えていましたから、景色も何もありませんし……」

「大変なのね、そちらも」

「大変っていうレベルはとづくに超えてると思うけどなあ、僕は」

「<カルデアの中で休んでいるのとは明確に違う。開放的な気分。貴方は周辺に目を向けるのも忘れ、完全にリラックスしてしまっていた。」

まあホモ君も人間ですし、こういう景色見てリラックスするのもご褒美やろ。しかしこっから第一村人が見つかるまで全部カット……というのも味気ないですし、毎度毎度それでも芸がないので、折角ですし特異点Fで出来なかつた、サーヴァントの皆さんとの交流でもイクヨイク！ 早速話しかけてみましょう。

「<とはいえリラックスしてばかりでも、重要な物を見逃すかもしれない。適度に集中を保つために、貴方は、あえてアマデウスに話しかけた。」

「ん？ なんだい？ まだ第一村人は見つかつちやいないが」

「<アマデウスとマリーさんって、どういう関係なの？」

「<< 一曲作って歌ってくれませんか？」

いやそんな無茶振りしなくていいから（良心） いくら話題に窮したとしてもその手の無茶振りはやめなかい！ 後、アマデウスの甘酸っぱい思い出が聞きたいっていうのもありますので上だよな。

「んー？ まあ隠す程のものでもない、親しい友人だよ」

「プロポーズもされたくらいなの、ね」

「スウ……マリア、君ね、そんな馬鹿正直に話さなくても……」

「ぶ、プロポーズ?!」

「そうよ?」

「<マリーはなんて事のないように言ったが、貴方と香子にとっては結構衝撃の一言だ。振った相手というのは、普通はそんな朗らかに言えるような事じゃあないと思うのだが。」

「マリーさんはそういう思い出はとっても大事にしてらっしゃいますから。」

「とつても熱烈な言葉をくれたの、アマデウス。今でも大切な私の思い出なのよー!」

「——まあ、マダム・式部が物語にして綴る程の大恋愛でも無いし。まあ、ごく普通の、当たり前前の振られ方をマリアにされたんだよ。僕は」

「された、つて。ちよつと意地悪な言い方じゃない?」

「全力の告白で、結構ナイーブな部分だし、触れられたらちよつと意地悪にもなるよ」

とぼけちゃってえ……そう見えて意外にもすっごい大事な思い出にしてそう(小並感) まあマイナスには考えてないと思いますけど。この二人の関係って結構複雑だけど、それでもいい関係を保ってるの本当にエモいと思った(オタク並感)……まあ、もつと複雑な相手が二人位いるんですけどね、初見さん。そして更に歪んだ関係を作りそうになってるセイバーも居るんだよなあ……(悲哀)

「<それでも仲が良いんだね。」

「<告白した時のセリフって?」

聞いてやるなよ……そんなセリフ一生心に秘めておきたいでしょうが……ほんへで確認できるから気になる人は確認してみてくださいさい。マジで熱烈なセリフなので(ド鬼畜外道野郎)

「ええ。私は、アマデウスとこういう関係になれた事、本当に嬉しいのよ。告白されたのも、同じくらい本当に嬉しかったけど……私、婚約相手は自分で選べなかつたから」

「そう言ってくれるのはありがたいけど、だからって喧伝するのはやめてくれ」

「? もう告白された時には、嬉しくて周りに教えて回ったけど?」

「君って奴は魔性の女だなホント!」

〈その時の思い出は相当ナイーブな部分である、とアマデウスは自分で言っていた。けれど彼はそんな思い出があるにも関わらず、そんな素振りを見せず、マリーに協力している様に、貴方には見えた。

〈成程、男だね！ アマデウス！

〈お主の心意気、痛いほどわかるぞ……！

男つてのは不器用つてそれ一番言われてるから（選択肢上） 下はちよつと和に傾倒しすぎじゃないですかね。ホモ君が言ったら似合いです、キャラがぶれるのでNG。

「——そんな事ないさ。単に、忘れられないだけだ」

「？」

「マスター？ ……あつ」

一番理解して欲しい当人がハテナマーク浮かべてて涙ちよちよぎれそう（悲哀） やっぱり恋愛つていうのは一筋縄ではいかんもんなんやな……すれ違いなんやな……後、香子さんは黙つててあげてね（慈愛）

「なに？ 何の話？」

「あ、マリーさん！ 前、ちよつとデコボコしてますから、運転に集中を……！」

Nice Assist（ネイティブ） 香子さんありがとナス！

〈香子がマリーを引き付けている間に、貴方はアマデウスに向き直った。マリーとの思い出を、聞かせて欲しい。貴方の友達の事を。そう、貴方は言った。

「……聞く必要、あるかい？」

〈貴方とマリーの事が知りたい。ここで一緒に戦う仲間として。

〈男同士の俗な世間話さ。同情させてくれないか？

……下だよ（方針転換）

「は、同情なんて真面目からいう奴がいるかよ……ま、世間話つて事なら、ちよつとは話しやすいし構わないさ」

聞かせてくれよなあ……アンタのホレた、女の話だよ。

と言った所で、今回はここまでとなります。ご視聴、ありがとうございます

ございました。

「あ！ 旅の人！ みつけたわよ！」

「……つたく、マリア。君って奴は」

……じゃ、情報聞き出そうか。(悲哀)

## ティーエルにて その一

皆さんこんにちは、ノンケ（牛女）です。衆生無辺誓願度（小声）  
前はアマデウスとマリアの事を聞こうと思って色々とした結果、  
最後にマリーさんに目的の第一村人発見されて全てをぶち壊されま  
した。やっぱり何よりも強いのは、天然なんやなって……仕方ない。  
アマデウスの淡い思い出は、今度聞くとしましょう。

さて、只今ホモ君一行を乗せた馬車は、街道を行く人から聞いた情  
報で只今ティーエルに向かっています。マリーさんがニコつてする  
と大抵それだけで情報のセキュリティアランスがガバガバにな  
るんですよ……色事師の異能持ちですね間違いない（サタスペ）  
「此方の町で、変わったお姿の二人を見かけた、というお話でしたが  
……」

『本当だ。サーヴァント反応を見つけたよ。いやあ、本造院君の選択  
肢が吉と出たね』

「正直な話をすれば、貴方にとって、動いたのは大きな賭けではあつ  
た。いざその賭けに勝ってみれば、喜ぶというより、ホツとしたとい  
う気持ちの方が大きい。」

「じゃあ早速行ってみましょう！」

「……なんだろう。物凄い嫌な予感がするんだけど。あの、僕だけ町  
の外で待ってるってのは無しかい？ 予感ていうか耳に焦げた泥土  
を流し込まれるような、クソツたれた嫌な感覚が今もしていてさあ、  
ね？」

「デオンが何処に潜んでいるか分からない。ここは一緒に行動しよ  
う。」

「<<そこまでいうのなら……」

上だよ（道連れ） 君は一緒にこの先でライブを聞くんだよ！（死  
の宣告） ああ逃すことは出来ない！（カルマの連鎖） あ、抵抗して  
ますね！ わかる？ 突っ込め。突っ込めって言うてんの、ね!? 突っ  
込めって言うてんだYO！

「ええい分かった分かったよ！ ……女神達よ、僕にどうか加護を授

けたまえ……」

アマデウスが神に祈る貴重なシーン。まあそれくらい濃いキャラのコンビがこの先に居るからなのですが。ここでちよつとホモ君は不穩です。というのも、この先に居るお二人の内、片方が坊主に大分ビンビンビン感なんですよねえ……ホモ君はただのハゲですけど。

「あら、通りの中央から……」

「怒鳴り声、でしょうか」

「ああ、しかもこれは……その中でも特別酷い、キャットファイトの類だぞ……！ もうこの時点で大分吐きそうなんだが……マジで帰っちゃダメか僕」

あ、アマデウスが！ あの藤丸君からクズと呼ばれるほどの凶太さと面の皮の厚さを誇るアマデウスが既にダウン寸前。しようがないね（同情）

「全くこのカナヘビィ！ もう許せない、焼いてステーキにでも変えてやるわ！」

「……安珍様への捧げ物として、竜の肉で拵えた御膳というのを思いつきましたわ」

「……も、物凄い勢いで言い合いをなさっていますけど」

「流石に、アレを仲裁しろ、というのは……私に出来るかしら」

＜無茶を言い出したマリーを、貴方は止めた。あそこで言い争いをしている二人は、もう理屈で止まる段階を過ぎている様にも見えたらだ。

過ぎてるところかオーバランした拳句ビンビンでいらつしやるんだよなあ。（仲裁を）くわえてさしあげないと（義務感）冷えてくれよなあ

「……あれは、僕たちが止めないと。あれ以上は音という宝、声という財産を汚物で凌辱するみたいな暴挙だ！ ああ畜生やってやる！ 今、ちよつとマリアに遠慮している余裕はない！ 僕も本領を發揮してやろうじゃないか！」

＜なら和服少女は任せていいか？

〈ならツノツキ少女の方は任せる。

……よし、ここは危険を避ける為にも上だよね（危機察知）

「シヤアアアアアアアア……あ？」

「ん、ちよつと、こつち見なさいよ、無視してんじやないわよ！　なん  
でそつち見て……！」

〈巨大な角を携えた少女の方へと向かおうとした、その時だった。  
和風の少女と目が合う。瞬間、その眼が蕩けたのが分かった。それな  
りに距離がある筈なのに……どうしてか、心がそれを理解したのだ。

「——ああ、まさか！　そんな！　そ、そのお姿は……！」

〈人、それを悪寒と呼ぶ。

ふざけんなヤメロバカ！　強制イベントとかこんなんじや商品に  
なんねえんだよ（遺憾の意）　本気で怒らしちやつたねえ！　俺のこ  
とねえ！　おじさんのこと本気で怒らせちやつたねえ！

「あ、ちよ、凄いい速い!？」

「見つけましたわ！　やっと、やっとお会いする事が出来ました  
……っ！」

〈まさに這い寄る、という表現の似合う動き。その眼に宿る狂気。  
一発で分かる。この少女は間違いなく……狂戦士！

「ああ、安珍様！　漸くお会いすることが出来ました……！」

という事でFGOが世に自信をもつて送り出した、型月のバーサー  
カーの意味を変えた少女こと清姫ちゃんです。ホント彼女の登場か  
らバーサーカー、という言葉の意味が確実に変わった気がします。

『あ、アンチン？　え？　ほ、本造院君知り合い？』

〈全く覚えがない……！（小声）

〈……知らぬ相手でも拳を交えれば分かるというもの……！

上だ上だ上だ（強調）　ホモ君を一体何処へ導こうっていうんです  
かねこの選択肢は本当に……とはいえ上は上で嫌な予感しかない。

「安珍様？　どうして何も答えてくれないのですか……？」

『本造院君、ちよつと思ひ出してくれないか？　もしかしたらサー  
ヴァントと出会った事があるとかいう稀有な経験をしているかもし  
れないし！』

「そんなもんあるかと、意識せずして乱暴な口調になった。貴方の人生は、ちよつとだけケンカの割合が多かった以外は、ごくごく当たり前の人生だった。そんな素っ頓狂なものに関わり合いになる訳が無いだろう。」

『あ、うん。そりゃそうだよ。ちよつと冷静になったよ』

「マスター、その、お名前をお聞きした方が宜しいかと……」

香子さんが冷静で草。ロマンもホモ君も動揺してるからね、誰かがクールにならざるを得ないし仕方ないね。

『うん、全くその通り。という事で、そちらのお嬢さん、お名前を……』  
「本当にお分かりにならないのですか、安珍様。清姫、清姫でございませす！」

『だめだね！ 全然聞いてないや！』

安珍様（大嘘）の前じゃ清姫は一切の外的情報をシャットするらしいです。感情が振り切れすぎんだよ、それ一番言われてるから。

「清姫、と名乗った少女はこつちをじつと見つめている。これは自分か話をしないと引つ込みが付かない気がする。」

「香子さん、マリーさん達と三人で角の大きな子の方を。」

「香子！ アマデウス！ 奴に三人がかりをかけるぞ！」

上だよ（黄金の意思） もう今パート下の選択肢君があらぶっていらつしゃつてもうめちやくちやや。少しはこつちの事情もくんでくれよなく頼むよ。」

とりあえず、エリちゃんは比較的理性もあるランサーですし、三人もいれば説得は行けると思います。三人に勝てるわけないだろ！」

なお清姫は安珍様モードに入っていると何物にも屈する事はありません。いわゆる無敵モードです。お前ら三人なんかには負けるわけねえだろお前オウ！ という訳で説得役はホモ君一人のみです。

「そもそも、清姫という名前を聞いた事がない。どのような英霊かも分からず、どうやって彼女を説得せよというのか。」

「そういうえば、安珍様。袈裟は？ とてもお似合いだった、あの袈裟は置いてきてしまわれたのですか？ 私、袈裟姿もとても、好きでしたから……」



◇ ……そもそも俺は仏教徒ではないのだが。

◇ ……待ってくれ、俺はキリスト教徒だぞ。

◇ ……空飛ぶスパゲッティーモンスター教に入信しているから改宗は無理だな。

なんで？ (素)

なんか三つ目の選択肢にとんでもない異形の選択肢が現れたんですけどそれは……こ、これはこの三つ目を選ぶ、という事か？ トンデモにはトンチキをぶつけるべきなのか！

良し。一番下、イクゾー！

◇ ……そもそも俺は仏教徒ではないのだが。

◇ ……待ってくれ、俺はキリスト教徒だぞ。

◇ ……空飛ぶスパゲッティーモンスター教に入信しているから改宗は無理だな。

「……えっ？ あ、あのすいません。一体今なんておっしやりました？ あの、安珍様のお口から出るとは思えない素っ頓狂な単語が聞こえた気が……？」

◇ だから、空飛ぶスパゲッティーモンスター教。と貴方は返す。別にしっかりと信仰している訳ではないが、無宗教というのもアレなので、神に祈る時はスパゲッティーモンスターに祈っている。

「す、スパゲッティーモンスター……ああっ!? せ、聖杯から映像が！ なんなんですかこれ安珍様のお姿が！ 隅に追いやられて！ あああああああ!？」

やったぜ (完全勝利S) あの理論の通じない最強バーサーカーの狂気が偉大なるスパゲッティーモンスターによって浄化されていきます。すっげえ (心が) 白くなってる、はっきりわかんかね。

「……うう、スパゲッティ、モンスター……」

◇ 清姫が頭を抱えてしやがみ込む。一言貴方は謝罪をしてから、人違いである事が分かって貰えたか、と貴方は問う。清姫は黙って、降伏するように首を縦に振った。

清姫ちゃんかわいそう (棒読み)

でもあのままバーサークして『あ・ん・ち・ん・さ・ま』されてた

方がヤバいと思うのでここは譲ってもらいましょうね  
今回はここまで。ご視聴、ありがとうございます。

## ティーエルにて その二

皆様こんにちは、ノンケ（金ぴか本気モード）です。

前回はホモ君最大の強敵を撃破（？）することが出来ました。実を言うと清姫ちゃんが無敵モードに入ると手のつけようがなくなり、最悪オルタ側に加勢するとかいう悲惨なルートもあり得たので危なかったです。やっぱりトンチキが一番。ハッキリ分かんだけ。

「……あの、大丈夫、アンタ。顔色、悪いわよ?」

「大丈夫です。ええ……乙女の夢と書いて儂いと読むのですね……」

あのエリちゃんときよひーが和解を……! 和解というか同情されてるだけだと思っんですけど（凡推理）（顔が）青くなってるんぜ?

あ、エリちゃんの方は無事マリーさんと香子さんで制圧しました。アマデウス? そこで横になってますねえ!

「とりあえず、アイドルともあるうものが見苦しいところを見せたわね!」

「あ、あいどる……?」

「そう! サーヴァント界にさっそうと現れたトップアイドル! それが私、エリザベート・バートリ―! よろしくね?」

〽よ、宜しく?」

〽ムウ あれが世に聞く亜威弩流……!」

知らないの上だよ（無知の知） 若干そっちっぽい顔つきしてるからって下選ぶと思っとなのか!

「貴方達はあのイかれたサーヴァント共とは違うみたいだし、ちよつと安心したわ。ここって頭おかしいサーヴァントしかいないのかと思っただ」

「……私も頭おかしいのでしょうか」

「あ、いえ、そうじゃなくて……ちよ、さつきと全然違うわよマジで何があつたのコレ!」

スパゲッティモンスターにやられたんや……スパモン教の洗礼を受けたんや……いつものパワフルモンスターなきよひー生き返れ生き返れ（御仏の慈悲）

『えつと、安珍清姫伝説の清姫と、血の伯爵夫人エリザベート・バートリー。どちらも凄い逸話持ちの英雄だね。特に清姫は凄いなあ……ちよつと背筋が凍りそうなくらいだ』

「……ええ、安珍様をお慕いする気持ちさえあれば、あの程度は」  
「あ、復活した」

「安珍、という言葉聞いた瞬間だった。余程安珍という人物にこだわりが有るのだろう。清姫の前で迂闊にそのワードは呟けないな、と思った。」

「頭から麵と肉だんごの怪物の映像が離れなくて……なんとか安珍様への愛で立て直しましたけど」

「え、なにその気持ち悪い怪物」

「気持ち悪いとは失敬な。ちゃんとした主神クラスなんだよなあ。」

『スパゲッティモンスターは見た目からしてあれだからねえ』

「……とりあえずその謎生物の話は置いておこう。本題を話すべきじゃないかい？」

「アマデウス様、もう大丈夫なのですか？」

「お気遣いありがとう、マダム・式部……とりあえずは大丈夫だよ」

「そうだった。貴方はここに来た訳を思い出す。その、エリザベート曰く、イかれたサーヴァントと戦う為に、味方を探している事を、二人に伝えた。」

「それで、彼奴らを倒す為に力を貸せて事なのね？」

「あのバーサークなんたら、とか名乗っていた方々ですか。私、純粹で正当なバーサーカーだというのに彼らに間違われて攻撃されかけましたし、気に入りません」

「そっちの奴に同意ね。気に入らない。手を貸すのもやぶさかじゃないわ」

「という事で、一悶着ありましたがサーヴァントがお二方、仲間になりました。やったぜ（完全勝利UC） とりあえずこれで謎のバーサーク・アサシンさん対策は完璧ですね（墓穴） 寧ろ燃え上がる気がするのは気のせいでしょうか……」

「まあこれで本来の目的は果たしたわけだけど……大丈夫かな。この

二人で」

「何とかなるだろうと、貴方はアマデウスに笑って言う。今は緊急事態、何よりも人手は欲しい。自分は彼女たちを信じてみる、とも告げた。」

「まあ良いけど。さつきも思ったが、その顔に似合わないくらい、普通で善良だな、君は」

「まあアマデウス！ そんな言い方！」

「いやあ、ぶっちゃけ彼のフェイスって、控えめに言っても『バンデイト・リーダー』な顔じゃないか。ギャップが凄いやね」

山賊のお頭とはいってくれるねえ！（激ギレ）でも実際そんな顔してますよねホモ君。もしかしてオオエヤマ山賊団にも参加できる可能性が……？

「ギャップって言っても、良い意味でさ。うん。これだから人間は面白いんだ」

「君と俺でモーツァルト山賊団でも結成するかい？」

「ありがとうな、アマデウス。」

良し上……じゃねえじゃん正解が下だよお!? 選択肢が壊れてるじゃないか（獄怒）（選択肢の正解が）上って言ったのに下（急転直下）っておかしいだろそれよお!?

「団員は今ここに居る全員かい？ 女性が多すぎるなあ、華があり過ぎて他所から嫉妬を受けそうだ、はははっ！」

「えっと、アマデウス？」

「ああ冗談だともマリア。ああでも、久しぶりに大分愉快的な冗談をかました気がする」

アマデウスが凄い機嫌良くなってきて嬉しナス！（掌返し）いやあ凡ミスしたかと思いましたけどこういう感じで上手くハマってくれると見所さんですねえ！ そう言えばアマデウスってこういう下らない冗談も乗ってくれる人でしたね。

『あーちょっと冗談は後にしてくれ！ 頼もしいサージェントが味方についてくれて心強いんだけど、実は藤丸君の方で面倒な事が起こってね！』

あつ、もしかして。

「あら、どうしたの?」

『実は、あの黒いジャンヌがとんでもない怪物を引き連れて来た! 竜種の中でもその頂点に位置するであろう、ファブニールだよ!』

「ファブニール。その名前は貴方でも聞いた事がある。有名なドラゴン、と問われれば間違いなく名前の挙がる一匹。伝説の邪竜。

やっぱりもうそっちまで進んでいましたか……つて今襲撃真つ最中!?

『メドウーサが石化の魔眼をつかって時間を稼いでくれてるんだけど、ちよつとそのファブニールを倒せる希望と絶望が同時にやってきてちよつと、ちよつと僕心が!』

しかもジークさん見つけた後!?! なんだこの超スピード!?! (展開)

別に急いでる訳でもねえって言うてんだルルオ!! のんびりエンジョイプレイさせて♡ させる(覚醒) 舐めてんじゃねえぞ。

「ファブニールつて」

「僕でも聞いた事がある。相当ヤバいドラゴンじゃないかい?」

「何、なに? ふあぶにーるつて? え、どうしたの?」

エリちゃんが一人だけ状況理解できていないのホント可愛いライブして? (懇願) 駄目です…… (理性)

「マスター、藤丸様達が……!」

「……ドクター、立香達は逃げ切れそうか?」

「今から行って間に合うか……!?!」

安全を取るには下じゃないかと思うんですけど……けど、実際ここから彼らに合流してもファブニールに纏めて『勝てる訳ないだろ! (極限)』されて被害が拡大しそう。しそうじゃない……?」

という事で悩み所さんですが……よし、ここは私の灰色の脳味噌を回転させる時です。リスクやリターンをよく考えて選びましょう。

又ウン!ヘッ!ヘッ!

アッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッ  
アッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッ  
アッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッ  
アッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッ  
!!!!!! フウウウウウウウウウウウウウウウウ!!!

フウウウウウン!!! (大迫真)

……決めました。ここは上を選択してみます。ほんへ通りに行動するだけじゃ(エンジョイプレイとして)ダメだつてハッキリ分かんだね。リスクとか、お気になさらないんですか……? (一抹の不安) 『え? 逃げきれ……そうではあるみたいだ! なんとか!』

◁であるならば。ここで立香達に焦って合流するのは、逆に後に立香達の足を引っ張りかねないと貴方は判断する。立香達が無事に逃げ切ったその後に、反撃する為の力を連れてくるのがこの旅の目的だろうと思うから。

「マスター……藤丸様達には、まだ合流なされないのですね」

『えっ、でも僕としては合流した方が良いんじゃないかと思うんだけど……え? いい? 救援は要らないって!? 君達どういう思考してるの!?!』

◁立香に伝えてくれドクター。トカゲ野郎なんかには負けるなつて

ファブニールをトカゲ風情とは豪胆ダア…… (賞賛) とはいえ

ファブニールの怖さを知ってるプレイヤー視点からすると結構怖いです。一応ほんへでは無事逃げきれては居ますが陣容が違いますし……でももう決めてしまったので仕方ないね。ホモ君の様に、藤丸君を信じましょう。

『まあ合流するのもしないのもメリットはあるけど……! なんていうか、そこまで信じられるっていうのは凄いなと思うよ、僕は』

「分かりました。であれば、我々は独自に戦力を集める事を優先しましょう」

◁今までは無軌道な道のりだったが、今はそのファブニールに対抗する戦力が必要だ。貴方は竜殺しをこちらでも探すことを決めた。

「マルタ様のおっしゃっていた人以外に、竜殺しが、居ると?」

◁カウンターの話が本当なら、二人召喚されていて可笑しくない。サーヴァントを探してそれが竜殺しなら幸運、程度でもいい。と貴方は紫式部に告げる。

あくまで必ず居るとは言わない冷静さを保ったマスターの鏡。  
「分かりました」

「……顔色、あんまり良くないけど、本当に行かなくていいのかい？」  
　　<心配ではある。けど、ここで彼奴の所へ行くのは、逆に彼奴を馬鹿にしている気がする。貴方は、彼を信じて自分は自分の仕事をする  
と決めた。

「そうか。それなら早く出発しよう。マリア、頼む」

「……ええー！」

藤丸君に最高の贈り物をするんだよ！

と言った所で今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。



## 藤丸視点：竜魔対蛇盾

飛竜がいる。その向こうには、巨大な黒竜が居る。

竜殺しを探していた俺達を嗅ぎ付けた黒いジャンヌは、リヨンへと凄まじい数の軍勢を差し向けてきた。兵隊も、対象も、全てが竜の、文字通りの竜騎兵<sup>ドラグーン</sup>。サーヴァントなど必要ない、と彼女が言い切れるのも分かる戦力だ。

「流石は竜の魔女を名乗るだけはある!! なんとという数の竜!」

「レオニダス王! 一度下がって態勢の立て直しを! 今度は私とジャンヌさんでカバーします!」

「承知しましたマッシュ殿!」

けれど。そんな圧倒的な軍勢を前にしても。

強い。大盾が、槍が、旗が。群がる飛竜達を次々打ち払う。砦で戦った時とは全然比べ物にならない数なのに。寧ろ、今の方が力強く、戦っている様にすら見える。俺に力を貸してくれるサーヴァントの皆が、本当に心強い。

「俺なんか、零れた奴の処理が精いっぱいだ! つだああ!」

「……やはり、俺も……ワイバーン程度なら」

「大丈夫です! 弱いですけど、此奴らを追い払う、だけなら……!」  
翻って自分が情けなくなる……それでも。後ろのジークフリートさんを守るのは、俺の役割だ。ここで引き下がるわけにはいかない。そんな弱気、今は捨てろ藤丸立香!

「マスター! 戦線を下げます!」

「分かった! ジークフリートさん、ちよつと担ぎますよ……っ!」

「……ありがとう、すまない」

この数を引き連れて逃げ出せば……どれだけの被害を生むか。ファブニールはどうしようもなくともせめて、この場のワイバーンは全滅させてから撤退する、とみんなで決めたんだ。ジークフリートさんを連れて逃げ出せるようになるまで、気を張り続ける。

空を埋め尽くすほどだったワイバーンは、確実に数を減らしている。もう少しで逃げ出しても問題ないくらいになるだろう。

ファブニールの攻撃も、先程から散発的で、脅威ではあるが、マシユ達でギリギリ凌ぎ切れる程度に収まっている。

「ふざけるな……どうなってるのよ！ これだけのワイバーンに加えてファブニールまで居るっていうのに……！ 足手まといもいる、たった四人のサーヴァントをなんで！ 潰し切れない！」

「——激昂している余裕がおりですか」

「っ!? ファブニール……っ」

それを支えてくれているのが、メドゥーサさんだ。

鎖でワイバーンを蹴散らしつつ、時折ファブニールの翼の付け根や、足の付け根を静止させてファブニールの動きを妨害してから撤退するという流れを繰り返している。

「クソツ、その、その忌々しい魔眼さえなければ……！」

向こうにファブニールありなら、此方にはメドゥーサさんあり。

ギリシヤにて、見たものを石化させる力を持つ強者。その眼は、魔眼って言う物の中でも最高峰に位置する石化<sup>キュベレイ</sup>の魔眼という物らしく、あのファブニールにすら通じる力を持つ。

「まあ、一瞬足止めをするので精一杯ですが。とはいえファブニールも、自分の思う通りに動けないというのは初めての経験のようですね」

「蛇……蛇があー！」

黒いジャンヌは怒り狂っている、けど分かる。アレは焦ってもいるんだろう。嘲る様な笑みと一緒に、自分が優位だっという態度が消えている。

ファブニールにすら通じる魔眼に、守勢の強さ。それが彼女から余裕を奪っているんだ。向こうの方が優勢なのは間違いないけど、それでも流れはこっちが掴んでいる。後はドクターに逃げ出しやすいようなルートでも割り出して貰えば……！

『やー、味方が見つかって良かった良かった……ってなんだあ!?!』

「ドクター！ 漸くつながったー！」

『いやそれはいいんだけど、ちよつと本造院君の方に集中してたらエライ事になってないかいそつち!?!』

「いいからスムーズに逃げ出せるルートの割り出しをお願いします！」

そう思っていたら、丁度来てくれた。どうやら康友の方へ通信を繋いでいたらしい。繋がらない訳だ。

『まってなんか凄い魔力反応が君達の周りにあるんだけど……!?  
え、これ竜種とかいるんじゃないの? それも超ド級の奴』

「居ます! ファブニールって奴!」

『めっちゃヤバい奴じゃないか!? 神話級の竜種!』

「でもジークフリートさんって人が見つかりました!」

『へ? ファブニールを倒したっていう!? か、カウンターで呼ばれていたんだな! はーそれは一安心だ』

「とても戦える状況じゃないですけど!」

『うそお!』

混乱している。正直そうなる気持ちも分かるし、そうなってしまいう位置みかけている自覚もある。後で謝るから、早く逃走する為のルート……つ!

『ちよちよ! マズいつて! 本造院君達の方にこれ知らせないと』

「え? 康友たちに!」

……この状況、正直助勢があるのはありがたい。今はなんとか流れを掴んでいるが、何時それが俺達の手を擦り抜けていつてしまうかは分からない。でも、康友が居れば、百人力だし。式部さんとアマデウス妨害があれば、逃げる時によりスムーズに逃げ切れるかもしれない。助けに来てもらった方が……

「どうなされましたマスター!」

「や、康友達が、こつちに来るかもって!」

「——それはなりません!」

えっ!?

「ど、どうして……!」

「確かに助勢を待って反撃するのは常道ですが、今は我々が不利!

そこに本造院殿達が来ても戦力の逐次投入の愚を犯すだけ! 彼らを巻き込む前に、ここは我々だけで逃げ切らねば!」

「っ！」

——馬鹿か俺は。レオニダス王の言う通りだ。

こんな状況に巻き込むような事、しちやいけない。例えどれだけキツかったとしても、安易に負担を背負わせるような事……今、何とか自分達で逃げ出せるかもしれないというのに猶更だ。

「……ドクター！　とりあえず救援はいりません」

『……え？　いい？　救援は要らないって!?　君達どういう思考してるの!?!』

「こっちは俺達だけで何とかかなりそうなんで！　大丈夫です！」

取り敢えず、それだけ言って視線を前へ。

俺達は、マルタさんから教えてもらった、竜殺しを探すため、そして康友に無理をさせないように、態々分かれて探索を開始したのだ。それなのにピンチになったら力を借りるなんて。何のために分かれたのかわかりやしない。

「レオニダス王、ごめん……それとありがとう！」

「礼などいりません！　それと王は要りません、ただレオニダスと！」

共に窮地を切り抜けましょうムアスタア！」

「……っ！　分かった！　レオニダス」

その一言と共に、レオニダスの槍の一閃が竜の首を刈り取る。誰よりも先頭に立ち敵を押し返す姿は、ここに居る誰よりも頼もしい。彼に跳ね返せない逆境など、想像できない！

「——はい！　寧ろ、やっさん達に行くかもしれないワイバーン達を、ここで減らすつもりで応戦します！」

「ファブニールにも、もしかすれば傷の一つくらいなら！」

「その意気ですぞ御二人共お！　逃げるにも方法があります！　竜の魔女が悔しがるような最上の逃げを勝ち取って、凱歌と共に帰還いたしましょう！」

他の何者をも、鼓舞し、引つ張る。先陣を切る王。

これがスパルタ。これがレオニダス、という英雄なんだ。

彼の事がより深く知れた気が少しして、嬉しかった。こんなに凄い彼が自分なんかの下で戦ってくれているのが申し訳なくて、それ以上

に誇らしかった。

「……流石だ。レオニダス」

「本当に、俺なんかには、もったいない……」

「いいや、君も。良い主従だと思うぞ」

「え……」

良い、主従。そう見えるのだろうか。

今もレオニダスに守ってもらえばなしで……彼の忠告が無ければ、他の仲間を危機にさらす所だった。そんな俺が……

「例え失態をしても……サーヴァントからの言葉を受け入れ即座に直す。それが出来るだけでも良い関係を築いていると言える……全く、俺とは大違いだな」

「そんな……」

「それでも、自分が未熟だというのなら、これから……彼らと共に、直していけばいい」

ジークフリートさんの視線の先、シールドで敵を押し返す、二人が見える。レオニダス。マシュ。俺の、大切な仲間。ああそうだ。彼らと一緒に、戦って、俺も……！

「……ありがとうございます……」

お礼と共に前へ踏み出す。何時もより、体に力があふれる気がする。疲れも消し飛んだように、足が軽い！

彼らと一緒にあれる、自分でいる為に。得難い仲間を失わない為に！

「踏み出せよ、藤丸立香！」

俺は、前へと進むんだ！

## 鬼と鬼 その一

皆様こんにちは、ノンケ（すまない）です。

前回はヤベーイ！ なサーヴァントお二人と合流。意気軒高したのも束の間、ファブニールが襲来、今から藤丸に罰を与えつからな、とばかりに大暴れし始めました。でもホモ君は独壇場を征く（エンジョイプレイ並感）独自行動ですかね……

『とは言ったものの、実際どうやって見つけるのいいかな』

「やっぱりもう一回フランスを巡るのが良いかしら」

『いや、それは流石に無駄が過ぎるのでは……』

「そっちの遠見の魔術師に同意だよマリア。しらみつぶしにしたって、限度がある」

〈情報が欲しかった。どこどこで、怪しい人影を見かけた程度でもいい。一切の行動指針なしで、というのはいやほやほや厳しい。

ライダー助けて！ してもマリーさんと馬車には限界があります  
あります（食い気味） 非常に新鮮で、非常に美味しい情報を下さい！  
（無邪気）

「サーヴァントを探しておいでですか？」

〈清姫、何か心当たりが？

〈何かあるなら、隠さず教えておくれ、マイプレジヤス

ヒエツ……上なんだよなあ。そんな下みたいなクソ寒セリフ選んだらパパに怒られちゃうだろ！ パパどころか一族全員、視聴者からもそっぽ向かれるレベルの大罪なんだよなあ……分かる？ この罪の重さ。

「ええ、一応は。私をあの可笑しなサーヴァント達と同類と判断して剣を向けられたのですが。少し話せば誤解だと気づいて剣を収めてくれました」

「……まあ、ノーコメントで？ そのサーヴァント、名前は？」

「確か、名前は……ゲオルギウス、と。確か聖人のお一人だったような……」

取り敢えず大罪は置いておいて。ここで知ったク情報。この特異

点の重要なキーとなる最後のキャラクターの名前が上がりました。竜殺しの聖人ゲオル先生です。彼は戦力としてもその特性的にも、この特異点を解決する為に存在している、と言っても過言でない程たまらねえ人です。

『聖人ゲオルギウス！ これはついてるぞう、このタイミングで竜殺しの英雄の名前が出てくるなんて……それに、聖人っていうのもありがたい！』

「聖人がどうかしたのですか、ロマニ様」

『実は、藤丸君がファブニールから逃げ出す際にもう一人サーヴァントを味方につけたんですよ、式部夫人。名前はジークフリート。ゲオルギウスを超えるほどの竜殺しの大英雄』

「そしてファブニールを倒したのも、ジークフリート。彼が居るならファブニールも何とかなるかもしれない。思わず貴方と香子の目が合う。」

「それは……！ なんという」

『けどファブニールが居るのにジークフリートをそのままにしておく訳がない。彼は徹底的に痛めつけられた上で呪い迄かけられていたんだ……そんな状況を打開するには』

「——成程、呪いを解くのは聖人のお仕事。しかも竜殺しの聖人と来た。まさに行幸と言わざるを得ないね。運が向いてきたんじゃないかい？」

ホモは剛運。ハッキリ分かんたね（なおプレイヤーは除く）ホモ君の剛運をちよつとくらい分けてくんねえかなあ、俺にもなあ」

「そうと決まれば早速その聖人の元へ向かわねばならない。皆の視線が清姫に集まる。」

「えっと、その方でしたら、私が来たのとは逆の方向……西側へ行きましたわ」

「移動は力……ツトオ！（BRLY）」

西側についたんですけど、なんか騒がしい……騒がしくない？

『ちよつと待って、凄い敵性反応の数が！ それにこれは……！ サーヴァント反応が三つ!? ヤバいぞ、間違いなくゲオルギウス以外

にサーヴァントが!』

ゲオルギウス以外のサーヴァントが?! (驚愕) 二人……? (困惑)  
なんだか凄い事になっていますが、要するに敵襲じゃんアゼルバイ  
ジャン。さっさと殺そうぜ! (混沌・悪マスター)

「つたく、ここにサーヴァントが居るのを突き止めて攻めて来たのか  
彼奴ら!」

「まだ人が……! アマデウス! 住民の避難を手伝ってあげて!」

「君は!?!」

「私は前線へ!」

……あつ (察し) こんな場面オルレアンで見た事があるんだよ  
なあ。そして、ゲオルギウスとの合流……これはいつも以上にマリー  
さんに気を付けないと (使命感)

「つたく、着くなりいきなりって、騒がしいわねホント! 行くわよ、  
えつと……子ダコ!」

◇タコオ!?

◇墨吐くぞオラア!?

上だYO! 吐けるもんならやってみろって話なんだよなあ。つ  
ていうか墨で目つぶし出来るならそんなスキル欲しい……欲しくな  
い?!

「あの、マスター……その。そんなに、似てないと思います」

◇内心を読まれ、ダメージは更に加速した。しかし文句を言ってい  
る場合でもないので、貴方は黙って頷くだけにしたのだった。

内心気にしてて草生えますよ! とか言ってる場合じゃないので  
さっさとサーヴァント戦です。まあ二騎の内、一騎は予想つくんでい  
いんですけど、もう一騎の予想、コレが中々、難しいねな……

◇悲鳴の中心に向けて走る。近づくにつれ、サーヴァントの暴威に  
巻き込まれ、倒れた人々の姿が目映る。かみしめた奥歯がギリリと  
鳴った。

「見つけました……っ、あのサーヴァントは!」

◇そして辿り着いたその先に広がっていたのは……無数の杭。杭。  
杭。そして、そこを駆け抜けつつ戦う、見覚えのない姿が二人



「……！」

『えつと……どつちがゲオルギウスだろう!? 鎧姿!? それともコート姿!?』

いや一目見れば分かるだろwwwとか思うでしょうが、歴史上の偉人をコピーして一側面だけ抜き出した存在の姿だけ見ても、初見じゃ分かる訳ないんだよなあ……ノツブだって初見で分かる訳ないだろいい加減にしろ！（極端な例）

「鎧姿の男性がそうです！ そしてもう一人は……私に、見覚えがあります」

「マリー・アントワネットが心当たりがある。つまり、あの殿方がルイ十六世という事ですか……!?!」

「あつ、いえ、あの、そうではなくて」

違う違うそうじゃないんだ、なんだよお前（清姫）の説ガバガバじゃねえか……アレはサンソン君です。生前マリー王妃の首を刎ねた人です。あ、その話を聞いて清姫が凄い微妙な顔に……気持ちは分かる。

〽そして……もう一人。

「アレは……確か、黒いジャンヌ様と共に居た」

「……嘘、でしょ? ヴラドおじさま!? あの女が居るのは知ってたけど、あの人までなんて……!」

おっとここでエリちゃんがファインプレー！ ランサー公の真名が割れました。という事でバーサーク・ランサー、真名はヴラド三世。アポクリでは知名度補正の真の意味を見せつけ大暴れした方でもあります。

『ヴラドって、まさかヴラド三世!? そうか、分かったぞ、あの大量の杭はかの串刺し公の異名から……! 護国の鬼将と呼ばれた名将だ!』

〽ヴラド三世、ランサーの姿が此方に向く。その眼が捉えたのは、エリザベートと……貴方だった。

「……ふ、カーミラの奴めが憤死しそうな小娘は、まあ良い……それより、その方」

◇……俺か。

◇……香子さんか。

貴方だつたつてんだルルオ!? 傍にいる香子さんに責任を擦り付けてはいけない。というかここはボケる場面じゃないと思うんですよ。スタッフは何を考えているんだ(憤怒)

「やはり匂うぞ。頬の傷から香る、其方の血。伝承によって墮ちた我とは違う、真正の……」

「マスターが、どうしたというのです。ヴラド三世様」

「気付いていなかったか。その者の中には、間違いなく人ならざる血が流れている」

◇——言っている意味が分からない。自分は徹頭徹尾人間だ……と、言いたかったが。貴方は特異点Fでのキャスターの言葉と、幾度と無く自らの体に訪れた、あの感覚を、思い出していた。

「っ！」

「余を夢想の淵より揺り起こした……その血に、興味が涌いた」

「——マスター、耳を貸してはいけません！ そのような事、有る筈が！」

◇……何が望みだ？

◇言葉はいらぬ！ さあ、疾く首を取れい！

もう下は首だ首だ首だ(棒読み) なんて態々ホモ君は煽りに行くんですかね……？

「こちらへ、来い。ただし……一人でな。サーヴァントを伴う素振りを見せれば、即座に杭で街を埋め尽くす。一人でも多く、道連れにしてくれよう」

……スツ(血の気の退く音) ふう……

◇ヴラド三世が手招きをする。杭の中心、まるで決闘場の様に開いたサークルの中に。乗らなければ、杭が自分や、香子、力を貸してくれる英霊達、さらには一般人にまで、凄まじい被害が出るだろう。行かない選択肢はない。

「っ、卑劣な……マスター!?!」

「ちよ、アンタなにしてんの!?! おじさまよ!?! オスマン一人で押し

返そうとした武闘派のおじさまよ!? アンタなんか瞬殺よ!」

もう私操作できないんですよ……イベントに入りましたね。

「そうだ、此方へと来い」

∟戦場を埋め尽くしていた杭が、道を開く。決闘場への、花道を。

∟本当に、手は出さないんだな

∟へへ、援護も要らねえや……テメエなんか怖くねえ!

ベネットはNG(素) とはいえ実際援護は許していただけなのは事実なので……やっぱり(難易度) 壊れてるじゃないか。

「二言は無い……これは、貴様への褒賞だ。甘んじて受け取るがいい」  
褒賞っていうか厳罰だと思うんですがそれは……実際ブラド公目が笑ってないように見えるのは……私だけでしょうか。

「余が……傀儡としてではない、余の意思で相手をしてやろうというのだから」

∟その直後、その体から金色の光が僅かに漏れ出す。貴方は、冬木でのセイバーの最後を思い出す。彼女も体を金色の光に変えていた。となればコレは。

へえっ!? ジツ、自壊ですかあ!?(困惑) そんな事出来るんすねえ

(戦慄)

「ククク、狂気は、今は邪魔だ。それを跪かせただけの事……目覚めさせてくれた事への返礼だ。狂気のままには狩らぬ。正気を以つてあたる」

何だお前(素) も、もしかしてバーサーク化から目覚めさせたからオコなんですかあ!?! いやだからって霊基崩壊するまで力を振り絞りますか普通。それって……(緩やかな) 自殺ですよ……?

っていうか、だとしたら死ぬ覚悟決めてバーサーク化までやめて自分の意思でぶっ殺すってどんだけホモ君を始末したいんですかねヴ  
ラド公。

∟自殺行為。だが、貴方はそうは思えなかった。まるで自らを痛めつけているとは思えないその余裕……そして。  
まともに戦える状態じゃあないというのに、まるで勝てる想像が出来ない!

「準備は整った……さあ、始めよう」

唐突なタイムマンバトルが確定したところで今回はここまでとなります。

ご視聴、ありがとうございました。

## 鬼と鬼 その二

皆さんこんにちは、ノンケ（護国のランサー）です。

前回はホモ君がまさかの一騎打ち。相手は護国の鬼将、ヴラド三世さんです。ワーぱちぱちぱちぱち……ふざけんな！（豹変）この前は血の気が引いて一周回って冷静な思考が出来ましたが普通に考えれば絶望的だろいい加減にしろ！ 相手はランサーの中でもガチ中のガチだぞ！ 逃げるんだあ……勝てる訳がない……！

とか混乱していても……仕方ないねんな（諦観）

とりあえず、現状の勝つ為のポイントは

- ①：ヴラド公が爪の先程も本気を出していない。
- ②：特異点Fでもあつた香子さんの援護。
- ③：ホモ君の鬼種の魔。

この三つです。というかこれ以外にありません。この三つを最大限に生かしてヴラド公を攻略する必要があります。武器は香子さんの援護込みでこん棒くらい、礼装は初期、スキルは初期に毛が生えた程度。クソですか？（殺意）そして早速バフ入りましたね。香子姉貴の援護ありがとナス！

「行くぞ……！」

あつ早速突うずるっ込んで来たあ！ 流石ランサーだけあつて突きが鋭い。とはいえ大分弱体化（自己申告）されているので何とか回避が成功しています。してなかつたらこの時点で死んでます。

でよく見たらなんかスリップダメージが常時入ってますけど……デバフの所に『霊基崩壊（弱）』とかいうデバフが追加されていますね。マジで霊基を燃やして戦ってんのか……（畏怖）

「マスターをやらせはしません……！」

「……これは」

遠距離からの式部さんの援護攻撃が……外れた!?（驚愕）まるで背中に目でもついているかのようなバックステツポ、本当にAI操作なんですかねクオレハ……でも隙を見せてるとオラツ！ 反撃！

当てられましたか……？ 防御されました……（消沈）

「そこへマスターを一人で寄せ、とは言われました。近寄っては、い  
ませんから」

「ククク、言うではないか。良からう、余は寛大だ。援護の一つも許さ  
ぬのであれば、それこそ余の器量が問われよう……それに、その程度  
では、覆す事は出来ぬ」

そして香子さんからの援護その二、相手に機動デバフが付きまし  
た。ありがてえ！

とはいえ大分弱体化しても竜骨兵なんかとは格の違う動き、香子  
さんの直接攻撃を躲し、不意打ちも防ぐ勘の良さ、やつぱりヴラド公  
強いっすね……分かってましたが真っ当にやっては（勝ち目も）流れ  
ますね……

「——その血を目覚めさせねば、死ぬだけだからな」

ツアアアア、一つ選択ミスるだけで死にアアアアアツ……ハア  
ッ、アッ、アッ………そうです（辛み）なにせ、能力が落ちていると  
いつても……オオン!? 結構、良い動きしてるじゃねえか……（疲労

困憊）

「ああもう！ おじさま相手にして無事で済むわけないでしょう！

私も………！」

「——近寄るな」

〳〵此方に近寄ろうとしたエリザベートに向けて、杭が一本伸びる。  
片手の槍で自分の動きを制し、もう片方の伸ばした指先で杭を操って  
いる。その一本がエリザベートの喉に向けて正確に伸ばし、彼女の動  
きを封じていた。

ヴラド公も結構、（杭の）使い方上手いじゃん……アポクリでそんな  
器用な事してましたっけ。いや、アポクリじゃ面制圧で全部何とか  
なったからやらなかっただけですね多分。

「っー！」

「援護程度であれば、許容はする、だが……直接の手出しとなれば話は  
別だ」

〳〵やめろ、約束を破るのか。槍を払いのけ、ヴラド三世へと貴方は  
吼える。

「なに、約束は破らぬ。お前がたとえ死んだとしても、アレ等が割り込まぬ限りはこの杭は何物をも殺しはしない」

〈〈……そうか

〉〉どうしてそこまでして俺に拘る

下の選択肢が物凄く久しぶりにまともな事言っているので、偶には選んでやりましょうか（傲慢）

「知れた事……貴様のその血だ。それが、余の体を動かしている……未だ目覚めぬ、その血が」

〈目覚めていない自らの血。本当かどうかはまだ確かではないそれを、ただ狙って彼はここまでの事をしている。

実際なんでここまでやってるんですかねヴラド公。オルレアンの公って、割とヤケクソ気味に暴れてて、もうそんな鬼と名の付くものに執着する必要なかったと思うんですけど（名推理）

〈分からない。ヴラド三世を、何がそこまで突き動かすのか。

「余は侵略者、貴様の命を狙う侵略者だ。そんな相手を前に考え事とは随分と……余裕だな！」

さて、そんな所で戦闘再開ですが。正直圧倒されてボロボロ、とかなるか思ってたんですけど意外にもホモ君は無事生き残れています。

ぶつちやけ杭を使われていない、というのが大きいです。使われたら間違いなく死んでると思うんですけど（小並感） なんてかはさっぱりわかりませんが、ヴラド公は今の所殴り合いしかしてきません。そのお陰で辛うじてホモ君でも対応が来ています。なおダメージを負わないとは言っていない（絶望）

頼むからこれ以上暴れんな……暴れんなよ……（懇願）

〈強い。全く自分が打ち込む機会など無い。ヴラド三世の攻撃を必死になって凌ぐことしかできない。それでも、自分が死んでも

「ふむ、未だ人間の身でここまで粘られるとは……予想以上に、あの竜の魔女めの呪縛を抑え込むのは力を使うようだ。少しばかり、意識を変えるか」

〈だが次の瞬間に思い知った。今までの攻撃など、まだ、まだ手加減をしていた状態でのものに過ぎない、という事を。

ヌツ……（フラグ回収）　なんかヴラド公に必中バフが付いたんですがそれは……もう回避率とか関係ないじゃないか（憤怒）

「ククク、少しばかり手を抜き過ぎていたが、次はそうはいかん」

やだやめて叩かないで叩かないでポツタイシ……（ダメージ）　防御はしましたが、振り下ろし一発で体力十分の一は持つていかれました（号泣）　防御したのにダメージガッツリ入るっておかしいだろそれよお!?

「防ぐか。だがサーヴァントの膂力を相手に、どれ程意味があると思う?」

「ないです（激怒）」

バットは使用不可能になっていないにしろ、ヤバいですね、これじゃジリ貧ダア……こうとなればダメージ覚悟で一発当ててみましょうか。防御でアレだけのダメージ負ってましたし、防御無しで食らったらまずダメージは必至。けど取り合えずダメージを与えない事には話は始まらないと思うんですけど（名推理）

「ほう、向かってくるか。良いだろう」

お、まさかのノーガード戦法。これは行幸ですね。そのがら空きの上半身に鬼種の魔、逆境込みのふといバットをぶち込んでやるぜ。ホラホラホラホラホラホラホラホラホラ!

……全部二ダメージ。あつ、ふーん……ダメみたいですね（絶望）

「……理解したか?　人の身のままでは、余には痛打など与え得ぬ、という事を!」

エンペルト……（致命傷）　ふ、振り上げた槍の一発だけでホモ君が赤ゲージ突入です。強すぎませんかねヴラド公。こんな中盤とから出てくる負けイベントボスレベルなんですがそれは……

「さあ、どうした?」

まるで修行の様ですが殺し合い（一方的な蹂躪）です。

これは選択肢ミスしましたかねえ……まさかこんな死亡フラグが立っていたなんて、どこでへし折ればよかったんでしょうか（疑問）  
教えて♡

「今、この死の淵にて、引きずり出して見せろ。その力を」



「死ぬ。このままでは間違いなく。体を斜めに引き裂く、凄まじい熱のような感覚で分かる。力の差は歴然だったとはいえ、あまりにもあつけない結末。」

「さもなくてこのまま死ぬだけだ……卑劣なる篡奪者に、全てを奪われて、な」

「しかし、分からないのだ。そんな、在るかどうかも分からない力をどうやって扱えば良いのか、など。」

「そんな事言うたかてこのままじゃ君は死ぬねん！ ホモ君、どうにかしろ（無茶振り）」

「ああヴラド公が近寄ってきます。こんな事になるのであれば、RTA奏者の方々バリの変態操作を練習しておけば……悔やまれますねえ！」

「死にかけているからか、半ば諦めのような言葉が浮かぶ。忠告を聞いて後ろで震えていれば、こうはならなかったのか、と」

「——香子は 呪に詳しくは ありませぬ」

——

「けれどけれども 心ならば——『源氏物語 桐壺 別離』」

「——そんな弱気を振り払うような、凜とした声が。貴方の耳に届く。それは間違いなく貴方と共にある、サーヴァントの声。」

「マスター！ 諦めないでください！ 私が、私がついて……っ」

「ちよ、アンタ大丈夫!？」

「その声と共に、体が少し、軽くなった気がした。痛みは残っている。しかし、それも薄まった。香子がおかをしてくれたのだろう……けれど喜んでなどいられない。」

「はあ〜生き返るわあ〜！」

「これは、香子さんの第二宝具！ 治癒能力を持つ結界宝具です。ホモ君のHPが、真つ赤な状態から少し回復しています。それでも普通に逆境発動するレベルですけど（瀕死）」

「ほう、あのサーヴァント……む？」

「香子が、地面に蹲っているのが見えた……自分が情けないせいで無理をさせて、それで助かって……喜べるものか。貴方は、唸り声を」

あげて、歯を食いしばって、立ち上がった。

あ、操作効かなくなりました。これはイベント入りましたね。

「成程、まだ立つか。だが、戦力差は未だ圧倒的に絶望的だ。先ほどの二の舞を演じたいというのであれば、望み通りにしてやるが」

〈そんなつもりは無い。戦うのだ。分からなくてもいい。そんな鬼のような力が、目の前の敵の言う通り本当にあるのならば。引きずり出す以外の選択肢はない。

香子さんに無理させた後にそんな無様さらすとか狗畜生以下だつて、それ一番言われてるから。

「それとも……相手は圧倒的。それでも勝つと吠えるか？」

〈答えの代わりに腹の底から、思いつきり声を張り上げた。不思議な力の出し方なんて分からない。なら今の自分が持つてる全てを、思いつきり叩き付ける、それくらいしかできない。それで何か起きたなら、上等だ。

「——先程とはまるで違う覇気。己の命より、自らの失態で友柄を巻き込む事にこうも憤るとは……良からう」

「来るがいい、改めて見極めてやろう。貴様というモノを……！」

じゃけん今、行きましょうね（覚悟完了）

〈〈お前を、ぶっ飛ばす！

今回はここまでとなります。ご視聴、ありがとうございました。

〈——額が、バチリと、一瞬痺れた気がした。

## 鬼と鬼 その三

皆様こんにちは、ノンケ（先生）です。私は第三再臨が好きです。前回はホモ君が吹っ切れて戦闘再開。ヴラド公、ホモ君共に香子さん関係のバフ、デバフが消えています。代わりにホモ君には『???』というバフが付いています。何はともあれ突っ込めたっていつてんの、ねえ!? 突っ込めたって言っただろお!?

〽振り下ろしたバットがランサーの腕に防がれる。しかし、明らかに先ほどとは手応えが違う。ダメージを与えた、という確信がある。「ぐっ、この、手応えは」

〽バットが、まるで小枝の様に軽い。詰まっていたモノが抜けたよ。うな、妙にスツキリとした気分だった。そして抜けた分、体に力が満ちている。今なら、あの動く人骨程度なら一発で粉々に出来そうだ。

「……ハハハハ、目覚めたか！ その血が！ 化生としての血が！」  
正直もうちよつと後で、地道にトレーニング詰んで発揮するつもりだったんですけどここは実況者特有のオリチャー発動という事で、マエアロ。

という事でコレが鬼種の魔の本領発揮状態になります。今までの瞬間的な出力のアップしか出来ませんでした。覚醒です（王者の風格）すると全体的なステータスが大幅に出力アップするスーパークサイヤ人の様な効果を得ます。

なお覚醒しても最初期はサーヴァントに僅かなダメージが与えられるようになるだけです（絶望）つまりここまでやって士郎君の影を踏むくらいなんやな……悲劇なんやな。

〽が、それと同時に、眉間が燃え盛る様に熱くもなっている。貴方の体に異常が現れているのは間違いない。だが、今はそれをどうこう言っている場合ではないという事も分かっていた。これなら対抗する事も。あるいは。

「相手をしてやる。忌々しき我が血を。今、この時ばかりは解き放つてな！」

〽そう思った直後だった。目の前のランサーの姿が……変わる。肌

が、青ざめる。目が赤く染まる。牙が鋭く、伸びる……！ その姿はまるで、吸血鬼のような。

自分から(吸血鬼に)寄っていくのか……(戦慄) 相当ガチな覚悟で来てませんかクオレハ……バーサーク化解除したのに吸血鬼化するっておかしいだろそれよお！

そんな悲鳴はおいておくとしてヴラド公のステテックですが……相手のデバフが『靈基崩壊(強)』に強化されています、さらに必中バフに代わって『戦慄の吸血鬼』とかいう謎バフが追加されています。これは……最終局面じゃな？

「お、おじさまが……子ダコ！ ヤバいわよ！ おじさまは本気を出したらガチの吸血鬼に……！」

「もはや、吸血鬼にすら劣る、侵略者として捻じ曲げられた靈基に拘りは無い。さあ、打ち砕いて見せるがいい、これが伝説の怪物だ！」

◇……行くぞ！

さて！ ぶつかった際のダメージですが……ファツ!? 互いに同ダメージとかこれマジ? 逆境込みでコレとかうせやろ……疲労してる分普通にホモ君が不利ですね間違いない。引き続きマトモにぶつかるのは昏睡なんたら並の愚行のようなので慎重に。

「ガアッ！」

行こうと思いましたが無理です(敗北主義) 杭が！ 杭が！ 杭は使わねえって約束守ってよ、怒ってんの?(煽り) ホモ君には使わないって言っていないから……

杭とかいう遠距離から一方的になぶり殺しに出来る切り札が出てきた以上、これは下手にビビって逃げると余計にダメージを負いかねません。ダメージを与えられるというのであればここは一転 攻勢しかないでしょう(古今無双) バットで殴れば人は死ぬんだよ！

「グアッ……ククッ！ 神祕を纏う程の、この力！ 我が芯に響く、一撃！ そうだ、もっとだ、モット引き出せ！」

◁ヴラド二世は楽しいに笑う。貴方が、力を引き出して戦うのが、嬉しくて仕方ない、とでも言うように。

「自らの底二ある、力を、感シロ！」

〈だが貴方にそんな余裕はない。圧倒的な力が溢れていても、それに付いていけないという自覚がある。快調の筈なのに、震えが走る。人の杵を大きく超えた、そんな力をいきなり振るっているのだ。

目覚めた力に振り回されていらっしやる。落ち着いて差し上げる

(謎言語)

因みに振り回されている仕様を再現する為なのか、現状のホモ君はちよつと動作がぎこちないです。そんな所まで再現しなくていいから(良心)

「怪物とナった己は忌々しいか、恐ろしい力、だがオクするな！ 今、臆すれば死ぬダけよ！」

〈——言われなくても。もう負けるつもりは無い。香子から送られたエールを無駄にはしない。必死になって、貴方は溢れる力を乗りこなそうと足掻く。

幸いヴラド公のスリッパダメージの量は倍以上にまで上がってますし、ホモ君の打撃自体も威力は上がっているので、併せて逆転に持っていける可能性はあります。状況をフル焼きソバ！（ひっくり返すぞー！）

どうでもいいですけど、バットと槍が鏝迫り合いつていうのは意外と絵になるんすねえ。かつこいい（小並感） なお競り合いになると大抵ホモ君が負けるんでやりたくないです（激ギレ） やっぱ基礎ステータスがちがうって、それ一番言われてるから。

「……そのようなチマチマとシた使い方では話二ナらん。このように、豪快に振るわねバ、な！」

〈ヴラド三世の突き出した杭が、四方から貴方を取り囲む。何処を見回しても逃げ場はない、まるで壁の様だ。

ちよ、そんないきなり広範囲の攻撃とか、聞いてないんで、無理です(潔し) じゃなくてどうかしないとホモ君が死ぬねん！

〈豪快に振るう。その言葉に納得できるものがあつた。恐れているばかりではダメだ。この力をフルに使わねば對抗する事もままならない。乗りこなすのではなく、逆に。

◇思い切り力を……振るう！

おおおおおおおっ!? バットが迫りくる杭をバキバキへし折って行きますねえ！　ンギモヂィィ!!　野球か何か?（構え的な意味で）　なおヴラド公が弱体化してるから杭もへし折れるんであって、普通は無理です。やっぱり……サーヴァントって、強いねんな。

◇何かを掴んだ気がした。今、体の底からあふれる力と、ガツチリと、貴方の意識がハマった気がした。

「……ソウだ！　臆せずしテ振るえ！　全力で！」

◇ランサーが飛び掛かってくる。掴んだ感覚に集中していた貴方は、それに対応しきれず、地面に押し倒されてしまう。大きく開いた口元に見えたのは、牙。噛み付くつもりだと、直感的に理解した。

シユバルゴ!?（捕縛攻撃）　ランサーに勝てるわけないだろ！　×  
鯖ア！（ランサーの力強い捕縛を解くのに苦心する実況者）　馬鹿野郎お前俺は勝つぞお前！　ランサーの言うとおりなんかなねえぞお前！

流行らせコラ！　流行らせコラア！

「ぐあっ」

◇しかし、力の使い方を掴んだ今、力負けはしない。もみ合いの末、何とか貴方は拘束を逃れ、相手を後ろへと蹴り飛ばす。

マジでスマブラはNG（困惑）　ほんへを完全切り貼りで実況する事になるなんて誰が思うんでしょうね、FGORPGで……まあそれは置いておいて、危なかつたです。

恐らくヴラド公が狙っていたのは吸血ですね。ほんへでもスキルとして実装されているんですが、RPGでは体力吸収に加え、振りほどけないとそのまま死ぬ凶悪な攻撃行動となっています。まるでモハン見たいダア……（直喩）

◇しかし地面に転がったランサーは、立ち上がるよりも先に、無数の蝙蝠と化して宙へと舞う。伝承に伝わる吸血鬼そのものの動きだ。今、本人が言っている通りランサーは吸血鬼そのものと化している。「食らい尽くしてくれ……！」

ファッ!?　蝙蝠に変化しての攻撃!?　だから広範囲攻撃はやめ

ろつつつてんだろ（激怒） うせやるこんなんどうやってよければいいんでアツアツアツアツアツ（多段ヒット）

「マダだツ！」

アツ（また）これかあ！ 全部回避すんのは無理だと思います（経験） しかも範囲攻撃で多段ヒットなので下手に回避するとダメージがイツパイイツパイ入っちゃ入っちゃ入っちゃ入っちゃあゝ！

ここは愚直に直線状に突っ切って逃げるのが一番だと思います。多少はダメージは負うでしょうが、覚醒状態で多少は硬くなっています。直接ぶん殴られるよりはダメージは落ちると思うのでその辺りは覚悟決めて……凸れ。

＜無数に飛んでくる蝙蝠に向け、今度は真つすぐ突っ込んでいく。受ける傷は最小限になるよう、体は小さく丸めて突っ込む。

「抜けタか……しかし逃がさん！」

あ、ヴラド公が実体化しました！ どうやら打撃叩き込むために、ある程度蝙蝠化したら実体に戻るようですね。取り敢えず今は回避一択ですが、次、実体化するタイミングは分かりました。ので次はそこを狙ってぶち込んでやるぜ！

＜まさに吸血鬼。牙を突き立て、無数の蝙蝠に変身する、怪物。そんな相手と渡り合えている自分も、同じように。

「心せよ、これが貴様の行く道、その一つだ！ 怪物とナつて、こウして悍まい姿を晒す、我が姿を！ 見よ、コレは貴様ノ未来だ！」

＜＜自分は、怪物じゃない！

＜＜俺は本造院康友、それ以外の何者にもならない！

下の選択肢つて、偶に激熱な事言ってくれますよね。という事で下を選んでおきましょうか。

＜——だがそれでも、貴方は決して揺らがない。この力がどんなモノかも分からないままではあるが、それでも。貴方は怪物になどならないと、迷わずに、告げた。

「良くぞ言った！ ならば、先ずはその力で討ち果たシ、示して見せろ……吸血鬼を、卑しき侵略者を！ 護国の誇りも忘れた愚かな愚物を！ 忌々しき未来を！ 打ち破れ！」

∟ 吠えて、ヴラド三世が無数の蝙蝠となって再び宙を舞う。

おつ漸く蝙蝠化してくれましたね。ここが踏ん張りどころさんです。体、持ってくれよ！(G K U) アツアツアツアツアツアツ(多段ヒット) マジでもう死ぬ5秒前……

けどやっぱり攻撃する為に……正体現したね(心眼) じゃあその実体化した一瞬を狙って、やっちやうよ? やっちやうよ!?

暴力!(一撃必殺) 暴力!(二撃決殺) 暴力!(一撃余り) って感じで!

∟ 砕けろっ!

「かつ……!?!」

∟ ——最後に叩き込んだ一撃が、何かを砕いた感覚があった。ヴラド三世の、決定的な何かを。同時に、好調だった体が、ズシリと重たくなった。

「……見事。全くもって、見事だ。怪物を、討ち果たしたか。良い、今の貴様には、護国の槍が良く馴染むであろう」

や っ た ぜ (辛勝)

ぶつちやけバリバリ手加減してくれた上で、更に弱ってるのに付け込んで襲ったのと変わらないんだけどね、初見さん(自虐) ここまで弱らせた挙句にこっちが全力全開をさらに飛び越えるような一手を使わないと勝てないとか……やっぱつれえわ……(疲弊)

∟ 力が抜けて、膝を付く貴方の前で、ランサーが地面に仰向けに倒れる。勝った、のに、まるで勝った気がしない。

「ククク……誇りを忘れ、侵略者に成り果てた、我が身には……過ぎたるほど、良い最後であった……感謝するぞ、後進よ……」

∟それは。黄金の光になって消えゆくヴラド三世が、酷く穏やかで、満足げに、天を見つめていた。だからなのかもしれない。

な、なんとかヴラド公打ち倒した訳なんですか……これ、ヴラド公。マジでホモ君を殺すつもり有ったんですかね?(疑問形)

今回はここまでとなります。ご視聴、ありがとうございました。



## 影よりの一手 その一

皆さんこんにちは、ノンケ（ゴーレムマスター）です。起動せよケテマル。

前回はヴラド公を見事撃破、なんとも堂々と御帰天なされました……敬礼！ ぶっちゃけホモ君にめっちゃ有利な状況にして貰ったの勝利なので、周回プレイとかしたら今度は真っ向から堂々と挑んで決着をつけたいですね。

さて前回から引き続きホモ君ですが……体力が真っ赤ア！（イキ杉田） そりゃあヴラド公と殴り合えばそうなるのは当たり前だよなあ？ あ、でも事前に買って置いていた包帯がまだ……え、行動不能？ あれ？ ヤバくね？

「ちよ、アンタ大丈夫?! 全身真っ赤じゃ……真っ赤じゃ……」

ちよ、待って！ エリちゃん落ち着け、吸血鬼としての逸話を今発揮するのはキャンセルだ（必死） ホモ君なんか食べても腹下すだけだから！（失礼）

「ってああっ！ 危ない危ない……初めての香りがしたからってそっちを掻き立てられて理性失っちゃダメよエリザ……私はアイドル、アイドル……」

〈〈ちよつと、すまないが肩を貸してくれないか？〉〉

〈〈因みに何系のアイドルなんだろうか？〉〉

そういえば気になりますよねえ（選択肢下）

「え？ そりゃあ私はなんでも出来るスーパーアイドル！ ハードなロックから情熱的なバラードまで！ どんな歌でもこなして見せるわよ……って流石に今そんな事言ってる場合じゃない！ アンタマジで死ぬわよ!？」

〈言われた直後に視界が揺らぐ。どうやら貴方は想像以上に自らを酷使していたらしい。だんだんと酷くなって、いよいよ地に膝を付いているのもやっとなっている。〉

「ちよ、ちよ！ ヤバいじゃない！ でも私回復系の歌なんて持ってないし……どうすんのよコレえ!？」

「……だい、じょうぶです」

「え？」

あ、香子さんが目を覚ましてくれました！ 回復オナシヤス！

……って、もう魔力残ってないんですけどがそれは。消滅するまで魔力を使えとか言える訳ないんだよなあ……（エンジヨイプレイ並感）

「マスターは、包帯をいくつか携帯していた筈です。それを、使えばまだ……！」

「ちよ、アンタは大丈夫なの!? まだふら付いてるわよ!？」

「大丈夫、です。パスから頂いた魔力で、立てるくらいには、なりましたので。それよりマスターの処置が先です！ 一番重症なのは……」

＜その言葉が終る前に、貴方は体勢を崩し、転げそうになる。だが地面に叩き付けられる前に、香子が貴方を受け止めた。

「っ、ふう……大丈夫ですか、マスター？」

体中ボロボロやねん（純然たる事実） ちよつと暫く肩を貸してもらいましょう。ストレスはないですがあらゆる体のステータスにマインスの補正が掛かっているとか初めて見ました（無知） やっぱり……私が下手やねんな（自嘲）

「お辛いでしようが、肩に捕まって……歩けますか？ サークルの設置してある森へ行けば魔力の供給も、スムーズにつ、出来ます。私や、マリーさんの宝具で、治療を……」

「——大丈夫!？」

＜頭を何とか前へ向けると、此方に走り寄ってくるマリーの姿が目に入る。体はもうボロボロだが、なんとか腕を上げてそれに応えようとして……駄目だった。腕ももう上がらない。

「大丈夫じゃないみたいね」

「森まで戻れば、霊脈から魔力の供給も出来るかもしれませんが……急いで戻らないと」

「立香達とも合流しなきゃいけないし、その方が良いわね」

まあここでの用事は……って、一番重要なゲオルギウスさんの事をもう忘れてる！（ホモガキ） 彼を確保できていないと、ここからの攻略が相当きつくなるんですがそれは……

「そういえば、そっちもなんかバトってたみたいだけど、大丈夫なの？」

「ええ……ちよつと、生前の知り合いに会って。清姫ちゃんが、説教してくれました」

「——いいえ、説教だなんて。そんな」

＜マリイの後ろに、何処か清々しい表情の清姫。そしてその後ろから……先ほど戦っていた鎧姿の男性が此方に来るのが見えた。

お、でも杞憂だったみたいですね。っていうか清姫ちゃんとマリイであの処刑人さんをボコボコにしたんですか……処刑人君精神ミンチ肉みたいになってそう、サンソンかわいそう（ネタバレRRM）  
「いえ、清姫殿。貴方の言葉は間違いなく、かの処刑人殿にも届く『説教』だったかと思われます。あそこまで真摯に愛を説くのは、私とて出来ません」

「そ、そんな……」

清姫ちゃんのテレ顔を藤丸君以外で拝むのは珍しいっすね。まあ皆の聖人ゲオル先生の言葉は、バーサーカーの狂化をも貫通するんだなって事で……ハイ！ ヨロシクウ！

「貴方は……」

『——つたあ！ 漸く繋がったよ！ ヴラド三世がこつち見たあたりから急に通信が安定しなくなったと思ったら康友君のバイタル値がトンデモない数値叩き出して……！ 何があつたのかちよつと僕に誰か説明をよろしくお願いします！』

めつちやロマニ焦つてて草生えますよ。まあ、ホモ君がいきなり覚醒したらバイタル値こわれるだろうから仕方ないね。まあ藤丸君の方も覚醒したら似たようなことになるとは思うんですけど。

＜説明力……ツトオ！（BRLY）＞

『成程。状況は理解したよ……ぼかあ君を叱るべきなのかサーヴァント相手に生き残ったのを称えるべきなのか……』

＜ロマニがとても複雑そうな顔をしている。正直自分としては選択肢が無かったので責められても困るのだが。

『まあ、それは置いておこうか……問題は、そのサーヴァントが本造院

君に対して言った事だ。ぶっちゃけ、荒唐無稽とでもいいけど……」  
「私見たわよ。その子ダコの額から、角みたいなのがバチバチ生えてきたの！」

『……証言もある上に、弱体化してたんであろうサーヴァント相手とはいえ、勝利し生き残ったというこの状況。正直信憑性しかないというね』

サーヴァントは使い魔に属する存在としては最高峰の存在ですからねえ。バット持ったハゲが殴り勝ったとか普通に考えたら誰が信じるという話。ロマニが信じたくないと思っっているのが見える見える（千里眼）

「……鬼」

香子さんにすごい見つめられてる……しょうがないね（レ） 平安出身にとつて鬼っていうのは結構……ね？

「でも、今は角、ないわねえ」

「レディ、その様に頭を面白そうに撫でるのは……その」

ハゲを弄らないで（懇願） いや、そう言う意図はないと思うんですけど。でもハゲを興味深そうに撫でまわしてるとか揶揄ってるようにしか見えないし、仕方ないね。

「あ、いえ、そう言う意図は無くて……」

「——君はそうやって悪意なく、誰かの急所を突くから気を付けた方が良いよ、ホント」

「アマデウス！」

お、避難誘導員のアマデウスも合流しましたか。で、こつちに来たという事はどうやら避難誘導は終わったようですね。お疲れナス！  
「取り敢えず、町の人間の避難はほぼ終えた。これで大丈夫だとは思うが……で、そっちの鎧の男が、例の？」

「おお、貴方が町の人の避難を！ ありがとうございます、私一人では、あのサーヴァント二人を抑えるのに手いっぱい……あ、私。ゲオルギウスと申します」

＜ゲオルギウス、と彼は名乗った。その名は間違いない、竜殺しの聖人の名。どうやら無事目的の人物は探し出せていたらしい。＞

「見つけていたか。ならもうここには用は無いだろう。残ってる人間も回収して早く撤退しよう。追撃が来たら、もう凌ぎきれないかもしれないぞ……って、おいおい本造院がなんでそんなボロボロに!?」  
「そうね。町の人達の非難が終わり次第、急いでここを離れましょう。その事もあるし早く回復させてあげないと」

『……そうだね。それが先決だ。本造院君の事については、改めて。この特異点を切り抜けて落ち着いたら、ということだ』

確かに、見所さんはもう十分堪能しました(満身創痍) 一度引きましよう。

あ、一応応急処置は香子さんがやってくれています。包帯を持っていと好感度の高いキャラが使ってください。お陰で何とか歩く位は出来るようになりました。はえ〜……すっごい頼もしい……

「残ってる避難民はあそこだ」

「じゃあ彼らを護衛しつつ……マスターは、すみません。ゲオルギウス様、お願いできませんでしょうか」

「承知しました。さ、此方に」

〈貴方を担いだゲオルギウスを一番後ろに、一行が歩き出す。

しっかし、これでホモ君は暫く戦線離脱。痛いですねコレは痛い(見所的な意味で)

「あと三十人程かしら」

「まあちよいと多いが、接近戦も出来るサーヴァントも増えたし、大丈夫……」

「皆さん! ごきげんよう!」

〈先頭のマリーが避難民に声をかける。その瞬間——アマデウスの顔色が変わった。青ざめ、何かを恐れるような顔で、彼はマリーを見ていた。

つと、どうしたんでしょうね。後は撤退するだけだと思っただけです……なんか他にこの場所でイベントってありましたかね。ファブニールは藤丸君の方に居ますから、どれだけ素早く取って返しても、ここにはまだ来ないでしょうし……

〈貴方は、その顔が酷く気になった。まるで、何かを恐れるような

……!

◇——ゲオルギウス！ エリザベート！ 警戒を！

◇——清姫！ 香子さん！ 気を付けて！

えっ、ここで選択肢!? ど、どうしましょう。状況があんまり理解できていないんですけど……と、取り敢えずホモ君を担いでるゲオルさんに無理させる訳にいかないので清姫を選んでおきましょうか。

「マスター!? どうなされたのですか!？」

「……香ります……嘘を付いている匂いが……その群衆の中から!」

『えっ!? 何々?!』

◇清姫が言った言葉。その意味も、方法も、今は無視した。その内容を理解した瞬間に、直感的に、貴方は持っていたバットを群衆に向けて放り投げる。誰かに当てる積りは無い。貴方の脳裏に浮かぶ最悪の可能性を、僅かでも妨害する為に投げつけた。

◇——アマデウス！ 前だ！

「——ようやく、隙を見せてくれたね」

……あつ（絶望） この声って。

◇群衆をすり抜けるように飛び出してきた、一つの影がバットを弾き飛ばして迫る……しかし、その僅かな時間の間にその影との間に、割り込んだ姿があった。

「——残念だった、な……狂騎士」

「貴様っ!」

◇——マリアを守る様に立ち、突撃してきたセイバーの刃を体で阻んでみせたのは、アマデウスだった。

ここ、今回はここまでです！ あ、アマデウスウウウウウウウウ!?  
?

## 影よりの一手 その二

皆様こんにちは、ノンケ（理性蒸発ライダー）です。

前回はセイバー君ちゃんが不意打ちを……って言ってる場合じゃないですねえ！ アカンこのままじゃアマデウスが死ぬう！

「——あま、どうす？」

「マリアさつきと、ぐっ、下がりな……あんまり、もたないぞ、ぼくは」

＜貫かれていた。セイバーの突き出した一閃で。アマデウスは、間違いなく貫かれていた。もしアマデウスが、デオンとマリーの間立ち塞がらければ、貫かれていたのはマリーの方だっただろう。

『……どういう事だ!? 急にそこにサーヴァント反応が出現した！

この反応は間違いない！ サーヴァント、シユヴァリエ・デオン！』

や、やられました……恐らくは彼のスキル、自己暗示です。自分の体を変質させる程の強力な暗示能力！

避難民に自らを偽装し、カルデアの探知も潜り抜けて奇襲の機会を伺っていたようです。そんなほんへじや大分後に生かされた技術使うとかコイツ大分強化されてるぜ？

「シャアアアアアアアッ！」

「つち、バーサーカー狂戦士め……！」

＜三つの焰の弾丸が、セイバーに向けて飛んでいく。続いて動いたのは完全に理性の鎖を手放し、バーサーカーの本領を発揮した清姫だった。対するセイバーは、アマデウスから引き抜いたその剣が血の飛沫を四方に散らしながら、その火球を打ち落とす。

「嘘にまみれた狂気の匂い……なんて、悍ましい！」

「狂気に関しては、君に言われたく無いものだ……っ！」

すっごいブーメランのぶつけ合いを見たんですがそれは……いや、清姫ちゃんはここまで手段を択ばない訳では無い（個人的主観）のでブーメランはデオン君ちゃんだけですかね。それは兎も角、清姫ちゃんが時間を稼いでいる間に、アマデウスとマリーさんを回収しましよ  
う！

＜マリーは無事だ。しかし、表情を失って倒れたアマデウスを見つ

めたまま、全く動かない。明らかに彼女は正気を失っていた。

「マリールとアマデウスを誰か！ 撤退だ！」

「清姫！ 程々にして撤退を！」

「おいゴルア！ 逃げろ！ おい今勝てると思ってるのかゴルア！」

「分かりました！ マリーさん、此方へ……！」

「どうして、ねえ、わたしは」

「ちよ、アンタ！ しっかりしなさい！ ホラ！ 私の歌、作曲させて

あげるから！ 気をしっかり保ちなさいよ！」

「じよ……じや……い」

「焔が地面を舐める。剣閃が石畳を剥がす。逃げ惑う無辜の人々に向けて、逃げろと半ば追い立てるように、貴方達は逃げ出す。最後の力で、貴方はもう一度清姫に、撤退するように声をかけたが……清姫は、退く様子を見せない。

「逃がしません……！」

「退けっ！ 王妃、王妃！ オウヒイイイイイイ！」

清姫ちゃんもデオン君ちゃんも完全に、バーサーカーしててやだ怖い……やめてください……！ アイアンマン！ ガチ武闘派のデオン君ちゃんと真っ向から渡り合う姿迫力あり過ぎなんだよなあ。っていうか表情が完全に鬼とかのソレなんですよ、怖いねえ……あれ？

ちよと待つて?! これって清姫も置いて撤退する感じ?!

「まったくアイツ……！」

「今は流星に、彼女を連れて逃げる余裕はありません！ ここは、任せるかしかないかと！」

「清姫に背を向けて、足を動かそうとして……体から力が抜ける。貴方は自分が怪我人だという事をすっかり忘れてしまっていた。休むどころかささらに酷使したせいも、もう貴方には意識を保っている事すら、出来なかった。

あつ、コレは気絶しましたね。このゲーム、体力がゼロになっても死にはしません。気絶状態、いわゆるダウン状態になって、ここから更にボコボコにされると普通に死にます。これもケガの割合に寄りますが……多分アマデウスが一番キツイ状態です。



……  
マリーさんと香子さんの宝具次第で何とかなるかもしれませんが

……  
〽——貴方が次に目を覚ますと、そこは森の中。日は大分傾いているように見える。貴方は柔らかい何かの上に頭を乗せられているようだった。

「——っ！ マスター！ 気が付いたんですね……！」

つとお、画面再開……とこのテキスト、まさか……やりました（完全勝利） 香子さんに膝枕してもらってます！ 和風美人の膝枕とかつよい（確信） お前ノンケかよお!?!（罵倒）と言われようが私はコレが好きです（鋼鉄の意思）

……とか現実逃避してないとやってられないんだよなあ……（意気消沈）

「良かった……」

「——康友！」

〽貴方が首を倒すと、そこには分かれて行動して居た、立香が立っている。どうやら自分が気絶していた間に、合流したらしい。

「馬鹿野郎、無茶しやがって……！ ヤバかったんだぞ！」

『本造院君！ 聞こえる!?! この指何本に見える!?!』

〽アマデウスは!?! 清姫は!?!

〽……皆は?!

上を選ぶしかないですよ……（絶望）

『清姫は、まだ分からないけど……彼は、その』

「ここまでもつてたのが奇跡だって……さつき、マリーさんに、看取られて」

あっ……やっぱ霊核を砕かれてたかあ……サーヴァントにとっての心臓のようなものなのですが、アレだけザクつとやられてたら、それもあり得ると思います……悔しいなあ……（無力）

正直、さつきザククリやられてた時、覚悟してましたが……狂いそう……！（悲しみの奔流）

『君にも伝言がある。『マリアとの恋物語は、また何れ』と』

「……マスター」

◇……聞きたかったよ、アマデウス

辛いですねコレは辛い……っていうか、特異点で仲良くなっただけのホモ君でコレなんですから、長い付き合いのマリーさんが心配ですねえ。大丈夫なんでしょうか。

◇……もう一つ気になるのは、マリーの様子だ。貴方から見ても、アマデウスとは、とても良い関係だったように見える。彼が亡くなった今、どれ程。

「……その、マリーさんは……結構、ショックを受けて……」

『今、ジャンヌとマシユの二人がついてくれているけど……無理もない。彼女はもう戦えないかもしれない』

これ以上聞くと泣きたくなっちゃう、もういいよ、ヤバイヤバイ……（寂寥）で、清姫ちゃんはどうなったんですかね。一応ホモ君が意識落とすまでは元気に暴れてましたが。

『少なくとも、清姫に関しては探知範囲の外に出るまで反応はあったから、まだ生き残ってる可能性は、有ると思う』

あ、良かった……流石に味方を二人も一気に失ったら私もプレイ意欲がごっそり削れるんだよねあ……一人でも十分辛いですけど（憤怒）

◇……この先の特異点でも、こういった事はあるのだろうか。戦う事に異論はない。だが、こうして仲間を失うというのは……それとは別に、貴方の心に影を落としていた。

◇ストレス値が大きく上昇しました。

ホモ君結構キてるじゃないか（当然）普通に各種ステータスに疲労とストレスのダブルデバフが掛かってもうめちやくちやや……ああ、こんなじゃ戦えねえぜ。早う回復しようや（提案）

『……この話は、また後でにしよう。傷は治ったとはいええ、体力の回復には少なくとも一日はかけないといけない。安静にしていな』  
「そう、ですね……俺も、目が覚めたって聞いて、その。騒ぎ過ぎました」

お通夜みたいな空気してんなお前な。実際お通夜みたいなもんなんだよねあ……アマデウスは志望、清姫も生死不明……辛いですねコ

レは辛い……

しっかし、彼のセイバーとは強烈な因縁が出来ましたねクオレハ……とか言ってますが、でも一番因縁が出来たのはたぶんマリーさんだと思っうんですけど（名推理）

「おや、マスター。目覚められましたか」

「メドゥーサ様」

「～お大事に。そう残し去っていく立香と通信を切るロマニ。入れ替わる様に貴方の元へやって来たのは、メドゥーサだった。思わず貴方は問いかける。メドゥーサは大丈夫か。他のメンバーは。仲間を一人を失って、他の仲間が無事なのかも、酷く心配になってきた。」

「此方は問題ありません、レオニダス、マシユ、ジャンヌ。皆無事です。それと、ジークフリートの事はロマニから聞いているでしょうが、彼も全快しました」

「おお、既にジークフリートさん復活の儀式は終わっていましたか。となれば、もうオルレアンに攻め入るのも時間の問題、と言った所でしょうか。すいませえくん、本造院ですけど、まくだ時間掛かりそうですねえく？（ホツかち） いやホモ君が回復してないから無理ですけど（逆転論破）」

「～良かった。と貴方は胸を撫で下ろすが……同時に、その中にアマデウスが居ない事を余計に考えてしまう。決して長い付き合いでは無かったが、それでも。この特異点で話し、共に旅をした相手だ。考えない訳がない。」

「……シキブ。そろそろ貴方も休まれた方が良いのでは？ 看病は、

私が代わりにしよう」

「え、ですが私はサーヴァントですので、そんな、疲労など……」

「サーヴァントだとしても、精神的疲労は馬鹿にできないものです。貴方も、彼の死や他にも、色々思う所もあるでしょう。それでもマスターをずっと看病していたのですから」

「～はっ、と香子を見る。アマデウスと友好を深めていたのは、香子も同じだ。けど彼女はそんな様子を見せず、こうして自分の看病すらしてくれていたのだ。」

〈…ごめん。また、迷惑をかけた。〉

〈俺って奴は、本当に……貴女に迷惑しかかけない。〉

自戒を込めて下だよお！

「いいえ！　今回はマスターの所為ではありません！　ランサーとの一騎打ちも、アマデウス様の……死にも、なにも」

〈そこまで言って、香子は言葉を詰まらせ……暫くして、それは嗚咽へと変わった。泣いている。香子も、相当に無理をしていたのだろう。〉

「本当に……ご無事で、何よりです……マスター」

辛い(辛い)　アマデウスがキボウノハナーして、自分も凄く悲しいだろうに、そんな中でも頑張ってホモ君を支えようとしてくれる香子さんが本当に女神で辛い。

今回は……ご無事で、ご視聴、ありがとうございました。

## 騎兵と語らう その一

皆さんこんにちは。ノンケ（花園の花嫁）です。

前回は……色々ホモ君も皆もボロボロになりました。アマデウス……必ずマリーさんを守り抜いて、ついでにおフランスを救って見せるから、天の上から見てくれよな―頼むよ―（必勝の誓い）

〈これ以上、彼女に甘える訳にもいかない。香子にも死者を悼む時間が必要だろう。そう考え、貴方は香子に、もう後は自分一人でも大丈夫だからマリーさんについてやって欲しい、と伝えた。

「マスター……分かりました。メドゥーサ様。後はよろしくお願いします」

「お任せを」

いつまでも甘えとるばかりじゃいかんのじゃない！（独り立ち）香子さんもアマデウスの奴を悼んでやってくださいオナシヤス！

という事で香子さんは一旦フェードアウトです。さて、画面ではホモ君も立ち上がって適当な木の方に体を預けようとしています……おや、メドゥーサさんに引き留められましたね。

「貴方は此方に」

〈一瞬、ハテナマークを浮かべた貴方は、気が付くとメドゥーサの膝の上に寝っ転がっていた。先ほどの香子とメドゥーサが、そっくり入れ替わった形だ。

〈え？

〈な、何をするダアーツ！

誤字はNGなので上だよ（堅実） いや、マジでこちらも困惑します。香子さんとは多少仲良くなったんで分からなくもないんですが……なんでメドゥーサさんが膝枕を継承してるんですかね……？

「大人しくしていなさい」

〈そもそもなぜこんな事を、と貴方は返す。何故膝枕なのか。何故香子のやっていた事を継続しているのか。香子に迷惑をかけないように彼女と代わったのに、これでは迷惑をかける先が変わっただけではないかと。

「別に膝枕程度、そこまで頓着する物でもありませんし。貴方が回復するのは早い方がいいと思っただので、まあ木よりはマシでしょう？」  
はえ、くすっごいCOOL……特にマスターを心配している、とかいう様子を見せないのがノーマルメドゥーサさんらしくていいっすねえ。初代？ 初代はサクラという最良のマスターが居たから……（初代至上主義者）  
「それに……」

メドゥーサがふと視線を他所に向ける。向いた方は、立香やマシユ達が、マリーを慰めているだろう場所だった。

「私はあのような場には相応しくないのです。まあ、ここで大人しく居られるなら、膝の一つくらいは別に貸してもいいかと。特に疲れもしませんし」

なんていうか、メドゥーサさんらしいセリフですね。他人と交流するのに基本的に頓着しませんからねえ、メドゥーサさん。だがここにはホモ君が居るからその代わりにホモ君とコミュするんだよ！

「ああ、申し訳ありませんが。慰めの言葉等は期待しないでください。そう言った言葉は正直、苦手です」

彼女はどうやら言葉を選ばない性格らしい。少し苦笑いしたが、慰め等は欲しくないから大丈夫だ、と返した。

「そうですか……てつきり、モーツアルトの事で意気を落として、何かしら慰めの言葉でも期待しているのではないかと思っていました」

メドゥーサさんに囁かれながらお慰めいただく!?（難聴）それは兎も角、ホモ君は基本的にそういうのは要らない性格みたいですね。まあ選択肢を見ていた限りなんていうか慰めを欲するタイプの性格ではないのは分かっていましたが。

慰めを欲するより先に、やる事がある。

俺はその様に情弱ではない。

取り敢えず乱世の霸王でも気取ってそうな下は置いておいて、よう言うた。それでこそ男や。かっこいいとこ、出そうと思えば（王者の風格）

「……そうですか。ここでも思っただのですが、今の人とは思えぬほど

に強靱ですね、貴方は。普通なら彼女の様に落ち込んでいても無理はないというのに」

〈強靱ではない。と貴方は返す。アマデウスが亡くなったのは正直、泣きたくなるほどショックだ。しかし今の自分には、そんな風に倒れている暇は無いのだ、とも言った。

「暇はない？」

〈アマデウスは、命を懸けてマリーを守ってみせた。であれば、彼への一番の弔いは、彼が恋していた少女を最後まで、あの狂剣から守り抜く事であろうと。その為に落ち込むよりまずはしっかりと休んで、また戦えるようになるのが先決だ、と。

あたりまえだよなあ!? マジのバーサーカーと化したデオン君ちゃんを止めなきゃ嘘だよ嘘! ハハハ! とはいえほんへでは持ちこたえていたのが、この世界線では完全にああなってしまったのは、ほんへでもデオン君ちゃんがこうなる可能性は十分あったという暗示だった……? コレだからおフランススガチ勢は……(風評被害)

「勇敢なのですね。どうやら心配は必要なさそうです」

〈心配してくれていたのか? と貴方はメドゥーサに問う。素振りからして、自分の事は特に気にもしていないと思っていたのだが、と。……何のために私が貴方の召喚に応えた、と思っているのですか。特異点で、逃げずに戦って、私を止めた貴方になら、力を貸しても良いと思ったからです。言葉を飾るのに興味はありませんが、心配位はします」

おく、思いやりが気持ちよく、inして下さい!(文法に無知) 基本的に言葉を尽くさないタイプの人なだけで、思いやる心はちゃんと持ってるって、それ一。

「それに、マスターを心配するのも、一応サーヴァントの務めですから」

〈ありがとう。メドゥーサ。

〈〈じゃあ心配を吹き飛ばすためにちよつと狩りでも行っていくつか!

そんな事(選択肢下)する前に回復するんだよあくしろよ。ちゃん

とお礼を言える人間になりましたよね〜（お兄さんとの約束）

「いえ。礼は不要です」

＜しかし心配はしてくれていても、やはり言葉には遠慮はないらしい。少し突き放したような言い方に、貴方は苦笑いを再び浮かべてしまう。

「……しかし、お礼、ですか。すみません。撤回します。本が読みたいのですが、礼をというのであれば、幾つか仕入れていただければ幸いです」

おつ、そういえば。アタラクシアではメドゥーサさんも香子さんと同じく本の虫でしたね。呼んでる本の内容は大分違いましたけど。そう考えるとメドゥーサさんと香子さんは相性のいいキャラだったのかもかもしれません。

＜貴方は、既に香子の為に本を仕入れるのをダ・ヴィンチに頼んであるので、それで良ければ、と提案した。

「構いません。ですが、贅沢を言うのであれば名作ばかりではなく、普通の作品から迷作まで色々取り揃えていただけると、ありがたいのですが」

アタラクシア（本の雑食）再現のセリフ良いゾ〜これ。っていうかあの大図書館に迷作が増えるって中々の事態では？

＜どこまで実現できるかは分からないが、香子の欲しい本が集まった後でいいなら、と貴方はメドゥーサの言葉に頷いた。

「では、それが実現するのを楽しみにしています」

こう考えてみると、本繋がりの召喚でもあったんですかね、メドゥーサさんと香子さんって。まあ一番の触媒は頬の傷でしょうけど。まあだ（治るのに）時間かかりそうですね。え、一生治らないって？ そんなー。

＜この傷の縁だ、出来るだけの事はする、と頬の傷を撫でていた貴方を見て、メドゥーサは少し考え込むような仕草をし、口を開いた。「――では、もう一つだけ、宜しいでしょうか」

＜＜いいとも！

＜＜ダメ。お願いは一日一個まで。



下の方が教育上宜しい気もしますが、基本的に私はサーヴァントの皆様にはだだ甘マスターなので上だよ（意志薄弱） 現世に来てくださった皆様に楽しい滞在時間を提供するんだよ！（ホテル・カルデア並感）

「であれば。私の馬……ライダーの私に付随する天馬がいるのですが。偶にでいいので、彼と散歩をさせて欲しいのです。彼と空を翔けるのは、心地が良いので」

＜そう言われ、貴方は一つ思い出す。戦闘シミュレーターが確かカルデアにはあった。それをうまく使えば、そのお願いも叶えられるのではないかと。後でロマニに相談してみようと、貴方はメドゥーサにその旨を話した。

「ありがとうございます。よろしくお願いします。マスター」

サーヴァントの要望を叶えるのも、マスターの仕事の……内や（堂々）

まあ大図書館命名の悲劇に関しては名前通称大好きおじさん 極道マンモスババの要望を叶えず却下するのもやぶさかではありませんが……まあ、もし征服王と雷帝が揃ってしまった場合に考えましょう。

＜そうしている内に、貴方はメドゥーサの言っていた言葉を思い出した。アマデウスの事以外にも、香子は何かを気にしていた、と言った風の事を。

＜香子さんにも、こうやって話を聞かないとね。

＜少しでも元気づける為にも、香子さんとも話さないで。

まあどつちでも良いけど、偶には下も見たいので下だよ（ランダム）

「――それは、やめておいた方が。彼女も、整理が必要だと思いますし」

ん？

「彼女は、貴方の額を撫でて、何かに思い悩んでいるようでした……推測するに、貴方に関する悩みなのではないのでしょうか」

……あつ（察し）

今回はここまでとなります。ご視聴、ありがとうございました。

## 騎兵と語らう その二

皆さんこんにちは。ノンケ（夜霧の殺人鬼）です。お母さんはここに居る（威風堂々）

前はメドゥーサさんとのコミュパート……かと思ったら、速攻で不穏な雰囲気が出てまいりました。今はちよつとナイーブな状況だからこれ以上の面倒を増やすのはやめてくれよなー頼むよー。

「彼女は、貴方の額を撫でて、何かに思い悩んでいるようでした……推測するに、貴方に関する悩みなのではないのでしょうか」

◇俺に関する悩み……もしかして。

◇俺のハゲを心配して……？

下はほぼと言っていていくらありえないですが、一応選んでみましょう。僅かでも可能性がある事を諦めてはいけない（希望皇）

「その頭に希望は無いと思いますが……そうではなくて」

ですよね（絶望）

「恐らく、貴方の体から香る……その匂いに関する事では？」

◇そう言われた瞬間、思い出す。ランサーが言っていた……自らに流れるという、異形の血の事。ロマニはカルデアに戻ってから確認すると言っていたが。

「初めから気になってはいました……とはいえ、特に言及する必要もないと思ったので黙っていたのですが」

◇ええっ!?

◇もしかして貴女も私の心を……!?

いやメドゥーサさんに読心能力は無いから（苦笑） とはいえ、キヤスニキもそうですが気付く人と気付かない人の差が分かりませんねクオレハ……

「私はそれなりに血にはうるさい質でして……そういった類の化生、あとは多少鼻の利くのであれば、その頬の傷から香る匂いで、ある程度は」

一発判明した（困惑） え、（ホモ君は）そんなん知らんし（素） ヲラド公もそんな事言っていましたねえ。あれ、ちよつと待ってください

ね。って事はこれからもこの匂いを嗅ぎつけた人に絡まれる事が増える……？ ひえ、怖いやめてください……！ 声かけてくる心当たりが多すぎる。吸血鬼大杉って、それ一番言われてるから！

「まあ人間であろうと混ざり者であろうと、私は気にしていませんが……シキブはそういう風に割り切れていないのでは」

〈そういえば。貴方は特異点Fで初めて出会った頃から幾つくか、彼女が奇妙な反応を見せた事があったのを思い出した。彼女にも、何かしらの心当たりがあったのだろうか。

「その様子ですと、何か心当たりがありそうですね」

あ、ちよつと黒陣営のランサーに追突してしまって、その示談の条件に……全然違うだろいい加減にしろ？ お、そうだな(素直) ただそれくらい、ヴラド公との一騎打ちしたあの時はピンチだったんだよ。分かる？ このダメージの重さ(現在重傷ホモ)

「敵方のランサーから……成程。角が生えていたのも、あのマゼンダカラーのランサーが目撃していたと」

〈気にならない、と言えば嘘になる。何故香子がそれを気にしているのか。そもそも自分の中に眠る力とは、一体何なのか。

〈カルデアに帰ったら、ちゃんと調べないと。

〈血筋がどうであれ、戦うことに変わりはない。

ホモ君は自分の血筋についての知識はナオキOFナオキです。ヴラド公のご指摘によっていよいよ浮かんできた部分です。こういうのもDLCの醍醐味ですね。追加された生まれで様々なイベントのフラグが立つ。私としてはこの鬼種の魔の生まれを全力で楽しみたいですので、これからもそういう方向のイベントはガシガシやっつくからなあ？

という事で、多分下選んだら一切調べずに終わるんでしょうが、そんな見所さんの無い実況動画は申し訳ないがキャンセルだ。

「調べる、ですか」

〈今は自分のルーツを調べられる状況ではない。であれば、調べるとすれば自分がどういう血を引いているのかになる。カルデアの様な凄惨な場所なら、貴方の血がどのようなものなのか、分かるかもし

れない。

「奇特な方ですね。自分が人外の血を引いている、と証明したいのですか?」

◇知らないまま、というのには駄目な気がする。

◇隠しごとをするのは良くないだろう。

確かに隠し事は良くないですよねえ、虚偽とは神が与えし大罪（聖職者） ホモ君が鬼種の魔だというのも、ちゃんと明かすのが良いでしょう。やっぱり正直に言うのを……最高やな！（健全な思考）

……と思いたいんですけど、香子さんが不穏なんですよねえ、やっぱり。平安生まれってというのが特に。けどねえ……

「シキブは……その事を知れば悩み、苦しむのでは？ 明かさない方が良い事実、と言うのも存在はします。それを明かすというのは、マスターの自己満足にしか、過ぎないかと」

◇——それでも。貴方は、香子に嘘をつく事の方が嫌だとハッキリと言った。

よう言うた！ それでこそ男や！ 男の子も女の子も、嘘は、いけないねんな……正直に、生きようね！

いや……僕がさつき（鬼に）成っちゃいました…… 鬼になったあ!? この中で!?（関西クレマー） とかなる覚悟は決まってるって事で宜しいですね!? え？ そんな覚悟は決めてないだろいい加減にしろ？ おっ、そうだな（寛大）

◇香子には幾度も助けられた。これからも、何度も助けてもらおうかもしれない。そんな相手に大切な事を隠し、嘘をつく、と言う不義理を働くという事が出来ない。それは、彼女から受けた恩を仇で返すような暴挙だ。自己満足だと言われる方が何倍もマシだろう。

「自己満足でも構わない。彼女には包み隠さず話すと?」

◇話す。彼女の目を見て、しつかりと。

◇話す。良い夜景のレストランで、指輪と共に。

（下の選択肢が）キショイ……!（気が）狂いそう……!（吐き気の限界）クソだよクソ！（容赦ない批評）もう嫌……（下の選択肢のセンスの無さに激昂するダメー）

それは兎も角。ちゃんと目と目を合わせて話すのは当然。目で会話するっていう位は目は大切。古事記にもそう書いてある。古事記には大抵の事が書いてある（風評被害）だから全くもって参考にはならないんですがそれは……

「……確かに。ええ、掌を返すようではありませんが。半端な覚悟で嘘をつくだとか、隠し事をするだとかは、そういう卑劣な真似はしない方が宜しいかと。ええ。そういう卑劣な真似は、良くないワカメの呪いを受けますから」

「良くないワカメは分からないが、ずっと真つすぐで育ってきた。嘘は苦手だし、そもそもずっと助けてもらえばなしの彼女の不安材料は、出来るだけ早く取り除きたい。その為にも先ずは知り、明かす事が大切だろう。」

「良くないワカメ……一体何処のメドゥーサさんの元マスターなんだ……（難問） EXTRAのワカメは良いワカメなんですけどね。歯ごたえシャキシャキだと思う（偏見）」

「先ほどのお礼もそうですが、誠実ですねマスターは。ええ、好ましい点です。貴方はそのままでも宜しいかと思えますよ。私は」

「此方を見下ろすメドゥーサが僅かにほほ笑む。貴方はそれに、出来る限りの満面の笑みで返した。」

「チンピラハゲなのに笑顔は眩しいホモ君。そしてそんなちやちなモノをかき消す、メドゥーサさんの微笑み。心が奪われそう……！奪われる！（断定）」

「では最後に……もし本当に自分が人間ではない、と証明されたなら。貴方はどうするお積りですか？」

「人間、怪物、その前に……」

「俺は俺だ。だから平気だよ」

「F G O特有の二択に見せかけた一択好きじゃないけど嫌いじゃないよ（好意的）」

「即答だった。それ以外は無かった。」

「言い切りますか。随分とまあ呑気と申しますか、鈍感と申しますか……普通なら、自分が何者なのかを思い悩む場面ですが」

「貴方は、自分が賢くないのを知っている。自分は馬鹿だから、そのような高尚な事は考えられない。ヴラド三世に言った通り、自分は自分である、としか言えないのだ。」

「まあそれだけ振り切っているなら問題ないでしょう。ここぞと言う場面で思い悩まれても、足かせになるだけですし、それに……その単純さは、嫌いではありません」

「おつ、キビシーー!! まあ緊張すると力でないしね、しようがないね(レ)」

メドゥーサさんはMUR大先輩が好みだった……? (新説) でも実際相性良さそうですよねえあの二人。なおBB劇場の聖人大先輩に限る(基本)

「貴方のような単純で善良な人間ばかりであれば……」

「メドゥーサが少し、すすけたような表情で遠くを見つめ……直後、顔色が一変する。何か信じられない物を見つけたかのような。」

「……前回、それなりに叩いたと思うのですがそれでも尚、攻め寄せてくるとは。それほどまでにあの竜に自信があるのか……しかたありません。迎撃の用意を整えねば」

「その視線の先には……木々の隙間、その先の空。太陽を背にして、大きな黒い影が、此方に迫って来ていた。貴方はそれを初めて見たが……分かった。アレが間違いなく、立香達を襲った邪<sup>フェアニール</sup>竜だと。」

ドファツ!?

まさかの襲撃イベントが発生したところで今回はここまでです。ご視聴、ありがとうございました。

## 天空の激闘 その一

皆さんこんにちは、ノンケ（叛逆ガール）です。チチウエハイルカ！

前回、まさかの襲撃。相手はまあ……分かりますね？ 巨大な影が飛んできているという事はつまりそう言う事です。まあもうヴラド公が倒れてるし、色々襲撃のタイミングが変わっていても多少はね？

「マスターはここに。私たちが迎撃に出向きます」

メドゥーサさんがホモ君を置いて迎撃に出向こうとしています。あ、オイ待てい。肝心な事思い出して忘れてるぞ（ミスの指摘）

＜貴方はメドゥーサの足首に手を伸ばし、行くのを止めようとしたが……止められない。物凄い勢いで暫く引き摺られて顔面を土まみれにされてから、ようやく気付いて貰えた。

草しか生えない。サーヴァントの馬力に振り回されてんなお前な。

「つて、マスター。どうして私の足に掴まっているのですか。ここに居てください。今の貴方ではワイバーン一匹にも勝てはしないのは分かっているでしょう」

＜＜そういう、問題じゃ、なくて。

＜＜そんな状態だから、ここに放置されたら多分死ぬ。

「……あ」

ホモ君は体力消耗激しく、淫夢君にも勝てないようなナメクジ状態なんだよなあ。ワイバーンなんぞに遭遇しようもんなら多分もぐもぐされた拳句ヴオエ！（嘔吐）つて吐き出されて終わりッ！ 閉廷！

以上！

「そうですね。マスターをここに放置しては……良い餌にしかありませんか」

＜囹になれというのであれば頑張つて囹役を努めようとは思う。だが、ボロボロの今の体でどれだけ囹をやれるかは分からないし、ぶっちゃけた話、メドゥーサの言う通りになつて終わりな気しかない。

重症になつても戦えるのは某正義の味方だけつてそれ一番言われてるから。大変申し訳ないですがメドゥーサさんに連れて行つても

らうしかありません。ヴラド公を倒した功績が帳消しになるレベルで足手まといになって笑うしかねえ……

「どうやらマスターを運びながら移動するのが一番安全ですか……であれば」

「メドゥーサが傍らに手を翳す。そこに集まる黄金の光。形作られるのは、四つの蹄とそして……純白の翼。それは紛れも無い、伝説の天馬だった。」

「この子と一緒に乗った方が良いでしょうね」

お、メドゥーサさんのペガサス。初お披露目ですかね。因みにこの子はガチ幻想種ですがそれでもメドゥーサさんの宝具ではありません。あくまでメドゥーサさんのデフォな移動手段でしかありません。やっぱこの人スベックおかし……

「それは……ペガサス！」

「まさか……ユニコーン！」

下の選択肢君の目は節穴なので必要なさそうですね（怒サイコ）  
当然ながらペガサスなので上を選択……下選んでたらどうなっていたのか気になるのは内緒（小声）

「ええ、私の可愛い馬です……さ、マスター。後ろに」

「ペガサスに跨ったメドゥーサ。その後ろに、よじ登ろうとした貴方は……ペガサスのお尻の一振りの後方へ吹っ飛ばされた。」

馬は臆病な動物です。乱暴な扱いはしないようにしましょう。（定型文）

まあ、そうなるとは思ってました。ペガサスはあくまでメドゥーサさんに懐いている、メドゥーサさんの馬なので合って、どこぞの馬の骨かも分からんハゲを乗せる為の馬ではないんだよなあ……

「……え、えつと。ちよつとお待ちください」

ちよつと気まずそうになってるメドゥーサさん可愛い。で、一旦馬から降りて、凄い良し良ししながら説得を試みるメドゥーサさんも可愛い。こう、身長が高くてモデル体型だからこそギャップが凄い……凄くない？

「お待たせしました。多分、大丈夫だと思います」



「貴方はちらつとペガサスの顔を見る。どことなく、不満の色が滲んでいる様に、見えなくもない気がする。ごめんな、と一言謝ってから、今度はメドゥーサにも手伝って貰って、出来るだけ優しく馬上に着いた。」

「しつかり掴まっついていてください……それなりの速度で飛びますので」

「しがみ付いている他に選択肢はない。貴方は黙って頷いた……その直後、体が持ち上げられるような、そんな感覚を感じた。衝撃に備え、目をつぶってしつかりとしがみ付く。」

「まあ、一悶着ありましたがいよいよ初めての空中散歩です。楽しんでいきましょう。」

「直後、体に風が叩き付けられる……だが、予想していたほどではない。ちゃんと掴まっついていれば、振り落とされるという事は先ずないだろう。それよりも……眼を開いた先に広がっていた光景に、貴方は圧倒される。」

「……スゲエ、俺空飛んでるよ。」

「やっぱ、コレ気持ちいいなあ！」

「FORO! 空中散歩気持ちいい〜! 見えてっかく! バツチエ見えてますよ! 青い空と輝く太陽。そして何処までも続く緑と大地! これをツマミに一升は酒飲めますよ!」

「大丈夫そうですね……どうやら藤丸達は既に迎撃に出向いているようです」

「目を下に向ければ、ファブニールを眼前に捉える一行の姿。見覚えのないサーヴァントとゲオルギウスが既にワイバーンと戦端を開き、多くのワイバーンを止め、そして削る様に次々と打ち倒していく。」

「ファアアアアアアアッ!? ちよ、そんな聞いてないねん! 録画録画……は、取り敢えずキャプチャボードで出来てるからめっちゃリピートしましょうね〜。ゲオルさんとジークさんの共闘が上空から観戦できるなんて、揃う英雄がどれもこれも伝説級。それでこそFGOだな。」

「藤丸達は……どうやら、あの二人から一步下がった位置にいるよう

ですね」

「メドゥーサの言う方に視線を向ければ、森の入り口付近に陣取るマシユと立香、ジャンヌとレオニダスの姿。エリザベートと香子、マリーの姿も見えない。まだ森の中にいるのだろうか。」

「立香達の所に合流しよう！」

「ゲオルさん達を援護しよう！」

「だからホモ君は戦える体じゃないから足手まといになるっていつてんだルルオ!? 援護は後回しにして合流して、どうぞ。」

「了解しました。とはいえそう容易くは行かないようですが……」

「メドゥーサが見つめる先。此方を視認したワイバーンが突っ込んできている。」

「良いでしょう。纏めて、蹴散らして差し上げます」

「メドゥーサさんが天馬を使って……突っ込みました！ なおまだ宝具は使ってません。それでもワイバーン共なんかより全然速いですねえ！」

「ワイバーン達は、メドゥーサとペガサスの動きに反応しきれず、空中でもたついているばかり。そんな間をすり抜け、鎖の一撃で次々とワイバーンの頭蓋を砕きながら進むメドゥーサの姿は、正に騎兵、ライダーのサーヴァントとして相応しい。次々と、此方へ向かってくるワイバーンを蹴散らして……そして。」

「——あつ、康友！ メドゥーサさん！」

「ご無事でしたか……！ あ、旗に噛み付いて……やめなさい！」

「あつと言う間に、貴方は立香達の元へたどり着いた。」

「やー、FGOで空中戦とか興奮する……興奮しない？ ほんへじや基本的に大地に足ついでこの殴り合いですからねえ。アポクリ位に空中戦とかド派手にやろうじゃねえか！」

「お二人ともワイバーンに襲われてるやもしれないと思っていましたか！ 無事で何より！」

「その程度に敗れるほど軟ではありません……とはいえ、今のマスターは軟ですが」

「本造院君も合流したか！ 良かった！ 通信に出ないから何事かと

思ったよ！』

……あつ（察し）

「……マスター、そういえば。カルデアとの通信は試したのですか？」  
　　＜完全に忘れていた。言い訳一つせず、貴方は彼方を眺めながらそ  
う眩く。ハゲ頭を、立香の振り下ろした剣の鞘が叩いた。結構痛かつ  
た。

「お前マジでそういう所しっかりしろお！ 死ぬぞ本当に！」

「やっさん……機材確認はしっかりしましょう。そういうミスは個人  
の努力で減らすことが出来ますからつ、ハアツ！」

　　プレイヤーの操作ミスとかではなく、劇中で忘れていくのか……  
（困惑）　ホモはガバガバっていう説を証明してしまいましたねクオ  
レハ……

『えつと、不運なミスもあつた所で状況を確認したいんだけど……い  
や、待ってくれこの反応は!?　ファブニールと黒ジャンヌ以外に高ラ  
ンクの魔力反応、どうやら向こうのサーヴァントも来てるよ!』

　　つと、どうやら向こうさんもサーヴァントを連れてきている模様で  
す。とはいえヴラド公は撃破され、デオン君ちゃんは清姫ちゃんとの  
死闘で詳細知れず。残ってるのでそんな強力なサーヴァントなんて  
……

「■■■■■■■■■■ーーー！」

　　＜ロマニの言葉の直後、咆哮と共に、巨竜の背から飛び降りたのは  
真っ黒な全身鎧。そしてその動きに合わせるようにして、無数の矢  
が、空を埋め尽くすようにして飛んでくるのが見えた。

　　そういえばお前ら居ましたねえ！（忘却への怒り）

　　今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。



○にて大暴れしたバーサーカー。オルレアン狂気の三大巨頭サーヴァントの一角にして、多分オルレアン敵陣営最強クラスのサーヴァント……その名をサーツ！（追真）ランスロット卿です！（激寒ギャグ）

◁そして続く様に飛んできた無数の矢が、全ての者に防御の選択肢を強制的に取らせた。その唯一の例外、防御せずそのバーサーカーに対応できたのはジークフリートのみ。

「狙いは俺かつ」

「■■■■■■ー■■■■ー！」

彼はオルレアンでは聖女絶対コロスマンと化していたのですが……今回はジャンヌを無視した辺り、ジークフリートさん一人を狙うように指示をされているらしいですね。

「——しまっ!？」

「ジークフリート殿！」

◁相手の攻撃を受けようと構えていたジークフリート。しかし黒い騎士が行ったのは直接の斬撃ではなく……剣に纏った魔力を地面に叩き付けての爆発。不意打ちの威力とその勢いに圧され、大きく吹き飛ばされてしまう。その後を追って、黒い騎士が駆ける。

いやそんなバーサーカーなのに、セイバーのアロンドイトみたいな手の込んだ芸当しなくていいから……（恐怖心）ん？ ちよつと待って（発見）ジークフリートさんを引き離したって事は？

「よくやったわバーサーカー！ これで……ファブニールが自由に暴れられる！」

◁その瞬間だった。天に留まっていたファブニールが此方へと向け降下を始めたのだ。やられた、と全員が思っただろう。ファブニールに対する切り札のジークフリートを、こんな力業で封じてくるとは。

「く、最初の矢も……この為でしたか！ ジャンヌ殿！ マシユ殿、この守りはお任せします！」

「いえ、私も前に出ます！ 藤丸君達は森の守りを！」

「ジークフリート殿には劣りますが、この身も竜殺し。好き勝手には

……！」

ジークさんが飛ばされたのは痛いですね……コレは痛い。スイツチするようにレオニダス王とジャンヌがゲオルさんと並びました。取り敢えずこれで何とかジークさんが戻ってくるまで時間稼ぎを……あれ？ さつきより硬くなってないか？（困惑）

「無駄よ、幾らアンタが竜殺しでも、ファブニールを討ち果たせるのは……今吹き飛んでいったジークフリートだけ！」

∨ファブニールと共に降り立った、黒いジャンヌ。そして、その竜の背から飛び出してくる二つの影。片方は、以前襲撃を仕掛けて来たアサシンだが……もう片方に覚えはない。獣の如き耳を生やした、翠色の女性。

「ジークフリートさえいなければ、ファブニールとワイバーン共、バーサーク・アサシン、バーサーク・アーチャーだけで十分始末できる……サーヴァントが居る今、この前のように行かないわよ」

片方は集団得意のアタランテ姐さん。もう片方は吸血鬼の馬力を持つアサシンさん。どっちも普通に強敵なんだよなあ……

∨荒い息を吐き出すファブニールが、此方を睨みつけている。ワイバーンの応援が続々と駆け付ける中、それを従えるように二騎のサーヴァントが黒いジャンヌの傍に控える。状況はかなり苦しい。

とは言ったものの、あの三人がいるだけでどうにかなりそうな気もしますが、ほんへとRPGは違うのできついのはきついっすけど。しかし……それだけじゃ後ろが……後ろが……（最大の苦難）

「……藤丸。正直此方は手負い、状況も劣勢。撤退も視野に入れねばならないのでは」

「ダメだ！ ジークフリートさんを置いていけない！」

藤丸君の言う通り撤退してジークフリートさん置いて行くと、先ずファブニールに勝てなくなりそうですし、何より見捨てて逃げるとか調子こいてんじゃねーぞ、エンジョイプレイ失格。分かる？ この罪の重さ。

「……そうですね。ジークフリートさんは私たちの為に、傷ついた体のままでも戦おうとしてくださいました。そんな方を見捨ててオー

ダーを成し遂げても」

『——ジークフリートは、戦力としても大きい。彼をここで失うのは正直痛手以外の何者でもない。撤退するにしても、彼を確保してからじゃないと』

＜マシユが、ロマニが、立香が。彼らがそこまで信用する相手を置いて行く、という選択肢は貴方の中から消え失せた。まだ話しても居ないが、ジークフリートはきつと良い人だ。それなら、自分も助けたと思った。

よう言うた。それでこそカルデアや！ 誰かを助ける為にエンジン全開！ カルデアの面々は良き人々だってハッキリ分かんかね。

「……私だって置いて逃げる、とは言っていないのですが」

「あ、いやそういうつもりでは……ご、ごめんなさい」

あ、メドゥーサさんゴメン……凄いい二人共焦ってメドゥーサさん慰めてて草生えますよ。ちゃんと人の話は聞こう！（提案ゆうさく）

「しかし実際問題、ジークフリートを回収して逃げる、となると相当難しいかと」

「それは……」

「コレだけの数のワイバーン、それに……っ来ます！ 散ってー！」

＜メドゥーサが叫び、咄嗟に全員が四方へ散った直後……蒼い焰が津波の様に押し寄せる。ファブニールが猛っている。竜の魔女の怒りに同調するように。貴方は空から、メドゥーサと共にガラス状に変質した大地を眺めていた。

「——ご覧になったようにはファブニールが居ます。アレの攻撃をすり抜けつつジークフリートだけをかっさらうと言うのは、至難の業かと」

焼けたかな？（一目瞭然） 少なくともアレを貰ったらホモ君は乙ると思います。すっげえ死体になってる、はつきり分かんかね（死体以下）

＜状況を打開しようにも、メドゥーサと完全なお荷物の貴方の二人だけではどうにもならない。寧ろ貴方が居る分、彼女の全力が発揮できないという可能性すらある。かといって誰かと連携しようにも、今

の一撃で散り散りにされてしまった。

「ジークフリートを引き離れた上で、我々を散り散りにする。初めに連携を取られた事、ジークフリートの存在、その辺りをしっかりと考えて戦いに臨んでいますね……作戦が練られている」

こんな作戦考えられる奴なんてジャンヌ・オルタ陣営に居たかと思いましたが、そう言えばジルって腐っても元帥なんですよね。情報が揃えばこれくらいの作戦は考えついても不思議ではないと思います。

「このままでは各個撃破で終わる可能性も……」

＜ファブニールを初めて見た貴方でも分かる。あの竜は強大だ。連携を取らずして太刀打ちできるような相手ではないだろう。そう思って見ていたファブニールと、視線が合う。それだけでも震えが来そうだったが……その時に、ふと気づいた。

＜……ファブニール、こっちに注目しているような。

＜ファブニールって、禿が好みなのか？

ハゲな好きなファブニールとかあまりにも悲しすぎると思うので上を選択。でもジーク君に慕われていると考えたら悪くないかもしれない（狂人）

「そう言われてみれば……以前、散々ばら邪魔をし、コケにしたのを覚えていられるのかもしれないね。賢いのでしょうか」

＜……貴方は、直感的にある事を思いつく。ファブニールがこの場に居るから危険だ。であればこの場から引き離してしまえばいい。その為には。

「……はい？」

＜貴方は、メドゥーサにある作戦を提案した。

何かホモ君が思いついたようですが、今回は時間的にここまでです。

ご視聴、ありがとうございました。



## 天空の激闘 その三

皆様こんにちは、ノンケ（ケモミミ姐さん）です。

前回はホモ君がファブニールをどうにかする為のアイデアを閃いた所からです。この状況を打開する程の作戦を思いつけるとは、意外にホモ君は知能派なのかもしれません。ホモ君の作戦に期待しましょう。

「理屈は分かりましたがマスター、その、本気でやるつもりですか？

私は兎も角として貴方は間違いなく危険になりますよが」

「上手くいけば状況をひっくり返せる、試す価値はあると、貴方は改めてメドゥーサの腰にしがみ付いた。覚悟はできている。一人でサーヴァントに挑んだのだ、それに比べればどうという事も無い。

「全く、奇特なマスターに出会ったものです……では行きますよ。覚悟を決めなさい」

いやどんな作戦思いついたのホモ君。メドゥーサさんがあんな顔するなんて、なんだよお前の策ガバガバじゃねえかよ（経験に基づいた高次元予測）

「ファブニールは、今はマシユと立香を追っていた。ワイバーンを連携で蹴散らしつつ二人は見事追撃を躲し、凌いでいる。だが躲し切れなくなるのも時間の問題だろう。」

「——ファブニール！」

「メドゥーサが呼び掛けた瞬間だった。その二人を追っていたファブニールが視線をメドゥーサに向ける。それは明らかに、苛立ちの籠った感情。メドゥーサに苦戦させられたのが余程腹に据えかねているのだろうか。」

「一体メドゥーサさんが何をしたんだ、言いたくなるくらいには物凄いい意識されていますね。一声でこっち向くなんて、もしかしてファブニールは逆にメドゥーサさんに種族の壁を超えた恋心を抱いている可能性が微粒子レベルで存在している……？ ジークさん!? マズいですよ！（人違い）」

「っ、アンタは……！」

「どうしました、先の戦いでは私にアレだけコケにされたというのに。真つ先に向かつてくるかと思いきや、別の獲物に目移りとは。怖気づきましたか……それとも」

＜続いて、メドゥーサが目を向けたのは、黒いジャンヌ。彼女も、メドゥーサを凄まじい形相で睨んでいる。どうやら余程向こうの陣営から恨まれる真似をしたらしい。

「その魔女の無能な指揮に、従わされているのですか?」

おっ煽るウー! めっちゃメドゥーサさん煽ってて草生える。

＜黒いジャンヌの目が、此方へと向く。

「——良いわ蛇女、そんなに死にたいならアンタから殺してやる! ちようどマスターも一緒みたいだしねえ……ファブニール!」

＜直後、ファブニールが天に向けて吼える。唯の咆哮の筈なのに、ここからはまるで拘束から解放された囚人の様な、歓喜をひしひしと感じ、そして……ファブニールは、天へ、メドゥーサへ向けて飛び立った。

そんなにメドゥーサさん殺したいんか君。猫まつしぐらで草も生えない。つていうかメドゥーサさんが乗ってるこの子が目に入らないのかオルたちちゃん。それともちゃんと見つけたけど、『ファブニールに比べたら見た目からしてザツコ♡ 全然相手にもならないわね♡』とか思ったのかな。可愛いね。敗北して（懇願）

「食いつきましたか……ではマスター、お覚悟を」

＜直後、メドゥーサがペガサスを反転させ、加速。迫るファブニールから逃げ出した。目的地など無い逃避行……だが、それでいい。ファブニールが此方に食いついた時点で作戦は成功しているのだから。

……んん? いや、でも、ちよつと待ってください。これつてもしかして、もしかするかもしれませんよ(嫌な予感) この時点で作戦成功つていうこの文章、そんなまさか。やんないよね、まさか。ホモ君は重体だし重体じゃなくてもファブニールの炎ウケたら一発消し炭だし。

＜メドゥーサと自分を餌に、ファブニールを戦場から引き離し、時

間を稼ぐ。後は現地にいる立香とマシユ他、此方の陣営の頑張り次第だ。

マジだったあー！ このホモ野郎自分を囿にしやがった！ 馬鹿じゃねえの（嘲笑） 迫りくるファブニールと時間稼ぎのドッグファイトするつもりだ！（メドゥーサさんが） 自殺志願者じゃねえの？（嘲笑） この人ガラス状にさせられただいちくん（人に非ず）の二の舞になりたいんですかね

「マスター、決して振り落とされないように。しがみ付いてくださいいな」

了解、と言った瞬間に体にかかる風圧が強くなる。先ほどは全く本気では無かった、とでも言うように、ペガサスは更に加速を続けているのだ。

……とはいえ面白くなってきました。あらゆる幻想種の頂点、竜種の中でも指折りの強者であるファブニールと、空駆ける幻想種の代名詞、ギリシャの海神ポセイドンとメドゥーサの子であるペガサス、空中戦においては何方も定評のある二種によるガチのドッグファイト。Fateではありそうでなかった戦いです。折角ですし楽しんでいきましよう。

「っ」

天を焼く炎から身を躲し、ペガサスが大きく旋回する。馬力は向こうがあるが、それが体が大きい故。特別速い、という訳ではなく、天馬の速さに僅かに劣る程。そして此方には向こうにはない小回りと言う武器が存在する。ファブニールと比べれば木の葉の様に小さいペガサスだが、その動きの軽やかさも木の葉のごとしだ。

「鈍重な事……そんな動きでは、この子には一生かけても追いつけませんよ、邪竜」

——ゴアアアアアアアアツ!!

ファブニール君かわいそう（嘘）メドゥーサさんに煽られてかわいそう（大嘘）かわいそうだから早く追いついて見せてね♡ほら、早く追いつくんだよあくしろよ。

火力はあるんですけど、火炎を吐き出すだけで弾丸みたく物凄い速

い攻撃でもないですし、普通にペガサス君に振り切られてしまうという。先ずうちさあ……速度、あんだけど……焼いてかない？（挑発）

∟地を焼き尽くす焰の波も、一向に空を飛ぶ一筋の流星を捉える事は出来ない。寧ろ焰を四方八方へと見境なしに吐き出すのは、いつそ間抜けにすら見える。邪竜と恐れられるファブニールが、まるで餌を目の前にぶら下げられ、手に入らないともしらずにその餌を追う馬の様だった。

∟ペガサスとメドゥーサの息はピッタリだね！

∟人馬一体とはこの事……ライダー、お主は我が誉よ。

「……」

変な選択肢は放っておいて。実際、メドゥーサさんの操作技術とペガサスの機動力があつてこそ、この逃走劇は成り立っていると思えます。ファブニールもきつと悔しがっている事でしょう。冷えてるか？

∟どうやらファブニールとて、ギリシャの伝説相手では勝手が違うらしい。ペガサスの表情も少しばかり得意げに見える程だ。

——グルルルル……！

∟低い唸り声を漏らすファブニール。自らの力が届かない、掠りもしない事に苛立ちを感じているのだろうか、一切此方から目を逸らさうとしない。貴方は、このまま相手を引き寄せておければ、地上での戦いで勝つことも出来るかもしれないと、希望を見出し始めていた。

希望を見出すなんてとぼけちゃってえ……（スマイル）もうファブニール君の居ない地上なら勝ち目しかない、ハッキリ分かんかね。ゲオルさん、レオニダス王、マシユ。この三人の並びの力強さよ（ほんへプレイ勢並感）

「……成程、それなりの知性は有しているようで」

∟だが、メドゥーサがボソリと呟いた直後の事だった。ファブニールがにやりと笑い、そして……唐突に下を見下ろした。その喉の奥から飛んでくるのは、無数の焰の弾丸。先ほどの火炎放射とは違う、更に広範囲を覆う流星群。しかも狙いは……地上だ！

へえ!? 冗談は止してくれ（震え声） 面白いえばファブニール君、

ほんへでも結構狡すつからいマネ普通にしてたような。め、メドウスさんに目を取られたように見せて地上攻撃の機会を狙ってたとか、流石悪竜汚い(誉め言葉) そんなに暴れるな……暴れるなよ……(懇願)

「——ですが、所詮は浅知恵ですね。読んでいますよ」

∨立香達が危ない……そう思っていた時には、既にメドウスは天に吐かれた火炎弾の下に潜り込んでいた。その間をすり抜ける様に飛ぶ、僅かの間に鎖が縦横無尽に宙を走って火炎弾を打ちはらう……火炎弾の雨を潜り抜けたその直後、打ち払われた火炎弾は悉く爆ぜて消え去った。

やりますねえ! (賞賛) ペガサス君に一切焦げ跡とか付けないように飛ばすとかうまいぞ騎乗(空気) っていうか、ペガサスの上で鎖を使いながら、誘爆する火炎弾の間をすり抜ける姿カッコ良すぎひん……? 女の子になっちゃう! (ファン意識)

「マスターからは、貴方を引き付けるように申し付けられていますので……申し訳ありませんね。貴方とは空での経験値というモノが違います」

∨——ファブニールは先ほどよりも特段低い唸り声を漏らし、此方を睨みつけた。今度こそわかる。明らかに、ファブニールは怒り狂っているのだと。

「貴方は確かに恐るべき悪竜でしょう……しかし」

∨ファブニールの激昂の咆哮に対しメドウスは……ただ、薄く、酷薄に、笑った。

「ギリシャからしてみれば、ただ一匹の怪物に、貴方は過ぎません……世界の広さというモノを知ると良いかと思えますよ? 駄竜」

ぴえん (カッコ良すぎて語彙が焼失したんですがそれは……)

ぴえん (今回はここまでです。ご視聴ありがとうございました)



か（確信）

「やはり、気遣い、というのは慣れていませんね……つと、来ますか」  
　　＼激昂したファブニールが突っ込んでくる。怒りのあまりなのか、一切火を吐く事すらせずにそのまま直接噛み付きに来た。

「そんな直線的な動きでは掠りもしませんよ」

　　とはいえ怒りで我を忘れた獣は狩りやすい、チガウウか？　チガワナイ・ダロ？　尚、倒すのはジークさんじゃないとキツイので、めっちゃ抑揚って翻弄するのに集中するのが一番だと思います（小並感）  
　　「とはいえ、何時までも飛んでいられる訳ありません。マスターが近くに居て、効率的に魔力を回して貰っているとはいえ、雀の涙ですし……」

　　ホモ君は魔力タンクとしてお世辞にも有能とは言えないからね。使い物にならないじゃないか（失礼）　つまりホモ君の魔力でメドウーサさんが飛んでいられる間が、地上の立香君達に与えられるチャンスタイムです。お前の勝利報告、突っ込んでくれよ！

「その分仕事はしないといけませんね。マスター、しつかり掴まっついてください」

　　＼後ろにファブニールを引き付けつつ、再びペガサスが加速する。噛み付こうとする首を紙一重で躲し、無数の火炎の弾丸をすり抜け、時には反転しファブニールのギリギリの所をすれ違う。

　　少なくともこちらはファブニール君に打ち落とされる心配はナイナイ！（未来の賢人）　そんなガバガバ攻撃して、バカじゃねえの（嘲笑）

　　しかし、長髪の麗人が乗った天馬が、巨大な竜を翻弄する……神話に揺われそうな光景ですねえ！　やっぱり特異点は神話製造機、ハッキリ分かんかね（エンジヨイ並感）

「さて、地上の方は……」

　　＼地上では、ワイバーンを蹴散らしながら、二騎のサーヴァントと、合流したマッシュ達が激しい攻防を繰り返している。無数の矢を凌ぐ大盾、そこから飛び出した三人が、敵方のサーヴァントへと肉薄する。押しているのは——自分達だ。

「どうやら心配をする必要は無さそうですね。あのまま行けば先ず負ける事は無いでしょう」

それにまーた同士討ちしてるんですがそれは。アタランテ姐さんがぶっ放してる範囲攻撃でガンガンワイバーン死んでるし、バーサーク・アサシンさんも被害受けてるし。最初の戦いからずっとあの人被害担当になってんねえ、道理でねえ！

「となれば、後は適当に時間稼ぎをするだけ、でしょうか」

◇◇上手くいつて良かった。

◇◇正直適当申したのが上手くいつてビックリしている。

本心を語る必要は無いので上だよな（沈黙は金） というかそれが本心だしたら考えないでの発言しスギイ!? このFGORPGは下手な選択肢が普通に炎上して終わりを告げたりするので、そういう考え無しは、止めようね！

「——っちい、ファブニール！」

◇その時だった。地上で事の推移を見ていた黒いジャンヌが声を上げる。瞬間、此方に意識を向けていたファブニールが、視線を地上へと向けた。

「戻って先ず此方から始末なさい！ それからその蛇女を！」

あつ、おい待てい（江戸っ子） そんな事をしてはいけない（必死） というかファブニール君さつきまでブチ切れてこっち追っかけてたのに邪ンヌの強制力が強すぎる……強くない？（恐怖）

「っコレはマズいですね……」

◇ファブニールをある程度引き付けていたとはいえ、戦場から遠く離れている、という訳でも無い。直ぐに地上の立香達を焼き尽くすのに、そう時間はかからない。

時間かからないどころか秒で壊滅、ふぎけんじゃねえよお前これどうしてくれんだよ！（憤怒） やはり（火力）ヤバい。

「救出は……間に合いませんか！」

◇◇メドゥーサ！ どうにか追撃できない!?

◇◇ことうとなれば総力戦よ！ 俺らも加わるぞ！

下とか（勝算が）壊れるなあ……総力戦でもまず勝てないからって



時間稼ぎ選んだんだから貫き通してどうぞ。

「全力を以って当たれば可能ではありませんが……私の全力をぶつけても、アレを打ち倒せるわけではありません。後の保証は厳しいですよ」

「そう言われ、齒を食いしばる。確かに、ここでメドゥーサを使い捨てるような真似など出来る訳がない。しかし、だからといって立香達を見捨てるのも当然無しだ。貴方は思考する。どうすれば、出来る限り時間を稼げるのか。」

ホモ君を放り出すとか？（純粹） そんな事したらホモ君は死ぬねんな……囹としては優秀ではあるからといって、それなりに貴重なマスターを使い捨てる真似もしてはいけない（良心） でもエンジンジョイ勢としては出来得る限りの選択を取るのが正解なんでしょうか（狂気）

「フアブニールは飛んでいる。飛んでいるから素早く取って返して移動できるのだ。当たり前の事……では、その当たり前が無くなってしまえば？ 頭に浮かんだその発想、実行可能か考える前に、貴方は即座に命を下す。」

「——令呪を持って命ずる！ 我が騎兵、メドゥーサ！ 宝具を以つて邪竜の翼を食い破れ！」

おっ!!? まさかの令呪で最高……出力を……キューーン（迫真）  
「……ふふ、成程。何も討ち果たす必要は無いと。であれば問題はありません。粉々には出来ませんが、翼を一時使用不能にする程度であれば！」

「メドゥーサが、もっていた手綱を確と握りなおす。貴方は、その手元に視線を向けた。彼女の宝具、話には聞いていた、その黄金の手綱こそが……！」

「思い切り突っ込みます。先ほどの比ではない程のスピードになりますので、全力で掴まってください」

ふおおおおおおおっ!!? まさかの一緒に天馬に乗っての宝具発動を見れるなんてFGORPGって素晴らしいですねえ（感嘆）

「参ります……『<sup>ベルレフオーン</sup>騎英の手綱』！」

「――一瞬の出来事だった。貴方とメドゥーサが一瞬、光に包まれたかと思つた直後にはファブニールが悲鳴のような咆哮を上げ、その動きを止めていたのだ。」

「羽のみを狙いました。流石に、暫くは動かさないでしょう」

「ファブニールが、体勢を崩している。羽が動いていない。飛翔出来ていない。空を飛ぶ翼をメドゥーサは、ファブニールから奪い取つたのだ。戦場に戻るどころではなく、彼の竜は宙で藻掻き鱗を落としながら、失墜していく。」

あゝあゝくく！ たまらねえぜ!!! (ちよび髭軍曹) 勝てはしませんでしたけどファブニール君を徹底的にお邪魔してやったつたww w太いしーちきん(達成感)がウアア!! オレモイツチャウウウ!!! ウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ!!! イイイイイイイイイイイイイイイイイイ!!! (エンジヨイプレイの醍醐味)

「っ、ファブニール!？」

「黒いジャンヌが悲鳴を上げたその一瞬で、決着は付いた。ゲオルギウス、そして立香がバーサーク・アサシンを引き付けているその間、ジャンヌとマッシュがバーサーク・アーチャーを釘付けにし、そして。」

「――そおおくおおおおだあああああ!!!」  
「咆哮と共に宙に放たれたレオニダスの槍がバーサーク・アーチャーを貫き、地面と繋ぎ止め……旗の切っ先と、大盾が、その身を切り裂き、砕いたのである。」

おゝ、地上も、いい仕事してんじゃん…… (感激)

これでは、ジークフリートさんを助け出せれば、あとはファブニールを倒すだけですなあ！ ダイナモ感覚！ ダイナモ感覚！  
YO! YO! YO! YO! (高揚するテンション)

今回はここまでとなります。ご視聴、ありがとうございました。

## 言える言葉 その一

皆さんこんにちは。ノンケ（悲劇厨）です。

前回、メドゥーサさんとホモ君の共同作業で見事ファブニールを打ち落としてみせました。ドラゴンスレイヤーとまでは行きませんが、竜特効が付いても可笑しくなくらいの活躍見せましたねえ！ タマラナイ……！（ダディー）

「……何とか間に合いましたね」

メドゥーサの見つめる先で、レオニダスとマシユがジークフリートが吹き飛ばされた方向へと走り出し、ジャンヌが黒いジャンヌと向き合う。双方互いから目を逸らさず、一切引かない。

「ファブニールは……もう既に立て直していますか。しかしあの黒い剣士も、三対一ではそう長く持たないでしょう。ジークフリートが解放されればファブニールを討ち果たす事も容易くなる」

これは勝ちましたね間違いない……って、あ！ ジークフリートさんが飛んでった方向からバサスロットが逃げ出してきたんですが。

アサシンと黒いジャンヌは既にファブニールに乗り込んでいた。眼下に残るワイバーンを尻目に、最後の黒い騎士を回収し、ファブニールは元来た方向へと引き換えしていく。

ワイバーンを捨て駒に、強力な将の喪失を防ぎましたね……これは紛れも無い知将。邪ンヌの頭脳に強化パッチが入ってないか？（疑惑） まあそろそろ決戦近いからね、しようがないね（ほんへ参考）

「しかし、危ない所でした。あと一手、何かを間違つて居れば総崩れも十分……つと、そろそろ下した方が良いですね」

力の全てを使ってしがみ付いて居たが、どうやら限界の様だった。もう腕に力が入らないし、気を抜いたら瞼を閉じてしまいそうで、疲れのあまり、磯臭い、変な匂いがした気も。幻覚だろう。大分体力を消耗しているらしい。

「全く、病人が無理をするから……今度こそ、安静にしておくべきだと思いますよ」

ウン（素直） 実際、病人が必死になってメドゥーサさんにしがみ付

いて、囀役やってた訳ですから今度こそちやんと休まないといけな  
い……いけなくない？」

「さて、私達も地上に下りましようか……おや」

「眼下には、既に立香達が集まって、此方に手を振っている。貴方  
は、気だるげな体に鞭を打って何とか手を振り返した。」

「康友—— お前説教だからさつきと下りてこい！」

「……やっぱり離れた所で降ろして貰えないか。そんなか細い声の  
お願いは、残念ながらメドゥーサに受け入れられることはない。それ  
でも、地上に下りるまではと貴方は無駄だと悟りつつも結構な抵抗を  
繰り返した。」

無茶した報いなんて悔い改めて、まあでも見所さんを手に入  
れる為なら一切の容赦はせず張り続ける所存です。張り続けられな  
かった奴が……負けなんだよオ……！」

「何か言う事はあるか？」

「正座である。体力消費してるとか、そんな生易しい事なんて一切  
に気にせず、速攻で、即座に正座である。言い訳をしたかったが、正  
直無茶をした自覚はあったので流石にそんな見苦しいマネはやめた。  
「やっさん、あのサイズの邪竜を相手取って囀を引き受ける、というの  
は非常に危険な行為なんです。メドゥーサさんが付いていてくだ  
さったとはいえ、正気ではありません」

「……なんというか、思い出す事が」

「？ ジャンヌ殿、どうなされたのですか？」

「いえですね、この、何というか。我が身を省みない無鉄砲さは、何処  
かで見えた事があると言いますか、何時か再会したら説教したくなる  
というか……」

「そう言えば同じライダーですね。まあ向こうは理性蒸発ピンク騎  
士、こっちはクール系天然お姉さんなんでタイプが全然違いますが。  
二人とも好きかい？ うん！ 大好きSA☆

「——兎も角、マシユや立香の言う通りです。マスターは無茶をする  
ための役割ではないとカルデアでは教わらなかつたのですか？」

「教えたつもりではあるんですけどね……どうやら藤丸君より、注視

すべきは彼かもしれないねえ。本造院君はカルデア帰ったら、ちよつと改めてマスターの心得を叩き込むからホント、そこの所覚悟しておくように』

＜情けも容赦もない一言が突き刺さり、貴方は泣いた。立香だって色々しているとは思うのだが。自分だって、全部やりたくてやったのではないと、言いたかったが……今回は自分で判断した事だったので、改めて黙りなおした。

ホモ君ボツコボコで顔中草塗れや。とはいえ、一応愛あるお説教ではあるから、諦めて窓際行つて反省するんだよあくしろよ。

「……とはいえ、ファブニールを引き付けてくれて助かった。ありがとうな、相棒」

＜地面に俯いていた貴方の目の前に、立香の手が差し出される。どうやらお説教はこれで終わりの様だ。それを察した貴方はその手を掴み……思いつき引つ張った。

「……ん？」

＜お前もサーヴァントと殴り合つてただろうが！ 見てないでも思っていたか！

＜何となくムカつくからお前は殴る！

ああそう言えばそうでしたねえ……地上でバリバリ女アサシン相手に、ゲオルさんとタッグ組んで足止めをしていました。これは、仕置きじゃな？ 後下は理不尽過ぎるので無視します。

「ぎゃー！ ちよ、やめ！ やめ！ 噛み付くな！ 頭皮を齧らないやマジで痛いって許してつていうか噛み付きつつなんで腕に……がああああ腕を極めるなああああ!？」

＜自分の事は反省している。だが、自分の事を棚に上げてなんか言つてた立香は絶対に許さぬと、貴方は立香に組み付き、絡み、暴れる。その内拘束から逃れた立香と、本格的な殴り合いになった。

「この野郎！ 大人しく安静にして寝てちゃんと回復するんだよ病人があー！」

スマブラ（正しい意味）ホモ君と藤丸君がわちやわちやしてる様子がとても微笑ましいですね（大嘘）マシユは大慌てしてる

しジャンヌは仲裁に入ろうとしてタイミング伺ってるし、レオニダス王とメドゥーサさんは世間話してるしで、滅茶苦茶だよ……ジークさんとゲオルさん？ 微笑ましいものを見る目で見てらっしゃいますよ（赤恥）

＜暫く大暴れした後、体力の差で立香にボロ負けした貴方はメドゥーサさんに肩を貸してもらいながらベースキャンプへと足を進める。

「先輩、やつさんは病人です。ちゃんと気遣わないと駄目です」

「ごめんよマシユ……」

＜だが、一矢は報いた。立香がマシユに説教されている、さっきの自分の様になっているのを見て、貴方はにやりと笑った。

後輩に頼る先輩の屑。で、何時ものキャンプへ帰還しました。エリちゃんと香子さんの姿が見えますね。

「まったく、アイドルに留守番なんて……あら、終わったの?」

「マスター! ああ、お怪我がまた増えて……マスター? 藤丸様との殴り合いで増えた、とはいったいどういう?」

ヌツ（サトラレ）……これは心読まれましたね間違いない。香子さんゴメンよ。ちよつとスマブラして、怪我増やしちまったんだけど……治してかない?（反省ゼロ）もうちよつと香子さんに頼る機会を減らして、どうぞ（激怒）

後エリちゃんがあそこに居たらとあるお方が居る関係上、清姫ちゃんとの二の舞になりかねないし、お留守番も多少はね?（TDN偶然）

＜察してしまった貴方は、取り敢えず謝罪の言葉を述べようとして……香子の傍らに居た彼女が、目に入った。

「あら、無事だったのね、皆。良かった……」

はあああああ……!!（慟哭）ま、マリー様が……我らが王妃のハイルイトが薄れていらっしやる?! 慰めなきや（使命感）

＜声に張りは感じられない。ロマニや立香の言った通り、マリーは相当なダメージを負っている。貴方は声をかけようとしたが……思いつかない。彼女に、何といえれば良いのか。

あつ、ふーん……（察し）アマデウスを失った悲しみは当人にしか

理解できない。ハッキリ分かんかね。無力感感じるんでしたよね  
……（一転絶望）

「……マスター、その」

＜香子も気が付いたのだろう。怒気が収まり、少し気まずそうな表情へと変わる。慰める言葉は、なにも思いつかなかった。ならば、せめて自分が言える事をと、マリーに向けて、互いに無事で良かった、と先ず、一言を置いた。

「ええ、アマデウスが……守って、くれたもの」

オオン……！（傷を抉ってしまった無力なホモ）マリーさんの悲しみを晴らしてあげたい……あげたくない？ でも俺達の手は、無力なんだなって（少年漫画並感）

＜……あまり、考えすぎないで。

＜……ねえマリーさん、俺はまたいつか、彼奴と話をしたいって、思ってる。

……！ ああ、そうですよねえ（覚悟完了）今回だけで終わらせるのは、確かに勿体ない。だから何時か再会したいと思いつつ、下だよね（一歩前進）

「……アマデウスと？」

＜いつかきつと会える。いや、会う。そう決めた。貴方はそう言う。あつて、彼奴の事をぶん殴ってやるんだと。勝手に守って、カッコつけて逝きやがって、と言うんだ。と。

「……そうね、あの人は勝手だから。文句の一つも、言いたいわね」

「マリー様……」

「香子さん。アマデウスとの思い出話に……少し、付き合ってくれないかしら」

マリーさんにも早く立ち直って欲しいけどこれ以上は何も言えないんやなって（無力なホモ） ああああももおおやたああああああ……（無力感に泣き叫ぶホモ）

今回はここまでになります。ご視聴、ありがとうございました。

## 言える言葉 その二

皆様こんにちは、ノンケ（不屈の剣闘士）です。飛べ、スパルタクス。

前回、マリーさんにあんまり何か言う事も出来ず、無力感感じるんですたよね……？ しました。もうちよつとなんか言えたら良かったんですけど、悩みの在り処は人それぞれで他人に測れないってそれ一番言われてるから。

〽元の場所まで戻ってきた貴方は、メドゥーサに助けてもらいながら地面に敷かれた布の上にゆっくりと腰を下ろす……その直後、貴方の前に、立香とマシユが立った。

「……此奴はちゃんと見張つてないと、何をしでかすか分からないから、ここは一番信頼できる後輩にお願いしたいと思う」

「という事で、やっさんの見張りを担当します、マシユ・キリエライトです！」

「それではマスター。私はこれで失礼します」

〽見張りをガツチリ付けられるという宣言をされてから、流れるように自分のサーヴァントがこの場から去っていき、貴方の目は死んだ。

めつちや警戒されてて草生えますよ！ 藤丸君がマシユちゃんを見張りとして配置するとか相当なもんだと思いますけど（名推理）しかしまるで図っていたかのようなメドゥーサさんの撤退の流れに草不可避や。

「マシユ、絶対に此奴から目を離さないでくれ。ちよつとした間にワイバーンの肉を狩りに行っても可笑しくない奴だ」

「分かりました」

〽分かりました、ではない。自分は一体何だと思われているのか、と全力で抗議したくなった。というか抗議した。まるで野獣か何かのような扱いではないか、と。

名前がホモ君だし（TDNあだ名）野獣って思われても仕方ないのでは？（冤罪） BBが量産されなただけかもしれませんがようね、



ん？（地獄耳） BBちゃんが量産されるって？ それはTDN悪夢な気がするんですがそれは……いや、どこぞのカーマちゃんが似たような事やってましたから慣れてるか（感覚麻痺）

「ムアスターア！ エリザベート殿が明日の行動についてご相談がある」と！

「あ、分かりました！ 兎に角、マシユを付けてるから、大人しくしてろよ康友」

「はい。お任せください先輩」

＜そう言っつて、立香は茂みの向こうへと消えていく。正直泣きかけた。十年來の親友からのあんまりな扱いに、心がへし折れそうだった。

今までの行動でそう思われなとか此奴相当アホだぜ（ド直球）

「と、いう訳でやっさん。このマシユ・キリエライトがしっかりと見張らせていただきますので。お覚悟を」

＜貴方は無言で寝つ転がった。真面目で、立香のお願いもしっかり聞きたい子なので貴方は何も言えやしない。もうふて寝でもしてやるつもり満々だった。

本造院君も中々、拗ねやすいねんな……まあ大人しくしていれば、怪我は治つてるので直に回復してまた暴れられるようになります、我慢してもらいましょう……ムアア！ 我慢できぬ！（掌返し） やつぱり、早めに見所さんが欲しいねんな。（見所）お寄せコラア！ お寄せコラア！

＜暫く、互いに無言の時間が続いたが、気まずい沈黙の間では無い。マシユも、貴方も、昼から夕方、夜に移り変わる間の自然の音を聞きながら。穏やかに過ごしていた。

「……やっさん、一つ。お聞きしていいでしょうか」

＜そんな沈黙をおもむろに破つたのは、マシユの方だった。  
ん？

「その、アマデウスさんの事について何です。私は、アマデウスさんが無くなる現場に居合わせて、その……その、彼の最後を見たんです」  
ああ。マシユはベースキャンプに居たから……あれ？ となると



としての生が終つても、未来永劫ずっと後悔し続けると思つたのではないか、と。

「けど、サーヴァントは召喚された時の記憶を引き継げないと。確か、カルデアで閲覧した記録には書いてありました。それでも、ですか？」

◇それなら、きつと魂に刻まれる。

◇それでも、体の芯に刻まれる。

個人的に好きな回答は上なので上だよね（好みの問題） いいよ！

来いよ！ 魂に刻んで魂に！ そんな事したら後悔を忘れられなくなるだろ！ いい加減にしろ！

「魂に……霊的な存在のサーヴァントの」

◇それ程に大切な存在だったのだろう、と貴方は言う。アマデウスでないのだから、自分には分からないが、だろう、とか、かもしれない、としか言えないが。それでも。

◇アマデウスは、後悔しない選択が出来たから、満足気だったんだと思うよ。

ああ……（涙が）止まらねえぜ……ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト。お前、一切後悔しない生き方なんかして、誇らしくないの？（賞賛） 何が世界一やお前、宇宙一や（絶賛） もうこれ以上やると気持ちよくなつちやう位、お前の生き様、突っ込んでくれよ！

「凄いい、ですね……後悔をしたくない、たった一つの理由だけで、命を賭ける事が出来る、そんな選択肢を選ぶことが出来る、なんて……特異点Fでの先輩も、やつさんも、そうだったんでしょか」

◇——その通りだ。あの時、守ってばかりで、蚊帳の外で、終わっていたら。きつと後悔していただろう。だから貴方は我慢が出来なくなつたし、立香も一緒に戦ってくれた。いや、自分が立ち上がらなくても立香はきつと自分で立ち上がっていた、とは思ふ。

原作主人公の芯は強いからね、当然だよ（信じる心） 伊達にたつ

た一人のマスターとして人理修復成し遂げてないすか？（文法崩壊）

成し遂げてるなあ……（自問自答） ですよー？（自己の確認）

「——私にも、出来るでしょうか。そんな時が訪れたら……命として、全然未熟な、こんな私にも。先輩達の様な」

え、そんな関係ないでしょ（素）

〈出来る。その質問に対してだけは、貴方は断定の言葉を告げた。こちらを向くマシユに貴方は笑いながら言う。

「先輩と、私なら……」

当たり前だよなあ!? 生命としての順番とか全然関係ないって、それ一番言われてるから。世界最高の後輩なんだろう（当然の事実）お前は（確信を込めたひと言）やれば出来る！（修三）

〈後悔しない選択を、二人なら出来る。大丈夫だ。自分が保証すると。根拠など無いし、未来など分からないけれど。貴方はそう笑った。

「……ありがとうございます。やっさん。一つ、私は大事な事を学ぶことが出来ました。お礼にキツチリ監視の任を遂行しますのです！よろしく願います！」

〈墓穴を掘った。貴方は天を見上げたため息を吐いて……マリーにも、こうやって言えば、と。自らの選択肢に、後悔を一つ、していた。

ただやりたいようには出来ない、ホモ君が無力なバカ（S○Y○I R）にはならないようにプレイしてえなあ俺もなあ。

今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。

## 藤丸視点：復活の朝

——そこに行ったのは、多分偶然だった。

『……最後に一晩だけ。一人で考えてみたいの。ごめんなさい』

マリーさんにそう言われて……二人の事を詳しくは知らない俺は、『危ない所にはいかないでください』と、一言だけ言うしかできなくて。無力感を感じて。それで、少し用を足してくる、という言い訳をして……弱音を、吐きに来ただけだ。

『後悔しない選択を……君と立香なら出来る。大丈夫だ。俺がドンと保証してやるよ』

「……康友」

後悔をしない生き方を。それが、俺とマシユならきつと出来ると。弱ってた自分の背中を蹴っ飛ばしてくれた気がした。

「ありがとうな」

何となく、直接あの場に乗り込んで言うのは照れくさいから、今はしないけど……後で改めて。礼を言おうと思う。あのハゲ頭の、何時も前向きな友人に。

そうだ、マリーさんにも、出来るだけの事をしよう。知らないなんて、そんな言い訳は要らない。まず知る努力をしてから、それからだ。後悔する選択なんて、しないように。そう思っただけの時、視界に、人影が。

「——貴方達の事を余程信頼しているようですね、我がマスターは」

「あ、メドゥーサさん」

向こうで休んでいた筈の、メドゥーサさんだった。

「まあその気持ちも分からないでもないですが……貴方達二人の在り方は、私の様な輩には些か眩しいほどに輝いていると思いますよ」

……なんというか。サーヴァントはその人物と相性のいい人物が呼ばれると、ドクターに休暇の一週間の間で教わったけど。メドゥーサさんはまさにその典型だろう。康友もメドゥーサさんも一切言葉を飾らないし、遠慮なく色々言う。

気質は……まあ、彼奴とは全然違うけど。ストレートに褒められる

と、照れる。正直。

「あ、ありがとうございます……えっと、どうしてここに？」

確か皆が居るのは向こうの焚火の方向だったと思うけど……夜風にでも当たりに来たとか？

「私は何方かと言えば一人を好むので。一人で居れるような場所を探していたのですが」

「あ、そうなんですか」

「それに……私は彼女が苦手なので。あまり同じ場所に居るのは彼女？」

「マリー・アントワネット王妃ですよ」

「マリーさん？」

「ええ。嫌い、という訳でも無いのですが……どうにも気後れ、というか、凄まじい違和感で倒れそうになる、と申しますか」

「違和感、ですか？」

確かに、マリーさんは純粹で明るい人けど、それが苦手っていうのはちよつと不思議だ。

「ああいうアイドル気質の方は、少し……私の知っている二人を思い出して。けど性格が、素直で、純粹で……想像してしまうと、自分でダメージを負ってしまうというか……気が付いたら勝手に立ち直つていそうな、結構逞しいという、共通する部分もあるとは思うんですけど」

「そ、そうなんですか……えっと、大変ですね？　って言えばいいんでしょうか」

「お気遣いありがとうございます……大丈夫、とは言い切れませんが、なんとか、頑張ってみたいと思います」

そういう割に物凄く深いため息ついてるけど……うん。後悔するような選択はしないって、決めたばかりだし。その始めの一步だ。

「えっと、その。悩みだったら、話した方が楽になるって言いますけど。俺で良ければ、話聞きましょうか？」

「……いいえ、これはあくまで個人的な問題ではあるので、話す意味も無いですし」

「けど、そんなに凄いため息ついて。気にするなっていう方が無理で  
すし……」

平気そうに見えるなら良いんだけど。全然そう見えないっていう  
か。だったら、サーヴァントの相談に乗るのは、その、マスターの仕  
事じゃないかなって思う訳だけど。いや遙か昔に生きてた凄い先輩  
の相談に乗るなんてそうそう簡単に出来る訳ないとは分かってるけ  
ど。

「今がどうしても無理っていうなら、何時か折を見て……俺が嫌なら、  
康友に。貴方のマスターにでも話してみるのはどうでしょうか。  
やっぱり、抱え込んでるとストレスになりますし、俺達に手を貸して  
くれるんですから、出来る事はしたいと思うんですよ。だから……そ  
の」

「……」

「俺達に、貴方達の力にならせてくれませんか」

……自分で言っていて、何言ってるかも分かんないし、結構臭い事  
言ってるかもしれないし……アレ、言っていてなんか恥ずかしくなっ  
てきた。

「す、すみません。その、お節介でしたかね！　そうですよね迷惑です  
よね！　すみませんやっぱり……」

「いえ、貴方も彼も、同じような事を言うのだなど、驚いていただけで  
す。その様に考えていた訳ではありませんよ」

「……そ、そんなんですか？」

表情からじや正直分らなかった。あんまり表情変わらなかった  
し。

「ええ。マスターも、そんな事を言っていたので……そうですね。貴  
方の言う通り。腹の内でグツグツとさせたままで居るよりも、話して  
少しでもスッキリした方がこの泡沫の夢を楽しめるでしょうから  
……ええ。マスターにでも今度、愚痴代わりに話してみようかと思  
います」

「……！　はい！　思いつきり話して、こき使ってやってくださいー！  
……自己満足かもしれないけど。うん。一つ、役に立てた気がし

て、何となくうれしい。

うん。これがマスターとして、後悔しない選択肢なんだ。サーヴァントの皆さんに寄り添って、出来る事をする。忘れないようにしよう。

「ありがとうございます。藤丸。面倒を避けようとして、余計な面倒を抱え込むところでした」

「はい……え？　面倒？」

「いえ、なんでも。それでは、私はこれで……マシユと見張りを交代するのであれば、声をかけてください」

「あ、はい。わかりました。っていうか態々言うって、交代したいんですか？」

「まあ、怪我人のマスターの近くであれば、静かに休めると思うので」

あ、間接的に一人で居れるような場所になりえると……この人、意外にちゃっかりしてるなあ。凶太っていうか。やっぱりどこか康友と似てる気がしないでもない。頬の傷が触媒って言ってたけど、本当は縁での召喚だったりしないだろうか。

「ま、まあ。今夜は大丈夫だと思います。はい」

「そうですか。であればこれで。何かあればお呼びを……では、お休みなさい。明日を楽しみにしていますので」

そう言葉を残してメドゥーサさんは消えてしまった。霊体化したのだろう。何処で休んでいるかは分からないが、近くには居ると思うので大丈夫だと思う。

「……なんていうか、ミステリアスな人だな。メドゥーサさん」

マシユとは全然違うというか……あんまり、年頃の少女と接した経験のない俺としては正直、どう接したらいいのか、距離を掴みかねるというか。言葉の端々には、妙な説得力があった気がするけど。最後の言葉とかも、良く分からなかったし。

「俺もそろそろ寝ようか……康友の体力が回復し次第、オルレアンへ進撃。だからな」

何時でも戦えるように、調子を調整しておかないと。



……朝の陽ざしが眩しい。誰かに揺り起こされている。あんまり強くない。レオニダスだったら揺り起こすというより、総員起こし、と言う方が正しいようなモーニングコールが飛んでくるので、これは。

「おはようございます。先輩」

——俺の予測通り、そこに居たのは、マシユだった。

しかし、マシユは康友の監視をお願いしていたのだが……康友が要らないと固辞したのだろうか。そこまで監視されている、と言うのが嫌なのだろうか。

「マシユ……どうしたの？ 康友が、見張りは要らないって？」

「あ、いえ。そうではなくてですね。メドゥーサさんが」

「メドゥーサさん？」

あの人はどうしたのだろうか。

「朝になったので見張りの交代の時間だと……先輩がそうおっしゃっていたと」

「……あの人」

今夜は大丈夫ってそういう意味じゃないんだけどなあ……いや、もしかしてそれを分かった上で、一人で居る口実を作る為に利用したのかもしれない。

「なんか、しれつと嘘をついている顔が想像できる……」

「？」

「あ、いやなんでもないよ。うん。交代の時間で大丈夫」

とはいえ、別に自分のマスターを護るのは可笑しい事ではない……と、ロマニは言っていたので。大丈夫だと思う。だから変にメドゥーサさんのイメージを下げるようなことを言う必要は無い。うん。沈黙も金だ。

「さ、今日も一日頑張りましょう、先輩」

「うん」

可愛い後輩の声に、体を起こす。そろそろオルレ안의攻略に乗り出す頃合いだ。気を引き締めていかないと。

「——ええ、立香！ お早う！」

そう思つて立ち上がった時、聞こえて来たその声に、目を見開いた。前日とは明らかに違う、張りのある、透き通った声。間違ひなくあの声は……彼女と初めて出会った時の声だ。

「……マリーさん？」

「ええ！　ごめんなさいね、心配をおかけしてしまつて……ジャンヌにも、マダム・式部にも後でお礼を言わないと。もう、大丈夫よ！」  
一発で分かる。言葉を交わす必要もないくらい。まるで不死鳥の様に。沈み込んでいた淵から、見事にマリーさんは蘇った。輝ける王妃として、立ち直つたんだ。

「良かった。もう、大丈夫なんですネ」

「大丈夫、かは微妙だけど。けど立ち上がらないという選択肢だけは、選ばない事にしたから。だったらもう、後は立ち上がるだけでしよう？」

「凄い。」

きらきら輝く、王妃様。彼女が何故処刑されたのかが、分からない程に。彼女は今、人を引き付けるカリスマを放つていると思う。完全復活だ。

「あ、そうだ。立香！　メドゥーサさんに、後で伝言を頼めるかしら」「え？」

「——純粹ではありませんが、逞しいのは間違つてないって」

「……そ、それは。」

「もしかして、昨日マリーさん、その」

「ふふ。ああ、そうだね。康友にもお礼をしないとイケせんわね。それじゃ！」

「あ、行っちゃつた……はあく、そっか。昨日、マリーさんは……なるほどなあ。」

「スゲエな康友。お前、歴史上の偉人を勇気づけてんぞ」

## ??? 視点：竜の騎士

——傷が疼く。

「はあっ……はあっ……ぐうう」

唸り声を上げる事しかかできない。呼吸するのも苦しい、予想だにしない痛打。東洋の伝説を舐めていた、としか言えない。竜騎兵と呼ばれた自分をここまで追い込むとは。胸に刻まれた火傷の痕を撫でながら、蠢く。

何よりも……魔術を用いた治療をもつてしても回復しきれない程に、自分が疲弊している事、火傷に込められた執念が強い事。それが、驚愕するべき点だろう。

『貴方は嘘を吐いた……私たちを欺き、その上、自らの心にまで……見苦しい!』

……そうだ。彼女、バーサーカーの実力は決して僕に及ぶ程のモノではなかったのに。決闘代理人として戦っていた僕から見れば、あまりにも稚拙で、弱々しい……筈なのに。そんな常識など容易く飛び越え、ここまでの手傷を。

ああ、それはまさに。彼女の執念の賜物だろう。

「こ、んな、所で……寝てる訳には、いかない……! のにつー!」

折れてなどいない。決して、僕は諦めるつもりは無い……けど、体がピクリとも自分の思った通りに動かないのだ。徹底的に体を焼き、傷を負わせ。結果として彼女は見事、自分を無力化して見せた、という訳だ……なんとも、忌々しい。

——彼女が、ではない。自分の信念を貫く事すら出来ぬ、自分自身がだ。こうして与えられた部屋の一つの床で、藻掻くしかできない、自分が。

「負けた……んだ……彼、女の……思い、に僕の……」

僕に残っているのは、思い一つだ。たった一つ。あんな女吸血鬼に汚されてなるものか。そんな意地にも、いや、妄念と呼んでも良いだろう。しかし、そんな妄念は、彼女の執念に競り負けたのだ。

——動けないのはその所為かもしれない。

心で敗れる、というのはそういう事だ。体がどれだけ健康で、丈夫でも。結局は自分の心が折れているのなら、立ち上がれもしないのだ。

「——随分と手ひどくやられましたね。バーサーク・セイバー」

「キヤスター、か……何の用だい。私を、笑いに來たのかい」

だから、此奴が現れたのも、そんな自分を嘲笑う為だと思っても、仕方ない。

「いいえ、そのような事は……貴方はジャンヌの劍として、あの方に仇成す匹夫を見事討ち取ったのです。賞賛こそすれ、嘲笑するなどと」  
あの黒い聖女の為に、劍を取っている訳ではない。あくまで自分の成し遂げたい本懐の為に劍を取って、戦っているにすぎない。だがそれでもこの男にとっては一向に構わないのだろうと思う。

ただ僕が、彼女へと捧げるだけの戦果を挙げれば、それで良し。倒れても、手駒が無くなった程度にしか感じないだろう……

「その結果が……これだよ！ こうして、床の……上を這いずりまわり……竜騎兵には、とても見えない。虫が、せいぜいさ……！」

「ふふ、虫と言うのはジャンヌに逆らう匹夫共の事……勘違いしてはいけません、セイバー」

——自分が狂っている、と言う自覚はある。狂気に身を預けてでも、自分が守るべきものを守りたかつたから。後悔は、していない。

だが、この男の狂気に比べれば。僕が身を預けている狂気など、まるで薄い。バーサークサーヴァントですらないというのに、精神を汚し、英霊とは思えぬ思考へと走らせるこの男の狂気。濃密と言うのも、足りぬほどに。

「……今や、その虫を、払うだけの……力だって、残っちゃいない、さ」  
「であるならば！ 虫たちを払う更なる力を、貴方に授けようではありませんか」

「——力？」

「そう！ その体の火傷など気にならなくなる程の、全てを切り裂き、崩す程の！ ジャンヌの劍として相応しい圧倒的、そして！ C O O O O Lな力を！」

——だがその狂気の化身は、何の気紛れかどうやら僕に手を差し伸べてくれるらしい。

「……竜の魔女の、さしがねかい？」

「いいえ、私の独断にございます。ジャンヌより了承は頂いています  
が」

「だろうね。彼女が……僕などに、そんな気に向けるとは思えない」

「しかしジャンヌに必要な力でございます故……いかがか？ バーサーク・セイバー。我が手を取っていただけますかな？」

分かっている。

差し伸べられたこの手は、自分をさらに深みへと……この男と同等の狂気の渦へと自分を引き込む招待状だ。こんな物を手に取るなど、諜報員としては論外だろう……だが。

「——いいだろう。君の力を借りよう……力が手に入るといふなら」

「ありがとうございます——シユヴァリエ・デオーン。フランスの勇壮なる竜騎士の名に相応しい力を……」

——思いを遂げる為なら。折れた今、ここから立ち上がる為ならば。どんな悪意でも飲み干して見せよう。

体に走る痛みに耐え、手を取って……そこで、僕の意識は闇へと堕ちた。

目を覚ました時には、酷くすつきりとした心地だった。

ベッドから起き上がる。体が軽い。気だるさも何もない。生まれ変わったような心地だ。アレだけの痛み、熱。それがまるで気にならず……いや、熱に至っては、それが心地よくすら感じる。そして、腹の底から湧いてくる、力。

「お目覚めですか、バーサーク・セイバー……いいえ、今はこう呼ぶのが正しいか。ドラグーン・セイバー！ シユヴァリエ・デオーン！」

その声に、視線を向ける。キャスターが近寄ってくるのが見えた。

それより、彼は自分を何と呼んだのだろうか。ドラグーン・セイバー？

「キャスター……ぼ……いや、私は、一体」

「ふふふ、我が配下の海魔の拾ってきた土産……かの女怪が引き剥がした邪竜の鱗！一枚だけでも魔術礼装の触媒として極上の素材！

それを用いて、貴方を改造したのですよ」

改造。サーヴァントの、エーテルで編まれたサーヴァントを改造するなんて。そんな話聞いた事も無い。

「そんな事が……？」

「我が友の書き上げた邪本と、聖杯の力があれば不可能ではございません。現に、溢れかえっていませんかな。体の底から、力が！」

しかし、キャスターの言う通りだ。

自分の体の内に宿る、熱のような力を、僕は感じている。エーテルの体の中に、まるで火山でも発生したかのような。凄まじい熱だというのに、心地の良さすら感じるこの異常な感覚は。

「凄まじいな。まるで、生まれ変わったみたいだ」

「文字通り生まれ変わったのですよ。貴方の肉体を、飛竜種の体を以って体を以って作り変えました」

「飛竜種の？」

「腐っても竜種ですから。潤沢な魔力を孕んだ素材になり得る。そして、ファブニールの鱗を触媒とすれば、加工も可能です」

……要するに、壊れた僕の体に飛竜の体を詰め込んで直したという事か。それにしても、余りにも調子が良すぎるような気がしないでも無いが。

「——そして、それだけではありません」

「何？」

「幸運にも恵まれたのですよ……貴方の竜騎士としての逸話、貴方を焼いた焰、そして邪竜の鱗！全てがまるで決まっていた事のように相性が良かった！」

その一言を聞いた瞬間、体が跳ねた気がした。

いや、跳ねたのは体じゃない……心臓だ。霊核が、まるで喚起するかのように飛び跳ねたのだ。何かが埋まっている。何かが、取り込まれている。咄嗟に、服をはだけ左の胸を覗き込む。

「——これ、は」

「そう、貴方はファブニールの鱗をも取り込んで見せた！ 胸を焼き続けていた焰と共に霊核へと染みこみ！ 貴方はまさに、小規模なファブニール悪竜現象と化した！」

そこには……まるで、心臓を護る様に生えた、竜の鱗が。その鱗の色は確かに竜の魔女が使役しているファブニールの物。であれば、自分は本当に……いや、だが。その力を以てしても一つ、懸念は残る。「流石にファブニールそのもの、とまでは参りませんが。それでも通常のサーヴァントなど及びもつかない程に、貴方は強化されました……」

「だが、それは……向こうにとっては福音となり得るんじゃないのか。ジークフリートとゲオルギウス。両者共に人類史に名高い竜殺しだぞ」

彼らを相手取るなら、この竜の力の無い方が、寧ろ戦えるのではないのだろうか。

「その辺りは問題ありません……それだけではない、と申しましたでしょう？ 少し、私流の小細工をしておりますね……今の貴方には、竜殺しの力とて、さほど気にはならないでしょう」

「……どういう意味だ？」

「仔細は後程。今は、その体があらゆる英霊英傑など、ものともしない程の力を持っているとだけ！ それだけを感じなさい！」

——左胸に手を当てる。その心臓から聞こえる鼓動。それが余りにも頼もしい。まるで、自分の物とは思えない程大きく、逞しい——もしキャスターの言う通りなら、これなら果たせなかつた悲願を。僕が。

あの女吸血鬼になど渡さない。彼女の……フランス王家の誇りは……この僕が、シユヴァリエとして！

「——ジル、終わったかしら？」

竜の魔女！ そうか、配下を改造したと聞いたのなら、見に来るくらいはするか……であればあの女吸血鬼に取られる前に！

「おおジャンヌ！ 整いましてございます……！」

「そう……あら、そこまで見た目は変わってないけど。感じるわ、アン

タの内から溢れる竜の鼓動を。確かに、そこらのサーヴァントとは比べ物にならないでしょうね」

「——ジャンヌ・ダルク。お願いがある」

「……あら、私に跪くなんて随分と従順になったものね。バーサーク・セイバー?」

「王妃、マリー・アントワネットの首を私に任せて欲しい……あの吸血鬼になど渡したくない。私が、あの方の首を」

「良い感じに染まって来たじゃない……いいわ。あの女の首は任せます。念入りに、胴と首は斬り分けるのですよ?」

言われずとも……王妃に無駄な苦しみを与える事はしない。一撃で仕留め、終わらせる。

「ああ、それが終われば君の指揮に従ってフランスの全てを切り刻もう」  
「——ふ、ふふふ。アンタ、大分キてるじゃないの。良いわ、ドラグーン・セイバー。その邪剣、私が貰い受けましょう」

ああ。構わないとも黒い聖女。君の指揮する飛竜などに、このフランスは傷つけさせはしないと……僕が、この国に美しい最後を。麗しの白百合に、相応しい最後を。

「く、ふふふふう、ははははははははっ!」

竜騎士。シユヴァリエ。デオーン・ド・ボーモン。このフランスの為に、躍るとしよう。



## オルレアンへ その一

皆様こんにちは、ノンケ（毒の女帝）です。バレイベの鳩ッターが好きでした。

さて、前回はマシユちゃんに看取られてホモ君永眠……ではなくて。まあ体力が尽きて普通に眠っちゃったんですけどね。藤丸君にも『お前マジでネテロ』と言われる始末。同じ位ジャンヌサイドで活躍してる藤丸君はなんで普通に無事なんですかね……？

＜……目を覚ます。朝、の様には見えない。日が上から燦々と降り注いでいる、ならばもう昼直前か、それを過ぎているか。昨日はマシユにガツチガチに見張られ、意気消沈しつつ眠りについた。貴方はそこまで思い出して。

「おや、お目覚めですかマスター」

＜悲鳴を上げた。いきなり顔を覗き込まれた上に、マシユじゃなくてメドウーサだった。挨拶よりも混乱が勝ち、思わず女兒の様な悲鳴を上げてしまった。

ホモ君は女の子だった……？（新説） 大胆な悲鳴は女の子の特権だってそれ一番言われてるしその可能性も微粒子レベルで存在しているかもしれない。いやこんなむつけき女の子が居たら大きいお友達卒倒すると思うんですけど。

「……幾らなんでも失礼ではありませんか。私を何だと思っているのです」

＜覗き込んだ瞳が、ジトつ……つと此方を睨みつける。貴方にも言いはあつたが、しかし悪いのは九割自分だ。貴方は素直に謝罪を口にした。

「はあ、昨夜の見張り役のマシユ・キリエライトではなく私だったので驚いたのでしょうか。もう少し悲鳴を選んでください……ああほら、貴方のサーヴァントを呼びつけてしまっていますよ」

「マスター!?!」無事ですか!?!」

あ、式部さん Good Morning (ネイティブ) まああんな素っ頓狂な悲鳴上げたら誰だって何事かと思つて飛んでくるでしょ

うなそりやあ……

「大丈夫です。敵も何もいません。少々と混乱しただけです」

「そ、そうなのですか!?! ですがそれにしてもトンデモない悲鳴……あ、本当なのですね」

〈心を読まれたようだ。恥ずかしい。無言で顔を抑え、貴方は寝っ転がって香子に背を向ける。凄まじく下らない事でまた心配をかけてしまった挙句、である……本当に、泣きたいほどに恥ずかしい。穴があつたら埋まりたい。

穴があつたら(意味深) まあ普通に恥つて事でしようけど、やったとして、出られ亡くなつた挙句、埋まつてんなあオイって煽られて終わりだと思ふんですね……普通に入つて、反省してから出てきてどうぞ。

「この通り、マスターも相当恥ずかかっています」

「はあ……とりあえず、大事でなくて良かったです。って、ああ!?! マスター! その、えつと!?!」

〈読心能力とはかくも恐ろしい物か。とりあえず、ひとしきり読まれて恥ずかしかつて、読まれて恥ずかしかつて、を繰り返して。若干煤けたようになってから、貴方は視線を香子の方に戻す。調子は大丈夫か、という問いに、香子は強く頷いた。

「お氣遣い感謝します。マスター。香子はもう、大丈夫です」

笑顔になつてくれてウレシイ……ウレシイ。やっぱり人間笑顔が一番つて、当たり前だよなあ。取り敢えず、これで後はホモ君の回復と、マリーさんの復調を待つだけですね。え? マリーさんが復調するのかつて? まあ心配こそしてましたけど、立ち直る事については心配してません。アマデウスが惚れた王女様がそんな軟な訳ないでしょ(王道踏破)

「——ああ、康友。さっきの悲鳴と言ひ、やっぱり元気そうね!」

ほら、見ろよ見ろよ、ホラ(誇らしげ)

〈続いて此方に来たのは、マリーだった。落ち込んでいたと聞いていたのだが。まるでそんな様子には見えない。出会ったばかりの時の、明るい笑顔のままだった。

「随分と元気になられたようで。なによりです」

「あらメドウーサさん、此方にいらしたのね。ごきげんよう！」

「あ、マリー様……置いて行ってしまつて、その」

「いいえ大丈夫！ 仲間が心配なのは、当然の事だもの」

ああ、あ、あ、ああああああああく！ (号泣) 復活ッ

！ マリー・アントワネット、復活ッ！ マリー・アントワネット、復

活ッ！ ああ、くセンチメンタルう、くぷももえんぐえげぎおん  
もえちよつちよちやつさつ！ (言葉にならない大歓喜)

心配こそしてなかつたけど、嬉しい事には変わりのないんやなつて

……！！

◁マリーは、香子の方からもう一度貴方に視線を向ける。その眼は、  
透き通つて、真つすぐにこつちを見ていて。アマデウスが惚れこん  
だ、王女の目だと、貴方は思った。

「ね、康友。私貴方にお礼を言いたくて」

お礼？ いや、お礼と言われてもホモ君なんもしてなくはないですか  
ね……？ ホモ君が寝てる間に勝手に立ち直つちやつたんですがそ  
れは……？

「ありがとう。私、アマデウスが、私を守つた事を誇りに思うように、  
強く立つわ！」

◁何のことかさつぱり分らないけど……

◁良いって事よ、つてね。

何でお礼を言われたのかホモ君もプレイヤーもサツパリだけでも  
もうどうでもいいや (思考放棄) マリーさんにお礼言ってもらえた  
からもうそんなん関係ないでしょ (丸投げ) うーん (心の中が) サイ  
コガン (恍惚)

「そうしたら……私、何をしようかしら！ 休んでた分、色々頑張らな  
いとー！」

「——随分とやる気に満ちています、残念ながら今は此方も休息、と  
いうより態勢を立て直している所です。マスターに関しては、医療班  
の見立てでは少なくとも今日一日は安静、作戦行動は明日からという  
事です」

「あつ、そうね……あのサーヴァントと戦った後だものね。休息も必要よね。ごめんなさい私ったら、また一人で先走っちゃって」

「正直、今でも立ち上がって走れるくらいには元気な感じがするのだが。流石にドクターストップをかけられてはとうしようもない。ここは大人しく療養するのが一番だろう。」

「あんまり無理しても実況終っちゃうヤバイヤバイ……ということではプレイヤーとしてもこの休息期間はものすごいありがたいです。とはいえ見所さんは死ぬんですがね……見所さんこっち来てホラ。」

「それに……貴方にはやる事がある。アマデウスの借りを、シユヴァリエ・デオンに返さねばならない。せめて一発、顔面でもぶん殴ってやらねば。その為には、休養は必須だ。」

「……デオン」

「元のオルレアンのカッコいいデオン君ちゃんはどうつかへ消え、残ったのはバーサーク・デオン君ちゃんです。とはいえああいう執念丸出してっていう感じも似合うのはホント卑怯だと思います。そんなんやからホモに付け狙われるんやぞ（根拠のない言い掛かり）」

「話には聞いていましたが、そこまで凄まじい相手なのですか？」

「あ、はい。ティーエルで遭遇した時も……清姫様が、残らねば」

「清姫も、未だ行方は知れない。探す暇も、敵からは与えては貰えなかったとはいえ、諦める事だけはしたくなかった。」

「……マスター、先程ゲオルギウス様とエリザベート様の二人が、偵察と清姫様の搜索を兼ねて出発なされました。お二方の探索に、良き結果が出る事を祈りましょう」

「マジで清姫ちゃんは生きていますか……絶望的、とまでは言いませんけどあのデオン君ちゃんを相手に殿を努めたのです。生きている確率は、良くて五分、とかかもしれない……すっげえキツイゾ……（嘆きのMUR）」

「——暗い話ばかりでも仕方ないわ。清姫さんはきつと戻るって信じて、まずは朝食にしましょう！ 向こうで準備が始まっているから、康友も食べないと！ 体力が戻らないわよ」

「そんな暗い雰囲気吹き飛ばすようにマリーが声を上げる。彼女

も、清姫の事を心配していないという事は無いだろうが……それでも、落ち込むだけで終わる事はしないのだろう。

やっぱりマリーさんが復活したのデカいっすね。こういう時も明るく振舞って皆を元気つけてくれて、大分明るくしてくれんじやんアゼルバイジャン。

「……そうですね。マスターには明日に備えて、しっかりと回復してもらわないと」

「では行きましょうか。立てますか？」

＜流石に立つ事くらいは問題ない。多少は気だるさが残っているが、歩く事も出来る。貴方は転ばないようにゆっくりと茂みの向こうへと向かった。

「おつ、康友。おはよう。やっぱり何ともなかったか」

「おはようございます……凄いい悲鳴でしたね」

「おはようございます！ 本造院殿！ 朝から元気そうで、なにより！」

「ルーラー、彼が昨日メドゥーサ殿と共にファブニールと戦った？」

「はい。名前は本造院康友。カルデアのもう一人のマスターです」

おー、壮観壮観。オルレアンで集まる戦力、それにカルデアからの戦力。一番最初の特異点とは思えない凄いメンバーですよ。はえ、すっごい心強い……(感嘆) けど悲鳴は聞こえてたみたいですね(赤っ恥)

＜ベースキャンプのメンバー。その中から、一人男が進み出て来た。昨日、黒いジャンヌが恐れ、戦場から無理やりに追い出す選択肢を取った程の大剣士、ジークフリート。その背に背負う大剣が、彼のバラムンクか。

「——はじめまして、かな。ジークフリートだ。本造院」

＜オルレアン攻略、最後の力ギがそこに居た。

今回はここまで。次回はホモ君の休息の辺りをカ……ットオ！（BLRY）して、オルレアン攻略当日からとなります。ご視聴、ありがとうございました

## オルレアンへ その二

皆さんこんにちは。ノンケ（あまくさ）です。

さて、今回は前回より休息を挟み、いよいよオルレアンへと討ち入りです。ホモ君もようやく完全回復。ベースキャンプで円陣を組み、いぎ鎌倉。

『……結局、清姫の生存は確認できなかったね』

と思つてたんですけど、早速空気がお通夜です。結局戻ってきたゲオルさん、エリちゃん共に成果は上げられず、ティーエルは物凄い戦鬨の痕が残っているばかりとの事。物凄い長い炎の跡もあつたという事で、恐らく宝具は間違いなく使われているようで……

清姫ちゃんも脱落とかやめてくれよ……（絶望）

「い、生きてるわよ！ あのカナヘビが、そんな簡単に！」

「生きているにしても、重傷である可能性は高い。何とか探し出して合流したかったです……」

△あの場で清姫が戦ってくれたからこそ、自分達は五体無事で撤退できたのだ。生きていて欲しい。そう、思うのをやめられない。

『——だが、それでもこれ以上待っている訳にもいかない。直ぐにでも僕たちは、オルレアンへと進撃を開始すべきだと思ふ』

「ドクター……」

『こちらの準備も整つて、向こうのサーバントもある程度減つている。オルレアンに攻め入る、これ以上の機会は無いだろう』

お前どうすんだ清姫をなあ……大事だつたんだよなあ！ 清姫え

……けど、今こそ攻め時っていうのも、まま、分かるねんな……（掌大回転クレーマー）

『協力してくれた相手を探したい、という気持ちは分かる。けど、一度探索をしても見つからなかったんだ……酷な言い方をするようだけど、ここからさらに探索するのは許可できない』

△ギリ、と歯を鳴らすのを堪えられない。悔しいが、ドクターの言う事は正論だ。ここから清姫を探そうとすれば、特異点を解決する機会を見逃す事になるかもしれない。更に探索へ時間を使うのは、得策

ではないのだ。

あ、(それでも探しに)行きてえな……(絶望) ウッ、ウッ、アッ、アッ、アッ!!ウッ、ウッ、アッ、アッ、アッ、アッ!!ウッ、アッ、アッ……(慟哭)  
「——ねえ、エリザベート? 貴方が探したのはティーエルとか、オルレアン以外の場所なのでしょう?」

「え、ええ。そうだけど」

「だったら、もしかしてオルレアンの方に向かっていて、見つからなかったのかもしれないわね。でしたら、ええ。まずはオルレアンに向かってみるのも、良いかもしれないわ」

「マリーの言葉に、貴方はハツとする。オルレアンに向かうのは変わらない。けれど確かに清姫がオルレアンに行っていて見つからない可能性も、ある」

ハツ、待つてくださいよ(気づき) 確かに清姫は発見できていませんけど、死んでいると確定したわけでもありません。これぞ発想の転換、これぞ王者の風格って感じで。

「もし清姫を見つけてもスムーズに助けられるように、段取りをしつかりしてから向かいましょう! だからこそ!」

「——今、ここで迷っている場合ではない、という事でしょうか。マリー?」

「ええ、ジャンヌ。黒いあなたの暴虐を止める、清姫を探す。両方しなければならぬもの」

「……そうですね。彼女には、聞かねばならない事もあります」

自分に問う(一片の穢れも無い事実) めっちゃ独自行動してる所為であんまりジャンヌには関わられてないけどその最後はしつかり見届けて三回くらい男汁を出したい所存です(エンジョイ勢特有の感動絶頂)

「マリーの言葉に皆が頷く。向かう先に居ると信じて、もし見ついたら、直ぐにでも助けられるようにする。諦めるより、余程良いだろう。」

「俺達の方は、清姫さんの容姿を知らないから、教えてくれ」

「ちゃんとその辺りの情報は共有しておきたいですね」

「藤丸も、マシユも。誰も。助けるのを諦めない。それが当然の如く……であれば、助けるのは立香達に任せ、自分達は今ここに居る、彼女を護る事に集中しよう。貴方は、視線をマリーに向けた。」

「お、そうだな（納得）」

「清姫ちゃんが行方不明なのと同じように、デオン君ちゃんも行方は知れません。オツパゲドン！（最終戦争）を経て相打ちになった可能性もあります（食い気味）。けど差あつけられて勝っていても仕方ないね……（消沈）　　いうてデオン君ちゃんもエース級のサーヴァントだからね。」

「貴方はマリーに問うた。セイバーは、生きているか、と。」

「……ええ、恐らくは。清姫との戦いに勝ったにしろ負けたにしろ、デオンはそんな容易く死に果てるような騎士ではないわ。恐らく、オルレアンで待ち構えていると思う」

「であれば。マリーを守らなくてはならない。バーサーク・セイバー、シュヴァリエ・デオンの本懐を遂げさせるわけにはいかない。アマデウスが守った王女を、決してあの剣に貫かせはしない。」

「……はい、アマデウス様の思いを、無駄にさせる訳には」

「デオン君ちゃんがピンピンでいらっしやるよ、妨害して差し上げる（暗黒微笑）　　なんで悪党共の思う通りにさせる必要なんかあるんですか（半ギレ）　　という事でホモ君のお相手はデオン君ちゃんに確定ですかね。」

「——デオンは、私を狙っている訳ではないと思うわ」

「えっ？　　そんな訳ないじゃん（素）」

「デオンは私を殺そうとしている。けど、彼が今見ているのは……恐らくは、私の後ろに輝く、白百合の紋章。それを狙っている、と思うの」

「> どういう事だ。と貴方は問い返す。彼は、あそこまでマリーに執着していたのに。他の物を見ているなら何故マリーを真っ先に狙うのか、と。」

「……彼は忠義の人。フランス王家に全てを捧げた人。あの人が執着するものは私を通してみているフランス王家なの。あの時、間近にデ



オンを見て、初めて分かったわ」

フランスを見る（至言）

「私ではない。これ以上フランス王家を汚させぬようにと。あの方は剣を取り、狂乱の淵へと降り立ったのでしよう」

「し、しかしそれでマリー様を狙う理由には……！」

〈なる。とマリーは断言した。

「私は生前、フランス王家の象徴として振舞ってきたわ……なら、真っ先に私が狙われても至極、当然の事なの」

はえへ、フランスへのお心がお深い……死して尚フランスの誇りを守ろうと動けるとか大英雄かな？ デオン君ちゃんは元から大英雄だろいい加減にしろ！」

「……故に、彼に私を殺させるわけにはいかない。フランス王家に忠義を誓ってくれた彼に、フランス王家の象徴である私を殺させるなんて。彼に対する最大の侮辱だと思わ。そしてこれ以上、彼にフランスの敵をさせる訳にもいかない」

〈アマデウスを討ち取った相手だというのに。彼女は決してセイバーを憎んでいない。寧ろその様に悲しみを抱き、彼の本懐を遂げさせまいと、気遣っている。白百合の少女は、けっして折れず、こんなにも強い。

そしてそれ以上にマリーちゃんのお心がお太い！（汚い嬌声）名

誉フランス国民として誇らしゅうございます王女！ Vive l

a France！ Vive la France！ Vi

ve la France！

「だから力を貸して欲しいの。康友。香子。そして……メドゥーサさんにも。デオンの思いを止める為にも。黒いジャンヌを、止める為にも」

「……私に、出来る限りであれば」

「マスターがやる、というのであれば。サーヴァントの私も協力はします」

〈やらない、と言う選択肢はない。オルレアンで待っているであろう、セイバーからマリーを守り抜き、そして……必ずや黒いジャンヌ

の野望を止める。それで初めて、アマデウスへの弔いになるだろう。

〈〈覚悟はもう決まってる。〉〉

〈〈黒ジャンヌには、俺も言いたい事がある。〉〉

ん？ 邪ンヌと殆ど絡んでないやんけ君。なに？ 一目惚れでもしたの？ だとしたら惚れっぽすぎませんかね……？

「言いたい事？」

「——多分康友の言いたい事は、俺と同じことだと思うよ」

〈そこに話を聞いていたのであろう、立香が言葉を挟んでくる。首を傍らに向ければ、立香と目が合う。自分も同意だと、拳を突き出して。立香と合わせる。〉

「言いたい事、言ってやろうぜ」

〈〈おうともさー！〉〉

こんな序盤も序盤からそんな事して良いんですかね……？ (困惑)  
拳を合わせてどうこうっていう感じの流れは最終局面直前とかでやる感じではないでしょうか。

『——方針は決まったかな。よし、であればこれよりオルレアン攻略の為にブリーフィングにはいろうと思う！ 目標はシンプル……全員欠けずに特異点を解決する事！』

〈ロマニの一言。マリーを守り、清姫を探し、そして黒いジャンヌを打倒する。三つの目標を達成する為の、酷くシンプルな作戦目標だ。〉

『人理保証機関カルデア、及び現地協力サーヴァントの皆さんには各員、最大限の努力をお願いします！』

……そこはもうちよいハッキリ言おうぜドクター。

「締められませんね……」

「ま、まあこんな感じでも良いんじゃないかな？ 俺達らしいし」

「ふふふ、宜しいかと思えますよ。ねえ、マスター？」

〈それがカルデアらしいというのはどうなのだろうと、貴方は天を仰いでしまった。〉

それでは今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。

## オルレアンへ その三

皆さんこんにちは。ノンケ（聖女）です。ジーク君と幸せになるんやぞ。

前回、いよいよオルレアンへ進撃を開始する事となりました。ここからが、マグマなんです（見所さんの意味で） 敵方のサーヴァントは結構生き残っていますが、此方のサーヴァントも粒ぞろい、あっさり競り負けるといふ事は無いと思います。

『作戦内容はシンプル、速攻でワイバーンを蹴散らしつつ、オルレアンへ進軍。疲弊する前に敵サーヴァントとの決着をつける』

「速度が命、一気に行くよー！」

>眼前の道には無数のワイバーン。前衛にはゲオルギウスとレオニダス。そしてその先頭には突撃力を重視し、メドゥーサが。勢いを殺さず、ワイバーンの群れの中を突き抜けていく。

三人に勝てる訳ないだろ！（古今無双）（勝機が）高まるウ……溢れるウ……！ ワイバーン如きでは我々を止める事は出来ぬう！

「ふふん、トカゲ風情がどうしたっていうの？ こっちは本物のドラゴンアイドルよー！」

「……ドラゴンアイドルとは？ すまないが、俺は現代の知識には疎くてな」

「大丈夫ですジークフリートさん、私達も分かりません……」

「それは大丈夫だとは言えないと思います、マシユ」

「ご存知、ないのですか!?(驚愕) 彼女こそ彼の哲学者、アルキメデスに『どこに出しても恥ずかしい最高最低の無能サーヴァントが——ッ！』とまで言わしめたスーパーアイドル、エリザベート・バートリーですよ!? いや知る由もないでしょ（正論）

後方にはジークフリートさんを中心に残りの面々が控えています。ジークフリートさんはファブニール君をぶっ潰す為に体力を温存して貰っています。

「今の所、問題はありませんね。ワイバーンの数も多い事は間違いありませんが……」

「対処しきれるくらい、だと思っわ……立香と康友は大丈夫？」

〽問題ないです。

〽ナツシング。

変な回答をするのは、やめようね！　そして良い子の皆は、ごく普通の選択肢を選んでプレイしようね！　そんな当たり前の事を堂々と言うなんて（頭が）やば……やば……わかんないね……（自分自身への戦慄）

「俺もです。結構、特異点ついてからずっと暴れてたのに、全然疲れなくて」

「マスターその、ご無理などは」

「大丈夫だよマシユ。体は軽いくらいだし……それに、こんな所で倒れてられないし」

〽目指すオルレアンはまだ先だ。それまでに倒れば元も子もない。迫りくるワイバーンをバットで払い除け、貴方は進む。丁度いい、準備運動だと、笑みを浮かべながら。

さて、ここからオルレアンまでワイバーンの群れを只管突破するだけなので見所さんはありませんでした……（正直）　という事で。

〽カ……ットオ！（BRLY）

〽ワイバーンの群れを抜け、抜け、抜け。漸くその眼前に見えて来たのは……瓦礫の山の様な有様となった、街。

『見えた、アレがオルレアンだ！　そして……どうやら向こうもお待ちかねらしい。ファブニールの反応は当然として、サーヴァント反応が、一、二、三……』

〽その街の目の前に、ワイバーンを引き連れ、居並ぶ四人のサーヴァント、そして巨大な邪竜。彼らの後方には、黒いジャンヌが。

おー、ええやん。（正面衝突の姿勢）気に入ったわ。興奮させてくれるねえ！　本来のオルレアン決戦とは相手の戦力も何もかも違いますが、それでも今特異点での最終決戦には間違いありません。（気合入れて）行くぞオー！　オエツ！

『——ん!?　ちよつと待ってくれ、何だこの反応!?!』

〽その時だった。ロマニが悲鳴のような声を上げて——四つの影の

内、一つが姿を消す。その直後、立香の視線が後ろのマリーへと向かった。それに反応するように、貴方は声を張り上げる。

〽香子さん！ メドゥーサー！

ヌツ！（迎撃）

「——良く止めたね、カルデアのサーヴァント、そしてマスター」

〽マリーとの直線状にすっ飛んできたそのサーヴァントを、香子の陰陽術が足止めし、メドゥーサーと貴方が押し留める。その刃は、忘れもしない。アマデウスを貫いた、あの刃。

「デオン……」

「ごきげんよう、王妃。そのお命、頂きに参上いたしました……お覚悟を」

〽シユヴァリエ、デオンがそこに立っていた。

出たわね（恐怖） このオルレアン最大の脅威にして絶対マリーぶっ殺すマン、デオン君ちゃんのエントリーです。やはり清姫ちゃんとの交戦も、響いていませんか……いや、清姫ちゃんの奮闘は無駄ではないって、大丈夫っスよ、バッチエ証明しますよ！（勝利宣言）  
「マリーから、離れなさいっ！」

「——退きなさい子ダコ。とびつきりをお見舞いしてやるから」

〽そのデオンに対し、続いて仕掛けたのはジャンヌ。振るわれた旗が、デオンを一步下がらせた……そこに、エリザベートが向き直る。「恥ずかしいとか、そう言うのは今は気にしないわ……無様に吹っ飛んで、地面でも舐めて命乞いをなさい！」

〽振るわれたのは、エリザベートの尻尾。スカートを翻し、風を引き裂きながら振るわれたそれが、見事デオンを彼方へと押し返す。

エリちゃんのガチモードとか初めて見た（素） EXTRA時代の残酷性がちよつと顔出してますねクオレハ……怖い！

「二発だけ、あのカナヘビへの手向けって奴よ……一応、この特異点では一番付き合い長かった奴だしね」

〽吹っ飛んだデオンは、しかし特にダメージなど無い様に見事着地し、立ち上がり……そしてその横に、奥から歩いて来た三騎のサーヴァントが並んだ。



えー、此方のチームはホモ君のサーヴァントの皆さん、そしてマリーさんとゲオルさん。向こうは藤丸君チームWith聖女と竜殺し。戦力としてはドツコイでしょう。

＜そして、ファブニールと共に、黒い騎士が立香達の方へ走り出し……そこまで見てから貴方は、その視線を後ろに向けた。まるで図つたかのようにそこに居た、二人に。

「漸く、マリー王女。貴方を、王家を……僕の手で……ふふ、ふふふふ！」

「……」

＜——幽鬼の様に立つ、コートの男。そして、先程には感じられなかった、目に見える程のどす黒い魔力を巻き散らす、バーサーク・セイバーの姿。

スツゲエ巻き散らしてんぜ？（震え声）ここからがマグマって言っても見所さんにそこまでしなくていいから（良心）

＜貴方は、そんなセイバーの前に一歩、足を踏み出した。彼には聞かねばならない事があった。

「おや、カルデアのマスター。ごきげんよう……何か、ご用かな？」

＜清姫を……彼女を、どうした。

当事者に聞かずして、本当の事は分からないってそれー。おしえてわ た し に（課長）

「発動させた宝具で、私の意識を落とした所までは覚えている……その前に、大分斬り付けては居たから、宝具発動が負担になったとは思うよ？ どうなったかは、分からないな」

＜微笑むセイバーに、貴方はそうか、と一言頷いて……バットを構えた。

＜ぶっ飛ばしてやる。

＜覚悟決めとけや外道。

……男が覚悟決めたんだ。ここはカッコリとした選択肢が火い吹うくう〜！（選択肢下）

「勇ましいね……けど、それは勇猛ではない、無謀と言うものだ」

『こ、この反応……ちよつと待って本造院君!? そこに居るのって、

シュヴァリエ・デオンだよね!？」

おやここで通信とは。ドクターどうした!? 確かに目の前に居るのは変態竜騎士屋ですが。

「ふふ、もう僕はただのセイバーであるシュヴァリエ・デオン、ではない」

『サーヴァントの反応に間違いはないけど……けどこれは……!』

「今の僕は、王家に使える真の竜騎士……ドラグーン・セイバー。君達との格の違いというモノを、見せてあげよう」

『ファブニールに近い反応をしてるじゃないか!』

………ファツ!? ンンツ……!?! マ。ツ! ア。ツ! →

(思考放棄)

なんか謎の単語が出てきた所で。今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。



## 悪竜騎士 その一

皆さんこんにちは、ノンケ（宇治金時）です。

前回はオルレアンに進撃……した所、なんか謎の覚醒をしてくださったデオン君ちゃんと遭遇いたしました。なんなんドラグーン・セイバーって？ っていうか反応がファブニールってどういう事なんですかね……？

『と、兎に角そのサーヴァントには気を付けて……ああ!? 藤丸君の方も結構ピンチじゃないか!? ちよ、忙しいなもう……! 取り敢えず今は、解析に集中するからちよつと待って!』

あ、ドクターが離脱しました。今回もナビは期待できそうにありません。

「今の私に、君たち程度では障害にもならない……さ、無為な抵抗は止めて速やかに退きたまえ。私が果たすべき役割の邪魔を、しないでほしい」

「貴方の思う通りにさせると、思いますか!」

〈速攻で仕掛けたのは香子。黒い光条が三本、セイバーへと向かう。しかしデオンはその攻撃を避けようともせず……なんと、武器も持たない片腕で、あつさり跳ね除けてしまう。〉

「っ!」

「ふふ、痛いね。けど……それだけだ」

なん……だと……!? (OSR) そりゃあ香子さんの攻撃は火力ありませんけど、だからってそんな片腕で払えるほど弱くも無いですよね? もしかしてやせ我慢してるのか!? 痛いだけとか、とぼけちやっつてえ…… (暗黒微笑)

〈信じられない事に、払い除けた腕には……僅かな傷しか見られない。直撃、しかも、特に何かしたわけでもない。ただ適当に払ったようにしか見えなかったというのに。〉

「そんな……!」

全然効いてないじゃないか(半ギレ) いや可笑しいでしょうこれ、サーヴァントの攻撃ですよ! 神秘の塊ですよ! クソ雑魚パンチ

止めてくださいwwwwで済む代物じゃないんですよクオレハ!?

「王家の百合よ、永遠に在れ。我が剣がその輝きを永久の物へと繋ぎ止めよう」

「――繋ぎ止められるのは貴方でしょう」

〈全く止まらず、マリーへと優雅に歩みを進めるデオン。その体に鎖が絡みつき、動きを止める。背後に回っていたメドゥーサの鎖だ。「油断、慢心、隙だらけですね。多少強くなっても、実力を発揮しきれなければ意味はないでしょうに……シキブ、速攻で片を付けますよ」  
「っ、はいー」

慢心、敗北、強いサーヴァント……うっ、頭が。初代から続くどこぞの黄金の我様の慢心芸ですね分かりません。記録は座に持ち帰れると言うのに、なぜ慢心王は学習しようとしなのか。したら王様じゃなくなる？ 慢心せずして何が王かだからね、しようがないね。「全く、どうやら君達はどうしても私の邪魔をしたらしいね。仕方ない、アサシン」

「……ああ」

「マリー王女を抑えてくれ。再び取り逃がすのも嫌だからね。僕が彼らを始末する間までで構わないから、それまでは霊基を持たせる様に。分かったね？」

〈返事をする事なく、アサシンが地面を蹴ってマリーへと迫り……

その動きが、ゲオルギウスによって阻まれた。

「ティーエルでの決着、未だつけてませんでしたね」

「……残念ながら、その決着をつけている余裕は、ありません。マリーを、この手で」

「いいえ、私は倒れる訳にはいかないの……私を守って、大切な友人が逝ったから。彼の鎮魂の為にも、最後まで、生き抜くって。決めたの」「無理やりにも付き合っ頂きましょう、処刑人、シャルルIIアンリ・サンソン！」

ほんへではゲオルさん、マリー様大分不利の対面ですが、FGOR PGでは別、寧ろサンソン君圧倒的不利かもしれないですね。こっちは任せて、こっちは横向くんだよ90度(目標変更) デオン君ちゃん戦に

集中しましょう。

「——二対一、か。ふふ、随分と侮られたものだね。僕を二人で御せると、本気で思っているとは……」

「何がおかしいのです？ 隙を突かれ、動きを封じられているというのに」

「先ほどよりも、強力な一撃を……！」

＜貴方は、デオンに向けてバットを構えてつつも、拭いきれない強い違和感を感じている。縛り付けられ、圧倒的不利だというのに、セイバーはまるで慌てる様子も見せない。状況を理解できていないのか、それとも……

「——そして残念ながら、コレは油断も慢心でもないんだ。ライダーのサーヴァント」  
「っ!？」

＜今の状況は、彼にとつて、脅威にすらならないという事なのだろうか。その答えを示すかのように、鎖諸共メドゥーサの体を引き摺り、先程よりゆつくりとだが、デオンは貴方へと歩みを進め始めたのだ。

ドファアツ!? どんな怪力なんですかね……? (戦慄) 筋力Aとかじゃ説明付きませんよ! どうなってるんすか! (悲鳴) ちょ、嫌な予感がします。逃げる準備しなきゃ (使命感)

「強いて言うのであれば……余裕、かな?」  
「ぐうっ!？」

＜いや、引き摺るだけではない。巻き付いている鎖が、軋みを上げている。まさか引き千切れる筈がない、そんな風に思った直後に……貴方は耳に、金属の弾ける音を聞いた。

「——ヒュウ、良い勘してるね。流石、幾度も僕の邪魔をしてくれたマスターだ」

ほ、ほーっ、ホアアーツ!ホアアーツ! (緊急回避)

生きてるうー→ 帰ってこれたくー! いや、マジで今ほど喧嘩師のスキルとかで回避に補正乗っけておいたのに感謝した事はない……してなかったらデオン君ちゃんの突きでホモ君の頭弾け飛んでたま

したよ（朗らか） ふぎけんな！（声だけ迫真） こんな初見殺し仕込むなんて鬼すぎるだろいい加減にしろ！

「マスター！」

あつ、香子さん援護ありがとナス！ 二つの扇らしき物、ほんへでも投げてましたね。パパパつとデオンくんちゃんをぶつ飛ばして……あ、一閃で切り裂かれてる。駄目みたいですね（諦観）

「甘いよ。私を相手にそんな牽制じゃあ」

けどこれで逃げる時間が出来ました。今の内に逃げなきゃ……！（使命感） つてもうすつ飛んで来ましたけどお!? あつぶえ！

「良く避ける……マスターにしては、中々に良い動きだ。並のサーヴァント相手ならいい感じに逃げおおせるかもしれないね」

〈切っ先が、此方を向く。腰だめに突きの構え。チャージ。一瞬後、貴方は貫かれているだろう。避けようのない未来が、見える。

「僕が、相手じゃなければの話だけど」

〈——しかし。いつも、サーヴァントに翻弄されてばかりでは居られない。腹の底から雄叫びを上げる。ランサーとの戦いを思い出す。まだ、慣れてはいないが……引き出す感覚は覚えていた。あの時の感覚にはまるで足りないが、それでも、避ける位なら！

覚醒です（威風堂々） それでも回避するのが精いっぱいなんだよなあ、回避率はそのそこあるビルドなので、そう簡単に死にはしないでしょうがやっぱりのままじゃナオキです（正直な感想）

いや、このビルドも普通にクリアする分なら十分なんですけど、こんな太い！難易度になるなんて想像もしてなかったし……（言い訳）  
そもそもホモ君サーヴァントに狙われ過ぎじゃないですか？  
こんなんじや幾つ命があつても足りないよ

「——本造院殿！」

〈何とか回避に徹して逃げ惑っていた貴方と、セイバーの攻撃に割って入ったのは、ゲオルギウスだった。視線をマリーの方へと向ければ、サンソンの攻撃をガラスの馬でいなすマリーの姿が。

「嫌な予感がする、というマリー殿の言葉は本当でしたか……！」  
「竜殺し、ゲオルギウス。そう、彼も入ってようやく対等になれるん

じゃないか？」

三対一で相手しないと抑えきれないとかヘラクレレスか何か？（恐怖）とはいえ香子さんの攻撃をあっさりを弾き飛ばし、メドゥーサさんの鎖を引き千切った辺り、間違いなく実力がこわれる（形容詞）しているのは間違いありません。

ファブニールと反応が酷似している、とロマニは言っていました。何か関係しているのは間違いないでしょう……ん？（気づき）

「……成程、剣を合わせるまでは分かりませんでした。この馬力」「どうだい、竜殺し。感じるかい、この体から溢れ出す、底なしの力を」「ええ、覚えがありますよこの力は。嫌と言う程に、我が身に染み付いていますとも」

ファブニールと反応が酷似、ドラグーン……なんででしょう。私、こういう事例を良く知っている気がするんですよ。血を浴びてめっちゃ固くなった大英雄、心臓を埋め込まれて巨大な竜になったホムンクルス。F a t e ってそういう事例に溢れてるじゃないですか。

「——如何なる手を使ったかは知りませんが、邪竜の力をその手中に収めるとは」

「正解だ、聖人ゲオルギウス！ 僕の体は、竜の力によって、より強大に、より堅牢に、強化された！ 僕は、真のになったんだよ！」

また悪竜現象だ！ ファブニール また悪竜現象だ！ ファブニール（ホモガキ）

正直ヤバイです。デオン君ちゃんは元々から普通にステも高いサーヴァントですが、そのサーヴァントが更に悪竜現象で強化を施されたとなると……何だこのチート!?!（驚愕）マジで対円卓騎士戦くらの覚悟しておいた方が良いでしょう。

〽狂ったような笑顔……嫌な迫力がある。背筋がゾツとする。力を見せつけているのは、自慢したいから決してないだろう。何か、必ず目的があつてやっていると、そう思わせるには十分な形相だ。

「手の内を明かして、構わないのですか？」

「君を相手に、隠しきれはしない……なら素直に明かした方が、威圧になる」

「——成程、バーサーク、とは呼べませんね。竜騎兵と名乗るに、相応

しい判断力！」

「セイバーの剣の一撃が、ゲオルギウスを押し飛ばす。背に庇われていた貴方はゲオルギウスの体を受け止めて……そのまま、二人でセイバーへと向き直った。

「カルデアのマスター、君には幾度も悲願を妨げられた借りがある。その借りを、今返そうじゃないか……この戦いで！」

悪竜化現象とかいうトンデモナイ切り札で凶ボス化したデオン君ちゃん。オルレアンってもう少し優しくかったイメージがあるんですけど……（困惑）

そんな感じで、今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。

## 悪竜騎士 その二

皆さんこんにちは、ノンケ（薄幸のホムンクルス）です。

前回は強化したデオン君ちゃん相手に本格戦闘開始。ちよつとほんとに、オルレアンからこんな超強化してたらバビロニアとかどうなってるんすかね（戦慄） まあバビロニアは強化する余地がないくらい絶望ゲーだからそんな難易度変更はないか！（酷い前向き思考）

さてサーヴァント戦恒例（大嘘）のステテックになりませんが……デオン君ちゃんに付いているのは『悪竜改造』。そのまんまですね。防御バフ、攻撃バフを永続で付ける単純ですが凶悪なバフになっています……ん？ あれ、防御、攻撃だけじゃない？

「竜の力を手に入れたのは此方にとつても行幸……私の力が通じるというもの！」

＜まずゲオルギウスが踏み込む。彼は竜殺しの聖人。竜の力を得た、と言うセイバーの言葉が正しいなら間違いなく天敵の筈だ。しかし、ゲオルギウスを目の前にして、セイバーの態度は変わらず。寧ろ、不敵な笑みを浮かべ更なる余裕すら見える。

「ふふ、その理屈。私に通じるかどうか、試してみると良い」

「言われずとも……汝が竜であるならば、通じぬ訳はない！

『力屠る祝福の剣』！」

つと、ステテックしてたら早速ゲオルさんがデオン君ちゃんとWorld War！（開戦） もうしてるんだよなあ……しかし、実際にデオン君ちゃんが悪竜モードなら、ゲオルさんがどれだけ脅威かも分かっていそうなものですけど、それでも凄い余裕そうなのが気になる……：：：？

「っ、ふふ。どうしたのかな？ その自慢のアスカロンも、当たらなければ意味は無いだろうに。さあ、当ててみたまえよ、当てられるなら」……成程、人型の竜、というのは厄介ですね……！！ 力負けている相手に、剣戟を強要されねばならないとは……！！」

あ、そつかあ（爆速理解） そもそもドラゴンって防御しませんし、ドラゴン殺しの剣もまあノーガードですけど、デオン君ちゃんは普通

に人間だから剣での防御位しますねえ！ アスカロンって鎧貫通はしますけど剣とかは無理っぽいですし、当たらなきゃ意味が無い。これは辛い……

「——しかし、貴方は一人、此方は三人だという事をお忘れなく」

「っ！ この、重圧は……！」

「メドゥーサ殿！ かたじけない！ その首、貫い受ける！」

「だが、剣での凌ぎ合いをさせる余地は無いと、メドゥーサの魔眼がセイバーから自由を奪い取る。動きの鈍くなる体、その一瞬を逃さずゲオルギウスが追撃を仕掛け——アスカロンの袈裟懸けの一撃を、その身に見舞った。」

「——」

「邪竜の力を取り込んだのは、悪手でしたね。シユヴァリエ・デオン」  
か、かつけえ（正直） まさに完璧な連携。ホモ君も香子さんも介入する余裕を残さず一撃ですね……ゲオルさんの竜殺しの力とアスカロン、このコンボは相当凶悪、マトモに貰ったら大ダメージは免れないでしょう。

……けど、先程のデオン君ちゃんの余裕の態度から何となく嫌な予感がビンビンだよ、ここは無駄になるかもしれないけど備えて差し上げろ（命令系）

「——見事だね、竜殺し」

「っ！」

お、やべえ119番だな！（レスキュー） シュバルゴオ！（タツクル） お前の思う通りになんかなんねえぞお前！（スマブラ） ふう……ゲオルギウスさんが速攻で退場する所でした、危ない危ない。デオン君ちゃん、まさかの不意打ち振り下ろし。結構豪快に斬り付けられてたと思うんですけど全然そんな風に見えない……見えなくない？

「……へえ、勘が良いね。カルデアのマスター」

「ほ、本造院殿。助かりました……ですが、何故!? アスカロンの一撃は、間違いなく貴方の体を切り裂いたはず！」

「ふふ、其方に関しては教えられない。残念ながら」



「体には間違いない、斬り付けられた跡が残っているが、傷は深い物には見えない。どういう理屈かは分からないが、セイバーにはゲオルギウスの竜殺しの力が通じていないのだ。」

「成程、からくりがあるという事ですか。簡単に力の秘密を明かす時点で、警戒の度合いを格段に上げるべきでした！」

「ですが……慢心している事には変わりはないようで」

ドラゴン殺しの力が効かない竜種とは（哲学） 何お前竜の癖にお前竜殺し無効化してるんだよこの野郎、オイ。止めたくりますよ！  
実況（現実逃避） つと？

「メドウーサの言葉の直後、無数の文字がデオンの周辺で巻き上がる。流石に驚いたらしいデオンを内部に封じ、竜巻の様に文字が躍る。香子の援護攻撃だ。」

「——お見事です、シキブ」

「お三方、今の内に！ マリー様、追加の援護は必要ですか！」

「大丈夫よ、ありがとう！」

「その一瞬の隙に、貴方達三人は香子、そしてその奥のマリーを背にして態勢を立て直した。」

久しぶりのハリケーンみたいな文字が非常にハリケーンで、非常にハリケーンの（我修院様）な攻撃、懐かしい……でいる場合では、ありませんね？（方針転換）

竜属性の効かない古龍モンスターとかクソですか？（直球） このゲームはモンハンではない（無言の腹パン） とはいえ状況は似たようなもんやし……早急にあのドラゴンデオン君ちゃんをどうにかする為の方策を練らないと……それにしてもデオン君ちゃん出てくるの遅いですね。もしかして見事封じ込めたとか？

あ、いえ竜巻が剣の一閃で縦に割れましたね。デオン君ちゃんの切っ先が入っちゃう……（突撃） しかしここでゲオルさん、迫真の割り込みカバー。

「せえいー！」

「無駄な事を」

ゲオルさんが両手で構えた渾身のアスカロンの振り降ろし。それ

を片手の剣で軽々と受け止めた(!?)デオン君ちゃんに対し、今度は上空からメドゥーサさん、そしてゲオルさんの脇からホモ君、よし、完璧だな!(フラグ) 三人に勝てる訳ないだろ!(数の暴力) 一番分かりますい解決方法を取るのは当然。当たり前だよなあ?

「っああっ!」

「——それも無駄だ」

メドゥーサさん(の蹴り)、(無傷で防御とか)マズいですよ!! まあ攻撃を防がれるのなんて世の常だし、多少はね? それじゃあ次は特別な稽古(ホモ君)付けてやりましょうか。狙いは当然デオン君ちゃんへの直接攻撃ではありません、足だよ足。ヨツンヴァインになるんだよ(転倒狙い)

「マスターの君の攻撃なんて、通じると思うかい?」

ちよつと侮られてんよー(激怒) 確かにホモ君の攻撃はクソ雑魚ナメクジだし、鬼の血覚醒でほんのちよつとダメージ負わせるのが精々。特異点Fでセイバーをひっくり返せたのも、ヴラド公に勝てたのも、相手が滅茶苦茶弱ってたからってハッキリ分かんだね。

△——香子さん、メドゥーサ!

「——はい!」

「油断しましたね、ドラグーン・セイバー?」

「貴方の声に応え、香子が呪を紡ぎ、メドゥーサが目を輝かせる。魔眼と、陰陽道。二重の呪いが、セイバーの力を大きくそぎ落とした。」「っ!」

「けどマスターの戦い方は、王道を征く……サーヴァント頼りなんで……特異点Fみたくひっくり返してやるからお覚悟して、どうぞ(R I K U マ マ) って事で先ずは膝裏にバット入れてワンダウンからのホラホラホラホラ、どんどん行くぜえ?」

メドゥーサさんがあ! 跳躍してえ! メドゥーサさんがあ!

画面下あ! お、腹に膝が入りましたね。大丈夫か大丈夫か? 大丈夫そうですね……じゃあオマケでもう一発、くの字に折れた体、浮き上がった頭にフルスイングだ(追い打ち)

「——それでは、失礼……覚悟をした方が良いかと」

「はあっ！」

「これで、どうですかっ……！」

そして地面に転がっているとところに追撃でゲオルさんの斬撃と香子さんのおまじない(物理) このプレイヤー、容赦せん!(ST様並感) や、キモチイフルボッコで草。こっちの方が悪役染みた攻撃してませんかね……特にホモ君のやり方とか、自分でやっておいてなんですがヤクザのそれで更に草。どこぞの眼帯ヤクザを思い出しますね。弱いおう?(関東指定暴力団幹部)

「……ここまでやっておいてなんですが」

「ええ、メドウーサ殿。同意見です……全く手ごたえがない」

え、嘘でしょ(語録無視)

「——流石は竜殺しの聖人に、ギリシャーの女怪、勘が冴えているじゃないか」

え、嘘でしょ(二重の極み)

＜信じられないような二人の言葉。それを頭で租借する前に、まるでなんて事の無い様に、セイバーは立ち上がった……複数の細かな傷こそ見られるが大きな怪我は愚か、出血すら見られない。

「ぞ、そんなっ……!？」

＜……強化されたっていうのは、伊達じゃなさそうだな。

＜強き事は誠に素晴らしき事……戦い甲斐がある！

あ、はい。上だよ(常識)

しかし、竜殺しの力は通じず、三人(+オマケ)の連携での力押しもほとんど意味が無いとは……やべえ、マジでこのオルレアンの中でも折りの怪物じゃねえか!? ゲオルさんだけじゃなくてジークさんも呼んでこなきや……ファブニールの相手中やん?!(驚愕)

＜三騎のサーヴァントを相手にまるで怯まず、寧ろそれで漸く対等に戦えている程度。しかも此方の攻撃はまともに通らない。力の差があり過ぎる。

「彼のジークフリートは、竜の血を浴びた事で、生中な攻撃は通用しなくなかった。こんな感じなのかな……君達の攻撃が、まるで恐ろしくない」

た、確かに。ジークフリートさんは竜の血を浴びてカチコチになりましたけど。だからと言ってこんなチートええん!?

「けどそんなジークフリートも出来なかったことはあると思うんだよ。例えば、そう。こんな事とか、ね」

「不意に、セイバーが深く呼気を吐いて……呼気は、瞬時に青白い炎へと変ずる。驚きに目を見張っている内に、蒼い焰は剣へと纏わりつき、禍々しい輝きを灯した。」

「竜殺しの力が通用しない僕にどうやって勝つのか……精々、見つからない方法を探しながら我が剣の前に倒れると良い」

……もう十分だ、もう十分だよ（強化内容）

と言った所で今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。

## 悪竜騎士 その三

皆さんこんにちは、ノンケ（騎士オオン！ Z E R O）です。

前はデオン君ちゃんが無双するさらなる下地を見せてくれました……ふぎけんな！（豹変） あんな滅茶苦茶な強化ねえよ……竜属性通じない悪竜現象とはいったい何なのか、デオン君ちゃんにめっちゃ問いたみたいです。

とはいえ答えてくれる訳もないので、そのマジックのタネを地道に解いて行くとしましょう……とか思ってたら、更なる強化内容を見せてくれました（半ギレ） テメエー！ 何してんだあ!?!（詰問）

「炎の、剣……!?!」

「どうだい？ 面白い芸だろう？ さあここからは少し本気で行こうじゃないか！」

ステチエックステチエック！ さつき確認できなかつた部分を……あつ（戦慄） なんか全ての攻撃に火傷付与状態を付与、とかいうトンデモナイ能力が備わってますね。火傷はほんへと同じくスリッパダメージを引き起こします。その上、当然ながら重ね掛け可能となっております。F G O R P Gでも当然ながら凶悪なダメージソースですので、重ね掛けなんぞされたら死ねます。

＜そう言った直後、振られたデオンの剣の切っ先が地面を擦る。巻き起こったのは焰。唸り、振じれたそれは、蛇のように此方へと突き進む。＞

「っ！ 散って！」

＜ゲオルギウスの声に、一瞬遅れてだが皆が四方へ撤退しようとするが……一歩、戦い慣れていない香子の反応が遅れてしまった。＞

ヤバいって（焦り） 生きてえなあ、生きましょうよ！（レスキュー開始） ……ちよつと焦げましたけど救出には成功したので問題はありません（似非RTA奏者並感） 体力の消費は予想より全然少ないですね。

「——マスター……!?! 大丈夫ですか、お怪我は!?!」

へーキへーキ、へーキだから（余裕のホモ）

「ごめんなさい……お手数を、おかけしました」

まあ当たつても大して痛くない、と言うのが判明しただけでも儲けもんです。ん？ でも本気を出してるって、言っていないよね？（不安の種）

「——そこだっ！」

「っ!」

◁その直後に、デオンが狙ったのはゲオルギウスだった。散開したその時を狙った一撃。辛うじて受け止めたゲオルギウスだが、拮抗しているようには見えない、押されている。

「どうしたのかな……？ 相手は竜だよ？ 竜殺しの力を見せつけたらどうだい！」

「つく！ 先ほど、嫌と言う程、その力が通じないという事を見せつけておきながら、良くぞ言ったものです！」

完全にゲオルクさん押されてて草も生えない。やっぱ一対一じゃ絶望的に不利。必ず二対一ないしは三対一で与すべきですね。よし、僕もカッコいい所見せてやるぞ！（参戦）

「マスターは下がって香子の護衛を。アレを直接相手するのは私とゲオルギウスが」

ヌケニン……（防御専門） 実際デオン君ちゃんにホモ君の攻撃は欠片も通用しないし、コレは仕方ありませんね。とはいえ二人がかりでも勝てるかどうかは結構微妙な所さんですから油断はしないようにしないと（義務感）

「——サーヴァントを三人相手取って、全く引けを取らない……恐ろしい方」

◁香子の言う通り。相手の力を侮っていたというのは間違いないだろう。とはいえ決して攻略できない、という事も無い。攻撃が一切通じない、という事も無い。最初に放った香子の一撃も、痛がつている様子を見せていた。

◁……あれ？

◁……香子さん、俺……この戦いが終わったら、貴方に言いたい事があるんだ。

上だよお！（緊急事態） 強大な相手を打ち破ろうと覚悟を決め、その直後にフラグ染みたセリフ言わせるとか間接的に死ねって言うようなもんだと思うんですが。まあそれは兎も角。

「どうか、なされましたか？」

くふと気が付く。香子の一撃が通じている、というより……最初の一撃以外殆ど彼に痛みを与えられている者は居ない気がするのだ。

「いえー。まさかそんな……お二方共に、私など比べ物にならない程に強さも何もかも格上の方。そんな方々の一撃が、まるで通じないというのに」

『——そうでもないかもしれないよ？』

お？ ここでドクターが御帰還。解析に集中する、とか言ってますけど何かわかったんでしようかね。

「ロマニ様！ 何かお分かりになったのですか!？」

『まあ、一応。ずっと計測していてわかったんだけど、本造院君の言う通り。ドラグーン・セイバーのバロメーターに僅かでも異常が発生したのは、最初の紫式部さんの攻撃が直撃したその前後だ。それ以外の攻撃じゃ、まるで彼に影響を及ぼしていない。貴女が存在は、何かのカギになるかもしれない』

はえ〜 凄い解析能力……しかし、香子さんの攻撃だけしか通用してないっていうのは奇妙ですよねえ。ゲオルさんの攻撃だけ通用しない、っていうなら竜殺し対策だけして来たって事で分かりやすい（理由は不明）で分かるんですけど。

『で、もう一つ。役に立つかは分からないけど……ドラグーン・セイバーのデータをファブニールのそれと比較してみた。確かにデータはファブニールに近いものだとは分かったけど、そのデータよりももっと、今のセイバーに近いデータがあった』

「近い、データ？」

『本造院君。君が反応を異常に変化させたときのデータ。共通点がより多いのは、そちらの方だったよ』

ホモ君の反応が!？（重要） 近くて……？（困惑）

『それがどうしてかは分からないけど、参考にしてみたい。って藤丸君も結構危ないな！ 向こうのサポートに行くから、一旦これだ！』

＜ロマニの通信が切れる。と共に隣の香子と顔を見合わせた。自分が異常な反応を叩き出した時、となると。あのランサーとの戦いの時か。

「……もしかしたら」

おや？ 香子さんには何か考えがおありで？ って待つて待つてゲオルさんとメドゥーサさん纏めて相手してるはずなのにデオン君ちゃんがこつち向いてる、これは……死じゃな？ (高次元予測)

「あの、マスターってキャツ?!」

炎がお体に障りそうですよ……？ (危機察知) 逃げなきや (使命感) っていかお二人の相手をしてるんですからこつちに意識向けてないでそちらに集中して、どうぞ。

「あ、ありがとうございます……」

＜どうやら二人と戦っていても此方への攻撃の手を緩めるつもりは無いらしい。時間の余裕はない。手に抱いた香子へ問いかける。何か知っているなら教えて欲しいと。

っていか何気に姫抱きなの笑う。ホモ君女の子の扱い心得てそうな顔してないのに。寧ろ女の子泣かせるようなお顔してらつしやるのに。人は見た目に寄らない、なんだこのオッサン!! でも滅茶苦茶紳士って事なんざ幾らでもありますねえ!

「その……あくまで、思い付き、ですけど。あの方は、魔性の力を纏っているのかも、しれません」

＜魔性？ と貴方は問い返す。

「それが、もし本当なら……私の力なら、多少は通じる、というのも理解できます。魔性の類への備えなら多少は、覚えもありますので」

ああ、そういうえば香子さんのスキルに魔性特攻ありましたね。成程、それが通ってたのかなるほどなるほど……なんで?!(困惑) デオン君ちゃん竜種の力を手に入れたんじゃない!? どうして魔性の力手に入れちゃってるの!?



「なる、香子ならこの状況を打開できるのかと問うたが……香子の表情は、思わしくない。俯いて、活路を見出したようには見えない」「けど、私のそれは、あくまで本当に、備え、程度の物です。史実にて怪異を討ち果たした坂田金時様、源頼光様などに比べれば……考えが当たっているかも疑わしいですし、もし、この考えが合っているとしても、どこまで通じるか……それ、に……」

「貴方の方を見た、香子の瞳が潤んでいる。それが何故か、怯えをも含んでいる気がした。どうしてかは、貴方には分からない。分からないが……言うべき言葉は、もう決まっていた。」

「大丈夫。俺と香子さんなら、何とかなる！」

絶対、大丈夫なんだよなあ。俺のサーヴァントは最強、ハッキリ分かんだね（信頼）

「マスター」

「香子の瞳を見つめながら、もう一度、この人と一緒なら大丈夫と心の中で繰り返した。自分を、鼓舞するように。一瞬、香子の目が見開かれた後、潤んでいた瞳はしっかりとした輝きを取り戻し、口元は凛々しく引き締まる。」

「私の力が通じると、信じていただけるのであれば、お願いしませぬ。マスター。私が最大の威力を叩き込むだけの時間を稼いで頂けませんか。あの、館の時の様に」

「香子が真剣な表情で此方を見る。であるならば。貴方が言う言葉などたった一つしかないだろう。マスターとして。」

「分かった。お願い、香子さん。」

この状況を打開できるのであれば。幾らでも時間位稼ぎに行きますよ！イクイク。ヌツ！（覚悟完了）っていうかロマニの情報からの香子さんの『魔性特攻なら通じんじゃね？』ってというのが唯一の突破口ですから、実行せざるを得ないというか。

「お任せくださいマスター。必ずや、セイバーを討ち果たして見せましょう」

香子さんと一緒に覚悟完了！した所で今回はここまでとなりませぬ。ご視聴、ありがとうございました。

## 悪竜騎士 その四

皆さんこんにちは、ノンケ（憂鬱金ぴか）です。

前は、香子さんの魔性特攻を生かしての突破口を発見しました。さあ、ドラグーン・セイバー解体ショーの始まりや（愉悦顔） 本当にできるのかって？ 香子さんと一緒なら出来ない事はないってハッキリ分かんかね（初期鯖への信頼並感）

あ、ミツシヨンが出ました。指定時間の耐久……特異点Fでも似たようなミツシヨンが幾つも出てましたけど、そことの差はスゲー難易度の差だゾ……（憂鬱）

＜香子を降ろし、貴方は前線へと向けて走り出す。同時に叫んだ。状況を打開する為に、三人で時間を稼ぐ、と。ゲオルギウス、メドゥーサがこつちに視線を寄こし……即座に頷いてくれた。

「考えがあるのでしたら……」

「力を貸しましょう！ 頼みますよ、本造院殿！」

お二人ともありがとナス！ ん？ アイエツ!? なんだこの焦げ具合!? ゲオルさんの鎧が焦げてんの！ 分かるこの罪の重さ？ ハア……あ ま く さ（激怒の象徴） ちよつと許されんわ、これだけは。

＜二人の攻撃を凌ぎ続けるセイバーに、まるで苦戦している様子はない。寧ろ、ゲオルギウスの剣も、メドゥーサの鎖も、剣一本で捌き、防ぎ、凌ぐその姿。堂々とした迫力すら感じる程だ。

「——何をするつもりかは知らないが、させると思っているのか」

「そちらこそ、先程のように攻撃をすり抜けさせるような真似をさせると思いませんか」

「二度も同じ轍は踏みません」

それに三人に勝てる訳ないだろ！（ホモ君参戦） ホモ君は、まあほぼ戦力外とはいえ気を引く位の事は出来ると思うので、香子さんの準備が整うまでは守護らねば。

ということ二人の後ろにホモ君を控えさせます。今の所、二人の攻勢が続きセイバーから仕掛けてくる事はありませんが、万が一、二

人が突破された時は体を張ってでもセイバーの動きを止めましょう。団長にはいい加減に止まって貰わないと（無関係）

「言うじゃないか……まるで私が全力で君達の相手をしていると思われているのが、些か不服だね」

「何？」

「この後にも、またやる仕事はある……その為に余力を残しておきたかったから、全力は出していかなかったけど。何か打開の一手を打とうとしているのであれば、話は変わってくる」

なんかテキストが不穏。ちよ、こつちも戦闘態勢取っておかないと、なんか突然ゲオルさんとメドゥーサさんが押し返されても全然可笑しくありませんよこの空気。

「ハアッ！」

「っ!？」

剣振っただけで更にすげえフレイム!? フラグ立てた直後に押し返されて草も生えないんですけど、さっきより出力上がっているのに見えるのは、私の気のせいでしょうか……? 焼き払うっていうか灰も残さぬレベルなんですがそれは。

「……まだ出力を上げられましたか」

「少し、と言っただろう。それ以上は出す必要は無いと判断していた。まあ、その目論見の甘さを呪っている所だ……故に」

有言実行でおっp……おっばげた……いやサーヴァント二人分を纏めて吹っ飛ばす一撃とかそんなんチートでしょ（素）確認しますけどここオルレアンですよ？ 前回ネタで言いましたけど、マジでバビロニアとかと違いますよね？（震え声）

「本腰を入れて、このオルレアンを君達の墓標にする事に決めたいよ」

〜じわり、体を蝕むような圧力が貴方を包む。本腰を入れて、と言うのはブラフではないだろう。ここから、セイバーは本当に本気を出して向かってくるのだ。少しずつ、足が重くなっていく。

あ、デオン君ちゃんがご自分から『ここはオルレアンだよ』と保証してくれました。ありがとうございます（適当）じゃなくて！（一転）オルレアンからこんな難易度とかやつぱり壊れてるじゃないか

……

「……まあ、それは構いませんが。出来るのですか？」

「多少は火力が上がったようですが、その程度でしょう。特別恐れる事でもない！」

◇だが、圧倒的な力を見せるセイバーに対し、それでもメドゥーサとゲオルギウスは立ち上がった。セイバーの力を、恐れる様子は無い。二人の背中を見て、貴方は膝を打って自らを鼓舞した。気おされて、戦う前から負けを認めるところだった。

「言うじゃないか」

「事実ですから」

「我々を一瞬で切り崩せる……そんな圧倒的な力でもありません。であれば、恐るるに足らず」

割り込んだら死ぬので後詰に徹しているホモ君を他所に、お三方が更なる激戦に入りました。ゲオルさんとメドゥーサさんの状態異常欄に、ちよつとずつ火傷が増えていくのが辛いね……現状二人が明らかに不利であることは間違いないですね。すげえフレイムな勢いに圧されて……どうして二人をこんなに困らせるんですか（当然）  
切られた場所が焔で焙られるその痛みは想像を遥かに絶するんじゃないかと……やっぱり割り込んでみつか！（GKU）だからそれすると死ぬって言うてんだルルオ!? 堪えるんだよお！

「勝てはしなくても！」

「徹底的に、邪魔をさせて頂きます」

「ちいっ……」

◇だが、それでも……二人は決して、最後の防衛線を踏み越えようとするのを許さない。アスカロンが炎の剣を受け止め、メドゥーサが卓越した体術で、セイバーを決して抜かせない。

かつこいいい（小並感） いやもう、ホントカッコ良すぎるゾ……ヤバゾ……（語彙消失） ゲオルさんが真っ向からデオン君ちゃんと切り結んでるのもカッコいいし、その周りでメドゥーサさんが三次元的な動きでデオン君ちゃんを翻弄してるのもヤバい。

「私は守りの戦こそ得手とする身……！ 抜けると思うな、邪竜の騎

士！」

「本気を出す、本腰を入れる……口に出す割りには、あまり強くなったようには思えませんね」

「っ、この二人……予想以上に！」

焰攻撃凄いいっぱいっばい……来てますけど、お二人どうしてかそこまで苦しそうには……アレ？ 寧ろちよつと動きが良くなっていないか？（着眼点） いや、待つてくださいゲオルさんが炎攻撃の終わり際……剣を止めた！ でその隙にメドゥーサさんの蹴りがデオン君ちゃんに突うずるっ込んでいくう！

「……っ！」

「そして、慣れていない力を使っている所為でしょうか、炎を放つ攻撃は些か……」

「ぎこちないですな。成程、付け入る隙を見つけました！」

語彙が消える（エンジンヨイ勢の本懐） 上手いぞ二人共（空気） 僅かな攻防の間に相手の不得意な所を見抜いて反撃の糧にするとか……これって、勲章ですよ……（恍惚）

実際、こうして外野から見ると、デオン君ちゃんの攻撃手段は、炎の剣による直接攻撃、炎を巻き上げての中距離攻撃の二種類に分かれて、それで炎の中距離攻撃はちよつとだけタメの動作があるんですよね。こんなん、某ダクソばりに死なないと分からへんねん！

「それがどうかしたのかな？ 隙を見つけても君達の攻撃が通じない事には変わらない！」

「貴方を……」

「押し留め安くなった、という事！」

おっ、セイバーが声を荒げて突撃して来ましたね。凶星を突かれて冷えてんか？ 少し余裕を剥がされたのか。デオン君ちゃんは無敵の怪物ではない、苛立つているの？（冷静さ）加えてよ（煽り）しかも真っすぐ突っ込んでくるだけで一切、防ごうともしないとか、余裕ぶっちゃって、馬鹿じゃねえ！

「——それは違うさ、僕にはこういう方法も取れるからね！」

おや？ デオン君ちゃん、突っ込んでくる、っていうか勢いを弱め

ませんが……攻撃が通じない体、突撃……あつ。

＜だがその突撃は、決して怒りに支配されただけの、考え無しの行動では無かった。振り下ろされたアスカロンが体に食い込んだ瞬間、セイバーは更に加速する。狙っていたのだ、力押しでこの二人を突破する、タイミングを。

「――マスターっ！」

＜前からメドゥーサの、後ろから香子の声がある。目の前には、竜の力を得た恐ろしい騎士が迫っている。無防備に立ち向かえば、まず自分などあっさり殺しえる相手だ。

ほ、ホモ君サーヴアントと一騎打ちとかし過ぎじゃありませんかね？ だからあんまり無茶をさせるつもりは無いつて言ってるんじゃないか（消耗）でもやらないと、普通に詰みそうなんでやらない選択肢は駄目です。

けどバットで真面に殴り合ったら普通に死にそうですし……よし、ここは武器を捨てて漢タツクルやな！（武器を大切に作る人間の鏡）  
＜それでも……貴方は、視線をそらさず、真つすぐ突っ込んだ……自分の武器のバットすら投げ捨てて。姿勢は低く。腹の底から、もう一度声を絞り出す。死と生の狭間で、ほんの僅かだが、眉間にバチリと痺れが走るのを感じた。

＜メドゥーサ！ 魔眼を！

「――っ、ええ！」

＜直後、ガクン、とセイバーの膝が落ちる。目を見開き――自らの失態を悟ったセイバーに貴方は、全力を以ってぶつかる。物凄い衝撃が、体を走り抜けたが……貴方は、見事デオンの突撃を、受け止めていた。

や っ た ぜ ！ あ、でも時間稼げるのはほんの僅かですからそれまでに間に合わない……ナオキです。

「マスター！ 陣の構築、終わりましたー！」

＜一瞬、押し留める間に、体から力が抜けていく……だが、崩れ落ちる直前、貴方の耳に香子の声が聞こえた。もう何も考えない。やるべきは、たった一つ。

◇◇ 令呪を以って我がサーヴァント、藤原香子に告げる！

◇◇ 宝具を以って我が敵を打ち倒せ！

「――承知いたしました！」

香子さんの全力、見たけりや魅せてやるよ（マスター並感）

「限りあれば 薄墨衣 浅けれど 涙ぞ袖を 淵となしける――」

『源氏物語 葵 物の怪』

◇ 筆が、走る。紫式部の、彼女の言葉が、詩が、紡がれていく……  
そして。

今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。

『香りました』

『うそつきの香り……漸く……』

『――逃しません』

## 悪竜騎士 その五

皆さんこんにちははノンケ（黒子野郎）です。セイバーの方が好きやねんな。

前回は、いよいよ全力を以って香子さんの宝具が解放されました。さて、どれくらいデオン君ちゃんに通じるのかって感じですが……問題は。頼むからちゃんとダメージ通してくれよなあ頼むよ〜？

「——つあああああああああああああ!?!」

＜香子の紡いだ呪詛は、あつさりと悲鳴をセイバーに上げさせた。地面へと、力無く崩れ落ちて、頭を押さえ、吠える姿から先の余裕は失われていた。

待つて予想以上に効いてませんかね!? ちよ、デオン君ちゃんがのたうち回ってるんですけど!? え、ナニコレ、静謐ちゃんの毒を貰ったノーマル魔術師並みに苦しみまわってるじゃん……?（風評被害）

「…………、ここまでとは」

「シキブの宝具とは、かくも恐ろしいものですね」

「いえ!? この様なその、惨状を生み出すような宝具ではなくて!?!」  
＜ゲオルギウス、そして、メドゥーサが完全に引いている。貴方も、引きはしなかったがあまりにも強烈に香子の宝具が通じているのに驚いてはいた。

いや私も驚き桃の木山椒の木なんですすがそれは……魔性特攻の宝具がここまで刺さるっていったい何をしたんだデオン君ちゃ……なんだコイツ!?!（驚愕） 待つて!?! 私の目の錯覚じゃなければ、デオン君ちゃん、若干溶けてませんか……?」

「バカ、な……僕の、表皮、が……!?!」

＜もだえ苦しむセイバーの体から、肌色の物がどろりと零れる。それは落ちた場所から考えて手の皮だったであろう物……しかし、地面に零れ落ちた瞬間、瞬く間にその様相を大きく変えてしまう。

「な、皮が……ち、珍妙な触手に!?!」

「見た所、凡そ真面な生物とは思えませんね。正直気持ちが悪いというか」



アレは……海魔じゃな？（Zero履修並感）ちぎれて原型無いやん、と言う感じですが色は元々のままなので一発で分かります。つていうかデオン君ちゃんの皮が溶けたら海魔になるとはどういうことなの……

『——突然ゴメン！　なんかファブニールの反応が増えたんだけど、何か知らない!?!』

＜その時、ロマニが素っ頓狂な悲鳴と共に通信を入れて来た。ファブニールが増えたと言われても、周辺にそれらしい影はない。なら、可能性があるとすれば……

『……うん？　そのセイバーの反応、明らかにさつきと違うぞ?!　さつきのは似てる、位だったけど、コレはもうファブニールそのものって言っても……って、あれ？　セイバー蹲ってるけど、もしかしてやっつけた!?!』

ファブニールと同等の反応に変わった……原因は間違いなく、香子さんの攻撃ですね。というか他に此方は一転攻勢出来てないし（目逸らし）

「……よ、くも」

＜ロマニの言葉の直後、セイバーが動きを止め、ゆっくりと立ち上がってくる。べちよりと落ちて、怪物へと変わる異質な皮。その下から見えてくるのは……黒い鱗。ほとんどはそのままだが、一部が鱗に覆われた歪な人間の肌。そして胸に輝く、紋章のような模様。

「やってくれ、たね……表皮を、引き剥がされる、というのは、こういう気分なのか」

「肌の下から、また肌が……?」

「——成程、そういう事ですか」

ゲオルさん!?!　どういうことなの……?（二度目）

「着ていましたね?　怪物を、もう一枚の肌として、鎧の様に。それで竜としての自分を覆い隠すとともに……竜殺しの力への、盾にしていた」

「……まさか、コレを剥がせるものが……いる、なんてね」

……ちよつと頭を整理しましょうか。しばらくお待ちください。

ヌウン！へッ！へッ！

アッアッアッアッアッアッアッ →アッ →アッ →アッ →アッ  
アッアッアッアッアッアッアッアッ!!! ウッアッアッアッアッアッ  
アッアッアッアッアッアッ!!! フッウッウッウッウッウッウッ!!!  
フッウッウッウッ!!! (大迫真)

……整理完了です (恍惚)

要するに、竜としてのデオン君ちゃんに海魔、要するに魔性特性の皮を被せて竜殺しの力を削いでいたようですね。海魔は魔性としての特性以外を確か持っています。盾にするには丁度良かったんでしょう。お前マジシャンみてえだな (素直な賛辞)

でも魔性の皮を被っている間は、魔性特攻二重持ちの香子さんの攻撃が面白い様に刺さってしまい、その皮をぶち破られてしまった、と。何だこの不運はたまげたなあ……

✓火の消えていた剣に、もう一度熱が灯る。まだ、倒し切れては居ないが……間違いなく足元もおぼついていない。相当なダメージを負ったのは間違いないだろう。

「そして、今の僕を間違いなく殺しえるのは……」

「私だけ、ですね」

「——良いだろう、こうなれば、正面から力でねじ伏せるだけだ！」

✓ゲオルギウスが地を蹴って走り出す。セイバーは、未だそこから動かない。香子の攻撃の影響が残っているのか。

魔性特性が引っぺがされた今、デオン君のドラゴン (意味深) は丸出しです。あくもうめちやくちやにしてやりてえんじや (反撃開始)  
「ガアアアアアアッ！」

✓否、唯立っていた訳ではない。咆哮と共に、先の出力をさらに超えて吹き上がるのは、焰。思わずゲオルギウスも、駆け出していたその足を、止めざるを得ない。

ひえっ……止めてください (弱体化) 剣の一振りできっきの810倍位の炎が噴き出してきたんですけど何ですかねコレ、バグ? いいえ仕様です (ほんへ並感) やめてくれよ……

そういえばデオン君ちゃん、力を温存してたって言ってましたね。

旗色が悪くなったと悟って、いよいよ温存を止めたようです。香子さんの一撃を経てなお、まだボスとしての力は健在とか、誇らしくないの？

「ハア……力を温存しすぎて、王妃の命を頂く前に倒れるなど、本末転倒だからね」

「……貴方には、マリー殿を害する事は出来ません。いいえ、させませんとも。お二方！ 援護を！ カルデアの方々が役目を果たした今、後は私が役目を果たす番でしょう！」

あ、勝利条件が変更になりました。ドラグーン・セイバー、シユヴァリエ・デオンの撃破ですね。後はゲオルさんを援護しつつ、彼に止めを刺してもらうだけです。いぎ鎌倉（USWK） 一気に畳みかけましょう！

「参ります……！」

香子さんの闘志がビンビンでいらっしやる（誉め言葉） やっちゃいましたようよ！ その為の陣設置？ 後その為の陰陽術？ でも全部の攻撃、普通に炎に焼かれて無効化されてますね。悲しいなあ……  
「——背中が無防備ですね」

でもその間にメドウスアさんが既に後ろへと回り込んでる＋114514点。よーしこつちに押し込んで、押し込んでホラ……待つて!! 間髪入れず背後にも炎巻き散らしたんですけどなんてことを……（恐怖） あれ。そういうえば 接近戦で迎撃とかじゃなくて、炎を全力で使つての中距離ばかりですね……？

「くっ……これでは」

「近寄りようも、ありませんか」

『やばいぞ、これは……出力がどんどん上がってる！ あんな炎の中に突っ込んだらサーヴァントとはいえ、まず持たない！』

一回、二回、三回……いや待つて!! さつきから炎攻撃しかないやん!? そんな両極端な行動して……先ほどとは比べ物にならない程の大きさの波が、ドバババー、っと出てきて、圧倒的な物量に、此方の攻撃は押し流されて、ああ、もうやってられねえぜ（なげやり） そりゃあ近寄せたらゲオルさんのアスカロンが怖いですけど、だか

らっていつて結構セコイ……せこくない？

あ、一回ホモ君で近寄ろうとしましたが、近寄っただけで若干スリップダメージ染みた物を受けたので、即撤退です。

＜温存を捨てた全力はまさに小規模なフアブニール。胸の紋章を青く、蒼く、滾らせる。間違はなく、セイバーを打倒できる状況までもつていつているというのに。その壁は未だにあまりにも厚い。

「——本造院殿、後をお任せしても、構いませんか？」

おっ、どうしたどうした？（打開策を欲しがるホモ）

「私の馬は一度であれば、あの炎の壁は潜り抜けられます……一度凌げれば、流石に我が命が燃え尽きるまでには、一撃も見舞えましょう」  
＜それは——紛れも無い、特攻の宣言だった。

えっそれは……（惑い）確かにゲオルさんの宝具は、一度迄だったからカスが効かねえんだよ（無敵状態）を維持できる馬だったはずですけど、そこから先は戻ってくる積もりないんですか……？

「……清姫殿は、その身を盾に、狂騎士の進撃を阻みました。ならば今度は、私が我が身を鋒として、竜騎士に引導を渡す番でしょう」

＜そう言つて、ゲオルギウスは此方の答えを待たず、一步、足を踏み出した。もはや後ろを振り向く事もなく、見据えているのはたった一騎、セイバーだけだ。

「短い間でしたが、貴方達カルデアの事は見ていました。良き人々だ。貴方達を先に送り出せるのであれば、この身も、惜しくはない」

聖人の極みがこの野郎……（慟哭）おい、（ゲオルさんはその足先を）返さねえぞ（覚悟に対する諦観）ならば私が出来るのは、香子さんとメドゥーサさんに、ゲオルギウスに太いしーちきん（援護）が欲しい！ と恥も外聞も捨ててマジメに頼み込む事くらいでしょうか。  
「わ、分かりました！」

「……無理難題を言うものですね」

＜香子とメドゥーサがデオンに向けて構えを取った。準備は整ったのを見て取って、ゲオルギウスが更にもう一步を踏み出す。そして……次の三歩目で、いよいよ、焰の波へと、走り出そうとして——

行かないで（懇願）目の前で犠牲者が増えるのはホント辛い……

辛い……ん？

『逃しません』

＜背筋に氷柱が突っ込まれたような感覚が走る。直感に従い、空を見た。雲の切れ間、蒼い空に滲みだすように、何かが飛んでくる。見えたそれは……

「なっ」

『逃しません、逃しません、絶対に……！』

……うせやる？（素） 青い炎が大空から……いや確かに全く死亡報告も何もなかったですし、行方不明でしたけど？ だからってこのタイムニングで、あんな風に突っ込んでくるとか。

＜それは……青い、焰の蛇。セイバーの焰が、霞んで見える程の燃え盛り方で、それは此方に、ミサイルの如き勢いで突っ込んでくる！

『転身 火生 三昧！』

「そ、そんな……!? 生きていたのか!？」

これって……勲章ですよお？

＜炎の蛇が、巻き上げられた炎の波とぶつかる。だが……まるで、足りない。英雄の宝具と唯の炎では出力が違う。あつと言う間に食い破られ、蛇は胸元に食らいつく。文様の浮かび上がった、胸元へと。

『シャアアアアアアアアアアアッ!!』

「——っ」

＜声にならない悲鳴が上がった。燃える、焦げる、そんな匂いがする。声で、悟った。彼女は生きて……ずっと、デオンに食らいつく機会を伺っていたのだと。

執念が怖すぎる（率直） でもってデオン君ちゃん崩れ落ちました！ 結構……やり方上手いじゃん（歓喜） 良いカツコだぜえ？

＜——今だ！

＜貴方の一言に、香子が、メドウーサが動く。筆が走り、魔眼がセイバーを縛る。同時にゲオルギウスが、今度こそ走り出した。そして……全ての力を使い果たした彼女、清姫が力無く地面へと倒れる。消える様子は見られないがボロボロになっているのは、分かった。

「——お見事です、清姫殿。ここまでのお膳立てをされては、一層奮わ

ざるを得ません」

デオン君ちゃんはダウン寸前、香子さん達の援護もあり……これは勝ちましたね間違いない（慢心）

∟ゲオルギウスが、剣を構える——だが、最後の力を振り絞ったのは此方だけではない。自らの体を、絡みついていた呪詛を諸共焼いたセイバーが、立ち上がった。

ファツ!?（フラグ回収を速攻でする実況者の鏡にして人間の層）  
慢心なんかしなきゃ良かったゾ……ゲオルさんすいません！ 勝つてくださいオナシヤス！ なんでもしますから！

「まだ、マダアアアツ！」

「——『幻影戦馬』！」

∟セイバーに切りかかる、その刹那。虚空より現れた白馬にゲオルギウスは跨った。その跨った瞬間を狙って突き出されたセイバーの剣は、まるで彼を傷つける事すら叶わず弾き返されて。

「——」

「これこそはアスカロンの真実。汝は竜、罪ありき！——  
『力屠る祝福の剣』！」

∟がら空き、大きく晒された、文様の浮き上がった胴に。十字の傷が深く、深く、刻まれた。

今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。

## 悪竜騎士 その六

皆さんこんにちは、ノンケ（ゲーム好き王）です。素朴な疑問なんですけど、大戦略つてどれくらいムズイんですかね？ いやそれは兎も角。

前回は遂に……遂に！ デオン君ちゃんとの長きにわたる死闘に決着を付けました。正直な話、デオン君ちゃんの突撃を堰き止めた時は『あ、死んだ』とかなるのを覚悟しての行動でした。良く生きてましたね。

「地面に両膝を付いたセイバー。その胴には鋭い十文字の傷が刻まれ、そこから青い炎が漏れ出している。消滅する様子こそ見えないが、力無く項垂れている姿には戦う余裕が残っているようには見えなかった。」

『や、やったのか……？ 本当に……？』

「倒した……いえ、無力化したようですね」

「でしたら清姫様を！」

おつ、そうだな（快諾） 相手がもう戦えないなら、止めを刺すより先に先ずは救助が優先。ハッキリ分かんだけ。清姫は……ボロボロですよんか!? あなたに先立たれるなんていやよ〜!

「……魔力切れ、傷も複数。ですが、核は無事の様です。不幸中の幸いですね」

「マリー様の宝具で、回復は可能でしょうか」

「恐らくは。後一度は発動可能、とは言っていたので、その時に」

「そこで貴方は思い出す。セイバーの力が想像を遥かに超えていた所為で全く気にすることが出来なかったが、マリーも今、敵に襲われているのだ。急いで彼女に加勢せねば危ないかもしれない。そう思っって振り向いた先……」

「——ああ、やはり僕の刃はとつくに……」

「ええ。嘗ての貴方の刃なら、労する事も無く私の首を刎ねていたでしょうけど。けど今の貴方の刃ではダメなのよ。サンソン」

「全く、処刑人としてなんと……無様な事だろうね」

∟コートの男が、黄金の光となつて消えていくのが見える。マリーには、傷一つ付いてなかった。マリーは、完全勝利を見事掴み取っていたのだ。

お、おっぱげた……(戦慄) 史実で自分が処刑された相手に完勝していくのか……(困惑) 史実との因縁とは一体と言いたくありませんが、それは置いておくとして。

「此方は終わったわ。そっちも、終わったのね？」

「……はい。シユヴァリエ・デオンは、もう戦う力を残していないかと……ですが」

∟それを聞いたマリーは、真つすぐに歩みを進め始めた。向かう先には、デオンの姿。それを止めようとした香子を、貴方は制した。彼と最後に話すべきは、彼女だろうと。

デオン君ちゃんも、やっぱりこの方と話したいと思うねん……アレだけ執着してましたし、ここで話させないって言うほど鬼じやありませんよカルデアだつて。あ、でも一応メドゥーサさん警戒頼みナス！

「デオン」

「……おう、ひ」

∟セイバーが……いや、シユヴァリエ・デオンが顔を上げる。眼の縁に生えた鱗がボロリと剥がれて落ちたのを見て、既に彼の体が限界である事を、悟った。

「真面目な人。真面目過ぎた人。貴方の忠義が揺らぎなかつたからこそ、貴方はそこまで突き進んでしまったのね。強い竜騎士様」

「ふらんすが、もえているんです。ぼくは、それを……とめるどころか、ああ。くには、ほろびて、だからせめて、かたちに、のこらないなら、と。そう、でも……」

∟うわ言の様に。自分の中になる、形にならない思いを、必死にかき集める様に。彼は言葉を紡いで。それを、必死に訴えかけようとしている。アレだけの暴威を振るつたサーヴァントとは、とても思えない程に、その様は……



なんでしよう、あの燃え尽きた姿を見ると涙が込み上げてくる気がするゾ……デオン君ちゃんも、別に殺したくてマリー王女を……いや殺そうとしてましたね。アマデウスの事もあるし、やっぱダメだ  
(一転必罰)

「……そう。大丈夫よ、悪夢はもう少しで終わるわ。きつと」

「ふらんすは、もう、だいじょうぶ、でしようか」

「ええ。きつと大丈夫……だから、貴方は安心して最後のケジメを付けないと、ダメ」

〈そう言つて、マリーは立ち上がり……その傍に、ガラスの馬を呼び出した。

「清姫さんをここに。一緒に治療をするわ」

……えっ!? 一緒になって言いました!? デオン君ちゃん一緒に治療するんです? (純粹な瞳) どうして(電話猫) ケジメって言つてましたけど……それに関連してるんですかね?」

『あ、あの王妃様? どうして治療をなさっているのです?』

「マリー様!? 何を!」

「ごめんなさい……けど、許して頂戴」

〈彼女の目の前のデオンも呆然と自分の体を見ている。治療される、等とは思ってなかったのだろう。貴方は、マリーに視線を向ける。どうしてこのような事をしたのか。その真意を知ろうとしたが……やめた。

「王、妃」

「……私は貴方に決闘を申し込むわ。アマデウスの弔いの為に」

〈そう言つた彼女の瞳に怒りも、憎しみも。貴方は感じなかった。寧ろ、少し潤んで、零れそうになっていたあれは……そこまで考えた時、貴方はマリーが自分を見ている事に気が付く。

へええ!?! ホ、ホモ君ですかあ!?!

いや急に決闘の流れになったのもちよつと分かりませんし、どうして?

「——決闘代理人は、彼を……康友おねがい、彼に相応しい決着を」

〽了解。

「貴方は立つ。元々、アマデウスの借りを返すとは決めていた。であれば……迷う理由はなく、貴方は一步、前に踏み出す。バットは香子に任せ、カルデアの制服はメドゥーサに預ける。少しでも動きやすい様に。」

「……あつ、そつかあ（閃き） ケジメ、付けさせてもらいます……デオンの兄貴（KRYU） 拳を叩き込むんだよ、一回だよ一回（ホモにあるまじき一発勝負）」

「——ありがとうございます、王妃。最後に、機会を頂いた事」

「いいえ。これくらいしか、出来ないから」

「……敵いませんね」

「剣を捨て、デオンが立ち上がるのを横目に、不安そうに此方を見る香子に顔を向けた。相手は、致命の手負いとはいえ、サーヴァントだ。負けて重傷を負うかもしれない、そう思われても仕方ないだろう……」

「マスター」

「だから、貴方はその不安そうな声に……ただ一度、拳を天に掲げる事で応える。勝つてくると、思いを背に込めて。」

「さあ、どうやらコレが真正銘、ドラグリーン・セイバー……いいえ、シユヴァリエ・デオン君ちゃんとの最終決戦の様です。ここで殴り負けるとか流石にクソ雑魚ナメクジ過ぎるんで、しまつていこおー！」

「——君には、複雑な思いがある。正直、態と殴られたい、という思いすらある」

「けど、と言ってデオンは、目の前の貴方に両の拳を構えて見せた。先ほどのような迫力は無いが、しかし流麗な構えだ。英霊として、やはり貴方とは技術の桁が違うだろう。英霊として、やはり」

「けど……最後に、頂いた機会を無駄にすることは出来ない。今の僕が出来る全力で、戦わせてもらう」

「普通に考えて、デオン君ちゃん相手に接近戦とか、まず負けだと思えます。え？ じゃあ今はって？ デオン君ちゃんが先の霊基崩壊ヴラド公並みに弱っていますけど結局は普通に負けると思えます（絶望）」 というかヴラド公にも覚醒だとかの幸運があつたから勝てただ

けなんだよなあ……

という事で、素でボクシングしても先ずこつちが吹っ飛ばされて、デオン君ちゃんが本田△して終わりだと思うので、ここは度肝抜いてやりましょう。

「ゲオルギウスさん。見届け人をお願いできるかしら」

「……分かりました。ここまで来たのです。お付き合いしましょう！

取り決めなどは……はい、分かりました」

『いやお付き合いしてないで止めてください……って、ここまで来て、それは流石に無粋になるのかなあ……』

「恐らくはそうかと。黙っておいた方が良いと思いますよ」

＜そして、二人の間にゲオルギウスが立つ。ゴキゴキと首を鳴らす貴方、構えを解かず此方を見つめるデオン。開始の合図を、二人は待っている。

「それでは、シユヴァリエ・デオンと本造院康友、両名の決闘を執り行う！ 何方が先に地面に背を付けるかの勝負。お互いに殺しは無し！」

＜二人の視線が交差する。誰かが、息を呑んだ音が聞こえた。

さて、こつからはプレイヤーの操作次第……お前みたいな三流プレイヤーの世話はもうごめんだ。二度とこの世界に居られないようにしてやる、と言われない為にも、頑張りマ。ツ！しよう。

「いぎ、尋常に……始めっ！」

＜デオンが、ゆっくりりと、距離を詰めてくる。一步、一步。その拳動を、貴方は決して見逃すまいと、意識を張り詰める。チャンスは、一度だ。

動かない動かない……でもって、拳を振り下ろしてくるところをよーく狙って……そこだよ（知将MUR）

「はあっ！」

聖拳（頭）突き

「……くっ!？」

＜腰を落とし、振り下ろした貴方の額が、拳を受ける。ビキ、と何かが割れる音がしたが、気にしない。今こそ……相手に叩き込む、

チャンスだ。

ホモなら二撃決殺、当たり前だよなあ？ つていう事で今度こそ正

真正銘の

聖拳突き

あげるわあなたに（国土無双）

〜額から熱いものが滴っているが……手応えは、有った。

「――ありがとう。間違いなく、僕の負けだ」

〜貴方の拳を顔に受け、そのまま地面に倒れ伏したデオン。彼の言葉の後に。貴方の勝利を告げるゲオルギウスの声が、響いたのだった。

……やっただぜ（二度目）

今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。

## 行け、聖女よ その一

皆さんこんにちは、ノンケ（青髭）です。

前回は、デオン君ちゃんと最後に一発っきりの殴り合いをして、見事に勝つことが出来ました。良かったあ、頭突き選んでえ。またお願いすると思うから。いやサーヴァントに頭突き叩き込むような機会なんてもう無いと思うんですけど（名推理）

『——今度こそ、かな』

「ええ！ 康友の勝ちよ！ ちょっとラフな勝ち方だったけど」

デオン君ちゃんは……大の字で倒れたまま動きませんね。はい。勝ちました！ ほんとお？ ホントじゃなかったらプレイヤーのスタミナ壊れちゃうよ……（疲労困憊）

「らふ、という問題ではありません！ どうしてこう、マスターはサーヴァント相手に無茶ばかり……！ もう、もう！ マスター！ 此方へ！」

∨……勝ったのは良いが、速攻で香子に引導を渡されかけそうになっている。逃げ出そうと足を立香達が戦ってるであろう方へと向ける。援護をしなくては。そう言い訳をして逃げ出そうとした貴方の視線の先。

「——オオオオオオオオオオオ！」

∨高く飛びあがった立香が、傷だらけになって、それでもなお足掻く巨竜の眼球に、藍色の長剣を突き差す光景がそこにはあった……どうやら、今、決着が付いたようだった。

駄目みたいですね（予知） もう、ホモ君が誤魔化そうと思ったそのタイミングで割り込んでくるとか神みたいな勝ち方だア……（絶望）

あ、肩がガシツとされました。

「……マスター、今日と言う今日は、香子もちよつと、怒りました。この期に及んで誤魔化そうとなさってたなんて……お説教です！」

しかも泰山解説祭で心も読まれましたか……逃れようもありませんね。オルレアンでは結構お説教されてませんかね、ホモ君。でも香子さんのお説教なら聞いてみたいかも（欲） あ、でも程々にしてくだ

さいね。

〱五分後〱

「いいですかマスター！ マスターというモノは前に出て戦う者ではない！ ましてやサーヴァントに頭突きを見舞う者ではない！ 分かりましたね！」

〱一瞬だった。正座だった。敵わなかった。なんだか若干だが、体にこの人に逆らってはいけない、といったような法則が刻まれているような気すらした。

〱すいませんでした……

〱男と男の決闘だったのだ、この身に全くもって後悔は無い。

男らしい返事は結構ですが反省はするんだよ、おう、あくしろよ（選抜肢上） っていうかほんへじや見られなかった珍しい表情ですね。おめめウルウルで頬つぺた真つ赤でぷくーっしてしてる。正直めっちゃ可愛いです。カワイイ（BRLY）

「もう……心臓によろしくくないです」

「まあマスターがこうなのは最早常識と考えた方が宜しいのでは？」

〱メドゥーサにまで一緒になって呆れられているのが、なんともやるせなかった。

「——仲が良いんだね。それはそれとして、そろそろ良いかな」

〱だがその声に、直ぐに貴方達は気を引き締め直し、構えた。地面に倒れるデオンからの声だった。まさか回復したのか、とも思ったが。ピクリともせず寝っ転がって居る辺り、そうではないようだ。

「……なんの、御用でしょうか」

「ああ、なんて事は無いよ。このまま放っておいても、僕は消滅するけど……方が一という事がある。確実に今、消滅させるのに確実な手段があるからね。それを教えようと、ね」

消滅させる手段って？ ああ！（前後に繋がり無し支離滅裂な会話） それは兎も角確実に消滅させるって、まさかご自分が完全に消滅するまで攻撃叩き込んで欲しいとか？ Mかな？（素朴な感想）

「……」

「疑っているかい？」

「逆に、ここで疑わないであつさり信じる方が、精神に重篤な損傷か何かがあるのではないかと思いますが」

メドウーサさんがめっちゃ辛辣で草も生えない。その理屈だとほんへ藤丸君に重篤な損傷がある事になってしまうと思うんですがそれは。まあFateの主人公はどいつもこいつも逸般人だからね、仕方ないね。

「最後に騎士としての役割を思い出させてくれた君には、感謝しているんだ。だから。その恩を、返したい……」

「恩を……ですか？」

「ああ。あんな狂戦士に成り果てて、何を言うかと、自分でも思うけど……」

〈〈信じるよ。〉〉

〈〈あんないいパンチを放てる奴に、悪いことは出来やしないさ。〉〉

脳筋独自の理屈止めろ（激ギレ） 選択肢は上でいいとして、さて、何をしろっていうんでしようか。マジで体が砕け散るまで殴り潰し続けるとかだつたらおこころこわれるわ。

「マスター……宜しいのですか？」

〈メドウーサの言葉に、躊躇わず頷く。例え元が敵でも、今の彼の言葉に嘘はない様に感じた。であれば、元は敵であっても信じてみたいと思うのは、普通の事だ。〉

信じらんねえ！ でぶっ殺しまくってたら誰も救われないですしおすし、人理修復は信じる、という事の上に成り立つ。信頼です。コミュ強者になるんですこの野郎。あくなさってください（再翻訳）

「ありがとう……私の、左胸。心臓の辺りを、見てくれないか？」

〈そう言って、デオンは自分の服を開け……心臓の辺りから覗く、並んで生えた、他とは明らかに大きさも、色つやも違う鱗を見せつけた。〉

「……これは、他の鱗とは、様子が」

「私に施された、術式の大本を守る最後の砦さ」

何でも良いけど（史上最大級の失礼）、美少年の胸の辺りを興味深そうに撫でる香子さんめっちゃ絵になる……絵にならない？ そういう意味の絵になるとか、（発想が）バカじゃねえの。嫌いじゃないよ

(ツンデレ)

「この鱗を剥がした下……私を維持するものが、そこにある。元々から無茶な術式だったのが、竜殺しの力が作用していよいよ維持できなくなってきたのさ。それをどうにかすれば私は、確実に無力化できる」

「そう言われ、貴方に向けて振り返る香子。貴方は頷くと、その鱗に手をかけて……ゆっくりとその鱗を剥がしていった……そして、左の胸から飛び出している、それを見つけた。」

「竜の……鱗、でしょうか?」

「ファブニールの物だ……もう、大分異物感が強い。引き抜けるんじゃないかな」

オオン……(グロ系ダメ投稿者) そう言う痛そうなのは、正直言えばあんまりやりたくねえぜ、ああ、く……まあ、やれるところまでで、うん(最後までやるしかない事を悟った覚悟の棒読み)

「貴方は一瞬、デオンへと視線を向ける。彼が頷くのを確認し、その鱗の、少し捻じ曲がっている部分に指を引っかけ……一気に引っこ抜いた。もう少し、苦勞するかと思っただけに、少し拍子抜けした。」

「——ありがとう。これで、君達を襲わずに済む……」

「そして、その直ぐ後だった。デオンの体が黄金の輝きに包まれていく。先ほどの鱗が、デオンの体を持たせていた最後の楔だったらしい。」

デオン君ちゃん、ご帰還です。このオルレアン最大の強敵にして脅威、マジで最後まで苦戦させられました……正直、この後の邪ンヌ戦も、君ほど脅威ではないと思います。やっぱり(難易度が)壊れてるじゃないか……

「……あ、そうだ。一つ言い忘れてた」  
ん?

「二応、僕もファブニールみたいなモノだったからね。彼らを制御するのに一役買ったんだ……けど、僕、というかドラグーン・セイバーが成立しなくなった今、この辺りのワイバーンは、多分暴れ出すと思



うから……気を付けて」

『——本造院君?! 話の途中でゴメンだけどワイバーンだ! 周辺のワイバーンが急に統率を失って暴れ始めた! どうなってるんだ一体!』

◇……そう言われ、周辺を見る。四方八方へ向けて、好き勝手に飛び立とうとするワイバーンの姿が、街のそこかしこから見えた。

「その……ごめんね」

……良し。

全部素材にしてやらあオラァン! 此方に降りて生死受けるオ!

(激昂)

カ……ットオ (BRLY) カ

◇街に居たワイバーンは、勝手に餌を求め此方に向かって来たので、全て迎撃できた。しかしスムーズに殲滅できた割に、どうにもやるせない空気が、貴方の周りに漂っていた。

「……なんと、申しますか」

「綺麗には、終われませんでしたね」

「なんともタイミングが最悪と申しますか」

「デオン……」

◇合流、しようか。そう言っつて、貴方は歩き出す。向こうでは、エリザベートやマシユ、立香達が此方に手を振っているのが見えた。

締まりがなさすぎる——114614364364点。

と言った所で今回はここまでとなります。ご視聴、ありがとうございます。ありがとうございました。

## 行け、聖女よ その二

皆さんこんにちは、ノンケ（百面相）です。

前回は……えっと、綺麗に終われそうだったのに、物凄い台無しになった気がしました。ほんへではずつとシリアスだった気がするんですけど、FGORPGではそうとも限らないらしいですね。仕方ないね。

＜貴方達が近づくのに気が付いたのか、マシユが此方に手を振っているのが見えた。彼方の周りにもワイバーンが墜落して居る辺り、同じような事が起きたのだろう。

「皆さん！ お疲れさまでした！」

「そつちも終わったか……あれ？ なんてなんか、こう、やりきれない顔してるんだ？」

＜なんでもない、と貴方は返すのが精いっぱいだった。

色々あったんや、藤丸君。聞かんと言ってやってくれ……いや、あの名台詞、『話の途中だがワイバーンだ！』が出ない事が不思議だと思ってたんですけど。こんな、しかも、ある種完璧なタイミングで挟むとか、こいつ相当な変態だぜ？

「しかし、突如としてワイバーンが凶暴化するなんて……ファブニールが倒れても、何事も無かったのに。小休止にはいろいろとしたら、途端に」

「黒い私は、未だに姿を見せていません。それと何か関係が？」

「ないです（疲弊） かんっぜんにくつちと向こうのタイミングがズレたせいです。ホント迷惑かけてゴメンやで……」

『……まあ、それは兎も角として。これで相手の残ってる戦力は僅かだと思われる。まあアレだけの戦力ですらほんの僅か、とか想像もしたくないから希望的観測も入ってるけど』

「そうですね。流石に、聖杯を用いたとしても、そこまで高速で戦力を補充する、と言うのは難しい、と思います……素人陰陽師の意見ですが」

「となれば。いよいよ、決戦という事になりますな！」

「レオニダスが見つめる先。そこには、城があつた。邪竜の旗が掲げられた、城が。間違いないだろう、黒いジャンヌは、そこにいる。しかし、正直懸念は残っています。デオン君ちゃんを改造できる人間、というかキヤスターなんて向こうには一人しかいません。そしてそのキヤスターもラスボス努めるに十分な実力（宝具）を持っています。向こうの人材が豊富すぎないか？」（疑問）

ソイツは今の所、一切姿を現さず何をしているか分からない所さんなので、あく姿をみせて、やくめでしょ。

「行きましょう。黒い私に、会いに行かねばなりません」

「——ねえ、ジャンヌ。その前に一つ、聞いて良い？」

「城門へと一歩踏み出そうとするジャンヌ。その背に、マリーが声をかけた。」

「なんででしょう」

「貴女は、彼女に会って、何をするのか。決めたのかしら。私は貴女と行動を共にする事はあまり無かったけれど……初めて会った時、貴方は確かにあの黒いジャンヌに気圧されていたのは、覚えているわ」

ケツ押されている……？（難聴）それは兎も角、確かに。このオルレアンは、ジャンヌと邪ンヌの物語でもありました。けどホモ君の独自行動でもうほんへとは大分違う道のりを歩んでいる今回。果たして、ジャンヌは大丈夫なのか、コレガワカラナイ。

「せめて、何をするのか……それくらい決めてないと、彼女の、憎悪、復讐の念は、余りにも情熱的よ」

「——待って、マリー。今、何といたしました？」

「え？ だから彼女の、フランスへの憎悪と、復讐心は並々ならないものだって」

「フランス、憎悪、復讐。その言葉を聞いたジャンヌが顎に指を当て、何かに気が付いたかのような、そんな表情をした。」

フランス、憎悪、復讐！ フランス、憎悪、復讐って感じで……？

なにかジャンヌに気が付くところがあつたんでしょか。まああつたんでしょか（ほんへ既プレイ並感）そんな三拍子で気が付くのなんてめっちゃ汚そう（小並感）もつと別のワードで閃いて欲し

い。

「……でも、あの私は……?」

「——考え事は少し中断を、ジャンヌ殿！ 何か、出てきますぞ！」

〽その時だった。何事かを察知したレオニダスが城門に向けて、盾を構える。その動きに倣うように、マシユが続いて大盾を地面に突き立て、その後ろで、各々のサーヴァントが構えを取る。そのレオニダスの勘は、ややあつて的中し……それは、城内から溢れ出した。

「なっ、何ですかアレは!？」

「触手の化け物……!? しかもなんて数!」

『ちよ、城内からどンドン湧き出してるよあの反応！ 一個一個はそこまで脅威じゃないけど数がヤバい！ もう三桁は軽く突破してるぞ!』

か、か、か、海魔だー!? それもバカみたいな数の海魔だー!?! いやまあ敵方の陣容を考えれば当然とも言えるエネミーではありませんが……しかし、何故此奴らが。別に強くも無いですし、こっちの陣容考えれば時間稼ぎにもなるかどうか。

「いけません！ これだけの数を一々相手にしては、如何様にも態勢を立て直す時間を稼がれてしまいます！ もし、もしも今一度、アレだけの数のサーヴァントを揃えられれば!」

(意味が無い訳)ないです。あ、ない……脳味噌がガバガバなんだよなあ。向こうは聖杯を持って。時間さえあれば態勢は立て直し放題だつてそれ一番言われてるから。

『——そうか！ 聖杯！ よく考えれば分かる事だった！ 向こうに聖杯がある以上、時間をかければ幾らでも戦力は補充できてしまう!』

「という事は……急がねば！ マシユ殿!」

「は、はい！ マスター！ マシユ・キリエライト、突貫します!」

〽よっしや俺も!

〽後に続け立香あ!

お、久しぶりに共闘でもする？ じゃあ選択肢下行って、ボコレ。「は、特異点来てからは全然一緒に暴れてなかったからな。良いぜ、た

だし……俺の後に前が続け、康友オ！」

「シキブ、良いのですか？」

「後で全力でお説教はします……！」

「後ろから不穩過ぎる一言が聞こえたが、取り敢えず無視する事にした。ちよつと調子に乗り過ぎたかな？　とも思ったが、今ここで努力しないのは色々アレなので、ここは最後まで調子に乗り切る事にした。」

よつし、海魔君は出荷よー。まあ海魔一匹位なら今の所まだまだへつぽこマスターな藤丸君ホモ君達でも十分相手できる、というか普通に勝てる程度の相手だと思うので、流石に突破できないということはない………なくない？（フラグ）

くカ……ツトオ！（BRLY）く

多すぎい!?　ちよつと多いねえ………あまりにもドバーつと海魔君があふれ出してて、無理くもく無理く！　一匹倒したら二匹以上増えるとか質が悪すぎるツピ！

「まさか………ここで、人海戦術で押し返されるとは………！」

「聖杯の魔力、もしや此方にも回しているのでは!？」

「だとすれば質が悪いどころの話ではありませんね」

くメドウーサが鎖で一氣に敵を薙ぎ払う………が、それですら焼け石に水にもなるかどうか。どんだん城門から湧き出す触手の怪物に、完全に後ろへと押し流されかけている。

「しかし、もし聖杯の魔力をこれに回しているのであれば………！　ここを突破すればいいよ本丸までは、容易く辿り着けるやもしれません!！」

「それは、確かにそうですけど………！」

くくもう暫くはタコ焼きは食わねえ！

く立香あ！　今何匹い!？」

藤丸君は元気に兵士の剣で海魔君をシバイています。そして今回はホモ君も結構な数始末してるので、素材もほつくほくです（現実逃避）　ホントタコ焼きは暫くトラウマになりそうな光景ですよ。

「四十匹くらいじゃねえの!？」　もう数えんのは止めてる!！」

「突破する前に、マスター達の体力が尽きるかもしれません！」

「そうなる前に、手早く散らしたい、所ではあるが……！」

「そう言つて、ジークフリートが剣の一薙ぎで多くの怪物を切り捨て、その先へジャンヌが突っ込もうとするが……その倍近く湧いてきた怪物に足止めを食らってしまう。」

「っ！」

「やっぱり私も！」

「いえ、マリー殿はここで清姫殿をお願いします！ エリザベート殿がその分働くと、力強く返事をしてくださったので！ ええい汝も竜！」

「してないわよ！ あーもう！ うざったい！」

とか言つてる割には撃破数一番なんだよなあ、エリちゃん……尻尾が凄い威力してる。しかしその殲滅力をもつてしても足りないんだよねえ！（ギャン泣き）

「あと一手が足りない。そんな苦悩が脳裏をよぎる。セイバーの時とは違って、全てが徒労に終わる様な無力感。」

「——放て！」

「その時だった。」

「おう!？」

「放て！ 兎に角放て！ コレだけの数だ！ 目をつぶつても当たる！ フランスから怪物どもを叩き出せ！ 信じろ！ それが出来ると！」

「突如、貴方達の周りで、巻き起こる幾つもの爆発。しかし、それは貴方達を狙ったものではない。周辺の海魔を、纏めて吹き飛ばす砲撃。その射手であるのは……遙か後方に現れたフランスの旗、その下に集いし兵士。そして。」

「何故なら我々には……聖女が付いているのだから」

「ジル！」

「鈍く銀に輝く、一人の男だった。」

「今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。」

## 行け、聖女よ その三

皆さんこんにちは。ノンケ（ギョロメ元帥）です。

前回はまさかの海戦術に出てきた向こうさんに対し、こつちも人海戦術を取る時が来た！ と言った感じでフランス軍が殴り込んできました。完璧なタイピングで、すいませへええくん！アツアツアツ、アツエー！アツエー！アツ、熱いっす！熱いっす！ーアツ！ 熱いっす！熱いっす！

「ジャンヌ！ 皆様！ 後ろに！ ここは我らフランス軍が道を切り開きましょう！」

＜銀の男——ジル、という人物の声に、立香と貴方は自分達のサーヴァントへ向けて同時に指示を放つ。彼らと協力してこの状況を打開せよ、と。

「分かりました！ マスター！」

「承知いたしました！」

香子さん！ マシユさん！ 一つ、思い知らせてあげなさい！ その場合黄門様は藤丸君とホモ君の二人いる事になるんですがそれは……黄門が二つ、ちよっと待って!?(高速反応ホモ) こんな汚いのええん!?

「——ジル。どうして」

「私は、ジャンヌ、貴女と共に在り、戦うと決めております。そして、今度こそは最後までお供するとも……今度こそ！ フランスは貴女を裏切らず！ 貴女と共に！」

＜ジルが、剣を号令と共に振り下ろす。その直後、揃えられた大砲が次々と火を噴いて眼前の海魔を弾き飛ばす。殲滅力だけなら、先程の貴方達を大きく上回るそれに……遂に海魔達は城内への道を開けたのだ。

「今更ながら、虫のいい話と、思うでしょう……それでもどうか、もう一度、もう一度だけ」

「いいえ、信じます……我が祖国を。フランスを。貴方達を。私は、何時でも」

ジル君が男泣きしてる……気持ちには分かるデデンネ……（もらい泣き） あこがれた人に信じるって言って貰えるのは漢の誉れ、ハツキリ分かんかね。

「ありがたきお言葉、痛み入ります……フランスの勇壮なる兵よ、突貫せよ！ ジャンヌ達の道を開け！」

＜その号令に応え、フランス軍が雄たけびを上げて海魔へと突っ込んでいく。倒すのではない、槍をつつかえ棒にし、海魔を押し込んで、無理矢理に城内への道を押し広げる。

「今の内に！ 行け、聖女よ！」

「——何時も、貴方のお陰で私は……迷わずに戦うことが出来ますね。ありがとう、ジル。お陰で道が見えました」

「……っ！ はい！」

こんだだけガバガバなら、どんな太いシーチキンだつて通るつてもんだぜ！ 今こそジャンヌに続いて城内へ突入しましょう。ジルさんありがとうナス！ しゃあっ！ 不法侵入ですよ不法侵入！（颯爽）

あ、マリーさんが編成から外れてる。まあ清姫ちゃん動けないからね、仕方ないね。取り敢えず問題は、この先の

「内部からやはりあの生物は湧いて来るようですが、先程と比べれば……マスター！」

「ああ、マシユ！ 一気に押し通してくれ！」

＜ジャンヌに代わって、最前衛に躍り出たマシユの大盾が、触手の化け物達を奥へ向けて押し込む。そのままフランス兵を背にし、貴方達は廊下を駆け抜けていく。

押せっ……押せっ……！（応援） 流石マシユ、人間ブルドーザーですね。触手野郎を津波を割る様に。ただ、『ビチッ』だの『ゴリユ』だの生々しい触手共の抵抗の環境音が非常に不快で、非常に気持ち悪い（直球） もう抵抗しても無駄だからなあ!? ジツとしてろお前！

『そのまま真つすぐ！ その怪物達の反応の大本は、その先にいる！』

「——ええ、見えました」

＜そして……ジャンヌの視線が、何かを捉えたらしい。彼女の視線の先……廊下の半ばであるそこに、一人奇妙な格好をした男が、本を



携え立っているのが見えた。

「そうでしよう。この奥に、『ジャンヌ・ダルク』が居るのであれば、貴方も当然いるのでしようね……ジル」

「ジル。その言葉に思わず貴方は目を見開き、奥に見える男性をもう一度見つめなおす。鎧は来ておらず、珍妙な服に身を包み。そしてギョロリと目を飛び出させた顔まで見えてきて。先ほどの人物とはまるで似ても似つかない様に見える。

ホモ君が完全に正論で草生える。まじで剣ジルと術ジルって別人と言われても仕方ないぐらいに共通点が無いというか。

「……やはり、来てしまわれましたか、ジャンヌ」

「ええ。私は、この国を見捨てる事なんて出来ませんから。貴方達を、止めに来ました」

「貴女はやはり、そういうのでしよう。ええ。分かっておりましたとも」

「あの触手の怪物は、もう湧いていない。呼び出していたのは、目の前のジル……と呼ばれている男らしい。しかし、先程の男も、ジルと呼ばれていたが。」

『彼らは、同一人物だよ。ジャンヌ・ダルクに付き従ったフランス軍の元帥、ジル・ド・レエ。童話、青髭のモチーフとなった猟奇殺人犯。そして、先程のジル元帥はこの特異点に生きる人物……向こうは、サーヴァントだと思われる』

ロマニ兄貴解説ありがとナス！ あの海魔、そしてデオン君ちゃんに改造手術を施したのも彼でしょう。つまりデオン君ちゃんの尊厳破壊と難易度上げを行った張本人でもあります。あつたまきた……

(灼熱) 青豚あ！ もう許さねえからなあ！ (怒りの奔流)

「であれば、私は貴女を通すわけには参りません……彼女の元へは、決して」

「ジル・ド・レエ。その事について……一つだけ。彼女は本当に、私なのですか？」

「——そう問われたジル・ド・レエの反応は劇的だった。眉を顰め、顔を歪め、怒りとも悲しみともつかない、奇妙な表情へと。」

「……何と。何と何と何と許せぬ暴言！ 聖女とて怒りを抱きましよう、聖女とて絶望しましょう！ アレは確かに紛れも無い！」

「——いいや、違うね」

〈その形を変えて……一瞬で無表情へと、変わった。

ファツ!? ちよ、藤丸さん、何言ってるすか!? マズいですよ!?

「——今何と?」

「彼女は絶対にジャンヌじゃないって言ったんだ。もしかして聞こえなかったのか、ジル・ド・レエ」

〈全くもって同意見だ。

〈聞こえなかったとすれば、ただの案山子ですな。全くお笑いだ。

プレラーティが居れば、奴も笑うでしょう(選択肢下) とうかこの選択肢は色々危なくない? でもノリがいいのでこつちを選んじやうんだなあコレがあ! この発言が本当に大丈夫なのかは度外視してます。物凄い顔色になってますからねジル。

「……貴様等あ!」

「マスター! その、不用意に挑発を行うのは、その、どうなんでしょう!」

マシユにまで心配されてて草。

「挑発じゃない。事実だ」

〈貴方もうんうんと首を縦に振る。何故か隣の香子から『どうして』と言う視線を向けられているのだが、それが何故かは分からない。

「えっと、藤丸。そのですね、私は何もそこまでは……」

「——この匹夫共……宜しい、そんなに殺して欲しければ、貴方達から始末して差し上げようではないか! そこを動かなあ!」

完全にブチ切れてて草が枯れた。どうしてそんなに煽ったの二人共……(半泣き) もう起きてしまった事は仕方ありませんが、ちよつと選択肢で性格強制した方が良いでしょうか……? そこまで『彼女はジャンヌではない』と強調する事も無いと思うんですけど。無言の腹パンしそう(小並感)

「このまま、カルデアのマスター達がここに居ると、ジル・ド・レエは間違いなく際限なくヒートアップするな……」

「ええ……マスター達の発言は、些か計算外でした……!」

　散々な言われようである、と若干不満に思ったが、とはいえ自分達の言葉で向こうを最大限着火させたのは間違いないようなので、ここは黙っていることにする。

「となれば……ジャンヌ・ダルク、マシユ、シキブ」

「「え?」」

「ここは任せて先へ。我々四人でここを引き受けましょう。ご武運を」

　ジルとの戦闘も覚悟していましたが、ここはサーヴァント達が引き受けてくれる模様ですね。ジークさん、ゲオルさん、メドゥーサさん、レオニダス王……あれ?　大海魔出てこようと瞬殺ではこのメンバー?

「マスターを任せましたよ。勝ってきてください」

「わ、分かりました!　必ず!」

　そのやり取りを背に、貴方は走り出す。隣を共に走る立香と共に向かう先には、目の前には凄まじい表情で此方を睨みつけるジル・ド・レエ。

「逃がすでも……!」

「――すまないが、ここは通させてもらおうぞ」

「つちい!」

　そこに、ジークフリートの大剣の一撃が振り下ろされた。怪物を盾に、その一撃を辛くも躲したジル・ド・レエの真横をすり抜け、貴方達は奥へと走り抜ける……その後ろに、メドゥーサが降り立って道を塞いだ。

　後ろは心配ありません。後は、我々が大ボスの元に辿り着くだけです。

　今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。

## 藤丸視点：アンタは一体誰なんだ

——響く、何かの破壊音。感じる、地響き。後ろの激闘は、想像を遥かに超えて過酷なのだろう。それでも、俺達は決して振り返らず、走る。

「ドクター！ この先に反応は!？」

『あるよ！ 間違いなく、竜の魔女、黒いジャンヌ・ダルクの反応だろう！』

その言葉に、拳をぎゅっと握る。いよいよ、この特異点も大詰めだ。彼女を打ち倒し聖杯を回収する。そのゴールに、手をかけているのだ。

「そうですか……マシユ、調子はどう。いけそう?」

「はい、戦闘行動に一切の支障はありません。全力戦闘、行けます」

特異点での長い闘い。疲れが出ていないかと言う心配は、どうやら杞憂で終わってくれたらしい。幾らマシユが頼りになる後輩とはいえ、疲れているのに戦わせるのは嫌だ。無理だと分かっているけど、休んで欲しいと思ってしまう。元気なら、それに越した事はない。

「香子さんは？ 問題ないか?」

「はい。大丈夫です。マスター。ご心配、ありがとうございます」

「全員大丈夫そうですね……黒い私の実力は未知数です。くれぐれも用心を」

この先に居る存在は決して、弱いという事は無いだろう。このフランスを亡ぼしたのは紛れも無く、あの黒い彼女に他ならない。もしかしたら、あのファブニールよりも、強いかもしれない。

「なんだ、ビビってるのか立香」

「……お前はどうかんだよ康友」

「正直、ビビってないと言えば嘘になる」

「まあ、だろうな。俺もそうだし」

そんな心はどうやら友人にあっさり見抜かれていたらしい。まあ、友人も似たようなことを考えているっぽいから、分かるのも当然だろう。

「ただ、言いたい事は言うつもりではいる。ここでチキったら漢じゃねえ」

「お、言うじゃんか。まあさっきのは予行演習みたいなもんだしな」

……なんか、マシユやジャンヌさんから凄い物を見る目で見られている。何故だろう。あれ、どうして皆止まるの？ 急がないと駄目でしょう。

「あの、マスター。言うってまさか」

「さっきのジルに言ったようなことを……？」

「え、はい。そうですけど……その、えつと。何かおかしいですかね？」

隣の康友と目を合わせ、首を傾げた。先頭のジャンヌさんが若干頬を引きつらせ、マシユが悲しそうな顔しているのが、なんだろう、とても辛い。特に後者。俺、何かマズい事を言ったのだろうか

「香子さん、俺達なんか可笑しなこと言ってますかね」

「ま、マスター？ その、ご自覚がない、とかでしょうか……!?!」

康友も完全に慌てている。完全に俺達二人が何かしでかしたのは間違いないようだ。それをそのままにしておけないからこそ……こうやって止まった。この状況で止まる程の事を俺達が言った、又はやったという事だが。

「……なあ、康友。なんか思いついたか？」

「マジで身に覚えがないんだけど。え？ 俺ら余程の事したよなコレ」

「うん。絶対俺らが悪いと思う……け、けど覚えのない事で謝るのって不誠実じゃ」

「バツカお前、悪いと思ったらまず謝るんだよ、基本だろ！」

正直、余りにも座りが悪いというか、空気に潰されそうというか、兎に角男子二人で固まって会議。一刻も早くこの状況を打開しないとマズイのだが、お互い出るのは不毛どころか余計に火に油を注ぐような意見だけだ。

「……あの、マスター」

「ま、マシユ……その、えつと……俺は」

「マスターの個人の意見があるのは、その。良く分かります……私も、此方のジャンヌさんが本物だと、その……思っています、けど」

……本物？ 本物……んん……あ、成程！ 閃いた！ 閃いたって  
いうか、漸く分かった何に怒ってるのか！

「あー、そっかそっか……言い方がちよつとマズかったのかな」  
「……え？」

「大丈夫だよマシユ、ジャンヌ。詳しくは時間無いから言わないけど、少なくともそういう意味じゃ言っていない。うん。取り敢えず、信じて欲しい」

でも、止めてでも真意を聞こうとした理由が分かった。確かに聞いておきたいわなあ、下手すりゃ俺達二人揃って外道扱いだった……確かに、言い方をちよつとでも考えておくべきだったか。

「なんだよ立香、分かったのか、俺らが怒られた理由」

「まあなあ。誤解だったけど、誤解じゃなかったというか。うん」

しかし、言葉とは難しいもんだ。俺が思ってもいないような意味に取られちゃう。コミュニケーション能力を、カルデアに居る間に養った方が良さだろうか。

「……えっと」

「本当に、分かって言うんでしょうか」

「うん……俺達は、彼女の存在を否定したいわけでは、ないからね」

「——ああ、来ましたか。全く、殆どを失った癖に諦めの悪さだけは残るだなんて、なんとも滑稽な事です。『私』自身の事とはいえ、度し難い」

——予想は、外れていたと言える。

『いや……突入する直前増えるとか、無しだろう普通に』

「ドクター・ロマニ。言っている場合ではありません。状況の解析を」  
『いや解析しなくても分かるよ……シャドウサーヴァント！ それも相当な数を取り揃えてあると来た！ 全く、最後の最後までたつぷりと戦力があるね！』

黒いジャンヌ・ダルクが待ち構えているとばかり思っていたその場

所……恐らくは玉座の間だろうか。そこに居並ぶ黒い影。居るわ居るわ、間違いなくこつちに味方についてくれるサーヴァントと同数は居るだろう。

「ですが、手遅れです。流石にサーヴァントの再召喚までは叶いませんでしたが。それでもこれだけの数のシャドウサーヴァントを、相手に出来ると思っついていて?」

「……勝てるか勝てないかは問題ではありません。しかし、戦う前に一つだけ、貴女に訊きたい事があります……マリーと、ジルのお陰で、思いついた、一つを」

その奥で笑う黒いジャンヌに向けて、ジャンヌ・ダルクは毅然と立った。

「……今さら何を」

「至極簡単な問いかけです。貴方は、自分の家族の事を覚えていますか」

そして問いかけたのは……なんとも、当たり前前の質問だった。

家族を覚えているか。そんな物、誰でも当たり前前に答えられるだろう。特別な境遇の人間でも無ければ、良い記憶であれ、嫌な記憶であれ、家族というモノは記憶に刻まれているものだろう。

「……ジャンヌさん?」

「どういう意味だ? あれ」

「分からん……だが、無意味な問いかけじゃあないらしい」

今、明らかに黒いジャンヌは……身じろぎをした。いや、動揺した、と言う方が正しいのだろうか。あの問いかけが、確実に彼女を揺らがしたのだ。

「私は、あくまで田舎娘。戦場に立ち、その記憶が鮮烈であったとしても……私の中に残る記憶の大部分は、長閑な、平和な村で過ごした、なんて事の無い、それでも、暖かな思い出で占められている。ジャンヌ・ダルクとして必要なものです」

「……そ、れは」

「いいえ、その思いが忘れ得ないからこそ……この国の裏切りに、憎悪し、絶望し、そして何よりも、憤怒する事が、出来る筈なのです」

「……っ！」

「記憶が、ないのですね……」

それは至極当たり前の帰結だった。じゃあどうして。彼女はここまで戦うことが出来るのだろうか。燃料が無い車が、走っているようなものだ。

「そんな、そんなもの！ 関係ない！」  
「……」

「そんな記憶があらうと、なかろうと！ 私が、ジャンヌ・ダルクである事に……！」

——ああでも、そんな疑問は今には気にしなくていい。それだけは見過ごせない。

「いいや、違うね」

「そうだ。違う。そこだけは否定させてもらおう」

ジャンヌの横に、ずずいっと。ビククリしてるようだが、ここは。言いたい事はしっかり言いたいタチなんで。

「——何？」

「何度も言うが、絶対違うだろ、それは。さっきもそうだ。アンタはずっとこのジャンヌ・ダルクを見てそれを言ってた……アンタは、自分はこの人だって、そう言ってる感じがした」

「っーか間違いなくそう言ってたと思うんだよな……だよな？」

そりゃあ、違うだろうよ。

「え、つと……？」

「そ、それがどうしたっていうのよ……その女は、絞り粕のようなものとはいえ、私が捨てた、とはいえ」

「違う。絶対にだ。アンタはこの人じゃない。この人は、アンタじゃないだろう」

黒いジャンヌが目を見開く。

どうにもしっくりこなかった。黒いジャンヌが本物とか、偽物とか。そういう話も。当人が自分をジャンヌ・ダルクと名乗った時も。まあ、百歩譲って、同名なのは良いとしてもまるで誰も彼も、ジャンヌと彼女が同一人物みたいに。



「っ、本質は同じだって話をしているというのに！ 私もソイツも、サーヴァントでしょうが！ 同じジャンヌ・ダルクから分かれた、同じ！」

「違う！ アンタもジャンヌも！ 独立した一人の人間だろうが！ サーヴァントだろうが何だろうが関係ない！ 本質が一緒なんて、有り得てたまるか！」

「記憶がないって時点で大分違いあるって突っ込むのは野暮なのかコレ」

記憶がないとかは、正直あんまり気にはならないと思う。記憶が無くても、全然黒いジャンヌは話せてるし、問題は無い。一人の人格を、ちゃんと持っている様に見えるんだ。だからこそ！

「どれだけ似て居ようと、全く同じ人物なんざこの世には存在しない！ ましてやアンタらは似てる所だって少ないってのに！ 偽物本物以前に、アンタらは全然別人だろうが！」

「……！」

マシユの言葉は、そもそも彼らが共にジャンヌ・ダルクである。という事を前提にしている。それは違う。違うのだ。誰かの偽物、を名乗る事は出来る。だが、全く同じ『偽物』になる事なんて、人間の誰にも出来ない。

「ま、その辺りは同感。アンタもジル・ド・レエも、アンタをジャンヌと同じだって言ってたけどな……結局の所、自分は自分だ。他の誰でもないんだ。元が同じだって、別れた時点で別人だろ」

「わ、私は……私は」

「なあ、教えてくれよ。アンタは何者なんだ。『ジャンヌ・ダルク』じゃないだろう、アンタは。一体、誰なんだ？」

彼女は、絶対にジャンヌとは違う、独立した人格を持った、別人なんだ。だったらそこを聞かないと、納得なんて出来る気がしない。

「——名乗っているはずだ。黒い私。もう既に」  
「っ！」

え？ そうだっけ？ 聞き覚えが無いんだけど……聞き逃してたとかか?! 康友お前どう?! あ、お前も覚えはない……やべえ、俺

達スゲエ失礼なことしちゃってる!？」

「貴女は手ずからこのフランスを亡ぼすと言った。貴方はこのフランスに、名を名乗って宣戦布告をしたはずです」

「――」

「記憶など、関係ないと。貴方は言いました。貴女には、記憶が無くとも、このフランスを燃やすだけの心がある!」

「かん、けい……ええ、そうよ! 記憶の有無なんて関係ない!」

「私はフランスを亡ぼす者! 復讐者! 竜の魔女! ジャンヌ・ダルク! 名前が被つていようと、私はそんな女とは別人よ! これで満足かしら、カルデアのマスター!」

――ああ! 上等!

「アンタが何者かは分かった。どうして喧嘩するのもかも、ハッキリ見えた!」

「――おうよ! アンタがどんな人間かは分かった!」

「なら、アンタからフランスを守らないとな! 俺達はカルデアのマスターの!」

「藤丸立香と!」

「本造院康友だ!」

## 竜の魔女 その一

皆さんこんにちは、ノンケ（湖の騎士）です。我が王に叱られて来い。

今回はホモ君達がアツツイ！ な自己紹介してください！ と言って終わりました。なんかイベントの内容をちよつと先取りした気もしますが、それは置いておきましょう。名乗り上げをした後はいざ尋常に勝負！ なおシャドウサーヴァントは盛り沢山で若干こつち不利は否めない模様。

「――アンタら二人は、私が念入りに焼き尽くしてやるって、最初に言ったわねえ？ シャドウサーヴァント達！ 先ずはそいつらからサーヴァントを引き剥がしなさい！」

あ、おい待てい（静止） そんな事されたらホモ君と藤丸君死ぬねん。幾らホモ君と藤丸君戦闘系って言ったって、二人がかりでもガチサーヴァントの邪ンヌに勝てる訳ないんだよなあ……

>黒いサーヴァント達が、此方に迫る。その前に割り込んだのは、マシユと香子。盾に阻まれ一瞬揺らいだ黒い影は、五芒星の呪を刻まれて輪郭を崩しながらぐらりと倒れ伏す。

「そうはさせません……！」

「はあっ！」

<倒れたシャドウサーヴァントの分、マシユが前に出る。文字通り、シャドウ達の懐に飛び込んだ形から振るわれた大盾の一撃は、容赦なく幾つかの影を吹き飛ばした。

HomeRun！（ネイティブ） マシユの盾で二人位シャドウサーヴァントの皆さん吹っ飛んだんですけど。後輩パワフルっすね……？

「私も！」

「っし！ 行くぞ康友！ マシユが蹴散らした奴らはジャンヌさんと俺らで叩くんだ！」

あ、いつすよ（快諾）

<ジャンヌの旗が、交差したサーヴァントの胸を切り裂く。明らか

に致命的ダメージだが、それでも何とか反撃しようとしたサーヴァントに対し、旗の持ち手が鈍器として叩き付けられ、シャドウサーヴァントは崩壊した。

流石ですねえ！ 負けていられません、シャドウサーヴァントなら現状のホモ君達でもギリギリ限界バトルすれば勝てる程度の実力ではあるので、散って単独になったシャドウサーヴァントの皆さまは叩き潰して差し上げろ。

という事で先ずはランサータイプ。シャドウサーヴァント、それも質としては格落ちな相手に二対一で負ける訳ないだろ！ バットのフルスイング直撃、いいゾこれ。

「じゃあっ！」

そして畳みかけるような藤丸君の一撃が綺麗に入って、あつ。クリティカル。これは結構なダメージが入りましたね……って、そう言えばシャドウサーヴァントもサーヴァントには変わらないんでした(完全ノーダメージ) 流石にバットと唯の剣じゃダメージ通らないゾ…… (神秘不足)

「……効いてないか!? ああダメだなコレ、ぜんっぜん意味ねえや！」

「マスター、藤丸様！ 流石に無謀ですのでせめて強化程度は！」

＜構えていたバットと剣に札のようなものが張り付いた。冬木で使っていたのと同種の物だ。これでなら、全く通じないという事も無いだろう。

あ、香子さんエンチャントありがとナス！ お前いつつもサーヴァントに頼ってんな(呆れ) そうならないように色々素材も集めているから(次の特異点では) 見たけりや見せてやるよ。

＜サンキューー！ 香子さん！

＜＜キヤー素敵！ 抱いて！

下ネタはNG(殺意) 普通に感謝の言葉は述べておきましょう。なんだかんだ言ってほんへでは分からなかったけど、自由度が広がった時のキヤスタークラスの万能感といったら格別だと思えます。

「っしやあ今度こそ！」

次は藤丸君が仕掛けての………続いてホモ君。お、結構ダメージ美味

いじゃん。エンチャントが効いてますね間違いない。と言つても楽に片づけられるレベルではないです、ツーマンセルで確実に潰していきましよう。

「作業だったのでカ……ツトオ！（BRLY）」

「これで……倒れてっ！」

「こうして、こうですね」

「マシユと香子が五人目のシャドウサーヴァントを打ち倒す。数こそ取り揃えてあつた黒い影は、マシユと香子の前では苦戦する障害にはなり得なかつた。」

「これで、残るは二人、ですよ。竜の魔女！」

「デオン君ちゃんとの死闘と比べるとこのシャドウサーヴァント戦は……なんでデメエらはそう戦闘に対して根性がねえんだ（侮蔑）もつと苦戦するかと思いきや、全然勝てましたね。」

藤丸君とホモ君の二人で、どつちかがタゲ取り、どつちかが攻撃、つてちゃんと役割分担してたらそうそう難しくありませんでした。やつぱりシャドウはシャドウですね。ガチのサーヴァントと比べたら大分戦いやすいです。」

「……つち、マスター二人の動きが予想以上ね。けどまだまだ、こつちには兵隊がいるのよ」

「そう言つて、彼女が手を上げた瞬間、玉座の天井が崩れた。そこから飛び込んでくるのはワイバーン……だが、オルレアンで見慣れたワイバーンと違い、明らかに角も大きく、肌も赤と黒の、大柄な種。「こういう時の為に、特別に待機させておいたまあ、上位種みたいなもんよ。言っておくけどシャドウサーヴァント共と、能力だけならそこまで変わらないと考えなさい？」

「ワイバーンテンペスト!? ハントクエのモンスターをここで投入して来るのか……（困惑）でも実際、ハントクエのラストモンスターだけ会つてそれなりのバフも持つてる強敵です。油断しないように行きましよう……って待つて!? 十四匹!? そんなに居るとかうせやろ!? こんな最序盤で（最上位）十四匹とかぼったくりやろ！」

「さて、コレだけいればいいでしょう……仕切り直しと行きましよう

か？」

「……望むところです」

仕切りなおすどころか状況が悪化してないか？

とはいえここで逃げ出す事も出来ないので、落ち着いて戦う事にしましょう。幸いワイバーンテンペストはシャドウサーヴァント程の防御性能はありません。ホモ君と藤丸君で十分叩けます。ただし火力はシャドウサーヴァントと遜色ないのでガバでNice Boatしないように気を付けましょう。

「マシユ！ あとちよつと、頑張つて！」

「はいマスター！ マシユ・キリエライト、突貫します！」

〈〈香子さん！ 援護宜しく！〉〉

〈〈香子さん！ 説教は勘弁してね！〉〉

説教される前提の無茶をするのは申し訳ないがNG……あ、選択肢間違えちゃった。ままええわ（寛容）

「そうならないように努力をお願いしますマスター！」

〈努力はする、とだけ返して走り出す。狙いはワイバーン。技量に置いて大きな開きのあるシャドウサーヴァントの相手をするよりは、まだまだ与しやすい相手だ。

プレイヤー的にも単純な行動しかしてこない相手なので、見所さんさえ除けば相手をするのには賛成な相手ですね。さあ行こうぜ（開戦） あ、ちよつと待って開幕バフ付けはお兄さん許して!? この状態でクリティカルなんぞ貰ったらあつと言う間に死ねます。

さて、こつからは第二ラウンド……とはいえ、結局の所デオン君ちゃん戦と比べれば単調作業なので。やはりカットします。

くカ……ットオ！（BRLY）く

さて、ワイバーンの数は減って、シャドウサーヴァントは片方沈みしましたし、そろそろ一区切りですかね。

「このワイバーン野郎、見た目もパワーも派手だな！ ってうおおお二匹目が！」

「やらせません！ マスターは、私が守ります！」

マシユちゃんと藤丸君の連携には特にいう事はないですね。マ

シユちゃん盾で防いで殴ってタゲを集めている間に、藤丸君があぶれた敵を削る。役割分担もきっちり出来てますね。偶に藤丸君ピンチなってますけど、それもちゃんとマシユちゃんがカバー。

一方の此方ですが……

「マスター、そちらのワイバーンは縛り上げました！ 攻撃を！」

OK 牧場（死語） 此方も結構様にはなってますね。ワイバーンを香子さんがバフかけてデバフも蒔いて、で弱ったワイバーンをホモ君が刈り取る。シャドウサーヴァントは基本的に香子さんが担当。綺麗な連携ですね。

え？ ジャンヌがあぶれてる？ いえ、寧ろ彼女は遊撃役として良い感じに立ち回ってくれてるのでめっちゃ必要ですよホント。

「そこですっ！」

「ちいっ……！ ワイバーン、その女を近づけさせるな！」

あとジャンヌは邪ンヌに偶に攻撃仕掛けてるので、連携が取りにくいというのがあります。残念ながら今の所はジャンヌの周りに居るワイバーン君達に防がれてますけど。

あ、香子さんの術でシャドウサーヴァントが……倒れましたね。こっち側に寄こしてあったワイバーン君も全滅しました。残るは邪ンヌの周りのワイバーン八匹……普通に数が居て草も生えない。

∠シャドウサーヴァント、ワイバーン。喉けられた手勢は打ち倒した。後は玉座から未だ動ない、ジャンヌ・ダルクとその配下だ。

「まだまだ、我が手勢は居る……邪竜の群れ、竜の魔女の軍勢！ 邪竜による終わりなき闘争、地獄の具現を成し遂げんとした我が恩讐、終わらせてなるものか！」

∠だがそれでも。決して黒いジャンヌは闘志を鈍らせない。寧ろ、その怒りをさらに燃え上がらせる。ワイバーンたちが、彼女の怒りに呼応するように吠えたてた。

さあ、いよいよ邪ンヌ戦、最終局面。締まっていきましょう。

今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。

## 竜の魔女 その二

皆さんこんにちは、ノンケ（破壊の大王）です。

前回は邪ンヌ戦、開始から最終局面まで、一気にお送りしました。難易度の割りにはデオン君ちゃんより全然見所さんが少ないので辛い所さんだったゾ……カットしよう！ で消えるデータの中にはプレイヤーである私の奮闘も詰まってるからね仕方ないね。

さて、最終局面、いよいよ見所さんの邪ンヌとその取り巻きのワイバーンですが……ワイバーン全部に攻撃力アップバフが付いてるという悪夢みたいな光景ですね。

「やりなさいー！」

〳黒いジャンヌの一言に、彼女の周りを旋回していたワイバーン達が飛び立つ。先ほど暴れていただけの同族よりも整然とした動き。貴方達を包囲するかのように。

とはいえ迎撃してやればいいんですけどね、初見……待って!? まるで狙っていたように躲かれたんですけど……あつぎやああああ!!? このタイミングで羽ばたきクリティカルするのはご勘弁をおおおおお！（TTBNダディー）

「ちっ、逃がしたか……」

「そこですっ！」

「甘いー！」

さあお返しとばかりジャンヌが邪ンヌへ向けて猛進。したんですけど即座にワイバーン君がまるで盾の様に均整のとれた整列、なんだってテメエは防御に対して根性しかねえんだ（疲弊）

「なっ！ 野生の生物が、あのような動きを……!?!」

「それが彼女の力なのでしょう。清明様も、動物を使役する術などを使って、ネズミなどを自由自在に操って見せました」

〳その言葉に、黒いジャンヌ・ダルクが笑う。まるで此方を小馬鹿にしたような……一緒にして欲しくなどない、とでも言いたげな。そんな笑顔だった。

「竜の魔女、って呼ばれてるのは伊達じゃないわ。ファブニールより



格の低い、ワイバーン程度なら私の合図一つで自由自在よ。ワイバーン風情と侮っていた？ だったら……はは、お笑いね。ええ」

要するにあのワイバーンテンペスト達は邪ンヌのファンネルまたはビットみたいな扱いって感じですかね。最後までドラグーンたっぷりとはたまげたなあ……

「さあ、我が竜達を恐れ、踊れ！ そして……引き裂かれ、襤褸布の様に息絶えなさい！」

さっそく邪ンヌのワイバーン曠げ攻撃。ワイバーン達が旋回とか遊びを一切せず向かってくるのやだ、怖い、止めてください……つて狙いホモ君じゃないですかねコレ!? 毎度毎度ハゲ狙いとか信じらんねえ！（憤怒）

でもずっとサーヴァントに狙われ続けて来た歴戦のホモ君相手に、そんなんじや甘いよ（回避） 回避補正、あんまり役立ってないように見えるけど、雑魚相手ならこれ以上ないくらい仕事してるんだよなあ。

「マスター、此方へ！ 結界を張ります、その中であれば……！」

〽️いいや、守りには入らない。

〽️寧ろ攻める！ 守りに入れば押し切られるぞ！

今回ばかりは下の選択肢ですね。耐久はジャンデルセンシシステムが構築出来てからってハッキリ分かんだね（古参並感） というかオールレンジ攻撃相手に持久戦とか、古くから負けフラグだし、ニュータイプじゃないと無理だと思っただけ（古参オタク並感） 「それはそうかもしれないませんが……マスターをやられては、元も子も！」

〽️一所に留まれば、それこそ竜の魔女が直接炎で焼いて来るだろう。ここは寧ろ、本体である彼女を叩いて、残ったワイバーンを掃討する方が良いと、半ば野生の勘にも似た判断を下していた。

確かにワイバーンがファンネル染みた動きで攻め込んできたら厳しいでしょうが……古来よりオールレンジ攻撃には致命的な弱点があります。飛んでいるファンネルを、一つずつ丁寧に調教してけば、均整の取れた攻撃なんてガバガバになるってそれ一番言われてる

から（古強者並感）

「……分かりました。マスター、どうかご無事で。出来る限りの事は、致しますので」

「何時も心配をかけてばかりだが。今回はその心配を杞憂で済ませ、信頼を取り戻すチャンスだ。貴方は、マシユと何事か話していた立香に声をかけた。こちらからも攻勢を仕掛ける、と。」

「ああ、やられてばっかりになるのは嫌だからな……マシユ！ ジャンヌ！ 行こう！ 後衛は式部さんが引き受けてくれる！」

「分かりました！ マシユ・キリエライト！ 突貫します！」

「これで、決着を付けます！ 竜の魔女！」

圧倒的、圧倒的攻めの選択肢……ッ！ 決して引かない……ッ！

引けば、流れは流れていってしま……！ 一度諦めた便意の様に……ッ！

という事で全力で凸ります。一切の躊躇もなく邪ンヌ、お前を芸術品に仕立てや……仕立てあげてやんだよ！ お前をげいじゅつし……品にしたんだよ！ お前を芸術品にしてやるよ！（妥協）

「正面から……いい度胸じゃないの、上等よ、磨り潰してあげようじゃない！」

「ワイバーンが展開する。邪ンヌを中心に。一列に整列した槍兵の如く。そして彼女の手が一度振り下ろされ……ワイバーン達が一斉に羽ばたきを巻き起こし、見えぬ刃が面の形で制圧せんと迫る。」

マジでファンネル染みた挙動で草不可避なんだよなあ……恐ろしいほどに綺麗に統率が取れてて草不可避。邪ンヌつてそうなんですよね、こういう事も出来るんですよ今更ながらですけれど。

「マシユ！」

「はいっ！」

けど無駄だよ、そのマシユは藤丸君の許可でしか開かないようになっっているんだ（防御） 大盾が一本の道を切り開き、無事暴風地帯を突き抜けました。まあマシユがガチの防御バフで固めてしまえばそう簡単には抜けませんよ。

「お二人共！ 今です！」

「よっしやあー！」

〽オツシ！」

さあ、ここからです。ワイバーン達の猛攻、それに邪ンヌ自身の攻撃を潜り抜けられるかです。ワイバーンの動きは邪ンヌの指示次第なので、少なくとも彼女から目を離さないように行きましょう。

「散れ！ 四方から押し潰しなさい！」

げえっ全包围攻撃！ 速攻で容赦ないですねクオレハ……じゃあ特別な稽古つけてやるか！ ジャンヌさんと連携攻撃でも……

「康友！ 力を貸してください！ 上空のワイバーンを打ち落とします！」

〽それに頷いて、すぐさまバットを構える。低く、冷静に。ジャンヌの後ろに。届かないなら届けばいい。深く考える事はしない。

おや？ 特別コマンド？ あ、いつすよ（快諾）

「——ありがとうございます！」

〽一瞬、こちらに笑顔を浮かべたジャンヌは、直ぐに上空へと視線を向ける。一つ、地面を叩いて合図を送る。一瞬、それに頷いたジャンヌが一步、後ろに構えられたバットに足をかけ……跳躍する瞬間に合わせ、思い切り貴方は振り上げた。

必殺ロケットジャンヌ。お、ワイバーン君反応追いついてませんね、じゃあ命貰って帰るから……（棒読み）

〽バットを振り上げた勢いで肩に担ぎ、貴方は走り出す。狙いは、一匹のワイバーン。空のジャンヌに気を取られていた顔面にバットを叩き込み……直後、自分の背中を踏み台に立香の剣がワイバーンの口内に叩き込まれる。それはジャンヌが空中のワイバーン二匹を叩き落すのと、ほぼ同タイミングだった。

ヴォースツゲ……連携が綺麗に決まるのが気持ちいい×そのサポートが出来るのが気持ちいい〓もうタマラナイ！ ワイバーン全部打ち落としてやるから、つべこべ言わずに（ワイバーン操って）来いホイ。

「舐めるなああー！」

一斉に凄いのが来たああ！ いや、でも普通に迎撃されていますね。

香子さんの援護が実にお太い！ ワイバーン君の足並みを乱した所で、一気に突うずるっ込みましようか。

香子さんの援護で空いた穴は……こっちこっちー（突撃） こんなユルいんかよ！ 笑っちゃうぜ！ 自分達で緩くするように努力したんだよなあ……さあワイバーン君の包囲網を抜ければ、その先は本丸です。

「っ！ まだだっ！ ワイバーン共！」

ってもう邪ンヌがワイバーンに指示出ししてるじゃないか（焦燥）  
急いで止めなきや（使命感） 最初に接敵したのは藤丸君、剣で一閃！（ノーダメ） でもってホモ君もバットで一撃！（ノーダメ） そして最後はジャンヌが旗で、一撃入ったあ！（結構なダメ） ……あれ、ホモ君と藤丸君体勢崩すくらいしか出来て無くない？

「ぐっ……っ！ はっ、遅いわよ、諸共死ねえ！」

「何を……っ!? 二人共、逃げて！」

言われなくても指示が出る時点でスタコラハッサム……（斬撃ダメージ） ワイバーン君達の鎌鼬を避けきれませんでした……久しぶりにダメージ結構入りましたね。藤丸君もどうやら無事の様ですけどって一番邪ンヌに近いジャンヌが……落ちたな（仲間を信じない人間の屑）

＜自爆にも近い、ワイバーン達による風圧の集中砲火。貴方と立香は何とか回避も出来たが、近くに居たジャンヌへのダメージは、相当なものだ。

「は。ははっ！ どうした、聖女！ こんな物か！」

「あ……ぐ……」

＜その中心で黒いジャンヌは笑って立っている。自分で狙った一手、事前に覚悟が決まっていたからこそ、耐え抜けたのだろう。周辺の床が一部完全に挟れているあたりから、その威力は推して知るべきだろう。

「聖女は、倒れた……次はアンタ達よ カルデアのマスター！」

＜視線を中心に向けていたワイバーン達が、一斉に貴方と立香に視線を向ける……だが、黒いジャンヌは、気が付いていない。立香の向

けるその視線の先。彼女が、盾を構えているのが。

「——マシユ！ 決めろおおおおお！」

「はいっ！」

おお!? ここでマシユちゃんが……！ よーし、香子さんにも良い所見せてもらいましようか！ 香子さんオナシヤス！

「——承知しました！ マシユ様を必ず辿り着かせます！」

＜突撃するマシユに迫る竜を、躍る文字が、五芒星の呪が、次々に  
阻み、打ち落とす。

それでも向かってくるワイバーン奴、いますよねえ……（ねつとり）マシユ

の邪魔するとか殺されてえかお前（進路確保）……そんな悪い子は

ホモ君と藤丸君でお仕置したる。ギャアギャア騒ぐな、だ→ま↓れ←

！（一撃）落ちろ！（二撃）……落ちたな（二撃決殺）

「ちい、なら私が直接……焼き尽くしてやる！」

＜ワイバーンの守りも無い状況で、黒いジャンヌが自らマシユを迎撃しようと、その旗と剣を構え動いたその瞬間……

「——逃がしません！」

＜……倒れていたジャンヌが立ち上がったのだ。黒いジャンヌの後ろに回り込み、彼女を羽交い絞めにし、その動きを阻害する。

シユバルゴ！（縛るぞ！）ジャンヌに勝てるわけないだろ！

鱈ア！ フル焼きそば！ ああもう……！ もう抵抗しても無駄だぞ！

「今です！ 私ごと！」

「な、アンタ！ クソ、離しなさい！ 離せえ！」

＜ジャンヌに捕らえられ、藻掻く黒いジャンヌに向けて大盾を構えた少女が真つすぐ突っ込む。わき目も振らず。勢いを維持して。

「やああああああああああつ！」

＜——その大盾は、間違いなく、黒いジャンヌの体に叩き込まれた。今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。

## エンドロール・オルレアン その一

皆さんこんにちは、ノンケ（勝利の女王）です。

前回は邪ンヌとの激闘、マシユ突貫で一撃が直撃。もしかして、これは……もしかするかもしれませんが？（決着）というか、デオン君ちゃんデプレイヤーは大分消耗してるのでそろそろ決着と行きたい所さんです（ぶっ続け）

〽——一瞬の間があつて。竜の魔女が僅かに呼気を吐き出す。ジャンヌが離れた後は、もう真っ直ぐに立っている事すら出来ず……フラフラと玉座へ向けて後ずさりしていく。

「まだ……まだよ、負けてない、私は！」

〽そう叫んでは居るが、見事に統率されていた周辺のワイバーンは既に何処かへと散つて何処にもいない。既に、彼女にマトモに戦う力が残っていないのは明らかだった。

ワイバーンが散つたつて事は、いよいよ竜の魔女としての力は残っていないのは間違いないようです。ワイバーンオリジンあたりを引っ張り出しての第三戦とかは有ってもキャンセルだ（消耗）

「——ジャンヌ！ おお……ジャンヌ、なんと、お勞しい……！」

〽そんな彼女に貴方達を追い越し駆け寄つたのは……メドゥーサ、レオニダス達と戦つていた筈のジル・ド・レエだった。しかしその彼も決して万全と言えるような姿ではない。服に染み出す夥しい血液が、その傷の深さを表している。

ジークさん達は見事術ジルに打ち勝つたようですね。意外と早く勝つたなあ？ 正直大海魔とかの召喚含めて、結構時間かかると思ってたんですけど。

「……ジル」

「ジャンヌ！ お引きあれ……！ そのお体では！」

「いいえ、いいえ……まだ、まだ私は負けてなんかいない！ まだ、戦える！ 私はこのフランスを焼く、竜の魔女！ この胸に焼け付いた、この思いを、果たすまでは……！」

〽そんなジル・ド・レエを押し退けて。彼女は立ち上がり……その

ままだに目の前に体を投げ出し、倒れてしまう。もはや、体を支える力すら残っていないのだろうか

「見ろよこれなあ！ この無残な姿よおなあ!? おい！ 頑張つて戦い抜いたんだよなあ！ 邪ンヌウ！（敵に対する惜しみない賞賛）」

「ジャンヌ、後は、後は私に……！」

「いいえ、貴方には任せられない！ これは……私だけの！ 私に存在する、一つ、たった一つだけの……！ 離してジル！ 叶えるのよ！ フランスへの、私の憎悪を！ 私の復讐を！ 私が、私自身が！」

「> 竜の魔女が、ジル・ド・レエの手の中で、ひたすらに足掻く。そんな彼女を見て……僅かに、ジル・ド・レエは顔を伏せ。口元で何事かを呟いた。その直後だった。」

「あ……」

「おうえ!? 待つて!? 邪ンヌが金の光に包まれて……あれって、サーヴァントが退去する直前のアレですよええ（名推理）でも彼女をどうこう出来るのは、確かこの特異点じゃ……」

「——なっ!?!」

「そ、そんな……りゅ、竜の魔女、消滅……どうして!?!」

「> 竜の魔女は、解けて消えた。突如、黄金の光となって。そしてそこから現れた何かを抱えて、ジル・ド・レエはゆつくりと、立ち上がる。彼は……泣いていた。その瞳から、滂沱と涙を流していた。」

「——ああ、ジャンヌ。私のエゴが、貴女が止まる事を許さなかったのですね……なんと私は愚かな事を。お許しください。そして、せめてゆつくりとお眠りを。我が竜の魔女、ジャンヌ・ダルク」

「お前ホントに術ジルか?（嫌疑） 剣ジルが、堕ちたフリしてるだけじゃねえのかあ?（懐疑） こんな綺麗な発言する術ジル君久しぶりに見たんですけど。」

「——ちよ、ちよつと待つて!?! 今、黒いジャンヌ・ダルクの体から出てきたの、反応的に聖杯としか考えられないんだけど!?! なんで彼女から聖杯が出てくるの?!」

「やはり、そうでしたか。ジル……聖杯の持ち主は、彼女ではなく、貴方ですね。ジル」

「ジャンヌがそう呟いたのに、全ての人間の視線が集まる。竜の魔女は、自らが聖杯を所持しているようなそぶりを見せていたが……それよりも、何故彼女はそれが分かったのか。」

「勘の鋭いお方だ……」

「ええ。その勘で、私は自らの運命を見て、結末を知って、それでも戦ったのです。この勘が無ければ、私は貴方と出会う事も無かった。ジル」

「そうです。竜の魔女……ジャンヌ・ダルク・オルタを作り上げたのは、彼です。でも知っての通り、ジル・ド・レエはジャンヌ過激派と呼ばれるほどのジャンヌフリーク、なんだってテメエはそうジャンヌに対して根性しかねえんだ？」

「そんな彼が、自らの手で、ジャンヌ・ダルクを消し去るなど……信じらんねえ！」

「ええ、貴女は滅びを知ってなお、戦った。この国の為に……恨み言、一つ残さず」

「貴方達が居る、この国の為ですから……恨むなんて、あり得ません。寧ろ、少し誇らしいくらいでした。こんな村娘でも、何かを為す事が出来たのですから」

「じゃ、ジャンヌさん。一体、どういう事なんですか？」

「マシユが問いかける。彼女は、何かに勘づいているようだが、貴方達は、何が起きているのかも分からない。」

「——私が、フランスを恨む事はない。ならば、フランスを憎み、滅ぼすと言う思いを抱いた側面など、存在する筈がない。では、彼女は一体何処から来たのか。あの膨大な力は一体何処から来たのか……私が考え得る可能性は一つでした」

「もしかして、それって」

「聖杯。彼女が聖杯そのものだった。フランスを憎んだ……貴方の願いだった。貴方が聖杯を用いて……彼女を作り上げた。そうですね？」

「なんか段々ジルが何かを悟ったような微笑みになって行ってるんですけど。術ジル大丈夫？　なんか悪い物拾って食べたりした？（心



配)

「——ジャンヌ、貴女を現世に蘇らせて、今一度、我が前に……その願いは、叶えること敵わぬと、万能の願望記であるはずの聖杯に拒絶されました」

「ジル……」

「ですが、我が願いはそれ以外に存在しない！ 貴女以外になど、だから、新しく創造したのです。私の信じる貴女を！ ジャンヌ・ダルクを……」

〈それは狂気の告白だった。自らが恋焦がれた誰かを作る。人を、創り上げる。正気の沙汰とは思えないような。

「ですが……ですが、その私の願いが、彼女に無理を強いてしまった」「ええ。彼女は貴方に託された願いを、最後まで……」

「事実すら知らせぬ、この愚かな落伍者の願い。それを燃え上がらせ先の彼女は立ち上ががあがった。もはや力も、霊基も、滅びる直前だったというのに……」

〈しかし……そんな狂気の沙汰を為した人物とは思えぬほどに。彼は静かに泣いていた。その懐の、聖杯を、愛おしい物のように、抱きしめて。

本当に手つきが優しいんですね……優しすぎてちよつと違和感。とはいえどんだけ優しい手つきでも変態だと思っんですけど（名指摘）

「——彼女もまた、ジャンヌ。それを忘れておりました。貴女は、諦める事を知らず、真つすぐに進む少女でした」

「だからそれは——むぐつ」

「先輩、今は、ちよつと」

マシユちゃんナイス。流石にここは空気読んで黙ろうね。

〈絶対に違う。そう言おうとした貴方の口は、既に札に塞がれていた。後ろを振り向くと、香子が申し訳なきような表情で、首を横に振っていた。

ホモ君もやられてて草生えますよ。二人揃って頑固スギイ!? どう考えたってよおお前よおなあこの場面は二人のものだとかって思

うだるなあ普通よお（正論） 馬鹿かお前らなあ？

「これ以上、彼女を私のエゴに付き合わせることは出来ない」

「ジル」

「彼女に、お供せねばなりません。もし彼女が寂しがっていたら、導かねばなりません。それがこの、ジル・ド・レエの役目でございますれば……ジャンヌ。これにて、失礼を」

＜その体から、黄金の光が立ち上り始める。ゆっくりと、最後に一つだけ、ジャンヌに向けて頭を下げて……ジル・ド・レエは、黄金の光となって消え。その手に抱かれていた聖杯が金属音を立てて、転がった。

「ええ。ジル。良い旅を」

「……聖杯、回収します」

＜マシユが、少し沈んだ声で聖杯をそのシールドの中に収納する。勝った。聖杯を回収して特異点も解決する。だというのに、何処か物悲しい空気が、この玉座の間には漂っていた。

空気の読めない二人は兎も角として、ああいう消え方をされてると、こつちとしてもなんかしんみりしちゃいますね。ジャンヌ過激派はただの過激派では終わらなかつたようです。

今回はここまで、いよいよ次回でオルレアン編は最後になると思います。

ご視聴、ありがとうございました。

## エンドロール・オルレアン その二

皆さんこんにちは、ノンケ（二面性アサシン）です。

前回は邪ンヌ、術ジルを見事……なんですかね？ あれは。取り敢えず撃破して聖杯を回収しました。これでオルレアン編は見事突破したわけで。後はカルデアに帰還するだけです。長かった……ドラグーン・セイバースツゲエきつかったゾ……

「——マスター！」

「決着は……付いたようですね」

＜ジル・ド・レエの消滅の直後、駆け込んできたのはレオニダス、そしてメドゥーサ。ゲオルギウスとジークフリートの姿は無かった。

「レオニダス！ メドゥーサさん！ ……他の方は？」

「フランス軍の方々の方へ向かうと！ 清姫さんの事も心配だからって」

あ、そつかあ……ゲオルさんにはお世話になったし、最後にご挨拶してから帰れたかったなあ……（無念）でも次の召喚に応じてくれるかもしれませんが、応じてくれたらその時にお礼を言うつもりです。

『——全員揃ったね。そろそろこの時代の修正が始まる！ レイシフトの準備は万全だから直ぐにでも帰還してくれ！』

「了解しましたドクター！」

＜マシユが通信に返事をした時……玉座の間に、もう一つ、入ってくる影。それはガラスの馬、それに乗っているのはマリーと、フランス軍を率いていた元帥、ジル・ド・レエの二人だった。

「はあ、間に合ったかしら！」

「——ジャンヌ！」

おお、お二人共。態々ガラスの馬にまたがってまで来てくれたんでしようか。ウレシイ……ウレシイ……まあジルはジャンヌの為にしようけど。

「マリーさん！」

「ああ良かった、みんな無事そうで。外のワイバーンは、少しずつ消え

ていつてる……ようやく全て、終わったのね?」

「はい。特異点を維持していた聖杯、無事回収しました」

〈マシユがそう言うのと、胸に手を当てて、一つ呼吸をマリーはして……少し困ったように笑った。

「せめてお別れの挨拶を、と思つて来たけれど……駄目ね。言葉が浮かばないわ。立香や康友、カルデアのサーヴァントの皆さまにも色々言いたい事はあつた筈なのに」

友の別れに言葉は要らないつて、それ一番言われてるから。だから気にしないでくれよなあ（気さくなホモ）ホモに気さくにされてもマリー様困るだけじゃないですかね……?」

「でもせめて、これだけ……ありがとう。私の大切な国を、第二の祖国を助けてくれて。本当に、ありがとうございます。それ以上の感謝の言葉が、見つかりません」

〈そう言つて、マリーはゆっくりと、その頭を下げた。思わず立香と貴方は顔を合わせ、直後、顔を上げて欲しいだと、そんな事しなくてもぜんぜん、だのと要領を得ない言葉を繰り返し……

「いいえ、お礼を言われるような事ではありません、マリーさん。これは、私たちのやるべき使命ですから」

〈そう言つて、微笑みを浮かべながらマリーの手を取ったマシユに、全て持つていかれた。

ウダウダやつてるからだよ、そうだなあ!?(厳しい叱責) どうか大の男二人が揃つて頭を下げている女性の前でわっちゃわちややつてんの、情けなさとか通り越して逆に笑っちゃうぜ!

「マスター、礼を言われているのだから、素直に受け入れれば良かったのでは?」

「そ、その……受け入れようとはしていらつしやつたのですけど……」  
〈貴方が、こんな風に礼を言われた経験の無さから来る一種の照れであり、居心地の悪さなどそれらが混ぜこぜになって、若干のパニックを起こしていた事。香子は見抜いている、と言うより見てしまったのだらう。貴方は無事沈黙した。

「……あれ?先輩。大丈夫でしょうか?」

「立香、どうしたの？ お顔がなんだか……萎んでるわよ？」

「うん。うん。大丈夫だよマシユ、マリーさん。ちよつと、なんともやるせない気持ちになっただけだからさ。なんでもないんだ」

藤丸君とホモ君のダメージは置いておくとして。

〈気を取り直して。貴方は、改めてマリーの方を向いた。共に戦い抜いた、戦友に。そして貴方も、世話になった、と一つ。頭を下げて……足元が光に包まれているのに気が付いた。そろそろ、時間らしい。

「お別れみたいね」

「はい……マリー様。本当に、マスターがお世話になりました」

「マスターに限定するあたり、結構根に持っていますね、シキブ」

「ふふつ。式部さん、メドウーサさん。お二人も、またいつか！」

マスターが、と強調するあたり、マジでカルデアに戻ったら香子さんに相当叱られそうで草。悪い子はお仕置きだどくでもそれも無事に帰らないと受けられない。つまり生きてる証拠だよ（生の実感）

〈少々顔色を悪くしつつ、後ろを振り向けば、ジャンヌと立香も何かを話していた。互いに、この特異点で戦った戦友との別れだ。少し、寂寥感もあった。けれど。

「康友」

マリーさん……ほんへとの一番の違いはデオン君ちゃんと貴女でしたね。後サンソン君は終始ボコられっぱなしでマジで泣いて良いと思った（小並感）

「あなたの道のりは長く、大変なものかもしれないけど、大丈夫！ 頼りになる人との縁は、もう繋がってる。きつと、呼びかけに答えてくれるわ。頑張つて！」

〈……ありがとう！ また会おう、マリー・アントワネット！

〈でも、マリーの言う通り。別れを涙で済ませるのは、少し悲しいから。あくまでも、最後は笑顔で。貴方は、マリーの応援に頷いた。さて、光の向こうでは、集まった三人が此方に手を振ってくれています。

ああ、思えばヴラド公との一騎打ち、ドラグーン・セイバーと、此

方のプレイヤースキルを遥かに超えた相手ばかりが集まる最初の特異点でした。でも、結構個人的にはエンジョイしてプレイできたと思っっていますね。あーつまんね、とか思う暇が無かったともいう。

「皆様！ またいつかお会いしましょう！」

「今度はアマデウスの恋のお話、一緒に訊きましょうね！」

「え？ アマデウスって……彼と!?」

「あ、ジャンヌは知らなかったわね……まあ、それもまた何れ」

〈戦友である彼らに向けて。ここに居ない、彼女たちに向けて。貴方達も手を振り返す。力いっぱい。心を込めて。

「ジャンヌ！ マリーさん！ またいつか！」

「はい、きつとまたお会いしましょう！」

〈立香とマシユの言葉を最後に、目の前は光に包まれていく。彼女たちの姿は、少しずつ見えなくなっていく。そして……

あ、レイシフト画面。つかあああああ漸く第一特異点終了です！ くう疲。あまりにもしょっぱなから飛ばし過ぎて、ここから先の特異点に対する不安感が倍増しましたが私は元気です。

というか、普通にオルレアンプレイするつもりが、めっちゃ独自要素出てきてます。流石F G O R P G。全くもって私を飽きさせない……！

予想外だったのは、ホモ君の覚醒が予想以上に早まった事ですね。正直、早くても第五特異点からだと思っていたのですが……これは、最強じゃんこれ！ なプレイをさせてくれるのか、それとも従順になるまでやるからなオイ！ と言わんばかりに難易度が爆上がりする事の前触れなのか。後者とかはすいません！それだけは……！

と、カルデアに戻ってきましたね。

「お帰り、皆！ お疲れ様！」

〈——戻ってきた貴方の目に、初めに入ったのは、笑顔のドクターだった。

「初のグラントオーダーは、君達の手で無事遂行された……本当に、凄いよ。人員に補給物資と足りない物ばかり、加えて実験段階のレイシフト、そんな絶望的な状況下で君達は最高を遥かに超える成果を見せ

てくれたんだ」

ドクター嬉しそう（小並感）

「全カルデア職員が保証するよ。君達は難題を乗り越えた、このカルデアが誇る、一人前の魔術師だとね！」

「フオーウ！ フオーウ！」

でもって、今回の特異点でも、あんまり出る事は無かったねフオーウ君……本当にゴメン。活躍見せるって言ったのに見せねえってお前おかしいだろそれよオ！ コラア!? 独立愚連隊的な行動してたせいですね……セプテムではマジで気を付けよう。

「やー、全く同意見だとも。本当に、お疲れ様だ、皆」

「レオナルド」

「ロマニ、こちら最新の観測結果。どぞー」

「どれどれ……やった！ 特異点は完全に修復できてる！ まだ特異点の内一つだけだけど！」

＜ロマニに何かを渡したダ・ヴィンチは、今度は此方に歩いてきた。目当ては……貴方の隣の香子らしい。

「で、お疲れのところ悪いんだけど……紫式部、君のご要望の物、設計図が出来たから此方に来てくれ」

「え？ 〴〵要望ってああああ……」

＜そうしてダ・ヴィンチに引つ張られて奥へと消えた香子を見送った後、貴方と立香は目を見合わせ、首を傾げたのだった。

〴〵要望となると、図書館でしょうか。ダ・ヴィンチちゃん仕事速いっすね。

さて、漸くオルレアン編は決着。次回からは、また拠点フェイズか、それとも……と言った所で今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。

## イベント特異点 拠点フェイズ その一

皆さんこんにちは。ノンケ（影の国の女王）です。

前回、いよいよオルレアンをクリアし……カルデアでの自由行動フェイズです。さて何をしようか、と言った所ですね。後夢の中で『空気になってんだよなあお前のせいだよお（倒置法）なあ』とフオウ君に怒られたので、彼の出番を頑張つて増やそうと思いました。

でも先ずはホモ君藤丸君の成長チェックから（裏切り）スマヌ……スマヌ……

取り敢えず、藤丸君からですが。ファブニールにとどめ刺してたり、色々行動していたようで順調に直感等のスキルが成長しています。クリティカル番長への道は順調ですね。後は天性の肉体のレベルの上昇で、ステータスもガンガン伸びています。怖いねえ……

一方のホモ君は、何方かと言えば鬼種の魔の方に特異点で手に入れたポイントを振ってみました。予想より早めに覚醒迄持っていたのですが、イベントによる覚醒の影響か覚醒した割にスキルレベルが貧弱すぎる。成長させて、ちゃんと戦えるようにしなきゃ（使命感）と言った感じですね。藤丸君は順当に、ホモ君はトリツキーに成長しています。

さてそんな所で画面のホモ君ですが、カルデアを歩き回って貰っています。施設内を犬のように駆け巡るんだ！

▽——廊下を歩いていると、貴方は立香とレオニダスを発見した。

おや？ どうしたんでしょうお二人さん。なんか上半身インナーだけの立香君の腕とか足とか、レオニダス王がバシバシ叩いて確認していますけど。……はっ！ おう、そういう……関係だったのか（解析）

「——どんな感じ？」

「うーむ、確かに鍛え上げられていますな……良い筋肉です！ しかしながら！ 鍛える余地はまだありますな！ いや、寧ろコレだけ



下地があるからこそ、鍛え甲斐がある！」

「そっか……：良し！ 貴方がそう言うなら、やってみようかな！」

＜そんな二人に貴方は声をかける。

＜＜どうした二人共？

＜＜筋肉の話題なら、このボディビル評論家の俺を放って貰っては困るな。

いやそんなトンチキな趣味はホモ君にはないです。と言うか何なんでしょうかそのピンポイントにすぎるシユミ。もうちよつとマトモな趣味にしておいて欲しいんですが。止めたくありませんよ……：選択肢は当然、上だよね。

「お、康友」

「どうも本造院殿！ そういえばマスター、この筋肉は本造院殿との鍛錬で身に付いた、とおっしゃっていましたが！」

「鍛錬っていうより山遊びですけどね。まあそうです」

「なるほどなるほど……：本造院殿、少し、お体失礼しても構わないですか？」

＜意味は分からなかったが、断る理由も無い。頷くと、近づいてきたレオニダスに幾つか体の筋肉をチェックされた。腕から始まり、足、背中。全身くまなく。

「ふむ、こちらも中々！ これは二人共、になりますかな！」

なんのこったよ（疑問）

「先の特異点、お二人はとても元は一般人とは思えぬ動きを見せました。とはいえ！ まだまだ成長する余地は存在していると私は見ました！ この先、激化するであろう特異点での戦いに備える為に、この休息の間にトレーニングを、とマスターに提案していました！」

「それで、折角レオニダスほどの英雄に鍛えて貰えるなら、って」「本造院殿も、如何ですかな！」

＜彼のスパルタ王に鍛えて貰えるなら、それは確かに貴重な経験だろう。誘ってもらえるというのであれば、断る理由はない。

＜＜それじゃあ、お願いします。

＜＜黒光りする立派な筋肉を作ろうぜ。

黒光りに限定する理由なんてないでしょ。黒光りは追突されて一転攻勢される運命背負っちゃうからね、申し訳ないがそんな運命はキャンセルだ。

「宜しい！ ではお二人共！ 早速向かいましょうか！」

「向かうって……どこに？」

「トレーニングルームに、です！ 位置は既に確認し、ロマニ殿にも使用の許可は貰っています！ さあ！ 始めましょうか！」

「そう言って歩き出すレオニダスの後に続く。マントを纏っておらず、その背筋の筋肉の盛り上がりと密度は凄まじいものだ。もしや、あそこ迄鍛えるのかと若干の期待と若干の不安が貴方を満たす。少し軽率だったかもしれない。とも思ってしまった。」

まるでアルプス山脈みたいだあ……（誉め言葉） こんなんにビシバシ鍛えられたら漢の子になっちゃう！（マッスル） なれ（完走への飽くなき欲望からの豹変） この先、様々なエネミーなどと戦う時にどれだけ筋肉があっても足りませんからね。ここはガッツリ鍛えていただきたい。

「カ……ツトオ！」

「さて！ 先ずはお二人がどの程度出来るかを示していただきますしよるか！」

「はいっ！ 教官！」

さて終わるまではレオニダス王の事を教官、と呼ぶ事になったトレーニングですが全く特訓器具等は見られません。つまりこれは……

「その為に、私と組み手です！」

「はいっ！ ……えっ」

です よ ね（絶望） こんな聳え立つマッスルと組み手とか自殺行為かな？ そもそもサーヴァント相手に喧嘩売るとか基本的に無謀だろいい加減にしろ！ 喧嘩じゃなくてトレーニングとか、いや、それはもう、関係ないし。

「人を計るのに一番やりやすいやり方です！ 組み手、というよりお二方が好きに仕掛けて私が捌く！ その時の手応えで、何処から始

め、どのように鍛えるかを見極めますので遠慮なく！」

「バシン、と胸の筋肉を叩く音が凄まじく重たい。レオニダスの力強さが、まるで真正面から押し付けられているようだ。

「えっと、じゃあ……どっちから行く？」

「ならば先手は頂き！」

「調子を整えたいから先手は譲る。」

うーん、どっちにしてもやり合うのに変わりはないなら、ここはちよつと先に行かせてもらいましょうか。ちよつとレオニダス王と組み手するの楽しみですし。

「——よし、分かった。お手本見せてくれ」

「頷いて、先にレオニダスの前へ貴方は出る。貴方が前に出てくると同時、ゴキリ、と首を鳴らし、少し低く体を落とす。まるでプロレスラーの様な姿勢だ。

「さあ、どこからでも構いませんよ！ 存分に拳を振るってみましょう！」

オッスお願いしま〜す（挨拶） じゃあ最初は王道を征く……正拳突きですかね。打ち込んでいきますんで、お覚悟、どうぞ。オオン！

（掛け声）

「——はい！ 良い拳です！ 腰も入って、相手を打ち倒す、と言う意思に満ちている！ ですがこれだけではまだまだ！ さあ遠慮なく、どンドン打ち込んでいきましょう！」

片手で軽く受けられてて草生えますよ。とはいえ相手は正規のサーヴァント、ホモ君のパンチなんてひで並の威力しかないでしょう。寧ろ鼻で笑う通り越して慈悲の笑みを浮かべられるレベル。お言葉通り全力で打ち込んでいきましょう、正解（全力操作）

「いいですね！ そうです！ 自分の中の全てを惜しむことなく叩き込むのです！ もう少し、まだいけます！ そう！ その頭狙いのハイキックは実に良い！」

何処狙いで打ち込んでも全部防御完璧防御。信じらんねえ！ 前後前後左右左右、色んな所に振り分けても全く突破できません。これじゃ、（プレイヤースキルが）全然足りないんじゃないですか？

「さあ、ラストスパート！ 全てを絞り出すように！ 最後のラッシュュ！」

寧ろレオニダス王に応援されてるじゃないか（呆れ） 恥ずかしくないのかよ？ もっと太いシーチキン打ち込んでやるからポイテーロ……！

イクイクイクイク！いくよお！イク！（ラッシュュ＋フィニッシュュ）

「——はい！ 最後の一撃、一番魂の籠ったモノでしたね！ お見事！」

チコリータ……（疲労困憊）

今までで一番の強敵とやりあって、もう指がボドボドダア！ もうちよつと手加減してくれよな——頼むよ……

「す、すげえ……」発も入らなかった」

「我が配下、三百人のスパルタの兵士たちの先頭に立つという事は、彼らの何れよりも強くあらねばなりませんので。しかし！ 本造院殿は実に見事！ もし私の生きていた時代にスパルタで出会ってれば、是非スカウトさせて頂きたかった程です！」

＜そう言われ、嬉しかったのは間違いないにせよ、最早貴方の体力は底を突き、立っている事すらままならない状態だ。スパルタ国の壁は、あまりにも高かった。

「よーし！ 次は俺だ！ 胸、借りますよ！」

「宜しい！ 何処からでもどうぞ！」

＜——その後、貴方と同程度は善戦したが、結局は体力の尽きた藤丸が、隣に無事に倒れ伏したのだった。

俺みたいな三流プレイヤーの操作じゃもう無念（な結果ばかり）だ。何であんなきついんすかね〜も〜（無能） もうちよつとくらいプレイヤースキル磨きなおしてくつかかなあ〜俺もな〜

「——お二人共！ お見事！ これならスパルタ式訓練、準上級者編から始めても問題は無いでしょう！ 明日にでもトレーニングを開始しますので、お二人共、楽しみにしていてください！」

＜貴方達は、はい、とか細く声を出すので精一杯だった。

？  
と言った所で今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。

## 拠点フェイズ その二

皆さんこんにちは、ノンケ（首切りわんこ）です。

前回はレオニダス王との熱い特訓をお送りしました。お陰で私にあらゆる物が不足している事を思い知りました。はあく……な　さ　け　な。こんなクソ雑魚ナメクジで実況者気取りとか、ぼったくりやろこれ！

それは置いておいて。朝はトレーニング、というかレオニダス王の試験でほぼ潰れ、体力の回復に時間を使って既にお昼過ぎです。自由時間とは（哲学）　次はあんまり体力を使わない会話イベント辺りを……

　　＜端末が震える。丁度食堂から出た貴方の元に届いたのは、ロマニからの連絡だった。後で医務室に来て欲しい。とメールには記載されていた。＞

　　？　ロマニから連絡とは、何かフラグ立てて……あつそつかあ（理解）　　そういえばオルレアンで鬼の血目覚めさせて、それをちゃんと計測するって話、出ましたね。まあそれはちゃんとやっておいた方が  
　　良いイベントですし、やりましょうか。

　　＜移動力……ツトオ！＞

　　はい、という訳でね。医務室です。

　　＜貴方は扉を開ける……その前に、少し考えてから入っていいかどうかを問いかけた。親友の悲しい失敗が、貴方の脳裏には浮かんでいたのだった。＞

　　ここ藤丸君の失敗からの学習ポイント。部屋に入る前にノックするなんて当たり前だよなあ？

『あ、本造院君かい？　早いね。ちよつと待つてね。マシユ、取り敢えずは異常はないけど、これからもちゃんと健康には気を付ける様に……』

　　＜どうやら懸念は的中していたらしい。やはり中でマシユが体のチェックをしていた。マシユは立香の可愛い後輩。そんな彼女の柔肌を見るのは罪だろうと、貴方は考えていた。＞

ホモは女性と子供には驚くほど紳士。ちがいますかあ〜？ 後藤さん（パトレイバー） 男子には？ 情け容赦なんか必要ねえんだよ！（辛辣） あ、カッコいい漢の方とかディアマイフレンドリカルドは除く（アトランティス良かったですね）

＜その時、医務室の扉の近くで、もう一人待機していた影を見つけました。いや、もう一匹と言うべきか。マシユといつも一緒に居る小動物、フオウ君がそこに居た。

おや、奇遇ですね。いや、マシユが何時も検査をしているのなら、ここに居ても不思議はないのか……丁度いいです。ここらでフオウ君と本格的な交流を計ってみましょうか。つと、ここで選択肢とは。動物に関する選択肢ですかね？

＜動物は好きだ。

＜動物は苦手だ。

＜小動物には昔から逃げられっぱなしだった……

……よし、一番下にしよう（愉悦） 鬼種の魔が原因で動物にビビられてるっていうのも説得力ありますし。苦難も悲しみも生きてる証拠だよ。

「……フオウ？」

＜今回も怖がらせてしまったりしてはいけない。直ぐにでも離れようとした時……フオウ君は一切貴方を怖がつていない事に気が付いた。目を見開き、もう一歩前に踏み出して。それでも動かずずっと扉の隣にいる。

「フオウ、フオーウ」

おや、フオウ君はホモ君から逃げないようですね。まあ正体が正体ですし、君じゃ話にならないから（嘲笑）ぐらいにしか考えてなくても不思議じゃないと思います。

＜感動に打ち震えながら、そつと指先を伸ばして……フオウ君の頭をそつと撫でた。傷つけないように。ふわっ、とした感触が人差し指の先から伝わり……貴方は、静かに一筋の涙を流した。そして、それでも逃げない。もう一筋涙を流した。

ものっそい感動してて草。

「——あ、やつさん。フオウさんと遊んでくれていたんですか?」

〈そうしていると、扉が開いてマシユが姿を現した。その直後、フオウ君は貴方の指先から抜け出し、マシユの元へと走っていく。一瞬硬直したが、彼がマシユに懐いているのを思い出し、仕方ないとゆっくり立ち上がった。

「ありがとうございます。良かったですね、フオウさん」  
「フオウ」

フオウ君と戯れるマシユちゃんも可愛いですね。さて、それは兎も角として。ロマニが言っていた用を果たすのでしょうか。

〈マシユにそちらこそお大事に、と言葉をかけ、貴方は入れ替わりに医務室内に入った。デスクの前、ロマニが貴方を見て、椅子から立ち上がった。

「やあ。本造院君。今日連絡したのは他でもない。君の特異点での異常なバイタル、あの事についてだ。と言っても、いきなり検査をする訳じゃない。まずは、色々聞かせてくれないかな」

〈そう言つて、ロマニは自分の座っていた椅子の向かいにあつた、もう一つの椅子を指さした。貴方はその椅子に腰を下ろし、同じく自分の椅子に座つたロマニと向かい合う。

「それじゃあ、取り敢えず改めて名前から。僕の質問に、出来るだけ正確に答えてもらえると、嬉しいかな」

ここからは怒涛のロマニとのカウンセリング、連続選択肢ですが、殆どホモ君のプロフィールチェックみたいなものなんで殆どキャンセルだ。でも全カッツは流石に職務怠慢を疑われるので、一部だけをピックアップして、お話しします（邪淫）

「出身は京都府って聞いてるけど、合ってるかな」

〈はい。

〈天神さんの近くですね。

何処の出身になるかは詳しく描写はされていなかったのですが、骨董市っていうのがヒントだったのかもしれないですね。下行つて……選べ（確定）

「天神さん……北野天満宮、かな? 確か」



「その骨董市で、ここに来る前に色々な買い物をした、という思  
い出話をロマニにすると彼は楽しそうにその話を聴いてくれた。」

「友達同士で骨董市巡りかあ……なんだろう、青春してるねえ。なん  
だか羨ましいなあ」

ロマニも一緒にやりませんか？ やりましょうよ！ でも、もうめ  
ぐる場所なんてないんだよ（届かぬ願い） カルデア以外全部吹き飛  
んでるからね、仕方ないね。取り敢えず黒幕は絶対滅ぼす。

とりあえずホモ君の詳しい出身くらいしか目新しい情報はありま  
せんでした。

「成程ね……分かった。あくまで本造院君はただの一般人で間違いな  
いようだ」

「けれど、とロマニが見つめる先には、二つのグラフ……先ほど聞  
いてみた所、通常の自分と特異点でヴラド三世と戦った時の自分のバ  
イタルデータの様だ。素人目で見ても明らかに両者には差があるよ  
うに見えた。」

「となると、魔術による干渉での影響はまず考えられない……生来の  
物だと考えれば、取り合えず大分絞れそうだね。よし、分かった」

「プレイヤーは既にどういう生まれなのか理解してるんですけどね、  
初見さん。さあ謎の検査器具が揃ったベッドへイクゾー」

「カ……ットオ！（BRLY）」

「血液を採取されたり色々された後、しばらくベッドに寝つ転がっ  
て大人しくしている間に、検査は無事に終了した。貴方は制服を着な  
おすと、先程まで座っていた椅子にもう一度腰かけた。」

「お疲れ様本造院君。とりあえず、血液検査とか詳しい検査結果は後  
日だけど、一点だけ確実な事が分かったからそれだけ報告させてもら  
うよ」

「ロマニの目は、至極真剣だ。何もなかった、と言う顔には全く見  
えない。」

「僕としても正直、驚きなんだけど……まず間違いなく、君から帰って  
きた反応は人間そのものだった。検査中も、何か特別な反応があった  
訳でも無い。何かしら反応があるとばかり思ってたところにかくの

無反応と言うのは、逆にね」

無反応?! この中の中で!? 何かしらあると思つたら完全に空振りです。草生える。けど不思議ですね。藤丸君の異常を悉くカンパしてきたカルデア医療でも分からないとは。お前……中々、難しいねんな。

「ここから想像できるのは、君が何か化け物だとか、そう言う類の物ではないというのはまず間違いないという事だ。そこは安心して欲しい。君は、きちんと人間だよ」

◇ どうやら不安がついていると思われていたらしい。

◇ 元から気にしてないから、大丈夫だよ。

◇ 寧ろアヴェンジャーズの様に人外でも面白かった。

下の選択肢が豪胆すぎる。とはいえ折角の気遣いに下の選択肢は流石に刺激が強いと思うので普通に上にしましょう。

「——そっか、お節介だったかな。ならもう今は言う事はない。後で検査結果が出たら改めて話をさせてくれ」

と言った所で今回はここまで。検査の結果が出るのを、楽しみに待っておきましょう。

◇ ご視聴、ありがとうございました。

## 拠点フェイズ その三

皆さんこんにちは、ノンケ（仁王立ち僧兵）です。

前回はロマニに検査してもらって、それで特異点終了後一日目の自由行動は終わりました。トレーニングと検査で一日が終るといのは、色々どうなんでしょうか。後はマイルームに戻って休息、なんですけど、マイルームに反応がありません。

〽——貴方がマイルームの扉を開くと、そこには一人でベッドに腰掛ける人影が。何時のも格好と違い、眼鏡をかけて。そしてその手には……文庫本らしきものが。

「あ、マスター。お帰りなさい。すみません、勝手にお邪魔してしまつて」

〽〽香子さん？

香子さん!? 何やってんですか!? マズいですよ！（定型文）それは置いておくとしてなんでここにいるんでしょうか。え、マジでエッチな看病してくれるんですかね。そんな訳ないじゃん（冷徹）

「あの、漸くダ・ヴィンチ様とのお話が終つて、マスターにご報告しようかと……あの、マスターがおっしゃっていた、本の件で」

〽先ほどの件はそうだったのか。しかし、貴方は一つ、思い出す。ダ・ヴィンチは確か設計図と言っていた。本を見るだけなのに、何故設計図と言う話になるのか。こんな遅くになったのと関係があるのか。

「じ、実は……せつかくやるのだから、大規模にやろう、と言う話になってしまつて。ダ・ヴィンチ様がカルデアの空きスペースを使つて、本と一緒に、折角だから図書館を設置しないか、と」

あ、やっぱりその話でしたか。まあだろうとは思ってました。カルデア大図書館、設置までこれで秒読みですね。

「私も、拙いながら陰陽道を用いて協力する事になりました。ダ・ヴィンチ様の引いた設計図通りなら相当な規模となります。沢山の本が！ ものすごい数の本が！ いろんな種類の本が！ おかれる事に！」

めっちゃ血色が良いっすね香子さん。興奮しすぎて若干加速しているようにも見えます。クロックアップかな？（仮面ライダー的疑問） フリーズでしょ（ワーム的結論）

「ロマニ様にも許可は頂いております。本の方はカルデアに存在している全ての本のデータを使っても構わない、と。カルデア職員の慰安にも使えるような良い施設になる、という事で……」

〈話が相当大事になっているのに驚いたが、香子が楽しそうに話している方が喜ばしいので余計な水は差さず、貴方は香子の話に相槌を打っていることにした。

「そして完成した暁には、私そこで司書をする事になりました。まだ完成には時間がかかりそうですが、完成した際には、是非マスターもご利用いただければと！」

香子さんが笑顔でフンスフンスして喜んでる＋114514364364点。こんな表情を見せてくれただけで答えは得たんだよねあ……（正義の味方並感） イシユタル神を召喚しなきゃですね。

〈出来上がったその時は、真つ先に利用しに向かう、と貴方は言った。聞く限り相当な規模で中々の数の本が揃えられると思われる。司書をやっている香子を見に行くためにも、純粋に図書館を楽しむ為にも、向かわない選択肢は無かった。

「は、はい！ お待ちしております！」

〈そして香子はこの後、どういった本が揃えられるのか、雰囲気はどんな感じなのか、司書をする際に司書のスペースをどのようにするか、等々こだわりの物を怒涛の勢いで語りに語って……小一時間してから我に返り、怒涛の謝罪タイムに突入した

カワイイ！（BRLY） 香子さんって、綺麗っていうより可愛いが似合う。それ一番言われてるから。好きな物には熱い所とか凄い愛せますよね。

〈そして、謝罪タイムを抜けた後……少し息を整えた香子は、改めて口を開いた。

「えっと……それだけではなくてですね、ダ・ヴィンチ様もこの図書館設立と同時にご自分で何やら始めるとの事で。マスターにお伝えす

るように、と」

おつ、そして大図書館と、もう一つ。私が待っていたもう一つの施設も動き始めたようですね。早ければ、次の特異点終了後には稼働してくれるでしょうか。

◇ダ・ヴィンチが何かを始める。香子は自分のサーヴァントであり、一応発端は自分の発言でもあるので、図書館の連絡が来るのは分かるのだが……ダ・ヴィンチが独自に何かを始めるのに自分に連絡する必要は無い。

「お二人にご利用して欲しいとの事で、藤丸様にもご連絡は行くそうなのですが……なんでも、ダ・ヴィンチ様曰く、我が叡智が君達の道を照らすような場所になるから楽しみにしていたまえ、と」

あーいいつすねえ……！（覚醒の兆し） 来ました来ました。FG ORPG、戦闘系マスターが必ずお世話になる施設、ダ・ヴィンチちゃん工房です。余程恵まれた生まれでも無ければ、殴り合いなんてマトモに出来ない（例：ホモ君）このゲームですから。この施設の稼働如何によつて大きく結末は変わります。ありとあらゆる手段を使つて何時かはサーヴァントと殴り合つてやるからなあ！（不転の覚悟）それにこのダ・ヴィンチちゃん工房で作れる装備は結構千差万別、ピエロが履いてる靴みたいなのから聖剣『月』まで何でも作れる……ん？ 今、何でも作れるつて言つたよね？ という事で、折角なのでホモ君にピッタリの装備を作りたいですね。

「一体どの様な施設になるのか、楽しみですね」

◇万能の天才と名高い、ダ・ヴィンチがそこまで言っているのだ。決して中途半端なものとは作らないだろう、とは想像できた。

「ただ……工房の方に関しては、ロマニ様は微妙な顔をなさっていたのですが、一体なぜなのでしょう。あのダ・ヴィンチ様が手掛けるのですから、きっと悪い事にはならないと思うのですけれど」

まあダ・ヴィンチちゃんだし、しょうがないね（諦観） 万能の天才と言うアドバンテージの代わりで自重と言うブレーキがこんな緩いんかよ！ 笑っちゃうぜ!? もうちよつと締めて、どうぞ。

◇その時だった。貴方の端末に、何か連絡が入る。件のロマニから

だった。解析の結果は明日のこの時間には出る、と書いてあつて……その文面を、香子が覗き込んでいるのに貴方は気が付かなかつた。

あつ（察し）

「……マスター、検査というのは。やはり、あの時の……？」

＜心配そうに、香子が此方を見つめている……そろそろ、こちらとも向き合うべきなのだろうか、貴方は思案する。特異点Fでも、オルレアンでも。彼女は、何かを知って居そうなそぶりを見せていた。

＜香子さん、聞いて良いかな。

＜俺の異変について、心当たりがある？

まあここは直接聞きたいから下だよ（男は真つすぐ直線） 実況をご覧の皆さまは凡そこの後の展開は読めませんかあ？ 読めますよねえ？

「……無い、といえば嘘になります。マスターの額から生えていた角は、見覚えがある物でしたから。マスターは……お聞きに、なりたいのですか？」

＜当然。

＜いや、そこまで。

（そこでヘタレるの）なんで？（威圧） 上だ上だ上だ（選択） オルレアンを突破した記念に、ホモ君の素性にもちよつとずつ触れていくのは当たり前だよなあ？

「……そうですね。ご自分の事ですものね。それに……たとえば私から何を聞いても、マスターはマスター、そうですね？」

＜そう言つて、心配そうな顔を微笑みに変えた香子。大丈夫だ、と貴方は強く頷いた。それを聞きたいのは、自分のルーツに興味がある、だとか、自分の事で知らない事があるのが気味が悪い、だとかそういう他愛のない理由だ。自分が揺らぐことは、欠片も無い。

「流石、と言うべきでしょうか。分かりました。私の知る範囲で、ですが。貴方様の内に眠る力について、お話しさせていただきたく存じます」

香子さん、というか恐らく平安鯖とホモ君の生まれが揃わないと見られないレアなイベントだと思われまます。ここからはノーカ……ッ

トオ！（BRLY）でお送りしたしまさしすせそ。

「——あの角。あの形を、私は覚えております。お山の怪。源頼光様と、四天王の御歴々が討ち取った、怖い怖い童子たち……鬼の、証の角」

▽鬼。日本の怪異の中でも、相当にポピュラーな存在だろう。角を持ち、大酒を飲み、怪力を振るって人を攫う。畏れられる物としては最上位に当たる物。貴方の認識としてはそんな物だった。

「少なくとも、マスター。貴方様の力は、それに類するものである、と言うのは間違いないかと思われます」

な、なんだってー（棒読み） はい。ホモ君には漸くネタバレ、プレイヤーはじめっからネタバレされてるので特にいう事はありませんねえ！ 逆に目新しかったらこの実況見流してるってことなんだからちゃんと見てきて、どうぞ（露骨なステマ）

▽——特異点の時の事を併せて考えるなら、自分はその角が生えた時だけ、鬼のような力を発揮できるのだろうか。貴方は、そう香子に考えを告げてみる。

「どうなのでしょう……私も、鬼の事について特別詳しいという訳では。判別する為の特徴程度であれば分かりますが、それ以上は。ただ……」

▽香子が、真剣な瞳をこちらに向ける。

「体が人である、という事なら。マスターは鬼そのものであるのではなく、鬼との混血の家系に生を受けた、という事なのかもしれません」

——今回はここまでとなります。ご視聴、ありがとうございます

## 拠点フェイズ その四

皆さんこんにちは、ノンケ（ブラックビード）です。デユフフフフフ！

前は香子さんと色々話しました。図書館だったり工房だったり、衝撃の真実（既読）だったり色々聞きましたが、まあどれも今、直ぐにどうこう出来る話ではないので、あ後は普通に会話して終わりっ！ 閉廷！ 以上！

「でははっ！ 朝のトレーニング、始めましょうかムアスター方！」  
そして起き抜けは当然、レオニダス王のトレーニングからスタートです。まあとはいえ地道なトレーニング風景流しても全く見所さんが無いので全力……ツトオ！（BRLY）になります（号泣） 結構頑張ったんですけどねえ……

「はい！ 終了です！ 良い感じですよ！ ちょっと勢いに乗って準上級兵コース通り越して『若干死ぬかもしれない真・スパルタコース』に突入しておりますが、対応出来ていて何よりです！ 計算通りです！」

通り越すのも計算の内なのか……（ドン引き） と言うか若干死ぬかもしれないとかついてる辺りで真面目な訓練じゃないでしょ、道理でトレーニングの難易度があげつない事になってないか？ と思いましたが（疲労困憊）

「という事で夕方からは最初から真・スパルタコースから始めますのでその積りで！」

～朝から空挺団も真つ青になりそうなガツチリとした訓練に消耗しきったが、それでもシャワーと朝風呂を浴びて、食事を取れば一気回復。マシユや香子と合流するころには、貴方も立香もエネルギーギツキを取り戻していた。

こうした訓練でも、経験値やスキルポイント獲得は出来ています。加えて訓練が過激すぎて、プレイヤーのプレイスキル自体が鍛えられてるんですよえ……レオニダス王のトレーニング、余りにも効力が強すぎて草生える。



「先輩、どうでしたか？ レオニダスさんのトレーニングは」

「いろんなことに応用できるコツも掴んだし、自主トレのやり方も教わったし、凄い実りがあるよ。マシユもレオニダスに軽い運動のコーチ、お願いしてみたら？」

「健康には適切な運動も必要だと聞きますし……先輩方とご一緒にトレーニング、と言うのも楽しそうです。ドクターと相談して、許可が下りれば、是非！」

おー……いいじゃない（ニッコリ）マシユと絡む藤丸君実に良いよ。オルレアンでは別行動が目立つちやつて、ぐだマシユあんまり摂取できなかったからね。ここで摂取しないとね。尊い（語彙消失）あ、香子さんもおはようございます！（元氣な挨拶）朝一番から麗しいですね！

「おはようございます、マスター……レオニダス様とのトレーニング……過酷を極めるのでしょね」

＜しかし、実践的かつ、的確なアドバイスが飛んでくる。これからの特異点を戦い抜くには彼のトレーニングは不可欠だろうとすら、貴方は思っていた。

「――マスターは、本来戦う者ではないのですから。そこまでして自分を追い込む必要も無いとは思いますが」

「メドゥーサ様」

あ、メドゥーサさんちつちつす！ 昨日は香子さんと拠点フェイズを過ごしたからメドゥーサさんとも過ごしたいけどなあー俺もなあ。

「まあ、それで止まるような貴方ではありませんか。ダ・ヴィンチが呼んでいましたよ、藤丸、マスター。なんでも新施設やカルデアに関する、重要な事だと」

＜昨日香子が言っていた、新しい施設絡みだろうか？ 良く分からない、と言う顔をしている立香に貴方は、昨日香子からして貰った話をした。

「新施設……あのレオナルド・ダ・ヴィンチが準備しているものって聞くと、とんでもなくスゴイものじゃないか、なんて想像しちゃうね」

君たちマスターが一番お世話になる施設ですなぁ！（呼符ガチ狙い勢）所でダ・ヴィンチちゃんってなんであんなにメロンゼリー集めてるんですかね。フルーツ好きとか？ 普通に魔力リソースの回収に決まってるんだよなぁ……（自問自答）このゲームではメロンゼリーはあんまり登場しませんけども。サーヴァントをメロンゼリーに変えるとかいう外道行為はやってはいけない（戒め）

「——でもその期待の新施設に関する事だけど、ちよつと待つて欲しいんだ」

おや、ロマニ兄貴じゃないですか。

「ドクター」

「レオニダス王がトレーニングを開始した、っていう話を聞いてね。戦力増強の流れが来ているなら、折角だしサーヴァントの召喚をしようと思っちゃってね。君達がオルレアンを探索している間に溜まった魔力リソースを使って、一回だけなら召喚可能だ」

お、これはお楽しみガチャタイムですか。当然このゲーム課金して石増やすとか出来ないのぞ召喚出来る回数自体がガチャです。そもそも一回もガチャが出来ない場合とかもありますねぇ！ ありますあります！

「一回だけ、ですか。って事は俺か康友のどっちが召喚するんですよ」

「あ、いや……スタッフたちとの厳正な話し合いの結果……本造院君になったよ」

お、ホモ君ですか。こういう場合、どっちかと言えば原作主人公が優先される事が多いんですが、珍しいですね。

〽️なんでですか？

〽️よっしゃ！ ここは気合入れて夢の国の誰かしらを当てたる！

マズいですよ！（反射神経極限覚醒）この開発スタッフはマジで命知らずなんですかね本当。とはいえアレを召喚出来ればシャレにならない位の戦力を手にする事が出来ると思いますけど、その代わりそんなもんに頼って人類史取り戻したら即剪定事象確定、当たり前だよなぁ……

「まあ、うん。単純な話、本造院君の方が重傷だったからね。よりサーヴァントの護衛が必要だと判断されたわけなんだが……」

〈理由を聞いて思わずすっこけてしまった。あまりにも情けないというか。要するに一番介護せねばいけないと言われてしまっているのだから、そりやあ泣きたくもなる。

「康友……うん、まあ、なんだ……張りきって召喚してこいよ」

「そ、その。頼もしい味方が増えるのですから、大変宜しい事かと！ やっさん！」

けどそれって問題に対する根本的なフォローにはなってますよね？（後輩の精一杯のフォローを無為にしていく先輩のゴミカス。死んで、どうぞ）とはいえマシユの言う通りではあるので理由はどうあれ召喚はする事に越したことはありませんから召喚はしていきましよう。誰が召喚されるか……期待が高まるウ……溢れるウ……！

「よし、決まった所で行こうか。後、念のため全サーヴァントを集めて召喚を行うから藤丸君はレオニダス王を呼んできて欲しい。本造院君は、そのままお二人と一緒に召喚場所へ」

オツスお願いしまゝす（追従）

〈準備、移動はカ……ツトオ！〉

「では、本造院君、頼むよ」

〈頷いて手元の虹色の石に視線を向ける。それを目の前の魔法陣に放り込んでやれば、巻き起こる空気の流れ。力の奔流。それらが一点に集中し……一つの輝きとなって現れる。

さてセイントグラスは……セイバー！ ここは一発、ジークフリートさんでも引いて全体宝具祭りでもしねえか！ すっぺすっぺ！

「……うん。僕を呼ぶなら君の方だと思ってたよ。改めて、シユヴァリエ・デオンだ。君の剣となり、盾となるよ」

あつ、そういえばデオン君ちゃんもセイバーでしたね……（ド忘れ）  
オルレアンでの実質的なラスボスが味方になってくれました。とはいえ改造霊基のドラグーン・セイバーの力とかは有してないノーマルなデオン君ちゃんです。タンク役ですね。

「げえっ!? あの凶悪セイバー!?!」

「……それに関しては忘れてくれないか、座に刻む程の、その……黒歴史でね」

それはデオン君ちゃんにとっても黒歴史なんすねえ〜（興味津々）  
まあでも過去は過去ですから、切り替えていきましよう！（さわやかマスター）

＜貴方は一步前に出て、手を差し出した。コレから自分と戦ってくれる頼もしいサーヴァントに、初めの挨拶をと。その手を見つめ、デオンは華やかに笑った。

「——うん。これからよろしく。僕のマスター」

デオン君ちゃんに『僕のマスター』とか言われたら女の子になっちゃやう！（直球） いかんいかん、私はノンケノンケ。とはいえデオン君ちゃん相手なら、ノンケでも……許される気がします、色々（クソ失礼）

「そちらに居る二人は、君のサーヴァント、だね」

「はい。シュヴァリエ・デオン様。オルレアンで烈火の如く猛威を振るった貴方がお味方に付くのであれば、心強く」

「よろしくお願いします」

早速、ホモ君のサーヴァント同士で交流してます。絵柄が華やかですなあ。でも一人だけ男子……多分男子が居るんですけど、全員女性に見えます。やっぱり（男女の性別の垣根なんて）壊れてるじゃないか。

＜デオンは問題なくカルデアに馴染んでくれそうだ。そう思い、続いて藤丸と、そのサーヴァント達に報告しようとしたところで……召喚を行っていた部屋に、ダ・ヴィンチが飛び込んで来た。

「ほんわか召喚後の紹介タイムに邪魔してごめんね！ でも緊急事態なんだ！」

「レオナルド……分かってるなら空気を読みなよ」

「いいや読まない！ コレから稼働する予定の私の工房、そこで扱う予定の品物にとんでもないケチが付いたんだよ！ その為にメドウーサに連絡頼んだってのに！ みんなで楽しそうなおこととしてえ！」

めっちゃ羨ましそうにするやん……って、待ってダ・ヴィンチちゃん工房にケチが付いたって……？　なんか、聞き覚えがある様な。

「はあ？」

「私の……私のモナ・リザが、誰かに複製されているのさ！　しかも売りに出す前に！」

……待って!?(戦慄)

今回はここまですになります。ご視聴、ありがとうございました……  
拠点フェイズの霊圧が消えた……!?

## 贗作逆襲画廊 ルーブル その一

皆さんこんにちは、ノンケ（ステラアアアアアア！）です。周回到に彼を使えないの私だけじゃないと思うんですよね……マジで。

前回は、デオン君ちゃんの召喚も終わり、さてここからデオン君ちゃんと交流を深めて行こうかなあ？ とか思ってたらとんでもない案件が飛び込んできました。い、いや落ち着くんだ私……見覚えのある導入ではあるが、まだそうと決まった訳じゃないですしおすし（震え声）

「はあ!？」

＜信じられない発言が二つほど飛び出した。先ず……モナ・リザを売り出すとは一体どういう事なのか。そして、それを売り出す前に贗作が出てきた、と言う発言は更に謎も謎だ。思わず立香と顔を見合わせた。

「え、えつと……ダ・ヴィンチ様。そのモナ・リザ、というのは、その……」

「当然！ 私が描いたモナ・リザだとも！ カルデアのマスター君達の生活の彩になって序に稼げればなあ、なんて思って暇つぶしに書いていたものだ」

「おい、誰か其処のサボり魔技術顧問をシバキ回してくれ」

ロマニお怒りで草も生えない。ロマニの無表情真顔なんて初めて見ました。なんならほんへでも一遍も出てきた事ないスーパーレアナ表情ではないでしょうか。コワイ！

「……で、そのモナ・リザが模倣されたのが、どうして緊急事態なんだいう？」

「冷静に考えて見なよ！ 私、まだこの事は誰にも知らせてなかったし、なんなら知る切欠すら存在しないだろう？ で、それを踏まえて……贗作なんて、だれが書いたんだい？」

……言われてみるとめっちゃ怖くない？（震え声）ほんへでは普通に売り出されてからこの騒動は起きましたけど、今回はまだ売り出す前どころか情報すら無し。めっちゃ情報を引き出されてるじゃない

いか（戦慄）

「……カルデアのセキュリティを突破してきた相手が居て、それが態々君の贗作を!」

「言い方にちよつとトゲがある気がするよロマニ……兎も角、私個人としても大変遺憾だけでも、この技術顧問としては遺憾どころの騒ぎじゃない。コレはれっきとした宣戦布告だよ」

「カルデアなど、この程度。とその贗作にメッセージでも込めているのだろうか。特異点が終つてようやく、少し一息入れられると思つたタイミングで、まさかの事態だった。」

「という事で、はい。ここまで来てほぼ確定かと思われませんが、イベントが発生しました。導入からみて恐らくは『ダ・ヴィンチちゃん』と七人の贗作英霊』と見て間違いないでしょう。なお今回は相当シリアスな導入から始まつてしまいました。」

「……これは、見過ごしておけないね。藤丸君、本造院君」

「はいー」

「理解してます。黒幕を突き止めりやいいんですね。」

「了解しました。相手を全員ぶつ飛ばすんですね。」

「ホモ君が血気盛ん過ぎないか？ どっち選んでも大して変わりませんが、まだマシンな上の選択肢を選んでいきましょうか……あ、間違えちゃった（凡ミス）」

「いや、いや最終的にそうなるかもしれないけど……ちよつと血気盛ん過ぎないかい？」

「……なんというか、手のかかるマスターの所に呼ばれてしまったようだね」

「すいまへん……（号泣） そんなつもりは無かったんです……とはいえやってしまった事はもうどうにもならないのでこのままごり押ししていきましょう。ヘーキヘーキ、大丈夫だから！（マイナーチェンジ）」

「兎に角、だ。二人共、早速だが新しい味方と共に捜査を開始して欲しい。カルデアに直接干渉してくる、というのは尋常の事じゃない。相手方に余程強力なキヤスタークラスでも居るか、それともここに繋が

る抜け道の様なものでもあるのか……可能性は無数だ」

「ロマニの表情は深刻だ。当然だろう、カルデアは自分達の本丸だ。そこに直接仕掛けて来られてしまつては自分達に休む暇など存在しない。」

「特異点なのか、それとももつと別の何処かなのか……人類史を焼き払った何者かが直接刺客を放ってきたのかもしれない。それらを調査し、此度の異変と……まあ、序でいいからモナ・リザの贋作作成をやめさせてくれ」

「了解の声は、綺麗に揃つて。カルデアの召喚部屋に響き渡つた。」

さて、そんなこんなで早速イベントスタートな訳ですが……そもそも贋作英霊イベントはエミヤさんの眼力あつてこそ話が進む展開だったと思うんですけどその辺りはどうするんですかね……（一寸先は闇）

「——召喚部屋から、とりあえず食堂に場所を移し、先ずは件の贋作と真作を見てみる事になった。最初の手がかりなのだ、それを見なければ始まらない。という事で、テーブルの上に置かれた二つを見比べてみたのだが……」

「……で、全く違いが無いように見えるけど？」

「いやある！ 確かに贋作の出来が良いのは認める。けれども……両者にはそれだけじゃない明確な違いがあるのさ！」

「ふーん？」

「ロマニ兄貴が全く興味を示して無くて草生えますよ！ まあほんへでも大抵こんな態度だったし、だからっていつてどうでも良いです的な態度は止してくれ（お願い） これでもれっきとしたカルデアの危機なんだよなあ……」

「で、その違いって？」

「どっちが偽物かなんて粉々にして成分を調べりゃわかるのでは？」

「芸術になんてことを……下なんぞ選ぼうもんならダ・ヴィンチちゃんとの間に埋めがたい溝が出来ると思うので流石にNG。」

「本造院君はノリが良くていいねえ。宜しい、その疑問に答えま



しょう……とはいえ単純な事なだけどね？」

「ダ・ヴィンチちゃんが、絵の一方を撫で、もう一方をそつと掴んだ。そして、その持った方の絵を、此方に差し出して来た。その絵をじっくり見ても、彼女が撫でた方の絵と見比べてみても、そんな単純な違いはあるように見えないが……」

「熱意の差さ。私の、この本物の絵に熱意が籠っていない訳じゃないが……此方の絵には私ですら疾うに失ってしまった『若い熱意』が……ある。しかも、そっくりなように見えて使われている技法は全て違うもの。頂点を越えてやる、という気高い『飢え』もあるね」

「『飢え』……ですか？」

「そうとも、マシユちゃん。人間の最も凄まじい激情の一つ。頂に上った者では決して得られない感情でもある。私も、芸術家としてはある程度まで極めてしまった人間だ。当然ながらそれを得る事は出来ない」

なるほど、ダ・ヴィンチちゃんがこの辺りの解説役をやるみたいですね。ほんへでも出来ない事はないんですけど、エミヤさんの方が贋作に詳しいからね、適材適所って言葉もあるし仕方ないね。

「机に置かれた絵……贋作の方を、何処か優しく、贋作だというのに、なぜか愛おしく扱ってすら居る様に見えた。」

「……私なりの分析だけどね。コレを描いた人物の熱意は、凄まじいものだ。清々しい程にね。贋作を作られたというのに余り腹も立たない。寧ろ、ここまで私の絵に真剣に取り組んでくれたんだ、ちよつと嬉しくすら思える」

「レオナルド、君は自分で解決して欲しいと言ったのにこの贋作問題に真面目に取り組む気があるのか」

「あるともロマニ。芸術家としては兎も角、工房の店主としては品物をパクられるというのはあまりいい気持ちはしないからね。という事で、私的にはこの贋作を描いた犯人は、真作というものに執着にも近い何かを抱いている相手、だと思おうよ？」

めつちや的確で草あ！ 今回の犯人って一言で表すと真作コンプレックスですからね。しょうがないね……はっ、まさか犯人は案内人

役としての任をハブられたエミヤさん!?(驚愕) そんな訳ないじゃん(真顔)

「成程、真作に対して、何かしらの執念を抱いている者ですか……」  
「あまりにも特殊、ですね。普通ならそっくりの贋作を描いて巨万の富を得る、と言ったような事を考えるのではないのでしょうか」

「芸術家の生み出した作品は、それこそ誰もが手を伸ばしたくなる様な輝きに満ちている。それを真似しようというのではなく、越えようとする。同じ土俵で。あまりにも道理に合わないと言え、その通りだ。」

「もしかして同じ芸術家系サーヴァント?」

「もしかして同じ発明家系サーヴァント?」

「どうして発明家が絵を描くんだ脳味噌万能の人かよ(罵倒) 万能の天才なんて一人で十分です。という事で、ここは的外れでも芸術家系サーヴァントを選んでおきましょう。ワンチャンどこぞの腐れ改造好きサーヴァントとかが黒幕かもしれませんし。」

「いや、それは無いね。芸術家なら、自分の中のモノを、オリジナリティとして表現すると思う。私がそう保証するとも」

「まあ、芸術家としては君一流だからね。その辺りは信用するけど……じゃあ誰なんだい?」

「恐らくは、芸術にはむしろ疎い人間かもしれないね。こんな正気の沙汰とは思えない事を平然とやってのけているんだから。やろうと思ったら一直線、だと思う。相当な激情家じゃないかな?」

「凄いや冷静に分析されてっついでいよいよ草が枯れて来ました。黒い子めつちや顔赤くなつてそう。」

「犯人像は見えたけど……その犯人像に当てはまる人物を、どうやって、何処で探すのかも分かってないんだけど、その辺りは? レオナルド」

「あー……いやー、この真作の方がいつの間にか盗まれてたらしい、つて所までは突き止めたんだけど、それ以上は……ね?」

「それじゃどうしようもないんだけど!?!」

「再びずっこけた。素晴らしい芸術家らしい分析からの、万能の人

らしからぬまさかの答え。結局は贋作の出所を探るための重要な情報等は特にないという……振出しに戻ったのか、そう思った時だった。

「そういう人、最近見かけた気がするんだけど」

「……私も、そういう人物に覚えがあるよ」

つと、ここで藤丸君とデオン君ちゃんが発言。藤丸君は兎も角、デオン君ちゃんは、まあお察しですよ。というか、会った事がある人だったら、この人物像を聞いて、思い浮かばない方がちよつと残念と  
言うか……

「本当かい!？」

「凄いです先輩！ デオンさんも！ 犯人像から候補を割り出すなんて！」

「フオウフオウ！」

「全員から喝采を受ける二人だが……その表情は、なんとなく微妙なものだ。」

「だって……」

「ちよつと前に、戦つてた相手だし……」

「二竜の魔女、だよねそれ」

「……皆が『あつ……』みたいな顔したところで今回はここまで。ご  
視聴、ありがとうございます。」

## 贗作逆襲画廊 ルーブル その二

皆さんこんにちは、ノンケ（卵おじさん）です。夏イベの扉の下り面白かったですね。

前はダ・ヴィンチちゃんのあまりにも的確な解析に、バリツバリ当て嵌まった人が割とあっさり特定されて草生えしました。もうちよつと隠す努力を、しよう！

「良く考えてみれば、そうだよね……真作へのこだわり、というより本物へのこだわりと考えると、凄いしつくり来る感じがする。そして」「二人の証言を頼りに探ってみれば、ドンピシャ。オルレアンから特異点反応だ。まさか修復した筈の特異点と同じ場所に拠点を構えるとはね。灯台下暗しとはこの事か」

さて、画面はカルデア司令部。オルレアンの辺りにどうやら邪ンヌは拠点を構えている模様です。お前、そういう……隠れ方だったのか。

「よし、此方に忍び込んだ方法は分からないにしても。向こうの場所が特定できれば根元を断つことは出来るだろうねえ」

「という事で、余り休息できていない状態で申し訳ないけれど、これから君達にはこの微小特異点の修復に向かってもらう。向こうが此方に侵入してきている以上は、この特異点を見過ごす事も出来ないし……特異点が成立しているという事は……」

「その特異点を成立させるだけの力……もしかすれば、オルレアンで回収した、聖杯と同質の物が存在するかもしれない、という事だろう。」

最終的にすべて倒せばいいのだから、それどこぞのダークヒーローも言ってるから。さて今回の特異点ですが、ほんへ通りなら出てくるサーヴァントは分かっています。しかしながら導入から出てくる変ってしまった今回の特異点ではその通りに行くとは限らないかもしれません。警戒していきましょう。

それと、今回の特異点でセイバー、デオン君ちゃんの扱い方をキツチリ学んでいきたいと思えます。ある意味デオン君ちゃんの試運転

とも言えますね。

「向こうの思惑は分からないが、その辺りは特異点内で探るなりすればいいだろう。それと一切無抵抗で此方に降参する程、あの黒い聖女が聞き訳が良いとは思えない」

「抵抗がある、と思った方が良さだろうね。で、君達の役目はその抵抗を突破し、特異点を成立させている原因を回収してくる事！ オツケーかな？」

寧ろ抵抗が無い方がおかしくないですか？ 可笑しいですよねえ？（邪ン又履修勢並感） ゴムマリ位ゴインゴイン反発してくるのが目に見えますしワンチャンサッカー部並みの邪ンヌの一転攻勢とか来るかもしれせん。

「オルレアンの時とは明らかに特異点としての規模が違うけど、決して油断しないように」

「では諸君。私の工房とカルデアの為に、頑張ってくれたまえ！」

「優先順位が逆だよレオナルド！」

「大丈夫だろうか。そんな表情をしている傍らの新入りサーヴァントに、貴方は大丈夫だと思いたい、とどうにもしつかりとしない返事を返したのだった。」

うーんデオン君ちゃんのチベスナ顔とか貴重ですけど、イベント特異点ならではのという事で。イベント特異点で終始シリアスなんて寧ろ珍しいくらいなんだよなあ……けどCCCはちゃんと終始シリアスやってた気がするので皆、やろう！（提案）

〈アンサモンプログラムスタート 霊子変換を 開始します〉

〈レイシフトまで〉

〈3〉

〈2〉

〈1〉

〈全行程 クリア グランドオーダー 実証を 開始します〉

〈移動とローディングはカ……ットオ！〉

という事で到着しましたが……眼の前の景色はまさに博物館そのものですね。沢山絵が並んでいます。そしてどの絵も当然のように何処かで見えた事がある気がする名画ばかりでございます。

「——凄いです。沢山の絵が、壁にずらりと」

「フオウフオウ！」

「これが美術館、と言う奴ですか！ サーヴァントとしての知識では知っていましたがかここまで絵がずらりと並んでいると、正に壮观！」

〱レオニダス王が少し珍しそうに周りを見回しているが、それは立香も貴方も同じ事だった。廊下に一定間隔で置かれている絵が、それだけでも見ている価値がありそうな整然とした美しさを生み出している。

『どうやら、美術館を横している場所のようだね。しかしそれにしても……そこにある絵って、僕の見間違えじゃなければ……』

『名画ばかり。でもこんな特異点に本物の名画が集まっていると考える方が不自然だと思うから……恐らく全てカルデアにあるモナ・リザと同じ、全てが贋作だと思う。まあ良くここまで描いたものだよ』

オルタの真作コンプレックスは筆舌にし難いから……とはいえ、プレイヤーとしてもほんへとそっくりなこの美術館に置かれてる全てが彼女の書いた贋作だと考えると……ひえっ（ホモは怖がり）

「……なんというか、凄まじいね。ここまで来ると」

「貴方が元仕えていた方では？」

「ノーコメントで頼むよ、メドゥーサさん」

オルレアンとカルデアのデオン君ちゃんは厳密には別人だからね。とはいえオルレアンの時の記録で見事オルタの事を突き止めたんですけど、その辺りどうなんですかデオン君ちゃん！（追撃）

「兎も角、ここは敵地です。先ずは周りの安全を確保する所からか！ 式部殿、陣地の設置は可能そうですかな！」

「……なんとか、ですね。簡単なものになってしまいますが、カルデアとの通信を安定させる程度のものであれば」

〱という事で、先ずは香子の設置する陣地を完成させる。探索はそ

れから。そう思って周辺を見回した貴方の目に……人影が写った。それも、今の自分達が居る場所とは、離れた所に立つ、何者かの。

おつ、早速初遭遇ですね。さてさて、一体誰がお出迎えをしてくれるのか。確かほんへでは最初に現れたのは例の少年征服王でしたが……？

「——おやおや、予想より圧倒的に早い到着よなあ……カルデアご一行殿？」

「誰だ！」

〈反対側に警戒を向けていた立香が、振り向きつつ叫ぶ。そこには、涼やかな武人が立っていた。武人、そう判断したのはその身に纏う陣羽織でもなければ、当然後ろで括られた長髪でもない……その、手に構える長い得物、異様に長い刀だった。

「ふむ。ここに来たという事は、あの挑戦状には気付かれたようだ……そうとなれば、問われれば名乗るとも」

……マジでエ!? (戦慄) 彼が、ここで相手とかマズいですよクオレハ……(絶望) ほんへと初代履修済みマスターならば、もしかしたらこの時点であつ(察し)となつて居るかもしれません。私はなつてます。

「アサシン。そうとだけ呼んでもらおうか。生憎と、我が身は亡霊に近い存在。名乗る名前も存在しない」

「アサシンが態々姿を現して戦いに出向くとはね。僕らを馬鹿にしているのか、それとも」

「いいや? 小馬鹿にしているつもりもなければ、虚偽を話しているつもりも無い。ただ拙者は忍んでの殺しなどは得意では無くてなあ……尋常の果し合いの方が、まだ使い物になるというもの」

さあ仮称アサシン、構えも取らずその長い刀を担いでいます。舐めてる? 違います(断定) そもそも、隣のデオン君ちゃんの表情が早速ガチガチもガチなあたり、もう泣きたいですね。唯一の希望、『イベント特有のギャグ補正』とかありません。どうやらガチモードらしいです。つらい。

「そうだろうね……僕が君に挑んでも、勝てる景色が明確に思い浮か

ばないよ」

「そう言うな。西洋の棒振りにとて、術理はあるのであろう？ 同僚より学んだよ」

◇デオンが、自分の前に出て露骨に警戒している。間違いない、目の前の和装の男は間違いなく、強敵だろう。

「——マスター、下がってくれ。最初の任務がこんな強敵相手とは、まったく私もツキが無い。メドゥーサさんは式部さんの護衛を」

「マシユは式部さんを。レオニダス、お願い！」

「分かりました！」

「承知！」

さて藤丸君のコールに応え、FGOの超強力タンクサーヴァントが揃いました。しかし目の前の男相手には、この二人でも若干の不安が残りますねえ！（半ギレ）

「ふむ、相手は二人か。拙者が一人で抜けるには、些かと厳しいか」

『良し！ 流石にあのシュヴァリエ・デオンとレオニダス王を相手じゃ此方を叩く事も出来ないだろう。取り敢えず今の内に紫式部さん！ 陣地の構築を！』

「わ、分かりました！」

◇そうして陣を構築し始める香子を、涼やかな男は見つめている。目の前の二人ではなく。それは、まるで目の前の二人を抜けた後の事を、考えているような。

「よそ見をしている余裕があるなら、向かってきたらどうだい」

「ですが、そう容易くは抜かせませんよ！」

「ふむ……そうだなあ。目の前の相手から視線を逸らすのは、道理に合わぬ。それも、その相手が築く壁が、尋常を遥かに超えた固さであれば余計に。であればその守り——」

正直、トップクラスの強敵ですよ。ベスト出せるようにね、とか言われずともこの環境……平地で、ある程度狭い空間なら間違いなく彼はベストを見せてくると思います（天下無双）

「——力づくでこじ開けようか」

このアサシンなら、多分。



今回はここまで、視聴ありがとうございました。

## 贗作逆襲画廊 ルーブル その三

皆様こんにちは。ノンケ（女吸血鬼）です。

前回は……邪ンヌがなぜかイベント特異点だというのに全力です。まさかのアサシン佐々木小次郎を投入して来ました。こういう狭くて平地で、剣の間合いが最大限生かせそうな場所に彼を投入しちゃう……ダメだろ！（必死）もう正直負ける光景が見え始めてるんだよね、そのガチ具合、私は理解に苦しむな。

「マシユ！ 香子さんの警護を！」

〱万が一、後ろから不意を打たれば致命的だ。メドゥーサとマシユを香子と共に後ろに残し、貴方は目の前のアサシンに向き直った。

さて、此方セイバー、シュヴァリエ・デオ。ランサー、レオニダス一世。何方も人類史に燦々と輝くエースクラスのサーヴァント。そんな二人が迎え撃つはアサシン、佐々木小次郎。初代でもチートと名高いサーヴァントです。尚初代連中は皆チートです。

で、肝心のミッション内容は、『一定時間の耐久』。どうやら相手はこの戦闘では倒せない強敵の様ですね。

「間合いは向こうが上だね」

「元々から攻め込む積りも無し、とはいえ間合いの有利は攻防何方にも影響を与えません。油断は出来ません」

「それを言うのであれば、其方は二人で数の有利ではないか……もつとも、その程度で臆する程、青いつもりも無いが……では、参ろうか？」

〱そう言っつて、一步先に踏み出したのはアサシン。長い太刀一本をゆらりと揺らし、まるで散歩でもするかのような軽い足取りで、一步、また一步と、二人との距離を詰めていく。

この狭く、しかしながら刀を振るには問題は無い、しかも平地の一本道。全てが小次郎の為に詭えられたかのような場所ですね、改めて見ると。正直二対一でも何の問題も無いね（レ）ここは藤丸君との連携もキモになりそうです。

「——レオニダス！ 式部さんが準備を整えるまで耐えて！」

＜＜デオン、レオニダスに合わせて行動してくれ！

＜＜デオン、レオニダスの後ろで機を伺ってくれ！

とか言ったら連携の選択肢が超スピード!? 流石FGORPG、プレイヤーの思考を読み切ってますね……（なろう特有の勘違い）つまりこれはなろう実況という新しい実況の形だった可能性が……？

とりあえず、選択肢が一番下を選んでおきました。レオニダス王はガッツリ前衛タイプですし、盾を生かすにはやっぱり前の方が良いと思うので。

「……ちよつとマスターっぽいんじゃないか、俺ら！」

＜＜パシツと乾いた音が立香と自分の掌から鳴る。流星にオルレアンを経て、何も学んでなかった訳ではない。マスターとしての指示の仕方、多少は分かったのだ。

「了解、マスター！」

スイッチがしなやかで草生えますわ。恐らくはレオニダス王が盾で凌ぎ、デオン君ちゃんが後ろで一撃を狙う、と言った形ですね。理想的な連携が出来てうれしいダルルオ!? 嬉しいです……（素直）

「——成程、聞いていたほどにマスターが未熟では無いな。これは勞しそうな事だ！」

＜＜レオニダスが盾を構えたその瞬間には、その表面に剣閃と火花が走った。速い。全くもって知覚することは出来ない……しかしそれを見事防いだレオニダスの防御の巧みさも劣るものだとは言えないが、それでも。

「っ！」

「レオニダス！」

「問題はありません、っ！ デオン殿はっ！ 己の役割に集中を！」

＜＜言葉を交わす間に、三度。火花が散る。アサシンの攻勢は苛烈だ。その見た目から想像も出来ない程に、連続、一切の隙無し、途切れる暇も無く！

音がジャンジャカ、凄い金属音が聞こえてるんですけど……アサシ

ンの出している音じゃないんだよなあ。この音出しているのはジャックちゃんだけってゆったでしょ（ネットスラング） ちゃんと決まりを守って？

「その首、既に二度は落そうと仕掛けたが……しかしその盾の守りの硬さときたら、最早人のそれでは無い、まるで砦。一人で切り崩そうとなると……」

「集中していて良いのかいー!」

〈盾の守りに一瞬気を取られた、そこを見逃さずにレオニダスの脇をすり抜ける様に、デオンの鋭い突きがアサシンに向けて伸びるが……アサシンの一撃が即座に迎撃し、突きの軌道はあらぬ方向に。その直後の反撃は、デオンが一步下がって回避する。

「つちいー!」

「全く、一瞬の隙も許されぬ。いやはや、この守りを抜くには相当に骨が折れるか」

「隙ありいー!」

〈裂帛の気合と共に払われた槍の穂先、それも既に間合いを取っていたアサシンには一步届かず……アサシンは、やはり相当な使い手だ。二対一で以て当たっても、反撃は決まらなず攻め手には欠ける。

まあタンク二人とバリバリのアタッカー一人ですからねえ、そりゃあ反撃もそうそう当たらないとは思いますが……しかし、明らかに有利だと思える点がありますねえ!

「……此方は常に全力、されど其方は寧ろ余裕すら保って防衛している。流石にサーヴァントは人の枠に収まらぬ存在とはいえ、何時までも戦い続けられるものではない」

「消耗は、そちらの方が速いとは思いますが」

「このまま攻め続けるのであれば、そちらの方が僕らとしては都合がいい」

表面上互角でも、こっちには只管専守な上二人で手分け出来るというアドバンテージがあつて、長期戦ともなれば絶大な余裕があります。アサシンは確かに強いですが……戦いは数だよ兄貴、だゾ。と言ってもその不利を覆す程のチート技がまだ出てないのが気がかり

ですが

「流れは此方にある。だがそれでも、アサシンに焦りも、必死さも見られない。」

「であれば退かせてもらおうか……ここで何方かが潰えるまで戦うのも一興なれど、流石に主への義理立ても果たさぬままに、というのは雅ではない」

「そして……その飄々としたそのままに、アサシンは此方にゆつくりと背を向けたのだ。」

……つと、その大技が出る前にどうやら引き返してくれるようですね。危ねえ、本気出されたら間違いなく一人は腕ぎ取っていかれますからね。

「——ああ、追ってきてても構わんぞ。その代わり………続いては我が秘奥も全て惜しみなく投じる積りだ。覚悟を決めてくるのだな」

しかし、追うことは出来なかった。あのアサシン相手に、迂闊な追撃は強烈な痛手になるだろうと。未だ素人マスターの自分でも理解するのは容易かった。

背中の傷は剣士の恥だ（傷を負わせないようにすれば問題無し）いやあ大剣豪の迫力というモノをかみまみた気がします。失礼、かみまみたが出てしまいました。お詫びして訂正いたします。申し訳ございません。

「……日本のサーヴァント、だろうね。あの剣は」

「ええ、しかし我々ではかのサーヴァントが何者かは……」

「分かるよ。あの長い剣と、異常な強さ。漸く確信できた。」

「分かるよ。俺もサツパリわがんね！」

下は完全に脳みそが溶けているのでNG。幾ら脳筋タイプとは言えだからって脳味噌関係完全に無能、とかなるのは流石に避けたいです。

「分かるのかい、マスター」

「——ああ、日本人なら一度は自分の国の最強の剣士、として挙げる人だよ」

「最強の剣士……ですと？」

「異様に長い剣、物干し竿を携えた巖流の剣士。佐々木小次郎、だと思  
う」

「——佐々木小次郎。宮本武蔵と並び、天下に名高い剣豪と称され  
る一人。あの剣術の冴えも頷けるといふもの。クラスがアサシンな  
のは気になったが、そんなクラスなど関係ない程に強かった。」

「——ササキ、成程。日本の伝説の剣豪、ですか」

「我が国においては、剣聖と呼ばれてもおかしくない程の剣客、でござ  
いますね」

「そんな方がアサシンというクラスになっているのは、どうしてなん  
でしょうか」

「フオウフオーウ！」

あ、お三方お疲れ様。フオウ君も。

「お疲れ様。そっちは大丈夫だった？」

「はい、先輩。こちらには、そもそも敵が出てこなかったの……」

「出てこなかった？」

「はい。フオウさんなど、暇そうにあくびなどしてらっしゃいました」

呑気ですねー（RMNKNTY）

こつちに集中してたからそっちはあまり見れなかったけど、敵が一  
人も出てこなかったとは、こつちとは大分空気が違います。雑魚エネ  
ミーでも出て来ない仕様なんでしょうか。

「とはいえ此方としてはありがたかったです。無事に陣地の設営、  
完了しました」

「ダ・ヴィンチ。通信状況はどうですか？」

『実に良好だとも！ ベースを起点に、少なくともその特異点じゃ絶  
対に通信は途切れないよ。安心してくれたまえ』

通信が途切れないのは（探索が快適で）気持ちよくなっちゃう……  
ヤバイヤバイ……しかしコレでようやくこの特異点で活動する準備  
が整っただけ、とも言えます。油断せず、確実にクリアしていきたい  
と思います。

と言った所で今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。

## 贗作逆襲画廊 ルーブル その四

皆さんこんにちは、ノンケ（マリーガチ強火勢くアサシンく）です。今回は、漸くこの特異点を探索する準備を整えて、いよいよ探索を開始です。でも絶対にTUBAME殺しの大剣豪には会いたくないので慎重に行きましょう（敗北主義者） だってあんな強い相手に態々ぶつかる意味、あるんですか……？（電話猫）

「——フオウ、フオーウ」

＜楽しそうに、フオウが美術館の廊下を進む。オルレアンの時も、こうして特異点を闊歩していたのだろうか。しかし、フオウ程に、今の状況は楽しむことは出来そうにない。＞

『……回廊のような形状、で、窓から中心に見えるアレは、多分』

『中央、ガラスのピラミッド。カルデアのデータベースを探るまでも無く、あんなものが置いてある場所は、一つしか知らないよ』

＜ルーブル。フランスに存在する美術館。フランスに所縁のある竜の魔女が作り出した特異点として相応しい場所だろう。＞

『ここがかの美術館を模した特異点だとするなら、ここはシュリー翼、そしてこの先はドウノン翼、と呼ばれるエリアだね』

「ドクター、何か反応などは見られないでしょうか」

『それがその辺りはキツチリ対策されてあるみたいで……僕たちのサーチでは、有効な反応を見つけないことは出来ていない。君達の位置が確認できる位だ』

カルデアに小次郎さん侵入させたり、こうしてカルデアからの観測を弾くような特異点を構築してみたりと……間違いなく邪ンヌには相当なキャスターが味方として付いていますね。乙女思考で召喚したほんへとは違って、大分バランスを考えている（＋114514点）  
「となれば妨害をしているのは恐らくは……私と同じキャスターだと思われませう」

「アレだけの強さのアサシンに加え、カルデアの観測を妨害する腕を持つキャスター、ですか。二人だけでも、十分脅威ですね」

『……二人だけしかない、とは思えないね』

〈佐々木小次郎の言っていた事を思い出す。自分の役目ではない。撃滅は他に任せる。キャスターは何方かといえれば直接戦うタイプではない、と香子を見て知っている。となれば他にも何かしら別クラスのサーヴァントが居るのは、容易に想像できる。

「少なくとも、向こうの数は三騎以上は居る、と考えた方が良いかと」  
「アレだけのアサシンが哨戒……となるとやはりより戦闘に特化した敵がいる」

〈デオンと同じ最優のセイバー、とかかな。

〈メドゥーサみたいに、強いライダーかも！

露骨にサーヴァントを褒めていく……いやらしい……（風評被害）  
とはいえ何方の好感度を上げていくのかで色々変わって来るでしょうし、ここは慎重にひゃあ我慢できねえ新入りのデオン君ちゃんだあー！

「ふふ、最優か。そう言っただけで貰えるとうれしいよ」

「確かに、白兵戦においては相当に強いセイバーであれば殲滅を任せられても不思議ではなさそうですが……私は前衛としては少々実力不足になるかもしれません」

「メドゥーサ様も白兵戦は、相当の腕だと思いますが」

「私の知っているセイバーと比べれば、私の白兵戦能力など霞みますよ」

そのセイバーは間違いなく白兵戦能力においてはトップクラスの怪物だから比べる必要ないから……（良心）何であんな強いんすかね〜も〜（経験済み）そもそもメドゥーサさんがタイマンで敵わない方がおかしいからあんまり気にしないで、どうぞ（やさしみ）  
「メドゥーサ殿は、ライダーとしての機動力を生かした遊撃の方が似合っているかと！」

「この狭い館内では遊撃も何も無いとは思いますが？」  
「そうでもないさ。キッチリ内部構造を把握してからであれば……つと」

〈先頭を行っていたデオンの足が止まる。少し微笑んでいた表情を引き締め、睨みつける先には……スケルトンが居る。しかし、冬木で



見たそれとは、些か趣が違う。盾や長槍、紫の衣装などを身に纏って……変に豪華。それらがゆらりゆらりと、少し先の廊下をうろついている。

『ふむ、シユリ―翼のエリアには居なかつたけども……?』

「アレは警備員のつもりなのかな?」

「さあ……しかし、普通のスケルトンと違う以上は警戒した方が良かった」

ハントクエストで出てくるスケルトンキングとも違いますね、あのスケルトン。見た事がある気はするんですけど……何処だったか。俺の記憶は何時もガバガバ（自虐）

「……通過するまではやり過ぎした方が良いかな」

「確かに、余計なリスクは負わずに済むのであればそれが一番ですね」  
「ですが今の内に相手の戦力を減らしておくのも、間違いとは言えないかと」

〈目の前の敵に戦いを仕掛けるか、それともやり過ぎして、安全に抜けるか……何方にせよ必ずある程度のリスクを負う事にはなるだろう。〉

「私はアレの実力の確認の為に一度は当たっておくのも悪くは無いと思いますが!」

「確かに戦力の把握は重要だからね、レオニダス王の言にも一理ある」  
「ですが、あまり悪戯に戦いを仕掛けるのも、如何なものなのでしょう……」

積極案三、安定案三、でここまでで出遅れたホモ君に視線が向く、と。なるほどなるほど多数決でどっちに入れるかで変わるって所ですかね。はえ―責任重大……

『……まあ、何方になっても君に責任は無い、と思うよ? 多分だけども』

ダ・ヴィンチちゃん気休めありがとナス! さて、ここでどうするかによって、この先の難易度が変わると言った所でしようか。責任重大を遥かに超えてもう狂いそうですが頑張つてエンジョイプレイしたいです（極限の意思）

……さて、何方にするかですが。うーん、最近はお上品な上ばかり選んでましたし、久しぶりに蛮族染みた行動がしたくなってきましたねえー！（一時的狂気）下で行きましようか折角ですし！

〈ここは戦力を温存したいところだねえ。〉

〈サーチ&デストロイ、これ一択だろ。〉

「了解しました、では先鋒は私が勤めましようか。一気に殲滅します」  
「分かった、戦うんなら全力だ！ 行くよ、マシユ！」

「はい！ マスター！」

という事でこの美術館二度目の戦闘です。ここでの敵ではスケルトンも出てきましたが、そのままでは芸が無いと装いを新たにしたいのでしょうか。客を飽きさせない姿勢＋114514点。その熱意にこたえ、全力で殲滅して差し上げましよう（サイコパス）

〈最初に突っ込んだのはメドゥーサ。そのまま鎖の先の剣で二匹を串刺しにし足を止め、蹴りで彼方へと蹴り飛ばし、その反動で戻ってくる。お手本のようなヒット&アウェイ。〉

「エネミー、此方を察知！ 向かってきます！」

「レオニダスとマシユは防衛線を！」

「承知！」

〈その防衛線の後ろには、デオン、そしてその更に後ろには援護体勢を整えた香子が悠然と立つ。数は居るが、決して強いと言えるような相手ではないようだ。ならば、問題は無いだろう。〉

早速、四体くらいスケルトンが向かってきましたが、まあレオニダス王とマシユのガチ防御を抜ける訳も無くにんじんしりしりされてますね。おーいい格好だぜえ？（挑発）そしてメドゥーサさんの鎖で更に二体くらい首がポーン、と。良い格好だぜえ!?（挑発）

「……私の援護は、必要なさそうですね」

「二応私も加わって来ようかな。マスター、どうする？」

〈ああ、頼む。〉

〈メドゥーサが居るから大丈夫だと思おうよ。〉

実際メドゥーサさんを加えた藤丸君チームがゴリゴリ削って、もうスケルトン君達の数が悲しい事になってますしねえ。力の差の在り

方が当然すぎて難易度がナオキです……

「分かったよ。それなら僕はマスターの守りに集中しておこうかな」  
「えっと、私は一応援護をしておきますね……あ、でも、ちゃんとお味方に誤射しないように当てられるでしょうか、はわわわわ……！」

うん、やめておこうか香子さん。誤射したりしたら普通に気まずくなりそうだしね。コレからの関係を平和に保つ為にも、余計な事はしないに限る。これは賢いホモの選択。ホモは賢いからね、仕方ないね  
(強調)

「しかし、あのスケルトン達予想以上にあっけなかったというか……」  
「皆様が強い、という事ですよ。デオン様」

「いや、格好も、普通とは違ってたし。それだけだった、と切り捨ててしまえば、それまでだけど」

〳〵そういう間にも、既にスケルトン達はマシユの盾で二体殴殺されている。何体が応援に来ているようだがそれもあまり意味をなさず、増えたそばから削られていく。心配し過ぎではないのか？ と貴方は答えた。

「そうだと良いんだけど……」

まあ特別な格好とはいえ、スケルトンはスケルトンだった、という事でそこまで気にせずとも。それに邪ンヌって脳筋な所あるし、戦いは数だよ兄貴的な思考で兵隊を出している可能性も。まるでバーサーカーみたいな手してんな(戦略)

……ん？ バーサーカー……スケルトン……あつ(察し)

「……………」

〳〵その時だった。貴方達のいる廊下の、反対側の奥から鼓膜を突き破るような凄まじい方向が轟いたのは。それは純粹な……激昂の咆哮だった。

今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました……！

## 鷹作逆襲画廊 ルーブル その五

皆様こんにちは、ノンケ（羊飼）です。かなりブヒるよ！

前は、美術館探索。発見したスケルトン相手に、偶には蛮族選択肢でブチかましに行ってみましようか！ つて感じで行ったんですけれども……今は正直痛い後悔していたりしていません。あのスケルトン、漸く思い出したんですね。前回の最後辺りでなんですけど。

「――っ、後ろ!？」

「廊下の奥から……来ます、マスター!」

＜廊下の奥に、目を凝らす。闇の奥から、それよりも濃い、巨影が滲み出てきていた。間違いなく、スケルトンではないだろう。そして……理解した、アレは規格外。圧倒的な力を持ったサーヴァントだと。

あんな筋肉の塊をスケルトンと見間違えたらそいつは目が腐ってるんだよなあ……

「■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■!!!」

＜現れたその姿は……威容、という言葉が正に丁度当て嵌まった。黒い肌に、黄金の装飾。そして、両手に握られた大斧は、人が持つには大きすぎるが……その巨体には丁度に合う、設えられたかのよう。

あー、ですよねえ！ 自分の臣下がやられたならそりやお怒りもしますよねえ申し訳ありません！ コレを見てる皆様は、あつ……（察し）となつて居る事請け合いですよね。小次郎さんに加えて、もう一騎チートクラスのサーヴァントが……ねえくもく無理〜！

「あ、あのサーヴァントは……!?!」

「さっぱり分からないけど、一つだけ確信できるのは……間違いなく、彼はバーサーカークラスのサーヴァントだろうという事だね」

＜その足取りは次第に速く、力強く……貴方達へ向けて、突っ込んでくる。思わず、隣の立香と顔を見合わせた。

「――康友、コレはマズくないか?」





「香子さんは俺が守る！」

男が選ぶ選択肢？ 当然下だよなあ!?

「マスター……はいっ！」

「香子を背に庇い、貴方はバットを構えてスケルトンに相對する。未だ不明な点も多い自らの体、その底から、咆哮と共に額に熱を引きずり出す。オルレアンで、何となくコツは掴めている、戦えない事はない！」

「参ります！」

さー、鬼種の魔（覚醒）も使った所で、こつからはホモ君の操作に集中しましょう。相手はあのバーサーカーの召喚したスケルトンです、正体を知っていると、このスケさん相手にも油断は出来ません。「くつ、本造院殿、もう少しお待ちを！」

「もう少しでスケルトンを殲滅できますから……！」

急に現れて香子さんを困らせるなんて、そんな悪い兵隊には先生がお仕置をしたる！（とか気合入れてますけどそんなに面倒は）ないです。ちよつとAI君が目に見えて進化して、鯖より絶望的に劣る、だったのが鯖より圧倒的に劣る、位になっただけです。楽勝とはいかないっピ！（致命的な矛盾）

幸い鬼種の魔発動で、そこまで出力負けはしてませんから、こつやつてオオン！（応戦）打ち合う位は、できますねえ！ ホラホラ、とつととお仲間みたいに頭を差し出してホームランされるんだよ！

「っ、えいっ！」

……油断してたらホモ君の真後ろでスケルトン君が砕け散りました。香子さんの援護が無かったら死んでたんじゃないの？（震え声）

「マスター！ っ油断召されないよう！」

「香子の言葉に、気を引き締め直す。敵の数は二体減っただけだ。まだまだ居る。冬木で戦ったそれとは比べ物にならない程に強いスケルトンが。油断して居れば、無残にやられるのは此方だろう。」

当然だよなあ!? なので一気に叩き潰しに行きましょう。ここで日和って負けるのは流石に情けないので。じゃあ先ずはその肋骨か





ルトンは残り二体迄減らしました。此奴らを潰してしまえば香子さんも……待つて速い、動きが機敏、バーサーカー君待つて！助けて！待つて下さい！お願いします！　ワアアアアアアアアア!!!（発狂）

「させません！」

ガアン！（迫真）　いゝ音しましたよお、後藤さあん……マシユちゃん迫真のインターセプトありがとナス！

「遅くなりました！」

「オラア！　式部さんと康友から離れろお！」

レオニダス王と藤丸君も、スケルトンを粉碎しながら合流。これで、漸く全戦力。こっから一転攻勢、いっちゃんやいますか!?　やっちゃんやいましょうよ！

と言った所で今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。



まあ止まらないでしょうね。バーサーカーですし、良いでしょう。ここでバーサーカーを打ち倒せば、後が楽になります。強敵ですが、流石に負けはしないでしようし……やりましょうか！　じゃあ（敗北の味を）ぶち込んでや……ん……？　あれ、なんか、沢山足音が聞こえるんですが、気のせいですかね？

「……な、なんででしょう、この音」

「一つだけではありません、相当に……！　デオン殿！」

「方向は……奥からか」

◇デオンの声に視線を奥へと向ける。そこから現れたのは……通路を埋め尽くすように現れる、スケルトンの大群だった。先ほどの兵士と違う粗末な装備の者、更に豪華な者。その種類は千差万別だ。

わあキッツ！（素）　鬼みたいな物量で攻めてくるとか恥ずかしくないですか！（言い掛かり）　とか言ってるうちに物凄い勢いで雪崩れ込んで来そうで……カルデアには伝統的な戦い方が存在するんですが、皆様ご存知ですか？　それは……

「……………」

『た、た、た、た、た！』

◇◇退却——！

当たり前だよなあ!?　あんなバカみたいな数相手できる訳ないだろ！　全員回れ後ろで全力で後ろに突撃！　追いつかれたらロストですよ！　風よりも早く走るんだよあくするんだよ！

「シキブは私が抱えます！　全力で離脱を！」

「ご、ごめんなさいメドゥーサ様、ご迷惑をおかけいたします！」

「任せた！　マスターは私が！　舌を噛まないように気を付けてくれ！」

「先輩掴まって！　全力で離脱します！」

「殿……も必要なさそうですな！　ここは逃げるが勝ちでしょう！」

◇一種、理不尽なほどの数の暴力が一気に溢れ出す。アレに掴まれば、速攻であの世で過ごしている祖父や祖母の元送り届けて貰えるだろう。

寧ろ閻魔様の元への超特急、それ一。しかし、ギャグ調な雰囲気と

は裏腹に間違いないガチもガチな死の軍勢です。寧ろあれに追われている事が生きてる証拠だよ(意味☆味☆不☆明) でも来ないで♡(正論)

「くっ、兎に角設置してある陣の近くまで逃げ切って、そこから仕切り直そう!」

「賛成です! 流石に陣があるの無いとでは違うでしょうし!」

「しかしこの数相手では焼け石、に……?」

「ちよ!? メドウーサさんなんで動き留めてるんですか!? 香子さんも担いでる貴方が止まるのはちよつと、マズいですよ!」

「め、メドウーサさん!? どうして止まって!」

「……マシユ、どうやら、もう止まっても問題はないようですよ。一切を飲み込む無敵の軍勢という訳ではないようです」

「えっ……?」

「言われ、全員が後ろを振り向く。あのスケルトン達が、ドウノン翼と呼ばれているエリアから溢れ出してきた……と思われて居たのだが。アレだけの数の敵が、まるで影も形も残さず、何処かへと消えていたのだ。」

「……どうなってるんだ? アレだけの数が、唐突に……?」

「追いかけてくれば、此方に大打撃を叩き込めるのも難しくは無い筈。だというのに、アレだけの数を一斉に退かせるとは。道理に合いませんな」

「実際、ここらで結構疲弊させられる覚悟までしていたんですけれど……結構あっさり逃げ切れちゃったと言うか。あつけないというか。いや、戦いたかったわけではないんですけども。でも、本当に何処にも影も形もありません。バーサーカーも追って来てません。どうやら逃げ切ったようです。」

「わ、私達がこの……えつと……」

『シユリー翼、かい?』

「そ、そうですダ・ヴィンチ様。そこに入った時には、まるで霞の様に」  
「消えた、と香子は言う。追撃する機会だったというのに。普通なら自分達を侮っている、と貴方でも考えるだろうが。問題は、相手が

狂化され理性の薄れた狂戦士だ、という事だ。

「バーサーカーが、獲物を一旦諦める、という理性を持ち合わせている、という事でしようか？」

「そうは思わないね……となれば、道理に合わない行動をするのは、外因によるものだろう」

といっても、戦力が擦り減る前に逃げ出せたので実質的なセーフです（ガバ判定） 暫くは絶対に近寄ったりしませんけど（硬い意志）少なくとも、なにかしらの情報が出てからじゃないと戦いたくはないですなぁ！

『……出なかった、訳じゃなくて出られない、とか？』

「出られない？」

『あのバーサーカーはドウノン翼のエリアからは出られない。だからあの敵もシユリ―翼には雪崩れ込んでこない。単純だけど、魔術にはそういうシンプルな縛り、というか制限が意外にも多いんだ。クー・フリーンの犬のゲツシュの逸話とかね』

『まあ正確な理由は分からないけどね。一例だよ。あくまで』

槍兄貴のゲツシュは単純すぎるってそれ一番言われてるから……一つ目と二つ目を責めて組み合わせたゲツシュにして？

『まあ要するにピンチになれば仕切り直して逃げちゃえばオーケー！  
ってことなんだけど……』

「だからと言って、あの魔窟に無策で突入しても、また無事に済むとは思えない」

〈奥に視線を向けるデオン。一見すれば普通に綺麗な床といくつもの古びた絵が並んでいるだけのエリアだが、その実は死の軍勢の闊歩するバーサーカーの支配地であるのだ。〉

あの狭い廊下であの軍勢を相手にする、というのは〓死。アレを相手せず、バーサーカーだけを打ち倒すようなウルトラCを準備してイキたいところです。幾らこのゲームが鬼畜難易度になる事があるとはいえ、攻略できないクソボスは存在しないので……はあく……（クソデカ溜息）、どうしてこんなに僕を困らせるんですか（憤怒）

『……とりあえず、一旦仕切り直そう』

そつすね……（疲労困憊）

く移動力……ツトオ！く

くロマニの提案で、設置した陣地まで貴方達は戻って来た。

『うーん……最初のアサシン、そしてどうしてか知らないけどドウノ翼から出てこないバーサーカー。彼らは間違いなく強敵だ。彼らとはまだ当たりたくないし、気持ちを变える為にも、別の場所を探索したいところだね』

「だったら上じやないかな。ここは三階建てだ、残り二階に何も無い、つていうのはちよつと無いと思うんだよね」

それはあり得ますねえ！　というか、七人の贗作英霊って言ってるのに確実に遭遇したのはまだ二人です。残り五人の姿は見えていません。キャスターの存在は多分確実だとは思いますが、名前すらわかりません。なんも分かってねえじゃねえかお前よオオン!?

「それがサーヴァントであれ、突破口の様な何かであれ、探さないという選択肢はありませんか。であれば」

く目的地は二階。行こうか香子さん。

くやろう。俺のキャスター！

くっせえ！（ド直球）俺のキャスターとか口説いてるんですかねえ？　自分のサーヴァントに色目使うとか獣ですよ獣！　喋る汚物に成りたくないの上だよね（久しぶり）

「はい。マスター」

「先頭は私が勤めましょう。レオニダス、殿を」

「承知！」

という事で並びが決まりました。先頭メドゥーサさん、そして殿はレオニダス王です。なんかレオニダス王が殿を努めるのがお決まりになってますね。殿適正めっちゃ高いからしようがないね。

「大丈夫です、マスターとやっさんは、このマシユ・キリエライトが必ず守り抜きます！」

「フォーウー！」

くマシユの頼もしい一言、それに反応したフォーウの鳴き声に頷き、貴方と藤丸が号令を取る。二階の探索に出発だ、と。皆がオー、と返事

を返してくれたのか、嬉しかった。

と言った所で今回はここまで。^^視聴、ありがとうございました。

## 贗作逆襲画廊 ルーブル その七

皆さんこんにちは、ノンケ（ウーリの狩人）です。ロビンと狩人勝負して欲しかった……

前はバーサーカーの軍勢相手にビビって逃げたらあつさり見逃して貰えました。慈悲な訳が無いので、それがどうしてなのかはこれからジツクリ探っていきたい所さんです。さて、その理由を探るために……何しようかな！

さて、暖かい触れ合いを見て心が浄化されたところで二階です。今までの戦力が戦力だったので、正直残りが怖すぎるといなのが正直な所です。マジでどんなサーヴァントが居るのかバツチエ肝が冷えますよ……（ビビリ）

――シユリ―翼、二階。奇襲を警戒していたメドウーサの視線に、特に敵が写る事は無かった。この階のシユリ―翼にも敵は居ないようだ。そして、壁にかかっているのは、やはり絵。どれもこれも、何処かで見えた事のある名画ばかり。

『ふむ、やっぱりこれも贗作だねえ』

「やはり、このルーブル美術館にある物全てが、贗作、という事でしょうか」

「特異点そのものが贗作の様なものだ。だとしても不思議ではないが……これが、竜の魔女の手書きだ、という可能性があるのを考えるとね」

「数が増える度に、彼女の執念の凄まじさに背筋が冷える。こんな特異点を作り出し、贗作を並べ、彼女は一体何をするつもりなのだろうか。」

ほんへだと自分がジャンヌを超える為に……つていう建前で乙女的な思考を叶える為に色々やってたんですけども（弩失礼）今回のサーヴァントは乙女ゲーム的なキャラクターでも無い……まあ、アサシンはあり得ますけど、バーサーカーさんみたいなキャラが出ていたらっしやる乙女ゲームとかあまりにもニツチ過ぎると思うんですね。



「……ここは特に何も無い、となれば向かうべきは」

「ドウノン翼、ですね。マスター、皆さん、警戒していきましょう」

「おーけー……そういや康友、バットもう一本持ってない？」

「無いですねえ！ 藤丸君もそろそろ専用の獲物が欲しい所さんです。強化藤丸君は雑魚処理に十分運用ができるので。」

「マスター、マスターは戦う必要はありません。なので、武器は必要ないかと思えます」

「い、いやでも俺だって居るだけ、っていうのはちよっと、なんというか」

「必要 無い かと 思 い ます」

＜マシユに圧されてたじたとしている立香は置いておいて、貴方は改めて二階のドウノン翼の方面に向き直る。その傍に、香子がそつと立った。

「参りましたようか」

＜危険な美術館巡りだが、香子さんと一緒なら楽しめそうだ。

＜おう。いざとなれば腹いせにここの贋作打ち壊してくれる。

ヤバン！（NINJAスレイヤー）とはいえ上の選択肢も若干クサイ感じがするんですよえ……まあ某風の精霊（GLGL）もこれくらいの臭さなら見逃してくれるでしょうと信じて上で。

「はいっ」

「では、引き続き私が先頭を」

「次は僕が行くよ。藤丸、マシユ、夫婦喧嘩も程々にして、着いて来てくれ」

あつ……藤丸君とマシユが真っ赤になっちゃいました。すっげえカエンダケみてえだなお前の顔。お互いを意識していないとそんな表情にならないってそれ一番言われてるから。というか、マシユちゃん照れるようになるの早いっすね……とてもとてもいい事だ（ニッコリ）

これはワンチャン封印されし『人理救済中にも関わらず超ドスケベぐだマシユルート』も見えてくる……？（邪推） だが残念、この動画は全年齢対象なんだよなあ。

「……初心だなあ。微笑ましくて、ちょっと、なんだろう」

「ええ。ああいう可愛らしいものというのは、男女関係なく、良いものですね」

「あの二人を見ると、こう……とても、胸が熱くなります……！ メモ、メモをしておかないと！」

〈反応は三者三様だが、見守る様な暖かさは共通している。尚、貴方は完全にこの空気に乗り遅れてしまつて、少し照れ臭くなつてしまつていて。三人を置いて先にドウノン翼へと踏み出した。

ホモ君照れてんぜ〜？（弄り） やっぱり若いんですねえ！ で、そのドウノン翼ですけども……絵の感じがガラリと変わった気がしますね。こういうのつて抽象画っていうんですかね。そればかり並んでます。あ、アレはちびノブの抽象画!? ゲーム制作班なんてものを作っているんだ……（畏怖）

「……この絵は、変わったモノが多いね」

『見る限り、アメリカ発祥の抽象画が中心かな？ しかし、コレの贗作つて……作る方が大変なレベルだと思うんだけど。レオナルド、君なら……出来るかい？』

『無理……とは言いたくないけど、うんやっぱり……無理！ こんな一期一会みたいな絵を完璧に再現するとか気が狂う位には難易度高いよ。』

調べてみたらマジで絵の具を叩き付けたような絵とかあったゾ……こんなもん再現するとか邪ンヌ頭おかしい……（誉め言葉）

「——つとお？ お客さん？ やー、暇だったからねえ。丁度良かったよ」

〈その踏み出した足の先で、帽子を被った男性が一騎。その手の内で行くると回る拳銃が一丁……貴方に向けられて、構えられていた。

そして、二階ドウノン翼にも当然ながらサーヴァントが居るようですね。あの姿は……やっぱりこの特異点では見かけなかった人。

「——マスター、下がって」

〈瞬間、メドウーサが貴方とその男性……否、少年との間に割つて入った。鎖を構えたその姿を、少年は笑つて見つめている。この特異

点で、まるで当たり前のようにこの場に陣取っている相手だ、当然この少年も……サーヴァント。

「ようこそ、カルデアのマスター。僕の事はアーチャー、又は『西部最速の早打ちガンマン』って呼んで欲しいな」

あー、やつぱりこの人もそういう感じの呼び名があるんですね。というか、ギャルゲーっぽくはないテーマというか……マジで何をメインテーマに贗作英霊を組み上げたのか、コレガワカラナイ(本音)あ、藤丸君達も追いついてきましたね。

「いやあ、下でのドタバタは見てたよ。バーサーカーと最初に当たったのは運が悪かったね」

『アーチャー!? 武器ガッツリ拳銃なんだけど? マグナムなんだけど!? 弓は!?』

「いやあそこは気にしないでよ。どうせやり合うなら関係ないじゃない? 弓だろうと、銃だろうと。」

〈そう言って、構えていたその銃を、ホルスターに収めるアーチャー。全員が臨戦態勢に入ったその時。貴方の前にメドゥーサが掌を翳した。

「ここは、私に」

お、ここはメドゥーサさんとアーチャーの一騎打ちでしょうか。相手アーチャーは、ほんへでも早打ちが相当ファイチャーされたサーヴァント。一方メドゥーサさんの武器は能力ではなく……アレ? そういえばビリー君の魔力って……メドゥーサさんが、眼帯外してビリー君の前に進み出てます。大体、四メートルくらいですね二人の距離は……これは。

「お姉さん一人で相手するの? 纏めてかかってきても良いんだけど……」

「いいえ、私一人で十分……というか、私が一番相性がいいでしょう」  
「そう? じゃあ遠慮なく、一対一だ。とはいえ、貴方が一歩踏み出した時点で……僕は一発撃ち込むけどね」

〈瞬間だった。メドゥーサがその瞳を……向けた。アーチャーに向けて。全員が、という暇も無く。アーチャーの体は、瞬く間に停止し

た。

「……ん？」

「早打ち、と言っていましたか……それは私が貴方を見るよりも早く、出来るものなのでしようか。アーチャー」

……おつ p……おつぱげた……！。魔力による抵抗が無い事を良い事に速攻でアーチャーの動きを封じた。確かにアーチャー……いやもうビリー君で良いですね。確かに彼の早打ちよりは尋常じゃありませんけど、メドゥーサさんの魔眼はこの距離ならマジで見ただけで即座に停止。よく考えてみればこういう美術館みたいな広々とはしてない空間って、メドゥーサさんの独壇場やん!？」

「近代の英霊とお見受けしましたので、先ず抵抗は無いものだと予想しました。安心してください。体が動かないだけですから」

〈動かなくなった体に巻き付く鉄の鎖。もはや、拳銃を抜く事は愚か、体を動かす事すらマトモに敵わないだろう。

「ですが、勝敗はつきましたね。アーチャー」

「……キャスター、こういう時の対策もして欲しかったなあ。まったく、こんな天敵が居るなんて思わないじゃないか」

あ、これはもう、ワンチャンスの反撃も封じられましたね……なんて初見殺し。メドゥーサさんて大当たりのサーヴアントなんだなあ……（今更）

〈強敵出現か。そう思われた矢先の瞬間的な決着。思わず呆然とする貴方達に、メドゥーサは振り返らずに行った。

「私が彼を抑えていますので、事情を聴いては如何でしょうか」

……こ、今回はここまでです。ビリー君、ドンマイ……本当にドンマイ……むううん……（男泣き）

## 贗作逆襲画廊 ルーブル その八

皆さんこんにちは。ノンケ（授かり）です。

前回は……あまりにも酷い不意打ちが決まり、速攻でビリー君が無効化されました。熱い熱い戦いが繰り広げられるって期待してたんだよなあ!?! どうしてくれんだよお、高かったんだよなあ、撮れ高あ!

「……僕が言うのもなんだけど、初見殺し過ぎないかい?」

「此方を使うのも多少は疲弊するので、それに見合った能力なだけですよ。下手にバラす位なら、これくらい豪快に使って、最大の効果を発揮した方が良いでしょう」

〈どこか悲し気なアーチャーが、苦笑い、というか。それに近い表情で言うのに、メドウーサが淡々と返している。確かに無慈悲な最速の不意打ちではあったが、それでも、敵将を捕獲できたという戦果は余りにも大きい。〉

「あ、あの……敵の私が言うのもなんですけど、大丈夫ですか」

「うん。ゴメンね。心配かけちゃって……自慢の腕が振るえないのは、ちよつと悲しいかな」

マシユちゃんにまで心配されて草あ! でも納得できるレベルで容赦は無かったと思いました(小並感) ビリー君、第五特異点では頑張ろう!

『……えつと、気を取り直して聞くけど……君達の目的を、教えて貰えないかな』

「んー? まあ、流石にそれは教えられないかな。僕としても、流石に主に義理も返せないままに消えるのは、ちよつと。戦えなかったし、せめてここ位は、ね」

『あの、アーチャー、変に取り繕わない方が良いと思うんだ僕は……そうじゃないと、僕らとしても、容赦なく最終手段を投入する事になつてしまうから』

〈そう言つて、映像のロマニが見つめる先には……香子。何をするのか、一瞬で全員が察して、立香の顔が引きつり、レオニダスが視線

を逸らし、マシユが顔を手で覆い……メドゥーサだけが、平然として  
いる。デオンは何の話だか、サツパリと言った感じだった。

おお、もう……（顔を覆う） ビリー君が一体何をしたというんで  
しょうか。というかよく考えたらホモ君のこのメンツ、足止めから捕  
縛、そして尋問要らずで情報を引き出せる、まあまあ鬼みみたいな編成  
してますよね。い、いやまだだ。カルデアの善意がまだ仕事をするか  
もしれない。

「あ、あのロマニ様。流石に、それは」

『んー、私としてもやりたくはないんだけどねー……ああいう宣戦布  
告をされちゃうと、ちよつと。カルデア迄侵入して、何をしたかった  
のか聞かないと。後、その術式はどんな感じか純粹に気になるし』

『……ごめん、紫式部さん。気が進まないとは思うけど……本当に、申  
し訳ない』

カルデアの善意が死にそんな顔をしながらお願いをしている……  
！（戦慄） 尚、ダ・ヴィンチちゃんはとてもわくわくした表情をして  
らっしゃいます。うーんこれはエミヤにロクデナシ呼ばわりされる  
ダ・ヴィンチちゃん。

「あ、あの……！ ですが……！」

＜若干半泣きになっている香子の肩を、ポンポンと貴方は叩く。責  
任はすべて自分が負う。気は進まないだろうが、頑張つて貰えないだ  
ろうか。貴方はそう言うってから、頭を九十度直角に下げた。

「……わ、分かりました……申し訳ありません、アーチャー様」

さあ皆さまお待たせしました。只今よりビリー君より情報を抜く  
だけ抜き取る、鬼の泰山解説祭祭りの開催です。ああ、センチメン  
タルうゝ（悲しみの慟哭）

「ん？ こちらの奥様が僕の尋問担当？ 出来るのかい？ 優しそう  
な人だけだ」

『この人がどんな拷問をしようが、主の目的を知らない以上は何も話  
しようは無いけども、ブラフが決まっていると思っただビリー・ザ・  
キッドであった』

はい。早速一つ抜きましたね。どうやらビリー君は邪ンヌの目的

を知らないようです。となると他のサーヴァント達もしているかは微妙ですね間違いない。

「……先輩、こんなの、こんなのって……」

「マシユ、俺達の罪を。しっかりと瞳に刻みつけよう」

「……なんなの？ どうしたの？ なんで僕、憐みの眼で見られてるのかな。なんか、哀れな家畜でも見てるみたいなの、そんな」

君が哀しい事になってるからだよ……（慈悲の眼）そしてデオ  
ン君ちゃんが遅ればせながら事態を察して、口元を抑えて青ざめています。そうですねえ、エゲツナイですよねコレ。ほんへで香子さん  
出せない理由がコレですよ。だからこんなんじやストーリーに成ん  
ねーんだよ（迫真）

「いえ、何でもありません……続きを、紫式部殿」

「は、はい……えっと、アーチャー様。この特異点について、何か知  
てることはないでしょうか」

「いや、だから教えられないって」

『この特異点がキャスターの特別な魔術によって構成されていて、理  
由は良く分からないが自分達の存在を周りの絵画が補強しているら  
しい、という事は絶対言わないと決めたビリー・ザ・キッドだった』  
もうやめてやれよお！（号泣） こんなのって……こんなのってな  
いよ！ 酷過ぎるよ！ あんまりだよ！ こんなグロテスクな真似  
しちやだめでしょ！ 終わりっ！ 閉廷！ 以上！ チエイテ解散  
！（風評被害）

『絵画が補強……？』

「あ、あの。ダ・ヴィンチ様……これ以上は、やめておいた方が」

〈ダ・ヴィンチちゃん！ 俺からも頼む、もうストップだ！

〉香子さんにも、ビリーにも……残酷だよ！

実際残酷だと思うので下を選択しておきます……ダ・ヴィンチちゃ  
んに届けこの、この切実な思いよ……！

「……あれっ？ なんで僕の名前バレてるの？ 言っていないよね？」

「「あっ」」

ビリー君に届いちゃったよ！ しかも届いちゃいけない部分が！

「あ、あいえ、それは、ですな……!」

「せ、先輩……私、もう、耐えられません」

「いいや、マシユ。言うんであれば、マスターの俺達が……責を……!」

おかしい。一応尋問の筈なのに、されてる本人は全く平気そうで、こっちは全員疲労困憊阿鼻叫喚です。特に香子さんが。

『うーん、これ以上やるとこっちのメンバーが罪悪感で全滅しそうですし、やめとこうか』

『……そうしてくれ……もう、皆限界だよ』

〈画面越しのロマニさえ疲れ果てる、カルデアの最終手段。もうこれは、滅多な事では使えないだろう……そう、全員が確信していた。そしてあまりにもエゲツナイこの尋問を終わらせるために、香子が口元を抑えて、立ち上がった。』

「……ありがとうございます。アーチャー様」

「え? 終わったの? なんだったんだ一体……まあ終わりならいいけどさ。じゃあ僕はもう退場しても良いかな。流石に、アレだけ完璧に負けたなら潔く敗退したいからね」

香子さんお疲れ様……ふ、ふら付いてやがる。抱き留めなきや(使命感) 分かる。感触は感じないけど、今必ずホモ君は香子さんの柔らかな感触を感じて居る筈……! (童貞特有の悍ましい集中力)

「まあ、勝者へのヒントを一つだけ上げるとしよう……ちよつと見てなよ」

〈貴方が香子を支えている内に、立ち上がったビリーは壁へと向かって……その壁にかかっていた絵を掴んで……外した。その瞬間だった。』

「……!?!」

「び、ビリーさん、体が……!?!」

「まあ、ビックリするよね。こうやって、ここに飾られている絵によって、僕は……というかこの美術館のサーヴァントは補強されているのさ」

あ、うん。それはもう聞きました。だからってこんなアツサリ消滅



するとかは思ってははいけませんけれど。

「そして、その補強している絵を外せば、この通り……一つ、忠告しておこう。さつきみたいなの不意打ちはもう通じないから、覚悟しておいた方がいいよ」

「最後に、そう言い残し。ビリー・ザ・キッドは黄金の光になって消えていった。」

はい。という事でアーチャー、見事撃破……撃破？ 出来ました。撃破つていえるかどうか相当微妙な勝ち方だとは思いますが。まあ、メドゥーサさんの技が嵌ったのは、色々条件が嵌ったからだし……ノーカン、ノーカン。NOカウントなんだ！

「……敵アーチャー、消滅しました」

「この罪を、決して俺達は忘れないと誓うよ」

「……本当に、本当に……申し訳ありません……！」

「……ああ。コレは許されざる罪だと思おうよ。」

「……いつかまた会った時、謝罪できたらいいなあ……」

良かったな。第五特異点で会えるで（容赦ゼロ）バラしたら間違はなく致命的な溝が生じるかもしれないからどうすればいいのか、今から対策を練っておきたいです（RTA風）

「——はいはい。エマーゼンシーエマーゼンシー。こちらルブル美術館を取り仕切る大魔女から、残る六騎のサーヴァントにお知らせだ」

「皆が罪悪感に打ちひしがれている時、突如美術館の中に響く、甘やかな声。」

「アーチャーが敵サーヴァントからのエゲツナイ不意打ちで敗退したようだ。敵の紫髪のライダーの魔眼の奇襲に気を付け給え。個人的な見解だけでも、距離を取る事をお勧めしよう」

今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。

## 贗作逆襲画廊 ルーブル その九

皆さんこんにちは。ノンケ（マハトママン）です。ウチ最強のキャスター、これからも周回のオトモお願いしますね。

前回はビリー君がご帰還。その前に、徹底的に情報を抜かれてしまつて悲惨な事になりました。ビリー君、第五特異点までに謝罪文をご用意しておくので、それまでお待ちいただけるとありがたいです。

『さて注意喚起が終つた所で……やあ、カルデアの諸君。私はキャスター。この管理人を任されている者だ。アーチャーを破つた勇者に、先ずは声だけで、ご挨拶を』

さて、まさかのキャスターさんが館内放送が始まりましたが、ほんへじやなかったルーブル要素をこれでもかとお出してくんなお前な。館内放送つてルーブル要素と呼んでいいのだろうか微妙ですけど。

『バーサーカー相手に尻尾撒いて逃げ出したかと思つたら、アーチャーにあんな血も涙もない奇襲を仕掛けるとは、私が言うのもなんだけど、君達、緩急が酷過ぎないか』

＜少女の样でも、女性の样でもある、そんな、声が、この美術館の彼方から聞こえてくる。

「——キャスター、だど!？」

『そうとも。僕がキャスター。自己紹介したんだから、出来れば一回で覚えて欲しいなあ』

この声めっちゃ聞き覚えがあるんですよ。具体的には怪文書関連で。まさかのスーパーライジング参戦ですよ叔母様。あ、いや謎のスーパーキュートキャスター様。

『今回君達にこうして語り掛けてるのは、君達の健闘を称える為だ。是非僕のエリアまでたどり着いてくれ。僕の持てる限りの力でもてなそう。それでは』

＜一方的に要件を告げて、その声は消えていった。

もてなす（絶望） あの人がもてなすっていうだけで正直絶望しかありません。もうもてなされた時点で間違いなくBAD ENDですよ。美味しく頂かれちゃう……！

「……シキブ、同クラスとしての意見は」

「あのキャスター様は、間違いなく私より格上。それは分かり切っていました。先の様に声を館中に届けるような術を使うその実力。予想よりはるかに格上かと思われます」

「香子の声が、少し震えている。それだけでもあのキャスターの実力を察するのは容易い。バーサーカーといい、アサシンといい……恐らく、アーチャーも相当の強敵だったろう。どうやら竜の魔女は本気を出して此方に宣戦布告をしてきたようだ。」

『やー、コレだけの術を使う、女性のキャスターか。厄ネタの香りしかないねえ』

「基本的に、こういった屋内、そしてそこを工房とするキャスター相手ともなれば、相当に強敵かと。皆さま、ご油断召されませんよう」

香子さんもキャスターだし、冬木でも工房を構えてメドウーサさん圧倒したからね。その脅威が一番分かってるでしょう。」

「……までで四騎。何れも強敵と思われる相手ばかりですね」

「怯えてはいけませんなマシユ殿！ 我々として、オルレアンの英傑たちを越えて来たのです。自信を持ちましょう！」

「そうだね。怯えてばかりは、あまり宜しくない……次へ進もう。この感じだと、リュシユ―翼にも……」

まあ、ドウノン翼に二人サーヴァントがいて。これでリュシユ―翼に誰も居ない、とかそんな甘い事はないでしょう。間違いなく。恐ろしいサーヴァントが待ち受けている事でしょう。ゾツとしないですねえ！

「キャスターが私の種を暴露し潰してくれたので、先程の様なマジックは使えません。その辺りはご留意を」

『メドウーサさんの魔眼は、初見殺しの要素が強いからねえ……』

『次のサーヴァントとぶつかる時は、真つ向勝負になるだろう』

「そう言つて、皆が見つめる先には……ルーブル美術館、リュシユ―翼がある。キャスターの言う事を信じるなら、残るサーヴァントは、六人。一人撃退したかと言つて、決して油断できる状況ではない。」

「気を引き締めて行こう！」

△ケツの穴を締めて行こう！

ホモなら選択肢は下。当たり前だよなあ……？（反射の域）

「け、ケツっ!？」

「……康友、俺とお前しかいない訳じゃないんだから言い方をだなあ」  
「そもそもそういう言い方はしない方がいいんじゃないかな、と。まあ、うん。こうして緩んだ空気は引き締めて、行こうじゃないか」  
申し訳ナス！でも完全に選択肢出た瞬間に反射で下を押しませんでした。ヤバい、ノンケなのに……キツチリノンケの教育をし直さないと……（使命感）馬鹿な話しないでリュシユ―翼に向かいましょうか。さっさと。

△移動力……ツトオ！△

△リュシユ―翼、二階。やはりドウノン翼とも変わらず多くの絵が飾られている。壁に飾られている絵は、何処か田舎の風景を描いた、放牧的な物が多い。そして、そこに待ち受けていたのは……

「――あら、来たわね。ようこそ。二階、リュシユ―翼へ。ここを担当するマルタよ」

△オルレアンにて遭遇した彼のドラゴンライダー、マルタ。彼女は堂々と廊下の中心に。しかしながら明らかにビリーより奥に鎮座している。完全にメドウーサの魔眼を警戒した布陣だった。

おーマルタさんかあ……いよいよもってこの邪ンヌが何のテーマを中心として英霊を召喚してるのか分からないんですがそれは。

「お、オルレアンで遭遇したライダー、マルタさんですー!」

「あら、別の私と面識あり？ まあだからって手加減はしないから、その辺りは理解しておきなさいね。貴女。序に……まどろっこしく、話し合うつもりも無いわ」

△その手に持った杖で、床を一突き。ゴ、という重たい音が貴方の背を震わせる。アレの先が床で無ければ……そう思っていた時だった。

――ビキリ

んん!? ちよ、いきなりメドウーサさんの近くの柱が……!? 凄いいび入ってますけど!? 何だこの攻撃!?(驚愕) あ、いや。マルタさ

ん相手ならこれくらいあり得るのか。マルタさんて、空間を直接狙って攻撃するとかいう、恐ろしい能力持ちなの忘れてた……  
「っ!？」

「しまった、オルレアンでもアレに苦戦したんだった……! 全員止まっちゃだめだ! 狙い撃ちにされるぞ!」

∟立香の声に一瞬で全員が四方に散る。その中で彼女が狙ったのは……メドゥーサだった。彼女が駆け抜けた、その直後の場所に、いくつもの閃光が走る。

「貴方が一番厄介なのよね? だったら、早めに狙っておくに限る!」  
「だからと言って易々とは倒されませんけど」

一切容赦なしですねえ! ほんへの猫被って……げふんげふん、お淑やかなその物腰と比較すると、ちよつと好戦的というか本来の性格というか……あ、なんでもないです(クソ雑魚ナメクジ)

「皆様! ライダー、マルタの攻撃は空間を狙い撃ちにする強力な物! 距離を取るより接近して叩くのが良策かと!」

レオニダス王のありがたいアドバイス。確かにマルタさんの強力な点は距離が離れて居ようと、容赦のない不意打ちが出来る点です。距離置いてたら間違いなく死ぬので……(断言) もう逃がさないゾ(冷静) という事で接近戦であれば我がパーティ最強のデオン君ちゃんに向かつてもらいます。イケーほらいケー。

「分かった! ライダー、オルレアンでは一応同胞だったが……!」  
「容赦なんてしないから安心なさい。足元がお留守よ!」

ヒエツ、速攻でデオン君ちゃんの足元狙いでピカツと!? お陰でデオン君ちゃんの動きを見事に制しています。やべえ、ほんへのマルタさんってスキルが凄い注目されがちですけど、ガチでやり合うとこんなヤバいんですね……オルレアンでは藤丸君に押し付けてよかった!  
(外道) やっぱり(実力的に) 壊れてるじゃないか。

「マシユ!」

「はい、マシユ・キリエライト、突貫します!」

∟マシユが、マルタに向けて突撃する。狙いをマシユへと定めたマルタの杖が、その力を開放する直前……二つの影が、その杖を弾き飛

ばした。香子の援護がマシユの突撃の、道を開いた。

「マシユ様！ そのままー！」

香子さんの陰陽術による迫真の援護が光る（ご満悦） マシユちゃんそのまま撃破しちゃってー、やっちゃってー。

「やあああああつー！」

「直接攻撃なら行けるって……？ 甘いわよっ！」

——ブツピガン！

フアツ?! マルダザン!! ナズエコブシコブシヲツカツテイルン  
デイス?! ウワアアアアアアアアアア!!

ルーラーですか?! ルーラー何ですか今の零基は?! あわわわマシユを、マシユをラツシユでシールド諸共押し返してますよ……?! スタープラチナかな? クレイジーダイヤモンドでしょ（推測）  
「くっ」

「マスターには、『陰に隠れた実力派格闘家』って望まれてるからね。拳だって、多少は使うわ……よつとー！」

「きやあつ?!」

〳最後の一撃で、思い切りマシユを押し返して見せたマルタだが……その前に、割と衝撃的な一言が飛び出している。聖女、マルタが、格闘家、とは。

……今回の邪ンヌはどんな贗作英霊を作っているんでしょうか？

今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。

## 贗作逆襲画廊 ルーブル その十

皆様こんにちは、ノンケ（活発な私）です。

今回は、ライダー枠にマルタさんが参戦し、早速戦闘に入りました。展開が早いのはイベント特異点の特徴ですね。油断して被弾しないようにしたいです。後、なんかマルタさんが若干元気になってたのが気になると言えば気になります。普通にマシユの突撃を杖で抑えつけてたんですよねえ……っていうか女番長とは……

「……なんて？」

「あら、聞こえなかった？ 頭がサツパリして無い方のマスター。格闘家よ格闘家」

「お、格闘家、ですか……？ え、えつとそれは……」

〈あまりの一言だった。全員が止まっていた。呆然と自らを見ている他の全員を見つつも、マルタは床に落ちた杖を蹴りの一つで回収する事は忘れない。

〈あ、頭のサツパリした……!?

〈遠回しにハゲっていわれてる……

ホモ君だけ全然別の事でショックを受けていて草も生えない。ハゲ弄り出ないなーとか思ってたなら、油断したところに挟り込んできました。

「……何よ、何か問題ある？」

「い、いや問題は、無いと思われませんが……えつと？」

「君としてはそれでいいのかい？ その、そういう風に扱われるのは」  
ほんへでそんなこと言おうもんなら一瞬でマルタさんに捻り潰して磨り潰されて終わりだと思うんですけど（超偏見） 邪ンヌさん良  
く召喚した瞬間に捻り潰されませんでしたね……

「まあ、納得いくかって言えば……正直微妙な所だとは思っただけど。まあでも、そういうのに抱いてる憧憬をさあ……容赦なくぶち壊すのも、あれじゃない？」

「ど、憧憬なんですか!?!」

〈思わず、といった風に香子が問いかける。そりゃあ、女番長、と

いうのは誉め言葉というにはあまりにも、荒々しすぎるといふか。女性に使うべき言葉なのか、と言われれば。

全然違うわよねえ？　というかそれを『仕方ない』で許すこのマルタさんの懐がデカすぎる。ホモも懐はデカイ。マルタさんはホモ（概念）だった……!?!　流石に失礼なので（そんな仮説は）止してくれ。「まあ、一応彼女の理想を形にしたのが私達な訳だし、応えるしかないわよね！」

＜マルタが床を蹴って、狙ったのはマシユ。振り下ろした杖、続いて拳が盾を激しく打ち付ける。その音の激しさに違わず、マシユの体を僅かとはいえ後ろに押し返して見せた。

「くっ！」

「普通の私なら、出来ないような事も！　気兼ねなく、出来るんだからねえ！」

ヒエツ……実際、普段のマルタさんなら、もうちよつと、技っぽくというか、お淑やかに杖を振るうんですけど。いや、一切技術が無い、とは言いませんけどね。まるで野獣染みた荒々しさが混ざっているというか。

「お、オルレ안의マルタさんてあんな感じだったっけ!？」

「あの時の様にバーサーク化させられている……という訳でも無さそうですが！」

ここでレオニダス王も突撃、マルタさんを盾で押し出しましたね。流石は盾サーヴァントの大先輩。そのままマルタさんと槍、盾で打ち合ってますが、互角なのか……（困惑）

「へえ、やるじゃない！　ノって来たわよ！」

「貴女こそ、見事な杖捌き！　接近されてなお、こうも強いとは、見誤っていました！」

「う……れ、レオニダス王！　私も！」

＜呼吸を整えて、再びマシユがレオニダスの隣に立つ。盾を振るい、体ごと突っ込み、杖を防御に回させ、決してマルタからの反撃を許さない……だが。

「ああ、それと勘違いしてるかもしれないけど……アレ、遠距離じゃな



いと出来ない訳じゃないから」

「っ!?!」

「なにっ!?!」

〈突如として、接近してマルタを抑えていた二人が吹き飛ばされた。マルタの空間攻撃が至近距離で炸裂したのだ。ダメージが大きい、という訳ではなさそうだが、しかしそれでも抑えを引き剥がす事には成功してる。

接近戦でそれ使うのは無しでしょう?!　そこは大人しく杖で殴っておいて? (懇願)

「甘いわよ。こっちも、結構本気でやってるんだから、貰った!」

〈マルタが杖を振り上げ、今度は立香の方向へと一気に距離を詰めてくる。とつさに立香も横に飛んで逃げだったが……間に合わない。咄嗟に走り出そうとした貴方を、白い手が制しそして、もう片方の腕が、マルタへ向けて黒い三本の光条を打ち放つ。

「っ!?!　ちいっ」

「お二人共!　今の内に藤丸様を!」

香子さんナイスウ!　ナイスウ!　いや、それ以前にマルタさん容赦なさすぎい!?!　速攻でマスター狙いとかオルレアンの時の凶暴さを醸し出してますね間違いない……とか言ってる場合じゃない。

「マスターはやらせません!」

「本造院殿、合わせて下され!　マスターをあの技で狙われては、危険です!　その前に素早く仕留めねば!」

よっしゃ!　任せとき!　デオン君ちゃん足止めお願いしナス!　あんまり時間かけると良くないですから、ここは一瞬でも隙を作ってから叩き潰すのが基本だよね (笑顔)

「分かった!」

〈デオンがマルタの元へ向けて走る。その動きを察したマルタは器用にその突きを杖でいなしてみせた。とはいえ、流石にデオン相手に接近戦をするのは厳しいのか、彼の見事な体捌きと突きで完全に動きを制されていた。

「くっ、流石に……セイバー相手に、接近戦は、厳しいかしらね!」

「悪いけど、マスターに命じられたものでね！ 逃がしはしないよ！」  
すげえ、一応接近戦のスキルならあのベオさんにも認められた実力派を、ここまで見事に封殺するとは……やっぱ強いんですねえ（感嘆）  
あ、足止めたそこが隙ですよ？ 藤丸さんやっておしまいなさい！  
「マシユ！ レオニダス！ デオンが動きを止めている今の内だ！」  
「はいっ！」  
「承知っ！」

コレがカルデア式、必殺の袋叩きよ。残念ながら、もう逃がしやしない。確実に仕留めさせてもらおう！ 香子さん、援護お願いします！

「承知しましたマスター！ 申し訳ありませんが……仕留めさせていただきます！」

「——つちい!? 流石に、この数を相手じゃ……！」

＜焦ったように四方を見回したマルタだが、時すでに遅い。一手に全てを込めての連携攻撃。マシユと、レオニダスの、二人の影が交差したその一瞬に、符と扇が二の線を引いて……直後、マルタが膝を付いて、崩れた。

「……つたく、結構暴れ散らしてみたけど、ダメだったか」

「やった、か」

「やったわよ……つたく、容赦なくやってくれちゃって」

っしやあー……！ 勝ちましたあ！ けど女性を集団でボコす絵面がやば……やば……アカン無いね……（絵面を気にする投降者の鏡）流石に、ちよつと集団でボコすのは自重したい所さんです。え？ ほんへでもそんな感じ？ じゃあやるしかねえなあ！（豹変）

「ねえ、アンタ達。あの子の所に向かうんでしょ」

「……あの子、というのはこの特異点を創り上げた、竜の魔女の事でしょうか」

「そうよ。まあ分かりやすいメッセージ残してっただけというから、分かるか」

＜マルタは、その視線を壁の絵に向けた。そこには、飾られている様々な長閑な風景を描いた絵画とは違い、そこには雄々しい……拳を

天に掲げ、民衆を導く、マルタの姿が描かれていた。杖も、旗も持っていない、拳一つで民衆を率いるその姿は、実に凜々しい。

「アーチャーと私、結局勝てなかったか。まったく、残りの贗作達には頑張って貰わないと」

「……贗作？」

「言つとくけど、私は七人の中ではそこまで強く無い方よ。油断はしない様に進みなさいな。カルデアのマスター達」

さて、漸くここでこのサーヴァント達の確信に迫る発言がようやく出て来ましたね。イベントでは最初の辺りで豪快にばらす予定の筈の事だったんですけど、まあキャスターが完全に此方の術を封じて来るとここまでかかって……しょうがないね（寛容）

「それじゃ、失礼するわね。思いつきり暴れるのは、割と楽しかったわよ」

＜そうして晴れ晴れとした笑みを浮かべ、マルタは黄金の光となつて消えていった。負けたとは思えない、あまりにも堂々とした退場だった。

「……ライダー、マルタ。消滅しました」

「贗作、とはいったい何の事だったんでしょうか」

『分からない。けど、何か重要な事かもしれないし。ビリィ・ザ・キッドが言つてた、霊基の補強っていうのに関連しているのかもしれないね』

そこも気になりますねえ……大体、ほんへでは絵で補強してる、とかいう要素なかったです。そんなことしなくても贗作英霊を成立させられてましたし。

「……しかし、それを調べようにも、こうして妨害されていては」

『やはり妨害を行っていると思われるキャスターを撃破するのは、最優先になるだろうね。此方でも解析が行えるようになれば、出来る事も広がるはずだ』

＜しかし、キャスターはこの階には居なかった。となれば……キャスターが居るのは、三階の何れかのエリアだろうか。貴方は、天井へと……その先の、三階のエリアに、視線を向けた。

た。  
という事で、今回はここまでです。ご視聴、ありがとうございます

## 贗作逆襲画廊 ルーブル その十一

皆様こんにちは、ノンケ（お淑やかな私）です。いや別に下姉さまがお淑やかじゃないって訳ではないですよ？ はい。

前回は、マルタさん相手に大立ち回りを繰り広げ、見事撃破する事に成功しました。色々を謎を解く為にも、先ずは正体不明（大嘘）のキヤスターを撃破する事が当分の目標となりましていよいよ、三階へ侵攻です。イクゾー！ オウエア！（えづき）

＜シユリ―翼を抜け、先ずは今までの様に、ドウノン翼へとやって来た……訳なのだが。

「……誰も、居ませんか？」

「フォーウ」

＜マシユとフォウが歩く先、そして、手分けして探しに動いたサーヴァント達も、ドウノン翼に居る、と思われていたサーヴァントを見つけることが出来なかった。ここにあるのは贗作の絵だけである。

なんていうか、凄い神話的な絵が多いんですね。何処の神話か分かりませんが、デカイ木が書いてあるのが特徴的です。特徴からの分析もできないの？ そんなんじゃ甘いよ（成長を実感したいオレモナー）

「二階にはバーサーカー、二階にはアーチャーとライダー。それぞれ翼にはサーヴァントが配置されてる、と思ってたけど……」

「ここだけ例外、という事でしようか？」

＜その例外の理由さえ分からない。とはいえ、ここに誰も居ないという事だけは事実だ。ここに何時までも時間を費やすのは、流石に時間の無駄だろうと判断した。

『まあ居ないのであれば、もう片方。リュシユ―翼を調べるしかないだろう』

「そこにキヤスターが居れば……万々歳って事かな、ドクター」

『居なかったら居場所のヒントは何処にもなし、だ。何処へ行ったかさっぱりだね』

居なかつたら片っ端から色々ひっくり返して探し出すんだよ、嫌っ

て言ってもするんだよ、もうこれ以上やると気持ちよくなっちゃう、位までなあ！

「さて、じゃあ次はリュシユ―翼か。そこにサーヴァントが居れば良し。それがキャスターであるなら、なお良し、という事で」

そのキャスターですが、相当強い、というのは間違いないと思います。カルデアの探知を封じるっていうのは、マジで超級、一流も一流のキャスタークラスじゃないと先ず不可能、実力も魔力もでけえなお前……（分析）あの声から考えれば、もうおおよその予測は付いていきますけど。

＜シユリ―翼を横切り、相対するリュシユ―翼へ……そして、その入り口程度に差し掛かろうとした、その時だった。

『ふふつ。良く辿り着いたねえ。あのランサーを退けてくるとは、想像を遥かに超えて恐ろしい実力派だね、君達』

＜何処からか、あの時の声が聞こえてきたのは。

……ランサー……邪ンヌ……居ない……そしてさっきの、デカイ木とか書いてあった絵ですか。もしかしてですがあそこに居たサーヴァントっていうのは。そう言えば、ほんへでも色々と酷い有様になってたランサーが居ましたね。デカイ木、というかそういう系の神話に関連する、サーヴァントが。

『しかし、幾らなんでも早すぎやしないかい？ 一応、色々と認識逸らしか仕込んでさあ、私の元に来ない様にやってたから、間違いなくランサーとはぶつかったと思うんだけど。あのランサーをそう簡単に仕留められたとは思わないんだけど？』

「そもそも、誰とも戦っていないんだけど」

＜……瞬間、完全に声が止まった。暫くの沈黙の後、物凄いトーンダウンした声で、か細く言葉を紡ぎ出した。

『いや、あの……まさかとは思うけど……彼奴、まさかとは思うが、いやそれしかないっていうか、間違いないって言うか……いやもう、あり得ないじゃん。持ち場を任せてたのにさあ、それほっぽらかして、主の……ダメじゃん、自制心っていうものがないの……』  
「えっと、そのですね」

『あ、いや。なんでもない……大丈夫だよ。うん、入ってくれたまえ。僕が相手するよ』

完全に声が死んでて草も生えないんだが？　しわしわピカチュウ顔になってるのが容易に想像が出来るというか……スゲー、このキャストにこんな声出させるなんざよっぽどヒドイ（貶し言葉）サーヴァントじゃないと出来ない。

▽——踏み入れたりリニュー翼。そこは、今までの展示されていた絵とは、少し趣が違った。飾られている絵画は……壁に、そして何より、天井に直接描かれている物。荘厳な雰囲気さえ漂うその場所は、明らかに他よりスペースが大きい

『……肉眼で見てるだけでも分かるねコレは。ここだけ異界化されて、空間拡張もか』

しれっとケイネス先生染みた事してて草も生えない。やつぱり凄いキャストなんすねえ……（感嘆）

▽そして、そんな空間の奥に……文机と、椅子が一つ。

「あーもう、もうちよつと頑張つて貰うつもりが、台無しじゃないからンサーの奴！　というか贗作として成立した時からけつこうどつか吹っ飛んだ奴だなあ、とか思つてたけど」

▽そしてそこに腰掛ける、見目麗しい……少女にも、女性にも見える。不思議なサーヴァントが一人。ピンクの髪が、良く似合っている。

はい確定。邪ンヌが呼び寄せたサーヴァントの中でも、多分指折りのチート野郎です。カルナルジュナと比較できるレベルでチート野郎です。女の子やぞ。なにせ、ギリシヤ神話に置いて、彼女を凌ぐキャストは恐らく存在しないレベルですから。

「ん？　ああ、待たせたね。ここまでたどり着いた君達に敬意を表し、お相手をさせて貰おう。キャスト、または『無数の智慧にて相手を翻弄する魔女』だ。宜しく」

……それは何方かと言えば貴方のお弟子さんの方では？

はい、という事でこの人に関して隠しても全くもって意味ない、という事で言いますけどバツチリとオケキャスさんです。キユケオー

ンのキャスター、又は怪文書のキャスター……あだ名が多すぎる（半ギレ）サーヴァントNo. 1の名を欲しいがままにしていると思いません。

「魔女？」

「そうだとも……その名に記された通り、君達を翻弄し、甘く蕩かして……飲み込む、悪い悪い魔女なのさ。ふふっ」

〈……等と言っているが、どうにも覇気がない。物凄く疲れているというか、酷く凹んでいる。その所為か、悪い魔女、というよりは、疲れ切ったコスプレイヤーの様にすら見える。

〈……ドクター、この人がカルデアの干渉を？

〈〈油断させる演技……だとすればハリウツド物だなあ。

多分ガチだと思うんで、煽るのは止めておきましょう（賢明） 一見すると、マジでそうとは見えませんが、決して油断できないんですよ、この人。

『うーん……信じたくは、ないよねえ』

『……壁の絵画……関連性があるとすれば……』

〈ちよつと微妙そうなロマニと、何かを呟いているダ・ヴィンチ。そんな二人を置いておいて、マシユがキャスターに声をかけた。

「だ、大丈夫、ですか？」

「んー？ 大丈夫だよ。ただ、他のサーヴァントや僕が酷く真面目に仕事をしているというのにまあ自由な彼女が……本当に……本当に……いや、なんでもない。仕切り直そうか」

マシユに心配されるくらいとか相当お疲れだぜえ……？ というか、普段のギャグ調から一転して中間管理職的な苦労人キャラになっていますね。まあ聡明な人ですし、マジメにやればこうもなると思いませんが。

『えつと、一つ……訊いても良いだろうか』

「なんだい？ 凄く貧弱そうな魔術師君」

『ひ、ひんじやつ……!?! ボク、なんでここまで言われないといけないんだろう……』

で、出——！ FGO特有のロマニ弄りだ！



「それで、何が聞きたいんだい」

『……君が、カルデアからの干渉を阻害してる、んだよね?』

「ああ。マスターの命令だね。そりゃあ、なんでも解析される、つていうのは気に入らないだろう?」

『そうか。なら君を倒せば、この状況は』

「打開されるとも!」

〈先ほどよりは元気そうにキャスターは、あっけらかんと答えた。あまりにも素直な回答に一瞬、全員が度肝を抜かれた。

「え、えつと……言ってしまったて、いいのかな?」

「いいとも、マスターの少年。どうせバレてることを隠すのは、あんまり上品じゃないし」

あんな怪文書書いておいて自分がハイソな人間と申すか。

「それに……言ってしまったても構わないだよ。残念ながら、ここを越える事は出来ずに君達は全員、豚になってリタイアなんだからね」

〈——瞬間、キャスターが杖を軽く掲げる。その直後だった。空中に描かれたのは魔法陣。その数、自分達と同じ七つ。それが、瞬時に展開されたのだ。

「——なん、だどっ!」

「ライダー、マルタ。アーチャー、ベリィ・ザ・キッド。彼らは確かに強い……強いけれども。でも、僕やバーサーカー、アサシン程じゃない」

さー、ふざけてるのはここまで。もう一度言いますが、オケキャスさんはギリシャでも指折りの魔女。ヤバいのはキュケオーンだけじゃありません。キャスター界でもトップクラスの実力者、メディアさんのお師匠ですよこの人。普通に魔術もグンバツに強いです。舐めると芸術品に仕立てや……仕立てあげられます。

「さあ、始めようか。ピグレット達?」

と、行った所で今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。

## 贗作逆襲画廊 ルーブル その十二

皆様こんにちは、ノンケ（鋼の看護婦）です。

前回は、遂にキャスターと開戦です。正直初っ端から此方との格を見せつけてくれてもく無理く……ああも今から、すげえきついで……拠点持ちのキャスターの厄介さをここで見せつけてくれるでしょう……

「さあ、僕の精一杯のお持て成し、受け取ってくれたまえ！」

「レオニダス、マシユ！」

魔法陣が輝きを増していく……直撃を食らえば、どうなるか。想像も出来ない。立香の声で前に出た二人の盾の後ろに、咄嗟に全員が滑り込む。そして。

「——っ！」

雷電の如き七条の輝きが、二人を襲った。堅牢な守りに阻まれ、その光は此方には届いてはいないが……分かる。二人が間に居なければ、間違いなく、自分たちマスター二人は確実に消滅していたであろう。バーサーカーといいライダーと良い、マスターの心臓に悪い相手が多すぎる。

バーサーカー君に関しては此処でなくてもずっとあんなレベルで強いから……このサーヴァントおかし……（小声） まあイスカandalとタメ張れるサーヴァントだし多少はね？

何も決めないで戦える相手ではない。立香と貴方は、自分のサーヴァント達に指令を下す。

＜マシユ、レオニダスを中心に持久戦。

＜香子を除いた全員での速攻戦。

ここは当然速攻戦ですね。元の間取りのままなら遮蔽物とか利用できたかもしれませんが、ガッツリ広がってしまつてそれも無理です。なによりも問題はここがキャスターの完全なホームという事。そんな所でマトモにじっくり戦つても、確実に工事完了されて終わりです。

＜貴方が立香に声をかける。香子に援護を任せ、全戦力で一気に攻

め落とす。時間をかければかける程、キャスターは確実に有利になる、と。

「っしー！ なら速攻で叩くに限るな。キャスター相手なら、俺でも役に立つだろ！ レオニダスとの特訓の成果……は、まだ出てないだろうど、やってやる！」

＜立香は近場にあつた金属の手すりを……蹴りでぶち壊して、まるで杖の様に、くると回し、構えた。その姿が妙に様になって居る。

っしやあつ！（TH）ここはホモ君も参戦しようじやありませんか。香子さん援護おなしや……アレツ？ 香子さんが、なんか、目が笑ってない、物凄い迫力の笑顔を……ど、どうなされたんでしょうか？

「マスターはここで私の警護を……藤丸様もです。宜しいですね？」

「あ、で、でもさ……流石に、この場合は全力を」

「宜しいですね？」

＜立香は黙って香子の傍に立った。貴方は目を逸らし、そつと離れようとしたが、その動きを冷静に腕を掴まれて制された。後ろを振り向くと、静かに笑みを浮かべた香子が此方を向いていた。怖かった。何ならちよつと瞳のハイライトが消えている気がした。

「マ・ス・ター？」

はい。大人しくしてます。あ、一応武器へのエンチャはしてくれてるんですね。すいませんお世話になりまーす……香子さん、遅しくなつたね。

「マシユ様！ 此方は私が！ 全力で向かってくださいー！」

「ごめんなさい、式部さん！ 先輩をお願いしますー！」

＜保護者同士の様な会話が為され、マシユを先頭にキャスターの元へと四人が向かう。特に二人、示し合わせて居る訳でも無いし、第一特異点でも連携をあまりしていた訳でも無いというのに……至極不思議に感じるしかなかった。

「と、兎に角式部さんの警護、キツチリやろう！」

＜お、応！

どうして尻に敷かれているんですか（電話猫）（ホモ君の立場）こ

んな弱いんかよ、信じらんねえ！ 笑っちゃうぜ！

「四対一だ、悪いが……」

「これも戦、卑怯とは言わせませんぞ！」

それは兎も角、さっそくデオン君ちゃんとレオニダス王が突撃仕掛けてますね。しかしコレをオケキャスさん、空中浮遊する事で華麗に回避。そして杖と魔法陣から……一齐放射！ ですがマシユちゃんがこれにインターセプトして防御。上手いですねえ！

「——メドゥーサさん！」

「キャスター相手にどこまで通じるかは分かりませんが……」

この隙にメドゥーサさんが背後に回って……魔眼準備！ メドゥーサさんのお得意ですね。初見殺しとしての力は失われましたけど、発動するだけでも十分な脅威です。いいよ！ 来いよ！ 瞳に捉えて瞳に！

「——甘いよ」

「な……っ!?!」

〳その時だった。背後を取ったメドゥーサに向けて、ほぼ間髪入れず暴風が迫る。まるで背後に回るのを予期していたかのようにその杖を振るって、くるりと一回転してから、メドゥーサの方に体を向ける。余裕が溢れるキャスターに対し、メドゥーサの表情は険しい。

「僕は、彼の大英雄に出航の助言すらしたんだぜ？ それなりに頭脳も切れるのさ」

「読まれていた……!?!」

「作戦の立案とかはあんまり、軍師じゃあないからね？ でも読み合いならそれなりに出来るとも。あんまり大魔女を馬鹿にしていると、火傷するよ……名前も無き島の女怪クン？」

「——ッ！」

……ばかあ！（恐怖） 叔母様そんなキャラとちやうでしよ！

キャラ守って！ やくめでしよ！ あーでもカッコいいです叔母様！ いけませんいけませんやめてはいけません！（矛盾） ずっとそのキャラだったら間違いない全国のマスター君骨抜きだと思うんですけど（凡推理）

まあでも弱点のある女性の方が可愛いっていいますし。多少は、ね？

「であれば！」

「力づくで！」

今度は一度下がったレオニダス王、デオン君ちゃんが再度突撃！

こじ開けるんだよ（守りを） 三六〇度！ 全てはチャンス！（レ）

「——まだまだ若いね、君達」

「んなっ!？」

とか思ってたら叔母様の足元から何か……タコ足!? あ、あれは！

知っているのか、雷電！ ダレダヨ

タコ足と言えばキルケーの逸話に名高い、怪物スキュラでは!? いつの間にか足元に召喚陣が敷かれてますけど……何時の間に書いてたんですかねえ!? 手回しが早すぎる、訴訟。

「くっー！」

「この、足は」

「丸々一匹、そのまま戦わせるなら、それなりに時間をかけて陣を敷く……けれど、ここは私の工房で、僅かな時間君達を足止めできればいいから、足だけでも十分だろう」

＜メドウーサ、そしてマシユに向けて光を降り注がせながら、キャスターはなんて事の無い様に、謡うように告げる。

「なら、本当に単純な陣で良いのさ。くるんと、回るくらいの時間で書けるものでも、ね?」

「——っ！」

そ、そういえばさつきメドウーサさんを迎撃する時にくると一回転、してましたけど……!?! そんな一瞬の動きである二人を止めるとか、叔母様マズいですよ!?! 正直舐めてました……申し訳ナス！

「さて、時間は稼いだ。全力射撃をもう一度お見舞いして上げようじゃないか！」

「「「っ!?!」「」」

やべえよ、やべえよ……! 直撃こそしてませんが、サーヴァントが四人集まってたった一人の魔力砲撃に追われてるって、強いよ、

強すぎるよ叔母様。怪文書のキャスターなんてもう二度と言えねえよ。これは偉大なる鷹の魔女ですね（確信）　しとる場合かあー！

「ぬんー！」

「く、うう……！」

「マシユ！　レオニダス！　ちっ！」

「全く、厄介なサーヴァントですな……！」

レオニダス王、マシユが防御で耐え、メドゥーサさん、デオン君ちゃん、ホモ君と藤丸君のサーヴァントで綺麗に特徴が分かれてますねー……じゃなくて！　ヤバいですねコレは。状況は一方的に呑まれて相手のペースで一方通行。最悪です。ここは香子さんにも援護を加速していただかねば……

「ふふ、どうしたのかな？　そんな状態じゃ——援護をしている、後衛を直接狙ってしまうよ？　君達」

▽直後、貴方達、マスター二人より少し離れた場所に浮かび上がる魔法陣と……その中から姿を現す竜牙兵。数はそれなりを遥かに超えている。コレだけの数が殺到すれば、香子は間違いなく討ち取られてしまう。貴方と立香はそれぞれの獲物を構えて、相手と相対する。待ってくれ、そんな軽率に後衛を狙ってはいけない（戒め）　そ、そりゃあこのフィールド全体が工房なんでしょうけども……だからつてこんな、こんなあ！

「マスターっ！」

「おっと、君達の相手は僕だよ？　折角のお持て成しを袖にするのは、寂しいからやめて欲しいなあ？」

こうなれば香子さんを守るのはホモ君達だけです。藤丸、ホモ君！　竜牙兵にジェットストリームアタックを仕掛けるぞ！　お前はダレだよ。

状況は最悪、援護のサーヴァント無しで、あの叔母さまが生み出した竜牙兵の大群を相手にせねばなりません。プレイヤーの腕がなりますねえ！（震え声）

▽目の前に向かってくる危険を前に……貴方と立香は笑っている。相手がサーヴァントレベルの強敵であれば、最早笑う事すら出来ない

だろう、だが……たかが強敵であれば、野山で野生児の如く、互いに殴り合っていた二人にとっては、怯えるには値しない！」

「久しぶりだなあ、俺達二人だけで暴れるのは……なあ！　康友オ！」

◁ ああ、やってやろうぜ立香！

◁ お山一番の悪ガキコンビ、いざ、推して参る！

ここは気持ちで負けてはいけません。ノリ良く、下で行きましようか。無数の竜牙兵に向けて立ち向かう青少年コンビって燃えるよなあ!?(独自路線) 全部骨粉にして畑に撒いてやるよ(マイクラ並感) 容赦ゼロでイクイク……ヌツ！

と言った所で今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。  
?

## 贗作逆襲画廊 ルーブル その十三

皆さんこんにちは、ノンケ（魔王）です。カッツに優しくしたげて……？

前回より続いて、今回も対キャスター戦です。まさかのこつちに直接兵力を送って来るっていう掟破りをやらかしてくださいました。お陰でマスター君二人で大暴れする事となりました。でも楽しそう

（小並感）

「つしやあ来た来た来たあ！ そりやあああああ！ こつち来るんじやねえ！」

＜手すりを体ごとぐるりと回し、立香が群がってきた竜牙兵を蹴散らしていく。一部は今の一撃で脊椎を打ち砕かれ、使い物にならなくなって崩れ落ちていった。

「つし！ 流石にファブニールだとかと比べりやそうめんみたいなものだ！」

＜ファブニールに失礼だと思わず、それは流石に。

＜ジークフリートさんに心よりの謝罪を。

こんなと比べられる程度の相手に苦戦した、とか思われるジークフリートさんが可哀そうなので下にしておきましょう。一応、『竜』牙兵なので関連が無い、とも言いきれませんが。あ、態勢崩した竜牙兵君は粉碎よく

「どうした！ かかってこい、向かって来い！ お前たちの死地に向けて！」

竜牙兵君がカタカタ楽しそう（小並感） それじゃあお客様、沢山楽しんで行ってください（汚食事） ほら、その内臓に金属製の特別な食事を突っ込んでやるからよお！

取り敢えず、藤丸君が蹴散らして、ホモ君が散らした奴を撃破していく、つて感じで今のところは上手くいっていますね。既に何体かはホモ君の追い打ちで地面で骨粉となっていますので、香子さんには近寄らせて……

「——きやあつ!？」



って(香子さん襲撃)もう始まつてる!(ホモガキ) どつから湧いた此奴ら、ホモ君一旦下がって、藤丸君が耐えてくれることを信じ、アイツらを蹴散らしに向かいますよ。

「うくつ……ま、負けません。ここで足を引つ張る訳には……!」

◇足手まといなんて思わないよ!

◇安心して頼って欲しいなあ! マスターを!

香子さんが足手まといとか、何時も何時も助けて貰って罰当たり過ぎて笑う。そんな事言った奴は首だ首だ首だ (SMD) オラア!

香子さんから離れるこの集団ストーカー共!

「マスター、すみません」

◇気にせず、未だキャスターからの砲撃に四苦八苦しているサーヴァント達の援護を続けるようにと、貴方はバットを構えなおす。砕けた竜骨兵の中に一つ、貴方の強襲を見事躲した竜骨兵が。その手に構えた二本の短剣を、器用にクルクルと回し、貴方へにじり寄ってくる。

これは……ちよつと他の竜牙兵とは違いますね。リーダー、またはほんへのDANGERモンスターでしょうか。いずれにせよ油断は出来ません。確実に……サイコガン……(撃破宣言) そして、当然ながらこの手のモンスターはAI強化されていますので油断しているとさつくりやられますので気を付けましょう。

「康友オ! つち、こつちはこつちで、数が……!」

藤丸君は数に圧され、こつちは質ですか……とか言ってる内に竜牙兵君迫真の二連攻撃が光る! でも残念、耐久盾じゃなくて回避盾なんだよなあ、当たらんよ! けど反撃のバットは普通に凌がれてる辺り、結構強敵ですねクオレハ……

よしお兄さん鬼種の魔覚醒やっちゃうぞ♡ まあ、まだまだレベルも低いのでそこまで出力も上がりませんが、こうやって活用できる時にはしていきますよ。

竜牙兵の迫真の突撃に合わせ、握りしめたバットを、ホームランをぶちかましてやる、という気概で ア アイッ! ! (フルスイング)

先ほどと同じように、短剣で受け止めようとしたその体を……今度は全く容赦もなく重たい手応えと共に粉々に打ち砕いて……

やりまし た (KG)

結構手間取りましたが、それでも撃破終了です……(職人並感) そして藤丸君の方はと言えは。

「っしやおらあああ！ うおおお！」

めっちゃ長物で無双して手草も生えない。まるで三国無双ダア……まあ彼も彼でクリティカル番長(マスター基準)ですので、そりやあこうもなりますか。

さて、此方は無事突破。後はキヤスターさんだけです。四対一だというのに完全に此方のサーヴァントを翻弄してますね。拠点持ちのキヤスターはやっぱ強ええわ……(戦慄)

「中々に活きが良いマスター達だ！ 流石に、コレだけのサーヴァントを相手にしてる片手間じゃどうしようもないかな……っ!？」  
「よそ見をしている暇がおありか！」

∨キヤスターの光線を盾で無理矢理凌ぎ、レオニダスが一瞬、肉薄する。その槍が鋭く狙ったのは、キヤスターの杖だ。魔術を使用する媒介、コレを狙われては、流石にキヤスターも一歩退かざるを得なかった。

「——今っ！ デオン殿！」

「悪いが、此方に意識を向けて貰う……！」

「——っ!？」

しかしここでレオニダス王とデオン君ちゃん、迫真の攻撃妨害。これで少なくとも、デオン君ちゃんのスキルが続く間は此方に攻撃は出来ません……となれば。

あのオケキヤスは間違いなく強敵です。強敵と認め……ここは、二つの宝具を使わせていただきましょうか。と言つてもこの中で攻撃できる宝具を持っているのはメドゥーサさんと香子さんだけです。今回はメドゥーサさんに行つて貰いましょう。あ、藤丸君も宝具展開、オナシヤス！

「——分かった！ マシユ、宝具行ける!？」

「はいっ、大丈夫です……!」

〈マシユが足を止めたその時、香子に全力で援護を行うように貴方は声を上げる。案の定集中砲撃を仕掛けようとしていたキャスターの動きが、一瞬止めて……

「宝具、展開します!」

〈マシユの盾が輝き、巨大な光の壁を生み出した。驚いたキャスター、その一瞬でマシユの後ろにメドゥーサが回り込む。それに気が付いたキャスターの全力砲撃が、デオン諸共巻き込む様にマシユの盾へと突き刺さるが……その砲撃ですら、マシユの盾を揺らがせることは出来ない。

「うわあ、なんて硬さの……!」

「——そして、その一瞬が命取りです。優しく蹴散らしてあげましょう」

やっちやつてください!・メドゥーサさん!

『ベルレフオーン騎英の手綱』!!」

〈流星となつたメドゥーサが、マシユの頭の上を低く、あらゆる妨害を蹴散らして飛ぶ。一直線に、僅かな距離を駆け抜け、突き抜けたその先には……デオンに翻弄され、メドゥーサに意識を向けきれない、キャスター。

「——っ!」

あー直撃! 直撃です! んぎもぢいイイイイイイ! 流石にコレが直撃でピンピンしてたら怖いねえ……その時はオケアノスのキャスターとは呼ばない、ゴーレムのキャスターとかいう何処ぞのゴーレムマスターみたいな渾名付けてやるからお覚悟どうぞ。

「っ……っ……っ……っ!」

〈立香の見つめる先、光の暗れたそこには……倒れ伏したキャスターの姿があった。既に黄金の光が体から立ち上っている。どうやら宝具の直撃は、致命傷だったようだ。

「……は、はは……まさか……負けるとは、ね……こちらが絶対有利、と思っていたけど」

『これは……やったぞ! 此方の解析が少しずつ出来るようになって

……え?』

そして、これで漸く物語の核が、見えてくると思われれます。

『ちよつと待ってくれ、目の前のキャスター……何だこの反応!』

『ど、ドクター? どうしたんですか?』

『いや、目の前の彼女はサーヴァント、なんだけど、その……なんていうか、こういう言い方をするのは失礼かもしれないけど……雑、なんだよね』

〈雑、という言葉にマシユや立香、そして貴方も揃って首を傾げる。何が雑なのか、さっぱり分からない。』

『だから、サーヴァントととしての反応がだよ! いや、雑っていうのはちよつと違うんだけど……なんというか、余りにもよく似た、でもイヤこれは違うよね、っていう感じのその、何ていえば……!』

〈その時、貴方の脳裏に思い浮かんだのは……ライダーの、あの言葉。』

◇……贗作?』

ここでホモ君の(珍しい)名推理が光る。ホモ・サピエンスは頭脳明晰ってハッキリ分かんだね。ただのホモは大抵脳筋かRTA特化なのでNOカウントで。

『そ、それだ! 贗作、英霊の贗作だよ! そう呼ぶのがピッタリな……!』

「——そりゃあそうだとも。私は、主が、自分の目的の為に……生み出した、贗作の英霊。その完成品だからね。アーチャー、ライダーも、そうさ」

〈キャスターが、ドクターの言葉に応えた。贗作、という侮辱にも取られかねない言葉を当然の事のように、彼女は受け入れていた。』

「ふふ、最後に、警告しておくよ……主は、私達の主は……私達を生んだ事で、既に目的の最終段階に、入っているんだから……うふ、うふふふふ。気を付けて、向かいたまえよ」

〈——そう最後に言い残し、キャスターは黄金の光となって消えていった。』

……ほんへでは、『贗作で真作を打ち負かす為』というのが大きな目

標でしたが、贗作英霊を生み出す事で目的を果たそうとしている……  
？ この邪ンヌは、ほんへとは違う目標の元、動いているのでしよ  
うか。

今回はここまで。ゞ視聴、ありがとうございました。

## 贗作逆襲画廊 ルーブル その十四

皆さんこんにちは、ノンケ（鬼武蔵）です。

前回は、キヤスター撃破！ いよいよカルデアの解析能力が仕事し始めましたが……今回もほんへとは若干違う方向に向かっているようです。ドラグーン・セイバーは強敵でしたね……（白目）

＜竜の魔女は、英霊の贗作を創り上げていた。それが、どうしてなのか、何の意味があるのか……それを問われたダ・ヴィンチは、眉間にしわを寄せていた。

『……悔しいけど、分からない。見当もつかない。絵の贗作だけじゃなくて、英霊の贗作まで作るっていうのは……特異点を維持するだけの力があるなら、普通に英霊の一体も呼んでも不思議じゃないのに』  
『贗作の英霊だった。恐らくは、マルタも、ビリー・ザ・キッドも』

このイベント最大の要、贗作英霊。本来なら、邪ンヌが執念と真作への怨念と若干の乙女心を込めて作り上げた、英霊のまがい物……の筈なんです。彼らが名乗る名前はどれも乙女心とは正反対、と申しますか……寧ろ若干此方の男子的な厨二心が擦られると申しますか。「贗作の役割、というか、贗作の使い道と言えば、古今東西本物と偽って売りつける金策と相場が決まっていますか……」

「英霊は……売れないと、思います。レオニダス様」  
「フォウ、フォウ」

香子さんの言う通りなんだよなあ……ウスⅡ異本とかでの不思議時空なら兎も角、型月時空で英霊で商売なんぞしようもんなら、良くて封印指定、悪くて商品に惨殺されてデッドエンドでしょう。一転攻勢すら許されなれないと思います。

「となると……一番あり得そうなのは生贄、などでしょうか」  
「め、メドゥーサ。流石にそれは、ちよつと血生臭い発想だと思っただけど」

「そもそも、ここまで回ってきて彼らを生贄に捧げている様子などはありませんでしたし」

＜どうにも、様々な意見は出ているが、どれもイマイチ答えだとは

思えない。貴方も少し考えてみたが、そもそも頭を使う事は得意ではない。速攻で貴方は思考する事を諦めた。

ホモ君アホすぎいい！ うーん今までの脳筋プレイが完全に悪影響を与えてて草。

「取り敢えず、今はそれは置いておこう。兎に角、あの竜の魔女が贗作の英霊を作り、特異点を作り、何かを為そうとしている、それだけ分かってるんだ。方針は変わらず、竜の魔女の元へたどり着いて、彼女を阻止する！」

話がゴチャゴチャしてきた所で、藤丸君がスパツと纏めてくれました。流石ほんへで人理を成し遂げたお人。サーヴァント達のもめ事の間に入り込むなんて余程のコミュ強者じゃないと出来ませんね……！

「ここで足踏みする前に、先ずは行動！ とりあえずは、それでいいかな！」

〽️いいね、実に分かりやすい。

〽️いいね。馬鹿にも優しい方針だ！

ホモ君に合ってるのは下だと思うので下を選んでおきましょうか（無慈悲） 更にホモ君の脳筋化が加速していく……の、脳筋化すればその分筋力に補正かかるかもしれない……（僅かな希望）

「そうそう！ 俺達に考えるのは似合わないんだよ」

「ま、マスター！ 流石に考えなしというのは良くありませんよ！」

香子さんに叱られました……ホンマ、こういう大人しい人に叱られるのが、一番心に響くねんな。だけでも同時に興奮する……興奮しない？

「香子さんの言う通り、考えるのを放棄する、というのは余り宜しくないかと、マスター」

「う、そういう積りではないんだけど……」

「けど、確かに考えてばかりで何もしない、というのも宜しくありません。今は行動をすべきという方針も、間違っていないと思います」

〽️賛同した貴方、頷いたマッシュに続き、他の三人も一様に首を縦に振った。

「そもそも、先ずはあの一階のバーサーカーをどうにかしない事には、全階の十分な探索も不可能でしょう！」

「考えるにしても、目の前の問題を何とかしてから、ですね」

「問題を解決している内に、何かしらヒントも出てくるかもしれないし」

「やっぱり皆、行動派なんすねえ〜（親近感） さて、後は香子さんだけですが…………？」

「はあ…………別に、行動するのが宜しくない、とは申しませんが。寧ろ、まず行動に移そうとするのは、マスターらしくて、宜しいかと思えますよ」

「そう笑顔で肯定してくれた香子。方針は決まった。先ずはこの特異点を全て探索しつくしそこで得られた情報を元に、改めて竜の魔女の目的について、考えを巡らせるのだ。」

「よしっ！ という事で、次の目標は一階。バーサーカーに追い出されてしまったてからいよいよ再チャレンジです。問題は小次郎がまたぞろ喧嘩を売って来ないかですが、その場合は取り合えず逃げる事としましょう。」

「——方針は決まったようだね。よし。ここからは僕らも全力でサポートさせてもらおうよ」

『万能の天才が一切仕事をせざるに終わる、つていうのも癪だからね。早速仕事をさせて貰ったよ。その壁を見てくれたまえ』

「そう言われ、貴方達は壁にかかった絵に視線を向けた。」

壁の絵…………あ、オケキャスさんが描いてありますね。オケキャスさんが凄いニコヤカに笑っている周りには、崩れ落ちている男が何人も。（恰好が）犬だよ。ヨツンヴァインになってるんだよ。

『そこに書かれた壁画から、先程迄可笑しな反応が出ていた。驚くなかれ、だよ？』

『——君達、マスターの様な反応だ』

ドウファッ!?

『正直、どうしてそんな反応が出てきたのかは分からないけど。ビリー・ザ・キッドは補強、と言っていたが、それどころの話では無かつ



た、という事は分かった。そこにある絵は……サーヴァントにとつてのマスターだ、要はこの特異点にサーヴァントを留める為の楔だよ！』

オッ、ロレ、ロ、ル、ラ、ア、（大困惑ホモ） 待たんかいオイ!!  
〈全員が目を見開く。この絵が、サーヴァントを現世に留める為の楔だと、ロマニは言うのだ。マスターというのは、基本的に人間でなければ出来ないのではないのか？

『信じられないのも分かるけど……事実だと言わざるを得ない』

『アーチャー、ライダー、キャスターは正確にはサーヴァント擬きだ。既存の、ルール通りのマスターでなくても問題はないのかもしれないね』

（独自の） 贗作英霊の設定がガンガン出てきてブルっちまうよ……！（戦慄） 絵が楔、だから取り外されると消滅する、と。ビリー君が消滅したのはコレを示してたんすねえ……（感心） 成程。補強したのは存在そのものだったんすねえ（感心） してる場合じゃないんだろオラアン!?

「……じゃあ、この絵を破壊、もしくは外すことが出来れば？」

『敵サーヴァントは間違いなく消滅する、と思われる。彼らがそれぞれ階の特定のエリアに配されていた理由はこれだろう。その絵があつた所から動けなかった、という事だよ』

〈じゃあバーサーカーにも、こういう楔の絵があるのかな。〉

〈バーサーカーは、あの場所から出てこなかった……つて事は！ 気付いてしまわれましたか……少なくとも、バーサーカーの攻略手段は確定しましたね。アレをマトモに相手するのは流石にちよつと馬鹿すぎるので、楽な道があるならそちらから確実に崩しに行きましよう。あ、選択肢は上だよね（今更）

「バーサーカーの弱点、見つけたね」

「正式な英霊としての弱点が、あるかもしれませんが。それを探すよりは、此方の方が楽そうですねー！」

〈バーサーカーの攻略手段は早速見つかった。カルデアの全能力を生かせる、というのがここまで頼もしいとは。間違いなくこの特異点

で、カルデアのバックアップの重要性が身に染みて理解できた。

ああ……(感激)やられたなあこりや……(骨抜き) もうロマニ兄貴とダ・ヴィンチちゃんが居ないと駄目な体になっちまったよ……これからもめっちゃ頼っていききたい(小並感)

「流石です、ドクター!」

◇ダ・ヴィンチちゃんは凄いね!

◇万能の天才に不可能は無いなあ!

やっぱりコレからお世話になるダ・ヴィンチちゃんを出来るだけ褒めたいので下で。

『い、いやあ。それ程でも』

『ふふーん! だろう? もっと褒めてくれてもいいのだよ? 本造院君』

◇強力なサポートがある。如何に竜の魔女の目的が不明だろうと、なんとかなる、という安心感があつた。貴方達はその足を階段へと向けた。向かうは、一階。リベンジへ。

今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。

?

## 贗作逆襲画廊 ルーブル その十五

皆さんこんにちは、ノンケ（渚の第六点魔王）です。今回のレイドではお世話になりました。ありがとナス！

前回、いよいよ一階へと戻り、探索のリベンジです。一回目はバーサーカー君に追い立てられて、取り敢えず切り替えるべく引き返しましたが、今回は攻略法もあります。少なくとも前回みたく、あっさり負けるという事も無いと思います。

「……アサシンは？」

「居ません。サーヴァント反応も無いそうです」

「此方にも、居ませんな……となれば、居そうなのは、リュシユ―翼」  
〳―アサシンは、今の所、影も形も見せていない。カルデアの分析から唯一外れた行動、キャスターも実力派だと言っていた事から、異質な存在として、最大限の警戒を行っていたがどうやら空振りに終わった様だ。

「強敵と会わないのは、幸いだね」

「今の内にドウノン、リュシユ―、何方かへ向かうべきでしょうが」

「何方に向かうのが宜しいのでしょうか……」

〳 未探索のエリア、リュシユ―翼。

〳 〳 バーサーカーにリベンジ、ドウノン翼。

んー……個人的にはバーサーカーとの再戦も悪くないですが、ここは最後の未確認サーヴァントを確認しておきたい所です。え？ まだ確認してないサーヴァント居るって？ もうその一人は正体バレてるようなものだから……

「では未探索のエリアへ侵攻するのでしょうか」

『今の所、サーヴァントの七つのクラスで、僕らの前に姿を見せていないのは、セイバーかランサー。何方が出てくるのかな』

『何方にせよ、聖杯戦争ではアタリとされる三騎士だ。キャスターはバーサーカーとアサシン、そして自分を強敵、として位置づけしてたけど、油断はできないね』

〳 階段を下りて右。リュシユ―翼へと、貴方達は足を向けて、歩み

を進め始める。

「……そう言えば、結局三階のドウノン翼のサーヴァントは何方だったんでしようか」

「一応、ドウノン翼を覗いては見ましたが、絵はもう取り外されてたから……消滅してしまったのかもしれない」

そうなんですよねえ。一応、三階のドウノン翼を覗いて見たんですけど、ぽつかりと絵一枚分だけ綺麗に開いてたんですよね。スペース。消えてるならラクチンですけど。消えてる気がしません。

という事で、恐らくここを出てくるサーヴァントは恐らくセイバーだと思っただけですけどどんなサーヴァントかは、今までの傾向から想像するのは無理ですね……

「——来たか。カルデアの者達」

「あ、貴方は……！」

「セイバー、又は『偉大なる竜殺し』。自分には過ぎた二つ名で、すまない。だが主がそうと望んで作った存在なのでな。そう簡単には負けはしない」

超ストレート!?(レ) ま、まさかのジークフリートさんでした……ここはほんへと変わらないんですね。

「嘘だろ……ジークフリートさんが相手とか！」

「オルレアンであの人の実力は、良く分かっています……！」

「……は、バーサーカーやアサシン、そして自分には及ばない、か。まんまと騙されたね」

＜正に智慧をもって相手を翻弄する魔女。最後まで、自分達を見事にかき乱す手練手管は見事というしかない。＞

「そんな事はない。キャスターたちと比べれば、今の俺はどうしても劣る」

「私が見る限りではとてもそうは思えませんな！ ジークフリート殿！」

凄い魔力が迸っておられるように見えます、ジークフリート殿。つーか心なしか顔に自信が満ち溢れているような気もする。贗作英霊のジークフリート殿は、ほんへでもこっちでも基本的には自信満々

にふるまう傾向がある可能性が微レ存……？

「とはいえ、至らぬこの身であっても。任せられた命くらいは、必ず果たして見せると決めているのでな……悪いが、手加減は出来ん」

◇堂々たる立ち姿。手に携えるは、竜殺しの魔剣、バルムンク。大英雄ジークフリートを相手に、貴方達の背筋は冷たく冷え切っていた。

「さあ、死力を尽くしてくるがいい！」

コレは大英雄ですねえ……間違いない（確信）

ま、カットなんですけどね（無慈悲） あ！ 止めて！ 物を投げないでください！ 許して！ 許し亭！

だって！ だって……ジークフリートさん強すぎィ！（諦め） 全

然攻撃食らっても怯まないしめっちゃ警戒してる背中弱点なんてそう簡単に突ける訳も無いし、だったら絵画破壊しようと思ったら回転率グンバツの宝具で防ごうとしてくるしで、ドラグーン・セイバー君ちゃんと同じ位苦戦したゾ……これ全部動画化は無理なんだよなあ……（諦観）

くという事で、進展があるまでカ……ツトオ！く

◇——勝てない。真つ向勝負で全く押し負けていない。此方も万夫不当の英霊が四騎、決して戦力的に負けているとは思わない。だというのに……ジークフリートは、まだ堂々と立っている。その身に深い手傷を負いながらも、それでも堂々と！

「——どうした。まだ、俺は立っているぞ」

「……っ！」

「大英雄、ジークフリート……！ ここまで、とは！」

ここまで苦戦してる最大の理由は、やはりその身に浴びたファブニールの血によるカチカチマンでしょうね……ランクA以上じゃないと攻撃通さないとか何だよ（戦慄） 仕方ないとカットの間に一面令呪切つてメドウスさんに突っ込んでもらったんですが……倒し切れませんか？ 倒し切れませんでした……（自問自答）

「……あの子の全力をもって、それでも駄目とは」

「いいや、ギリシャの強き女神よ。貴女の一撃は確かに悪竜の加護を

破り、この身に痛手を負わせた……だが、俺にも守るべきものがあり、それを果たさずして倒れる訳にはいかないだけだ。気負う必要はない」

カッコいい（確信） 戦うべき敵にも気遣いを見せるジークフリートさんは英雄の鏡ってハッキリ分かんだね。いや感心してる場合じゃありません。令呪一画切って、それでも倒し切れないとかほんへなら即撤退モノです。

『め、めちやくちやだ……贗作だからって事で。もしかしたら、もしかしたら弱体化してる可能性を信じてたけど……！』

『オルレアンで、黒いバーサーカーを撃退し、ファブニールを下し、大海魔を退けたその実力は全くもって失われていないか。悪い夢でも見るようだよ』

＜ズン、ズンと。重たい足音を響かせてジークフリートが迫る。重症の筈なのに、その足取りに一切の陰りは見えず。しっかりと、大地を踏みしめ向かい来るその姿は、正に英傑、英霊、英雄の代名詞に相応しいだろう。

もう負けを認めたいです（半泣き） けどメドゥーサさんの攻撃が通って、ダメージは確実に入ったと思うので、諦める訳には行きませんが。何か、何かあと一手があれば仕留められるかもしれないのですが……！

「――では、僕がお相手しよう」

＜その前に降り立つは……白百合。シュヴァリエ・デオンが竜殺しの前に立つ。竜騎兵対竜殺し。夢のマツチと言っても、嘘ではないだろう。

「本当は、バーサーカー相手に使う積りだったけど……でも、貴方程式の英傑相手に出し惜しみは不可能だね」

「……成程、宝具か」

「宝具に太刀打ちするのであれば、やはり宝具しかないだろう」

ヒエツ、デオン君ちゃんの不敵な笑みがカッコ良すぎひん……？

カワイイ！ とか言ってる場合じゃないですよ。間違いない、今あそこに立っているデオン君ちゃんは、白百合の盾たる『シュヴァリエ・

デオン』、これは まちがいなく ふといしーちきん だ！

「流石に、メドゥーサからアレだけの一撃を食らって、全く影響がない、という訳ではないらしい……眼が少し、揺れている」

「……！」

「今であれば、十分に通用するだろう。僕の宝具もね——『百合の花散る剣の舞踏』」

〈——ゆらり。華のようにデオンが揺れる。一瞬その姿を見失った、と思った時には既に彼方に。と思えば此方に。瞬間移動の様に不自然な移動ではない、見惚れた一瞬に抜けていく鮮やかな足運び。その動きに、宙に舞う百合の幻覚を、貴方は見た。

「これは……そこかつ!？」

「外れだ。ジークフリート」

「っ!？」

〈一瞬の出来事だった。ジークフリートが振り切った剣の先に、デオンは居ない。既に背後へと、するりと回っていたのだ。

ぴえん越えてパオン(精神崩壊)で、デオン君ちゃんがカツコ良すぎる……惚れますねえ……惚れます惚れます……!」

「惜しみなない賞賛を、ジークフリート、貴方へ」

「——っ!」

「そして、さらばだ」

〈振り払おうとする魔剣よりも早く、鋭く竜騎士が一刺しを……その背中に突き立てていた。文字通り、一撃で、相手を貫いて見せたのだ。

「……見事だ。同じセイバーとしてその技量、感服せざるを得ない」  
「いいや、メドゥーサの宝具の一撃が無ければ、ここまでは通じなかっただろう。大英雄という肩書に嘘はないよ」

「その様に……呼ばれる……のは……こそばゆいの、だがな……」

〈黄金の光となって、ジークフリートが消えていく。真っ向から自分達を圧倒した、英雄らしい戦いを終えて。

カットされたとはいえ、今のところ一番カツコ良かったです、ジークさん……そしてデオン君ちゃんにガチで喝采を……カツコ良かった

たです。

今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。



## 贗作逆襲画廊 ルーブル その十六

皆さんこんにちは、ノンケ（若い神槍）です。

前回は……もう、見事というしかありません。アトランティスで負けたとか信じられないですね。デオン君ちゃん、ヤバかったです。はっ！ ほんへのアトランティスはデオン君ちゃんの活躍が許せなかつた運営の作り出した異聞帯という可能性が微レ存……？ つまみ実際はデオン君ちゃんはあるの鉄の軍師を打ち破つて単騎突破してたんだよ！

……失礼しました。ちょっと色々頭が炸裂しましたね。落ち着きましょう。取り敢えず強敵、ジークフリートさんを無事撃破したんですから。というかジークフリートさんもカツコ良く無かつた？（再発）

「——これで、四人。そして、一階の敵は……あと一人」

「ドウノン翼のバーサーカー……いよいよもって、最大の難敵が出てきましたな」

＜ジークフリートよりも。キャスターよりも。アサシンよりも。恐らく、あのバーサーカーは強いだろう。全員分かつていた。正に怪物。絶対的な強者。魔王と言つても差し支えないという事を、貴方達は悟っていた。

（あの数相手にマトモに戦うつもりなんて）ないです。というか、あの軍勢何人居るかご存知？ 一万人よ？ 如何にサーヴァント五人がかりでも、全部は相手出来ずに磨り潰されて終わりよ？

「あの数を押し返すのは先ず不可能だ。となればマトモに戦うのは流石に……」

「しかし、あの数の群れ相手に下手な搦め手が通用するかなれば、経験上は無理と申させていただきましょう！」

＜圧倒的な数を相手に最後まで善戦して見せたレオニダスの言となれば、説得力が違う。正道も邪道も、あの数相手では簡単には通用しない。手だてが今の所、ない。

数の力は偉大つてそれ一番言われてるから。FGOで言えばどれ

くらいだ？ アンリマユの幕間の物語です……（未突破兄貴） 幕間の物語じゃねえ、バフで言えバフで！ あゝ、キャストリアバフマシマシです……（未所持兄貴）

「本当に、どうしたもんか……ん？」

くふと意見を求めようとした隣、立香がフオウに袖を引かれている。そのまま袖を引かれるまま窓際へと向かっていき……どうやら、フオウは窓からの景色が見たかったらしい。

「つたく、結構真剣な話してるのに、お前は呑気……だ……？」

……ここで藤丸君が停止。すつごいブツブツ言ってる。不審者みたい（直球）

「そっか、ここには中庭があつて……ごめんフオウ君、ちよつと待ってな」

くその直後だった。フオウをそつと床に降ろし急いで立香が引き返し……シユリ―翼に設置された館内マップの元へと走り出した。指を使ってチェックしているのは……ドウノン翼の間取りだ。

「……先輩？」

「マシユ、ちよつと作戦を思いついたんだけど……皆も、聞いてくれなかな」

どうやら何かしら閃いたようですがまあお決まりの暗転が入りました。ちよつと位プレイヤー君に作戦内容を教えて欲しいんですが？ どうして僕をこんなに困らせるんですか？

くロードカ……ツトオ！く

さて、画面に灯りが戻つていよいよバーサーカー君攻略戦ですが。

く——踏み込んだドウノン翼。初めて踏み込んだ時と変わらない、無数の絵がならんだ画廊だ。しかし今回は……スケルトンの一体すら見当たらない。斥候すら配していない。であれば油断しているのか、等とは思わない。

『……潜んでいる？』

「いいえ、そのような事はないでしょう。此方との戦力差は圧倒的です。姿を見せないのはあえて……姿を見せる時に、全力で此方を威圧しようという魂胆かと」



『……彼女、聞いている様には見えないけど、大丈夫なのかい?』

「ががががががががががががががが……」

震えすぎて紫の何かにしか見えませんねえ! (追撃) いやそれどころじゃなくて顔青いわおめめグルグルだわ完全にガツタガタに震えて(強調)るわで駄目なもんは駄目なんじゃあ!! (心配) どうしてこの話を受けちゃったんですかあ!?! 冷静になって!?

「香子殿! 緊張しすぎないように! 緊張すれば下手を打ちましよう!」

「ははははははっ! わか、わかかつ! わかりっ! はい!」

わかりましたじゃねえよお前えもう限界寸前になってるんじゃないんだよだからわかつてるか? 香子さんが震えてんだよなあ!?! レオニダス王はどうしてよりにもよって一番荒事に向いてなさそうな香子さんをパートナーとして指名したんでしようか……

〈惨状、と呼ぶのが相応しい香子の状態。流石にマスターとして、何か言ってやらねばマズいと思った貴方は……

〈任せる香子さん。俺が必ず守って見せるからな。

〈いざとなったら俺がバーサーカーを直接打ち取るさ!」

やってやろうじゃねえの! (選択肢上) そりゃあやる気を出すっていったってそれなりにするのが限界なんですよねえ……ここで狂化EX発動しても何にもならないので落ち着いて戦いましょう。

「はわ……ふ、ふう……落ち着いて……だ、だいじょうぶ……です。何とか、あの、えっと多分何とかかります……はい……」

何とかならなさそう…… (小並感) 死人みたいな顔色してんなお前な。とはいえ、もう敵は目の前に迫ってきてます。最早……戻れる場所なんて無いんだよ (背水の陣)

〈何とか呼吸を整え成した香子。それを見て、一行の眼の前にレオニダスが堂々と立つ。見据える先には、無数の骸骨の群れ。

「では香子殿、始めますぞ! 用意を!」

「わ、分かりましたっ」

「——さあ、かかつて来るがいい不死者の軍勢よ! 貴殿らが立ち向かうのは……我が不屈の軍勢。そう容易くは打ち破れぬと知れ!」

……おっ？ レオニダス王の様子が？

〽——レオニダスの周りに巻き起こる、焰。どこからか遠く、聞こえる声。それは雄々しく、何処までも届く戦士たちの鬨の声だった。響くのは、足音。その音に、一瞬不死の軍勢が怖気づいたようにも見えた。

「……これはっ!？」

「無数の数も、人ならざる威容も、我らには通じぬ！ さあ、者共！ 見せつけてやれ！ コレが！ 我らが！ スパルタであると！」

〽その音が耳にひときわ大きく響いた時、貴方達を取り巻く様に。鉾や大盾を構えた無数の男たちが姿を現す。脈動する筋肉、目の前のスケルトンの軍勢を見つめる目は、鋭い。

空間からにじみ出てくるように出てくるラウンドのシールド、そしてレオニダス王とそっくりな長槍たち……これは、間違いありません。お。も。し。ろ。い。こ。と。に。な。つ。て。ま。す。ね。え。ゝ

『彼らは……間違いはない！ かのレオニダスが率いた不屈の三百人、スパルタを表したかのような屈強なる軍勢、嘗てペルシャ軍相手に一切引かず、立ち向かったあの!』

「これぞ我が宝具、『炎門デルモビユライ・エフモタイアの守護者』アアアア！」

〽ドウノン翼の絵画を、三百人の勇者達の猛々しい咆哮が揺らす。

「■■■■■■■■……っ!？」

「黒い巨人よ、貴方の軍勢は津波の如く、我々に押し寄せるだろう。だが！ その程度の苦境、生前に既に戦い抜いた！ 死して英霊と呼ばれるようになった今、もう一度立ち向かうのになんの苦労が有ろうか!」

〽レオニダスの言葉に応える様に多くの兵士達が窓枠すら揺らす怒号を上げる。それに反応するかの如く目の前の白い軍勢も、齒を力チカチと鳴らして威嚇の様に槍を突き出す。

皆様……お気づきでしょうか。ペルシャ軍とはすなわちペルシア。バーサーカー……そう。彼、ダレイオス三世君が率いていた軍勢です。彼はレオニダス王に苦戦しギリシャを諦めた男、クセルクセス一

世を祖先に持っている男でもあります。因縁の対決ですよクオレハ間違いない……レオニダス王は気づいてませんけれど。

「――■■■■■■■■!!!」

「全軍、決して奴らを先に行かせてはならぬ！ 構えええい！」

∨巨人の号令に応え、突っ込んでくる死の群れを、炎の番人達の盾の壁が押し留める……闘いの火ぶたは、今切って落とされたのだ。

炎の激戦が始まった所で、今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。

## 贗作逆襲画廊 ルーブル その十七

皆さんこんにちは、ノンケ（破壊の大王）です。セプテムで彼女をどう描くか割と悩んでるゾ……

前回は、アツウイ！ 戦いが始まりました。ダレイオス三世とレオニダス一世、ペルシアとスパルタの、時を超えた因縁の対決です。めっちゃ場所狭いですけど。出来れば藤丸君達が楔を見つけるまで、しつかりと目に焼き付けたい所さんです。

「怯むな！ 耐えるのだ！ 耐えて、耐えて、耐えて！ そして爆発させる！」

＜ラウンドシールドに、無数の鈍が叩き付けられる。だが、一步もレオニダスは、スパルタの兵士たちは、引いていない。スケルトン達のぶつかり合う音は重たい。衝突の衝撃は凄まじい物だと分かるが、それでも微動だにしないのだ。

はえく……すっごい頼もしい……もうレオニダス王だけでいいんじゃないかな。こうして後方にホモ君と香子さんが待機してる意味はあるのでしょうか。そう思う位には硬いです、レオニダス王。

しかし、防いでばかりで反撃は無し。相手はどれだけガン彫りしても決して萎えないスケルトン達相手。反撃の気を伺うにしても何時になるのか、スツゲエキツそうだゾ……

＜絶えず突撃して来るスケルトン達を只管に凌ぎ続けるスパルタの兵士たちが……その僅かな一瞬、筋肉を盛り上がらせたように見えた。相手の攻撃に合わせる様に一斉にシールドチャージ、相手の体勢を見事に崩してみせる。

「——今だっ！ 香子殿！」

「は、はいっ！ 清明様、直伝です！」

＜——それに気が付いた直後、合図が飛んだ。香子の筆が走り、描かれた文字が宙へと飛ぶ。その文字はレオニダス達を取り囲むように飛んで……輝きをもって彼らを包み込んだ。その直後、咆哮を上げたスパルタ兵たちがスケルトンの軍勢を、駆逐し始めたのだ。

あつ、おい待てい、うまいぞカウンター（空気） このカウンターは





の意) あーもう何回でもいつてくれ(香子無双)

「ドクター・ロマニ! マスター達は!」

『絵を探しているが、今のところは見つかってない! もう少しかかりそうだ!』

▽——立香達は今、別動隊としてバーサーカーを成立させる楔を探している。その為にも決して、彼らを見つけさせないわけにはいかない。僅かでも気を向ければ、見つかりそうな場所で彼らは絵画の探索を行っているのだから。

あ、さつきから藤丸君達との会話が無かったと思つたら、ここに居なかつたのか。わからなかつた(小並感)

「承知いたしました! であれば、もう少し気炎を上げると致しましょう!」

うわ足音でズン……つて感じの重たい音が。盾で一気に押して、相手を転がして突き差し踏みつぶし蹴り飛ばしあーもう滅茶苦茶だよ……これはベスト出してる(確信) 元々から守勢には強いレオニダス王が、魔性特攻付与で恐ろしい強さを手に入れています。

で、どうやら作戦というのは楔となつて居る絵を探し出す事らしいですけど……藤丸君達何処で探しているんでしょうか。見当たらないですよ。少なくともこの通路一杯にスケルトンへが居るので廊下ではなさそうですが……?

「不死の軍勢、何するものぞ! 押し返せえ!」

「オオオオオオオオオオオオオオ!!」

▽スケルトン達が突つ込むたび、スパルタの分厚い壁に阻まれ砕け散る。あまりにも脆い攻勢と、城壁の如き守勢。勝負は、明らかに此方に分がある。このまま消耗戦を続ければ先ず負けは無いだらう……消耗戦を、続ければ、だが。

ん?(NT) ちよつと、後ろのデカイ人が、近づいている様に見えるんですけど……気のせい……何だこのバーサーカー!? (接近確認) や、やべえよやべえよ……ダレイオス君が業を煮やして突つ込んで来ちゃったよ。

「■■■■■■■■■■!!」

「ぬう、やはりこのままでは終わらせないですか！ 来い、狂戦士！  
今度は私が相手しましょう！ いぎっ！」

レオニダス王に一直線！ なれどレオニダス王、直線状に突っ込んで来たダレイオス君のコワ顔ダブルアックス（即死）を見事盾受け、パリイも決めてカウンター！ ダークソウルか何か？（賞賛）

あーでも自分の主の総突撃にスケルトン君も大興奮で攻め寄せて来ました。何やってんだアイツら……あく帰れよ（余裕ZERO）

「レオニダス様！」

「香子殿は兵の対処を！ こやつらが抜ければ、その分マスターの作戦遂行が遅れるやもしれません！」

「っ……分かりました！」

レオニダス王は、灰の方もかくやの迫真ローリングでダレイオス君の攻撃を凌いでいます。我々は目の前のスケルトン君に集中しましょう。ここで死んだら元も子もないからね、しようがないね。

＜俺は大将。後ろでドンと構えているのが役目だ。

＜俺は大将……なんてガラじゃねえんだよ！ 行くぜ行くぜ行くぜえ！

当然選択肢は下ですが（下衆顔）

「あ、マスター……！ 前に出ては！」

＜立香に危機が及べば元も子もない。少しでも動ける戦力があるなら、遊ばせておくのはそれこそ合理的ではない。この作戦の成功を少しでも高める為、貴方は前に出る、と貴方は叫ぶ。今度は止まらない。

「……っ！ それは……」

っしやあ！ 大暴れして経験値稼ぎしましょうか！ あのスケルトン君達相手なら、サーヴァントよりは戦えるってもんです！

『ちよ、本造院君!? 今回は君、戦いに向かう必要ないよね!』

『ロマニダメだ、頭に角生やしちやってるよ』

『うう、解析の結果が悪かったら即使用禁止を言いつけようかなホント……』

あ、そう言えば今日の夜でしたっけ。解析の結果が出るの。まあそれが出来るのも楽しみにしておきましょう。おいゴルア！ こつち来

いお前ら！ おい凶骨持つてんのかゴルア！ おいゴルア凶骨見せろ！ 寄こせ！ もつと寄こせバルバトス君！

といつても、このスケルトンからドロップするのは骨じやなくて塵っぽいけど。まあサーヴァントの宝具だし、劣化シャドウサーヴァントみたいなもんだから多少はね？

「——本造院殿！」

「文句は言わせない、と貴方は言う。此方に意識を向けさせるのが最大の自分の役割なのだから。であれば、大将首の自分はさぞ狙いたい事だろう。ならば自分が前に出るのは最も合理的な筈なのだ。」

「……本来であれば、お止めすべきなのでしょうが。しかし、此度ばかりは状況が違う！ 決して無茶をせず、必ずや生き残る事！」

「分かりナス！ というかもう三人くらい骨粉に変えてしまったからめっちゃスケルトン君達はお怒りです。逃げたら追撃されそうなんでやられる前にやっちゃおうよ!? やっちゃおうよ!? フェーズですが、周りのスパルタンな皆様がお強いので周りを気にする事も無く、目の前に出て来た相手を捻り潰すだけで大丈夫ですね。オラッ！ スイカ割りっ！（TNTNTN亭）」

「オオオッ！」

「ゼアアアア！ ハアッ！ アアウ！」

「ホアッ！ ホアッ！ ホアアアアアアアアアアア！」

「シヨアッ！ エイシャア……！」

「スツゲエオタクっぽいスパルタへが居る。ハッキリ……ちよつと待つて!? 何処かのプロレスラーみたいな方いらつしやいませんか？ した今!? 製作スタッフにもホモが居るのか……（困惑）」

「今の所は順調ですが……本造院殿、ご油断召されないう！ ここからが本番です！」

「良い感じだ……と思つていた思考を、レオニダスの一言で引き締めた。そうだ、戦いは始まったばかり。敵は無数、不利な状況には変わりないのだ。ここで油断し、立香達がやられる事だけは避けなければならぬ。」

不利な状況、上等等だ。そういう時こそ実力がはつきり出てくるって

ハッキリ分かんだね。オラ、往生旋回！（回転攻撃）ホラスケルトン  
君の頭も吹っ飛ばした事だしどんどん行くどー。  
と言った所で今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。

## 贗作逆襲画廊 ルーブル その十八

皆様こんにちは、ノンケ（ローマ）です。どのローマかって？ 分からないとかローマが足りてないなお前、稽古の続きだ！（ローマ並感）

前回はいよいよダレイオス君との本格戦闘、スケルトン君の数が太いぜ……（絶望） けれどテルモピュライの戦いでレオニダス王が戦ったのは目の前の奴らより全く格上の相手です。畏れるに足らないって、これも分かるしかねえなあ……（変化形）

「ヌウン！」

「■■■■……！」

∠交差で振り切った斧の一撃を、身を低くしすり抜けつつ……突進の勢いに合わせ地面に槍をつつかえ棒の様に立て、膝を立て座り、どっしりと構える。勢いのままに、レオニダスの槍が馬防柵の様にバーサーカーを貫いた。

『うっひょう！ 強烈なカウンターだなあ！』

「————■■■■■■■■！」

「効いているかどうかは正直微妙ですね、全く怯む様子も見せないとは！」

∠レオニダスの槍は深く突き刺さったように見えたが、しかし。それでもバーサーカーはその巨大な見かけを裏切らず、そんな物を無視して動き回る。

ダレイオス君は宝具がファイチャーさがちだけど、タフネスとかパワーもずば抜けてる、ステータスもバツチリ一流な頭おかしい（誉め言葉）なトップクラスのサーヴァントですよねえ。レオニダス王は強いサーヴァントですけど、相手が悪い。

『レオニダス王とバーサーカー、双方トップクラスのサーヴァントだ。戦いも激しくなるとは思っていたけど、凄まじいね……凄まじいといえ、まあ向こうの彼女もだけど』

「えいっ！」

後ろの香子さん無数の札や術をばら撒いてスケルトンを悉く塵殺

しているのが見える見える。その不安そうな表情とは裏腹にえげつない殲滅速度、ええぞ、ええぞ！（賞賛）ギャップが非常に可愛くて、非常に宜しい。

「……………」

「……………!?!」

スケルトン君が若干下がっている様にすら見えます。逃げんじやねえよ！

……と言いたい所ですがあの殲滅速度を考えると逃げてもしようがないと思うんですけど（名推理）秒で三体位あつと言う間に処理されています。魔性属性のノーマルエネミー相手には相当強いので、もしかして香子さんが居ればそこまで苦戦しない説が微レ存……？

「こ、コレを、こうして……………こうですね！」

『うーん、彼女の自己申告の評価に修正入れた方が良いかもしれないなあ、これ。ハマると彼女の爆発力は自己申告の能力を遥かに凌ぐよ』

修正っていうか、先ず間違いなくこの人って雑魚専なら多分トップクラスの実力なんだよなあ……………アーツヨソ（確信）

『とはいえ、こうして殲滅速度は爆発的に上がってるんだから、悪い事ではないよ。間違いなくね』

＜周りのスパルタ兵にも定期的に能力強化の術を掛けているのだが、その時の殲滅力の上昇も凄まじいものだ。キャスターの中でも、こういった人外の群れに対しては、想像を遥かに超えて強みを生かせるようだ。

まあ名前アリ魔性の群れとかいう悪夢みたいな百鬼夜行とか普通にいらした型月の魔境、平安界限出身ですし……………そう言った能力に特化してても不思議じゃないですよっば。香子さんは強い子、分かる？ この事実の確実さ。

『今くらいは此方が有利にあつて欲しいよ……………此方の時間稼ぎも、何処までも持つものじゃないんだから』

＜——視線を、レオニダスとバーサーカーに戻す。アレは、この双方の軍勢の大將戦。そして……………この薄氷にも等しい拮抗を誤魔化する



「——まだまだあー！」

「そしてその反撃は……烈火の様に燃え上がる、彼の情熱の様に苛烈。鋭く、三連続で胸板に傷を刻み込む。」

しかし、今の状況でもレオニダス王が有利とは言えません。ダレイオス君のパワーはお強い……！　ほんへでもRPGでもマトモに食らったらやられちゃうよ!?　やられちゃうよ!?　(確信)

『……そろそろ、令呪で伸ばしては居るが彼の宝具の展開時間も限界だ』

あ、そういえばそつすねえ…… (納得)　レオニダス王の宝具だつて、別に無尽蔵に続けられる訳もないですし、ここまでもたせるにはそりゃあ令呪のバックアップも受けなくてもいけない (魔力の戒め)　アレ?　ちよつと待つてこのホモ君の状況つて、結構危ないんじゃない?

『藤丸君の方は?』

『探索していない範囲はあと少しだよ。敵は此方に大分意識を取られて、間違いなく中庭には意識を向けていない。探索に支障も無い筈だから、そう時間もかからないだろう』

おや、暗転するつて事は、作戦立ててた時の回想、ですかね?　とはいえ長々説明を聞くのもテンポがアレなので……ある程度はカットしてかみ砕いて説明しましょうか。

く力……ツトオ!く

……理解しました。藤丸君が中庭を見て思いついた作戦。

ルーブル美術館、ドウノン翼は二つの中庭を持つ建物です。当然ながら上までぶち抜いている訳ですが。残りの四人はそこから建物内の絵画を探っています。で、どうやって侵入したかという……

『しかし、二階の窓からの侵入とは、思いつかなかつたね。二階は既に此方が撃退していて、誰も居ない。そこから飛び降りれば、もし向こうが数で道を阻もうと関係なく、一階を調査し……弱点の絵を発見でききる』

とまあ、こんな感じです。楔の絵を破壊すれば『早コイツもう終わりがいいな!』レベルで終わると思われるので、やはり搦め手でいつて



たんすね。

とはいえもう待ちきれないよ、早く外してくれ！（必死）レオニダス王は当然、香子さんも今は押せ押せですが、あのまま行くと魔力が枯渇するかもしれないので出来れば急いでほしいもんじやい！

＜そして、ロマニの恐れていた事態は、最悪のタイミングで訪れてしまった。あともう僅かで探索も終わる……そんな時に。

「っ……申し訳ありません……宝具の、展開時間が！」

『えっ！』

エエツ!? ちよ、レオニダス王勘弁しちくりー！ ここでレオニダス王の軍勢が居なくなったら一瞬で終わりゾ……これ（軍勢相手）無理ゾ……

＜隣に一瞬視線を向ける。屈強なスパルタ兵が、僅かに透けているのが見えた。ここでレオニダスの軍の援護が無くなれば、自分が無事でいられるかなど容易に想像が付く。そして更に……自分達が押し切られれば、立香達も……ここで、僅かでも時間を稼がねばならない。

＜――俺が囷になる！

＜――令呪装填！ 香子さん、行くよ！

RTA奏者兄貴姉貴なら前者でも行けると思うんだけどなあオレモナ……拙者には無理だという事は悟っているので、無理はしません。炎神全開！

「それでは僭越ながら……!?!」

よし、後は香子さんの全体宝具でスケルトン君達を少しでも……あれー？ おかしいね（隣に）誰も居ないね（戦慄） 待つて予想を遥かに超えて宝具の限界が早いですオーマンマミアマンマミアアアア  
“アアア”アアアアアアアアアア……！（大混乱）

「マスター、下がってください、レオニダス様の宝具が！」

＜……瞬間、貴方の背筋に、稲妻が走った。下がる、などと、寧ろ前へ出なければならぬと。

ファツ!? ちよ、下がってホモ君下がって！ 乙っちやう！ ここで終わるとかねー小生やだ！ まだ特異点一個終わったばかりなんです！ あ、操作効かない!? ムービー始まってる！（ホモガキ）



ですが、濃密な時間でした……（満身創痍）  
今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。

## 鷹作逆襲画廊 ルーブル その十九

皆さんこんにちは、ノンケ（月狂い叔父上）です。

前回は、レオニダス王と香子さんの共闘によつて僅かな時間を稼ぎ、見事な勝利を挽ぎ取りました。見事な勝利誇らしくないの……？（恍惚）とはいえ、全力を發揮しきれず敗北していったダレイオス君は悲哀に見えましたね……

〽——思わず、腰を下ろす。判断が間違つて居れば、自分は間違ひなく死んでいただろうと分かる。香子を信じ令呪を切つたが、それは最高の一手だったのだ。一步でも判断が遅れていたら、自分は躊躇いも無く、スケルトンの群れにバットを振りかぶつて……

「マスター！……無事ですか！」

〽香子の声に、そこで思考を打ち切つた。駆け寄り、此方の顔を覗き込む香子に、軽く手を上げて返す。ぶつ潰してやるというあの爆発的な闘志は何処かへ消え去つてしまつて、腰が抜けて、立てもしなかつた。

邪剣『夜』君でも握つてんの？ っていう位なんか、血走つてましたしねえ……というか前兆無かつたのが怖すぎる（困惑） いや、最初から物騒な選択肢が度々出ていたのはその影響である可能性があるようにでないようである……？（確信無し） いやー、だとしても急にこんな凶暴化するとか全然想像もつかないんだよなあ……ホモ君血気盛ん過ぎない？ いや、元から血気盛んか（掌返し）

「お怪我等は……なさそう、ですな。良かった……」

〽貴方の眼の前で、香子が目をウルウルとさせ始めた。

フアツ!?

「マスター……あの時点では、周りに、レオニダス様の、お仲間は、居なかつたのですよ？ 死んでも、不思議では無かつた……令呪を切つた時、何故お逃げ下さらなかつたのですか」

すまナス！ いや、でもあの時はマジで操作効かなくて……選択肢も出ないという徹底ぶりだったんです！ 許してください！ センセンシャル！

「どうか、どうか……ご無茶はなさらないでください……」

〈〈心配させて、ゴメン。〉〉

〈〈もうちよつと臆病になる位が、丁度いいかな。〉〉

うーん……ここはあんまりシリアス過ぎても流石に宜しくないと思うので、ちよつと茶化す位で、IKEYA! (選択肢下)

「いいえ、臆病なんて……そんな事、ありませんから。生き残るために逃げても、誰も臆病なんて言いませんよ」

〈少し微笑んで、そう香子は返す。では、次からは真っ先に尻尾巻いて逃げ出そうかな、と返すと、また少し笑ってくれた。

良し! これで香子さんへのフォローは終わったな! (確信) こんな事ばかりしてたら何時か見放されると思うので、そろそろ学習しましょう (ゲンドウポーズ)

『……うん、本当に間に合ってよかった……ギリギリだったね』

「ええ。本造院殿が令呪を切ってくれなければ、些か危険だった、と言わざるを得ませんが……しかし」

〈レオニダスが、自分を見ている。あの時、一瞬目が合って。彼の目が見開かれているのが分かった。どうして、あんな表情をしたのだろうか。自分は……どんな顔をしていたのだろうか。』

『……いいえ! なにも。それより、先ずはマスター達との合流を目指しましょう! 全てのサーヴァントを撃退した、後はこの特異点を成立させた本人を探さねば』

不穏な文章、しかし追及は無し。でもノンケ知ってるよ、これ跡から追及来る奴や。やめてやめて暴かないで! (建前) ナイスウ! (本音) サーヴァントと個人で面談とか男女関係なくご褒美なんだよなあ……

『うん。これで敵性サーヴァントは全員居なくなったから好き勝手に調べられるだろう。しかし……結局ここまで来ても、張本人から何か干渉があった、とかは無かったか』

まあそれはほんへでもそうだったから (苦笑)

『——そりゃあ、あのサーヴァント達は指標だからね。 オネエサマ

……私の所に来る資格があるかどうか、確かめる為の ハアハア  
…… が、贗作英霊達を倒せなきゃ、私がこうやってアンタ等を招く  
必要性も無い。私の力を確かめる為にアアアアアアアアアア  
ちよつとつと待ちなさい』

〈聞こえたと思った声が、速攻で途切れた。というか、なんか聞こ  
えた。想像するのも色々ちよつと、憚られるような……

『——あー、なんだ。主は少しばかり用が出来た。代わって拙者が伝  
えよう。まあ資格はあると判断されたので、地下への道は開いておい  
た。覚悟が出来たなら……参られよ』

切れちやったよ…… (困惑) 折角シリウスで始まったBGMが、途  
中から一気にギャグ調に変わったんですがそれは。更に一転してシ  
リアスに戻りましたけど、もう誤魔化し気れないズエー!

『えつと、コレは……道が開けた、でいいのかな?』  
「大丈夫だ、とは思いますが……」

〈思わず香子と顔を見合わせる。雰囲気は凄まじい乱高下をして、  
風邪を引きそうなほどだったが……不思議と、一体何事かと、追及す  
る言葉が浮かばなかった。

まあ突っ込んだら負けって雰囲気だったら(ツッコミを入れるの  
は)駄目なもんは駄目なんじゃあ!! という事で、ここはもう藤丸君  
達と合流して、大人しくその地下、でしたっけ。そこへ向かうとしま  
しょう。

〈合流力……ツトオ!〉

「康友! 良かった、ドクターが不穏な事言ってたから!」

「マスター!」

〈階段から降りてくる立香達に手を振って無事を伝える。不穏、と  
呼ぶには些か度を越えたピンチだったとは思いますが、それは言わないで  
置く事にした。嘘を吐くのは良くないが、真実を話さないと余計な心  
配をかけないのは悪い事ではないと思うので。

藤丸君マシユちゃんお疲れ (陽気) メドゥーサさんもデオン君  
ちゃんもみんなお疲れ (陽気) ねー作戦キツかったねー。

「不穏どころではありません! マスターは、それは本当に、無茶な事

を……！」

「……康友、お前な」

「やつさんは何を？」

マシユちゃんそこについての追及はちよ、ちよつとキャンセルだ（必死） な？ 変な追及は良くない、すいません！それだけは……！ 追及するのだけは、すいません！ 許してください！ 何でもはしませんけど許してください！

＜貴方は止めようとしたが、しかし一瞬遅れ……結局、貴方は正座をさせられ、デオンからこんこんとお説教を貰う事となった。

「全く……君の熱意を僕は買っているけど、それも過ぎたら良くない。良いかい、あまり無茶はいけないよ」

「マスターのそれを止めるのは無駄だと思うのですが……」

＜だが、何よりも効いたのはメドウーサの一言だった。無駄、というのはちよつと酷いと思ったが、しかしそう言われても仕方ない無茶をしていた。もつと前に出ないようにする立ち回りも覚えるべきだろうか、と。思ってしまった。

それはそれでちよつと派手さがなくなるから迷い所さんですね。なんだかんだ言ってホモ君の前線突撃は結構絵になるので、その辺りの選択肢は残して太い見所さんが欲しい……（欲しがり投稿者）

「やつさんもそうです、この機会に先輩も……」

「俺は無茶してないからセーフ」

「せ・ん・ぱ・い？」

＜いつの間にか、立香も一瞬で正座していた。二人して正座しているのも、特異点F以来だろうか。あの時からちよつとも変わっていない、と貴方は特異点の空を遠く見つめた。

草。普段表情豊かな藤丸君が真顔で正座しているのが更に草を誘うんだよなあ……どこ見てるんでしょうねあの瞳は。分からない位目が変にこう、透き通ってるというか……吸い込まれそう（小並感）

『まあまあ、二人のマスターへのお説教もそこまでにしておこうか。さっきの放送を聞いただろう？』

「そ、そうだよ。さっきの声って……」

『お誘いのメッセージさ。そこを見てごらん』

◇ダ・ヴィンチの声に、貴方達足止め班はその視線を階段へと向けた。立香達が来る前にこの一階のシュリー翼に来ていた貴方達三人は、それを見つけていたのだ。

『さつきまでは無かった、ルーブル美術館、その地下への入り口だ』  
『どうやら向こうが解放したようだけど……どうやら、向こうさんは私達に、自分の元へと辿り着いて欲しいらしいね』

何だあのデツカイモノ……（入口）これは誘ってんなあオイ（確信）ルーブル美術館の地下で殴り合いたいぜ（格闘ドカちゃん）あへへ、早く血塗れになろうや（狂気）

◇行かない選択肢は無いな、行こう立香。

◇誘っているのなら是非もない、参るぞ立香。

下は若干どころかちよつと時代錯誤過ぎる喋り方なのでちよつと上だよな？（選択肢）

◇貴方は、隣に立つ立香に、持っていたせんべいを投げつけた。それを受け取った立香はそれを半分に割って、残りを貴方に返した。バキリ、と互いにその煎餅を齧って……貴方達は先陣切って、地下への階段に足を踏み出そうとして……

「いけません」

◇互いのサーヴァントに阻止されたのだった。

よわい（確信）クソ雑魚ナメクジマスター君からまだ脱却できてませんねえ……（悲壮）将来的にはスフィンクス君くらいは素手で絞殺す位やってもらうから、分かったかあ!? 藤豚あ！ ホモ豚あ！（強者の座へ）Come on, Now!

今回はここまでとなります。ご視聴、ありがとうございました。



## 贋作逆襲画廊 ルーブル その二十

皆さんこんにちは、ノンケ（暴走キャット）です。ニンジン vertex を頂こう。

今回は邪ンヌの元へ、いよいよ侵攻ですが……五人のサーヴァントを撃退し、残るサーヴァントは恐らく三人。そのサーヴァントは、多分全員地下に居ると思います。というかあの音声で居なかつたら詐欺ですよ詐欺！

∨——地下への階段を下りた先に、その空間はあった。本来のルーブル美術館地下とは間違いなく違うだろう……そこには、床に散らばった無数のキャンパス、壁に散った絵の具、机の上に散乱する絵筆。巨大な、アトリエがあつた。

「——これは」

「まさか、これ全部……？」

「見た所、百は間違いなく超えているかと思われませんが」

こ、これ……嘘だよな？（確認） キャンパス全部に何かしら絵が描かれてるんですけどまさかこれも全部彼女が書いた絵、とか言いませんよね？ そうに決まってるじゃん（冷静） 邪ンヌの闇を垣間見た気がします。

∨キャンパスに描かれた絵は、稚拙な物から、既にプロ級のタッチになつて居るものまで。千差万別だ。その中には、あのモナ・リザと酷似したような絵もあつた。

「明らかに上に置かれていたモノより、遥かに数がありますな。書いて書いて、書いて。正に水面を美しく走る白鳥の如く、凄まじい努力をしていた、と」

「……敵とはいえ、この熱意に関しては感嘆の念を禁じ得ないよ」

いや、デオン君ちゃん。これに関しては熱意とかそういう生ぬるい範囲を遥かに超えてると思うんですが。ほんへじゃ、邪ンヌもここまですり切れてなかつたです。何が彼女をここまでさせたのか、ンモノか!? 金か!?

「——それでも無いわよ。私にとっては、必要だつた。それだけよ？」

私の工房へようこそ。人理保証機関、カルデアの皆様？」

〽その時だった。アトリエの奥から聞こえて来た……聞き覚えのある声の一つ。貴方達が目を向けた先に……彼女は居た。銀の髪と黒い鎧の少女……が長髪の女性の上に腰掛けていたのだ。一瞬、完全に皆が停止し……最初に声を上げたのは、立香だった。

「……えつと？」

「下のはただの椅子よ、気にしないでちようだい。というか気にするな」

いや気にするなっていうのは無理だゾ……

めっちゃ恍惚な表情してる人が『オネエサマ……ハアハア……』とか蠢いているのを反応するとか、いやそんなん、無理だし……怖すぎませんか？

「……マスター、流石にコレを気にするな、というのは無理があるのではないか？」

「うっさいわよアサシン……バーサーカーと同レベルで完璧に仕上げられたのに、どうして性格はこんな事になったのかしらね！」

「それは拙者にも分からんなあ。雑念が混ざったのではないか？」

「そりゃあ一人くらい私に忠実なしもべが居ればいいかな、とかは思ったけどこういう事じゃないわ！」

やっぱりほんへ通りじゃないか(確信) えー、という事で小次郎さんと、あの、下敷きにされたランサーさんと、そして邪ンヌです。はい。

〽……仕切り直そうか？

〽えつと、そういうご趣味がおありか？ 竜の魔女殿？

一応、ほんへでも気を遣っては置いたので、上にかけますね……(思いやり)

「やめなさい、変に気を遣うのは。そういうのは逆に惨めになるから、本当に」

「そ、そうか。じゃあ遠慮なく……いやゴメンやっば無理」

「なんでよー！」

〽竜の魔女たる彼女、オルレアンでは凄まじい暴威を振るった、ジ

ル・ド・レエが生み出した願望の形足る彼女が……どうしてあんな凄  
い状態になって居るのか。ツツコミ所塗れのおんな光景を見て、どう  
やって話を進めろというのか。これには貴方も思わず同意。

流石のコミユカEXの藤丸君ですらこれをスルー出来ず。誰だつ  
て美女が美女を椅子にしてたらそう思うんやなって……今この状況  
で一番冷静でいるのは、多分小次郎さんだと思います。

「……まったく、アレだけの試行錯誤を得て、漸くこうやって……本当  
に」

「あー、なんだ。カルデアよ。我が主が、どうして今こうして、現界し  
ているのかは気にならないのであろうか？」

「そこ」に助け舟を出したのは、まさかの敵方の佐々木小次郎だった。  
流石に彼もこの空気は宜しくないと思ったのだらうか……とはいえ  
それは何でもい。渡りに船とばかり、まずはロマニが口を開いた。  
『そ、そうだ。竜の魔女。君はあの時、オルレアンにて確かに消滅した  
筈だ。それがどうやってか、君はもう一度しっかりとした体を経て  
いる。何を企んでいるんだ？』

ロマニ兄貴ナイスです（レ） このまま微妙な雰囲気になっ  
ちゃったら、（空気感が）糞だあ……！（ド直球）

「……どうやってか、ね。一応私も、聖杯によって形作られた存在、並  
の英霊よりは強い霊基だったわ。特異点が修正されようと……残留  
思念の様になって残っている位には」

「そ、それに乗じ、空気を変える為に竜の魔女が口を開いた。」

いや、この空気はもうどうにもならない、やっぱ壊れてるじゃな  
いか……（シリアス） あのランサーちゃんが居なければもう少しま  
しになってたと思うんですけど、そうはならなかったんだよ……

「当然サーヴァントなんかにはなれない、ゴースト以下の残りカス  
だった……それでも私は諦めなかった。不安定なオルレアンの中で、  
私は僅かな可能性にかけて、必死に探したのよ……コレを」

「そ、それは……！」

「その手には何かの欠片。黄金に輝くそれに、貴方達は見覚えが  
あった。」

『聖杯!? 聖杯だ! その欠片は!』

「オルレアンの聖杯の、ひとかけら。でも、これ一つでも弱り切っていた私の霊基を補強してこんなチンケな特異点を作る位は、訳なかったわよ」

という事でまあ当たり前の様に出てくるイベント特異点特有の追加聖杯です。今回はオルレアンの聖杯から零れ落ちた、まあ食べ残しみたいな物みたいですわね。

「でもこの聖杯の欠片を頼りに、もう一度アンタ達にリベンジする……それは無理だつて分かってたわよ。流星にね。だから、この特異点を使って準備をする事にした」

「準備?」

『その欠片を使って……つて事じゃなさそうだね』

∟ダ・ヴィンチの言葉に、竜の魔女は歪んだ笑みを返した。それは……どこまでも、屈するという言葉からは遠い、反逆してやる、という意思に満ち溢れた笑顔。

「当然。私は、私の力でアンタ達を捻じ伏せる。その為に、私は始めたのよ。贗作、そして英霊を理解する為の、私なりの試行錯誤をね」

すくつと立ち上がる姿は結構凛々しいんですが、反動付けて立ったせいか『オオウ……オネエサマノオモミガ、ヒビク』とか悶えてるラッサーさんのせいで全部台無しになってます。多分変態だと思っただけですけど(名推理)

「見たでしよう? 私の贗作英霊達を……絵っていう一番分かりやすい贗作を用いて、創り上げた。アレは、私にとっての試金石」

「試金石、ですか?」

「そうよ……私が思う、『最強の英傑』を贗作の英霊として、聖杯の力を借りて、創り上げたのよ。最初は全然上手くいかなかったけど……最終的には六騎、私の理想の英霊を描き上げた!」

最強の英傑、あつふくん……(察し) そういえば、邪ンヌってあの水着をデザインした子でしたっけ。そりゃあ、アレも発症してて不思議じゃないとか。

『西部最速の早打ちガンマン』、

『陰に隠れた実力派格闘家』、

『無数の智慧にて相手を翻弄する魔女』、『偉大なる竜殺し』、『不死の軍勢を率いる魔王』、『勇者を導く美しき戦乙女』。六人を完成させた……そして」

『そして?』

「コレだけの理想の英傑が描けるようになったのなら……理想の私だって、作れるようになると思わない? ねえ? 自らを理想の姿に作り替えた、ダ・ヴィンチ様? 挑戦状、受け取って頂けて?」

それは兎も角、あの六人を創り上げたのは、別にあの病を満足させる為では無かったと。そしてこの会話……成程、色々不明だった部分が見えてきました。

『竜の魔女』。私を、理想の形に……描いた贋作も、贋作英霊も、全てはその為の布石。そして、私は自らを改造し、そして遂に作り上げたのよ! 竜の魔女に相応しい私へと、復讐者、ジャンヌ・ダルク・オルタナティブとしてね!」

＜足元から、焔が立ち上がり、その身を纏う……そこに居たのは、オルレアンで見た彼女とは些かデザインの違う、彼女。

「どう? カルデアのマスター! 私は私を確立したわ! あの時みたいな動揺も、もうあり得ない! あの女を越える、真作を超える贋作として、あの時の借りを返すわよ」

やっべ、めつちやオルレアンの事覚えてる……ど、どうすんだコレ……とか言ってる場合では、ありませんね?(切り替え) どうやらほんへとは些か異なったやり方にて、邪ンヌは己を確立して見せたようです。

ほんへではありえないジャンヌの可能性を、一度生み出された存在だから、という理由で一点突破して現界していました……あれ? ほんへの方がヤバいやり方してない?

「マスター」

「——マシユ、これ以上の問答は無粋だ。要するに、ベストの状態に仕上げてからリベンジに来た、って訳だろ? 今回の特異点は」

＜立香が、その熱に応える様に前に出て……その目の前に、一本の剣が突き立つ。見れば彼女が腰の剣を投げて寄こしていた。

「貸してやるわ。全力をもって、私を潰しに来なさい」

「……じゃあ、遠慮なく！」

藤丸君の装備欄が更新されましたが……あのーすいません、ステータス見る限り自分のバットの性能と大分違うんですけどそれは。まあ藤丸君主人公だし、多少は鼻肩されるのもあるでしょうが、ちよつと差が露骨すぎるんだよね（指摘）

全てのステータスがホモ君のバットの倍以上とかお前おかしいだろ?!（抗議）

「アサシン！ ランサー！ やるわよ、準備を」

「――承知」

「わかりました……」

あの、椅子になってた人が速攻ですつくって起き上がるのが怖すぎる。コマ送りみたいになってる（畏怖）

＜二騎のサーヴァントを付き従え、ジャンヌ・ダルク・オルタナティブが堂々と歩みを進める。貴方は、立香と目を合わせ、共に声を上げた。

「マシユ！ 戦闘準備！」

「はいっ！」

＜＜香子さん！ 援護頼みます！

「っ、はい！ 一息にて……書き上げましょう！」

さて、激闘開始と言った所で今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。

## 贗作逆襲画廊 ルーブル その二十一

皆さんこんにちは、ノンケ（炎門の守護者）です。これからも頼りにさせてくれよな―頼むよー。

前回は、ラスボス邪ンヌ……と取り巻き二人との決戦です。邪ンヌは当然ですが、他の二人のサーヴァントも決して油断できる相手ではありません。全力を尽くして彼らを打倒しましょう。というかわんちゃん取り巻きの方が厄介まであります。

「喰らえー！」

∠彼女が手をさつと向ける。オルレアの彼女の能力を考えるなら……貴方達は速攻で散開した。直後に目の前から、波の様に押し寄せる焔が、貴方達の近く床を黒く焦がした。

早速飛ばしてきちゃ……ったあ！　そしてモーションも、アヴェンジャー・ジャンヌに無事変更されています。というか、明らかにオルレア時の炎と勢いが違います。流石に理想の自分を創り上げたと豪語するだけありますねえ！

∠それに乗じる様に、先ずは小次郎がその背の刀を抜き放ち、迫る。接近させれば一瞬の隙すら致命台になり得る強敵、これを相手取るには……

∠デオン！　お願い！

∠メドゥーサさん！　頼みます！

そしてここで選択肢。基本的にはそれぞれのサーヴァントを一人ずつか、もしくは二人充てるのでしょうか……どっちも不安なんだよなあ。ほんへでは、何方も小次郎さんとは致命的に相性が悪いんです。

デオン君ちゃんの回避を貫く魔剣を小次郎さんは持ってますし、メドゥーサさんはほんへではライダー、アサシンとは相性の悪いクラスです。そういうのを考えるとドツチモドツチモ……（不安の表れ）

……決めました。ここは同じ剣士、そしてあのジークフリートさんをも幻惑して見せてくれたデオン君ちゃんを信じましょう。

「了解！　アサシン！　君の相手は私がしよう！」

「——ほお、あのジークフリートを屠ったセイバーが相手か。中々に、滾るではないか」

「アサシンの元へ一步踏み込んだデオン……その直後、二人の動きが止まる。剣を抜き放つ前にその動きを止めたアサシンの眼の前には、デオンのサーベルの切っ先が。」

「……コレは最早棒振りとは呼べぬな。一撃で我が喉を貫き得る鋭さは確かに一つの術よ」

「これが、フランス王家を、そして我がマスターを守る剣だ。何時までも棒振りなんて呼ばせはしないよ……アサシン」

「デオン君ちゃんがカツコイイ（一目惚れ）あの小次郎さんの動きを一突きで制して見せるとか、伊達に伝説のスパイヤってませんねえ！ という事で小次郎さんのお相手はデオン君ちゃんと小次郎さんです。目が離せませんよ……とか言つてたら邪ンヌに殺されそうですねコレは間違いない（確信）油断には気を付けよう！」

「……ごめんなさい、お姉さまの命令ですので……討ち果たさせて、頂きます」

「その直後だった。突如貴方の真後ろから聞こえる、女の声。先ほどのランサーの声に間違いはない。何時の間にも近づいていたのか、全く気が付かなかった……だが。」

「——させません」

「お見事、メドゥーサ殿！」

「その巨大な槍の一撃は、ランサーの腕を鎖で縛りあげたメドゥーサと、その直後に盾で槍を凌いだレオニダスの手によって止められていた。」

（お二人の活躍に）あ痺れるう！ このランサーさん……まあ要するに、ブリュンヒルデさんな訳ですけど、此方も普通に強いです。

今、急に現れたのも現実誤認のルーンの、そうだお前ルーンだからな！（言い直し）コレを応用すればスネークバリのステルスも余裕で……アレ？ ブリュンヒルデさん他の贗作英霊の再現度考えるともしかしてこの中で一番厄介だったりするのでは……？（戦慄）

「しかし、良くお気づきになりましたな！ 突然空間から現れたよ



うにしか見えませんでした！」

「……私の髪は、少々と感覚が敏感ですし、それに触れて気が付きました」

ああ、そういえばH o o r o wでもそんなシーンありましたねえ。やっぱり将来髪がああいう風に変化するメドゥーサさんですから、彼女の髪は特別、ハッキリ分かんかね。

「ああ……逞しい英傑、そして麗しい女怪のお二人。退いてください」「それは出来かねますな！ 本造院殿は我がカルデアの大切な仲間です、易々と殺させる訳には参りません！」

「二応、約束もありますし」

◁レオニダスとメドゥーサを前に……ランサーは、怯むどころか、更に氣勢を上げるが如くその体から魔力を解き放った。先ほどまでとは、明らかに桁が違う、その力を。

「困ります……私、お姉さま一筋なのに、その様な……本当に……困ります」

「……流石に、一筋縄ではいきそうにありませんか」

「難所こそ私の光る場面ですから！ 連携し、撃破してまいりますよう！ マスター、本造院殿、ここは我らにお任せを！」

ブリュンヒルデさんを相手にするのは、同じランサーのレオニダス王と、メドゥーサさんの様です。ブリュンヒルデさんは北歐神話、メドゥーサさんはギリシャ神話に名高い実力派の女性です。そして、レオニダス王は先も言った通り、スパルタ……ギリシャと同盟組んだ事もある間柄。実質ギリシャ神話対北歐神話の異種神話大戦です。第五特異点か何か？

◁二人のサーヴァントの追撃を抜け。そして……立香達と、貴方達は、彼女の……ジャンヌ・オルタの前に立った。この事件を引き起こした、張本人の前に。

「——で、私の相手をするのは、私をぶっ飛ばしてくれたシールダーと、そのこの女かしら？ ああいや……私がリベンジしたい、マスター二人も居るわね」

「マスター達は、私が守ります。リベンジはさせません」

で、当然残った邪ンヌの相手はホモ君香子さんコンビと、藤丸君マシユコンビ、と。

ホモ君藤丸君が足しても一どころか0,5にもならないクソ雑魚ナメクジなので、実質二対一みたいなんです。でも0,1にもならない二人でも、相手の足を引っかける段差代わり位にはなるでしょう。必死になって抵抗するんだよ！（無茶振り）ちゃんと邪魔になるまでやるからなオイ！（二重の無茶振り）

「やれるもんならやってみなさいな、シールドー！」

∠ジャンヌ・オルタが旗を構え、真つすぐに飛び出す。竜を操っていたオルレアンの時とは違う強引な突撃をマシユは見事に受け止めた。

「——行かせ、ません！」

「はっ、上等！」

「させません！ 下がってください！」

お、香子さんの墨ビームが邪ンヌを牽制！ 相手を下がらせる援護ナイスですーす（レ） さて私たちのお相手、ジャンヌ・オルタですが、ドラゴンファンネルが無くなつてなお普通に強敵です。伊達にアルトリア・オルタとタメ張るサーヴァントじゃありませんよ……

「はっ、そんな貧弱な一発、当たるもんですか！」

「素早いっ……！ マシユ様、残る魔力を全力で使って援護します！  
どうか！」

「分かりました！」

マシユにイベント特異点ではあまり見られなかった香子さんの援護バフが入ってますね。魔力の関係上、特異点程はポンポン使えないんじゃないでしょうか。で、物凄いスピードでマシユが突撃して、強烈なアタック決めてますが、バフ込みでも邪ンヌが力負けしてねえ！「へえ、さつきよりもいい手応えじゃない。そっちの女も、役立たず、って訳じゃなさそう」

「く、う……！」

それも当然。邪ンヌは三つ以上のステータスがA、スキルに至っては半分以上が良い意味でのEX評価とかいうチートクラスの攻撃性

能を持つサーヴァント。作者的評価は『戦闘機をそのままサーヴァントにした感じ』です。

「マシユ様、そのまま抑えて！」

「——っはい、逃がしません！」

「ちいっ」

因みにその装甲はあんまり厚くないのと幸運が絶望的なのが唯一弱点らしい弱点ですね。

マシユの攻撃食らったら間違いなく打撃食らいますし……幸運値が最高ランクの香子さんは特に相性は悪いです。一発でも貫つて事故で落ちろ！……落ちたな(確認)とかなるのは確定的に明らか。

＜マシユに抑えられたジャンヌ・オルタに迫る香子の呪術。一発は逸れたが二発は確実にジャンヌ・オルタを狙う。……ジャンヌ・オルタもマシユの盾による拘束をするりと抜け、真横に飛び出して、それを見事に躲して見せる。

「そんなもん当たるワケ……って!? ちよ、なんでこんな所に！」

「あつ」

＜——しかしその直後、飛び出していった先に、外れていた弾丸が置かれた様に飛んで来ていた。強引にスライディングをキメて、その攻撃には当たらない様に避けきつて見せたジャンヌ・オルタだが……その顔色は悪い。

酷い(酷い) 完全に逸れて飛んでった一発が、まるで邪ンヌを狙い撃つみたいになって……鬼かな? 幸運最下位と幸運最上位が噛み合うとこういう事もあるんですね。

「……こ、この女! えげつない撃ち方して! なんてやり方を！」

「ち、違いますう……狙ったつもりなんて全く、ありません……ほ、本当です！」

ホントかなあ? (無邪気)

まあ実際香子さんにはそんなつもり欠片も無かったと思いますけど。寧ろ不運と幸運というこの世の仕組みが邪ンヌを殺しにかかってきてるので、復讐者として存分に世界に復讐していただいて、どうぞ。

と言った所で今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。

## 幕間の物語：竜騎士対燕返し

「——そもそも、私は贗作の類では無い」

一閃が、空間を断つ。長い刃渡りの剣は、圧倒的なリーチを誇る。リーチにおいてアドバンテージを誇る筈の突きと、全く互角に張り合う程に。それが、まるでつむじ風の如く連続で襲い来る。全て掻い潜って、突きを通すのは相当に難しいのは、ここまでの攻防で嫌という程理解できている。

「へえー！」

「キヤスターめが、万が一の時の為に……召喚しておいた、護衛役だ」

「……つまり君はっ！ 正規の英雄という事かい！」

「そうだな。此方の贗作英霊は、タネが割れば、その弱みを突かれかねぬからなあ」

それ故に、彼が贗作の英霊で無いという事実など、大した問題では無かった。

たとえ贗作であろうと真作であろうと、彼に今、自分が気おされている事実は変わらないのだからと。デオンの手に無駄な力が籠りそうになって……一呼吸入れて、無駄な力を抜いて、再び視線を向ける。「しっ！」

「まあそれ故に……他の六人を相手取ってなお、負けぬ程度の実力を求められた訳なのだが。護衛役として召喚されて、良かったと思っっている」

斬撃の嵐を掻い潜って漸く突き出した剣も、相手の振る刀に弾かれて……構える事すらなく、小次郎は肩に剣を担ぎ、此方と相対する。突き出した剣の切っ先を、的確に、かつ一撃で確実に弾くのは、どれ程困難なのか。想像するだけ馬鹿らしかった。

「くくつ、槍とも剣とも違う、この鋭い突き。こんな面白い技の使い手と、存分に死合うことが出来るのだから」

「面白がっているとは、余裕だな！ 佐々木小次郎！」

「余裕などないとも……今こうして、凌いでいる間は常に、全力だ！」

自分の剣は、無数の決闘の代理人として鍛え上げたものだ。対人戦

であれば、人一倍、いや人より数倍は長けている。しかしながらその腕をもつてして、目の前の相手に剣を突き立てる事は出来ていない――それがなぜか、デオンにはいやという程理解できていた。

「そこだつー!」

「――遅いな」

小次郎と自分の技量には、恐ろしいほどに隔絶した差がある。自分の方が剣の重さや速さでは勝っている筈なのに、たった一つ、その剣の上手さだけであらゆる不利を覆して余りある程に。

技量に置いて、この英傑以上の相手というのはどれだけいるのか……そもそも存在し得ないのではないか、とすら思う。

「全くこれほどの技量とはね。接近戦の花形、セイバーの立場が無い!」

「巧さは拙者の唯一の武器故な、それが無くなれば此方の立場が無いというもの」

言葉を交わす間にも、二、三度程、相手の霊核や利き腕を潰そうと突きを繰り出したが、その悉くは打ち落とされている。どころか、一手を繰り出せば必ず的確なカウンターを返してくるのだから、シヤレにならない。

「しかしセイバー、お主の技量は実に見事……フツッ!」

「つく、嫌味かい!?!」

「いいや、私の知っているセイバーと比べても、人を相手取った、そうさな……決闘の腕に限れば間違いなく上だろう」

その一言の直後、振り下ろされた全力の袈裟切りを一步下がって何とか避けるが、それでも僅かに避け切れず、一步届かない。生前の決闘の何れと比べても、緊張感は段違いと言えるだろう。

「しかしながら、それだけの腕を持ちながらも、先程からどうしようも無く、後一步を踏み込んで来ないなあ。セイバー」

「……嫌な感覚がするからね」

最悪の予感がするのだ。

相手に決め技がある事など、サーヴァントが相手なら当然だろう。それを恐れて踏み込まないなど、それこそ愚行……なのだが。それは

理解できている。故に、今まで、デオンは様子を伺う事に徹して来た  
「そうならば……どうするセイバー。このまま終わらぬ舞踏に興じる  
つもりか？」

「……いいや、そんなつもりは無いよ。そろそろ此方も仕掛ける積り  
さ」

デオンが見に徹し、分かったのは相手の技量だけではない。自分が  
相手より優っている部分もキツチリと分析していたのだ。

「ここまで対人戦の素人に翻弄されたとなれば、決闘代理人の面目丸  
つぶれだからね」

「——ほう？ 私か、か」

「違うのかい？」

「いいや、お主相手に隠し立ては不可能と見た……如何にも、この佐々  
木小次郎、決闘の経験など、皆無に等しい」

それは、相手は一騎打ち、というより実戦の素人であるという事。  
驚くべきは、彼は実戦の経験など皆無に等しいというのに、その技量  
だけでその経験すら埋めている。

……のだが、それ故にか、技量による鋭く、正確な反撃や、必殺の  
斬撃などは目を見張るなどという言葉ですら足りない程。だが、その  
分経験則に裏打ちされた、無骨な人間業などは技の冴えに反し酷く少  
ない。歪だ。

「その点において、私は貴方より長じていると言える」

「で、あろうなあ。其方の動きは正に人を相手取るのに最適化され  
……此方とは比べるべくもない程の高み。決闘の職人、と呼ぶべきだ  
ろう」

故に、その部分を押し付けて、勝利を掴む為に……デオンは覚悟を  
決めて一步を踏み出した。そのデオンの動きに合わせ、小次郎が、初  
めて構えを取った。

「……それに勝ったとあれば、私に取ってはこれ以上なき誉れである  
うな」

「それは僕も同じさ。マスターの祖国の剣聖との決闘で勝利を掴んだ  
となれば、マスターに捧げる勝利としては最上の物になるだろう」

一歩ずつ、一歩ずつ……距離を詰め。小次郎の得物、物干し竿の間合い。その僅か外にてデオンはその足を止めた。ここから先は、死のエリアだ。

「覚悟は良いか、セイバー」

「ああ、行くぞ。佐々木小次郎」

互いの呼吸が重なる……小次郎の切っ先はブレず、デオンを狙っている。デオンの視線が小次郎の一挙手一投足を見逃すまいと、注がれている。

呼吸が五つ。

「」

踏み出したのは、デオンだった。今までと違う……ジークフリート戦で見せた、無駄の無いゆらりとした足取り。それを見た小次郎の眼が細められる。

「王家の百合よ、永遠なれ……『百合の花散る剣の舞踏』！」

相手を幻惑する、デオンの必殺の宝具。小次郎の剣をすり抜け、一気に叩き切るつもりなのか……だが、その宝具を前に、小次郎はにやりと笑う。

小次郎の眼は、相手を幻惑しようとするデオンの姿を決して逃がさない。

「……燕の如く、すり抜けようと言うか。だが私の剣は生憎と……その類の敵を打ち倒す為に生涯をかけて編み出したのだ」

一歩、二歩……三步目で緩急をつけてデオンが駆けだす。真っ直ぐに、貫く為に。だがその動きを小次郎は見逃していないだろう。全力の、全霊の一撃を、放つ構えだ。

「秘剣……『燕返し』」

振り下ろされる剣。現れる全く同時の三つの斬撃。予想を遥かに超えた光景に目を見開くデオン。

衝撃。その直後にデオンの体に、三つの剣閃が走り、小次郎は、剣を振り切ったまま、止まっていた……その霊核を、刺突の一撃で貫かれて。

「……成程、避ける為では無く」



「タイミングを……誤魔化す、為の、宝具だ」

「そもそも、打たせる前に、貫く……か。やられたよ」

小次郎の眼が見ていたのは、一瞬前のデオンの動きだった。彼が完璧に合わせたと思っても、それは虚像。本物のデオンはその一歩先で、先手を制し剣を叩き込んでいる。三つの斬撃を打つ、一撃。異常に過ぎる魔剣はしかし、振るわれる前に堕ちていたのだ。必然、反撃として飛んでくる、力の乗り切らぬ必殺の反撃、それを覚悟し、気合で堪えた、デオンの辛勝だった。

「全く、成程。実戦ではこの様な摩訶不思議な決着もあると……学ばせてもらった」

「いいや……僕も、凄まじい物を見せて貰ったよ。三撃同時の、剣なんて、ね。授業料には、十分さ」

「言ってくれ……」

何とか立っているデオンの前に崩れ落ち、黄金の光となって消えてく小次郎。そしてその直後、隣にデオンも倒れ込んだ。小次郎が限界だったのと同じくデオンも、洒落にもならない被害を受けている。一撃受ける覚悟で踏み込んだとはいえ、一撃どころか三撃貰ったのだ。予想を遥かに超えたダメージを頂いてしまつて、流星にもう立てない。

「全く……決闘でここまで傷を負った事は無かつただけ……恐るべき、だね。佐々木小次郎……」

劍聖、と呼ばれているのは伊達では無かつた。セイバーとしての、面目だけはギリギリで保てただろうか……少しは、オルレアンでの恩も返せただろうか。

「マスターは……ああ」

遠くを見れば、マスター二人がジャンヌ・オルタに上から奇襲を仕掛け……雑に払われていた。思わず『あのマスターいつペン全力でシバキ回した方がいいのではないのだろうか』と思つてしまう。しかし、雑に払っただけとはいえサーヴァントの攻撃を受けて、殆ど傷らしい傷を負つてないのは、見事だと思つてしまう。

「……やはり、あの角が、力の原因なのかな」

その額から生えた角がどのような由来のものかは分からないが、そのパワーアップの能力は本物。とはいえ……

「アレ、明らかに良いもの、じゃない、と思うんだけど」

魔術や、別の理に関する事にそこまで詳しくないデオンではあるが、それでもアレが無条件にいい影響を与えてくれるとはあまり思えない。彼のキャスター、紫式部はその辺りを考えているのだろうか。

それとも……と、そこで思考は止まってしまい……強敵を倒したその余韻に浸り、デオンはゆっくりと瞳を閉じた。

## 幕間の物語：希欧神話対戦

薙ぎ払う。

一言で済む行動ではあるが、そんな簡単に出来る技でもない。剣でも槍でも、下手を打てば大きく隙を晒す攻撃だ。実力が低ければ、弾かれて大きな隙を晒し、反撃に転じる好機にすらなってしまうのだ。

「——隙がありませんね」

「薙ぎ払い、と言うのは本来後隙を狙いやすい一手なのですが！」

だが、達人、と呼べるレベルの実力者であればそれも大きく変わってくる。恐ろしい速度で振るわれ、後に僅かな隙がほぼ存在しなかなければ、単純に範囲の広く、威力もある攻撃として、主軸に振るい、相手を圧倒するのも容易い。槍と言う間合いの広い武器でそれが行えたならば、その脅威は桁違いだろう。

「……困ります、本当に。お見事な腕前を見せてくださって。私……本当に。燃え上がって、しまいます」

レオニダスの槍よりも長く、圧倒的な大槍。それを容易く、操るランスーの実力は、槍使いとしては正に最上級だろう。槍を打ち払ってから、腕をそつと撫でる、その可憐な仕草とは裏腹に。

「此方も二対一で追い込もうとしているのに、ここまで上手いかないとは」

「単純にサーヴァントとしての地力が高いうえに、戦士としても強いのでしょうか！」

レオニダス、メドゥーサの二人がかりで尚、有利を保っているというのに攻めきれないのがその証拠だが……彼女の強みは、それだけではない。先ほどから、一気に責め立てようと突撃するといつの間にか姿を消され、攻め切れていない。

「これは先ずあの掻き消える術を攻略する所から始めなければいけませんね」

「しかし、あの掻き消える仕組みすら分からないのが現状ですよ、どうやって……」

「——いけません、その様に隙を晒しては」

「っ！」

それどころか、一瞬でも隙を晒せば背後から染み出てくる様に背後に現れ、纏めて打ち倒そうとしてくるのだから溜まらない。戦いのチャンスを取り逃がさないという点において正に彼女は戦乙女、というジャンヌ・オルタの願望は当て嵌まっていた。

「っふう」

「またですかー！」

そう、消えるのだ。絡繰りは全く分からないが、兎に角いつの間にか消えて、一瞬の隙を狙ってくる。

振りぬいた槍を、二人が首の皮一枚ギリギリで回避できているのは、レオニダス、そしてメドゥーサが一流の英霊だからこそである。

「……また、とてもお上手に避けますね……本当に、素晴らしい。私、熱くなっちゃいます。本当に……堪え、きれません……！」

胸の少し下、鳩尾の辺りに手をやって、そのままもう片方の腕を掴み、我慢するような仕草をしている。だが堪える積りは本当にあるのか、と二人の意見は思わず一致してしまった。素早く、かつ苛烈に、しかし冷徹に隙を見せず打ちこむ。堪えるどころか、容赦という情の欠片も存在しているか怪しい気がする。

「メドゥーサ殿、ここは私が！」

「ええ、下がらせてもらいます」

その直後。前へ出たレオニダスの盾に槍の巨大な穂先が叩き付けられる。腕で堪えている、と言うよりは体全てで盾を支えて、そうではなくては、とてもこの一撃を防ぎきれなかった。僅かな膠着の後、なんとか大槍を払いのけるが即座に、次撃が振るわれた。

「ぬうっ！」

「……」

振り下ろしからそのまま突きに転じ、更にバトンの様に振り回し、畳みかける。槍の穂先からは炎が巻き上がり、肌を焦がす。そのいちいちが的確で、冷静だ。まるで、機械の様に。

「あのっ、バーサーカーも！ 恐ろしいほどに強かったですけど、しかしこのランサーは、個人技に関しては！ 間違いない……！」

「それを凌いでいる貴方も大概だとは思いますが」

それを真つ向から相手しているレオニダスも、迂闊な反撃など出来ないど割り切り、全てのリソースを防御に回して互角と呼べるまでに凌いでいる。そしてその攻勢の間に僅かな隙を見抱いたメドゥーサの鎖がランサーの首を絞め上げようと伸びるが……くると後転、身を屈めつつ鎖の間合いから離脱。

「——流石ですね。かのギリシャの女怪、メドゥーサ様」

「私の真名を見抜かれているとは……いいえ、キャスター辺りが解析しましたか」

「ええ……キャスターは魔眼に警戒をするように言った時点で……」

伸びた鎖は地面を削り、包囲する様に踊ってランサーを狙うが……グルリと回した槍がその悉くを打ち落とし……その鎖に気を取られた一瞬を狙い、メドゥーサがランサーの上から蹴りを仕掛ける。当然狙いは、頭蓋。

「……故に、油断は致しません」

「っ！」

それに合わせる様に反撃を仕掛けたレオニダスとメドゥーサを諸共に、巨大な炎の壁が阻む。魔眼を妨害する為の目くらましであり、一瞬の時間を稼ぐための術でもある。その一瞬に、更に一步下がろうとしたランサー……しかし。

「此方こそ、もう逃がすつもりはありませんが」

「っ！」

もう一步、下がろうとしたその足が、重く、鈍くなる。ランサーはキャスターの言う通り、見られないように炎での目隠しまで行ったというのに……レオニダスとメドゥーサからもランサーは見えていない。

しかしメドゥーサの魔眼は、相手がメドゥーサを認識して居れば発動可能だ。ランサーはメドゥーサを炎の壁の向こう側にしつかりと捉えている。彼女の魔眼からは、逃げきれない。

「——そこですー！」

「っ……」

鋭く、焔を盾で無理矢理に突破したレオニダスがその槍を突き出し……狙ったのは、彼女の腕。その腕に刻まれていた、奇妙なマーク。それに傷をつけてレオニダスは一步距離を取り……ランサーは、何歩も一気に距離を取った。

「やはり何かその腕に仕込んでいましたか。しきりに腕を撫でていたのが気になって居ましたが、それが、恐らく」

「……そうです。現実誤認を誘発するルーン……このわずかな攻防の間に、見抜かれてしまうなんて。やはり貴方は、強い英雄、なのです  
ね」

「効果は見抜いて居ませんでしたかね」

腕を撫でていたのは、何度もルーンをかけなおしていたのだろう。

「——そして、それを見抜いた以上、容赦はしません」

そのルーンをかけなおす隙を与えぬ、とばかり更にメドゥーサから鎖が飛び、今度は、ルーンを見抜かれた僅かな動揺を突いて、その足に絡みついた。槍で破壊させる時間など与えず、一気に地面に引き倒し……そこに、レオニダスが踏み込んだ。

「はあああああつー！」

「……がつ、ああ……」

レオニダスが槍の穂先を、鋭く、相手に向けて杭打ちの如く叩き付ける。ランサーの白い肌を、鋭い槍が食い破り、地面に繋ぎ止めて……そんな光景を幻視したレオニダスは、目を見開いた。胴に、槍の穂先の僅かな先、それ以上が刺さらない。

「なつ、に!？」

「強い方……容赦なく、一撃で相手を仕留め、仕留められなかった場合にも、そう簡単には逃げられない様に……中心に。貴方が、強い英霊でなければ、この守りは通用しなかったでしょう」

胸と腹の合間。鳩尾の辺りに向けて振り下ろされたそこに、刻まれていた……ルーン。それが槍の一撃を、堰き止めていたのだ。鳩尾の辺りにも、そう言えば確か触れていたが。それすら此方の行動を見越した仕込みだったのか！

「何というー！」

「ごめんなさい……ああ、殺します……!」

レオニダスは渾身の振り下ろしに両手を使い、咄嗟に盾を投げ捨てていた。防御は、間に合わない。片手の槍がレオニダスの胸板を、逆に貫き、食い破らんと一直線に迫る。

「判断を誤りましたね」

だが……その槍の一撃を停止させたのは……レオニダスの背面に既に近寄ってその魔眼でランサーを捉えていた、メドゥーサだった。ピタリと体の動きが止まり、完全にその動きを停止させている……その両腕は、既に石化していた。

「この戦いは二対一です。忘れていたのですか？ ランサー」

「申し訳ありませんメドゥーサ殿。仕損じてしまいました……!」

「いいえ、お気になさらず」

流星にギリシヤで多くの勇士を石化させたその伝説は伊達では無い。力任せで破ろうとする抵抗すら許されない。そして。

「それよりも早く彼女を。一撃で。万が一回復などされれば厄介です」

「承知いたしました……では、御免。フンヌツ!」

その動けない体に、再度、その槍を振り下ろす。ルーンの守りももはや存在しないその体に、今度こそ……レオニダスの槍は、深々と突き刺さった。

「……かはっ……!」

手応えあり。それを確認した後に、レオニダスは槍を引き抜く。一応反撃があるかもしれないと、レオニダスは盾を拾い直し、メドゥーサはもう一度魔眼を展開しようとしたが……それも無い。ランサーの体から黄金の光が立ち上っていた。

「……もうしわけ、ありません……おねえさま……」

その光が空へ立ち上り……消えていく。と同時に余韻をかき消すかのように禿げた頭が黄金の光の欠片を引きつぶしながら転がっていく。思わずスゴイしょっぱい顔になった二人の眼の前で、ハゲ頭を搔きながらマスター、本造院康友が立ち上がった。

思わず、メドゥーサが呆れた表情で声をかけて……

「つてえ……んの黒魔女！ やつてくれるじゃねえか！」

「……マスター、なにやってるんですか？」

「お、メドゥーサさん丁度いい所に。俺を鎖でブン投げてくれ。思いつきり」

「……はあ？」

その要求に、更に眉間のしわを増やしたのだった。



## 贗作逆襲画廊 ルーブル その二十二

皆さんこんにちは、ノンケ（朕殺し）です。

前回は邪ンヌと決戦開始……なのですが、邪ンヌと香子さんの相性が最悪です。幸運値最悪と最高つて、組み合わせ次第であんな事になるんすねえ（感心）とはいえ決して油断できる状況ではないので、ここは確実に、勝利していきましょう。

∠ジャンヌ・オルタは、圧倒的な火力を持っている。今までのサーヴァントの中で、比較対象になり得るのが、冬木のセイバー、ジークフリート、ドラグーン・セイバーという時点でどれ程かは分かりやすいだろう。

「――通しません……！」

「ふん、しぶとい。やはり厄介ねシールドー、アンタのその盾は」

ま、その火力もマシユちゃんの前では無意味なんですけどね（暗黒微笑） さつきから邪ンヌの攻撃に全く怯まず、盾役を全うしてくれています。マシユちゃん頑張ってるね、元気して？（心配）

とはいえ香子さんに援護、及び攻撃に専念してもらう以上、マシユちゃんにタイマン張って貰わないと厳しいので……いいやつ！ いるさつ！ ここに二人な！

「セイヤアアアアアツツ！」

∠ぶつ殺す！ YE AH――！

その掛け声は別作品だルルオオ！

それは兎も角、藤丸君と一緒に背後からの強襲です。当然自バフは発動済みで。ノーガードで耐えられない様に、ここは大きく声を出しても相手を引き付ける事を意識してホラいくどく。でも万が一もあるかもしれないのでここは脳漿をぶちまける勢いでオウエア！

「――流石にアンタらに対応できない程耄碌しちやいないわよ」

「うわっ!？」

アアン♡ アシクビヲ（ry ま、まるでハエでも払い除けるみたい……あまりの扱い、せめてゴキブリを潰すかの如く悪意をもって徹底的にやってくれ（破滅願望）

「っ！ ハアアッ！」

「——そこですっ」

「チツ……！ 見逃す訳ないか！」

だがその隙にマシユちゃんがシールドバッシュ、押し込まれたところに香子さんの援護射撃。馬鹿め、俺達は本命っぽい困だ！（生贄の鏡にしてマスターの屑）只管に足を引つ張って、二度とこの世界に居られないようにしてやる（過激）

「ええい、単純にめんどくさいわねこの二人イ……！」

「やあああつ！」

くマシユが盾を使って押し込む。香子が陰陽術で攻撃する。前衛後衛がハッキリとしている上に何方も相手に合わせる、という事を知っている。主にマスターのせいだ。それ故にあまり組んだことのない二人が、即席なれど絶妙なコンビネーションを發揮するのだ。

「あの二人はもう逃げたか……やっぱり此奴をどうにか……ツ!?」

「マシユ様に意識を向け過ぎではないでしょうか……ツ!?」

「なつ、くつ！」

邪ンヌに香子さんの攻撃がヒット。盾を回り込んで飛んでくるアレ……結構ギリギリで迎撃して、偶に掠ってますけど、もしかして出てくる直前まで見えないんじゃないでしょうかアレは。

くマシユの盾は攻撃範囲も広く、更に退治する相手の視界をも大きく制限出来る。逆に香子からはマシユの動きは丸見えで、簡単な合図であつても、こうして的確に援護が可能なのだ。

「——っ！ この、陰険女ああああ……！ 見えない所からチクチクチクチクと！」

「そ、そんなつもりはありません！ マシユ様の為に、援護をと思っただけです！」

盾での面制圧、陰陽術での狙い撃ち、なんだこのキラーコンビ……（戦慄）単純に砲兵と盾兵の相性が最高つていうのもありますけど、幸運値の高い香子さんは単純に遠距離攻撃が当たりやすいんですね。後クリティカル出しやすい。

要するに砲兵が自動的に狙撃兵を兼任してるみたいになっ

て、マシユちゃんに気を取られるのが文字通り命取りっていう。

「式部さん！ 助かってますから大丈夫です！」

「そ、そうですか！ でしたら頑張ります！ はい！」

「頑張るなア！ この、コケにして……アンタ等、舐めてんじやないわよ！」

邪ンヌ、切れたツ！ 炎がめっちゃ押し寄せてきてます。そりやあこんだけ二人に翻弄されたら頭の中沸騰しても仕方ないね。

「させませんっ……！」

尚全くマシユは怯まない模様。そりやあさつきまで全く通じなかった攻撃が、ぶち切れたからってそう簡単に突破できる、とはならないですよ（無慈悲）とはいえ明らかに炎の勢いは上がってるのでマシユちゃんには気を付けて頂いて。

「なーんて……前ばっかり見てていいのかしら？」

「えっ!？」

あちよ、マシユちゃん後ろ向いちや……あーっ!? マシユちゃん頭上頭上！ 邪ンヌのエクストラアタックのエントリーだ！ ヤバいって！

「——っ！ マシユウウウウウ！」

＜立香が吠え飛んだ。文字通り、弾丸の如く。流石にデミ・サーヴァントであつても、不意打ち気味にロケットの如く吹っ飛んできた立香の一発を受け止める事は出来ず、体勢を崩し倒れ込んでしまう。

「ま、マスタートツ……!？」

＜その直後、空中から降り注いだ無数の剣が次々と地面を穿った。少し離れた位置から見ていた立香だからこそ、この危機に気が付いたのだ。一瞬でも遅れて居ればマシユの体に無数の風穴があいていたかもしれないかった。

ヒューッ！ 此奴はやる奴かもしれないねえ！ というかマシユちゃんに危機が迫つてると見るや弾丸みたく突っ込むとかお前精神状態おかしいよ……（型月特有の逸般人）ちよつとでもタイミンズズレてたら串刺しになってたのはマスタートツでそれ一番言われてるから。「——つちい、小癩な真似を！ ならアンタ等纏めて火葬にでもして

あげるわ！」

あ、待つてくださいいよ(追撃) そのバクステからの追撃狙いは甘えなんだよなあ、オラツ！ バクステ狩り！(格ゲー並感) やり方はとっても簡単！ 相手がステップする方向にスライディング、体を障害物にするだけっ！

「い、はあっ!？」

倒れる！ 倒れたな(確信) サーヴァントとて足元が疎かならば足を掬われる、今やコレは常識……(聖闘士並感) さあさこんな所からはさっさと離脱するに限ります。万が一にも逃げ遅れると、怒れる邪ンヌがホモ君を絶対に狙ってくるので結果的に死ゾ(飛び越えた先にある真実の答え)

「こ、の、逃げるなあ！ 焼かせろ、このハゲえ！」

このハゲエエエエエエ!?(難聴) そんなヒステリック議員みたいなキチ声出してない……無くない? しかしこのネタももう大分過去な上に廃れ始めてるけど丁寧丁寧丁寧に使って行きたい所存です(漢)

∠余りの暴言に振り向いて文句を言いたくなかったが、振り向く余裕なんて見せれば、背後の怒れる竜がどんな報復をしてくるか分からない。貴方は振り返りもせず走り抜ける。

「マスターはやらせません！」

「っちい……い！」

∠そんな怒れる竜と化したジャンヌ・オルタに香子の援護が飛ぶ。直撃こそしなかったが、それでもマシユと立香が体勢を立て直し、貴方が逃げ切るだけの時間は稼ぐことは出来ている。

まあ藤丸君とマシユちゃんもつれ合ってたし、バックスステップからの遠距離炎とか危なかったからね。何の考えも無く妨害したわけがねえだルルオ!?(疑惑の判定)

「——ったく、予想以上に連携できてるじゃない」

「ま、マスター。ありがとうございました」

「マシユのマスターだからね。足りないところは俺が補うよ！」

かつこいい(かつこいい) ネタ全力マシマシ蛮族思考突撃マンホ

モ君には絶対に言えない言えないセリフなんだよなあ……（自虐）  
まあ、マスターも二人ですし、二人のキャラ立てが出来ているという  
事で一つ。

「良いわ、簡単に潰せたらつまらないものねえ！」

〈再び、炎の瀑布が此方に襲い掛かる。しかし今度はそれを防御せず、全員が全力でその場を離脱し、回避した。先ほどの上空からの串刺し攻撃がある以上、迂闊にとどまって防御すれば更なるダメージを負うかもしれない。

「ちい……あんまりそういう風に、ちょこまかと逃げんじやないわよお？」

でまた散るしかないと……全力で防御できるカードがマシユちゃんしかいない以上マシユちゃんに防御を依存するしかなく、マシユちゃんが防御しない⇨逃げ出さないといけないという……防御面が強固だが貧弱すぎる（自己矛盾）

「——思わずこういうの置きたくなっちゃうから！」

へっ？（素） って上に剣!? まさかの置き技!?（格ゲー並感） そんな細かいことしなくていいいら（良心） あ、待って普通にこれ死……

「先ずは一人、汝の道は、既に途絶えた……アハハッ！」

「マスターっ！」

オオン！（ノーダメージ） 物凄い勢いでぴゅーんと飛んでるんですけどホモ君。 あでもそろそろゆっくり地面に向かってへブウン!?

着弾！ い、一体何が……（犠牲者並感） 取り敢えずこのままドラム缶染みて転がっててもしかたないので Wake Up!（光と闇の果てしないバトル）

「足を止めたわねえ！ そこよー！」

んー、どうやら香子さんの扇で吹っ飛んだっぽいですね。ホモ君の立っていた辺りに扇が一枚……って三人の上にも串刺し剣が展開していつている!? アカン（アカン） そ、そんな置き技の連続とか恥ずかしいと思わないんですか!?

「……マスター、なにやってるんですか？」

あ、メドゥーサさんレオニダス王ちっす……って物凄いお顔されて

ますねえ……まあそりゃあ横合いからハゲが飛んで来たらこんな表情にもなりますかってそんな事言ってる場合じゃねえ！

今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。？

## 贗作逆襲画廊 ルーブル その二十三

皆様こんにちは、ノンケ（剣術指南役）です。ろこもこ。

前回は邪ンヌ相手にマシユちゃん香子さんが大活躍、藤丸君がカッコいい所見せて、ホモ君が救出されついでに遙か彼方に吹っ飛ばされた拳句メドゥーサさん達にめっちゃ『ええ……（困惑）』みたいな顔されました。ホモ君だけダサイ……ダサくない？

「……マスター、なにやってるんですか？」

〈ちよつと……香子さんの思いやりが、強かったんだよ。

〉お、メドゥーサさん丁度いい所に。俺を鎖でブン投げてくれ。思いつきり。

選択肢どうした!?!（困惑）いきなり九回裏みたいな終了間近の選択肢が出ちゃったんですが……でも楽しそうだからやっちゃおうかなあ！（選択肢下）

「……はあ？ いきなり何を……ああもう、分かりました。思いつきり行きますよ」

ツーカーで了承してくれるメドゥーサさんしゆき（しゆき） あ、ホモ君が鎖でグルグルされている（事実確認） 一気に動けなくなって……そしてハンマー投げの如くグルングルンと振り回して……いいよ、来いよ！ 投げ飛ばして邪ンヌに！（鉄砲玉）

「そお、れっ！」

メドゥーサの宅急便じやオラアン！ あ、ちよつと待ってダメージ受けてる!?! いやでもそりゃあメドゥーサさんが思いつきりやればそうもなるわな（納得） しかし、なんかヘンテコな連携を生み出してしまいましたね。マスターの投擲攻撃……ありだな！（外道）

「——なっ!?!」

〈弾丸の如く飛び、それなりの威力でぶつかった貴方は、なんとジャンヌ・オルタを巻き込んでゴロゴロと倒れ込む事に成功した。サーヴァントに直接攻撃しても意味は無くとも、サーヴァントにぶん投げて貰えばそれなりの妨害にはなるようだ。

その代わりダメージは深刻なんですけどね、初見さん（中ダメージ）

マスターの体力と引き換えに敵サーヴァントを一定確率で怯ませる劣化ガンドって感じですかね。まあこれはガンドと違ってホモ君の体力が続く限り使えるという特徴がありますけど。ホモ君頼もしいね、特攻して？ イヤです……（諸刃の剣）

「な、なんか……ハゲが……急に……」

ハゲハゲうるせえんだよガキ（サーヴァント歴な意味で）のくせによオオン!? 死ぬ寸前まで痛めつけてやるからなあ!?!（カラ元気）  
ダメージも負ってる状況なのでサーヴァントの攻撃なんて掠っても死にます（切実）

「……ってまたお前かああああああ!? さっきから徹底的に邪魔してくれやがって本当に、生かして返すかあ!」

◇ 香子さん援護お願いします!

一も二も無く香子さんにヘルプを求めろんだよ九十度（最敬礼）

そして助けを求めた直後に援護が飛んでくるサーヴァントの鏡。直撃した邪ンヌが物凄い顔してこつちを睨んでますけど。コワイ!

「ご、ごめんなさいマスター! 助かりました!」

妨害してなかったら一気に焼き払う積りだったからね邪ンヌ。皆を助ける為ならマスターの一人や二人使い潰すのも多少はね?（切嗣並感）

「ですが、どうして遥か彼方からマスターが弾丸の様に飛んで……マスター、お顔の色が悪いですよ、大丈夫ですか?」

何でもないよー（すつとぼけ） さあ気を取り直して邪ンヌ戦に戻りましょう。包帯も無いので体力回復は香子さんの宝具頼りですが、流石にマスターの中ダメージに使うなんてもったいないんだよなあ……（マスターXの献身）

「ま、マスター!」

「お二人さん話は後で! 来るよ!」

◇ 香子の手を引いて駆け出すそのすぐ後ろに、次々と黒い剣が突き立つ。明らかに此方を狙っている。先ほどから妨害に終始しているのが余程気に入らないのだろう。であれば……貴方は立香に視線を向けた。目が合ったのを確認し、そのまま視線でジャンヌ・オルタを



指し示した。

「——（コクリ）」

＜意図に気が付いたのか、立香がマッシュを促し、そっとジャンヌ・オルタの背後に回り始める。狙いは、ジャンヌ・オルタに致命の一撃を叩き込む為の奇襲だ。自分がどれだけ視線を引けるか。

ここは藤丸君とホモ君のスタンドプレーが光りますね。一々声で連絡し合ってたなら奇襲も何もないので、誰にも伝えず、逃げるフリをしつつケツ振って相手の眼を引くうゝ（囮作戦）のが重要です。

＜その為には香子の協力が不可欠だ。貴方は、手を引いて走る香子に、出来るだけ小声で此方の意図を説明すると……香子は、重苦しい表情で頷いた。

「分かりました……ですが、あまり必要以上の挑発等は、やめておいた方が」

＜となれば香子さんの援護が必要だな。

＜となれば必要な分の挑発なら良い訳だな！

お前遠回しに『危ないことしちゃダメよ』って言われてんだから素直に頼ればいいんだよ上等だろ!？（罵倒）なーんで、そこで『トランザムは使うなよ!』『了解! トランザム!』みたいな選択肢を選ばないといけないんですか（呆れ）

「は、はい。頑張ります!」

よおしいつちよやってみつかあ！（カカロット）しかし、香子さんに足止めて耐えて貰う訳にもいかないし………んそうですねえ、やっぱり僕は、王道を行く、視覚妨害系ですかね。という訳で香子さん、オナシヤス!

「……成程、冬木のランサーにやったように、ですか。しかし移動しながら、アレほどの術をとというのは、すみません。難しいと思います」  
せやろな（納得） 香子さんは動かないタイプのキャスターですし、そもそも文系に体育会系みたいな真似させるのが間違いつてそれ一。となると、別の手段を取る事になりますか………ありゆ？（困惑）

「——では! 私はその時間を稼ぎましょう!」

＜その時、貴方達の眼の前に立ったのは、先程迄ランサーと戦って

いたレオニダスだった。その姿を認めたジャンヌ・オルタはその顔を歪め……何かに気が付いたのか、その場所から距離を取る。ズドンという音と共に、そこに蹴りが突き刺ささったのは、その直ぐ後の事だった。

「流石に少し疲労したので、休憩を入れさせていただきます。申し訳ありません」

「メドゥーサ様！」

「まさか、ランサーが……？ つ、二対一じゃ分が悪かったっての!？」

ヒヤア！ お味方じゃあ！ しかも心強い前衛じゃあ！ ありがたやありがたや……ここはひとつ、反撃でもしねえか！ すっぺすっぺ。まあ根流しレベルの範囲攻撃が出来るの向こうですけど（暗雲）とはいえこっちの人数が圧倒的に増えたのはまちがいありません。

「……もう少しだけ……ええい邪魔よ！ 纏めて焼き払ってやる！」

お、炎来ますか。でもレオニダス王の守りを抜けると……フオツ!

ちよ、レオニダス王前じゃないっす、上です上！ 焼き払うとか言って上空に剣展開するとか（賢しさが）太いぜ。褒めてる場合か！

アーツ!

「貰った！」

「甘いっ！」

〳不意打ち……だったのだろう上空からの剣。しかしレオニダスはそれを一瞥もする事なく、あっさりと盾で払い除けて見せた。目を見開くジャンヌ・オルタに、レオニダスは油断なく盾を構えなおす。

「言葉で印象付けての不意打ち……しかし！ その程度、私は生前幾らでも受けてまいりました！ 不意打ちの際、視線を向けてしまうようであれば、まだまだ未熟！」

「な、に!？」

レオニダス王カッケエ……！ 正に古強者感じるんですけどよね（ゆうさく） というか、さつきまであんなに苦戦してた相手がここまであっさりとか、アレ。もしかして今、カルデアの最大戦力ってレオニダス王では……？

「やっぱり……いや、まだやるわよ！ 私はあ！」

「いいえ、これで決めます！」

＜レオニダスへの不意打ちが不発に終わったその直後。香子が腕を振るい……ジャンヌ・オルタを中心に竜巻が巻き起こる。香子の全力攻撃、その中心に包囲された今、ジャンヌ・オルタは完全にその視覚を封じられたのだ。

「——今ッ！」

「はい、マスター！」

＜ジャンヌ・オルタの死角に隠れ、機を伺っていた立香とマシユが突貫する。それに応える様に、貴方は竜巻の中にも聞こえるような大声で叫んだ。

＜メドゥーサー！ 香子さん！ 全力攻撃！

こつちこつちー（囀）レオニダス王にメドゥーサーさん。香子さんも居るこつちに視線を向けるのは正しい事だとは思いますが……残念ながらそれも悪手だ。悪く思え（KLN） さあ竜巻が晴れて……こつち向いてるな！

「は、竜巻で誤魔化せると思った!? 丸聞こえよ！」

ところがぎつちよん！ そりやあこつちが本命じゃないからねえ

！（瞳孔ガン開き）アルケーしゅき（大胆な告白）

「(´Д`)で……っ！」

「……ッ!? しまった、シールドー！」

＜背後を振り向いた時には、既に遅い。全力で盾を振りかぶって突っ込んでくるマシユが居る。しかし、それでも諦める訳にはいかない、と一歩でも下がろうとしたところに……

「逃がすかっ！」

＜下がろうとした方向から、立香が、その手に構えた剣を振りかぶって体諸共叩き付ける。その剣は、ジャンヌ・オルタが自ら手渡した剣。その剣を持って、立香はジャンヌ・オルタの動きを阻んで見せた。

「こ、いつう！」

「マシユ、いけえええ！」

「——やあああああっ！」

スマツシユヒット！ そういえばオルレアンでもお前マシユちゃ

んの一撃受けて沈んでなかったか？

「……ま、十分……か」

「盾の一撃をモロに胴体に受けて吹っ飛び、地面を転がるジャンヌ・オルタ。胴の鎧は砕かれ……そのまま、大の字になって動きを止めた。オルレアンと同じように、今一度、ジャンヌ・オルタは盾の一撃で倒れ伏したのだった。」

と言った所で今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。

## 贗作逆襲画廊 ルーブル その二十四

皆さんこんにちは、ノンケ（ゲーマーオーガ）です。ろこもこ。

前回、遂にジャンヌ・オルタを撃破。メドゥーサさん、レオニダス王を見せ札にしてマシユちゃん藤丸君が攻め入る、結構贅沢な勝ち方ですよねぇ？（恍惚）これぞエンジョイプレイの醍醐味だな！

∨——床に大の字になって倒れたジャンヌ・オルタは、立ち上がる事をしなかった。しかし黄金の光を発して居る訳でも無く、未だ警戒は解けない……その時、彼女から深い深い溜息が聞こえた。

「……あーもう！ やめやめ！ 私の負け！ ったく、ランサーとアサシンが時間稼いでる間に倒せなきや負けなのは分かってたわよ！」

あれっ、予想以上に潔い……やめやめって、無理かどうか分かんねえだろ（塩を送る） まあそれは冗談にしても、死んでも徹底抗戦するくらいの気概でくるかとおもったんですけど、意外と言うか。堕ちたフリしてるだけじゃねぇのかあ？（疑心暗鬼）

『……随分と諦めが早いね？』

「あんまりにも無様に足掻くのは嫌なだけ。引き際は弁えて置くのよ、あの女と違って。ほら、持って行きなさいよ」

∨その手から放り投げられたものを、慌ててマシユがキャッチする。それは……間違いなくあの聖杯の欠片だった。アレだけ大暴れしていた彼女からは考えられないほどに、まるでどうでも良いかのようには、それはあつさりとして此方の手の中に入った。

「え、えつと……」

「なに？ 良かったじゃない手に入って。喜ばないよ」

「いや、アレだけ、その。凄い大暴れしてたっていうのに……随分、あつさり渡すな、って」

「だから言ってるじゃないの。立つ鳥跡を濁さずって奴。嫌に諦めの悪い、醜い女にはなりたくないってだけよ」

邪ンヌってこんなに諦め悪かったでしたっけ……？（更なる疑惑）

あのサバフェスを無数にループしてなおへこたれなかったあの邪

ンヌですよ？　こんな諦めが早いとか、何というか信じられるかっていうと……ナオキです。

〈全員が、『本当か？』という視線を邪ンヌに注いでいる。相手が自分から降参をしたというのに、余りにも信じられないのは彼女が諦めが良いタイプには見えないからだろうか。〉

ナレーターにまで言われてて草ア！

「ええい！　そんなに暴れて欲しいなら徹底抗戦してやるけど!?　それが嫌ならさっさと降参を受け入れなさいよこのスツトコドツコイ共！」

〈ガーツ！　と旗を振り回しながらまくし立てるジャンヌ・オルタに思わず立香と揃って頷いてしまう。断ることが出来ない位の剣幕だった。これを断つたら、一体どんな風に自暴自棄になって大暴れるか分からない。〉

誰がデカイ態度とっていいつつたオルルア!!　興奮さしてくれるねえ、好きだよそういう態度！（豹変）　やっぱ邪ンヌはこうじゃないと……プレイヤーはねえ、君みたいなカワイイ、子の、そう言う感情直球な感じが、大好きなんだよ！（大胆な告白）

『す、すまない！　あれ、なんで僕謝ってるんだろう……？』

「アンタ等にリベンジする為にこの特異点を作った。でも負けたんだから、もうどうしようもないでしょうが！　私だってね、そんな絶対無理って事に立ち向かう程、馬鹿じゃ……」

『リベンジ、か。本当にそれだけかい？　ジャンヌ・オルタ』

〈その中で、さらにジャンヌ・オルタに向けて踏み込んだのは、ダ・ヴィンチだった。〉

『態々原作の絵こんな物を送り付けて私たちの気を引いて、リベンジするだけなら、贗作英霊全員を纏めてぶつければよかったのにそれもしない。そして目的に失敗すればあっさり諦める、消滅する寸前から聖杯の欠片を探し出して復活して見せる位の執念を見せたのにな？』

「……何が言いたいの？　万能の英霊サマ」

『引つかかる部分が多すぎるんだよ。目的と行動で、一致しない部分が、余りにも』

それはそう（冷静）とはいえイベントの都合と言ってしまえばそれまでですけど、ダ・ヴィンチちゃんと言及するって事は、何が目的だ！　ンモノか!?金か!?　そんなもの今なんの意味もないだろういい加減にしろ！

『何か別に、君には目的があつたんじゃないかい？　竜の魔女』

「……もしそうだとして、教える義理ある？　グルジアの軍師。お生憎様、アンタ等は勝利で終わりなのよ。精々モヤモヤしながら帰りなさい。ま、特異点作って宣戦布告したわけだし？　別に知らなくてもアンタ等に大義はあるんじゃないの？」

うわあ……最後までこういう嫌がらせして来る辺りは正に邪ンヌだなあ……お前らカルデアなんかに負ける訳ねえだろオラア！　馬鹿野郎俺達は勝つたぞお前！

「……それでも納得できないっていうなら、私の秘密を探り出して辱めでもしたら？」

「そ、そんな事はしない！　分かった、俺たちの勝ち！　それで終了！」

　　＼ 揶揄うような言葉に真っ先に反応したのは立香だったが、他の面々も流石にそこまでやるつもりは毛頭無かった。解決はしたのだからそこまで追い込む必要は無いだろう。その言葉にジャンヌ・オルタはニヤリと笑った。

「お優しいわね、カルデアのマスターちゃん？　……ま、禿の方はちよつと人相悪いし、こつちにしておいたのは正解だったかしら……」

「ん？　何か言った？」

「何も言っていないわ」

怪しすぎる（疑念＋114514点）　小声とはいえテキストに出ちやつてるんだよなあ……（プレイヤー並感）　とはいえここでその事を聞く事はシステムの壁に阻まれて、難しいねんな……（諦観）

「それより、急いだら？　その聖杯の欠片を回収したんなら、この特異点だって崩壊するんじゃない？」

『……ってそうだそうだ！　ヤバいよ！　特異点が崩壊する！　急い

でレイシフトしないと危ない！ 直ぐにでもレイシフトするから準備を！」

あっ……話してる余裕なんて無かったやんけ!? ちよ、急ぎましよう！ 崩壊までもう少しだけ？あと1ミリだけ？（厳しい現実） 因みに特異点から脱出しそこねてRTA再走を余儀なくされた兄貴姉貴も居るから気を付けよう！

「え、ちよ!?!」

『全員居るか確認を！』

〈で、デオンが居ない……倒れてるウウウウウウ?!〉

〈デオンが倒れてる！ お昼寝してるのかな!?!〉

えっ、なにそれは……（戦慄） 召喚して早々デオン君ちゃん消滅の危機!?! いやキラキラしてないし大丈夫だとは思いますが……『本造院君落ち着いて！ 大丈夫だ！ 疲労して倒れてるだけだと思っ！ とはいえ立てそうには無い』

「デオンは私が回収して来ます」

「み、皆さん一か所に固まって！ 急いで！」

〈慌ただしく全員が動き出す。もはやジャンヌ・オルタについて何か聞いている余裕も存在しなかった。そんな此方を見て、ジャンヌ・オルタがにやにやと笑っている。〉

「必死ねえ！ ハハッ、その無様な姿見ただけで、この特異点作った甲斐があつたつてもんよお！ 人理を守る皆が随分と必死こいて！

良い見ものだわあ！」

『君、良い趣味してるねえ……つたく、聞く気も失せたよ』

邪ン又凄いい趣味してますねえ！（憤怒） こっちが右往左往してんのは楽しいかあゝ邪ンヌウ！ この子は多分愉悦部入れますわあ……あれ？ ほんへのオルタちゃんより邪竜の魔女してませんかこの子。

「あーあ！ 良い物見せてくれた札に、その剣はくれてやるわよカルデアのマスターちゃん。まあ私が消えると同時に消えるけどねえ！

アハハハッ！」

「楽しそうだなあ竜の魔女さんよ！ まつたく、オルレアンの時より



随分と人間らしいじゃないか！」

「——その時、丁度貴方はジャンヌ・オルタの方向に顔を向けていて……それを見た。いや見てしまった、というべきか。立香の言葉の後、一瞬、笑みを引つ込めて……ほんの僅かに、照れたような顔をしたら彼女と……目が合った。物凄い睨まれた。」

「……」

「……」

おう、喋るんだよお！　というか、気まずそうに視線を逸らしてるホモ君が面白すぎる。あの強面が逆に面白さをバインバイン（ドラえもん）　宇宙を埋め尽くしそう（NBT並感）

「見てはいけないモノを見た。と、思つて目を逸らしたが……余りにも視線が痛すぎる。見えてないのに視線が突き刺さっているのが分かつてしまう。そして、その圧に負けてもう一度視線を向けると、口パクで、此方に何かを伝えている様に見える。」

「（も・し・ば・ら・し・た・ら・あ・と・で・ぜ・っ・た・い・に・や・く）」

「聞こえた。自分は読唇術など使えないのになぜ分かるのか、なぜジャンヌ・オルタがそう言っているのか。あらゆる思考を投げ捨てて、貴方はただゆっくり頷く事しかできなかった。」

ひえっ……迫力がダンチです。ちよ、ほんへより大分ハイスペックじゃありやしませんか邪ンヌ。愉悦をこの時点で理解してたりとか、情緒面で相当に成長しています。本当にサーヴァント歴赤ちゃんサーヴァントですか？（困惑）

「デオンを回収して来ました。もうレイシフトを開始しても大丈夫です」

「あ、分かりました……って、どうした康友。顔青くして」

「いや、なんでもない。」

「いいいや……なんでも、ないんだ……」

どっちにしても聞しか感じない回答にホモ君の悲哀を感じます。というか、藤丸君にはなんか乙女っぽい反応していたというのに……鯖タラシか？　鯖タラシなのか!？」

こちららサーヴァントとは基本的に シュバルゴ！ 3人に勝てるわけないだろ！ ×鯖ア！ フル焼きそば！ 馬鹿野郎お前俺は勝つぞお前！ でスマブラだったのに！（特攻野郎ホモチーム）  
「そうか？ その割にはなんか……おばさんに怒られた時みたいな顔してるけど」

『それじゃあレイシフト開始するよ！ 誰も逸れて無いね!？』

「あ、はい！ えーつと……大丈夫です、皆居ます！」

「——カルデアの……髪がある方のマスター！」

＜圧力に屈した貴方を気にすることなく、レイシフトが始まる……その時、ジャンヌ・オルタが声を上げる。さり気なく自分をデイスラれて更に落ち込む貴方。その背を香子がさする横で、立香が声に応えた。

「いや、言い方をだな……なんだよ！」

「——待ってなさいよ」

「はあ？ 何を待ってろって……！」

＜その声を最後に……貴方達は、黄金の光に包まれたのだった。

ロードカ……ットオ！ ……の辺りで、丁度いいお時間になりました。今回はここまでとしましょう。実は私、なんとなく嫌な予感を感じているのですが……まあそれは次回となります。ご視聴。ありがとうございました。

## エンドロール・ルーブル その一

皆さんこんにちは、ノンケ（竜の魔女）です。

前回は、邪ンヌが諦めの良いイイ女振りを見せて、愉悦部の素質を目覚めさせて、そして最後にちよつと乙女っぽい所を見せました。特異点から脱出するまで、バトルよりも邪ンヌのターンだったとかちよつとおかしくないですか？（素直な疑問）

「——はあ、なんか最後の方が慌ただしくなっちゃったし、結局彼女の目的を確認する前に終わっちゃったけど……でも、特異点修復完了したのは確かだ！ お疲れ様！」

「お疲れ様だ。いやあ、ジャンヌ・オルタは強敵だったね」

＜カルデアスの前に降り立った貴方達の前に、ロマニとダ・ヴィンチ。時計を見てみればまだ深夜には届かない程度の時間。体感よりも向こうにはあまりいなかった様子だ。

「物凄い濃い一日だったと思う。もう遅い時間だし、マシユと藤丸君達は、直ぐにでも休んでくれ。報告とか諸々は、また明日にする事にしよう」

はーつつかれ！（限界） ダメージも色々ありますし、ここは素直に休む事にしましょう。しかしサーヴァントの皆さんと交流したいっていうのに、全然合間がありません。次の特異点前には必ず。え？ レオニダス王？ アレはトレーニンングだから……

＜物凄い勢いで駆け抜けた特異点だった。足を引き摺って、貴方も立香も、それぞれの部屋を目指し始める。一種、オルレアンよりも疲れた気がした。

はい。という事でルーブル、無事攻略しました。くう疲。正直、予想を遥かに超えたタイミングでのイベント特異点でしたが……ほんへとは大分違う点もある内容でした。まあ邪ンヌは自分の事を見せつける為にあんな大掛かりな舞台を整えた……と、言う風な内容ではありましたが、あの最後が、物凄く気がかりですよねえ、後藤さん？

（エアフレンド） まだ事件は終わっちゃいない……（特車二課）

『——待ってなさいよ』

うーん。待つてなさいよ、というのは……そして、後で焼く、というあの口パクの内容だとか。色々と不穏な点はあるんですが。その前に特異点で手に入れた経験値で成長しましょうね〜（お楽しみ）  
〜諸々カ……ツトオ！〜

はい、成長の結果報告ですが、藤丸君はステータス、スキルの成長等順調です。藤丸君は邪ンヌに攻撃を通したからか結構多めに経験値が入ったらしく、成長著しいです。一方のホモ君も成長方針は変わらず鬼種の魔一点集中。オルレアンより経験値は当然少ないので、こつちの成長は控えめですが……オルレアンで先に覚醒した分、これでトントン位ですね。

という事で成長終了。起床、起きろー、朝だぞー。体力も全快とまではいきませんが回復していますね。そして端末チエックでメールを発見。レオニダス王からですね。というか既に端末を使いこなしているのか……（驚愕）で、内容は、今日は特異点の疲労などを考えて休み、だそうです。優しい（確信）

〜貴方は、ベッドから体を起こし、歩き出す。朝の特訓が無くなって、特に予定もなくなつた……訳ではなく、昨日やるべきだったことを後回しにしているので、それを熟さなくてはならない。

ホモは忙しい（確信） お前は超人ホモマスターとして人理修復の為に働くのだ！ 超人つていうよりホモ君は鬼ですけれど。

〜先ずは、昨日召喚して、いきなり使い倒してしまった新人サーヴァントの元へ……行こうとしたが、その新人サーヴァント、デオンが何処へ行ったか、さっぱり分からなかった。

昨日ホモ君は疲れ切つて寝てましたからねえ。え？ 私が知ってるかって？ 知wらwなwいwよ。ホモ君視点でこのゲームは進むからね、しょうがないね……こうなればカルデア中をしらみつぶしに探しつつ、その時間を有効活用するとうましよう。

〜114倍速〜

具体的にはダ・ヴィンチちゃんの工房を訪ねるんだよ上等だろ。後、包帯も無くなつたので売店で補充しておきました。因みにせんべいは消費をしないようです（なくなる心配は）ないです。順調

にせんべいお兄さんを目指しましょう。

「はいはい……おや、本造院君。おはよう」

〽おはよう！

〽 Good Morning

やっぱりここは……王道に行く……英会話ですかね（選択肢下）

「君の強面でそれをやってもあまり爽やかには見えないねえ」

〽ケラケラと笑うダ・ヴィンチに、自覚していると貴方は苦笑いしつつも返す。何となくこういう気分の日もある、という事で。最後にせんべいをダ・ヴィンチに放り投げて、貴方は会話を締めくくった。「ありがとう。英会話の気分の日、か。うんうん。そう言うこともあるよねー、使い慣れてる道具じゃなくて、何となく使った事ない奴で発明がしたくなる……分かるとも」

それは本当に同じ感覚ですか？ 天才特有の謎感覚じゃありませんか？ 貴方。正確には貴女……いや貴方か。FGO特有のガバガバ性別変更でドツチモドツチモフタチマル……！（大混乱）

「それで？ 今日はどうしたんだい、私の部屋まで態々」

〽元々はデオンを探していたのだが、探している間の時間で、ダ・ヴィンチが特異点に向かう前に言っていた、要件を確認しようと思つて来たのだ。

「ああそうか。そう言えばそんな事も言ってたね……ちよつと頼みごとがあったのさ」

頼み事？ 香子さんが居た場合、素材を態々集めなくても開いてくれるのですが、一応は素材を納品しなければいけないでしょうか。

〽そう言うと、ダ・ヴィンチはいきなり貴方を……突然展開したゴツイ右腕で貴方の首根っこを捕らえた。完全に思考を停止させてしまった貴方だったが、いきなりの異常事態に、五秒ほどたってから漸く気が付いて暴れだす。

〽ちよ、待って!?! 私何かしました!?!

〽ええい俺に首輪をかけるだど！ 俺は永遠のロンリーウルフなんだよ！

流行らせゴラ！ 流行らせゴラア！ サーヴァントになんか負け

る訳ねえだろお前コラア！ 馬鹿野郎お前俺は勝つぞお前！ あ、選  
択肢は当然上です。下とか完全に頭浮かれポンチ過ぎて首引っこ抜  
きたくなる。

「べ、別に何か脅迫したりお説教するつもりじゃないさ。まあ万が一  
勘違いされると困るから拘束してただけで。内容が内容だから」

「＜拘束しなければならぬ、とは一体どんな無茶振りをされるのか。  
貴方は遂に声すら上げずに無言で拳を構えた。相手がサーヴァント  
だろうと、抵抗を諦めるつもりは無かった。」

「……私、君に何かしたつもりないんだけど、もしかして初手拘束がマ  
ズだったかな？」

「当たり前だよなあ……いきなり拘束しなきゃいけないような要件  
なのかと思つて当然というか。そもそも普通の方の手でそつと抑え  
るとかじゃなくて、いきなりパワーハンド展開して捕獲とか、若干や  
りすぎな気まです。ムーア！（抵抗を）我慢できぬ！（永遠の  
レジスタンス）」

「まあまあ、そんな無茶をさせるつもりないよ……ちよつと服一式丸  
ごと今ここで脱いでもらいたいだけだから、ね？」

「＜——完全に思考を停止した。何を言っているのか、頭を超高速で  
回転させて。理解してから。速攻で額から角を生やし、瞬間的出力  
を腕に集中させて抜け出すと全力でその場を後にしようとし……」

「レオナルドパーンチ遠距離弱バージョン」

「＜しかし一瞬で掴まった。全力で逃げ切ろうとしたが、文字通り段  
違いの速度で確保された。回避も間に合わなかった。何だったら必  
中スキルが付いている様だった。」

「流行らせゴラ！ 流行らせゴラア！ 自分の事をお、変態ばつ、変  
態万能屋（命名）が確保してるんですけどお……誘拐罪ですよ誘拐罪  
！ いきなり脱げとかちよつと、もしかして中身が男だから溜まって  
らっしやる？（偏見）」

「ええい、だから逃げるんじゃないかと思つたんだよ！」

「＜確保されなおされても、貴方は諦めない。支給されたこのカルデ  
アの制服は結構気に入っているし、流石に今から速攻で脱がされる積

りも無い。そもそも脱がせて一体何をしようというのだ

「そういう変な事するつもりないから！ 私だつてするにしたつて相手は選ぶから！」

〽それはそれで反論したかった。俺は選ばれないタイプの間ではないと言いたかったがしかし……どう足掻いても犯罪者顔だった。選ばれたくはないと言われても完全に仕方なかった。貴方はそつと泣いた。

ハゲ、三白眼、そして追加された頬の傷……前まではチンピラで済みましたけど、傷が付いてからというものもう完全に筋者にしか見えないうか。

因みにホモ君をレジライのイラストレーターさんが描いたら間違はなく『龍が如く』のパッケージです。神室町で真島の兄さんの部下やってるか、下手すると桐生ちゃんを襲撃するちよつとエライさんです。誓って殺しはやってないんだよなあ……

「私があるのは君自身じゃなくて、その制服だから！ ちよつとそれを私に調節させて欲しいんだよ！ 次の特異点に備えて！」

と言った所で、今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。

## エンドロール・ルーブル その二

皆さんこんにちは、ノンケ（希望おじさん）です。性格は悪くないんですよ。性根が腐っているだけで。

前は、ダ・ヴィンチちゃんに制服を脱げとか言われた挙句、上下を引っぱがされました（事実無根&風評被害） あんだけ色々と言いましたが、ダ・ヴィンチちゃんもそんな凄まじいやり方で若い燕確保するようないやありませんし、中身男ですし。

「……先ず君のその服。それ、一応魔術を使う為の礼装なんだよ。それも、素人でも魔術が使える位には、凄い優秀な。知ってた？」

「知らない。貴方は真つすぐ、嘘偽りなく答えた。自分には似合わないが、結構この服は気に入っていたので、気に入りの服だというだけで終わりにしていた。」

「まあそうだろうね。知ってたら使いたいか言ってたろうし。まあそれを伝えなかったのは、まだ君達には使えなかったというか。魔術の素人、とかそう言う次元ですらなかったからね」

ぐうの音も出ねえ……ホモ君と藤丸君は魔術素人どころか魔術生後一週間レベルです。士郎君でも素人扱いなので。

「で、漸くカルデアもちよつと落ち着いてきたから、その調整の為に回すりソースも出来たんだ。次の特異点を攻略するのに色々活用できた方がいいだろう？ だからその為に使えるものは使うべきだろうか？ 工房開店の祝いに、私が直々に調整しようかと」

成程。そういうえばこのカルデア魔術礼装、全然使ってなかったというか、そもそも使う選択肢が無かったというか。この機会、というかセプテムから使えるようになるみたいです。全力全開でイクイクイクイクイク！ いくよお！ 行く！（特異点への前向きな感想）

「という事で、まあ暫くはそのレプリカを使う事になるけど、次の特異点までには仕上げておくから、私に預けておいて貰えるかい？」

「あ、そういう事なら是非お願いします。」

「だが断る。この本造院康友が……（ry）」

お前は露伴先生か（半ギレ） 大人しく了承するんだよお！



「はいはい！ ダ・ヴィンチちゃんにお任せー、つてね？」

「――それから、改めて脱いだそれをダ・ヴィンチに預け、貴方は改めてデオン探しに赴く事にした。ダ・ヴィンチからデオンに割り当てられた部屋を聞いて、その部屋に向けて歩みを進め……目的の人物を見つけたのは、意外にも直ぐだった。」

「ん？ おやマスター。お早う。昨日は……よく眠れたらしいね。とてもいい顔色だ」

デオン君ちゃんオツスオツス！ 昨日は本当にお疲れナスでした。小次郎さんとの一騎打ちとか、あのドル箱アルトリアさんだつて相当に苦戦していらつしやつたというのに。どうして僕をこんなに喜ばせるんですか（誉め言葉）

「私を探していたんだね。何か用事かい？」

「昨日は会話する暇も無く即座に特異点だった。サーヴァントとマスターとして、互いに交流を持つのは悪い事じゃないと思う。香子やメドゥーサとは色々話したりもしたので、デオンともある程度は話しておきたい。」

「成程。それは確かに必要な事だね。じゃあ……折角だし、カルデアを巡りがてら何か話でもしようじゃないか」

あ、いいつすよ（承諾） 寧ろこつちが持ち掛けたんだから了承してもらおう立場なのを自覚して、どうぞ（自己激怒） まあ、序に色々何か聞きだせればいいんですけど。

「カルデアの施設だが、貴方もまだそこまで詳しく知っている訳でも無い。しかし、それでも道中の時間に話す程度にはネタにもなったし、それに……自分の事情も、暇つぶしの種にはなった。」

「……それ、何てことない、位の感覚で話す事かい？」

「貴方にとつては所詮、角が生える程度の事だ。犬歯が尖っているのと大して変わらない感覚である。そもそも元から顔つきがアレなので、妙に似合ってしまうまである。」

とぼけちゃって……とか揶揄うまでもなくマジでどうでも良いとしか思っていないこのホモ野郎である。角が生えたのをその程度で言うとか、（情緒が）壊れるなあ……もうちよつと人間らしく思い悩

んで、なんだその偉そうな……すわわっ！

「氣遣う必要、というか氣遣ったらそっちの方が失礼そうだね、コレは」

◁デオンが仕方なさげに笑っているのを見て、どうやらそれなりに打ち解ける事が出来た様だ。こうしてサーヴァントと交流をして、互いを把握すれば戦いでもキチンと連携を取ることが出来るだろう。

「所で、その角の事は……君の友人の彼には言ったのかい？」

◁……一瞬考えて、確か全くもって詳しく話していない事を思い出した。流石に話さないという訳にもいかないだろうし、ちやちやつと話しておかねばならないだろう。

親友なんだからその辺りは話してやりなさいよ……（憐み） 誰よりもホモ君に近い相手でしょうに。まあ角の事が発覚した時点で直ぐに次の特異点が始まったりしましたからまあ。ロマニの検査もありますし、それが終わってから話を聞くとしましょうか。

「はあ、そう言う大事な事はちゃんと話しておかないといけないと思うよ？ 藤丸君に」

「——っと、お！ 康友、おはよう」

◁その時だった。丁度話題に出てた立香が曲がり角から出て来た。その右手には……見覚えのない黄金の札の様な物が。

「おや、噂をすればかな」

「んだよ、二人して俺の悪い噂でもしてたのか？」

◁違うよ、唯の暇つぶしだ。

◁そう言う立香こそどうしたんだ、その右手の奴は。

◁ここは普通に選択肢下。で、FGOで黄金の札と言えばやっぱり……多分呼符だと思うんですけど（名推理）

「ああ、なんか。ベッドにぶっ倒れてた時にコレを握りしめてて。何なんだろうな、これ」

「……文様が書いてあるね」

「なんだろう、この模様……あ、デオンさん、だよねえっと。おはようございます」

◁この黄金の札に心当たりも無い。これが悪いものだったりしたら

危ない。万が一も考えロマニに見せて調べて貰うつもりで彼を探していたらしい。

？

それはね、呼符といって、FGOのマスターが血肉を捧げても入手したいとか暴走するような代物なんだよ藤丸君……石？ アレはもう麻薬みたいなもんやし……（目逸らし）

「流石に何かも分からないようなものを持つてるのは、ちよつとなあ」  
〈丁度いいタイミングだ。立香の話が終わった後に自分の話をすればいいだろう。貴方は立香の用事にちよつと付き合う事にした。

……これは藤丸君について行った方が良いでしょう。上手くいけば良い物が見られるかもしれません（下衆顔）

〈移動力……ツトオ！〉  
「……居ない？」

「ああ、ダ・ヴィンチ技術顧問と話をしにいったよ。確か、礼装について色々話す必要があるって言ってたけど」

まさかのホモ君の行動ですれ違いになつて草生える。お前道化師みてえだなあ？（侮蔑の眼） さて、という事でさつき出て行ったダ・ヴィンチちゃんのお部屋にまさかのとんぼ返りと参りましょうか。

「礼装……つてなんだ？」

〈〉なんか……魔術が……どうこう、って感じの奴？

〈〉なんかすげーサポートアイテム。

どっちもI Qクツソ低そう……低そうじゃない？ 言葉というか、なんか言い方そのものが馬鹿っぽいというか……まあ、少しでもマシな上の選択肢にしておきましょうか。念のために。

「はーん、魔術が、ねえ……俺達とは関係なさそうだな！」

〈関係はあるのだ。間違いなく。寧ろ自分達に一番関係があるみたいなのだが……取り合えず貴方達は、ダ・ヴィンチの工房に向かって歩き出し……暫くして、その扉を叩いていた。

さて、ロマニにコレを見せて、すんなりと召喚の流れになるのか、それとも何か一悶着があるのか……楽しみですねえ！

「失礼しまーす。ダ・ヴィンチちゃん、ドクター、ちよつと相談したい事がー」

〈中に入った立香に、奥で何かしらをしていた二人が振り返る。

「おや。藤丸君、おはよう。元気そうで……その右手の物はどうしたんだい？」

「朝起きたら、これを握りしめてて。見た事も無いし、こんな物もって寝た覚えもないから」

「……そりゃあ不気味だろうね。ちよつと、レオナルド」

「はいはい」

まあこの後は召喚の流れになるとは思いますが、呼符ってそういえばどっから来たのか、どういうものなのかの言及がないんですね。ジツサイ急に出てきたら警戒重点。

「ちよつと待つてね、コレを適当な所にしまつてから……」

〈その時、ダ・ヴィンチが持ち上げたのは……例の贋作だった。『がんさく』と気の抜けるようなメモ用紙が貼ってあったから分かりやすい。それが持ち上がった瞬間に……立香の持っていた黄金の札が、光を放った。

「——な、なんだっ!？」

「マスターッ!」

〈輝きの直後、デオンに床に押し付けられて……見上げた瞳に入ってきたのは、くるくると回る、七色の輝きだった。輝きは、真つすぐと壁を突き抜けて……何処かへと消えた。

虹回転じゃねえか……! (団長) RPGでもこの演出出るんすねえー(感嘆) つて、あちよつと待つてください、待つて、止まれ! ……ダ・ヴィンチちゃんの部屋から飛んで出てっちゃいましたよ?

「今のは……!？」

「あつちは確か……召喚用の部屋がある方向じゃ」

〈ダ・ヴィンチの言葉に、全員が顔を見合わせ……取り合えず、走り出した。

勝ち取りたい! 物もない! 違うだろお……? (牽制)  
移動力……ツトオ!」

∨部屋の中心。踏み込んだ貴方達に、そこに立っていた女性は……  
ニヤリと、笑顔を浮かべながら振り向いた。

「どうやら上手くいったみたいね。さ、こちら契約書です。さつさと  
記入しなさい、マスター？」

今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。

## 拠点フェイズ その一

皆さんこんにちは、ノンケ（竜の魔女・夏バージョン）です。

前回は……まあ、察しのいい奏者兄貴姉貴達は察していらつしやつたようですが、邪ンヌ参戦です。しかし、呼符にあんな機能があつたなんて全く知りませんでした（無知） R T A奏者兄貴姉貴達は呼符でサーヴァントを呼ぶまでもなく初回召喚サーヴァントの皆さんであつさり攻略してたからね。使い方知らないのもしょうがないね。

「……何を呆然としてるの？ 契約するの？ しないの？」

「あ、あの、えつと……ええ？」

「…此方を呆然と見る立香。助けて欲しい、とでも言いたげだが、ドクター及びダ・ヴィンチ、当然ながら貴方も、そろつと、かつ揃って首を振った。明らかに用件があるのは立香に対してだ、と。デオンは警戒を欠かさずジャンヌ・オルタを見ているようなので安心していけ、と目で伝えておいた。

「ど、どうやって、ここに？」

「何って、召喚されて。トリガーはあんたが握っていた金の札。触媒は私の絵。キャストア作」

振り向く振り向くな。お前そんな目を真ん丸にして出目金か何かかよお!? というかロマニ兄貴もギャグみたく顎をカクーンと開いて……状況がカオスすぎる。全く困ったもんじゃい！（他人事）

「……召喚を誘発する礼装……いや、出来ない事はない……のか……？ 彼女が使っていた術は全てそれこそ、格が違うレベルの魔術だったし……うーん……?!」

ロマニ兄貴が大混乱してらつしやる、医療室に担ぎこんで差し上げろ（提案） それは兎も角、そろそろ邪ンヌの表情が『限界だぞオラ』つてなり始めてるので藤丸君はお返事して上げて？（追加提案）

「……で？」

「あ、あぁいや、その……力を貸してくれる、のか？」

「だからそう言ってるでしょうが！ 何？ アンタの耳は節穴な訳！？」

「ああいや違う！ 分かった！ 力を貸してくれるなら契約させてくれ！ こちらからお願ひするよ！」

「勢いで完全に押し切られ、立香はその差し出された契約書を手に取って……瞬間、完全に停止した。まさか何か悪い呪詛でもかけられたのか。貴方は誰よりも先に立香に近寄り。そして同じように凍り付いた。」

「マスター?!」

「……何やってんのこいつら」

「貴様！ その契約書とやらに何か仕組んだのか!!」

「はあ!? そんな事する訳ないでしょ!? 普通の契約書よ！ サーヴァントって契約する者なんでしょう!? 必要だと思って！」

「サーヴァントの契約に書類は必要ないんだよなあ……（満面の愉悦スマイル） まあそれに関してはオイオイ弄るとして、今はどうしてホモ君達が完全停止したかです。どうやら邪ンヌには覚えがないようです、さて。」

「……な、なあジャンヌ・オルタ。物凄い申し訳ないんだけど」

「あ、喋った。アンタ、大丈夫なの？ 契約一つで顔色変えるとか、貧弱すぎない？」

「えつと……すまねえ、フランス語はサツパリなんだ」

「……一陣の風が吹いた。そうなのである。立香、そして貴方も、お世辞にも秀才とは言えない。何方かと言えば学校の勉強自体は、必死こいて追い付いているタイプだ。そんな二人にガチガチの本場フランス語は、異世界の言語にしか見えなかった。」

「草オブ草。お前ら揃って脳筋かよお!? まあ二人共マスターじゃなくて暴れ猪みたいなものなのでそれも多少はね？ それにフランス語なんて分からなくていいんだよ、上等だろ（半ギレ） どうか邪ンヌの契約書ってバリバリのフランス語なんすねえ（感心）」

「そう言えば、アンタ等って生粋のジャパニーズだったわねえ！」  
「あ、うん。バリバリの日本人です。はい」

「っだあー！　そこは勉強しておくとかしなさいよ！」

「私の理想の契約シーンがー！　等と叫ぶジャンヌ・オルタに対し、剣を抜きかけていたデオンですら『困惑』と顔に書いているような有様である。見た目が明らかに悪役という感じだと言うのに、行動とのギャップが……」

正に『ええ……（困惑）』って顔してますよねえ。まあ邪ンヌってオ  
ルレアンからアヴェンジャーになった後って基本こんな感じですし、  
慣れてあげてくれよなー頼むよー。

「……えっと。とりあえず、契約するかどうか決めればいいんじゃないかな。藤丸」

「あ、えっと、はい。そうっすね」

「立香がその視線をジャンヌ・オルタに向け直した。明らかに不満  
です、という表情をしている彼女に。少しためらいがちに彼は切り出  
した。」

「えっとだね、その、俺としても、その……君の様なども強いサ  
ヴァントが味方になってくれるのはとても助かる、ので、はい」  
「……とても強い……っふん……でっ」

「俺としても、えっと、是非とも、契約、させてもらいたいと、思いま  
す。はい」

「……ふーん？　是非、ねえ。そこまで言われちゃうと、私としても？  
やぶさかでないというか？」

不満げだったのが一転して凄いイイ笑顔されてらっしやる。こん  
なチヨロいんかよ、信じらんねえ！（誉め言葉）　まあチヨロいって  
うより、褒められ慣れていないだけなんですけどね、初見さん。

「で？　契約書にサインを……もう日本語でいいから」

「あ、いや分かったけど、えっと。サーヴァントとの契約って、こうい  
う感じで書面で契約する事もあるんだなあ。俺知らなかった」

あっ、それは……

「当然。契約よ？　それなりにしっかりといけないって訳。分かる  
？」

「いや、そういうのは必要じゃないと思うけど？」



◇ダ・ヴィンチの言葉に、先ずジャンヌ・オルタが硬直した。その直後に、立香が『えっ、そうなの』という顔をしてロマニを見た。「えっと……サーヴァントとの契約っていうのは、普通のそれとは大きく違うからね。特に契約書、とかは要らないんじゃないかなー、と……はい」

「私もそんなことしなかったしねえ。デオンもそうだったろ？ 本造院君」

◇えっと、ノーコメントで。

◇我、この身に語る言葉を持たず。ただ無を貫くのみ。

ちよつと中二病に感染した選択肢下君は置いておくとして、邪ンヌの顔が硬直してらっしやる。ちよつと言うのをやめて差し上げろ（建前） 良いぞもつとやれ（愉悦） まあその辺りは、邪ンヌの持ちネタなんで、そこは楽しんでいきませんか！ いきましようよ！（意気軒高）

「……えっと、その……オルタ？」

「黙りなさい。焼くわよ。契約成立。って事で私コレで失礼するわね」

◇物凄い早口だった。そして秒速でそのまま全力で部屋から出て行くこうと歩き出す。凄いスピードだった。しかし前が見えて居なかったのかそのまま壁に一度頭をぶつけ、『いた』とか言いながら、改めで出口から出て行った。

邪ンヌー、いい眺めだなー？ 邪ンヌー？（煽り） まあこんな感じで、ちよつとドジして大爆発してからのこの、誤魔化しムーヴが物凄い、乙やねんな……味わっていいけ（超絶変態）

「藤丸君。彼女に部屋の事とかも伝えてあげたほうがいいじゃないかい？」

「あの、ちよ！ 待つてよオルタ！」

◇なぜかニヤリと笑ったダ・ヴィンチの言葉を受けて、藤丸がジャンヌ・オルタを追いかけて行って。貴方もその後が続く。別に付いていく意味も無いが、何となく今の流れから、この先を見て居た方が面白いかもしれないという直感があった。

「マスター、え、着いていくのかい？」

〈面白い予感がするんだ！ デオンも行こうぜ？

〉人間って、面白そうな場面に遭遇しちゃったら……ね？ 共にGO。

「ここは当然下ですよええ！（満面の笑み）

「うん。まあ良いけど。あまりいい趣味とは思わないよ？」

〈引き続き、デオンとの交流が続けられそうだと貴方はニツコリと笑って立香の後に続いて部屋を出て……デオンは微妙な表情でその後続いた。

やっぱり、こういう藤丸君とサーヴァントのわちゃわちゃを肴に自分のサーヴァントとの絆を深めるのは基本やな！（確信） もっと太いシーチキンが欲しい……！ 狂いそう……！（エンジョイプレイの醍醐味）

「——離しなさいよ！ 私はね、コレからカルデアを見て回ろうとね！」

「だから、その前に君にも部屋を用意するから、選んでつて話！」

「……それを早く言いなさいよ！」

〈物凄い勢いで立香とジャンヌ・オルタが言い争って……いや、争ってはいない。立香が一方的にまくしたてられている。だがジャンヌ・オルタは怒っている、と言うようには見えなかった。何方かと言えば……

「ねえマスター、アレはもしかして、照れているのかい？」

〈いや……詳しくは分からん。

〉うーん、ここまで分かりやすいとは。アレは間違いなく恥ずかしかっているのを誤魔化している。

「まだまだ終わらせない、倍プッシュだ……！（選択肢下）

「多分そうだよ。なんというか、オルレアンやルーブルの時の印象とは、大分」

〈まあ、彼女も女性だそう言う一面もあるのだろう——と、零したその時だった。聞こえていない距離の筈なのに貴方にグリーンとジャンヌ・オルタがその顔を向ける。アカン。背筋を走った恐怖の感覚の

ままに、貴方は廊下を駆け出した。

「待ちなさい！ その出歯亀！ そのハゲ頭を荒野に変えてやる！」

◇誰がハゲじゃあ！

ホモ君怒りの反論。うーん、邪ンヌ加入で、ホモ君のハゲ弄りも加速するみたいですね。楽しそう（小並感）とか言ってる場合ではありませんね？（切り替え）今イベントじゃなくて操作なんで、ミスると一敗なんだよなあ！

と言った所で、今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。

## 拠点フェイズ その二

皆さんこんにちは、ノンケ（フランスの盾）です。

前回は邪ンヌと藤丸君の微笑ましい絡みが見られました。良いですねえ。これこれ。こういうのこそエンジョイプレイの醍醐味ですよ！ イベント特異点の辺りはまさに『イベント』って感じで、こうやってマスターとサーヴァントとの絆を描きませんか？ 描きましようよ！

「——って事でえつと……ジャンヌ・ダルク・オルタ、です。俺が、召喚……しました？」

「どうも。ま、精々私の活躍を見ていなさいな」

＜邪ンヌと立香が諸々言い争った後。取り敢えずカルデア主要メンバーを集め、新しくやって来たメンバーの紹介をする事にしたのだが……空気が何というか、凄い微妙である。立香も様子もそうだが、貴方など煤塗れで真つ黒である。

逃げ切りましたが、それでも関係なく邪ンヌの恩讐の念は直撃しました（憤怒） 逃げ切らないとどうなっていたのかって？ 死んだんじゃないの？（KWSK）

「……し、式部さん。何があつたんでしよう、先輩とやつさんは」

「分かりません……分かりたくありません……！」  
「？」

あの表情……さては既に泰山解説祭を発動させているツ……!?（覚り並感） まあこの微妙な雰囲気を共有して、皆で幸せになろうよ（特車二課）

＜各員が黙りこくっていた。予定にないサーヴァントの突然の召喚。そしてそれが立て続けに敵対し、カルデアに打ち倒されたサーヴァントなのだ。あまりの事態に動揺しても仕方ないだろう。喋れない者。喋るつもりが無い者。それぞれの思惑が重なり、この状況を生んだ。

「い、いやー、とても頼もしい味方が入ったね！ ね！」

「そうですね!! 彼女の實力は身をもって知っています！ その彼女

が味方に付いてくれるとなれば心強い！」

∟この絶望的な状況でも声を上げたのは一応カルデアの指揮官として頑張るべきだろうと思っただのか、ロマニ。そして胆力においては恐らくはカルデア一のレオニダスだった。

さすレオニダス（感嘆）　ロマニはちよつと言葉に詰まってるから誉めては上げられませんねえ……まあでも実際この空気の中で会話しようと思っただけでも褒めようかな、とは思いますが。けど褒めない。褒めない。褒めない……！（硬い覚悟）

「ええつと……か、彼女はカルデアに新しく来たから、慣れてない事も多いと思うから！　その辺りのサポートも！」

「私もデオンもレオニダスも、なんなら元からカルデア所属ではないマスター達も慣れているとは言えないと思いますが」

「あつ、はいいい……」

∟無理矢理に空気をどうにかしようと考えたロマニは綺麗に轟沈した。

「……レオナルド、どうしよう。凄い微妙な空気のままだ」

「取り敢えず解散で良いんじゃないかい？　取り敢えず紹介は出来たんだし、本造院君をあのままっていうのも問題だし、渡す物もあるだろう？」

因みに現状ホモ君のHPは半分です。何でほぼ全快したのにあつと言う間に消耗してるんですかね……まあ私がホモ君を深入りさせたのが原因なんですけど。とはいえポロボロなままなのは流石に嫌なので治療してくれよな——頼むよー

「あ、そうか。本造院君は……うん、じゃあ、その、解散で。本造院君は、こつちに来てくれ。代えの服とか、あと色々渡すから」

オッスお願いしまーす（追従）

∟——結局、本当に紹介だけして解散となり……ロマニの元に向かう貴方に、カルデアの施設巡りを続行すると離れたデオンに代わって、香子が付いて来てくれることになった。

「大丈夫ですか？　マスター。あの、えつと……災難でしたね」

∟乙女と泣く子には勝てないなあ……

〈女性を揶揄うのは止めようと思います。〇。

まあここは真摯に反省した方が良いと思うのでここは上で。それにしても香子さんの気遣いがなんか……あつたかい……（感涙）香子さんは私の母になってくれたかもしれない、え、違う？ そう……（無関心）

「しかし、凄い真つ黒だなあ本造院君。まああのジャンヌ・オルタの炎を真つ向から受けてそれだけで済んでいるのが凄いのか」

〈鍛えているから、と冗談を言ってから取り合えず綺麗に顔を拭いて、服を着替えて……そこまで言ってから貴方の目の前に座っていたロマニが、一枚の紙を貴方に差し出した。

「それで、これが本題だけど。昨日の検査結果。結局昨日は渡せなかったからね。で、検査結果だったんだけど……まあ見て貰えばわかると思う」

〈無数のグラフ。そして様々な言葉が書いてあるが、貴方は大抵を読み飛ばし、一番下に書いてあった、検査結果に目を向けた。そこには……『血液に異常な成分、及び反応は見られなかった』と書かれていた。

うーむ、カルデアの精密検査でも反応なしと来ましたか……これもう分かんねえなあ。香子さんどう？（結果報告）

「詳細な調査でも全く手応えが無しと言うのは、こつちとしても正直予想外だった。お陰でその角の力がなに由来なのかも、どう対応していいのかも、サツパリだ」

〈その時、貴方が思い出したのは、香子が先日話してくれた話だった。自分の体に関する事であれば、と貴方は傍らの香子に先日のお話をするように頼んだ。

「で、ですがアレは私の私見ですし、ドクター様に話すような事では」「いや、此方では分からなかったんだ。何か心当たりがあるのなら、一つでも良いから教えて欲しい。どんな情報でも」

そう言えば香子さんの見解とカルデアの解析の擦り合わせしてませんでした（凡ミス） 報連相も出来ないとかまあ効率重視でもない エンジョイプレイなんで、こういうのも多少はね？

「……分かりました。未熟な見識ではありますが、それでもよろしければ」

〈香子の、貴方の能力が東洋の鬼を由来としているのではないか、という話に、ロマニは幾度か頷いて……その話を聞き終わるとゆっくり、一度頷いた。

「成程。東洋のデーモン、鬼か」

「はい。あの角の形は、私が嘗て見た鬼の一族と酷似しています。マスターは日本の生まれですし、外ツ国の妖と関連があると考えるよりは……」

「確率はそちらの方が高い、と」

それにしても、角の形だけで鬼かどうかを見分けるって、よっぽど詳しいのか……いや詳しくはないって言ってましたし、余程彼らが怖くて瞳に染み付いてた、って感じですかねえ。やっぱり酒吞童子って怖いやなって……

「……鬼種については、カルデアにもデータが少ない。もしその仮説が合っているとすれば鬼種のデータを参照できず、異常を異常として認識できなかった可能性もある」

「この情報については……伏せた方が？」

〈貴方の扱いを心配していったのだろう一言は、しかしあつさりとロマニに否定される。

「いや、それは必要ないよ。ここはカルデア。下手な魔境よりよっぽど危険な技術の使われてる異次元だ。鬼の一匹や二匹、珍しいね、で終わると思う」

「それは、あの、宜しいのでしょうか。本当に」

宜しくないと思います。鬼でも『あー珍しいね』で済ませるカルデア職員君肝座り過ぎじゃないですかね……まあキリシユ様に比べれば鬼っ子なんて可愛いもんやろ（感覚ガバ）

「むしろ彼らなら『案外鬼っぽくない』とか言い出すんじゃないかな？」

〈えつと……角生やしておく？

〈肌紅く塗ろうか？

だ→ま↓れ←！ 余計なこと言いやがって殺されてえかお前……  
寧ろなぜそう言う発想に至ったのか、私は理解に苦しむね。

「うん。協力してくれる姿勢は嬉しいけど、気持ちだけ」

「……マスターがこうですから、深刻に考えるだけ、無駄なのかもしれない  
ませんね」

「まあ自分の事を悲観的に考えないのは良い事だよ。本造院君はその  
ままでもいいと思うよ」

いや主人公的にはもうちよつと苦悩とかして、やくめでしょ……  
(正論ゆうた) カタルシスもドラマもねえじゃねえかお前ん生涯！

まあでも変にウジウジするよりはプレイに支障が出ない全然気に  
しないムーブの方がやりやすいですし、このままでいいじゃないかな  
？ (掌ドリル)

「兎も角、本造院君の事に関しては気長に調べて行くという事で……  
今は、次の特異点に向けて、それぞれ準備を進めて欲しい。一週間に  
内には次の特異点の攻略を開始するつもりだからね」

〈とりあえず、今はどうしようもない事が分かった。それだけでも収  
穫だろう。貴方はロマニに検査の礼を言って、部屋を後にし……その  
後ろに続く香子は、しきりに首を捻っていた。

「……私が気をもんでいるのが、可笑しいのでしょうか」

香子さんが普通だと思いますよ？ ここの人達が豪胆すぎるだけ  
で……

と言った所で、今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。



## 拠点フェイズ その三

皆さんこんにちは、ノンケ（お怒りマン）です。

前回は焼かれ、暴かれ、カルデアの懐の深さを見せつけられました。一つ明らかに余計な物がありましたけど、まあ、それも邪ンヌの乙女ムーブの犠牲になったと考えれば問題ありません（サーヴァント大好き並感）

さて、今回ですが。特異点直前のこの育成フェイズ……と、呼ぶべきなのか微妙な期間で起きた、まあミニイベント、みたいなものを纏めてみました。前にジークさんのバトルシーン丸々カットしちゃったし、多少はね？

という事で、初めはメドゥーサさん。場所はカルデア食堂……予定の場所です。エミヤさんが欲しいねんな……（切実）

＜カルデアの中で、休憩所、そして食事をとる場所として使われているこの部屋は、貴方も当然利用する。朝食を終えた貴方は、マスターとして、カルデアの一員として、様々な知識を得る為に勉強をする事もある。

という事で、開幕はホモ君の勉強シーンからスタート。こんな早くから勉強なんてマジメだなあ……

＜今日勉強するあたりは既に支給された端末にダウンロードしてある。こういった端末をそつなく使いこなすのを、立香には『全く似合わないな』と揶揄われた事もあった。

「――あなたにそういった端末は、恐ろしいほど似合いませんね。マスター」

＜そして貴方の事をよく理解している友人からの言葉だけあって、似たようなセリフはよく言われる。その大半が冗談で、本気で自分を罵倒する為に言われた事は少ないが……貴方はその悉く、そして今声をかけて来たメドゥーサに対しても、同じ返事を返した。

＜自分はインテリヤクザなんだよ。

メドゥーサさんお早うナス！ そして自分からヤクザと認めてい

くのか……（困惑） ハゲとかチンピラ顔とか言われるのは結構ダメージ受けてるのに分かんねえ奴だなあ（ヒゲクマ） アレでしようか、他人から言われるとダメージが大きいのでしょうか？

「……何を調べているのですか？」

＜メドゥーサの事。と軽く返せば、その表情が若干渋いものに変わった。その端末に入っている情報の半分以上はもう読みこんだと言え、眉間に皺も寄った。

「そう、ですか……正直あまり調べては欲しくないのですが……黒歴史ですし」

メドゥーサさんにとってゴルゴンさんは生きる黒歴史ですからね。ぶっちゃけ、カルデアと一緒に居て殺し合いになる可能性が高いサーヴァントトップ三にランクインするんじゃないかと思えますよ、密かに。一位二位はまあ……女王と韋駄天小僧、灰の男とクソ音楽家でしようよ。

「しかし、何故？」

＜自分の信頼できるサーヴァントの事は良く知っておきたい。次の特異点でも大いに頼りにさせてもらいたいから、と貴方は正直に答えで。それを聞いたメドゥーサの眉間に、ちよつと皺が増えた。

「信頼できる、ですか。であれば、余計に知らない方が良いのでは……？」

＜神話の黒歴史がどんなものだろうと、俺の眼の前にいるメドゥーサとは関係ないでしょ。

＜そこまで言うなら……でもなあ。

だが（知らないという選択肢は）断る。この本造院康友の一番好きな事は、過去をちよつと知っただけで離れていくのではないか、というサーヴァントの目論見を覆してやる事だ。

「……私は伝説に描かれた張本人なのですが」

＜サーヴァントは本人とは厳密には別人だろう、と貴方は返した。であれば、目の前に居るのは自分の事をオルレアンで助けてくれたサーヴァントで、伝説のメドゥーサとは別人。ごったに考える方が馬鹿らしい、とも返した。

「そういう、ものですか？」

そう言うもんや（断定系）

「……なんというか、ここまで真っ向から信頼される、というのも慣れませんか」

メドウーサは、少し頬を掻いて……その眉間の皺を消して、少し笑った。

「そういうのであれば。元から私に止める権限等ありませんし……ええ。調べてなおそう言うのであれば、お好きに信頼していただければ」

あゝ、たまらねえぜ！（閣下） もう一回こういうやり取りをやりたいんじゃない！ でもこういうのは数少ないから貴重って、それ一番言われてるから……

はい、という訳でメドウーサさんとの会話イベントでした。こういうのもっと頂戴！ エモーションが……我慢できなくなっちゃう……！（ガバ感情雑魚メンタルホモ）

はい、ちよつと取り乱しました。続いてはデオン君ちゃんです。

えー、画面は移りまして廊下。ホモ君、藤丸君はレオニダス王との特訓に向かっている様です。で、お部屋にINして三秒でデオン君ちゃんです。

「やあ、マスター。藤丸」

「今日は臨時講師としてデオン殿をお招きしました！ 組み手に関しては、様々な方と行うのが宜しいかと思えますので！」

「そう言う訳で、全力でかかってきて欲しい」

目の前に立つデオンは、召喚時から着ている衣装ではなく、二人も着ている、鍛錬用の上半袖下は脛までのウェアである。貴方は俄然氣勢を上げた。

特異点じゃフェアじゃなかったからなあ……

今度こそフェアだ。胸を借りるぜ、デオン。

選択肢は当然下だよなあ!? 男だったらこれくらいの啖呵切って、どうぞ。

「ふふ、その調子だよマスター」

「——だが、先行は譲ってもらおうぜ康友。お前は一度やったんだからさ」

〈自分の眼の前に堂々と割り込み、その勢いで挑んだ藤丸だったが……レオニダスとは違う、投げ技も併用する、スマートな動きに翻弄されあっさりと地面を転がり。それを五回ほど繰り返してから、地面に転がった。

「す、凄い無駄がなかった……」

「いい思い切りだったよ。一撃に全てを賭けるのは、多分間違ってるんじゃないと思う。君はその方向で伸ばせばいいと思う」

「押忍……」

ふ、その男はチームマスターの中でも最弱……（大嘘） 今度はオルレアンで（全力で弱体化した拳句死にかけボロボロの状態だった）デオン君ちゃんを破ったホモ君の挑戦です。よし、やれるな！（死亡フラグ）

「さあ、おいでマスター。軽くもんであげるよ」

〈その言葉に応え、真つすぐに飛び出し……全く歯が立たなかった。気付けば貴方は空を舞って、ふわりと地面に背中を付ける。といった、藤丸と全く同じ負け方を九回繰り返していた。

やっぱりな（レ） 此方に操作すらさせない徹底具合で笑う。まあ実際サーヴァント相手に私風情のプレイスキルで敵う訳もないからね、イベントバトルでありがたいくらいです。

〈しかし、このままでは終われない……貴方は、最早破れかぶれで絶叫を上げ、その直後カエルの如く、なりふり構わず飛び込んだ。これには虚を突かれたのか、デオンの反応も僅かに遅れ……しかし、結局奇襲のタックルはただの押し倒しにダウングレードさせられた。

「……いい奇襲だったけど、残念だったね」

〈……無念！

〈……参りました……

完全敗北ホモ君UC。妥当な結果なんだよなあ……

〈デオンの胸元に顔を埋める格好になりながら、貴方はデオンの美

しい顔を見つめ……ふと、気になって居た事を聞いた。

◇デオンて、男？ 女？ どっち？

おおっと。コレはカルデア禁断の質問の一つ！ こんな序盤に聞いちやうとかホモ君大胆すねえ……まあ、その質問自体が無意味なんですけどね、初見さん。

「それは……どっちも、という答えになるかな」

◇どっちも？ という答えに……貴方の脳裏には、立香とネットサーフィンをしていた時、間違つて覗いてしまった、そう言った系のサイトで見た……両性を有している女性の本の事を思い出した。

そんな本見てるとかお前ノンケかよお?! ノンケなんだよなあ

…… (自問自答)

「なんか凄い顔してるけど、変な意味じゃないよ？ 単に、僕は何方にもなれる、というだけの話さ」

◇デオンのスキルの一つ、自己暗示は、自分の体を男性、女性のだちらにも変容させられる程に強力なのだという。故に、彼はどちらでもなれるのだ、と。

オルレアンの時も、この能力で自分を群集だと偽装して奇襲を成功させましたからね。気配遮断にも応用が利く超の付くユニークスキルです。ん？ 今なんにでも応用が利くって言ったよね？ 実際できそう。

◇成程、と納得し……そう言えば、デオンの上のしかかった格好のままなのを思い出した。疲労で頭が回って居なかったとはいえ、どうにも間抜けな格好を晒してしまった事に頭を掻きながら体を起こそうとして……駄目だった。動けなかった。

「？ どうしたんだい？」

◇疲れからか、起き上がれない。正直かなり恥ずかしいが……このままの姿勢で居る方がよっぽど恥ずかしいと正直に疲労を伝えると……自分の体が、軽々と持ち上げられた。他ならぬデオンの手で。まさかの御姫様抱っこで。

ヌツ!? ああ、男の威厳が壊れる音おく！

◇今、自分がトンデモナイ恰好を晒している。それを自覚した貴方

は肩を貸すだけで大丈夫だ……と藻掻いた。否、正確には藻掻こうとした。しかし、疲労しきった体は、全くいう事を聞いてくれない。

「疲れているんだろう？　そういう時は素直に誰かの手を借りるものだよ、マスター。大丈夫、ちゃんと君のマイルームは把握してるよ……レオニダス」

「本造院殿は今日もう無理そうですね。休ませるのが吉かと！」

〽それに領いたデオンが、男一人を抱っこしているとは思えない程に穏やかな足取りで歩き始める。その姿は、当然ながら廊下を行きかうカルデア職員にも見られ……貴方は、泣いた。

止めて欲しかった（半泣き）　ホモ君だって男の子なんですよ！

それが、結構中性的なデオン君ちゃんに軽々とお姫様抱っこで……心死んでそう（小並感）　因みにこの後はベッドの上にやさしく乗っつけられ、布団までかけて貰ってました。ますます心死んでそう（厨並感）  
と言った所で今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。

## 拠点フェイズ その四

皆さんこんにちは、ノンケ（オペラ座の怪人）です。

前回は、メドゥーサさんとの会話イベントを熟し、デオン君ちゃんと戯れました。香子さんとのイベントはどうしたこのスットコドツコイというお言葉もありますが、香子さんは初召喚サーヴァント補正なのか、一番会話してるから多少はね？

……と思っていたのか？（BRLY） まだまだイベント消費は終わらねえぞオラア！ 今回は香子さんとの会話イベントだよ！ 喜べ平安美人大好き委員会の兄貴姉貴、今日は香子さん成分のお代わりも良いぞ！

〳― 次の特異点攻略の準備が進む中でも、巨大図書館の設立準備は着々と進むそんな折。貴方と香子は、白紙の紙の眼の前にドンと座っていた。

「という事でマスター！ 図書館のデザインの検討を致しましょう！」

〳要するに図書館に関してだ。ずっと根を詰めて勉強をするのも疲れるので、息抜きも兼ねている。間取りなどはダ・ヴィンチの設計で決まっているので、話し合うのは雰囲気や小物などの事になるが。

はい、図書館関連イベントです。香子さんイベント、とは言い難いですがまあ香子さんが沢山、というか香子さんは必ず出てくるので実質香子さんイベント、良いね？ アツハイと言え（脅迫）

「では最初は……どのような雰囲気にするのか、ですね！」

〳洋風、和風、中華風。システムチックな感じにするのか、それとも少し古い感じの形にするのか。様々デザインの候補はある。詳細は後に詰めるとして、まずは全体を決める。

「マスターは、希望等ありますか？」

〳うーん……やっぱり、王道を行く洋風で、木を中心にした……って感じかな？

〳カルデアに合わせて、システムチックに。自動的に本を持ってきてくれるみたいな。

やっぱり僕は、王道に行く……（空耳） まあそれは兎も角として、ここは香子さんが望む形の図書館にするのが一番だと思うので、まあ選択肢上で。

「いいですねえ……沢山の本棚と、読む為の机があつて。シックな茶の色を中心に」

〈香子も結構そう言う系がお好みらしい。雰囲気は決まった。香子が管理人として、受付に居るのがとてもとても良く似合いそうな、そんな良い図書館になりそうだ。そう言った時、香子は小首を傾げた。

「……私が、ですか？ 私は一人の司書として働くとは思っていませんが」

アレ？ ってそう言えば、香子さんって司書として働く、位の事しか言つてなかつたような。なんか勝手に香子さんが管理するもんだと思つてましたけど。

〈え？ そうだったの？

〈いやあ、香子さん以上に本に詳しい人も居ないからそうだと思います。

……ここは選択肢が重要ですね。私、個人的に香子さんが管理するあの感じが大好きなんですよね。慣れないながらも必死になって、大切な本を管理するあの感じ……アレを浴びるのが生きてる証拠だよ（中毒）

という事で選択肢下。お前が管理人になるんだよ！

「えっ!? そ、そんな！ 私は、別に！」

〈あわあわと慌てる香子に、貴方は寧ろ今からでも管理人として立候補するべきではないのかと続けた。紫式部。書の英霊が管理する図書館なんて、想像するだけでロマンがあるではないかと。

「で、でも私！ そんな、図書館の管理なんてした事も……！」

すつごい慌てるのがカワイイ！ カワイイ！（二撃決殺BRLY）でも容赦はしない……死にてえ奴だけ、かかってこおい！（大袈裟）

〈折角香子の言葉から始まった計画だ。大好きな本を管理して、自分の理想の図書館を作るのも一興ではないか、と。その言葉に一瞬、



香子が固まった。

「理想の図書館……それは……」

ホモ君ナイス。揺れてますねえ……いいじゃない、YOU管理人やっっちゃいなよー。嫌って言ってもやるんだよ（過激派） 寧ろ香子さんの管理する以外の図書館はぜってえ認めないからなあお前上等だろ。

▽それに、香子さんみたいな綺麗な人が管理人やれば、絵になるし！

▽そんなにイヤなら仕方ないか……ごめん、押し付けになっちゃったね。

コレほぼ確定なのでは？（困惑） いや、下は普通に『あ、そうですね……』となつて終了の可能性も……そんなわけないじゃん（棒読み） ここまで来てそんな展開になったらプレイヤーはコントローラーをブン投げますよ。

とはいえ、万が一そっちになつたら困るので一応上を……

「えっ!? き、きれ……えつと、そ、それは……その……うう」

▽個人的には香子さんが管理人をやるのが良いと思うと、貴方は締めて……香子はたつぷりと黙り込んでから、小さい声で

「……ダ・ヴィンチ様と、ちよつと、相談してみます」

▽と言った。

完全勝利ホモ君UC。前回のデオン君ちゃんのイベントから見事取り返しましたねコレは間違いない……コレで余程の事が無ければ香子さんが管理人として就職してくれるでしょう。香子さんを一司書じゃなくて管理人にしたんだよ！

▽——その後、図書館の雰囲気決めは、何故か香子が俯いたままに進んだ。しかし彼女の発言する機会は増えていたので、理想の図書館作りには相当心躍っていたらしい。

大分心躍ってるじゃんアゼルバイジャン……恥ずかしがつててもやっぱり体は正直なんすねえ（風評被害）

さて、このイベントで大きなイベントも消化したので……え？ 邪ンヌはどうしたのかつて？ 藤丸君とイベントはあったんですが、ホモ君はその時、こうして香子さんと一緒に居たので見れませんでした

(血涙) 事件はリアルタイムで進行してるって、それ一番言われてるから。

という事で、いよいよ次の特異点——セプテム突入の日がやってまわりました。

∠カルデアスの前に、八人の影……貴方と立香、そしてそのサーヴァント六人が集結している。そして貴方と立香はダ・ヴィンチが調整したカルデアの制服を身に纏っている。見た目は変わった部分等無い。「ふふーん、その礼装は回復魔術、攻撃強化の魔術、機動力や洞察力を同時に強化する複合魔術の三つを使用することが出来る優れモノだよ！ ぜひぜひ、活用してくれたまえ」

∠しかし、コレは万能の天才、ダ・ヴィンチが今の科学や魔術、自分の才覚を注ぎ込んで調整したものだ。そう考えると万の援軍を見たような気持ちになった。

こんな良いもの装備して、どんな事だつて無理か分かんないだろ！(仲間の才覚を信じるホモの鑑) 実際回復も出来るようになって……あれ？ そう考えると包帯の存在意義とは一体……？(痛恨のミス) い、いや回復魔術にもリチャージの時間は居るから多少はね？(フオロー)

「あと、藤丸君にはコレを」

「コレは……」

「取り敢えず、本造院君だけ得物をもってるのもアレだからね。使いやすいように、警棒を支給しよう。こっちは頑丈なだけだけど、その分滅多に壊れないよ？ ま、ダ・ヴィンチ工房開店直前の御祝い品だ」  
アレーおかしいねホモ君だけ普通のバットだね(悲しみ) もう耐久力も限界だしそろそろ買い換えたい所ですが……

「この特異点を突破するころには開くだろうから、是非特異点を突破して、我が店を利用してくれたまへ」

「——まあ、それは兎も角として。いよいよ、次の特異点攻略となる……次の特異点は古代ローマ……イタリア半島から地中海を支配した、大帝国が舞台になって居る」

「古代ローマ……貴方が知っているローマ関連というと、ブルータスとカエサル位だ。他は全くと言っていいほどに無知。それを正直に伝えると、ロマニはカラカラと笑った。

「うんまあ、それさえ知ってれば大丈夫だと思うよ」

「バツカだなあ康友、一応あと一人、ネロ・クラウディウスくらいは覚えとけよな」

「因みにどんな奴なんだよ？」

「済まねえ、暴君についてはサツパリなんだ。

「知ってるやんけ！（選択肢下）」

「知ってるじゃねえかお前……そうそう、暴君ネロ！ 有名だよな！」

「先輩、因みにネロ帝が暴君以外の事は……？」

「全く知らん！」

「威張れる立場じゃないんだよなあ……（悲哀） Fateのネロ

ちやまは暴君から遠いってそれ一。兎に角マスター二人はローマ関連で全くと言って頼りにならない事は（レ／フ）はつきりしたので、ローマエアプ位の感覚で赴くとしましようか。

「時代は一世紀。その時代のローマ帝国に相応しいサーヴァントが召喚されているのか、はたまた全く関係の無いサーヴァントばかりなのか……聖杯についてもそうだが、突入するまではサツパリと状況は把握できない。全く頼りないが、今回も君達に託すしかない」

「出来れば召喚されているサーヴァントと協力して、聖杯を探せると良いんだけど。まあそう簡単に見つけさせてはくれないだろうね」

「ジャンヌ・オルタの様な敵対する勢力が居ると考えた方が良い。という事だろう。そう思っただけで本人の方を見ると、睨み返されて貴方はちよつと凹んだ。

「そんなの（レ／フ）がいつぱいいつぱいゆうじろうって、分かる？」

「この事の重大さ（切実）」

「とはいえそんな凶悪な敵ばかりでも無く、Fateのドル箱（色違い）も出てくるのでその辺りも楽しみであります。なんてったって俺は日本のローマ市民だからな！」

「まあ、余りそこから辺の事を考えても仕方ない。僕らがやる事は変わ

らない。本造院君、藤丸君。君達は現地に赴き、特異点を成立させる原因足る聖杯を回収、歪みを修正して来て欲しい」

〈了解。と貴方と立香の声が揃う。恐れはない、と言わんばかりの声に、ロマニの表情も綻んだ。

「いい返事だ。そのテンションのままレイシフト行ってみよう！君達の健闘を祈るよ！」

因みにほんへでも（レ／フ）こんな感じでロマニはレイシフト強行しました。ウツソだろお前www いやマジ（真顔）

と言った感じで、いよいよ第二特異点。セプテム攻略開始です。個人的には、ループルでフライング登場して来たダレイオス君がどのような扱いになるのが気になります。そして全国三〇〇〇万人のレ／フファンのみなさまお待たせしました。いよいよ大切断タイムです。さつきからちよつとこらえきれずに漏れちや……ったあ！のは許し亭許して。

〈アンサモンプログラムスタート 霊子変換を 開始します〉

〈レイシフトまで〉

〈3〉

〈2〉

〈1〉

〈全行程 クリア グランドオーダー 実証を 開始します〉

今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。

## 第二特異点 永続狂気帝国 セプテム 紅い少女 その一

皆さんこんにちは、ノンケ（爆殺悪魔）です。実はアイツしれっとヤバイサーヴァントなのに取り上げられない不思議。

前回は、香子さん成分をたっぷり（当社比）補給後、いよいよ第二特異点であるセプテムに突入。前回のオルレアン後に加入したデオン君ちゃんと、邪ンヌをどのように生かすかがキモになると思います。後全国のレ／フお待ちの皆様と、日本のローマ市民の皆様も、お待ちせしてしまつて申し訳ありません。

さて、レイシフト画面終わつて、なだらかな丘陵地帯がドーン！  
オルレアンの時と全然変わらねえじゃねえかお前んレイシフトオ！  
（言い掛かり）

「今回も、無事に転移完了した模様です」  
「……ふうん、レイシフトつてこんな感じなのね。案外何てことないじゃない。で？ ここは一体何処なのよ」

「マシユが深呼吸をしている横で、ジャンヌ・オルタが少し詰まらなそうにしている。実際、何処なのかと言われれば、貴方にもさっぱり分からない。周りを見渡せば、広がるのは丘陵地帯ばかりだ。都市らしい場所もない。」

「ドクター、ここがどの辺りか何かわかりませんか？」  
『——えっと、そこは位置的に……首都ローマの郊外だね。首都からはそこまで離れてないから、直ぐに向かえると思うよ。首都にはあらゆる情報が集まつてくる。この特異点の事を把握するのに、かなりの幸運だねコレは』

さて、ほんへでは元々首都ローマにレイシフトさせる予定でしたが今回はそうでもないようです。この辺りはRPGでは確立乱数らしいですね。なお何方にせよレイシフト場所は変わりません。変化とか……いらつしやないんですか？（素朴な疑問） ないです。

「であれば、早速首都に向かつて、情報の収集を……」

「フオウ……ンキヤウ」

「あ、フオウさん?! やっぱり着いてきてしまったのですか!」

◁コレで三度目。もうフオウ君はこの旅の同行者としてカウントした方が良いらしい……それは兎も角として、立香が物凄い目でフオウを見ている。睨んでいる、というより驚いている様だ。

あっ…… (察し) お前そういう所だけ目敏いなお前な。

◁どうした立香?

◁鳩が魔○光殺法喰らってターミネーターしたか?

選択肢さん!?! (その回答は) マズいですよ! スタッフが完全に選択肢で遊びに来てますねクオレハ……とはいえ俺もその選択肢に入っちゃう入っちゃう入っちゃうくあゝ (見所さん欲しがり投稿者) 「それオーバーキルにもほどがある気がするんだが……」

「何それ?」

「どっちも伝説の作品。オルタも今度一緒に見るか? ……じゃなくて?! いや気のせいだと思っただが、今フオウ君が胸の辺りから出てきたような」

◁立香の一言に思わずマシユを凝視しようとして……何故か目に激痛が走った。叫びをあげて転がる貴方に、少し冷ややかな声がかかった。

「女性の胸を不躰な目で見るのは、些か宜しくないかと、マスター」

メドゥーサさんが辛辣う! いや、メドゥーサさん可愛い女の子が好きらしいからそりゃあマシユをそう言う無粋な目で見るのは些か許しがたいのかもしれませんが、男というよりガキっぽさが勝つホモ君がそんな思考するなんて。いや、そんなこと…… (否定)

「あ、あのメドゥーサ様! 違いますそうでは無くて!」

「え?」

「ま、マスターは一体どうやったらあんな狭そうな所に……とかそう言った、その、純粋に不思議に思った模様で!」

◁私、見てしまって、という香子の言葉からどうやらアレが発動したことを悟った。それで誤解が解けたのか、メドゥーサは少し慌てた様子で地面を転がる貴方を抱きかかえた。

「……そ、そうでしたか。申し訳ありません。マスターの瞳が野獣の様な迫力だった物で、つい。勘違いをしてみました、大丈夫ですか?」

「ないです(半泣き) 手加減はしているのでしようが、それでもサーヴァントの眼球シバキは多分相当効きますねえ! (絶望) 見ての通り、ホモ君は地面をのたうちながら悶絶してます。」

「勘違いは誰にでもある。切り替えて行こう、と貴方は目を抑えながら立ち上がる。この呪われた顔を何時か整形できないだろうか、と切実に思う貴方であった。」

「称号「野獣の眼光(偽)」を獲得しました。」

「汚い称号ばかりだなあ…… (直球)」

「……アンタ等ナニ? コントでもやってんの?」

「いやそうじゃないと思う。マスターは顔がちよつと怖いから、誤解されやすいんじゃないかな。まあ、そう言う人は僕の生前にも居たよ」

「皆様! ご歓談はそこまで! 剣戟の音が聞こえますぞ! それも、相当な数が!」

「——その言葉に、全員の気が引き締まる。複数の剣戟、すなわち近くで、大人数が戦っている、という事だ。」

『いや、いや。それは可笑しい。この頃はローマ帝国、第五代の皇帝、ネロ・クラウディウスの時代だけど、その時代に首都ローマの近くで大規模な戦闘なんて無かった筈だ』

「つまりそれは……この時代の歴史に異常が?」

「つとお、どうやらレオニダス王が何か察知したようですね。まあ何かって言うか、要するに赤王様降臨シーンな訳ですが。という事で、特異点の案内役に会いに、その現場にユクゾツ デツデツデデデ!」

(カーン) デデデデ!

「移動力……ツトオ!」

「貴方達の眼が捉えたのは、二つの軍勢。双方が似たような色の装備を身に着けているが、違いはその数。一方はもう片方の二倍近い数を誇り、その数で、ジリジリと距離を詰めて行っているのだ。」

「ドクター、やつぱり戦いだ！ 似たような人たち同士で戦ってる！」  
『戦っている人たちに何か特徴とかはあるかい、藤丸君』

「赤と……ゴールドか？ 全体的にそんな感じの武装だ！」

『——ほほう、赤と黄金。それは間違いなく、ローマの軍隊だろうね』  
あ、今回はダ・ヴィンチちゃんも司令室にいるみたいですね。頼もしみ（まじんさん）

「ローマの？ なんでわかるんだ？」

『ローマと言えば情熱の真紅と、絢爛たる黄金が象徴なのさ。故に、その色を関する、その時代に居る軍隊と言えば、ローマ軍。初歩的な事なのだよん』

◇ダ・ヴィンチちゃんすげえ！ 流石万能！

◇よっ！ 万能の人！ 世界一！

ダ・ヴィンチちゃんよいしよは基本、当たり前だよなあ？（選択肢下）

『ふふーん。そんな当然のこと言われても嬉しくないぞう』

『鼻高々なレオナルドは置いておいて。他に特徴はあるかい？』

◇他に……その時、貴方の瞳が捉えたのは、少数の軍隊の方。その中から、赤い彗星の如く飛びだし、人数差にも怯まず凛々しく戦う少女が一人。凄まじいほどの熱を、貴方はその女性から感じた。

◇女性だ。べらぼうに強い女性が、たった一人で、進軍しようとする相手の軍団の動きを止めてる。

おっ（反応） コレは来ましたね。真っ赤な剣を懸命に振って薙ぎ払ってます。アレで生身とかマ？（困惑）

『べらぼうに強い女性か。サーヴァント反応は無いけど、そんなに強いのかい？』

「……はい。何処か、頼光様を思い出させるような奮戦ぶりです」

『頼光……うえ!? あの平安一の怪異殺し、源頼光?! そりゃあ強い！ でもサーヴァント反応はないってことは、この時代の生きている個人……それで女性?!』

あの人が頼光さん並だったらタマモが焼き稲荷になっちゃう！（戦慄） まあ、戦いなんてどれも『凄い（小並感）』な香子さん的にはそ



う見えても仕方ないとは思いますが。

◁ロマニが悲鳴をあげている。全く心当たりがないのだろう。そんなロマニに代わって、通信に出てきたのは、ダ・ヴィンチ。

『まあそれは今は置いておこうか。あの大軍団の行こうとしてる先が分かった。方向的に首都ローマだろう』

「という事は、あの女性はローマを守護する為に戦っているという事でしょうか」

『恐らくは。相手を足止めするように戦っているんだろう？』

「それなら——取り敢えず俺達が加勢する方は、決まったな！」

ヨシ！ 大軍団の方だな！（裏切者） 馬鹿じゃねえの（自己嘲笑）  
流石に第一部からクリプター染みた真似する訳ないんだよなあ  
……

「マシユ！ レオニダス！ オルタ！ 俺達はあの女性の側に付く！

戦闘準備！」

「はい！」

「承知！」

「ふふつ、焼き甲斐のある数じゃないの」

◁立香の声に応え、三騎のサーヴァントの各々の得物を構える。大盾が、槍が、旗が。蒼天の下で臨戦態勢に入った。

かつこいい。号令一つでちゃんと命令を聞いてくれるサーヴァントの皆さんが頼もしい（確信） ただ邪ヌは闘争本能に火が付いているだけな気もしますが。しかしここはホモ君も負けちゃいられないわ！（お嬢様） 男見せるんだよ上等だろ。

◁立香に続けと貴方も香子、メドゥーサ、香子に号令をかける。

◁皆あ！ カチコミの時間だ！ 派手に行こうぜ！

◁我らこれより、死地に入る！

下は号令じゃなくて特攻宣言なんだよなあ……とはいえ上もガラが良いとは言えませんが。ほんの少しずつだがホモ君が本当にスジ者になろうとしている……？（懐疑）

「は、はいっ」

「分かりました」

「ああ！……カチコミはどうかと思うけど」

デオン君ちゃんのツツコミが光る！　この子こういう役割か……滅茶苦茶苦勞しそう（小並感）　さて、この後はローマ（大）との死闘な訳ですが。ワイバーンより全く見所さんの無い、スケルトン戦の焼き直しみたいなクソ試合だったんで。

くカツ……トオ！く

く　貴方のバットが一人を強かにかっ飛ばして……その時、周りの敵兵が、一斉に退き始めた。サーヴァントとという六人の超人を相手にし、漸く状況が不利だと分かったのだろう。

マジで瞬殺でした。いやー、実は初っ端邪ンヌの炎が敵ローマの結構な数を焼いた挙句、そこに突撃して、旗を振り回し大暴れして、その時点で半ば総崩れでした。流石戦闘機サーヴァント、突撃能力に関しては六人の中でずば抜けていると思います（確信）

「はっ！　随分と手応えが無いわね！　このまま、一気に叩き潰して……！」

「オルタ、そこまで。目的は敵の壊滅じゃないから」

「チツ……ハイハイ。分かりました」

舌打ちしてんじゃねえよお前よおオオン?!　退くって言ったたら素直に退くんだよ！　されどその闘志誉れ高い（掌返し）

く　物凄い不満そうなジャンヌ・オルタは置いておいて。貴方達は少数のローマ兵の方に近寄った。その中から進み出て来たのは……少女。

「都市からの援軍……ではなさそうだな。うむ！　それでも構わぬ。兎に角助かった。その働き、褒めて遣わすぞ！」

く　赤と黄金の映える少女は、何処までも傲慢に、しかし澆漑と、貴方達に向けて声をかけたのだった。

今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。

## 紅い少女 その二

皆さんこんにちは、ノンケ（でませい）です。

前回は、突撃ローマ！ 状況把握を開始せよ！ って感じ？ いやよネロちやまどご対面しました。後、邪ン又つてやつぱりアタツカーとしては飛びぬけた能力もってますよねえ……（戦慄）正直舐めてました。敵方からこっちに移ってきてなお、セオリーを覆してその能力を遺憾なく発揮してます。

それは置いておいて、ネロちやまです。いやあ全国EXTRAファン、そして日本のローマ市民の皆様、お待たせしました。我らが皇帝陛下の降臨です。まだゲーム内では『??』のままですけど。

「首都からの援軍……ではなさそうだな。うむ！ それでも構わぬ。兎に角助かった。その働き、褒めて遣わすぞ！」

「ねえマスター、この偉そうな焼いて良いかしら」

「いやダメだから……いえいえ、お褒め頂き恐悅至極！」

「なんか爆発させそうなジャンヌを抑え、立香が少女の前に出る。他の兵士とは比べ物にならない程に豪華な服装。間違いなくやんごとない身分の人物だろうと判断したのだろう、立香はその女性に頭を下げる事を躊躇わなかった。」

「こういう所が藤丸君の長所ですよ。基本的にコミュニケーションの怪物、誰かに下手に出る事も拒まない。ドラ田ですか？ 違うだろうお……!?!（激憤）」

「それにしても、見かけぬ服装だが……何処の国の者だ？」

「私達はカルデア、という組織所属の者です」

「かるであ……? ううむ、聞き覚え内の無い組織だな。ローマを感じる名前では無いが、しかしその方の恰好を見る限り、中々良い趣味をした組織の様だな。盾の娘よ」

それは一日くらいかけてマリスベリー所長に聞いただしたい所存（冤罪） ホラ、マシユもちよつと恥ずかしがってるじゃないですか！

「というかローマを感じる名前ってなんだよ……（困惑） カルデアって言ったら古今東西の英霊が集まるロマンしか感じない組織な

んですけども。名前だけ聞いたら星見台ですからロマンはあんまりなさそう（偏見）

「まあそれはどうでも良いか。一騎当千の将が六人、そして……その方ら、二人が帥だな？ うむ、其方らも中々の才覚を秘めていると見た！ 良い、余と轡を並べ戦う榮譽を許すぞ？」

「やっぱ焼いて良い？」

「落ち着いて！ 絶対やっちゃダメな偉い人だからこの人！」

「現地人との交流を悲惨な結果で終わらせてはいけませんジャンヌさん！」

うーんこの。邪ンヌの反骨精神豊かでおいちちゃんは非常に嬉しい……その分藤丸君とマシユちゃんも苦勞する様ですが。

「つと、そうだ。其方らは余を助けた。先ずはその褒美……は、今は渡せぬな。取り敢えず我がローマに向けて凱旋するでしょう、褒美は、その時に改めてな」

「我がローマ？」

＜立香が、その言葉に首を傾げる。我が祖国、と言ったようなニュアンスではない。まるでローマという国が我が物である、とでも言うような。＞

「うむ？ 何故首を傾げている。余はローマの……む、もしや其方ら、余を知らぬのか」

「それは、まあ初対面ですし……？」

「ううむ。国外迄この名は轟いているとばかり思っていたが、そうでもないのか……そうかあ……」

ちよつとしょんぼりしてるネロちやまカワイイ！ ……可愛くない？ 自分が良く知られてて当然、位に傲慢で丁度いいですよねちやまは。ドヤ顔が似合うサーヴァントトップ2を争えると思います。あと一人はつて？ そりやギル様しかいないんだよなあ（初代並感）「……ちよつと悲しくなったが……まあ良い。知らないのであれば名乗ればよいのだ……うむ。泣いてなどいないぞ」

＜相手が若干涙目になって焦り、ジャンヌ・オルタに『愉悦』を携えた笑みで「ねえねえ若い女泣かせてどんな気持ち？」と煽られてい

る立香の事は気にせず、少女はちよつと目元を拭い堂々と胸を張りなおした。

「ふふ、改めて。この光栄に震えるがよい、我が名は……」

「——陛下！ 一大事です！ 連合帝国の攻勢、第二波が来ました！」

……流石に可哀そうだと思いましたが（小並感） 完璧に割り込まれた拳句に、その割り込んだタイミングが名乗る直前という、狙いすましたような……（やり返しに）行きませんか!? 行きましようよもう（半ギレ） その為の戦力、後その為のカルデア……？

「……お、れええ！ 空気の読めない連合帝国の者どもめつ！ 盾の娘よ！ 余の盾役をするが良い！ 竜の旗を掲げた娘よ！ お主は突撃して奴らの戦線を打ち壊すのだ！」

「わ、わかり……!? 先輩！ いつの間にか仕切られてます！」

「なんでアンタに仕切られなきやいけないのよ！」

「二人共取り敢えず目の前の敵に集中を！ もう目の前まで『ワアアアアッ！』ってなってるからあ！」

∟わちやわちややっている四人を他所に、酷く冷静に盾と槍を構えなおしたレオニダス。それに倣うように、貴方のチームもそつと武器を構えなおした。

香子さん以外が真顔なのが笑う。香子さんだけが『えっえっえっ!?』みたいに焦ってる顔してるのが余計に笑う。結論としてメツチャ笑う。まあ、取り合えずさつきより数が多いので、目の前に集中するのは間違いないと思います。

∟カ……ツトオ！∟

ま、容赦なくカットなんですけどね（辛辣） 敵も、種類と数が増えただけで強くなった訳でも無いです。まあサーヴァントの皆さんがちよつと暴れるだけでさつと一掃できましたし。ちよつとは成長してくれよなー頼むよー（煽り）

「何とか危機は脱したが……ええい収まらぬ！ 余の名乗りを邪魔するとは！」

「まあ、取り敢えず怒りを収めて」

「そうですね。怒っている場合ではありませんぞ！ 新手、しかもこ

れは」

　　＼貴方も、その人物を視界に捉えた。同じく赤と黄金のその服装。違うのは、ガタイの良いその体。そして……赤く染まった、その瞳が此方を捉える。

『目の前のあの男性は……サーヴァントだ！　それに……もう一つサーヴァント反応！　急速接近してくるぞ！　気を付けてくれ！』

　　お、来ましたか叔父上……ん？　待って、もう一騎？　ほんへではここで遭遇するのは叔父上ただ一人だけと記憶していませんか？　F G O R P Gがまたぞろ悪さでもしたんでしようか。オルレアン……ドラグーンセイバー……アマデウス……うっ、頭が（ダメージ）

　　＼その後方から、土煙を上げて、サーヴァントが此方に迫ってくるのが見えた。それは……目の前の男性よりも、更にガタイも、上背も高い。筋肉隆々の巨漢だった。右手には巨大な鉾。そして、真っ赤な鎧と頭上に揺れる、二本の飾り。

「■■■■■■■■■■」

「――我が、愛しき、妹の、子よ」

　　＼二騎のサーヴァントがここに並ぶ。狂乱の叫びをあげる一騎。そして、初めに現れた男を見て赤い少女はその視線を鋭いものに変えていた。

「……伯父上。いや、ここはあえてこう呼ぼう。狂気に囚われ、連合帝国に与した、愚か者と。態々配下まで引き連れ、余を狙いに来たか！」

　　ファツ!?　ウーン……（失神）　どうして?（電話猫）　伯父上は、まあいいですよそりゃあここで出てくるでしょうし……でもアンタ!　アンタは明らかに違うでしょうよタイミングも、陣営も!

『男性の方は分らないが、あっちの巨漢……手に持っているのはまさか!?!』

「何か分かったのかドクター!」

『藤丸君も知っていると思うよ!　あの武器、あの形は……方天画戟だ!　間違いない、データと一致する!』

　　＼その言葉に、全員の表情が凍った。ジャンヌ・オルタが、明らか

にその表情から余裕を消しつつ……ゆつくりと、口を開いた。

「……私だって知ってるわよ。方天画戟といえば三国志の！」

「人中の、呂布……！」

『一伝承の頂点に位置する武人。単騎で三万の賊を打ち破った伝説。オルレアン、彼のジークフリートと比べても遜色ない大英雄だね』

デアドン！（絶望） りよ、呂將軍！ 貴方はネロちやまの陣営じゃなかったんですかああああああ!? マズいですよ！ ローマの戦力低下しちやへう！ 討ち取った皇帝の数減っちゃつ……たあ！（高次元予測） セプテムはそう言う方向でプレイヤーを虐めてくるのか、クソかな？ これが！ お前ら（FGORPG）の！ やり方かああ！（クレーマー）

「フオウ!？」

『初っ端からとんでもない英雄が相手じゃないか！ ちよ、油断は禁物だよ！』

「分かってますよ！ レオニダス、マシユ！ 前線を支えてくれ！ オルタはマシユ達が切り開いた隙に斬り込んで！ ……それでも、万が一がある。康友、デオンさんをこっちに回してくれないか！」

「分かった！ デオン、立香を援護してくれ！」

「<<そう簡単には無理だ！ ちよと待ってくれ！」

呂將軍相手に出し惜しみとか死ゾ。全力投入して当然なので選択肢は上、ハッキリ分かんだね。ここでサーヴァントが一人欠ける瀬戸際かもしれない、位の感覚でIKEA！

「分かった！ マスターも、無茶をしないように！」

「では、私達は此方、ですか」

「余、の——余の、振る舞い、は、運命、で、ある。捧げよ、その、命。捧げよ、その、体」

「<一步、男が踏み出す。その赤く染まった眼が写すのは、唯一人……黄金の髪の少女。それは既に執着を遥かに超えた狂気に、貴方は見えた。」

「すべてを捧げよ！」

「伯父上、一体何処まで……！」

「■■■■■■■■■■——ッ！」

「来るぞ、最強の武将が……全員、気合入れて行こう！」

あまりにも状況が移り変わり過ぎてどうすればいいのか迷い所さ  
んですが、取り敢えず今回はここまでとなります。ご視聴、ありがと  
うございました。



## 狂乱の渦 その一

皆さんこんにちは、ノンケ(傾国ライチ)です。石が溶けました……前回はネロちやま、兵士さんとの戦闘は力……ツトオ！ したんですけど普通に想像を遥かに超えるような事態が連続しました。伯父上は兎も角として、どうして呂將軍がここで敵方として出てくるんですか……！

「ネエエエエロオオオオオオ!!」

ヒエツ、伯父上の迫力ありスギイ!? 普通に伯父上も筋力、耐久、敏捷が全部B+以上とか言う結構なサーヴァント何だよなあ……後精神汚染宝具とかいうほんへでは真価を發揮しきれなくてもRPGではエゲツナイ宝具もやめてクレメンス……

「伯父上えー!」

先ずはネロちやまがバスターモーションの突きで突撃。で伯父上が……ちよおま?! 素手で剣搦んで抑えたんですがそれは……流石バーサーカー、なんて豪快な行動を。

「――そちらに集中していて宜しいのですか?」

「ヌ、ウ!?!」

「ハアアアツ!」

な・ん・て・ね(もつちー並感) メドウーサさんをあらかじめ援護に回しておいたんだよマヌケがあ! バーサーカーは理性的な考え方を狂化で失っているで周りの状況は見えていないという事、頭脳が貧弱貧弱ウ! ガラ空きの伯父上の背中に強烈な蹴りがシュート! 超、エキサイティン!

「ぐおっ、お、のれ……!」

「良くやった! 悪いが、伯父上……! 速攻で決めさせてもらおう!」  
そして吹っ飛んだ伯父上にネロちやまが追撃! 良い感じですねえ! オルレアンの時は、初っ端サーヴァント同士の殴り合い祭り、結構苦戦させられましたが……結構楽だったよ(悔り) 油断? コレは余裕と、言うもんだ! (CCCO)

「――ダメだっ! 踏み込むな! 逃げろ!」



「呂布は、正に伝承に謡われるだけの凄まじい怪物と言える……しかし、此方にもそれに匹敵する程の圧倒的な破壊力を持つサーヴァントが、一人いる。」

「オルター！」

「マスター！ 援護しなさい！ 礼装、つて言うの使えるんでしょー！」

しかしやられてばかりじゃありません、ここで邪ンヌが攻勢に……うわあ邪ンヌの顔怖っ!? スルーされたのが相当に気に入らなかつたのか、目とかヤバいですね、ウサ美ちゃんかな? (名探偵並感) というか、コレは呂布將軍しか見えない……見えて無くない?

「つたく、初めて使うんだけどなあ……ッ! 瞬間強化、上手くいってくれよ！」

「オルタさん、援護を！」

「はっ、そんなもんが来る前に、一発で仕留めてお仕舞いにしてやるわよ! 喰らえっ！」

藤丸君の礼装が僅かに発光、そして邪ンヌが赤く発光。礼装使用はどうやら上手く行ったようで……さあ無視されて怒り心頭の邪ンヌがここで反撃かけますね (一転攻勢)

「っ!」

「呂布の体に、黒い焰の波が押し寄せる。サーヴァントであろうとあつざりと骨の髄まで焼き尽くすであろう、圧倒的火力。さらに、どの程度かは分からないが、立香からの援護も入っている。大打撃と思っても間違いないだろう。」

「■■■■ ツー！」

「なっ、はあっ!」

「だが……それを、呂布は捻じ伏せて見せる。裂帛の気合と共に地面に突き立てた鉾、そこから吹き上がる圧倒的、爆発的な力の渦! それが、纏わりついた焰を、無理矢理に引き剥がしてみせた。」

エクストラ攻撃を防御に使うんじゃない (語録放棄) というか、藤丸君の瞬間強化っていう相当強力な援護込みの邪ンヌの攻撃を拭き散らします普通!?

そ、それにしても無傷とはいかなかったようで……流石に一部は大

分焦げてますね。というかこんだけバツチり決まったの喰らって、全くノーダメとかなったらやめたくくなりますよ〜FGO……とはいえ全然まだピンピンしてますけど、難易度クソかな? (直球)

「こんなカス当たりで、満足すると思ってるの!」

とはいえ瞬間強化も文字通り一瞬で切れるって訳でも無いですが、それなりには持つでしょう! 更にここは香子さんの援護も……あつ!?

「ウウオオオラアアア!」

「ぬうつ! この……!」

隙だらけのネロちやまに伯父上が! (バーサーカー) 香子さんの援護はこっちに回さなきゃ (義務感) メドゥーサさんも伯父上に……待つて!? 呂將軍真つ直ぐネロちやまに向かつて行ってませんか!? アレだけドギツイ一発もらったら、普通邪ンヌを野郎オブクラッシャーしても不思議じゃないと思うんですけど (凡推理)

と、ともあれメドゥーサさんには呂將軍の足止めをして頂かないと、というか藤丸君の側のサーヴァント達は!?

「——お待たせしました!」

「今度こそ、行かせはしませんぞ!」

≪ネロに向かつて執拗に突撃する、その動きを、二つの盾と一本の槍が食い止めた。そしてその足に閃く、一撃。空から飛び込んだデオンの刺突が、呂布の機動力を奪う。≫

「今だつ! ジャンヌ・オルター!」

「言われなくても、今度こそボロボロにしてやるわよ!」

あゝ完璧なタイムミングなんじゃ、コレでメドゥーサさんを伯父上側に回せるってもんです。今は香子さんの援護なんて気にせず伯父上が暴れまわってますが……あ、一応断っておくと、バチバチ当たってますよ? 香子さんの援護。香子さんがへっぽこ、という訳ではないのでそんな事を思った方は悔い改めて+

もうね、伯父上がね、つよい (確信)

「ヌウウツ!」

「コレだけの、魔術を体を受けているというのに怯まぬとは……何と

いう狂気！ 月女神の気まぐれもここまで来ると恨めしく思えてくる！」

全く怯まないのもそうですけど、伯父上も素手で地面にヒビを軽く入れてる辺りとか凶悪なんですけどね。呂將軍が色々ずば抜けてるだけで、本当は此処のボスなんですよ伯父上。というか本当にバーサーカーですか叔父上、ちよつと、フックが凄まじくキレ過ぎでは？ちよつと某デンプシー野郎張りにキレてますよ？ 大丈夫？ 本当に狂化してる？

ネロちやまがやられたら特異点！ 完！ なのでメドウーサさんを加え入れる？（強襲）ネロちやまに集中するのが伯父上の弱点ですからね、容赦なくついていきましよう。

「幾らなんでも隙を作り過ぎ……っ!？」

「……二度、の、轍を、踏む、程……狂気、に、染まりは、せぬ」

カスが効いてねえんだよ（自虐）弱点なんて無かったんや……！振り向きもなしで、鎖の掴み取りとかホラ直ぐこういう事する——！（戦慄）完全に不意打ちだったのにこれ防ぐとか、伯父上狂化してても若干思考考えられるから普通に厄介なんですよ！ バレンタインとかスゲエ体力使って長時間理性維持してましたし、それは裏っ返せば僅かな間だったらそこまで体力も消費せず理性的に考えられるって事ですよ！

「——ですが、僅かでも此方に意識を向けても良いのですか？」

「伯父上、そこが隙だっ！」

ま、だとしても詰みなんですけどね、初見さん（冷静）そりやあこつちに意識をやったらネロちやまの斬撃が飛んでくるでしょうよ。「っ！」

「はああああああっ！」

ネロちやまの大上段が直撃！ これは大ダメージ入りましたね間違いない……数で袋叩きになっている様に見えますが、コレだけしないと我が方に甚大な被害が出るので必要な事です（クソ雑魚プレイヤー） 太いシーチキンになりたいね（レ）

と言った所で、今回はここまで。取り敢えず伯父上は撃退できそう

な感じは出てますが……問題は呂將軍ですね。本当にどうしまし  
うか……  
ご視聴、ありがとうございました。

## 狂乱の渦 その二

皆さんこんにちは、ノンケ（何時か彼方に至る為）です。

前回は伯父上と呂將軍に散々かき乱されましたが、何とか伯父上には結構なダメージを叩き込めたと思います。とはいえ、倒し切った、とは言い切れないのでここで一気にダメージでゴリゴリと押し込んで撃破しておきたい所さんですが、さて。

＜黄金に彩られた鎧を、紅い剣が切り裂いた。鮮血が散り、グラつく狂戦士は……しかし、それでも地面に膝を付く事は無い。

「く、オオ、オオオオ……ッ」

「取った！ 眼帯の女、合わせよ！ ここで、討ち取る！」

「勝手に仕切らないで頂きたいのですが。まあ逃がす必要もない、というのの同意です」

っしやあ！ ネロちやまにマスターとしてのお株を奪われている気がしますが、ここは気にせず、一気に攻めましょう。香子さんの援護射撃も込み込み。瞬間強化使って、メドウーサさんに全てを賭けてガン掘りして……

「——ッ、グウオオオオオオオオ！」

＜二人に挟み打ちの形を取られたが、それでも諦める素振りなど見せないっからこそその狂戦士。喉も裂ける勢いで張り上げたその叫びに最早理性は残っておらず……その振り下ろした両手は目の前の地を返し、まるで盾の様に二人の間に立てたのだ。

「ぬうっ……！ 何という、剛力かつ！」

「地面をひっくり返すとは……！」

馬鹿じゃねえの（震え声） た、確かに腕力に関してはA+まで言ってましたけど伯父上はたしか。にしたって目の前の地面ちゃぶ台返しして盾にするようなそんな無茶をしないで（歎願） 伯父上は精神を病んでらっしやるんだからお体は大切にして（建前） 止めろオ！

（本音）

それにコレだけの出力叩きだしたって事は、間違いなくスキル全開しましたよこの狂戦士。現状、パワーだけならば呂將軍にも匹敵しま

す……むーりいーもうむりい…… (弱気)

「しかし、この程度」

「時間稼ぎにもなりませんよ!」

とはいえ流石にサーヴァントに匹敵する現地人と、生サーヴァントのタッグにその程度の盾じや脆い脆い脆いDon't Cry (誤字)

さあ伯父上追い詰め……あつ、待って伯父上、その構えは……!?

『待ってくれ! 二人を退かせるんだ! サーヴァントの魔力が増大してる、宝具が!』

「……め、がみ……オオオオオオオオ……女神が……グ、ヌウウウウウ  
——『我が心を喰らえ、月の光』アアアアア!」

◁突如空から降り注ぐ輝き。間違いなく今は太陽が天に輝く時刻だ  
というのに、今、天上に座しているのは間違いなく、満月。白く、静  
かな輝きが、狂戦士を包み込み……直後、彼から最も近い二人が、走  
る足を止めて、その膝を地面に付いた。

お客様お客様お客様!! 困ります!! あーっ!!! お客様!! 精神  
汚染は困ります!! ほんへならスキル封印と宝具封印で済みますけ  
ど、あーっ!!! RPGじゃ普通に行動だつて封じられるんですから!!  
あーっ!!! 対軍宝具も困ります!! 困ります! 範囲攻撃は辛  
いですお客様!!

「お二人共っ……!?!」

◁香子さん! 二人を回収できる!?

◁バーサーカー一点狙い! アレの発生を止める!

下だよね(直感D) ここで焦つて二人の救助を急げば、香子さんは  
兎も角、ホモ君は間違いなく頭おかしくなって死ぬ(断定) それに、  
回収するまで二人が正気居られるかも分かりません。じゃあオラオ  
ラ討ち取って来いよオラア!!! (猪突猛進)

「っ、承知しました! っご無礼をつ!」

◁二人に異常を見て取った貴方の指示で、香子の陰陽術が飛ぶ。攻  
勢を仕掛け相手の攻勢を封じる攻めの一手。そこに、咄嗟の判断で貴  
方の礼装の強化が入り、黒い光条は、大蛇の如き破壊の大槍へと変  
わつて、異様な光を降り注がせる狂戦士に食らいついた。



「アアアア……ッ!? ゴグウッ!」

〈結果として、その判断は功を奏す。三条の光は、相手の喉、鳩尾、そして額を見事に打つ。三つの人中を強かに打たれては、流石の狂戦士もその意識を混濁させたのか、二人と同じように膝を付く……だが、ダメージはあるだろうが、倒すには至っていない。

いやそんなん関係ないでしょ、香子さんナイスです（レ） 因みに香子さんを見てたんですが、アレ多分当たるように撃っただけで狙ってはいませんね。

救助優先、デオン君ちゃん助けて……は、無理ですねはい！ ここはホモ君が回収するしかありませんか。問題はお二人を回収できるまで伯父上が待つてくれるか、いざあ……！（覚醒完了） あ、選択肢は上で（先行入力）

〈ドクター！ 俺が回収する！

〈サーヴァントの様子を監視しておいてくれ！

『わ、分かった！ 此方でもモニターをしておく！ あまり無理をしないように！』

っし、やってやろうじゃないの！ ホモ君をダツシュ！ 彼我の距離はそこそこありますが、角生やしたホモ君の能力ならそこまで遠い距離でもありません、取り敢えず二人を速攻で回収して逃げるんだよオク！ 香子さアくん！ 伯父上の宝具ツて範囲攻撃だから逃げ遅れたらお察しゾ。

「ぐ、あ……頭を、かき乱す、これは……！」

「つ……ます、たー……すみま、せん……！」

グダグダ言うんじゃねえ！ テメエらは俺に黙って攫われてりやあいなんだよ！（救助隊） 復活する前に逃げるが勝ちです。ダツシュダツシュ！ ヨシ、結構距離を離せてますね、これなら……！

『——マズい！ 魔力再び増大……サーヴァントが復帰する！ 本造院君！』

〈渾身の力で地面を蹴って逃げる。

〈二人を全力で投げ飛ばす。

……ええい、ここはホモ君の犠牲にし所さんでしょう！ サーヴァ

ントとマスターじや前者の方が戦略的な価値が高いからね、しようがないね(決断) って事で、ホモ君大丈夫精神汚染されるだけだから！ 死にはしない！ 最悪死んでもコンティニューしてでもクリアするから多少はね？ (ゲム並感)

＜サーヴァントが復活する。能力が発動される……貴方は咄嗟に、担いでいた二人を出来るだけ遠くに放り投げた。怪力、という訳でも無いが、そこまで重くもない女性二人ならば投げ飛ばすに問題は無かった……が。貴方は、後方の怪物から逃れられない。

あつ……が、画面が！ 画面の法則が乱れる！ あーもうぐちゃぐちゃだよ…… (諦観) ホモ君にサーヴァントですら膝を付く洗脳宝具が直撃しました。これは暫くは使い物になりませんね間違いない。セプテムでの見所さんが無くなる！ 無くなる！

＜降り注ぐ光を浴びて頭の中が真っ赤に染まる。かき乱される……だが、それは、何故かそこまで忌避的な物ではない。寧ろこれは……馴染むのだ。実に。

ん？

＜逃げるのではなく、貴方の足は自然と後ろを向いた。前は味方、後ろは敵。であるならばもう進む先は決まっている。手元の得物を握りなおし、自然と、笑みを浮かべ……貴方は咆哮と共に殴り掛かろうと、足を踏み出そうと――

ちよ、待つて!! ホモ君どうしたの!! 洗脳宝具で情緒滅茶苦茶になって死ぬ(容赦なし)なら兎も角なんで若干バーサークしちやった!?! 待つて! 止まれ! 今の君の実力では目の前の男には勝てないぞ! (少年漫画並感)

「――そこまでだー!」

＜した、直後だった。響く、太く、雄々しい声。たった一言で、目の前の狂戦士も、貴方も。戦っていた全員の足が止まる。そうできる程、それが容易く出来る程、その声は威厳と迫力に溢れていた。

止まったあ……助かりました。いやーホント、何方さんか知りませんが……あーYESいません。私、ちよつと今ダイコンRUNするので、ちよつと、ちよつと待ちましようか今聞こえちやいけない声



## ローマ帝国の崩壊 その一

皆さんこんにちは、ノンケ（コンビ女性海賊）です。

前回は、精神汚染攻撃！ 狂化伯父上の逆襲！ 喰らって、ホモ君が何か目覚めそうになってしまつて。それで、えっと、最大の原作破壊が見れました。えー、セプテムの難易度が青天井なんじゃあ〜……  
「——改めて、名乗らせてもらおう。この花のローマが五代皇帝、ネロ・クラウディウスである……少々と、顔色が良くないのは、まあ許せ。頭が、痛むのぞな」

〈貴方達は、先の戦場より離れ、豪華な宮殿のその玉座の前に立っていた。戦闘を終えて消耗激しい、このローマの皇帝、ネロ・クラウディウス。暴君、と呼ばれた皇帝が、この様な華麗な少女、等と誰が信じられようか。〉

さて画面が暗転から戻って来て再開の場面は……ネロちやまの玉座の前。結構飛びましたね。とはいえあのままイスカンドル王と殴り合いとかは洒落にもならなかつたので良かったです。

いや、負けはしないと思えますけど、呂布カリギュライスカンドルの暗刻とか大分強まっているので倍プツシユは不可能……ッ！ 即刻中止せよ！

「ではこちらも改めて。カルデア所属、藤丸立香だ」

「マシユ・キリエライトです」

「フオウ、キヤール」

「えっと、こちらはフオウさん……です」

〈二人が続けて、残る貴方達も自己紹介をしていく。自己紹介と言っても、カルデアの目的をゴチャゴチャ説明するのは得策ではない、というロマニの判断から。自分達は魔術師達の弟子で、サーヴァント達の事は、超強力、かつ高位な使い魔、程度に説明しておいた。「ふむ、その力は人間など遥かに超える使い魔、か。俄かには信じがたいが……しかしお主達が嘘を言っている様には見えない。特に、このフジマルとマシユ。それと、えー……ホンゾーインであつたか。そもそもお主達は嘘を吐けぬタイプと見た」

マシユは兎も角、藤丸君とホモ君共に脳筋馬鹿正直進野郎補欠チームだから嘘ついて誤魔化すなんて言う高度な事出来ないからね。ある意味信用は得やすくてうん、おいしい！

「それに、信じられる理由もある事はあるからな、ホンゾーイン……うむ、なんとも言い慣れぬ名前だ」

〈呼びやすい呼び名で良いですよ、皇帝陛下

〉〈良い慣れないならハゲとかでも良いっすよ（血涙）

じゃあハゲで（ド鬼畜外道）

「うむ、ではハゲで！」

なんだよ、ものっそい笑顔じゃねえか……（団長）ホモ君のハゲ弄りはもうこの旅ではずっと続くと思うので、そろそろ慣れて頂きましようか（愉悦）

〈冗談で言ったのだが、物凄い良い笑顔で了承され、後戻りが出来なくなった。若干、どころではなく最大出力で後悔しているが、今更なのでやめた。

「……ッ……ッ！」

「お、オルタ様……！ その様に笑うのは！」

「す、すっげえ良い笑顔で……ハゲって……いい、んじやないか？ くっ、親しみ込めて、もらえて、さ……！」

「先輩！ 流石に失礼ですよ……！」

〈只今笑っている馬鹿二人は後でシバく。貴方は心でそう誓い、今は平静に保つことを決めたが……苛立ちが収まらない。戦場帰りだからか、昂ってしまっているのだろうか。ここで暴れても仕方ないと深呼吸を一つして、改めてネロに向き直った。

ん？ ……今までもこういう感じの場面はありましたが、こういう描写はなかなか出てこなかったよな？（絶無）戦場帰りで心が昂るとかお前アマゾネスかよお！（TDN風評被害）

「……流石に冗談だ。康友、と名は言うのだな？ ではお主はヤス、と呼ばせてもらおう。丁度良いから、フジマルも、名で呼ばせてもらおうか」

犯人ぽい……犯人っぽくない？ まあ名前で黒幕扱いされるよう

な理不尽は、流石にF G O R P Gとは言え、ないとは思いますが。万が一『犯人じゃね?』とか言われたらクリプターに寝返つたろ! (狭量)

『なんかサスペンス物の犯人っぽいね、それ』

『んー、余りにもべた過ぎで逆に新鮮まである感じだけど。本造院君の迫力のある顔だと案外似合うというか』

許さん (豹変) これより人理漂白作戦を……! する訳ないじゃん (真顔) 所詮冗談の一つでそんな裏切りまくるとかどんな情緒不安定なんでしょうか。

「……それで、だが。お主達は余を助けてくれる、と言ったな。あの時、余の前に立ち塞がって」

あ、画面暗転しました。そしてこれは……回想シーンですかね。

∨——あの時。ネロと向き合ったイスカンドルを新たなる刺客と考えた貴方と立香の行動はそれぞれ対極に位置する物だった。立香は咄嗟に自分がネロの前に立ち塞がり、貴方はイスカンドルの前に武器を構えて割り込んだ。

『落ち着け。今は、拳を交えるつもりは無い。我らが軍の将を、引き取りに来たまでだ』

すげえやれやれって顔してますけど、こっちに向けて自分の所の将がカチコミしてるっていう無礼講も真つ青な状況でその顔して許されるのはアンタとギル様と朕とオジマン位だからな? (寛容)

『二人共逃げろ! 目の前のサーヴァントは……桁が違う! 呂布、それにもう一人のバーサーカーよりさらに格上なんだよ!』

まあイスカンドルですし多少はね? というか何てことない様に呂布と伯父上の動き制してますけど、普通にできる事じゃないんだよなあ…… (絶望)

∨イスカンドル。その名前は、貴方でも良く知っている。文字通り、世界を征服した大王である。呂布ですら比較するには余りにも不足というしかない。それ程に、人類史に刻まれたかの男の偉業は深いのだ。

『んん? 其方ら、妙な術を使っておるな。それにその服装は……ふ

む、となれば其方達がそうか。成程、良い目をしているではないか！』  
　　＜そんな彼が、目前に立って、貴方達二人を見定めている。そう考  
えるだけで、貴方の背筋が粟立った。

我らが大王にお褒め頂くとかはえく……すっごい光栄……（マケド  
ニア並感） Z E R O のライダー登場からファンが耐えなかつたのも  
ある意味当然だったと思います。まあそれはそうなんですけど、だか  
らってこんな早く出てきて頂きたくは無かつた……（恐怖）

『——のう、お主ら。我が方に付き、共に我が征服の一翼を担うつもり  
は無いか？ お主らのその輝き、失うには惜しい』

＜そんな大英雄が……自分達を誘つたのだ。信じられない。サー  
ヴァント達なら兎も角、あくまで唯の人間二人をも。

『はっ、光栄だ。天下の征服王にそう言つて頂けるのは』

＜だが答えは当然NOだ。俺は此方のお嬢さんにお味方する！

だが断る（J O J O 並感） お前いつつも断つてんな。まあ内心『然  
り！ 然り！ 然り！』とか叫びながら我が王の元に馳せ参じたい気  
持ちは無くもないですが。人理修復優先して♡

『ほう、そいつはどうしてだ？』

＜どうして、という程の理由は無かつた。強いて言うのであれば  
……

＜俺達の直感だよ！

ホモ君に直感スキルは無いんですけどね（茶々） どっちかと言え  
ば直感スキル持つてるのは藤丸君なんですけど、まあそこは今は良い  
でしょう。

『ほう、直感とは！ 随分と雑な理由だが？』

『俺達が付くべきは、必死になって何かを守ろうとしてるこっちだと、  
そう思つたんだよ！ それ以上の理由があるか！ 大王イスカランダ  
ルさんよお！』

『……いや！ 要らんな！ ははっ、中々に肝も据わっている。これ  
は聞いていたよりも強大な敵ではないか！ やはり敵は一見してお  
くに限るわ！』

お、聞いていたって誰からですか？ レ／フか？ レ／フなのか？

お、お？ 早速奴をブチ転がすチャンスか？（過剰反応） つと……落ち着きましょう。レ／フのタイミングはまだまだ先です。とか回想ですからどうこう出来るもんでもありませんし。

『ネロ帝よ。お主、得難き味方を得たではないか。またお主と相まみえるのが楽しみになったわ！ 呂布、カリギユラ、退くぞ！ 今は、時ではない』

『ま、待てイスカンドル！』

『お主も万全の体勢を整えてくるが良い。この様な無粋な戦いの中であっても、覇を競い合うのであれば、互いに出来る限り全力が良いからな』

＜そう言つて、イスカンドルは呂布、そしてもう一人のバーサーカー、カリギユラを伴つて引き上げていった。その場から去る雄大な背中に、誰も追撃を仕掛ける事はしなかった……その後、疲労した全員がネロと共に王宮に戻り、今に至る。

イスカンドルにとっては、他の英雄と覇を競うような戦いも、こんな状況では『無粋』なんですすねえ……それでもサーヴァントとして召喚された以上はキツチリ仕事はする英雄の鑑がこの野郎……！（誉めギレ）

＜あの時の言葉に、嘘は無い。そう二人で答えを返せば、ネロも首を縦に振った。

「であるならば……余から、改めて頼みたい。あの強敵、イスカンドルを打ち破るために、今や、洛陽の縁にあるこのローマを守るために、力を貸して欲しい。余には、少しでも多くの味方が必要なのだ」

＜当然、力になりますよ！

＜ハゲで良ければ、是非。

まあそろそろハゲネタもしつこいと思うので、ここは選択肢上で。

「給料は弾むのかな、なんてね」

「先輩！ ……はい、ネロ陛下。是非私達に助けさせてください」

『ここ、首都ローマが焼失するのは、我々にとっても好ましくないのですから。皇帝陛下。我々も喜んで、貴方の傘下に加わりたく』

＜ロマニが、マシユが、立香が。そろつてそう言うのを見て……ネ



口は、ずっと張り詰めさせていた表情を、漸く少し緩めた。

「そうか……うむ。そう言って貰えるのは心強いな。本当にありがたい……お主達を我が陣営に迎えさせてもらおう。今のローマにどこまで出来るかは分からぬが、最大限の歓待を持って、報いらせてもらうぞ」

カルデアは せいしきに ローマのなかまになった！

という事で今回はここまでとなります。ご視聴、ありがとうございます  
ました。

## ローマ帝国の崩壊 その二

皆さんこんにちは、ノンケ（過労死）です。いよいよ出番直前ですね。

前はローマに馳せ参じました。ネロちやまの陣営とかやる気百倍満です。最大のやる気が出る時？ 新選組か、ワラキアの旗に集う時……ですかねえ？ 黒の陣営が好きなんですよ私。誰か分かってくれ（切実）

「現状、我がローマの偉大な国土は、大きく二分されてしまっている」  
『ろ、ローマ帝国が二分、ですか』

「左様だ……が、規模で考えれば、半々とはとても呼べぬ、どれだけ良く見積もっても余が三、向こうが七と言った所だ」

「特異点の理由は一発で割れた。この時代最大の帝国たるローマが二分されているなど、最大の異常と呼んでいいだろう。」

「それで、向こう、というのは？」  
「……連合ローマ帝国、という。奴らは突如として現れ、皇帝を僭称しローマの半分を奪い取って見せた。その名の通り、余ならぬ複数の皇帝が続べる『連合』であるのだ」

状況は最悪、みたいな感じで行ってますけど、実はこれ原作よりは  
大分マシな状況なんですよね。原作では『バラバラに引き裂かれた』  
とまで言われてましたからね正統ローマ。三割でも形残ってるだけ  
マシだなガハハ（ポジティブ）

「アンタみたいなのが何人も居るの？ 考えただけで焼き払いたくなってくるわね」

「オルタ殿、そう言う意味で皇帝、と言っているのではないと思いが  
が」

「いや、その黒い……オルタ、でよいのか？ お主の言う通り焼き  
払っても問題は無いような輩ではある」

『えっ、そこまで言いきつちやう!?』

真顔で草。具体的に描写はされてませんでしたけど、ほんへでもこれくらい怒ってたんですかね……？

「……ああ、皇帝と名乗るのも許しがたい！ あ奴らは各地で暴虐の戦いを引き起こし、民を苦しめているばかりだ！」

「フオウツ!？」

「ネロは玉座の肘掛けに、思い切りその拳を叩きつけた。言葉以上にハツキリとした激怒の発露に、香子とフオウがビクリと跳ね上がる。近くに居る訳でもない二人がそんな風に怯える程に、皇帝ネロの怒りは凄まじかった。」

実際、あのネロちやまボイスで相当ドス利いてるとか聞いた事もないからね。もうプレイヤーの私は漏らす寸前です。汚い（確信）とか言われても許してとしか言えない、だってマジでインテグラさんバリのドスボイスなんですよ……

「それで、連合は一体どんな勢力なんだい？」

「このままでは怒りのままに話題が逸れかねない勢いだった。それを軌道修正するべく動いたのはデオン。流石に質問を無視して迄怒りを爆発させるつもりは無かったのか、震えていたネロは、その感情を一旦鎮めたように見える。」

「……正直なところを言えば、あまり詳しくは分からぬ」

「分からない？」

「ひと月ほど奴らと相争い、戦い続けてきたが……それでも、不気味なほど奴らの様相は知れぬのだ。どのような統治をしているのか、全くと言っていいほど。分かっているのは一度攻め込めた奴らの首都と、何人かの将の事ばかり」

「おや、原作では首都すら分かっていた様ですが……この辺りも原作ネロちやまの状況よりはマシみたいですねいや待ってやつぱりスルー出来ない。首都に一遍攻め込めてるのここのネロちやま。ほんへより全然優勢じゃないか（誉） 誇らしくないのかよ？」

「その首都に、我らは一度侵攻し……敗れ果てたのだ。首都の守りの前に」

「敗れた……成程、それで、連合との国力に差が開いた、という事かい？」

「うむ。そこで完璧なまでに敗走し、そして……余と共に戦ってくれ

ていた英傑もまた、そこでイスカンドルに敗れ去ってしまった」

「とある英傑。その心当たりは確かネロ自身が口にしていた。」

「ダレイオス三世。偉大なるペルシャの王。遠き国の王とはいえ、あのイスカンドルに立ち向かった王として、余も知っていた英霊。彼は……亡くなった我が宮廷魔術師が最後に呼び寄せてくれたのだ。連合に対する、最後の切り札として」

あ、そう言えばダレイオス君がこっちに付いてたって言ってましたね。というかネロちやまの宮廷魔術師、ダレイオス君呼び出すとか有能すぎひん？ 多分（魔術師としての技量としては）変態だと思うんですけど（名推理）

「如何なる術かは今となつては分からないが……先のサーヴァントの心当たり、というのは彼だ。嘗ての大英傑が蘇り、人知を超えた力を見せつけるというのは、一種そのサーヴァント、という存在と通ずる部分がある気がする」

「ネロの表情は、少し寂しげなものに変わっていた。嘗ての栄光を懐かしむような、そんな表情にも見えた。」

「彼は我らと共にローマに攻め寄せた連合の不屈き者達を雄々しく、華々しく、討ち取ってくれたのだ。何よりも頼もしい味方であった。他の将達と共に、始め不利だった余達を、五分の状況まで押し上げてくれたのだ」

つ、強ええダレイオス君。流石にトップクラスサーヴァントは伊達じゃないですね。ほんへではあまりファイチャーされないのが勿体ないくらいです。あ、婦長クリスマスのダレイオス君ホントすこなんだ……（唐突な割り込み）

「戦力を削り、皇帝を討ち取り……首都に攻め込んだあの時に至っては、我らは優勢ですらあったのだが……後は、先に言ったとおりだ」

「手をググ、と握り、歯を食いしばるその姿は余りにも悲壮で、僅かな怒りすら孕んでいる。敗北したその当時の姿は、正にこの様な姿だったのではないか、と思う程に。」

感情の浮き沈みが激しすぎる（困惑） さつきまであんなに怒つたのにここまで沈むもんですかね？ まあでも話は分かりました。

要するにダレイオス君が呂將軍とトレードされた結果、ネロちやまの状況が好転したと。このバタフライエフェクト分かんねえな……お前どう？

『それで？ そのダレイオス三世君は、今どうしてるんだい？』

「……今は、王宮の一室で休養を取っている。辛うじて、死は免れたようだが……傷が余りにも深く、未だに癒えぬのだ」

「サーヴァント、と思われるダレイオス。その彼に言えぬ程の深い傷を負わせる。一体どれだけの激戦だったのだろうか。想像するだけに余りある。」

「それだけ、敵将イスカンドルは恐ろしい実力者、という事だったのでしょうか」

「確かにかの征服王は恐ろしい強敵ではあった。ダレイオス殿を擁する我々でも押し切れぬ程に。しかし恐るべきはそれだけではない」

えっ、まだあるの（素）

「イスカンドル、という力の切り札の将が向こうにはあるが……しかし、それだけではなく、知の切り札足る帥もまた居た……確かコウメイと言ったか。イスカンドルの切り札としてその知恵の髓を尽くし、奴を支えていたのだ」

「コウメイ……待って、呂布が居るってことは、いやな予感しかしないんだけど!?!」

「まさかの諸葛孔明!?!」

「……もしかしなくても諸葛孔明じゃねえか!」

エルメロイゴリアー! 何してんだああああ!!? ちょ、お前セプテムじゃ大分ダウンで全力だしてますよー風を装ってそこまで働かないとか言う消極的な反抗策に出てたくせに、なんで急に本気出したお前!?!

最悪です。そりゃあアレキサンダー君が征服王に覚醒したんだから、そりゃあウエイバー君もはしゃいじゃって、我慢できぬ!（推理）どうしましようかコレは……

「諸葛孔明というと確か、呂布と同じ三国志の英雄じゃなかったかい?」

「はい。蜀の王、劉備より三顧の礼を受け、彼の為に最期まで仕えた大軍師です」

『軍師でもあり、宰相でもある。魏の国が蜀を攻めきれなかった最大の要因。それが征服王とタッグを組んで迫ってくる。いやあ、控えめに言つて悪夢だねこりやあ。劉備でも呼んで寝返り期待しちゃう?』

いやあ、その人劉備呼んでもあんまり意味ないんですよ……どつちかと言うとイスカンドルに猫まっしぐらなんですよその似非中国人。

というのも、F G Oの孔明は実は孔明本人ではなく、デミ・サーヴァントのマッシュと似て非なる『疑似サーヴァント』的な感じになっていくのです。で、その孔明の依り代となって居るのがよりにも寄つてF a t e / Z e r oにて征服王過激派に成り果てたウェイバー君……が成長したエルメロイ二世つていう。現代的な感性にも対応した知能派です。クソかな?

「ぬ、知っているのか? コウメイなる男の事を」

『我々が知る限りでは、最上位の知恵者という評価です』

「最上位! 成程、あの様な常識の遙か外の策を取るのだ、尋常ではないと思つていたが、それ程に噂されるとは……成程、アレだけの守りを展開したのも頷けるといふもの」

【F G O】エルメロイ教授はR P Gにて全力を出すようです【あんこ】初手クリティカルとかしたのかな? 余計なことしなくていいから(必死) もっとレノフの足を引っ張つてホラホラ。寧ろ反乱引き起こして。

『やはり、ここでも蜀で見せた辣腕を振るつているみたいだね』

「辣腕、等という話ではない。あ奴は連合首都を守るための長城を創り上げた張本人だ。ダレイオス殿と戦っているひと月の間に、な」

……え? なんて? 何が築かれて居るつて!? 長城? 長城と申したかネロちやま。

「……長城!? 長城つて、万里とかある感じの!」

「うむ。コウメイ肝入りの防衛施設。連合首都を守るために創り上げた、三重の長城だ」

ぶももえんぐえげぎおんもえちよつちよちやつさつ!!! (難易度上

昇を悟って発狂する投稿者)

なんだよお長城って……お前、おまえー！ ドラグーンセイバーだけに飽き足らずなー！ 難易度をなー！ んん、ゆるさーん！

なんでしよう、DLC入れただけでこんな難易度って上がるもんですか……FGORPGの鬼畜さを悟った所で今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。

## ローマ帝国の崩壊 その三

皆さんこんにちは、ノンケ（発明王）です。

前回は……お前それSINの要素の先取りじゃねえか！ ふざけんな！（迫真） そんな物立てちやつてさあ、もう嫌……ゆるして。しかも三重!? マジでもう馬鹿じゃねえかとか。誰だそんな馬鹿な真似したのは！ エルメロイ二世 だった！（桃鉄感）

えー、ほんへより状況が好転している、と思っていましたがお詫びして訂正いたします状況は悪化してますねえ！ 怒りのあまり黙れゴツ太郎も辞さない構えです（意☆味☆不☆明） とりあえずレ／フはゴツ太郎した後レ／フにする。孔明もゴツ太郎する。

『……おかしいな、これ二つ目の特異点だね？ 特異点は激しい戦いになるのは承知してたけど、もうこれはそう言う厳しいという次元越えてないかい!』

「落ち着いてくださいドクター！」

＜混乱するのも無理はない、あまりの衝撃。中国よりはるか離れたこのローマの地に、それも三つも。守りという一点に置いては、かのレオニダスと並ぶほどの知名度、そして意味を持つであろう大障壁が。もはや突破云々の話を越えているのではないだろうか。

どうやって突破すれば良いんでしょうそんな頭の悪い防御。ちよつとコレは此処にいる全ての野良サーヴァントの皆様にも何でもして貰わないといけないでしょうか……オラ島に引きこもってる神様！ アンタの役割無くなったも同然なんだから手伝えオラア！（未来予知）

「一応お聞きしますが、ネロ殿！ 長城の守りはいかほどな物か、教えて頂けると」

「堅牢にして苛烈。この二言に尽きるだろう」

＜そう口にするネロの眉間の皺は、今までで一番深い。

「三重の長城は、孔明という男の指揮によってローマの建築技術の粋を尽くし作られている。都市への侵攻を、島の端まで遮る一つ、二つ目の長城。そして最後の連合首都をぐるりと囲む三つ目の長城が存



在し、余達は……一つ目を突破する事すら出来ていない」

『ヒュウ、絶望的な情報が追加されたね』

「フオーウ……」

硬すぎる（素直な感想） ダレイオス君とネロちやまがほぼ全力で望んだ戦で一つも抜けてないとかこれマジ？ 孔明には失望しました、ウエイバー君の休日差し止めます（遺憾の意） カルデアに来たら休めると思いうなオラアン!?

「ただ単純に、高く、固い。それ以外の機能は持っていないが……それでも、それが何処までも続いているのだ。それだけで、脅威と言わざるを得ない」

「単純な程、純粹に強い、と言った所でしようか」

そう言うメドウーサさんなら多分お一人で上飛んで突破できるでしょうけど……お一人で向かった所でキラキラ（消滅演出）して終わりだと思うので絶対にさせません（意思強し） サーヴァントは大切にしよう！（ゆうさく）

「そうだ。アレを突破しようとなると……」

〈想像できる光景は、余りにも凄惨に尽きるだろう。

「文字通り残るのは屍の山、って訳ね。マスターの時代の言葉で言えば、なんだったかしら……ああそうそう、クソゲーって奴？」

「オルタ、そんな……そんな的確に、一言で言わないで。頭痛くなつてくるから」

オルタは賢いなあ！（誉め言葉） そりゃあ万里の長城を自力で、かつ真つ向から攻略するとか人類に冠たるクソゲーになるに違いありません。

「……取り合えず、細かい点を省いた現状はこの様な形になる。其方達には、この現状を打破するだけの、活躍を期待したい……というか期待せざるを得ぬのだ。済まぬが」

〈い、いやあ……やるだけの事はやります！

〈やっつてやれない事は無い！ と思いたい！

ホモ君絶対これ震え声だと思っんですけど（指摘）

「そう言って貰えると助かる……良し！ 暗い話はここまでだ！ 取

り敢えず、其方達の内の一人を総督に任じ、もう一人を……そうだな。その補佐に付ける。活躍の期待を込めての任命だ。頼むぞ」

凄い期待の表れ、光栄だなあ……(重責) 総督としての地位が無いとただの愚連隊になっちやうからねカルデア、しようがないね。みんなで沢山功績を稼いで、ローマ帝国で成り上がろう！(建前) 総督権限でレフぶつ殺す(本音)

あ、選択肢は当然立香君に任せます(閃光入力)

∨∨ 立香を総督に推薦する。

∨∨ 自分が立候補する。

∨——取り敢えず、貴方は速攻で立香に面倒を擦り付けに行つた。秒速だった。何の躊躇いも無く貴方は仲間を売つた。やはり自分より責任感があり、洞察力もある……だとか適当に理由を付けて、売つた。鬼である。

「……や、康友テメエええええええ!」

「やっさんの言う通りです。マスターであり、素質のある先輩にこそ、総督の任は相応しいかと思えます」

∨マシユに逃げ道を塞がれ、立香は泣き笑いの様な表情を浮かべていた。レオニダスは無言で佇んで居たが若干のジト目で此方を見ていて、ジャンヌ・オルタはやっぱり笑いを堪えていた。

ヨシ! これで補佐役は自動的にマシユちゃんになるでしょうし、ホモ君は自由に行動できるな! じゃあ藤丸君、俺ギヤラ貰つて独自行動するから……(逃走)

「テメエ逃がすか……!」

∨鬼が居た。一刻も早く、マシユを補佐役に据えようとした瞬間の出来事だった。一瞬で肩を捕獲されて、ズリズリとネロの前まで連れていかれてしまう。

「補佐役コイツで」

「……う、うむ。それは良いが、その。良いのか? 凄い嫌がっているよな」

「はい。此奴とはいつつもコンビなんで、ええ。ぜつつつたいに逃がしません」

流行らせゴラ！ お前マシユちゃんっていう後輩が居るんだからこのチンピラハゲなんか補佐役に任命してんじやねえぞゴラァ！

『……えーと。まあ当人たちがこういつているので、良いんじゃないかと。それで陛下。我らカルデアのメンバーは常に最前線に配置していただけるとありがたいのですが』

「うむ？ 総督に任じたというのに、最前線にか？ 余としては、戦力が少ないゆえに助かりはするが……」

『はい。私達には、ネロ陛下をお助けする以外にも、幾つか目的があり……それを果たす為にも最前線で全力を振りたいのです』

と藤丸君は兎も角として、ホモ君は司令官とか無理ですから。この子は基本的に万歳突撃させるのが一番有用な使い方ですから（正論）  
「ふむ、目的とな？」

『はい。我々は、カルデアの裏切り者、レフという魔術師を探し、打ち倒さねばなりません。彼がここに居るかは分かりませんが、居るとすれば……間違いなく、彼は連合ローマに与しています』

「裏切者の魔術師……」

〈魔術師、という言葉にネロの顔色が変わる。

『何か心当たりでも？』

「連合ローマ帝国の首都に進攻した時、魔術による援護攻撃も行われていた。城壁やイスカンドルの軍略に比べれば目立つものでも無かったが……それでも被害はそれなり以上に出ていたのは事実。優秀な魔術師が付いているのは間違いない」

「どうかレ／フだよ。速く殺そうぜ！（兵は神速を貴ぶ） 落ち着け……余りにも殺意があふれ出てしまっている。この殺意は丁寧丁寧／フを切り殺すまで取っておきましょう。」

『可能性は高いかもしれませんが』

「であれば、うむ。余としても拒む理由は無い。其方達の希望に応え、可能な限り前線に配置する事を約束する」

〈裏切者、レフ・ライノール。彼と早くも遭遇するかもしれないチャンス。立香と貴方は言い争うその手を止めて、互いに視線を合わせていた。頭の中が赤く染まり、電が駆け抜ける。あのニヤけた面にこの

拳を叩き込む、その機が――

〈ぶち殺す。〉

〈無残に磨り潰してやる。〉

おおっと（指摘） ホモ君の思考が危ない。レ／フを心待ちにしてるプレイヤーの思考が乗り移ったかな？ 良いぞもつとやれ（過激派）

「ああ……康友。必ず所長の仇を討つぞ」

〈——その言葉に、ハツとする。そうだ。あの男を討ち果たす一番重要なその理由を、忘れていた。アレを捻り潰す為だけに戦うのではない。特異点Fにて、無念の内に討たれたオルガマリーの為に、ケジメを付けさせる為に。〉

まあ小指どころか彼奴は全身ケジメさせますけど（血狂い） けど確かにあのモジヤを殴り倒すのは、所長オ！ の敵討ちって言うのが始まりでしたよね。危ない危ない。殺す事を楽しむ様になったら三流ってそれ一番言われてるから。理由を胸に気高く飢えるんだよ！（ジヨニイ並感）

「……其方にも、複雑な理由がありそうだな。うむ、お主達が悪逆の徒を討ち果たせる事、余もローマの神々と神祖に願ひ、そして誓うとしよう」

『お心遣い、感謝します。陛下』

「良い、お主達にはまだ助けて貰った礼も残っている。この程度は些細なものだ……今日はもう遅い。それぞれに部屋も用意させた故、休むが良い」

〈そう言つて、玉座から立ち上がるネロ。代わつて、案内役と思われる兵士が此方に声をかけてくるが……貴方は、上の空だ。先ほどから殺気立っているのが収まらない。〉

〈疲れてんのか……？〉

〈何かの悪影響……？〉

つと、コレは結構重要そうな選択肢……スルーしてもよさそうです  
が、取り敢えず下選んどきましょう。

∨万が一のこともある。念のため、ロマニに今の自分のバイタルを  
チェックしてもらおう事を考え……隣からの声に、意識を浮上させた。

「マスター、お部屋は此方だそうです」

∨香子が指さす方向に、既に何人かは向かっている。話は部屋につ  
いてから。一旦思考を打ち切り、貴方はゆつくりと歩き出す。その額  
に、僅か一瞬だが、雷電が走った。

……なんだか不穏な幕切れですが今回はここまで。ご視聴、ありが  
とうございました。

## ローマ守護チーム その一

皆さんこんにちは、ノンケ（水着姫）です。イベント特攻抜擢やつたぜ。

前回は、よーしレフをぶっ殺すぜ！ となつて居た所に藤丸君が『仁義を忘れちゃいけないよ……』と諭してくれました。プレイヤーも少し殺気を押さえないと、と思つた一回でした。どうかホモ君どうした？ イベントまではそこまで凶暴じゃなかったぞ？

〱——開けて翌日。貴方達カルデアの面々は、召集の命を受け、再びネロの玉座の前に集結していた。

「おはようございます！ ネロ陛下！」

「うむ、良い挨拶だ！ 元氣そうで実になによりである。これで憂いなく、お主達に頼る事が出来るというもの」

ここ激ウマジョーク（冷静） ホモ君達が万全じゃなかったら勝てないのは道理だからね。さて、ほんへでは起こつていた幾つかの襲撃イベントをスルーしつつ、これがネロちやまからの初指令ですね。

「それで、だ。お主達を呼び寄せた訳だが。お主達の様な戦力が加わってくれた今が、攻勢の時と余は判断した。先ずは連合との最前線、ガリアの地に余とお主達で赴き、彼の地を取り戻す……積りなのだが、その前にやっておいてもらう事がある」

〱そう言つてネロが指差した先は南。海、を指さしている訳ではないようだった。

「宮廷魔術師の事で、思い出した事があつてな。あ奴は何時も、『エトナの霊脈を独占できれば、連合の有象無象など』と言つていた。魔術師にとって、その霊脈？ とやらがどのような役割を持つかは分らんが、重要な事は分かつている。そこを抑えよ」

『——エトナ火山に霊脈があるのは、此方も確認していました。しかし……宜しいのですか』

めっちゃ気を使って貰つてるってハッキリ分かんだね（指摘） 実際ネロちやまにエトナ火山を抑える理由なんてないですし、価値なんて糞だよ糞。そこを押さえろオ！ とか言うなんてどう遠慮して考

えてもこつちの為としか思えないんだよなあ……

「宜しいも何も、魔術師を運用するならば、その要点を抑えるのは基本であろう？ 余にとつて、お主達を抱えた時点でエトナは重要な地点になった。故に攻略に行かせるだけだ。何も問題は無いぞ？」

「何も気など使っていない。そう、ネロは言葉にする事すらしなかった。」

カツコいい。これが皇帝ちゃんですか（戦慄） 必要だと思ったら即断即決とか有能さ誇らしくないの？ めっちゃ褒めてあげたい（上から） ネロちやま褒めて貰って嬉しいのは奏者だけだから、勘違い野郎はホイじゃ首を出せい！（初代様）

『……お心遣い感謝します。出来るだけ早めに済ませ、戻ってまいります』

「お主達が戻り次第、ガリアへの攻勢を開始するつもりなのでな。出来るだけ早く戻ってくるのだぞ？」

「そう言つて、ネロが玉座を立つ。振り返らず颯爽と去っていくその背中には、確かに皇帝としてのカリスマが宿っていた。」

よし、ここはネロちやまのお気遣いを無駄にしない為にも、早速ホラいくど〜（神速のホモ）

「<<とはいえ、全員で行くべきなんだろうか。分散するべきでは？」

「<<よっしゃあ！ ネロ陛下の期待に応えるぞ！ 全軍突撃じゃあ！」

まあ待て（一転守勢） 思考を完全にぶっ殺しての突撃も最高だと思えますけど、あんまりにも戦力を一点集中するのも、ちよつと戦略に、ね？（魔術師並感） ここはリスクヘッジを優先するべきでしょうか……そんなの関係ないんだよ！（突っ張）

「<<とはいえ、全員で行くべきなんだろうか。分散するべきでは？」

「<<よっしゃあ！ ネロ陛下の期待に応えるぞ！ 全軍突撃じゃあ！」

『そ、それは確かに！ 万が一連合が僕たちがエトナに向かつてる隙にローマに攻め込んで来て……それで滅びましたとか言ったら僕ら完全に戦犯だぞ！』

「戦犯どころではない。協力すると言った口で全く協力する事なく特異点でローマ帝国滅びました、等と言ったら人類史における大罪人レベルである。全員で首つりハラキリでも責任は負いきれない。」

「別に速攻で確保して戻ってくればいいじゃない」

「リスクを抱え込むのは避けるべきだと、防衛を得手とする立場から意見させて頂きます」

「僕らは二チーム居るからね。その利点は生かすべきだろう」

「すいません……チキりました……（顔面蒼白）RTA兄貴姉貴だったら全戦力投入、エトナから一気にステンノ様確保してローマに凱旋するくらいはしますからね。エンジン<sup>クッ</sup>雑<sup>雑</sup>魚<sup>ナ</sup>メ<sup>メ</sup>ク<sup>ク</sup>ジ<sup>ジ</sup>なんてこんなもんですよ。」

『……うん！ 安全策を取れるならそっちの方向で！ という事でエトナ火山確保チームは当然マシユと藤丸君チーム！ 本造院君にはローマ防衛の任に就いて貰いたい！』

「結局、全力でリスクを回避した策を取る事になった。」

『藤丸君チームは僕が、本造院君チームはレオナルドがサポートするから、その辺りは安心してくれ』

「戦力が分散したので、その分の不安はありますけど……」

「はっ、私が付いているんだから。こっちのチームは全く、これっぽっちも問題無いは無いわよ。そっちは……まあ頑張りなさいな」

「なんだあ……テメエ……？（ORT）鼻で笑いやがってえ、そりやあ見かけから考えりやあそっちの方が強そうだけど、見かけ考えなけりやあ総合力は互角なんじゃない！」

「——そちらのチームは大変そうですね。突撃<sup>脳筋</sup>の方が居て」

「ああ？ 何ですってデカ女」

「おや、今の発言は喧嘩を売っているのではないのですか？ 申し訳ありません、つい買ってしまいました」

「ただの軽口だったのかもしれないが、しかしこの一言にメドウスが噛み付いてしまった。当然反応するオルタ。コレから特異点攻略を本格的に行うというのにいきなり両チームの攻撃の要と言える両人がバチバチと視線をぶつけている。コレはマズいと貴方と立香



が二人の間に入り込んだ。

今から仲間割れをしていくのか……（困惑）

「オルタ！ 今のは君が悪いから、ここは鉾を収めるんだ！」

「はあ!? 別に喧嘩売った積りなんか無いわよ！ 普通にオーエンしたんじゃない！」

「今ので!？」

マジで藤丸君の言う通りなんだよなあ。鼻で笑う必要性はあったんですかね？（素朴な疑問）とはいえ、素直に応援が出来る分ほんへのオルタよりは相当に成長している可能性が微レ存……？

普通に応援していたようには欠片も見えなかったが……そう言う事であれば不幸なすれ違いだ。ここはメドゥーサさんにも抑えて貰いたい所。

「……私は悪くないと思うのですが」

〈〈YES。貴女悪くない。〉〉

〈〈とはいえ、ここは特異点をどうにかする為、抑えてください何でもしますから!〉〉

ん？（雷速瞬動）今、何でもするって言ったよね？

「ドフオウ!？」

「……何でもする、ですか？」

〈貴方は即座に首を縦に振った。加えて、最悪自分が死ぬような事でなければ、どんな事でも構わない、と改めて念を押して答えた。ここでメドゥーサに嫌な思いをさせる位であれば自分の身を切る程度は何でもない。〉

『ちよ、本造院君そう言う発言はあんまり!』

「ああいえ、無茶な事を要求するつもりはありませんけど……」

すいません。あの選択肢が目に入った時、他のなんか些事（ホモ君の人権とか安全とか陣理修復とか）は全部キレイにすつぽ抜けて下の選択肢以外は目に入らなくなりました。

「しかし、マスターが何でもしてくださる、と言ったのですから……そうですな」

〈メドゥーサは少し考え込んでから……その言葉を口にした。〉

「では、今度出来る図書館の優先使用権を頂いて宜しいでしょうか。順番待ち等、余り面倒に煩わされたくないのです」

そ、それはホモ君に言ってどうこうなるものなんでしょうか。いや、何でもするって言ったからね、ここはしようがないね。だったら何でもするんだよ、ホラあくしろよ。あくするんだよお！

「……（コクコク）」

＜香子に縋るような視線を向けた所、ちよつと考えた素振りをした後に香子が頷いたので努めて……出来るだけ努めて冷静に、了解したと返した。

メドゥーサさんの鋭さが凄い。

「そうですか。ありがとうございます。ではこの一件はコレで……後、気軽に何でもする、というのは止した方が宜しいかと。サーヴァントに対してそれは、致命の一手となりかねないので」

＜そう言つて、あっさりと怒りを収める事に了承したメドゥーサに、少し肩の力が抜けてしまった。どうにもこの人は読めない。悪い人ではないのだが。

尚、この両者、一言も謝罪の言葉を交わしていないのである……！  
まあタダの行き違いだったからね、謝罪の言葉もそこまでいらなし多少はね？

＜取り合えず、今回の一件は両者の行き違い、という事で決着は付いたのだが……

「それは兎も角として、そのデカ女は気に入らないわ！」

「一字一句そのままお返しします突撃脳」

＜結局、両者の溝が埋まる事は無かったのではあるが。サーヴァント同士の交流も、考えないといけないな、と思った。

仲良くして!?!（必死）

邪ンヌとメドゥーサさんの相性が最悪だと分かった所で今回はここまでとなります。ご視聴、ありがとうございました。

## ローマ守護チーム その二

皆さんこんにちは、ノンケ(坊主)です。そろそろ被りが心配になってきました。

前回はメドゥーサさんにしてやられました。でもサーヴァントとの交流は出来たからヨシ……じゃなくて、ホモ君と藤丸君が分かれ、それぞれローマ防衛、霊脈確保に動く事になりました。リスクヘッジしないといけないからね、しようがないね。

さて、画面ではホモ君が王宮の入り練りから藤丸君を見送っています。進む最中でも藤丸君達の周りにはローマのおっちゃんおばさん兄ちゃん姉ちゃんがわちゃわちゃやっています。物珍しいのでなんかテンション上がってる、というのもあると思いますが、それにしてもスッゲー元気だずえ！ ここ本当に窮地の国家なんですかね……？

「……ここが戦時中の国、とは信じられませんね」

「全くだ。しかし、それ故に彼女の王としての資質が分かるというのも」

「私は余り騒がしいのは好まないのですが……この騒がしきは嫌いではありません」

〈概ね三人の意見には賛成だった。国の状態を見るには民を見るのが一番、と誰かが言っていたが、それに則るのであれば、民が明るく元気に、活気を持って活動しているこの国は、実に良く統治されているというのが明確だった。

「うむ、余のローマ故にな！」

うおっ!?! いつの間にかネロちゃまに背後を取られている！

ちよつとお、俺の背後に立つなって言ったサル！（三位一体） いやもうそこまで行くと原型無いやん（指摘）

「皇帝陛下……」

「気を遣わせてしまったようで済まぬな。それを無駄にせぬ為にも、全力でお主達を活用させてもらうが、構わぬか？」

『それは当然。その為にカルデアとローマ帝国は組んだのだから、問題は無いとも』

「話しつつ、貴方達は王宮の奥へと引き返す。しばらく歩いて辿り着いたのは……玉座の間ではなく、巨大な地図が机に置かれている部屋。会議室で会った。」

「——では、これより第一回連合ローマ首都攻略御前会議（簡略版）を開始する！」

わー（パチパチパチパチ） 所でカツコの中つてどうやって発音してるか気になるですけど、やっぱりカツコ、カツコ綴じ、って言うてるんですかね。」

「此方のチームはローマの防衛とそして……ガリア遠征に先駆け、対連合ローマ、三重長城への対策会議を開くことになった。この情報はダ・ヴィンチを通して藤丸チームと共有されて、向こうの方からも提案が可能になって居る。」

「其方たちカルデアは、人材の不足している現状のローマに置いて貴重な臣。良き意見が出る事を祈る」

『ところで連合ローマの方は当然として、ガリアの方は大丈夫なのかい？』

「うむ。其方に関しては嘗てから計画している作戦が順調に進んでおるからな。お主達も加われれば、先ず負ける心配は皆無よ」

頼もしい事言ってくれるじゃないの……じゃあその言葉を信じて、正義の鉄槌で、その、腐った連合首都の壁を矯正してやる（大言壮語）  
と言つてもどうやって突破するか全然頭には浮かんでないゾ……  
ホモ君頑張れ！（丸投げ）

『では遠慮なく此方に集中しよう。先ずは……そうだね。その長城のデータが欲しいね。高さとか、厚さとか、そう言う具体的な情報が』  
「ふむ、高さに厚さ、か。厚さに関しては全く分からぬが、高さに関しては、余達の『塔』でも高さが足りぬ程だ。文字通り規格外と言つて良いだろう」

「開始早々、情報の交換に関しては完全にダ・ヴィンチとネロの二人舞台となった。頭脳的に同格の香子は軍事に疎く、軍事に詳しいデオンは頭脳面ではダ・ヴィンチには届かない、そもそもメドゥーサは積極的には参加しない、貴方は馬鹿、といった感じだった。」

『ふむふむ、となると……ッハア！ 中々絶望的なデータが出たよん』  
「う、うむ………というと？」

『コレだけのデータが揃ってくると、他のデータに関しては比較や現実的な可能性を考えてある程度は予測できるんだけど………その中でも、最もマシな可能性でも勝手に笑いが込み上げてくる位には硬いよマジで。サーヴァントでもコレ砕くのは厳しいねえ』

攻略しろって言ってんの、ねえ!? 攻略しろって言ってんだ口オ!?  
誰が絶望的なデータ出せつつたオラアン!? まあ、まて落ち着きましよう………ここで怒ってもなんにもなりません。でも叫びたくないくらいは嫌な発言が聞こえちゃって……

「要するに、真っ向からの攻略は不可能に近いという事かい？ ダ・ヴィンチ」

『というか、不可能だね』

「例えばですが、私の宝具をぶつけたとしても、ですか？」

『あのペガサスの高速突撃か………行けるとは思うけど、一回で崩し切れる、とは限らない。そもそも大きすぎるからね。突破は出来ても崩壊しない、なんて可能性も十分にある』

〈それを三回。令呪を込みで考えても………メドゥーサは静かに首を振った。真っ向からの突破は不可能。それなら令呪のリソースは温存しておくべきだろう。〉

メドゥーサさんの宝具でギリギリとかそれ本当に唯の城壁ですか？ マシユの宝具か何かの間違いじゃありませんか？ 貴方。というか孔明、改めて言いますけどお前ホント余計な事をしおってからに………！ ホントゆるるさんからな。

「となると、やはり搦め手を取る事になるか………しかし搦め手、と言ってもな。斥候の類は幾らでも送ったが、誰も帰っては来なかった。内部侵入も相当に厳しいと思われる」

「やはり敵の本拠地、そう甘くはありませんか」

〈ネロはそう言うが、しかし………内部侵入、諜報、斥候。そう言った方向に関してはアサシンですら上回る程の優秀な人材が此方に居る。貴方は、その視線を自分の召喚したサーヴァントに向けた。〉

「デオン。君なら出来ないかな。」

「優秀な諜報役なら、ここに。」

スパイ？ デオン君ちゃんにとってはそんなもん日常の二文字。分かる？ この実力の高さ、誉れ高くないの？（惜しみない賞賛）ヨシ！ デオン君ちゃんに全部任せておけば安心！（ホモガキ）

「うむ？ そちらの……男、よな？ そ奴は斥候役として優秀なのか？」

「優秀どころではない。人類史に残る伝説のスパイだ。彼を潜入させることが出来ればきつと、何かしらの情報を持ってきてくれるに違いない……しかし。」

「……確かに、僕だったら侵入も難しくないだろうけど。問題は出来るか、だね」

「他ならぬデオンが、その策に異議を唱えたのだ。」

ええ……難しくないのに出来るか分からないってどういうことなの……

「どういう事ですか？ デオン様」

「……単純なサーヴァントとしての制限だ。マスターと離れての単独行動をして、僕の魔力が持つか。もし連合に潜入できても、間違いなく途中で魔力切れになる」

あつ。いや、それは……それは……っ！ 確かに、デオン君ちゃんには単独行動持ちでも無いし、魔力が長期間持つかなんて自明の理では？ やべえ私、ホモ君の事馬鹿呼ばわり出来ない位の鳥頭じゃないか（自虐）

「マスターや我々も付いて行けば……見つかりますね間違いなく」

「マスターがやられれば一気にサーヴァントが三騎脱落する事になる。余りにもリスクが高いと言わざるを得ない」

「ここは『良し、乗り込んでやるか！』とあつさりとと言える訳もない。自分を死に追いやる様な真似は、もう簡単には出来ない。自分一人で暴れていた頃とは訳が違う……いけるという確信があるのであれば命を投げ捨てるのもやぶさかでは無いが。」

ほんへの藤丸君も、別に自分の命を投げ捨てるような無茶ばかりし

てた訳じゃないですし。まあ『絶対に仲間は見捨てねえええ!』的な無茶は幾らでもボンボコしてた記憶はありますけど。それはつまりホモ君は対照的な無茶をするべきという振りの可能性が……?」

「せめて、僕一人でも長時間活動できるようになればね……」

「この作戦も無理。会議は振出しに戻ってしま……そう思った時だった。声を上げたのは全員が予想だにしない人物だった。」

『ん? おや、何だいロマニ? え、ジャンヌ・オルタから?』

おおつと、ここで意外な人から発言が。こういうのは何方かと言えばレオニダス王や、藤丸君のビツクリマジック発言とかが主流な気が。ここの邪ンヌはどうやら結構案頭脳派……? それとも、ワトソン君的な何か奇跡的なヒラメキがあったとか?

『ふむ? ほう……うん、なるほど! その手があったか。根本的な解決にはなつて居ないかもしれないが、長期間の活動は出来るかもしれない! 本造院君、喜べ。君の案の問題を解決する方法が出た。令呪を使うんだ』

「……令呪?」

「俺のこの右手のつてそんな大した事出来たっけ?」

え、カルデアの令呪なんてそんな大した出来ないでしょ(回答) そりゃあ本家本元の令呪なら士郎君がセイバーにくっころ姫騎士プレイも出来る位のチート能力ですけど、カルデアの令呪なんてプルプル真拳みたいなもんでしょ(最大dis)

『いや、大したことは出来ないよ? ただ魔力を装填することは出来る。宝具を使えるだけの膨大な魔力を装填しておけば、そう簡単にはガス欠にはならないだろう……とのジャンヌ・オルタ君の提案だ』

「……成程、それなら長期間の活動も、難しくない気がする」  
『試算だが、デオンのステータスを考えれば、最悪でも一週間は活動できる。連合首都へ行って帰って来るくらいなら難しくもないとおもう』

物凄い賢い提案だった!? そ、そりゃあそうですよね。令呪で装填した魔力って別に宝具発動の為だけに使う決まりがある訳でも無いです。宝具発動にかかる魔力って一律で結構ですし……れーじゅ

でまりよくそうてんしてほうぐぶっぱじゃ！ 位に脳死していた俺をぶん殴って欲しい（ドM）

『いやあ、まさか令呪をこんな雑に使うとは……思いつかなかった！ 特殊な出自故、令呪の重要性を知らないサーヴァント初心者だったからこそこのアイデアだ。お見事、ジャンヌ・オルタ』

〈コレでデオンの諜報活動の枷は外れたも同然。となれば……

「ふむ。良く分からぬが、実現可能である、という事は分かった。後は……そ奴の技量、信頼してよいのだな？」

『当然。潜入にかけては、カルデア一番の猛者と太鼓判を押すよ』

「良し！ できれば皇帝として其方達に命じよう。先ずは連合より、あの長城を打開する為の一手を探りだして来るのだ！ 全てはお主らに任せる！ 吉報を持ち帰る事を期待しているぞ？」

よーしじゃあ……デオン君ちゃんオナシヤス！

〈デオンに諜報をお願いする。（コスト：令呪一画）

「ああ、必ずや、マスターの期待に応えようじゃないか！」

〈ネロ帝の元より、史上最高のスパイが動き出す。連合ローマ帝国攻略、その第一歩が踏み出されたのだ。

予想だにしないオルタちゃん大活躍。實力でも頭脳面でも活躍するとかさては一流サーヴァントだなオメー？

と言った所で今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。



## ローマ守護チーム その三

皆さんこんにちは、ノンケ(姉)です。一言から溢れる脅威臭よ……前回はローマの長城をぶち壊す為の策を練り……まさかの令呪の使い方が発覚しました。曰く、邪ンヌがサーヴァント初心者だったために出た意見だったそうで。藤丸君ももつとニュービー的な回答してホラホラ。

〈かくてスーパースパイ、シユヴァリエ・デオンは旅立つ事と相成った……と、ここで会議は終わるはずだったのだが、ここでとある提案がダ・ヴィンチから出た。

『どうせコレだけリソースを豪快に使うんだから、更に大盤振る舞いと行かないかい?』

「む? どういう事だ、魔術師よ」

『ふふん。言つたろう? 我らには一騎当千のサーヴァントが付いている。その力は、天にすら及ぶのだよ』

〈その視線が向いたのは……会議に一切口を出さずとても静かに佇んでいたメドゥーサ。

天にまで力が届く……メドゥーサさん……あ、成程ですね(瞬間理解)

「……あの、なんででしょうか」

『本造院君ならわかるんじゃないかい? 私のやりたい事、君はもうオルレアンで似たような事をやってたからね』

〈そう言われ……少しばかり思考すれば、容易にその答えに辿り着くことが出来た。その記憶はある意味、鮮烈に貴方の頭脳に焼き付いている。メドゥーサの大活躍と共に。

〈成程! メドゥーサさんに運んで貰うのか!

〈成程! 俺がメドゥーサさんと一緒に囿を!

違う違う違うそうじゃ、そうじゃない(緊急停止) というか余計な所を思い出してはいけない(戒め) 選択肢は当然上なんだよなあ……毎度毎度素っ頓狂な選択肢を入れないで欲しいのはワガママでしようか(疑問)

『そう、メドゥーサのペガサスなら彼を素早く連合の首都まで運べる。より長く調べる事も出来るんじゃないかな』

〈長く調べる事が出来るなら、その分有用な情報は増えるかもしれない。コレは良案だ。後はメドゥーサが承知してくれるのだが。〉

◇メドゥーサ、頼めるかな？

◇貴女が嫌じゃなければけれど。

無理に言う事を聞かせるのはマスターの屑だからね、ちゃんとお願  
いしないといけません。プリーズ（インテグラ並感） それは威圧し  
てるだろ！ ちゃんとヨツンヴァインになつてお願いをするんだよ  
！

「分かりました。とはいえ余り乗り心地は保証できませんが、それでも構わないのであればですが」

「文句なんてないよ。私が運んで貰う側だからね」

◇方針は決まった。藤丸達が戻り次第デオンを乗せてメドゥーサは  
出発。出来得る限りの情報をかき集めたらすぐさまローマに取つて  
返す、という事になった。作戦の内容を確認した後、思わず、といつ  
た様子でネロが溜息を一つつく。

「うむむ……何という贅沢な策であろうなあ。天馬の力を借り、凄ま  
じい実力者を斥候として送るとは」

そう考えてみれば、サーヴァントを態々使つて情報収集だけするつ  
ていうのは確かに贅沢とか言う問題を遥かに超えている気がします。  
でもええやん、気に入ったわ。こういう豪快に過ぎる策略狂おしいほ  
ど好き。七章も好き。

「うむ！ こんな一手が打てるとは、正に余のローマには追い風が吹  
いている！ この調子でガリア遠征も勝利！ 勝利！ 勝利！ で  
あるー！」

◇粉碎！ 玉砕！ 大喝采！

◇勝利し続ければ、安泰じゃ。

お前は何処の社長だよ、何処の桃太郎卿なんだよ！（半ギレ） いや  
いよもって選択肢君がプレイヤーに牙を剥いてきましたけど……こん  
なチンピラ顔が卿を名乗ったら殺されそうなので上だよ（自明の

理)

「……そう上手く行くとは決まっていけないのですが」

「まあまあ、良いではないですか。お二人共、楽しそうですし。今のこの空気に水を差すのは無粋、というものですよ」

「その心配を杞憂に終わらせる為、マスターの期待に応える為にも、頑張るよ」

▽楽しそうなネロと貴方を見つめ、微妙な表情のメドゥーサ、微笑む香子、苦笑いのデオン。この何とも奇妙な空間は、そろそろで解散でも良いんじゃないか、というダ・ヴィンチの言葉がかかるまで続いた。

普通に楽しそうだと思った (KONAMI) 失敗の可能性ばかりを考えてたら上手く行くものも上手く行かないからね、成功しか見ないのも多少は……良くないと思うんですけど(うわあ! 急に冷静になるな!)

▽——解散後。暫くは自由行動と言われた。と言っても何処へ行ったものか……と思ったので、貴方は通りがかりの兵士に尋ねてみた。物凄い怯えた様子でその兵士とはある三つの候補を示してくれた。

▽< 練兵場に行ってみる。

▽< 書庫に行ってみる。

▽< 適当に散歩してみる。

おっとここで行動選択肢、三か所も示してくれちゃってえ、そんなに探索して欲しいのかよ?(挑発) いいぜ、お前がそんなにこのローマ帝国を探索して欲しいというなら、まずは (ry

まあ全人類の基本はパルプンテだと伝説の勇者『ああああ』も言っているのです、ここはパルプンテ……ならぬ完全ランダムな散歩でOK 牧場 (死語)

▽城内を適当にぶらつくことにした。何が起きても臨機応変に対応できる……というのは建前、本当は考えるのが面倒くさくなくなっただけだった。

ホモ君が建前を覚えている……! (感涙) まるでサルが道具の使い方を覚えた時の様な感動に近いものがありますねコレは……いや

待つてください、そういう言い方をするのはサルに失礼ではないかと  
(分析)

＜そうして歩いて行つた先、貴方の眼に入ったのは……香子、とローマ軍の兵士らしき二人組だった。声でもかけようと近寄つた貴方は、香子が少し困つた様子である事に気が付いた。

「お願いします！ 我々、美しいご婦人を連れてくるように頼まれて  
いるのですよ！」

「この哀れな兵士二人を助けると思つて、なにとぞ！」

「あ、あの！ えつと、それは……！」

なんか香子さんがナンパされてるんですがそれは。イタリア人というのは情熱的と言われてますけど、この時代からの話だったのかたまげたなあ……

「お願いします！ 居てくれるだけでも構わないので！ 座つて  
だけで良いので！」

「貴方の様な華は、いらつしやるだけでも我らの士気は高まるので  
！ なにとぞ！」

「はわわわわわ!!」

＜スゴイ勢いで誘われている。その勢いに圧されているのか、香子  
は言葉を返す事も満足に出来ないようだ。これは、どうしたもの  
か。

＜＜(比較的穏便に) 助ける。

＜＜(物理的に) 助ける。

容赦なんて要らねえんだよ！ (リミッター解除) 香子さんみたい  
なお淑やかな女の人を囲んで連れていくとか実際犯罪行為、ローマ兵  
死すべし慈悲は無い。イヤー！ イヤー！ イヤー！

＜流石に放つておくわけにもいかない。何時もは出来るだけ怖く見  
えないようにおどけた口調で振舞つているのだが、こういう場合はそ  
れをする必要も無いだろう……と、脳髓から溢れる熱に任せ、歩き出  
した。

＜＜おい、アンタら。それくらいにしておいて貰えねえか。

＜＜他人の連れに手えだすたあ、随分騷がなつちやいねえなあ。

完全にチンピラになってませんかホモ君!? というかその見かけでそのセリフは完全にその筋の人にしか見えない……見えなくない? とはいえ似合いそうなセリフを選ぶのはプレイヤーの心得ですし(選択肢下)

「マスター……ひゅいつ!?!」

「え? ご婦人のお連れ……おひいつ!?!」

「お前どうした……ぬおっ!?!」

〈何時も普通に歩いているのを、ちよつとだらしなく、ガラが悪い感じで歩くだけでこれである。何時も『お前は人一倍礼儀正しく振舞わないと危ない』と言われていたのは伊達では無いのだ。

「え、ええええええと……ご婦人! 我々はこれで!」

「申し訳ありませんでしたお止めしてしまつて失礼しまーす!」

一発で退散してて草不可避。ホモ君つてタツパもあつて割とガツチリしてるから、その怖い顔と合わさつてちよつと……コレは間違いなく極道の鉄砲玉言われても言い訳不可能ですわ。

「え、えつと、マスター? あの……」

〈香子さん大丈夫だった?〉

〈いやー、上手くいって良かった。

一発で戻つてて草あ! お前マジで張りぼてじゃねえかあ!

「……マスター?」

〈香子が怪訝な表情で此方を見ている。少しばかり怖かったのは間違いないだろうが、そんな顔で見なくても良いじゃないかと思つたが……しかし香子が無事に助けられたのだから良いだろう。

「えつと……あ、いえ。なんでもありません。ありがとうございます……」

そりやあ秒速であんだけ豹変したらビックリするのも多少はね?

次回は香子さんとの行動回になるかもしれませんが……次回は特別編になります。た所で今回はここまですりませんが……次回は特別編になります。ルールでのジークさんとの戦闘シーンがあまりにも勿体ないので、ちよつとした編集版として次回、公開しようと思えます(先行入力)嘲笑するご準備をなさつていただければ幸いです。ご視聴、ありがと

じいちゃんもした。

## 作戦開始 その一

皆さんこんにちは。ノンケ（新星バスターゴリラ）です。最近悟ったんですけど、サーヴァント縛りでやっていると数足りない……足りないくない？

前は、香子さんがナンパされました。アアン!? なにしてる訳？

コレは許されぬものですわ……という事で怒りのヤクザムーヴかましてやりました。やったぜ（大勝利） これは執行対象ですねえ……（PHYCOPASS並感）

〓——立香達が玉座の間へ帰ってきたのは、デオン、メドゥーサの連合ローマへのスパイ作戦を決定したその翌日。無事に召喚サークルを設置した、という報告があつた、その半日程後の事だつた。

「マスター藤丸。及びそのサーヴァントのマッシュ・キリエライトとジャンヌ・オルタナティブ、そしてレオニダス。無事帰還しました。ネロ陛下」

「うむ！ 良くぞ戻つた！」

藤丸君ご帰還です。こっちが状況を一步前進させたように見えるでしょう？ 実はキツチリと補給の供給を行つた藤丸君の方が普通に活躍してるんですよ。戦は戦う前に勝負が決まる、補給はその第一歩つてそれ一。

「凄かつたぞ、火山に沢山のゴーストが居て……でも。それだけの数のゴーストが居るって事はヤバい霊地なんだってさ！ 確保して正解だつたつて！」

『これで、ここでの活動は万全になったと言えるよ。ただ、活動が万全になつても課題は残っているみたいだね。デオン卿とメドゥーサさんの活躍に期待、なのかな？』

活躍して貰わないとこっちも普通に全滅するとかいうか。戦争は下準備の段階からもう始まつてる！（功名戦ガキ）あのクソツたれの三重長城を崩壊させる為にも、まずは情報戦から制して行くんだよ上等だろ。

『とはいえ、潜入しているデオン卿とは通信も出来ないし』

「寧ろ、直接的な援護は僕が間者だと特定される要因になるから」  
『直接的な一手は避けるべきだろう。だからまず僕らがやるべきは……そつちが出来ただけ敵地で動きやすい様にする為の間接的支援、陽動だろうね』

〈問題は、その陽動をどうやって行うかだが。その為の絶好の機会は、もう既に目の前に来て居る。

「——ガリア遠征の、その理由が増えた形になるな」

「それはガリアでの戦いに目を向けさせて、デオンさんから目を逸らさせる、という事でしょうか、ネロ陛下」

「うむ。元からガリアでの勝利は華々しく各方面へ喧伝するつもりではあった。その報がより派手に、かつ豪快な物になれば、我らに味方する者も増えるかもしれん。一石二鳥であるな！」

男は黙って足し算だけ覚えておく、コレ常識。どんな事も押して押してただ只管に押し続けて解決するんだよ。とりあえず戦果を全部足し算しろよこの野郎 ああ!? あくしろよ! (功名餓鬼)

「……ガリアでの戦いに目を向けさせる、と言っても、どうすれば良いのでしょうか」

「マシユ殿、難しく考える必要はありません! 要するに、我々がガリアで戦っているというのが相手に伝わればいい! ならば我々のやる事は変わらず、全力でガリアの戦線にて暴れまわる事!」

「はっ! いいじゃない。そういう分かりやすいの、好みよ?」

私は邪ンヌのそういう歪んだ笑顔が凄いい好きですよ本当に。こういう時、本当に良い笑顔しますよね。全てに対して反逆するっていう意思が明確に見て取れます。私は負けない (反逆の狼煙)

「よし、方針は固まったな。藤丸達の小休止の後、ガリア遠征、及び連合ローマ首都への間諜作戦を開始する事としよう。暫くしたら伝令を寄こす故、それまで支度を整えて待つが良い」

〈——ならば、その間に此方でも動きを詰めるべきだろう。玉座の間から退室した後、貴方達は、立香達の小休止と作戦会議を兼ね、立香の私室に集まっていた。

「重要なのは、どの情報を優先的に狙うか、だね」



「デオンさんが潜入できる時間は限られていますからね」

「最優先は、取り敢えず長城に付いてだとは思う。問題は、その次だ。もし長城についての情報を獲得するのが難しいと判断した場合、その代わり、次善の一手が必要だろう」

二の矢は実際大事、リングゴの狩人もそう言ってる。外しちまったら？ ああ……その時もまた、腕の見せ所だ（狩人並感）

「候補は？」

「その裏切り者、とやらの情報じゃない？ ソイツを見つけ出して炙り出すつてのは案外楽しそうな気がするし……ええ、実に」

「連合ローマを統べる頂点！ 相手の行動を推測する為にその辺りの情報も必要かと！」

『各地の戦力状況というのも役立つ気はするけど』

〈意見は幾つか出たが……それを二つに絞ったのは、立香のとある意見だった。〉

「やっぱり、敵の懐で一番探りやすい情報が良いと思う。情報が取れなかった時は、多分作戦が失敗して危ない時だろうし、簡単に奪えて、相当に重要な……やっぱり人名とかが良いんじゃないかな」

藤丸君の知能が光る光る（ご満悦） ホモ君が完全に脳筋だからね、相方が知能派じゃないとどうしようもないね。あ、ホモ君についてはもう諦めました。だって変に中途半端に頭良くなっても役に立たないし……

〈レフ・ライノールについて。〉

〈連合ローマの首魁について。〉

さて、と言った所で選択肢のお時間ですが……下についてはネロちやま自身で乗り越える事だと思うので（試練の時）やっぱり上だよ。ね。

「——了解した。レフ・ライノールに付いて。この特異点に居るかどうかだけでも必ず探りだして来るよ」

『よろしくお願ひしたい。とはいえ、最優先は』

「長城に付いて、だね。分かっているさ。全力を賭して挑むとも」

必ず探し出してくれ（殺意の語録放棄） この殺意に意味など無い、

理由など無い。ただF G Oプレイヤーとしてプレイをし始めた時点で、レフをレ／フするのは運命であり宿命であり必然なんだよね、ハア（殺意の笑み）

「——と、もう時間が来たみたいだね」

〈そう言つて、デオンが立ち上がる。その視線は、部屋の入口に来ていた兵士に向けられていた。伝令の兵士だろう。

「では、僕らは先んじて出発させてもらおう……メドゥーサ」

「分かりました……あ、そう言えば。私はどのように合流すればいいのでしょうか。そのままあの子に跨つて、合流してしまつていいのでしょうか」

〈いや、万が一デオンの事がバレてもマズいから、徒歩で。

〈寧ろ空から降つてきてガリアの地を蹂躪してくれ。

スパイ行為が目立つたらマズいだルルオ!? ここは当然選択肢上だよ（即決）でもメドゥーサさんの空中強襲なら見てみたいかも（ドゴオ）

「了解しました。少し合流には時間がかかるとは思いますが……」

〈それなら、最悪先にローマに戻つても構わない。と貴方は告げる。万が一にも入れ違いになつてしまつたらそれこそ目も当てられない、と。

「いえ、それではマズいかと。それでは私の魔力が、恐らくもたない………思います。あの子を出した後なので、魔力の消費も、それなりですし」

「えっ、それってメドゥーサさんが消えるって事!? 大変だ! 令呪切るか!？」

『令呪はそんなポンポン切つて良い物じゃないから! 藤丸君はその辺り教育しないとね! マシユと一緒に!』

マシユちゃんが「先輩と一緒に勉強しそうです!」つて顔してるのと逆に藤丸君がこの世の終わりが来たみたいな表情してるのがクソワロタ。若干嬉しそうにしてる辺りマシユと一緒に勉強というのは嬉しいようですが、それ以上に勉強が嫌いなんでしょうね（類推）「……一応、時間を延ばす手も、無いでは無いですが……」

『おや、そんなウルトラCがあるとは……一体どんな手だい?』

〈若干、言い難そうな顔をした後……メドゥーサは口を開いた。』

「私は、一応吸血種です。それを生かせば、時間を延ばす事も出来る、  
かもしれないが……しかしながら」

『あーうん。成程……』

因みにコレの設定の所為か、血の代わりに……とかいう理由でメドゥーサさんは薄い本で引っ張りだこになって居ます。しかも型月の設定上それでも間違いないのがタチ悪いんだよなあ……

『それは……うーん』

「いえ、土台不可能だとは思うので言わなかったのですから。ですので、私はそちらに直接合流するのが一番宜しい、と思うのです」

〈吸血。血を吸う。サーヴァントから血を吸う意味があるとは思えないので当然、活き血という事になる。そういう事なら、と貴方は自分の腕をメドゥーサさんの前に差し出した。

えっ、ホモ君、ちよつと待ってください。これって、もしかして、もしかするかもしれないよ（嫌な予感）

「……なんです?」

〈さあ、僕の血を吸いなよ!」

〈さあ、僕の血をお食べよメドゥーサさん!」

言ったアアアアア!? メドゥーサさんの結構柔らかい部分を思いつきりジューシーな肉で殴りつけて言ったあああああ!?

と、行った所で今回はここまでです。ご視聴、ありがとうございますました。

## 作戦開始 その二

皆さんこんにちは、ノンケ（イバラギン）です。

前回は、メドゥーサさんの帰還にまさかの暗雲立ち込める事態に。デオン君ちゃんの時に起きた問題がもう一度起きるといふ事態。じゃあどうすればいいんですか!? 僕の血をお飲みよ！（気さくな提案） お前頭おかしいよ……!」

〽さあ、僕の血を吸いなよ!

〽さあ、僕の血をお食べよメドゥーサさん!

取り敢えずどっちか選ばねば進みませんし……取り合えず私は下を選ぶほど勇氣百倍ではないので当然選択肢は上を選ばせていただきます。

「……えっと、マスター? 正気でも失いましたか?」

〽あまりに酷いお言葉だ、と貴方は若干涙目になった。別に何かおかしなことを言っているだろうか、と頭を回していると戸惑ったような声でロマニが声をかけて来た。

『あ、あの本造院君? メドゥーサさんの言う通りだと思うけど……』

「お前なあ……メドゥーサさんが気を遣ってくれてるのに、それをぶち壊しにするみたいなあ! もうちよつと何とかならなかったのかお前!」

まさに藤丸君の言う通り。『まあ、別に吸って回復も出来ない事は無いけど……色々とマズいですよね』っていう大人の対応見せて下さったっていうのにこの脳筋ホモ野郎はホンマ。

「フジマル、その様にあけすけに言うのも、その……気恥ずかしいのですが」

「あ、はい、すいません……」

そういう藤丸君もデリカシーが全く足りてねえ……デリカシー不足しか居ねえじゃねえかお前んちい!

「まあ、ともあれフジマルの言う通りではありません。一応、私なりに気を遣ってみたのですが。それを豪快にスルーして血を吸え、と言われましても……」

「遠慮することは無い、と貴方は言う。自分の血の一匙や二匙くらい、飲まれても問題は無い、寧ろ今まで誰も彼も無償で自分達を助けてくれたのだから、対価を払えるのに安心すらする。」

「……私が可笑しいのですか？ マスターが可笑しいのですか？」  
「此奴昔つから変に義理堅い所あるし……多分此奴が可笑しいんだと思います」

「一匙も飲まれたら死ぬう！（ド直球） 此奴ホントに元現代人か不思議になりますね間違いない……どうしてDLCの一つを入れただけでこんな覚悟ガンギマリ主人公が出来るのか。誰か教えてくれ、ゼ口は何も答えてくれない……（ヒイ口風）」

「あの、マスター。吸わなくても大丈夫、という方に無理矢理吸わせるのは……」

「そんな無理をさせなくても、ガリアの地に合流すれば良いと私は思うよ？」

「確かに合流するならローマの方が良い。万が一ガリアに到着した時に自分達が帰って居たら、それこそメドゥーサの魔力が持つか分からない。ならば安全策を取るが良いのではないか、と貴方は言うが……」

「えつと……」

「それにしても、という事なのですよ」

「アンタ明らかにどっかのネジ外れてるわよ。マスター、アンタもこんなんだとしたら即刻治しなさい。気持ち悪くて仕方ないわ」

散々な言われようで草。ホモ君の言っている事にも一理ない訳じゃないんですけど、人の氣遣いをぶち壊すそのゴリ押し姿勢とオーブンに『良いよ！ 来いよ！ 血を吸いに来て吸いに！』と言ってくる頭おかしい（貶し言葉）な心意気が全部台無しにしてると思うんですけど（名推理）

「——一つ、聞かせてください」

「皆が困惑する中、メドゥーサが貴方の瞳を見つめ、口を開く。」

「貴方は、その様に誰にでも、自らの身を削って分け与えるのですか？ 自らを守る事すら放棄した愚か者なのですか？ そうだとすれば、

少しばかり……」

「そうではない、とメドゥーサの言葉を遮って貴方は言う。自分はメドゥーサを召喚したマスターだ。であればその程度のリスクも負わず、メドゥーサを使役しようなど、寧ろそちらの方が余りにも甘い考えではないか、と。」

契約には対価が必要なのはハガレンからの伝統。とはいえ血を吸われる事をその程度呼ばわりは流石に……なんだってテメエはメンタルに関して根性しかねえんだ（罵倒） もうちよつと柔らかくなるんだよ！

「……そうですか。気が狂った訳では無く、クレバーなのですね。あの島で石化した彼らと比べるのは、失礼でしたか」

「何か懐かしむ様に視線を空中に向けてから、メドゥーサは改めて貴方に向き直った。」

「一応確認しますが、それなりには吸いますよ。構いませんか？」

「良いぜ、何処までもクレイジーに受け止めてやんよ！」

「まあ、あくまで死なない位で。程々に飲んでくれれば嬉しいかな、なんて。」

下選択肢が狂気を帯びていない……だと!?（ITG） 下選択肢君がデレてくれたようなのでここは素直に下を選んでおきましょうね  
（笑顔）

「ええ。あくまで程々に。作戦遂行の為に、ですものね」

『え、えつとね。メドゥーサさん。本造院君は悪気があったわけじゃないわ』

「分かっていますから。心配せずとも大丈夫ですよ、ササツと飲みますから」

「彼女の眼の前に堂々と掲げたその腕にメドゥーサがゆっくりと近づき、口を付ける。僅かに間を置いてから、注射が刺さった僅かな痛みが走り、吸われているような感覚が走り始める。」

「……ふむ、タイプでは無いのですが。この味は……中々ですね」

「わあ……マジで吸ってる……美味しいのかなマシユ」

「え、えつと、どうなんでしょうか」

普通だったなら『え!? 血い吸うとかこつわ!』とかなくてもおかしくないと言うのにこの藤丸君である。お前はお前で肝が据わり過ぎてるからね? 自覚しよ?」

「——ふむ、ご馳走様でした」

〈暫くしてから、メドゥーサが腕から口を離す。終わってみれば、なんともあつさりしたもので。特に頭がふらつくとか、体調に異常が出るだとか、そういう事も無い。

『え、ええつと。一応バイタルのチェックを……あ、大丈夫だねうん』  
「手加減しましたので。ですがコレで、マスター達が此方に戻って来るまでならギリギリで持つかと。お気遣い、感謝します」

ええんやで (寛容)

『じゃあこれで、憂いは無くなった……と考えても?』

「ええ。後は先の話し合いの通り、連合首都方面にデオンを送るだけです。対価を頂きましたので、仕事はキツチリとしますよ。では行きましょうか」

「あ、ああ……良いんだろうか。いや、任務遂行のためだし、うん」  
〈そう言つて、メドゥーサが髪を翻し先に歩き始める。その後にくデオン。見送りの為に、貴方達もその後が続く。何故か、終始ジャンヌ・オルタから信じられないモノを見る目で見られていたのが気になつて居た。

何故かも何も当然では? (辛辣) 他人の気遣いをぶち壊す、血を吸われるのに賛同する、そして終わってもなんて事の無い様に振舞う。俺なんかやつちやいました? じゃ済まないすつげえ暴拳だろほらあ! (責め苦)

とか言つてる間にお外に付きました。ネロちやまがお待ちですね。

「遅いぞ! 全く、ペガサスが見られると思つて楽しみ……じゃなくて! 作戦の遂行が遅れれば我がローマに取つて痛手となるのだ!」

上の口は正直だぜ? (一般論)

『遅れて申し訳ありません。少し、準備があつたもので』

「ふむ、準備か。流星に古の天馬を呼び出すにはそれなりの儀式でも必要であつたか」

「〜そういう訳ではないのだが……等と思いつながらネロを見つめている間に、メドゥーサがネロの前……宮殿前の広場に進み出る。周りに人はおらず、どうやら人払いをされているらしい。」

「一応、気を遣ったつもりではある。人目を気にせず、存分に呼び出すが良い」

「……はあ。ありがとうございますっ〜」

存分に呼び出すって、ペガサス量産するみたいですよ、関係ないですけど。それは兎も角。

「では……」

「〜メドゥーサが虚空に手を伸ばし……そこに開かれる魔法陣。文様の輝きが最高潮に達した時……その中心より、白い羽が羽ばたく。蹄が、石畳を打つ。真つ白なその体躯が、堂々と姿を現した。」

「お、おおおおおおお！ ほ、本当にペガサスではないかあ！

美しい！ 凄い！ 欲しいぞ！ 乗りたい！」

「渡しません。さ、デオン。乗りなさい」

「ああ、分かった……本当にきれいだな。乗りたいという気持ちは、分かる気がする」

ネロちやま大興奮で草不可避。めっちゃフンスフンスしてる。カワイイ！ とはいえペガサスが一番似合うのはメドゥーサさんだと思います（揺らがぬ意思）

「〜じゃあ、マスター！ 吉報を期待していてくれ！」

「捕まっついてください。少し飛ばします」

「〜ペガサスがその羽を広げ、風を巻き起こし……瞬きほどの後に、既に空の彼方へと飛び立っていた。ネロは余りにも興奮しすぎて、まるで童女の様になって……暫くしてからそれ気が付き、一つ、咳払いをした。」

「う、うむ。さながら神話の如き光景であったな！ あんなものを見たのだから興奮しても仕方ない！ 加護でも宿りそうな光景であった！」

「いや、何も言っけません陛下」

「うむ！ 実際加護位宿ってるな！ その加護が続くうちに！ ガリ



アへ向けて出発である！ 出来るだけ急いで！」

めっちや誤魔化してて草。まあ、とはいえガリア遠征は必要な事なので、だあれも文句は言えないねえ？（悪党並感）ネロちやまのはしやぎっぷりは脳内保存しつつ、気を引き締めてかかるとしましょうか。

と言った所で、今回はここまで。ご視聴、あちがとうございました。

## 女王と筋肉 その一

皆さんこんにちは、ノンケ（同人の魔女）です。

前回は……メドウーサさん「覚悟は出来てるか？」 ホモ君「俺は出来てる」 大体こんな感じ。型月主人公なんて覚悟決まってるなんぼって所ありますし、それが悪い事とは言いませんが、だからと言ってあんまりキマリ過ぎても唯の某オサレ漫画の薙刀ハゲみたいになるだけなのでもうちよつと一般人らしくして？

〳〵メドウーサ、デオン出発の後に貴方達はネロと共に出陣。ネロの号令により歩みを進めたローマの軍勢は、劣勢など感じさせない程に氣勢を上げ、目的地であるガリア遠征軍、本陣に辿り着いてた。

「……凄い規模ですね」

「余の軍勢の半分以上をここに割いている。ここで勝利するのは、ガリアという要地を手に入れると同時に、連合首都侵攻での敗北から続く悪い流れを断ち切る意味もある。絶対に手を抜くわけにはいかぬ。お主らカルデアの戦力も当てにさせて貰おう」

ガリアと名の付く場所は大抵要所って、某異世界召喚の走り、ピンク髪ツンデレ使い魔になったら伝説になった件、でも言われてますし。え？ タイトルが全然違う？ なんのこったよ（すつとぼけ）

「……つたく、漸く来たか皇帝陛下。遅いよ」

「おお済まぬ！ その分、強力な味方を連れてきた故、許すが良い」  
「強力な味方って……そこに立っている子達の事だよね。確か連絡にあった」

〳〵本陣に到着し、最初に出迎えたのは……緋色の髪の女性だった。翠の瞳は力強い輝きを宿し、皇帝であるネロに対しても、全く退かない。それだけで、一兵卒ではないことが伺える。

第一再臨じゃないやん?! 第一再臨のブーディカさんを見たかったからこのゲームやってたの！ 親方に……あ、すいません冗談です。別にそこまで拘りないです。なんならこの第二再臨が一番好きです（大胆な告白）

「うむ！　ここに居るのはどれもこれも一流の戦士ばかり！　万の軍勢に匹敵する援軍だぞ！　褒めるが良い！」

「ふーん。まあ期待させて……一人だけ凄い顔の子がいるけど」

ブーデイカさんにまで弄られるのか……（困惑）

「えっ？　大丈夫、この子。闇とか背負ってるみたいなの顔してるけど」「ん？　いやそこまで恐ろしい顔しておるか？」

「かー、コレだからネロ公は……あのね。普通に過ごしてたらね、ここまで迫力の有る形相になる訳ないじゃないの。絶対なんか、酷い目にあつてああいう覚悟の出来た顔をね」

「そんな言われるような経験も何も無いのだが。心配されているのは分かるのだが、しかしながら顔について言われるのは色々……悲しくなってくる。宿命と考えてもう割り切るしかない気がした。」

「つたく、確かに頼りになるかもしれないけど、それはね、危うい橋を渡ったりして出来たもんで、頼りにしちやあいけないんだよ、本人の為にも」

「うぬー、そうなのか実際？」

「全く身に覚えがない。悲しさと申し訳なさが同居し、もう限界になって崩れ落ちた。何をどういえば良いのだろうか。視界の端で、ジャンヌ・オルタが心底愉快そうに笑っているのが見えた。殴りたくなつた。」

闇背負ってるまで言われてホモ君がガチ泣きしております。滂沱の涙を流しております。再確認しますが、本造院君はあくまで普通の家庭で生まれ、御母堂から叱られてボッコボコにされている普通の男の子なんです本当に。信じてあげて……

「……ホラー！　やっぱり泣いてるじゃないの！」

「やっぱり闇を背負っておるのか!?　よ、余の配慮が足りなかったか!?!」

「えっと……大丈夫です。特に闇とかは背負ってません。悲惨な事とか無いですから大丈夫です、幼馴染の俺が保証しますよ」

藤丸君ナイスウ……！（本音） ナイスウ……！（二重の本音） 頼むからホモ君の悲しい過去説を保証して上げて……！　あつ、間違え

た（仮面のはがれる音） 払拭して上げて……！

「ええっと、その顔は……えっと、生まれつきで」

「えっと言う顔をされた。両親と全く似てないのは自覚していたが、それが赤子の頃からだったというのも笑い話でされて、自分もゲラゲラと笑っていたのを思い出した。過去の自分、今はその顔で余りにも悲しい思いをしてる、覚悟しておけと思ってしまった。

「まあ、その顔の所為で色々弄られたり、誤解される事も多いですけど……悪い目には有って来てませんから。友人も、多いですし。はい。此奴は大丈夫ですよ」

「あー、そう、なんだ……ごめん、その、変に誤解してたみたいで……」

「うむ。正直何となく余は気が付いてた。その上で楽しんでしまった」

「<< 気にしないでください……」

「<< 男は涙を見せぬもの」

ホモ君も泣いてるんですよ！（矛盾精神） そういう事は止めてあげて！ この顔のネタは多分第七特異点まで擦られるだろうなと思ってしまうですねえこんな調子だと。そろそろ顔整形した方が良いためである。医神殿に頼む？

「< 大丈夫だ、問題ない。と全力で自分に言い聞かせて立ち上がると、代わって目の前の女性が自分に向けて頭を下げた。」

「——本当にゴメン。変な心配しちゃって」

「うむ。その詫びに、この大戦が終わり次第にでもお主を我がローマ帝国に正式に仕官させようではないか。余の太鼓判を添えてな？」

『あのー……我が家の人材の引き抜きはおやめください陛下。大切な仲間なので』

隙あらば自軍強化しようとする皇帝の鑑、ちなみに皇帝陛下に仕官して戦うルートもあるぜ！ BADEND確定だけどな！（一敗）

「ぬ、ならば姿見えぬ魔術師。お主が我が王宮に務めるか？ お主ら、丸ごとカルデアを手中に収めるのもやぶさかではないぞ？ そこな

小動物は……余自らが可愛がつてやつても良いぞ？」

「フオツ!？」

『いやあ、光栄な事ではあるんですが……王宮勤めなんて、今更どの面を下げて、という話で、あははははは……』

＜ロマニは現代に生きる人間なのに、まるで王宮に務めたかのような言い方。この咄嗟の会話への合わせ方、なんという詐欺師。余りにも自然体過ぎて、事実を知らなければ疑う事すらしないだろう。貴方は戦慄した。ロマニの口の上手さに。

嘘ではないんだよなあ……（号泣）でも今はこんな最序盤ですから言えませんねえ！

「ぬ？ どこぞの国で失態でもしたか？ これほどの人材を失態一つで手放すとは何とも愚かな国主な事だ……安心するが良い！ 余は寛大だ、何を抱えて居ようと、見事働きで示せば気にも留めぬ」

『ええと謹んで辞退申し上げます皇帝陛下……それより、彼女は？』

＜なぜか貴方の顔弄りの流れになつて居たが、そもそも目の前の女性の事すらマトモに紹介されていないという可笑しい状況に、漸くロマニが待ったをかけた。それを受けて一瞬きよとんとした表情を浮かべた女性は、はつ、とその事に気が付いたようだった。

「ごめんごめん！ そう言えば自己紹介もまだだったね！ 私はブーディカ。このローマ軍で、まあ……將軍をやつてるんだ。宜しく」

＜そう言つて差し出して来た手を、貴方は握り返した。続いて立香、マシユと、カルデアのメンバーと順に気さくに挨拶を交わしていく。因みにジャンヌ・オルタは挨拶を返さなかった。

という事でこのセプテムのキーパーソンの一人。ブーディカさんです。ネロちやまとは因縁というか、『お前ふざけんなよ……じゃあ死ぬ！（直球）』的な憎悪を抱いても仕方のない関係ですが、そんな血なまぐさい人では無く皆のママです（食い気味） ママです（強調）カルデアに来るとママが増えるからね、皆もカルデアに来ようね（喧伝）

「それで……えっと。あと一人將軍が居るんだけど」

「——おお、戦場に進み出た鬪志の者達よ。喜びたまえ、ここは無数の圧制者に満ちた地獄の一丁目！ 嵐の如き、比類なき圧制が集う悪逆の災害に今、立ち向かうなら。反逆者達よ、手を取つて立ち上がろう

ではないか！」

「そんな風に挨拶を交わす自分達の前に……もう一人。」

「こ、この力に満ちた頼もしすぎるお声は……！ 間違いありません。えー、反逆者の皆様、及び全国筋肉マスター、及びアツセイ！ されたい圧制者の皆様方、お待たせいたしました。トップクラスの筋肉のエントリーです！」

「その一人が、その逞しいのなんだけど。珍しいねえ、スパルタクスが誰かを見て喜ぶなんて……いや、正確に言えば、喜んで、それでも襲い掛からないなんて」

「お、襲い掛かる!? ですか!?!」

「大丈夫だよ。この距離でも襲い掛からなきゃ、コイツはね」

「逞しい。そんな言葉では生ぬるい。その男は正に……筋肉<sup>マッスル</sup>であった。力強さを具現化したような、太く、ナチュラルな肉の鎧に覆われた手足。にこやかな顔。余りにも印象に残るポイントしか存在しなかった。」

「……ど、ドクター、この人は……」

「ああ、間違いなく筋肉<sup>マッスル</sup>だ。間違えた。サーヴァントだ。反応からそう出てる。そうであって欲しい……」

ドクターが早口で大分やられているようですが気にせず行きましよう。という事で此方のお方が全世界の待ち望んだ反逆者、煮えたぎる闘魂、ミスター圧制者ぶつ殺すマン、スパルタクス、バーサーカーのエントリーだアアアアアア！

と言った所で今回はここまで。ご視聴ありがとうございました。

## 女王と筋肉 その二

皆さんこんにちは、ノンケ（くろまくろ）です。メカエリちゃんとかお前ホントそういう所やぞ。覚悟せいや。

前回は男性の皆様大好きサーヴァントのブーディカママ、男性の皆さま大歓喜のスパルタクス先生がご登場しました。特にスパルタクス先生はS I Nでファンが激増したと聞きます。お前らも、好きだろう？ 俺は大好きS A ☆

「親愛なる精悍なる反逆の勇士たちよ、その喉を剛と震わせ、この圧制無き自由なる青空にその名前を叫ぶ時だ」

〽——余りの迫力に、全員が度肝を抜かれていた。見た目もそうだが、言う言葉も何か重みというか、狂気というか、何かが全員を圧倒していた。しかしながら……貴方は確信していた。この人は心地よい好漢だろうと。

「え……何を言ってるのこイツ？」

「え？『仲良くなるためにも、先ずは自己紹介からお願いできるでしょうか』って言ってるじゃん。藤丸立香です、宜しく、スパルタクスさん！」

「レオニダスです！ 貴方の様な屈強な戦士と肩を並べて戦えるなら、心強い！」

〽本造院康友です。宜しく！

〽本造院康友だ。共に戦おう、友垣よ。

どうして理解できてるんですか（戦慄） 本来スパルタクスさんの言葉って、一見理性的カッケェ！ とか思ったら『圧制者みつけ、いっただつきまーす（殺意）』に全部結びつくので会話が成立しぬえ！

「若き反逆者、圧制者なれど反逆者、圧制者の血を引けど身心では反逆者、うむ！ 頼もしき援軍である！ 共に、圧制者を退けようではないか！」

「アンタ等何を聞いてんの!? おかしいんじゃないの!？」

「最も反逆の濃い香りを漂わせる君よ、その名を我が前に語ってくれたまえ」

「分かんないって言ってるでしょうが！ ていうか何？ 匂いって臭いって事？ 焼くわよ？ ガリガリに焼くわよ？」

最も反逆に近いって言う事でしょうか。まあ生きながらにしてルーラーに反逆してるようなもんだし、そりゃあ反応もしますか……（諦観）

「……す、凄い方ですね」

「フオーウ……」

『でも彼のクラスは、この万能の目を……以てしなくても分かるか。うん。間違いなく彼はバーサーカーだよ。予測しよう、狂化ランクはEXだ』

＜マシユは完全に圧倒されていた。フオーウ君も呆然とした。とはいえ悪い人ではないのだし、きつと分かってくれらるだろうと思っっている。狂化ランクも、そこまで高いものではないだろう、万能の目も、意外に曇っている時もあるのではと思ってしまう。』

ここに關してはさすダ・ヴィンチなんだよなあ（正解） この人は基本、言葉と同じように理性的に見えてずつと『（息の根を）止めたくなりますよなん、圧制者』っていう一種マシーンの思考に基づいているのでマジで普通に突拍子もなくマスターに反逆とかするっていう。『まあ、どんなサーヴァントであるとはいえ、この時代の……人理側に着いてくれるサーヴァントが居るっていうのは、とてもありがたいね』

「ん？ 圧制者かな？」

『イエー、イマセンヨー、圧制者イマセンヨー』

こんな感じです。何か圧制者の匂いを僅かにでも嗅ぎ付けると速攻で反応してくれるような特技を見せてくださいます。一遍、圧制者っぽくない為政者サーヴァントを集めて圧制者ポイント測定をして頂きたいと思う位です。

「まあ、こんなんだけど頼りになる男だからさ。心配しなくても大丈夫大丈夫」

「ええつと、見かけからしてとても頼りになると思う方だとは思いますが……」



「それはそつちもね。姿の見えない魔術師率いる組織は、ネロ公から物凄いいお気に入りだつていう……ねえ？」

「そう言つて、ブーディカが先程から黙り込んでいるネロに声をかけた……のだが、全く反応がない。何故か顔を顰めて、近くの木箱に手を付いていた。」

「……」

「ネロ陛下？」

「うむ。済まぬ、少々、頭痛がな……案内は任せる。兵士たちへの声かけは、後でやる故、収まったら……」

「あーはいはい。やつとくから、休んでおきな。無理しないでよ皇帝陛下」

「おおっと、ここでネロちやまがフェードアウト……あと、コレは気のせいかと思うのですがブーディカさんが、若干ですが態度が優しいというか。結構複雑な感情がいっぱい気持ちして（複雑な乙女心）二度とこの世界に居られないようにしてやる（一転攻勢）的な態度だつていうのに……」

「……ネロ陛下は、どうなされたのですか？」

「んー、ちよつとね。もう少し前まではあんまり酷くなかつただけど……その辺りも含めて、ちよつと話をしようかな……そつちの魔術師さんも、気になる事があるんでしょ」

「そう言つてブーディカはスパルタクスに一言二言言葉をかけてから、野営地の端にある天幕に向けて歩き出した。此方へ来いという事だろう。貴方と立香は互いに顔を見合わせ……その後に続いて歩き出す。」

やはり色々とカルデアがここに来るまでの流れが違う故なのか、人間関係にも変化がありますね。ブーディカさんとネロちやまとかもその例なのかな？　そういう変化ええぞ！　ええぞ！（欲しがり見所さん）

「天幕に入り、ブーディカは中に置かれていた適当な物の一つに腰を下ろし、貴方達にも適当な所に腰を下ろす様に促した。」

「——さて、そつちの魔術師さん。さつきこそそなんか言つてた

よね」

『……聞こえていらっしやいましたか。ブリテンの勝利の女王、ブー  
ディカさん』

「勝利の女王って……ちよつと大げさだよ。私、後の人達からそんな  
風に呼ばれてるんだ。なんか気恥ずかしいな」

「そう言つて顔を若干赤らめるブーディカ。貴方はその名前に特に  
聞き覚えは無かったのだが、そう言うという事は、この人も……」

『貴方のクラスは？』

「一応ライダー、つて事になつてるよ。死後にこんな英霊なんて呼ば  
れて、持ち上げられて、滅ぼすと誓つたローマに付くことになるなん  
て……思わなかつたかな」

「このちよつと照れとヤレヤレが混ざつた感じの顔本当に好き。本  
当になんでも『しようがないなあ……』つて言つて許してくれそうな  
顔してる。ん？ 今何でもするつて……本人が言つてないだらうい  
加減にしろ！」

「ブーディカ、さん……なんだろう、どつかで聞いた事がある様な  
……」

「ネロ公には詳しい？ そのの……えつと」

「藤丸立香、です。一応歴史の授業でネロ・クラウディウスについて  
は、必要だったので結構勉強は、しました」

「立香ね。おっけー。で、多分その時に聞いたんだと思うよ、私につい  
ては」

「ブーディカの視線が、立香の……正確には、立香の方から聞こえ  
たロマニの声の方向に向いた。それに促されるように、今度はロマニ  
が口を開いた。」

『彼女はネロ・クラウディウスがローマを治めていた時代の、ブリタニ  
アの女王なんだよね。そして……とある事情から、ローマに対し大々  
的な侵略を……その』

「気を使って貰つてゴメンね。うん、まあそんな感じで。ネロ公の事  
を教わつた時に私の事を教わつたんだと思うよ」

「因みにここでは結局最後まで出なかつたので捕捉すると、ブーディ

カさんはネロちやま率いるローマに、ガチでゴブリンスレイヤー味溢れる仕打ちを受けた事があります。そりゃあ恨んでも仕方ないんだよなあ……

「ふーん？ それなら、随分とここの派手な奴らには……抱えてるモノがあるのね」

「オルタさん……！」

「いいよ。実際そうではあったから……でも。でも今だけは、そういう恨みとかは、忘れる事にしてるんだよ。それこそ、神々に誓う感じだね」

＜ブルーデイカの視線が、天幕の天井に向かう。何かを、思い出すかの様に、遠い何処かを見つめていた。

「——さっきのネロ公、見たでしよ？」

「は、はい……アレはもしかして、偏頭痛ですか？ ネロの逸話の一つの」

「逸話かは微妙だけど、その偏頭痛だよ。アレはねえ。ちよつと前に、連合首都に勝負仕掛けた時から、酷くなつたんだよね」

因みにBADスキルみたいな扱いされてますけどFGOでは普通に超強力なスキルになってるんだよなあ……この偏頭痛。

「本当に、凄い敗戦振りで……いっぱい、ローマの兵隊が死んで。皆を逃がそうと、アイツは人一倍頑張つて、それでも……」

「……」

＜小説作家の想像力が悪い方向に働いたのか、誰よりも香子の顔色が悪い。貴方も、明らかにぼかした言い方をされているというのに、その声の重さである程度は想像できてしまう……その敗戦の凄惨さを。

「余の所為だ、つて。敗戦直後はそれしか言つて無かつたかなあ……」

『だから、生前の怨敵に協力を？』

「アレを見てさあ、生前の因縁どうこうを言い出せる程、恥知らずじゃないよ。裏切るつもりもない。最後まで、アイツに付き合おうつてね」

……こう言った部分では、ほんへでのあの事件は起こらないと思え

るので、いい方向に働いている……と思っていたいいのでしょうか。  
今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。

## 女王と筋肉 その三

皆さんこんにちは、ノンケ（餡子ヒロイン）です。

前回はスパさんと交流、ブーデिकास人と交流、今は出会い厨の様に交流……！そしてその最中にネロちやまが離脱。どうやら偏頭痛が悪くなっている様です。理由はまあお察しで。

「——まあ、ネロ公もあんな風になっちやう位には、現状は最悪って事なんだよね。それこそ戦力は連合首都侵攻した時の半分くらい。ローマの将も全然居なくなちゃって……」

「残っているのは自分達の様な客将位、とブーデイカは言葉を締めくくった。

「だから、ネロ公がアレだけ推して来るアンタ達には期待してるのよ」「いやあ、期待だなんてそんな……はははは、それ程でもあるというか」

「ドクター、あまり調子に乗った発言は止めた方が宜しいかと。お里が知れます」

『マシユちゃんちよつと塩過ぎない反応!? 僕なんかした!』

いや、マシユちゃんの対応が正しいかもしれません……今、ブーデिकासさんが凄いいい笑顔してたんですよ、ゲンⅡチを得たぞと言わんばかり。ジエダイかな? シスかもしれない（スターウォーズ）

「ふーん、凄い自信だね魔術師殿?」

『え?』

「じゃあ期待できるかどうかを確認する為にも、少し腕試しとかしちやってもいいかな」

ほらあ! 面倒な事になるうゝほんへでもあったブーデिकासの腕試しパートだ馬鹿野郎! 確かスパルタクス兄貴とのコンビで襲い掛かって来るんですよねクオレハ……ほらあ早速バトルパート出ちや……つたあ!

『え? え? え? え? あの、女王様?』

「もう女王様じゃないよ。ゴメンねー。じゃ、スパルタクス呼んでくるから、準備しててねー? ガチで行くから覚悟してねー」

〈ロロマニが止める暇も無く、ブーディカはさっさと天幕の外に出て行ってしまった。通信先のロロマニが黙り込み、投影されている映像に視線が集中する。

〈…まあ、頑張りましょうか。

〈発言には気を付けよう！

ゆうさくは申し訳ないがNG（選択肢上） 迂闊な一言は地獄を見るので本当に気を付けましょう。私も選択肢次第で大打撃を皆様に被らせてしまったので……（ルールを参照じゃ！）

「お待たせしました！」

〈——結局、全員が準備を整えて、野営地の中心に出てきたのは、五分ほど後の事だった。その間はずっとオルタがロロマニをチクチクとやっていた。

「ん、やる気に満ちてるねー。コレだったら本当に期待できそうかなあ」

「反逆者達よ、共に汗を流し、互いの志を磨き合おうではないか！」  
「スパルタクスも、よろしくお願いするつてさ。私も全力を出してやるから、下手打って死なないよーに」

……それは良いんですけど、なんか周りに兵士がいっぱい居てスゴイ騒いでるんですけれども。何なんでしょうかコレは。というか飲んでる奴迄いるじゃねえか!?

「あ、あのブーディカさん。此方の人達は……」

「あー、周りの兵士はねえ。ネロ公がちよつとしたイベントだって、集めちやつて。まあ要するに気晴らしに来てるだけ。にぎやかしかだら気にしないで」

「こんな、観衆の中で戦うなんて……あわわわわ」

〈香子が目を回しているのも当然と言えた。物凄い熱気だ。嫌なタipesではない、正に喝采と呼ぶのが相応しい感じだが……それ故に、逆に緊張してしまう。香子の肩をそつと抱いて支えつつ、肩を回して準備を整える。

「見世物って訳？ じゃあ事故で焼いちやつても文句言えないわねえ？」

「オルタ殿！ 彼らは味方です！ あまり事故を起こさぬように！」  
「なんか見世物にされるっていうのが気に入らないのよ！」

まあ、邪ンヌはそうでしょうね。マシユとかレオニダス王は『まあそういうのもええやろ』タイプだし香子さんは『断るの無理でしゅ……』ってタイプだし。なんていうか絶対に場に流されないぞっていうタイプは邪ンヌだけな気が……心がつよい（確信）

「ううむ！ その余りにも気高い志！ 黒き聖女よ、君の反逆の志、私が受け止めようではないか！ 来るがいい！」

「——ああ？ 今なんて言った？ 聖女？」

あつ（戦慄）

「えっと……オルタ？」

「マスターちやああん？ あの筋肉達磨は私が相手するから、構わないわよねえ？」

「あ、はい。お好きにどうぞ」

＜立香が勢いに压され、オルタがスパルタクスを真っ向から相手取る事になった。凄まじい迫力だった。遠目で見ていた香子が、ちよつと涙目になって居た。

「えっと、マシユ、レオニダス。オルタのサポートしてあげて」

「わ、分かりました」

「彼女を変に御そうとするより、突撃させた方が成果を上げられるとは思いますが、私はコレで良いかと！」

セイバーオルタちゃんに突撃女と呼ばしめただけあって、突撃して暴れる能力は突出しては居ます。ただその最中脇を突かれたりしようもんなら崩れる！ 崩れる！（突撃戦術特有の弱点）マシユとレオニダス王でしっかりとカバーしていききたいです。

それにこうやって死なない練習試合的に、サーヴァントと戦う機会はそのようありません。サーヴァントと戦うのは経験値的にもう美味なので、頑張っていきましょう。

＜話し合いの結果、オルタを中心として藤丸のチームが前線をはり、貴方と香子が援護を担当する事になった。

といっても今回ホモ君チームは二人欠場なので、援護しかできない

んですよね（確定した真実）　なのでここは藤丸君に気張って貰う必要があります。経験値を積むチャンスではありませんね。藤丸君（の経験値）も美味しそうやな……

「康友、援護は任せるぞ」

◇◇それは香子さんに言っただけでやってくれ。

◇◇分かった、二人で頑張ってみるよ。

選択肢次第でホモ君が動くのか、置物になるかが決まる選択肢の様ですが……当然マスターの出来る鉄砲玉、ホモ君に置物になって頂くのは論外なのでホラ、見てないでこっち来て（鬼の全力）

「頼むぜ。っし、全力で行かして貰います！」

「いいよお、私とスパルタクスのコンビ、破れるもんならやって見な！」

という事で戦闘開始。VSブーディカ、スパルタクス戦です。実は何気にセプテムでは強敵だと思っこのコンビ、ほんへでも言っただ通り割と噛み合ったチームで真っ向からは攻略しにくいんですね……しかし押し通る（脳筋の鑑）

「オラア筋肉達磨あ！　焼き尽くしてやるわよお！」

さあ開始直後にオルタが突進！　マシユとレオニダスが一步遅れて出発。これは……何の合図も無しの開幕突進じゃな？（滝汗）　オルタちゃんちよつと暴れすぎい！

「おお！　反逆者よ！　汝の胸の内にある焔、解き放つが良い！」

「やかましい、言われなくてもやってやるわよこの達磨アアア！」

「お、オルタさん落ち着いて！」

多分無理です（先見の明）　まあ感情に任せての全力攻撃は彼女の得意とする所なんでここは水を差さず好きに暴れて貰いましょうか。さあそんなオルタが黒い炎を纏って、旗でスパルさんを連打！　連打！　連打あ！

「もつとだ！　まだ足りん！　さらに解き放て！」

「笑ってんじゃあ、ないわよおおお！」

スパさんが兎に角耐えて居ますが、この隙を見逃すブーディカさんではありません。既にオルタちゃん弱点を見抜いて側面に。しか



し回り込んだ側はマシユちゃんがカバーしてます。コレはブリテン対決！ ……とか思ったら速攻でレオニダス王がマシユちゃんのカバーに入りました。コレは抜けませんねえ！

「良い動きだー！」

「オルタさんの邪魔はさせません！」

「…確かに、私がそっちの子の側に回り込んだのは、あわよくば側面から崩す為だけどさあ…本命はそっちじゃないんだよね」

ひよ？ (HG)

「——先に言っておくよ？ スパルタクスの本領は、耐えきってから。そっちの子に削り切れると良いね」

「…っ！ 式部殿！ オルタ殿に援護を回してください！」

あつ、ふーん… (察し) これ、どういう意味かといいますと、スパさんの特性に理由があるんですが。ええつと、スパさんて一言で言えば、カウンタータイプなんです。攻撃耐えきってから一気に反撃する、レオニダス王と同タイプです。

とはいえね！ オルタちゃんの攻撃性能もずば抜けているので、まあ行けるでしょう！

「はっ、耐え抜く!? こんな滅多打ちにされて、もうフラフラなんじゃあ」

「…良い、痛みだ。もつとだ」

「っ!」

∠オルタの連撃に晒され続けていたスパルタクスが、いつそ不気味なほどやさしい微笑みを浮かべ…一歩、前に踏み出した。

「さあ、もつと！ もつと！ 打ちこんでくるがいい！」

…駄目みたいですな。

と言った所で今回はここまで。〴〵視聴、ありがとうございました。

## 女王と筋肉 その四

皆さんこんにちは、ノンケ（大ハマグリ）です。取る方では無く取られる方です。

さて前回はスパさんとブーディカさんと模擬戦を開始しました。我が家の誇る最高の攻撃戦力オルタとスパさんの殴り合い、将としてのブーディカさんの才覚、そう言った部分が気になるところさんです。

「——コイツ……なんなの？」

「ハハハハハ！ 叛逆者よ！ 汝のその反抗の志を更に燃え上がらせたまえ！ 際限なき压制者、否、世界にすら抗う、心の底からの咆哮を！」

〳異様な光景だった。オルタの旗の連撃は、余りにも容赦の無い物だった。一応、模擬戦であるという事で、本当に最小限だけの手加減しかしていない、というのに。どれだけ殴っても、全くダメージを負った様子もなく……寧ろ、更に押し込んで来る！

おおブツダよ！ 微笑みながらズンズンとオルタに押し込んでいくスパさんのなんと変質者染みた事か！（困惑）しかし全くそう言った意図は無いという。スパさんは硬派だなあ！（現実逃避）

「オルタさん、私も……！」

「おおっと、残念ながらそうはさせないよ？」

そしてその異様な光景にコレはヤバイと察したマシユちゃん、なれどブーディカさんがその間にあつ、待つてくださいいよ（気さくな妨害）

「……っ！」

「スパルタクスは一対一じゃそう負けないからね。それに……どうやらその、オルタちゃんだっけ。その子にご執心みたいだし、悪いけど行かせないよ」

剣一本でマシユちゃんを牽制するその迫力、流石に勝利の女王は伊達じゃありませんねえ！ 一応特異点二つ熟して、マシユちゃんも勝負度胸は付いている筈なんです。それでもなんていうか、この攻撃

的な笑顔に気圧されるというか。あれ？ この二人どっちも笑顔怖くない？

「ぬう、オルタ殿！」

「だからダメだって！」

レオニダス王の攻撃をキャンセルだ。シールドバツシユをシールドバツシユで止めるとはなんともオサレ。これはKBTIT先生もご満悦で卍解〜

「……流石にブリタニアに名高い勝利の女王、容易くは参りませんか」「十万の戦力差を覆したレオニダス王の守りは抜けないけど……でも、攻めるのは得手っていう訳ではないと思うんだよね」

言外に『アンタのアタックじゃ私じゃ崩せないよ』と言っていくスタイル。ブーディカさんって忘れられがちですけど立派な戦闘民族ケルトなんですよね。あの兄貴の親戚筋って事なんですよ皆さん。何なら兄貴がご先祖様の可能性あるんですよブーディカさん。

「まあ、邪魔はしないであげて……って言っても、流石にもう一人は無理かなあ」

とはいえ香子さんの遠距離援護迄凌ぎ切れる訳ないだろ！ いい加減にしろ！（一転集中援護）オルターツ！ 俺のサーヴァントの援護だぜ！ 受け取ってくれえええええ！（クソデカシーザー）

「つち、余計な事を……！ 感謝はしないわよハゲ！」

「ふむ……圧制者でも無く、反逆者でもない、この痛みは……おお！ それもまた良しである！ さあ、もっと全力を以て私に打ち込むがいい！」

香子さんがちよつと泣きかけています。余り威圧しないであげて（気遣い） 本人は威圧してるつもり欠片も無いと思うんですけど、攻撃を喰らってなおにこやかな微笑みを浮かべるスパさんは迫力と不気味さに満ち溢れてるんですよ！

「う、うう……通じている気がしません」

＜香子が威圧されて、若干弱っている。こういった狂気染みた相手と戦うのは初めてだからか、気持ちで負けかけている。ならば……

＜香子さん、大丈夫だ。君の仕事をすればいい。

◇——大丈夫だ。俺が傍に居るから、落ち着いて行こう。

おいイ？ お前らは下以外の選択肢見えるか？

◇雷電が額に走る。それが一つに集まって……角を作り出す。自らの体に流れるその血を目覚めさせ、緊張する香子に寄り添って、その体を支えた。

「マスター……」

◇瞳を覗き込んで、大丈夫だ、と告げる。彼女の不安を言葉で解きほぐす事など、そんな器用なことが出来ないなら。せめて近くに居る事がマスターの仕事だ。

お前中々色男してんな（半笑い） ハゲにそんなカツコつけムーヴが似合うとおもったんのかこのサルウ！ 自分でやらせたんやろがい！（ガチビンタ） 本当に申し訳ないんですわあ！

「……すみません。模擬戦だというのに、気圧されてしまつて……もう大丈夫です！」

しかしこんなチンピラハゲの色男（大爆笑）ムーヴでも勇気づけられてくれる香子さんは本当に優しいなあ！ お兄さんは心配です（真剣）

「そこお！ 援護するなら援護しなさい！ ラブコメやつてサボってるんじゃない！ 燃やされたいの！」

「本当にごめんなさい！」

本当に、申し訳ない（平謝り） 文句も出ない程に正論で草も生えない。口は悪いんですけど、邪ンヌつて割とちやんと正論いうイメーヂ。で、なんかのタガが外れると邪ンヌなんか屁でもない狂気ムーヴかますのが本家……アレ？ オルタとは？

「はははっ！ 反逆者よ！ その炎を向けるべきは共に戦う友軍ではないぞ！ 今は私に叩き付けるがいい、明日の压制者への反抗につなげる為にも！」

「喧しい！ 上等よ、そんだけ言うならお望み通り立てなくしてやるから覚悟しろ！」

さあ反撃開始！ オルタがガンガン攻める、香子さんの援護が足とか顔面とか、喰らったら思わず動きを止めざるを得ない所に突き刺さ

る！ でも手加減してるとは言え顔面に当たってもスパさんは動きを止めないっていう……全く困ったもんじやい！（半泣き）

一応足に当たれば、ちよつと膝を屈するくらいはするので、その間にオルタも反撃できては居るんですが、可笑しいな、スパさん硬すぎませんかね。

「っ！ もうタフとかいう次元じゃない……！」

「ハハハハハ！ どうした！ もう直ぐ！ もうすぐ我が反逆はその身に届くぞ！」

因みに個人的な意見ですが、邪ンヌって権力者ムーヴが全く出来ないイメージがあります。オルレアンのアレだって圧制者、というより正に復讐者、そして基本的に誰彼構わず真つ向から喰らいつく反骨なので、そりゃあスパさんの圧制者判定も余裕で潜り抜けても不思議じゃないんですよ。

とか言ったらスパさんがさらにオルタに迫ってます！ マズいですよ！ ちよ、香子さん援護援護ダメだ止まらねえ！

「く、このお……っ！」

「ハハハハハハ！ 更にだ！ 反骨するその芯の全てを！ 曝け出すがいい！」

「喧しいい！ 上から物言ってるじゃあ、無い！」

つと、邪ンヌが一步下がって……ここですね。香子さん！ 全力で援護頼みます！

「オルタ様！ 合わせてください、隙を作ります！」

「——つち！ しくじったら承知しないわよ、作家女！」

さあ香子さんの攻撃が、再び足に直撃！ 完全に体勢を崩し、地面にスパさんが膝を付きました。今がチャンスと邪ンヌ突撃、というより旗ごとぶつかりつつ、下に潜り込むタックル擬きというか……そこからスパさんをLIFT UP（ネイティブ）

「おおっ!？」

「そんなに、やって欲しければ……徹底的にやってやる。その舐めた態度、後悔してももう遅いわ！ 吹っ飛べこの筋肉達磨あ！」

そしてリフトアップからの突き上げで筋肉のスパさんが宙を舞

うう！ やっぱりオルタの筋力A+は伊達じゃない……薄い本でも間違つてモノを握りつぶすとか普通にやりそう（小並感）、とか考えた事があるのは僕だけじゃない（断定系）

「凄まじい重力への反逆！ おお何と見事！」

「——それだけじゃ終わらないわよ、ジェントルメン？」

「ぬう?!」

しかし宙へと吹っ飛ばすだけでは終わらず、なんと旗を地面に立て、それを足場にスパさんのさらに上に、おおく良い位置取りだぜえ？（ご満悦）

「私の靴でも舐めて、地面に這いつくばれ！」

ああ、くストンプの音く！（ソプラノ） ジャンヌの強烈な踏みつけが、派手にスパさんを地面にスマツシユ！ というかオルタの鎧つてハイヒールですよ、それで踏みつけて痛いどころの騒ぎじゃない（冷静）

で、その叩き付けられた張本人のスパさんは……？ 流石にそろそろダメーヅ喰らつてほしい所さんですが……？

「……お、おお……叛逆の火、灯れり……」

まだ動いてるウウウウウウ!? 嘘やろ……気絶もしないで立ち上がるとかこの人やっぱりおかしい（ド直球）

と言った所で今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。

## 攻勢前夜 その一

皆さんこんにちは、ノンケ（無窮の果て）です。前回とはオルタ違いじゃ！

それは置いておいて、前はオルタちゃんとスパさんがずっとド付き合っていました。殴り殴られ、それが人生ってもんでしよう。違う？ そう……（無関心）それは兎も角として、スパさん的にはオルタちゃんに思う所もあったような感じもしましたね。

「——見事だ。その心からの一撃、正に叛逆の一撃である。忬に響いたぞ」

「つこの……！ まだやろうっての!? 良いわよ、幾らでもやって……！」

〈強烈な一撃を貰ってなお、進撃をやめないスパルタクスにいよいよその手に焰を灯すオルタ。いよいよもって焰で直接焼き尽くす手段に打って出ようとした……その時、マシユ達を抑えていたブーディカが動き、オルタとスパルタクスの間に入り込んだ。

「……お見事！ 私たちの負けだ！」

「ああん!? 退きなさいよ、そっちのクソ頑丈な野郎を焼いてやらないと……！」

「いいや、ここまで。スパルタクスはもうグロッキー寸前だからね」

ええ……?（懐疑的）物凄い足取りしっかりしてますけど、弱つてるとかウツソだろお前www（カテジナさん並感） 追撃しなきゃ（薩摩並感）

「しっかり立ってるようにしか見えないけど!？」

「いいや、コイツは大分無理する奴だからね。引き際を見極めないと厳しい。今立ってるのは、精神と根性の賜物。もう肉体的には限界だよ」

〈そう言ってブーディカが見つめるスパルタクスは……全く小動もしていないのだが。本当に弱っているのだろうか。全員が本当か、とスパルタクスを黙って見つめている中、口を開いたのはレオニダスだった。

「……確かに、彼の微笑みから迫力が若干抜け落ちている様に感じますな」

「分かるの?」

「ええ、長年戦い抜いて来た故に手に入れた勘……の様なものではありませんが」

カルデアメンバーの中で一番戦闘経験詰んでるレオニダス王の勘なら信じられる気がする。直感? アレは勘じゃなくて唯の未来予知みたいなものやし……ええいノーカンじゃノーカン!

「そつか……オルタ! そろそろ終わりにしよう!」

「はあ!? 冗談じゃない、まだ私は……!」

「これ模擬戦だから! 最期まで行っちゃったら色々ヤバイよ!」

誓って殺しはしてはいけません (KRYUちゃん) 実際模擬戦だからね、ここでキラキラさせちゃったら戦力減っちゃうんだよお!

え? ほんへじゃこの後消滅させられる可能性があるって? そのフラグ、この俺がへし折る (黄金騎士GARO)

「……つち!」

「まあでも結果は私達の負けだよ。まさかスパルタクスをここまで削れるなんて、想像もしてなかった……ネロ公の言ってた実力ってのは本物みたいだね」

▽ブーディカはそういつて、剣と盾を地面に置いた。その直後、周りの兵士たちが一齐に声を上げる。大歓声だった。

「——うむ! 余の目に狂いはなかったであろう! 皆の衆! 見事な戦いを演じた彼らに喝采を!」

皆さんありがとナス! いやあ皆さんの慰安に貢献できてうれしいなあ! お前ら最初に香子さん怯えさせたの忘れてへんからな(掌返し) 後香子さん難破したのも忘れてへんからな(根に持つタイプ) 「良く言うよ。急に調子戻したと思ったら、こんな場所設定して、ただの腕試しの積りで外出たら、コレだもんなあ。断るのも無理じゃない」

「まあ、そういうな。お主に実力を示し、兵士達の慰安にも最適! 一粒で二度おいしいという奴だな!」



それって不意打ちじゃん(指摘) とはいえ、ネロちやまの言う通り合理的に皆に娯楽を提供するチャンスと考えれば最適なのでは……？(人情破棄)

「……まあそういう事にしておいてやるか」

「それに、この現状を打破するだけの實力は、備えていたであろう？」  
「まあ、唯の後方支援とかに回せるような戦力じゃあないのは理解したよ。全力で前線で暴れまわって貰わないとね」

ブーデイカさんのお褒めのお言葉ウレシイ……ウレシイ……

まあ、喜んでばかりも居られませんけれども。さっきの慰安だとか、それを考えると、ここまでしないと現状相当に危ないっていう事でもあります。セプテムってこんな難易度って高かったでしたっけか。

「しかし、スパルタクスは大丈夫なのか？」

「ああ、傷の直りは早い方だからね。この後の攻勢にも間に合うと思うよ」

「それならば良いのだが……皆の者！ 此度の余興は、楽しんでもらえたか？」

＜ネロが声をかければ、兵士たちが太く空気を震わせるように声を返す。その様子に、満面の笑顔で、彼女は言葉を続けた。

「うむ！ お主達への余からの贈り物、楽しんでもらえたなら、余も嬉しー！」

イエーイー！ スキヤキー！ ハラキリー！ 歓声の仕方が日本を勘違いした外国人なんよ……でもモノホンの外国人のローマの皆さんはよっぽどマトモに歓声を上げてるといふね。ネロちやまの盛り上げが上手いというのもあるかもしれない。

「さて、見て貰えた通り……マシユ、此方へ来るがいい」

「え？ は、はい……」

「フォーウ!？」

＜そんな歓声が少し収まってくる頃を見計らって、ネロがマシユのその手を取って、自分の眼の前に連れてきて……その勢いで零れ落ちたフォーウをそつと貴方が回収した。

「彼ら彼女らは、何れ劣らぬ一騎当千の将ばかりである！ この盾の娘など、強さに加え美貌すら重ね備えた、正に伝説に名高い戦乙女の如くである！」

マシユは一回だけ戦乙女に自分の振りされてるからね、実質戦乙女みたいなもんよ。うんうん……そんな戦乙女の後ろにそつと付いてるシグルド気取りの藤丸君は何なんですかねホント。あー……（額が）ヒクヒクしてる。

「連合など彼らの前には案山子の如くなぎ倒されるばかりだろう……将、兵は揃い、機は熟した！ 我々は数日中には我々はガリアを取り戻すために、攻勢に打って出る！」

――一瞬、しんと静まり返った野営地に、直後爆発したかの様な雄叫びが満ちた。天をも貫くかのように勢いに、一瞬マシユがビクツとしたのを察したのか、いつの間にか背後に近寄っていた立香がその背をそつと支えた。

おーぐだマシユやってんねえ！ ちよつと今まで要素薄かったのがいきなりやって来てんねえ！ なんか……暖かい……（確信）

「ローマの要地たるガリアをこの戦にて取り戻した時こそ、我らは嘗ての苦い敗北の記憶を拭い去ることが出来ると言うもの！ 我らローマの栄光を取り戻す、絶好の機会、己こそが勇士足らんとその才気を振るえ！」

ネロの言葉に合わせ、ローマ兵の士気は天井知らずに跳ね上がっていく。彼らの歓声を浴びる紅い皇帝のその背中は、間違いなく皇帝としての威厳に満ちていた。

皇帝特権持ちは実際スゴイ指導者ばかりだからね。オジさん、ふやちゃん、後……は……なあ。まあこれ以上はセプテムの根幹にかかわるのでお。も。し。ろ。い。こ。と。に。な。つ。て。来たら改めてという事で、I K E A！

『流石、若き頃は才気に満ち溢れたというネロ帝だ。物凄いカリスマ。けど……その分晩年を知ってるこつちとしては……いや、止めておこうかな』

「ま、アレに負けた身だからね。その有能さ是否定しないよ……それ

にしても」

「ネロの演説には一切反応せず、ジーっと、ジーっと。マシユをブーデイカが見つめている。頭のとっぺんからつま先まで。まじまじ、と言うのがピツタリと言ったような感じである。」

「どうかなされたのですか?」

「あー、いや。ちよつとねえ……うんうん、ほうほう、成程そうかあ……戦ってる時には動きにしか目が行かなかつたけど……ふーん、そういう事だったんだ」

ねつとりしている(直球) 嘘だよ(気さく) まあブーデイカさんがマシユに注目するのは、彼女の成り立ちだとか、その辺りに原因があるのですが……まあ分かりやすく言えば中の人と、彼の認めた子に注目しているというか。

「うんうん。そしたら、私も見てるだけって訳には行かないかなあ……ネロ公!」

「ん?」

「マシユって子、そろそろ戻してあげな! もう十分士気は上がったろうし、勢いに吞まれて完全に呆然としちやってるし!」

「……確かにな。これ以上衆目の視線に晒すのも酷か。ブーデイカ、後は任せるぞ!」

さて、アイドルとして男共のやる気を煽った(語弊は非ず)マシユちゃん(彼氏付き)がご帰還しまして……直後、ブーデイカさんに掴まりました。やっぱりね。

「えっ、えっ?」

「大丈夫、ビックリしたでしょ。つたく、ネロ公は本当に……よし、よし」

更にブーデイカさんの胸に完全にホールドされています。優しく、しかしマシユちゃんが抵抗しても逃げられないように……こうして見ると、結構テクニカルな事してるなブーデイカさん。藤丸君も思わず呆然。大先輩みたいな顔してんなお前な。

「あのー……ブーデイカさん、一体何を」

「んー? 何て言うかこの子は……この子たちは、かな。妹みたいな

もんというか」

「妹……妹オ!？」

「そ。可愛がりたくなっちゃうんだよねー。そうだ、模擬戦の後だし、お腹減ってるでしょう。折角だし私のご飯作るよ。それなりには美味いからさ、期待しててね」

「ブルーデイカに絡まれているマシユ、立香。これは放っておいた方が良くないなー、とか考えて、貴方はそつと預かっているフォウをマシユの頭の上に返し、香子とどつか適当な天幕を確保しようと踵を返して……何故か貴方も捕まった。」

「そつちのアンタも。さつきはちよつと失礼しちゃったけど、なんかほつとけないっていうか、懐かない野良犬見てる雰囲気というか……一緒にご飯食べよ! 折角だし、カルデアのご飯は私が面倒見るよ、うん!」

懐かない野良犬で一面大草原や。完全に衰れに思われててコレは除草剤必須です。とはいえ……まあ、サーヴァントの皆さんと交流できるならいつか! (脳死)

と言った所で、今回はここまで、ご視聴、ありがとうございました。

## 攻勢前夜 その二

皆さんこんにちは、ノンケ（キャスター金ぴか）です。最近はこの処に乗っける鯖の皆さまが、今までの鯖と被らないように必死や……

前回はネロちやまが皆を鼓舞しました。あと藤丸君がマシユちゃんの前で彼氏面していましたね。お前やっぱり共犯者って呼ばれる資質あるよ、後方彼氏面っていう最大の素質が居るからね、共犯者になるのには……それは違うよ！（自己否定）

〓——ブーディカが鼻歌交じりに作り上げたブリタニア料理、その量は正に豪勢の一言だった。シンプルだが食欲をそそる味付けに、マスター、サーヴァント問わずに舌鼓を打ちながら……夜を迎えた。

「いやー、良い食べっぷりで良かった。作った甲斐があつたよ」

「ありがとうございます、ブーディカさん。大変美味でした！」

「むぐ……はぐ……」

邪ンヌが何も考えずに飯食ってるの可愛い……可愛くない？ 明らかに若干不満顔で匙でちよこつとずつズズツと飲んでるんですよ。なんていうか小動物的というか、邪竜の魔女なのにね（微笑み）

「本当になー！ 食べた食べた！」

「いやー、男の子だねえ。そっちのマスターの子二人が一番食べてたよ」

〓〓いやあ、大満足です！

〓〓まだまだ……まだ寄せバルバトス！

最終決戦かな？ まだまだ時期が早すぎる発言なのでここは当然選択肢上で。所でブーディカさんのブリタニア料理ってどんな感じなんでしょうね。当然投稿者は全く分かりません（無知）誰か有識者兄貴求む。

〓腹が膨れて、体も温まってきた……というより、若干火照っている気すらする。貴方は外に熱を冷ましに行く事にし、ゆっくりと立ち上がった。

「マスター？ 何方へ？」

〓隣に座っていた香子に用件を伝えて、貴方は天幕の入り口をく

ぐつて外に出て行く。見回せば、似たような天幕に灯りが灯り、そこから笑い声が聞こえて来る。軍事用の天幕さえなければ、何処か平和な光景にも見える。

そういえば、あの中にネロちやまの天幕があるんでしようか。実はブーディカさんの天幕に居なかつたんですよね陛下。もしかして、あの天幕の中で一人寂しく……これはお慰めしに行くしかありませんね（下衆顔）

とか思ったら……あ、今普通に入れ替わりにブーディカさんの天幕に入っていくのが見えてしまった……コレで完全にホモ君がボツチに。ああ〜センチメンタルう〜（号泣）

〜天に瞬く星。その中心にて輝く円環。自分の見た空とは少し違う、特異点の空。自分の時代では残っていないであろう、そんな……そう考えると、ふと、何とも言えない寂寥感が胸に宿つたのを感じ……

おつと、ここでもさかのセンチメンタルモード？　ほんへの藤丸君は滅多に見せなかつた弱つた感じというか、まあホモ君はあくまでアバター主人公だからね、藤丸君に劣るのも多少はね？

〜——同時に、胸の底より湧き上がるマグマの様な激情を、感じた。ん？（前兆）

〜自分の故郷を奪い、世界を奪つた……母を、父を。祖父を。友を。彼らの顔が頭を過るその度に、熱と、そして体の芯を焼き切るかのよくな痺れが走り……暗い、感情が胸の内を満たしていく。

お、おやあ？　どうしたのかなホモ君？　いきなり不穩、ちよつと精神異常与えちゃったかな？（大慌て）　さつきまで「ごはんおいしー」とか言ってたのにいきなり「二度とこの世界に居られないようにしてやる」みたいなダーク♂サイド堕ちしてるんですけどなんか地雷踏んじやいました？

〜この感情に任せて暴れればもつと、容赦なく敵を屠る事も出来るのだろうか。今手元にバットは無いが……この拳で思い切り殴りつける方が、もつと手軽に、痛みを刻み込めるだろうか……そんな風に自らの手を見つめ……

「――叛逆者よ。汝の手綱を手放してはならない」

　　〽後ろからかかったその声で、はつとその思考から浮上した。

　　こ、この頼りがいのある、叛逆者特有のバリトンボイスは……！  
アポクリファンだったらず先ず聞き間違えようがありません！

　　〽後ろを振り返る。天に輝く輪の外れ、狂気を司る月を背にその筋肉は立っていた。余りにも雄大に、そして、堂々と。揺らがぬ微笑みを浮かべて。

「汝の手綱を、狂乱に委ねてはならない。己の叛逆は、己の中にある抗うという意思で立ち上がり、成し遂げねばならぬのだ。狂走するだけでは、君の叛逆は決して成し得ないのだ。若き叛逆者よ」

　　〽そう言つて、彼……スパルタクスはその体に見合わぬ程に優しい手つきで、貴方の肩にそつと手を置いて。逆立っていた精神が少しずつ、落ち着いていくのが分かった。

　　す、スパさんがメンタルカウンセリングをしている……！　間違ひありません、これはセプテムスパさんではありません、S I Nスパさんだ！　このスパさん、異聞帯のOSを先取りしてインストールして、なんてことを……（賞賛）　いや、サーヴァントにOSとか無いと思いますけど（冷静）

「君が立ち向かうべき压制、君が行うべき叛逆、それは君自身の物なのだ。決して、叛逆に君の身を使うのではない」

　　〽低く、静かな言葉には、確かに狂気が宿っていたが……しかし、確かな信念も感じ取れるのである。自らの底にあるそれを、自分で極限まで信じているからこそ、理解できずとも貴方の心に沁み込んで来る。

「月に惑わされ压制者の血に酔うのも、それに釣られた、上位たる压制者の狂乱に乗せられるのも、違うのだ。気を確と保ち、压制に立ち向かえ。叛逆者よ」

　　スパさんて本当にバーサーカー？　キャスターとかその辺りとかじゃないんですか？　プレイヤーが「???」ってなってる事しか言ってますんけど、でもなんか確信をもって真相を突いている気がします。カルデアの分析なんて要らねえんだよ！（無礼）

〈彼の言葉に、頭に集まっていた何かが、ゆつくりと沈んで行くのを自覚していた。頭がゆつくりと冷えて、怒りの代わりに、穏やかな寂寥感が浮かんでくる。そんな貴方を見て彼は歯を見せて笑う。

「――死者を悼む心、理不尽を打ち破る心、苦難にあえて立ち向かう強き心、それこそ明日の圧制を打ち破る反逆に繋がるのだ。友よ」

〈スバルタクスさん……

〈スバルタクスの兄貴……！

漢の風格がやはりヤバイ（シンパシー） この人が初登場では化け物呼ばわりされるとかこれマジ？ コレは不敬ですな間違いない……ニトさんも、こつち来て一緒に鏡出してホラ（激怒） 呼び方もさんだとか生ぬるい事言ってられません、兄貴って呼ぶんだよ三六〇度（全世界配信）

「では友よ、強く叛逆を行う為にも……」

〈何か感極まっていた貴方の腕に、突如としてガチャリ、という音が響く。ん？ と思って手を見下ろすと……凄いゴツイ、木の枷がしつかりと嵌まっていた。もう一度、ん？ と思って今度はスバルタクスに視線を向けた。

「先ずは小さな圧制から砕いて行こうではないか！ その積み重ねが、何者にも屈さぬ強い反逆を生むのだから！ さあ、その枷を圧制者だと思つて！ 一思いに、グツと、グツと砕いてしまおう！」

ファッ!? スパさん!? バレンタインの先取りはマズいですよ!?

えっ、ちよ、マジで外れないんですけどこれは……マジで粉碎しなけりゃならん感じですか？ ち、チクシヨウこんなの素のステータスで粉碎できる訳ないだろ！ いい加減にしろ！

チート臭いですけど、鬼種の魔発動じゃい！

〈何が起こっているのか分からないが、とりあえずコレを外せばいいのだろうか。困惑しつつも取り敢えず額に熱を集め……頭の芯に痺れるような、感覚。それを感じた瞬間に……バシンと背中に衝撃が走った。

「狂乱に身を任せない！ 己の意思で力に反逆し！ 力を御して！ 振るうのだ！」



スパさんのニコニコ枷ぶち壊し教室!? なんなんですか!? 急に  
なんか、この、ナニコレ!? 俺なにかしましたか!?

何が何なのか分からない。何が悪いのかも分からず……暫く枷を  
外そうと四苦八苦しながら動き……五分後、漸く一つ目が外れ。

「見事だ……では、次は足かせだな!」

▽間髪入れず更に足に枷が嵌まった。呆然とスパルタクスを見ると、  
グツと親指を立てて返され……結局、その枷破壊は、夜が明けて、  
戻ってこない貴方を心配した香子が、その様子を見つけてくれるまで  
続き……終わった後、貴方は床に崩れ落ち、泥のように眠った。

……ええ? (困惑)

えつと、えつと……スパルタクス兄貴はやっぱりバーサーカーなん  
やなつて。と言った所で今回はここまで。ご視聴、ありがとうございます  
ました。

## デオンの潜入作戦 その一

皆さんこんにちは、ノンケ（テルモピュライ）です。多分間違いないですが文言が被ってなけりやもう被ってないとカウントしたいです。あれよ、セプテムとカルデアの差みたいなものですよ。

前回は、ブーディカさんのご飯に舌鼓を打って、ちよつとセンチメンタルになりましたでもってマスターが暴力は良いぞオ……ジョージイ……となつて、そんな凶暴な若者が先人の言葉で更生する人生の流れが……え？ 違う？ そう……（無関心）

∨——目の前に広がる、異常な光景。ここはローマであるというのに、本来中国に存在しているであろう広大な建築物が、堂々と立っているのである。こうして、上からではなく下から見つめて居れば、その凄まじい威容に気圧されていたかもしれない。

つと、画面暗転してたのが戻つて？ これは……ホモ君の視点ではありませんね。空中を飛んでいるこれは……ペガサスの背中ですね。という事は？

「デオン、恐らく魔力の温存を考えると、ここが限界です」

「分かった……どこか、林の中だとか、出来るだけ目立たないように下りてくれ」

「了解しました。先ほど歩哨らしい影を見かけたので、そこから離れた場所の……あそこの崖の下辺りで良いでしょうか」

∨その崖の感じからしてバレはしないだろう、と判断したデオンが首を縦に振る。了承を得て、白い天馬が日の光に紛れ、ゆつくりとペガサスが下降する。

お前ら歓声を上げろ！ 皆お待ちかねのデオン君ちゃん視点じゃあ！ F G O R P Gではスパイ作戦を敢行するデオン君ちゃんにもスポットライトを当ててくれるようです。お前初めてかここ（視点変更）は？ なあ？ ハイ！（プレイヤーその時意外に素直）

「……では、ここからは」

「分かつている。僕一人で何とかなるさ。君こそ途中で見つかつて墜墜、なんて事にならない様に気を付けて」

「流石にそれは無いと思いたいですが……」

〽そのやり取りを最後に地面に降り立ったペガサスから降り立ったデオン。それを見届けてから、ペガサスはゆっくりと浮上し、そして……暫くしてから天の彼方へと光になって消えていった。

「さて、ここからだな……先ずはさっきのメドゥーサの情報を生かしていこうかな」

つと、デオン君ちゃんを操作可能になりましたね。で、どんな感じで……うっわステータスがホモ君と全然桁違いですね。当然ですけど。それで何をすればいいというのか、私は理解に苦しむねつと……取り敢えず、ミツシヨンとしては表示されているんですが……歩哨を発見する事、だそうです。メドゥーサさんが見かけたって言うてましたけど。それを見つけると。

「あまり時間はかけていられないな……素早く行こう」

さて、デオン君ちゃんの治療感ですが……ヤバい、これ知った後にホモ君に戻る気がせんのですけどそれは。めっちゃ、こう、凄い滑らかに動くんですけど。こんなRPGとちゃうやん……

動きが無双シリーズのそれなんよ（発見） 車で言うのとどれくらいだ？ ホモ君が軽自動車、デオン君ちゃんがランボルギーニです……サラマンダーより（ry

「——あれ、かな」

お陰であつと言う間に発見できました。規則正しく動いてるなあ……よし、じゃあその規則正しい感じをぶち壊してやるぜ（マジキチスマイル） まあ出来ませんがね（即鎮火）

「さて……彼らから鎧を拝借しなければいけない訳だけど」

コレってスネークミツシヨンですからね。そりゃあ大暴れしたら全部ぶち壊しになっちゃうっていう。いきなり殺意全開にするとか馬鹿じゃねえの（自嘲） それは置いておいて……スネークしつっ一人確保して成り代わるといふそれなりの難易度のクリアしないといけないっていう。早く脱がせろよ（ホモはせっかち）

〽隠れつつ、誰かが逸れるのを待つ。

〽……全滅させれば目撃者は存在しないか。

おおつと？（困惑）サーヴァントってマスターに影響を受けるって言いますよね、主に藤丸君と師匠みたいな、そんな関係というか。もしやデオン君ちゃんもそんな風に影響を受けている可能性が……？

だつたら下の選択肢選ぶんだよ、あくしろよ。

「……あまり力押し、というのは得手としてるって訳じゃないけど」  
「あまりのんびりしている時間は無い。出来るだけ早めにパパッと、仕事を終わらせて情報を回収する必要がある。魔力の制限というその範疇で治めるには……力技も併用していく必要がある。」

「仕方ない。エレガントではないけど、まあエレガントなやり方にこだわる様な趣味も無いし……ささっと片付けるとしようか」

ふういんが とけられた！ さあ辻斬りデオン君ちゃんの始動です。皆で楽しく称えましょう。清楚系のデオン君ちゃんが、血の気の多いチンピラ系ホモマスターに召喚されたお陰で、この通り！

「——良し、ここら辺に敵は居ないな！ いったん撤退するぞ！」

「前回のネロ陛下の皇帝陛下の皆様への反抗作戦、あの様な事態を引き起こさぬためにも我々が僅かながらでもお役に立たねば」

皆凄い張り切ってるねえ！ 連合の皆様、凄い意気軒高やねえ！

いやあ皇帝の皆様もお喜びになってると思いますよ！ いやあ皇帝の皆様まにちゃんと報告出来たら仕事を褒めて貰えるんやろうなあ……まあ、そのチャンスはないんですけどね（暗黒微笑）

背後から襲い掛かり、まずは最後尾の無防備な背中を一突きで忍殺。声すら上げられないねえ！

「なっ!? うしろっ……!?」

「お、応戦を！」

スローウイなんだよねえ！ 反応がさあ！

ハイという事で始まりました超局地的RTA、デオン君ちゃん使用によるローマ兵歩哨部隊壊滅RTA。開始は最初の兵士を忍殺した所からタイマースタートです。まずは貫いた敵兵を盾にしたまま、その前に居た兵士も串刺しにします。オラッ！ 忍殺ッ！

「ぎゃっ……?!」

「速い!？」

ここで懐に飛び込んでしまえばもう後は此方のペースです。サーヴァントのデオン君ちゃんと敵兵のスペック差は歴然としているので、もう後は暴れまわれば勝ちです。

ここで僅かでもタイムを縮める為に下手な小細工をしようとする  
とダメージを負って余計にロスしてしまうので、脳死で暴れまわった  
方が良いと思います(小並感) カスが(小細工なんて)効かねえんだ  
よ!

「——ん……な」

最期に隊長さんの喉を貫いて終了。記録は……二十七秒ですね。  
コンマ以下のは小数点切り上げで考えています。まずまずのタイム  
になったのではないかと。

「……連合の首都からそれなりに離れていてよかった。そうじゃな  
ければ、こんな力業は誤魔化し切れない。とはいえ、一応首尾よく行っ  
たかな」

えー、皆さん。「あれ? おかしいな、俺達はデオン君ちゃんのスパ  
イ大作戦を見ていた筈だったんだけど……なんでFGO隻狼を見て  
いるんだろう」と思っているかもしれない。安心してください、こ  
こからですよ。

「さて、連合の首都に忍び込む……いや、潜り込む為の怪しまれないよ  
うな素振り……となれば。ちよつと狂信者入ってる、くらいが良いか  
な。狂人っていうのは変に疑うだけ無駄と見逃される事も多いし  
……」

さあ画面ではデオン君ちゃんが鎧に着替えつつプランを練って居  
ますが……残念な事にその光景を直接見ることは出来ません。紳士  
淑女の皆様、残念だったなあ!?! このゲームは全年齢対象なんだよお  
!

「よし、こんな感じかな……さて」

◀兵士から剥ぎ取った鎧を装備しつつ、巨大な壁に視線を向けるデ  
オン。暫くあの壁を見つめた後、瞳をゆつくりと閉じて……そのしな  
やかな体が、僅かに、骨太に、しっかりとした体格に変質し始める。

そんなこと言っている間にデオン君ちゃん潜入のお得意が出ました。オルレアンでも我々カルデアを脅かした自己暗示ですね。超強烈な暗示によって野獣先輩BB並に変幻自在に自らを変質させることが出来ます。

「……僕は、皇帝陛下たちに全てを捧げることが出来る、狂信的な兵士。よし」

さて、それで自らを変質させたデオン君ちゃんですが……しかしながらその一手、連合ローマが設立直後に到達している！（列海王並感）まあそのお陰で逆に溶け込みやすくなってるんですけどね、初見さん。

「……上手く行くといいけど」

こうして、デオン君ちゃんの潜入作戦は開始、という事で。

今回はここまで、ご視聴ありがとうございました。

## デオンの潜入作戦 その二

皆さんこんにちは、ノンケ（牛頭天王）です。次のシナリオ、楽しみですね。

前回はデオン君ちゃん視点になりました、連合首都への潜入作戦が開始されました。手段が脳筋寄りになって居るのは、まあ……ご愛嬌と言った感じで、一つ。可哀そうだけどコレ諜報活動なのよね。

「——と言った感じで、私以外はその……ローマの客将らしい存在を足止めする為に。急いでくれ！ 早く首都にこの情報を！」

「了解だ！ 今から門を開ける！ 少し待っていていろ！」

〳——その言葉に頷いた守衛と思われる兵士は、まんまとその第一の門を開け……そして、第二の門に伝えるのであろう狼煙を上げていた。

「急げよ！」

「分かっている！ 皆々様に必ずやこの一報をお届けする！ 命を賭して！」

……いやあデカいなあ（白目） いや、本来の長城のデザインを踏襲してはいつつ、ちよつと装飾はローマ入ってて、そして何よりも本家よりも圧倒的に高いんだよなあ、城壁が。門も壁もデケエなお前な。

「——……これで、取り敢えず、一番の関門は突破、かな」

〳自らに言い聞かせるように、何者にも、それこそ風に紛れてしまいうような細かい声でその兵士……デオンは言葉を零す。走る速さはい図的に抑え、常人の中でも僅かに速いか、程度で進んでいく。

流星にデオン君ちゃん、意図的に能力を下げる辺りは徹底してます。しかし変質したデオン君ちゃんも……美味しそうやな。正にローマの屈強な兵士って格好にしか見えないねえ、道理でねえ！

と言った感じでその縛りプレイの影響でデオン君ちゃんの本来のステータスが発揮できないようになってしまってますがまあ潜入ですし、ベスト出せるようにね（体の調整）

〳——そのまま、特に何の問題もないまま、まんまと偽兵士デオンはその身を連合首都へと潜り込ませたのだ。余りにもあつさりとし

た、何のドラマも無い成功だが、しかし真のプロの完璧な仕事とは、得てしてドラマも何も生まず、成功に突き進む。

「話は聞いている、孔明様は此方だ！」

「ああ、直ぐに向かう……！」

完璧な仕事はドラマを生まないっていうの狂おしいほど好き。ドラマが生まれてる時点でどつかミスってるって事ですからね。え？

見所さんとしては？ 使い物にならないじゃないか……（発覚）

「（しかし……コレは異常だな。一見普通に見えるのが余計に不気味、というか）」

〳誰も疑わず、彼をローマの一兵士として連れていく。しかしデオンは見抜いていた。それが自分の実力のみで為されているという訳ではない事を。この兵士たちはまるでそう……何か、取り付かれている様で、自分で思考をしている気がしない。

「（取り付かれているというよりは……熱に浮かされている、という方が近い、か）」

まあ、この市民とか兵士の人達はとある理由からほとんど全員傀儡みたいなもんやし……デオン君ちゃんが変装せずに潜入してもワンチャンバレない可能性がある位には皆案山子みたいなもんです。そういう質では敗戦国寸前の筈のネロちやまのローマの方が圧倒的にマシっていう。

「——孔明様はこの先だ！」

「分かった、急がなければ……！」

〳しかし、それはそれでありがたい。デオンにとって嬉しい誤算だった。そんな連中ばかりなら合わせるのも潜り込むのもさして難しくはない。連れてこられた建物の奥、そこに居る孔明……敵の軍師と目される人物に情報を伝えれば、自分はフリーになるだろう。

ホントかなあ？（純粋な瞳） 今まで上手く行っていただけあって、揺り戻しが怖い頃なんですよ（RTA視聴済み並感）

「（……とはいえ、相手は征服王の懐刀、とまで評された軍師。サーヴァントとしては当然、知恵者としても十分な警戒を払わないと）」

〳決して報告だけでも油断は出来ない。この作戦で最も怖い相手か



もしれない。孔明の観察眼が優れているかは分からないがしかし、相手の言葉裏を探るだけの知啓は間違いなく有る。もし僅かにでも怪しまればそれは……自分の消滅に直結しかねない。

デオン君ちゃんに一切の油断は決してない！　と思っていたかどうかッ！（掌返し）物凄い警戒しとるやんけ！

「失礼します！　孔明様、お伝えしたい事が――」

「……少し待ってくれ。兵站などの確認が終わってから」

〳その時だった。今まで完璧だったデオンに初めて、ミスが起きた。ほんの僅か硬直してしまった。その目の前の男は……明らかに中国人とは思えない肩幅と、背の高さで、黒いスーツ、孔明と呼ばれるべき要素をまるで有していなかった。

あつ（察し）　そ、そこか！　まさかの孔明の特殊な事情がデオン君ちゃんにダイレクトアタックを！（戦慄）　なんてこった、これが孔明の罠ちゃんですか。

「……どうしたのかね？」

「い、いえ……少しばかり、呆然と、してしまい、まして……」

〳しかし、デオンもさるもの。その僅かなミスであっても、まるで走りづめて疲労がどっと出てきたかのように、態度を取り繕ってみせる。伝説のスパイの自己暗示を絡めた演技力は尋常ではないのだ。

「――ふむ、疲労しているのかね。であれば少し休憩を」

「い、いえ。それより、も……報告、を」

「そうか？　ならば少し待っていてくれたまえ、出来るだけ終わらせて話を聞こう」

それで、孔明さんなんですが……その見た目、黒髪以外は東洋人要素が全く無い、という完全なトラップ。お前それでも中国人とか、とぼけちゃって……コイツ絶対に英国人だずえ！

まあ、というのもこれにはちゃんとした理由があつて、えー此方の方、孔明御本人ではございません。フザケテイルノカア!?　すいません、止めてください……

「（……アジア系の英雄の骨格じゃない。何方かと言えば欧州寄りだ）」

「——良し、ここはこれで……全く、気乗りのしない戦だからと言って好き勝手しやがってアイツは……」

◁そのまま、デオンはその男を観察する。黒い長髪、眉間に寄った皺、若干光を失いかけている瞳……疲れているのだろうか、サーヴァントが。

ええまあ、以前ちよつと怒りから漏れてしまったんですが、この人はとあるFate作品にて登場したマスター、なんですよ。え？

普通のマスターで軍師を!? (ステーキ並感) とか思った方、違います、サーヴァントなんです。

ここで大量のハテナを思い浮かべた方、まあ落ち着いて欲しい。このサーヴァント孔明は、非常に珍しいケースなんです。孔明本人なんです、肉体は別人というか。

「こんな物か……それで、報告とは？」

「は……その、首都付近を巡回していた我が部隊が壊滅したのです」

「ほう、敵の侵入という事かね」

「はい、唯……それだけでは無く、敵は我が部隊を、単騎にて壊滅せしめたのです」

◁直後、目の前の男の眼の色が変わった。疲れに淀んでいた瞳が瞬く間に理知的な光を取り戻し、デオンを射抜く。何者をも見通す様なその視線に、気を引き締め直した。観察に現を抜かしている場合ではない。気を抜けば、あつと言う間に間者だと見抜かれる。

因みにこの孔明さんの肉体の方ですが、普通に推理物の主人公出来る位には頭が良いんですね。迂闊な事するとホワイダニツトまで丸裸や (戦慄)

「その情報が本当であれば……相手は我らの様な特殊な出自である可能性もある、か」

「(……何処迄兵士が情報を知らされているか、今は定かではない。なら)」

◁異常を発見した故ご報告しました!

◁連合の脅威になると判断し、ご報告しました!

自分の部隊が全滅して『異常』の一言で終わらせるのは流石に無能

なんだよなあ……一見上の方が当たり障りないように見えますが、しかしここでプレイヤーに電流走る（選択肢下）

「——ふむ、ご苦勞だったな。その様な敵の情報を取りこぼさなかったのは大きいだろう。必ずやその者には対処する、ゆっくり休むと良い」

〳その言葉を聞いて……孔明はその鋭い視線を中空に向けそう告げると、何かしらを思索し始めた。様子を見るに、何とかその視線を掻い潜ることは出来たらしい。しかし胸を撫で下ろす仕草すらせず、デオンは、『栄光に酔いしれる兵の様に』声を上げた。

「いえ！ まだ巡回の任は終わっていませんので！」

「そうか。であれば任に励むと良い。無理をし過ぎないようにな」

や っ た ぜ 潜り抜けたな（確信） もうこれで孔明からはノーマークや。チヨロすぎひん孔明君!? 伝説の大軍師様もデオン君の前じゃあ形無しなんやなって……（満面の笑み） ムニエル——！

ムニエル見てるか——！ マリーさんありがとう！ フラーツシュ

！

「……そういえば、どうやってそのような相手から逃れてきたのかね」「はっ！ 味方がその身を盾にして、私を送り出してくれました！ 全ては『皇帝』の皆さまの御為です」

「——成程な。引き留めてすまなかつたな。もう行っても構わない」〳孔明の部屋を後にするデオンは、既に次のステップについて考えていた。兵士から適当な……王宮に出入りしているであろう何者かに成り代わり、情報を回収する。その道筋を見つける為の、方策を。

サー最大の強敵、と目されていた孔明もちよろつと突破し、ここからいよいよデオン君ちゃんがローマへの潜入任務をこなしていく行くわけですが……ここで画面が暗転していつてこれは……ホモ君の視点に戻ってきましたね。

今回は、ここまでで切った方が良さそうですね。ご視聴、ありがとうございました。

## ガリア戦役 その一

皆様こんにちは。ノンケ（双子のブチ切れてる方）です。カストロ君と真っ向から向き合って認め合える関係になるまでサシで喧嘩し続けたい……し続けたくない？

前回はデオン君ちゃんの見事な潜入が光る光る（恍惚） さあこのままスムーズに連合ローマ攻略や！ とはならず、一旦視点はネロちやま側のホモ君へと移りました。じらすねえ（笑顔）

「——じゃあ、作戦を説明するよ。と言つてもまあ。凄くシンプルなんだけどね」

「< 曰く、先ずローマ軍は一切の策を用いず、真っ向からぶつかって戦うのだという。策も無い正面からの削り合いに引きずり込み……ここで初めて、プランらしいプランが出てくるのだ。」

「敵を全力で引き付けた所で……後方の大将首を一気に狩るのさ」  
「首狩り戦術ですか？」

「まあそうだね。向こうの方が数が多いんだからマトモに戦う必要もない」

マトモになんて戦ってやらねえから！（机落下並感）ほんへでは少数部隊で強引な突破を図っていた場面ですが、兵士の頭数自体はほんへより増えているネロちやま陣営ですからこうやって使える手段が増えてあゝ、<sup>気</sup>持<sup>ち</sup>が<sup>い</sup>い<sup>！</sup>！（楽）

「で、藤丸のチーム、それとネロ公にはひと塊になって動いて貰う。分かると思うけどこのチームが大将の首狩り部隊だ」

「ふふん、戦の花形だな。任せるが良い」  
「分かりました」

でもやつぱり藤丸君とは別行動になるんやな……って（消沈）  
まあ二チームで分かれるのは凄いい点だからね、張りきって行きませんか？ 行きましようよもう（半ギレ）

「で、残ったスパルタクスと私、それと本造院のチームで連合ローマの相手、及び本隊の援護をするんだけど」

<< お任せください……

〈因みに他二人は出張中でございます……〉

うーんノリの良い主人公、好きじゃないけど嫌いじゃないよ（選択肢下）でもホモ君元気なさそうっすね。どうしたんでしょうか。

『まあメドゥーサさんの方は、もう戻って来てるんじゃないかと思うけど』

『予定がズレちゃったからね』

〈連合ローマへの反抗作戦、その、初めての一手だ。否が応でも気合が入るというものである。スパルタクスの猛訓練の疲れも、三日経てば抜けるというもの……というか、自分の疲れが抜けるのに合わせて貰ったのではあるが。』

『凄い疲労具合だったし……しようがないよ流星石に』

『見た目の割りに体力無いのね、アンタ』

「オルタ……！ アレは普通に体力あってもきつい奴だから！」

ホモ君が足を引っ張っているのか……（困惑）根性と体力が取り得見たいなこのハゲがそんなんで足引っ張るとか許しておけませんねえ！ この大罪を償う為にも、ここはギロチン送りですね間違いない（SNSN君案件）

〈申し訳ないと貴方は返す。自分の全力を賭して枷を吹っ飛ばすのは存外精神をスツキリとさせてくれた。体に溜まった悶々とした何かも、今は無く、晴れやかな気持ちではあるが、それと自分の所為で大休憩を取る事になってしまったのは別だ。』

当然ケジメだ！ 指ツメだ！ セプク案件だ！ 若しくはテングの里に連れて行ってもらわなくてはならない（教育的指導）そんな事したらホモ君も可笑しくなっちゃう……！

『でもこの間に皆もしっかりと体調を整えて、準備も万端。その為の期間と考えよう。今は目の前の連合ローマ！ 藤丸君、僕もしっかりとサポートするから気合を入れて臨んでくれ』

「了解！」

「分かりました、ドクター」

〈頷く立香に満足そうにしてから、ドクターは今度、此方に少し心配そうな視線を向けて来た。〉

『本造院君も僕がサポートできれば良かったんだけど流石に効率が悪いからね。今回はレオナルドに任せるよ……ごめんね』

『ごめんねって言い方はちよつとあんまりじゃないかい?』

『万能の天才にこんなこと言うのアレだとは思うけど、若干責任能力というか、常識が欠如してるじゃないかレオナルド』

全くもって容赦なくて草も枯れる。とはいえダ・ヴィンチちゃん常識なんて知るかムーブをしていたのも確かですし（無慈悲）

でも最近子供サイズになってから大分常識人寄りになって居る気もしないでも無いですけど。ダ・ヴィンチちゃんが変わってない事を考えると周りにそれ以上の非常識が増えた……いえ、これ以上は止めておきましょう（シタン先生並感）

『全く酷い言われようだ。大丈夫だとも。この私にドンと任せておきたまえ!』

∨という事で、今回二チームに分かれ動くにあたり、立香のチームをロマニが、此方のチームをダ・ヴィンチがバックアップする手筈になっている。

「よろしくお願いします、ダ・ヴィンチ様」

『こちらこそよろしく。ふふん、君達二人の動きは映像データを見直して把握しているとも！ 要するに本造院君が無茶をしそうになったらブレイキをする！ これに尽きる!』

ウーン間違っていないのがなんとも。実際マスターが前線でバトってるのがこのチームの弱点みたいなものやし（直球）藤丸君も突っ込むじゃないかって？ 主人公は全てが許されるんだよ上等だろ（横暴）

∨∨うーんこの猪扱い

∨何を申されるダ・ヴィンチ殿！ 止めて止まる拙者ではござらぬ！

でこの脳筋な選択肢よ。反省しろつつつてんの！ ねえ!? 反省しろつつつてんだルルオ!? 当然選択肢は上なんだよなあ……あつ、滑った（選択肢下）

「……マスター?」

「呆れたような表情のダ・ヴィンチが口を開く、その前に秒速で香子が反応した。美人が本気で笑うと迫力すらにじみ出る、と聞いた事はあるだろうか。正にそれ、サーヴァントを相手取ったかの様な迫力が……サーヴァントだった。」

「止まってください。ね？」

ホモ君の顔色が絶望的になってて草も枯れるわこんな。でも私も分かる、美人の笑顔の破壊力（暴力）こんな涙が出、出ますよ……

「頷かなければ命が危ない。貴方は無言で頷いた。ダ・ヴィンチも、空気を讀んだのか何も言わず黙っていた。」

「良かったです。マスターが聞き分けの良いお方で。私はマスターに恵まれましたね」

『うん。まあ。そうだね。私の方もデータを更新しておこうかな』

「香子さんにご心配かけぬよう、良い子でいたいと思います。」

「あ、アクマたん……！」

「儂げ平安グラマー美人と伝説のスーパーブロッコリーを一緒にしてはいけない（騎士王への忠言） まあ反省してもらおう為にも選択肢は上で（冷静）」

「はい、よろしい」

「ふと、英霊召喚に付いて考える。過去の英霊を使い魔、サーヴァントとして使役する術式がそれであるが、しかし過去の英霊英傑が使い魔などという枠に収まっている訳が無いではないか。現に目の前から発せられてるのは使い魔の迫力ではない。」

「——コレは圧制に非ず。他者を思いやる心である。明日の圧制を打ち払う切り札にもなり得る至宝である。良きかな」

「スパルタクス、凄いニコニコしてるね」

「スパさんがスツゴイ優しい笑顔になってる。あなた本当にバーサーカー？ って思うかもしれませんがやっぱり叛逆基準な辺りはスパさんやな（自己完結）」

「まあ、話を戻して。役割分担は以上の通りだ……ネロ公」

「うむ。すまぬ……皆の物！ ガリアは我らにとっても、敵にとって

も要地。此度の戦の勝利は、一つの戦の価値には収まらぬ程、大きなものになるであろう」

「ブーデイカに代わって前に出てきたのはネロ。尊大に、かつ堂々と声を張る姿はまるでサーヴァントと遜色ない迫力。此度の戦にかける意気込みの高さは、当然一番だろう。」

「此度、鍵となるのは其方達だ。連合ローマは強大、兵の数ではどうにも太刀打ちは出来ぬが……将の数であれば話は別。将一人の差が、敵にとつては万の兵を以ても埋められぬ差となるであろう」

クローンヤクザがどれだけ居てもニンジャの前では物の数ではない。それを分かっているローマ皇帝は格が違った。鉛の杯でワインを奢ってやろう（死刑宣告） 晩年のネロが暴君と化した原因なんだよなあそれ……

「故にこそ、余は其方達の奮戦に大いなる期待を寄せている！ 願わくば我が軍に勝利を齎して欲しい……全員、出陣の準備にかかれ！」  
「了解！」「了解！」

願わくばあ？ ああん？ なんで？（不平） そこは『必ずや』とかいう所だろオラアン!? 大船に乗った気持ちで任せるんだよ、なんの問題ですか？（国士無双） まあそんなネロちやまの不安も、今回の一戦でバツチり晴れてもろて……

まあこちとらサーヴァントの数で圧勝してますし!?（慢心） どんな無理難題が来てもなんとかなるでしょう！（油断）

えー……皆さん。私、今回の実況で最悪のピンチに陥っております。

「オオオオオツ……！ オオオオオオオオオオオ！」

「又ウン！ 圧制者よ！ 汝を……抱擁、せん！」

目の前。見覚えのある伯父上がまさかの本陣に強襲攻撃。やり口が此方と同じですねー本当にバーサーカーか？

「ブーデイカ様！ 今、援護を……きやつ！」

「アンタはマスターの事に集中して！ この数相手に攻勢になんて出れないよ！」



周辺、伯父上の突撃で乱れた此方の布陣に付け込んで連合ローマ兵がホモ君にカチコミをかけています。四面楚歌でございませう。スウウウウウウウウウウ……フウウウウウウウウウウウ（激震）　な―にが、いけなかつたんでしようかねえ。

―といった所で今回は此処まで……次回はこうなつた経緯を、お話しします。本陣（生存）ゼロ人にはならないように気を付けたいと思います。はい。

## ガリア戦役 その二

皆様こんにちは、ノンケ（妹の方）です。兄がアレだと大変だねポルクスちゃん……だからこそ一緒に居て？（兄妹英霊過激派）

さあ場面は前回ラストのいざ出陣、といった所から切り替わって、いよいよガリア決戦。因みに画面上、DEBUの姿は見えておりません。まあこんな最前線にいる訳ないしね。しょうがないね。

＜視線の先には無数の兵士。ガリアを占領する連合ローマの勢力。僅かにも乱れず此方に向けて進撃して来る動きは、最早空恐ろしさすら感じさせる。

「凄い数ですね……」

「アレだけの兵士を用いるとは、余程の将と見えます！ コレは油断なりませんな！」

「もしかして、いきなり征服王と再戦、って事もあるかもしれない」

いやそんなん悪夢やんけ……（戦慄）素直にDEBUさん来てく  
ださい。いや、DEBUもセットで来いという事ではないので。

「そうなれば、敵の勇将を討ち取る機ではあるが……ブーディカ、そろそろか」

「うん。ぶつかった後だと抜け出す機会が無いかもしれないからね。早めに」

「良し……藤丸！ そろそろ余達も動くぞ、着いて参れ！」

「分かりました！ 康友、あんまり無茶すんなよ」

＜そりゃあお前、お互い様だろ。

＜無茶してなんぼだろ、男つてのは。

漢らしく行こうじゃねえか！（選択肢下）このゲーム選択肢によつて性格も変わりますが、いつも真面な選択肢だと戦闘系マスター君は育ってくれないので、多少はね？ ニツコリしてる香子さんは気にしない事にします。具になりたいね（防御力極振り）

「否定はしないが、程々にしろよ？ 良し、じゃあマシユ。オルタ。レオニダス。行こうか」

「はいっ」

「はいはい。ま、精々働かせていただきますわ。あくまで人理の為に、ね?」

「それとローマ軍を助ける為でもありません!」

全てはチャンス! ちゃんと勝って戻ってきーやー……とまあ、これで藤丸君のチームは無事離脱した訳ですが。ここからは正直消化試合になります。確かに数こそ多い敵ですが、それもカルデアメンバーがDEBUさんに勝つまでですので。

稀に幸運判定がバグルグルしている(連続攻撃) DEBUさんが居ますが、それはRTA兄貴姉貴ですら泣かされたのもう事故だよ事故、ハハハ(強がり)

「——さて、こっからが腕の見せ所かな。スパルタクス!」

「圧制者の走狗たちよ、我が手によつて、砕け散るがいい!」

「つてもう始めっから全開か……まあいいや! 全員、構え! 奴らを抑えるよ!」

さて、FGORPG初の、大規模な軍対軍の大戦が開始です。良く見ろ、アポクリファを見てもこんな面白い光景は見られんぞ?(規模の違い)

「マスター!」

〈香子の声に応え、バットを正眼に構えて前を向く。キャスターである彼女を襲わせないようにする、何時もの壁役だ。

「前線には赴かず、ここで大人しくしててくださいね?」

〈……実際の所、無茶をしないように役割でここに縛り付けられた、ともいう。因みにコレはダ・ヴィンチからの提案である。曰く、『君は唯行くな、と言うよりは何か役割を任せていた方が動かないだろう』との事である。

ダ・ヴィンチちゃんにめっちゃ行動読まれた挙句、早速釘を刺されて草も生えない。フン、ザコカ(煽り)

『いやー凄いなー敵の戦力此方の約1, 5倍! コレで野戦するとか軍師としては自殺行為としか言えないけど、でもサーヴァントが居ればそんなのも覆せる可能性があるっていうあたり英霊つてももの理不尽さを感じるよ!』

「…じゃあダ・ヴィンチちゃんも理不尽な所見せてくれるかい？」

「…理不尽を踏破してこそ人類神話は生まれるのだ！（テストラポイント＋１）」

「何だこの選択肢！（困惑）　ご丁寧に色まで違うんですが、テストラポイントとは？　これ取り続けると雷電博士っぽくなるんですか？」

「いや、ワンチャンエレナママに叱って貰えるなら…：カアツ、気持ちわりい、何だオメエ…：！（自己嫌悪）　当然選択肢は上じゃあ！」

『ふふん、それは何時か君だけのダ・ヴィンチちゃんになった時に、ね？　…：という事で、今は軍師として、私も仕事をしようかな。式部、此方から見て一時の方向、早速敵さんが大攻勢を仕掛けて来てる。援護を』

「わ、分かりました！」

「ダ・ヴィンチちゃんが凄いの確に指示を下してる…：軍師してる…：やだ、解釈一致してる…：嬉しい…：（限界民）　そしてその指示を受けて香子さんが活躍するのは何よりも気持ちがいい！（ド直球）」

「まあ前線で敵を引き受けてくださっている皆様が居てこそその活躍なんですけど。で、その前線のブーディカさん達はと言えば…：」

「ひゆう、遠距離攻撃が出来る味方が居ると気が楽になるね。でもって…：」

「ハハハハハハ！　圧制者の走狗たちよ！　誠意をもって汝らを討ち果たそう！　我が反逆の志の名の元に！」

「また突出してるし！　仕方ない全員！　スパルタクスを援護するよ！　どうせなら派手に暴れて目を引き付けてやろうじゃない！」

「あーもうめちやくちやだよ…：やつぱりスパルタクスはバーサーカー！　とはいえブーディカさんの言う通り目を引き付ける役目は上手い事果たせているし、ママエアロ。ホモ君の役目は香子さんの護衛ですし、流星に今回は死ぬ要素も無いでしょう。という事で。」

「カ…：ットオ！」

「—お味方、順調に敵の攻勢を凌いでいます。敵将の姿も無く、どうやら相手は後方にて趨勢を見ているのではないかとブーディカ様

が」

「そう、ですか……ご苦勞様でした」

〈戦い始めてからしばし。ダ・ヴィンチの指示によって見事に援護もハマリ、貴方達は連合ローマを足止めする事に成功していた。

やる事なさ過ぎたのでね。ほならねという事で。時間が来るまで香子さんの周りうろちよろしてただけなので凄く平和な時間が過ぎているだけだったんですよ、そんな時間を映すなんて無駄無駄……無駄なんだ、どっちみち。あ、暇な時間に香子さんの体を舐め回すようになんて見て居ませんよ？

『んー、まあ今の所問題はないかな？ まあ強いて問題があるとすれば……藤丸君達の方が遅れたらちよつと数で押し潰されかねないっていう可能性が残っている位』

「全方位から敵が迫って来ますからね」

〈香子の言う通りではある。今の所、自分達の居る場所に敵は来ていないが、それはローマ軍が、ブーディカが、奮戦してくれているからに過ぎない。それが何時まで持つかも定かではない以上、立香達の動きにかかっているのは確かだ。

「藤丸様の方は？」

『此方が衝突したのを見て、向こうも動き出したけど、向こうさんがあらかじめ配置した兵隊たちにぶつかってるね。まあ気付かれたって訳でもないし、数は多くないから、素早く蹴散らしてイケてるってさ』  
「そうですか……このまま上手く行けば宜しいのですが」

うーん香子さんそれはフラグなんですよわあ。やったか〓やってないって意味になっちゃうこんな世の中じゃ（自己矛盾）良くないゾ  
〈コレ……（嵐の予感）おっと、ここで選択肢先輩！ 良し、ここでホモ君が同調して警戒心を上げてくれれば……

〈大丈夫だよ。立香達を信じよう。

〈不安ならば、我が前に出て一働きしようではないか

がつ、ダメ……ツ！ いや、望みの選択肢が無いわけでは無い、無いがそれを選ぶと無駄死に……だが、それでいい！ いや良くない（誤った反語）ちゃんとホモ君には生きていたただかないとゲームが

終わるウ！

「当然選択肢上を選ばざるを得ないですよね。視聴者さん（落胆）  
「そう、ですね。悲観的になって居ても、相手は待つてくれる訳でもございませぬ。ならば信じて、我々は出来る事をするべき、ですね」  
「そうだね！ やる事をやるしかないよね！ よーしガンバルゾー！  
ガンバルゾー！ 尚上手く行くとは全く思えない模様。ゲームに置いてフラグ発言は絶対に何かのトリガーになる。ハッキリ分かんかね。」

「——しかし、そんな香子の思いは、最悪の形で中する事となつてしまう。ただし、問題が起きたのは立香達の方ではなく……貴方達の方ではあったが。」

『じゃあその為にも……いや、ちよつと待つてくれ、急速に接近してくる反応がある。このスピードは……少なくとも徒歩じゃない！』

「——うわあああああつ！」

「響いたのは絶叫。思わず振り向いた先に……巨大な土煙が立ち登つて、自軍の兵士が宙を舞っているのが見える。何事か、そう思つた瞬間だった。貴方の目の前に、男が一人、自軍の列を突き崩して現れたのは。」

『サーヴァント反応が二つ！ で、目の前のは……見ての通り、先日戦つたバーサーカー二騎の片割れだよ！』

あ……ああ……（悟飯並感） 伯父上、お久しぶりです……まあそりゃああんな濃厚なフラグ立ててたらなあ!? しかし落ち着け、カルデアのマスターは狼狽えないッ！ 最悪、イスカンダルが援軍に来てる事だつて考えてたんです、伯父上だつたらまだマシつてもの。それに伯父上が来たなら、間違いなく彼は反応すると思うので。」

「っ！ ささせません！」

「そのまま此方へと踏み込もうとしたバーサーカーの顔面に、黒い輝きが直撃する。それがダメージになって居るかどうかは分からないが、しかし確実にバーサーカーの動きは僅かに停止し……その一瞬で、彼は此方へと駆け戻つていた。」

「おおっ！ ここに居たか、圧制者よ……！」



……はああああああ（クソデカ溜息）今回は此処までです！  
次回は……どうにか状況を打開したいと思います。はい。



## ガリア戦役 その三

皆様こんにちは、ノンケ（ヒミコサマー！）です。めっちゃ懐かしいネタですよ。今彼らはどこにいるのでしょうか。

前回は伯父上が前線をしっちゃんかめっちゃかかにしてくれた所まででしたね……じゃねえんだわ（半ギレ） どうしてフラグ一つである事に……愚痴っついていても仕方ないです。ネロちやまという特効薬はいませんが、伯父上を何とかしつつ（スパさん任せ）、戦線を維持する事に務めましょう

「皇帝陛下の皆様の為にー！」

「突撃——！」

ワー（ $\wedge$   $\eta$ ） じゃねえわこのローマ兵、お前らなんてろーまへで良いんだよ上等だろ（暴言） 今日はお前らの根性叩き直してやっから、俺が直々に、空手を教える（空手を使うとは言っていない）

戦場の最強兵器は打撃兵器、つまりお前らの剣よりバットが強いって事だから？ 分かる？ この威力の重さ（先手必勝）

「がっ」

あ、一撃。ふーん……なるほどですね（高速理解） やはりワイバーンや海魔よりは大了なこと、ないです。寧ろ冬木のクソ雑魚スケルトン君とどっこい、成長したホモ君の敵じゃないですねえ！ となれば寧ろここは経験値の稼ぎ所さんの可能性が……？

「うおおおおおおおっ！」

「どんどんいけえ！」

「皇帝陛下への供物と捧げろ！」

駄目みたいですね（一気冷静） こんなえげつなくキマってる奴ら相手に稼ぎに入るとか自殺行為なんだよなあ……ワンミスで組み付かれて乱暴（真実）されてあつと言う間に極楽浄土（通行不可）なので、堅実に参りましょうか。

「させませんー！」

＜此方へと突撃して来るローマ兵達に、香子の放つ光弾が幾つも幾つも突き刺さる。それでも彼らの足は止まる事を知らず……しかし、

香子に辿り着くことは無く、貴方のバットによって悉く蹴散らされていく。

さー顔面にジャストミート、が三連打！ 気迫は尋常じゃないとは言え、人間はバットで殴られりや倒れるんですよ（現実） おらっ、貴方達を全員ローマーの平たい顔族に整形してあげる！

「ああまたマスターが凄い勢いで……だ、ダ・ヴィンチ様。止めた方が……」

『とはいえここで彼らを叩かないと、こっちに突っ込んで来るだろうからねえ。止めるに止められないよ……ぶつちやけどれだけ数を減らしても無意味なのは分かってるけど』

ダ・ヴィンチちゃん辛い現実押し付けるのやめてクレメンス……まあ分かってますよ。画面の右上に見える残りエネミー数が千とかいつてる時点でもうどうしようもないのは自覚してる。でも辞めるかって？ 興味ないね（戦闘続行）

藤丸君の方が主人公補正かかって物語の中でどんどん成長する以上、何も無いホモ君は一人黙々と前進するしかないのである……つまりは経験値寄せローマ兵オラアン！

『本造院君、とりあえずブーディカ將軍が今、何とか流れを断ち切ろうと頑張ってるから何とか時間を稼いでくれ。そう時間はかからないと思う』

＜＜ 良し来たっ！

＜＜ ……寧ろ此方からこのローマ兵共を押し返すべきでは？

ん？（ホモは目敏い） 選択肢がお。も。し。ろ。い。こ。と。に。な。っ。て。ま。す。ね。え。く。というかここで選択肢が出ること自体正直意外だったというか……ままええやろ（選択肢下）

『ほっ？ その心は？』

＜ 経験上だが、時間をかけるのは危ないのではないかという話だ。素人考えだが喧嘩とカップラーメンは早い方が良いと相場が決まっている。

『ふむ、成程……兵は神速を貴ぶ、日本のコトワザにもあった気がするね。一理ある』

あるかなあ？（困惑）抱き合わせ対象まさかのカップラーメンだよ？ 凄い頼りないけど、もう一遍考え直して？ 天然ボケダ・ヴィンチちゃんはちよつと解釈違いなんですけども……というかこんな貧弱な根拠で速攻戦提案する人おる？

『時間をかければ更に敵の進入路が出来てしまうかもしれない。そうならたらいよいよジリ貧になるかもしれない。いや、これ一理どころか理しかないな』

さつすがダ・ヴィンチちゃんだ！ 賢い！（掌返し）

『よし！ ここは柔軟性を保ちつつ臨機応変に対応するのが一番だな！ 作戦変更！』

「ええっ!？」

アドリブは英霊の華みたいなもんやし……ダ・ヴィンチちゃんなんてそれこそ行き当たりばったりでどうにか出来ちゃう人だし。えっ？ 軍師向けの才能じゃないって？ 軍師の仕事出来てればそれでいいだろ！（暴論）

という事でプランBです。ブーディカさんの元までゴリ押し力押しを駆使して侵攻、穴をブスリ♂と埋めに行きたいと思えます。

「うう、ダ・ヴィンチ様だつて無茶をさせないように……」

『無駄死にするような行動は流石に。でも、状況が状況だからね。これは仕方がないよ』

「はあ……分かりました。マスター、私も精一杯援護しますので、どうかご無事で」

仕方ないね（レ）

ここからは一気呵成にローマ兵を押し込んでいくバジリスクタイムです。そして、今まで耐久クエストはありましたが、今回はその逆、時間制限が付いています。これを過ぎると何かしら悪い事が起きるんでしょ、知らんけど（アカネちゃん並感）

「えいっ！」

∟香子の術が、突撃して来るローマ兵たちを打ち据える。先ほどはその足を止める為だったが、今回は……

「マスター！ 今です！」

「貴方を先へと運ぶために。その言葉に、一切の躊躇いなく得物を構えて真つすぐ突っ込んでいく。崩れ落ちた仲間に動きを制限されたローマ兵に……貴方は、容赦なくそのバットを叩き込んだ。」

「さあ始まりましたローマ兵ぶん殴りマラソン、勝利条件は雪崩れ込んで来る皇帝陛下の過激派ファンボーイたちを纏めて地獄に送り返す事。簡単ですね。」

「先ずは鬼種の魔を速攻発動。基本ですね。これさえあれば大抵は困らない、日本生まれの万能調味料M E N T U Y Uの如き頼りがいがあります。ご家庭に一人鬼種の魔！ もうそれは過剰戦力では？ ボブは訝しんだ。」

「押し込めえー！」

「我らにはローマの加護が付いている！ ローマ万歳！ ウオオオオオオオオ！」

「しかし、幾らローマ兵が厄介オタクにしても、熱量がおかしい気がしますね。原作ではもつとこう、完璧な群れとして整った動きをしていたんですけど。今はもう忠誠心が溢れて暴走してる気がします。ヴォースツゲ……（熱意への感銘）」

「まあぶん殴るんですけど（感情と行動の分離） 早速フルスイングがヒットオ！」

「ぐべっ……！」

「鼻血撒き散らして、いいかつこだぜえ？（皮肉） オラアアン整形された奴からかかって来いやあ！ もう平たい顔族じゃ足りない、全員をモズグズ様に仕立てや……仕立てあげてやんだよ！ 全員をモズグズ様にしたんだよ！（事後報告）」

「真正面からぶつかるな、 囲んで……がっ!？」

「そうはさせません！」

「香子さん援護ありがとナス！ 後は脳筋チンパンで横振りしてればいいな！（某ガンダムゲー並感） ウツキイイイイイイ！（渾身の振り） アッアッアッアッ！（外れて焦る猿） キャアアアアアアッ！（ミラクルヒットで大興奮） 脳筋よりも酷えや……！」

『良いペース！ もうちよつとだから踏ん張れ踏ん張れ！』

頑張れ頑張れ見たいに言うんじゃないよ！（伊東ライフ）全然関係ないけどV t u b e rって、良いよね……じゃなくて。どうやら結構順調に殲滅出来ているようですね。コレはバナナ114514本。

……しかし、実際ここまで熱意をもって突っ込んで来るとか。狂気というかこれは普通に熱気を感じる気がします。原作のローマ兵とは、何かが明確に違う様な。

「マスターっ！ 見えました、ブーディカ様です！」

＜暴れに暴れたその所為か、もう目と鼻の先にブーディカの姿を捉えていた。そして、その周りには多くのローマ兵が。間違いない、あそこが侵入経路だ。

＜＜香子さん！ 俺への援護より先にブーディカさんを！

＜＜香子さん援護を！ 俺が蹴散らして合流する！

つと、ここで選択肢ですか。取り敢えず違和感は置いておきましよう（フラグ） お前自分でフラグ立てんなって言うておいて掌スクリューかよ（罵倒） で、選択肢ですが。まあカルデアの優しいママとチンピラハゲ、どつちを優先するかは……分かりますよね？ 我々は賢いので（選択肢上）

「ですが、それではマスターが……！」

＜自分は別に良い。と貴方は吼える。そもそも、今の現状を維持しているのはブーディカの奮戦あってこそだ。其処が崩れれば、救援もクツも無いなら、先ずは彼女を最優先するべきだろう。

へーきへーき、へーきだから。ブチ切れローマ兵になんか絶対負けないから安心してくれよなあ（感度三千倍） コントローラーがそんなんなつたらホモ君がキモい立体起動しちゃう……

「……分かりました！ しばしお待ちください！」

さあこつからは香子さんの援護すらない単騎耐久です。一方向からの全力突撃を只管バッテリーングセンサーする作業とも言います。いや、気付いたんですけど、こつちに向かってくるだけならボタン押してジャストミートしてればどんどん死んでくつていう。

しかし……

「うおおおおおおお！」

「偉大なる王の為に！」

「遙かなるその先へ！ 突き進めえ！」

テンション高いですよね、この連合ローマ兵。もっとロボットくらい無機質な感じでずんずん迫ってくるものかと。なんか原因でもあるんでしょうか。しかしこの熱気、何処かで見覚えがある気がしないでも……？

「偉大なる大王！ アヴェ・イスカンドル！ うおおおおおおおー！」  
……えっ？ あ、オイ待てい（気づき） 今誰のお名前をおっしゃったお前……というか、そう言えばダ・ヴィンチちゃん、サーヴァント反応、二つって言ってたような。あー、待ちなさいよ貴方。ちよつと、難易度調整ミスってませんか？

＜攻勢を凌ぐ貴方の耳に、突如として味方の声が響く。電だ！ 神の雷電だ！ まるで悲鳴の様な声が……ふと、視線を彼方へと向ける。土煙が、立ち上る紫電を纏い、此方へと向かってきている。

「——A A A A L a L a L a L a L a i e !!」

＜天地を震わせる、雄叫びが聞こえた。

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ（精神崩壊）

「この声!?!」

「ブーデイカ様！」

「式部……ごめん、間に合わなかったみたいだ。ここを任せる事になる」

「えっ?？」

……さあ！ 土煙の向こうから超ド級サイズのチャリオットのエントリーだ！ 逞しい牡牛に引かせた暴力の化身の戦車に乗り込むは、果ての海を目指した征服王！ おおブツダ照覧あれ！ 彼こそ兵士達の狂乱を生んだ偉大なるカリスマニンジャ！（ライダー）

「カリギュラめは上手い事着地出来た様であるな……であれば！ 次は余の手番か！」

ドーモ、イスカンドルⅡサン。プレイヤーです。

戦況がさらに悪化した所で今回は此処まで。

後ろに伯父上、前方に征服王。はークソゲー。RTA兄貴姉貴にお

力添えを頂きたいですね。ご視聴、ありがとうございました。

## ガリア戦役 その四

皆さんこんにちは。ノンケ（ゴールドデンライダー）です。こっちにも霊衣欲しい……欲しくない？（金時党）

前回ですが……えー、まあ伯父上というイレギュラーが現れたのですから、とばかりにイレギュラーのお代わりが。まさかのネロちやまと決着を付けると、したかは分かりませんが征服王のご登場です。ふざけんな！（声だけ迫真）

「っ！」

「……どうやら薔薇の皇帝は居らんようだな。となれば別動隊か？

ふむ、やはり坊主の献策の通り、先ず別動隊を捕捉しておけば……全く、気乗りせん策だ！」

やれやれ、とでも言いたげなご様子ですけど、そう言いたいのは此方なんだお（怒りの語尾変化）まさか隊の最重要戦力と目される征服王が、こうも簡単に前線に現れたのだから。此方の士気はがた落ちしかねないという物。うんこ野郎だうんこ野郎！（不敬極まりない煽り）

「——イスカンドルっ！ 覚悟！」

「ん？」

＜そんなイスカンドルに向けて、真っ先に飛び掛かったのはブーディカ。構え、真下に向けられた切っ先がその頭蓋を狙い……しかし、同じく征服王が掲げた長剣の腹で、あっけなく防がれてしまう。

「良い覇気だ！ ブリテンの勝利の女王、ブーディカ！」

「っち……悪いけどアンタの好き勝手にはさせない！ 付き合ってもらうよ！」

はえーブーディカ母さんが凛々しい。というか、人妻未亡人属性に惑わされて薄い本の印象ばかり頭にかお前ら、忘れるなよ？ この人は青セイバーが収める前の、更なる混沌に包まれたブリテンを生き抜いたお方ぞ？ 紛れもない大英霊ぞ？

＜構えたブーディカの傍らに、二頭の馬とチャリオットが現出する。恐らくは彼女の宝具であろうそれに軽やかに飛び乗ってイスカンドラ



ルと向き合った。

「ふはははははっ！ 面白い、余と駆け比べか？」

「まさか受けない、とは言わないよね」

「受けぬ、と言っても容赦はせぬであろう？ ならば……付き合おうではないか！」

くそう言つて、イスカンドルも自分のチャリオットの手綱を取った。両者のチャリオットの大きさには差があるが、ブーディカに臆した様子は見られない。

ちよつと征服王の戦車のご立派あ！ 過ぎるんですよ……大きい的には多分象とヒョウくらいには大きさに差があります。そりやあZeroにてコンクリートを破壊、蹂躪して移動するくらいの破壊力も出るよなあ……

「二人共、私が居ない間、戦線を支えて置いて！」  
「で、ですが」

「此奴の機動力で好き勝手されたら、間違いなく私たちの戦線が持たなくなる！ 抑えられるのは……私だけなんだ！ 頼むよ！」

くそう言い残し香子の静止を振り切つてブーディカのチャリオットが走り始める。それも……真つ向から、イスカンドルの巨大な戦車に向けて。

へえっ!?

「ほう？」

「行くぞ、征服王……っ！」

待つてブーディカさん！ その戦車と貴方の戦車との間には隔絶し難い破壊力の差があるの！ 止めて止して落ち着いて！ 持ち味を生かせ！（届かぬ思い）

くそれに応えるように、猛牛たちが雄叫びを上げ、征服王の疾走が始まる。余りにもゆつくりと、しかし確実に蹂躪踏破するという意思を以て！ そこに立ち向かうブーディカの背中が、余りにもか細く見えてしまう。

「ふふ、余の戦車と力比べとは！ 存外と、お上品な戦いは好まぬか！」

「——誰がそんなモンスターマシンと真つ向勝負するか！」

◇だがブーディカの突撃は……突撃に非ず！ 貴方の目の前で突如として、ブーディカがイस्कन्दルの頭の上を飛び越えて見せた。しかも、チャリオット諸共に……逆さまになって！

「おおっ!？」

「流石に小回りはこつちの方が効くでしょう！ やああああああっ！」

さ、逆さまになったチャリオットから、再度ブーディカさんが奇襲を！ 落下速度に任せて突くう……とかスタイリッシュ過ぎでは？

は？ 惚れてキレそう（矛盾する精神）

「ぬうっ！」

「——浅いかっ！」

◇浅く切り裂いたのは、イस्कन्दルの頬。外したか、そう思った直後に、ブーディカは何と巨大な戦車の上にそのまま着地、堂々と立ち上がってその剣を振り上げ、征服王と切り結ぶ。

「フハハハハッ！ なんとも豪胆であるな！ ブリテンの女王！」

「その首、貰うよ征服王！」

なんなのブーディカさん、なんで敵のチャリオットの上で敵と切り結んでるの？ チャリオットの上で片足滑らせて回避するとかスタイリッシュが過ぎるよ？ あれなの？ 凛々しさをプレイヤーに見せつけないと気が済まないの？ あまりカッコいい姿を見せつけるなよ……？ 好きになるぞ？（藍染隊長）

「——マスター！ 見惚れてる場合では！」

◇はっ、と。上空の激闘から貴方は意識を戻す。そうだ。自分達の仕事は戦線の維持だ。周りを見回せば、必死に戦う味方のローマ兵達。まだ、敵は此方を崩せてはいない。自分達が立て直さねば。

自分のサーヴァントに言われるまで味方のピンチから目を背けていた糞みたいなマスターが居るらしい……というか俺だった。

◇ありがとう香子さん！

◇……ブーディカさんを信じよう！

お礼は実際重要、選択肢は上として、さて、ここからは耐久戦です

かね。藤丸君がお仕事を終えるまで気合入れて……バトれ。鬼種の魔は切つてないので、継続して大暴れしてやりましょう。

とはいえさつきと違って周辺全方向から敵が迫ってくるので、そこまで脳筋大暴れしていると袋叩きにされかねません。慎重に行きましよう。

「マスター、私が足止めしますのでその間に！」

とはいえ、雑兵相手なら凄いいアドを発揮できるキャスター、式部さんが一緒な訳で。そうそう簡単には負けませんよ。おらっ！ 何処から来ても香子さんの陰陽術は突破できまい！

「くっ、おかしな術を使う……っ！」

「数だ、数で押せ！」

かずう？ アアン？ 最近だらしねえな？ そんな情けない奴

らに負けたら空手の稽古確定なんだよなあ……通常訓練がグラウンド114514週の迫真空手とか受講したくないですね。

「「「ウオオオオオオオオオオ！ 数だ！ 数だああアアアアアア！「「「「」」」」」

まって♡ 予想の十倍近く雪崩れ込んで来たんですがそれが……何なのこれ、ノリがボーボボのそれだよ。思わず顔がビュティさんになっちやう！ もうそこまで行ったら顔面崩壊では？

とはいえ香子さんの援護は相変わらず続いているので無茶をせず、落ち着いて処理をしていけばいやゴメンやっぱ不安だわ。難易度が序盤のそれじゃないんですがそれは。

「あわわわわわっ!? と、取り敢えず足元を」

「「「どわああああああっ!?「「」」」」  
「物凄い引つかかっていらっしやる!? え、えつと……マスター、どうぞ」

コントやっつてんじゃねえんだぞ（憤怒の大罪） こっちは真剣にお前らをシバキ倒そうって努力してるのによお……舐めてるとぶちのめすのヒューマンオラア！ 行けホモ君！ アイアンバットだ！ 全員ザクロみたく仕上げてやる！

「がっ！」

「ごんっ！」

「イスカンドル大王ばんざああああああい!？」

スツゴイ個性強い兵士君居ない？ なんなの？ イスカンドルに扇動されたからテンション振り切って個性発現させちゃったの？ 雄英行つて？

まあ、取り敢えずは現状凌げているので問題は、ない……かなあ。ちよつと数が多いので処理が大変っただけで。それも、落ち着いてプレイして居れば大丈夫です。何か致命的なガバが無い限り。ふ、勝つたな。

という事で、ここからは数を減らすだけなので……

くか……ツトオ！

あー……めんどくせえ！ 数をプチプチ減らすだけとか完全に作業で見所さんもないからどうしようもないんですよ！ まあ倒される兵士君の中に个性的な悲鳴を上げて倒れた奴も居ましたけど、そんな映す為に全部使うとか編集魂が許さへんし……

「——マスター、どうやら敵の攻勢、収まりそうです」

〳〵視線の先、多くの敵が此方へと視線を向けているが……不気味なほど静まり返って動きを止めている。

まあ、終わりまで即カットですよ。因みにドロップは……ありませんでした。英雄の証の一つや二つ寄せオラァン!? 二十数体仕留めたんだぞこっちは!

「いいのかいイスカンドル、指揮を執らなくて……兵を無駄に失うばかりだよ！」

「……」

〳〵そして、イスカンドルとブーディカも何時しか両者動きを止め、膠着状態に入っていた。両者ともに、手傷らしい手傷を負っている様子もなく。しかしその周りには戦いの余波なのか、抉れた地面や、崩れた岩が転がっている。

「それとも音に聞こえた征服王、そこまで兵を率いる才はない、とでも？」

「——兵を無駄に失う、というのは全くお主の言う通りよ、勝利の女

王。余としても、このような作戦は取りたくなかったのだがな……サ  
ヴァントというのは、厄介な面も持ち合わせておるわ」

「何?..」

いやあブーデイカさんも煽りよる……で、どうして私の方向を見て  
いらつしやるのでしょうかイスカンドル王は。何か私に御用なので  
しょうか。

「頃合いよ……異界の魔術師！ カリギユラに宝具を使わせろ！」

「——なっ!?!」

えっ?.. なんで急に空に稲光を……?..

「……ぬう、ウウウウウウン！ 『我が心を喰らえ、フルクティクルス・デイアーナ月の光』 アアアア

アアアアアア！」

は?..

∨前前に逃げる

∨防御する

∨今持てる全力で庇う

えっ?..

∨前前に逃げる

∨防御する

∨今持てる全力で庇う

まあって、反射で一番下選んじやったけど待って良かったコレ。  
ねえ、お兄さんワカラナイの。許し亭許して(懇願) ホモ君が真つす  
ぐ香子さんの所に……

「きやつ」

だ、抱き締めたっ！ 情熱的に！ 胸元に抱いたっ！ そして月の  
光を背に！ し、しかし……これは、待ってモロに食らわない？ あ  
の、サーヴァントにも通じる精神攻撃を一身に浴びるとか、まあって、  
ちよつと、ホモ君ストップ！

∨一瞬。間に合った。直後……敵味方、あらゆる者を巻き込んで、狂  
気の光は解き放たれた。

……こ、今回はここまでです。

オイマテ、カリギユラに宝具を使わせるって……この状況下でと

か。次回マジで阿鼻叫喚な気しかしません……お兄さん助けて！

## ガリア戦役 その五

皆さんこんにちは、ノンケ（クソデカ晴明感情法師）です。お前そう言うキャラだからって許されると思うなよ……

前回は、えつと。まさかの不意打ちを喰らい……伯父上を投入したのってそう言う事かよおおおおお!? お陰で戦線が大混乱に陥りそうです。というか、それだけじゃなくてホモ君の様子がおかしいんですけど、あの、コレ、やらかしましたかね。再走案件？

「あぁっ……うえっ」

「月がっ、月がアアアアアアッ!」

「ろー、ま。しんそ。ばんざ、ざ、ぎざ、ぎざぎざぎざぎざ」

＜ローマ軍、連合ローマ軍、誰彼構わず跪かせる月光の輝き。あらゆる狂気を掻き立て暴き、引きずり出す。それこそが、このサーヴァントの真骨頂。それを今、この場に居る誰もが、否応なしに体験させられている。＞

「っ! イスカンダル、お前!」

「……言い訳はせん。そして、悪いがこのまま押し切らせてもらおうとしよう」

＜そして、そこを狙ったかの如く……イスカンダルの後ろから聞こえる足音。この機を狙って残っていたのだろう、此方へと粛々と歩みを進める連合ローマの兵隊たちが。＞

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!」

しかし酷い。まさか味方諸共巻き込んでの宝具発動とは……どうりでイスカンダルが『気乗りしない』とかいう訳です。でも分かりました。これの提案者はさては怨敵のあん畜生だな? レ／フ死すべし、慈悲は無い。

とはいえ今は未来のレ／フより目の前の連合ローマです。嫌と言う程理にかなった作戦ですからね。こつちが混乱した隙に付け込むとかクソが（全力投球）

『こ、この反応は……前回発動されたアレか! ロマニ、ヤバいぞー!』  
『え、何!? あのちよつと待ってね藤丸君……それで、前回発動され

たつて、あの精神攻撃の!? ちょ、大丈夫なのかい!?

『大丈夫な訳が無い! 式部、本造院君は!』

『マスター!? マスター!』

◇咄嗟に、自らを壁として、貴方は香子を輝きから庇う事が出来たが……その代償は当然ながら貴方が支払う事となる。

そして……前回驚きの超反応をして香子さんを奇跡的に庇う事に成功したホモ君ですが、自分自身はダメみたいですね(諦観)あーもう物凄い呻いてますよ。あ、いえちよつと違いますね。え? ちよつとマシになつてるのかつて?

◇もはや、貴方の頭の中に、理性的な考えは浮かばない。頭の中に直接電気ショックを流されたが如き衝撃。上げられるのは、ただ獣の如き絶叫のみ。バーサーカーと共に、狂奔の二重奏を奏でていた。

逆にかけている声之余りにもグロすぎるだけなんだよなあ……寧ろ周りより酷いまであります。クトウルフチックな叙述が似合うかもしれません。名状し難そう(短借者並感) ジツサイ言語化は不可能めいている!

「酷い……マスター、しつかり!」

◇——意識が、揺らぐ。頭の奥が、軋む。貴方には、目の前の人が一団誰だったかも分からなくなっていく。あらゆるものをべた付く熱量が塗り潰していく。額の角が唸りを上げている気がしていた。

『本造院君のパラメーターが……っ! 式部、彼をそこから引き離すんだ! 急いで!』

『待てロマーニ! いま彼女が無事なのは!』

『……彼が盾になつて居るからか!? ダメだ、下手に動けないじゃないか!』

頭の中までしつかりツキジめいた惨状で草も枯れますねクオレハ……し、しかし慌ててはいけません。こういう時こそ偉大なる兄貴姉貴達の軌跡を見て、心得を学ぶ時。取り敢えずメガトンコインの回を見直してだな……(発狂済み)

しかし、真面目にどうしようもない状態なんですけど、何か、何か切欠があれば、まだ何とかしようも……!



「～周辺の敵味方が阿鼻叫喚と叫ぶ。自爆テロにも等しい、破壊無き圧倒的な暴力。もはやこの場の主導権を握ったのは、月光を背負うバーサーカー……」

「——ヌウウウウウウン！ 圧制者よ！ 汝の圧制を、受け止めよう！」

「っ!？」

「そして汝にも、我が愛を受け止めて貰おう……っ!」

「～しかし、しかし！ その場の支配を、圧制を、跳ねのけてこそと、吼える男が居る。灰色の巨人が、狂気の渦すらはねのけて、堂々と立ち上がって見せる！ 故にこそ、彼はスパルタクス、反逆者の英霊である！」

粹 ス ギ イ ！ や り ま す ね え ！

「なんなの？ 感動しか生めない英霊なの？ 月の光の狂気を跳ね除けるとかオリオンなの？ 大英霊なの？ 大英雄なの？ 大英傑だったわ（誤った三段活用）」

「っ！ 光が！」

『宝具の中で宝具を殴って止めるとか……つたく、滅茶苦茶だなこのマッスルマン。式部、今の内に』

「わかってます……っ！ マスター、肩をお貸しします、気を確かに！」

「香子さんサンクス……ホモ君もそろそろ回復して欲しいんですけど、光も収まりましたしさあどうだと思っただけどああこれダメだ。獣みたいな唸り声上げてる。ぐふしゆるるるとか言ってる。ダメだ。危ない。」

「マスターは!？」

『ダメだ、パラメータの乱高下が収まってない！ あの洗脳宝具、ここまで威力になるだなんて』

「～地面から空を見上げながら……体の底から湧いて来る、流れる血潮が吠えたてる、呪詛を聞いている。考えて理解するのではなく、直接感じ取れる。異様な感覚を、貴方は味わっている。」

めつつちゃ洗脳宝具喰らっている（恐怖） なんか（狂気に）侵されて

るよお……！　なんか角の輝きまで段々厳つくなってきましたし。こんなな精神攻撃に弱かったのかホモ君は……っ！　耐性つけな  
きや（使命感）

『式部、頼む、敵を迎撃してくれ』  
「っ……っ！」

『現状動けるのは君だけだ。本造院君を叩かせる訳には行かない。君に気張ってもらうしかないんだ、頼む』

「マスターを……私が」

〈自分は何をしようとしていたのだろうか。ごちゃごちゃと考える事が出来なくなった……が、その代わりに嫌にすつきりした頭の中で、一つの答えが固まっていく。〉

〈――敵を討ち果たす。〉

〈――感覚に身を任せる。〉

こ、ここで選択肢だとお!?

コレ選択ミスしたら間違はなく人理焼却、又は単独ゲームオーバーのどつちかですよね!?　どうして……どぼちてこんなことするのおおおおお……こ、こんな選択肢一つで死にとうない！　助けてたもれ!

うう、ここで……どうするべきでしょうか。

常識的に考えて敵をブチ倒す、っていう選択肢が良い気がしないでも無いです。だってこういう暴走状態って、目的もなく暴れまわって周りに被害出すのがパターンですし……目的を与えてやればいけるんじゃないでしょうか……

――ンンンンン？　本当にそれでよろしいのですかな？――

はっ、お前は！　俺の心の中の悪魔！（イメージはリンボ）

――どうせ見所さんが欲しいのでしょうか？　であれば、より荒れそうな選択肢を取るのは必然かと存じますが……？　如何でしょう――

た、確かに、それは……

正直こうなってしまった時点で大抵、こつちにマイナスなイベントが起きるのは確定かもしれない。となれば。攻めて此方が欲しがる

見所さんを手に入れてしまふのは実は間違っていない……？（ひらめき）

——躊躇う事はございません！ さあ、口に出すのです！ 常識的な選択肢を選ぼうとおもいましたが……やめましたと——

あ、あ……そ、そうだ。どうせ暴走するのであれば、見所さんを、見所さんを探さないといけません。良いだろお前実況動画だぞ（正論）という事で私が感覚に任せて暴れるのも、致し方ない事なんだよお！（終わりの足音）

◇◇——敵を討ち果たす。

◇◇——感覚に身を任せる。

◇——こういう時は、どうするか。あまり考えるのは苦手だ。感情に任せて暴れるのが昔からのセオリーだった。

「ま、マスター？」

◇立ち上がって、前を見る。今、自分が感じるままに。力を振るえば良い。結果はおのずとついて来るはずだ。自分が感じているのはなんだ。怒りか。愉悦か。それとも。貴方は一瞬、迷って……

あー目が据わってますね。コレは暴走フラグですよ……第二特異点にして暴走フラグとはやりますねえホモ君も。見所さんを切望する視聴者も、これには大満足や。あ、因みにコントローラーからはもう手を放してます。操作効かなくなつたからね選択肢選んだところから。困つたもんじゃい！（期待感）

「——ならば、私の言葉を思い出したまえ。若き反逆者よ」

◇ふと、そんな言葉が聞こえた。

「狂乱の支配に、君は自らの手で叛逆せねばならない。君のそれが内から湧く物ならば手段は如何様にもあるだろう……いっそ、何処までも高く飛んで見たまえ。真っ向からぶつかるとはではなく。自由に、支配から解き放たれる為に」

つとここでスパさんですか。ンンンンンンンンあいやしかし、最早ホモ君にその様な尋常の言葉、届かぬと思われませんか？（悪性受容）さあ、このハゲのチンピラが拭いきれぬトラウマを背負う所を見ながら盛り合おうぜ（愉悦部）

＜敵と取っ組み合いをしているとは思えない程、穏やかな声だった。今の貴方にはその意味を考える事は出来なかつたけど……叛逆という一つの狂気を以て語り掛ける彼の言葉は同じく狂気に染まった頭に、通じるものがあつたのだろう。一つの答えが纏まった。

つてアレ？ 普通になんか効果与えちゃつたかな？（想定外）あの、態々暗黒面に落ちてまで選んだ選択肢だつたんですけど、見所さんが……

＜先ずは此方へと、自分を殺そうと向かつてくる奴らを叩こう。他は今を考えない。敵と明確に認識できる相手を、即座に粉碎しよう。心の奥底から湧き上がる熱に身を任せたままに。その思考の元……貴方は、立ち上がつて。押し寄せる敵の方向へと視線を向けた。

……えつと……そのですね（一転不利）

よし！ 予定通りだな！（強引）コレでホモ君が敵を叩いてくれれば万々歳や！

と言つた所で、今回は此処までとなります。次回はホモ君が何かしらしてかしてくれると期待できるので、其方に注目していききたいと思います（話題逸らし）

ご視聴、ありがとうございました。

## 幕間の物語：目覚めの兆し

「——かかって来い。どうせ時間もないんだ」

目の前で、ゆらりと立ち上がった少年から……表情という物が消えている事に、一番身近に居た香子は真つ先に気が付いていた。その声も、何時もより平坦で。いつそいつもより冷静なようにすら見えた。

「ま、マスター……」

伸ばした手の先、康友は振り返りもせず、此方へと押し寄せる大量の連合ローマ兵に向けて歩き出した。カラカラ、と引き摺るバツトの音が、怒号に交じって嫌にハッキリと聞こえている。

——香子が何よりも恐ろしかったのは、発動した、泰山解説祭だった。

『』

見えない。文字が現れない。白紙のモノログだけが、痛々しいほどに彼の今の心の内を表している。胸元にやった手をキュツと握りしめた。あそこにあるのは、残酷な真実に他ならない。

「——止めない」と

あのまま行けば、彼は何処までも行ってしまう。それこそ、手のつけようのない場所まで。確証は無いが、頭のどこかが警鐘を鳴らしている……だが。

『それは駄目だ』

そんな香子に、ダ・ヴィンチは即座に待ったをかけた。

「どうしてー!」

『現状で、自分達で抑え合ってる暇はない。ブーディカも、スパルタクスも、自分の相手で精一杯……敵を全員排除してからなら、未だ話も違うけど。彼を止めて居たら、私たち全員死にかねないんだよ、この状況は』

あまりにも残酷な、戦場での採択。ダ・ヴィンチの言葉は何処までも非情で、そしてどこまでも正しかった。言い返す事も出来ず。そして。

「今こそ、僭称皇帝ネロの軍を討ち果たす時だ!」

「進め！ 恐れるな！ 我ら連合ローマの尖兵である！」

「すすめええええええ！」

敵が怒号と共に襲い掛かってくる。大地を揺らす程の音も、気にしてすらいないう様に見える。ただ、からくりの様にバットを振り上げて……先ず、先頭の男の頭蓋に向けて振り下ろす。鈍い音と共に、無言で一人目が大地に崩れ落ちる。

「——えっ？」

無表情、一切の掛け声すらなく一撃で頭蓋を打ち砕いたその様子に、思わず、と言った様子で兵士が動きを止めた。その一瞬の困惑ですら、この少年には十分すぎた。

「げへ」

次に狙ったのは相手の首。しかしバットではなく素手で。相手の首を鷲掴みにして力づくで、へし折った……軽い、パキリという音と共に。余りにも凄惨な光景に、思わず喉奥で悲鳴を上げてしまう。

「こ、こいつ……!？」

「一斉にかかれ！ 急いで……！」

声を上げたその一瞬で、先ず一撃。最初に声を上げた方の顔面にバットがめり込んだ。鈍い音と共に後ろに倒れる仲間。その顔を呆然と見つめる男を、前蹴りで乱暴に倒し、後ろに続く兵士達にぶつけた。

「ちよ、何する！」

「俺の所為じゃ……ぎ……え」

それを受け止め、崩れ落ちた兵士を含め二人がひと塊になった所で、容赦なく倒れ込んだ方に一撃を見舞う。ぐしゃりという音、その直後の一撃横振りが、受け止めた側に突き刺さる。

『強い……精神が混乱しているとは思えないぞ。どうなってるんだ。脳のリミッターでも外れたのか……?』

「——いいえ。ダ・ヴィンチ様。恐らくマスターの強さは何も変わってません」

康友のスペックが変わったのか。そんな疑問を浮かべるダ・ヴィンチに対し、香子是否と口にする。自分のマスターの動きを誰よりも見

てきた彼女だからこそ。それは分かる。その上で……彼女には、ある予想がついていた。

「恐らく、容赦が無くなったからだ」と

『容赦?』

「……人の心に触れて来た身故。分かるのです。まるで感情も無く、冷徹に相手を処理するのがどれだけ恐ろしいか、というのは。痛いほど」

宮中でも、そんな人間が居た。相手が感情を露わにしている時でも、自分が侮辱されている時も、まるで感情の一つも表さずに、淡々と、過ごす人間が居るのだ。それが、常人の恐怖を煽る。そして。

「相手が理解できない。自分の常識に当てはまらない。だから……」

『相手の不意を突ける?』

「右大臣……道長様も狂人の類が最も与し難い、と言われておりました」

故に、一切の躊躇なく、相手の都合など考えず、ただ自分の都合を押し付ける戦い方をする彼は……今現状、相手の動きを完全に制していると言えた。

『けど、彼そう言うタイプじゃないよね』

「ええ。恐らくは……あの宝具の影響が大きく出ているのかと」

『——人間、錯乱状態になった時に普段より凶暴性が跳ね上がって強くなる、なんて事もある。その類と考えれば、説明はつく、か』

相手を錯乱させる作用だとは思われる。それが、一種プラスに働いたのだろうか。

『しかし、相手が全く対応できていない、というのはそれに付けても不思議だけど』

「常識の外にある相手に合わせるのは、難しい物なのです。人の心も、頭も、実に複雑ですから」

『……成程。いわば、今は無防備な相手をタコ殴りにしている訳か』

身も蓋もない言い方をすればそうなる。寧ろ、そうでもしなければ康友が無双をしている様に見える現状は先ず成立しない。

それは幸運なのか……否、幸運とは到底言い難い。正気を失った暴

走。そのの行きつく先は？ 分かりやすい、陳腐な結論だろう。しかし、少年が負う心の傷は陳腐では到底済まない。

「――なら」

そんなあの少年に、何が出来る？ 止める？ その間に彼諸共殺されてしまつては元も子もないというのには？ 心に寄り添う、文字を書く、そんな事が得意な自分出来る事は？

サーヴァントとして、出来る事は。たった一つだ。

「――香子は、呪に詳しくは、ありませぬ」

今、必要なのは力ではない。自分が戦いに参戦した所で、出来る事はそこ迄ない。であればもつと、多くの人の心を動かすのだ。

「けれどけれども……心ならば――」

香子が発動したのは、呪詛をばら撒く宝具……ではない。もう一つの、回復宝具。狙いはマスターではない。今必要なのは、味方だ。彼を一人で戦わせない為に。一人でも多くの味方を。

「源氏物語・桐壺・別離」

結界、回復宝具。桐壺の生と愛の歌が……呻き、狂気に侵されていたローマ兵達を癒し救う。全員とまではいかずとも彼らが居れば状況は、逆転する！

「こ、れは……」

「俺は……一体、なにを」

『――驚いた。回復宝具とは聞いていたが、まさか精神へのダメージも回復できるのか』

「当然かと。本来和歌というものは、心に届くものです」

周りのローマ兵が立ち上がったのを確認し、香子は走り出す。もう彼が戦う必要はないのだ。止めなくてはならない。此度の事が、彼にとって致命的な、心の傷になる前に。急いで。

「――マスター――」

声が響く。

しかし、少年は振り返らない。次の得物に向けて、バットを振り上げている。声では届かないのか。

『ろぶし』



文字がにじみ出て来た。狂気が薄れてきているのか。そう淡い期待を持った、直後。

『滅ぶべし』

ゾツとした。たった一言。その言の葉から、恐ろしいほどの怨念を彼女は感じ取った。単純な言葉故に、心を穿つ。彼の言葉とは思えない程に。ダメだ。これ以上は、絶対にいけない！

「マスターっ！」

飛びついて、押し倒そうとして……しかし力が足りない。如何にサーヴァントとはいえキャスター、フィジカルでは貧弱な香子では。……」

「もう大丈夫です！ マスター！ もう十分です！」

それでも必死になって少年に組み付き、離れない。動きを阻害され、漸く少年が香子の方に顔を向けて……その時だった。少年の表情が一変したのは。

『——藤原』

「えっ？」

声が違った。香子を見る目が違った。しわがれた、老人の様な声だが、少年の喉奥から響いてきた。冷徹な瞳が此方を見据えていた。角の雷電が、激しさを増す。まるで、香子が最後のスイツチを入れたかのように。少年は……バットを、振り上げる。その狙いは、既に、連合ローマ兵ではなく——

「——なあにやっつてんだこの馬鹿！」

その側頭部に、おでこが突き刺さった。ぐわん。という音が聞こえるような一撃が見事康友の頭を揺らし……目に、光が戻る。香子の目の前に立ったのは、青い瞳の黒髪の少年だった。

「あれは……カルデアのもう一人のマスター。という事は」

「そこまでだ。征服王」

その直後、ブーディカとにらみ合うイスカンドルの後ろから声が響く。いつの間にか彼の首筋に、紅い隕鉄の剣が突きつけられていた。

「皆様、ご無事では……なさそうですな！」

「何でもいいけど、私の焼く獲物、残ってるかしら？ ちよつとあのセ

イバー一人じゃ消化不良なのよ」

バーサーカーに対するサーヴァントが一人から、三人に増えている。槍と盾が、焰が、バーサーカーの僅かな動きすら牽制している。唸り声を上げてはいるが、全くもって動けない。

「ったく、何やってんだ相棒……らしくない暴れ方して!」

「あの、凄い音がしましたけどやっさんは大丈夫なんですか?」

「相棒は頑丈だから大丈夫だよ」

混乱を生む、連合ローマとの戦線。その佳境の最中——藤丸チームが、戦場へと到着した。

## ローマの進撃 その一

皆さんこんにちは、ノンケ（トリ）です。この一言で分かるってもうミニチュア化され過ぎじゃないだろうか円卓の騎士。

前回ですが、ホモ君が洗脳されました。えっ?! チンピラハゲが対魔忍を!? んな訳ないでしょ（正論） 途中、私の内なる悪魔が囁いて悪の道に走りましたが、結果として上手い感じになったのでノーカウントです（粗製） トラウマ? そんなもん藤丸君だって沢山背負って来てるでしょ（適当）

「ったく、何やってんだ相棒……らしくない暴れ方して!」

「あの、凄い音がしましたけどやっさんは大丈夫なんですか?」

「相棒は頑丈だから大丈夫だよ」

〈荒れ狂う貴方に一撃を叩き込んだのは、カルデアもう一人のマスター、藤丸立香! そしてブーディカと睨み合っていたイスカンドルの背後を取り、その首筋に剣を突き付けたのは紅い皇帝。ネロ・クラウディウス。〉

「——うむ、カエサルのおめ。随分と楽しみながら逝ったようだな。全く羨ましい」

「また随分と好き勝手やってくれたものだな……覚悟は出来ているのだろうか!」

いやあナイスタイミング藤丸君! それにしても頭突きとは、なんとも豪快だとは思いま……待って? HPの減りがエゲツナいんですけど? アア イッ! ! (遅れてきた悲鳴) もうちよつと手加減して? 因みに藤丸君の一発で体力一割持っていかれまして。酷い。

〈頭突きの衝撃が、頭の中を真っ白に染めた。たたらを踏みながら崩れ落ち……体を香子に抱き留めて貰ってしまう。一気に押し寄せると頭の痛みと疲労、そして吐き気で、身を預ける以外は無い。〉

「しかしなんという……此方も相当な激戦だった模様ですね」

「予想と全然違う顔が二人も居るんだけど。あのDEBU一人じゃ物足りなかったから私が焼いて良いかしら?」

「バーサーカーを包囲するのは、レオニダスとオルタ。オルタに至っては本当に焔のサークルで相手を包囲している。許可を求めようとしているが、その前に既に行動は完了していた。」

「オルタちゃんが兄貴みたいな事してる……オルシュートの姉貴！ ペッシ役はマシユか藤丸君かな？ 随分可愛げのあるマンモー二だなあ……」

「しかしピンチの限界寸前に現れて敵の動きを牽制するとか、流石主人公チーム。良い登場の仕方してくれるじゃあないですか全く……誇らしくないの？ 誇って？ 誇れ。お前たちのカツコ良さを誇るんだよ！」

「どうする。今、ここでお前たちを討ち取ってやってもよいのだぞ」「というか、ここまでやったんだ。無事に逃げられると思わない方が良い」

「フハハハハ！ 良き殺気ではないか、薔薇の皇帝、勝利の女王！ 余も、ここでお主達と雌雄を決する事が出来るのであれば、万々歳という物だが……しかし」

「前後に一級のサーヴァントが居る状況で、臆するどころか、征服王は尚も堂々と笑っていた。既に趨勢が決まった状況だというのに。」

「お？ 余裕やな征服王。こっちは七、そっちは二、戦力に差があり過ぎる……やっちゃおうか、やっちゃいましょうよ！ 二人の英霊を一から調教するなんて久々だから、楽しみますよ（舌なめずり）」

「済まぬが、召喚された身故。それも出来ぬ。悪いが、通して貰うぞ」  
ひえっ（一転弱体） お顔が怖いのじゃ……ボイスが凄いいヶボになってる……やだ良い低さ……孕んじやう……（ホモの遺伝子）」

「だが、現実的に不可能じゃないか？ 人数的には不利というしかないこの状況で」

「——若いマスターよ。今現状、余とお主らの間にはそれ程の差があるぞ？」

「立香の言葉は正しい。連合ローマの兵は著しく減少。一騎当千のサーヴァントの数も、現状は此方が上回っている。先ず間違いない、こっちが有利と言える。だがしかし……それでもイスカンドルは不」

敵な笑顔を崩さない。

「違うのか？」

「んん、いや間違つては居ないぞ？　ただし……お主達をあつさり屠れるほどに圧倒的な差があるという意味だがな」

あ、全員が凍った。ネロちやまが見た事無い表情してる。ビューティ先輩みたいな表情してる。それでもくあいとかさては反則やな？

「——冗談か？　そう全員が思ったのだろうか。しかし。イスカンドルの表情が、それを本気で言っている事を告げていた。そしてその中で口を開いたのは、貴方を手の中に抱えながら、イスカンドルを睨む香子だった。」

「……それは一体、どのような」

「見せてやりたいのは山々だが……それは我が宿敵、ダレイオスの奴めに真つ先に見せてやりたいからな。という事で、ここは特に手札も見せずに撤退させてもらおうか。丁度手本は……その髪の毛の薄い若造が見せてくれたからな」

「その直後、掛け声の一つすらなくイスカンドルが鞭を打つ。完全に不意を打たれた形になったネロとブーディカの間から、あつと言う間に抜け出してしまった。」

「ファツ!?　い、今のはホモ君の不意打ち行動!?(解説者並感)　こういう小技を素早く習得するあたりはやっぱり英雄やな……サーヴァントは成長しないって言いますけどアレって次に召喚されるまでの話で、顕界してる間は普通にガンガン成長しますからねホント。」

「しまっ!?!」

「ふはははははは!　一度勢いに乗ってしまったえば此方のものよ!　さらばだ、また何れ決着を付けようではないか益荒男共よ!」

「イスカンドルの駆ける先、そこには三人のサーヴァントに囲まれたカリギュラ。それを回収しようというのか、真つすぐにチャリオットを走らせる。それに気が付いてオルタとレオニダスは速攻で下がったが……スパルタクスだけは、違う。」

「——ハハハハハハ!　逃がす訳には行かぬなあ圧制者よ!」

「ぬおっ!？」

「何と、動かなかった。彼はチャリオットの進む先に堂々と立ち塞がった。」

皆さん、勘違いしちやいけません。仁王立ちだと思ってるませんか？ そんな甘いもんじゃございませんよこの人。そのチャリオットに向けて突撃してるんだよ。真っ向から突っ込んでるんだよマシで。本当に苦難の道程しか選んでないんですよこの人。流星スパさんだよ……誰も真似できねえよ……

「我が愛を受け取るがいいいいイイイ！」

「うおおおおおおっ!？」

「——鈍い音がした。まるで漫画の様にスパルタクスは宙を舞い……イスカンドルは若干冷や汗すら掻いていた。初めて、彼の顔から余裕という物が消えていた。」

す、スパサーン!? 良い感じに空を舞っておられる! まるで某水を被ると女になっちゃやう系漫画の如く……ああ……(落胆) やられたなあこりや……(分析)

え? やられたのかって? 今、邪ンヌの目の前でぬぼっと起き上がって旗でシバかれていますよバシバシ。なんか可愛くない? ギャグからシリアス迄、何でもござれの万能マッスルマンのスパさんを皆さんよろしくお願いします。

「……なんとまあ。サーヴァントには色々居るものであるなあ……」

「ネロオ……っ!」

「おう、済まんがお主の姪に構っている暇はない。離脱するぞ」

「しかし、度肝を抜かれて尚、見事にバーサーカーを回収し、その動きを冷静に制するあたり、実に手際は良い。その背中を追いかけようとするスパルタクスを、近寄っていたブーディカが抑え込んだ。」

「ぬううううううう、圧制者よ! わが愛から目を背けてくれるな! 抱擁を受けとるのだ!」

「いやアンター一回跳ねられたんだから諦めなよ……いやスゴイ、力、強いっ……!」

スパさん凄いい叛逆バイタルで草。につこりとしながら立ち上がる

暇も惜しいとばかりに地面這って追いかけてようとしているのがホント草。そしてブーディカさんが若干力負けしてるのが重ねて草。信じらんねえ！　こんな（拘束）緩いんかよ！

「ふははは、余を追いかけるのは構わんが……その方の兵士たちを放っておいて構わぬのかな、薔薇の皇帝よ」

「貴方が周りを見回せば、未だ苦しんでいる者、苦しみに耐えかねて気絶している者。連合ローマ、ネロの兵、双方入り乱れて倒れ伏している。」

「……いや、そうはいかぬ。今は我が兵の救護を優先させてもらおう……余の民を見捨ててまで戦う必要もない」

ネロちやまは、ここら辺でDEBU……いや、もう倒されちゃったし伏せる必要もないですね。えー、ここで藤丸君が戦っていた相手は、ブルータスで有名なカエサル……の、太っていた時期というか。クラスはセイバーです。

で、その辺りで色々自分の皇帝としての在り方を見直す訳なんですけれど、そのイベントはまあホモ君には見せて貰えなかったという事で。ばかあ！（無念の意）

「という訳だ。逃げるというのであれば、余達も無理には追わぬ」

「ほう……そうか、そうか。成程なあ。ならばその言葉に甘えさせてもらうとしようか。ではな！　次に相まみえる時こそ、雌雄を決そうではないか！」

「——当然。ダレイオス殿が復活した暁には、再戦を！　必ずや余達が勝つ！」

「言うではないか、全く、次が楽しみになって来た！」

「そう言った征服王は……敗北した側の表情とはとても思えぬ程に、自信に満ち溢れた笑顔を浮かべ。そして……一瞬、カルデアのメンバーを見回してから、チャリオットを走らせ、地平の向こうへと消えていった。」

そして、漸く……漸く、此方をかき乱すだけかき乱してくださいました征服王のご帰還となります。難易度の乱高下がもう嫌……コレでまだデカイ決戦の一つ目だと言ってうんだからホント、こっから先はもう

い、逝くくうく逝く逝く逝く逝く逝く逝く（死の運命）

……お〃 おおおおおお〃 おおおおおお……（唸り声）

「……勝った、の？」

「ここを支配していた僭称皇帝、カエサルは討ち取った。間違いなく、勝ちである」

「カエサル……カエサル!? カエサルって、あの!?!」

「うむ。それ程の男とて、黒幕ではないとの事だ。あのイスカンドルが一人の将として動いているのといい、此度の戦は余程の相手が敵に回っているであろうな」

くそうネロは言うが……此方の兵士も向こうの兵士も、多く地面に倒れ伏し、無事な者の方が少ない。勝利というには、余りにも苦しい状況であることは間違いなかった。

はっ、しまった、ついレインボーダデーに（癡）現状、相打ちつて言われても納得しそうなのは間違いない。いきなりこんな消耗しちやつて……なあ（迫真）どうすんだよなあ、どう誠意見せてくれんだよお前（難易度上昇に憤るホモ）

と言った所で、今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。



## ローマの進撃 その二

皆様こんにちは、ノンケ（下父上）です。この呼び方自体大分不敬だと思っんですけどジツサイぐだ男ぐだ子は呼んでいるのか。疑問は尽きぬ。

前回は結構ピンチな所に藤丸君達が乱入、生きてるうゝゝって感じがしました。後スパさんが綺麗に空を舞いましたね。因みにS I Nの時と違って完全にギャグでした。凄い痛そう（小並感）

「——香子が回復してくれた奴らは、何とか持ち直したけど……：他は全員立てるような状態じゃないね」

「そうか……ブーディカ、お主のチャリオッツでどれくらい運べる？」  
「荷台を引つ張って、それでも二十人も行かない。全然足りないよ」

〈ネロの表情が曇る。バーサーカーの与えた被害は甚大と言わざるを得なかった。実際貴方も、頭の底から響いて来る痛みと吐き気で、立ってるのも厳しい。〉

「全員で纏めて運んで……：それでも結構時間かかると思うよ」

「本国から援軍を寄こして回収するしかあるまい。ガリア戦勝の宴を開いて、その間に」

「兵士たちの慰安もしなくちゃいけないし」

まあそのね……回復したとはいえ一度は心を昏睡レイプでぐっちゃぐちゃにされたのでそりゃあ。精神的に疲労しきった量産型TKGW様が大量に発生しております。もう十分だ、もう十分だよ……

『こっちは先ず、本造院君の回復を優先したい。影響が相当大きいらしいから』

「マスター、大丈夫ですか。無理せず、さ、吐いてください」

〈香子に背をさすられているが、ここまで二度は間違いなく吐いている。もう胃の中身すら残っていない。それでも、存在しない中身をぶちまけようとして胃が脈動しているのだからタチが悪い。〉

ゲロハゲとかお前マジで情けないの？（容赦ゼロ）でもまあ、伯父上の宝具をガッツリ受けたし、そもそも人間が受けてあんな大暴れするくらいおかしくなったんだからまま、しょうがないね（掌大回

転)

「となれば急いで陣地に戻るべきであろうが……どうだ？ ヤスの調子は」

「マスター？ 大丈夫ですか？ 立てますか？」

「そう言われ、足に力を入れてみたが……駄目だった。全く力が入らなかった。」

藤丸君はピンピンしてますが、ホモ君は精神デバフに加え体力消耗で満足に動けない二重苦です。やっぱ、世界はぼっと出のオリジナル主人公には厳しいんやな、って……強くなれハゲ。其方は美しい。

「……駄目です、立てそうにありません」

「であれば、私が背負いましょうか」

「そう言つて目の前にしゃがみ込んだのはレオニダス。貴方は、戦いの後で疲れてはいないか、と聞いたが、その心配をレオニダスは豪快に笑い飛ばした。」

「スパルタを舐めてはいけません！ 戦の一つや二つ熟した後でも、地平線の向こうまで病人を送り届ける程度、屁でも無い！」

頼もしすぎませんか？ ベスト出せるようにね、とかもうそう言う次元の話じゃないやん。これで本来の出力より実力は落ちてるって言うんだから本気のレオニダス王ってどんななんでしょう。夢が広がりんぐ。

「でしたら、申し訳ありません。マスターをよろしくお願いいたします」

「承りました！」

「ぐいっと力がかったかと思うと……いつの間にか、レオニダスの広い背中に貴方は背負われていた。暖かい温度、鉄の様に固く、しかし弾力のある背筋。なんだか地面に居る時よりも、安心する気すらした。」

ん？ (ホモはせっかち) そんなレオニダス王の魅力にまた一人やられたようだな……だがチンピラハゲはカルデア四天王の中でも最弱……他三人を先ず探してこないといけませんね。K (キアラ)、B (BB)、S (スカサハ)、って感じでどうでしょう。ホモ君が格落ち過

ぎるんだよなあ。

「ううむ、この体の預け方……見た目以上に消耗は激しいと見ました。急ぐ必要がありそうです！」

「ではお主だけでも先に野营地の方に戻った方が良いのではないか？」

「しかしマスターを放って私だけ、というのは些か……」

「そうしていると、誰かに持ち上げられる心配がして……気が付けば、レオニダス以上に広い背中に背負われていた。その背中は、ちよつと灰色がかっていて。それが誰か想像するのは容易かった。」

「スパルタクス殿」

「叛逆にも休みは必要だ。私は当然ながら朝から次の朝までずっと叛逆しているが、彼はそうではない。常人には十分な疲れへの叛逆が必要なのだ。故にこそ……彼は私に任せてもらう」

やだ、スパさんの背中大きいナリ……というかハゲのチンピラがムツキムキグラディエーターに背負われてるという中々に暑苦しい状況だというのに、全然そう見えない。それはきつと、スパさんがとてもやさしい笑顔をしているから。

「じゃあスパルタクス。式部と一緒に先に戻っててくれる？」

「ハハハハハハ！ では行くぞオ！」

「つてもう出発してるし！ 式部を置いて行くんじゃないよ！」

「ドドドド、とスパルタクスが走る音が聞こえて来た。疲労の限界が既に来ていた彼としては、その振動すら心地よいレベルで……貴方の意識は、速攻でブラックアウトしてしまった。」

あ、画面が暗転した。

ホモ君も限界だったみたいですね。逞しい男性の背に揺られて眠るとかまるで女の子みたいだア……レズはホモ、つまりホモ君も女の子だからしかたないね。

「——意識が戻った時には、布製の天井が真っ先に目に入った。」

はい。という訳で暗転から戻って、どうやら野营地の様です。主人公がこういう所に寝かされるって五章の辺りからだと思ってたんで

すけど、ホモ君の場合はどうやら早めにそれがお届けされたようです。誰が早めにお届けしろと願った、誰が過酷な運命を望んだ……！（ミユウツー並感）

＜先ほどより、少しはマシになっただろうか。体を起こす事くらいは何とか自分でもできる。そうして目に入ったのは……自分の布団の脇で、こつくりこつくりと船を漕ぐ香子の姿。何となくデジャヴ味を感じた。

あ、お前さホモ君さ、それってYO！ 特異点Fの後の時の話ではないですか？（指摘） 学習してもんをしないのかお前は……（呆れ） そうならないように努力しろって言ってたYO！

「……ん、あ……」

＜自分が起きた事で目を覚ましたのか。香子と目が合って……彼女が目が潤み始めた。これもまたデジャヴだ。違うのは場所と、未だ特異点の解消が終わっていない、道半ばである事くらいか。

「——マスター？」

＜おう。貴方のハゲチンピラマスターだよ

＜やっほう美しいお姉さん。寝床に来てくれるとは随分と情熱的だね。

頭痛がする……は……吐き気もだつ……！ こんなに気持ちの悪い選択肢、生まれてこの方見た事がねえ！ 当然選択肢は上、構いませんねツ！ 猿渡さん！

「マスター……気が付かれたんですね……！」

＜飛びついてくる香子を、まだ少し怠い体で受け止める。泣いてこないが、今にも泣きだしそうな表情をしている。何時も彼女には迷惑をかけてばかりだと、つくづく実感してしまう。

「はあ、良かった……ロマニ様の話では、精神的疲労だからちゃんとして休めば回復するとの事でしたが、あんな状態でしたので、不安で……」

まあ獣みたいな咆哮を上げてたし、しょうがないね。実際狩人さんに狩られそうな感じであったのは否めない。皆さんは相棒に、どの武器を選びましたか？ 私はやっぱりノコギリ一択！ 獣にはノコギリってそれ一番言われてるから。

「兎も角、皆さまに……って、皆さまはもうお休みでしたね」

〈そう言つて香子の振り向いた方の入り口の隙間からは、夜闇がちらと見えている。もう寝ているという辺りから、深夜も深夜に目を覚ましてしまったらしい。余程消耗していたのだろうか。

如何に肉体派マスターとはいえ体力が持たなかった模様。うーん後で煎餅でも食べておこうかな……まあ焼け石に水レベルではありませんが。

「ガリアを取り戻した事で、更なる進撃をするだけの道が拓けた、との事で。皇帝陛下は我々の活躍をより期待するとおっしゃっておられました……その為にも、先ずはゆっくりと寝て、傷を癒してください」  
〈そう言われ、香子にベッドに寝かしつけられる。抵抗も出来ずまるで子供のようだ。

香子さんに寝かしつけて貰えるとか……これは許されざる者（ペインパッカー）今なら苦しむ暇も与えず焼き尽くせそうです。私も疲労し切れば看病してもらえる可能性が微レ存……？　じゃあ私も伯父上の宝具受けてくるから（自殺行為）

〈ベッドに寝転がり、天井を見上げる。香子が同じテント内の別の寝台に向かうのを見てから……貴方は、自らの手を見つめた。

何だこの手、この手は（定型文）

〈感触が残っていた。相手を破壊した時の感触が。それは、まだいい。一応殴り合いをするのは慣れていたが……人殺しをしたのは、これが初めてだ。しかも、あんな、機械的に処理するように。

あつ（察し）

そう言えばホモ君も一応藤丸君と同じ一般人でしたね。サーヴァント（全力弱体）と殴り合いとかしてたから忘れてたゾ

〈あんな事を、自分がした。その事実が、酷く恐ろしかった。そして、ああやって暴れていた時はなんとも思わなかった。それが余計に。

〈……宝具の影響、だとしても。

〈本当に、宝具の影響だけなのか。

おや？　選択肢ですか……ちよつと下が気になるので下で。

▽——眠りに落ちる時に、ふと思考が明後日に走る。あのむき出しの狂気は、果たしてあの宝具の影響なのだろうか。

『……藤原』

▽自分が、香子に向けたあの言葉は、一体何処から出てきたのだろうか。彼女の名前は藤原などではない。一体、どういう事なのだろうか……貴方は、ふと自分の額を撫でた。あの力が、無関係なのか。それとも……

——どうやら、この章。連合ローマを攻略するだけの章では終わらない臭いですね。うーん、見所さんが増えてオラア満足じゃあ……

(投稿主並感)

と、言った所で今回はここまで、ですかね。えっと次回は……ん？  
新スキル解放？ おや、経験値がたまってスキルが進化でも……あいや待たれよ(気づき) それだったらスキル解放、つて出ますよね。新？

えーステータス欄を確認……

【天神の呪】：先祖代々受け継がれてきた異能の力。例え我らが■■■■  
■■ようとも■■■■消えず。忘れてはいけない。■■■■から生まれた存在こそ■■■■■なのであるから。

……ええ(困惑)

何これ(直球)

## ローマの進撃 その三

皆様こんにちは、ノンケ（バナナ鬼）です。海外だとマジでこの呼ばれ方してるとかマジ……？ 実態はそんな可愛いもんじやないんですが。水着？ そりゃあ重ねるまで引き続けましたよ。

前回はホモ君がダウン。デジャビュ。謎デバフ……謎バフ……？ 分からない、何も分からない。分かったのは多分それが明らかに厄ネタという事だけ。どうしてエンジンジョイプレイをしているのに苦行せにやなんのか。

【天神の呪】：先祖代々受け継がれてきた異能の力。例え我らが■■■■■■■  
■■■■■■■消えず。忘れてはいけない。■■■■から生まれた存在こそ■■■■■なのであるから。

前回出現したこの謎スキルですが、千代ちゃんとそっくりの名前ですが、どうやら効果は全然違いうらしく、そもそもパッシブスキル系の様です。

・鬼種の魔の上昇量をブースト&精神異常耐性を大ダウン

えー、詳しく確認してみるとこんな感じですね。要するに洗脳やら狂気煽るスキルとかにクツソ雑魚ナメクジになります。その代わりに鬼種の魔ちゃん完全合体合金太いシーチキンになります。コレは対魔忍ですねぇ……チンピラハゲの対魔忍とか全くもって必要なさそう（事実）

さて、このスキルが目覚めた事でフィジカルは更によつよになりましたが、マタ・ハリさんが相手になろうもんなら……クウーン（屈服） この特異点、より気を付けないと。

✓——テントの入り口から光が差している。体を起こしてみると、向かいのベッドで香子が寝ているのが見えた。声をかけようと立ち上がる。そこで初めて、自分が大分回復している事が分かった。

親友のヘッドバッドで体力一割減、精神デバフ掛けられてたのを一日寝て回復するとかポケモンか何か？（困惑） 一日は行動不能を覚悟していたんですが。やどりぎのタネかドレパンを積んでいたのかもしれない。誰に何時打ちこんだんですかね……

〈周りは、酷く静かだ。どうやら大分早めに起きた様で……テントの入り口から外に出れば、まだ日も昇ったばかりのように見える。寝直してもいいのだが、何となくそんな気にはなれない。

〈〈カルデアに連絡を取る。

〈〈近くをのんびり散歩してみる。

そして選択肢ですか……ここは、やっぱりランダムエンカウントを狙って散歩でもしましょうか。上を選んで状況確認してもいいんですけど、男は黙ってパルプンテ一択。自爆したらご愛嬌。

〈……ゆつくりと考えたい事もある。貴方は、近くをうろつく事にした。日の光に頭皮をギラつかせながら、無人の野営地の中を歩きだした。

唐突にハゲネタを挟むな（一敗） 清閑な野営地の真ん中でピカリと光るハゲとかギャグ以外の何物でも無いんだよなあ……

『ここから想像できるのは、君が何か化け物だとか、そう言う類の物ではないというのはまず間違いのない事だ。そこは安心して欲しい。君は、きちんと人間だよ』

〈そう、ロマニは言っていたが……本当にそうなのか。自分は普通の人間なのか。別に自分が人間でなかったとしても、それでシヨックを受ける訳ではないが……ただ、それが原因で他の皆に迷惑をかけるのであれば、話は違う。

しかしホモ君はいたってシリアス。そりゃあ誰だって自分が原因で誰かが傷ついたりするのは嫌やねんな……

〈アレを、香子は自分が狂気を煽られたから、あの様な状態になった……と言っていたがしかし。本当にそれだけだろうか。あの時、外からではなく、あの衝動は自分の内から湧き上がっていた。

『滅ぶべし』

〈煽られたのは間違いない。だがそれが起こしたのは、自分の中に潜む、自分の知らない何か……心当たりなど一つしかないだろう。

おっ、そうだな（プレイヤー並の理解感）

〈覚えている。香子が自分を止めようとしたあの時。自分は誰を砕こうとしていたのか。あのバットは、誰に向けられていたのか。アレ



をもし振り下ろして居たら……想像すらしたくない。

『えっ?』

〈あの無防備な顔に、無骨な金属バットを振り下ろして、何度も、何度も、何度も何度も……そこまで想像して、貴方は頭を抱えてしまった。』

やめてくれよ……（共感性） その光景想像したら本当に泣きそうになったゾ……これ無理ゾ……死ゾ……（心はガラス） まてよ、今の内にホモ君を消しておけば香子さんから危機が去る……?（悪魔のひらめき）

それは兎も角、ホモ君の精神に確実にダメージが入ってるヤバイヤバイ。あ、ちよつと待ってもうデバフ入ってない!? もうそんなにテーションがた落ちする!?

「――叛逆（おはよう）」

はっ……そ、その重厚な意思に満ちたボイスはツツ!

〈その時だった。後ろから声をかけられたのは。ハツと振り返ればそこに立っていたのは灰色の筋肉と……あまりにも優しい笑顔だった。』

「調子はどうかね若き叛逆者よ」

スパさあん! 既にSINと同レベルの理知を有してるカツコい  
いスパさあん! この人はもー、欲しい時に来てくださる! 素敵!

抱いて! こんなホモチンピラハゲで良ければ!（他人を生贄に捧げる人間の屑）頼む、ホモ君に道を示してくれ……!!

「……ふむ、惑う顔をしているな。どうしたのかね。叛逆に惑う心は天敵。心を乱さず真っ直ぐに压制者への拳を叩きつけねば压制者は打ち倒せないぞ」

真っ直ぐ行つてぶっ飛ばす、右ストレートでぶっ飛ばす（単純思考）

〈分かりやすかったのだろう、一発で見抜かれてしまう。当然だろう。自分も今の顔色がとてもいいとは、お世辞にも思えない。貴方はゆっくりと口を開いて……しかし、話したかったはずの事は、言葉にならず、ただパクパクと口を開け閉めするだけに終わった。』

〈…すみません、言葉にならなくて。

〉クソ、脳味噌の皺返ツルツルになってんのか俺は……

流石にこの状況で下のネタ選択肢を選ばせるほど鬼畜じゃないんだよなあ……おおっと手が滑った（故意）

「ははは、ナイス叛逆ジョーク」

〈空気を明るくしたくて、もはや空回りしてもいいや位の覚悟でジョークを飛ばしてみるが……寧ろ気を使って貰って。余計に気まぐずになってしまったまでである。今頭を占拠しているのはしくじったという一言だけだ。

まあホモ君の所為というより私の所為なんですけれども。本当に申し訳ないと思って居る……だが私は謝らない。（品性が）糞だあ……！（自己嫌悪）俺はこの実況の中で何回品性の最低限を更新するんですかね。

〈あまりにも気まずすぎる。ここは素直に謝ろう、申し訳ないと。そう思って口を開こうとしたが、その前にスパルタクスが口を開いた。

「……若き叛逆者よ。私は、君の悩みに答えを出す事は出来ない」

〈厳かな声だった。諭す様な声だった。ハツとして、貴方はスパルタクスの方を向いた。何時も笑っている彼だが、今は微笑みを浮かべたその眼の奥に、鋭い光を宿している様に見えた。

メトメガアウー（瞬間のミステリー）スパさん綺麗なおめめしますね。

それは 兎も角。スパさんが物凄い真剣。声もマジトーンなんですよね。

「君は、何故だ、と思っっているだろう。それが如何様な意味であろうと……私が言えるのは一つだけ。手綱を渡さぬように振舞うしかない。律するにせよ、開放するにせよ、それは君次第だ」

〈悩みの内容など一言も言っていない。しかしながらスパルタクスはそれが分かっているとしか思えないような一言を。英霊としての目利きか。それとも。

「汝が行うのは自らへの叛逆だ。それは己で成し遂げるしかない。そ

うでなくては、何時か君の凶拳は、汝の友を、仲間を穿つ事となる」  
自らへ叛逆つてなんだよ（なんだよ）と思うかもしれないけど、今回ばかりは案外当て嵌まっているのが、こう……いややつぱりおかしいですね。お前ジキル&ハイドか何かなの？

〽——傍から見れば意味不明の言葉の羅列かもしれない。それでも今の貴方には、その意味が何となく分かった気がした。突き放された様な言い方ではあったが、しかしそのアドバイスは、間違っていない気がした。

〽——今は、未だ答えは出ないけど。

〽〽ちよつとずつ、向き合っていきます。

こういう一つで二つの選択肢、好きだよ（容赦無用） まあ賛否両論あるとは思いますが、私は好き（強固） あ、選択肢は上で。

「今はそれでもいい。急ぐ必要は無いのだ。君の人生は長く続き、自らを確と保つ限りはその向き合おうと決めた覚悟は何者にも汚される事は無いのだから……ゆつくりと。落ち着いて」

〽そう言い残し、スパルタクスは笑顔のまま立ち去って行った。その背中が、いつも以上に大きく見えたのは……きつと目の錯覚ではないと思った。スパルタクスという英雄の偉大さがその背に宿っているのだと思った。

か、カツコいい……抱いてツ！ あ、ヤバイ自分で言っておいて物凄いい気持ち悪いなこの発言。スパさんが真顔になるか、無言で压制者認定するレベル。

〽ふと……自分の掌を太陽に掲げてみる。透けて見える血は……人間の色、赤い色。それがきつと大丈夫だという証拠にはならないが……それでも、何となく元気が出てくる気がした。

と言った所で今回はここまで。〽〽視聴、ありがとうございました。

## ローマの進撃 その四

皆さんこんにちは、ノンケ（鬼の副長）です。因みに現代の新撰組フリークもドツコイ位の狂気なんですよね……こんなんでも勝つても嬉しくないやい！ 漢なら堂々腕つぶしで勝負せんかい！ なお死ぬ模様。

前回は主人公がヘラリ、絶望し、スパさんが元気づけて……くれませんでした。えっ？ くれなかつたんですか？ 当たり前だよなあ!?!（半ギレ） 曰く、君の悩みは君にしか解決できないんだとの事です。ド正論で草も枯れる。

「——皇帝陛下下！」

「ネロ様！ ご帰還を信じて待つておりました！ お帰りなさい！」  
「やっぱりネロ陛下じゃないとなあ！」

＜貴方達の脇から、歓声上がる。かかる、というより浴びせかけてぶつけるかのような勢いで歓声上がる。若干骨にまで響く程の大きさは、文字通り皇帝ネロへの絶大なる支持を表していた。

さて、そんなホモ君は……今何やってるんですかねコレは。パレード、にしてはちよつと地味というか。ネロちやまだったらこんな地味さムーア！ 我慢できぬ！ つてなるでしょうし。

「凄いですね先輩。流石ネロ陛下です。こうして凱旋するだけでこんなに歓声が」

＜貴方の後に、他のメンバーが目を覚ました後、ネロはこうして、奪い返したガリアの各土地を巡りながら首都への凱旋を開始した。そして、その間に立ち寄った町全てがこうなのである。

「本当だなあ……ちよつと耳きーんてするけど」

「は、はい。ちよつときーんてしますね」

流石ぐだマシユ、ヴォーいい格好だぜえ？ 似合ってるじゃね（おうお前らいちやついとんちやうぞ） つと建前と本音が逆転してしまいました。いけないいけない……うーんぐだマシユ過激派でぐだメルテロリストでぐだむさ特攻隊の俺としては公平を保たねばならぬいというのに……

「というかこれ、要するに各地を巡って凱旋してるだけ？ はえ、スツゴイネ口ちやま人気。やっぱり頑張り屋のキレイな王様とか誰でも支持するんやなって（なお後）」

「マスター、お加減の方、大丈夫ですか？」

「香子は、そんな中でも貴方の事をずっと気遣っていた。ロマ二曰く、本当はもう一日安静した方が良いらしいのだが、流石にメドウスアの魔力が持たない、というのと、貴方がもう大丈夫だと言い張ったからこうしているが、彼女としては不安らしい。」

「そんなに心配しなくても大丈夫でしょうに。ソイツ、そんなに軟な面じゃないわよ」

「実際に戦ったオルタ殿が言うと言得力がありますな」

「あら？ サーヴァントは記憶は持ち越さないから、何も覚えていないけど？」

何とぼけてんだよ（憤怒）都合の良い言い訳してくれるじゃねえの……実際そこまで軟じゃないですけどね、このチンピラハゲは。精神的に脆いかどうかは分かりませんが。

「そう言う訳にもいきませんよ。確かにマスターは逞しい方ではありませんけど、それでも私達と違い、人間なのですから」

「アンタよりは頑丈そうに見えるけど？」

「……そ、その」

うーん否定しきれないのが。寧ろ耐久面だけなら香子さんの三倍近くはありそうですよね彼。それは見た目だけなのでは？ ボブは訝しんだ。とはいえ一応この実況の主人公君ですから、お慈悲〜かけてやるよ？（体調管理）

で、そうするにあたって目下の問題はあの謎デバフなんですよねえ。ノーマルなFGOなら兎も角RPGではアレ致命的な弱点になりかねないというか……

「まあその辺りは、別の日にでも議論すれば宜しいかと。今は町の人々の声に応えるとしましょう。それも将としての役割という物」

「っは、お上品ねえ正規の英霊サマって奴は。私らに向けられてる声なんてないからそんなの気にしなくても良いじゃない。返した所で

気づきもしないんだから」

「オルタの言う通りではあった。歓声の殆どは皇帝ネロへの物であり、他に聞こえるのもブーディカやスパルタクスの名前が僅かにあるばかり。そのブーディカやスパルタクスはガリアへ攻めてくる敵への備えとして残り、ここには居ない。」

『まああまり目立たない方が僕らとしても都合が良いけどね』

『その分、レフ・ライノールを探しやすくなる』

問題はそれだけでは無く。

連合ローマには間違はなくレ／フが居るのですが、その片鱗すら見えていないというのは非常に不気味……SOUTE Iの中でEasy Easy!（ルー大柴風）とは参りません。

「今の所、我々を直接叩こうとも、そもそも姿を見せようともしてないですが」

『余程の余裕の表れなのか、そもそもネロ皇帝諸共始末すれば良いと思っ居るのか、はたまたその両方か……一番最後だったらありがたいけど』

「その可能性は低いと思っおいた方が宜しいかと!」

あ、それ一番最後なんですよ（ネタバレ）ぶっちゃけあの似非ソロ……おっとげふんげふん。レ／フはこつちをバリツバリに舐め腐っ下さってます。なんだその偉そうな……すわわっ！（あざ笑う目）

まあこの特異点では正直レ／フは戦力としては気にしてません。獲物としてなら……狩りてえなあ、狩りましょうようもう（欲望の発露）

『だよね……』

『ま、だからこそ目立たない様に、我々は向こうを叩き潰す準備を粛々と進めるのさ。何事も地道な積み重ねが、重要だよん』

「その一歩は、既にガリア解放で成し遂げた訳だが。ダ・ヴィンチの言う言葉に倣うならここでその成果に酔っている場合ではないという事で。」

「地道な積み重ね……戦力を集めること」

『野良サーヴァントの探索がそれに当たるね。オルレアンの時の様に、ここにも人理の危機に呼ばれたサーヴァントが居るかもしれな

い』

ガリア攻略した後はこの会話って事は……サーヴァントが三騎、来るぞ遊馬！ そのサーヴァント、来月から（味方になってくれる可能性が低い）なんですよ……ガーンだな。出鼻をくじかれたって奴だ。『……まあ、その為にこうして凱旋している間にも、ネロ皇帝にも協力して貰って情報を集めてるんだけど』

「芳しくありませんね……」

＜マシユが落ち込むのも仕方ない。ネロが民たちに、連合ローマ以外に変わりはないかという風に聞いているのだが……出てくるのはまあ、関係のなさそうな田畑の異常やら、害獣の事ばかり。それらにも対策を打つのは大切なのだが。

「ネロ様にとって重要でも……」

「私達にとつては重要と言えるかは、些か」

因みにこの後、七章ではこのレベルの情報が物凄い貴重になってくる可能性があるのでちゃんと気を付けましょうね（三敗） ちゃんと町の人からの信頼得ないとフラグ立たないとかおつたまげだったゾ……

「とはいえ、地道に聞き込みを続けていくしかありません。幸いここは大きな町なので何か有力な情報を得られるかもしれません。手分けして聞いてみましょう」

＜聞き込もう、聞き込もう。そう言う流れになった。貴方は当然香子と組んで動く事になった。因みにオルタはそっこうでレオニダスとペアにされた。その理由は……まあ、推して知るべしである。

うーんこの保護者に任せられた感じ。完全に手のかかる娘の扱い。それはどうでもいいとして。さて、町をうろついて情報収集です。町の探索をやるのは初めてかもしれませんがね。まあ特異点の性質上、町の探索パートが訪れる機会は……ナオキです。

「さて、マスター。何方へ向かいますでしょうか」

＜町中をうろついてみる。

＜路地裏を見回してみる。

＜郊外を探し回ってみる。

うーん三択……取り合えず真ん中は却下で。ワンチャン路地裏に野良シャドウサーヴァントとか普通に居たりするゲームなんで……お前たちのゲーム、イベントが豊富過ぎないか？（SOU GO）

しかし郊外と町中、どっちも可能性は十分ありそうでこれもう分かんねえな……良し、うろつくつていうランダム性が気に入ったから町中で（ギャンブラー）

〽町中をうろついてみる。

〽路地裏を見回してみる。

〽郊外を探し回してみる。

「分かりました。何かいい情報が聞けると良いのですが……」

それは私の運に掛かってますね。まあ？ 私の剛運なら？ キツチリ情報を抜くくらい大したことは無いというか？ 因みにガチャは基本的に星五礼装当ててますし？（理想の王政偏り民） 有能な礼装なんですけど……ね。

〽——取り敢えず、適当に聞きまわってみたが……どうにも振るわない。そもそもネロ皇帝が来て完全にハッピーになつてしまっているの、殆どネロ帝の自慢話しか聞こえてこないのである。

「……ネロ様の事に付いて、詳しくなつてしまいましたね」

〽うん……

〽ネロ様サイコー。私ローマ人

おっとローマネタだ拾わなきゃ……（使命感）

「マスターしつかり!」

「おいおい当然の事言つて喜んでんじやねえよ！ まあだけど、アイツに聞かせてやりたいセリフではあるな……つたく、可笑しなことに嵌つてネロ様の凱旋にも立ち会わねえとか。ローマの風上にも置けねえ奴だ」

お前さあ……ローマ市民なのに日本語のコトワザ使うんじやないよ……ちよこちよここういうのが挟まって来るんですけど、コレって素で書いたのかネタで書いたのか分からないからお前おかしいだろそれよオ！ コラア!?（豹変）

まあそれは兎も角（うわ急） コレは……情報でしょうか。



「可笑しな事？」

「そうですね。ソイツは漁師なんですがね、どうやらどつかの島まで出向く為だけに最近船出して……そこに居る女に入れ込んでるって話らしいですけど。大層な、それこそ神ですら見惚れるような美人だつて言うんですがね」

「美人、ですか」

「ええ。ソイツに骨抜きにされて、形相まで変わっちゃったんですよその漁師」

〽——香子に視線を送る。香子が頷いた。ここまで来て、漸くそれらしい情報が入って来た。本当にサーヴァントかは分からないが、しかし形相が変わる程に入れ込む、というのは。話を聞いてみるだけの価値はあるのではないか。

「その方は、今何方に？」

「この街の外れに住んでますよ。本当に変な奴ですよねえ……こんな所から態々漁に出て行ってるんですから。そもそも、前まで漁なんてやってなかったのに」

……成程。形相が変わる位の美貌かあ。あれ……これイツらかなこれ……？（名推理）クソガキが……（直球な言い方）

と言った所で今回は此処までとなります。次回はお話を聞きに行ってみます。正直オチは見えていますけどね。ご視聴、ありがとうございました。

## 形ある島へ その一

皆さんこんにちは、ノンケ（小僧♡）です。内臓引きずり出されても彼女なら許せる気がする私は……もう手遅れなんでしょうね。はい。

前は、いよいよ野良サーヴァントを探す為の情報収集開始です。とはいえ、時間制限ありの探し物な訳ですが……上手に見つけられるかな？ 見つけられねえんだよお！（諦めの早さ）

「漁師の方が、この凱旋パレードにも姿を見せないらしいですが……」  
〽直接話を聞きに行くのが一番だろう。

〽まだだ、徹底的に足場を固めて、追い込んでやる……！

ホモ君は捜査一課か何かなんですかね……これ以上聞き込んでも無駄になる気しかしないので上の選択肢を選ぶのか一番でしょうか。しかし、漁師ですか。ほんへでは農夫か何かから話を聞いた気がしましたが、この辺りも変更加えられてるんですかね。

「分かりました。その方の住んでいる場所はお聞きしているので、早速聞きにまいりますようか。ええつと……」

〽どうやらその漁師は、町中から離れた郊外に住み着いているらしいとの事で向かってみれば、確かに郊外に一つ、ポツンと小屋が一つ建っている。それにしても奇妙なのは一つだけ。

「こんな内陸の方が漁師、というのも不思議な話ですね」

そう言えば。こんな内陸の県北（地理クソ雑魚）に住んでワシ（53歳漁師）とかはえーすつごい剛の者……結構内陸なのに態々地中海まで出向くとか健脚にすぎる気がする。といっても彼女見たさでしょうけど。アイドルかな？ アイドル 偶像だよ。

「——あの、ごめん下さい。此方にお住いの方、いらつしやいますか？」

〽香子が外から声をかけてみる。暫く反応がなかったが、ややあつて中から男が一人出てきたのだが……見えて来た顔、その様子は……

「……なんだあ？ お前ら……何か用か？」

「ひえつ……!？」

◁異様としか言いようが無かった。目の周りが窪み、頬は痩け、目だけがキラキラと、此方を睨みつけている。いや、睨みつけている訳ではないのだろうが、しかしそうとしか見えない程に、恐ろしい……まるで死体の様な形相をしているのだ。

……いや、ちびつてませんよ。俺をちびらせたら大したもんです。それは置いておいて、マジでホラーみたいな造詣なんですよ。FG Oの愉快的仲間たちとは思えないんですよ。セイレムの村人を思い出す不気味さ加減です。第二特異点でこんなモブキャラを出してはいけない（戒め）

「ああああああの……そつ、そのおかつお顔つ顔つ、だい、だ、大丈夫、夫なの、でしょうか……?!」

「あ？ 平気だよ……つて、なんだよアンタ、なんでこつち睨んでんだ」

◁あまりの迫力に香子が圧されていた。サーヴァントであっても気圧されるその形相に思わず貴方も割って入り、香子を庇う体制に入る。

◁テメエ……香子さんにガンつけるとは良い度胸してるじゃねえか……!」

◁エネミーか!? 香子さん！ 管制室に連絡！ 皆を呼んでくれ！

◁ゾンビみたいな顔しやがつて、香子さんが怖がつてるだろうが！

おや三択。そしてどの選択肢も壊れてるなあ……（困惑）全部ガンつけてるとかふざげんな！ 乱闘になつちやうだろ！ いい加減にしろ！ 面白いから選ぶけどさあ（選択肢下）

「ああ、ゾンビだと？ テメエだつてハゲで目つきも悪い、人さらいしてるみたいな顔しやがつて……」

◁人さらい。その言葉に思わず青筋が浮かぶ。自分の顔が恐ろしい事になって居るのは何となくわかった。後ろから「ひえ」という声が上がって居たからだ。まあ別にそれはどうでもいい。

「なんだ、俺を殴り飛ばしに来たのか？ ローマ皇帝に靡かない異端者だつて？ はつ、連合ローマと大した違いは無いな。ネロ・クラウ

「デイウスの配下もよ」

「良いぞもつとやれ（やめて！ 喧嘩しないで！） しまった本音が暴走をば……殺し合いがここで始まるのはまあ、良い見世物になるんじゃないかな（貴族主義） 二度とこの世界に居られないようにしてやる（戦士思考）」

「あ、あのすいません！ 私達は貴方と争いに来た訳ではないんです！」

「はあ？」

「た、ただお話を聞きに来ただけなんです！ 貴方が漁に行つてまで見に行くお人の！」

「そう言った直後、男の表情が一変する。くわっ、と見開かれた瞳に香子が怯えるのも気にせず、男は凄まじい勢いで此方ににじり寄つて来た。」

「あ、あのお方についてか!? あのお方について聞きたいのか!? へへへなんだお前そう言う事なら早く言え！ どいつもこいつも連合ローマやらネロ帝やら、どうでも良い事ばかり気にしやがって！ 先ずはあの女神様を称えるのが先決だろうが！」

「うわキツ……（軽蔑） 早口オタクくんだあ……いやむしろ厄介オタクですネクオレハ（名推理） あの姉妹に関わった人間はスケベな事しか考えないのか（呆れ） スケベな事は一言も言つてないだろ！ いい加減にしろ！」

「は、はい……あの、その女神さまについて……」

「あ、そ、そうか……！ すまねえな。あんまりに興奮してたもんでよ、ま、まあ取り敢えず家に入れよ、存分に聞かせてやる」

「男のテンションは正に限界寸前といった様子で、正気を失つていくというのが当てはまるような、見事な満面の笑みを浮かべていた。「……取り合えず、入ってみましょうか？」」

「万が一の場合は俺がぶちのめすから安心して。」

「……俺も覚悟を決めなきゃいけない。無辜の民を殴る決意を……！」

男はやらねばならぬ時がある。此方もやらねば不作法というもの

……兄上、こんな所で戦ってないで最強の剣士に勝って下され兄上……

「——で？ なにから聞きたい？」

＜男は家の奥に座って、爛々とした瞳で此方を見つめている。よっぽどその女神様とやらの事を話したいらしい。となれば、根掘り葉掘り聞いても問題は無いだろう。

＜＜その女神の名前

＜＜どんな女神なのか

＜＜どうやって出会ったのか

さて選択肢三つ、ですか。というか、これ全部話聞かないと終わらないパターンだと思われまますので聞いていきますよーイクイク。取り敢えず分かりやすく私は上から（○ンザブ○ツク並感）

「あのお方の名前か？ そりやあもう、ローマのやぼったい名前とは全然違う、美しい響きだぜ。ステンノ様、というお方だ。ふふふ……あ、因みにあのお方は俺に何も声をかけてないぞ。あの方の目の前に出る勇気なんて俺には無いからな！」

＜じゃあなんで名前を知っているのかと思っただが……そこは聞くべきではないと思ひ、貴方はうんうんと頷くだけに留めて置いた。

コレ絶対こっそり盗み聞きした奴だゾ……ヤベエ、厄介オタクの上に変態盗聴屋とか救い様がねえぞこのゾンビ野郎。もうちよつとマトモな生き方して（懇願） こんなんステンノ様もお怒りになられるわ……

「んで？ 他に聞きたいことは無いか？」

＜＜その女神の名前

＜＜どんな女神なのか

＜＜どうやって出会ったのか

んにやび、じゃあ真ん中ですかね……

「そりやあもう美しい女神様さ！ 憂鬱そうな顔ですら絵になる程でさ。お顔もそうだが声も！ 初めて御名前を聞いた時なんざ……その……な……へひひ、ちよつと……分かるだろう？」

＜男の様子に、香子の顔色が真っ青に染まる。貴方もゾツとした

かったが……しかし万が一にも彼女を危険に晒すわけにもいかない  
ので警戒は解かない。因みに、男がそう言つて摩つた場所は、股間  
だった。

何してんすか！ 止めて下さいよホントに！ ヴォエー！（嫌悪感）

これ以上の卑猥な行為は此方への宣戦布告とみなすが如何か（絶ギ  
レ）

「んで？ 他に聞きたいことは無いか？」

◇◇その女神の名前

◇◇どんな女神なのか

◇◇どうやって出会つたのか

いきなり賢者タイムになるな（殺意＋114514） ペースが乱  
されそうになるこういうタイプが一番苦手……聞かないという選択  
肢もないので聞き込みますけど。

「あのお方の住んでる島に行ったのは、偶然だ。波に攫われてね……  
その島で目覚めた時に恐ろしい獣人に襲われた……話の通じない頭  
のおかしな恰好の奴だった。それに恐ろしい程に機敏で、力もすさま  
じい。生きた心地がしなかつたよ」

何という言われよう。しかし彼女に関しては完全に当て嵌まつて  
いるのがなんともいえぬというか。CatでFoxだからね、マジ  
でエ!?（不安定）

「くく、けど今は感謝すらしている。アイツに追い立てられて、俺はあ  
のお方の元に辿りついたんだから」

◇男はその女神の様子を恍惚、と言つたように話しているが、貴方  
達としてはそちらの獣人の方も大分気になる。奇妙な格好の獣人、も  
しやすれば、連合ローマがそこまで手を伸ばしている可能性もあるの  
だ。

ただの中立ですな（酷いネタバレ） 俺達をまばたきする間に皆殺  
しにできる、忘れないことだ（ほんへ履修並の感想） ちよつとホント  
に……味方になって欲しい、オレモナー（古き良き） でも無理なんや  
ろうなつて。

「んで？ 他に聞きたいことは無いか？」

◇◇その女神の名前

◇◇どんな女神なのか

◇◇どうやって出会ったのか

◇◇その場所は何処にあるのか

つと？ コレは……

「場所か？ 地中海に浮かぶ、名もない島さ……そう言えば、あのお方は形ある島、とか読んでたっけな。逢いたいなら、詳しい場所を教えよるぜ。あの方の美貌を知らないのは最早罪だからな」

——と言った所で、フラグが立ったので今回はここまで。次回はその形ある島に、姉に逆らえぬ妹と共に乗り込んでやろうと思います。ご視聴、ありがとうございます。

## 形ある島へ その二

皆様こんにちは、ノンケ（ひまわりの人）です。キャラもいい、性能も良い、ヒロイン度も高い、おや？ パーフエクトヒロインではさては。

さて前回ですが、ステンノ様過激派から情報を引き出す事に成功しました。一部悍ましい発言がありました。それに関してはもう気にしない事にします。もう発言からして大荒れも大荒れ。視聴者の皆様においては、余りに下品な発言のオンパレードに本当に申し訳なく……次回からはその辺りは出来るだけカットする事を検討しております。

『ふむ……ステンノ、ねえ』

『ギリシヤ神話に名高い古き神、ゴルゴーン三姉妹のその長女の名前だね。それでもう一人、謎の獣人、連合ローマが手を伸ばしているのか、それとも……』

＜取り合えず報告した結果、ロマニとダ・ヴィンチはそこに向かう事に概ね賛成との事だった。曰く、どんな情報であれサーヴァントの手がかりになりそうなものは放っておくわけには行かない、との事で。＞

「しかし、そのステンノ、と名乗っている方は……本物なのでしょうか」

『いや間違いない偽物、というかステンノの名前を名乗っている何者かだと思ふよ。彼らは地上に降りてくる事はほとんど……ううん、いや皆無と言って良い』

ロマニ君のワクワク神霊講座、はーじまーるよー。

くカ……ットオ！く

まあ、冗長なんでカットなんですけどね（無慈悲） 因みになんですが、ロマニの話を要約すると『チツ なんで神が人間に力を貸す必要なんかあるんですか。今は人間と文明の時代なんですよ（暗黒微笑） バカじゃねえの（嘲笑）』って感じですよ。こんな悪意ある話し方じゃない？ 良いだろお前バレンタイン間近だぞ。



「つて事はその島に居るのは神の名を騙る詐欺師、つて事かしら？」  
『若しくは、その女神に所縁ある何者か……態々偽名にギリシヤの神々の名を名乗っているんだ。このローマの時代の人間ではない気がする。つまり……』

〈別の時代からの闖入者、サーヴァントである可能性は十二分にある。

『それが一体何者なのか……それを判別する為にも、一度首都には戻るべきかな』

「メドゥーサさんが居るから？」

『そう。もし、万が一……何らかの奇跡が起きて降りて来た本物とかなら彼女にも同席してもらいたい。何しろ神霊だ。マトモに話を聞いて貰えるか、とかいう話じゃない。出向いた瞬間に問答無用で、とかなり得ない話じゃない』

メドゥーサさんにあの方の説得はちよつと……（不安大） 姉妹仲がガバガバという訳ではないのですが……まあ、ちよつとした理由があります、駄目なものは駄目なんじゃあ！（保護者並感）

『その前に我々の行動に関しては、ネロ陛下にお伺いを立てないと』  
「まあ、コレは我々の戦力を増やす為である以上、独自の行動になるでしょうし。それを許していただけないと……」

〈流石に現地での最大の協力者を切つてまで追加の戦力を求めるのは本末転倒にすぎる。という事で、彼女が許可できない、というのであれば、今回のコレは諦めざるを得ないだろう……

まあカルデアは形式上ローマ帝国傘下な訳だし、是非もないネ！

〈そう。多少、渋られるくらいの覚悟は、皆あったのだがしかし。それで、その漁師の方の話によれば、あの島にその女神さまは住んでいるとの事です」

「ふむふむ。孤島に住む女神……なんとも良い！ らしいではないか！」

〈寧ろネロ皇帝は楽しくなっちゃって着いてきてしまったという。何だったら態々超しっかりとした船を用意させてまで来た。まるで

遠足に目を輝かせる子供の様に浮ついているのが丸わかりだ。

うわあ、なんだか楽し気な事になっちゃったぞ(ゴローちゃん並感) そりゃあネロちゃんまは可愛い女の子大好きだし、可愛い女の子、しかも戦力になるかもしれない相手が来たとなれば、そりゃあ最高……出力を……キュイーン…… (テンション)

「ネロ様、楽しそうでよかったですね。マスター」

『まあ楽しそうでない子も居るんだけどね。本造院君はその子の対応をしている訳なんだけど』

＜香子がサツと顔を逸らす。彼女が見て居た方向には、貴方と、そして……顔色が宜しくないメドゥーサ。今にも吐きそうな表情ではあるが、全くもって船酔いは関係ない。

＜＜気分は落ち着いた？

＜＜えっと、悪い予感は収まった？

よーし、パパ張り切って下の選択肢選んじやうぞー(満面の笑み) いじめではなくてですね、これ選んだ方が早めに……その、真実が分かるので。

「……全く収まりません。寧ろ悪寒が増して来たまであります」

＜マスターの自分が近くに居る事で、何かしら良い影響が出れば、もしくは悪い影響を削ぐことが出来れば……と思つて居たが、何方も全く振るわなかつたようで。メドゥーサの顔色は、出航からずっと悪化しているばかりだ。

「上姉様が居る、というのが……さらに……真実味を……」

「め、メドゥーサ様、大丈夫ですか？ あの、一度吐いた方が」

「いえ大丈夫です。吐いて体力を消耗する方が嫌なので、絶対に吐きません」

嘘つけ絶対無理(してるだけ)だゾ。まあ、体力を維持するっていうのも間違いではないと思えますけれど。ステンノ様の無茶振りは体力を削る物ばかりで、メドゥーサさんが消耗してらっしゃるぞ、休ませて差し上げろ(まだ何もしてない)

「そんなに……その……」

『キツイのかい？ そのステンノって女性は？』

「だ、ダ・ヴィンチ様っ……!? そんな、幾らなんでも……あんまりにも、えっと」

〈一切の容赦のない一言に香子があわあわとしているが、メドゥーサはその一言に眉の一つすら動かさない。完璧な真顔の儘で、即答した。

「ノーコメントで」

メドゥーサさんの真顔もセクシー……ヘロインツ！（病みつき）でも精神状態は間違いなくマズいですよねえ、ボロカス位でお気持ちロックマン（逃れられぬカルマ）カルマの重さだけなら仮面ライダーメドゥーサかもしれない。一体何の話をしているんだ私はほんへに戻れ。

〈話を聞いた時からこの調子だった。ステンノ、の名前が出た時点から速攻でカタカタと震えだし、特徴やら男の異様な様子やらを聞くにつれてその態度は悪化していき、最終的に床に崩れ落ちた。貴方との再会を祝う暇も無かった。

「し、下姉さまは本当にいないんですよね。上姉さまだけなんですよね」

『君逢いたくないのか逢いたいのか、どっちなんだい』  
「どっちもです。ええ、どっちも……なんです……!」

〈絞り出す様な、か細い声に、貴方はもうメドゥーサの背をさすだけのマシーンになる事にした。コレで楽になるかどうかは分からないのだが、それでも何もしないよりはましだと思った。

メドゥーサさん凄く可哀そう。実際お姉さんたちと逢いたいのとは間違いないでしょうしでも全く逢いたくない理由もh o l l o wを履修してると分かるんですよねえ。そんな二つの心の間で一杯一杯勇次郎なんだよ、分かったか!

「——ネロ陛下! そろそろ上陸します!」

「おお! いよいよか」

「うう……いよいよですか」

〈その声にネロとメドゥーサの声がハモるが……その調子は全く違う。まるでアイドルを見るファンと身内の差の様だと、貴方は思っ

た。

すつごいの確な比喻で草も生えない。ホモ君も結構、良い感性してるじゃねえか……詩人だよ、ドライデンになるんだよこの野郎、あくしろよ（自由形）　クツソ汚い詩が出来そう。

『うん、メドウーサがこの調子じや説得役なんてとてもじゃないが無理そうだ。君達が自力で女神さまのハートを射抜くしかない訳さ。頑張ってくれたまえ』

『神霊は居ないってレオナルド……』

『いやあ、同じ姉妹の彼女がここまで怯えてるんだよお？』

〈そう言ってロマニがメドウーサを見て……一旦瞳を閉じてから、ゆっくりとダ・ヴィンチに改めて向き直る。

『彼女の為にも、偽物だったほうが良いと思うんだけど僕は』

『魔術師的にはこういう同族同士のシンパシーっていうのは馬鹿に出来ないのは君だつてわかってるだろうに』

スタンド使いは惹かれ合うってそれ一。メドウーサさんの姉妹レーダーはドラゴンボールレーダーの精度と殆どドツコイ的な一面もありますし……

『いやあ……だつて神霊だよ？　彼らは基本的にいない、んだけど』

『普通ならね？　今はその前提となる人理がきれいさっぱり無くなっちゃってる状況だから。万が一の奇跡が、起きやすくなってるチャンスタイムかもしれないよ？』

〈まるでパチンコの様だな、と神の価値が若干安くなった気がしたが、それは兎も角。そんな奇跡が本当に起きたなら、自分は初めて神様という存在と出会う事になるのではないだろうか。何となく緊張して来てしまう。

「やばい、俺無宗教だけど許されるかな……？」

〈俺だつてそうだよ馬鹿野郎。

〈残念、一応俺の実家は仏教所属なんだ。

〈良しこれを機にお前も空飛ぶスパゲッティモンスター教に入信するんだ

一番下の選択肢以外は存在しないようなもんなんだよなあ……（即

選択)

「あの謎宗教に入ってる方が怒られそうな気がするが。あ、上陸したみたいだぞ」

〈他愛のない会話の終わり。ゴウ、という音と共に船が停止し、船員たちが慌ただしく動き始め……暫し後、貴方達は無事に島の砂浜に降り立っていた。

良いロケーションだあ……(恍惚) 青い空、白い砂浜、水着サーヴァントは居ない。哀しいかな……今年の水着、楽しみですね(早すぎた埋葬)

「――漁師の方のお話では、この辺りで謎の獣人に襲われた、との事ですが」

「お留守、かな」

〈砂浜には人の姿は見えず、周りを見渡してみても――

「悪いがそのモノログを寸断する。RPGでは謎発狂キャラを返上、野生のキャットがまかり越すのだワン！」

っはっはっはっはっは。っはっはっはっはっは！ 誰だお前は！

『な、なんだ!?!』

『あ、あそこの崖の上だ!』

〈ダ・ヴィンチの声に、皆がそちらに注視する。其処に立っていたのは……なんとというか、物凄い、個性の塊だった。

『な……なんだと!?!』

『ほう、和風コス狐耳ケモ手袋の謎のケモ娘Xか。大したものじゃないか』

『レオナルド!?!』

「ふふん、キャットの縄張りに入ったという事は、それすなわちデイナーショーの開始のゴング。半ドンまでのクレイジータイムだワン！」

と言った所で、今回は此処まで。

ご視聴、ありがとうございました。

## 猫と和解せよ その一

皆様こんにちは、ノンケ(ぐんしん)です。お虎さんホント好き。あ  
あいう人間なのに到底人間じゃない系キャラあまりにも最高過ぎな  
い？ すこすこすこすこのスコツティ。

前回はいいよステンノ様にお目見え……の直前！ 混沌とする  
パーティに喧嘩を売るキャットが居んだワン！（ふふ、FOX）  
因みに何故か指名を受けたのは私でございました。藤丸君狙えや  
！

「では三回転半アクセルをかけて参ろう！ モーターはショート寸前  
なのだな！」

◁まるで球の様に丸まって、ダ・ヴィンチ命名『謎のケモ娘X』が  
此方に向けて吹っ飛んで来る。ギャグにしか見えない光景だが、しか  
しその迫力は、自走砲から放たれた弾丸がそのまま迫って来るが如  
く。

さあキャットが再び先行を奪っていく。デュエルに置いて先行は  
完全有利、最早ドウエリストの間では常識……（古代思考） 今では後  
攻有利先行有利別に関係ないみたいですけど。如何にテトリスを上  
手くするかで決まります。遊戯王なのにテトリスという単語が出て  
きている……？ おかしいな？（至極真つ当な疑問）

◁——散開！

◁メドゥーサさん迎撃！ 香子さん援護！

そこで問題だよ、回答するんだよ（命令形） 先手を奪われガン不利  
の状況（諸説あり）でどうやってあの攻撃をかわすか？

3択 ひとつだけ選びなさい

答え①チンピラの本造院は突如反撃のアイデアがひらめく

答え②仲間が来て助けてくれる

答え③地道な回避。現実には過酷である。

まあ当然ながら①なんて選択肢に無い訳であって、当然、私みたい  
な脳筋プレイヤーには選択肢なんて一つしかない訳で……頼みます  
お二人さん！ 何とかあの狐球を弾き飛ばしてください！

〈――散開！

〈メドゥーサーさん迎撃！ 香子さん援護！

「分かりました。シキブ」

「はいっ！」

〈貴方の声に応え、先ずはメドゥーサが跳躍。そして無数の巫術の弾丸がその後ろから飛んでいき、茶色の弾丸に直撃。その勢いを削ぎ落していく。そして……

「はあああああつ！」

〈そこへ、メドゥーサの弾丸の如き蹴りが突き刺さる。香子の援護も合わさって巨大な弾丸の如き毛玉を弾き飛ばし……そのまま吹っ飛んだケモ娘は、近場の岩場に見事着地して見せた。

「ナイスウ！ 取り敢えず初回の一発は凌ぎました。デュエルは先行有利という訳ではない……コレは既に常識……！」（現代知識）  
デュエルが先行有利が常識じゃなくなったのはいつの話なんですかね？

「ぬふふ、まだまだ三擦り半、満足してくれるな若人よ」

〈ジャキリ、といっそ冗談であって欲しい程の音が聞こえる。可愛いらしいぬいぐるみの様な手足から生える、包丁も顔負けの鋭い爪。ギャグの様な見た目からは想像もつかぬ程の戦闘能力。それに合わせるようにメドゥーサも鎖を虚空より呼び出した。

「キャットの手管はお楽しみ福袋、男は黙ってパルプンテ！」

「全くもって意味が分かりませんが……っ！ 良いでしょう、お相手いたします！」

パルプンテは確率頼りなので問題外なんですよね（RTA視聴並感）それは兎も角さてこっからはキャットとの殴り合いスタートです。キャットはバーサーカーですが色々トリッキーなキャラです。其処に足を掬われちゃうと、もういいよ、ヤバイヤバイ……

〈貴方がバットを構える間には、既にメドゥーサとケモ娘は戦端を開いていた。振り下ろされる爪を楔で受け止めるメドゥーサ。両者ともに力は拮抗していて、全く譲らない。しかし、足を止めればそこが隙、香子がケモ娘を狙う。

「お覚悟を！」

「キヤットはススめられる程女々しくは無い！ 炙って七味マヨネーズが一番なのだな」

〈しかし、見てから回避余裕と言わんばかりの機敏な動きで後方宙返り。見事に香子の光弾を全てスカし、一步下がって見せて……しかしその動きに、見事メドゥーサも追従して見せる。

「逃がしません」

「んははははっ！」

〈両者の間で飛び交うケモ娘の爪、メドゥーサの楔と鎖。瞬く間に軽く三回以上の火花が散り、その最後に互いに獲物を大きくぶつけ、弾け飛ぶ。メドゥーサは貴方の目の前に。ケモ娘は軽やかに跳躍し、再び崖の上へ。

ここまで見た所、両者の実力の差は(そこまで大きく)ないです。実際、互いのパラメーターもそこまで差がないっていう。単純に殴り合うのであれば、AKYS対虐待おじさんみたいなベストバウトが期待出来ますね。全盛期のBB先輩バトル劇場、久しぶりに見てえなあ……

「……埒が明きませんね。シキブ、仕掛けますよ！」

「わ、分かりました！」

〈真つ向勝負では決着は付かぬと判断したのか、香子へ援護を要請し、メドゥーサが低く沈みこむ様に構える。それに反応したのか、それともたまたま同じタイミングだっただけなのか、Yの字を彷彿とさせるような奇妙な構えをケモ娘が取った。

「荒ぶれキヤットの筋は煮込んでも真つ直ぐブレブレ。いざや尋常にフオーク准将！」

〈な、なんだかよく分からんが凄いやる気だ……！

〈これだけは確信できる！ アレは刺客の類じゃない！ あってほしくない！

こんな常時メダパニが刺客とかちよと冗談がすぐるでしょう……

(困惑) え？ とある黒幕後輩系忍者はこのキヤットを刺客として

(ry おいやめろ馬鹿。このSSは早くも終了ですね。



『うーん同意見』

『そもそも、信じたくないんだけどあれサーヴァントなんですよ……』  
「ええ……?」

〈思わず、と言った様子でオルタが声を漏らしていた。普段の彼女からはとても想像できないような、間の抜けた声だった。レオニダスが、兜越しでも分かる位にチベットスナギツネ顔をしていた。

レオニダス王の貴重な困惑顔。それは兎も角。

現状は何方にも、こう、決定打がありません。メドゥーサさんはブーストした魔力も底を尽きかけていた状況でここまでCome On Now! して来てもらったので、宝具は愚か石化の魔眼も使う余裕がありません。香子さんも宝具は先日使ったばかりですし。そもそもキヤットは状態異常無効のスキルを持つてるから、魔眼が通じるかどうか。どういう仕組みかは、んにやび……ちよつと良く分かんないですね……

〈……現状、二人ではやはり押し切れない。しかし、味方に出来る……可能性の、ある。野良のサーヴァントである、事は間違いない。それを容赦なく、カルデアの総戦力で叩くというのは流石に違うのではないか。

〈〈なら……立香! 礼装で援護頼む!

〈〈仕方ない。ネロ様、お手数おかけしますがお力添えを頂きたい! っと、ここで二択ですか。どっちかを選べば状況が好転する……つて感じか。であれば良く考えて選ばないとヒヤア我慢できねえ手堅い戦術だあ! (選択肢上)

「——わりい康友! ちよつと降って湧いて出た巨大ヤシガニの対処でっ……!」

「先輩! 砂の中からどんどん出てきます! ハマグリとほぼ同義です!」

「これ食べるの……?」

「うーむ一部間違はなく毒がある者が居ますな!」

〈そう声をかけた立香は、甲殻類と戯れていた。ここは自分一人で戦うしかないと貴方は腹をくくって、前を向いた。

ヤシガニイイイイイイイイ!? お前っ! 第二特異点実装時  
じやまだモデリング出来てなかっただろうが! R P Gになって追  
加で来ちゃった♡ってか!? ふざけんな! やっぱリネ口ちやまが  
ナンバーワン! (届かぬ思い)

とか言ってる場合じゃないです、キャットをどうにか大人しくさせ  
ないと。万が一宝具を打たれようもんなら、今の状況凌ぎようがござ  
いま——

「全く、本当に上手い事凌ぐ……っ!」

「互いにカツポン使用の許可求む、詰まっているのはゴールデン猫缶  
! 全力で獲得しに向かう覚悟は良いか! キャットはA I I L  
i g h t! 陰気後宮を満たし、みな正体を見失うのである!」

アーツ♂!? ま、待って! 待ってください! お願いします!

メドゥーサさんがキラキラしちゃう! 消えちゃう! メドゥーサ  
さんに無敵状態付与のスキルは……あ

あるやんけ! ちよ、間に合え!

「——っこれは」

「うむ——というワケで皆殺しだワン! 『燦々日光午睡宮酒池肉林』  
!!」

香子さんは宝具レンジの外。つまり、メドゥーサさんさえ攻撃を躲  
せば……この後、致命的な隙が存在する。俺知ってるんですよ?  
後藤さあん? (ねっとり)

〈転げまわる野生の獣。四方八方の砂が弾ければ、そこに刻まれる  
三本の斬撃。野生無双、暴虐解放の嵐が、メドゥーサを容赦なく狙う  
が……その激流の中を、軽やかにメドゥーサがすり抜けていく。機動  
力を上げる、礼装の援護能力が見事に嵌まった。

「め、メドゥーサ様!!」

「にやにやにやにやにやああああああん!」

「……助かりました。マスター」

〈当たらない。当たらない。そして……いよいよ、その勢いが落ち  
ていく時が来た。唐突な宝具解放。全く読めない行動パターン。だ  
がそれでも、覆しようのない戦場の法則という物がある。大技という

のは、技の撃ち終わりにこそ。

キヤットすまない……君の宝具に必中バフは乗っていないんだ……カルデア礼装の回避で凌ぐことは難しくないんだ……本当に済まないと思つて居る。だが私は謝らない（外道）

「これで、討ち取るのに問題はありません」

「——うくん、Good Morning」

∨大きな隙を、晒すという物。其処をメドゥーサは見逃さない。再び崖の上に戻ったそこに飛び掛かる。最大のチャンス、ここを逃せば……！

「そ、ここですつ……？」

∨その、筈だったのだが。

さてメドゥーサさんの動きが、突如として止まりました。まあ……原因は分かっていますけど。信じられるか？

「……メドゥーサ様？　どうなされたのですか？」

「——マスター。あの、信じられないと思うのですか」

∨メドゥーサが困惑している。物凄い渋い顔になつて居る。何があつたのかと声をかけてみると……彼女は、崖の上に蹲る狐娘を指さして。

「彼女、寝ています。この状況で」

∨と、信じられないような一言を、言った。思わず、貴方もは、と声を漏らす事しか出来なかった。

此奴、寝てるんだぜ……こんな時に……

と言つた所で今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。

## 猫と和解せよ その二

皆さんこんにちは、ノンケ（良妻キヤット）です。カルデアキツチンで一番信頼できるのがキヤットだという人。私と石破ラブラブ天驚拳。エミヤだという人。私とフュージョン。頼光ママだという人。私とシンクロ召喚。ブーデイカだという人。もはや言葉はいらさない。前回は、キヤットと燃えつきろ!! 熱戦・烈戦・超激戦!! した訳ですが、唐突にお昼寝タイムに入ったキヤットの暴挙により戦闘は中断。何という事でしょう……（見所さん不足に嘆く投稿者）

「……どうする?」

「こ、コレが女神ステンノ……なのか? ちよつと余のイメージと違い過ぎるような」

「んな訳ないでしょう何処が私と姉妹なんですかコレが」

＜メドウーサが呆れとやるせない怒りの混ざったような声で言う。目の前の狐娘は完全に岩場の上で丸くなってスヤスヤ寝息を立てており、最早砂浜に集った面々の間には闘争の雰囲気が存在しない。

「冗談だ。しかし、連合ローマの刺客でも無いとなると……お主らの言っていた野良の」

『ええ。我々が探し求めていた……念、願の……仲間に……っ!』

『ハーイシャツチヨサーン深呼吸ヨく無理ダメダメ、リラツクスリラツクス』

ダ・ヴィンチちゃんは どうして日本の闇にそんなに詳しいの? 好奇心旺盛系の外国人なの? ところでダ・ヴィンチちゃんつてもものすっごいセクシー……エロいつ（本音を拘束解放波）のになんでウスⅡ異本が少ないのでしょうか……おかしくありませんか? 『はい、ダ・ヴィンチちゃんだよ。ちよつとロマニがグロツキーだから暫し離脱するから、その狐の処遇は君達に任せるよん。よろぴく』

「あ、うん。了解しました」

＜どうやら、ロマニの常識的な頭脳ではこのカオスすぎる状況は理解しきれなかったようである。気持ちは分からないでもない。とい

う事で。貴方は黙って立香の肩をポンポンと叩いた。

「ん？」

「＜じゃ、総督殿。判断任せた。」

「＜立香。さっきの分も漢見せてくれや。」

いや速攻で擦り付けにいつてて草も生えない。あ、お前さ立香さ、さつきバツ、シバキ逢つてた時にさ、中々入って来なかつたよな？（言い掛かり） そうだよ（自己同調） という事で立香君君に任せるぜ！

あ、一応建前の方の理由言っておこうかな

「おまつ……!? て、テメエ！」

「確かに。やつさんの言う通り、この場を仕切るのは立場上、総督の任を受けている先輩が一番適任ですね」

「＜純粋なマシユの援護が、無意識に立香を追い詰める。それを見て、貴方はニンマリと笑った。正直、これを計算してやって無かつたと言えば嘘になる。ここまでキツチリ嵌まるとは思って居なかつたが。」

ホモ君が悪い子になつて……まあ別に問題は無いか（無慈悲）  
そもそも彼がそう言う所で嵌められると想定してないのが悪い、そんなんじゃ甘いよ（挑発） もつと想定を厳しくしてホラホラ。

「＜という事で、取り敢えず貴方はサーヴァント戦の疲れを癒そうと、そつと輪から外れようと動く……というかコツソリダツシユで逃げ出す。そもそも頭を使うのは、立香より圧倒的に苦手なのだから、コレも分担という物である。」

「——おい、逃げるな総督補佐」

「＜だが、まるで地獄の底より響いて来るような声と共に……立夏の腕が貴方の腰に絡みつく。思わずしてうげ、という声が腹の底から漏れる。この男、貴方が逃げ出そうとしている意図を速攻で見抜き、そのずば抜けた反射神経をフル活用して食いついてきたのだ。」

ひえっ（素）

「そもそもお前が相手したんだろうが、コイツは……っ！ その行く末を決めるのであれば寧ろお前が何とかするべきじゃねえかというか俺が総督として命ずるお前が決めるこの野郎ちゃんと考えてなアツ！」

〈その表情たるや、迫力だけならあの漁師の表情にも匹敵する程。瞳孔は完全に開き切っている上に、口から何か、良く分からない物が漏れ出してしまっている始末だ。完全に恐怖である。

ブチ切れ極限藤丸センパイBB（素材提供）……じゃなくて。何だこの鬼さん!？（直諭） 藤丸君完全に顔面崩壊してますけど大丈夫？大丈夫じゃない……そう……結構……怒り方極まってるじゃん。

〈マズイ。このままの流れで行くとこの謎サーヴァントの面倒を見る事になるかもしれない。別に、彼女が気に入らないとか、そう言う事ではなくただ単純にぜつつつつつたいに面倒なのが目に見える。責任から逃げるな、と貴方は絶叫を上げた。

「先輩！ 面倒だからと言って他の人に任せては駄目ですよ」

〈真面目なマシユの援護が入る。それに泣き笑いの様な顔を浮かべる立香に、コレは勝ったと、貴方は確信染みたモノを得た。勝利だと。

ホモ君全力で拒否してて草。キャットも慣れれば可愛いマスコツトみたいなものやで？ ちょっとと言語中枢シエイクしたみたいな発言が多いだけで……それがイマイチつすね（容赦ゼロ）

というか良い様にマシユちゃんを利用するとか、これは窓際行ってもらおう案件。どうにか天罰を下せない物か……（オリキャラに容赦のない投稿主の鑑）

「——ふうん？ なあるほど？」

〈その瞬間だった。貴方とジャンヌ・オルタの視線が交わる。明らかに目が瞞っていた。笑っていた、ではない。瞞っていた。凄まじく良い事を思いついた時の様な、そんな表情をしていた。嫌な予感がする、逃げなければ——

「ねえシールダー。私はマスターの言ってる事も、間違いは無いと思うけど」

「ですが……」

「確かに、自分で決断して行動するのは正しい事だと思うわ。ええ、私もマスターがそうできるようなれば頼もしいのは間違いない……うんうん、けどね？」

おい何やってんだ？（いい笑顔） ちょっとアツいんじゃない（割

り込み)こんな所でー? 聞いてんかおい、兄ちゃん……?

「やっぱり、適正のある誰かに任せるっていうのも正しいと思うのよ」

「——はっ」

〈はっ、ではない。と叫びたかった、純真なマシユの心に付け込んでこのオルタ。その表情は自分で名乗っていた通り、正に魔女というのが相応しい。やられた。完全に。

「成程、先輩はやっさんに任せるのが正しいと思って、信頼して任せよう」と!

「そうそう……フフフツ、だからここはマスターの采配に従うのも、悪くないんじゃないかって、私、ソフツツ、思うんだけど……?」

わあ楽し気な笑い声が漏れ出てるや……なんだオルタ嬉しそうじゃねえかよ、そりやあこと嫌がらせとなると彼女の本領ですからね。テンションも乗って然りですよ。バレンタイン? アレはポンの面が出ちゃっただけだから…… (援護)

「——オルタ、サンキュー……っ!」

〈立香が嗤っている。オルタが嗤っている。マシユがキラキラした目で此方を見ている。もう完全に逃げられる流れじゃない。完全に……自分が行かざるを得ない。もうこの状況は覆す事は厳しい。

「ま、マスター……」

「してやられましたね。どうします?」

〈俺に……もう選択肢は無い……

〈くははは……残酷な事だ。

何と言う事でしょう。ほんへではマシユちゃんと共に人理修復を成し遂げたカルデアのかっこいいマスターさんと、ウスⅡ異本で引つ張りだことの評判高い、ザ・ツンデレヒロイン、ジャンヌ・オルタに挟まれて嵌められました。主人公とヒロインの必殺サンドはどうだ? 最高です! (断定)

〈諦めて、貴方はゆっくりと腰を上げた。目標は、目の前の狐娘。仕方ない、もう逃げられないのなら……覚悟は決まった。引き受けてやるのではないか。キワモノに慣れるのもきつとこの世界を救うのに役立つ……と、強く信じて。

〈〈起きちやくれないか、ミス・フォックス

〈めーぎーめーよー、めーぎーめーよー

CV：謎のありがたい石像。バレンタインボイス物凄いい好き。文句ないほど友人で好き。もっとカルナと絡んで。具体的にはサンタカルナと絡んで。

「……ん、んん？」

〈割と大きな声で呼びかけた所為か、素直に狐娘はその眼を開いた。モフモフの手で目元を擦る姿など、正に獣そのものでありちよつと愛らしいかな、とか考えて……開いた目と視線が交差する。

「……」

〈〈おはよう。可愛いフォックス。

〈〈ハロー……ジョージ……

〈〈お早うお嬢さん。早速だが、君は圧制者かね？

さあて、こういうのはファーストコンタクトが一番だからね。ビシツと真面な選択肢を何だこの選択肢!? ネタに全力を費やしてやる……こんなネタ選択肢、俺を惑わすつもりか……っ！ うっ、右手が、僕の右手が暴走を……! (選択肢真ん中)

「うむ、騙されんぞ。フォックスは騙す者故。騙し騙されは狐<sup>こ</sup>狸<sup>くり</sup>の夫婦。野生のリビドーは雷の如く暴走するのだな」

〈相変わらず物凄い話題が脱線しているうえ、全く何を言っているか分からないが……取り合えず更なるコミュニケーションを取らねば、と思った矢先だった。

「という事で同級生のよしみである。キャットがお主に力を貸そう」

えっ……いや。話が早すぎる (困惑)

「えっ」

「一応キャットもタマモ故。同じタタリ系は見過ごしておけぬ。哀しい涙はキャットには不要。玉ねぎを切つて流す涙は女の甲斐性。甲斐性気立ての極まるキャットは……ご主人を助けようではないか。これからよろしく頼むぞ、ご主人」

〈そう言つて貴方の差し出した手に、ポンと獣の手が置かれた。俗にいう、お手の姿勢という奴である。



「……これは、和解した、って事で良いのか？」  
それは全くもって私にもわからぬ……  
と言った所で今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。

## 神というモノ その一

皆さんこんにちは、ノンケ（インファイター聖女）です。ステゴロにおいては多分最強クラスでは……あれ？ 以前もこの紹介したよ  
うな……（お爺ちゃん）

前回はキャットと激突、睡眠、騙して悪いがこれも仕事なんだから……という恐るべきトリプルコンボでキャットを自らが引き受ける事になりました。覚悟完了！ キャット「成程、其方がキャットの飼い主なのだな？」 何だこの狐!? 大体こんな感じ。

「……なあ、提案した俺が言うのもなんだが。大丈夫なのか？」

〽——カルデアの指令室がサーチした、島の奥へと続く道。それを進みながら立香が貴方に問いかける。それが何故なのかは……後ろの奇妙な光景に集約している。貴方は、その質問に無言で返した。

「♪ ♪♪♪」

「……あの、えっと、キャット様……で宜しいでしょうか」

「んふふふ、焦るな文学系。キャットは伏線に隠れている。主語述語で初めちよろちよろ中ぱっぱ、赤子泣いたら汝が犯人。その時こそ真実は唯一っ！」

「え、ええ……う？」

〽キャットが居た。本人曰く、名をタマモキャット、だワン。しかし狐耳。矛盾の塊のような存在で、クラスは自称アルターエゴ、だがバーサーカー。ツツコミどころしかない。

こうして見るとキャットのプロフィールって相当滅茶苦茶だなあ（他人事） お前を身元引受人にしたんだよ！ ちゃんと承知して？

無理です……（弱気） そんなんが許されるとおもっとなのか!?

『因みにロマニは自己紹介の時点で症状が悪化したから暫くはマトモに使えない4。代わってダ・ヴィンチちゃんが全力を以てサポートするから任せたまへ。因みに今から全力で逃げ出したいけどいいかしら?』

〽ダメです、と貴方は速攻でその選択肢を完全封印した。ここで冷静に解説出来る相手が存在しなくなると間違いなく吐く。無理だ。

『はい。サーヴァントだけど胃薬が欲しくなっちゃうなー』

「俺は胃薬は要らないけど、康友には支給してやってくれ」

「ありがたい……と思ったが、あの狐娘を引き受ける原因になったのはこの性悪の相棒の所為だった事を忘れていた。此奴、お礼こそうがコイツに関しては確実に後で仕返しをさせて貰う。そう決めた。」

ホモ君のクラス適正にアヴェンジャーが追加されました。こんな弱々しい恩讐背負って復讐者とか笑っちゃうんですよね（爆笑）とはいえ個人の恨みに関して言えば色々度合いはあるし……

「康友に関して言えばはまだまだ問題は残ってるしなあ……」

「あの、私が背負いましょうか？ やっさん」

「そう言っつて、立香一行は貴方の隣を見つめる。まるで縋りつく様に腕を絡めるメドゥーサ。右腕に大分柔らかい感触が当たつていても、全くもつて嬉しいと感じられない程に、その顔色はヤバイ。」

「うえねえさまゆるしておねがいますわたしまだなにもやってませんひいひいひいひいひいひい」

あつ（察し） そういえばこの後に最大の問題が残ってましたねメドゥーサさん。めっちゃホモ君の右腕に体諸共抱き着いてる訳なんですけど、その姿、色気ZERO、まるで杖に頼って荒れ地に行く罪人の巡礼の如き壮絶さを感じますねえ！（白目） 誰かメドゥーサさんのメンタルケアを上げて？

「……オルタ殿、何か、なんでもいいから言葉をかけて発破を！」

「私だつてあんなになつた奴追い打ちでボコボコにするつもりもないわよ」

「せ、正論……本造院殿、その、メドゥーサ殿は、えつと」

「大丈夫じゃねえ。大問題だ。」

「さつきから背中をさすつてる、察してくれ。」

要するに吐きそうなレベルだと……

「メドゥーサがこうなつたのは、キャットが此方のパーティに加入した直後だった。戦いに没頭して忘れていたその姉への恐怖が全力でぶり返して来たらしく、あつという間に身心が崩壊する勢いでボロボロになつたのである。」

「……」

「もう喋らなくなってるけど!?!」

「頑張れと声をかけるのも逆に負担になる気がするの、体を擦るだけに留めている。当然、セクハラにならない様に、その辺りは気を付けつつ……だが、効果はどうやら薄いようで、ドンドン状態は悪化して行ってる。」

美人を励ますハゲ……なんだろう、絵になりそうで微妙に足りないこの構図。もうちよつと、シルバー巻くとかSA! そう言われましても……頭に巻くのかな? 流石に銀ピカに光るハゲはNG。

「やっぱり、メドウーサさんは船に戻って貰った方が……」

『そう言ってもねえ……メドウーサがここまで反応してるんだ。向こうが本物である可能性は高い。そして同じようにメドウーサの事を感じ取っていても可笑しくない。そう考えると、彼女に帰って貰うのはちよつと』

「下手するとそれが切欠で開戦、という可能性もある訳か。納得してしまう。日本神話でも割と理不尽な理由で神様は怒る事もある……等と考えて居たら、貴方の腕がより一層ガシリと掴まれる。」

「だ、大丈夫……です……私も、上姉さまに、逢いたくない……という、訳でも、ないですし、ね……」

「そ、壮絶……っ!?!」

「私は姉とか要らないわ……ああんりたくないし」

オルタがスツゴイ『イヤア……』って顔してるのが笑う。でも君だって将来姉が増えるんやで(狂気) 俺も想像もしたくも無い様な姉ならざる者がね……どうしてあの聖女はああなってしまったんでしょうか。

「そうしているうちに……道の先に光が差しているのが見えて来た。」

「……先輩、見つけました。真新しい足跡です」

「漁師の人の物、かな。となると」

『この先で間違っではないだろうね。そして……反応アリだ。それもコレは、この距離からでも感じられる程の、神性の反応だ』

「げぼっ」

「メドゥーサさーん!？」

＜その一言で、ついにメドゥーサが吐血した。ふらつく彼女を、慌てて香子と貴方で支える。しかし……遂に限界を迎えた様で、メドゥーサは穏やかな寝顔で倒れ伏してしまっていた。

……頑張れメドゥーサさん、もう少しだけ？ あと一ミリだけ？  
(優しい嘘) もうちよつと頑張れば終わるんだ……! だからお姉さんと話だけでも…… (棒読み)

＜貴方はメドゥーサに声をかけようとしたが……不可能だと悟り、首を振った。サーヴァントである彼女が、こうなるまで耐えたのだ。これ以上は、無理をさせたくなかった。

「あわわあわわ……!」

＜香子さん。メドゥーサさんを頼む。

＜せめて、俺達の手で連れて行こう。お姉さんの元へと。

（ご臨終です…… (号泣) いや、キラキラしてませんからまだ亡くなつてはいませんが。サーヴァントには精神ダメージが特攻つていなのは嘘ではなさそうですね。つまり心は硝子というのは英霊のデフォだった？

＜貴方は、メドゥーサを香子に任せ……後ろを振り向いた。こんな速攻で彼女の力を借りる事になるとは思わなかったが。仕方ない。

＜護衛役を頼みたい……タマモキヤット!

＜タマモキヤット! 君の出番だ!

相手は某スタープラチナかな?

＜その一言に、いつの間にか道の脇の木に背を預けていたタマモキヤットが、目をゆつくりと開けて立ち上がる。その目は真剣そのもの。流石にサーヴァント、本気ともなれば迫力という物が……

「少々と手荒くなつてしまうゾ? きつと自分の方からホールドアツプ、後頭部にはバナナ、気付かぬうちにCCC! アレをそこまでメるとは、さてはご主人、巨乳派か?」

＜そんな事は一言も言っていない!

＜どうしてシリアスを持続できないのか。

それはね？ タマモキヤット永遠の秘密の一つみたいなものやら……しかたないねんな。でもホモ君だってシリアスクラツシャー的な所あるし（謂れなき中傷） お前ら漫才師になれよ（笑いのカリスマ）

「んははははっ！ つまりご主人は雑食派、主食は五穀米でエンゲル係数急降下、パイルドライバーもお好みで添えるのだな」

＜奇妙奇天烈ではあるが、そう言うて行うシャドーの音は、通常の人間のそれではない。空気を切り裂く鋭い音が、耳を叩いていた。一応、今の所素直に協力するつもりではあるようだ。大丈夫か、という視線が立香から来るが、たぶん行けるだろう、としか。

「……よし、今回は俺達主体で行こう。さつきは康友に任せちゃったしな」

「了解しましたマスター」

ホモ君のサーヴァント、二人共ダウンしてますしね。戦力が実質外部助っ人だけとかなめろう！（弱体化の比喩的表現）

「……行くか」

＜そう言つて、先頭切つて立香が踏み出す。その表情は真剣そのもの。流石に神霊が相手なのだ、何時までも緩んではいられない。その後、キヤットと貴方、最後尾にメドゥーサに肩を貸した香子が続く。

……さて、ここからですね。問題は。

ホモ君のあの謎バフ、アレがあるという事は、この先の人つて大分……その……まあ Fate にお詳しい人なら（察し）となる場面です。アー見えてきました見えて来ちゃいましたよ紫色のツインテールが！

＜——そして、その先で見たのは。

「あら、お客様。どうやらメツセンジャーはちゃんとお仕事を果たしてくれましたみたいね」

＜美しい、モノだった。

と言った所で、今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。

## 神というモノ その二

皆さんこんにちは、ノンケ(夫)です。一言で表せる夫っぷりにビツクリ。割り込む隙間どころか割り込んで間でも間でも捻り潰されるだけです。ふ、間男Aが死んだか、そいつは俺達間男四天王の中でも最強……残りは作業で殺されるだけだ……

前回は、いよいよステンノ様の元へ……向かって居たらその前にメドウーサさんがお亡くなりになりました。皆、英霊っていうのは大小違いはあれども精神に傷を負っているんだよ……ホモ君？ 知りませんよ、勝手に魅了にでもなんでも負けてろ (ド辛辣)

「こんにちは」

「——っ！」

〱立香が、息を呑んでいる。気持ちは分かる。ここまで完璧に美しい、と呼べる生物が居るとは、だれが想像しただろう。確かにオルタにマシユ、メドウーサ、そして香子。貴方の知る女性サーヴァントは皆、美人ではあるが……ベクトルが違う。

「どうしたの？ 呆然として。私に御用があるのでしょう？」

「……っ、ああ。そう、です。えっと……ステンノ、様、でよろしいんでしょうか」

「ええ。この島の主、という訳でもございませんが。ここを仮の住まいとしております、ステンノ、と申します」

〱コレは、愛玩されるという一点に置いて極まっている。男性に愛される、称えられると言った方向にベクトルが全て向いた……美しさだ。

あ、あの歴戦の(第二特異点)マスターの動揺を見ただけで誘うだと……?! 殆ど素人童貞みたいなもんやろが(容赦ゼロ) そもそもそういう旅じゃないと言っているサルこの野郎……!

「……しかし人間の勇者の方を待っていたのですけれど、サーヴァントが混ざっている……というか半分以上はサーヴァントなのでですね。それに、顔見知りも見えるし」

〱その視線の先。貴方の隣のキャットに一瞬行ってから……ずるり

と滑り、メドゥーサに向けられた。その眼が笑みの形に細められた。キヤットは、貴方の肩にそつと手を添えて彼女を見つめている。

「まあ、適当に番犬代わりと思つて居た獣は兎も角として……何を寝ているの？」

声がつ……お前の声が怖かつたんだよ！（大胆な告白） H O O I Wの頃から更に声優さんの腕が極まって来てて、F G Oほんへの頃にはもう、女の子特有の重い迫力を醸し出してらっしゃるんですよ。というか、目が笑つてないんですよ。笑つてるのに笑つてないんですよ。メドゥーサさんが引きつった泣き方をするレベルなんですよ。

「——はい上姉様！」

＜速攻だった。恐ろしい勢いで、眠りに落ちていたメドゥーサが飛び上がった。弾丸の如く。恐るべきはその直立不動性だ。まるで弾丸の如くである。躡けられている、というのが一発で理解するだろう。＞  
「うわあ……」

お、オルタちゃん藤丸君の声が揃った!? コレはカツプルですねえ……オイ！ ぐだマシユ警察だ！ おのれ自分！ ぐだマシユ以外を信奉したな!? 天誅ウウウウウ！ もうそれは自害だと思うんですけど（冷静）

「起きた？ ならさつさと早くこつちに来なさいな。こんなくつろぐところが何も無い島に来ちゃったから肩が凝つてるのよ。揉んで」

「えっ、いや、あの……えっ、そんないきなり言われましても……」

「さつさと揉んで」

「はい只今参ります！」

＜メドゥーサが走り出す。脇目も振らずに走り出す。立ち上がった弾丸の如氣勢いをそのまま維持し駆け抜ける。物凄い姿勢よく、快活に走っているのを、マシユがまん丸な目で見つめていた。＞

その走り方、貴方の同期のサーヴァントがしてませんでしたか？

その走り方を止めるんじゃないやねえぞ……団長!? 何やってるんだよ！

団長！ カルデアの団長（臨時所長）は今、理不尽に負けて止まってるんだよなあ……

「失礼いたします上姉さま」



「ぎつぎと膝を貸して。貴女みたいに無駄に肉付きの良い体なら、クッションくらいにはなるでしょうし」

「はい喜んで！」

「姉妹、というよりはまるで舎弟扱いである。凄いメドゥーサがハキハキと返事をするのが正にそれっぽい……それにしても余りにも最大全力で反応するのでそれ以上であることは確認できてしまったというか。」

「——ふう、漸く落ち着いたわ。立ちっぱなしか岩の上、どっちも女神としてはあんまりな状態だと思わないかしら？ お客様？」

「あ、いえ、そのですね……は、はい。そうですね」

マシユちゃんがあからさまに精神的威圧に弱いのである……しよ  
うがねえな（カカロットオ！） ホモ君、ちよつくら君が話を、つと。  
そう言えば今回は藤丸君がやってくれるんだっけステンノ様の対応。  
それではお手並みをですね。

「これで漸く、話の一つでも出来るというもの……まあ、もう既に一人は脱落しそうだけど……人間の勇者様は」

「——だが、一番の異常が顕れていたのは、メドゥーサではない。」

へ……っ!? ば、馬鹿な。我が頭上に死兆星（デバフアイコン）が……!!?

「貴方だった。既に意識は朦朧とし、何とか周りの話を聞くので精一杯……そうしてあの女神、ステンノの声を聴いていると、余計に……頭痛は酷くなる。膝はとつくに地面について、立ち上がる事も出来ない。」

「康友っ!？」

「ご主人、良いか。気をしっかり保つのだゾ。必要なのは水を撒いて光合成、しかしあの悪性のラブビームは成長には悪影響。屋内栽培のご主人には刺激が強すぎるのだな」

「っ……くそ、が。」

「なんだらうな……酷く、頭の奥が疼くんだよな……」

ダメだアーツ!? ほ、ホモ君が！ ホモ君が可笑しくなってる!?

何時の間に!? まさか最初に視認した時からか!? 一人の少年を一

から調教し終わってるとかこの女神相当変態だぜ……！(更なる強敵の登場に震えるオレモナー)

つと、選択肢選ばなきや……(使命感) まあ比較的症狀が軽そうな下ですよ。私は賢いので。

〱——体の奥底で、何かが蠢く。何かの浸食が、僅かに進んだ気がした。

「ウム。タタリポイント＋1である。選択肢を間違えるとBADENDだから気を付けるのだな(主人よ)」

バレンタインイベか何かか？ ホンマそう言う所だぞFGO……！ えつ、というか下が不正解なのか……(困惑) こういう雰囲気で騙すのはちよつと、普通、三点。もうこんな零点でしょ。

「ほら、見ての通り具合が悪そうだし」

「アンタ……っ！ 康友に何しやがった！」

〱マシユが貴方の前に割り込んで盾を構える。立香の一言で全員が既に臨戦態勢に入っていた。攻撃か。はたまた権能か。何れにしても、既に彼女の力に、マスター一人が膝を屈そうとしているのである。こうもなる。

というかホモ君の反応が激推しアイドルに出会った限界オタクそのもので草も生えない。実際相手はアイドルみたいなもんやし。チンピラハゲがいきなりそんなんなつたら「なんだコイツ!」(畏怖)つていう風に警戒するのも……あれ？

でもこのまま行くとメドゥーサさんも一緒に居るのでこのまま攻撃すると巻き込まれるんですがそれは大丈夫なんですかね……まあメドゥーサさんは自分の姉が目の前に居るとなればガチで肉盾になる位には姉妹思いだからね、致し方なし(古風)

「う、上姉さま!?!」

「ふふ、皆さままそう怒らないで？ 私、どうにも殿方に愛されてしまう存在なので。目にしただけでも、少し悪影響が……?」

〱一触即発となったその時、貴方と女神の視線が交わる。そして……一瞬、その眼が見開かれた気がした。それが、ハッキリとしない意識の中で、貴方には『想定していない』という驚きに見えた気がし

た。

で、その渦中のステンノさんですが、なんか急に「冷めたわ」って感じの表情になってますね。さっきまでの微笑みが嘘の様な変わりようで怖いねえ……

「……ふうん。そう。悪さをしているのは、私だけではないと」

「何をごちやごちやと……康友に可笑しな真似するのをやめろ」

「別にこの程度なら、直ぐに遮断できるわよ。魔術師のサーヴァントでも居れば、簡単な工房でも十分過ぎると思う……まあ、その間はちよこつとくらい振りまくのを自重してもいいし」

「そう言われ、立香がぼかんとした表情になる。戦闘も辞さない、と思つて居たのが急にこの態度。完全に肩透かしを食らつたと言つた感じだろう。」

「……」

「やらないの？ 別に私、無意味に争うつもりも無いのだけど。そもそも、戦う力なんて持ち合わせていないし……話がしたいと言つていたのはそつちではなくて？」

確かに、ステンノ様は戦いたいとは言っていない(重要) 挑発は基本だからね、それとこれとは話が別つてもんですよ。あ、香子さんが今、陣を張つてくれましたね。デバフも消えました。サンキュー！ ドラゴンボール！（間違いの極み）

「後は、そこから出なければ悪影響もないでしょう……それで？ 私に何の用なのか、そろそろ話してくれても良いんじゃないかしら？」

「――微妙な視線が突き刺さる中、何処までも不敵に、堂々と。女神はそう言った。」

ホモ君、君見ただけでステンノ様に負けるとかざあこ♥ざあこ♥言われても仕方ないと思うんですけど（名推理）でも精神耐性上げるスキルなんてそれこそレア中のレアですし……プレイ最中に取れるものなのか、疑問です。

そんなチャンスを夢見つつ、と言つた所で今回は此処まで。ご視聴、ありがとうございます。

## 神というモノ その三

皆様こんにちは、ノンケ（クイリヌス）です。五章は余りにもカツコ良すぎんじや。

前回ですが、いよいよステンノ様に遭遇し、精神耐性クソ雑魚ホモ君があつと言う間に籠絡……される前に若干凶暴化してんじやねえ！ という事で話を聞くのは藤丸君で、ホモ君は役立たずと相成りました。馬鹿じやねえの……

「結論だけど、力を貸す事は不可能です。先ほども申し上げたように私、戦うなんて出来ない体ですから」

＜そう、ステンノは堂々と言い切った。立香がメドゥーサをちらりと見る。その、物凄く申し訳なさそうな顔を見るに、どうやら真実らしいのだが……それより心配なのはメドゥーサである。顔色は兎も角、表情は申し訳なさでしわくちやになってしまっている。

しわしわメドゥーサ（涙） ホントお姉さんが凄くお方だと大変です。でも容赦なくお姉さんは圧を掛ける。その分は……ギャラ（魔力）ドスんで……すぐ終わるから（真っ赤な嘘）

「確かに、私の眼から見ても彼女に戦う能力があるとは思えませんな」  
「……それは、筋肉的にでしょうか」

「それも当然！ それに、戦う方というのはある種、戦う為の物腰を身につけている物なのですが、この方にはそれがある様には見えません。寧ろ守られるのに慣れている、と言った感じではないでしょうか！」

＜レオニダスの言葉に、クスクスとステンノは笑う。

「ええ。私がかつて、恐ろしい番人に守護されていたので……それはもう大きな」

「え、っ」

さり気にデイスられてますね……でも皆さん。大きなお姉さんって、正直性癖ランキングの中では大分上位に位置するレベルだと思うんですけど、そう思いませんか？ 持ち味を生かせ！（要約：可愛いのも良いけどメドゥーサさんには美人さんという表現が一番似合いま

すよ)

「じゃあ、戦わないにしろ、なんか……そう、その謎能力で敵を全員骨抜きとか」

「私を兵器か何かと勘違いしていないかしら。それは海の変態ボセイドンだとか、雷オヤジゼウスの領分なのだけど」

「若干不満げにそう言ったステンノに、立香は冗談だ、と返し……一つ、大きく……諦めを多分に含んだ……溜息を一つついた。

「勧誘は失敗って事か。残念ながら」

「ええ。またのお越しをお待ちしておりますわね？ お客様？」

両者の間に……見えるっ！ 電！ バチバチと光るエゲツナイ迫力！ この中で陣に守られているとかいう情けないホモ君よ、主人公としてもうちよつとしゃつきりしろ殺されてえかお前（半ギレ）

「むう……我らとしても、女神の加勢ありと喧伝できれば意気を上げられたのだが」

「神に頼った軍とか止めてくれない？ 私が燃やしたくなるから」

「仕方ない、全員が雰囲気のままに踵を返そうとした時だった……そこに狙いを絞ったかのようにステンノが言葉を聞く。

「——その代わり、になるかどうか分からないけど……提案があるの」  
おっと。この先、危険があるぞ。だから、引き返せ（ダークソウル並感）あからさまにミミック（罠）なのである。ステンノ様ってホント女神だよね……（反語）

「……その後しばらく、ステンノが語って曰く。

「——海岸沿いの洞窟の奥に、宝物を、ね」

「ええ。女神の祝福。受け取って頂けるとありがたいのですが」

「そういつて笑うステンノ。しかし立香の表情は若干険しく……純粹にそれを信じている顔ではない。先ほどのやり取りでこの女神の本性、というか、人間性というかが、なんとなく分かってきた故にあるが……」

その性質を最大限に生かして来る小悪マンステンノちゃんだからね、女の子やぞ（半ギレ） それもちよつと、ズレてるかな……女神様やぞ（絶ギレ）

「悪いが、信じられると思うか？」

「あら、酷い言いぐさ。其方の方が可笑しくなったのは、私の所為ではないのだけど」

「それにしたって、教えてくれたって……」

「ふふ、簡単にタネが分かってしまったっては面白くないでしょう？ それに、思考を停止した人間ほど、始末の悪い物は無いのだから。それに、多少は申し訳ないと思ったからこそ、お詫びとしての贈り物のつもりなのよ？」

「余計に険しくなる立香の表情……が、どうにも締まり切らない。確かに悪女というかそう言った感じの雰囲気なのは間違いないのだが、その背後の妹に自分の肩を揉ませながら座る、という。奇妙過ぎるのだ、この光景が。」

メドゥーサさんが小さく『ごめんなさい、上姉さまが本当にごめんなさい』とBGMの様に断続的に呟き続けているのが笑っちゃうんですよ（必死の訴えを笑う人間の屑）でも気持ちは分かるよ……（掌返ししても変わらぬ人間の屑）

「——もし、それを取りに行ったら。俺達の力になる話、もう一回くらいは聞いてくれるかな？ 女神様」

「あら？ 凶々しいのね、贈り物を貰って、その上で話まで聞けって？」

「それが本当に贈り物だと信じられたらいいんだけど……絶対なんかあるだろ？」

「そう言って頭を搔く立香に、ステンノは面白そうな物を見る視線を送っている。特に何も言わず否定も肯定もしないのだから、明らかに嫌な予感しかない。」

「疑うばかりもちよつと無粋じゃない？」

「アンタが露骨過ぎるんだよ……で？ どうなんだ？ もう一回話を聞いてくれるなら、なんなら俺一人で行って来てもいいぞ？」

「ファッ!? ウーン……（絶望） そんなマスター単騎とかいけませんよお客様！ あーお客様いけませんお客様！ あーっ！ あーっ！

「マスター!? 何を……」

「マシユの悲鳴が上がる。当然だ。マスター単騎で行動する等、正気の沙汰ではない。」

「……何となくだが、そうした方がウケが良いんじゃないかって思うんだよ。この人相手ならな。まあ、こつから先勝ち抜くにはリスクを負う場面も出てくる。今のうちに慣れておくのも手じゃないかって」

「はえ……めっちゃステンノ様の性格を把握してらっしゃる（感嘆） ステンノ様はヴリ様とも違う、人の苦勞を見て飯を食うタイプなんですよ。なんだったら失敗する方を望むタイプです。」

「そんな事は一言も言っていないけれど？」

「舐めんなよ。あんまり人の表情とか読むのは得意じゃないけど、そこ迄露骨に楽しそうにしてたら分かるに決まってるんだろ」

「——そう言われたステンノは……変わらずに笑っていた。ただし、少しばかり笑顔に深みが増した気がする。」

「そう思うのであれば、貴方一人で行ってみれば？」

「とことん言質は掴ませない、ね。分かった……取り合えず」

『いやダメだからね?』

「と、ここまでガツツリ盛り上がっていたのを、速攻でダ・ヴィンチが制した。そりゃあ当然というかなんというか……マスター一人で特攻など、誰が許すというのだろうか。」

ここに來ての凄惨な意見で草も生えない。まあ、幾らそれが合っていたとしてもマスターが全力でひとりでカチコミに行くとか許可できませんよ猿渡さん！ それでマスター君死んだら人理修復壊るるゝゝ

「ダメですか」

『ダメ。そんなリスク負う位なら素直に帰ってくれ。その神様の戯れに付き合う余裕は此方には無い。協力関係が築けないんだから、ここは撤退一択だよ』

「ダ・ヴィンチの言う事も尤もだ。だが……人間一人程度、あつさり狂気に落とし込むその神としての力、このまま放っておくのは惜しいというのも、確かだろう。」

でもあんまりほんへ通りでも面白くないからね、ここはステンノ様と神祖のスーパー信仰大戦に持ち込むのも悪くない。長城も合わせつつセプテムが滅茶苦茶になりますが良いんだよお前人理修復だぞ（意味不明）

「ご褒美を上げる、というのは本気のつもりなのだけれど」

『それがリスクを負って迄手に入れる褒美かどうかも分からないし。申し訳ないけど今回の提案は無かった事に……』

「——ご主人、湘南に吹く一陣の風となるは今だ！ 進軍のドラを鳴らせ！」

＜そんな貴方にキヤットはそう言葉をかけた。言葉の意味は……今回は何となくわかった。要するに、自分達が洞窟に行こうと言っているのだろう。』

『いや、だからリスクをしい込むのはちよつと許可できないって』

「そんな女神は悪役至極、されど一応ゴツデス、存外褒美はゴージャス、ゴールデン猫缶は期待できぬが……虎穴 is 宝庫だワン！」

＜そう言つて、キヤットは貴方に視線を向けてくる……さつきは、しつかりと一発貰つてしまつてこのザマだ。神様相手とはいえ、悔しいものは悔しい。なら、一矢位報いたいと思つても、良いじゃないかと貴方は思った。』

漢なら、背負わにやいかん時はどない辛くても背負わにやいかんぞ！（後押しする見所欲しさの人間の屑）

＜キヤットと香子さんと、行つてみる。それならいいだろう。』

＜俺が一人で行こう。』

＜ダ・ヴィンチと、目が合う。ややあつて……ダ・ヴィンチが、大きく息を吐いた。』

『……悔しそうな顔しちやつて。ここで止めたら、私が悪役だね。宜しい、サーヴァントをちゃんと連れていくななら、そのやる気と合わせてギリギリ許可の範囲だ。ただし、無茶はしない事。ダメだと思つたら速攻で帰つてくること。良いね？』

——と言つた所で、今回はここまで。

今回はやられっぱなしのホモ君のリベンジマッチ。セプテムで良



いところなしのホモ君は果たして、見所さんを作る事が出来るのでしょうか。それでは、(次回)ご覧ください。

## 愛憎の洞 その一

皆さんこんにちは、ノンケ（魔術師殺し）です。バレンタイン、短いけど結構彼のシナリオ好き。

前回は、ステンノ様がいろいろ引つ掻き回してくれました。お陰で藤丸君のヤレヤレゲージがマックスです……じゃあそんな藤丸君に代わって、ここはホモ君が出撃してくれるあ！ まあガリア制圧戦、今回のステンノ様遭遇、悉く後れを取ったから、その分を取り返す為にも多少はね？

「——という訳で、ダンジョン制圧！ この暗さ松明は必須、緑の匠たくみに湧かればそっこうでお陀仏！ これにはキヤットも怒りの直下掘りなのだな？」

〈因みに足元は砂である。こんな所を掘っても掘り切れないだろう。足元の条件は最悪という事なのだが……取り合えず、前衛後衛は揃っているのだ。そこまで恐れる必要も無いだろう。』

『それにしても、暗いねコレは……視認性は最悪だ』

「ダ・ヴィンチ様、危ない場所等のサーチ、くれぐれもお願ひします……マスター、先程のダメージも残っているでしょうし、足元お気を付けて」

〈〉ありがとう。でも大丈夫だよ。

〈〉済まぬ香子……迷惑をかけるな。

何時からそんな雄々しくなった君……？ 当然選択肢は上……いや待て、ここまで良い所無しなんだからちよつとくらいカッコつけてもええじゃないか（明治時代）

「いえ、そんな……マスターの事を支えるのがサーヴァントですから」「うむ、愛を確かめ合うのは良いが、腹八分目にしておくが良い。満腹にするのは我らではなく目の前のお客である」

〈〉そう言つて、キヤットが爪をシャキリと立てる。獣の嗅覚が嗅ぎ付けたのか、それとも単に相手が隠す気がないだけなのか……何れにせよ、その言葉の直後に、唸り声が闇の中に響き渡った。

『タマモキヤット、見た目とは裏腹にすごいね。エネミー反応、数は

……数えるのも面倒になって来る位いるよ!」

つと、エネミーのお出まし……何ですけどちよつと待ってください、些か暗すぎませんかコレ。シルエツトしか見えねえじゃねえかお前んちい! ステンノ様がここに暮らしてるとかホームレスか何か? 遠からず。

「灯りを……!」

「それはいかぬ。キヤットは分かる、灯りとは獣にとって激推しアイドル、一度見つければ猫まつしぐら、あつと言う間にキヤットタワーの出来上がり」

〈迂闊に灯りを付ければ命取りになりかねない、という事だろうか。実際、この暗がりでは灯り一つでも完璧に目印、いやむしろ的になりかねないのだろう。となればこの暗がりの中で、戦うしかない。〉

「ふふん、いきなりの縛りプレイ、夫婦の営みにスパイスだワン!」

「あ、キヤット様!」

という事でキヤットが真っ先に飛び出して戦闘開始です。敵の表示は全部『?』となつて居ます。何となくシルエツトを見るに、大分数は多いようで。月明りもない真っ暗な中で殴り合いですが……と言つても相手はそこまで強くもないエネミーなので、苦戦すら論外だと思われまます。

【暗がり】：回避率、命中率が低下する。(アサシンの場合上昇する)

だからつてバフを容赦なくつけるなお前FGORPGオオン?!

セプテムまでは基本的に昼間、もしくは明るい場所で戦っていたので付かなかつたんでしょうけど……流石に第二特異点、地形デバフ迄付いて来るようになるとは。難易度が上がりましたね。

「ふふん、キヤットの五感の良い五感……獣の匂いを嗅ぎつける程度は余裕、すなわちこのバトルはランチタイムと同義なのだな!」

なおキヤットには暗がりデバフは付いておりません。流石は獣、暗さ程度では全くもって行動の制限などされませんね。さては……キヤット体験クエストじゃな?

となれば全力で叩き潰すならキヤットを主軸に。イクゾー

「にやははははっ! 先ずは三枚おろしから!」

キヤット選手、先ずは見えにくい敵に向かって切り込んだ！ アレは……シルエツト的にはスケルトン！ ブチ砕いてカリツと焼いて骨煎餅にするのが一番の頂き方ですがさて！ とか実況しておいてなんですけど食べたくはありません（全ギレ）

……しかし流石バーサーカー、暴れ具合はピカー。敵が四方八方に吹き散らされるその姿、サツバツ！

「叩いてネギトロめいたマツポー調理！ クローンヤクザもこれには潔くハラキリしつつ昇天！ んー！ グッドナイトなのだな」

というか何だったらキヤットに任せてさ、終わりで良いんじゃない？（圧倒） 敵がおもちやみたく弾け飛んでるんですよ。こんなの戦いじゃないわ、唯の処理よ！ だったらさっさと終わらせればいいだろう！

という事で香子さん、援護オナシヤス！ 護衛は当然ホモ君で。

「え、援護……しかしマスター、この暗がりの状況でどうやって援護を。当たるかどうかも分かりませんし、キヤット様の近くに撃つにしても……」

〽——誤射の可能性が頭を過る。迂闊に撃つのは折角の協力者を失う危険を招きかねないのである。となれば……

〽キヤットの動きをよく見て、地道に打ちこむしかない、か？

〽狭い空間内に大量の敵、キヤットを避けて適当撃つても割と当たるのでは？

さては天才か？ 成程、数撃てば当たるとは言いますが、この空間でドバーツつと出していけば避けるスペースもそう無いですし、数撃つただけ直撃するつてもんです。さてはファイバータイムか？

という事で選択肢は下だ下だ下だ（速攻）

「……成程、そう言われれば」

グミ撃ちはフラグと言いますが、それはDB世界だけだから…… Fate世界では一斉砲火は切り札、デインギルもそれを証明してます。

「キヤット様！ 取り敢えず出鱈目に打ちこんでみますので、一旦動かないでいただけませんか！」

「うむ？ 野菜王子の再現か！ キャットはニンジンの如く泰然自若なのだな！」

キャットが一步下がって、さあ撃つスペースが出来上がりました。香子さん出番です！ すーっ、えー、八割くらい……いやちゃんと全力でやって貰わないと駄目みたいだと思います……

「こ、こうなったらヤケ、という奴です！ えいえいえーいつ！」

さあ無数にばら撒かれる黒光りの太い棒！ 墨色なのでまあ画面の暗がりには混ざってしまっただけで映えない事映えない事。本来は暗がりでも光の光線って派手な光景の筈なんですけど、何という例外の光景か！

「当たっているのか外れているのか……うーむシユレディンガー」

『確実に数は減ってるね。命中は確実にしてるみたいだけど、何という力技』

傍から見ると香子さんがパタパタ手を振っているだけの様にも見えるという。物凄いカワイイ！ 尚真正面から見ようとするとホモ君の頭蓋がトマト染みた事になる模様。欲望に身を任せるのには気を付けよう！

「こ、これで……どうでしょうか……」

『……よし、数も減ってきたかな。そろそろ良いんじゃないかい？

後は……』

「うむ。平安ガール、そろそろストップ。後はキャットがケツを拭く、ケツはケツでも真っ赤なエネミー共の血だワン！ しかしゴーストが出血とはコレ如何に！」

ちよつと顔を赤くしつつ、ふうふう息を吐く香子さんが愛おしすぎて……取り合えず後で動画で只管に切り取るとして、そこだけ行けキャット！ 残党狩りだ！ 最後の一発までくれてやるよオラアン！！

「にゅっふっふっふー……さあ、いよいよメインディッシュ。丁寧にさばいて食卓に上げるとしよう、テーブルマナーは御覧の番号のオンライン教室にお電話なのだナ！」

『——一匹、デカい反応が残ってるみたいだしね。来るよ！』

〈暗がりにはキヤットが飛び出し、暗がりからキヤットに向けて何か  
が飛び掛かる。一瞬キラリと光るのは、キヤットと似通った獣の爪  
……だが、その爪牙が同じなのは、僅かに見た目のみ。

「殴つ血KILL!」

〈そのネコ渾身の振り下ろしは……あつさりと洞窟の奥から突つ込  
んで来た影の前足らしきものを切り落とした。

あぁつと キメラくん きりとばされた!

「ふふん、流石に野生。猫パンチにアングリーシャウト、講○社から発  
売中」

〈痛みから怒りの咆哮を上げる、獣に向けて……キヤットはあくま  
で自然体。畏れることなく真つ直ぐに向き直り、そのまま腰を落と  
し、腰だめに二つの獣手を構える。その手の内に灯るは紅い、紅い、紅  
蓮の輝き!

「しかし売れ行き微妙故即打ち切りである……悪く思ふな若人よ、恐  
み恐み——『呪層・猫日照』!」

そして機動力の落ちたその体では避けられまい……お前はもう完  
全に『出来上がって』いるツ! トドメだ喰らえ、  
キヤットのEXアタック!  
メタリカッ! ルビが無理矢理過ぎると思うんですがそれ  
は……

〈紅い焰は空気を引き裂き、着弾。圧倒的な熱と光をまき散らしな  
がら、大柄な獣の影を一瞬洞窟に浮かび上がらせる。しかし、一瞬。  
一瞬で獣の影は炎の中に溶けて消え……一瞬の後、湯気の他には、最  
早そこに何も残って居なかった。

『うーん出鱈目なパワーだ。彼女が本気でさつき暴れて居なくて本当  
に良かった』

「ひえ」

「ガツチャ! なのだな」

キヤットが楽しそうに何よりです。

と言った所で、今回は此処まで。アレ? ホモ君活躍、出来ました  
か? 出来ませんでした(小声)……ま、まだどうくつこうりやくお  
わってないし(震え声)

次回こそ、RPG主人公の面目躍如を。ご視聴、ありがとうございました。

## 愛憎の洞 その二

皆さんこんにちは、ノンケ（暗殺の天使）です。あの天使様の考察の中に、アレ旧神の類じゃねーのとかいうのがあったんですけどシヤルちゃんもフォーリナー適正でもあるんですかね……

前回は、洞窟討伐戦の第一回、殲滅作戦が見事に嵌りまして、敵があっさり殲滅出来ました。ざあござあこ。まあね、この先も大した敵が残っていた覚えもないのでこの後は流れ作業で、軽く踏み潰すようにしましょう。

『話によると、この奥に彼女の言う所のお宝があるらしいけど……』

＜エネミーの姿も取り敢えずは無かったので……香子に灯りをともして貫いつつ洞窟を進んでいた。しかし、この通路にて、異様な光景を、貴方達は目撃する事になった。

『何なんだろうね、この壁の傷。爪……じゃないよね明らかにさ』

『貫いたような……矢、でしょうか』

『でこつちは、何だろう、デカイ鞭でも叩き付けたらこんな跡になる、かな？』

不穩過ぎる……こういう訳の分からない破壊跡狂おしいほど苦手（怒りのスーパーサイヤ人） こういうなんだろうね、未知への恐怖つて何者にも勝ると思います（SS2） というかちよつと暗い場所ですごい演出するな（SS4）

『破壊の跡に溢れる愛した男への心……コレはこの先に居るのは伝説のスーパー良妻と見た。キャットと料理対決に持ち込む積りか？』

『いやならないでしょ』

＜冷静なツツコミが入った所で、一行はさらに先へ進む。進めば進むたびに壁の傷の深さ大きさはドンドンと大きく、鋭く、激しくなっていく。先ほどのエネミーが暴れているのかそれとも……

いやこんなぶつとくて長い跡残せるなんてヒュドラぐらいでしょ（半ギレ） こんな第二特異点であっさり出てくるレベルの敵じゃないですよ。俺普通に死んじやうんだけどいかがか？ ああん？

「……しかし、敵が本当に減ったというか」



『そもそも、存在しないというか……増えたよね。死体の数が』

〈そう。増えているのは壁の傷だけではなく……それに巻き込まれて死亡したのではないかと思われる、エネミーの亡骸、残骸。スケルトンの物が無数、そして……今、ちらりと横に見えているのは……

『スケルトンだけじゃなくて、こんな大柄なキメラ迄』

『これを捌けば精もビンビンのパーフェクトだキヤット』

「た、食べるんですかっ!？」

凄い体に悪そう（ド直球）でもカルデアキッチンの鉄人の皆さまならワンチャンスで大分美味しい食事に仕上げてくれるかもしれない……？ つまりキヤットに第三再臨でキメラ料理を持ってきてもらうチャンス？ あ、ちよつと燃えて来た。セプテム全力でやつちやおつと。

『……獣肉つて案外美味しいって聞くけど……まあ、それは置いておいて。このサイズもあつさりど殺されてるとなると、この奥には相当の怪物が居ると見るべきか』

「相当の、怪物……」

〈キメラも、これだけの数のスケルトンも、あつかりと粉碎して、砕いて。この先に居るであろう何かの戦力評価は更に上がる。

「怪物に怯えては何も出来ぬ。キッチンにも小さいながら怪物は出没する故、速攻で処理をするのが一番である!」

『……そういえば、このラボも大分掃除してないなあ。そろそろアレが湧いて出てきそうなんだよね。如何に人理焼却といえど、彼らが死滅したとは全くもって信じられないというか』

「Gのレコンキスタなのだな」

題名じゃなくてそのままの意味で言っていないかそれ……？ 皆さんは最近、何時彼らに遭遇しましたか？ 私は、朝起きた時……額に奇妙な感覚が走り、咄嗟に反応して叩き潰した結果地獄を見ました。『まあそれは置いておいて奥に反応ありだ。このパターンは確か……シャドウサーヴァントだね。これは』

「成程、それでこんな……マスター」

〈分かつている、と貴方は返す。これだけの破壊を齎す様なサー

ヴァントだ。シャドウに零落しているとはいえ、相当に強力なサーヴァントである可能性は十分にある。

『令呪を使って速攻で畳みかけても良いけど……どうする?』

〈令呪は……よし、使う!〉

〈令呪は……いや、温存!〉

私って、基本的にアレなんですよね。エリクサーとか凄い取っおいて使わないタイプなんですよ……(唐突な自分語り) つまり使う必要ねえんだよ! (選択肢下) 因みに相手が速攻宝具を使ってきたらこの選択肢は凶となります。

『了解。じゃあ出来るだけ警戒しつつ向かうとしよう……もしヤバかったら即撤退で』

〈一応、この洞窟探検にはそういう条件で来ているので、貴方は素直にそれに頷いた。しかしシャドウサーヴァントが陣取る洞窟など、あの女神は余程な性格をしているらしい。コレでダメなら……どうしてくれようか。〉

コレは分かせ案件。尚、能力的にどう足掻いても人間の男性は勝てない模様。だって最強の洗脳能力だからねステンノ様、仕方ないね。催眠する前に声聞いただけで男性側がくっころ確定とかいう鬼の所業。

「……あら、奥の方に明かりが」

「まるでシンデレラを祝福するスポットライト、ご主人に照らせば反射で目を潰せるやも知れぬな」

〈それはハゲているという意味だろうか。ちょっとショックを受けつつ、奥を覗き込めばその光の下に……一人の影が立っているのが見えた。〉

〈称号『サーチャイトの反射役』を獲得しました。〉

いやメツチャ良い感じにシリアスなんだからその称号で笑わすのやだ怖い……やめてください……! アイアンマン! でも一瞬ふっとしてしまったのも事実。結局セプテムでもノルマ達成してしまうという。

〈少し、広い空間だった。そして、その周りの壁には……今まで以

上の、破壊の跡。恐らくは破壊に破壊を繰り返し、ここまで広くなつたのではないのだろうか。その証拠かは分からないが、ゴロゴロと不自然な形の岩が転がっているのが見える。

「あれ、でしょうか……でも、サーヴァントだけではないようですが」  
『——蛇、かな？』

＜その中心、人型の影の周りには、一匹の大蛇がその影を取り囲む様に佇んでいる。シャドウサーヴァントと蛇のエネミーが、あの破壊の跡を生んだのだろうか。蛇型は兎も角、シャドウサーヴァントは見た目からどんな攻撃をするのかも想像できない。

「……さま……どうして……許さない……」

蛇、サーヴァント……あれ？　なんかどつかで聞き覚えが……そういえば、この特異点つて中ボス枠が彼<sup>カエサル</sup>彼なんですよ。アレキサンダーがイスカンドルにワープ進化してるくらいなんだから……あれれー？（現実逃避）

で、このくぎゅボイスとくれば……もう、皆さんお分かりですね。

「——いいや、アレは別々のモノではない。誰もがニツコリのハッピーセットである」

「え？」

＜そう、思っただが。

『……マジか。こりやあヤバいかもしれない。あの蛇、多分シャドウサーヴァントの宝具か何かだろうけど出力がヤバイ！　観測できた限りだけど、ほぼ間違いなく幻獣種クラスに匹敵する……！』

幻獣種クラスで、蛇型の宝具ですか……もう嫌な予感しませんがねえ！（全ギレ）

『撤退だ！　シャドウサーヴァント化してもこのレベルつて結構な』

「——逃げる、ですって……逃がす、わけがないでしょう……っ！」

＜影が此方を睨む。瞬間、蛇が地より飛び立った。咄嗟に貴方は香子を抱えて伏せ、キャットは高く跳躍し回避はギリギリで間に合ったが……しかしその蛇が直撃した通路は完全に崩れて通れなくなってしまう。

「出口が……っ！」

『……やられたね。偶然か、それとも態とか。どつちにせよ、もう撤退は出来なくなってしまうたか。すまない、もつと早く撤退を指示するべきだった』

ああん!? 最近だらしねえな!? (耐久度) まさかの通路から粉々に粉碎していくスタイルは斬新……バイオを思い出すかのような容赦の無さ。逃がして、逃がして……駄目です。

「――許しがたい、あの方の、誇りを汚した……呪われるが良い、連合ローマ! 呪われるが良い、魔術師共!」

再び大蛇が暴れ出す。壁を更に削り、転がっている岩を砕き、そして遂にはその体に、焰を灯して、縦横無尽。まるで生きた炎の嵐。飛び込めば、サーヴァントとて肺の中まで無事では済むまい。その中心で、影は、怨の一字を叫び続ける。

「名は疾うに捨てた……今は、ただ恩讐の化身として……あの方の……無念を、晴らしてみせる……名を、汚され、国を、汚された……その全てを、我が命を賭けて!」

わあすつごい迫力……

とまあ、シルエツト的に分かるでしょうが、恐らくクレオパトラさんの中ボス戦です。本来セプテムには居ないサーヴァントですが DEBUさんが居た以上は普通に召喚されても不思議じゃないっていう。どうやらこのゲームは徹底的に私を虐めないと気が済まない模様です。はー……あほくさ(激憤) 何が流れ作業で踏みつぶすんですかね……

と言った所で、今回はここまで。今回は世界三大美人戦からです。ご視聴、ありがとうございました。

## 愛憎の洞 その三

皆様こんにちは、ノンケ（カ エ サ ル の 妻）です。貴女、ここに召喚されてたんですね……さてはレ／フやな（瞬間湯沸かし器）前回はいいよ奥に突入。結果としてボーナス敵キャラに遭遇いたしました。因みに能力的には普通に強いレベルのサーヴァントな上に宝具も凶悪です。ぶっちゃけAクラスの宝具です。何だったらセイバーさんとどっこいです。

＜暴れ狂い、焰をまき散らし、洞窟の幅を削って広げるその破壊力、とてもシャドウサーヴァントのそれとは思えない程のそれに、貴方達は完全に顔を青くして……訂正、キャット以外がである。

「まるでオーブン！ 寧ろピザ焼き窯！ シキブのミルクでチーズを作るのだな」

「えっ!？」

『言ってる場合じゃない！ 全員散開！ アレに一網打尽にされるのだけは防がないとマズいよ!』

＜その言葉で、先ず香子を抱えて貴方が走り出す。それを援護するようにキャットが未だ暴れ狂う大蛇に飛び掛かった。

「蛇対獣、ハブ対マングース！ 何時も勝つのはマングース！ つまりキャットの勝利イベントなのである!」

実はアレって勝率ははつきりしないという事実。マングース有利とのデータは何処から湧いて出たのか……まあ取り敢えずキャットにあの大蛇は任せて、こっちは対謎のシャドウサーヴァントに炎神全開（神降ろし）

＜その間に、貴方と香子は、その一瞬でなんとか本体の前に走り込む事に成功した。その影……声と体格から見て女性と思われるサーヴァントは、歯をむき出しにして此方を睨みつけている。

「許さない……連合ローマツ……絶対に!」

いやストレートに怖い（半泣き） 顔が完全に般若です。目力先輩が土下座して自らエンコするレベル。助けてトツチャマ……

「っ……マスター、この方もう」

「貴方は領いて応える。完全に錯乱して、此方が何者なのかも分からない。というより全ての目の前にいる存在を敵対者と認識してしまおうだ。正規のサーヴァントだったのかはたまた、こうやって呼ばれてしまったのか、何れにせよ……放っておくには忍びない。」

「俺たちで討ち取って、終わらせよう。」

「——もう苦しまなくても大丈夫だ。」

「堕ちた英霊の介錯をするのも……カルデアのマスターの仕事の内や。もう旦那も満足して逝った。一緒に後を追わせてやるよ（ド鬼畜外道）」

「——はいっ！」

「さあ、戦闘開始。敵クラスはアサシン、そしてこちらはキャスター……はっ、さては消化試合だな？（確信）とか思うかと思いますが、ほんへでも弱点クラス突いてドッコイ位な感じなんで、油断せずしっかり指揮していきましょう。」

「一気にいきますー！」

「という事で先行攻撃じゃ。先行技は基本的に絶対有利ってそれ一。故にこそファイアローは何時まで経っても絶対に許されないのである。もうアイツ一人で良いんじゃないかな案件が多すぎる。」

「さあ速攻のバスター攻撃で一気に主導権を……」

「——甘いっ！」

「えっ、待つて墨汁ビームが謎の光によって迎撃されたんですがそれは……主導権は、掴めましたか？ 何の機会も、掴めませんでしたあああああ……！ まさかのアラオ闘方で迎撃するとか、ホントにシャドウサーヴァントですかこの人？」

「そんなんっ!？」

「ひれ伏しなさい、我が前に……許しを乞うのです、あのお方に！」

「イソイデフセロー（q）（撤退行動） あ、危なすぎる。あまりにも凄まじい輝き具合！ 一步遅れてたら輝きに包まれてクレオパトラ様に服従して……え？ 死？ あ、そうなんだ。で？ それが何か問題？（震え声）」

「ま、全く何も無い所から光が溢れて……っ！ マルタ様の様な攻撃

でしょうか」

因みに此方のフアラオ闘法、高貴な方である程強力な出力を發揮できる謎技なんですけど、発生が早く、遠距離もこなせる強力な技となっておりませう。さつき見た通り此方の攻撃を迎撃するだけの性能もあるっていう……さては割と万能だな？

でもってこっちは動きの遅いキャスタークラスっていう。あれ？さては此方が不利かもしかしくなくても……？ はえー（諦観）となれば。

「……ど、どうしましょう。躲されるとか、防がれるだとかは良くありますけど、謎のオーラで迎撃されるなんて、初めてです！」

「あれ、突破できそう？」

「一撃で抜けぬのであれば千撃を打ちこむのだ！ インストラクション！」

センセイ！ そんなにぶち込んだら香子さんの方が魔力が持たなくなるのは自明リーズンなのである!? センセイ方式は体力を消耗しすぎるんですよ……もうちよつとご容赦をしてください。

「少しばかり厳しいです……そもそも、生前からそこまで陰陽術が得意という訳でも無いので……申し訳ありません」

やはり正面突破は不可能みたいですね。うーんさて困りました。どうやらこっちの遠距離攻撃に合わせてフアラオ闘法で迎撃する、と言ったプログラムが組まれている様です。接近戦に活を見出すしかない……キャット蛇の迎撃に回しとるやんけえ!? コレは無能マスターですなえ……

「そこですつー！」

「つきやあ!」

そして一切間髪入れず此方に攻撃。回避には成功したけど、このクレオパトラ、隙がねえ！ 容赦ねえ！ 呑気に話す暇もねえ！ こんな敵嫌過ぎるんだよなあ……イベントに出たい（敗北主義者）

「キャット様の、出力なら……キャット様はっ！」

「ハブ酒の密造にはキャットの肉球で適度に叩いて肉を解するのが重要なのだな！ 血抜きはワイルドにである！」

あーこつちも白熱している様子！ 叩いてるといふより引つ掻いてますしなんだつたら口から炎とかかビーム吐き出して薙ぎ払ってますし、蛇は蛇で炎纏つてどこもかしこも吹っ飛んで大暴れしてマシユシ……あれ？ 某怪獣王作品かな？

「……無理そうですね……なんとか私で頑張るしかないみたいですっ!?!」

〈取り合えず、香子の動き慣れてない足では機敏に動くのは不可能だ。貴方は速攻で彼女を抱え上げる。咄嗟に持ち上げやすい姫抱きを選択したのは事故の様なものだが、そこは許して欲しかった。

「ママママママ!? スッ!? タツタツ!」

〈ちよつと顔面が男臭いが、我慢してくれな！

〈悪いが飛ばすぞお姫様！ 舌あ噛むなよお！

さて取り敢えず下の選択肢以外は無視するとして（恋愛脳） 流石ホモ君、飛ばすぞお姫様とはくっせえなお前……（誉め言葉） とはいえその強面ですしそのくらいクサイ表現じゃないと乙女はキユンとしてくれない可能性が微レ存……？ 酷い縛りだなア（直球）

「お姫様あわわわわわわっ!」

反応が可愛すぎる。コレは許されない（絶ギレ） 脳の中がパンパンになるまでやるからな（図書館充実） 何で現界ブチ切れおじさんになつて居るかって？ 逆に皆さん……ならないんですか？ この状況で（真顔）

〈混乱している香子を他所に、貴方は思考する。このまま香子を抱えたまま逃げるのはそう難しくは無いが……しかし、体力的には何時までもそう出来る訳がない。しつかり抱えて居れば香子の心配はしなくても大丈夫なのだ。ならその分思考を回せば……

〈——キャットに合流するしかないか？

〈——待てよ、そもそもこの状態……

つとそれは今は置いておいて……ここで行動の二択。一つはキャットに合流する案、もう一つは……お姫様抱っこを継続してくれるんですか!? じゃあ、下ですよね？ 効率とか考えて『合流が堅実なのでは?』とか思った奴は窓際行つて……思考<sup>シユコレ</sup>れ。効率よりも何よ



りも、愛じゃよ、愛！

「ど、どうしましょう！ わ、私っ……ふえ、どっ、どうなされました、マスター」

「貴方は香子に一旦落ち着くように言ってから、自分の考えを話した。この状態でなくては先ず出来ないだろう大博打。それに……香子は一も二も無く頷いた。」

「……分かりました、何とかやってみます」

「どうやらホモ君には一発逆転の秘策がある模様。漸くセプテムでマスターっぽい仕事をする時が来たのでしょうか。そもそも更にナオキになるのか……そもそもナオキになるってなんだよお前メタモンか何か？ どっちかと言えば……ビリリダメみたいな面してんなお前な。」

と、脱線してしまいましたが、今回はここまで。

今回は対アサシン戦後半、となると思います。所でこれ勝てた所で何の情報が頂けるのかが全く不明なんですけど……首都の位置は抜けてますし。もしかして骨折り損とかあるんでしょうか。

そうならないように祈りつつ。ご視聴、ありがとうございました。

## 愛憎の洞 その四

皆さんこんにちは、ノンケ（象さん）です。声が誓殺さんだった時の私の電の走り抜けるような衝撃。課金。爆死……ふふ、S O X！（暴走する欲望） 止めないか！

前は、パトちゃんとの殴り合い……とはならず、ファラオ闘法対分らない陰陽術との殴り合い（一方的な虐待）を繰り広げました。ぶつちやけダメージレート向こうの方が上ですよね。ポーズ取るだけで範囲攻撃とか効率良すぎませんかね。

「——いい加減に、ひれ伏しなさい愚か者！」

「あわわわっ!？」

＜シャドウサーヴァントの猛攻が続いている。ポーズ一つで槍で穿ったかのように穴を開け、大槌で叩いたかのように粉碎する破壊力もあるが、しかし恐るべきはその連射力。シャドウサーヴァントとは思えぬ程に機敏なポーズを連続するだけで攻撃が飛んで来る。

「ど、どうしましょうマスター……作戦実行するにしても、余りにも、隙が……」

＜無理にでも仕掛けるか……？ ダメだ危険すぎる……！

＜持久戦になるが、気長に待つしかないか。

ホモ君ってお顔的にそう言う方面の持久力高そう（適当） っていう問題ではありません。持久戦というのはひで並の固さとB B 劇場のK M R並みの有能補給が無いと成立しないんですよね。どっちも持っていないホモ君には荷が重すぎる戦術です。

「……いえ、多少は無理を通してでも。わ、私が……大丈夫です、一回、二回位」

＜それはもう自殺行為とかいうレベルではない。全力で止める事にしましたが……下手な言葉は逆効果になるかもしれない。ここは慎重に言葉を選ばねば。

＜無茶はやめてくれ！ 大切な貴女を失う訳には行かない！

！  
＜無茶はやめてくれ！ そうしたら貴方の代わりに俺が突っ込む

おいしい？ お前らには上の選択肢以外が見えたか？ 俺達のログには何も存在しないな。こんな選択肢でちゃったら、ねえ？ もつというタイミング他にあるとは思いますが、まあ出て来ちゃったものは。下の選択肢はいい加減学習してどうぞ（半ギレ）

「…………ふえっ？」

＜香子の目がまん丸に見開かれる。どうにか説得できたかどうか、それを判断する前に、再び相手の謎光線が飛んで来て判断する事は出来なかった。

「大切、大切…………えっ？」

良い顔をなさってる（愉悦） 若い燕に熱い告白（誤解）される気持ちはどうだ？ お姫様だっこされながら！ 感想を述べよ！ いや、感想も述べられない位赤くなっちゃってるね♥ カワイイね♥ 結婚しろ（恫喝）

「…………はっ！ え、えつとじゃあ、わたすい、ち、ちがう、わたしゅ、待っててくださいお願いします！ あの、わ、私が戦わなきゃ、d、どお、すれば」

＜凄い噛みまくってたが、作戦を執行するにしても、という事だろう。確かにそれは問題ではあるのだが…………さて、どうするべきか。

＜…………逃げるしかないだろう。

＜俺が囧になる。その間に頼むよ。

さてジツサイオタツシャ案件なのは事実。つまり、コレは…………囧作戦じゃな？ ホモ君にはいつも通り死に行ってもらおうとしよう。頑張れホモ君。当然囧は…………サーヴァント以外が行く。

「…………マスター？ 何をおっしゃっているのですか？」

＜怖い。お顔が怖すぎる。ちよつとちびりそうになったが必死に堪えて、貴方は落ち着いて言葉を紡ぐ。持久戦では勝ち目は無いのであれば、いつそ相手を一点に集めて一気に破壊する、というのが良いのではないかと。

「だから？ マスターが？ 行くと？ ダメです。良いですかマスター。どんな状況であれ、マスターというモノはですね…………」

＜ダメだそうである。そして続く声が何時もの香子のトーンで無い

のでヒエツとなってしまった。思わず泣きたくなってしまった。もう限界だ。

ホモ君が泣いています。綺麗な涙を流しています。でも逃げるな、お前が生贄になるんだよ！ 諦めるな！ 積極的に囷に行けよ？ 積極的に囷に行くのは漢ポイント高いですよ。そのポイントで何が買えるんですかね……？

しかしそこはググつと堪え、そうでもしなければ隙を見つけれない、と根気強く説得しようとして……ふと向こうを見やる。キャットとあの巨大な大蛇が未だ激闘を繰り広げている訳なのだが。若干、そこに違和感を感じた。

△（……随分自分勝手に暴れてるような。援護一つもしない）

△（本体とは別行動取ってるにしても、自由過ぎないか？）

△（幾らなんでも自由過ぎる（言い掛かり）

「……分かりましたか。マスター……マスター？ 聞いていますか？」

△——貴方の頭の中に、先程の案へと繋げる為の、もう一つ案が浮かぶ。一の矢、二の矢を以て、あの怪物を攻略する道筋が、いよいよ見えた。細い道筋を。辿る様に。その為に貴方は……向かう方向を変えた。

「あのマスター？ どうしてキャット様の方向を見ていらつしやるんですか？」

△その目標は、先程から此方とは違い、凄まじい破壊音と衝突音が繰り返して飛んで来るキャットと大蛇の激突現場。それを見て……香子の顔色が青ざめる。囷になるだとかそんなチャチな物ではないよな、とんでもない愚行を犯そうとしているのを悟ったのだろう。

香子さん……大変申し訳ありません。ケジメ、付けさせてもらいます……（突撃開始）

「まっ、あつ」

△容赦なく、躊躇いなく、貴方は真つすぐにキャットと大蛇の殴り合いに向かつて走り出す。その視線が、大蛇の噛み付きを顎を抑えて凌ぐ、キャットと絡まって……貴方は吼える。策へのピースをハメる



せぬとはやはりお主は案山子であるな？」

「何とかシャドウサーヴァントがその動きを御そうとするが、やはり彼女の声を聴く様子もない。大蛇は、挑発しながら仕掛けるキャットを追って大暴れしながら、彼女自身を巻き込むのみだ……今、この時香子と貴方から、彼女のマークは離れた。」

「……っ……っ……っマスター。後でお話があります」

まあお見事にパトラさんをハメた代償はある訳ですけど……なあ（迫真） どうすんだよなあ、どう誠意見せてくれんだよ、お前のなあ、なあ、到底弁償できるような事じゃねえんだよなあ!? ホモ野郎がよ……

「——でも、今は。御身を危険に晒して得たこの機会。逃す訳には参りません！」

「香子がその手に筆を携え、文字を綴りだす……香子の攻撃は、あの謎のオーラで迎撃されてしまう。であれば……形無き、呪詛であればどうだろうか。暴力では防ぎ様無き、言の葉であれば、どうであろうか。」

「令呪を持って命ずる！ 宝具を開放せよ！ 紫式部！」

「おーここで二画目の令呪を切っていくウ！ 最初で温存して居なかつたらここで使えなかつたので最初で温存しておく必要があつた訳ですね（RTA風）」

「限りあれば 薄墨衣 浅けれど 涙ぞ袖を 淵となしける」

「紡がれるは詩の力。言の葉一つで相手を呪う、詩を扱わせたならば紫式部の真骨頂。万人に届き、凌ぐことも出来ぬ、そんな……詩歌宝具！」

「——源氏物語・葵・物の怪」

（注）ほんへでは無敵貫通は付いておりません。呪殺なんて回避のしようも無いだろうから必中くらいは付けてくれよなー頼むよー……（切実） まあでもそうでなくても十分に強いは強いんですけど、可愛いサーヴァントには無限に強くなって欲しいやんか。

「……しん、と洞窟が静まり返る。大蛇すら、その動きを止め……さらさらと虚空に溶け消えていった。それは、決着の印。」

「——ああ、カエサル、様……」

　　＼先ほどまでの力強い恩讐の念は、見る影もなくしほみ、力無く、体は震えている。招かれた滅びの概念は……確実に、そのシヤドウサーヴァントの力を奪い去り。その膝を、大地へと落させた。

　　——と言った所で、今回はここまで。

　　ご視聴、ありがとうございました。

## 勝利への道を その一

皆さんこんにちは、ノンケ（ユウユウ）です。前回クレオパトラ様を無事攻略出来たので今回は同じ世界三大美女で。太もも好き。

前回は、クレオパトラさん無事撃破。因みに割と大ピンチの状況で死の淵に突っ込む様な真似して何とか勝利いたしました。というか、自分の荒れ狂う神獣にもみくちやにされるパトラさんは余りにも哀れでございまして……

「良いですか！ 私は、まあ良いです！ 最悪！ でもマスター！あの状況で私という荷物を抱えた貴方が突っ込むというのが！ どれだけ！ どれだけ！」

＜勝てば官軍、とはよく言うが……何とか勝利こそした貴方にはその法則は適用されなかつたらしく、香子に思いつきり叱られていた。怒涛である。瀑布の様なお小言が浴びせかけられている。

「母の愛は内臓を貫き男心を粉々に。ミキサーの中身はあの日流した薄い本との別れの涙なのだな？」

その涙は皆通る道だから許してあげてキャット。でもこの場合香子さんがお母さんになるのか。怒られても泣かずに済みそう。寧ろご褒美まであるかもしれない……さては変態だな？ 貴様。

「……全く……勝てたから良いものの、で終わらせていては駄目ですね。コレは！ 徹底的に絞らないといけませんね！ カルデアに帰ったら！ 全力で！ ええもうはい！ お覚悟くださいマスター！」

＜とはいえ、正直自分が凄まじい無茶をした自覚はあるのも言うもない。一步間違えば全滅まであり得たのだから。ロマニ辺りからお叱りが来そうなのが余計に辛い。冷静に今考えると、完全に頭ゆだっていたとしか思えない暴走攻撃だった。

『——えー、大丈夫かな皆。此方ダ・ヴィンチちゃんですよ。さつきまでヤスの暴挙でちよつと気が遠くなつてたダ・ヴィンチちゃんだよーヤスは後で説教ねもう君はね、ヤス呼ばわりで十分だよホント』  
＜終わった。貴方は静かに天を仰いだ。



めっちゃ扱いが雑になってて草。ダ・ヴィンチちゃんをして『もうヤスでいいや』とか言われるっていう。ホームズと同じレベルとかオメエ（評価の落ち方が）マジシャンみてえだな……

『とはいえ、まあ、ホントお見事だとは思うよ。まさか相手同士を仲違いさせてその隙を突くやり方。マスターらしい、とはまつつつた言えないけどね！ ロマニにもしっかり言ってもらおうから！ 覚悟しなよ君ホント！』

〈どうやらお三方からのお説教へと秒速で進化したらしい。オルタと共に神を恨んで恨み抜いてやろうと思ってしまった。それくらいに、今は何かに八つ当たりをしたかったもう。

それは自業自得なんで諦めてもらって、どうぞ。そりゃあ、あんな無茶な真似したらまあそうなるという事で。幾ら見事に問題を解決したとはいえ、自滅覚悟の玉砕特攻みたいな攻撃をしたら、ダメでしょう（冷静）

「……それにしても」

〈香子が向いた先。そこには……黒い霧が晴れ、ボロボロになって倒れ伏す、緑髪の美人が居た。起き上がってくる様子は見られないが。未だ消滅はしていないのだが……果たして、まだ戦う力は残っているのだろうか。

「ダ・ヴィンチ様」

『……大丈夫だ。消滅する寸前だろうと思われる。こっちの勝ちは揺らがないよ』

ああクレオパトラちゃん。自慢の美しい御髪が酷い事に。もう二度とアラオ闘法は撃てないねえ……？（ニチャア）

「——無様、ね……」

〈その声に、貴方は咄嗟にバットを構えてしまう。如何に勝利は揺らがない、という話であっても、動きがあれば警戒してしまう。そんな貴方の目の前で、弱々しく、女性は言葉を紡ぐ。

「……あの方の、誇りを、汚した……あの、魔術師、に……一矢を報いる……為に、ここまで、零落して尚……良い様に、使われて尚……機を、伺っていた、というのに」

いや、アンタの旦那、ほんへでも割と満足そうに逝ってましたけど……ああ見えてもしかしたら不満を抱えていたのかもしれない（運転の心得）

『——あの方、というのは。ガイウス・ユリウス・カエサルで間違いないかい？ 女王クレオパトラ』

「……」

＜そんな彼女に、声をかけたのは、ダ・ヴィンチではなく……：ロマニだった。

「ロマニ様。大丈夫なのですか？」

『うん。なんとかね。流石に……：神霊が降臨して居たり、あんなハチャメチャなサーヴァントが居たりとか、ちよつとシヨックが強すぎたけど……寝てる訳にもいかない』

お？ このまま正体不明のサーヴァントとして話が進むと思われていたのですが……：そうか、旦那と交戦していたのは藤丸君チームの方でしたっけ。

「何故……：私の、名前を」

『他でもない、君の夫を討ち取ったのが、当代の皇帝、ネロ陛下と……：僕たち、カルデアだからだでもまさか、こんな所に居るとは思ってたけど。妻は、何処かへ幽閉されているのだろうと彼は言っていたから』

「っ！ カエサル様が!？」

＜その名前を聞いた途端に、疲れ切っていたサーヴァント……：クレオパトラの表情が息を吹き返す。体の痛みや、魔力は復帰して居ないというのに、精神の回復具合は恐らく天井を遥かにぶち抜いている。』

『す、凄いなあ。顔色が激変している……：』

「か、カエサル様を討ち取ったというのは!？」 とうか、カルデア!？」

あの魔術師が言っていた星見台の!？」

『あ、あのですね』  
「連合ローマとネロ・クラウディウスの戦況は!？」 どうなっているのです!？」

『大変申し訳ありませんがお話聞いて頂けませんか女王様！ お願い

します！』

『……今のうちに藤丸君達に救援に来て貰おうかな』

草オブ草オブ草なんだが。めっちゃロマニが圧されてて解釈一致。やっぱりロマニは英雄の勢いに圧されてあわあわ慌ててるのが一番ですねえ……（恍惚） 頑張れロマニ、俺達のロマニ。

〈——何とか今の状況をロマニが説明するのに、結構な時間がかかり。その間に、何とか此方と向こう側からの掘削作業が終了。立香達と合流する事が出来た。』

『……とんだ宝箱だったな康友。お疲れ様』

「シャドウサーヴァント相手の勝利、お見事です」

〈まあ、若干無茶こそしての勝利だったが……それはバレていないようなのでセーフ。セーフである。お小言を頂くのは三人だけで十分である。故に貴方は曖昧に、まあ頑張ったよと返すだけに留めて置いた。』

言葉は使いようによつては金にもクズにもなる悪い良い例（矛盾螺旋） 沈黙は金といいますが、これを真似してはダメなんじゃない……！（心からのアドバイス） まあ、私は使うんですけどね（卑劣様）

「——カエサル様は……そうですか。当代の皇帝と」

『倒した僕たちが言うのもなんですが。本当に神君カエサルの名に相応しい方でしたよ』

「ええ、ええ……当然ですわ。あの方は、何時でも、ずっと……」

〈そんな楽しそうなクレオパトラは……ふと、思い出したようにあの事を問いかけた。』

「カエサル様が、私に……伝言を？」

『……伝言、というか。まあ、惚気、みたいなもんだったけどね……これ、記録映像。本人の声で聴いた方が、一番いいと思うから』

……そういえば、地面に倒れ伏してる相手を誰も抱き起こしたりしないのは、冷静に考えて酷いな。まあリスク管理の面から、個人的な立場からも悪くないとは思いますが。パトラ様に触れて良いのはDEBUさんだけやし……（夫婦過激派）

『その名と姿を目にしたとき、貴様はどんな顔をするのだろうか。楽

しみだ』

「か、カエサル様っ……」

✓そこに写っていたのは……確かに、美男子だった。太っていた。いや、完全に矛盾しているのだがしかし、太っているにも関わらず、並のイケメンなら相手にもならないと思われる、整った男が其処に居た。

正直カエサルさんが不細工だと思った事無いんですよ。凄い秀逸なデザインですよ。デブじゃなくてDEBUと表記される所以もその辺りにある気がしますねえ！ とはいえ痩せた方が良かったというのはパトラの姐さんに同意ですが。

『嫌味で行っているのではないぞ？ 貴様は美しい』

「はっ？」

DEBUさん!? 何してんすか! (迂闊な発言とか) 止めて下さいよホントに! 女王の表情があつと言う間に氷点下、やっちゃったねえ! カエサル様ねえ! というかこんな堂々とした浮気宣言を映像記録として見せるとかロマニさては自殺でもしたいのかな???

✓明らかに記録映像を見ていて不機嫌になっているクレオパトラ。そりゃあ、自分の思っている相手が他人を口説いているのだから。

『どんな表情を浮かべても、等しく——』

「ぐぬぬぬ……カエサル様あ……!」

『……いや、いや済まぬ。訂正させてくれ薔薇の皇帝。今の私にとって、お前は美しいとは呼べぬな。もっと美しい者を、私は知っている。そして、その輝きを曇らせたのもまた俺である。その様な浮ついたセリフ、口が裂けても言えぬ身であった』

✓しかし……その雰囲気は、ある時を境に一変する。

ん? (一転攻勢)

『私の為に……自らの身を賭した女が居たのだ』

『女?』

『ああ。約束も守れず、先に死んだ男の為に、そんな男の、誉れの為に……済まぬな薔薇の皇帝。私にとっては、我が妻の献身こそが……今生、何よりも美しくそして……何よりも、得難い——もし、あ奴と

相まみえたなら、伝えてくれぬか。一言。済まぬと』

〈クレオパトラが、目を丸くし……そして静かに涙を流す中、カエサルは黄金の輝きを放ちながら、ゆっくりと消えていく。その最後まで、彼は思い出を噛みしめるように。優しい表情で、消えていったのだ。〉

つはあ……眉間にきちゃったよ……（ご満悦先輩）もうこれ以上やると涙腺緩くなっちゃう、ヤバイヤバイ（確信）声優さん迫真の演技が光る。こんなベタな話で泣いてなんてやるもんか（激ギレ）

『——以上になります。確かに伝言、伝えました』

「……謝る、必要なんでないんです。ただ……私は……」

〈そして。それに続く様に、クレオパトラの体からも、黄金の光が立ち上り始める。メッセージが切欠となったのだろうか……酷く、穏やかな表情で、彼女は最後の言葉を紡ぎ出す。〉

「……礼の代わりになるかは分かりませんが。私の持ち得る情報の中で、最も貴方達に有用な情報を伝えます。連合ローマの軍師は知っていますね」

『ええ。諸葛孔明ですね』

「そうです。大王イスカンドルの懐刀……彼を唯の敵と思っではいけません」

ほうほう（フクロウ）

「私が何故、ここに居たか分かりますか？」

『……偶然、とかでは？』

「どんな偶然ですか。諸葛孔明の差し金です。彼は、叛逆した私を使い潰そうとする連合ローマの皇帝達を説得し、ここに居る神への見張り役として、遣わしたのです……彼は、こう言っていました。『零落しても、一矢報いるつもりなのなら……機会を待て』と」

〈そして……彼女は告げたのだ。〉

「彼は、連合ローマに従っている訳ではありません。連合ローマを打ち倒すのであれば必ず、彼に接触なさい。それが、必ずやあの牙城を瓦解させる、一手となるでしょう」

〈連合ローマ、強大な敵を討ち果たす為の、その手掛かりの一つを。〉

……ほう？

と言った所で今回はここまで。

ご視聴、ありがとうございました。

## 勝利への道を その二

皆さんこんにちは、ノンケ（銀の腕）です。執事衣装が似合い過ぎで元に戻せない不具合。元衣装もカッコいいんですけど、バトグラから立ち絵まで完璧に敏腕執事なのが悪いのじゃ……

前回は、クレオパトラ様にカエサル様から「すまんな……」とお声をかけて頂いて昇天……する直前に重要な情報を頂きました。どうやら孔明Ⅱエルメロイ二世は唯イスカンドルヒヤツハーしている訳ではない模様です。流石二世！ 信じてたぜ！（ホビーアニメ特有の掌返し）

「——それで？ 私からのプレゼント、如何だったかしら？」

「一応本気で協力する気はあったってわけだ。女神様」

「ええ。私が力を貸せるのはここまでよ。後は貴方達で切り開いて頂戴な」

＜ステンは、一体何処迄見通していたのだろうか。曰く、この島に住まう彼女の監視役として寄こされたクレオパトラ。彼女をここに送り込んだ軍師……孔明の暗躍。それらをプレゼントと彼女は呼んでいたのだろうか。

「……まあ、アレだ。助かったのは事実だよ」

「そう？ それなら良かったわ」

「若干つまらなそうにしてるのはなんでなんだよ……全く」

女神様は失敗して敗退する方を望んでいたからね。しようがないね。つまりホモ君囮作戦をやっていた方が女神様受けは良かった……？

『まあ、女神様の協力を一度でも得られただけでも十分だよ。それに、僕らにとつてとても重要な情報だったからね。危険を冒すだけの価値は、まああったと思う』

＜＜つ、つまり俺は許された訳か。

＜＜神は私を許したもうた……

おつ、オルタも今居るんですけどそこで神の名を出すという事は……もう選んでくれて言ってるようなものですな。

『あつ、本造院君は全力で説教確定してるから』

「私の前で神の名を出すなんていい度胸してるわね。焼かれないのかしらっ。」

「そのお説教は先輩も参加するそうですよ?」

〈許されていなかった。なんだったら処刑人が増えた。助けを求めようと周りを見回したが……頼りになる騎士は今はスパイ活動中である。貴方は詰んだことをそつと悟った。そして泣いた。

ゴツホみてえだなお前…… (泣き方) 全く似合っていないからやめた方がよいよ (冷徹) 寧ろもつと男泣きするぐらいでI K E A。もつと「ウッウッアッアッ!!! ウッウッウッアッアッアッアッ!!! ウッアッアッ…… (慟哭)」みたいに泣いて (お願い) 「ふうむ。其方も色々大変だったのだな……余も一緒に行くべきだったか?」

「いえ……皇帝陛下も一緒に居たら、もつと、その、大変に、なつてたと思うので……」

〈皇帝陛下を死なせたらマズイ事態になるのは察しが付く。恐らく香子の心臓とか胃袋はもつと悲鳴を上げていた可能性も無きにしも有らずである。ただ、もしそんなカオスになっていれば自分のお説教は無くなつていたというそんな……そんな希望を、見た。

そんなことは無いんやで。君は大人しくお説教四天王十死刑執行人にこつてり絞られるんだよ。カルデアに帰るまで震えて眠るんだな……

〈そんなどうでもいい希望は、まあいい。重要な事は一つだ。

『まあ、何はともあれ。ここへ来た意義はあつた。ローマへ戻つて、ここで得た情報を生かした作戦を立てるべきだろう』

「うむ。敵の軍師に接触するとすれば……あの騎士殿になんとか頼まねばならん」

〈そう。この情報を伝える為にも、デオンと早急に接触するべきではあるが、彼が戻ってくるのはまだ先の話。となれば、此方から向こうへと、何とか接触するべきなのだが……と、そこ迄貴方は考えて、ふともう一つどうにかしなければならぬ事を思い出す。



えっ？ 他に何かありましたっけ？ ってそう言えば、こっちのメンバー一人たりないねえ……？

「あ、あの姉さま、私何時までこうして居れば……」

「私が許可するまでに決まってるでしょ？ 黙って椅子の役割を果たしなさい」

「はい……だから怒らないでください……」

＜メドゥーサだ。完全に姉の椅子代わりになっていて、自然な光景だったので流していたのだが……普通に考えれば異常だ。

そうなんですよね。今の所、頼りになるメドゥーサさんは椅子になってるんですよ。目が死んでいるかもしれない（ギャグマンガ日和並感） うーん、余りにもびったりと当て嵌まり過ぎている所為で違和感なさ過ぎて忘れていたという……モノローグとプレイヤーの意見が一致する貴重な光景。

「何かしら？」

＜見て居たら若干威圧されビビらされてしまった。凄い反応が冷たい。自分が何かしただろうか。何だったら被害者な面まであるのだが……色々、こう、哀しくなってしまう。

「……ふん」

ステンノ様がホモ君に対して物凄い辛辣なの笑う。さつきから君困難ばかりやね。片方は愛の鞭だろいい加減にしろ！ 愛の鞭にもいい加減というのはあると思うんですけどそれは……

「あ、あの上姉さま。そのくらいで……」

「あら？ メドゥーサ？ 今、口答えか何かした？」

「いいえしておりません椅子の任務を全うします」

＜——このままメドゥーサを椅子代わりにされているというのは流石にちよつと看過できない。かといって……一応、彼女らは姉妹である訳である。そんな彼女達を引き離すのはどうなのだろう。積もる話もまだまだあるのではないか。

まあ、この二人は色々複雑ですからねえ。こうして扱いはちよつとアレですけど姉妹の絆は本物ですし、こっち（カルデア）戻って来いよおいしいからあなあ!? とはそう簡単には言えないですよ……そ

んな剣幕で言うのはどんな時でも厳しいと思う。

「もしかしたら、ステンノの態度も、久しぶりに会った妹に対する照れ隠しだったりするのかもしれない。そう考えたりすると……引き離し、難かったり……」

「……あのー」

「私が良いと言うまで……よ？ 二度言わせる気かしらメドゥーサ？」

「もう言ってます上姉さま！ そして怖いです！」

「……案外そうでもないかもしれない。もしかしたら、今すぐにも救出した方が良いのかもしれない。何方も言い切れないのが、どうにも困る。英霊という特殊な立場と、現状目の間に広がっていく光景を加味して……」

「取り合えず、一旦メドゥーサさんを開放していただけませんかね……」

「——もうちよつとだけ、そつとしておこう」

「さあ、皆さま。ここで究極の選択のお時間でございます。姉妹百合の間に挟まるガイアになるか、それともそつと放置する紳士になるか……でもその百合、百合は百合でもどす黒い黒百合だとおもうんですけこ（名推理）」

「まあここで助けないと下手するとメドゥーサさん離脱でセプテム攻略とかいう無駄な縛りを加えてしまうかもしれないので、ここは割り込みます（ガツ、ガイアツツツツツ！）」

「あら？ 解放とは可笑しな言い方じゃない？ 私達は姉妹の絆を深めているだけなのだけど……？」

「マスター、大丈夫です。貴方迄巻き込まれては……」

「——それとも。サーヴァントとして召喚した事で、この子を自分のモノ、だと勘違いしているとか……だとすれば、随分と傲慢ね」

「メドゥーサの髪を撫で、笑いながら言うステンノに、そんなつもりはない、と貴方が返した……丁度その時だった。ステンノの表情から突如として笑顔が消える。そして見つめるのは海岸沿い。其処に何者かが立っているのが貴方にも見えた。」



貴方はそつと地面に腰を下ろし……

「——メドゥーサ？ 何をやっているの？ 私の島へのお客様よ。対応なさいな」

「えっ？」

「そこの貴方もよ……丁度いいわ？ 見せてごらんなさいな、必要だというのなら。メドゥーサと一緒に戦って。モノとして扱っていないのなら、その姿を見れば分かるでしょ」

「えっ、と思わず声が漏れた。」

誰に向かって口利いとんねん……（怒れる猿人<sup>レイジング・ハゲ</sup>） つたくしうがねえなあ？（寛大） メドゥーサさんを返して欲しければちゃんとして事をしろ、という事でしようか。あれ？ という事は此処で下手な仕事したら縛りプレイが確定……ふざけんな！（声だけ迫真） 認められるかっ……！ そんな条件……っ！

この女神様はホンマ……仕方ありません。次回、しっかりとサーヴァントとマスターとしての絆、見せつけるとしましょう。ご視聴、ありがとうございました。

## 勝利への道を その三

皆さんこんにちは、ノンケ（黒女王）です。そろそろ被ってきそう  
で怖いので、ちよいちよい変わり種を挟んでいくスタイル。

前回は、お仕置確定！ ハゲの精神は限界寸前！ でもホモ君も頑  
張ってたんですから許して頂戴……そしてボロボロに言われてから  
のステンノ様に睨みつけられて、更にぼろっぼろにさせられました。  
涙しかない。あ、伯父上も襲来しました。

『敵はサーヴァント一騎と、連合ローマ兵が……結構な数が居る！  
流石に本気出してるなあ！ 怖いなあ！』

「つとなれば……康友、俺はネロ陛下と、あのサーヴァントを叩く！  
お前は離れて他の対処！ レオニダス！ 康友の援護頼む！」  
「了解しました！」

＜領き、速攻で別れて動き出す二人。貴方の先には、無数のローマ  
兵達。大盾を構え、その後ろに槍を構え、遠距離攻撃も備えた三段構  
えがジリジリと向かってくる。

＜良し！ キャットとメドゥーサさんは突撃！ 香子さんは援護！  
＜三人共、我が背に続けええい……！

さては学習能力がないこのハゲ。さつきアレだけボッコボコに  
されておいて、舌の根も乾かぬうちに自分で突撃したらどうなるかな  
んてもう想像つくだろうに……当然ながら上ですよ、お説教部分は全  
部力……ットオ！になるので。

「分かりました！ すみませんメドゥーサ様、キャット様！」  
「分かりました……！」

「真っ先に突っ込む弾丸キャット、敵対するもの全員ケジメ案件なの  
だなー！」

＜殆ど同じ速度で飛び出すキャットとメドゥーサ。テンションの差  
は歴然であるが、しかし砂浜の砂を四方八方に吹き散らすその破壊力  
は、互いに全く遜色なし。一撃で纏めて何人ものローマ兵を吹っ飛ば  
す。

「……はあ……ホント、姉さまって昔っから……！」

「にやはははははっ!」

躁鬱が激しすぎる……

片やデデドン! (絶望) 片や目力先輩(暴走) 温度差でローマ中のグッピー全滅してそう。グッピーが大量死してて巡り巡って特異点出来てそう。その場合ボスは何になるんでしょうか。カイニス君が海の仲間たちの相談に乗って代わりに出張ってくれるんでしょうか。凄いい面倒見良さそう (小並感)

「……メドゥーサ様は大丈夫なんでしょうか」

「全然大丈夫そうには見えない。テンションボロボロなのに、手元は自動的に敵を処理しているようにしか見えない。明らかに危ない気がする。とはいえ撤退してもらおう訳にもいかない、寧ろ動きはキレているので頑張ってもらおうしかない訳だが。」

まるで鬱憤を晴らすかのようですね……だからと言って怒りとも違うというか。特殊な鬱憤の貯め方をしてるんですよこの方。ホント姉妹の関係は複雑怪奇。お願いだからもうちよつと素直になつて。」

「遅れました! 香子殿、私の後ろに!」

「は、はいっ!」

そしてレオニダス王降臨。後衛をしつかり盾役が固めたのでもう突破は無理です。おや? またも消化試合かな?

「くっ、これが大王の言っていた……!」

「怯むな! 此方も何も用意してこなかった訳ではない……ゴーレムを解き放て!」

とか思ってたらこれだよ (憤怒) 海岸につけられた船からまあぞろぞろぞろぞろと。岩の塊が雁首揃えて投入されました。最近は……岩を運用しとったんか? (現在進行形) 容赦とか……なさらないんですか? (懇願)

『つ、追加の魔力反応でゴーレムだとう!?! 総数は……兵士よりは少ないから安心とは言えないな! 結構いるよ!』

「ぬう! 敵もそれなりに本気ですな!」

見えるだけでも二十は居るんですね。というか、船を大量に揃え

てこんな小つちやい島に乗り込むとかお前らホモ（臆病者）かよ……寧ろやるんだったら島全体をフルで囲んで一齐に砲撃するくらいでどうぞ。どこのバーソロミューの宝具なんですかねそれは一体……あれ？ メドゥーサさん、すつごいゴーレムに肉薄してますけど……？

「全軍！ 奴らを押し潰せ！ 如何に一騎当千の将とはいえ数で攻めれば……！」

「——今の私、正直気分が悪いので、速攻で仕留めさせていただきます」

〽——瞬間だった。ゴーレムの前に立ち塞がったメドゥーサが、眼帯を解き放ち……魔眼を、ゴーレムたちに向ける。その直後……ゴーレムたちが、あつと言う間に崩れ落ちていった。アレだけの数が居たのが、既に三分の一は使い物にならなくなっているだろう。

「……………えっ？」

あの、それは私のセリフなんですけど。メドゥーサさんって、そんなチート能力持ってましたっけ……？ アレ？ 彼女の魔眼って崩壊の魔眼とかいう超チート能力だったかなあれえ？

「——ゴーレムの材質は、大抵岩」

「あ、あれ？」

「石化、というのは、まあ平たく言えば、モノを脆い石に変える物なのです。だってそうじゃありませんか。石にも色々ありますが、中にはそれこそ、金属の一撃で弾き返す様なものだってあります」

〽一歩、一歩と、歩みを進め。ゴーレムを指揮しようとした男を、睨みつけて。抵抗は無駄だ、という事を、丁寧、丁寧に、噛みしめさせるように。口を、開いて、追い詰めて行っている。

「倒せば砕けるような石なんて、本当に脆い種類ですよ。砂岩にも近い……さて話を戻しますが、岩というのは元を正せば石の一種。そんな物を更に、更に脆いモノに変えるとなると……無いんですよ、砂になる位しか」

うーむ説得力がある様な無い様な。

「要するに、貴方達のご自慢のゴーレムは、私の前では非常に無力とい

う事」

「あ……ああっ……!?!」

「それで？ 貴方も石になりますか？ それとも……」

〈ちらりと視線を向けた先、そこでは遙か彼方に吹っ飛ばされる哀れな兵士の姿。キャットのひとつと暴れは、人間一人の大暴れに匹敵する威力、すなわち、今まで話していた間も、どんどん連合ローマの兵力は磨り潰されている訳なのだが……

「ああなりますか？ 痛そうですね、彼女の一発」

うわあ……メドゥーサさんが悪い子になつてらっしやる……コワイ！ 相手を睨みつけるその形相は正にアシユラ！ あからさまに鬱憤をバーンさせているのである！ まあメドゥーサさんの先ほどまでの扱いなら理解できない事も無い（鎮火）

「……はっ……ああああ……へえ……」

〈メドゥーサの迫力に押されたのか、完全に兵士の心は折れ、あつさりとは崩れ落ちてしまう。気持ちは分かる。メドゥーサの上背は相応なもので、彼女から見下ろされながら圧力を掛けられるのは結構な迫力だろう。

「……どうやらこっちはあつさりとケリが付きそうですな」

「も、もう大勢はついてしまった感がしますからね」

ゴーレムが一瞬で結構な数やられた時点で、連合ローマ兵全体が『いやもうホントコワイんでもう無理です（棒読み）』的な表情をしていらっしやっただのね。それもやむなしと思いつらふ。

「——ひい、ひい、るむ、なあっ！ まだ、ゴーレムは居るんだっ！ 戦える！」

〈一部は櫓を飛ばしたりしているが、しかももう大半は逃げ腰、及び腰である。マトモに戦えるのか……その答えは、もう分かり切っているだろう。

「無抵抗に等しい相手を蹂躪する、というのも、流石に」

「いえ式部殿！ ……ここは、容赦なく！ 徹底的に！ 逃げ腰で、壊滅寸前とはいえ、彼らも兵士！ 戦場に出て来たからには覚悟というモノがありましよう！ それを最大限に尊重しなければ！」



レオニダス王の無慈悲な『お前を殺す』発言に苦笑いも出ねえ……流石にスパルタ、戦場ではシビア of シビアですね。これにはローマ兵も思わず十字切り。でもそのキリスト人理焼却で燃え尽きてらっしやるんですよ……

という事でね。はい残りは……

く力……ツトオ！く

「……ふうふうふう……」

「背中に滅びを背負っているのだな。コレは確コン極めている背中である」

くフラストレーションを背中から、まるで背中から翼の様にまき散らしている。そんな幻覚が見えているのは、貴方だけだろうか。これはマズい。一度爆発してしまったのがマズかったのだろうか。どんどん溢れて来てるように見える。

「……あ、あの。メドゥーサ様、どうしましょう」

「ここは私が参りましょう！ なあに、私は頑丈ですので、万が一が有っても半殺しで済むかと！」

「ダメですよ！」

いや、半殺しじゃダメなんですよね……もうちよつと穏便に収めなきゃ(希望) しかし、レオニダス王のその気高い覚悟誉れ高い(漢の涙) 故にこそ犠牲になったのだ……とはそう簡単には言えないというか。

くサーヴァントの問題をサーヴァントに解決させる訳にもいかないだろう。となればここで頑張らなければいけないのは、マスターの貴方だ。しかし、見る限り凄じ根深いものが噴出してきているのは分かりやすいので、下手な言葉はかけられない。

く……よし、ロマニに相談だ！

くよし、ダ・ヴィンチちゃんに相談だ。

頼りになるのは何方か、となると……まあランダム要素は強いけど、ダ・ヴィンチちゃんの方が頼りになる気がする。よし！ よろしくお願いしまあああああす！ (超高度な暗算)

『はいはい。ダ・ヴィンチちゃんだよ。帰って良いかい？』

〈管制室から見ているダ・ヴィンチちゃんも状況を把握しているのだろう。そう簡単に帰らせる訳にもいかない。何とか打開策を授けて欲しい万能の天才とばかり、貴方は涙目で懇願する。

『うーん、とはいえ姉妹の間のフラストレーション、それにあの慣れた様子を見てると昔っからあんな関係だったと考えると……ちよつと、根深過ぎる気がする』

それはそう（諦め）

『となれば……いつそ、なんかご褒美を上げてみるとか？ 例えば……君の血とか』

ファツ!? ダ・ヴィンチちゃん何言ってるんすか!? 冗談にしても、ちよつと優しい感じで……

〈いや、それは流石に……

〈成程！ 流石万能の天才！ そうとなれば善は急げだ！

何だコイツ!?（困惑） オツケーの返事があるのか……明らかにメドウーサさんを怒らせそうなご褒美なんですけどそれは……で、でも……もし、もし……見所さんが……（葛藤）

あ……あ……（選択肢下）

『えっ? あのちよ、ヤス君!? ちよ、待つて待つて少し考えてみようそれはちよつとマズいどころの騒ぎじゃないというか』

〈ダ・ヴィンチの静止も、もうそうと決めてしまった貴方には届いていない。ナイスアドバイスとしか思ってる。そして、何の警戒も無く、貴方はメドウーサに近づいて声をかける。

「——マスターですか、なんででしょうか」

〈いやあメドウーサさん。イライラしてるなら、おいらの血を飲みなよ！  
い、いった!?

「……冗談、でもなさそうですね。そんな悪趣味な冗談言えるような方でも無い。となれば本気ですか？ 本気で血を吸っても良い、と思ってるのでしょうか。この前だって他の方に止められていたというのに」

〈自分の覚悟はこの前言った通りだ、と二言は無いと言外に貴方は

告げる。物で機嫌を直すというのは余りいい考えではないかもしれないが……自分に今、出来るのはこれくらいだろうと。

サーヴァントを養うのはマスターの仕事というのはそうなんですけど、だからって気軽に血を吸わせすぎる(困惑) しかし、これ、大丈夫なんでしょうか。一応初代とホロウを知っている私としては……

「ふうん……であれば、遠慮はしなくて良い、と。その言葉、後悔しないといいですね?」

〈どんとこい……と、言ったその直後だった。既にメドゥーサは貴方の後ろに回り込んでいた。えっ? と一瞬呆然としたその一瞬で、貴方の首に、牙が突き立っていて……貴方の記憶が残っていたのは、その後のセリフ迄だった。

「——私の吸血は……甘くて、蕩けるようで……腰が抜けてしましますから」

あつ、ふうん……

と言った所で、腰砕けになっていくハゲを背景に、今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました……うわあ、本当に憂さを晴らす様に吸ってる……よっぽど溜まってましたねコレは……

## 勝利への道を その四

皆さんこんにちは、ノンケ（鬼武蔵）です。被ってないギリギリを責めていくスタイルで参ろう。被ってたらドボン。

前回は、形ある島に攻めて来た連合ローマを無事撃破。上手い事連携も出来ました。メドゥーサさんのストレスをいい加減晴らしてあげた方が良いんじゃないかと思いましたが。という事でメドゥーサさんに『僕の血を吸いなよ！』発言。ホモ君は死んだ。

「……伯父上……」

「ふう……少し、スッキリしました」

＜遠い目をしているネロ。そして、凄い血行の良い顔をしているメドゥーサ。足元にはシリアスとコメディ。両極端にも程がある。コメディの側には、愚かな提案をした故、崩れ落ちて顔色が悪くなったハゲも一人転がっている。余計に絵面が酷い。

ホンマ草。前回、冗談で選択したイライラが溜まってるなら、とアパンマン発言したら速攻で血を飲まれました。しかも大分しつかりと。うーんこの。まさかノータイムで飲むとは……それだけ溜まってたんでしょか。

「……ご自分で許可したとはいえ、コレは酷い。大丈夫ですか本造院殿？」

＜マスターとして、彼女がスッキリとしたなら本望！

＜ふふ……吸血って、慣れると気持ちが良いんですね……

（発言が）お太い！ 変な趣味に目覚めてないかホモ君……という事で下の選択肢に決まってるという事で。まあ、こんな選択肢バキュームみたいなもんだしそりゃあ選びますよね。

「マスター!？」

「本造院殿?! いや、確かに趣味は人それぞれかと思われませんがしかし、それは、些かと……特殊に過ぎると申しますか」

＜いや、流石に冗談だとは返す。吸血でそんな、気持ちよくなるなんて……そんなバカな話は無いだろうと。若干冗談めかして。

「そ、そうですか……良かった」

「はあ、全く、流石に冗談になるものとならない物がありますぞ。自分のサーヴァント相手にそんな物を開眼する等、マスターとして前代未聞ですからな」

ほんとお？（純粹な瞳）メドゥーサさんは、エロゲーの初代出身なんですよ。そう言う描写はまあ当然ながら……ね？ つまりにメドゥーサさんにはそう言う要素が要素があるのは不思議でも何でもないんだYO！（クソデカ）

＜……とは言ったものの。実際、そこ迄悪い心地では無かった、寧ろ予想を遥かに超えて、ちよつと心地よかつたのは事実である。そう言う性癖なのだろうかと自分を一瞬……いや、正直今でも疑ってはいるのだが。

＜（……立香には絶対に言えないなこんな醜態）  
＜（……癖になったらどうしようかな）

気持ち悪くなっちゃうやばいやばい……（清々しい罵倒）秒速で印象レベルが最下層迄落ちかねないんですけど、でもあの鉄人土郎をしてそう言う感じ方しちゃってたからホモ君如きじゃ対抗出来ないのも多少はね？

「——ずいぶんお熱いなご兩人。恥の繋がりで見せるラブ&ストーリーとはキャットも思わず玉ねぎアイ、デアルな？」

「え？……あつ」

＜そこで漸く、自分の足元に貴方が崩れ落ちているのに気が付き……ものすごい勢いで貴方を抱き起した。

「だ、大丈夫ですかマスター!? ああ、あのすいません！ ちよつと、その色々と溜まっていてしまつて！ それで、その……遠慮が効かなくなつてしまつて……あの、えつとえつとですわね」

すつごい慌てるメドゥーサさん可愛い。この表情を見る為にハゲが可笑しい趣味に目覚めようとまあ……うん。良いよね。必要な犠牲、コラテラルダメージという奴なのです皆様。お許してください！「そ、そのっ！ ま、マスターも悪いのですよ！ あんな、あんなタイピングで幾らでもどうぞなんて！ 私を誘つたのですから！ それ  
は！ もう！」

「ちよつと色々マズい言い方な気もするが、あくまで吸血の事である。ストレスを晴らす様に指示して、その通り吸血したら、ちよつとハッスルしちゃった件である。他意は全く無いのである。そう。全く。」

「ほんとお？（疑問）目が泳いでますよ貴方。めっちゃずるつずる滑ってらっしゃいますよ？ カルデアのマスターとして嘘はいけませんねえ……もつと清廉潔白に恥部を晒してどうぞ。」

「……余が、こう、勝負の余韻を楽しんでいる時に、何とも言えぬ話題を裏で話すのは止めて貰えぬだろうが。微妙な気持ちになる」

「申し訳ない、と立ち上がって言おうとしたが、やっぱり足がガクついて動かない。此方もすっかり余韻が残っているらしい。しかし丁度いい、伏せたまま出来る謝罪の仕方を貴方は良く知っている。」

「大変申し訳ない。皇帝陛下。」

「拙者、腹を搔つ捌いてお詫びする所存。」

「で、出た——！ 日本特有のクビサシダシジツ！ 土下座！ 最近海外の人にも浸透して来た日本特有の謎文化！ 文言は変わってもやる事は変わらないという。まあ取り敢えず普通に謝つてもろて（選択肢上）」

「ま、マスター？ あの、頭焼けませんそれ」

「い、いやその、そこ迄深々と頭を下げなくても構わんから……」

「ネロ陛下——！ って何だこの状況!」

「思わず飛び出した立香の一言には正直同意する。砂浜にジャリジャリになつて若干焼けながらもハゲ頭を擦り付ける貴方と、それに寄り添う妹系、目の前で慌ててやめさせようとする皇帝、その横でチベスナ顔を浮かべるサーヴァント二騎。」

「控えめに言つて……カオスです……何だこれは！ 何なのだこれは!?! 一体どうすればいいのだ!?! 本当に誰か答えを教えてください。私もこの状況、一体どう打開するべきなのかさっぱり分かりません。つまり打開する必要はない……?（発想の転換）」

「——随分と滑稽な状況ね」

「はっ!?! その混沌を切り裂く、鈴のような声は……!」

「う、上姉さま」

「楽しそうね。メドゥーサ……嫌味の一つでも言おうと思つて来たのだけど、ここまで面白いともう何も言えないし、言う気も起きないわよね正直」

あ、普通に呆れられている……！ ステンノ様すら呆れて『ええ……（困惑）』つてなってるのつて凄まじい事ではないでしょうか。

「はあ……モノ扱いしてるのはマスターの方では無くて、貴女の方ならんてね」

「えっ、その、それは、ですね……」

「だって完全に今のその子の扱い、貴女の、えっと……確か、先の時代の言葉で、ドリンクバーというのかしら？ そんな感じだったじゃない」

「ヴツ」

メドゥーサが崩れ落ちる。姉からのあまりにも容赦の無い一言は、流石にダメージが大きすぎたのか。貴方と同じような格好で砂浜に伏せ、震えるばかりになってしまった。

ダメージが余りにも大きすぎる。いや、そんな事をしていた覚えは無いんですけれどももしかしそんなか細い事実を容赦なく吹き飛ばすドリンクバー発言。美味しそうに飲んでいたのは間違いないからね、しようがないね……

そんなメドゥーサを尻目に、ステンノは此方の傍にゆっくりと屈みこむ。

「……はあ。なんだか、警戒していた私がバカらしくなるくらい平和ね。貴方達」

そう言つて隣のメドゥーサを見つめるステンノの表情は……先ほどの威圧感のある笑顔と違い、やんちゃする妹を見つめる姉としての、優しい表情をしている。そこに、初めて彼女たちの姉妹らしい——一方的なものではあるが——姿を見た気がした。

まあ藤丸君チームと違って、こっちチームは完全に漫才トリオですからね……そりゃあ仄暗い色気のある話だったり、サーヴァントとマスターの軋轢だとか、そんなとは無縁な平和なチームですよ。尚、

大胆な犠牲になるのはマスターの模様。

「まあ、あんまり駄目ドゥーサに構い過ぎるのもご褒美になつてしま  
うし、この辺りでやめておくべきかしらね」

「――一瞬の後、そんな表情は何処かへと消え。直ぐに涼やかな、元  
の笑顔へと戻る。そんな彼女とメドゥーサの視線が、一瞬交わり……  
口を開いたのは、ステンノだった。」

「メドゥーサ」

「は、はい」

「貴方の様な大女が活躍出来るような場所にいるのでしょうか？ 私達  
の分まで、精々働いてきなさい。それで私が力を貸した、という事に  
もなるでしょう」

「おや？ さてもこれは……」

「は、はいっ！ 分かりました上姉さま！」

「下手な真似をしたらお仕置だから。その辺りは覚えておきなさい」  
「はいっ！」

「どうやらビビりあがつてる、ハッキリ分かんだね。」

まあ威圧されておりますが、同行の許可も無事下りた模様です。そ  
れがああ痴態っていうのがなんとも言えませんが……仕方ない  
ね。うん。でもあそこ迄恥ずかしい姿を見たからこそなのかもしれない。  
つまりマスターは痴態を率先して晒すべきだった……？（DM  
の発想）

と言った所で、おや画面が暗転して……今回は此処で区切れという  
事ですかね。では今回はここまで、という事で。ご視聴、ありがとう  
ございました。



## デオンの潜入作戦 その三

皆さんこんにちは。ノンケ（バナナセイバー）です。早く奥様と一緒に幸せになって。あとお二人の邪魔をするクソ猿は今後敵として実装されたら首を刎ねる。アーチャーだったら心臓を穿つ。セイバーだったら的当ての的にする。

前は、お姉さんが若干あきらめ気味に『いつてらっしやい』コールをメドゥーサに送って下さいました。ありがとうございます！ 糞みたいなカオス時空に巻き込んで大変ごめんなさい本当に。で、ここで暗転したんですよ…：…つまりは、お前と一緒に主人公交代の準備だあ！（意味不明）

〜——異様な光景だと、デオンは思う。出来る限り周りに合わせるのが得意なデオンではあるが、ここまで特異な状況であると、逆に溶け込むのは難しくない。

「まるでアリの巣の様だな」

〜無感情、という訳ではない。まるでシステムの様に思考も何も考えていない、そんな動きをしているのだ。ただ、幸福を享受して生きている。この住人はそれ以外をしていないのである。

市民、貴方は幸福ですか？ 状態です。デイストピアってこういう事を言うんですね。みんな笑顔なのに活気が無いとここまで不気味になるんですよ、人混みって。FGOってホラゲーだったかな？（すつとぼけ）

「——」  
「？」

「誰も私に意識も向けていないか。他者と無理に干渉する必要もない。話すのは自分に近い極身近な人間だけ。その会話も…：…」

〜こうして市街を歩く際も、自分からボロが出かねないような状況の一つや二つ、覚悟していたというのに。全く、と言って良いほど支障も無く。恐ろしい程簡単に、歩哨という仕事を熟している。これは必要なのか、と思う程に。

「まあ、僕としてはありがたいが。市民からの告げ口もないんだ、仕

事もしやすい)」

はい、という事で異様な連合ローマ市街から再開の、デオン君ちゃん視点。連合ローマ首都潜入作戦〜一人で出来るもん〜の続きです。で彼は今、歩哨をさせられているようです。今の所はバレていないようです……

「(……とはいえ、任務を途中で放り出すのは怪しまれる。これが終わってからのだな)」

〈今は、王宮の近く、兵士の詰め所への帰還途中だ。戻ったら改めて仕事を開始するでしょう。ここまで警戒もされないのなら、此方もそう警戒する必要も無いだろう。此方が過剰に警戒するのは逆に不自然さを生みかねない。

で、こつちに来て思うんですけど、最初に孔明先生に接触したのは大チャンスだったのではないでしょうか。何かあるのであれば、寧ろ孔明先生にだけスパイとしてバレているとやりやすい気がします。秘密の共有は好感度を稼ぎやすいってそれ一。

まあでもね、私とデオン君ちゃんの隠密Ⅱジツが完璧すぎたんで、気付かれませんでしたよ(慢心) いやー最強過ぎてすいませんね視聴者の皆さま。ワハハ。(フラグ) と、そういうしている内にデオン君ちゃんが詰所らしきところに戻りました。

「……」

〈デオンが詰所に入った途端、入れ替わる様に次の兵士が動き出す。まるで機械のような動きで、デオンに目を向ける事すらしていない。

「……よし」

〈そして入れ替わったこの一瞬。詰所には誰も居ない。自由に動き回るのなら絶好の機会だろう。後は、何処に向かうかが重要だが……候補は三つ。市街、王宮、そしてこの都市を覆う巨大な城壁の三つ。「何処も調べ甲斐はあるが、強いて優先するなら」

〈最も広いエリア、市街

〈最も厳重なエリア、王宮

〈最も重要なエリア、城壁

さあ、ここにきて選択肢ですが、何処を探したものでしょうか。

ここで一番危ないのは、下手な選択肢を選んで時間を無駄にした挙句、何の成果も得られませんでした、じゃ私は兎も角デオン君ちゃんのスパイとしての名声に瑕がつくってもんです。アレ？ どうして私、プレイしてる英雄の誇りまで背負ってるんでしょか。

では、ここは消去法で参りましようか。広い場所は時間を消費しやすい、市街は除外。嚴重な警備を掻い潜るのも時間の無駄になりかねない……つまり。

∠最も広いエリア、市街

∠最も嚴重なエリア、王宮

∠最も重要なエリア、城壁

当然城壁だよなあ!? 城壁の秘密を探るのであれば城壁に乗り込むのが基本です。迂遠な戦略とか花拳繡腿に過ぎるってそれ一番言われてるから。直球勝負こそ王者の戦略なんだよなあ……

「——よし、城壁を崩す術を探るのであれば、直球勝負が一番、かな」  
∠時間もあまり無い。速攻こそが戦場では貴ばれるものだ。そうならば先ずは本丸へ。其処で城壁を崩す隙などが見つかれば御の字である。

という事で城壁へ。GO! (大乱闘) 実際見つかるとそうなりかねないので慎重に。

∠移動力……ツトオ! ∠

∠——構造はいたって単純。それでも分厚い石を綿密に積み重ねられた、ローマの建築技術の結晶。サーヴァントとはいえこれを崩すには相当な……それこそ対城宝具の最大出力を以てして何とかというレベルである。

「それでも取り敢えず、潜り込むのは難しくなさそうだな」

∠今、デオンが居る場所は、八角形に都市を覆うその巨大な城壁の、その頂点の一つ。壁と壁をつなぐ、殊更に巨大な塔、そこから見事城壁への侵入を果たした所である。

侵入をまるで当然の様に成功させるな (誉め言葉) 諜報員として

のスキルはマジで極まっていますね。一応、侵入フェイズ的な物もあつたんですけど、デオン君ちゃんの補正も乗っててあまりにもチヨ口過ぎたので……実況もクソも無かったです。

「それにしても、内部から見ても、隙が見えそうにも無い、か」

「それでもデオンとしては、少し落胆を隠せなかった。外から見えぬ隙、切り込む一手。そんな物を、内部からなら何とか見つけられないかと。そう思って居たのだが……全くである。何処を見ても綻び一つ見えもしない。

「入ったばかりだというのに、そう思える位には、この城壁は完璧だな」

「はえーデオン君ちゃんからそんな意見が飛び出すなんて絶望的ですなあ!? おかしいな何の成果も得られないどころかさらに絶望的な情報まで飛び込んできてしまった……! これでは悪化……っ!

状況が悪化……!」

「——とはいえ何もしない訳にもいかない、か」

「しかし、デオンの役割は、何かしらこの城壁を穿つ為の隙を見つけ出す事である。もし存在せずとも、無理矢理に見つけ出すくらいはやってやらねば、状況の打開などとても出来るものじゃない。自らを奮い立たせ、意識を切り替える。

「先ずは何か、気になる部分が無いか……そこからだな」

「触れた石積みみの壁の模様を撫ぜれば、掌に引つかかる感触を残している。こんな風に、何かしらがあっさりと見つかつてくれれば、苦労はしないのだが……」

「さーでどこから手を付けるとしましょうか……入り込んだは良いんですけど、どこもかしこも壁、壁、壁なもんで、何処にもとつかかりがないです、あ無い……（諦観） 犬の様に探し回らなきゃ……探索力……ツトオ!」

「むーりーもうむりー……（即落ちニコマ） とつかかりどころか唯の城壁観光になってしまっている! くぎぎ、コレはキチンとした城壁の探索じゃ……デオン嘘を吐けっ! 嘘ついてるのはデオン君ちゃんではない（ガトリング腹パン） 己の無能をキャラに押し付け

てはいけない（二重の極み）

「——はあ、少しばかり自信が無くなって来るな。良し悪しに関わらず使えそうな情報が全く増えていないというのは」

「触れて。よく観察して。最後には味まで確かめたが……最初の印象、難攻不落以上の情報が欠片も増えていない。単純明快に、堅く、しっかりと積み上げられたこの壁に、それ以外の物など不要、と言わんばかりに。」

「ままならないな。まあ、昔から諜報活動はそんな物だったっけ」

「思わず城壁を撫でる。こつちにはいくらでも、引つかかる感触があるというのに。」

「仕方ねえ……破壊工作でもすっか！（テロリスト思想）とか思っ  
てさつき攻撃してみましたけど全然ビクともしませんでした……（後悔）この壁、凄い装飾されてますけど単純に固いんですね。さすローマ。こんなデコボコなのにな！」

「……というか、なんでこんな引つかかる位模様を彫り込んでいるんだ。無駄なパフォーマンスを掛けているとしか……ん？」

「そこで、ふとその壁を見つめる。模様というには、些かそのデザインは美しいとは言えない。寧ろ、少し不自然さを残すレベルで……そこで、デオンは気づく。」

「模様じゃない。コレ、文字だ。しかも、この文字は」

「で、画面内ではデオン君ちゃんが壁を調べ始めました。確かに言われてみれば文字っぽいものが刻まれてるようにも見えない事も無い（曖昧）ですけど……で、カメラが下（の方の壁）からグイッと来て、壁の文字がくつきりと……おや？」

「間違いない。コレは、術式……魔術の細工だ。もしかして、これが壁全体に……！」

「先ずウチさあ、発見、あんだけど……次回に持ち越してかない？」

「へーきへーき、次回で確実に解き明かすから（大嘘）ご視聴、ありがとうございました。」

## デオンの潜入作戦 その四

皆さんこんにちは、ノンケ（トロイアミサイル）です。標的確認、方位角固定とかマジでミサイルのそれでは？

前回は、デオン君ちゃんの前回は、デオンの潜入作戦パート2前半。連合ローマの異質さを内部から調査し、その後は城壁をじっくりと舐め回す様に調査。結果として、どうやら何かしらの魔術機構が組み込まれている事を知りました。

「——やはり、全ての場所に、しつかりと刻み込まれて……いや刻み込まれているというよりこれは、組み込まれている、と考えた方が良いか。ここまで来ると」

「模様の様に刻み付けられた、術式。魔術に疎いデオンでも分かる程に、分かりやすい物がここまで大量に。城壁の強化の為なのか。それとも……結果として、八つの壁すべてにその文様はしつかりと刻まれていた事は間違いのないようだった。」

「有事の際に起動する仕掛けなのかな」

もし城壁の強化とかいったらもう俺はエルメロイを信じない（半ギレ） 大軍師の素質をフルに生かした城壁とかマジで抜ける気がしない訳なんですけど。そういうのはウルクでやってどうぞ（激怒）

「——そして。気が付いたのは、もう一つ。  
「壁、そして塔にもか」

「魔術的な仕掛けは、何も一種類だけじゃない。壁面の物とは違う……何となく、東洋の物ではないかと思われるような術式が、八つの塔に施されている。」

「おつ、エルメロイじゃん（疑惑） さっき迄は許されたけど東洋系はちよつと許されませんねクオレハ……汝は孔明！ 罪ありき！  
ビツクリするほどの万能肌だからね。許されないのも多少はね？」

「どんな効能なのかは分からないが……しかし、ラッキーな部分もあった」

「そして、発見した三つ目は……この城壁を修復する為の物なのだろうか。魔術の文様の刻まれた、石レンガを発見した事。どうやら、

この城壁自体が複数の術式を刻まれたコレで構成されたもので、そして刻まれた術式は、レンガの中で完結していた。

「個別でも力を発揮できるタイプのものか」

「かつてはフランスの闇を駆け抜けたデオンだ。魔術への造詣も多少はある。使えない、分からない事も多いが……最低限の判断位は出来る。これが完成しているかしていないか、位の事であれば。」

Fate世界だからね、深い所では魔術の一個や百個くらい跳梁跋扈してるでしょう。百個も飛び交ってたらもうオツパゲドン！（最終戦争）

そんな（クツソ汚い）裏を駆け抜けたデオン君ちゃんなら、そういう方面に関する知識は豊富っていう。どこ（細かい設定）触ってんてい！ そう言うの嫌いじゃないし狂いそうな位好きだよ（大胆な告白はプレイヤーの特権）

「だとすれば……これがどんなものか分かれれば……」

「取り合えず、塔の物は完全に詳細不明な以上は、調べられそうな壁の方の術式を調べるのは基本だろう。そう思い、デオンは片手にレンガを携え、城壁を後にした」

「さーて、この石レンガ、調教（調査）のし甲斐があるぜえ？ 従順になるまでやるからな。お前の効能を丸裸にしてや……仕立てあげてやんだよ（ミス） お前を丸裸にしたんだよ！（過去形）」

「——さて、次に調査するべきは……」

「——最も広いエリア、市街。」

「——最も嚴重なエリア、王宮。」

「で、次ですが……当然ながら王宮なんて無視だよ無視！ ハハハ（朗らか） こんな所で無茶するのはエンジヨイ&エキサイティングを逸脱してダイハードなんだよなあ。めっちゃ生き残れそう。でも死にかけそう（小並感）」

「市街にも、何かしらあるかもしれない、か。このレンガを調べられそうなのも見つきたいし。うん。次は市街かな」

「そう言っつて、デオンは周りに広がる、広い都市の街並みを見回す。さっきの哨戒で、ある程度町の構造は把握できた。問題は、その把握

しているエリアの、何処をどういう風に探索するかだが……

◇◇ 人気のない場所を優先的に調べる。

◇◇ 人気のある場所を優先的に調べる。

◇◇ どちらも余さずに満遍なく調べる。

「し知ってるよ(幼児化) こういう時って、下手に丸い選択肢を選ぶと大抵失敗するって事に。ゲームはエンジョイ&エキサイティング。お分かり? (使途並感) 忘れちゃダメだよ?」

「という事で、一番下は論外で。残るは二つですが……個人的にスパイ作戦はスネークしてこそエンジョイ勢だと思うので一番上で。」

「派手に動く必要も無い。静かに行こう」

◇この連合首都にも、人目の付かない場所はある。寧ろ、ああして機械的に動いている人民が多い故か、隙は予想以上に大きい。調べるだけならば決してへまをやらかす事も無いイージーモードだ。

正面ががら空きになってそう(⑨) さて、市街を探索開始しよう。といつてもうろうろと見回ってみるだけなので……

くカ……ツトオ!く

「——さて、色々見回ってみたが発見できたのは……ここくらいか」

◇そこは裏路地、というには些かと広いエリアだった。しかも、壁の近くで、王宮からは割と離れている上に、周りの建物に人気は無い。余りにも出来過ぎていて、ここを隠れ家にするのはリスクが高いにしても……一時の避難場所とするにはうってつけだった。

スツゴイ狙い撃ちにされそう(小並感) というかめっちゃ不穏なポイントとして下手打ったら真つ先にガサ入れ来るでしょコレ。だからデオン君ちゃんも隠れ家としてはちよつとね、的な評価なんですよけれども。

「それにしても、ここまで都合の良い場所が見つかるとは。人民があだだからこそ、ここまでの道のりも普通に見つけられたと考えると……正に、連合ローマ首都ゆえの隙と言った所か。とはいえ……ああなるのも、仕方ない相手ではあるか」

◇そして、デオンがこうして歩きまわって手に入れたのは、ここだけではない……人々の口から洩れる、とある単語。神祖。



「ローマにおける神祖……建国王にして、人の身で神の座に上った男、ロムルス。ローマにおいて召喚されたならば、間違いなく誰もが頭を垂れるであろう人物。連合ローマ、という形式を取ったのも、全ての皇帝を纏めるだけの力を持った男が居たからこそか」

そして隠れ家以外にも、結構いい情報を仕入れた模様。まあ、そりゃあ連合ローマに居れば分かりますよね。この情報はほんへの的にもとても重要な情報なので、必ず持ち帰って貰わないと……そもそもコレが一番大切な情報なまでである。

「——となれば、連合ローマ。その土気が落ちるとは思えないな。文字通り、神が自分の側に付いているんだ」

＜正に熱狂的宗教国家。その熱気は、レコンキスタにも匹敵する……戦争ともなれば主導者の為に命を捧げる事厭わない、狂信者たちの集まり。こういう輩こそが、最も厄介というのを、デオンは良く知っている。

「大義に酔って、最早誰にも止められなくなる大津波……成程、それが連合ローマの形という事か。こうして忍び込まねば分からない部分だ。こうして来てみたのは……大きな収穫になったな」

大義に酔う（迫真） 人間ってすーぐ圧倒的に偉大な物に縋りついて暴走するー。これだから人間って……焼却しなきゃ（獣並感）

「……さて、収穫が多いに越した事もない。ここら辺で……実験してみるのも悪くないか、っと」

＜そして、もう一つ。何かしらの収穫になりそうな物証を調べるチャンスでもある。人気のないこの場所のなら、多少は調べる事も出来るであろう。この……魔術的な措置が施された、石レンガを。

やるのか!? 今ここで! いやここ以外だったらやるタイミング無いやろがい! さあどんな効能をもっているのかこの謎レンガ。

「……どうやって起動すればいいのか」

＜調べる、と言っても、デオンには全くコレの起動方法は分からない。取り敢えず、軽く力でも込めてみようか、とその石レンガを掴んでみると……少し、なにか吸い取られたような感覚があった。

「これは……」

光ってますねえ！ 石レンガ！（倒置法） スツゴイ起動方法がガバガバ過ぎない？ というか魔術師じゃなくても使えるとか、これって、勲章ですよ……

「……起動できたのか。しかし、何か発生させている様な気配も無いし……」

「そう思つて、よく見ようと持ち直そうとしたその時だった。手からレンガが転げ落ちてしまう。地面に落ちたそれを拾おうと視線を向けた……その瞬間。いやな予感がした。落ちたその瞬間に、文字が輝いて見え。咄嗟にデオンはその場から全力で飛びのいたのだ。」

「っああっ！」

—— ツドウオウン！

へっ？

「轟音。爆風。真昼の空に煙が登る。サーヴァントとしての性能をフルで活かして居なければ、間違いなく巻き込まれていた……あの爆発に。そして、同時に理解する……あの壁は、唯の防壁ではないと。アレは、此方を道連れにする為の、兵器でもあるのだと。」

「しよ、衝撃で起爆する……で、壁が全部アレ製……お前城壁リアクティブアーマーかよお!!? ば、馬鹿じゃねえの……!!?」

「と言った所で、今回は……ここまでの様です。画面が暗転してしまいました。果たして敵陣内で爆破工作（意図せず）してしまったデオン君ちゃんは無事に帰れるのか。不安でしかありません……頼むデオン君ちゃん、生きて戻つて。」

## 嘗ての後悔 その一

皆さんこんにちは、ノンケ（渚の第六天魔王）です。我がカルデアの貴重な神性特攻持ちです。普通に殴っても強いですけど。

前回は、何と申しますか……連合ローマの恐ろしさを嫌というほど味わう事態になりました。何だよ全部リアクティブアーマーって……馬鹿じゃねえの……？ しかしデオン君ちゃんしか掴んでいないというこの状況。早くカルデアに伝えて（切実）でもあの後はどうなってしまったのかは今分かりません……

「――さて、カルデアの者達よ。神の島への遠征ご苦労だった。そして、帰ってきて早速こうして集まって貰ったのは……話し合うべき重要な情報についてである」

＼ステンの元から帰還した後、先ずローマの王宮にて開かれたのは作戦会議。当然ながら、議論するのは……敵軍師、諸葛孔明についてである。

因みに今ここに居るのは、精神的疲労でダウンしたメドゥーサさん、その介護として先に戻って貰った香子さん、キャットを除いたメンバー……アレ？ ホモ君がピンなんですけど。マスターとサーヴァントは基本一緒に居るべきとは（困惑）

『敵方のサーヴァント、クレオパトラからの情報、しかも今際の言葉だからねえ』

「流石に嘘、という事も無いと思われませんが……」

「うむ。我々としてもかの軍師が此方に協力してくれる可能性があるからであれば出来るだけやっておきたい。調略等は戦の常であるからな」

という事で早速YOU寝返りしねえか？ という話ですが……まああのロードエルメロイがああな征服王を裏切るとも思えないんですよね。という事で、恐らくは征服王が孔明さんを動かしていけ好かないレフに何かしら仕返してやろうかと企んでいる物かと。

「とはいえ、そう簡単にサーヴァントがマスターを裏切るとも思えません」

「何故だ？ その孔明がサーヴァント、という類のモノだとしても、意思があり、まるで生者のように振舞っているのだぞ？」

『マスターとサーヴァントの間に取り交わされた契約はそれほどまでに強い物なのですよ皇帝陛下……如何にいけ好かない相手でも、おいそれと裏切る事は難しいのです』

〈野良のサーヴァントはその限りでは無いですが、と最後にロマニが締めくくる。何と面倒な、とても言いたげにネロは眉間を何回か揉むと……改めて彼女はカルデアの面々の顔ぶれを見回した。

「となれば、軍師の調略は厳しい、か？」

『いいやあ？ マスターとの契約を裏切れないだけで、消極的に力を貸してもらおうのは出来るかもしれないよん、皇帝陛下？』

「ううむ、成程……」

〈貴方自身、まだまだサーヴァントについては詳しくない部分も多い。とはいえ彼らに自由意志があるのは確かであり、裏切る事は無くとも、マスター以外の人に力を貸したりすることもある。実際、メドウサーに、立香へ力を貸して貰った事もある。

「調略にも色々やり方はあるというものか。であれば、裏切りを前提とするのではなく内応で留める手もある、か」

実は裏切りと内応は厳密には別物って最近知りました（無知） プレイヤーの馬鹿もスキル振って治せばいいんですけど（届かぬ願い）

あ、そういうえばほんへでは、ローマに戻る前に一回レオニダス王との戦いがあった筈なんですけど……ありませんでした……（小声）

無かった!?! この中の中で!?! 多分こつちにレオニダス王が付いた代わりに敵側の出番が無くなったのだと思います。代用としてクソ雑魚な伏兵君達が居ましたが此方のレオニダス王に処理されました。

「——良し、その辺りは接触してから、だな。となればどうやって接触するか、だが」

『此方のサーヴァント、デオンと密かに接触して、孔明に話を通すのが一番かと思われませんが……何分、潜入して情報を探るのを重視している分、通信用の礼装等は全く持たせていませんので、どうやって連絡

をとろうかな、と」

「問題はそこである。迂闊に接触しようすればデオンの事を感じつかれ、彼自身に危険が降りかかりかねないのだ……流石にそれは。」

「ふうむ……難題であることは間違いないですが」

「使い魔とかで良いんじゃないの？ それこそ、ここそこそとやるなら」  
『いいや、相手にスパイの存在を気取らせてしまう要素になり得ちゃうし。今回はデオンの潜入の実力頼りの作戦だ。彼に下手に接触するのは逆に足を引っぱりかねない』

接触せにやあならんというのに、接触すればデオン君ちゃんの足を引つ張るとは。状況が悪すぎる。オオン……（思い悩む投稿者）

「——しからば、ここは私にお任せいただけませんか？」

「レオニダス？」

「会議が行き詰まるか……と、思ってたその時だった。口を開いたのはレオニダス。全員の視線が、彼へと向いた。」

「何か妙案でもあるのか、スパルタの勇者よ」

「いえ、そもそも接触する為の方策を練るのは私の得手ではございませんから、そう言った案はできません……ですが！ 接触しやすい場を整える！ それに関しては、私は一家言以上に有りますが故！」

はっ、成程。場を整えるという一点に置いてレオニダス王は、はえ……（感嘆詞）スツゴイ優秀なんですよね。そりやああの巨大なペルシア軍を凌いだのは、そうできるだけの場を整えたっていうのも大きいですから。」

「ほう……それで、具体的には？」

「二度、連合ローマの城壁。その現状を見ておきたい、と思っております。強化されているのか、それとも敵は未だ何もしていないのか。中からだけではなく、外からもしっかりと観察する、いわば威力偵察！」

「レオニダスはそう言って、一体何処から手に入れたのか、周辺の地図……それも、連合首都の物を取り出した。それをテーブルに広げ、自ら解説をし始めた。」

「この三重の壁に対し、真つ向から大きくぶつかる事は致しません。」

しかし、動作、というか雰囲気は大規模に攻めるように……向こうに、此方を脅威と認識させて出来得る限り反撃をさせるのです！」

「成程、戦っている間に出来る限り相手の情報を得る訳か……」

「そして此方に目が向いている間なら、使い魔の類で接触を図る事も難しくないやもしれません」

スツゴイ理にかなって……もうレオニダス王に全部任せてき、終わりでも良いんじゃない？（錯覚） 落ち着け私、幾らなんでもスパルタに頼り過ぎです。もう少し自力で考えられるようにしましょう（先生評価）

「成程」

「単純ですが、これ以上なき迄に此方に理しかない動きです。必要な一手かと」

「——その言や良し！ 採択させてもらおうレオニダス！ 連合ローマ首都に一当て仕掛ける！ その一手を次なる勝利への布石へとせん為に！」

こういう時ぐだぐだしないのはとてもいいですね。下手に時間かけてもあんまり実況する事も無くなってしまいますし……えっ？

そもそも貴方に実況するだけのボキャブラリがないだけだろうか？

何の事やら……とぼけちゃってえ（侮蔑）

「先行している騎士への接触は、お主らカルデアに一任する」

『宜しいので…』

「うむ。どうせそちらの方がやりやすいであろう。少しでも作戦の成功率を上げる為ならば独断専行の一つや二つ、許しても問題あるまいよ」

くそう言つて笑うネロの瞳が……ふと王宮の天井を向く。しかしその眼はその向こうを見つめている様に、貴方には見えた。其方にはないがあるのか、地図から判断するに……連合首都がある方向ではないだろうか。

「……ネロ陛下？」

「いや、何でもないぞマシユよ。少し、思い出に浸っていただけだ」

オイなに浸ってんだオイ、ゴルア！ オイ！ ネロちゃん俺らも混

せてくれや！（思い出に挟まるガイア）なあ！ 楽しそうだね〜！  
めっちゃ憂鬱そうに見えてたんですけどもそれば……

「——うむ。お主らが上手い事接触できるかは、余の采配次第という事か。これは余の指揮の腕、見せつけるしかあるまい！」

「指揮に関してならば、私も少しはお力になれるかと！」

「炎門の守護者の助力を借りられるならこちらも有り難いが……良いのか？ 其方が手薄になるのでは？」

〈そう言うネロに、立香は不敵な笑みを返す。〉

「確かにレオニダスが抜けるのは辛いけど、それだけで瓦解する程力ルデアは弱くないですよ皇帝陛下」

「レオニダスさんの分まで、先輩は私が守ります！」

「はっ、そもそも守りが必要になる前に焼き尽くせば万事解決よ。それくらい、私に掛ければ造作も無いわ」

カルデア瓦解させたら大したもんですよ（事実） 正直、マシユちゃんも邪ンヌがいるだけでも攻防はしっかり揃ってますし。

それに邪ンヌの言っている事も間違いではないですし、ホモ君なんかガッツリそっちのタイプです。どんな槍とてブスリ♂されてもズンズン突き返すだけの腰使いが有れば防御なんて必要ねえんだよ！

腰使いは関係ないだろ！

「ほう？ 言うではないか。であれば、存分にその力、借りさせてもらうとしよう……準備が整ってから、だがな。それまでは、皆それぞれ英気を養っておくのだぞ」

——と言った所で今回は此処まで。

（ご視聴、ありがとうございました。）

## 嘗ての後悔 その二

皆さんこんにちは。ノンケ(鏡のフアラオ)です。良い子ですよ。その逸話からは考えられない位には。でもそれは裏返しと考えると……

さて、今回はデオン君ちゃんへの接触手段を考えて、ここで出て来たレオニダス王。策士ではないんですけど、指揮官としての才覚は、英雄王とタメ張るくらいスゴイんじゃないですかねレオニダス王。

――次の作戦は決まった。総決戦に至るその前哨戦。ここで勝利する為の全ての布石を敷く為の威力偵察。当然ながらカルデアの全メンバーを投入しての物だ。立て続けの大きな作戦になるが、愚痴は言ってられない……それに対しては。

えー、只今のホモ君ですが、会議室から出て……っスー……えっと、ですね……マイルームがわがんね(ド阿呆) キャットとメドゥーサさん、香子さんも始めっからいないという状態(システムの罠)なので自力で行くしかないという。自分の部屋も分からないの？ そんなんじゃ甘いよ(嘲笑)

自分に対しては言っちゃった。この無能めと。どうして案内を断ってしまったのかと。正直に言う、恰好を付けたかった。ここはあんまり慣れていないけど、でももうちゃんと順応した感を見せたかった。

その結果が……このザマだよ！ 具合悪そうだなあ？ 先生ー？

(煽り) もうちよつと実利を取ってホラホラ……

「……あー……しまった……マッシュにカツコつけようと思ったら……」

そんなあなたの前に……もう一人、自分と似たような間抜けが姿を現したのは、果たして偶然だったのか、それとも。其処に居たのは、さつき涼し気な顔で会議室を出て行った愚か者だった。

「あ……」

「何も……何も言うな相棒」

「俺達は相棒だ。共に帰り着く家を探そうじゃねえか……」



男子高校生の日常かな？（直球） これはあ……グズツ……Fat eであってンドウツハツハツハツハアアアアア！ グズツそ う言うギャグアニメにあらずうう！（武家） もうちよつとオオオオ ウオオオンシリアアアアアアアアアアアッハあアアアアスウウウウウ ウウしてへえええええええええ……！

うるせえ！（至極当然）

「へへっ、何時だって相棒はそうだな……頼りになるぜ。つつく」

＜男子二人きりで、誰にも頼れぬ初めての王宮探検。文字面はワクワクとする部分があるかもしれないが……しかし、その内実が、どれだけ情けない物か。それでも、今は傍らの親友の存在がありがたかった。

因みにどっちもこの状況ではマイナスの存在なので足してもプラスにはならない模様。掛け算にして？ それはお腐れ様が湧くので嫌です……申し訳ないが『なんで？（殺意）』はキャンセルだ（敗北主義を受け入れる戦争屋の屑）

「さて……どうやってどこへ向かうか」

＜さて、無能の頭数が増えた所で結果は見えているものの……貴方は隣に仲間がいる事で妙な自信を付けている。悪い想像はせず、寧ろどんなアイデアでも名案に見えてくる始末だ。

＜＜こういう時道なりで突き進む！ 基本じやねえか！

＜＜考えるな、肝心なのは感じる事だ！

はえー案が糞（ド直球ストレート） なまじ何とかなるんじやないかっていう自信に満ち溢れているような口調なのがムカつきを加速させますねえ！ これは念入りに指導しないと（使命感）

「……成程な！ 感じる！ 気配を！ 思い出すぜ、野山を駆け回っていた頃の俺達を……小柄なツキノワグマに手作りのこん棒一本で立ち向かったあの頃を……！」

君達は未来少年コナンか何か？（困惑）

＜男二人のロクでも無い案で状況が解決する訳も無いのだが……先輩を影日向で支える賢くそして可愛い後輩も、至らぬマスターをその賢明さでカバーする頼りになる文豪もここには居ない……

「っしや！ そうなれば我が道を行こうぜ！ きつとたどり着ける！」

∠土台無理である

クソデカモノローグ君の迫真の主張に草が生い茂ってしまいますわ（悪役） 主人公として恥ずかしくありませんの？（容赦ゼロ）

∠——その後、男二人は全く分からぬ王宮内を彷徨って……全くもって見当違いの方向へズンズンと進み続けていた。しかしながらその足取りに込められているのは、揺るぎない自信と、前に進み続けるという意思。無駄に輝かしい。

「なんだろう、凄い見覚えのある場所に来てる……やったぜ、どうやら野山で培った勘は鈍ってないみたいだな！」

∠残念ながら完全に気のせいである。間違はなく鈍っているし、そもそもそんな勘は存在しなかったのかもしれない。

モノローグ先輩がいつも以上に辛辣う！ まあ二馬鹿が暴走しているからね、自業自得ですね。

∠しかし、悪運か、幸運か、少なくとも運が、今の彼らにはついていた。突き進む先で彼らが視界に捉えたのは……何処かへと向かっていく、皇帝ネロの姿。何処へ向かっているのか、それは今の馬鹿二人には考えられない。

「神の導きだ……っ！」

∠ああ、俺達を導く天子様を遣わしてくれたんだ……

∠はっ、ステンノ様に祈りを捧げないとなア！

その神様に祈りを捧げても大して意味はないどころか、多分暇つぶしのおもちやにされるだけだと思うんですけど、それは大丈夫なんですかね……（困惑） 後、上の選択肢は誤字が余りにも酷い……でも下を選べぬ以上上を行く（威風堂々）

「始皇帝様に感謝だぜ！」

∠謎電波を受信しながらの王宮の廊下を爆走する貴方と立香、ネロの背後をつけ回すその姿は、正にパワーに満ち溢れ過ぎたオーバースペックストーカーそのものである。どこぞの殺人鬼ゲームの殺人鬼側レベルで追跡している。ネロが後ろを振り向いたら悲鳴確定。

血走った眼をした美男子とチンピラが後ろから追いかけてくるんですよ、そりゃあ如何にネロちやまとて『何のローマの一大事か!』と黄金劇場展開不可避。え? 今のネロちやまはサーヴァントじゃない? 今この時ばかりはギャグ時空だから何でもありって事で……

〈視線の先、ネロの姿は角に消えていく。漸く見つけたカントリロードへの道しるべ。逃がしてなるものかとチンパン二人の爆走はさらに勢いを増す。どうして気付かれていないのか不思議なレベルだ。

「相棒、どうする! 逃がしたら俺達は二度と自分の部屋には帰れんぞ……!」

〈〈回り込め立香! 俺が背後から決める!〉

〈〈俺が足を潰す。頭を打て! 一撃で決めるぞ!〉

お前ら獣狩りか何かをする積りなんですかね……つと、そんな哀れな獲物(共を狩る)側のネロちやま、ここで曲がった先の扉をすつと開けて……中に入った! そして加速するホモサル(半分は風評被害)二匹が入っちゃやう入っちゃやう入っちゃやうくあく!

〈バアン、と扉を男たちがこじ開ける。その表情は正に、哀れな小鹿を狩るその瞬間の狂気に満ち溢れていて……しかし、部屋の中を見るなり、その表情はあつという間に抜け落ちてしまう。

「……ん、お主ら。なんだ。余の後をつけて来たのか。皇帝の後ろに張り付いて尾行する等と、場合が場合なら極刑物だぞ?」

〈寂しそうな表情を浮かべていた。そして、その手が撫でるのは……黒い、黒い巨体。その姿に、貴方達は見覚えがある。

〈〈び、美術館のバーサーカー!〉

〈〈なんでこんな所に此奴が……!〉

まあ、美術館で真名は抜けていないので、この辺りで驚くのも仕方ないというか……しかし間近で見るとマジでデカいっすねダレイオス殿。そして目を瞑っているのもめっちゃレア表情。

「まあ……だが、今はそう言う気分でも無い。せめて、静かにしてやってくれ」

〈——そう言えば、この王宮には一人、寝込んでいる英雄が居る、と

は聞いていた。となればこの黒い、美術館で暴威を振るった恐るべきサーヴァントこそが……

「――少し、次の戦いに、その……なんだ、色々感じるモノがあつてな。つい、彼に、ダレイオス殿に、会いに来てしまった。しっかりと、余が、皇帝としての、戦いが出来るように、と」

「長城の決戦以前、連合ローマをただ一人で押し返し続けていた英雄にして大王、ダレイオス三世なのだろう。」

「そうだよ（便乗） まあこの人が静かに眠りについてるっていうのが余りにもレアではあるんですけど……気になるのは、胸に刻まれたデカイ傷から、キラキラと黄金の光が漏れている事でしょうか。」

「――この傷、やはりそう容易くは癒えてくれぬな」

と、そんなちよつと寂しそうな表情を浮かべるネロちやまを背景に今回はここまでとなります。次回は……今回の続きで、ダレイオス殿について、ですかね。結構ネロちやまが征服王を敵として見ている理由とか、割とスルーされがちでは？ と思つて居たので。補足が欲しかった所さんです。

ご視聴、ありがとうございました。

## 嘗ての後悔 その三

皆さんこんにちは、ノンケ（伝説のスーパー女将軍）です。

前回は、無能なサルが二匹王宮を彷徨って居ました。ふ、知能指数たったの五か、雑魚め……もうそれサルすら下回る数値なんだよなあ。ミトコンドリアかな？ で、辿り着いた先で出会ったのは、トトロ……みたいなデカイお方です。

「——ダレイオス殿と出会ったのは……連合ローマに大きな苦戦を強いられていた、時の事だったのだ」

▽王宮の窓枠に腰掛け、ネロは星の海へと視線を向ける。その時は、こんな星空を見られるような空では無かった、と苦笑しながら……その表情は、戻らぬかつてを懐かしむ様なそんな。

「魔術師さんが、最後の切り札として……」

「そうだ。最も信頼のできる宮廷魔術師であった……負け戦を積み重ね、土砂降りの敗走劇。良く最後まで着いてきてくれたと思う。その所為で、あ奴は、連合ローマの凶刃に倒れた訳だが」

ああ悲しまないで（心からのエール） いつも元気なネロちゃまが、あゝあゝあゝもうやだあゝあゝあゝあゝあゝとばかりに落ち込んでおります。どうして……慰めてあげたい（下衆顔） 内容次第によつてはこの発言は処刑不可避ですねぇ……（自害）

「……雷鳴と共に、彼は立ち上がり……余に、コレは刻まれた」  
「それって……!」

▽ネロが二人に見せたのは……間違いなく令呪。自分達の物とは大きくデザインは違うが間違いなく、サーヴァントとマスターの繋がりの証だった。考えてみれば、ダレイオスは魔術師が呼んだサーヴァントである。マスターが居ても不思議ではない。

「余は、彼をこの世に繋ぐための楔だと、宮廷魔術師は言つて、亡くなった……その後はすさまじいものだった。まるで嵐の様に、連合ローマの追っ手を討ち取り、そのまま後方に居た皇帝四人を、纏めて打ち取つたのだ」

アアッ!? さ、サーヴァント四人を相手に（重要）単騎で……?（最

重要) さ、流石征服王とタメを張れる数少ないモンスターサーヴァント、描写すらして貰えないサーヴァント相手じゃ物の数ではない模様。

「すっごい！」

「ふふん、であろう？ かの征服王に、真つ向から立ち向かった伝説だ。如何に蘇った皇帝とはいえ、神君カエサル程のクラスで無ければ物の数ですらないのである！」

「いっそ清々しいほどに自慢気なネロ。さっきの少し寂しそうな表情が一瞬何処かへと吹き飛んで……しかし、直ぐに彼女の表情は曇ってしまう」

「……余の味方だった。余の、英雄だった。雄弁ではなく、咆哮と暴力の化身の様な御仁ではあったが、しかし。誰よりも先陣を切って戦い、余を守ってくれた。ローマの民たちも彼を英雄と、慕っていたよ」  
見て！ ローマがダレイオス殿の手で元気づけられてるよ！ かわいいね！

「——あの時、余がああの長城に挑まねば、もつと、思慮深ければ、な」  
「で、でもその時は勝ちの勢いがあったって」

「それでも……勝っていたからこそ、気を引き締めて挑むべきだったのだ。しかし、あと少しでローマへ降り注いだ厄災を払えると、気が急いてしまった、その足元を掬われて余は……いや、いやいや違う！」  
「ダン、と言葉だけではなく、その無念を行動で表す様にネロは手を叩きつけた。その眼に浮かぶのは……大粒の涙だった。」

「あの時、分かっていたのだ……想定外の防衛施設、此方の不利は……しかし余は、ダレイオス殿が居ればあの程度、と慢心したのだ！ ダレイオス殿に頼れば、と。皇帝にあるまじき……愚行を……その所為で……その、せいで……っ！」

なかないで(胸の痛み) そんなかなしそうになかないで。こつちまでかなしくなってくるから、おねがい。なきやんで(切実) でもダレイオス殿に頼り過ぎたのは大いに反省して(鬼の所業)

しかし、なんとというか、こうしてネロちやまが見舞いに来たのもコレで納得ですねえ！ そりゃあローマにとっての大恩人兼自分の

サーヴァント、そして犠牲者（容赦無し） コレで何もしないというのは流石に無しでしょう、ネロちやまの性格的に。

「……余は、あそこで散った同胞達に報いる為にも、ダレイオス殿に償いをする為にも、彼の復活の時まで、決して諦めず、油断せず、止まらぬと決めていた。それが……三重の長城に今一度挑むと決めただけで……これだ」

＜トラウマを持っているのだろう。自分の失態により、多くの犠牲を生んだ戦場に……また、自分はその時の光景をまた作り出すのではないかと。そんな不安が頭を過って、どうしようもないのかもしれない。

凹み方はその時の失敗の度合いにも寄ると思いますが……ここまですると相当な物だったんでしょね。こうやって表情もつぶさに描写するの好き、でも涙を流させるのはきらい（ハピ厨）

「……済まぬな、弱いところを見せた」

＜弱り切ったその姿。普段の堂々とした振る舞いからは想像もつかない……かける言葉も無い、というのはこういう状態を言うのだろうか——だが、しかし。

「——そうだな。ちよつと弱気過ぎるぜ皇帝陛下。覚悟決まってるんじゃないですかそれは？」

「——！」

＜——そんな優しい気遣いと、この男たちは全くもって無縁である。

男、強さ優しさ！ 尚優しさは欠片も無い模様。それはもう男と呼べるのだろうか非常に疑問詞が付く形になりますが、それはどうなんですかね……もうちよつと優しさを込めてどうぞ。

＜寧ろ、そんなしよぼくれた顔を見たら、もう凄まじい発破をかける行くようなボンバーマンお祭り男達である。容赦など欠片も無い。

「覚悟、だと」

「そうだよ……この人に、ダレイオスさんに報いる為に頑張るんでしよう？ そんな弱々しい覚悟で、明らかに達成できる訳ないでしょうよー！」

＜寧ろ、なにくそって、奮起しないとだめでしょうよ！

「体張ってまで守ってくれたダレイオスさんに、こっちも体張って答えないと！」

二人の関係を詳しく知らない？ 知りませんねえ！ 無責任でも前に進む様に促してこそその主人公ですよ。主人公たちもそうやって突き進んで来たんだからさ（同調圧力） まだ二章ですしそうなる前だと思っただけですけど（名推理）

「……それは」

「ネロの顔が、少し不安げに揺れている。良く事情すら知らない餓鬼二人にここまで言われて尚怒るでもなく、叱られている様な子供の様な顔をしているのは……良く分かっているからだろう。」

「分かっている……分かっている……ダレイオス殿には、多くの無茶を強いた。そんな彼にどうやれば報いる事が出来るかなど……たつた一つしかない事くらい」

凶星を突かれて怒れるのは余裕がある人。本当に余裕がない人つて、色々言われても怒る事すら出来ないそうです。つまり今のネロちやまが見てると……ふふ……下品なんですが……余計に喝、入れたくなつちやつたんですよね……（静かに暮らせない）

「だったら！ 失敗にビビってる場合じゃないでしょう！」

「余は……余は皇帝なのだぞ……迂闊な判断で、あの地獄を、もう一度……」

「次に失敗すること考えて、どうして成功できるんですか！ 俺達を雇い入れるって決めたあの時、そんな事を考えてなかったでしょうよ！ 皇帝として、勝つために！ 決断したんですよね！」

「彼女がどれだけの重圧か、そうやって落ち込んでいるのに、理由とてあるだろう。だがそれでも、そう言うモノをまどろっこしく考えたり、少しずつ解き解したりはしない。そんな事をして、余計な事を言う位なら……彼らは真つすぐ、ストレートに。」

「責任とか、失敗した時の事とか！ 一番テツペン、皇帝のアンタが考えるのは、そう言う事じゃないと俺は思う！ 勝つて！ 皆で笑つて！ その時の景色だけ、先ずは考えないといけないんじゃないですか



！」

そうだよ（一転攻勢）王たる者強欲じゃないといけないうて、王を目指す者に道を示さないといけないって、それ一番良く言われてるから。勝利、勝利、勝利！　って感じで……自分で言ってるんだけど馬鹿っぽい指標だなあ……

「――」

「俺達は、当然勝った時の事以外、考えた事無いですよ」

「そんなん考えられる程、頭良くありませんし。」

「そんな事考えられませんし、馬鹿なんです。」

「どっち選んでも同じイ!？」

「……まあ、もしかしたら皇帝陛下は頭良いから、そう言う事を考えちゃうのかもしれないけど。なにくそって、もう二度とあんな悲劇起こしたくない、って負けん気から、そう思うのかもしれないけど……」

「＜だつたら、それで火を燻らせちゃダメだ、と貴方は続ける。寧ろ、その熱を燃え上がらせないと駄目だとも。」

「俺は……少なくとも、そっちの方が似合ってると思いますよ。だつて、俺が見て来た貴方は、そんな情熱に満ち溢れた、薔薇の皇帝でしたから」

「ジツサイネロちゃまはEXTRAとか不屈の塊みたいな女の子でしたし、素でガッツ三回持ちのサーヴァントとかFGOでもそうは居ないんだよなあ……自信もって。」

「……情熱、薔薇の皇帝、か」

「＜ネロが顔を上げる。少し、瞳は揺れていたが……さっきまでの、不安げな表情は何処かに行っていた。カラ元気か、それともつたない言葉で喝を入れる事が出来たのか。それは分からないが……」

「うむ、お主らの言う通りではある。とはいえ、若干以上にデリカシーに欠けた言い方は直すべきではないかと思うぞ、余は」

「＜少なくとも、自信に満ち溢れた、その笑みを少し、取り戻す事は出来た。」

「やっぱりヘッドが弱気だと舎弟共は付いて行かないからね、ネロ」

ちやまには踏ん張りどころさんですので頑張っ頂かないと。それにしてもローマ軍を愚連隊呼ばわりは……昔の軍隊なんて大抵愚連隊みたいなもんやし（失礼）

「——元氣、ちよつとは出ました？」

「ま、言い方が良くなかったので、ちよつとだがな。とはいえ余の応援、大義であったぞカルデアのマスターよ」

＜＜そいつはありがたいお言葉。

＜＜で、その褒美と言っでは何ですけど……

……あつ（察し）

「うん？　なんだ？」

「……俺達の部屋の場所、教えて貰えませんかね……」

＜折角のちよつと熱い雰囲気、凍り付いた気がした。暫くしてから、押し殺したような誰かの笑い声が、その場に響いた。

えーオチもついた所で、今回はここまで。

ご視聴、ありがとうございました。

## ローマ（特異点）の休日 その一

皆さんこんにちは、ノンケ（ランサー道明寺）です……ええつと皆様、そのですね。きよひー関連のお寺って道明寺で合ってたか分かりません。美味しいお菓子な事は知っています……

前回は、ネロちやまが弱っていた所に、渾身の右ストレート喝を叩き込んでまいった所です。おらっ、ダレイオス殿に胸を張って誇れるような貴方になるんだよ！ 貴方は皇帝になるんだよ！（ウオズ並感）

「……それで、昨日の夜は、ネロ様に喝を入れて、アレだけ遅くなってしまうた、と」

＜当然ながら。夜の間ほとんど皇帝に喝をぶち込んでいたこの間抜け二人が怒られない訳もなく……貴方の隣では、立香がマシユの目の前で正座させられている。所詮はサル二匹が女神が如き後輩と文豪様に勝てる訳も無い。

「皇帝陛下の相談に乗っていたのは別に問題ではないのです。それは。寧ろとてもよい事かと思えますし、私自身そのお話は興味が……こほん」

ん？（雷速） 香子さんさあ、もしかして自分の小説の題材になりそうな感じじゃないかとか、思ってた居ませんか？ ホラ、正直に言っただらんと、取材したいって（下衆顔おじさん） 変態にしか聞こえない発言に思わず吐しゃや物鳥に変貌（オエーツ！）

「と、兎も角！ 部屋に戻ってこなかったと聞いて、皆心配していたんですよ！ マスターはその辺りをちゃんと自覚なさってください！」  
＜ぐうの音も出ない。何時もとは違う形ではあるが、心配をかけた事には変わりはないのだ。寧ろ、これだけで済んでいるのがラツキーでは無いだろうか。もし戦場で無茶をすれば笑顔の圧力で押し潰しに来るのが最近である。

霊圧か何か？（困惑） 美人の笑顔は破壊力満点とはよく言った物ですが、そんな重力染みた破壊力だったっけかなあ……  
「分かりましたか！」

〈〈ちゃんと言葉を報告してから夜出歩きます、すいません。〉〉

〈〈今度からは香子さんを常に一緒に連れて歩きます……〉〉

おつ、大胆な宣言だなあ……とはいえこれで伝家の宝刀単独行動（ボッチ）が封じられるのもちよつと微妙ですね。危険は伴いますけれど、一応メリットの方がデカいと思われれますのでまあ選択肢上で。「はあ……まあ、取り敢えず報告するよう約束を取り付けられたので、一歩前進したと考えるべきなんでしょうか」

〈〈そうそう。ポジティブに考えよう……等と、言えば反省している様子無しと普通に思われそうである。という事で、貴方は無言に徹する事にした。実行できるかは正直分からないのだが。〉〉

『やっぱり発信装置付きの礼装、作る？ 特別製の』

『人権侵害、っていう可能性は投げ捨てて、徹底的にマークする必要があるかもしれないなあ……二人共専用の礼装でも作る？』

いやこんな所で専用礼装のフラグ立てないでください！ あまりにも情けなさ過ぎて泣けてきそうです……

礼装開発はダ・ヴィンチちゃんに頼めばしてくれるんですけど、専用の戦闘礼装の開発ともなるとフラグが要ります。大きな挫折だったり、大抵はドラマチックな展開から出てくるものなんですけど。こんなクソ情けない展開で礼装開発とか、主人公としてちよつと情けなさすぎるんですよ。

〈〈流石にそんなことまでさせてしまうのは笑えない冗談だ……と言いたい所ではあるが、お節介を焼かれても一切文句は言えない程の行いをしてくれているのは、貴方自身自覚している。これは喜劇。〉〉

〈〈……こんなんで恥ずかしいと思つたの初めてだ。〉〉

〈〈すいません、ご厚意に甘えさせてもらいます……〉〉  
で選択肢と。下を選べば開発が確定しそうですね。後は礼装開発用の素材ですが、まあオルレアンでもルーブルでもそれなりに素材は集まっているので、そう時間はかからないと思います。どんな礼装になるか、個人的にはアトラス院が欲しい所なんです。

〈〈……こんなんで恥ずかしいと思つたの初めてだ。〉〉  
〈〈すいません、ご厚意に甘えさせてもらいます……〉〉

『おっけーい。まあ二人が迷子になっても見つけれられるような、素敵なダ・ヴィンチちゃん特製礼装を組み上げようじゃないか』

因みにこのセリフの後『アトラス院製の礼装を発掘したよん。折角だし君達の礼装として流用させてもらおう』とか言い出す事も普通にあります。開発とは(哲学) ありますよね、開発するって言っておいて結果、凶悪な兵器を発掘して来る博士とかバカみたいに居ますし……

『まあ、それは後々にね……さて、その件の皇帝陛下は、明日には戦力の調整が終わるから、それまでは休息しておいてとの事だけど』

〜という事は……ローマを楽しく観光していいのだろうか。立って続けの任務で、割と疲れ切っているのは事実。だからと言って、こんな一大事に遊んでいる暇はあるのかとも考えてしまふ。

〜誰かと都市観光するの悪くないかもしれないなあ……

〜緊張を切らすのは良くない。ここは一人でコツソリ腕を磨いておこう。

ボツチになるか、それとも誰かとデートするかですが。Fateは元々恋愛(エロ)ゲームですからね。そろそろその辺りに倣ってゲームを進めるべきでしょう。当然ながらRPGにも好感度システム、というより絆は実装されていますので。専用礼装手に入れなきゃ……  
『うん。特異点攻略もちゃんと休息を取ってこそだからね。栄光のローマを存分に観光してくるといいよ』

〜我が事ながら観光だけで終わらせる、というのもちよつと呑気過ぎないかとも思わないでも無いがしかし、だからと言って他に何か出来そうなことは今の所無い。まあ、観光という名目でぶらぶらとしていれば何か見つかるかもしれない。当面は観光で良いだろう。

磯野ー！ 観光いこうぜ！ 髪型的にホモ君が磯野役なんですけど、誘うのもホモ君という。役柄が矛盾している……？ 妙だな(至極当然の感想)

『藤丸君もそれで良いのかな？』

「うん。三人と一緒に観光……あー、しようと思ったんだけど……」

〜そつと目を伏せる。流石にこのメンバーを連れて歩くというのは

目立つどころの騒ぎではないのである。観光どころではなくなる気がする。オルタもマシユも目の覚めるような美人で、レオニダスは美術品の様な肉体美を備えたスーパーマン。騒ぎは確定。

すっごい人だかりになりそう（小並感）特にレオニダス王に集りそう。昔のローマは男性の肉体美に相当な価値を見出していましたがね。ヒューツ！ 見ろよ、やつの筋肉を……まるでハガネみてえだ!! こいつは（付加価値が）高いかもしれねえ……!」

『まあ、ええつと。安全の為にサーヴァントが付いていくことは必須にしても、流石に誰か一人だけに絞った方が良いかな』

〜という事で、立香の護衛役には当然の様にマシユが付いた。能力的にも、人柄的にも文句は一切ない人選だった。そして、立香と同じように貴方も外へ出向く以上は誰かを連れて歩く必要がある。

『本造院君は、誰を連れていく?』

◇ だったら香子さんと一緒に行きたい。

◇ だったらメドゥーサさんと一緒に行きたい。

◇ だったらデオンと一緒にいきたい。

◇ 折角だし、キャットの話を知りたい。

デオン君ちゃんの選択肢はグレーになっております。もしデオン君ちゃんと一緒にいたらローマデート出来たのか……哀しいなあ……フランスイケメン騎士のエスコート受けたかったです。お前女の子みてえだな。

さて、誰と行くかですが、実はこれ実質二択なんですよ。今回の目的はカルデアのサーヴァントとの絆上げなんで、デオン君ちゃんが居ない以上、上の二人でQ, E, D. で、その二人で選ぶとなれば……

◇ だったら香子さんと一緒に行きたい。

◇ だったらメドゥーサさんと一緒に行きたい。

◇ だったらデオンと一緒にいきたい。

◇ —— 気になる事もあるし、キャットの話を知りたい。

『そうか。彼女だったら自室で待機してるから会いに行つてくると良い。もう迷子にならないようにナビゲートはしっかりするからさ』

という事で、メドゥーサさんで。デオン君ちゃんは仕方ないとし

て、香子さんとの交流の機会が結構多かったので、ここはバランスを取ってメドゥーサさんとの絆上げに走っておきます（平均厨）

後、個人的にホロウのメドゥーサさんとのスチルイベント凄いい好きだったから、そんな感じのがもう一回見てみたいです（正直） 欲望に弱すぎる。

後、こういう時RTAなら一番下の意味深キヤット一直線なんでしょうけど、そんな時間短縮なんて要らねーんだよ（エンジョイプレイ勢特有の余裕） 折角のサーヴァントとの交流の機会楽しんでいけ  
〜？

という事で、次回はメドゥーサさんとのデート回になります。ステ  
ンノ様との諸々もありましたし、楽しんでもらえる様に選択肢、頑  
張って選んでいきましよう。

ご視聴、ありがとうございました。

## ローマ（特異点）の休日 その二

皆さんこんにちは、ノンケ（魔剣）です。三人いる内の、コロツケそば好きそうな方ですね。最近夢女史の皆さまの栄養源になって居るお方でもあります。

前は、お前っ！ なんでこんな時間まで起きてるんだよバーカ！で、その所為で専用礼装のフラグが立ちました。こんな情けない事あるかよお前……でその後はローマ観光となりました。メドゥーサさんのメンタルケアを追加で行う事になりました。

「——観光、といってもこういう時は何をすればいいのか分からないのですが」

「貴方も別に観光が得意という訳ではない。そもそも観光に得意も不得意も無いと思うがまあ、慣れてるかどうか位の差はあるだろう。因みに木刀を買った事くらいはある。因みに、その木刀は一年以内に使い潰した。」

「一体何をどれだけふんだんに殴ったんですかね……？ 両の手が真っ赤に染まってそうですねクオレハ……完全に危ない奴や。地元で悪鬼と恐れられてそう（小並感）」

「どうでしょうか」

「慣れてないなら、俺がエスコートさせてもらおうかな、なんて。メドゥーサさんがいないからなあ……ここはメドゥーサさんに任せるよ。」

しかし傍から見るとこの、なんとも不似合いなコンビ。強面ヤクザと長身長髪美女の組み合わせってというのは。美女と野獣というにもあまりにもインパクトが強すぎる、大事ではありますけどあり過ぎだとイマイチっすね……（丁度いい塩梅を求めるホモ）」

で、選択肢は……まあ、ここはハゲだけに丸く収める感じで（激ウマギャグ）メドゥーサさんに任せる感じで行きましょうか。ホモ君が先導すると行き先が血なまぐさくなりそうですし（偏見）」

「そう、ですか……」

「メドゥーサが顎に手を当てて考える。流石に無茶振りしてしまっただろうか、自分も相手も出来ない、という事を相手に任せるのはど



うなのか。そう思ってやはり自分が何とかしないといけないか。そう思って貴方が動こうとした……その直後だった。

「……それなら、観光とは少し違いますが、用はありますので」

「——貴方の目を、じつと見つめてから。そう言つて、メドゥーサが歩き出したのは。彼女が向かったのは……ローマ市街ではなく、先程出て来た王宮の方だった。」

「おや？ 市街で無くて王宮へ向かうとな。となると本か何かを探すお積りなんでしょうかメドゥーサさん。この辺にい、(収集が)上手い本屋……ないです、あ、無い……この時代に本が普通に売つてる贅沢な店なんてある訳ないだらういい加減にしろ！」

「ああ、ここにですここ」

「> そう言つてメドゥーサがやつてきたのは、王宮……の近く、兵舎の脇に隣接された厩舎だった。いかにも軍馬です、というようなガタイの良い馬がずらりと並んでいる。その内の一匹に近づくと、近くの世話係に声をかけた。」

「すみません」

「はい。なんすか」

「此方の馬、お借りしても構いませんか？」

「あ、いつすよ。三ホーラで……五万！ うそうそ、タダでヘーキヘーキ、ヘーキだから。うん、ヨロシクウ！」

「すつごい汚い世話係君が居ますね……」

「そうですか。であれば、お借りしていきます……マスター、後ろに< どうやら、メドゥーサは馬に乗りたいたい様だった。そういえば、オルレアンでもペガサスを飛ばしていた時は生き生きとしていたし、そのペガサスを思い切り飛ばしたいと前に言っていた気もする。」

「……まあ、馬や乗り物を運転するのは、嫌いではない、です。寧ろ好きな位で。今は少し、風になりたい気分と申しますか」

「風になりたいね♂……蟹になるよりはよっぽどマシだと思っうんですけど。甲羅マシマシ甲殻類への変態だ(生物的な意味で)」

「> 成程、そう言う事なら是非も無い。貴方はメドゥーサの跨つたその後ろにそつと腰掛けて……ふと、ある事に気が付く。前回、ペガサ

スに跨っていた時は緊急事態故、腰に思いきり抱き着いたのだが……今は、良いのだろうか。

〽️良い訳ないだろう。肩掴んでいよう。

〽️そんなこと言っても安全第一。断ってから腰に抱き着かせてもらおう。

は？　ここで抱き着かないとかお前ホモかよお!?　ホ（んぞういやすと）モなんだよなあ……しかしプレイしてる私はノンケなんですね、ノータイムで下の選択肢、当たり前だよなあ？　まあホモ君は私みたく色気に集中してこの選択肢だった訳ではないのでしょうか、一切そう言う発想がないという訳ではないと思われま（偏見）

「腰に、ですか。構いませんよ。ちよつと速めに駆けるつもりなので、寧ろ振り落とされないようにしつつかり掴まっついて欲しいので……」

結果オーライ！　寧ろこつちが正解だった！　やっぱリスケベがナンバーワン！　スケベは世界共通の究極言語って世界一言われている、ハッキリ分かんだね。いやあ性欲しか勝たんのよなあ！

……つすうううううううううう……大変申し訳ございません。物凄い見苦しい姿をお見せいたしました。謝罪いたします。申し訳ございませんでした。

「……しつかり掴まり、ましたね。では、取り敢えず町の入り口までは、ゆつくりと参りましょう。その後は振り落とされない様に気を付けてください」

ういよいよいよいよいよいよいよいよ！　任せて下さい、全力持つて食らいついて参ります。振り落とされたら速攻にてズタボロになつて死ぬんで（貧弱マスター）藤丸君だったら奇跡的になんか無事だった位で普通に生還しそうですけども、このハゲには主人公補正は無いので。

〽️——暫くして、ローマの都市のその入り口に、メドゥーサと貴方を乗せた馬が悠々と到着した。その先に広がるのは、何処までも走れそうな広い荒野である。これは……そつとメドゥーサの顔を覗き込んでみれば、まあ分かりやすく輝いているのが見える。

「では……マスター、お覚悟をしてください。全力で参りますので。

最近は私、ちよつと色々溜まって居ますので……飛ばしますよ。はい。フルパワーです」

「コレはもう全力だろう。覚悟を決めて、しっかりとしなやかな体に頭を押し付ける。一発で振り落とされたいよう——そう、覚悟を決めた直後に、自分の体に恐ろしい負荷がかかったのが自覚できた。」

あつ、スタートした。はつやーい！ マジで馬のスピードじゃないんですよ、流石騎乗A+の乗馬モンスター、ホモ君すっかりしがみ付いておかないとあつと言う間に振り落とされます。

「——ふつ、良い勢いですね。こうやって全力で走るのは気分が実に良い……風を切って走るこの心地、こうしてライダークラスとして召喚されるされないに関わらず、思い切り味わいたくなります」

「メドウーサは楽しそうだが、貴方には余裕などない。必死に食らいつき、落されない様にするのが精々だ。女性の体に触れて役得、凄いなやかで魅力的な肉体、そんな発想など毛頭なかったが、そんな現実逃避をしていないと精神的に限界を迎えそうだった。」

まさかの男子のラッキースケベ思考を、現実逃避として使うとは。この私の眼を以てしても見抜けなんだ……そのセリフを言った軍師の目は曇り切って居るだろ定期。

「もう少し飛ばしますよ。まだまだ、走りたりませんし……出来るだけ二人きりで話したい事もあるので」

「……そう言われ、振り落とされぬように堪えながらも、メドウーサの顔を覗き見る。走りを楽しんでいるという風には見えない。酷く真剣な顔をしていた。」

「話して？」

「……乗馬が目的じゃなかったの？」

乗馬でカーニバルなファンタズムするのが目的だと思って居ました……（選択肢下） だってだって、メドウーサさんってば本当に乗馬というか、乗り物に乗るの好きですしそりゃあ……ね？

「まあ、それもありますよ。溜まってましたし、色々……けど、それだけなら後で私一人で走りますし、そもそもマスターに観光の行き先だって任せて居ますよ。マスターを態々連れて来たのですから、それ

相応の理由位はあります」

「そう言つて、メドゥーサは、暫く荒野を駆け抜けていった。そして、ローマ首都がもう少して豆粒ほどになる位の距離まで走った頃……漸く馬の速度を緩め、木陰に貴方を降ろした。」

「この辺りなら、大丈夫でしようか」

しかし、メドゥーサさんがホモ君とサシで話ですか……はっ（気が付き） さてはホモ君の血が癖になりましたねメドゥーサさん。オオンつまりホモ君は人間バッテリーだ！ 人間バッテリーは野球で見れば普通の言葉なのでそこは勘違いしちやいけないゾ。つまり人間ビュツフエ？ もう電気と何も関係ないじゃねえかお前ん表現い。

「取り合えず、木陰に腰を下ろす……と、その隣に、メドゥーサもそつと腰を下ろした。貴方の目を、彼女は覗き込んで、一瞬の間の後に口を開いた。」

「——今から話す事は、他言無用にお願いします。上姉さまが、そうするのように私に命じて来たので……単刀直入に聞きますが、マスター。あの角の能力について、どれだけの事を知っていますか？」

——と言つた所で今回はここまでとなります。

ご視聴、ありがとうございました。

## ローマ（特異点）の休日 その三

皆さんこんにちは、ノンケ（鯨の聖女）です。イルカも確かに気になるんですけど、宝具の主力以外にも鯨っていう。バレンタインで大分体張ってましたけど、無理はしないで君、海じゃないと体がもたないのよ……

前はメドゥーサさんを連れてお出かけしようかなー……とか呑気な事言ったら超スピード!? その代わりメドゥーサさんの体に抱き着けて役得……そんな余裕ねえ! でこうしてお出かけした目的が、離れた場所でどうやらお話がしたかった模様で。

「……単刀直入に聞きますが、マスター。あの角の能力について、どれだけの事を知っていますか?」

「——そう、問われ。貴方はそのハゲ頭をそつと掻く。どんな風なのか、どんな風に発動すればいいのか。そんな辺りの、大雑把な事は理解できているが……一応仮説の一つや二つは出てきているものの、確定した詳細の情報は何一つない。」

「そうですか……何も分かっていない、と」

そう言っただけで考え込むメドゥーサさん。うーん、何か知ってそうなのは意味深な発言をしていたキャットの方でしたがまさかのメドゥーサさんの方から問われるとは。

「どうしてそんな事を聞いたのか気になった貴方が尋ねると、メドゥーサは一瞬、そつと目を伏せて……ぽつぽつと話し出した。」

「実は、上姉さまが私を椅子にしていた時に、聞いて来たんです。何故あのマスターは自分の魅了に掛からなかったのか……と。私から見たらかかっているようにしか見えなかったので、気のせいではないかと聞いたのですが」

「貴方は形ある島での思い出を思い返す。確かに魅了に掛かった覚えはなかった。何方かと言えば、物凄い勢いで腹の底から感情が爆発した……怒り、というのが一番近かったように感じる。」

あー怒りの専門家が欲しい所なんです。そうじゃなければキャットトじゃなくてオリジナルの方。こういうのに関してはオリジナルは

結構造詣深そうですし……戦力的にはキャットは物凄く有り難いですが。

「やはりそうなんですか。上姉さま曰く、そんな事が出来るなんて、通常の人間では先ず不可能。神霊か、それに類するものでなくては厳しい、と」

「神霊……その言葉を何回か咀嚼し……思わずえつと言葉を漏らす。」

「その反応をしたかったのは私ですよ。一応上姉さまは神霊の中でも、格は上の方ですからね。下手な神霊相手では姉さま方の魅了は通ります。それがかかるでもなく、跳ね除けるでもなく、それを利用して感情を爆発させるといふのは……」

「いや？ 魅了された男の方が ってなるのは薄い本じゃ基本の展開ですしおすし……メスガキって知ってますかメドウスさん。因みにステンノ様は大抵屈服させる側です。」

「姉さま曰く、余程の神の血筋なのか、それとも……何か、強い感情を振り所とした存在に連なる者が貴方なのか、と。何れにしても碌な存在じゃない、精々気を付ける様に、とも言われまして……そこからずっと、姉さまは不機嫌だったので、それ以上は」

「言い方があんまりではないか……とも思うが、しかし。実際、そういう能力を持つている神様の言う事だ。無視はまあ出来ない。」

碌な存在じゃないとか散々な言われようでダイソウゲン。水タイプに致命的な一発叩きこめそう。というか私自身、そんな魅了特攻の神様の権能を、まるで同人染みた方法で突破する、というのはビビりましたけども。

「出ている仮説ではそう言った神霊に繋がる様な事は一切出て居なかった。流石に神霊という事だろうか、結構重要そうな情報が飛び出て来た。これは後でロマニに報告しないといけないだろう。」

「確か、東洋のデーモンと類似した特徴をもっていた、でしたか。其方は私の専門ではないので、ある程度造詣が深いシキブの発言も無視は出来ませんが……それでも私としても姉さまの言う事です。一応は、お伝えするべきかと思ひまして」

成程。ん？ という事はメドゥーサさんを選んでなかったらこの超重要そうな情報を流して終わりになって居たという可能性が？ ちよ、こう言う所だぞFGORPG。そう言う不意打ちはね、ダメですよ。ホント。

「しかし、デーモンにせよ神霊にせよ、全く由来も得体も知れないようなものを使っていたというのは……些か、不用心が過ぎるのでは？」  
それはそう（同調） 今まで、まあ便利だから使っていましたけど、だからってガンガン使っていい様な力ではないと思われますよね、鬼種の魔つて（今更） 健康を気にするエンジョイプレイなら使うのを自重した方が良いでしょうか……ああん!? 何の問題ですか!? 寧ろDLCのコンテンツをエンジョイする為にも酷使して、どうぞ（非道） でもメドゥーサさんに言われちゃったし、一旦従った方が良いのかも（優柔不断センパイ）

「緊急事態故にというのもあるから致し方ない、というのもあるのでしょう。それでも、マスターのその奇妙な力については、慎重に考えるべきかと……将来が将来の私が言えた義理ではないかもしれないかもしれませんが」

＜そう言うメドゥーサの目は非常に真剣な物だ。

「……無視するもしないも、貴方次第ではありませんけど」

＜心配してくれてありがとう。でも、きっと大丈夫だ、なんとかなる。

＜……危ないのは分かってる、けど俺だけリスクを負わないのは……不公平だからな。

ここは一旦メドゥーサさんの意見に従う……選択肢が存在しない……っ！ 選択させるという意思なし……圧倒的不自由……っ！ だ、どっちにしてもその意見は聞けないなって事じゃないですかヤダー！

ち、チクショウどっちを選べばまだマシだ……？ ちゃんとお礼を言っている上の方が良いのか……

＜心配してくれてありがとう。でも、きっと大丈夫だ、なんとかなる。

「危ないのは分かってる、けど俺だけリスクを負わないのは……不公平だからな。」

「……し、下の方がまだ、まだちゃんとメドゥーサさんを説得しようとする、確固たる意志を感じる気がする＋810点。という事で下あ！」

「不公平、私に血を吸わせた時も、言っていましたね」

「世界を救う、と言う難事の前だ。力を恐れ自分だけ何もしない、というのは圧倒的に不公平で、皆に対して誠意に欠ける。もし自分を破壊に追い込む力だとしても、皆も命を懸けているのだから、リスクは同等——」

「ですが、そうして力を振るっていった先に、暴走……等という事態になれば？」

「——そう思ってた。そう思ってたのだが。」

あれ、可笑しいね。コレって拠点フェイズ的なスチル回だとばかり思ってたんですけど（遅すぎる判断） どうして物凄いシリアスになって居るんですかね……？

「その一言に、思考が止まる。暴走。それに……覚えが無い訳ではない。香子を襲おうとしたあの時。自分は確かに暴走していた。スパルタクスに言われた、凶拳。」

「暴走した力が我々に向かった時、貴方はどうするつもりなのですか。貴方がリスクを負わない事が、皆にとってのメリットにつながると思えば……」

「貴方は、少し考えて……メドゥーサを見た。せつかくここに誰も居ないのだからと口を開く。こんな事を頼むのは心苦しいが……そうしたら、自分を石化させて、粉々に砕いて撒いてくれ、と。」

「はえっ（素）」

「はっ。」

「貴方自身、できるだけこの正体不明の力を律して、向き合っているつもりではある。しかしそれでもどうにもならない時が出てくるかもしれない。だったら、その時はその時で対処するしかないだろう。」



「そ、それは……そうなたら潔く死を選ぶ、と？ やめてください、私にその刃を取れと言うのですか」

「＜＜ 本当に申し訳ないけども……」

「＜＜ 貴方が一番確実に、止めてくれそうだから。」

ケジメ、付けさせてもらいます。メドゥーサの姐さん……だったら他人にやらせないで自分でケジメしろやオオオン!？」

「私だって、人を殺すのが得意、と言う訳ではありません。顔見知りなら、多少は心も痛みます。それでも尚、私に頼むというのであれば……それは貴方の、独りよがりな」

「＜ 頼むしかない、と貴方は言葉を遮って告げる。もし、この力を使わなかったら、カルデアのメンバーにとりかえしのつかない事が起きるかもしれない。そうならない様に自分がリスクを負って戦うのはきつと当然の事だろうと、貴方は思う。」

「＜ 俺の事を考えず、軽く処理してくれればいい。そっちの方が気も楽だろう。」

「＜ 恩知らずのクソガキで、本当にゴメン。路傍の石を蹴つ飛ばす感じで、よろしく。」

偽善者がよお…… (罵倒) 分かる!? テメエで勝手に首括れって言うてんの! ねえ!? 首括れって言うてんだYO! かーっ、ホンマ男ってこれだから嫌いよ! それはエゴだよ!

「……本当に恩知らずのクソガキであれば、気も楽だったんですが。貴方の言葉には理がキチンとあり、他人を思う気持ちもあります」

「＜ 大きなため息を一つ。メドゥーサが吐く。」

「——頼まれる、訳ではありません。出来るだけ、その力は慎重に。基本的に使わない事を前提として動いてください。暴走などされたら、面倒この上ないですから。そう約束してくれるのであれば……一撃で、楽にして差し上げるのも、やぶさかではありません」

メドゥーサさん、こんなホモのエゴに付き合わせて本当にごめんなさい…… 僕を死刑にしてください……

「＜ メドゥーサの瞳が、此方を射抜く。少し、怒っている様にも見える。本当にごめんと最後に一言謝って……その頭に、ゴツンとげんこ

つが落ちた。

「謝る前に、先ず気を付けてください。シキブも無茶をしないようにとアレだけ言付けているのですから。謝るだけならサルでも出来ますよ」

「すいませんそのホモチンパンなんですよ……返事どころか横振りチンパンムーブしか出来ないんです……と、ホモ君が自殺幫助をメドゥーサさんにお願ひした所で、今回はここまでとなります。ご視聴、ありがとうございます。」

？

## 蘇れ嵐 その一

皆さんこんにちは、ノンケ（冬の妖精）です。シトナイちゃん常設にならねえかなあ。ならねえかあ……シトナイちゃんが普通にガチャに追加されてる異聞帯作るかあ。

前は……まあ、そこ迄語る事ありません。女神の忠告を、いや、ちよつと無理つすね、と言って跳ね除けた大馬鹿者が居ました。戦え……戦え……！ KMNライダーGRSだつて体がボロボロになるまで戦つたんだからさ！ 老化かガチ死亡かの差はあるけど。

「……まあ、話が終わったのは良いんですけど、どうしましょうか」  
＜ぶつちやけ、今日一日丸々空いているので、まだまだ時間は全然ある。というか、朝早く出てきてしまつた事が、完全に裏目に出てしまつた形になる。貴方は頭を抱えた。自分の事なら自分でガツガツ決断すればいいが、こういう時は自分にはどうしようもない。

＜……王宮に戻るか。  
＜いや、寧ろ暴走した時のシミュレーションだ！ メドゥーサさんに喧嘩売るぞ！  
うつわ下選びたい……サーヴァントというモノの力を圧倒的に味

わつて沈んで欲しい、欲しくない？ ヤダもう叩かないで……つて言うまで虐待させたい。同人誌で描かれる光景は所詮絵空事だぞつて体に叩き込みたい。でもメドゥーサさんが嫌な気分になると思うのでやりません（マスターの鑑）

「そう、ですね。どうせ何をするにしてもここでは……いつそこら辺を駆け巡りますか？」

＜それでもいい気はしたが……しかし、ふと思ひ出す。さっきの惨状を。一日アレに付き合うのは……恐らく、それこそ能力を発動しないともたないだろう。軽い気持ちでは使わないようにする、と言つた手前、絶対にやらないので大人しくご遠慮するが。

「遠慮しておく？ そうですか。まあ、確かにあまりこの子を酷使するのも、可哀そうですね。大人しく王宮に帰るとしましょうか」  
しょうがないね。あれ？ コレってもしかして振出しに戻つただ

けでは……そこに気が付くとは、やはり天才か。天才じゃなくたって分かるよなあ？ そうだよな？（指差し確認） ハハハハ！

〽——という事で王宮に逆戻り。余りにも早い帰還。

「……それで、結局どうしましょうか。」

〽慣れてないなら、俺がエスコートさせてもらおうかな、なんて。

〽引き続き、メドゥーサさんに任せるよ。

〽……いつそ王宮に引き籠もるまであるか？

また同じような選択肢が出てきたら次は別の選択肢を選ぶ、当たり前……何だこのオツサン!?（選択肢） そんな選択肢あるなら初めから出してくれよなー頼むよー。という事で折角だし俺は新しい選択肢を選ばせ!

「——その発想はありませんでしたね。しかし、良いのですか？ 折角のローマ観光」

〽観光をするのもいいかもしれないが、お家で過ごすのも悪くはない。まあ貴方としては外ではしゃぐ方が好きだが……メドゥーサは基本的に室内の方が好みな気がするので、そこは合わせる積りだ。

「構わない、ですか。でしたら良いのですけど……」

——後日、気になって上の選択肢を選んでみたんですが、ホモ君がローマ観光しつつパルクールやってみました。お前マジで自分の好きな事しかやってないな（辛辣） でも後ろをちよつと呆れながら着いてきてくれるメドゥーサさんは可愛かったです。

それは兎も角、ここに来たらメドゥーサさんが好きな読書タイムでしょうか。後ホモ君INTが足りな過ぎてチンパン一直線なのでこちらで稼ぎたい所です（TRPG脳）

「それで、どうします?」

〽観光は王宮でも出来るってな。

〽他のサーヴァントと合流しに行こうか。

しかしFGORPG、容赦せん！（図書館選択肢無し） お前howじゃあメドゥーサさんの絆稼げないんですけどアレですかね、大人しく拠点で稼げって事ですかね。だが俺はそれに従わない、意地でも好

感度稼いでやるから、覚悟しろ先生ー？

「王宮巡りですか。現代で考えるなら確かにデートコースにも使えそうな道のりだとは思いますが……大丈夫ですか、マスター」

何がとは言わんよな？（ニツコリ掌ドリル） 昨日アレだけ迷ってネロちやまの案内受けてようやく戻って来れたチンパンジーが王宮巡りなんて出来るんですかね……？ もうちよつと身の程を弁えて、どうぞ。その選択肢はお前が選んだらいい加減にしろ！

「……はあ、何時も勢いで発言をしていますが何時かしつぺ返しを喰らいますよ貴方……」

＜仕方ない。目的も何もいらぬ。ただ彷徨うだけでも十分暇つぶしになるだろう。貴方はもう王宮巡りを諦めて、タダの散歩にする事を決めた。別に散歩は嫌いではないし……等と言いつつ。＞

「それは最早徘徊と言うのではないですか？ マスター、如何にサーヴァントとはいえ、介護は些か骨が折れると思うのですが」

扱いが老人で草も生えない。まあ髪生えてないし概念的に老人なのかもしれない。概念老人とは一体……？（自問自答）

＜そこでふと思出す。自分が唯一、王宮で知っている場所はある……しかしそこは観光に向かうようなところではない。と、そこまで思い返し、気が付いた。彼は未だ復活していない。しかし、傍らのメドゥーサを見て、思う。＞

＜サーヴァントというのは、そう簡単に寝たきりになる存在じゃない筈だよな。＞

＜ダレイオスさんは治療を受けている様子だったけど……それでも起きてない。＞

サーヴァントを普通の人間と比べてはいけぬ（戒め） ハガネみたいなボディと迫真空手部がチリに見えるようなパワーと、サラマンダーよりずつとはやい（やめないか！） というチート出力なんですよ。あれ？ じゃあなんで復活してないんですかね……？

「ええ、それはまあ。マスターと言う楔がある限り、そう簡単には倒れず、崩れず、決して倒れない、そんな鉄壁の存在がサーヴァントです。それこそ、ゴキブリよりも生き汚いランサークラスも居ますし」

「凄い実感の籠った言葉が気になったが、とりあえずそこは気にせず……そうなのだ。サーヴァントと言うのは、霊核が致命的に傷ついて居れば即消滅するだろうし、如何に大きな傷を負ったとはいえ、消滅する程のダメージでさえなければ回復するのである。」

某ランサー兄貴かな？

「けど、それがどうかしたのですか？」

「問うメドゥーサに、返すのは、昨日の事。そして、傘下入りを承諾した時に説明されていた、ダレイオス三世の事。それを聞いて、メドゥーサが納得したようにその首を振る。」

「成程。霊核を傷つけられて尚消滅せず、かと言って目覚める事も無い。言われてみれば奇妙ですね……」

目覚めたり目覚めなかつたりするのはソツチの趣味だけで十分なのよ。

まあそれは兎も角として、大ダメージを負っても回復出来るのがサーヴァントとしての強み。なのにそれが殺されているというのは確かに理由があるんでしょうが……もしやデイルムツドさんとか、向こうにいらつしやるんですかね……アレかな？ セプテムでZEROCコラボ回収するつもりなのかRPG……

「一度気になってしまうと、どうにも忘れる事は出来ない。それに昨晩あんな風なネロを見て、発破をかけた身としては、何かしてやりたいと思うのが人情である。幸いカルデアはサーヴァントには詳しいのだから、何かしら解決策も出るかもしれない。」

「という事は、その彼に会いに行く、という事で宜しいでしょうか」  
「正直観光でもなんでも無いが、折角の自由な時間なのだ。慣れぬ観光で無為に時間を潰すよりは、圧倒的にマシというモノだろう。」

「結局休んではいませんけど」

休みなんて必要ねーんだよ！ ホモ君（プレイヤーのおもちや）の基本は月月火水木金金で良いんだよ上等だろ。労基に怒られちゃう……労基もろとも燃え尽きてるから問題ありません。安心して過剰労働しましょう。

「——そんなやり取りを挟みながら、その部屋の前に辿り着く。扉

を開けばその奥に、黒い巨体。見覚えのある姿に、メドウーサが目を見開くのを尻目に、貴方はとある人物に連絡を取る。今日は、折角の休日なのだから趣味の時間に走るのだと告げていた……

『ふっふーん、えーつと、次の更新、次の更新はつと……んっ!? アレツ!? 通信用の礼装が起動してる……本造院君!? えっ、何!? 休養中に急用!?!』

〈我が家の、頼れるか頼れないか、微妙に分かりにくい医療班のトップにして、現カルデアのトップでもある、この男。ロマニ・アーキマシと。〉

——と言った所で、今回は此処まで。次回はロマニ活躍回となるのでしょうか。それとも何時もの通りマシユちゃんに「ドクター……」と言われて終わってしまうのか、次回のドクターの御活躍にご期待ください。

ご視聴、ありがとうございました。

## 蘇れ嵐 その二

皆さんこんにちは、ノンケ（アメリカの神様）です。最近コツソリ宝具時間が短縮された模様です。運営がバニヤンにかける熱意の方向性よ……

前回は、俺だって王宮巡りの一つや二つくらいできらあつ！（大嘘）まあ当然ながら一発でバレて、結局は、まあ、アドリブだらけの放浪散歩となりました。で、その最初の目的地はダレイオス殿の所になります。

〽それで、医療班、及び魔術師としての見解は？

〽〽どうして彼は全く目覚めないのか、分かるかな？

さて、早速の選択肢ですが、まあここは落ち着いて上を選択します。『……原因は二つ考えられるね。一つ、霊核へのダメージが大きすぎて、消滅していかないだけという可能性。しかしそうなった時期を考えると、此方の線は薄いと思う。幾らなんでも長持ちしすぎな気がする』

〽そして、もう一つは……

『霊核へのダメージはあるが消滅する程ではない……しかし、その霊核の傷を修復する為の魔力が足りないんじゃないか、と思うんだ。かのダレイオス三世ともなれば普通のサーヴァントとしての格が違う。修復にも多大な出力が必要なんじゃないかと』

はえ、なるほどですね。ダレイオス殿はトップサーヴァントだからね、そりゃあ当然ながら特別扱いされてもしかたありませんね。

『……となると、ここではダメだど？』

『場所が悪いというのは否めない気がする。ここはローマの首都として優秀な立地ではあるけれども、霊脈の通りは、正直微妙だからね』  
〽となれば、ダレイオスを治療するにはここではなく、もつと良質な霊脈のある場所に連れていく必要があるのだという。そうになると、貴方に思い浮かぶのは火山にあるという霊脈だが……

『……療養に向いている場所ではありませんね』

『火山の近くだからね……方が一、治療中に活動しようものなら大



打撃どころの話じゃないと思うよ。多分』

ダレイオスさんの蒸し焼きが出来上がっちゃう……！ やめて！

ここを耐え凌げば連合ローマに反撃の一手が放てるんだから！

次回、ダレイオス三世死す！ 次回も何もそんな選択肢は始めからないんだよなあ……

『となると他の、落ち着いて治療に専念出来るような、リゾートっぽい島、その辺りで霊脈があれば完璧なんだけれども……』

＜そんな都合の良い場所がある訳ないだろう……と貴方はロマニに言った。のだが、メドゥーサはその言葉に凄まじい反応を見せていた。顔面が真っ青に染まっている。というか、この顔色の悪さは、貴方にも覚えがあった。

＜……えっと、お姉さんの事思い出したの？

＜＜確かにあの島はリゾートっぽい感じではあったけど……

えっ？ ステンノ様？ 治療とは全然関係ないサーヴァントだと思っただけですけど、ステンノ様の魅力でダレイオス三世を死の淵から呼び覚ますとか？ いやそんな王子様のキスで目覚めるお姫様じゃあるまいし……

「……いい、いえ。そのですね」

『えっと、その、どうしたのかな』

「あの、その条件に綺麗に当て嵌まるのって、姉さまの居た、あの島じゃないかなと」

＜思わずロマニと一緒にメドゥーサに視線を集中させる。どういう事かと。ロマニに視線を向け直すと、呆然、と言った様子で口を開いた。

『そ、そうなのかい？』

「ええ。皆は上姉さまに目を向けて居ましたけど……神霊が顕現して、住まいとして選ぶ島ですので、それなりですよ」

『——そりゃあそうだ！ もし、万が一、神霊を顕現させるならそれなりの霊地を選ぶのは魔術師としては当然！ 逆もまた然り、という事か！ 盲点だった！』

神様を呼ぶには霊脈全ての力を使つて漸く、なんてありがたい展開

ですよね。確かにそう考えると、あの形ある島、と言うのが霊脈の地というのとは……あれっ？　もしかして俺またなんか（失敗）しちゃいましたか？

『……し、失敗はコレから取り返すとして』

＜ロマニの声が震えている。魔術師的に余程の大ダメージだったのだろう。つらさは全くと言って良いほど分からないのだが、それでも必死に立て直しているその姿は何時もより大分カッコ良かった……気がする。

『兎も角、療養するならその島に向かうべきだろうとは思うけど……問題はネロ皇帝がそれに許可を下ろすかだよ』

大分ダレイオスさんに信頼置いてますからね、ネロちゃま。「何処の馬の骨とも知れぬ女の元になど送れるか！」とか……いや療養に行くだけでそんな事になったらもうヤンデレとかいう領域を過ぎてませんか？

「流石に、拒否するという事も無いと思いますが……治療する可能性があるのだったら」

『いや、ネロ陛下にとつては、ダレイオスは精神的支柱な気がするからね。話を聞く限り……如何に治療するにしても、そう容易く快く送り出すか、と言うと』

「医者としての意見ですか？」

『そう言う事になるかな。精神的な支えって言うのは、扱いを間違えると本当に悲惨な事になり得る。だから迂闊な事は出来ないんだよね』

＜普段の頼りない姿と違い、自分の専門分野となれば冷静に、かつ堂々と。実に頼りがいがある。

『だから話を通すにしても、下手なやり方はマズい気がするんだよね。カルデアの総意くらいの勢いが良いんじゃないかなあ……多分だけど』

成程、つまりカルデアの総意にならないといけないと……じゃあ、分かるよね？（下卑たオヤジの笑み）皆のロマニにそんな視線を向けてはいけない（無言の腹パン）

「となると、その判断をするのは貴方になります。ロマニ」  
『えっ？……あつ』

＜しかしそのカッコいいロマニは、この一瞬で完全に瓦解してしま  
う。そうなのである。カルデアの総意と言うのであれば、その判断を  
するのは間違いなくロマニなのだ。そうローマ皇帝に、傘下の者が口  
を開くのだ。』

『そ、それは……えっと、そのですね……あの』

おいクツソ情けないロマニが戻って来てますねえ……どうして権  
力者にそんなに弱いんですか（電話猫） 貴方もカルデア所長なんだ  
から正面から堂々と舌戦して、どうぞ（指導者の嗜み）

『……言わないと駄目かなあ、やっぱり』

＜＜ローマの主力だつて言つてたし……ネロ陛下も復帰を望んでた  
し。』

＜＜やれることをやりましょう、ロマニ所長代理。』

ロマニ様逃げてはダメですよ（逃走経路封鎖） 戦わなきゃ、現実と  
……！（闘争回路隆起） というか、相手にイスカンドル王が居る以上  
はこつちもダレイオスさんを出す位じゃないと対抗できないんで  
……

『そつかあ……そうだよねえ、今は僅かな戦力だつて欲してるし……  
かのダレイオス三世が戦力として動いてくれるなら本当に百人力ど  
ころの騒ぎじゃないし……』

＜＜ロマニは顔を伏せ……そこから結構な回数うんうんと唸った。そ  
して、最後に一つ大きく深呼吸をすると、顔を一度はたいて此方と  
しっかりと目を合わせた。まだ若干目が泳いでいる気がするが、覚悟  
は決まった様だ。』

『いよし！ 任せたまえ！ ボクがやる時はやる男だつて事を、この  
機会に見せてやろうじゃないか！』

よう言うた。それでこそ漢や。大丈夫だつて（骨は拾ってやるか  
ら）安心しろよー。ヘーキヘーキ、ヘーキだからさ。怒られる事前  
提つて言うのは可笑しいだろお前よお!? まあ怒られないと思うけ  
ど方が一つて事もあるし……

「そこまで気負う様な事でしようか」

『……一応、相手はネロ帝だからね。今は聡明で、圧倒的な連合ローマも相手取れるような凄い人だけど、晩年が晩年だから』

「確か、晩年は狂乱の内に没したのだったか。そんな人物の結構デリケートな部分に触れるのだ。今までとは訳が違う、という事だろうか。」

『大丈夫だ！今のネロ陛下はそんな晩年みたいな凶行はしない……  
答！』

さて、後はロマニと共にネロちやまを説得できるか、ですね。いやあ観光をする回だったと思っただんですけど、どうしてネロちやまのデリケートゾーンにカチコミかける回になってるんですかねえ……前回のネロちやまへの喝はコレへのフラグだった……？

と言った所で今回は此処までとなります。

次回は恐らくネロちやまとの顔合わせとなります。無事説得するか、ロマニの首が『ラウス・セント・クラウディウス童女謳う華の帝政』されてしまうのか……ご期待ください。ご視聴、ありがとうございます。

## 蘇れ嵐 その三

皆さんこんにちは、ノンケ（宇宙の女神）です。設定的にも実際の性能もチートサーヴァントの一角。可愛さもぶつちぎりで草も生えない。三種盛りとはこういう事を言うのでしょうか。

前は、ダレイオス様のお怪我を治そう！ という事でロマニに相談だ。リゾートみたいな島に行つて療養するべきぢやうかな!? えつ、それ姉さまのシマですけど……どうやって連れてく？ ロマニが相談するんですよ。

「……ふむ、それで余に相談しに来た訳か」

『はい……あの、あくまで、あの、カルデアの、医療班としての、判断な訳、なんですよけれども……えつと……』

くつつつ情けない医療班のトップが其処に居た。マジで滝の様な汗を流し、そしてその全てが脂汗である。正直、もう限界を軽く迎えている人間の姿にしか見えない。実際失神しそうではある。

顔が、某ホルホル君のリベンジマッチ時の柱の男そっくりなんですよね。多分変顔のライン越えてると思うんですけど（指摘）

「案外冷静ですね皇帝陛下。もつと食らいつく物かと」

「うむ。どこぞの美男子と禿げ頭に皇帝らしくあれと、言われたからでは無いが……断じてそんなことは無いが、まあ余は皇帝故な。余り取り乱すのも、良くは無いなと思つた訳だ。とはいえ、気にならないと言えばウソになる」

く怒っている様子にも見えないのだが、それでもロマニの表情は余りにも優れない。冷静に話を聞いてくれているのだから問題は無いと思うのだが……

『え、ええと、それで……如何でしょうか』

「うむ。お主らはこれまでずっと余とローマの為に戦つてくれた戦友故な。その言葉を聞いてやりたいというのはある、あるがしかしそう容易く承知してやるわけにもいかん理由があつてな」

あつ、ロマニの顔が死んだ！ 表情が全て抜けたっ！

「やはり、一番安全な場所で静養させたいですか」

「個人的にそう思うのもある。しかしそれ以上に、迂闊な一手を打つ訳には行かぬ、と言う皇帝としての判断もある」

「というと？」

「ネロは額を抑えながら、一つ溜息を吐いた。

「ダレイオス殿は既に国の英雄なのだ。万が一にも失う、という事があれば国全体の士気の暴落は避けられん……」

「——成程、万が一、首都を出た所で討ち取られでもすれば」

「その恐れはどうにも、な。余としても別の場所での治療を考えなかつた訳ではない」

しかしやらない、やらない、やらない！　だが、それが良い！（国の維持）　リスクとメリットを考えて現状維持を選ぶ事が出来る上役の鑑。やっぱりネロ帝がNO. 1！　ネロ帝しか勝たんのよなあ……

「——しかし、それを踏まえて尚、お主達の働きを考えると任せたい気持ちがあるのも事実ではある。此方の最大の主力たるダレイオス殿が復帰してきてくれれば、いよいよこちらも全力を取り戻す事も出来る」

ネロちやまどつちか選んで（半ギレ）　皇帝としてどつちつかずは一番ダメダメのダメなんですよ。国の英雄の扱いを決めるのは皇帝としての義務なんだよなあ（ガンギレ）　生かすも殺すも貴方次第だけど活かさず殺さずは一番英雄を殺すってそれ一番言われてるから（紳士）

「欲しいのは……確実にダレイオス殿を守り抜けるという確証なのだ」

『では、我々カルデアのサーヴァントが三騎向かうだけでは足りない、という事なのでしょうか、皇帝陛下……』

「いや、お主達の戦力は信じてはいるが、問題は運送手段。道中で見つかつて襲撃されるのが一番恐ろしい」

「——要するに、バレないように運ぶ手段か、順路があれば、と言つた所か。」

『隠ぺいの魔術を使って……その上で、相手に見つからないような順

路さえあれば』

「順路……」

さては偵察パートかな？ まあ良いんじゃないですかね。探索序に私もレベル上げしたいですし……よし、ここはホモ君も張り切つて出かけましょう。そこらの雑兵なら鬼種の魔を発動せんでも戦えるレベルだと思うので、経験値稼ぎ時ですねえ！

「それでしたら、心当たりがありません」

えっ、何それは……（想定外）

『本当かい!?!』

「デオンを送った時に、暇だったので空からある程度景色を見ていたですよ。その中で確か……」

＜そう言つてメドウーサが指示したルートは、確かにローマからかの島へ行くのであれば理想的なルートと言えた。これなら誰にもバレず、運搬する事は難しくないだろう。その言葉にネロの表情が色めき立つ。

「となれば！ もう後はお主達に任せて問題は無いな。直ぐにでも支度をし、形ある島へと進路を取れ！」

『あ、えっと……は、はいっ!』

「その間に藤丸達と共に偵察を済ませ、決戦の準備を整えよう！」

あのー、すいません木下なんですけど、（経験値獲得のチャンス）まだ時間かかりそうですかね……（無いです）もう仕方ないね。経験値稼ぎは別の機会にてという事で今回は諦めましょう。

『いやあー、なんか上手く行って良かった！ 無礼打ちとかも覚悟してたから！ 怖かったー！ 良し良し、ボクもやればできるじゃないか!』

「……まあ、私の情報ありきではありませんけど」

『あ、すいません自分だけが、その、手柄を、独り占めしたみたいな』  
「いや別にそれに関して文句を言いたいわけではないんですけど」

天然かな？（困惑） ロマニもメドウーサさんも天然な部分があるので自然とコントな感じになってしまうというか。楽しそう……混ざりたい（が、ガイアツツツ！）ぶっちゃけ聞くだけでも楽しい楽し

いと思いますけど。

『……と、兎も角。せつかくの休日を有意義に使えたし、良かった良かった』

「……というか、よく考えてみれば私あの島に……うう」

〈休日の元の目的からは外れてはいるが、とは思ったが、こうなったのは自分が原因なので完全に自業自得だな、と少し笑ってしまいうになつて……しかし、隣でこの世の全てに絶望して居そうな自分のサーヴァントを見て、流石に自重した。

普段がクール美人なだけにこういう感情の乱高下した時は結構力ワイイ感じになるんですけども、流石にこんな『もう世界とか、終わればいいのに』とか言つてそんな極まつてる表情してるのはやはりヤバイ（情緒） 美味しい物食べてねんねして……（届けこの切なる思い）

「……いや、藤丸のチームが向かうのであればまだ」

『で、サーヴァントを治療するなら当然サーヴァントクラスの力を運用するべきだとは思うからね、当然その治療に向かうなら本造院君とそのサーヴァントの式部さん、で護衛はまあ当然』

「知ってました！」

非常に申し訳ないが草オブ草なんだ。掌ドリルしてるけど仕方ないんや……メドゥーサさんの迫真の叫び声があまりにも物悲しいし血反吐吐いてるしピッタリ過ぎてもう限界なんだ……

「……私、今日はもう部屋に帰ります……マスターももう観光はしないでしょうし」

〈まるで鉄人レース完走直後の選手の如く、燃え尽きた様子でメドゥーサが去っていく。流石に引き留める事も出来ず、無言でその背中に手を振る事しか出来なかった。折角持ち直したというのに、とロマニが物悲しそうに続けた。

もう一回ステンノ様に遭遇しないと良いですね本当に、としか言いようがないと言いますか。メドゥーサさん特攻を持つステンノ様。狭い特攻対象だなア……倍率はその分馬鹿みたいに高そう（コナミ）  
〈取り合えず、メドゥーサに同情するのもそこそこに……貴方はマ



スターとしての思考に頭を切り替えて画面のロマニに向き直った。此方は、事前に無かった予定に急遽繰り出す事になったのだ。どんな馬鹿でも打合せしておきたいと思うのは当然だろう。

『——良し、今回は僕が本造院君チームのサポートをしようか』  
〜と言うより、あの表情で帰っていったお嬢さんの事を思うと余りにも悲しかったので話す雰囲気にならなくなってしまおう、と言うべきか。若干現実逃避も込めて貴方達はその口を開いた——

闘争の雰囲気ではないな……別働隊ラスボス系主人公はお帰り下さい。そして主人公系子安じゃないアンデルセンラスボスもお帰り下さい。お互い仲良く喧嘩しつつ英面しててください。心臓に釘立てて『やめろアンデルセン!』とか言ってもろて。

と言った所で、今回は此処までとなります。ご視聴、ありがとうございました。次回はダレイオス殿無事復活となるでしょうか。

## 蘇れ嵐 その四

皆さんこんにちは、ノンケ（カジノ槍王）です。個人的には彼女には主導権を握って貰いたいパターンです。兎は万年発情期とかいう同人用語よ。

前回は、ダレイオス殿を運ぶ許可を頂きにまいりました。で、経験値チャンスと意気込んだところ、強制メドゥーサさんの情報で速攻実行可能になりました。うーんあんまりスムーズに進むのも経験値稼ぎが出来なくてアレですねぇ……

「到着しました！」

「早急に降ろせ！ かつ丁重にだ！ 下手に揺らした奴は体罰などでは済まんぞ！ 魔術師殿、何処に運び込めば宜しいでしょうか！」

『ええつと……島の南の方へ！ 其処で行うのが一番宜しいかと思われませう！』

〈治療班、なのではあるがその動きはまるで軍隊の様に統率が取れて、しかも士気の高さが凄まじい。国の英雄を復活させるという大事からだろうか。〉

「急げ急げ！ カルデアの皆様には託すまでは我々の仕事だ！」

「おい貴様あ！ ダレイオス様をそんなきつく縛り付けるとは不敬な！」

お前ら全員まとめてダレイオス殿のファンクラブかよお!? 熱量と盛り上がりが最早フェスと同等レベルです。尚熱意を燃やす相手は寝ている模様。特殊なフェスだなあ……（小並感）

「キャット様、くれぐれもよろしくお願いいたします……！」

「うむ、任せられよ。黒猫キャットの宅急便は安心安全ド級突撃一切合切大喝采なのだな」

〈ダレイオスを運ぶのはキャット。先導をメドゥーサ。回復役の香子は貴方が護衛し最短ルートで目指す。ローマ兵達は、万が一ステーションに遭遇したりしたら事なので船でお留守番である。〉

「では行きますよ。姉さまの位置は……大丈夫です、此方と遭遇する可能性は低い位置ではないか、と」



『えーつと、もうちよつと先で右かな……最短を行くとなると。そのルートは?』

「見せて頂けませんか? ……微妙ですね。今進んでいる所から全く感じないとなると恐らく姉さまは此方に居ると思うので……姉さまの方に近づいてしまう、気がします」

〈何という的確な指摘か。しかしそれが逆に哀愁を誘う迄あってしまう。それが、メドゥーサのちよつと悲しい人生を表している様で。一体どれだけ姉二人と仲が良いのか、そしてどれだけ姉二人に苦勞させられて来たのかと言う話である。』

『うん。あの、えつと、その、本当にお疲れ様です……その情報確実に生かさせて頂きます。頑張ります……』

メドゥーサさん、貴方の苦勞を必ずや生かすのでお待ちください!  
明日迄、明日迄お待ちください! そんな待つて暇ないと思うんですけど (正論)

『——藤丸君の方は……今の所はのんびりと戦えている、みたいだね。消極的な戦い方が上手い事嵌っている形だ』

〈同時に、立香の様子の実況もロマニがやっている。メドゥーサの心に僅かなりとも清涼剤になれば、という思惑からだったが……それが上手く行っているかは、正直微妙と言わざるを得なかった。』

〈〈実際、壁とぶつかってみた感想とか聞ける?〉

〈〈敵将は誰が出て来る?〉

と、ここで選択肢が来ましたか……個人的に気になるのは三重長城の様子ですね。実際の戦場に居る藤丸君達の実況解説が聞きたいです。ネロちやまの言葉から「ハア……(クソデカ溜息)」となるような悲惨な状態だというのは分かっていますけど。

『……僕もモニターしてるけど、正直ローマの建築技術を侮っていた、としか言えないかな僕としては。ちよつとしたビル位の高さは間違はなくあるし、端は……本当に見えないよ。コレを相手に真正面からは確かに、厳しいとかいう話じゃないな』

〈すると、二十、下手をすると三十メートル近くの高さだろうか。中国の長城と比べても破格と言うしかない規模。』

『しかし、それを作るのは容易ではなかったみたいだね』

それはなんだろう？ 証拠物件として聴衆する（動詞）からなあ？  
『藤丸君からの報告なんだけど……城壁の近くに、死体が転がっていらしいんだ。けどそれは兵士じゃない……一般市民の物だった、と言う話だ。それも大分経過して居るものが結構な数』

〽——どういう事だ、と思わず返す。戦場に出ている兵士なら分かる。だが、何故一般人の死体が、自分達から見える範囲に転がっているのか。

『……恐らくだけど、そうなるまで酷使したんだと思う。巨大な壁を創り上げる為に多くの人員を割いて、そして犠牲にもした。その死体は、時間経過から推測するに壁が完成した直後に亡くなった方々の物と思われるから』

フアツ!? 人間の屑がこの野郎……使い潰すなんて、生きて居りやあ使い道だっっていっぱいあっただろうによお！ お前コロンブスみてえな発想してんな。どっちもクズじゃないか（憤怒）

〽——恐らく、相棒も同じことを考えているだろう。そう確信し、貴方は気を引き締め直した。必ずや、連合ローマの喉首を搔つ切る。正義とかそういう事ではなく、単純な話やり口が気に入らない。

〽オーライ、カチンとスイッチが入ったよロマニ。

〽この任務、絶対成功させないといかん。

ホモ君のハゲ頭がピカリと光る！ これは気合入りなおしましたね。なおその気合入った表情がいよいよチンピラ通り越してヤクザにしか見えない件について……香子さんも怯えてるんだよお前の所為でよお!?

『藤丸君とそっくりな反応を見ると、君達の仲が本当に良いんだって事を再確認できるよ……』と、言ってる間にも到着した、かな。ここら辺が一番霊脈の恩恵を受けられると思う。指示に従って準備を始めてくれ』

「といつても、メドゥーサ様以外は見覚えのある場所なんですけれども……」

『まあ、うん。そうなんだけど。ホント、島に辿り着いてからサーチし

たらドンピシャでね。ビックリ仰天』

〈辿り着いたのは……なんとあのクレオパトラとの死闘を繰り広げた、あの洞窟だった。ここにクレオパトラがいたのも、そういう理由があったからなのかもしれない……等と思いつつ、洞窟の開けた空間、その中心にダレイオスを配置する。

「では、陣の設置を始めます……マスター、申し訳ありませんが、手を貸していただけませんか？」

〈よっしや任せろーバリバリー

〈知らぬとは思うが、これでも俺は空き地への落書きのクオリティで知られた男！

それを他人ただのクソガキと言う……と言うか陣は落書きではない（無言腹パン失敗兄貴）

「デオンとの接触は？」

『まだ藤丸君達が出発してないからなんとも。とはいえ引き付けは上手く行ってるから接触は何とかなるんじゃないかって言ってる。多分』

〈デオンが仕入れて来た情報と、ダレイオスの復帰、その二つが揃えば反抗作戦の準備は整う……予定だ。問題はデオンが仕入れて来た情報次第である。如何に歴戦のデオンとはいえ問題が存在しなければ食らいつきようも無い。

「弱点がある事を祈るしか出来ませんね……」

『——完璧なものはこの世に存在しない……と思うから大丈夫だと思うよ。うん』

〈洞窟の中心のダレイオス。それを眺めながら、メドゥーサとロマンは呟いた。

そうならどうする？ 笑ってすませるさあ！（済まない）

つと、そしてここで画面が暗転しました。となると次回はデオン君ちゃんサイドでしょうか。前回の大爆発から無事に逃げ切れたのか、それともウース異本案件になったのか。気になる所ですね。

ご視聴、ありがとうございました。

## デオンの潜入作戦 その五

皆さんこんにちは、ノンケ(両儀)です。カルデアの中でも多分ぶつちぎりで恐ろしいアサシンの一人だと思います。やべーアシンだともっと候補増えちゃうから……

前回は、ダレイオス殿復活の儀に向かいました。何事も無ければダレイオス殿は復活すると思われます。で、藤丸君の様子を聞いていたんですが……三重長城つて、予想以上に闇を孕んだ建築物だったみたいですね。

▽——問題は、見つかる事ではない。捕まって此方の情報が引き出される事だ。故にこの失敗で焦る事は、デオンはしない。寧ろ失敗をしてしまった時こそ冷静にである。素早くその場から離れている。最短距離で、見つからない様に逃げ去っていた。

「——一時は凌げるか、けど……その後だな。捕まる位なら、逃げ出してしまった方が良いかもしれない、か。一応あの起爆レンガが、突破口に……なるか、どうか」

▽いや、とデオンは頭を振った。恐らく、レンガが爆発するように術式を施されてる以上は、任意のタイミングで起爆させる位は出来るようにしているだろう。

まあ敵の攻撃でボンガボンガ起爆してたらもう壁として使い道が無いっていう。そうなった方が嬉しいダルルオオ!? でもそうはならないんやな。悲劇なんやな……(F G O R P Gへの飽くなき不信感)

「——となると、このままじゃ一切の打開の情報も無しに諜報活動も終わる訳か……それは、許されないな、流石に。」

▽故に、使えそうな情報は手に入れられたが、弱点と呼べる情報は全く手に入れられていないのだ。リスクを背負った場合は即座に撤退するのが基本だが……現状はそんな余裕のある状況ではない。続行以外の選択肢は存在しない。

「(僕の失態一つで人理修復失敗という事もあり得る、となるとね。なら先ずは……一度潜伏して、ある程度時間を空けてから……いや、そ

れまで魔力が持つか?）」

そうなんですよね。デオン君ちゃん、しっかり宝具を使える位には魔力を装填して貰ってるとはいえ、マスターからの魔力供給が途絶えている状態で何処まで行けるか。デオン君ちゃんだけ別ゲーやってるかもしれない。

「少々と、覚悟を決めなきゃいけないか」

「——何かしら覚悟をする位ならもうちよつと落ち着いて動いて欲しいものだな」

\*おおつと\*

〈瞬間、鎧を脱ぎ、自分の普段着に着替え振り向く。頭の中は目撃者を昏倒させて逃げ出す事に既に切り替わっている。まだバレていないならリスク覚悟で突っ込むのもやむなしだが事こうなれば……  
「あんな大騒ぎとなれば、もう接触せざるを得ないじゃないか……全く、つくづくサーヴァントというものは此方の都合を考えてはくれないうだ」

「……諸葛孔明」

「ここまで諜報活動に秀で、かつフランスの意匠の装束。恐らくはシユヴァリエ・デオンと言った所か。安心しろ、敵対の意思は無い」

お また せ! 敵軍師しかなかったんだけどいいかな? 普通なら全然良くないんだよなあ……でも今現状なら、あ、良いっすよ(ネタバレくそ野郎)

「信じられるとでも?」

「敵対の意思があるならば、私の様な軍師一人でこうして出向かず、もう少し兵隊を引き連れていても不思議ではない。そもそも、こうして悠長に話さず大声で誰かを呼ぶと思うのだが……違うかね。シユヴァリエ・デオン」

〈切つ先が自らに向いているという、この窮地だというのに実に諸葛孔明は冷静に言葉を紡いでいた、揺らぎも無く。言葉には理があり、不審な様子も見られない。しかし僅かな疑惑も、頭の片隅には留めて居る。

「——何が目的だ」



「ここでは話せない。隠蔽工作をしてあるとはいえ。外では万が一もある」

「そこで初めてデオンは、周りに何かしらの魔術工作がされている事に気が付いた。確かにこれでは味方を呼ぶ意味が無いだろう。」

「因みに原作の孔明先生にはこれほどの魔術……どうなんでしょう。ギリギリ使えるんでしょうか。まあサーヴァント孔明の力を借りてるからこそだとは思いますが。」

「……ここで戦っても、僕にとつては不利しかない。信じる信じないに拘らず、僕に拒否権は無い、か」

「ほう、分かっているじゃないか。尤も、私としてはこんな下策も下策なやり方をしたくは無かったのだが……あんな騒ぎを起こされてはな。方針を変更せざるを得なかったのだ。その辺りは了承してもらいたい」

「デオン君ちゃんったらお茶目さん！（爆弾起爆）もしかしたらホモ君の今までの蛮行もお茶目さんで許されるかもしれない……ダメだっつってんだろ（至極当然） 取り敢えず土下座しろよこの野郎（強制）」

と、言っている間にも孔明にデオン君ちゃんがドナドナされて行きます。一応私はホモ君サイドの話を聞いているから孔明の裏切りを知ってますけど、デオン君ちゃんはその情報を知らないからアイアンマン……（省略形） あゝもどかしひ（大正）

「——そう言っつて、孔明がデオンを連れて来たのは、前に一度連れてこられた、彼の仕事場だった。ゴチャゴチャとした室内に案内され……孔明が壁に触れると、また何かしらの術式が起動した様だった。「よし、コレで問題は無い。改めて話をしようじゃないか、カルデアのサーヴァント」

「……本当に内応だとすれば。このタイミングに接触というのは些か……出来過ぎている気すらするが？」

「残念ながらそう理想的にはいっていないのが現実だ。此方としてはもうちよつと静かに接触を行う積りで策を練っていたのがこんななし崩しの形だ。この時点で計画は狂っているのだ。正直想定してい

た中でも大分最悪の状況に近い」

とはいえ……ねえ？ あんなトラップ仕掛けてあると誰が思うかっていう話です。コレは連合ローマの頭悪いトラップが悪い（責任転嫁）

「とはいえ、それは言っても仕方ない……話を進めさせてもらおうでしょう。先ず此方の状況だが、単純に言って大手を振って動く事は、今は出来ない」

「だから情報提供のみ、という形で？」

「そうなる。そして君達が求めるのは。まあ当然ながらあの長城についてだろうな」

＜そう言つて孔明がデオンの目の前に差し出したのは……長城の設計図の描かれた図面だった。それも、相当に精巧な。

「これは……！」

「先ず気持ち程度だが」

めっちゃ切り札切るじゃんエルメロイ二世。えっ、ウェイバー君つてめっちゃ冷静に慎重に作戦を練るイメージがあつただけ……？

「大盤振る舞いだね」

「策というのは、出し惜しみをすれば良いという訳ではない。時にはこうして派手にエースを切るのも必要という奴だ」

＜そうニヒルに彼は笑った。余りにも普通に差し出された、手首の血管にも等しい情報。これだけでも攻略法を思いつくには十分な情報だというのに……向こうも信用を得る為だけに大きな情報を切ってきたのだ。

コレは策士孔明。激しく前後に緩急をつける、殆ど違反行為。軍事的な作戦なんて相手から見れば「そんなんルール違反やろ」って事ばっかりだし……

「——分かった。どうやら、本当に此方に協力してくれる意思があるみたいだね。疑って申し訳なかった。諸葛孔明」

「いいや、あのタイミング、君の立場であれば、疑うのが当然だろうか。謝る必要はない。それに……今は、あの長城を砕くようなウル

トラCを求めて、相当に余裕が無かった。だろう?」

「――恐るべきは孔明の頭脳かと、背筋が寒くなった。デオンは、正直あそこ迄固めた守りが手元になれば、先ず真つ向からの攻略以外は気にしないだろうと想定していた。徹底的に隙を減らした単純なモノや行動、作戦。それらに搦め手は逆に通じにくい。」

「……あるのか」

「あるとも。そこまでしつかりと想定してこそその軍師だ」

「故にこそ王道、極まり切った基礎が厄介と言える。僅かな隙など気にしない、出来ない程に……しかしこの男。アレだけ巨大にして堅牢、そして攻略され、放棄した後の事まで考えてある、という王道も王道な守りの陣に、それでも一点の隙を見出している。」

「どれだけ困難でも、やっぱり軍師としては、王道を貫く(一撃必殺)……理想形ですかね(国士無双)」

「あの長城は私の設計だが……あの起爆に関してだけは私の物ではない。ある魔術師からねじ込むように言われたモノだ。必死に突破した所で足元を掬うのだとな」

「ある、魔術師」

「名前は言う事は出来ん。だがその男のお陰で、あの長城には最大の欠点が出来たのだ。もしそのままなら、間違いなく突破も苦しい壁となつて居ただろうが、私の『守りに徹しさえすれば先ず負けない』という消極的な姿勢がお気に召さなかったようだな」

「――その表情はなんとも、してやったり、という言葉が似合ひそうな顔であつた。」

「はえー……描写されなかつただけで孔明さんスツゴイ仕事してる……」

「と言つた所で、今回はここまで。次回は、デオン君ちゃんの潜入作戦第六回。いよいよ長城最大の弱点が露見するのでしょうか。」

## デオンの潜入作戦 その六

皆さんこんにちは、ノンケ（五章詐欺セイバー）です。お前実装に何年かかっただよお前よ……マジで待ってたぞ（宝具五）

前回は、デオン君ちゃんに孔明先生が接触したんですが、都合よく、という訳ではなく寧ろタイミング的には悪い時に接触するという。これが原因で攻略失敗するとかないですよね……（震え声）

「――遠隔操作？」

「ああ。当然そうできる様には作ってある。現代では不可能な大魔術もこの時代であれば十分に可能だ……そうなる様に、設計をさせられた」

「少し自嘲気味にそう言い捨てると……孔明は設計図を叩いて……少し歪んだ表情で笑った。何かしらの恨みがあるのだろうかという事が、一発で分かる。」

「全く、自爆前提の陣構成など、最早冗談にもならないふざけた指令だったが……此方を使い潰す積りの舐めた命令だ、折角だし丁寧に作ってやった。遠隔操作に一切の支障はない。間違いなく悪用可能だ」

「はえースツゴイ恨みを買ってるじゃん……めっちゃ「仕事しましたよちよつと有能すぎて悪用されちゃったらごめんねえくくくくく」的な悪意が滲み出てるじゃん……怖っ……」

「……まあ、それを悪用する為にもうちよつと機会を伺いたかったのだが」

「その起爆操作を行う場所は当然町中の適当な所にある訳も無い……手強い場所にあると？」

「王宮の内部、それもある程度入り組んだ場所にあるのだよ、デオン・ド・ポーモン卿。それも、他以上に監視の目も敷かれている場所だ」

「そりゃあ町中にそんな物設置してたら朝から晩まで起爆祭りになっちゃうし……そこまで連合ローマ市民馬鹿じゃないと思うんですけど（名推理） そもそも思考回路が存在しているのかという問題（燕返し）」

「まあ、それは今言っても後の祭り。問題は、そこに侵入できるか、という話だ」

「そう言つて孔明が次に出したのは王宮の地図。相当に正確に描かれたその地図の中で、孔明が指示したのは……王宮の中でも、最もしっかりと守られているであろう場所、玉座だった。」

「玉座に!？」

「これを起動するタイミングは、私達サーヴァントではなく、とある魔術師が握っている。そしてその男が常駐しているのは……ここだからな」

指令室に核起爆のスイッチがある……普通だな！（ミリタリー並感）（ここは合衆国でも連邦でも何でもないと思うんですけども。連合ローマとローマとの間で冷戦でも起こってるんですか？ ないです（自嘲笑）

「――流石に玉座に直接侵入ともなると、下調べも準備も万全に必要なか」

「辞めておいた方が良いでしょう。一人で侵入する等無謀の極みだぞ。何の為に私が協力していると思つて居るんだ……準備が整い次第、何とか侵入できるように手引きをするからそれまで待つていてくれ」

「いや、余り待つていても魔力の方が持たない。令呪を用いて魔力を充填して漸く活動できている状態だからね、あまり余裕はないんだ。侵入は流石に出来ないと思う」

そろそろ時間がない可能性もあります（食い気味）ここは無茶して消滅しちやったら洒落にもならないですよ、折角の超強力セイバーが……

「魔力リソースの供給が出来ない状態で一人で乗り込んできているのか」

「僕らの陣営にそんな余裕は無いんでね」

「となれば、あまり時間をかける訳にもいかん……なんとと言う縛りプレイだ。計画を変更せねばいかんか」

「そもそもデオンには時間制限があり、その時間制限内でどれだけ情報が持ち帰れるか……という作戦。あまり時間を取れない以上、敵

陣営との協力はあまり見込めないのだ。

「分かった。限界が来たのなら一旦戻ってくれて構わん……その上で。此方に協力してくれれば」

「良いのかい？」

「此方にも思惑はある。それを押し通す為にもそれくらいは……まあ、其方の都合に合わせる位はするさ……フウ……」

ため息がデカすぎる（心配） 二世本当にごめんなさい……何時か俺のカルデアでグレイと会わせてやるからな！ 来ネストも合わせてやるからな！（下衆顔） 天国と地獄を同時に味わう？ どうちゆる？（幼児退行）

「……分かった。そこまで融通されたんだ。出来る、とは言えないがやってみよう」

「そう言つて貰えると、有り難い」

〈そうやって疲れ切ったように椅子に背を預けた孔明……正直申し訳ないとは思いつつもしかし、確認しなければならぬとデオンは言葉が続ける。

「休んでいるところ申し訳ないのだが、私は何をどうすればいいのかな」

「……ああ、その辺りは今急いで、変更した作戦を伝えるよ。幾つか練つてあつたプランを修正、統合してでっち上げたモノだが……まあ、君の技量次第になるが、なんとかなるだろう」

やつたぜ（確信） 本当にご都合主義と思えるような感じで孔明を味方に出来ました。コレもホモ特有の豪運つてやつなんだよなあ……いやあーエンジンジョイプレイで完全勝利してホントすまん！

〈——そうしてデオンは、しばし孔明の元に匿われる事になった。脱出する機を伺う為……だったのだが。

「攻めて来る!？」

「ああ。ローマ軍に動き在り。明日にでも大軍を伴つて攻めてくる、との事だ」

〈そう孔明から告げられたのは、まだ三日も経たぬとある昼の事だった。完全に想定外の事態である。持ち帰ると約束した情報はま

だ届いていない。となれば、何故此方に進軍してくるのか。

カルデア寂しがり屋だから……（君を連れ出す為に決まってるだろ！） 尚デオン君ちゃんに戻るお積りはまだ無い模様。

「恐らくは、君に接触する為ではないかな」

「僕に？」

「そうだ……令呪で魔力を充填し、時間制限付きで此方に来て居ると、確か君は言ってる居たな。それを知っているローマとしては、君を回収する為に軍隊を動かすぐらいはしても不思議ではない。何せ、彼らにとつては君の持ち帰るであろう情報が命綱にも等しい」

「考えてみれば当然の事だった。自分が孔明と協力しているのは向こうは知らない。独断専行だと、自分でも分かっていただろうに。」

あまりにもすれ違い宇宙。もうちよつと報連相して？ しろ（豹変） 出来る訳ないだろこの状況で！ 実際噛み合ってるからセーフみたいなどころあるし、まあゆるして。

「だが好都合ではある。相手が向かってくるというのであればそれを利用しない手は無いだろう。君は、向こうの使者と接触して……これを渡してくれ」

「そう言つて、孔明はスラスラと何事かを紙に記すと、デオンにそれを手渡した。」

「これは……君が説明した、作戦の写しか」

「簡単なものだがね。それでもしつかり伝わる様には書いたつもりだ。本来は準備ができ次第一旦戻って貰う積りだったのだが……臨機応変に行こう」

作戦が思惑通りにいかないのは世の常だからね。しょうがないね。「了解した。それで、結局上手くはいきそうなのか？」

「君の協力あつてという、個人に頼った物にはなるが。一応仕上がった。向こうの出方次第で作戦の成功率も上下するが」

「随分と不安定だな……」

「本来は反抗出来ないような状況で、無い物ばかりで、それでも勝ち目を見出したのだから誉めて貰いたい位だよ。本当に、アイツは無茶を言う……」

「そう言う孔明は、しかし。余り迷惑そうにしているようにも見えない。そしてその口から洩れた、アイツ、という個人を指す言葉。」

「君だけじゃないのか？ 動いているのは」

「——ああ。私がこうして連合ローマの獅子身中の虫をやっているのは、我が主の命でもあるからな」

「……ふーん。我が主ですか。アンタがそう呼ぶ人間なんて一人しか思いつかないんですけど。所でこの孔明の眼の前にその方と劉備を置いてみたら、果たしてどっちに付く事になるのでしょうか（ライネス節）」

「……歴代のローマ皇帝の誰かか？ それとも」

「神祖でも無い。個人的な理由から、私はある男以外には仕えない事にしていてね。それこそ、相当の例外でもない限り。まあ、それは良いだろう」

「名前も、まあいい。デオンが気になるのは……その主の目的。」

「その方は、何を望んでいる？」

「……嘗ての強敵との、尋常なる再戦を。我が主は、此度の召喚にてそれ以外を望んではないとの事だ」

「——と言った所で、画面暗転。」

デオン君ちゃんは無事孔明先生と接触。いよいよあの三重の壁を乗り越える時が来たのではないでしょうか……やり方？ しらない（小並感） 藤丸君チームがデオン君ちゃんから情報を無事貰える事を祈りましょう。



## 藤丸視点：巨壁の前で

——緊張感のない戦いだ、と言えばウソになるだろう。それだけ、目の前に広がるその巨大な壁、無数の矢と、壁の前に配置されたゴレムの群れの威圧感とは半端なものではないと思う。でも、個人的にはどうにも其方に集中しきれない。

「——では、香子さんの作成して下さった式を用いて、なんとかデオンさんへの接触を図ります。マスター、操作の方はお願いします」  
「了解」

デオンさんを見つける為に準備されたのは……一枚の紙の式神。式部さん曰く、取り敢えず自由に飛ぶ事くらいは出来る、と半泣きで言っていた。それを操縦、というか、操作するのが俺じゃなければ、めっちゃ凄いとストレートに言えていたと思う。

「……大丈夫なの？ それ」

「多分。使い方も凄く簡単だし、後は俺がこの式神をどれだけ扱えるか……因みにラジコンの操作とか俺スツゴイ苦手だけど、失敗したらゴメン」

「ダメじゃない……そのシキ？ じゃなくてアンタが」

全くもってその通り。この式の性能自体は昨日見せて貰ったので問題は無い。『晴明様であれば式神を雄々しく戦わせることも難しくないのですが、私にはとても』という事らしかったが、飛んで動かせるだけ十分スゴイ。

自分が台無しにしなければ、だけど。

「ぶっつけ本番でやるしかないか……」

『式からの映像は、此方のモニタで捉えられる様にはなってる。それをさらに君達の所に投影するからラグが凄くと思う。頑張れ☆』

その上にダ・ヴィンチちゃんからの容赦の無い一言だ。ラグとか、魔術という言葉から信じられないような現実ト的な問題ル。泣きたい。

「……はいっ！ 何とか頑張りますっ！」

「大丈夫、アタシも居るし。そっちに手出しはさせないよ」

しかも、ネロ陛下から、態々ブーディカ將軍を護衛に回して貰って、

プレッシャーは倍率ドン。いきなりなんでこんな大役を任されたのか……そりゃあ、俺が一番戦力的には使えない男だからで、その分他の事を任せやすいからである。情けなさで二重に辛い。

「接触できなかつたら俺戦犯どころの騒ぎじゃないよなあ……」

「さ、マスター。始めましょう」

ああマシユ待つて。まだ心の準備が……ああもう仕方ない！ そんなことグチグチ言つたつてどうしようもないんだ。漢は度胸、何だつてやつてみるもんだよ！

「——オーライ……！ 見てろマシユ、先輩がカツコいい所見せるからな！」

そうして手元にある式に、親指を噛み切つて血を垂らせば……鳥の様な形をした式が動き出す。後は俺の思う通りに動いてくれる、この事。

「えっと、じゃあデオンさんの姿を思い浮かべて……」

出来るだけ、強く……強く……で、後はどの辺りで探すかを、決める、だっけかな。えっとじゃあ……向こうに見えてる連合首都の方を……

「つてうわあつ!？」

結構、風がっ……じゃなくて！ と、飛んだ飛んだ！ スゲエ、カルデアの礼装とおんなじ感じでやつたけど、上手く行つてくれて助かった。あー凄い勢いで飛んで行つてる。画面には……あー、凄い空からの映像がしっかり写つてる！

「成功です！ 流石ですねマスター」

「あ、ああ。案外簡単で良かった」

後は、式神が勝手に探してくれる……らしいけど。それ以外は俺が逐一指示しなければならぬ。その辺りはしっかりと集中しなければ。というかこんな簡単な事で褒められてたらダメになる気がする。その辺りも気を引き締めて行こう。

「——さて、仕事を始めましょうか！」

「防衛なんて退屈なだけだと思うけど……」

「そう言う事言わない。攻めるだけじゃ戦なんて勝てるもんじゃない

し。あ、マシンもあんまり張り切り過ぎちゃダメ。冷静に、きつちりこなしていこう」

「は、はいっ！」

……とはいえ、オルタの言う事が分からない訳でもない。自分以外は防衛が得意なメンバーばかりで、攻勢の得意な彼女の出番があるかは微妙な所。それをオルタも自覚しているのだろうか。

「……そっちにあんまり集中しすぎてもダメだ。皆を信じて、俺はこっちの仕事をしなさいと」

どうやら式は、連合首都の上空にもう到達しているみたいだった。結構速い。やっぱりサーヴァントって凄いなあ……じゃない。落ち着け俺。ちゃんと仕事しろ。えっと、見つかったりしたら事だ。気を付けて。

「ズーム機能とかは無いらしいから、後は俺の眼の良さ次第だ。気張れよ俺……絶対に見逃すな」

しかし、随分とこの連合首都というのは、綺麗な……いや本当に綺麗だな、ここまで完璧な八角形ないよマジで。こういう城壁つて四角形とか、星型だとか、そんなを想像してたけど。城壁の上に立つてる人とか、気になんないのかなあ。

「こっちの方が防衛上良いのか……？ いや、そんな気にしてる場合じゃないだろ」

しっかりと見てないと見逃しちゃう。とは言えども、人が豆粒にしか見えないんだがこれ結構無茶を……？ いやちよつと待てよ？

「今、城壁の上に立ってたのって……」

やつべ！ しまった見逃した！ なんてこった、こっちから何の連絡もしてない状況で態々分かりやすい所に立つてくれてたつての……頼む、見つかる前に間に合えよ……！

「——よし！ セーフセーフ！ 見つかってない見つかってない！」  
さて、後は此奴をデオンさんに届けて、任務は完了だ。

「……………ふう」

予想以上に上手く行って助かった……ここで失敗したら情報報は愚か、本人すら危ないかもしれない。あーホント……式神兼手紙

の内容がしつかりと伝われば、ちゃんとこっちに来てくれる、はず。

「——っしー！」

こっからは、合流ポイントの死守がお仕事だ。と言っても、結局俺に殆どお仕事は無い訳なんだが。サーヴァントが四人、ガッツリ守りを固めている。

「……なんか、この前の戦闘からあんまり戦いに回されなくなったよ  
うな」

前までは、俺が前線に突っ込んで、兵隊相手しててもそこまで何も言われなかったんだけど。今回の戦闘なんか口を挟む間もなくガチガチの防衛体制になって俺が介入する暇ないし。

「うーん……つと、あのゴーレムの集団はマズいんじゃないか、塊になってこつちに来てるし、オルタ！ 瞬間強化を掛けるから突出したゴーレム達を集中攻撃！ お願い！」

「——ウィー！ 悪くない指示するじゃない！」

そんなガチガチ防御で特に攻め立てている訳でも無い此方を相手に、向こうはゴーレム迄ドンドン投入して攻撃して来ている。ネロ陛下は、以前と同じように、ここを守っているのは征服王である、と言っていたのだが。

「……イスカンドルって、こんな無茶な戦い方をする人だったのかな」  
集中しきれない理由は、そこにある。最初から全力、というか全力しかしてない。余りにも単調、というか。コレは最早……本気で指揮しているのか、と素人でも思ってしまうような感じだ。さっきのゴーレムの動かし方とか、凄い『怖い』と思わせられてしまう事は幾度もあるのだけれど。

「全力じゃないのかな……」

「——全力にもなれんわ!!」

その声に、ハッと天を仰ぐ。此方に向けて跳躍する影、巨大な馬。その背に揺れる、紅い髪。間違いない、アレは——！

「征服王、イスカンドル!？」

「ここまで気に入らん闘いを強いられて。そもそも余が指揮を執っているのであれば、もっとマトモな戦をしているという話だ」

後方で指揮を執っているとばかり思ってたのだが。ネロ陛下の方でも無く、どうして此方に突撃して来たのか……その視線が向かって居る先は。

「当代の皇帝があそこ迄覚悟を決めているのだ。こういう策は余りにも無駄、と思うのだがなあ……敵将、ブリテンの勝利の女王ブーデイカよ！」

「——私？」

「左様。お主の仇たる皇帝、ネロ・クラウディウス……あ奴に、お主の牙を向ける積りは無いか！ 英霊として成ったその身には、息づいていであろう、故郷を焼き払ったあの娘への恩讐が！」

——此方の將軍、ブーデイカさんだった。

## 嵐の覚醒 その一

皆さんこんにちは、ノンケ（悪落ち本気モードメドゥーサさん）です。立ち位置的にはSS4なのか、SSGSSなのか……分からない……コレガワカラナイ。

前回は、ダレイオス殿を回復する為に形ある島に乗り込んで、ダレイオス殿のファンの意識の高さを再確認いたしました。まあダレイオス殿カッコいいからね……まあしようがないと思います。

「——これで、準備完了いたしました」

〳洞窟全体に敷かれた巨大な人の中心にて、特注の担架に乗せられた黒い巨人。その目の前に屈みこんだ香子に、貴方は予定通り、令呪を解き放つ。神の住まう島の霊脈、そして令呪によるブーストを受けた回復宝具の力、この二つで大吉を引けるか。

「では、始めさせていただきます……限りあれば 薄墨衣 浅けれど 涙ぞ袖を 淵となしける——『源氏物語・桐壺・別離』」

おかしいな、こんな大規模治療。今つて第二特異点の筈なんですけれども、あれー、おかしいね規模がもう第五だとかそのクラスのイベントなんだけどね……豪華絢爛と考えるべきでしょう（白目）

『——良し、想定通りの出力だ。これなら、霊核が致命的に破損してたりしてなければ治療は不可能じゃない、と思うよ』  
「どれくらいかかる想定ですか？」

『三十分ちよつと。それを過ぎて彼が動けるようになって居なければ、正直厳しいかもしれない、と言った所かな』

〳そうなった場合、恐らく自分達の勝ちの眼は大きく減退する。敗北濃厚の目で挑むか勝ち目の残っている状態で戦うのか。考えてみれば、相当責任重大な任務だろう。

〳——右の方の線とか歪んでないかな、大丈夫かな……

〳落書き王の仕事に不備はない……俺を信じろ俺。

うーん選択肢。どっちを選んでもろくでもない予感しかしないという……多分どつちかが罨、キツチリと成功させて気持ちよくしてくり（選択肢上）

『そう言う所をちゃんと心配できるなら、多分大丈夫だと思うよ。慢心してたりしたら大事な所でうっかりをやらかすかもしれないから』  
どこぞの冬木のあかいあくまかな？ どうしてその人の名前を出した！ 言え！ 先に名前を出しておけばフラグを粉碎できるから……（震え声） しかし名前を出した事で立つフラグもあるのですよ。  
＜展開された回復結果から、少しずつ、少しずつではあるが、エメラルドの癒しの輝きが黒い巨人に降り注ぐ。表面上は傷がある様には見えないが、霊核の傷は確実に修復できているのだろう。』

『……まあ良いニュースがあるとすれば、向こうは相変わらず順調だった事かな。藤丸君達もそろそろ任務を始められそうだよ』

「シキブの式神がしっかりと仕事をしてくれるといいのですけれど」

＜大丈夫だよ。香子さんの腕は確かだ。』

＜そんな意地悪言わないの』

これです、私がこれを選んだ訳！（大嘘） これこそ正に悔い改めてが似合う。という事で折角ですし満を持して言いましたよか！

せーの！

「そう言われましても。自分の式神が全くもって信用ならないと言っていたのはシキブ本人なのですけど……吐きそうな表情で」

＜貴方は何も言わずにそっと目を逸らした。』

ええ……ご本人がそんな大ダメージを喰らってるのか（困惑） どんなもんかは全く知らないけど、もうちよつと自分の式神に自信もつて、どうぞ。 晴明様直伝なんだから……あ、泰山解説祭もそうなのか。 だったらちよつと信用できないのも多少は、ね？（納得）

『まあダ・ヴィンチ曰く起動に問題は無さそうとの事だから……あ、そう言ってる間にも接触を始めるみたいだよ。準備始めた』

＜そんな此方の心配をよそに、どうやら向こうの作戦は順調に進んでいる様である。このまま杞憂で終わってくれれば一番なのだが……そう思いつつ、貴方は腰を上げる。どうせここで暇をつぶしても仕方ない、一応見回りの一つでもしてくるか、と。』

『いや、万が一の事もあるし、令呪による再ブーストとかの為にうろつくのはちよつと』

「……マスターは一度落ち着く、という事を覚えるべきかと。設置されるという図書館を一番利用するべきは貴方なのではありませんか？」

「<したらボコボコに言われてしまった。二人ともしつかりとした正論だ。余りにも心が辛い。貴方は大人しくしゃがみ込んだ。」

お前親戚の家に来たガキとちやうねんからもうちよつとジツとして（懇願） まあハゲのチンピラに落ち着きが無いのは完全に解釈一致なんでそれは良いんですけど。解釈不一致になる程ホモ君ファンは居ない不定期。

<——そうして、しばし経った後。

『さあ藤丸君の方も作戦開始だよ。ネ口陛下の指揮も順調で、集中して仕事に取り組めるってさ。こつちの方も……うん。多分順調だと思う』

<正直な話、自分のサーヴァントが頑張って宝具を使用しているという大事な場面ではあるが……しかし、結局のところ外野は何もする事が無いのだから、暇なのは間違いないのだ。不謹慎ではあるが。向こうの話が丁度いい暇つぶしになっている。

いや不謹慎どころの騒ぎではないと思うんですけど（正論） もうちよつとちやんとこつちの任務に集中して、どうぞ。とはいえ暇というのも分からないでもない。私も大分見所さんを探して困っているの……

『お、デオン君と無事接触出来たね。式神も……ちやんと渡ったな！』

よしよし、藤丸君側の作戦はほぼ上手く行った、かな』

<そして、どうやら香子の式神は見事仕事を完遂できた模様である。となると、後残る問題はこつちだけだ。後は香子の実力に期待するしかないか……と、そう思ったその時だった。

『——いや、待ってくれ！ 藤丸君の方でトラブル発生！ サーヴァントがこつち来た！ 相手は……最悪だ、敵の総大将、イスカandalご本人だよ！ 単騎だって言っても、このクラスのサーヴァントが直接って！』

<思わず振り向いてしまう。洒落にもならない報告だ。何と、その



最大の対抗手段を回復させている最中だというのに、張本人が態々出張ってくるなど。人数は此方が勝っているというのに、どういう積りなのか。

うっそだろお前!? こっちは唯デオン君ちゃんに接触したいだけなんだ……あんまり本気出さないで、ホラ力抜けよ(懇願) 死んじやうよオラオラ(命乞い) 実際藤丸君がお亡くなりになったら実況もゲームオーバーだから是非も無しデアルカ。

『けどどうして態々単騎で……レオナルド! 彼の目的は……ブルーデイカ? 彼女の勧誘だつて!』

∟戦場のど真ん中で、余りにも豪快過ぎやしないだろうか。一瞬今が割と緊急事態である事も忘れ首を傾げてしまう。態々そんな事をする為に……そう思つて居たが、ふとブルーデイカの事を考えて、思い出す。

『——彼女のローマへの恨みを再燃させる、つもりなのか?』

通販おじさん!? なにやつてんすか!? マズいですよ! 止めてくださいよホントにちよつと……! ほんへでもやらなかつたような鬼の所業をそんな、流れ作業でやらないでください! せめてホモ君の目の前でやつて(なりふり構わず見所さんを求める人間の屑)

∟あり得ない。と貴方は言おうとしたが……口を突いて出ない。血が、自分に囁いているのだ。恨みとはそう簡単に、消え去るものではない。この感覚は、以前にも覚えがある。精神を狂乱させる宝具を受けた、あの時の。

『っ、やり方がエゲツナイな連合ローマ! レオナルド、藤丸君にブルーデイカさんのサポートをするように伝えて! 精神的動揺の隙を突かれたりしたら、彼女が危な——うそ、もうブルーデイカさんがイスカンドルの方に!』

ヌツツツツツツ (絶命)

『彼女の恨みは、そこ迄根深いものだったのか……! ど、どうするんだコレ、ここでブルーデイカさんが暴れ出したりしたら!』

∟血が囁く。見て居ろ、怨の一字を背負う者の、お前の先輩の力を、と。背筋が凍る。ローマへの恨みを、ブルーデイカの叫びを、自分



## 嵐の覚醒 その二

皆さんこんにちは、ノンケ（謎のヒロインオルタ）です。被ってないかが怖すぎる、そんな日です。

前回は、カルデア偵察メンバーの元にイスカンダル王が乗りつける珍事。そして王族特有の勧誘！ 復讐！ S○X！ やめないか！（半ギレ） そんな感じでした。いやあブルーデিকাさんの盾アツパー見たかったですねえ……

『す、凄いな。コレが勝利の女王ブルーデিকাの本気かあ……直接勝負ともなれば、あの征服王と張り合う事も出来るのか。うわっシールドバッシュ二連打！ スマッシュ！ 剣の柄で顔面を狙って殴り掛かってる！ わ、ワイルドオ……』

～縦に伸びる上昇アツパーの一撃から、完全にリズムを掴んだブルーデিকাの戦い……の実況が続いている。どうやら何かしらの琴線に触れてしまったのが、ロマニのあまり慣れていない実況でも伝わってくる。

シールドバッシュ二連打、ほうほうなるほどですね。これはホモンスターハンター、かしこまりっ！ ほらFGOコラボあくしろよ。えっ？ Fateコラボはもうやってる？ やめろっ……！ もうフロンティアは、もうっ……！

～偶に本当にブルーデিকাさんがやってるのだろうか、という様な声が流れてくるのがちよつと怖い。あの優しい声が、二回り位野太い叫び声に変わっているのが、彼女の今の心境を表していて色々、アレである。

「……人間、隠し持つてる一面が結構あるようですね。まあ、あんな風に自分の柔らかい事を抉る言い方をされたら仕方ない部分もあると思いますけど」

『それにしてもなあ……チャリオッツから飛びたって……凄いい勢いで飛び掛かってるなあ怖いなあ！ あっ、剣を弾き飛ばされて、ちよ、ちよつと待ってブルーデিকাさん拳はダメ！ 女性がグーパンはちよつと！ 止めて！』

いや、あの、野太いとかそういう問題じゃなくて『URRRRAA  
AAAAA!』みたいなBANZOKUボイスが流れて来てますけれど、えっとそれは大丈夫なんですかね、ちよっと野生解放してない？ いやだいたい野生大解放してない？ しかもグーパンとかあまりにも遅しすぎませんかお嬢さん。

「どうやら向こうの方は大丈夫なようですが……ロマニ、実況はしているのは良いですが、時間の方はどうですか？」

『えっ？ あっ……ご、ごめんごめん。えっと、今は……アレツ!? もう三十分くらい経ちそうだけど!? だ、ダレイオスさんの方は!? 今どうなってる!? 変化はあるかい!?』

◇……残念ながら、今の所は。

◇か、顔色が、若干よくなつたかもしれない。

変化? 無いです(無慈悲) いや、うすうす気が付いてはいたんですけど、全く変化ないんですよ……ダレイオスさんに。香子さんも若干祈るような表情になって来てますし、汗も滝のようになってきてますし。

『そんな、宝具の出力は間違いなく跳ね上がっているし、霊脈の上に築いた陣の力も計算した通り……いや、それ以上だっというのに……!』

◇治療は上手く行っていて、それでもまだ出力が足りないのか。それともそもそも治療できるような傷ではなかったのか。ダレイオスの様子に変化はない。手応えが無いという言い方が余りにも無情に当て嵌まっていた。

いやあ、FORPG君、何処で俺はフラグを回収し損ねたんですかね……そんな素振り一切なかったんですけど。アレですかね、婦長とか呼べば良かったんですかね。もはやそれは運の領域なんだろうしもうもないと思うんですけど(正論)

「……姉さまを呼んできましょうか? 一応神様なので、あの、居るだけで何か、こう影響があるかもしれないし」

◇正直その影響が良い物である気がしなかったもので、大丈夫だと返した。寧ろ、喜々として場を掻き乱しそうでいない方が良いものである

かもしれない……いや、そこ迄失礼な事を考えるのはいけない、と貴方は胸の内ですつと自省した。

〈〈ここまで来たら止まれない……令呪を切るよ。〉〉

〈〈何か切欠が必要なのかな。クソ、分からない。〉〉

いや、ここはまだ令呪は温存で（エリクサー症候群） まだ、まだ舞えると思うんですよ。いや、寧ろここで正当な手段を使ってもRPGの悪意に嘲笑われて終わりまである気がします（運営不信症候群）

「切欠、ですか」

『切欠ってどんな!? ドクター分かんないよ!』

〈マスターもそんなのは分からない。分かるのはダレイオス本人だけだろう。しかし一人では分からずとも、ここには知恵の回る大人が二人も居る。相談すれば何かわかるかもしれない。〉

〈〈……メドゥーサさん、貴方の意見を聞かせて欲しい!〉〉

〈〈ロマニー！ 医者としての貴方の意見が聞きたい!〉〉

そしてここで重要そうな選択肢が。どつちかが正解……もしかしたらどつちも外れてどこぞの塩神様が我々プレイヤーをおちよくっているだけかもしれない。はー、ムカチャツカからのインフェルノ、ドアラ……（怒りの吐露）

とはいえ選ばないという選択肢はありません。取り敢えず、ドクターは分からないそうなのでメドゥーサさんに聞いてみましょう。この状況で医者意見仰がないとか愚患者ですね間違いない……

〈ここは年の功、という事で一番の年長者だと思われるメドゥーサに問いかけてみる。ロマニはちよつと慌てていて、今は聞いても余り良い意見が出るかどうか……

「私、ですか？ 病人の事等全く分かりませんし、彼についてなんて、全く分かる事ありませんし」

〈なんでもいい、例えば、なにくそこんな所で寝てられるか、そんな風に思えたりするような出来事とか無いかと。こういう時は、結構精神的な所が重要になってくるのだからそう言う事で何かあるか。〉

「……そうですね。気合の入る事ですか」

某プロレスラーさんの平手とか……それは闘魂注入では？ いや殆ど気合と同義じゃないか？（一致率的に）イマイチつすね……  
「例えば、上姉さまに命令された時とかは、否応なく気合を入れるしかなくなりませけれど……」

＜頭を捻るメドゥーサ。そんな中、先程から全く会話に入ってこなかったというか、完全にお昼寝に入っていた意外な人物から声がかかる。そう……それは紛れも無い、ケモノな奴だった。

「――恨み恨めば恨むとき。怒りの感情は貴方をウエルダン、声は一言、私の怒りで世界は回るのダナ……後、オリジナルはクロス」

……急に殺意むき出しにしてくんなお前な（困惑）　　というかそれだけ言って再び眠りに入ったんですが。アイステイーに薬でも盛られたかのような……おつ大丈夫か、大丈夫か？（唐突にネタに入るホモの鑑）

「……恨み、敵意……ふむ……」

＜キヤットの一言に、呆然としているだけの貴方と違い、メドゥーサには何か思い付く所があったようではある。するとメドゥーサは、ロマニの方を向いた。

「ロマニ、イスカンドルの声を此方に届ける事は出来ますか？」

『えっ？　で、出来るとは思いますが……けどどうして？』

「可能性程度の話ではありますが。もし、彼にとつてのきっかけがあるとするば」

えっ!?　イスカンドルの声でダレイオス君を!?（料理漫画並感）

それで目覚めたら彼ちよつと征服王好きすぎやしませんかね……?

『分かった、今ブーディカさんと凄く殴り合ってるから、ちよつと音声上げれば入ってくると思うから、それで』

『――フハハハハハ！　ううむ、久々に血沸き肉躍る闘いよ！』

『逃がすかつ！』

『嘗ての強敵と鎬を削り合った、あの時を思い出すわ！　やはり征服というのはこうでなくては！　強敵と、真正面から凌ぎを削る！　これこそ、正に王道！』

＜洞窟中に響き渡る、雄々しい男の声が聞こえる……変化は、その

直後に。余りにも突然の出来事だった。

早すぎイ!? もうちよつとりアクションする時間頂戴……?

「——!? 手応えが……!」

「……」

◇香子の驚愕の声の直後、ゆつくりと、洞窟の中心にて黒い巨人が立ち上がる。回復結界の輝きを、喰らい尽くすばかりの勢いで飲み込み続け、そして……その輝きの色が薄れ切ったその直後に……鈍い震えが、洞窟内に響いた。

『——魔力反応急速に増大! こ、コイツ……動くぞ!』

◇差し込む日の光の中に、黒い巨人が立ち上がる。口から吐き出す焰の吐息、輝く黄金の瞳、同じ人とは思えぬ程の圧倒的な筋肉量と、巨体! 間違いない、これが嘗て連合ローマすら退けた大巨人!

「——■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■!!」

◇男の名は……今一度言おう、征服に立ち向かった嵐、ダレイオス三世である!

——と言った所で今回はここまでとなります。ご視聴、ありがとうございます。ごぎいます。

## 嵐の覚醒 その三

皆さんこんにちは、ノンケ（クリスマス婦長）です。間違えてこの方を召喚してたら大分展開も変わっていたと思いますけど……遠距離から回復できるとか。えっ？ アンプルって回復手段でしょ？（震え声）

前は、ブーデイカさんがワイルドモード発動で大暴れました。シールドバツシユがワイルドとかいう風評被害……そして、その最中に漏れたイスカンドル王の声で、ダレイオス殿が復活しました。お前イスカンドル王の恋人か何か？

『す、凄い……大きいなあ！』

「シキブ、大丈夫ですか？」

「な、何とか……ビックリしました」

「おー」

～四者四様の反応の中、起き上がった黒い巨人は、ちらりと入り口を見つめると、真つすぐに歩き出した。一步一步踏み出す度に僅かに洞窟が揺れるのだ。その存在感は正に大英傑のソレだ。

「あつ！ だ、ダレイオス様が！」

「ええい、バーサーカーですかあの男……！ ええい追いかけますよ！」

『因みにクラスはバーサーカーみたいだよ彼。こっちで測定した結果だけど』

「それを言う必要があるかないか、それは光と闇の果てしないバトルなのだな」

酷いカオスですね……そしてそれを気にせずズンズンと進むダレイオス三世殿。ホモ君ちよつと追いかけて。そのまま放っておいてどっか行ったら折角治療したダレイオス殿が勝手にイスカンドルの所に突っ込んでいきかねませんし。おーい、待ってくれ。お前言うこと聞くんつったよなあ!?!（言い掛かり）

～貴方は、既に歩き出しているダレイオスの後に続いた。どこに向かおうとしているのか分からないが、しかしその前に、取り敢えず



ローマに戻って貰わねばならない。彼単騎で行動させてしまったのは、それこそ一大事だ。

◇ダレイオスさん！　ちよつと、ちよつと待って！

◇——ダレイオス殿！　ネロ陛下が、貴方の帰参をお待ちしております！

あんまり関係ないんですけど、私最近、機動戦士ガンダム0083を見ていますよ。デラーズフリートの方が好きなんですよ。というか、連邦側がね、ちよつと……まあそれとは関係ないんですけど、何となく下の選択肢を選びたくなくなってきました。

「……」

◇その言葉に、ダレイオスが振り向いた。貴方の言葉に、というよりはネロの名前に、と言った方が良いでしょうか。貴方を見下ろすその眼には、込めようとも思っていないのだろうに、自然にあふれ出てくる、『力』の様な何かが在った。

実際こんな人にジツと見られたら（出ちやいけない物を）流しますね……けどそれは恥ではない。あのダレイオス殿の前では皆そうなる定めなのだから……何だったら溶けるまでである（BBB—B・B—BB並感）

◇何を続けようか。互いに見つめる間……貴方のはじき出した答えは。

◇ネロ陛下からの伝言です！　ご無事で何より、と！

◇ネロ陛下からの伝言です！　今度こそ存分に、と！

おつ、どつちも大ウスオオ！　バレたら斬首迄あるような皇帝からの伝言の詐称、お前もう生きて帰れねえな？（睨み）　されどそのワイルドな姿勢雄の誉れKI☆WA☆MA☆RE☆RI!!（ハイパアアムウテエキイ！）

「」

◇口から出まかせ、そんな事は言っていない。とはいえ彼女自身がそう思って居るのはまず間違いないだろう。その言葉に、静かに彼は頷いて……バーサーカーとは思えぬ程優しい手で、貴方の肩を優しく叩いた。



咆哮か何かなんよ……

「す、凄いですね」

「なんでしよう、あまりにも凄まじすぎて、酷いだとかそういうのを通り越して呆然とするしかないですね……」

「キヤットにこの音はタマネギレベルなのだ……御主人、慰めて欲しいゾ……」

「そう言うキヤットの頭をそつと撫でながら、未だ戻らぬネロと藤丸達の事を思う。イスカンドルとの小競り合いを終えて、なんとかデオンと接触し、向こうの状況を確認できたとの事だったが……」

『うーん、デオン君の方も結構込み入った状況の様だけど……まさか、此方から報告する前に接触しているとは』

「それで？ あの言葉、信用できると思えますか？」

『分からない。とはいえ、これが本当だったら……デオン君は、城壁の弱点だとか、そんなのが生ぬるいレベルの大きな一手を用意してくれた、とは思う』

まあ自軍の知恵袋が裏切ってる訳ですから、そりゃあ連合ローマとしては洒落にもならない。しかしそれですら『面白い！』の一言で済ませそうな征服王。配下に裏切られてるんですがそれは。

「しかし、未だ連合ローマの追撃を受けていると、大丈夫でしょうか。藤丸様達は」

『敵は凄い勢いだよ、全軍を引き連れて。結局事ここに至るまで、敵将の呂布の姿が見られないのは少し不思議なんだけど……』

「立香達の方は、既にある程度の情報収集とデオンとの接触も終わり、撤退に舵を切ったのだが、それを見過ごしてくれるイスカンドルではなく、彼単騎で撤退する敵に強襲を仕掛けているようだ。」

『撤退するっていう機を逃さず速攻で追撃し切り崩そうと動いた、と現地をモニタリングしていたレオナルドは言っていたけど。先ほどの稚拙な防衛とは全然動きが違う、まるで別人だと』

ダ・ヴィンチちゃんも稚拙ってハッキリ言うレベルって……それはイスカンドルではない（怒りの腹パン） EXTELLAでも将としての才覚を存分に見せつけていった征服王がそんな。どーせレ／フ

が余計な命令したんでしょ（言い掛かり）

『とはいえ、レオニダスとマシユの連携で、一度勢いを殺してからは、なんとか距離を離す事が出来る』

「ああ、でしたら良かったです」

『この威力偵察が終わったら、いよいよ決戦だ。こんな所で手傷は負えないって、藤丸君も張り切ってたからね……うん、今、最後のゴレムをオルタが砕いた。これで何れ逃げ切れると思うよ』

＜そう、いよいよだ。今までは、その準備に過ぎなかった。嘗てネロが破れたという三重防壁を破り、いよいよこの特異点を解決する……その時が。そして、連合首都に居るといふ魔術師は、レフ・ライノールについて何か知っているのか。それとも、張本人か。

三重防壁、それを味わう機会はありませんでしたが、まあその性能を味わう必要も無いので、このまま楽に突破させてくれるとありがたいです（フラグ）

と言った所で、今回は此処まで。ご視聴、ありがとうございました。

## ??? サイド：征服の鼓動

「——全く、我が王の計画の一助にすらなれないとは」

玉座の間に響く靴音。態と立っているのだろう。苛立ちの対象は……あくまで彼にとつて役立たずとしか呼べないサーヴァント達。イスカンダル、諸葛孔明、呂布。そして未だ玉座に座ったままの、一応の切り札。

「私を苛立たせるのばかりが上手いなあ？ 君達は」

「言うではないか。お主の作戦には出来るだけ忠実に従っている積りだが」

「その作戦を成功させるために、ありとあらゆる手段を尽くす……そうしている様に、私には見えないのだよ。ライダー、イスカンダル」  
緑衣にシルクハットの魔術師、レフ・ライノールの計画では、もつと、もつと早く。カルデアとローマの一軍は壊滅迄追い込まれている筈だったのだが……結果はこれだ。計算に狂いが出る毎に、恐ろしい程、苛立ちを募るばかりだ。

「余の言った通り、呂布を貸し与えて貰えれば問題無く殲滅出来ていたと思うのだが」

「アレはガリアへの再侵攻に回していると、あの時は言っただろう」  
「ガリアから無防備な首都を穿つ、であつたか……理にこそ適つていたが、結局その作戦も、現地のサーヴァントに阻まれ、しくじつたようだが？」

「ふん、中国の歴史上でも類を見ない武人とやらも、その程度という事だ。そして今はお前の話だイスカンダル。その呂布の分の不足を補うために、人類の恩讐という、不完全極まりない感情とやらを利用しろと伝えたはずだ」

レフの計算では、呂布の不足を補うだけの実力がブーディカにはあり、そしてローマへの恨みも、此方の提案に応じるだけの濃密さがあつた筈だつた。其処を突けば所詮は寄り合い所帯、一撃で崩せる。

「——予想以上に、女王ブーディカの負けん気が強かつたようだなあ！ はっはっはっはっ！ あのシールドバッシュは効いたわい！」

「貴様」

「それを見誤っていたのは、余もそうだが、貴様もであろう。何方も間抜けだったという事で手打ちにせぬか。次に向けての策を考えねば建設的とは言えぬからな」

ギリ、と魔術師が歯を鳴らす。このサーヴァントは、確かにそれなりの駒だ。しかしどうにも御し難い。反発心が強いとは言えないのだが、どれだけ失態を詰めようとしても話をいつの間にか流されて終わってしまう。

「——つち、まあいい。どうせ次でこの特異点の命運も決定する」「ほう?」

「これだけ予定よりズレているのだ。君達の無能も、向こうの虫の様なしぶとさきも、私は見誤っていた。故にもう思考を変える。全ての戦力を投入し、奴らの首都へと向かい殲滅する。もはやこちらの戦力と相打ちでも構わない」

そう言うレフの顔は歪んだ笑顔によって彩られていた。

「……擦り減ったローマでは、壁を突破しきれず。勝手に自壊する、か?」

「その通りだ。流石は征服王、理解が早い」

それは人を生物とも考えない。ただの資源として磨り潰すという、狂気の沙汰を基盤に置いた思考だった。魔術師が人でなしというのは相場が決まっているが、最早この男はその原則からすら外れているのだ。

「君達を効率的に使い潰す為の策だからね、僅かでも無駄にしないよう、熱も入るといふモノだ」

「——そうか。であれば、余もそれ相応の準備をせねばならん。その熱意に応えねばな」

そしてそれを聞くイスカンドルの表情たるや。従順な言葉とは裏腹に冷め切った瞳と無表情。戦場を駆け抜ける、征服王としての覇気の欠片も無い。

「なあに、今回は単純明快だ。難しい調整は要らない。全軍をもって踏み潰すだけなのだからね。サルでも出来る単純作業だとも」

「それでもやっておくに越したことは無いからな……失礼する」

それは、イスカンドルが目の前の男に、忠誠は勿論、僅かな期待すらも抱いていない事の証左だった。

「——坊主！ アレはダメだ！ どうにもやる気が起きん！」

「何を今さら。彼と貴方の相性が致命的に悪いのは分かり切っていただろうに」

「それにしてももう少しマシだと思って居たが！ 全くサーヴァントというのも良い事ばかりではないという事が、こんな所で知れるとはな」

——故に、なのか。コレは当然の帰結と言えた。

「それで……我が軍師よ。戦局はどうだ？」

「問題ない。全ては計画通りに進行中だよ。後は、彼の言う最終作戦が遂行されれば晴れて此方の勝利だとも」

そもそも、レフ・ライノールはサーヴァントというモノに期待をしていない。そして期待をしていないというのは、それだけ評価をしていない、という事であり……反乱を起こす様な力があると露ほどにも考えていないのだ。

「であれば、いよいよもって手は抜けんか」

「そうだな。我々の勝利を盤石とする為にも」

そんな侮られている孔明とイスカンドル。彼らの言う我々というモノに、レフ・ライノールが入っているのか。果たして彼らの想像する勝利がなんなのか……知らぬのは、民と、自分の指示にサーヴァントが従う事をなにも疑っていない、哀れな魔術師擬き。

「それで？ どうだスパイの方は」

「驚くべきだよ。まさか令呪を魔力リソースとして、サーヴァントをスパイとして送り込んで来るとは」

「ほう!? それはなんとも思い切ったやり方をする」

「とはいえそれも間違っているとはあながち言い切れん。乗り込んできたサーヴァントは彼の白百合の竜騎士様だからな」

「——ほうほう！ シュヴァリエ・デオン！ あのフランスのか！」

成程！」

こうして、堂々と話しているのも、監視の目があるというのが分かり切っているの事。態とである。あくまで、向こうと通じているとは悟らせぬように、最低限の事をあえて伝えるのだ。

「向こうも必死だという事だろう」

「現地での召喚か？」

「いや、その素振りは見られなかった。恐らくは既に召喚していたのだろう」

「ここに来る前にか！ 成程、ソイツは良い！ どうやら奴らには中々の天運が付いているようだな……そうでなくては、面白くない！」

裏切りを悟られぬような言葉遊びなど、この二人にとってはさしたる労力ですらない。レフ・ライノールに読心術の心得でもあれば少しは話も違っただろうが、それでも歴戦のブラフを使いこなすこの二人相手に、何処まで通じるものか。

「さて、後は此方の話か。万が一余達が負ければ……魔術師殿の切り札とやらはどのような感じだ？」

「ローマを相手取るのであれば、かの勝利の女王ブーディカ、更にはカルタゴの大英傑ハンニバルをも凌ぐ力を発揮する、恐るべき怪物であることは間違いない。が、この特異点そのものも滅茶苦茶になるのは間違い無いだろうな」

——そんな二人ですら、その表情を歪めざるを得ないのが、レフ・ライノールが呼び出そうとしている、切り札。そもそも、全ての作戦は最後にこれが控えているという彼の圧倒的な勝利への確信を持つての行動だ。

「要するに、最後にすべて帳尻を……いや、合わせるとは言わんな。土台から打ち壊してしまえば勝負も何も成立せず全てご破算、勝利は全て奴一人が総取りと言った所か？」

「そもそも彼に特異点をマトモな状態で維持する、という発想は無い以上はそれが最も合理的なのだろう。そんな物が策として成立しているのが、若干腹立たしくはあるのだが」



「御せるのか？」

「万が一の場合、制御できなければ此方にまで牙を剥かれかねないレベルの大物だ。流石に対策は打ってある。とはいえ、どれだけの効果があるかは、分かった物では無いが」

「まあ切り札を切って此方が自滅など、洒落にもならん話だしもう」

ちらりと、孔明があらぬ空中に視線を向ける。見ているだろう事を承知した上で、迂闊に使う事は進められない……と、今までの話を踏まえた一種の警告だった。

「まあ、彼だけは逃げ去る準備が出来ているのではないかね」

「余達を生贄に、か。とことんせせこましい男だ」

「しかし、私達は従わぬ、という訳にはいかん。宮仕えの辛い所だ」

しかし。そんな切り札を目の前にして。この二人は、決して怯んでいないだけではない。飄々と仮面の下に一つ、ギラリと光る物を隠し、時を待っている。

「まあその切り札を切る、切らぬは次の決戦次第だ。其処で無事向こうのローマを亡ぼしてしまえば」

「その必要すらなくなる、という事だ」

——敵も味方も、それ以外も。揃い揃った役者の全てを欺き、自分達こそが盤面をひっくり返す。その時を。

## 決戦へ向け その一

皆さんこんにちは、ノンケ（ロシア皇妃）です。いたずらっ子という設定が余りにも拡大解釈され過ぎていている気がします。特にウース異二次創作。

前回は、ダレイオス殿復活！ 復活！ 復活！ 砂糖水一杯を丸々……ダレイオス殿なら行ける気がする。寧ろそれが適量まである。そしてデオン君ちゃんはどうやら合流できたようですが……ダレイオス殿復活の儀に勤しんでいた此方は蚊帳の外。

▽——王宮でもやはりというか、当然というか。騒ぎは全く収まらなかった。英雄の帰還というのは、いつそ寒気がする程の勢いだっ

た。

『あのテンションに無理に混ざるのもねえ……』  
「我々はカルデアメンバーとして固まっている方が空気を読めているかと」

「……反省会でもしましょうか?」

「キヤットという女は、ここからどうすればいいのか分からない……だが、それで良いのだナ」

いや全く良くないと思うんですがそれは。逆転無頼かな?（あやふや） 耳切り落とさなきや……!（使命感） 別に耳切り落とす事が重要じゃなくて、自分の思考を悟られないようするブラフが重要だと思

うんですけど（正論）  
「まあ反省会は冗談として。今回の任務が大成功だ。ネロ陛下が戻るまで部屋に戻って寝ていても問題無いよ。胸を張って休んでくれ寧ろ」

「まあ、そろそろ夜ですからね……」

「ダレイオス様帰還のお祭り騒ぎで、王宮に全然入れませんでしたから……」

▽——そうなのである。ダレイオス人気之余りにも凄まじすぎて、人が集い過ぎて大変な事になったのである。周りからぎゅうぎゅう詰めにした挙句、ガツチリと固定されて暫く逃がして貰えなかった

のである。

どっかのお祭りか何か？（困惑） リオの祭りでも無ければそんな沢山の一杯に滅茶苦茶にされないと思うんですけど……あっ、そもそも今のリオでは多分そうならない……うんやめよう、偉い人に怒られる気がする。

「……文句ではないんですけど、その、凄い、熱気と、汗と……」  
「率直に言っただけです。酷かったです……」

＜女性二人が完全にローマの兵士たちに囲まれてワッシュヨイされていたせいでグロッキー状態である。因みに、キャットの方は貴方がずっと抱えていた所為か、殆ど疲れなどは見られない。

「ご主人に感謝である」

＜感謝されるようなことはしてないけど……

＜俺もモフモフで癒されたし、トントンだよ。

キャットに依怙贖罪してんねえ!? まあモフモフには無限の魅力があるからねしょうがないね（妥協）

「はあ……兎に角、今日は休みましょう……」

「明日、改めて……ネロ陛下を迎えましょう……」

＜というより時間的にはそうするしかないのだが。もう真夜中を回る寸前だ。立香達を待つて悠々と王宮で落ち着いて話をするつもりだったのが、二人程速攻でぐっすり寝たいほどに体をボロボロにさせられてしまった（サーヴァントでありながら！）

いやZPR君は問答無用に草が生えるからやめろ（建前） やめろ（本音） いいぞもつとやれ（真実の声） どうしてあの魔（神）柱君があんな扱いになったのか……いまでも分からないですよね……ソワカソワカ……

＜——ネロに王宮で迷う事を相談した結果。入口から一番近い部屋を、自分の部屋として融通してもらえた。なら、わざわざ遠くの部屋に行くより、自分の部屋に連れて行った方が良いのではないだろうか。

＜……折角だしウチくる？

＜俺の部屋が近いから、そこで寝たらいいんじゃないかな？

えつつつつつつつつ？（困惑） ほ、ホモ君どうしたの？ 正気？  
なんで急に恋愛マスターみたいな口説きテクニク発揮した？

熱いんじゃないこんなところでえー、にいちゃーん？（必死）

「え、ええ……マスターが宜しければ……」

「ちよつと、歩く気力すらなくて……本当に……すみません……」

＜大丈夫、大丈夫と気楽に受け答えをするが、ふと隣のキャットの顔が物凄い事になって居る。目の前に凶悪事件を起こした熊っぽい何かを見つけた時のような眼をしている。正直に言つて怖い。ロマニは、何方にも驚いたような視線を向けていた。

「ご主人……その一言余りにもギルティギアである」

『……もしかして、本造院君って意外にもプレイボーイ？』

そう言われても仕方ない様な一言だと思ふんですが。完全に相手を部屋に誘う同人竿役おじさんのソレですよセリフが。はっ、ホモ君はハゲ、竿役おじさんも大抵ハゲ頭……つまりはそう言う事か！（悟り） その悟りは間違っている！

＜そう言われ、一瞬自分の言つた事を考えてみた結果……顔から血の気が引く。正直セクハラを指摘されても文句は言えないレベルだ。自分の部屋に連れ込んで何をする積りなのだろう自分。しかし……この場合、ここで引くと可笑しな誤解を生みかねない可能性も。

＜＜（いや冷静に考えて撤回しないと駄目だろ）

＜＜（ここで引いたら負ける……攻めろオッ！）

ここで攻める!? ここで攻める!? 信じらんねえ！（こんな選択肢） でも選んじやうんだなあ！ おっ……すうっげ……（自己への感心）

＜そうだ。漢ならこの程度の誤解を恐れるなど論外も論外。攻めるのだ。真っ直ぐに。自分に疚しい部分はない。気が付いたけど、逆に言えば言う迄は気が付かなかつたのだから無かつたのだ……一応貴方は保険代わりに、彼女たちの部屋は自分達が使う事を伝えた。

「わかりました……では……」

「……おやすみ、なさい……」

保険張るとか笑つちやうんですよね。漢つていうならそんな事も

せず最後まで貫き通してこそだと思っただけですけどそこどころどうですか？ やっぱりハーフボイルドはダメだな、今回の事でそれが良く分かったよ。

で、君自分のサーヴァントだけに集中してますよね？（不意打ち）

――去つていく二人の背中を見つめ。勝った。と勝ち誇る様な表情を浮かべた貴方だったが、しかし。ポフポフと頬に走る柔らかな感触。何事かと考えて……サツと顔を青くした。そうだ。今、自分達と、発言してしまった。

「ご主人……」

『勢いで口走っちゃうって、怖いよね』

隣のキャットがいよいよ歯茎を露出させ始めた。ロマニが最早生優しい表情にすらなつて居る。分かっている。今の言動、完全に女を部屋に連れ込むときのソレだ。甘んじて、罰は受けよう。

「全く、コレは今夜は寝かせられぬナ？ キャットの独断でオールナイトファイバーでO☆HA☆NA☆SIである」

はえーウカツ！ これはテングに攫われて修行し直さないといけませんね……そして画面暗転。コレはピクミンの一日の終わりの如き燦々日光が炸裂してますね間違いない……（○）

――その夜。キャットと二人で部屋で過ごした貴方と、ゆっくりと寝られた様子の香子、メドゥーサ達は、無事に帰還したネ口達を迎えた。王宮にて屹立する彼を見たネ口の表情は……正に、万感、というべきだった。

昨日は（ry 何を話したかは分かりませんが、きつとお説教でも受けて来たんでしようね（適当） キャットにすらお説教受けるとか、お前主人公として恥ずかしくないのかよ……

「――お帰り、というべきか。ダレイオス殿」

＜黒い巨人の前に立つのは紅い皇帝。自分達では知り得ない、沢山の事が、二人の間にはあるのだろう。その一言に、どれだけの思いが込められているのか……同じように、貴方達には理解しきれない。

「ご無事で、本当に何よりだ」

「――■■■■」

「今度は……貴方を失う様な無茶はしない。皇帝として、恥じぬ指揮と、戦いを以てリベンジを成し遂げよう。新たに得た、仲間もいる！」  
「そう言つてカルデアの面々を見つめるネロ。その視線が視線が貴方のチームに向く……その直後、ネロは此方に向き直った。

「良くやつてくれた！ ダレイオス殿を今一度立ち上がらせてくれた事、本当に感謝の念しかない——フジマルが齎してくれた情報と合わせ……漸く、連合ローマ、そして僭称皇帝共へ、引導を渡す事が出来る！」

「いやあ、ここまで長かったですねー。ブーディカさんの誘拐イベントだとか、もう一人のローマの将とか、出てきていない要素はありますが些事です（ゴリ押し）」

「ブーディカ率いていたガリアの戦力、スパルタクスも此方に合流し、ローマのほぼ全軍が揃う。その時こそ、最終決戦の時だ。お主達も、その時に備えしっかりと準備を整えてくれ」

「了解、と全員の声が揃う。いよいよ、第二特異点を修正する。その時が間近に迫つて来て……そして。貴方にも。一つのステップが、近づいて来ていた。

「……ん？」

と、意味深なテロップが出てきた所で今回は此処までとなります。ご視聴、ありがとうございました。

## 決戦へ向け その二

皆さんこんにちは、ノンケ（パリピ平安女史）です。年齢的に女子じゃなくて女史でも似合うあの方。ビックリするよね……メツチャパリピギャルなのに……

前回は、ダレイオス人気に叩き潰されました。ギュギュって感じでしたね。因みに屈強な男達にもみくちやにされていたというのに、全員の視線と興味は全てダレイオス殿に向かっついていてグラマラスな女性二人には目もくれない始末。お前らホモかよお!?

「——実際に見るのは初めてですが、凄まじい大きさですね。あの壁は……」

「やつぱりそう思いますよね。でも先輩は……その……」

＜マシユとメドウーサが、若干残念な物を見る視線で見つめる先に居るのは。まあ、正直想像は付く二人だ。

「やつぱ……敵の物とは言え、凄い、こう、くる物があるよなあ。あのでっかい壁。あんなデカくする必要があるかどうか、なんて考えるまでも無い。デカけりやどんな攻撃だって凌げるっていう、馬鹿かなっていう考えに基づいてる気がする」

＜いい……本当に、良いよな。呑気かもしれないけど。

＜男としてコレにあこがれない奴はタマついてないよ。

（ロマンを）語り合つとる場合かぁーッ!? ダメだこの原作主人公と本作主人公頭の中お花畑過ぎる……誰か頭の中をカニファンぐだ子に変えてくれ。少なくとも此奴らよりはマシだ!

『まあロマン談義は置いておいて……今は、此方が有利と考えて場の戦力は、ローマが持てる全戦力を投入している。ガリアでの勝利で完全に此方に天秤が傾いたと見て、間違いなく向こうより多く戦力を投入できていると思う』

＜城攻めをするのであれば、二、三倍の戦力が必要なのだとレオニダスは言っていた。曰く、五倍も揃えられればその時点で勝ち戦が確定するのだそうだ。と、何十倍の戦力を何度も押し返した張本人が、言っていた。

『本人の戦いに関しては、極まった練度、地の利、背水の陣という三つの要素が揃ったので絶対真似をしない様に！』との事だったけど』

「数は力、力は飯から、イコール飯は増量でファイナルアンサーである」

つまり最近の大盛ブームは理にかなった事だった……？ いやあの馬盛りご飯が理にかなってるとか世紀末か何か？ 常識ねえのかよ（GRGN）

『——それにしても』

「シキブ、その、気付かなかった私も悪いですし……」

「……私、男性の……寝所に……ううううううう」

＜因みに、香子は致命的なダメージを負って悲しみに沈んでいた。自分が若い男性の部屋に普通に入って、眠りについた、というのが、妙齢の女性として結構なショックだったようである。

「……まあ、まだ総攻撃の開始にはかかりませんから。それまで回復に努めても全然大丈夫だとは思いますが。数が此方の方が上でもあの壁を相手には戦い様がないという事で天運を待っている時ですから」

「実際、我々は向こうの出方を待たねばどうしようもありません。こういう時はのんびりと待ちましょう。デオン殿が動くのを」

＜そう、結局のところはあの壁を正面から粉碎する術は見つからなかった。デオンが齎してくれる吉報を、今はこうして待っている。あくまでここに陣を敷いているのは、壁に常駐する敵の戦力を威圧する為の物に過ぎない。

数がどれだけ居ようと結局あの壁はローマは通さない（BRN兄貴） 総攻撃っていう割に消極的な戦い方。嫌いじゃないし好きだよ（慎重派プレイヤー）

「内応ありきとは、正直あまりいい戦い方とは言えぬのですが」

「あら、戦いなんて謀略、策略、凝らしてこそだと思ってたけど、違うのかしら」

「戦いとは、戦場を知り尽くした玄人ばかりが行うものではなく、むし



るその逆です。故に単純な策、戦いこそが、最も大きな効果を上げるのですオルタ殿……しかし、難攻不落の要所を貫くのであれば、そう言った搦め手も必要になります。つと、またですな」

〽そう言つて視線を向けた先。此方に近づいて来る幾人かの兵士達。こうして膠着状態を到着してから続けて居れば、向こうも鬱陶しいのか戦力を投入して来る。

「つたく、撫で合うだけの戦いなんて、逆に溜まるだけなんだけど」

「まあオルタが居なかつたらもつと苦戦してるから。そう言わないで頑張つてよ」

「そんな安い誉め言葉で慰められると思わない事ね、マスターちゃん？」

とぼけちゃつて……頬緩んでますよオルタさあん……？（暗黒微笑）

「ま、その落ち込み司書サマの分までだったら戦つてあげてもいいわよ」

「ツンデレ、という奴ですか？」

「喧しい、燃やされたいの？」

〽という事で、迎撃に出るのはオルタと立香、そして、貴方も迎撃に出る事に。マスターとして戦う練習も兼ねて。連れて行くのは……

〽メドウーサ

〽タマモキヤット

うーん。前回の洞窟戦にて結局、しつかり指令できてなかった気がしたタマモキヤットで行きましょうか。コレから召喚出来るかも分からないので、ここで使い倒すに限ります（ゲストキャラ使いたい系マスター）

〽という事で、キヤットと協力して戦う事になった。メドウーサには此方の陣の防衛について貰う事にした。

「では主人、散歩タイムと参ろうか。別に我が爪で一気呵成に斬り裂いても構わんのだろう？ 着いてこれるかな？」

〽お前が付いて来るんだよ！ とだけ返し、貴方は先行した立香の

後に続き、戦場に躍り出る。既に、此方に接近してきているゴーレムを、オルタの炎が溶かしてしまっている。壊すのではなく。相変わらず恐ろしい火力だ。

楽しそうだねー、俺らも混ぜてくれよー（無邪気）で、この戦闘なんですけど。自分が戦う事が出来ません。その代わり、初めて、いやここで初めてって言うのが可笑しいと思うんですけど（指摘）サーヴァントに詳しい指示を出して戦う戦闘になります。

本来はオルレアンあたりで解放される要素の筈なんですけど、ホモ君と藤丸君が脳筋過ぎてマスターとしての戦い方を忘れてるからね。しようがないね。この二章にてマスターの本分をすっかり思い出してもらいましょう。

＜自分が前に出る事は変わらないが、メドゥーサに言われた事も無視するつもりはない。ならば相手も小手調べしているこの状況で、自分で戦う以外の方法を鍛えるのも悪くない。

「コマンドを にゆうりよく するがよい」

という事で、キャットをどこに突っ込ませるかを指示しましょうか。いや、突っ込ませる以外の選択肢もあるんですけど、バーサーカーは暴力！ 暴力！ 暴力！ で叩き潰すのが一番だと思うので（脳筋ゴリラ）

よーし行けキャット！ その股座に！

「ウム！ キャットの突撃、花道！ オンステージなのだな！」

うわっ、キャットタックル一つで敵兵が軽く吹っ飛んだ。流石キャット。色物かと思いきや、出生的には何とヘラクレスにも匹敵しようエリートっていう。

「よし、オルタ！ キャットに攪乱されてる敵を焼き払って！」

「右往左往しちやってまあ……これなら狩り放題って奴かしら！ アハハハハハッ！」

正直、キャットだけでもなんとかなるレベルなんですが、オルタが居る事で被害の程度はさらに加速した。コレから毎日連合ローマを焼こうぜ！ 嬢ちゃん、派手にやるじゃねえか！

さて、あんまりキャットに突っ込ませてもいつの間にか大ダメージ



ンテージを捨てる、全軍攻勢。そして、その一手が、今の貴方達四人には、致命的なダメージとなった。

……ライダー助けて！（今回のエンジョイプレイはここまでとなります。ご視聴、ありがとうございます）

## 決戦へ向け その三

皆さんこんにちは、ノンケ（剣豪おじいちゃん）です。あの人がラストじゃなかったのはまあ……仕方ないのかもしれないですね。主人公の時点で、十兵衛とかが相棒だったら良かったんですけどねえ。

前回は、ローマ軍、布陣。連合ローマとジリジリとしたにらみ合い……になるまでも無くまさかの向こうから強襲。しかも相打ち覚悟とかいうにほんへ仕様。そのお陰でキャットと孤立する羽目になりました。

「——中々面白い状況ねえ、マスターちゃん？」

「いやあ、そんな面白いと言っつてられる状況じゃないと思うんだけどさ」

〈完全にやられたといつてもいい。先手を取られた。まさか、敵があつと言う間に圧倒的優位を投げ捨てて突撃して来るとか一体誰がそんな愚行を想像するか。此方が考えていたのがバカらしくなるほどの暴挙。

「ニヤハハハ。右も左も上も下も満漢全席、いかにキャットとて食いきれぬ」

上下に居たらホラーのソレですキャットさん。

「——で？ オーダーは？」

「こっから本陣に向けて後ろに向かって突撃、そのまま食い破って合流しかないだろうこの場合は！ オルタ、前以外は気にせず突っ切れ！」

「はっ、随分とご機嫌なお返事な事！ 良いわよ、ドデカい道を開けてやるー！」

〈周辺全てが敵。しかし、それに一切怯まず、即座に命を下す立香。マスターとしての心構えがしつかりと出来ているだろう。自分は？ 貴方は自分に問いかける。この場合、自分はどうすべきなのか。

〈——キャット、オルタに合わせて。敵陣を一気に切り裂くよ。

〈——キャット、殿は俺達がやろう！

さて、ポジション選択の場面です。ですけど、バーサーカーという



スもこうしてやろうと思いません。

「つたく、なんて数だ本当に……！」

「——走っても走っても、全く途切れない敵の群れ。本当に壁の優位を投げ捨てた全軍での攻勢が、全てを磨り潰さんと迫ってくる。その数をも覆す、サーヴァントという規格外が居なければ、恐らく、自分達は……」

「っ！ このっ！」

「当然、立香も、貴方も、全力で後ろから追いつがる敵兵を払い除け続けて居る。追いつがられる事は無いにせよ、それでもまだ、本陣は相当に遠い。」

因みに、今もキャットへの指示はずっと続けて居ます。だってキャット、指示してないと本当に好き勝手に暴れ回っちゃうし……（困惑）でもこういう所がとつてもキャットだと思うので良き。

「って、ろーまへ凄い突っ込んでくるじゃん。触らないで変態！ オラツ、顔面スマッシュ！（豹変）一撃で顔面を潰されるとは無様だね、可愛いじゃないの、逝ってどうぞ。」

「——っ!？」

「ゴーレム!? マズイ、これじゃあ……！」

「そんなろーまへで遊んでいる間にゴーレムに割り込まれました……（無能）先生ごめんなさい……僕を死刑にしてください……！」

冗談は兎も角として、コレはマズいです。ゴーレムはろーまへより硬く、防御バフを掛ければサーヴァントの攻撃を一撃耐える位は出来るようになるっていう。そんなの相手してたら追いつかれちゃう！

「お願い立香！ 死なないで！ このゴーレム強襲を凌ぎ切れればチャンスはあるんだから！ 次回、『藤丸死す』。デュエルスタンバイ！」

「舐めんなっ……！ オルタ、俺が崩す、後は頼むぞ！」

「随分と命知らずねマスター！ いいわよ、精々必死こいて避けきりなさいな！」

藤丸君がグイッと下からバァン！（スライディングバット）して、転

倒させた隙にドーン！ ゴーレムは砕け散る。象のウンチくんと違つて藤丸君は生き残るんですけどね。初見さん。主人公補正が違いますよ。世界を救うマスター舐めちゃいかん。

「つしやあつ！ ナイス連携！」

「良い気になって足止めんじゃないわよ！ 捕まったらミンチなんだからアンタは！」

ママー！ 俺もキヤットとちゃんと連携したーい！ バーサーカーとしつかり連携取れたらマスターとして一流みたいなところあるし……

「つてまたもう一匹……!?!」

「にやはははっ！ キヤットのターン！」

そんな事を言つてたら今度はキヤットのターンが！ よつしやここぞとばかりホモ君も前に出るぞ出るぞ出るぞ（薩摩隼人） マスターとしての訓練はつて？ 知らんな（唐突な予定変更はエンジヨイ勢の嗜み）

〈キヤット、合わせてくれ！〉

〈キヤット！ 合わせろ！ かつ飛ばすぞ！〉

えっ、なにその下の選択肢は……選んじやうんだなあ!! これがあ！

「覚悟は出来たか？ キヤットは出来ている！」

バットを思い切り振りかぶつて……えっ、ちよつと待つてキヤットがバック宙決めてこつち戻つて来たんですけど、あの、かつ飛ばすつて、もしかしてそう言う事ですか。でもちよつと待つて……？ ホモ君、死ぬんじゃないですかね。

「なあに練習の様なものだ！ 引いてダメなら押してみろ！ 自由の空へ、高跳びフライング！ 理性という名の警察はノーセンキュー！」

〈——キヤットの言葉に、体の奥底から力を呼び覚ます。額に集う、電の感覚。しかし何時もよりも心持ち、思いきり、感覚は……言われたのは、あの時の恨みの感覚を、思い出す様に、だったか。そこまで考えて、キヤットと目が合った。



「——(ニツ)」

〽その笑顔に、腹を決めた。丹田に力を籠める。恐れない事が、始まり。アクセルはベタ踏み、ブレーキは要らない。頭に走る雷電が、更なる唸りを上げ始める。

……あの、ホモ君の額の角が、メツチャバチバチ言ってる上に、凄いい形を顕してきてるんですけど。まだ雷の集合体、って言ってるレベルだったのが、いよいよもって角、ってハッキリ言えちゃうレベルで形が！ ああ！ 頭に、頭に！

「レツツ」

〽——振り切る、その瞬間に腕に走る凄まじい衝撃、荒ぶる力を、今は取り敢えず、何も考えず発散する。飛べ、何処までも、とばかり。自分の腕が砕けても、構わないから今だけは。そんな刹那思考でも、今は良い！

「キヤットシユウウウウウウウウツ！」

という事でホモ君でカタパルトタートルです。コレはカードからの信用を失いますねえ間違いない……

「ニャアアアアアアアアン！」

うっわ、まるで砲弾だな……丸まったキヤットがボウリングの如くゴーレムもろーまへもなぎ倒していきます。というか本当にボウリングのピンのSEが聞こえてるんですけどそれは。スタッフ完全に悪乗りしてるだろうがよコレ。

「……凄いな、オイ」

「何あれ」

〽呆然とする二人の目線の先、転がっていくキヤットの後ろに出来た道は——自然と本陣への直通路と化していた。

と言った所で、今回は此処まで。言及はしてませんがホモ君は、どうやら何かしらをキヤットから教わったようです。さて……？  
次回にそれを、明かしてくれるのでしょうか。

## 万夫不当の猛将 その一

皆さんこんにちは、ノンケ（インフェルノ）です。ゲーム好きかい？ 結構！ 君にはチーターマンをやる権利をやろう……

前回は、連合ローマの全軍突撃、ちよつと全員にほんへになって貰いつつ……その中を駆け抜けてオルタと藤丸君が連携！ キャットとホモ君も連携！ 十倍だぞ十倍（日本プロレス）

＜開いた一瞬の隙を突いて、三人が敵中を駆け抜ける。キャットに吹き飛ばされて大きく道を開けた連合ローマ。しかし、その勢いはたった一撃では揺るがず、再び左右から逃げ道が押し潰されてしまふ。

「マスター！ 足腰折れても走りなさい！ 全力で！」

「言われなくてもおとおおお！」

＜走り方に一切の余裕なし。余りにも醜い走り方でも、それを自覚する余裕も無いと来たのである。走り方だけではない。その表情も、顔面崩壊と言って良いレベルである。

因みに一番ひどいのは当然と言うべきか、ホモ君ですね。もう角は生えてるわ鬼気迫る表情で駆けているわで、今まで一番ヤクザらしいです。コレはまごう事無き鉄砲玉。何方様の命を狙っているのかと。

「——もうちよつと！」

「ええい、最後のひと踏ん張りって奴かしら！ マスター！ チンピラ！ 私が合図したなら跳びなさい！」

＜その一言に、頷きすらせず、貴方達は走り続けて……

「——今ッ！」

＜オルタの言葉に、間髪入れず、地を蹴った。全力、全開。真っ直ぐに。その直後、地面に走るは……恩讐の焰！ 神も、呪われた運命すら、全て焼き尽くせと、天に唄う大文字が、押し寄せる連合ローマを薙ぎ払う！

コレは紛う事無き竜の魔女。連合ローマも、しっかり焼けたかな？

大丈夫でしょ（無責任な保証） ここら辺の焼け具合が凄まじい

……エロいつ！（異常性癖）

「——はっ！ スカツとするわねえ！ 周りに気遣わず焼き尽くすつてのはあ！」

〈そしてその中を、最早走りもせず、悠々と歩くジャンヌ・ダルク・オルタ。正直、余りにも絵になり過ぎて、立香と二人して、貴方は見惚れてしまっていた。

「……かっけえな」

〈炎とあの鎧姿の相性が完璧すぎるんだよ……くっ、滾るぜ。

〈竜の魔女って、誉め言葉だよ。やっぱり。

そりゃあ炎と黒い全身甲冑とかロマンの塊ですしおすし……オルタが人気あるのって確かにキャラデザもそうですけど、厨二心撥るそのコンセプトもあると思うんだけど、お前どう？

「——マスターっ！」

「ご無事ですか！」

〈そんなオルタに見とれている間に、本陣の方から、マシユと香子が此方に駆けつけてくれた。後ろのキャットが知らせてくれたのだろう。

「マシユ！ 状況は！」

「敵の全面攻勢に少し面喰いしましたが、ブーディカさんを始めとした將軍の皆さんが冷静に対処、今の所は総崩れ、と言ったような事にはなつて居ません」

「ひゆう、流石！」

『やあチンピラボーイ。無事みたいだね』

〈此方と通信を繋いだダ・ヴィンチに、貴方はなんてことは無い、余裕だと強がり混じりに返した。そして、続けて問い返す。取り敢えず、ここから、反撃に回るのか、それともこのまま防衛に向かうのか……

マシユの言う通り、後ろのろーまへにローマ兵の皆様がこれでもかと矢を射かけて援護してくれています。これは誇りあるローマ帝国。いやあ、実際ここで本陣総崩れとか笑い話にもならないんでホント良かったです。

「ネ口陛下曰く、この攻勢で無理に消耗するのは馬鹿らしい、との事



「全員で迎え撃つしか」

『——いや、ダメだ！　ここでメンバー全員は。もし、ここで内応の機会が来たら、逃しかねない！　突っ込むタイミング！』

〈つまり。ここで残れるのは……最低限の戦力だけだ。さりとて、突破されれば意味がない。つまり、万全の備えをしつつ、後へ続く戦力は残す。

〈立香あ！　お前は下がってなあ！

〈ここはこの本造院が引き受けようじゃないか！

……これ上選んだら、間違いなく立香が『出来らあつ！』の流れになるやつでしょう？　俺知ってるんですよおく？　という事で当然下。呂將軍という美味しい経験値、逃す訳ないゾ。

「——やれるんだな？」

〈当然、と一言返し隣のキャットと視線を交わす。マスター一人、サーヴァント一人。丁度いい戦力だろう、と。その様子に立香も頷いて、マシユの肩を軽く叩き、くるりと本陣へと脚の向きを向けた。

「マスター、その」

「アイツなら大丈夫だ。任せられる……頼むぜ」

任せてクレナーデ（悲しみのところてん）……とは言ったものの、ですよね。

「さあ、窮地だゾ、ご主人」

〈目の前には、中国に冠たる最強の將軍。貴方にはキャットという規格外が付いていても、それ以上の規格外だ。自分が援護をしても、そもそも勝ち目というモノがあるのかが分からない……けど、チャンスでもあるのだ、今は。

「引き続きレッスンツ、怨念に悟られてはヤレヤレなのだな。けれど我慢は体に毒、渾身の力を腰にため、昂るリビドーを天に開放するのである」

〈つっても、そんな開放するような相手か？

〈はっ、獅子は兎を狩るのにもなんとやらつてなあ！

まあ、ホモ君達は残念な事にろーまへとゴレムのお相手なんですけどね（アルカイツクスマイル）　ふ、来るがいい雑兵共、俺はサー

ヴァントと大型エネミー以外にはめっぽう強気だぞ！　ただしゴーストとラフムは勘弁な！

「ヤツヲウテ、q」  
「ニ「ワー、q」ニ」

そして引き続き、ろーまへは容赦なくCVにほんへに務めさせます。というか普通に喧しいねんな……常になり立っているのだから奴らだけ編集でボイス落さないと鼓膜が無くなります。

「――■■■■■■■■■■！」

「今日は中華。小籠包、チャーハン、レバニラ炒め！　満腹になるまで止めぬから覚悟するのである！」

……このカオス！（半泣き）一応最終決戦に突入してるのに、もうちよい緊張感持ってください。いや、後ろに呂布が居るっただけでスゴイ緊張感なんですけど。

と言った所で今回は此処までとなります。ご視聴、ありがとうございます。ありがとうございました。

## 万夫不当の猛将 その二

皆さんこんにちは、ノンケ（ハルペーメドゥーサ）です。一番好き……いやでもノーマルメドゥーサさん好き……でもやつぱりゴルゴーンさん好き……もつと種類出して。アルトリアぐらい増えて（狂気）

前は、堂々と敵陣を突破して、更にその敵の攻勢に一切ビビらないローマ軍。勝ったなガハハハ。だがそこに呂布將軍の御出陣でござる！ なお相手にするのはホモ君とキャットの模様。オルタちゃんも居るぞ！

「■■■■■■■■！」

「ウウウウンニヤアツ！」

＜爪と戟が散らす火花が、真昼の戦場にすら影を生む。激しい削り合いに、時たま割り込むのは岩の弾丸。しかし、二つの波状攻撃にも、彼は空いている片腕で軽く振り払う。

『マジの化け物だなあ……私もアレだけの武勇を誇るような英霊に目にかかったことは無いなあ。兎に角巻き込まれて磨り潰されないう様にだけ気を付けたまえ！』

一応、EXTRAやった事がある人間としての將軍の評価は……逃げ出したいです（正直） いや、実は私が一番苦戦したのって、呂將軍なんですよね。ラストの欠片男じゃなくて、アルクちゃんでもなく。キャスター相棒で。

なんでか知らないですけど、まあ負けたんですよ。二十位でしたっけ。当時の私は『コンピュータだしこのままの勢いで行けるやろ』と。突破に一週間かかる事も知らず。

＜貴方も、先程から、ちゃちゃの一つでも入れようとゴーレムの欠片をバットでかつ飛ばしているのだが、全くもってダメだ。僅かな障害程度気にしないかと思いきやその逆、律儀に、しかし一分の隙も見せず、粉碎している。

＜チクショウ、全然反応もしやがらねえ！

＜ちよつとは隙作って欲しいねえ飛將軍……！

お願い奉先、見て聞いて、投石は、飾りじゃないのよお！ そんなにサラツと捌くな！

もうちよつと意識を向けてくれ！ そらっ、ホームラン石！

『そんなこと言ってもねえ、相手は、三千年の歴史を持つ大国の、武の頂点の一角だ』

しかし、岩当たっても全く気にならないと思うんですけど、それでも律儀に粉碎していると思うと……僅かでも直撃して意識が逸れるより、初めから粉碎する前提で纏めて迎撃する事になっているのではありませんか。そんな、家にいるかもしれないゴキブリ怖いから家全体バルサン毎日するみたいなの……え？ 大分違う？ そう……（無関心）

『という事で本造院君も、一回それストップ。やつても意味があるかどうか分からないなら、体力の無駄になりかねないし』

ダ・ヴィンチちゃんも辛辣うー！ 実際サーヴァントに石ころなんてチリみたいなものやし……でも最後にもう一発打ち込んでやる。一番デカイ大ききの岩をぶち込んでやるから覚悟せい！ あっ、一瞬で塵に……

〜取り敢えず、無駄に岩を消費しただけで終わったので……引き続き、飛び掛かってくる連合ローマの兵士たちを打ち砕いていく。倒したその一瞬の際に岩を撃ちだしていたのだが、取り敢えず、本来の役割に集中する事にする。

しかし、本当に忙しいです。キャットと呂將軍のステゴロに混ざろうというバカは居ないのですが、一人きりのホモ君であれば与しやすいと、まあこつちに来る敵の数はそれなりです。あーねんまつ（忙しさの比喩）

それでも後ろでは藤丸君達も頑張ってくれていると思うので、ここは踏ん張りどころさんです。俺が直々に、喧嘩を教える（番長気質）

「セメロー、q」

ええい、うっさい、散れ！ 因みにホモ君は常に出力全開、鬼種の魔最大出力で戦っています。使うとマズイ、的な描写もありましたが……寧ろ、今回の戦闘ではそうじゃないんですよ。

《鬼種の魔を使用しての時間稼ぎ》



これが、ミッションと言いますか……呂將軍との戦闘開始にタイマーと同時に表示されました。どうやらキャットの話と関係している様ですが、っと、タイマー終わりました。

「――連合ローマの軍勢を相手に、どれだけ暴れても、どれだけ戦っても、貴方には切欠が掴めない。掠る感触すらない。キャットが言っていた、一つの到達点には、未だ。焦りが、貴方を包んでいる。」

『――無茶をするのであれば、もつともつとホットに行かねば』

「先日の、キャットの言葉。貴方の部屋で、説教とばかり思ってた自分に對して、始まったのはそうではなかった。」

「おん？　ここで回想……あー、そういえば今夜は寝かさない描写在りましたね。あの、香子さんとメドウーサさんをホモ君の部屋に送り込んだ変態所業の。説教されたんじゃないですかねアレ。」

『あの黒鉄くろがねの城が目覚めたのは思い切り振り切ったからである、分かるナゴ主人？　緑茶も紅茶も無茶も熱い内に打て、昼間も言ったが、恨み恨めば恨むとき、弾けたパワーはお墨付き。故にこそ、躊躇うのはマナー違反。即座に店を追い出されて雨の中である』

「キャットはそう、貴方に告げた。何故か貴方の居た部屋のベッドを占領しながら、まるで信者にお告げを告げる猫神様か何かの様に。『キャットのお告げは良いお告げ、唐突でも従うが吉である――お主のお仲間二人に聞かれぬ方が良い事もあるう越後屋。金色のお菓子をくれてやるぞ？』」

「ゴールデン猫缶かな？　ニンジンかも知れない。金のニンジンなんて作るのマイクラぐらいだと思っんですけど（凡推理）　けど量産体制が整えば、アレ一番効率が良いんですよねホント。」

『アドバイスはレックスワンダフル。思い出す事から始めるのだな。其処から迷わずにアクセルはベタ踏み、崖から飛び出し、夜の海へまっしぐらである！』

「急にそんな事を言われ、信じられるかどうか、という話だった。しかし……ベッドの上で丸まりながらそう言う彼女の姿に騙そうという気概すら感じられない。あくまで自然体としか感じられない。疑うのがバカらしくなるほど、自然体だった。」

『——同じ、タタリからのアドバイス。受けるも受けぬも、ご主人次第だ』

〈それに、キャットの言っていた言葉は……スパルタクスの言っていた事に通じる部分もある。狂気を解き放つも、抑えるも、自分次第であれば——キャットのアドバイスを受けて、貴方はこうして戦場で戦っている。

猫と和解した……？　つまり次に召喚出来るサーヴァントはタイガー姉さんである可能性が微粒子レベルで無いです（食い気味）

〈——アクセルをベタ踏みに行っている自覚はある。湧き上がる体の血が、唸りを上げているのだ。しかし、それでも足りない。寧ろ……振り回されている感覚すらある。体の奥底から聞こえる、何かに。

アカギか何か？（困惑）　死ねば助かるとかホモ君は南郷さんだった……？　凡そ髪の毛の量が同じとは思えないのでキャンセルだ。

「コウゲキ、q」

あつ、そちらお返ししますう。まあ、こんな風にカウンター一発で兵士君を伸せる位には出力も上昇していて、調子は良さげに見えるのですが、それではダメなようです。なーにが足りないんでしょうかねえ……

「ワー、q」

「モウコレイジヨウテキヲオサエラレナイ、q」

「ゼンインゼンシン、q」

『いやあ、不利有利とか関係なく凄い勢いだ！　仕方ない、ここは一旦仕切り直した方が良くも知れないね……』

〈——まだだ、と言いつ返したかった。しかし、実際周りの味方も、ジリジリとではあるが撤退の準備を始めている。この熱意に付き合うつもりはない、守りの姿勢がしっかりと見えている。ここで退くのが、一番安定している、と頭が理解はしているのだ。

〈……退くしかないか。

〈いいいや、未だきつかけは掴めていない！

ここで意地張っても仕方ないですしねえ。私、エンジヨイ勢が故……ん!?　エンジヨイ勢が故!?　つまり選択肢下だな!?（狂気妄動）

安定した挙動なんて、必要ねえんだよ！

「――退くのは、簡単だ。しかしここで退いて、どうしてきつかけが掴み取れよう。自分で何時までも何もしないでは、きつといつか、メドゥーサの言った通り……そう思つて、貴方は一步、更に踏み出そうとして。」

「――」  
「射竦められた。飛將軍の視線に。此方を見ていた。キャットではない。キャットと戦っている、一瞬の隙に、貴方の慢心を、彼は見て取つたのだろう。キャットをすり抜け、一步踏み出した貴方の目の前に、既に彼は居た。」

あつ、あつあつあつ、ちよ、目の前に飛將軍が。早い、早いよ！（KY）えつ、待つてくさいよ、選択肢一つでそんな、ゲームオーバーになるとか……いや、Fateじゃ普通でしたね。つて言つてる場合か!? ヤバい、エンジョイ&エキサイティングし過ぎました！

「――■■■■」  
「させぬっ！」

しかし、その目の前に、キャットが割り込んでみせたが……その動きは、反撃を考えるというより、貴方を庇う為の動きだ。あの戟の一撃を受けることは、ほぼ確定してしまっている。

やめて！ タマモが呂將軍にやられたトラウマが！ ヤメロー、コロサレタクナイ！ コロサレタクナイ！

ちよ、コマンド入力間に合うか……っ！ 間に合えっ！（ウラキ）

To be continued……

## 次なる目覚め その一

皆さんこんにちは、ノンケ（渚のバナナ鬼）です。

前回は、まあ……まさかのホモ君がピンチに。しかも、こう、サーヴァントを庇ってとかではなく、大分順当に追い詰められています。ヤベエよヤベエよ……キヤットさん死んじやうよ……

〽——方天画戟が、地面を穿つ。飛び散る筈の鮮血はしかし、貴方が直前に発動した礼装が免れさせてくれた。

「いやあ、油断一秒火事の元。ガスの元栓はしっかり締めねばな、ご主人」

あ……つぶねえ（語録無視） いやホント、ちよつとでも緊急回避の inputs が遅れてたらキヤットがキラキラと輝いて昇天してました。しかしクソ情けない。サーヴァントに庇われるマスターとは……え、なんで庇われないのが普通である必要があるんですか（正規聖杯戦争並感）

〽——ありがとう

〽感謝の言葉以外、存在しなかった。あと一步で、自分は間違いなくあの世行きの特急に押し込まれていただろう。

真つ赤な花が咲いてたと思いますねえ！ ハンバーグの可能性も十分にあつたと思いますが……いや、汚い花火かな？（野菜王子） ドンドン被害のランクが上がってんなお前な。まあ、何方にせよ死ぬという結果なので大して変わらな思ひますけど。

『危なかったね。けど——どうする、緊急用の保険はもうネタ切れだ』  
〽自分に力を貸してくれるサーヴァントが、自分を庇ってくれたのだから、その為に切った事に問題は無い。寧ろよい使い方だろう……問題は、そこではない。自分がミスしなければ、彼女に庇わせる事も無かった、という事だ。

〽俺が、ミスらなきゃ……！

〽落ち着け、気合入れなおせ俺！

なさないでちゆねえ？（自嘲） まさかのキヤットに庇われるとかいうクツソ情けない事態（事態の再探掘） お前主人公らしさの欠



〈了解、とだけ返し……頬を思い切り張って、手元のバットを構えなおした。未だ此方に雪崩れ込む連合ローマ兵。少なくとも、ここは何とか抑えきれないといけない。キャットに声をかけて、改めて角の出力を上げる。〉

「まだまだチャンスはマシマシ、アタマ大盛！ イクゾー！」

「■■■■■■■■■■！」

「セメローへq、」

はい、という事で対呂布、連合ローマ、第二戦です。正直、一体何がどうなれば勝てるのかが、微妙に分かりかねているプレイヤーです。いや、何となく察してはいるんですけど、どうやったらそれが成功するのかと……全く想像できないというのが。

「実の所、眠くなってきたのである……がそれも嘘だッ！」

「■■■■■■■■■■！」

そして先行はキャットが奪取。遊戯王は先行有利！ 最近はそうでも無い事が増えて来ると言っているサル！

で、こちらは相変わらず連合ローマへのお相手な訳ですが、ちよつとキャットと呂將軍の戦いから目を離さないようにしないといけませんね。何時、呂將軍が野獸の眼光でこっち狙ってくるかも分かりませんので。

さて、今更ながら戦況説明ですが、連合ローマ兵は、ワイバーンより弱いんですけど何せ数が多い。英雄の証だとかがドロップするから稼ぎ時、とか言ってる場合じゃありませんよ、幾ら回避補正乗ってるって言ったって数重ねられりゃあキツイ物も……あつ、やべっヒットした。

「センメツ！、q、」

うるせえ！ にほんへの癖によオオン!? SE変更してるけど、それはろーまへなんだよなあ……それは関係ないにせよ、この様に、どれだけ回避に補正が乗っていても、数で攻められりゃヒットもします。

『本造院君、ここに留まってるのは呂布を抑える為に残った君達だけだ。周りは敵ローマ兵だらけ、タマモキャットの邪魔をされないよう』

に、目を引き付けるだけに留めて、無理に倒す必要はないよ。どれだけ倒しても、キリがない!』

ダ・ヴェインちゃんをサポート、という名のF G O R P Gからのアドバイスが。回避に専念しろやポケカス、との事です。いやそこまで言つて無いと思うんですけど……?」

しかし、回避に専念しろと言われましても。寧ろ力を振るつた方が、キヤットの言う条件を満たせそうな気がしないでも無いですけど。犬の様に暴れまわるだけでは足りない事があるのででしょうか。だからキヤットだと言つてるサル!

「——苛立ちが、確実に頭の中を占有していた。誰かへの物ではない、自分への。煮えたぎる様な感情。今までで、一番あの時の感情に近い気がする。」

「——というかホモ君の感情が悪化してる気がする。ヤバイですつて、振り切る前に別の意味で変に振り切つて正気失つてひでと化すまである。害獣になつちゃうヤバイヤバイ……鎮めなきや（風の谷並感）」

「——自分に来るのは、キヤットへ礼装で援護する事くらい。寧ろ、マスターという楔を狙われる分、もしかすれば足手まといになつて居るかもしれない。ならばせめてその役割だけでも……そう、思つてキヤットの方を、向いた。」

「つ——」  
「■■■■ツ!」

「——一瞬の隙を突いた、呂布の一撃が、キヤットの肩口を捉えていた。瞬間——目の前が真っ赤に染まる。怒りだ。純粹な。未だ何も出来ない、自分への。バチバチと、頭がスパーク音を奏で、ブチ、と何か切れる音がした。」

「——好き勝手、させてたまるかよ……!」

「あ、選択肢選ぶと同時に礼装が勝手に起動を。つと、おや? 天神の呪も起動!? ちょっと待ってアレってパッシブスキルじゃないんですか!? ……今確認したんですけどデバフ効果だけは常時発動の様です。クソかな?」

「——張り上げる声。猛る感情。それと共に、タガが外れたかのように、

吹き出す力が、礼装から放たれた癒しの弾丸と共に、キャットへと流れていくのが分かった。

「――ふふ」

■■■■■■■■■■

「NICEであるご主人。それこそ奥義、初めちよろちよろならぬ、初めブツパ、脳筋チンパン横振り格闘！ 赤子以上に叫ぶのだワン！」  
∟口元に、鋭い牙が伸びていた。そして、天高く電が象かたどって伸びる角。今までと、体を流れる血潮から、変わったような感覚。その姿は正に、鬼と呼ぶに相応しかろう。

……とりあえず、一言だけ。おおよそ主人公のする面ではないと思います。これは。

と言った所で、今回は此処まで。ご視聴、ありがとうございます。



## 次なる目覚め その二

皆さんこんにちは、ノンケ（白百合の騎士）です。ギャグパートでは一番マトモなアルトリアである可能性が微粒子レベルで存在している……？

前回は、呂將軍との第二ラウンド。キヤットを助けられなくて悔しいか？ 力が欲しいか……？ 欲しければくれてやる！ 目覚めよ、その魂！ 宇宙天地 與我力量 降伏群魔 迎來曙光！ 鬼の手じゃなくて鬼の血なんだよなあ……あ、因みにコレはアニメ版の呪文ですね。こっちの方が個人的には好き。

さて、そんな事を言っている場合ではございません。どうやらホモ君の覚醒が第二段階に届いた訳ですが……回復礼装の方の効果は？ あ、血も止まっていますね。どうやら無事に効果は発揮されたようです。

「さあこっからがショータイムだ、無双OROCHIもビツクリなファイバータイムであるから、キヤットも思わず大喝采だワン！」  
「——ッ!？」

そして回復したキヤットが早速何と、呂將軍の一撃を弾き返しました。あからさまに出力が上がっているのである。芹沢博士、コレは一体……?! 私にも分からん（無責任）

『——これは……本造院君のバイタル値が凄まじい反応を!? それに、これはタマモキヤットにも！ この反応は、サーヴァントのカリスマスキルのそれに類似している様な』

キヤットのステータスを見てると……まあ見慣れたオレンジ矢印が付いてるんですよ。皆さん。ご存知だとは思いますが、鬼種の魔は、カリスマ的な全体強化能力を持ってるんですよ。まあ、酒呑童子、茨木童子、他鬼種の魔持ちの方も全員何かしらのカリスマみたいなものだし。一人ゲームのカリスマが居ますけど、まあ誤差みたいなものです。

『本造院君の謎能力……!? と、兎に角！ ここしかない！ 本造院君、ここだ、ここで畳みかけるしかないよ!』

「ダ・ヴィンチの一言に、貴方の思考は自分の体に起きた異常から、目の前の呂布へと酷く自然に、そしてしっかりと切り替わった。血潮は熱く坼うねっているというのに、頭は酷く冷静だった。」

「——ここで、決着をつける。」

「さあ、鬼みたいな形相、というか實際鬼になつてるホモ君のドアツプから、対呂將軍戦第二幕、というか後半戦の開始です。ミツシヨンの内容は……《キヤットの強化が終わる前に決着を付けろ》だそうです。要するにターン内に決着をつけるミツシヨンですね。そして、連合ローマ側の兵隊が此方に向かつてこなくなりまして。これでキヤットへの援護に集中できるというモノ。これで負けたら余りにもナオキです。」

「にやつはあー！」

「ツ■■■■■■■■■■！」

「さて、キヤットに対して私ができるのは礼装の援護、そして新たに出来るようになった動きの指示位なものです……ここでするのは礼装での援護ではなく、敢えて動きの指示です。直ぐに礼装に頼るとか、嗤わらつちやうんですよね。漢なら自分の手で活路を開かんかい！（なお戦っているのはキヤットの模様）」

「で、指示するのは……キヤット！ インファイトだ！（ポケモン風）  
「良からう！ お主をハグしてやる故、甘んじて受け入れるが良い天下無双！」

「——■■■■■■ツ!？」

「フハハハハッ！ 今のキヤットはバフ付き、ならばそれを最大限生かし、更に呂將軍最大の武器、方天画戟を封じる為の超インファイトよ！ 長物は、最早その距離では役に立つまいて！」

「狂戦士な二人！ 超キヤットは眠れない！」

「■■■■■■……■■■■■■■■■■——！」

「とはいえ、呂將軍は拳も使えるスーパーマン。即座に拳武装に換装して応戦可能。はいはい、それは良く存じてはいるが……？」

「まずこれが伝家の右、これが幻の右、これが伝説の右、そしてこれが！ オヤジより受け継いだ右！ なの です ワ ン!!」

「■■ツ……」

しかしその距離で戦えるというだけで、素手による接近戦により長じているのは、正に野生のパワーを誇るケモノキヤットである！ 今日には空手の稽古があるの、付き合ってちようだい（強気コマンドー）

「にやあ、ツハアアアアアアアア！」

「っ!？」

は、入った！ 遂にキヤットの爪が！ とか思ったらもう総崩れですわ、凄いキレてる動きのキヤットが、呂布の拳をすり抜けて！ 切り裂く！ 切り裂く！ 明らかに先ほどより動きが良い！

「ううん、やはり長さは重要なけれど、連射性も重要な事である！」

「■■ツ！ ■■■ツ！ ツ!？」

そうそう長さと連射性がつて、オイちよつと待て。それってなんか別の物を表してないかキヤット。コレは神が与えし大罪ですよ……逃れられぬカルマ……寧ろ自分から迎えに行ってる節までである。

まあそれは兎も角、キヤットがピョンピョンと呂布の周りを駆け巡りながら、一瞬の隙を突いてザクツと！ いやあ、流石野生。動きが鋭い。

「騙して悪いが、ご主人との初の共同作業故な、叩いて伸ばして具を散らして窯で焼いてお待ちどう！ 美味しい真つ赤なトマトソースもタップリ吐き出せ！」

「——ツ！」

——得意な間合いと、強化された動き。その二つをもって、キヤットが今、確実に飛將軍を圧倒して追い詰めている。恐らく、畳みかけるならばこころしかない。額の雷電を震わせて貴方は叫ぶ。

〽キヤットオ！ 吹っ飛ばせ！

お姉さま！ アレを使うわ！ 良くつてよ！（自己承諾）

「良くつてよ！」

〽呂布の拳を獣ハンドで弾き返し、返事をしたキヤットが懐に潜り込む。そしてキヤットの進む直線状に、貴方は滑り込んだ。そのままドゴンという音と共に、体当たりされた呂布が貴方に向かって飛ばされて来た。

へえっ!? すいまっへえくん!? 木下なんですけど(人違い)、それって、実質私が普通に死ぬんじゃないですか? 良いんだよお前、空手を教わるんだよ!(意味不明) へえっ!?(二重の極み) バットで空手を!?

トンファークックみたいな(小並感)

少し山なりに飛んで来た呂布の下に潜り込み、貴方はバットをしつかりと構えた。心構えは、キャットをバットで弾き飛ばしたあの時。しかし、今回狙うのは真横ではなく、そのまま真上。ダメージは無くても、吹き飛ばす事は難しくない!

おや? この流れは……? ホームラン一発、自摸、一盃口、ドラ四。呂布將軍、申し訳ありませんが、ケツの毛まで糞らせてもらいます!

「ナイストス! 必殺のアタックへ向けてジャンプだニャン!」

キャットの跳躍に合わせ、礼装を起動。最後に残ったのは、図つたかのような瞬間強化。それをキャットに! 跳躍するキャットの筋肉が、ビキビキと脈動して、膨れ上がる! 一撃を以て、確実に呂布を沈める為に!

「——さあ、今こそ叩き込もう! キャット渾身のうどん打ち! 叩かれて叩かれて、グルコサミンを暴走させて、コンペイトウを焼くのでアル!」

さあ、瞬間強化まで切ったんですよ、ここでやらなきやキャットじゃない! 多くの英霊が無駄死にで無かった事の証の為に……! 再びカルデアの理想を掲げる為に……! 星の屑(人理修復)、成就の為に……! ソロモンよ! 私(の強気エンジョイプレイ)は帰って来た!!

「落ちろ! 燦々日光午睡宮酒池肉林!」

キャットが空中から、恐ろしい程のラッシュを叩き込む。解き放たれた野生が、呂布の体に無数の傷跡を刻み込む! 最早ラッシュというより、唯の大暴れ。しかし、それでも全力全開の極み暴れ!

「グウウツツドニヤアアアアアアイトオ!!!」

オーオー空中で暴れておる暴れておる……楽しそう(小並感)と

というか、このラツシユでスツゴイ小刻みに震えてるよ呂將軍。大丈夫かな？ いや、寧ろここで乙つてもらわないと困るんですけど……あつ、フィニツシユ入った。

＜パアン、と弾ける音と共に、凄いスピードで天から降ってくる紅い影。ビキリという重たい音の直後、爆発音。そして……上がる土埃の中心に。

「……」

＜黄金の光を上げながら、倒れ込む呂布が其処に居た。

……やりました？ やった？

つつし！ y p a a a a a a a a!! EXTRAのトラウマを突破したぞおおおおおおおお！ タマモ（人違い）で一発突破したぞおおおおおお！ 気分が良いので今日はコレで終わりじやい！  
ご視聴サンキュウウウウウウウウ！

## 幕間の物語：瓦解の時

「——ええい……サーヴァント一騎とアレだけの軍勢、全て費やしてこの程度だと!？」

「仕方あるまい。コレに関しては向こうの方が上手だったと割り切らねば、次につなげる事も出来ないだろうよ」

——呂布の敗北を、しっかりと彼らは見ていた。上空に配置した使魔の数は、相当数である。戦場の動きを把握し、確実な指示を下すつもりだったのだが……その所為でまあ各地の敗戦を嫌というほど目にする事になった。

「クソツ、本当に虫の如く抵抗しおって！ 見るのも悍ましい！」

「とはいえ、向こうもそれなりにリソースを割いて此方に対抗しているのだ。それに此方には征服王、イスカンドルが居るのだ。彼ならば残った戦力を預ければ、それなりの戦果を挙げられるからな」

「そのセリフ、呂布の時にも聞いたのだが？」

「少なくともマスター一人を釘付けにし、奥の手を引き出し、彼の底を見る事には成功した。後はそれを組み込んで作戦を練ればいい」

しかし、そんな中でもレフが冷静でいられるのは……傍らのキャスター、諸葛孔明が存在しているからだ。

彼の作り上げた三重の防壁、そしてここに至るまでの戦略、カルデアを発見する為、及びそのカルデアを攻撃する為、という事で配置したクレオパトラ。幾つも策を弄し、一定の成果を上げ続けている。そして、今回の戦いも、唯消耗を強いるだけでなく、戦いの中で敵の行動を観察する為に多くの使い魔に魔力リソースを割く事を提案している。

「——それに、彼らの戦略は凡そ分かった」

「ほう？」

「同時に、厄介なのは、間違いなくあの黒髪のマスターだろうとも分かる。彼と契約していると思われるサーヴァント三騎の戦術は実に完成している。そして……何か理由があつてだろうが髪の薄いマスターの方と契約しているサーヴァントが、一騎見当たらない」

「狙い目は其方、という事かね？」

「カルデアも、この特異点を一刻も早く解決したいと思っているだろう。ならば効率を重視する作戦を取る可能性が高い。二人いるマスターを分けて運用する可能性は十分」

そこまで言われ、レフも察しがついた。

「その時に、予備人員の本造院康友を？」

「ほう、彼はそう言う名前なのか……その通りだ。彼を、討ち取る」

理にかなった作戦だ。馬鹿正直に二人のマスターを相手する事も無い、各個撃破するのが一番だろう。

「彼らは一時の勝利に浮かれているが」

「最終的に勝利するのは此方、という事か」

「そう言う事だ。余り激昂するものではない。落ち着いて、勝利を待っていればいい。そもそも、彼らがここに来るまでに……」

「——そうだな。あの壁には、最低限運用できるだけの戦力を残してある」

そう。壁を守っているのはイスカンドルだ。かつてダレイオスを討ち取った時の様に。最悪人員が足りなくとも、聖杯の無尽蔵な魔力で運用する、あの宝具が此方にあるのだ。即座に一万人も戦力が補充できるのだから。

「我々に、先ず負けは存在しない、か。すまないな、少しばかり神経質になり過ぎた」

「仕方あるまい。向こうの抵抗が予想以上に激しいのだからな」

「——それに、イスカンドルだけではない。我々には」

そうして、レフが振り向いたのは、玉座。そして、続いて見つめたのは床に記された……巨大な術式。壁を起爆する為の。

「まだ我々には切り札が二つ。残っているのだからな」

「——おい、余り中心に立つな。万が一それが誤起動でもしたら此方の負けが確定するのだぞ」

「誤作動？ ふふふ、ありえない。これは私の一存でしか起動出来ないのだからね。如何に君が私を殺したい、と思ったとしても、絶対に起動は出来ないのだから」

そう言つて、レフがコツコツと、術式の中心に、無造作に立つ。そして孔明にちらりと視線を向けて見せた。どうだ、とでも言いたげに。そして改めて使い魔からの映像が映る壁を見つめる。

「そら？ 問題は無いだろう？」

「なら……そうか。セキュリティはしっかりとしているようだな」

「私を愚かな人類と一緒にしないで貰おう。こういった所で、ミスなど犯さない」

そう言つて、振り向いた、レフの目に映ったのは……鋭い剣の切っ先だった。

「――は？」

「ああ、ミスは犯していない。コレは、私が君の実力を上回った。それだけの事だよレフ・ライノール」

片目を切り裂かれて尚、何が起こったのかと呆然とするレフ。そして、その先に見えたのは……黒の髪ではなく、金色の長髪。そして、スーツではない……白雪の如き装束。その直後、ポタリとレフの血が、紋様の上に滴る。

「驚いたかな？」

「き……さま、は」

「頼りの軍師様は此処には居ないよ。今頃城壁で、彼と共に指示を待ってる。まあ、この爆発と一緒に吹き飛ぶんだから、そっちの方が都合が良いけどね」

血は、力を解き放つ鍵。此度の戦争を決着づける為の、最後の一撃。敵の対応よりもなによりも、レフが何とか暴発を抑えようと動くが、時すでに遅し。彼が孔明にしっかりと組み上げさせた術式は……容赦なく、起動の時を迎える。

「まっ……！」

そして、中継された映像から見える、容赦ない壁の爆発の兆し。敵の動向を探るために、最前線に集中させている使い魔だが、そのくらの映像は見える。そして……

大爆発。



堅牢を謳い、ローマ軍の勢いに乗った大攻勢など、まるで意にも介さなかった巨大な壁の一つ目が。二つ目が。一つ一つのレンガから、丁寧に、弾けて、容赦も無く使い物にならなくなっていく。

「……」  
「何時からすり替わっていた、なんてチープな質問は受け付けないよ。何時からだろうと君は、僕がこうして君の前に出て来た事に気が付かなかった。残る事実は、唯それだけなんだから」

「——遺言は、それだけか。サーヴァント風情が」

瞬間、何かの力で床が弾け飛ぶ。其処に居た白い騎士……デオンは既に一步、最低限下がって攻撃を凌いでいる。涼やかなその表情に比べ、レフの表情は、歪み切った、怒りを混ぜ込んだ笑顔にもなり切れぬ何かと化していた。

「随分と、舐めた真似をしてくれるものだ」

「潜り込まれるようなザルな監視体制を敷いていた君が悪いのではないかな？ レフ・ライノール」

「ほごくな。やれ、ランサー」

抉られた目を抑えようとせず、レフが指示を下したのは、暗がりの玉座に座っていた一人の男。ゆっくりと立ち上がり……明かりの前に、その姿を晒す。

「残念ながら、それに付き合っている暇はない。任を遂げたなら、即座に撤退するのが一番だからね。それでは……」

——その直後、デオンは一瞬で身を翻し、その場から逃げ出してしまふ。余りにも潔い逃げっぷりとその速度に、一瞬、怒りも何も忘れて呆然とするレフ。僅かな隙を見逃されず、撤退を許してしまった。

「——どうする？」

「……許さん。そのまま出撃し、敵を迎撃しろ。ランサー」

「巨神を、呼ぶのか？」

「呼ぶ。万が一にも奴らの勝利の可能性を……消す。セファールの欠片で、ローマ諸共カルデアを粉碎してくれる——それに、奴らのしぶとい悪運も、ここら辺で尽きたらしいからな」

本来、この術式を起動させれば、第三の壁まで起爆し、町諸共吹き

飛ぶ予定だったのだが……それは無かった。バグか、それとも。兎も角、無かったのだ。起爆は。コレを吉兆とレフは捉えていた。

「我が王の寵愛を失った種族などこの程度。第三の壁、貴様のカリスマ、そしてセファールの力があれば。まだ、まだ巻き返しは出来る」  
もはや駒もほぼ討ち取られた状況で、それでもレフには勝算があった。普段ならば運等と言う不確定要素に頼る事など無いのに。自らに訪れた、望外の幸運を充てに、未だ巻き返しは可能だと。

——それほどもでに、自分が錯乱している事にも気付かず。

——その望外の幸運が、全く幸運で無い事にも気付かず。

——既に、この特異点において、カルデアが相手にするべきが、自分でなくなっている事にも全く気付かず。

「後悔させてやるぞカルデア……小細工を弄し、私を苛立たせたことになあ！」

彼は、未だ自分が、プレイヤーであることを、疑わない。

## 連合ローマの崩壊 その一

皆さんこんにちは、ノンケ（初号機）です。エリちゃん、ドリル。どうした呂將軍、前は随分とズゴン、ドゴン、とされてましたけど。いくわよーっ！俺は何方かと言えばゴテックスの派手なアレより、初代ドラゴンボールの天津飯先生のバレーが凄いい好き。

〽——掴んだ。そんな感じがした。まだ、一端だけど。スパルタクスに言われた事。自分で決める事。目の前で消えていく中国最強のサーヴァントを目の当たりにしながら。貴方はその達成感に、グツと手を握る。

前は、どうやら鬼種の魔のパワーアップイベントだったようです。しかし、その割に時間制限があったのが不安なんですけど……あの時間制限に間に合わなかったら私、どうなっていたんですかね……？

「ヤツラガキタゾ、q、」

「——モウコレイジョウテキヲオサエラレナイ、q、」

「敵將呂布が討ち取られた！今こそ連合の勢いを押し返せ！」

〽——正に機を逃さず。ローマ帝国が一時呵成に攻め立てる。逆に、先程から呂布の敗北を起点に一気に、連合ローマは自軍全体が敗北ルート一直線である。

『いやあ、流石ネロ帝。戦場の空気が変わった、と分かるや否やだね』  
つと、そんな事気にしてる場合じゃありません（主人公に厳しい投稿主の鑑） ネロちゃんの大攻勢が刺さる刺さる。エライねエ……アレツシーとか言うクソ変態殺人鬼ホントキャラがすこ。ジョジョの敵キャラの中で一番印象に残ってるまでである。なおラバーズに関しては承太郎のオラオラ込みなのでNOカウント。

「完・全・勝・利！ さあ、ご主人、全力で褒めたおすが良い！」

〽そして全力で自分に構えと突っ込んで来るキャット。余りにもマイペースにすぎるが相当に頑張ってくれたのは間違いない。取り敢えず、頭を撫でつつ……ダ・ヴィンチに、立香の方はどうなっている、と問いかけた。

『藤丸君の方は、特にサーヴァントが出張って来た、とかもないから余裕だよ。イスカンドルが今のところ姿を見せてないからか、ダレイオス三世の動きも控えめ……と言っても凄まじい勢いで前進してるけどね』

前に進むんだよ狂乱怒涛（バーサーカー戦法） 立派な戦術だし、基本的に戦術なんてやったもん勝ちだし……

『さて、敵の攻勢自体も落ち着いて来た。後は、向こうの行動次第なんだけど……』

〈——その時だった。貴方の視線の先、連合首都への道を遮る巨大な壁が、一瞬だが輝いた気がして……その直後に、弾け飛んだ。大爆発。凄まじい轟音と共に、大地に巨大な、あまりにも巨大な紅蓮の華が咲いた。』

『っ!?!』

〈——っ!?!』

うっわあ……マジで一斉起爆じゃん。いや、どっから起爆、とかじゃなくて、マジで全体が綺麗に一斉に起爆してるんですよ。はえー花火みたい（知能指数低下） あ、あんだけ煽っておいて、まさかの決着がこれっていうこのあっけなき感、立派な風貌して恥ずかしくないの？ 可愛いね♥ 砕け散れ（豹変） けど決して嫌いじゃないわ！（盛者必衰感）

〈この戦場で戦っていた全ての者が、その崩壊を見つめていた。余りにも突然の事だった。しかし、その反応は二つに分かれていた。連合ローマの兵士達、呆然とした表情と……この機を待ち望んでいた、ローマ帝国の兵士が浮かべる、歓喜の顔。

「「「ウオオオオオオオオオオオオッ!」「」」」

〈そして、天に轟く、鬨の声。連合ローマと勝敗を決する戦の初めを、完全に勝利で飾ったという確信が。彼らにその声を上げさせたのだ。

こっちのローマ兵もろーまへに変えてやろうかな（半ギレ） 俺の鼓膜がダイダゲキなんですよ。そして怒りの勢いがダイバーンである。俺の心がほんばれ。何なら荒れ具合はエレキフィールド。

『——どうやら、向こうの作戦は上手く行ったようだね。これで、連合首都へ進撃する道は出来上がった。そして……』

〈貴方から見えているのは、第一、第二が吹き飛んだ先の……第三の壁に囲まれた都市の姿だった。連合首都へと続く道が、今確実に出来上がった。』

えっ？ 第三の壁残ってるの？ いや、それ成功とは言わないんじゃないですかね（困惑）

『予定通り、第三の壁は残ったままだね』

あ、コレ予定通りなんですね。こちらプレイヤーは、どういう作戦か知らされてませんので、全く困ったもんじゃ……チツ……と言っても、プレイヤーは状況に合わせてプレイすれば良いから大丈夫でしょ。ま、多少はね？

「——康友！」

「やっさん！」

〈そうして連合ローマを見つめていた貴方の元に、立香達が走り寄って来た。メドウーサと香子も一緒だ。そして、その中から抜け出し誰よりも真っ先に此方へ走り寄って来たのは……香子だった。』

「マスターっ！……無事ですか！」

泣かないで（切なる願い） 貴方に涙は似合わない（臭さオーバーフロー） でもなんで泣いているんでしょうか香子さんは……今回ホモ君はあんまり無茶をしていないような気がしないでも……

「如何に状況がそうだったとはいえ、もう一人、サーヴァントを連れても良かったではないですか……！ そもそも、私は後方援護の担当ですから、オルタ様のように連合首都の城攻めに参加できる訳でもありませんし！」

〈そこまで言われ、あ、と間拔けな声が漏れた。確かに、オルタは城を突破する要ではある。ダ・ヴィンチがここで投入できない、というのも分かる。マシユとレオニダスもその役割は十分熟せる。メドウーサもそうだが……

『……ごめん、言い忘れてた』

〈ダ・ヴィンチちゃん!〉

「貴様あ！ こっちは普通に死にそうだったんだけどお！」

言い忘れてたじや済まねえぞホント！ 良く考えてみれば確かにキャスターの式部さんが何処まで城への直接攻撃に参加できるか、と言う話なんで、思いつかなかったこっちにも非は……いや、あん時は選択肢実質キャットだけだったし（言い訳）

「い、いや。取り敢えず、その話をする前に……先ずはあの壁の先！ 連合首都へ進撃しないと！ 今が最大のチャンスだ！」

「香子の視線から逃れる様に、成程その通りと貴方は視線を向ける。既にローマ帝国の兵士たちが、連合ローマの兵を押し返しながら、ジリジリと動き始めている。」

「ネロ陛下は既に先陣切って動き出しています。今こそ合流するべき時かと！」

「いこうぜ、いよいよ大詰めって奴だ！」

『レオナルドの方には、僕からしっかりとっておくから』

『天才にもミスはあるから……』

『ミスじゃ許されない範囲なんだよ。分かる？ この罪の重さが！』

ロマニがブチ切れてて草も焼ける。まあ、ダ・ヴィンチちゃんもロマニに任せておくとして。しかし、デオン君ちゃんが見事仕事を成し遂げて、どういう作戦かは分かりませんが作戦も無事進行中の様ですし、さあプレイに集中集中。

「——でも、合流するにも此奴らは邪魔よね？」

「そう言っただけでオルタが指し示す先。敗戦の色は濃厚なれど、それでも武器を下ろす事は無い連合ローマの兵士達。」

「直接、あの皇帝陛下の所に突っ切る為にも、ここは真っ直ぐ行つてぶっ飛ばした方が効率も良いし、分かりやすいと思うんだけど？」

「オルタ殿、先程防戦を強いられていて、溜まっていたようですな！」

要するに好き勝手暴れて、ストレス発散をしたいという事か……成程な、何時突撃する？ 俺も同行する。本造院（スタープラチナ）

「……まあ、オルタのいう事も間違いじゃないし、行くか？」

「連戦にはなるが、しかし。構わない。それよりも今は……掴んだこの感覚を、試したい所だった。額に雷電を纏わせながら、貴方は前

へとバットを構えた。

さあ、ホモ君の覚醒イベント……いえ、強化イベントどまりですね  
クオレハ……覚醒イベントと呼んでほしければ単騎でサーヴァント  
ぶん殴れるようになってから、言っただうぞ（ド無茶）

兎も角、強化イベントも無事終わり、そして連合首都への道も開か  
れました。この特異点もあとわずか。締まってイコオオオオオウ！  
と言った所で、今回はここまで。ご視聴ありがとうございました。

## 連合ローマの崩壊 その二

皆さんこんにちは、ノンケ（お気づきになりましたか）です。横山孔明ホント好き。十傑集孔明はもっと好き。グラサン所長はもっとすこ。

前回は、いよいよ連合首都に本格的に攻め寄せる事に。そしてトンデモないプレイミスがここで発覚。もうちよつと頑張りましょうの評価から抜け出せぬ……ぐぬぬ。まあピンチだったからこそホモ君も強化された、という事で。

「……ま、こんなもんかしらね。サーヴァント相手でもないし」「いやこんなもんじゃないじゃん全力だったじゃんオルタ常に」「殆どオルタ殿一人で焼き払って居ましたね……」

〈ちら、と振り返ればこんがりと焼けた大地。若干溶けてる部分もある。何だったら紅い筈の炎が若干青い部分まであった。炎と言うのは赤より青。つまりはそう言う事なのではあるが……何時の間にそんな芸当が出来るようになったのか。〉

お陰でホモ君の経験値の稼ぎ所さんが焼失しました（激憤） もう、何かしようとするたびにオルタちゃんかぼ〜、ホモ君が活躍しようと思うと、河の中に、意思が、あるッ！（業火のボーちゃん）ですよ。お陰でホモ君見てくださいよ、心なしかしゅんとしちやってるじゃないですか！

『ま、まあ活躍する分には良いと思うし』

「敵兵を容赦の欠片も無く焼き払っていくのは良い、と言えるのでしょうか」

〈良くは無いと思う。というか、正直に言えばそれは活躍と言うには、余りにも勢いしか無さ過ぎた。容赦なく、躊躇なく、熱く、そしてあまりに出力を上げ過ぎた。それは正に侵攻だった〉

ガッツかな？（色的に）グリフィスでしょ。ジャンヌから藤丸君を寝取る形になるんですかねそうなる……アレ？ そんなウゝス異本ありそうですね。と言うかその理屈だと勢いでカルデアが壊滅しそうなんですそれがそれは。



「ええつと、オルタさんは本当にお見事、という事で……それで、ネロ陛下は……」

〽オルタについては置いておくとして、貴方達は周辺を見回してみろ。多くのローマ兵が戦っている最中、その先頭に立つ紅い影が視界に入ってきた。明らかに目立ちすぎているのである。

「——ん？ おお、お主達！ 待っておったぞ！ ヤスも、呂布の迎撃、実に見事！ この戦が終わった後の褒美は思うが儘である！」

じゃあ出張料理人の中野君をですね。それは褒美じゃなくてワンチャン罰まであるんですけど。しかし、ご褒美か……君が欲しい！ っていうのが一番なんですけど、なんとキャスターもセイバー枠も、綺麗にホモ君のサーヴァントにいらっしやるっていう……悔しいです！（激震）

「それとお主達に客人が一人。そして……漸く、帰った来たものか一人だ」

〽その傍らに立っている影が、二人。片方には見覚えは無いが……もう片方に、貴方は笑顔で手を振って、駆け寄った。

「——ただいま。マスター。デオン・ド・ボーモン。任を果たし、帰還したよ」

デオン君ちゃんお帰りなさい！ それと、あの壁の処理本当にお疲れ様ナス！ それこそ、デオン君ちゃんにご褒美を上げたいくらいですけど、デオン君ちゃんへのご褒美ってマリー王妃呼ぶくらいしか思いつかない……仕方ない、へそくりを解き放つしかないかここまできたら。なおF G O R P Gには課金石は実装されていない模様。

〽ありがとうございます！ お疲れ様、デオン！

〽本当にお疲れ様、俺のセイバー

そして選択肢だけど残念ながら、片方の選択肢は見えていないも同然なんですよね。いやあ非常に申し訳ないんですけども。

パリジェンヌを落とすくらい情熱的なの一つ、頼みます！ こんなんでパリジェンヌ落ちないと思うし、そもそもデオン君ちゃんはパリジェンヌではない、という反論はン拒否するウ……

「……ふふつ、急に顔に似合わない事を言うのは止めた方が良いと思

うよ」

「長らく離れていたのだ。久しぶりの再会祝いとばかり、小粋なジョークのつもりで一発かましたが、どうやら上手く行ったようで、笑いの一つも取れて、貴方としては万々歳と言った所である。」

「とはいえ、元氣そうなら何より」

「……君のマスターは、随分と迫力のある顔をしているな。それに……額のそれは、ふむ」

「おう、何人の顔をじつと見てるんでい（江戸っ子） まあホモ君はこの人と初対面ですし、仕方ないと言えばそうだとは思うんですけど。」

『——本造院君、ボーっとしてちゃいけない。目の前の彼、サーヴァントだよ。デオン君が連れて来たって事は、恐らくは』

「ロマーニのその言葉に、チラリと視線を向け、その男は頷いた。」

「お初にお目にかかる。諸葛孔明だ」

『やっぱりそうか……だけど、その体格。東洋人のそれじゃないんだけど?』

「事情があつてね。厳密には、私自身は諸葛孔明ではなく、代理人の様なものなのだが。まあそれはいいだろう。今は、我が主の命に従つて、君達を支援するつもりだ」

何度目かの解説になりますが、孔明先生は、疑似サーヴァントと呼ばれる存在です。分かりやすく言えば、憑依合体みたいなもんです。阿弥陀丸とかいう昔の日本人離れた体格を持つ鎧武者、極み吼えるレベルです。」

「早速で悪いが、話は通っている物として判断し、始めたいのだが」  
『えっ!?! もう!?! 話によると、相当の大規模術式だと思うんだけど!?!』

「何、少しずつコツコツと準備を進めていたからな、動かすだけならいつでも可能だ」

「そう言つて孔明が見つめた先には……第三の壁。しばし見つめ、振り返った孔明に対し、応えたのは、ネロだった。」

「——うむ。ダレイオス殿にも待機頂いている。周辺は、ブーディカ、スパルタクスが固めておる。此方としても、直ぐに始めて貰いたい」

「承知した」

——さあ、ここまでプレイヤーもサツパリの大規模作戦、見せて貰おうか、諸葛孔明の組み上げた、作戦とやらを。

「始めるとしよう。それと、注意点だ。この術式を展開している間、残念ながら私は何も出来ないので援護をお願いしたい」

「いや、そんな情けない事をしつかりと言わないで欲しいんだが……マスター」

◇デオンの視線に貴方も頷いた。周りを見渡せば、第三の壁を死守しようとは向かってくる連合ローマの兵。彼らに睨みを効かせ……ようとして既にキヤットが敵の群れに突っ込んでいた。止める暇も無かった。

「——ねえマスター。私が居ない間に随分な問題児が増えているけど」

◇彼女のお陰で色々、分かった事もあったから……

◇アレでも頼りになるサーヴァントなんだよ。

頭脳タイプキヤットと言う稀有なタイプだから。その辺りは見逃したげて……まあ一切の容赦も無く戦闘突入に入ったのは、ちよつと許せへんし（豹変）

「よし、ここまでスパイ任務だけだったからね。君のサーヴァントとして、ここは彼女にも負けない活躍をしようじゃないか！」

という事で孔明護衛ミッション、開始です。何やらむにやむにやと唱えている孔明先生に敵を近づけぬように逐一仕事をして参りましょう。その分孔明先生にはド派手に仕事をして頂かないとオナシヤス！ センセンシヤル！

くしかしながらカ……ットオ！く

ま、カットなんですけどね（容赦ゼロ）だって、雑兵を処理するだけの簡単なお仕事で、完全に見所さん無かつたんですもの……

「——まだ起動しないのか！」

「いや、良く守ってくれた。これで、敵将レフ・ライノールの敗北は確定したとも」

◇その名前に、貴方達は孔明の方を振り向いた。いるのか、と言わ

んばかりの視線に孔明は、その手の羽扇を振る事で、応えた。

「君達の個人的な事情は知らないが……安心したまえ、私も軍師の端くれしつかりと仕事はさせてもらう。さあ、今日は特別も特別の、大盤振る舞いだ……！ 起動せよ、我が宝具、『石兵八陣』！」

▽——瞬間、輝くのは第三の壁。巨大。残っていたこの壁は、防衛の為ではなく……この都市全体を、巨大な檻とする為の、いわばブースター！ 八つの柱が赤く輝き、天より降る八卦の印が、連合首都に禍々しい輝きを満たす！

工工工工工エエ（。∩。）エエエ工工工、えっ、何だあのデツカイモノ♂……あつ、待つて八角形つてそう言う事!? う、うわあ。という事は、内部に居る人は……

「——全ては、我が思うまま。という事だ」

▽——と言った所で、今回は此処まで。

孔明先生、渾身の策が炸裂。発想のスケールがデカすぎる（誉め言

葉）これは勝ちましたね間違いない……

## 連合ローマの崩壊 その三

皆さんこんにちは、ノンケ（踵殺し）です。あのクソツたれアポロン、ゴツホちゃんにやった事への責任を支払わせてやる……（殺意）

前回は、あの八角形第三の壁……成程、そう言う事だったんですね。連合首都全体が彼らの敵に回った、という事で。普通の魔術工房とはマジで規模の違う、都市そのものをソレに変えるって、もうチートとかその域超えてると思います。

『す、凄い。こんな大規模な宝具展開……！ 都市そのものが巨大な宝具のブースト装置だった、なんて！』

「私自身……いや、こう言うのは些か不適合か。まあ、兎も角。移動する魔術工房としての性質を持つ我が宝具は、しかし、余りにも大規模に展開するには長けていない。そしてその弱点を補う為の第三の防壁だ」

＜内部に居る、レフ・ライノール。そして、内部のサーヴァントに対し、致命的な一手だったろう。そして、今から突入する自分達に対して、この効果は働かない。＞

ホント、デオン君ちゃんを派遣しておいて良かったと思います。一歩間違えば、自分達がこの大規模結界に巻き込まれていたって話ですからね。そんなんほぼ負け確定ですよんなん（無駄ギレ）

「となれば、敵将たるイスカンドルも」

「この内部に居るのであれば、間違いなく我が術中だよ」

「――ダレイオス殿！」

＜その声の直後、轟音が響く。いや、コレは叫び声だ。黒い巨人が、宿敵を見据え吠えたたてているのだ。というか、ここに至るまで大分静かにしていて、バーサーカーとは思えぬ程に大人しかったのが、イスカンドルの事になれば大爆発である。＞

「よし、我々本隊はダレイオス殿を旗印として、正面から連合首都に乗り込み、敵首魁を討ち取る！ ブーデイカとスパルタクスが周辺を固め、仮に逃げ出しても決してここから逃がさぬ！ 逃がしても、寧ろ追い立てる積りで戦え！」



された！　というか　はるかかなたに　けしとばされた！

「……さつきまではお遊びだったのかな」

「凄い勢いですね、先輩。さつきのオルタさんの様に、お一人で全てを蹴散らしてしまっています。目がまん丸になりそうです」

そしてその横で、ホモ君が、敵をシバキながら、こうして、巨人の、戦鬪を、実況しております。実は、討ち漏らして死にかけてるボロボロ連合ローマ兵を追い打ちで踏みつぶすだけで十分稼げるっていう。いやあ、楽な仕事やで……

「——全く、流石にアイツの……つと、もう門が見えて来たか」

「ふふん、守る者も無い門など、ダレイオス殿の戻って来た我々の前には何の障害にもなりはしない！　全軍、一気に突き破るぞ！　松明と破城槌を準備せよ！」

尚ダレイオス殿に言及していても門の突破に関しては全く関係ないですね……でも燃やして脆くなったところをぶち壊すのが一番効率がいいねんな。つと、ダレイオス殿が皆を押しつけて前に？

「——ツ！」

ええ!?!　ダレイオス殿が結局突き破っていくのか……というか、蹴り一発であのデカイ門が結構な勢いで軋んだんですけど、マジで呂布將軍レベルの化け物が過ぎる。

「……どうやら必要なかったようだな、皇帝陛下」

「ダレイオス殿におんぶにだつこと言うのは避けたかったのだがなあ……」

「あつ、今突破しましたね」

二、三回蹴り飛ばすだけで門が崩壊するとかヤクザキツク強いですね。それ程でもないがお礼は九杯で良い。何を九杯驕れば良いんでしょう。あれ？　ローマだから名産は葡萄酒、実質原作再現なのでは？　(困惑)

ダレイオス殿が門をボロボロにして突破し、連合ローマ内に突入したのですが。あれっ？　おかしいな、原作ではここに侵入した時点で連合ローマの市民がぶっこみかけて来てたんですけど。

「——誰も居ないな」

「この連合首都内は、我が魔術工房と同等。それに、石兵八陣としての本来の効果もある。市民を惑わせて、別の場所に避難させる程度は問題ない」

市民の避難誘導、ヨシ！ 賢い。市民の抵抗も無く、スムーズにレフをぶつ潰せると考えると……なんていうか……その……下品なんです……フフ……狂気……しちやいましてね……（殺意の波動）

「——いよいよだな」

「報告した通り、あの中には彼が居る」

『レフ・ライノール……想像以上に、早い再会になるね』

〈特異点F。思い返すは、あの人を嘲笑う顔と、オルガマリーの最期。手に握りしめたバットに、無意識に力を込めていた事に気が付いた。

「康友、調子はどうだ？」

〈〉——絶好調だよ。

〈〉最高だぜ、あのにやけ面を、粉々にできる位にはな。

その為の右手？ 後その為の拳……？ 暴力！ 暴力！ 暴力！  
今は悪魔が微笑む時代って事で選択肢は当然下。何を迷う事がある暴力！ そしてトドメの暴力！ もう何が有っても暴力しか勝たん。

「そうか。奇遇だな。俺も、アイツをぶん殴るって決めてるから、足が軽いんだよ。所長にやった事の敵討ちなんて、綺麗事いう積りも無いけど……ムカつくからな」

〈立香と視線を交わし……無言で拳を打ち鳴らす。コレに関して  
は、誰にも譲るつもりはない。自分達で、全力でぶん殴るのだ——  
そう考えている内に、既に、王宮の入り口が目の前に迫って来て……  
その時だった。

——ツガアアアアアアアアアアアアツ！——  
えっ!?

〈響き渡る悲鳴。貴方達は、この声をよく覚えていた。思わず顔を  
見合わせ……走る速度を上げた。前を走っていたダレイオスすら抜  
かし、目の前に見えた、一際大きな扉を、警棒とバットを叩きつけ、打



ち破る——その先。

『き……さまら……貴様らあ！ 何時から、いつから……』

＜それは巨大な肉の柱……であった物だった。その側面は、地面から生えた巨大な大樹にて無残にも削られ、血液にも似た何かを撒き散らしている。側面で暴れる目玉は狂ったようにぎよろぎよると動き回って、錯乱しているのが明らかだった。

「なんだ……アレ……」

『おのれ！ おのれ！ 悍ましかるや、人間が……こんな、こんなああアアアアアツ！』

あつ……れ、レフウウウウウウウウ！

＜最後の絶叫を残し、肉の柱は大樹に更に取り巻かれ、そして、押し潰された。あの声で判断するのであれば、先ず間違いなくアレこそが……そこまで考えた時、聞こえてきたのは、二つの足音だった。

「——これにて、舞台は整った」

「……な」

＜一つは、目の前に現れた、筋肉隆々の男の物。もう一つは……貴方達二人に遅れて入って来た、ネロの物だった。後者は、まるで困惑しているかのように、段々と弱々しく、そしてたたらを踏むかのように、不安定なリズムを刻んでいる。

「さあ、当代のローマよ。余が前に、其方の生き方を示すのだ」

＜まるで、傍らの大樹の様に、堂々と立つ、漢に……怯えているかのように。

——と言った所で、今回はここまで。

（ご視聴、ありがとうございました。）

## 連合ローマの崩壊 その四

皆さんこんにちは、ノンケ（レ／フ）です。

前回は……えっと、未だに状況が分かって居ないんですが、何が起きたんです？ あのレフがレ／フされる前にレフ・ハンバーグに加工されてたんですけど。というか、そもそもなんであの方が率先してレフを潰してるんですかね……？

「——な、何がどうなっている!? あのサーヴァントは、確かにあの魔術師が！」

「そんな……あ、貴方だけは。貴方だけは。敵に回ることは無い、と……」

＜二人の困惑の声が響く。それぞれの訳は、きつと違う。しかし、しかしながら、次に続く言葉は、余りにも見事に揃ったのである。

「何故だ!? 神祖ロムルス！」

「——それは、余が、ローマであるが故に、だ」

という事で、どうやらボス戦。神祖ロムルス戦、なんですけど。あの、レフ……レ／フはやらせてくれないんですか？ そんな機会はない（容赦無し） いやもう、前回悲惨なレベルでボコられた挙句、あのザマ、なので……

『神祖ロムルス!? そんな、ローマの建国王、ちよつとした神話の人物じゃないか!? ステンノといい、どうしてこうポンポン神霊、もしくはそれに類するトンデモサーヴァントが出てくるんだい!?』

＜そんなロマニの悲鳴など気にせず、ロムルスが此方へ一歩踏み出す。此方も構えを取ったが……しかし、そんな中でも、ロムルスを未だ見ない男が一人。その視線は……ロムルスのさらに奥へと続いていた。

『——ロマニ、君は間抜けか！ ロムルスだけじゃないよ、この場に居るのは！』

『えっ?』

『玉座の辺り、この霊基の反応は……!』

「ISCANDARUUUUUUUUUU!!!」

おお、ダレイオス殿が突っ込んでいった先。暗がりがちよつとずつ晴れて行ったそこから、出てきたのは……はい。まあダレイオスセンサーに引つかかってたんですからそりゃあ、ですよ。

「——全く、慣れぬやり方で召喚主を討ち取って、漸くここまで持ちこんだか」

〳戦斧が振り下ろされる。それを手にした剣で払い除けた男は……間違いない、幾度となく貴方達の前に現れた、征服王イスカンドル！尋常を遥かに超えた迫力を相手にしたとしても全く笑顔絶やさず、寧ろ楽しげにすら見えた。

「一度目は余計な壁一つで邪魔を受けたが……」

「■■■■ツ！」

「余計な口を出す者も、余が討ち取った！ お主には多くの味方と当代の皇帝！ 余にも、心強い軍師、同盟相手、そして……此度は、互いに同条件だ。さあ、心躍る征服に興じようぞ、我が宿敵よ！」

〳その衝突を合図とするかのように、続いて此方へむけて突撃したしたのは、ロムルスと呼ばれた大男。その狙いは一点……ネロだけだ。勢いは、先程のダレイオスの突撃の物にも匹敵しよう。

「くっ！ 何故だ、神祖殿！」

「先輩……いえ、マスター！ ネロ陛下が！」

「クソツたれ、孔明さん援護頼む！ ここってアンタの工房なんだから！」

「……ロムルスが、レフを裏切って……つまり」

流石に展開が早いな……（戦闘開始）マジで流れる様に戦闘が始まってて草も生えないのよ。もうちよつと話をさせろ、RPGだろ（半ギレ） と言うか隣のデオン君ちゃんはどうしてそんな険しい表情を……

「いや、残念だが、協力関係はここまで、という事になる。悪いと思つて貰わないぞ、カルデアの皆様」

「……何っ!？」

「——させるかっ！」

〳そして、その直後の出来事だった。隣に居たデオンが、突如とし

て背後に向かつて鋭く剣を突き出す。舌打ちの音、それに二呼吸程遅れ、振り向いた貴方が目にしたものは……此方に手を向けたまま、一歩下がった孔明の姿だった。

「……完全に信用して貰えた、とばかり思ってたのだが」

「信頼は出来ていない、と言った所だね。私としても、信頼はしたかったよ。とはいえあそこ迄の切れ者を心から信じる、というのは……出来なかった」

エルメロイさん!? えっ、待つて待つて展開が早いのだ。ちよつと、ちよつとで良いから状況を整理する為のお時間をです。お願いします。許して! 何でもしますから! ホントなんでもさせてください。

「奇襲に失敗したのだから、ここは大人しく引かせてもらおう」

「えっ、えっ、ええっ!?!」

「香子、落ち着きなさい。どうやら内通者は、それなりの食わせ物だったという事です」

「狼狽える香子、一瞬で意識を目の前の二人から、自分達に味方していた筈の孔明に切り替えるメドゥーサ。その目の前で自ら巻き起こした煙に紛れ……彼はイスカンダルの側に立っていた。」

「——良くぞ成し遂げた。我が軍師よ」

「全く、ここまで持ちこむのに相当に苦労したぞ」

「ふははっ! 済まぬ済まぬ。こうして……我が宿痾と戦う機が欲しかったのだ」

——えつと、何とか落ち着いてきました。状況を整理しましょう。えつと、先ずはレフがやられたようですが、それを先導したのは、どうやら会話から判断するにイスカンダルⅡサンの様です。実際妥当。(レフの性格が) 糞だあ……からね(変化形)

「それで? もう一つの方は終わったのか?」

「言った筈だ。ここは我が工房内、既に聖杯は我が手中にある」

「——なんだと!?!」

だから状況を整理させろっていつてんじゃねえか(激怒)

「既にレフが呼び出そうとしたサーヴァントを召喚する準備も出来て

いる。聖杯のリソースあつての事だがね」

「ぬははは、気に入らぬ支配者を打倒して略奪したモノなのだ！ 大いに使わせてもらおう！ さあ、此方の最後の援軍を呼ぼうではないか！」

「承知した」

〈そして、孔明が何事かを唱えた時、その傍らに、四人目のサーヴァントが現出する。黄金の輝きが形作るのは白いヴェールと、浅黒く、しなやかな肢体。異様な、三色の輝きを放つなにか……武器なのか、それとも。

「全く、アレも愚かなものだ。欠片とはいえ本体を呼び寄せて居れば、此方が自滅しかねないと分かっていたのか」

「——命を下せ、召喚者」

「ああ、済まない。特に何も言わない。君の好きなように判断して、戦ってくれ。そうした方が私の拙い指示よりはより上手く活躍してくれるだろう」

「流れる様に戦力増強しないで（半泣き） えつと、敵にはロムルスさん、イスカンドルと更に後衛担当に孔明。それで終わるかと思つたら、更にアタッカーが一人増えました（絶ギレ）」

『——やられたね。まさか、ここまで綺麗なサーヴァントの叛逆を見せられる事になるなんて。そして……』

『聖杯も強奪。しかも、相手はレフから彼の征服王イスカンドルへ……コレ、ちよつとどころじゃなく、マズいんじゃないかな？』

〈二人の言葉、マズい状況、故にこそ……貴方は、速攻で判断を下した。喧嘩なら、この状況で一番不味いのは、相手に先手を打たれる事だと。それは、何時も二人で組んで来た、立香もよく分かっている筈だ。

〈キャット、メドゥーサはあの白いサーヴァントを！

〈香子さんは俺の援護を頼む！

超スピード!? コレは早さが足りてるホモニキ。

「マシユ！ 俺のカバー頼む！ オルタはネロ陛下を！ レオニダスは——」

「——でしたら、ダレイオス殿の元へ！」

「分かった、頼む！」

「その判断が功を奏したのか、邪魔をされる事も無く全戦力をほぼ均等に振り分け、戦闘態勢を作り出す事に成功し……ダレイオスと切り結ぶイスカンドルは、その光景を見て尚豪快に笑った。

「良い判断をするではないか、カルデアのマスター共！ 余も昂って来たわ……坊主！ 聖杯から魔力を回せ！ 初めから全力全開で行くぞお！」

「良いだろう。僅かながら強化もくれてやる。全部持つていけ！」

待つて、待つてクレメンス(懇願) こっちが超スピードで速さが足りてるのに、それ以上にアクセル吹かすとか危険が危ない。

「——見よ我が宿痾、我が無双の軍勢を！ 肉体は滅び、その魂は英霊として『世界』に召し上げられて、それでもなお余に忠義する伝説の勇者たち！ 時空を超えて、我が召還に応じる永遠の朋友たち！」

「魔力が満ちる。時が満ちる。世界の法則が、塗り替えられていく。初めて感じる異質な力に目を剥く貴方、その正体に思い至ったのは……キヤスターである、香子だった。

「こ、これは……結界、いえ、ただのそれとは桁の違う……宝具級の！」  
「彼らとの絆こそ我が至宝！我が王道！ イスカンドルたる余が誇る最強宝具——『アイオニオン・ヘタイロイ王の軍勢』なり!!」

「いやあああああああ／＼(。o。)/オワタアアアアアアアアアアア

「塗り替えられ、何処までも続く砂漠に変えられた世界。そして、その彼方から、進軍して来るのは……軍勢！ それも、百や二百では済まぬ、間違いなく万に至る、征服王の大軍勢である！」

「これが、固有結界……！」

「さあ、始めようぞ。ダレイオス三世！ 三度あの時の戦いを！ 生前、前回、そして此度と！ 存分に！」

あ……ああ……こ、こんかいはここまです……やべえよ……やべえよ……

## メドゥーサ・キャットサイド：破壊の申し子

天に輝く日の光が、砂地を焼いている。

突如として現れた……否、孔明の手によって召喚された白いサーヴァント。マスターの命を受け、メドゥーサ、キャットの二人がその眼の前に立つ。三色に輝く、異質な剣がゆらりとその鎌首を擡げた。「タマモキャット」

「オロチのムスメ、舞踊を舞っている場合ではないのである。この相手は正に難易度インフェルノ、キャットの毛も逆立ちで百点満点である」

その剣の先に……二人の背筋が粟立っている。実力等は分からないが、しかし実力とは明らかに違う、異質な感覚が、二人を襲っていた。目の前の存在が、自分達とは、根本的に違う。それは二人が、神性に類するものだったからなのだろうか。

「――私は」

その視線が……二人を捕らえた。焰のような赤い瞳に、しかし熱は無い。あくまでも冷たく確実に、目の前の二人を粉碎するという、意思に満ちている。

「文明を破壊するモノ。文明を、終わらせるモノ。お前たちがどのように抗おうと関係ない。私は、その抵抗諸共、粉碎するだけだ」

「貴方は、何者です」

「答える必要は……ない」

軽い足音と共に、瞬間的に相手が距離を詰める。振り下ろされた剣を、二人が一步下がって避ける……が、その撤退する動きに、何と切っ先が追いついて来た。目を見開くメドゥーサが見たものは、鞭のようにしなる、光り輝く剣が此方へと首を搔つ切らんと動き出すその光景！

「っ!？」

「にゃんとおおおおおっ!？」

全力で剣の間を抜けながら地を走るメドゥーサ、ケモノ特有のしなやかな体で仰け反ってギリギリ凌ぐタマモキャット。剣が直撃する

ことは無かったが……その動きは正に異質。二人の緊張感の高ぶりが無ければ、間違いなく直撃していた。

メドゥーサとキヤットの視線が一瞬かち合う。明らかに実力の桁が違う。となれば……頷いた二人が、白いサーヴァントと向き合った。

「破壊する」

「――申し訳ありませんが、貴方の戦いに付き合っている積りもありませんので」

ここでメドゥーサが反撃へと移る。向けられるのは、必殺の魔眼。悉く英雄の命を奪い、如何な相手とて逃れられぬ、虹の視線が、白いサーヴァントへと向けられて。

「無駄だ」

――その、魔眼の力を、彼女は一撃にて切り捨てた。

「なっ」

「この剣に、破壊できない物はない。そして、お前の魔眼の力とて、例外ではないぞ。形無き島の女怪、メドゥーサ」

目を見開かざるを得なかった。形の無い力を、彼女は、手にした剣で切り裂いたのだ。一体、どういう原理なのか、さっぱり分からない。

思わず歯噛みする。魔眼の能力を無効化されただけではなく、そこから一瞬で自分の真名を見抜く。力だけではない。その判断力、冷静な知性、どれをとっても、明らかにこのサーヴァント、頭一つ抜け出している。

「であれば拙者の爪がオヌシをナマススラツシャーなのだな♪」

「――」

しかし、視線を向けたのは単に彼女の動きを鈍らせる為ではない。その間にキヤットの一撃を叩き込む算段だったのだが、結果として相手の隙を突いてキヤットが攻撃する形となった……のだが。

「甘っ」

「いっはっ!?!」

振り切ったその姿勢から、何と見もしていない後ろのキヤットに向けてケリが伸びる。無防備に腹を晒した、両の爪の振りかぶり攻撃



が、完全に仇となった。防ぐどころか、鈍い音をたてながら受け入れるしかなく、そのまま吹っ飛んで転がるしかなかった。

「——四方から敵が押し寄せるなど、日常茶飯事だった。その程度でやれると思われていたとは……心外だ」

「ぬうつ……なんと言う身持ちの固い女。コレは間違いなく良妻の香り。旦那の敵は一撃で切り捨てるタイプと見た」

「戯言を言っている場合ではありません」

その吹っ飛んだキャットへと踏み出す白いサーヴァント……それを阻止せんと、楔から伸びた鎖が、ぐるりとその腕を捉えた。手ごたえありと、メドゥーサが彼女を引き摺ろうとしたが、それより早く捉えた相手はくるり、と構えた剣を、手首のスナップを利かせ振った。

「つあ~~~~つー！」

それだけで、再び伸び、しなり、凡そ剣とは思えぬほど柔軟にメドゥーサの首を狙う光の剣。流石に距離がある故、鎖を外して逃げる事も出来たが……僅か、彼女の髪の手が剣に掠った。

「しぶとい。今で落としたと思つたが。流石に古き神性だけはあるか」

「やって、くれますね……」

たかが髪、とは言えない。彼女の逸話を考えれば。しかし激昂して襲い掛かる、という選択肢はあり得ない。目の前の存在相手に、そんな愚かな事をすれば、今度こそ首を斬られるだろう事は明確だったからだ。

「うぬぬ、タマネギの如く強敵……！」

「タマネギ……？ いえ、それは兎も角。あの剣、それに使いこなす本人の技量。厄介としか言いようがありませんか」

連携に慣れている、とは言いがたいコンピではあるが、それでも二対一。不利の筈なのに全く怯まない。サーヴァントという枠に収まっているかどうかすら、怪しいほどに。だがそんな相手に対策を練る暇も無く、一か所に集まったと見るや、速攻でその剣を伸ばし、纏めて薙ぎ払いにかかる。

「ちいっー！」

「何の必殺のキャットバウアー!」

横一線、跳躍したメドゥーサのほんの下を通り過ぎながら、キャットトのメイド服の先を消し飛ばした、仰け反りが少しでも足りなければ体を二つにされていただろう。

「とはいえ、避けられないという訳でも、っ!?!」

だがその一閃ですら、白いサーヴァントにとつては準備に過ぎなかった。砂地に食い込んだ切っ先を杭の様に使い、何と剣を縮ませる勢いで宙を舞う! さながら、現代のワイヤーアクションの様な動きで空中のメドゥーサに肉薄して見せた。

「そんなっ……」

「私が破壊できぬモノは、ない。常識すら、疑う事だ」

膝の一撃が、メドゥーサの胴に突き刺さる。くの字に折れる体。そのままの勢いで、彼方まで一気に吹き飛ばされていくメドゥーサ。

「ぬうっ! 雷電!」

「貴様もだ」

メドゥーサの方に振り向いたキャットの後頭部に、空中で器用に胴を回してはなつた、踵からの蹴りが襲い掛かる。弾かれるように吹っ飛んでいったが……しかし、その直前に何とか肉球での衝撃吸収が間に合い、致命的なダメージにはなつて居ない。何とか体制を立て直し、メドゥーサの傍らに。

「これは油断大敵火事ボーボー……消火は出来たか?」

「この程度でやられる程、軟ではありませんよ」

そう言つて立ち上がるメドゥーサも、まだまだ戦闘続行可能、と言わんばかりにゴキリと肩を鳴らした……しかし、その表情は険しい。

「とはいえ、何度も何度も喰らつては、たまつた物ではありませんが」

「生足魅惑の一撃でキャットもクラクラするというモノ。ご主人が貰つたら、クラクラでは間違いなく済まぬが」

「血反吐吐き散らしてミンチが関の山でしょう」

さり、さりと砂地を進むその姿。走る事すらなく、ゆっくりと距離を詰めてくる姿。しかし逃げようとは思えない。寧ろ、彼女は此方の動きに合わせて、行動するつもりで、あえてそうしているだろう事は、余

りにも分かりやすかった。

「……もう一度、魔眼を狙ってみましょうか」

「まあ待て独歩チャン。そう焦らずとも好いではないか」

「誰ですかドツポ」

そう言つて、一歩キヤットが前に出る。

「十二、策はある。キヤットは野生故な、狩りには鉄則というモノがあるのだ」

「……貴方が策と言つても、全く期待できないのですが」

「そう言うな！ 事はシンプルイズベスト、キヤットでも分かる三クッキングであるからナ！ 失敗したら天然系ドジっ子称号を贈呈しよう」

「要りませんよ。というか、なんかその称号は非常に不愉快なのでやめてください」

しかし、そこまで言うのであれば……賭けてみるしかない。どっちみち、あのサーヴァントを相手に、無策で挑むのは無謀なのだ、今の今までで、しっかりとメドゥーサは味わたったのだから。

ネロ・ジャンヌオルタサイド：我こそがローマである

——ネロは、当代のローマ皇帝である。

幼い頃から、ローマの絶えぬ栄光を見つめ、ローマの輝かしい歴史を知り、ローマの進む未来は光ある物だと信じて疑わなかった。ローマを、愛していた。

故にこそ、連合ローマなる、人々の笑顔を奪う、偽物のローマを許すわけにはいかなかったのだ。皇帝として、導く者として、抵抗を続けて来た。心強い味方も、多く彼女の下に集って来ていた。自分の正当性を、疑わなかったのだ……

そう、今の今までは。

「——ちよつと！ もうちよつとマトモに抵抗しなさいよアンター！」

そうだ。オルタの言う通り、抵抗しなくてはいけない。いけない筈なのに。出来ないのだ。抵抗しようと、心が奮い立たない。まるで牙を抜かれたかのように。

「つち！ 実質タイマンでワケ！ 上等じゃない！」

「ヌウウンー！」

「ええい暑苦しい、そんなにアツいのがお望みなら、特別、念入りに焼いてやるから覚悟しなさい筋肉達磨二号！」

放たれた焔が、真正面から神祖を捉え……しかし、全く怯まない。寧ろ、更に前進して来る。ネロが瞠目する。オルタも瞠目している。片や畏怖、片や驚愕、理由は違えど、やってのけた事は尋常ではないのだ。

「凄まじい熱だ。肌身に沁みる、良き熱でもある」

「温泉か何かだとも思ってたの!? 舐めてくれんじやない……!」

本来、警戒するべきだろう、どれだけの力なのかと、絶望すらしてなければならぬような場面なのだ。だが……ネロの心に、次に到来したのは、果てしない、尊敬の念ばかりだった。彼こそがローマだと、思ってしまった。

自らが守ろうと思つたローマ。？ 榮せよと願つたローマ。自らが皇帝として在って、滅びなど考えられぬ程、偉大なローマ帝国を、築

き上げた男。

筋肉隆々の、黄金の様な肉体を持ち、王者として格の違う、圧倒的な覇気を齎す、偉大なる建国王。

「(勝てぬ)」

そう思ってしまったのだ。

力ではない。そんなちっぽけな次元ではない。皇帝としての在り方ではない。そんなせせこましい事で彼を計ろうとすること自体がおこがましい。

存在そのもので、彼と張り合う事は出来ない。

「——しかし、娘よ。此度、余と相對するのは、其方ではない」

「何ッ！　ぐっ、ああっ！」

そんな彼が……今、自分に視線を向けている。立ちほだかる障害など、その手の槍で軽く払い除けて。ネロには、それを嬉しく感じてしまっているのだ。

「ローマよ。当代の皇帝よ。立て、自らの足で。抗うも、従うも、決めぬまま。蹲るばかりでは、生き方を示す事も出来ぬぞ」

「……っ」

恐ろしい事だと、ネロにも分かる。それを警戒できないのが。光栄だと思ってしまうのが。自らの芯に刻まれた、ローマとしての心が、彼女に戦わずしての屈服を選ばせようとしている。信じられなかった。

「さあ、来るがいい。余は、汝の挑戦を心待ちにしている」

——偉大だ。

自分への叛逆であろうと、彼はその雄大な心で、受け入れるのだろう。ああ、そうか。連合ローマに集っていた皇帝たちが纏まっていた理由が、肌身に沁みて、やっとわかった。あのカエサルが、一尖兵となつて居た理由が、ネロには分かった。

「無視してんじや、ないわよっ！」

「ぬうっ！」

「自分達だけで話完結させて、うざったいのよアンタ……！　大体ローマローマって、意味の分かる言葉喋りなさいっての！」

——そんなネロとロムルスの間にも、あくまでもオルタは割り込んでくる。凄まじい剣幕だ。ネロの目の前で、神祖が退いている。

「私を舐め腐った奴は、骨の髄まで焼き尽くして、そのゴーマンを後悔させてやるって決めてんのよ！ 大人しくTボーンステーキにでもなつてなさい！」

「――」

ふと、ネロは目の前の彼女が羨ましくなった。

彼女は、ローマの民ではない。だからロムルスに相對しても、全く尻込みせず立ち向かえる。何も気にせず、戦えるのだ。そんな後姿が……あまりにも……

「余には……」

出来ない。自分は、神祖には立ち向かえない。

自分は、彼に連なる……ローマの民なのだから。

「神祖だか何だか知らないけど、気に入らないのよ、アンタみたいなやつが一番！」

「ぐうっ」

「偉そうに、上から目線でモノ言つて！ 何処の神も、王も！ クソくらえだつての！ 私に偉そうに説教垂れて見なさい！ 骨すら残さず塵にしてやるから覚悟しろ！」

——その言葉に、思わず目を丸くした。

「敬意なんて、私が欠片でも持つてると思った？ お生憎様ね！ 私はアンタを唯の敵として見てるわよ。それも、特別気に入らない、顔をぶん殴つてやりたいタイプの敵だつてね！」

「おお……この熱は、何ともローマ……！」

「カテゴリー化するんじゃない！」

そして、その背から溢れる熱に、目を細めた。凄まじい。自己を自己として主張するそのパワフルさ。思い知る。彼女は、きっとローマの民であつたとしても、こうしてロムルスに真つ向から殴りかかつていくだろう。その姿が、見える。

「――何故だ」

どうしてだろう。彼女は……そこまで抗える。どうして立ち上が

れる。自分と、何が違うのだろうか、と。

「私は誰にも迎合しない、私だつての！ 誰にも屈さない、膝をつかない！ 竜の魔女としてサーヴァントやってるんだ！ 舐めんじやないって、言ってるの！」

「——それが、お主のローマか」

「誰がローマだつ！ 私は、ジャンヌ・ダルク・オルタナティブ！ 世を呪う竜の魔女だつて言ってるんでしようが！」

「自ら、己こそは誰にも決して負けぬと牙を剥く。誇り高きローマ。良きローマだ」

——そこで気が付く。

「（ああそうか。だから立ち上がれるのか）」

オルタを支えているのは、恐るべき程確立されたアイデンティティだ。だから誰が相手だろうと、自分がどういう存在なのかを決して彼女は見失わないし、迷わないのだろう。

「——余は、どうだ）」

自分には何があるのか。アイデンティティは、一体何処にあるのだろうか。自分以上のローマを相手に、何を誇れるのか。分からない。だから立ち上がれないし、真っ向からぶつかるともなれない。

膝について、思わず歯噛みする。当代の皇帝がコレだ。連合ローマが成立するのも、道理だつたのではないか……そう、そう思ったかっ

た。

「……違う」

思えない。思つてはいけない。自分は皇帝なのだ。当代の、ローマの皇帝なのだ。自分が今のローマを肯定せずに、誰が出来るのか。

ローマが斜陽の危機にある今だからこそ。神祖という、偉大なる存在が敵になったからこそ、自分だけは誰よりも、ローマでなくてはならない。そうだ。アイデンティティはここに有る。自分はローマであるが故に。灯る、熱き浪漫が胸の内にある。

「余は、皇帝だ。余の愛しいローマを守る、皇帝なのだ」

だからこそ……力を以て、戦うのではなく。

立ち向かう事で、示すしかない。自分のローマは、何物にも負けぬ

輝きを持って今を堂々と生きていると！ 何者にも、今を渡すつもりはないと！

「ここで、しおらしく崩れている……場合ではない！」

奥歯を噛みしめて立ち上がる。

「——そこを代われっ！ 竜の娘！」

「ああっ!？」

目の前の少女に、これ以上任せきりにするのは、最低の恥だ。自分が戦わずして、自分がやらずしてどうするのだ。彼らは援軍。この戦いの主役は、自分達ローマなのだから、と。ネロはその視線を、真つすぐに……

「任せきりで済まなかった……援護を頼む！ この男との決着は、余が付ける！」

「……はっ、今更しやしやり出てきて、調子いいんじゃない!? ソイツは私の獲物、悪いけど譲るつもりはないわ。やりたいなら、私より先にぶっ潰す事ね！」

「なにおう!?! ならば早い者勝ちでどうか！」

「上等！」

「——良い。良い。その熱<sup>ローマ</sup>燃えて見せよ、我が愛しきローマよ」  
神祖の、紅い視線とぶつけた。



## レオニダス・ダレイオスサイド：激突の砂原

——イスカンドルの後ろに並ぶ無数の兵に、ダレイオスは怯む様子を見せない。寧ろ喉から唸り声を上げて、威嚇しているようにも見える。ここでの戦いが、他の戦いの趨勢をも決めるのは間違いない以上、心強い事この上ない。

そして、そこに近寄る影……ダレイオスが振り向けば、片手に盾を、片手に槍を構えた偉丈夫の姿。

「——覚えてはおられますまい。ダレイオス殿。貴方と私が一騎打ちをした事」

美術館での死闘を、その男……レオニダスは思い出していた。無数の軀相手に自らと軍勢一人で戦って見せた、正に死闘だった。しかしながら……実に充実した戦いであった。かの男を相手取った自分だからこそ、この戦いに与する義理がある。

「あの時に交わした刃の縁により、助太刀いたす！」

「■■■■■■……」

宿敵との一騎打ち、怒鳴られるくらいは覚悟していたが……しかし、ダレイオスは何も言わず、すっと横へズレた。まるで隣に立て、とても言っているかのように。一瞬、レオニダスは目を見開いて、しかし何も言わずに隣に並んだ。

「ほほおおおお！ テルモピュライ、炎門の守護者のレオニダス！」

かのアケメネス朝の大王、ダレイオス三世と組んでの戦いとは、なんとも心躍るではないかあ！」

「■■■■■■——っ！」

「申し訳ありませんが、史実の再現とはいかせません！」

——そうして並び立った両雄は、征服王の軍勢に相對すためにと、同時に自らの宝具を解き放つ。

片や、攻め潰す死者の群れ。征服王の軍勢にも全く劣らぬ迫力。どこまでも続く鉾と盾と死の流れが、日輪輝く熱砂の砂漠に、暗い影と凍える風を齎す。率いるは、巨象に乗り込んだ大巨人！

片や守り弾き返す守護者たち。死の流れを主導するように先頭に



あまりにも、あまりにも分厚い壁は……ダレイオスへ続く道と言う、格好のチャンスの前に立ち塞がっているのである。

「——来いという事か」

誘っている。どんな鈍感ですら、コレは分かるだろう。ここを突破して、真つすぐに突っ込んで、自分の首を取りに来い、という。要するに、時間はかけない、一瞬で決着をつける腹積もりなのだろう。

「アレ、露骨過ぎませんか。王よ」

「だが清々しい！ 策謀を巡らすのも嫌いでは無いが、やはり真つ向からの勝負こそ一番燃える！ それに……あのペルシアの全盛期を、たった三百人で凌ぎ切ったあの炎門の守護者達に、余の征服が何処まで通じるか……試してみたくはないか！」

「試してみたいですよ！」

行こう、行こう、とそう言う事になった。躊躇いもせず、マケドニアの全軍が此方に向けて一点集中していく。しかし、この軍勢全体が突っ込めるわけも無く、余った部隊はズルズルとダレイオスの軍勢に向けて流れていく。

そして、テルモピュライの目の前に立ったイスカンドルは……思わずと言った様子で、ほう、と溜息を吐いていた

「ううむ、何という。余の軍勢の精鋭ぶりも中々のモノだと思ってるが……」

「凄まじく絞られた筋肉。綺麗に揃い、乱れぬ縦の壁。ピクリとも動かぬ槍の穂先。我らと比較しても、明らかにその練度ならば上を行かれていますな」

マケドニアの大軍勢をして、練度で負けるとまで言い切れてしまう程のスパルタ。しかもその気迫は、既に最高潮と言って良いだろう。

「——成程！ コレは我が軍勢の全てをぶつける以外あるまいて！」

全てを決着するのならば、出し惜しみはしない。自らの愛馬、ブケファラスを呼び出しその上に跨ると……剣を抜き放った。

「覚悟を決めよ！ 相手は彼の炎門の守護者！ レオニダスとその配下！ 突き抜ければ活路！ 突き破れねば死地！ 命を燃やし、伝説を突き破り……彼のペルシアの王の元へと至るぞ！」

「二二二オオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

雄叫びを上げる大軍勢。合わせていななきを上げる軍馬。彼らの咆哮に応える様に盾と矛を構える守護者達に向けて……イスカンドルは、堂々と剣を掲げ、そして全力を以て振り下ろした。

「いぎ、蹂躪せよおおおお！」

「来るぞおおおおおッ！　スパルタの魂、存分に示せッ！」

——その一言で、遂に火ぶたが切つて落とされる。蹄が砂原を抉り、征服王が先陣を切つて、レオニダスの元へ突っ込んでいく。勝負は単純、この一瞬でレオニダスの守りを破れるか、それともレオニダスの守りに軍勢が跳ね返されるか……双方の距離は、瞬く間に縮まっていた。

「ぬううおおおッ!!」

——破裂音と共に、衝突する。騎馬の衝突を、円盾が受け止めて……しかし、止まった訳ではない。ジリジリと、受け止めた側が少しずつ、後ろへと押し返されていく。

「進め！　進め！　押し開けろ！」

「進ませるなあアアアア！」

そして、征服王の突撃に続き、マケドニアの軍勢が次々と壁へと守護者達を押し込もうと体を叩きつける。しかし……それでも、さして後退する速度は落ちない。マケドニアの全力でも、まるで揺るがない。

「くっ……ならばせめて……っ！」

「王よ！　我が道を！」

——このままでは、全員突破できず、弾き返されて終わりやもしれない。そう悟った家臣たちが、今度はイスカンドルたちの元へと集い、其処に剣や鉞を差し込んで、一人だけでもこじ開けて通そうと、方針を変えた。

「——済まぬっ！　悪いが、余一人だけでも、通させてもらおう……！」

レオニダス！」

「ぐっ、流石に、かの征服王の軍勢……すべて止められる、と楽観視はしていませんでしたが……っ！」

そして開いた、ほんのわずかな隙間に、ブケファラスが割って入る。しかし、流石に無数の槍を受けていななきを上げ、動きを止められて……されど、何とか炎門に僅かな隙間を自らの体で、こじ開けて見せたのだ。

「感謝するぞ、ブケファラス……っ！」

その愛馬の体を蹴って……遂に、征服王は、自らの宿敵へと続く、たった一本の道へとたどり着いて見せた。

## メドゥーサ・キャットサイド：キャットの魔術

——三色の切っ先が、唸りを上げる。明らかに剣の間合いではない所から、しかし再び撓り、伸びた切っ先は、二人に向けて襲い掛かる。「合図があればアレを頼むぞ、ではなっ！ キャットはこれより、修羅に入る！」

「あ、ちよつと……全く、本当に自由ですねあの謎サーヴァントは。仕方ありません、援護くらいはしましょうか！」

そして、その切っ先に向けて……ではなく、白いサーヴァントの手元に向けて、鎖は伸びていく。真正面から相手にするだけ馬鹿らしいと判断したメドゥーサに対し、キャットはその鎖に並走し、真つすぐ突っ込んでいく。

「——味な真似を」

「にやははっ！ 戦場へきてキャットと握手！ ハグ！ 四肢粉碎！」

普通に鎖くらいを切り裂く事は出来るだろう。しかし、目の前には既にタマモキャットが迫っている。油断して居れば、彼女が一撃を叩き込む。しかし其方に気を取られていては手持ちの剣を弾き飛ばされかねない。

「仕方ない」

それ以外には道も無いと思われたのか、大きく、いつそ大袈裟なほどに距離を取って彼女が下がる。下がると同時、剣を縮めて接近戦に対応できるように剣を構えて……だがその一瞬、白いサーヴァントの目に入ったのは、紅い輝きだった。

「その脂身を落とす……」

「っ」

「——と言ったなそれも嘘だっ！ ううううにやああああっ！」

キャットの手の上で弾け、渦を巻く、膨大な量の焰の塊。宝具とまでは行かずとも、それなりに魔力の込められた大火球が、真つすぐにそのサーヴァントを狙う。

「無駄な事をつ」

だが、それを避けるどころか、白いサーヴァントはその場に仁王立ち。正眼に構えた光の剣が、縦一文字に軌跡を刻む。彼女に衝突するその直前、その一閃で生まれた風が目の前の火球と衝突し……なんと、そのまま炎の嵐となつてキヤットへと襲い掛かる。

「B A D っ!?!」<sup>キヤット</sup>

「温いぞ。せめて九尾揃えて出直すのだな」

流石にそれにぶつかると程キヤットとて愚鈍ではない、軽く跳躍して躲した……が、恐るべきは、白いサーヴァントである。たった剣の一振り、アレだけの魔力の塊をあつさり打ち返す。引き出しが多いのか、はたまた、スペックでのゴリ押しか。

「しかしキヤットは諦めない。何故ならバスケがしたいから!」

「来い」

——その状態を後方から見つめるメドゥーサは鎖を構えながら、機会を伺っていた。キヤットが相手の気を引くつもりなのは、先程の動きから分かっている。だが、それが達成出来ているとは言い難い。

「(それでも此方から離していませんか)」

キヤットの爪を避けつつ、華麗に反撃し……その動きを、剣で制する。そうしつつ決してメドゥーサから意識を逸らさない、しかも、メドゥーサの如何な攻撃でも捌けるように決して背を向ける事をしていない。

「余り浮気をするでない、我の元へカモンナウ! ご馳走するぞ鴨南蛮!」

「下手な挑発は無駄だ。どうせ、貴様から意識を逸らすつもりはないのだから、安心しておけ」

まだまだ底が知らない彼女の實力。それが全て引き出されるまで時間はかけたくないと考える……其処にすら至らないのだ。今のままでは、引き出す必要も無く、このままに磨り潰す事もあのサーヴァントには可能なかもしれない。

「上手い! 上手い! 上手い! かしながら遅いつ! キヤットのしなやかかつ水分90%ボディには止まって見える! 座・ワールドである!」

「良く動く……だが逃がさん」

「にゅあつ!? キヤットの毛並みを容赦なくそり込むとは、さてはトリミングの達人であるな? しかしワイルドスタイルこそ我の心の故郷故押し売りにはぶぶ漬けである!」

現に彼女の剣が、凌ぐことに徹しているキヤットに少はずつ掠り始めている。

圧倒的なバトルセンスは戦いの中で更に冴え渡り、既にキヤットの動きを掴んでしまっているのだろう。

「——まだですか」

既に、何時でも魔眼を解き放つ準備は出来ている。それが逆に、メドゥーサに焦りを生んでいた。準備万端なれど、迂闊に仕掛ければ無駄に終わる。しかし、このまま何もしないでいれば……

「早く——全力を、出す前に!」

——相手に宝具を、使われるかもしれない。

「もう既に、お前の動きは凡そ把握した。逃がさない。確実に仕留めさせてもらう」

「ほうほう、キヤットへの熱烈な視線でハートをキヤッチ、ワイルドなスタイルも把握済みであるか、スリーサイズはオフレコで頼むゾ?」  
「そうだな……既に心臓を穿つ程度なら」

「——お主の把握したスリーサイズ、だがそれも嘘だつ!」

メドゥーサの……その焦りが頂点に達した。その瞬間だった。キヤットが大きく後方へと跳ねる。超接近戦に挑んでいたその直後の事、流石に、白いサーヴァントも反応が大きく遅れた。

「これがキヤットの真のナイスバディ、キヤット呪術、呪詛・空裂大密天つ!」

「——なにっ!?!」

キヤットのモフモフの指が印を切る。其処から解き放たれるは、キヤスターもかくやと言わんばかりの魔の奔流、それが風にも似た動きで……白いサーヴァントに絡みついていった。

「ふはは、溢れるインテリジェンスがお前を襲う!」

「くつ、野生の類だと思って居たが……見誤ったか」



白いサーヴァントも、されるままではない。足掻こうとするが……しかし、その得物すら動かす事も出来なければ、メドゥーサにやつたように剣での粉碎もしようがない。そして、単純に、拘束の強さも相当なモノだ。

「今であるー!」

「……随分と、待たせてくれましたね」

——そして、言われずとも。キャットは下がった事で視界から外れている。メドゥーサは遠慮なく魔眼を解き放っていた。身動きもそう容易く取れない状況。最早これでは避ける事も、先程の様な離れ業も不可能。そして、邪魔の一つも無いのであれば……この魔眼は、絶対不可避、必中にも等しい!

形無き目の魔力が、白いサーヴァントを捕らえた。圧倒的な力量を持ったサーヴァントであれ、この魔眼の前では平等。余程の例外でなければ、無効化など敵わない!

「っああ……!」

「捉えましたよ!」

視線を向けたままに、投擲するは鋼の楔。引き戻した方をもう一度振るい、その鎖を首に絡みつかせ……思い切り締め上げた。

「ぐっ」

「悪いですが、余裕ありませんので……貴方は少々荒めに、殺して差し上げます」

しかしそれだけでは終わらない。それは、あくまで確と白いサーヴァントを捕らえる為の措置。其処からメドゥーサは、全力を振り絞って……彼女を、地上から引っぺがし宙へ向けて振り回した。

「!!」

「はあああああああっ!」

そこから、宙に浮いた彼女を、彗星の如く、床へと向けて振り下ろす。ゴズ、という鈍い音と共に、白いサーヴァントが思い切り砂地に叩き付けられる。常人であれば、これだけで脊髄が確実に損傷する程の勢いで、砂塵が、爆発したかのように撒き散らされて。

「——まだですっ!」

「……あ」

更に。もう一度持ち上げられ、更にドズンと墜落させる。更に、更に、更に！ 幾度となく上下を繰り返し、叩き付ける事——都度六回。「トドメッー」

もはや声も発さなくなった白いサーヴァントを思い切り振り回し、全力で回転させ始める。ハンマー投げの要領で超高速で回され、最早死体蹴りの領域を超えた追撃。そして思い切り回転させるメドゥーサの目に……

「——」

遠くで戦う、屈強な背中が見える。ネロと、オルタの戦っている敵。それに向けて、ほぼ無意識の内に、メドゥーサは捕まえた相手を投擲していた。己の楔諸共に。

「——蹴散らして差し上げます、立て直しをする暇は、与えない……！」

これが最大のチャンスと、彼女は、その手に手綱を握りしめていた。彼女の宝具、愛馬の全力を引き出す為の、切り札を！ 投げたサーヴァントがどうしているか、そんなのを確認する、一瞬の手間すら省いて。

「……っ!?!」

その瞬間、二つの影が天に掲げられる。いや……アレは最早晒し上げられている、と言った方が正しいか。黒く、禍々しい焰を纏った鎗が、天高く、二騎のサーヴァントを貫いて伸びている。

「成程、オルタの宝具ですか……好都合です。的がしっかりと、良く見えるというもの」

ならば次は自分の番だろう。白銀に輝く白馬に手綱を噛ませ、その背に跨って……瞬く間に天へと上る。ここは固有結界の中、室内ではない、全力で空を駆け、最大速度でぶつかるといえる事があるというもの。

「これで……仕留めます！ 『騎英の手綱』!!」

——流星の如く天より落ちる天馬。地より敵対者を焼きつくす焰。二つが二騎のサーヴァントを確実に捉え……最大限迄膨れ上がり、白と赤が、混ざり合う事も無く、暴れ、爆ぜていく。

そうして、後に残ったのは。

「……全く、手古摺らせてくれます」

ほんの僅かな、黄金の輝きの欠片だった。宝具の二重攻撃。余りの出力に、最早塵すら残っていない。しかし、それでも、メドゥーサに達成感など欠片もない。あるのは……余りにも重い、疲労感だけだった。

ネロ・ジャンヌオルタサイド：余こそがローマである

「尊び、敬っていたのだ！」

「雄オオオッ！」

「ローマの偉大なる神祖を！ 余は！ 間違はなく！ しかし！」

紅い隕鉄の輝きが、建国の槍と打ち合う。武器の格の差は、そのま  
ま両者の格の差であるはず……しかし、それでも。決して、紅い少女  
は、建国の祖に押し負けていない。寧ろ勢いだけなら、彼女の方が上  
かも知れない。

「今、この時！ 皇帝は！ 余、唯一人！ ローマは！ 余が治める  
ローマ、唯一つである！ 余は、そう吼えねばならぬ！ 皇帝ゆえに  
！ ならば余のローマを脅かし、偽りのローマを騙る不屈き者は、例  
え神祖であろうと！」

「熱い。良い！ それでこそ……！」

「我が手で、討ち果たすのみである！」

薙ぎ払う剣の一撃を受け、一步ロムルスが下がる。しかし、その一  
歩の隙を、もう一人は見逃さない。付け入る隙あらば、一瞬で彼女は  
食らいつく。卑怯卑劣、上等。それこそが彼女の戦い方だ。

「そつちの皇帝サマにしか興味ないって訳？」

「——これは、抜かったか」

「あんまり舐め腐っていると、内臓から燃やすわよ筋肉達磨！」

降りぬかれた旗が、ロムルスのテンブルを捉えた。ガツン、と景気  
のいい音、しかしそれに満足せず、まるでバトンの様に旗を振りまわ  
し、先端の刃で、徹底的にロムルスを切りつける。逃がさぬ、と言わ  
んばかりに。

「ほらほらほらほらっ！ 神祖風情が、私の前に立つんじゃないわよ  
！」

「お主！ 風情とは何だ風情とは！」

「いやアンタさっきまで思いつき切り付けてたじゃないの！ どの  
口でそのセリフ吐いてんのかしら?！」

サーヴァントとして、間違はなく格上の相手。しかし、二騎の動き

は、ここに来て恐ろしいほどに噛み合っていた。片や負けん気、もう片方も負けん気。二重の負けん気が、螺旋を描き、巨大な壁を穿とうと回る。

「良い」

しかし、それら全てを受け止めて尚、神祖ロムルスは健在。恐るべきは見た目にそぐわぬその、圧倒的なタフネス。雄々しい肉体は、決して飾りなどではない。

「良い。新しきローマの熱、真作に迫らんとする熱、余を、更に滾らせる。試す、唯それだけの積りが……ふふ、何時までも、続けたくなる。何と心地よき事か」

「呑気な事言ってるんじゃない。アレだけ叩きこまれたつのに」

「油断するな。相手はローマを築いた建国の祖、まだまだ底は見えていないぞ」

「油断!? 此奴相手に!?!」

牽制とばかり放たれた焰を、槍で引き裂きながら更にロムルスは此方へ進んで来る。それを見て、思わず、と言った様子でオルタは舌打ちを一つ。

「する訳ないでしょうが! こっちは今の所、致命傷一つ与えられないんだから!」

「ぐぬぬ、意気で負けてはおらぬとは言え、現実は厳しいか……避けろっ!」

そして、其処に振り下ろされる建国の槍。焰を煙幕代わりに離脱しようとするオルタだが、その焰も瞬く間に一文字に裂かれ、更に一步踏み込んでくる。

「浪オオオオオオオオ漫!」

「なっ」

「——だから、油断するなど言っただではないか!」

そこに割り込むネロの一太刀。オルタに集中している今こそ好機と取ったが、しかしその一撃を、何と避ける事すらしない。その筋肉隆々の肉体で、受け止めて見せた。僅かに食い込み、血も滴っているものの、大きな痛手にはなって居ない。特別な逸話がある訳ではな

い。単純に、その肉体が鋼の如く極められているからこそその離れ業。だがしかし、それはネロも承知の上。故に、その一撃の狙いは一瞬でも足止めして見せる事、その一瞬で続いて狙ったのは、足だ。

「やあああっ！」

「舐めるなっ！」

足に刻まれる一閃の傷。機動力を奪ったと見るや、オルタも続いて其処に、焰を思いきり叩き込む。特に切り裂かれた足の傷周りには、薬でも塗り込むかのように徹底的に。波の如く、更に焰が押し寄せ

る。

「ぬうっ！」

「はっ、流石に効いてんじやないの!? なら、もう一発！」

「畳みかけさせてもらうぞ！」

ヒールも真つ青のダーティプレイに、さしものロムルスも、再び僅かな隙を晒す——というより、ここまでしなくては隙を晒さない、それこそが脅威ではあるが——そこに、ネロの隕鉄の剣の袈裟切り、オルタの旗の突きが、その肉体を更に切り裂いた。

「……どうだっ!？」

「——むおおおおおっ！ ローマであるウ！」

「ええい、ダメかっ!？」

「此奴本当に人間!?! いくら、サーヴァントって言ったって……!！」

だがそれでも、仕留められない、動きも止まらない。オルタからは、全てを踏み潰す重戦車の様にロムルスが見えてきている。

「怯むなっ！ どれだけ怪物染みているとはいえ、形ある者だ！ 不死身などと言う御伽噺がある訳がない！」

「そんなの分かってるわよ！ けど倒せないなら不死身と同意でしょうが！」

「それを言うな！」

そんな二人に対し、しかしロムルスは再び突っ込んで来る事はしなかった。寧ろ、その手に構えた槍を、砂地に向けて突き刺してしまう……と、同時だった。

「——っ!？」

「見事である。熱く滾る其方達のローマ、見せて貰った。故に、余も出し惜しみをする訳にもいかぬ。見せよう、余の建国の槍、その全てを」

「マズいつ……宝具！ 止めるわよ高慢皇帝！」

解き放たれたのは、濃密な魔力。建国の槍が奇跡を起こさんと脈動する。サーヴァントについて、概要しか知らないネロとは違い、オルタは彼らの切り札足る宝具の恐ろしさを良く知っている。

「何だか知らぬが、分かった！ やるぞ！」

「(つつても……間に合うかっ!?)」

故に、オルタは宝具の多様性についても良く知っている。威力に特化している物。守りに重きの置かれた物。姿を欺く物、幻を見せ相手を騙す物、中には言葉に言い表すのが難しい奇妙な効果を持つものもあり……そして、速攻で撃てる様な、回転の早い宝具も存在している。常にその力を発動できるような宝具もある。

「(それだったら……この高慢皇帝と心中!? 冗談じゃない!)」

救いなのは、いかに発動が早い宝具とは言え、ほぼノータイムで発動という訳ではない事である。それまでに霊核に致命傷を叩き込めるかが問われるが。それが出来るかどうかとなれば……ロムルスのタフネスは今さっきまで見せつけられたばかり。

「(くそつ、あと一手、一手何かあれば……!)」

せめて、確実にロムルスの宝具発動をを止めるような、重たい一撃を叩き込む事が、出来れば……そう思った、その時だった。

——ドスンッ!

「又アツ!？」

ロムルスの背後から飛んで来た何者かが、ロムルスの体に強かに叩きつけられた。飛んで来た方向を見れば……ちらりと見える、紫の髪。しかしそこからすぐに視線をロムルスに戻す。

「チャンスよ！ 皇帝サマー！」

「承知した！ —— 余から行くぞ！ 後から続け！」

吠えるオルタに、応えてネロが動き出す。真っ直ぐに突っ込んで、肩に担ぐようにし渾身の力を込めて、衝撃で態勢を崩し、前につんの

めったロムルスに向けて……一閃！ 文字通り、真一文字に胸に大きな傷を作り出す。

「直撃だっ……」

「良くやりました！ —— 今度は、こつちの番よ！」

そして、その一撃が入って、声も無く仰け反ったロムルスに向けて更に、オルタが向けるのは……腰から引き抜いた自らの剣。

「そこに居る奴とまとめて、焼き尽くしてやるから覚悟なさい……！」  
差し向ける剣に合わせ、焔が渦を巻き、その炎に気付いたネロが一步下がったその直後にその焔が更に天へと巻き上がっていく。まるで、その中心に存在する二騎のサーヴァントを包囲し、逃がさぬとも言わんばかりに。

そして、その焔の中心からせりだして来るのは、黒い切っ先。

「これは憎悪によって磨かれた我が魂の咆哮おお！」

『ラ・グロンドメント・デユ・ヘイン  
吼え立てよ、我が憤怒』！

先ず、焔がロムルスと白いサーヴァントを十分に焼いて見せる。容赦の無い足止めから、畳みかけるのは無数の槍。足を、胴を、肩を。容赦なく刺し貫き、その体を天へと捧げ、その姿を竜の魔女は嘲笑う。

「このまま焼き尽くして……っ!?!」

その直後、オルタの視界に入ってきたのは、白い輝き。それが味方の宝具であることを悟ったオルタは……焔の出力をさらに跳ね上げた。

「上等じゃない。塵も残さず消し飛ばしてやるっての！」

——流星の如く天より落ちる天馬。地より敵対者を焼きつくす焔。二つが二騎のサーヴァントを確実に捉え……最大限迄膨れ上がり、白と赤が、混ざり合う事も無く、暴れ、爆ぜていく。

そうして、後に残ったのは。

「——終わった、か？」

「アレだけやって、まだ生きてたらもうサーヴァントでもないなんかよ。見なさい。もう跡しか残ってない」

天へと立ち上っていく、ほんの僅かな、黄金の輝きの欠片だけ。それを  
れを見て……少し、ネロは哀し気な表情を浮かべていた。



「神祖殿……余は、決して。皇帝として恥じぬ振る舞いを、これからも  
続けて行く。見て居て下され。ローマの栄光を。終わらぬ、栄光を」

## レオニダス・ダレイオスサイド：決着の咆哮

「——■■■■■■■■■■」  
彼が——ダレイオスが、イスカンダルを目の前にしてとつた行動……それは、予想以上にシンプルな物だった。激昂し、真つすぐに襲い掛かる？ 否。大声を出して相手を威嚇する？ 否。

彼は、静かに座した椅子から立ち上がって、イスカンダルに向けてその手に持った斧を、ゆつくりと掲げて……打ち合わせた。闘志の高ぶりを見せつけるかのように。

「ふ、其方を相手に余は丸腰か……等と思って居るのではないか？」

そんなダレイオスに向けて、その剣を構え……直後、その傍らに青い燐光が収束していく。そして……そこに顕れるのは、先程足止めされたはずのイスカンダルの愛馬、ブケファアラスだ。

「サーヴァントというものは、まあ便利なものよ！」

「■■■■■■■■■■——ッ！」

敢えて——という事なのだろうか。ブケファアラスを槍で繋ぎ止めさせたのは、寧ろこうしてダレイオスの目の前で、愛馬を暴れさせるために。

「とはいえ、我が宿敵を相手では、ブケファアラスと共にあつても些か、安堵しきれるといふ訳でも無いが……まあいい、行くぞ！」

「■■■■■■■■■■……！」

その傍らのブケファアラスに跨って、剣を掲げ、イスカンダルが疾走する。それを見て、堂々と掲げた斧を構え、ダレイオスは一步、また一步と前へ踏み出していく。両者の速度に差はあれど、両者の距離はドンドンと縮まり……

「行けえい！ ブケファアラス！」

「——■■■■■■■■■■！」

振り下ろされた剣を、ダレイオスの斧が受け止める。空いた左腕の斧で、ダレイオスがブケファアラスの足を狙って振り下ろすが、しかしイスカンダルは愛馬の手綱を引き、嘶くように高く足を上げて避けさせた。

そのままに、ブケフアラスが両足をハンマーの様に振り下ろす。狙いは当然、ダレイオスの頭蓋だ。

「——ツ！」

しかしそれを、何と片腕でダレイオスは受け止めて見せる。馬の全体重を。イスカンドルも不敵な笑みを一瞬崩し、呆然としてしまう。

「……はっ！ やるではないか！ ブケフアラス、もう一撃叩き込んでやれい！」

「■■■■ーッ！」

だがそれで諦める訳も無く、更にイスカンドルはブケフアラスを操り、更に蹄を叩き込む準備を整え……その一瞬、そうはさせじとダレイオスが斧を振りかぶった。狙いは、足から胴体へ。もはや、相手を愛馬諸共両断する勢いだ。

「ぬうっ！」

流石にそれを察して、イスカンドルも愛馬諸共引き下がったが、それに乗じ、更にダレイオスが右足から前へと進み出る。相手を粉碎せんと、両の手の斧を振りかざして、堂々と突撃していく。

「来るか、良い……駆けよブケフアラス！ 一気呵成に蹴飛ばすぞ！」

「■■■■ーッ！」

再び激突するダレイオス、イスカンドルとブケフアラス。交差させて、切り払わんと迫る二つの斧に、振り下ろされる剣と蹄。金属同士の凄まじい激突音が、空気を振るわせそして……再び互いの武器を大きくぶつけ、絶え間なく音を鳴らす。

最上級の騎兵と規格外の狂戦士の激突に、その度に砂塵が舞う……どこかの騒ぎではないのだ。ぶつかる度に地面は抉れてしまっている。

「くらええい！」

イスカンドルの振り下ろした剣が、砂塵を断ち、その時に巻きあがった砂塵を散らして突撃したブケフアラスが砂場を抉り、突風を纏って全てを吹き飛ばす。

「■■■■ーッ！」

その突撃に合わせる様に、二振りの斧が同時に振り下ろされる。ブ

ケファアラスの突撃の勢いを一撃で断ち切って、さらにその巨体を生かし、力任せに刃を振り回す。それだけで嵐の如き脅威。

「猛れブケファアラスッ！」

「■■■■！」

イスカンドルを引き込むの通路は、何時の間にか、二人が戦う為の舞台になるように広がって、両者の戦いを妨げることは無くなっていた。

ライダーとして、自らの機動力と突進力を全力で活かすイスカンドル。そんな征服王に、ダレイオスはバーサーカーのポテンシャルを最大限に生かし、只管に押す、押す、押す。押してダメなら更に押せ、相手が砕け散るまで、どこまでも押し潰す。斧の勢いは、未だ減速するどころか、さらに加速していくばかり。

「■■■■■■■■■■ッ！」

■■■■■■■■■■ッッッ!!!

「ぬ、おお！ これはっ……い！」

そしてその果てに、僅かに、少しずつ、圧されていったのは……イスカンドルの方であった。疾走から降りぬいた剣を、片方の斧が豪快に弾いた時から、遂に拮抗は崩れ始めたのだ。

「これはっ、堪える、ではないかっ！」

ブケファアラス諸共に、ダレイオスという嵐に、少しずつ傷を刻まれるその姿。ダレイオスと軍勢を指揮してぶつかるのであれば、間違いなくダレイオスは敗れ去るだろう。史実に置いて、ダレイオス三世をイスカンドルは破った。間違いない事実ではある。伝承の修正力は、絶望的なまでに高い。

だがそれは、軍勢に置いての話。個人で、サーヴァントとして、激突するのであれば？ 話は変わってくる、というより、そもそも前提からして変わってくるのだ。

「■■■■■■■■■■ッ！」

如何に愛馬との連携で、人馬一体の如き動きで魅せる征服王とて、尋常を遥かに超える巨体、それに見合った膂力を誇る巨人相手は、不利の一字だった。そもそも、破壊の規模から考えて彼は、人間というより、災害のソレだ。個人で相手すべき現象ではない。





## 特異点征服 その一

皆さんこんにちは。ノンケ（限界オタク恩返し一夜妻昔話系ガール）です。ちよつと今までのキャラと比べて余りにもキャラ濃すぎやしませんかねえ。デミグラスソース位濃い気がする。ハンバーグ煮込まなきや……（使命感）ミス・クレールの手作り料理なら食べたい……食べたくない？

前回は……我が王がとんでもない大暴れしてくれました。宝具展開ヤダ怖い……やめてください……メカエリチャン……（未知の展開へ恐怖する女の子系 Fate ホモ） 投降者もちよつと多いねえ（属性）

「——マスター、私の後ろに。ここから動かないでおくれよ」

〳白百合の騎士が、剣を構え、黒いスーツの軍師と向き合う。その間に、自分と立香を守る様に盾の乙女。自分の傍らには、藤の術師。その三人を目の前に……キャスター、孔明はゆっくりと呼吸を一つだけ、吐いた。

「そう警戒しないでくれたまえ……私の役割は、既に終了している。後は、ここで君達に余計な手出しをしないように見張る程度しかしない」

「キャスター一騎で、かい」

「私は、何方かと言えば直接戦う事は得手としていない。援護を得意とする、というより其方に特化したタイプのキャスターの様でね……君達が私を撃破しようというならば、全力で防御に徹しつつ、味方へ援護を撒く所存だ」

〳脅迫になってないな……デオン。

〳——それは流石に、勘弁してもらいたいな。

選択肢の上は破滅の音色なんだよなあ……このイスカンダルの軍勢に、諸葛孔明の援護が乗るとか悪夢以外の何者でもない定期。そんな事されたら（プレイヤーの士気が）ナオキになっちゃう！

「……そうだね。流石に、彼に全力で援護をされるのは、避けたい、かな」

「ふむ。君達が理性的で実に助かった。流石に、私としても戦いながらの援護は些かりスクのある選択だからね」

「そう言うとは……孔明は、ゆっくりと懐から葉巻を一本取り出し、それに火を一つ付けてなんとも無防備に吸い始めた。」

「お前呑気にすつとんちやうぞ（語録無視）」

「——随分、余裕そうじゃないか」

「それでもない。寧ろこうして葉巻でも吸って居なければ、やってられないという事でもある。正直、君達が無茶を一つでもしないか、不安しかない」

「無茶って何かな？ サーヴァント相手に時間稼ぎを行う事かな？」

「一騎打ちを行う事かな？ 単騎で敵の内に突っ込む事かな？ あれ、可笑しいぞ、この人、人間とは思えない程に無茶しかしていないぞ……？」

「一つ聞く、君達の目的はなんだ」

「……何故にそれを聞きたいのかね？」

「別に特別な理由がある訳ではない。分からないからだよ。君達は、レフ・ライノールという男を邪魔だと判断して消した。それは良い、なら君達は此方に協力のためにその行動を起こしたのか……だが、そう言う訳でもないようだ」

「>デオンの視線が、孔明に注ぎ込まれる。問いに顔色一つ変えない彼の様子を、一挙手一投足を見逃さないと言わんばかりに、そのままデオンは続けた。」

「根拠は……等と、いうのすら無意味だな。この状況では」

「聖杯を奪取、サーヴァントを召喚し此方と敵対、そして聖杯の使い道も分からないと来ているからね。なんなら、レフ・ライノールよりも此方としては脅威にすら見えてくる」

「そう言うものではない。彼は彼で、間違いなく君達にとって脅威だったからな」

「ほう？」

「あつ かいせつの こうめいおじさんだ！ あつそうだ（唐突）  
皆！ エルメロイ二世の事件簿、好評発売中だから買おうね（圧力）」



買え(恫喝) 買ってください何でもしますから!(懇願) 順序の違  
う三段活用だなあ……

「——彼らと私たちの目的は相反しているからこそ、この情報は漏ら  
すが。彼は慢心さえしていなければ、我々を蹴散らすのも難しくな  
いに恐ろしかったよ」

「あの、目玉の柱、というべき姿が、その脅威だと?」

「アレは唯の怪物ではない。自らの事を七十二柱の一角、フラウロス、  
と名乗っていた」

『——フラウロスだって!?!』

〈その一言に、デオンより先に反応したのはロマニ。一瞬、耳がキ  
ンとなる程の大声に貴方は何事かと目を白黒させた。

『七十二柱……ソロモンの悪魔と呼ばれた、あの……』

「自称と呼ぶには、聖杯を使い、この特異点の黒幕として振舞っていた  
その実力は余りにも高すぎると思うがね。あの異様な姿と言い、寧ろ  
彼の伝説の悪魔達……とでも言われた方がじっくり来る。頭の痛い  
限りだが」

〈葉巻の煙を、酷く憂鬱な表情で吐き出しつつ、孔明は続ける。

「いや、人理焼却などという所業……あらゆる事件には、格、という者  
が存在するが、間違いなく最上級の大事件と言って良い此度には、こ  
れくらいの相手で、漸く『ホワイダニット』を考察する余地が出てく  
る」

ホワイダニットってなんだゾ? 推理小説で重要視される『フーダ  
ニット(誰がやったか)』『ハウダニット(どうやって犯行を成し遂げ  
たか)』に並ぶhotgoo。良い子のホモは皆暗記、しよう!

それは兎も角。先にあの肉柱君を始末しちゃったから  
ロマニがアレ見てないと思ったんですけど、君がバラしていくのか  
…… (困惑)

「……君達は、その悪魔とやらに敵対する目的を持っている、と?」

「私達は、別に人理修復をしない、とは言っていないからな。寧ろ、君  
達と目的は同じと言って良い」

〈人理を救うのが目的だと?〉

ファツ!? ウーン……

「……サーヴァントが独自に、かい?」

「可笑しな事では無いだろう。我々も、この人理に生きた者の影法師。世界が滅びようがどうでもいい、という訳でもない。手だてを見出したから、我々も独自に行動しようと思っただけだ」

「それが、あの聖杯だと」

「聖杯の魔力があれば、まあ多少の無茶は何とかなる。幸い、私には聖杯を扱うだけの霊基が託され、託した本人も、この方法について否の返答をしなかった」

「それを誇るでもなく、ごく当たり前の様に、孔明は話す。サーヴァントに存在する原則から大きく外れた、異様というしかない行動なのに、そうとは感じさせない程に。」

「何故此方に攻撃を?」

「ふむ、互いに邪魔をするつもりは無かったさ……そうしてもらいたかったからこそ、私は戦うのを推奨はしなかったのだが。あの馬鹿は、どうにも一度は手合わせしてみたいと聞かなくてな。協力者の意見と合わせ、こうなってしまう訳だ」

協力者が凄い分かりやすい気がする。多分ローマ大好き我が子信じてるから輝き見せてくれお父さんでしよきつと(暴論) 渾名が余りにも酷い(半ギレ) 神祖に謝ってどうぞ。頭下げるんだよ九十度。「分かってくれたかね。君達は君達で、我々は我々で、行動するだけで、互いに邪魔する事も無く、スムーズに互いの仕事も進むのではないかと思うが」

「ふむ、そう思えばそうかも知れないか……」

「——一つ、気になる部分があります」

「>デオンの言葉を継いだのは、貴方の傍らに立っていた、香子。彼女の視線は、いつも以上に険しい表情をしていた。」

「なんだね」

「協力して下さる、とは言ってくれないのでしょうか」

「……それは」

「邪魔をしない。互いに行動する。確かに、敵対する意思こそその言

葉には籠って居ませんが、協力する、という意思も見られません。同じ目的であるならば、協力し動いた方がより効率的に動けるのではないかと、と思うのは普通だと思っておりますが」

この香子さんの視線が……鋭いっ！（ポーちゃん並感） バス運転してそう。ぶっ飛ばすぜベイビー！ 香子さんがそんな事言ったら、私は気絶する自信があります（精神クソ雑魚ナメクジ）

「――成程」

「それにも関わらず、其々が個々で動こうと提案する、という事は……後ろ暗い所があるからではないですか？」

「……」

「無ければ。如何様な手立てでも、堂々と協力を求める。貴方はそれだけの知恵者だと思えます。それに……そうして、目的を達成するのに、手立てを明かそうとしない手合いを生前、何度も見て来ましたので。そう言った類には、少々と、詳しいのです」

おっ、オリジナル笑顔平安望月おじさんかな？（正確な批評） 実際『いい目的だから過程はまあええやろ』的な感じで天覧やってたし……（目逸らし） そんなんだから望月が欠けるんやぞ。

「――君の逸話からして、比較されているのは、彼か」

「孔明様……返答や、如何に」

「そこまで凶星を突かれては、最早隠す意味も無いだろうな……君達は、あくまで人理修復を、後の世界に影響を及ぼす事のない様に行動している。だが、我々はそうではないと言っしかないな」

言い訳もしねえとか笑っちゃうぜ！（潔さに呵々大笑プレイヤー）でも後に影響及ぼすとか、立つ鳥跡を濁さずって言葉知らないのか、常識ねえのかよ……梯子にソウルをあれだけ掛けるとか、勲章ですよ……（静かなる怒り）

と言った所で、今回は此処まで。今回は、孔明Pとの会話の続きからです。因みに周りではネロちやま達がそれぞれの死闘を繰り広げて居ますが、此方に操作が来ないというのであれば、そういう事なんでしょう。絶対に許さねえ！ F G O R P G いいいいいいいいいい！

ご視聴、ありがとうございました。

## 特異点征服 その二

皆さんこんにちは、ノンケ（オリジナル笑顔平安望月おじさん）です。レジライ、ドーマン、ミス・クレーンとか大概な人一杯居るけど、その陰に隠れてるだけで、あの人も中々だと思う。え？ サーヴァントじゃない？ 何の事かな？（すつとぼけ）

前は、孔明さん、孔明さん、貴方の目的なんですか？ まあ貴方達の目的と一緒にですよ。おかしいな……それじゃあ協力した方が良い筈なのに、貴方は協力してもいいすら言わなかった……？

「カルデアは、穏便な手段で、人理を修復するのだろうが……我々はそうではない。もっと大々的にやるつもりではいる」

『——まさか、その為に聖杯を!?!』

「彼、フラウロスからは興味深い事を幾つか聞いた。ここと同規模の特異点が、後五つは存在しているという事実は、同時にここと同規模の聖杯が後五つ、ここと合わせれば六つは存在しているであろう事も我々に教えてくれた」

「それを、何故生かさないのか……と孔明は続けた。

「特異点に存在する聖杯を使い、その特異点で自らの軍団を強化し、そのままに次の特異点に攻め入る。要するに特異点の征服が、我々の目標という事になる」

「その果てに、人理を修復する、と」

「最終目標は変わらないとも。その為に、最も効率のいい手段を取るだけだ」

マジで征服王が考えそうなことだア……それを諫める立場じゃないんですか貴方は!?! いや普通にこの人征服王の臣下自称する征服王マニアだった（諦め）

それは兎も角、この手立てってFateファンならだれでも考えつきそうなことではあるんですけど、実際行けるんですかね。まあ『やってみよう!』で出来るような事じゃないよね普通は。それを『やってみよう!』ってなるのが通販大好きおじさんクオリティです。それだけ聞くと引きこもりみたいだなお前な。

『——そんな乱暴な手段で特異点を解決した所で、後に与える影響は相当な物になりかねないよ』

「ほう？ 何故かね。私の認識では……」

『特異点で起きた異常は、その問題を解決すれば無かった事になる、と言いたいのかな』

〈孔明に返すロマニの声は、固い、という形容詞が良く似合っていた。ただ、聖杯をやたらに使う事を忌避している……というのとは、明らかに違う。』

『確かに、特異点で起きた異常は、解決するだろう……だが七つの特異点を作り出した聖杯を、適切な管理もせずリソースとして使い、勢力を拡大していく。そんな事をしていけば、その広げた勢力そのものが、特異点の原因になりかねない』

「——流石に誤魔化せないか」

あつ（察し） 成程ですね。無法図に膨れ上がった力は結局は身を亡ぼすってそれ一。過ぎたるは猶及ばざるが如しって言うだろ、全く困ったもんじゃ……！

『危険性を理解している？』

「だが、そうして勢力を拡大していけば、知恵も集まる。三人寄れば文殊の知恵というだろう。何れ、聖杯を使ってなお問題が起きないようにするための手立てとて見つかる」

『しかしそれは、確定していない、あくまで可能性の話だ。そんな物に、天下の大軍師が継るとは、思いたくないんだけど』

「戦とは確定している事だけで進められる程甘くはない、という話だ。時には可能性に過ぎない事に、賭けなければいけない時もある。それ以上に優先する事柄がある場合は、特にね」

〈人理修復——その大きな目的の為に、多少、否、それ以上のリスクであっても、許容する。それはある意味、軍師らしいと言えるような戦術の練り方であるし、しっかりと覚悟が決まっている。』

『言い分は分かる。だが……此方としては許容する事は決して出来ない。我々は人理を保全し、回復するという目的の名の下に戦っている。その人理に危険が及ぶやり方を許容しては、此方の大義が成り立

たなくなる』

「まあ、そうだろうな。万が一の可能性も考えて説得、というより、不可侵を結べれば上々と思つて居たが——とはいえこの結果は見えていた、か」

目的を達成するにしても、やつぱり、手段選ばず戦う前に、ベスト出せるようにね。はい。頼むよ……アレ？ 今私は誰と会話を……まあそんな細かい事、大丈夫でしょ（器クソデカ投稿者）

「私としては、今この状況で互いに手を出せないだけでも上々。さて、戦の趨勢を見届けるとしようじゃないか」

〈〉……随分と余裕だね。

〈〉征服王が勝つて、信じてるのかな。

うーん、コレは上より下あ……ですかねえ……？ こう言つておくのが好感度も稼げるやろ（適当） 敵の好感度稼いでどうするつもりなんですかね。所で関係は無いんですけれども、三国志をやる時は、基本的に孔明を劉備から引き抜くプレイをしているんですよね私（下衆顔）

「——信じている……訳ではないかな」

〈〉そんな貴方の一言に……孔明は、なんとも言えないような表情で言葉を返した。目を少し逸らし、若干苦笑いというか、疲れた笑いというか、呆れた笑いというか。とても複雑そうな笑みを浮かべている。

「寧ろ、そうだと言えればどれだけ良かった事か……」

「……？ どういう意味だい」

「いや。君達は、あの馬鹿の事を良く知らないだろうからな。見ていれば……いや見ていると分らんか。ハア……ホントに、ホントにアイツは……」

めっちゃ孔明さん苦惱してるんですけど、征服王殿、何をやらかしたでゴワスカ！ おいは恥ずかしか！ 生きておれんご！ 結論が先走りチエスト過ぎる。

「——あつ、先輩！ ダレイオスさんが！」

「イスカンドルを吹っ飛ばした！ 凄い良いブロー！」

「そうしている時だった。戦いの渦のその中心にて、件のイスカンダルが、見事にダレイオスの拳を受け、吹っ飛ばされたのが見えたのだ。その直後に聞こえる、彼の勝鬨。そして……」

「マスター！ メドゥーサ様が！」

「貴方の視線の先、焔の渦を突つ切る様に、白い光が二つの影を貫いたのが見えた。間違いない。メドゥーサの宝具だ。貴方は香子の手を握りしめ、しっかりと頷いて見せた。」

「おやおやおやおや？ 孔明君!? 此方の勝ちの様ですねぇ！（一転攻勢） それにしても、描写すらなくキャラクターの会話の間に戦闘が終わるとか、RPGの戦闘要素どこ……どこ？」

「……負けたか」

「どうやら、その様だね。それでどうする？ この状況、君だけ逃げおせる積りかい」

「そうさせてくれるような状況ではないだろう」

「こうなれば、目の前の孔明先生とやり合うしかないか。ただ、孔明先生相手に、前衛二人後衛一人のバッチリ仕上がってるパーティで挑むとか、それなんていうイジメ。三人に勝てる訳ないだろ！（文字通り）」

「では……」

「かと言って、戦う程無謀ではないさ。私もね。正確に言うのであれば、もう戦う必要はない、というべきだったかな」

「>> どういう意味だ？」

「>> グダグダ言ってんじゃねぇ！ やるのか！ やらねぇのか！」

「下が物騒すぎるし、なんなら悪役のセリフだと思っただけでも。急にチンピラとしての素質をすっかり発揮しないで（半泣き） さっき迄アレだけ警戒してたのがこっちが勝ったと分かるや唐突にイキのやめて貰っていいですかね。マジムカツクなこいつ……主人公の株が下がるそんなセリフ吐いたら。選択肢は上。」

「何、ここの言う事さ……ライダーッ！」

「——おう！ 此方も決着がついた所よ！ いやあ、驚くべき程に勝てなんだ！ 強いのが、ダレイオスの奴めは！」



「その言葉に返してきたのは、景気よく、ダレイオスのボディブローによつて天高く吹っ飛ばされたイスカンドルだった。ボコボコにされて、そこかしこにしつかりと殴られた跡をつけて尚、割とピンピンとしている。」

「それで、余を呼んだ……という事は、終わったか？」

「ああ、終わったとも。後は——」

『——ロマニ！ 聖杯に反応だ！』

『えっ……ほ、本当だ！ 聖杯の出力が、上昇!? でもどうして、さつき迄、こんなに過剰な反応を見せる事は……?』

えっ、何事？

「——聖杯の導きにて、堂々と凱旋するだけだ」

「出来れば、勝つての凱旋が理想なんだがのう……とはいえ、仕方ない。引き際を弁えておくのも、将にとつて必須の事だ」

「孔明の後ろで、更に輝きを増していく黄金の杯。デオンとマシユが、貴方と立香を守る様に前に出る。マシユの肩で、警戒するように、フオウが唸り声を上げていた。」

『し、しまった！ そうか！ さっきまでは、まだ聖杯の掌握が完全に出来ていなかったから！ 会話も、交渉も！ 全部時間を稼ぐためのブラフだったのか！』

「ライダー、縁を辿つて次の特異点へと向かうのには、少し時間がかかる。済まないが」

「全く、王をこき使うとはとんだ臣下も居たものだ。良からう！」

ふーん、賢智じゃん（敵を認める主人公の鑑） ……貴様アア!!

（出火） 逃げてはいけませんよ？（鎮火） カルデアから逃げるなア

ア!!（噴火） 敗北者アアアアア！（大噴火） まさか、孔明Pにとつ

ては、話している事すら計算の内だったとは、これはこのリハク以下略。

いずれにせよ、彼らを逃がす訳には行きません。次回は、孔明P、イスカンドル組の撤退阻止です。けどこの流れは……まさか……

ご視聴、ありがとうございました。

## 特異点征服 その三

皆さんこんにちは、ノンケ（無限餡子ウーマン）です。輝いてる！輝いてるよ！君の歌！きつとXに届いてるよ！多分XXにも届いてるよ！XXさんは多分ボーロボ泣きながら推してくれるよ！多分！

前は、ダレイオス殿が見事パンチ一発でイスカンダル殿を伸して……ですが騙して悪いが、コレも仕事なんぞで、とばかりに孔明さんが聖杯を使用。急いで止めなきや（使命感）って感じです。

『——聖杯を使つての、特異点への移動……不可能とは言い切れない！止めてくれ！』

「くそつ、レオニダス……オルタ……いや、イスカンダルの呼び出した兵士は消えてない、こつちまで来るのには時間がかかる……今は何よりも速攻！マシユ！デオンと連携して突撃！」

◇デオン！マシユを援護してくれ！

◇デオンの援護を頼む！

あー、これはデオン君ちゃんがどういう戦い方をするかが決まる選択肢か……やっぱりエンジョイするなら、常に前線を張るべきだよなあ!? という事でマシユ、デオン君ちゃんのサポートオナシヤス！「了解しました！」

「——悪いのう、流星にコレは止められる訳にもいかん」

◇そして、突つ込む二人の前に立ちはだかるのは、先程のダメージを引き摺つてなお堂々と剣を構えるイスカンダル。ダレイオスの怪力が効いてない、という事も無いだろう。それを考えれば——

「ライダー、少し魔力を回そう。耐え抜いてくれ」

「良いだろう！では始めるとするか！」

◇——と思つていた矢先にこれである。流星に、聖杯を掌握したキャスターからの援護を受けているサーヴァントが、そう簡単に行くわけではない。

ええい厄介な。聖杯バフとかもつと先の章で出てくるような仕様だろうに。どうして私をこんなに困らせるんだ。そんな悪い子はお

仕置だどく？ でもホモ君の適正装備は竹刀じゃなくてバットなんだよなあ……

で、ミツシヨン内容ですが、時間制限内でイスカンドルさんを撃破、又は一定時間が経過するまで自軍サーヴァント全員が生存……なるほどですね（結末の即理解）

「行くぞっ！」

まあそれは置いておいて、エンジン全開、先ずデオンくんちゃんが仕掛ける！ イスカンドル、これをその手の剣で受けようと構えますが、デオン君ちゃん、切り裂くと見せかけてその構えた剣を掻い潜って肩口を貫いた！ ワザマエ！

「ぬうっ……!?!」

「動きが鈍いね。如何に君とてあのダレイオスとの連戦から、僕と一騎打ちとは舐め過ぎなんじゃないかい」

「……将とてこうして泥臭く戦う事もある。寧ろ、こういう戦いを経験しない将は」

「っ!?!」

しかしながらイスカンドルもサルモノ、聖杯∥ジツの援護でなんと貫かれたままの強制的な反撃に。これは孔明の罠ですね間違いない……

「どのみち、途中で潰れると言う話だ」

「成程。潰れていない君は、そう言った経験も良くあると」

「何事も経験……とか言っとなら、今度は盾か！」

「押し切りますっ……!」

じゃあ避けられない面攻撃なら当たるでしょ（脳筋） その弱った足腰でシールドの面攻撃を避けられるか！ 皆さんね、マシユの攻撃面をそこまで……とか思ってる方もいらっしやるでしょうけど。

考えてみてください。絶対に敗れない壁が、物凄い勢いで突進してくるんですよ。面の上に破壊力も中々、総合力に置いてシールドバツシュって全然侮れないですよね。

「ぐ、ぐぐぐ。コレはいかん……流石に、コレは止めきれんか！」

「やあああああっ！」

その結果？ まあこうしてゴリゴリ押し潰されるっていう話。で、シールドの壁に掛かりきりになつてるとねえ……背後が隙だらけになるんですよ（ニチャア）

「悪いね」

「——まあ、そうなるだろうなあ」

そうなればね。此方もイスカンドルの背後からさらに攻撃する事も出来るんですわ。

他のサーヴァントじゃこうはいかないですよ。実際。マシユのシールドは防御と同時に攻撃も行えるくらいクソデカシールド（誉め言葉）だから、相手を釘付けにしてダメージを滅多に負わずしっかり引き寄せ役が出来ます。マシユ。カチカチ。

「はっ！」

「ええい盾に阻まれ剣に切り裂かれるなど、悪夢以外の何者でもないっ！ ぐううっ！」

これがっ！ 美少女！ 美少年！ サンドだ！ サンドされる気分はどうだ!? 原稿用紙三枚に纏めて投稿せよ！ こんなに苦しんじゃって……大変そうだね♥ 確実に仕留めるから覚悟しろ。マケドニア。

「悪いが、僕たちは君を排除する手間を惜しむ程、アマチュアじゃない」

「はい。征服王、という偉大なる王だからこそ——」

「確実に仕留めさせてもらうから覚悟して欲しい！」

ホラホラホラホラ、どんどん行くぜえく？ もうお前は此処から逃げらんねえんだよ！ 徹底的にやるからなオイ！（過激派調教師）あつ、そうだ（唐突） 香子さんも混ざりませんか!? 混ざりましょうよ！

「——イスカンドル様……これまでです」

さあ、ここで空中に描かれる五芒星！ 黒い弾丸がイスカンドルに……ってその前に謎の光線で阻まれたんですけど（半ギレ）

「万が一の誤射を考えると迂闊な射撃は出来んが、これくらいはな」「おう軍師よ！ あんまり此方に手を出すんじゃない、お前は聖杯の

起動に全力を注がんかい！」

「その前に貴方が倒れては意味が無いだろう」

「……あー、全くその通りだな！ ふはははは！」

「<どうやら香子に関しては、孔明が睨みを利かせる模様だ。それは此方も同じ、孔明に対しては、香子が睨みを利かせる事が出来る。つまり……やはり、デオンとマシユの二人がイスカンドルを削り切れるかにこの勝負はかかっている。」

「詰み……切れないっ……（後悔）孔明Pと一緒にイスカンドル程にもなると、これだけ不利な状況でもここまで粘るんすねえ？」

「——それと、コレはもう一つ、贈り物だ」

「ん？ ……おお!? これはこれは！」

「あのーすいません、今一気に三つくらい紅いエフェクトと、二つ緑のエフェクトが付いたんですけども。コレは殺意マシマシですよ……えつと？」

「ついたエフェクト効果の一覧を確認すると？ はい、攻撃力上昇、ダメージプラス、クリティカル威力上昇に、防御力上昇にダメージカットと、はいはい孔明の全バフ全開と。はえー、徹底的に援護してらっしゃる……一つどころじゃない（憤怒） どう落とし前つけるんだよコレよお!？」

「やる気がモリモリ湧いて来るわ！ 行くぞおっ！」

「くうっ！」

「こ、このパワーは、さつきとは桁が、違うっ！」

「ほらもー、シールドを片手で押し返し、剣の一閃でデオン君ちゃんを退かせて……イスカンドルが明らかにパワフルになっちゃってるじゃないか！ 取り敢えず緊張すると力出ないそうなんで、ここはガッツリと緊張して貰って。ベストなんてももの出さなくていいから（邪心）」

「だがっ、それでも動きに精彩が、戻った訳ではないっ！」

「しかしデオン君ちゃん、コレに一切怯まず。そうだ、当たらなければどうって事無いって仮面のマザコン少佐も言ってた！（渾名のセンスが）糞だあ……」

『二人共！ 聖杯の反応が更に強くなっていつてる！ もう時間がない！』

「マスター！ 援護を！ ここで決めるっ！」

つと、デオン君ちゃんから熱いコールが。ここで応えなきや細いしーちきんですよ。よーし瞬間強化も再装填されてるだろうし、マスター全力で使っちゃうぞーバリバリ。デオン君ちゃん、一発キツイの頼みます！

「ぜえええあああつ！」

「君の今の動きなら、すり抜ける事は難しくない！ ——貫ったっ！」

さあ、デオン君ちゃんが綺麗にイスカンドルの剣の横振りを突進しながら潜り抜け、肩口に再びザクリと反撃の刺突が突き刺さっていくう！ やったっ！ セプテム、完！

「ぐうっ……」

「殺ったっ！ このまま、一気に霊核を砕かせてもらおうっ！」

「……いいや、一步遅かったな。麗しの竜騎士。余の勝ちだ」

〽——どういう事だ、と反応するまでも無く、答えは目の前に現れた。聖杯が脈動し、更なる輝きを放ち始める。それに、デオンが一瞬気を取られた……そこを縫って、イスカンドルがマッシュとデオンの包囲網から見事脱出する。

あつ、制限時間（池沼）

『マズイ！ 聖杯が……！』

「では諸君。我々は此処で失礼するでしょう。また次の特異点にて」

「待つておるぞ！ 再び、しのぎを削り合う、その時をな」

〽不敵な笑みを浮かべるイスカンドル達を、止める暇も無く。その姿は歪み、そして瞬く間に虚空へと消え去ってしまった。

わーっ、何を！ わあ、待つて！ ここから逃げちや駄目ですよ！

待つて！ 止まれ！ うわあーっ!! ……今回は……ッ  
スウウウウ……ここままで……あゝあゝあゝあゝもっうやだ  
ゝあゝあゝあゝあゝ!!!

## エンドロール・セプテム その一

皆さんこんにちは、ノンケ（ツナ）です。マヨネーズ和えても相性は良くなさそうですね多分ですけど。でもマヨネーズは意外と好きそう。あの涼しい顔で案外いっぱい食べてる気がする。

前は、我々カルデア、全力で孔明、イスカンドルの行動をどうかしようとして全力で行動した訳ですが……何の成果も……得られませんでしたあああああ……いやホントに、勢いにこつちが勝ってた筈なんだけども……？

『……反応、ロスト』

＜ロマニの声が重く響く。回収する筈の聖杯を奪われ、イスカンドルと孔明は何処かへと消え去ってしまった。特異点が解決したか、と言われれば……相当に、微妙な状況と言わざるを得ない。

「マスター、ご無事ですか。って、ちよつと、本当に大丈夫ですか、貴方」

「……きやつと ちんぼつ」

「周りの兵士どもがいきなり消えたけど、なんかあったの？」

ありました……（半泣き） お母さんごめんなさい……先生ごめんなさい……僕を死刑にしてください……いやもうホント、後ちよつとで押し切れたというのに、本当に悔やんでも悔やみきれない大失態。ってその他諸々取り敢えずうっちゃって、まずはキャットどうしたの!?! めっちゃ顔色悪いけど!?!

「ムアスタア! ご無事ですか! むっ!?! 聖杯は!?!」

「……ごめん。やられたよ。孔明とイスカンドルが……持って、逃げた」

＜あからさまに落ち込んだ、という様子の立香の言葉に、レオニダスは何も言わず、落ち着いて耳を傾けて……そして、最後まで話を聞くと、ポンと彼の肩に手を置いた。

「——ふむ、左様でしたか。ですがマスター、気を落とすのは早すぎます。少なくとも彼らは人理を焼いた側の人間ではありませんし、聖杯が消えたわけでもありません。追って必ずや、取り返せばよいので

す」

「こんな状況であろうと、合流したレオニダスの言葉に一切の揺らぎは無かった。責める事も無く、前を向いた発言に、落ち込んでいた立香の顔にも、少し明るさが戻ってきた。

うんうん、それもまた人理修復だね……じゃなくて、感動する前にまず死にかけみたいなの顔色のキヤットをどうにかしてやらないと。あつ、(自キャラが)動ける、動ける！ キヤット！ 大丈夫か……何？ 「きやつと」の ぼうけんのしよ は きえてしまいました」？ やっぱり壊れてるじゃないか (呆れ)

「そう、だな。うん。落ち込んでるばかりじゃあ何も解決しない」  
「その意気です！ 戦場では、如何にしくじっても、急いで立て直す事が出来れば、再び機を掴む事が出来ます。ネバーツ！ ギブアップツ！」

うーんレオニダス王が我らのジャステイス。レオニダス王が低レアな理由が分かる気がする。因みにFGOの星の基準は、召喚のしにくさで決まって来るらしいですよ。誰にでも気軽に力を貸してくれるレオニダス王をすこすこすこすこすこれ (命令形)

まあ、それは兎も角として、ちよつと皆キヤットにね、ちよつと、目を、向けてやって欲しいというか。

「――イスカンドルめの姿が消えたように見えたが、気のせいかな？」

「■■■■ツ！」

ムーア！ 我慢しかできぬ！ (無念の意) ネロちやま、なんてタイミングでやってくるんですか……後ダレイオス君にはホントに申し訳ないというか、あつ、体を支えるってコマンド出て来た。キヤットどうした！ しっかりしろ！

『ね、ネロ陛下……すみません。イスカンドル、取り逃がしました……』

「なんと!? ええいあ奴め、逃げるなどと臆病な真似を！ 何処だ！ 何処へ逃げたのだ！ 追手を差し向けてくれる！」

『どうやら魔術による転移の様で……行き先は、分からずです』  
「ぬうううううううう！」



〈特異点やらなにやら、そう言ったことを言うのは面倒なので、ロ  
マニがもう色々と重要な事をすべて排除して、めっちゃ要約してばつ  
と終わらせにいつていた。とはいえ、適切な判断であることは間違  
ないだろう。

「……ならば仕方あるまい！ 許せぬ、許せぬが！ 流石に行き先も  
分からぬ相手に、余りかかずらつていても、無駄としか言いようがな  
い、か」

『申し訳ない。ここでイスカンドルを捕らえられれば……』

「気にするな、遠見の魔術師……取り合えず、連合ローマは瓦解したの  
だ。余がお主らと組んだのは、その為だった。お主達はその仕事を十  
分に果たしてくれたのだ」

うんうん。ネロ陛下のお言葉大変ありがたいんですけど、あの、ま  
ず負傷兵がですね。もしもーし！ 皆さーん！ 聞こえてますかあ  
！ カンカンカンカン！ キャットだよ！ カンカンカンカンカン  
カン！

「——本当に、感謝しておる。助かったぞ、カルデアの者達よ」

「ネロ陛下……」

「ええ。私達も、ネロ陛下と共に戦えて、楽しかったです」

あゝ感動的なセリフ本当に良いっすね。いや、俺もね、素直に喜  
びたい所なんですけれどもちよおつとで良いからこつち向いてく  
れないかなあ？ ねえ？ こつちにも功労者（推定）がいらっしやる  
んですよ！

〈実に感動的な場面ではあるのだが……それと同じくらい優先して  
もらいたい事もあるので、ここで、このまま待っていても多分みんな  
気が付かないだろうと貴方がようやく声を張り上げた。

〈感動的なのは宜しいが、こつちにも注目してくれない!?

〈へい！ ブラザー！ ちよつとで良いからこつちにケイムオン  
！

下は緊張感がもう少しだけ？（お洒落ぶる言い回しをしたいイキリ  
投稿主） 誰でも良いから取り敢えずキャットを助けてください。い  
や、死んでるとかではないんですけど、なんか見るからに弱ってるん

ですよ。まあ会話するのはホモ君になるとは思うんですけど。だったら周りに注目させる意味とは……?」

「お、おう。悪い……ってマジでどうしたんだ!? キャットさん!」  
「にやはは……キャットのCPUもオーバーヒートである……」

「そう。明らかにキャットの顔が悪い。キャットと共に戦っていたメドウーサに話を聞くと、彼女曰く、何かしらの術を使った後、こうなった、との事らしい。大丈夫なのかと声をかければ、それでもニコリと笑ってキャットは返した。

「うむ、頭はパーだが心はグーである。チョコキはご主人の言葉で三すくみ、皆引き分けなら皆幸せである」

術を使った……成程、密天か。キャットもオリジナルと同レベルの術を使える、というのはCCCコラボで描写されていましたが、それを使うとクウーン(KO)するんですねキャット。キャットなのにクウーンとはコレ如何に。

「キャット、頑張ってくれてありがとう。」

「無茶するもんじゃねえ……お前にも家族が居るだろうに……」

つと、選択肢出たのに気が付きませんでした。で……下の選択肢は、家族っていうか絶対ぶっ殺す同位体九人が居るので、そこ刺激するとキャットが怒りに溺れる! 流されちゃウボボボボ!!

「……うむ。その礼の一言で、キャットにはアタイゴールデン猫缶、私タマモキャット、ワタシ、オマエ、マルカジリ、なのだな……そして序でにご主人も頭から、マルカジリである」

「そう言つて、キャットが少しよろめきながら立ち上がる。その視線は、貴方の瞳の奥を見通すように、此方から離れない。」

「えっ、オイラ食べられるの!?!」

「俺を喰らおうとはな。だがそう簡単に食らえる程、軟じゃねえ積りだぜ。」

だから何でそうお前はいつも喧嘩腰なんだ(激憤) こういう選択肢が多いのってキャラの影響なんですかね。つまり爽やか系イケメンを作つて居れば選択肢も爽やかになった可能性が……? 無さそう(諦めの極致)

「にゅふふふ、左様。故に、楽しみにナ？ ご主人」

〈笑う顔に、既に彼女らしい元気は既に戻っていた。言葉の意味はよく分からなかったが元気が戻ったのであれば何よりである。そう思っ、安心してゐた貴方にとって……次の言葉は、完全に不意打ちとなつた。

「——それと、だ。あの月光ラプソディは、ご主人のナカノ者を探るための、悪しきインテリジェンスである。お主は見抜かれた。故に……努、油断するなかれ。覚えておくのだゾ、ご主人」

どうということなの……？♂

キヤットはねえ、時々しかインテリジェンス發揮しないんですけど、CCCでもキアラさんを真つ先に見抜いていたり、その發揮された時の出力がおつ……すうっげ……（感心）だから馬鹿にできないんですよね。

〈言葉の意味は分からなかったが……彼女が心配してくれた事だけは分かつた。ありがとう、とだけ返し、貴方は手を差し出した。色々とお世話になつた。本当は、スパルタクスともしたい所だが……もう、時間が無いだろう。

「お互いに感謝のハンドグリップ！ キヤットの好感度もアップ！」

〈この特異点で戦つた戦友と、握手を。そして、其処に感謝を込めて。

——と言つた所で今回は此処まで。

キヤットの発言、ホモ君の情報を、果たして誰がどういう事に利用してくるのか。どうせ江戸門枠でも送り込んで来るんでしょ（適当）ヒットマン送り込まれるって事だと思ふんですけどどんな気楽に言つていいものじゃない、ハッキリ分かんかね。

次回は、恐らくセプテム最終回です。ホント、始めた時はどれだけ苦勞するかと思ひましたが、めっちゃ苦勞しました（その時意外に素直）

ご視聴、ありがとうございました。

## エンドロール・セプテム その二

皆さんこんにちは、ノンケ(超絶画狂降臨者)です。初フォーリナーです(申告制) ただ今回のえっちゃんとその全体フォーリナーとしての役割を脅かす可能性……宝具二になって欲しいなあ出来れば。

前回は、ネロちやまから労いのお言葉を頂き、しかしそれよりも衛生兵! という事でキャットとちやんと言葉を交わし、謎のアドバイスをいただきました。江戸門梓が誰か知りたい所です。

「——凱旋を終えれば、宮殿にて宴を執り行う予定だ! 此度の戦の功労者たるお主達や客将の皆を労う為の場である。楽しみに待つが良い」

〈そう言つて笑うネロ。だが……その宴に参加する事は出来ない。もうそろそろ、別れの時は近づいてきている。その話を切り出したのは、立香から。ネロの前に出て、その眼を見つめて、彼は口を開いた。「スイマセン、ネロ陛下……俺達、そこまで残ってられません」

「なに?」

「俺達は、聖杯を回収に失敗しましたけど……任務自体には成功しました。故に、帰らないといけないんです。直ぐにでも、次の任務の為に」

そうだよ(便乗) かのイスカンドル王がね、挑発して来てくださったんですから。特異点に乗り込んで首を取らなきゃ……(殺意全振り) ケリをつけるんだよ三六〇度(完全決着を望むホモの鑑)

「な、なんと……急な話ではないか」

「すみません。もっと早くに話しておくべきだったのかもしれないけど」

「そういう話ではない! 余に協力したお主達に何の褒章も無く返したとなれば、余の皇帝としての器も問われる! それに……」

〈顔を伏せ、彼女はゆっくりと寂しそうに、頭を振った。

「余を助けてくれたお主達に何も出来ないまま返すのは……辛いぞ」

「ネロ陛下……」

そうだよ(便乗) ネロちやまが泣いてるんだよなあ!? もう

ちよつとくらい特異点に留まっても……バレへんやろ。コレに関してはバレるバレないの話じゃないと思うんですけど（名推理）

「——いいえ、もう返してもらいましたよ。ネロ陛下」

「フジマル……」

「ネロ陛下の協力が無ければ、俺達は多分、この特異点を戦い抜けていませんでした。本当に、俺達にとって、大きな助けだったんです」

「先輩の言う通りです。本当に、ありがとうございます（ぎ）いました。ネロ陛下」  
「そうだよ（便乗） 互いに貸し借り作らないでスツキリと終わらせるといのが一番ですよね。」

所でこの池沼プレイヤー、さつきから便乗しかしらないんですけど脳細胞生きていらっしやる？（自虐の極み）カスみたいな便乗ばっかりして恥ずかしくないんですか!?! 活き恥とて啜らねばならぬ時がある……！

「……そうか。そう言ってくれるか」

「はい」

「であれば、これ以上言うのも無粋というものか。うむ。では余も……ありがとう。フジマル、マシユ、それにカルデアの者達よ」

「そして、キャットと貴方が行ったように。ネロと、立香とマシユが握手を交わす。ギュツと。その感覚を、忘れないように、強く。」

「何時か、遠い未来であっても。お主達が危機に陥った時、必ずや、余もカルデアの味方として現れよう。約束する。待っているが良い！」

「あー良いっすねえ……（恍惚） やっぱり特異点の最後はこうやって爽やかに終わらないと。おろしたてのパンツを履いた、正月元旦の朝の様によオーツ！ ダイヤモンドが砕け散らなさそう。」

「ん？ そう言えば……あつ……（半泣き）」

「——はい、重ねてありがとうございます（ぎ）。ネロ陛下」  
「……」

次のネロ陛下はこの事を覚えていないんだよなあ……（滂沱） 特異点のルールだからね、哀しいねバーニィ。マシユと藤丸君の寂しげな笑顔が心に突き刺さるんだよなあ。くそ、絶対に許さねえぞ奈須きのこオオオオオオオ！（濡れ衣）

「——む？ お主達、足が！」

「あつ……」

〈ネロの視線の先、既に黄金の光が、貴方達を包み始めている。聖杯は特異点から消えてカルデアの任は終わりを告げた。いよいよ、特異点から帰るその時が来たのだろう。傍らの香子と頷き合って、貴方もネロの前に進み出た。

そうだね。ホモ君は挨拶してないからね。ちゃんと最後に挨拶してから帰らないと、そうだなあ!?! (慟哭)

「おお……ハゲ。お主も帰るのか」

オオン!? ウゝアゝッ! (激怒) な、こいつ! 悪口、なんか吐きやがった! 体に! コレは悪い子ですねえ……悪い子は便所掃除だよお前! (今だけ不敬百パーセント増量)

〈思わずずっこけた。凄い勢いで無礼を投げかけられた。泣きたくなった。頑張ったこの特異点を駆け抜けて来た戦友からの一言が容赦の無い『ハゲ』である。地面に手をつけてボロボロと涙を流しても許されると思った。

「あ、あの皇帝陛下……」

「いや、済まぬ。そこまで落ち込むとは思って居なかったのだ。許せやス。お主にも世話になったな」

あら皇帝陛下下つたらお茶目! (激ギレ) まあ、ハゲハゲ呼ばれてももう慣れちゃった気がしますけど。でもあの感動の場面の流れでハゲ呼ばわりはダメージも倍増どころの騒ぎじゃないんですよ貴女。

「それと……シキブ、だったか。お主の手によって、ダレイオス殿は危機の縁から蘇る事が出来た。その事に付いて、未だ礼を言っていないからな」

「い、いえそんな、私は別に……!」

「いいや。お主達の様な裏方の活躍もあってこそ、戦は成立するのよ。本当にありがとう。麗しき術師よ」

〈そうやって頭を下げるネロに、あわあわとする香子。その間に、貴方は何とかひび割れた心を立て直し、ネロに向き合った。

「そして、お主もだ。お主にも、大きく助けられた。誰よりも真っ直ぐ

に、敵に立ち向かったお主の雄姿も、しっかりと焼き付けていたとも……まあ、若干無謀だったのは否めんがな」

〈いゃあ、ご心配おかけしまして。〉

〈手前、無謀な位じゃなけりや生き残れなかったもんで。〉

地獄みたいな戦場を生き抜いてきましたからねえ。思えば初のボス戦がシャドウサーヴァントとタイマン(逃げ)っていうハードコア。やはりヤバイ(確信) もうちよつと難易度をEASYLEASY!(懇願)

あと下の選択肢が任侠物みたいで好きだと思った(小並感)

「ううむ、反省をしていない訳ではないか。まあ程々にしておけよ。傍らのパートナーを余り困らせるでないぞ」

ネロちやまにまで言われてて草も生えない。あんまり香子さんを心配させると視聴者からも『少しは反省をしろ池沼チンパン』とか言われそうなんで、これからは少しは自重する事を検討しつつ前向きに考えていきたいと思考する次第でございます。(要するに自重はしない)

「ぱっ!？」

「——本当に、本当に」

〈パートナーという言葉にさらに目を白黒させる香子を尻目に、ネロは……:宮殿の窓から見える、暮れ始めた夕日をバックに、笑いかける。〉

「世話になった! お主達に助けてもらったこの帝国、例え三度落陽を迎えようとも決して滅ぼさせはしない。何度でも、ローマの頂に陽を輝かせて見せようぞ! 見ているが良い! ……遠く、遙か彼方に居るお前たちにも、届くような! そんな——」

〈彼女の言葉を最後まで聞く前に。貴方達の眼の前は黄金の光に包まれ、そして……〉

あ、レイシフト画面。っしやあああああセプテム終了! セプテム終了! セプテム終了! ホント、壁とか何やら、デオン君ちゃんの大活躍が無ければ多分負けてたと思います。後イスカンドル王はもうちよつとご自重くださいオナシヤス!

しかし、彼らが向かった先が次の第三特異点なのか、それとも……五は嫌だ……六は嫌だ……七は嫌だ……アズカバン（全特異点）とかは流石に無いとは思いますが……まあ逸話から考えて第三特異点でしょうね。多分。

あと、忘れてはいけないのは、キャットやスパさんの警戒していたホモ君の謎覚醒要素ですね。洗脳宝具に弱くなるとかいう謎効果で能力にブーストがかかるという、厄ネタにしか見えないあの能力。何故普通に強化してくれないのか、さてはFGORPGつてのはDSだな？

と言った所で、今回は此処までとなります。いやーでも、これだけ大暴れしたんですから経験値も期待して良いと思います。次回以降の成長を楽しみに、ご視聴、ありがとうございました。



## 拠点フェイズ その一

皆さんこんにちは、ノンケ（竜妻）です。多分、Fateヒロインの中でも結構な良妻だよねお竜さん。そうは見えないけども。

前回は、ネロ陛下に別れを告げ、遂に第二特異点攻略……とはならず。勝負は次回特異点に持ち越しとなりました。まさか勝負が持ち越しになるなんて。次はオケアノス。イスカンドル。あつ。

「——皆、お帰り。本当に、お疲れ様。もうなんていうか、色々あり過ぎて大変だったと思うけど、でも、一応特異点は修復出来た。レフ・ライノールの事は……もう、彼の真意を知る事は出来ないけど、彼が死んだことは確認できた……」

「それでも尚、他の特異点には何の変化も無い。だとすればレフ・ライノールは、特異点に関してそこまで特別な役割を負っていた訳でもないという可能性が高いね」

「うん……そして、孔明が言っていた。レフが、名乗っていた名前」  
「そこまで言って、ロマニが額に手を当てる。貴方が思い出すのは、孔明が言っていた名前だ。あの時も思ったが、貴方には全く聞き覚えの無い単語だった。それについて、貴方が声を上げる前に、先ず真つ先に立香が声を上げた。」

「フラウロス、とかいう奴だよ。ロマニは何か知ってるの?」

「——知っている、というか。魔術師なら知らない者の居ない超有名な人に関わる名前なんだよ」

因みに魔術師ばかりが知ってるばかりじゃないゾ。多分厨二病を発症したことある人間だったらバリバリみんな調べたと思う……思わない? 私? いやいや私はね、そんな病にかかつ（ry やりますねえ!

「超有名人?」

「そう。最も偉大な魔術師……魔術王ソロモン」

「そろもん?」

「＜思わず吹き出しそうになったのを、ギリツギリになって耐えた。頭の上に七つ位ハテナマークが連なっている様に見える。そして口を半開きにして首を傾げているのが余りにも性質が悪い。破壊力が凄すぎる。」

「形容がし難いんですけど、なんかマンボウみたいにボケーつとしながら、目の光ZEROで焦点が明後日に飛んでるんですよ。いやもう、酷い。主人公がする顔じゃない。」

「うーん……コレは完全に脳みそが蕩けているお顔をしていらっしやる。まあ普通の人は別に知らなくても不思議じゃないかな……本造院君は？」

「＜……代紋とかの親戚か何か？」

「＜自慢じゃねえが、ソロモンについて知らない王選手権やれば間違いない位だぜ。」

「おおっと待ってくれ、今回はどっちの選択肢もちよけている。選ぶことが難しいじゃないか。ちゃんと片方は真面目な選択肢を用意して欲しいんですけど……ママエアロ（ホモ・サピエンスは寛容）」

「で、選択肢ですが。よし、ここはよりちよけた選択肢を用意してやるぜ！（発狂）」

「ううううううん本当に自慢にならないかなあ……そっかあ、二人共知らないかあ……そっかあ……」

「何をそんなに落ち込んでるんだい君。ソロモンって別に有名な王様じゃないだろ」

「うっ、それは、まあそうなんだけれど……なんだろう、ちよつと、哀しいなというか」

「おっ、ロマニどうしたー？」

「と、兎も角、そのソロモンっていう王様に関連しているのが、七十二柱の悪魔で、その一柱にフラウロスが含まれているんだけど」

「????」

「~~????~~立香と揃って首を傾げ、ロマニにハテナマークを乱舞させる貴方。」

「それを見たロマニは苦笑を一つして、息を吐いた。」

「うん。二人に七十二柱を説明するのは後日にしようか。多分、しっ

かりと説明するには結構時間がかかると思うし……今は、それよりも優先しなければならぬ事もある」

無知ですまんチョコヘプトナス！ ホモ君がシュレピツピしてたら普通に利益ありそうな気がしないでもない。よし、ホモ君を教祖にしよう（提案） こんな強面が教祖とかヘプトナス教が東城会の二次団体と化してそう。やっぱりエンコ詰めなきや……（使命感）

「というのも、彼らの向かった特異点が見つかった。というか、まあ見つからないとおかしいレベルだけだね。彼ら二人の移動方法は大分乱暴だ。その痕跡を此方で辿るのは、難しくなかった」

「そう言つて、ロマニがその手で示したのは、カルデアスに浮かぶ一つの点。三つ目の特異点。」

「それで……この特異点なんだけど、今までの特異点とはちよつと事情が違つてね」

「事情が違つて？」

「そう。今回の特異点は、何処か、という特定のできる場所じゃないんだ。特異点化の影響か、凄まじい勢いで地形変動を起こしちやつてる。で、その舞台だけ……何処までも広がる大海原だ！」

いやあ、遂に来ましたね、オケアノス。第三特異点。いやあオケアノスつて言えば征服王なんですよね。もしかしてイスカンドル君、オケアノス行きたいがために聖杯略奪したまである……？

「……海、ねえ」

「おや、オルタ殿。何か思う所でもおありで？」

「無いわよ。無いけど……」

おやおや？ おやあ？ アレかな？ オルタちゃん……海、見たくなっちゃいましたかまさかですけど！（煽り） オルタちゃん、サーヴァントになつてから、まあオルレアンの時が嘘だと思つて位にサーヴァント生活エンジョイしてるというか。ぶつちやけホモ君よりもエンジョイして（ry それ以上はいけない。

「一応、確認しておくけど、船酔いとかは大丈夫だったよな」

「ああ、はい。一応、ネロ陛下と海に出た時は全然、酔いとかもありません。康友も大丈夫だったよな」

〈大丈夫だ。

〈実はあの時今にも吐きそうになって、倒れそうだったんよね(大嘘) 大嘘をそこまでしつかり言うのか……(困惑) えっ、寧ろそこで嘘吐いたら一体どうなるんだろう……うっ、エンジヨイ勢の魂が(苦惱) ここでやらないのはエンジヨイ勢として失格……? (汚染) 良し、ここは下の選択肢で行こう(発病)

「……えっ!? マジ!?!」

「そうだったんだ。うーん、やっぱり用意しておいてよかったかな。この酔い止め」

〈そう言ってドクターが懐から取り出したのは、カプセル状の何か。どうやら、今回の特異点が確認できたときに用意してくれていたらしい。必要ではあるから(大嘘) ここはしつかり受け取っておかないといけないだろう。

大嘘って言っちゃってるんだよなあ。でも誰も気づいてないからヨシッ!(邪悪) これは次のユガには必要ない存在ですねえ……間違ひなく邪悪の化身です。もうそれはカリだと思っただけです。所で、クシエートラの力に苦戦した兄貴姉貴居る? 俺はサポートに連れて行ったカエサルをぶち殺されまくりました(激怒) 彼奴らのパンチ雑魚敵とかウツソだろお前wwwwってなる(真顔)

「じゃあコレ、ちゃんと渡しておくから落としちゃダメだよ」

はい。ロマニ特製酔い止めを頂きました。ロマニありがとナス! アイテムってのはあるに越した事は無いのでちゃんと懐に仕舞っておこうねえ。

「——それと、本造院君、君は後で僕の所に来るように。特異点で観測した異常に関してキチンと調べなきゃならないから」

〈思わず、ハツとなった。やはりモニタリングしていたロマニには分かっていたのだろうか、アレが、ただの精神異常の類ではない事に。そうとなれば……誤魔化すのも無理だろうと、貴方は静かに頷いた。「今回は、結構しつかりとチェックするから、その辺り覚悟しておいてね……良し。これで話はお仕舞いだ! 特異点攻略お疲れさま! 皆、其々自室に戻って休憩! 次の特異点攻略に備えて欲しい!」

——で、漸くマイルームです。ステータス振らなきゃ……(使命感)  
いやあ、なんか謎能力も覚醒して、藤丸君とはちよつと、大きな差が着いちやっただかな！ まあ藤丸君の強みは圧倒的なコミュ力ってそれ一。素のステータスではこつちの方が………？

あれっ、可笑しいな、経験値がすつからかんだア……でもって、なんか成長画面のスキルが増えてて、それが勝手に一個取られてますね。名前は？ ああ天神の呪、成程成程つまり俺の経験値はほぼこのスキルに持っていかれた、と。

F o c k   Y o u ♂

やってくれたねえおじさんの経験値をねえ!? おじさんの事本気で怒らせちゃったねえ!? 誰が勝手に経験値使って良いつつたお前！ オオン!?

しかもこのスキル、まだ先があるっぽいんですけど……まさかこれから先も、取れる状況になったら勝手に経験値使われて取得される？ 呪われた装備枠じゃねえか！ マジで外せない奴！

あーダメですねクオレハ、完全に成長できるだけの経験値が残っておりません……チクシヨウレオニダス王との訓練で地道に鍛えるしかないじゃないか(憤怒) レオニダス王の逞しいトレーニング受けるのは一向に構いませんけど！ (ホモの鑑)

と言った所で、呪われた装備枠が見つかった所で今回は此処まで。折角の成長が……うごごご。まあ、有能で無い訳ではないので、一応は良しとしておきましょう。

ご視聴、ありがとうございました。

## 拠点フェイズ その二

皆さんこんにちは、ノンケ（夢の巫女）です。水着アビーに食べられない……（二重螺旋）食べられたくない……？ 変態って？ 仕方ないじゃないじゃないか。アビーちゃんのデザインが完璧すぎるんですよ。

前は、お帰り二人共！ レフ死んでたね！ やっぱアイツ大した役割の人間じゃねえなガハハ（初手侮辱）で？ 彼奴って何て言っただけ？ えっ？ なにソロモン？ なにそれ知らない（無知）大體こんな感じ。藤丸君のアホ面が一番の見所さんという。えっ？ ホモ君の異常？ 気のせいでしょ（目逸らし）

――久しぶりにマイルームのベッドで目を覚ます。ローマのベッドが悪くなかった訳では無かったがしかし、やはりこちらの方が寝心地は良い……と、いききたい所だったのだがここは医務室である。

「どう、でしょうか」

「――相変わらず、医療的なアプローチでは何か特質した物を見つける事は出来なかったよ。全く、力不足を実感させられるね……」

昨日、ロマニから言われた体調チェック。セプテムでの異常は、当然カルデアの司令部にも筒抜けだった。しかし、そのバイタルの異常を証明するような要素は、やはり出なかった様だ。

アレだけ異常起こしてたのに体調面では健康そのものとか何か（恐怖が）芸術的。ただこれに関しては、ロマニが力不足ではない、とは思うんですよね。

「……マスター、本当にお体に、異常等、ありませんか？」

「大丈夫！ 今日元氣百倍！」

「俺の筋肉が今日も唸りを上げています……」

どんな筋肉なんですかね（困惑）ホモ君の筋肉はB・O・Wか何かである可能性が微レ存……？ いやだよそんな筋肉ハゲ、何処のタイラント先輩だよ。タイラント先輩をこんなチンピラハゲと一緒にしたな！ 法廷で会おう！

「それなら、宜しいのですが」

「それよりも、と貴方は香子と改めて向き直った。結局、終ぞしつかりとした形で行う事が出来なかつた。故に、遅れに遅れたがせめて、このタイミングで。」

「怖がらせて、本当にゴメン。」

「幾ら操られたからっていつて、乱暴は許されない。この責任はエンコ詰めて……」

「キュアエンコかな？ 久瀬の兄貴はいい加減桐生に本物の極道教えてきて下せえ……所で久瀬の兄貴ってエンコ詰めた後の方が強いんですけど特異体質か何か？ エンコって普通弱くなる行為だと思うんですけど。」

「んっ？ ホモ君は強面。久瀬も強面。つまりホモ君と久瀬。久瀬はエンコを詰めた方が強くなる特異体質。選択肢は下だな！（確信）「エンツツツ!!」 っ、いえそんな事しないでいいですから！」

「——ほう、僕の前でエンコ。あの医師にとって最も忌々しい文化を披露しようって言うんだね君は。ほおおおおおおおう？」

「あつ……じゃ、じゃ俺ギヤラ貰って帰るから……（避難）一人用のポッドすらない状況で怒りによつて目覚めた伝説の医療班リーダーから避難できる訳ないだろ、いい加減にしろ！」

「君には、一度は話をしておかないといけないね。日本のGOKUDOは、筋をキツチリ通すのを好むって話だからねえ。そんなに任侠文化がお好きなら、筋を通すって事を先ずは教えてあげるよ」

「何時もは優しく慈愛に溢れたロマニの笑顔が、殺意に満ちた鬼スマイルと化している。間違いなくコレは地雷を踏んだ匂いしかしない。マズい。危ない。死ぬ。逃げなければならぬと思つたその直後、手をそつと掴まれた。」

「マスターは、あまり無理をしないように、一度はお説教を受けてください……！」

「藤原の！ おのれお主、裏切つたかあ！ くつ、話せ、拙者として、したくてそんなセリフを言つた訳ではござらぬ！ 言つてしまったのは正直ノリと勢い！ 脳味噌を蕩かして立ち向かつただけにござる！ それはもう致命的だと思つて……？」

〈香子に掴まれ、振り払いたいがしかし、キャスターのパワーとて、普通の人間の彼を繋ぎとめるには十分に過ぎた。

「サーヴァントに良く心配された良いマスターだね、本造院君」

「大丈夫です、ロマニさんとして悪鬼じゃありません、きつとちゃんと話して諭して下さいはらずです。大丈夫ですよ」

〈多分そんな事ない。徹底的に絞られる。貴方の脳裏には、ロマニにキツチリ絞られて最早立てなくなるまで真つ白になった自らの姿があまりにも明確に思い浮かんでしまっていた。多分、特異点を突破するより辛いかもしれない。

〈香子さん放して！ 多分、洒落にもならない事態になっちゃう！

〈アレ悪鬼羅刹！ いや！ それ以上のナニカ！ ダメだよ！ イヤーツ！

イヤーツ！（選択肢下）

「大丈夫だよ。そんなに本気で怒ったりしないから。落ち着いて、大丈夫。優しくするからね。大丈夫大丈夫……ねえ？」

〈——終わった。ゆつくりと此方に歩んで来るロマニの顔を見て、たった一言、貴方の頭に思い浮かんだのはそれだけ。燃え尽きるだけで済むかどうか、その辺りを思考しつつゆつくりと貴方は目を閉じた。

〈暗転〉

……さて、燃え尽きた後のホモ君はどんな感じになって居るでしょうねえ。それでは、ご覧ください（てーてーてーてーん）

〈天井が、真つ白に見える。いや、元から真つ白な色ではある訳だが、こんな感想が出るのは余りにも徹底的に、しかも、心の奥にズシンと響くしつかりとしたお説教というのをしつかりとされると結構ぐらりと来る。

「……大丈夫ですか？」

〈大丈夫ではない。精神的な疲労が限界状態だ。体力も限界まで搾り取られた。けど、その代わりにロマニの言いたい事は痛いほど響いた。もうちよつと、冷静になろうと思っただのは間違いなかった。

背後に映る背景のロマニが余りにも怖すぎる。ずっと笑顔なんで



すよね……何だったらそっちの方が迫力があるまである。スツゲエ怖えだろオラア！（地震雷火事親父） 実際マシユの父親だから親父というのは間違っではない気がする。

「それで、マスター。ロマニ様からの提案、いかがいたします？」

「そう言われ思い出す。角に關してのデータを取るために、実地試験を行う必要があるかもしれないと言われた事を。説教の最中でも、ちゃんと大切な事なので聞き逃してはいなかった。

……つと？ コレは？ アレですかね。シミュレーター稼働のイベントですかね。

シミュレーターは、まあ、分かりやすく言えばサーヴァントの経験値稼ぎの場です。特異点で敵を殴り倒して経験値を上げるばかりではなく、修練場みたくカルデアでもレベルを上げられます。後、主人公も使う事が出来ますけど、やっぱり主な運用はサーヴァントを突っ込んで、強化する事ですね。

「しかし、どうやって実戦形式の訓練などするのか分からない。まさかカルデアのあるスペースの所で殴り合いでもするのだろうか。サーヴァント相手に。それは普通に死ぬると思われるのだが。

「どうやら、ロマニ様曰く、ダ・ヴィンチ様が尽力した事で、爆破で起きた異常も少しずつ改善し始めた模様です。その一環で、もともと存在した施設の一つが無事復旧したからそれを使う模様です……昨日も言っただけだと思っておりますが」

「それは完全に聞き逃していた。絶対に聞き逃してはいけないと思われる事だけを聞き逃さないように努力していたので、それ以外は完全に頭から抜けていた。

「やっぱりそうですね。あと、シミュレーター稼働でやれる事も増えるのでそれはそれで楽しみではあります。それについてはまた何れ……」

「何でも、『しみゆれえたあ』なる施設の模様で、凄まじき規模の幻術を引き起こし、その幻の敵と訓練を行うのだとか」

「シミュレーター……カルデアの施設だから凄そうだな。」

「ほう、恐るべき幻術相手に、俺のバットが火を噴くという事か。実

に面白い！

今宵は俺のバットが血に飢えておる……（選択肢下） 因みに、シミュレーターの敵からは血飛沫は上がらず、なんか、QPっぽい何かを撒き散らして死にます（小並感） 殴り倒してもあんまりぶち殺したという実感がありません。やっぱり殺るなら実体だよね。（サイコパス）

「え、えつと。あの、あくまで訓練ですからね？」

▽——しかし、一体どんな内容の訓練なのか。それを想像して、貴方は首を鳴らす。自分の中のある力がどんなものなのか……もしかしたら、何かしら分かるかもしれない。そう思うと、何となくやる気が湧いてきた。

「それと、多分今すぐという事ではないと思いますので……」

……露骨にキャラが残念な顔するの、本当に芸が細かいと思った（小並感）

と言った所で、今回はここまですになります。シミュレーター稼働で、これからFGORPGも更に加速していくと思われしますので、楽しみにしてください。ご視聴ありがとうございました。

## 拠点フェイズ その三

皆さんこんにちは、ノンケ（コロツケそば）です。全国の夢女子に必殺の致命を叩き込んだ魔剣使い、全国の厨二病男子も多分、無形、我流の二刀流の対人魔剣とか、正に男の子のロマンだと思います。

前は、Dr. ロマニをブチ切れさせて大変な事になりました。菩薩の手は真の正拳って言われてるし、普段は優しい人がとんでもない勢いでブチ切れるととんでもなく怖いのも多少はね？

〳〵— 今度こそ、自室にて目をちやんと覚ます事が出来た。昨日のとんでもない思い出が色々としっかり脳裏に刻まれてしまっている。まだ若干、思い出すと体が震える。レオニダスのトレーニングは、特異点攻略直後である為、体を休める為に、無い。

〳〵……折角だ。サーヴァントの皆と交流するかな。

〳〵 早速ロマニに実勢形式での検査を頼むとしようじゃないか。

〳〵 ダ・ヴィンチちゃんに工房の進捗を聞いてみようか。

おつ、選択肢が三つ。基本的にFGORPGの選択肢は二つなんで三つ目は何か条件を満たさないと出ません。恐らくは、工房で香子さんの諸々をやって貰ってるので、視察の選択肢が出たと思われれます。当然ながら限定的な選択肢。選ばないというのはいないです。

〳〵— ダ・ヴィンチちゃんの所に行ってみる事にする。図書館の設営は着々と進んでいるのか、それとも何か手詰まりなのか。もし手詰まりなら、何かしら手伝える事があるかもしれない。

という事でダ・ヴィンチちゃんの所に行きましょう。やっぱり

「— おや、本造院君。いらっしやい」

〳〵 ダ・ヴィンチちゃんが貴方を出迎えてくれた。その目の前に、立派なカウンターらしき何かが置いてある。どうやら、ダ・ヴィンチが直々に設計した物のようだ。図書館のカウンターとして、正にふさわしいデザインと言えるだろう。

「ふふん、どうやら気に入ったようだね。本造院君。シキブのお目にも叶って、このまま完成させたい所なんだけど……」

おつ、来ました来ました。厄介事（嬉し気） こういう任務は達成す

ると当然ながら経験値を得られるので積極的にやっておく必要があります。ただでさえ経験値を飲み込むブラックホールみたいなスキルが生えてしまったので経験値を獲得する機会が多いに越したことは無いんですよ。

「何か問題があるのか、と問えば、ダ・ヴィンチはケラケラと笑った。

「いやあ、調子に乗って設計したのは良いんだけど、外界から隔離されたこのカルデアじゃ物資が足りないことが分かってね。いやはや、貧乏は辛いね……という事で、カルデア職員の精神の安定を保つ為に、君に一働きして欲しいんだ」

「要するに、自分に諸々の素材集めをして欲しいという事だろうか。」

「当然YES！ YES！ YES！」

「NO……NO……NO……特異点では身を守るので精一杯だぜ。FGORPGを製作しているスタッフって、色々な作品のファンがいますよね。で、そのスタッフが遊び心を全力で活かして選択肢を作ってくれている様で。毎回毎回選ぶのがあゝたまらねえぜ！」

まあ私にYES以外の選択肢はあつて無い様な物ですけども。

「——成程、そう言う事であれば、自分に否というつもりはない。自分はカルデアの一員だ。その仲間を助けるのだから進んでやっても問題は無い。」

あつ、いいっすよ(寛容) カルデアでね、仲間を助ける仕事が出来ると、楽しみっすよ(正義の味方) SRUがロボットって言うのは言い得て妙だと思うけど、でもあんまりな表現だと思うのは私だけでしょうか。

「いやあ、そう言ってくれたい。では、こちらが集めてきて欲しい物のリストだ。受け取ってくれたまえ」

お任せください。こういう地道な仕事はね、エンジョイプレイヤーの嗜みみたいなところありますから。やっぱりね、良いエンジョイは、地道な準備からですよ。結局は。さあ素材のリストは……？

・八連双晶 四

・混沌の爪 四

・黒獣油 四

ほうほうほうほう、各四つ……ふぎけるな！ ふぎけるな！ 馬鹿やろおおおおお！ おまつ、銀素材に金素材ばかりとか！ どんな舐めた事してくれてんだマジで！ そんなアホみたいな素材集めるなんて、集めろなんて……！

やるじゃない（ニッコリ）

▽素材任務：図書館の素材改修が追加されました。

という事でド鬼畜難易度の素材回収任務が追加されます。いやあ、楽しいなあ！（ドMホモ）しかし、この中で多分一番きついのは銀素材という矛盾。案外出ないと思うんですよね。

「所で本造院君。先に来てくれた君に話しておくけど、君達に、特別……というか専用の礼装を開発する話が出て来てる。第二特異点攻略までに、カルデアの施設も復旧出来てきたし、サーヴァントへの援護に幅を作る為にも、ってね」

オオン!?(予想外) 専用礼装とな……? いやあ、そんな事言われちゃつたらやるしかないじゃないですか(覚醒) 良し、素材を寄せ。

「その為の素材集めもやってもらいたいんだけど。コレに関しては、君だけでじゃなくて、藤丸君にも頼む積りで、お願い、という形ではなく指令という形になるね」

▽そう言って、ダ・ヴィンチが素材リストを手渡して来る。

で、こっちのリストが？

・黒獣油 三

・虚影の塵 三十

なるほどなるほどね……ふぎけんな！（声だけ迫真）

さつきより難易度増してるやんけえ！ 特に塵三十とかぼつたりやろこんなん！ あほくさ こんなミッションねえ、こんなミッションねえ！

やるじゃない（ニッコリ）

新礼装はね、幾ら合っても困らないから。カルデア戦闘服か、アトラス院か、魔術協会か、優秀な礼装なら完全勝利UCですよ……

(ねつとり) 今のカルデア一般礼装も優秀つちや優秀なんですけども。やっぱりもう後一着くらいは優秀な礼装が欲しい所さんなのですよー。にばあ(ねつちより)

「因みに、その礼装なんだけど、デザインは特注性で、君にピッタリの物に仕上がる予定だ。勿論、このダ・ヴィンチちゃんのお手製さ。楽しみにしていたまえ」

そういえば、かのカルデア戦闘服って、結構なデザインですよ。体に密着して気密性も高く、それがダ・ヴィンチちゃんのデザインだとすれば……はっ(その時ホモに電流走る) さては極まった変態だなあオメー。

「楽しみになって来ただろう? とはいえ、どんな仕上がりかは、受け取るまでのお楽しみというところで。其処に至る為にも、素材集めを頑張ってくれたまえ」

∨ 万能の天才、レオナルド・ダ・ヴィンチがデザインを手がけた礼装ともなれば相当お洒落な物を想像してしまう。今までお洒落をした事のない貴方でも若干期待してしまうのも無理は無いだろう。

うっ、純朴なホモ君を騙している気がする……頭がっ……! でもまあ、ホモ君にあのびっぴちスーツ着せたくはありますねえ! 禿げたチンピラにピッチピチのカルデア戦闘服と来た。なるほど、変態だな! (歓喜)

それは置いておいて、結構良い感じにやる事も増えました。良い感じです。やれる任務が増えると、やっぱりモチベーションの増加につながります。

「——ところで本造院君、君はどんな服が好きだい?」

∨ うーん……落ち着いたデザインが好きかな、強いて言えば。

∨ うーん……敢えて派手なデザインを試してみたい気がする。

おやつ、ここで選択肢という事は、この選択肢次第で礼装が変わるんでしょうか……でも私が欲しいのはカルデア戦闘服なので、いや、アレって派手なのか落ち着いたデザインなのかどっちなんだ……? ……とりあえず、無難な上の選択肢をしておこうかなっていう。

「落ち着いたデザイン。了解了解……ふふっ、やっぱり君はそのデザ

インを選ぶと思つて居たよ。最高のデザインを期待してきてくれたまえよ？ 思わず、目を見開く様な最高のデザインを期待しておいてね☆」

パチツとウインクするダ・ヴィンチちゃんクツソ綺麗……ホントしつこいようですけどなんでアダルトダ・ヴィンチちゃんの薄い本無いの……？ 書いて♡ 書け（威圧） 書いてくださいお願いします何でもしますから！

まあ、それはおいておいてですね。

とりあえず、ダ・ヴィンチちゃん工房では、こうして礼装の開発などしてくれるので選択肢が出たら積極的に立ち寄るようにしましょうといったところで。今日は此処まで。ご視聴、ありがとうございます。

## 拠点フェイズ その四

皆さんこんにちは、ノンケ（不可能無し）です。あの名言に間違いはありましたが、実際彼に不可能は無いのではないのでしょうか。そう思う理由？ ゲッテルデメルングを今すぐ見返すんだよおうあくしろよ。

前回は、凄いい勢いで納品クエストを頂きました。一気に二つ！ しかも黒い油を六つは確保しないといけないそうです。ひゅう！ 大型エネミー狩りが捗るなあ！（半ギレ）でもそういうの好き、モット頂戴……！

＜さて、ダ・ヴィンチの所にも行ったし、次は何をするべきか。

＜次は、やっぱりサーヴァントの皆と交流するかな。

＜ロマニに実勢形式での検査を頼むとしようじゃないか。

コレは遅かれ早かれみんなやる流れ。となれば、ロマニと検査するのを優先しましょうか。ダ・ヴィンチちゃんは限定だったので最優先だし、多少はね？

＜ロマニの元へ向かう……その前に、今回の件にアドバイスを貰っている香子を呼んでから向かうべきだろう。そうと決まれば、貴方は直ぐに香子の元へ向かう事にした。とりあえずは、彼女の自室に。

よし、実質香子さんのイベントだな！（大雑把） やっぱり香子さんは藤丸君にとってのマシユポジションなんでしょうか。となると何時か香子さんもホモ君の事を先輩と呼んでくれるようになる……？ 魂が滾る（変態発言）

――先日までは、やはり封鎖されていた場所が目立っていたが、流石に復旧、というか修理も進んできたようで、使える場所も多く増えてきている。何時かこの中に、図書館も並ぶ事になるのだろう。

「……」

＜そう思っ居た直後の事だった。一つの扉の前で立っている、香子を見つけた。自室ではないが……取り合えず、貴方は香子に声をかける事にした。

香子さんオッスオッス！ 今日も麗しゅうございます。という事



デート行こうぜ！ 濃厚な殴り合い（デート）によお！ 殴り合いするのはホモ君だけなんですけどもね初見さん。

「あら、マスター。お早うございます」

「お早うと返し、近寄ると……その先には、どうやら地下に続く通路らしきものが見えている。ここは初めて見た。何故ここに居たのか、聞けば、彼女は嬉しそうにはにかみながら答えた。

「この先が、私の図書館になる予定なのです。地下の広いエリアでやらせてくださるそうで、今からちよつと下見をしに行こうと思つてまして……そうだ。マスターもご一緒はいかがでしょうか」

「全然かまわないぜ、麗しき女流作家様。」

「——お手をどうぞお嬢さん。エスコートさせて頂きますぜ。」

地下図書館の下見ですか。あ、いつすよ（快諾） ロマニの用はどうするか？ 女性からの誘いを断る非紳士のホモとかおる？ 理由を言えばロマニも納得してくれるでしょ（根拠無き意見）……というか断る選択肢君が存在しない!? 選択肢の意味とはなんぞや？

「うるわっ!? も、もうマスターつたら……私の事、揶揔っていらつしやるんですか」

「揶揔っているつもりはない、とだけ返し、彼女の手を引いて、歩き出す。折角の図書館の視察だ。早く行く事に越したことは無いだろう。コツコツと良い音をさせてドンドンと奥へと向かう。」

所でカルデアに地下あんの？ って言われそうですけど、格納庫だとかも地下にある様なので、地下空間はある模様です。で、其処に香子さんの図書館を置く事になった模様なんですけども。

「——わあ！」

「そこにあつた空間は、想像よりもはるかに大きな空間だった。正直、まあビルの一室の会議室、位の大きさを想像していたのが……甘かった。其処は、恐らく倉庫として使われていた場所なのだろうが、高さも、大きさも、想像の二倍近くあつた。」

「これだけ大きければ、沢山の本が置けそうですねえ」

いやあ、スツゴイ大きさだなあ……なんだかんだシャドウボーダーが普通に入るレベルの大きさですからね。そういえばメカエリちや

んが加入した場合、また別の格納庫送りになるのでしょうか。

「そう言えば、マスター。ダ・ヴィンチ様から話はお聞きになりましたか？」

「貴方は領いた。先ほど、丁度素材回収を頼まれたばかりだ。結構ガッツリとした素材を求められたが、ここまで大きな図書館に使われるのだ。寧ろやる気になって来た感じすらする。

「私に任せて頂ける図書館に関連する物ですから、積極的に素材集め、お手伝いさせていただきます……というか、マスターに任せきりではないけませんし、私が主軸になつて集めますとも！」

おう、頼むゾ……じゃなくて！　ここはホモ君、漢を見せる時ですぞ。サーヴァントを狩らないと手に入らない素材つて訳でもないの、死にかけるくらいホモ君に頑張つて貰えばいっぱい素材も取れるでしょ。(ホモ君の) 命は投げ捨てる物……！

「あまり、マスターにも無理をさせる訳にも……つてあぁっ!?　マスター!?　そう言えばロマニ様から検査を言われてましたけど!？」

「あつ、と思い出した。そういうえば、そもそもそれに関連している彼女に同席してもらおう為に探していたのだが……完全に忘れてしまっていた。香子のエスコートに夢中になり過ぎていた。

「で、でしたら早く行きましょう！　時間は指定されていませんけど、早めにやった方が宜しいかと思えますので！」

予防接種かな? (小並感)

——という事で、ロマニの元迄向かきましょう。しかし、どんな検査をするのか、ワタシ、キナリマース(外国かぶれ)　まあ、出てきたとしても多分ノーマルエネミーくらいだとは思いますが。 「それにしても……ロマニ様は、どんな感じで、実戦形式をするお積りなのでしよう。エネミーを準備する、という話でしたけど」

「正直分らない。とはいえ、自分の実力を図るための機会なのだから、いっそ大暴れできる位の相手を用意してもらいたい所である。

あつ、コレはさては、結構なエネミー出てくるな……っ!? (察知)　こういうテキストはフラグって古来から言い伝えられてるから。うーん、とはいえ、相当のエネミーじゃないと今のホモ君相手じゃ力

不足というのは、ホモ君のコメントに同意なんですけど。

「えっと、こちらの様です。入りましようか……所で、マスターそのばつと、まだお使いになるんでしょうか?」

〈そう言われ、持参して来たバットに視線を向ける。使い込んで、大分ボロボロになってしまっていて、特に呂布を殴りつけた時のだろうか、大きくへこんでいる場所もある。確かに、何時壊れてもおかしくないだろう。

「……ダ・ヴィンチちゃんに相談してみましようか? もし戦っている最中に折れでもしたら、一大事では済みませんし」

「——じゃあそれも、序でに計測してみようか?」

「あ、ロマニ様」

あ、鬼のような説教技術を持つてる人だ! すいません、もう二度と逆らいませんからお許しください……! まあ、それは置いておいてですね。どうやらロマニの待ってるこの部屋がシミュ部屋の様です。

で? バットの測定もしてくれるって? あくもくどうすつかなく俺もなく(重役気取り)

「シミュレーションの最中は、使用者のデータを細かに測定できる。其処から適正な武器の大ききさとかを計るのも、難しくは無いんだ」

「はあく……今の技術の進歩というのは空恐ろしいのですねえ」

〈となれば、ダ・ヴィンチちゃんに、礼装だけではなく、得物も作ってもらおう事が出来るのだろうか。余計にこの実戦形式での検査が楽しみになつて来た。

さすダ・ヴィンチ。なんでも出来てこそ万能の天才だよなあ!?(煽り) というか細かいデータが計れるって事は、このチンピラハゲの股間のサイズも(r y すいません、下賤な感想が飛び出してしまいました。

「という事で、此方の準備はもうできてるから、早速始めようか……しつかりと準備は、出来てるかい?」

〈〈おう上等。ぶっ壊してやるよ。

〈〈頼む、一日だけ待ってくれっ……!」

一日も待つとか無駄無駄無駄無駄無駄アツ！（半ギレ）速攻挑むのが基本だつてそれこそが一番言われてるから……さあ、0で極めたスラッガースタイル、見せつけてやりましょうか。因みに一番使い込んだのは狂犬スタイルです（最狂厨）

と言った所で、今回は此処までとなります。次回はシミュレーションで色々なエネミーをボコすだけの回になります。恐らく、大抵はカットとなるでしょうが、まあそれくらいホモ君も強くなってるし、多少はね？

ご視聴ありがとうございました。

## 拠点フェイズ その五

皆さんこんにちは、ノンケ（ガラテア）です。彼女、この表記が恐ろしいほど似合う気がします。なんでしょね。パワーがあるからでしょうかね。うん。王様に会うっていうパワーは本当に凄まじい。そして、完全にナイチンゲールタイプ。

前は、香子さんと図書館見学、あんなだけ広げりやいっばい本も入るって話をしてたらロマニの事をすっかりと忘れておりました。ロマニファンの皆さま、お許しください！

「じゃあ……始めるでしょうか！ 設定レベルは、取り敢えずこれくらいで」

「そう言って出現したのは……なんだか、ちよつと撓れた、というか、くすんだ色のワイバーンだった。見た目からして若干哀しいが、しかしボロボロになるまで一切の容赦はしないつもりである。」

「マスター！ くれぐれも無理はなさらぬように！」

「まずは、ちよつと出力を上げてみてくれるかな。細かい調整が出来なかつたら、全力でも構わないけど」

「あの感覚を思い出せば、ある程度は出来る。貴方は、体の奥底から力を、開放するつもりで呼び起こす。そうすれば、バチバチと額に電流が走り……」

はい、角付きホモ君の出来上がりっ！ さあ、矢でも鉄砲でも何でも持って来いってなもんですよ。因みにどつちも喰らったら普通にお亡くなりだと思いますけど。当たらなければどうという事はないから。

「本当にすごいバロメーターの上がり方だなあ。よし、先ずは軽く流す積りで戦って見せて欲しいな。あ、そうだ。絶対に無理はしないように」

「了解した。とって目の前のワイバーンにバットを構える。べきべきと首を鳴らしてみれば、向こうも警戒するように唸りを上げていく。まるで本物の様な迫力に、貴方は思わず一つ、舌なめずりをして見せた。」

——と、言ったような感じでホモ君のバトルタイムと思ったでしょう？ 残念、その辺りは全てカットだ（無慈悲）

だって、だって……やる事が全く変わらないんですもの……！ 今までのエネミー戦と……！ 全く、変わらない……絵面……見所、搾りかす……！ 意味なし……！ 写す価値なし……

く容赦ゼロカ……ツトオ！く

ということ、見所さんが出てくるまで全力で飛ばしました。ワイバーンだの、兵士の群れだの、海魔だのと、大した敵も出ず、それらを単調に只管にシバいて、これが恐らく六戦目近くですね。

「本当に普通の敵なら作業だね……よし、じゃあこころで少しギアを上げて行くよ。辛かったら、出力もちよつとずつ上げていって。最悪の場合、香子さんが抑え込んでくれるから、まあ、安心して、というのもおかしいけども」

「マスター！ そうなる前に中止を申し出て下さいね！」

く今は、丁度エンジンがかかって来たというのに、と若干不満になったがしかし、しょうがない。未だ自分に完全に制御できるものではないと貴方が一番良く分かっている。精々掴めたのは、その触りくらいで……

——ビーツ ビーツ ビーツ

く……とか思ってたなら、なんか不穏な音がガンガン奏でられている。何事かと思ってロマニに向けて全力で振り向いた。そしてそれに応えるように一瞬で首を逸らして見せたその様子から、明らかにトラブルだと察した。

えー、当然のように機材トラブルでございます。まあカルデアと機材トラブルは親友みたいなもんだから（暴論） 画面がね、ドンドン、真っ赤に染まって……あー、すげえハリケーン（ピンチ）

「ええつとねえ……物凄く申し訳ない事を言うと、操作ミス……あの、難易度がね、あの、すつごいレベルで跳ね上がってるんだよね。いやあ、コレはやっちゃったかなあ、しまったなあ、シミュレーター操作、慣れてなかったからなあ……」

くそんな事言われても……と思っていれば、目の前に現れる一匹の

エネミー。それはワイバーンの姿をしていたが、最初の一匹とは迫力の桁が違う。目は紅く爛々と光り、灰色の肌がシミュレートされた太陽の光を跳ね返し、鈍く光っている。

こ、これはっ！　ワイバーンオリジナル!?　高レベルエネミーじゃないですか！（歓喜）　こういう見所もつと頂戴……！（欲しがり投稿者）

「——マズイ、本当にコレは！　設定レベルがサーヴァント並みになってる！　サーヴァントにとつてはそこ迄でも無いかもしれないけど……ちよ、ちよつとだけ時間をくれないか！　直ぐに強制終了するから！」

うっそだろお前！（大草原）　ここで戦闘続行しないと笑っちゃうぜ（血に飢えた狼）　折角出て来て貰ったドラゴン君にはホモ君のおやつになって頂きましょう。おらっ経験値寄こせっ！

△了解した。何とか逃げ回ってみる。

△丁度いい機会だ。俺の全力全開を試してやるよ。

あ、当然ながら選択肢は下です。

「マスターッ!？」

△香子の声を背中に、貴方は答える。どうせシミュレーター、と高をくくっている訳ではない。寧ろ、この限界時にこそ、自分の全力を出して、検査のデータを集められるものだろうと。

「で、ですが……!？」

△どうせ強制終了まで、と最後に締めくくり……貴方は、体の奥底にもう一度意識を集中させていく。そして、今度はキャットと一緒に感じ取った、何も気にせず逆に振り切る感じを思い出し……額が、ビリビリと痺れていく。

さあここで角がしつかりと形を得ていくう！　後、第二段階に入ったホモ君の表情が普通より凶暴になってるのが特徴的です。もうここまで来るとマジでチンピラからただのヤクザにしか見えないっというこの。

「——ちよっ、本造院君!?　何やる気だしてるのってあああああバロメータが凄い変動ををを、き、記録しないと、いやそれより先に

まず強制終了をあちよつと待つて終了まで五分くらいかかる」

「……(ぱたり)」

「ああつ!? 式部さんが倒れた! い、医者! 誰か医療班! ああいや僕がトップだった! いやあああああ!」

◇大混乱。それを尻目に、頭の中のタイマーを五分に設定。それまで、全力でかつ香子との約束を守るように、戦う為の動きを想定しながら前に出る。手元のバットは、最も重さの乗る先端部分を、遠心力で振り回すように意識。

見ろよ、このバットを……命を刈り取る動かし方をしてるだろう? ぶち壊してやるよその青白い横っ面をよお! 五分とは言わねえ、カルデアドラゴン三分クツキング! ハイクを詠め、カイシャクを仕る!

吠えるドラゴン、その横っ面に、先ず黄金の回転から繋ぐホームランスイング! こんな良い音させちゃってさあ、誇らしく無いの!?

——きやしやー

そんな情けない鳴き方でこつちをぶち殺せると思う……いや痛つ!?! 待つてダメージがシャレになつてない上、今のダメージで怯んだ感じじゃなくて普通に鳴いただけ!?! 馬鹿な、奴には此方の攻撃が通じていないのか……っ!?

——しやぎようー

ダメだつ! こんなクツソ情けない鳴き声してるけど迂闊なダメージ貰つたら普通に死ぬる! 死人がシミュレーターとは一体何なのか! それを考える前にぶち壊せてんだよ! 考える前に正拳突きから教えるんだよ! あ、でも死なないようにヒット&アウェイで出来れば事故らないようにやろうね(チキン)

——ぎやおーん

げつ、なんかエフェクトが付いた! ワイバーンオリジナルが使うスキルは確か……無敵付与!? 糞みたいなスキル使いやがつて……これは宇宙塩を味噌鰯だ! 許せる! いや、ちよつとこれは許せへんし……

とはいえ無敵エフェクトの付いている間は兎に角回避安定ですよ。



ちよつと、(敵の射程内から)ズレてみるかな……

——ぎやしゃあああ!

今更迫力を出したって遅いつてんだよ! どうした、滑空からの突撃、全く当たってないぞ! 当ててみる! 押し倒して俺をママに見せろつてんだ! ハゲとドラゴンのとか誰に対して需要があるんですかねえ……

——しゃああああつ

あつ、羽ばたきからの愚風斬はやめて……クリティカル出ちやううううううつ! おらつ、トベホモツ!(緊急ダイブ) あつぶえつ!

(回避成功) お前もう許さねえからなあ?(一転攻勢) 無敵切れてんだらう!?! 無敵切れたお前なんてうんこ野郎だよ! ハハハツ(嘲笑)

笑)

ホラ頭に一発、更に一発! バットをヌンチャクのように使うのよ!

只管ラツシユラツシユ! ほら、これ、バットね……?(確認) 啞

えて……?(優し気) じゃあそれ噛んだまま頭蓋ごと踏み抜いてやるつてんだよお!(豹変)

∨——貴方と、ワイバーンの戦いは一進一退。決してどちらが圧倒した、という事は無かった。結局、渾身の一撃を叩き込もうと、バットを振りかぶった貴方の額が、嫌な唸りを上げた所で……

「——間に合った! 強制終了!」

∨ロマニの一言で、目の前のワイバーンは消え失せたのだった。

……っはあくっ(半ギレ) 逃げるなアアアア! 責任から(r y

と言った所で、今回は此処まで。結局奴の無敵時間稼ぎさえなければ倒せてたと思うんですけど(慢心) そんな事ばかり言ってるから足を掬われるんだよなあ……ご視聴、ありがとうございました。

## 拠点フェイズ その六

皆さんこんにちは、ノンケ（ノツブ限界民）です。カツツ実装まで本当に長かったですよねえ。で、実装されたら皆の予想をはるか上をいく形で気持ちの悪い（誉め言葉）実装となりました。

前は、見所さんのない連続バトルを一括カット、そしてその後が始まった対ワイバーンオリジナル戦を全力で殴り合いました……結局決着はつかず。今度は彼に勝とうと思いましたが（小並感）

で、画面明けて……おや、ホモ君がああワイバーンオリジナルと殴り合ってる所ですね。うっわ、スツゴイ凶悪な面。で？ 引いて行ってニツコリ笑顔の香子さん、あつ、おい待てい（江戸っ子）俺ちよつと用事思い出したから、ちよつと、下駄貰って出て行くから……（逃走）

「——私が怒っているのはです、マスター。無茶をしたから、という理由ではありませんよ。マスターは、決して無理をなさらないように、引き際を分かった戦い方をしていたように見えますので、反省はしてください」

「何時もの正座……ではなく、完全に土下座になっている。正座ばかりでは誠意が伝わらないと思うので、そろそろ土下座にシフトした。人理修復も前半も前半でこれでは、最後には地面に埋まっているのではなからうかと思う。」

「私が怒っているのは、残り五分、という所で私が気絶する直前、見たんです。『五分というどうしようもない時間の間は、自分も好き勝手に暴れられるだろう』という様な感じでニヤリと笑っているマスターを」

「えっ、そんな顔してたの？ 嘘でしょ？ 全然見えなかったんだけど？」

「ええ。とてもしつかり見えましてごさいます。香子は見逃しません」

とか言ったらホモ君が早速追い詰められて草、チンピラの迫力が欠片も残ってないの恥ずかしく無いの？（嘲笑） 前回ね、泰平一家

だったらいい所まで行けそう、とか思ってたら一気にただのチワワですよ。

「ツハア……何が哀しいかと言えば、マスターが言い訳を入れるような、悪知恵をつけて仕舞われた事です。もうちよつと昔は、素直な良い子だったと思うのですが……!」

「あの式部さん。彼は貴方の息子さんではないと思うんだけど」

「マスターは！ 子供より！ 手がかかりますので!」

「アツハイ」

ろ、ロマニが負けたつ……？ 母は強しっていうし。いや香子さん母親では、無かったと思うんですけど……そ、その辺りは全く詳しく無くて……っ! (歴史弱者)

「兎も角！ マスターにはもつと反省していただかないと！ 良いですかマスター！ 変な悪知恵をつけてないで、先ず無茶をしない事を覚えてください！ 宜しいですか！ 宜しいですね!」

＜昨日のロマニに負けず劣らず……いや、間違いなく此方の方が桁違いに迫力があるだろうか。思わず縮み上がってしまったのもしかたない、と思いたい。

頼光さんみたいな発言してんな香子さんな。同じ平安属性だから通ずる物があるのだろうか。まあそれは兎も角としても、ホモ君に無茶させない事を覚えさせるのは特異点一つ攻略するのよりも多分難しいから……

「まあ、とはいえ、さっきのハプニングのお陰で、いろいろと情報は手に入ったと思うから。うん。このデータから、色々出来るようになった。これでちよつとでも本造院君の情報が掴めると良いね」

「……そうですね。せめて、そうなる事を祈りましょう」

＜香子さんの迫力が霧散していく。どうやらお説教の時間は終わりのようだ。気を逸らしてくれたロマニには、後で何かしらお礼をしながらはいけないだろう。

「えっと、疲れてるなら医療室に寄ってくれ。お詫びも兼ねて全力で治療をさせて頂きます」

「ありがとうございます」

「ああ、それと。後でまた、溜まったりリソースを使ってサーヴァント召喚を行おうと思うから、それまでに用事を済ませておくのと良いんじゃないかな。正直、今回の一件で戦力はあるに越したことは無いって事が良く分かったし」

おおつ！ サーヴァントをまだ召喚させてくれるのか……つ！

いやあ、沢山サーヴァントが来てくれてウレシイ……ウレシイ……

「分かりました。ではマスター、何かご用事などは？ 何かあるのであれば、お付き合いたしましょうか？」

〽是非お願いいたします！

〽いい、いいえ。その様な雑事を藤原香子様にお問い合わせする訳には……

馬鹿野郎！ ウカツ！ 下手に断ればそれこそさらなる怒りを買うぞ！ ここは素直にシンセツを受けて、オジキ？をするのだ！（迫真）名前を呼んではいけないあの人っぽいですね（半笑い）

「分かりました。それで、何をなさいますか？」

〽サーヴァントの皆と、色々交流しに行こう。

あつ、そつかあ（理解）これ、ロマニを最初を選んでたら香子さんについて来て貰えたんですね……ダヴァイツ！（舌打ち）これでは香子さんに先輩なんて呼んでもらうのは夢のまた夢である！

〽サーヴァントの皆と、色々交流しに行こう。

「分かりました。ええつと……それで、皆様が何処に行ったかは分かりますか？」

〽其方は全く分からない。色々とうろついて、出会った人と交流しようと考えていたのだが……ではだからと言ってうろついてみようか、とは簡単には言えない。香子連れ回す事になる訳であるから「あ、あの……もしかして、出会ったサーヴァントの皆様と適当に世間話でもしよ的な感じでしょうか？」

まあホモ君ですし……大抵の物事が行き当たりばったりみたくないもんでしょ（暴論）とはいえ誰か特定の人を選んで交流しよう、と言われても絶対に選べない情弱なので行き当たりばったりしていつて全員と出会う位で良いんだろ上等でしょうか？

「まあ、マスターらしいと言えばマスターらしいですけど……まあ、召

喚までにお時間もあるようですし、行ってみましょうか。それで、何方に行きましようか？」

「医務室に行ってみる。」

「カルデアスのある部屋に行ってみる。」

「敢えて召喚する部屋に行ってみる。」

これ実質選択肢は一つみたいなもんじゃないでしょうか？ だって、カルデアス以外完全にスカ選択肢にしか見えないんですが。

……いや、逆に考えるんだ。召喚部屋に行っちゃっても良いさと考えるんだ。何を恐れる事がある踏み込め！ 今は悪魔が（ry  
まあ、本音を言えば、一応考えが無い訳でも無いんですけども。いや、召喚されるって事前に告知されてたならデオン君ちゃんとかは先に集合してそうだなって（ホモは自称知的）

ま、色々言っておいてカルデアスなんですけどね（無慈悲）  
ここで逆張りする意味は無い、安全と安定こそが我がプレイの……プレイ……エンジンジョイ……つまり逆張りが見所さん……召喚部屋だな（目が爛々）

「医務室に行ってみる。」

「カルデアスのある部屋に行ってみる。」

「敢えて召喚する部屋に行ってみる。」

「え？ もう、召喚部屋に？」

「どうせ後に皆集結するのだ。其処に行って待ってれば、遅刻もしないし来たメンバーとも話も出来るだろうと。我ながらいいアイデアだと、貴方はにやついてしまう。」

「な、なるほど……？」

おうなんだそのガバガバアイデア。そんなかつ丼もうどんも食べたいから両方頼めば正解だな！ 的なピザ回答やめろ。香子さんも困惑してらっしゃるじゃねえか……これだからちよつとカツコつけた後のホモは信用ならねえんだ。

「では、取り合えず行ってみましようか。遅刻しないのに越したことは無いと思いますし。これくらい早く行けば、私たちが一番乗りでしょう」

「後から遅れて来た立香を煽ってやろうかな。とか考えながら、貴方は足を進めていく。そうして暫くしてみれば……誰もまだ来ていない召喚部屋に辿り着く。がらんとした室内の隅に、貴方は取り敢えず腰を下ろした。」

「ここまでヤンキー座りが似合うマスターもこのエンジョイプレイ位なもんやろうと思うと感慨深いですね（棒読み）そのくせヤンキーで弄られると凹むとかなんだこのツツパリ顔……（見掛け倒し）」

「——おや、私たちが一番乗りかと思つて居ましたが」「そんなに楽しみだつたりしたのかい、新しい仲間が。なんだか妬けるな、なんてね」

「そんな部屋に最初に足を踏み入れたのは……貴方と契約するサーヴァント二人、メドゥーサとデオンだった。軽く手を上げて挨拶すると、折角召喚まで時間がある事だし、会話に華でも咲かそうかと此方に手招いた。」

「うわあ華やかあ。藤丸君が結構王道なカッコいい系で固められている分、こつちは華やかさに結構寄つてる気がします。まあ、マスターがこの強面ですからサーヴァントで中和しようっていうゲーム様の御威光だろうと思ひましよう。」

「これが例えば、ホモ君、マイフレンド、金時、槍ニキ……ヤンキー集団かな？（困惑）」

「これが例えば、ホモ君、ダディ、オルタニキ、以蔵さん……おつ、さては東城会直系二次団体だな！（確信）」

「つて感じになつてしまうので。ホモ君はどうしてこんな強面になつてしまったのか。もうちよつと主人公らしい面になつて欲しかった。」

「と言つた所で今回は此処までとなります。ご視聴、ありがとうございます。」

## 拠点フェイズ その七

皆さんこんにちは、ノンケ（偽ドレイク）です。一応、実装されていないとはいえ、サーヴァントである事には変わりないので、紹介していききたいと思います。好きかどうかは兎も角として。兎も角として！！！！

前は、香子さんに怒られて、怒られて、めっちゃ怒られました。許して……許して……許された！ で、お許しを頂いた事ですし、よしサーヴァントと交流するぞするぞ！ 誰とする!? 全員だろうが！

「——しかし、そんなトラブルがあったとは。なんだったら、令呪で知らせてくれれば飛んでいったのに」

「カルデアの令呪にそう言った強制力は無かったと思われませんが」

「いや、位置を知らせる位は出来るんじゃないかな流石に」

「それも出来るかどうかは不思議なほどに分からない。サーヴァントのサポートに特化している、と苦笑交じりにロマニに言われて、その瞳が、とても哀愁を称えていたのを覚えている。

「まあ、兎に角、君の能力を理解する助けには十分なると思うけど」

「……そうですね。その力がどんな由来の物か分かれば、制御の目途も、少しくらいは立つでしょうね」

「とか考えて居たら、メドウーサにじろりと睨まれてしまった。彼女に言われた事を思い出せば、そりゃあ使うこと自体を宜しいとは思われないのは当然と言って良いだろうが、しかし制御の為なのだから許して欲しい。

使うなって言ってるの、ねえ!? 使うなって言ってるんだYO! メドウーサさんの気遣いをね、無に帰すとか、やっぱり此奴ホモの層ですよ！（楽し気） 投稿者あるある、自分のキャラが落ちる分には弄る部分が増えて助かる。

「私は未だ詳細が分からないんだけど、危ない物であることは分かっているからね。ロマニの成果が出て欲しいのは、君と同じだよ」

「——出来れば、次の召喚で専門家が出てくるのが理想、ですかね」

「一応、専門家は香子が居るのだが……まあ、そう言った事の専門家は多いに越したことは無いというのは間違いないだろう。問題はその専門家がどんな方かにもよるのだが。まあ問題は……」

『ンンンンンンンン！ マアスター！ その症状に拙僧心当たりがありますぞ！ さあさしつかりと講義いたしますので、先ずは拙僧の部屋に！ 大丈夫ですぞ！ 特別製のモノを用意してお待ちしております』

「～みたいな頭おかしい平安系サーヴァントとかが来てしまったらどうなるのかという話ではあるのだけでも。まあ、そんな頭のおかしいサーヴァントはこの世に存在しないと思うから大丈夫だと思う……なんか、具体的に想像出来てしまうのが不吉だが。」

「おつ、どこぞの平安平安敗北者かな？（一撃ぎ） まさかのこんな形で前倒しで出てくるってどんだけ出たがりなんだよ晴明bot君。」

「おや？ どうなされたんですか香子殿。此方を見て、なんか見えてならない物を見てしまった、みたいな顔をなさって？ もしかして泰山解説祭発動しちゃっ……あ、これはもう割れてんだよなあ……（確信） ホモ君の脳内拙僧を見ちゃった感じだ。脳内拙僧ってなんだよ……」

「——専門家ですか。専門家……ですか」

「香子、なにか心当たりでもあるんですか？」

「あ、はい。二人ほどあるのですが。ただあの方々が出てきて下さるか、というのは分からない所ですので、おいそれと口にするのも……はい」

「まあ、香子さんもあの平安リンボと人でなし陰陽師を知ってるからね。アレ、こつちを見てる。そして目が合った……そして互いに頷いた。もしかして何か通じるものがありましたかお二人？」

「香子の縁で案外あっさりとして出て来てくださるのではないですか？」

「……何方の方に出て来られても、私とても、とても困るのですけれど……」

「まあ、師匠と、その宿敵相手ですから、どっちも……アカン胃が死ぬう！ 壊れちゃ～う。まあでも召喚出来た所で我が家には可愛く、そしてお強いキヤスターが居るからどっちも首ですけど（容赦せ



口)

「そ、それは兎も角といたしました！　そもそもロマニ様の検査結果で、専門家が必要ないほどに精度の良い物が出るかもしれません！」

「——それは、案外厳しいかも知れませんよ」

「えっ?」

◇そう香子が言った直後、メドゥーサがぼそりと零した。

「あの、メドゥーサ様、それは一体」

「……いえ、専門家でも無い者の意見なので、聞き流して頂いても」

いや明らかに何か知っている人の言い方、だろうがい！（半ギレ）

ちやんと言いたい事は言ってください！　ホウ、レン、ソウ。分かる？　社会人としての常識。メドゥーサちゃん……俺さあ、悲しいよお！　メドゥーサちゃんに誤魔化されてさあ！

……分かりにくかったでしょうか。正解は、龍が如く0出演のSGWさんのパロディです。あの人凄い好き（ドストレート）でも、NSTNさんはもつと好き（超ド級ストレート）MJMの兄さんはもつともつと好きです（大和級主砲）

「おや?　皆早いね。召喚まで時間があるって言ってたんだけど……」

◇——そんな話を話していたら、どうやらお時間だったようで、ちやうどロマニが召喚部屋に入って来た。だが、立香達はまだ来ていない。となるともうちよつと待つ事になるのだろうか。

「じゃあ今の内に準備を進めようか。はい、これ本造院君の分。今日は藤丸君と二人で召喚するからね」

ええっ?!　きよ、今日は腹いっぱい食べられるんですか!?　お代わりも良いぞ！　毒ガス訓練始まりそう（小波）　いやあ、しかし、凄いなあ。こうやって沢山のサーヴァントと交流できるって言うのはエンジニアジョイプレイの醍醐味だろうか……!」

「二人のサーヴァントが一人ずつ増えるっていうのはとても大きい。いや、実を言えばカルデアから送れるサーヴァントには限界、というか、人数制限があるんだけど。でも此方の戦力が増えれば、戦術の

幅が増えるから間違いなく利点だ」

「人数制限があるのは初めて聞いたが、まあロマニの言う通りではある。手元の石でカラカラと音を立てながら、次に召喚される仲間の事を思おうとして……やっぱりさっきの謎イメージが頭から離れないのでやめた。」

「……」

「そして、また香子と瞳があつて、何故か頷いてくれた。」

……彼つて、平安時代からああじゃなかったんですよね。リンボになつてからああなつちやつた可哀そうな人つていう認識なんですけど、アレ？ どうしてそのイメージで香子さんが悲痛な顔をなさっているんでしょうか……？

「ごめんロマニ！ ちよつと遅れた！」

「先輩、多分お時間は余裕あると思われますけど」

「ああ藤丸君、マシユ。いや、大丈夫だよ。全然時間通りだとも。寧ろ、ちよつと余裕がある位だよ……ジャンヌ・オルタ達は？」

「えつと、レオニダスがジャンヌにトレーニング勧めたら、ちよつと、オルタがムキになつちやつて、そろそろ来ると思うんですけど……」

「——お待たせいたしましたっ！」

「そう言つて入つて来たレオニダスの背中には、真つ白になったジャンヌ・オルタが背負われていた。黒いのだが、真つ白になって居た。口からなんか出ていた。」

「……もしかして、アレからずつとやってたの!? あのペースで!？」

「ええ。とんでもない負けん気で、私が言つても聞かず。申し訳ない、こう言つた方のペース配分も承知していたのですが……油断してしまいました」

「さ、サーヴァントが燃え尽きる程の特訓をつ……!? いや、自分で燃え尽きて行つたのか? 加減しろ馬鹿! 痛くなければ覚えませぬ! 自分にそれやって楽しいのか、私は理解に苦しむね……」

「……うん。彼女は医務室に運んでおいてあげて欲しいです。休めば回復するだろうし。彼女に万が一の際の制圧をお願いするのは酷だろう」

「そうですね！ ではマスター、しばしお待ちください！」

「——ややあって、再び戻って来たレオニダスを加え、全員が召喚サークルの周りに集まった。マッシュとデオンを先頭に、中間にメドゥーサ、後方に香子が控える布陣だ。何時もの方が一に對する備えである。」

「えー、では。次の特異点へ向けての戦力増強を始めたいと思う。ではまず、本造院くんから初めてくれるかな」

オッスオッス！（返事）

「いやー召喚はいつになっても楽しいですね！ しかし今までの流れだと、ホモ君に深く関わった人が召喚される、みたいな流れなんで……成程！ 孔明だな！（確信） だからキヤスターは香子さんが居るって言ってるじゃねーか……」

「——言の葉を唱える。体を、バチバチと稲妻が走る。召喚サークルから、光が溢れだしそして、三つのリングを……作る前に、なんか変な幻覚が頭に過った。」

『——彼の者の血に叛逆すべきは私だが、しかし真に叛逆を思うのであれば、貴殿の方が適任であろう。同士よ、反逆の意思、君に託そう』  
『ウム。任せるのだな。叛逆するは我にあり、オリジナルもブラッドボーンも纏めてミンチにしてハンバーグ、ご主人は笑顔にっこにこなのだな。ではいざやアクセルシンクロオオオオオオオオ！ セイヴァーキャット！ すいっさん！』

「いや何事？ とか思った瞬間、ドゴンという音と共に後方迄吹っ飛ばされる。痛くは無かった。だが、大分重たかった。皆のどよめく声が聞こえたが、貴方は胸元のモフモフとした感触と重さでそれどころではない。」

「あつ、おい待てい（江戸っ子） 食べないでください！（怯え）  
くっ、一体どんなサーヴァントなんだ、こんな滅茶苦茶な事をしてくるなんて……っ！」

「——という事で、引き続きお世話になりに来たゾー！ ご主人！」

うんそりゃあそうですね（茶番終了）

と言った所で今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。

## 拠点フェイズ その八

皆さんこんにちは、ノンケ（人でなし陰陽師）です。あの馬鹿野郎は香子さんにあの業を背負わせた罪を贖わせなければいけない。ぶち殺さなければいけない。そしてお礼を言わなければいけない——  
ありがとう、と。

前回は、ちゃんと解析するためにメドゥーサさんに睨まれました。じゃあ睨まれないように専門家が欲しいね！　で？　誰を召喚したんですか？　「それは呼ばれて飛び出てキヤットなのだな！」　誰だお前!?

「そして次の特異点の主役もキヤットである。一切の容赦も無く！　お主らの！　出番を奪うのでアル！」

「貴女、一体何処に話しかけているんですか……?」  
「因みにこの作品は所謂例のアレ二次だが、実は汚い直接表現は相当ヒカエメにやっているゾ？　皆見やすいカナ？　などと投稿者は怯えながらやっているから、それをダンゴムシの様に突きながらゲラゲラ笑ってみるがヨイ」

「そして何をしゃべっているんですか……?」

本当に何喋ってんだこのキヤット!?　こ、このゲームは淫夢実況される事前提で製作されていた……?（困惑）　このゲームの製作スタッフさん、余りにも懐が深すぎないでしょうか。

「にやはははっ、観客に挨拶するのは良き演者のヒケツ、サーヴァントの強さの秘訣はヒミツ、なのだな」

「……特異点でも思いましたが全く理解の及ばぬことしか言いませんね貴女は」

キヤットに、人知が及ぶ、と勘違いしてらっしやる……?　ご存知、ないのでですか!?　彼女がデッドプール科タマモ目の暴走キヤット、タマモキヤットさんですよ!?　彼女に常識の類を当てはめるのが間違いないですよ！

まあその謎の言動や愛嬌やら、彼女の他の魅力を手札断殺して尚、この子が入った事による恩恵というのは大きすぎるというか。それ

が何故かって言うところ……ここ、食堂なんですよね。今まで描写すらされてなかった。

「——ウム、という事でキヤット特製和風御膳の完・全・完・成である！ 良く噛みしめて召し上がるがヨイお客様」

「コレも不思議なんですけど、どうやって調理してるんです、貴女は」  
「キヤット の こうかんどが たらぬ」

「教えてはくれない、と……まあ、頂きますけど」

そう！ これでカルデアの食堂が本格活動し始めるんですよ！

いやーやりました。食堂が稼働すると……まあ、色々良い事はあるんですけど、何より拠点フェイズで、サーヴァントの皆が結構此方に集まって下さるんですよ。交流がしやすくなる！

「怒れる魔王が来る前に、素早く引け愛らしい蛇娘。これよりキヤット、阿修羅に入る」

「ああ……そういえば、召喚された初日に、地獄の様な食事をしてらっしゃいましたねあの黒い王様。分量は足りみますか？」

「——ふっ、このキヤットに任せておுகいい」

——貴方の視線の先、二人が話しているのを見ると、キヤットがカルデアに馴染んでくれるのが嬉しくなる。キヤットはやはり独特な感性をしているので、ちよつと周りから孤立する可能性も十分あったのだが……杞憂としか言いようがなかった。

「はむ……むぐ……むぐ……しかし、何処で覚えたんですか？ この料理の腕」

「我流である！ 花嫁修業は乙女の嗜み、オリジナルを殺すのはキヤットの試み、キヤットを殺すのはタマネギの辛み……涙が止まらぬのだな」

——キヤットが見せた、破格のクッキング能力。それがカルデアの胃袋を瞬く間に制圧して見せた。恐るべきは、その料理のレパートリーの幅広さである。和洋中華迄なんでも行けると、豪語しながら本当にやってのけるのは、花嫁修業のソレを超えている気がする。

そうなんですよね。キヤットって、実はエミヤと並ぶくらいの料理の鉄人なんですよ。劇中苦手な料理の描写が……多分、タマネギ関係

くらいしかないっていう。お、いい腕してんね(棒読み) 良い腕どころじゃないだろルオオオオ!? (迫真)

「ところでそのタマネギは」

「うむ。想像の通りではある……」

「——おい、来たぞ猫コック。食事を寄せ」

「そして、その手腕が遺憾なく発揮されたのが、藤丸が召喚したもう一人のサーヴァントに関してである。

「そういうな。王の為にKINGサイズの食事を拵えているのではないか。ハバキ、柄、其々揃わねば美味しい食事は出来ぬと知るがいい」拵えに掛けた小粋なギャグだね! 分かるとも! で、えっと問題は……あの黒い小柄なシルエットには、私まあ見覚えがあるんでございますけれども……具体的に言うの特異点Fで。Fで。

「フン。まあいい。少しばかりなら待つてやるからさっさと作れ」

「言われずとももう少しで完成であるからもう少し待つがいい。焦らずともとんでもない量を食わせてやるから、遠慮せずその腹に収めよ」

「そう言つて、キャットの目の前の席に堂々と座つたのは黒い、小柄な少女……と呼んだら多分間違いなく怒られるだろうなあ、とは貴方も理解できている。流石にそこまで馬鹿では無い。黙つて見ている事にする。

「——どうやら、今日は彼女とは一緒ではないようですね」

あ、メドゥーサさんオツスオツス! ご飯美味そうっすね。小鉢もはえースツゴイ綺麗……やっぱりキャットは有能。それ一番言われているから。

「オルタ同士、相性が悪いのか、それともただ単純な同族嫌悪というやつなのか」

「その言い方はちよつとストレートすぎやしないか、とは思ふ。とはいえ、多分間違っていないのが、なんとも。あのセイバー……アルトリア・オルタは間違いなく先に召喚されていたジャンヌと同タイプというしかない。

やっぱりセイバーオルタだアアアアッ! これは、コレは相当な

戦力ですよお、後藤さあん……？ 何せ全体宝具に加え、凄まじい攻撃性能、藤丸君の攻撃面が一気に充実です。やっぱりバランスが良い山本選手型になるのか？

「——おい蛇女。聞こえて居るぞ。あの着火剤女と一緒にするなど、王に対する敬意というものが足りていないようだな？」

「貴女はそんな些細な事を気にするような性質ではないと思つての言葉ですけど」

「……つまらん。少しは狼狽えるだとかすれば可愛げもあるというのに」

「生憎と、私には可愛げというものが似合いませんので」

……何か静かですね（震え声） オルタとオルタがやり合う分には良いんですけど、セイバーとライダーとがやり合うと真面目に室内の温度が一気にガクツと下がるんですよ。迫力が間違いなくこつちの方があつていう。

「そんなにバチバチするでない。小動物は丁寧に扱わねば速攻ダウン、ご主人は小動物故にもう死んでいるのだな」

〈いや流石にそこ迄では無いが……居心地が、ちよつと悪いのは確かである。戦場ではないこんな場所で力を入れる、と言われても貴方には無理だ。常在戦場の精神には未だ辿り着けない、所詮はチンピラだ。

「そこのハゲ頭がか……？ はっ、ソイツは小動物などではない、良い所が狂犬が良い所だろう。マスターもそうだが、存外と凶太いぞ？」  
「少なくとも、鋼を食つて育つたのではないかという貴女よりは繊細ですよ」

〈貴方は心の中で前言を撤回した。普通に辛い。別に殴り合いとかは関係ない、自分はこの類の、特に女性同士の静かな差し合いの空気が実に……実に苦手である。今にも胃が崩壊しそうである。

俺だつてこの空間には居たくない（語録無視） 見ろよオラア！

この無残な空気をよお！ ホモ君は藤丸君と違つてそこまでコミュニケーション強者じゃないですから。このホモにこの空間を収めろつて言つたつて無理難題ですよ……

「さ、出来たゾ。あと、これ以上ご主人にダメージを与えるようであれば、従業員キャットの怒りのアフガンにてお主ら纏めてこの部屋から強制退店。ここは食事をする場であつて言葉でK―1をする場ではない」

「ことりとオルタの目の前に置かれたすさまじく豪快に盛り付けられたバーガーとオニオンリング。そして、貴方の目の前に運ばれてきたのは……頼んでいたざるそばセット。曰く手打ちだから時間がかかるとの事だったので、待っていたのだった。」

「さ、お待たせしたなご主人。すまんんだ。召し上がるがよい」

「こ、この辺りに、美味しいラーメン屋……ラーメン屋……（届かぬ願い） なんてそこでそばなのか。ホモならラーメンを頼むんだよ！別にホモ君はホモ君であつてホモでは無いんだよなあ……（複雑極まる真理）」

「折角なので天ぷらも付けた特別セット……味わって食べてやろう、食べてやろう、と真っ直ぐに向き合つて、そして箸を構え、いざ、勝負開始、という所で、再び食堂のドアが開く。」

「――皆、お待たせ！ 次の特異点へのレイシフト準備が整つたから、早めに切り上げてカルデアスに集まってくれ！」

あつ……（哀愁）

「箸で持ち上げ、今、正につゆに潜らせようとしたその直後である。折角奮発して頼んだそばセット、どうやら味わう暇も無く掻っ込む事になる事を悟り、貴方は、ちよつと凹みながら、せめて最初の一口くらいは、とズルズルと元氣なくすすつた。」

ホモ君つて、あんまりこう、タイミングが良いタイプじゃないですよね。これがタイミングに置いては何時も理想を更新する原作主人公との差か……！

と言つた所で今回はここまでとなります。まさか藤丸君が、彼女を召喚しているとは思つて居ませんでした。戦力的にはとてもありがたい人材が揃つて来たのではないのでしょうか。よし！ オケアノスは楽勝だな！（確信）



### 第三特異点 英雄艦隊封海 オケアノス 孤独な船出 その一

皆さんこんにちは、ノンケ（パラP）です。この人も結構な魔術師様なのに、ソ……げふんげふんには敵わないっていう話です。マジでグランド級はやバいつていう示唆なんですけど。

前は、キャット、及び黒王様を召喚に成功しました。戦力、実に増強！ 我らの人理修復、実に順調！ とはいえ戦力が充足したのは確かなんですけど、藤丸君の側のサーヴァントオルタ多すぎませんかね……？

で、開始早々なんですけども。いきなりホモ君視点じゃありませんねコレは。なんか船の上から視点がスタートしております。

さてはコレ……特異点前のアレだな？（察し）

▽——嵐が、舞っている。凄まじい勢いだ。彼女が経験する中では、最も凄まじい勢いだろう。その原因は一体なんだろう。数日前、自分が潰したポセイドンとか名乗る大馬鹿野郎を潰したからだろうか。それとも……

「悪い事は言わん！ 投降しろ！ 流石に、いかにギリシヤ一の益荒男とは言え、この数の勇士相手では、分が悪かろう！ ましてや……この、イスカンダルの軍勢相手に！」

「はっ！ お前らの様な有象無象の雑魚の寄せ集めに、俺が、アルゴ号が！ アルゴナウタイが、なによりも、コイツが！ ヘラクレスが！ 負ける訳が無いだろうが！ 無様に散るがいい！」

▽目の前の、水平線も埋め尽くす勢いの大艦隊。その前に浮かぶたった一隻、されど煌びやかに輝く船。その激突に、神も本当に興奮しているのだろうかとも思ってしまう。

——んん？ んんんん？ ンンンンンンン?? なんか、凄い大艦隊が……居るんですけど、でその中心で、あの、大塚明夫に啖呵切つてるのは……あー、小物時代のIASN君じゃないですか。

というか、あの二つが洋上大決戦やるのか……ヒエツ、戦争ってレ

ベルじやねーぞ！

「有象無象とは言ってくれ！ 余の元には、海を知り尽くした心強い提督が三人もついているのだ！ 如何に英雄達の集う極地なれど、この海の戦に置いて、そう容易くは負けはせん！」

「提督？ はっ、笑わせるなよ？ 海賊風情を雇い入れた所で俺達に敵うとも思つて居るのか？ もう一度言つてやるから、その聞こえない耳かっぽじつてよく聞け、お前らの様な有象無象の雑魚の寄せ集めに、負ける訳ないんだよ！ 俺達が！」

〈海賊風情とは言ってくれ。別人の話だというのは分かっているが、自分もまあ、海賊ではある故に、侮られるのは……いや、正直な事を言えば、それが気になってしまふのは違ふのだろう。厳密には。姉御っ！ ヤバいつすよアイツ等！ ここに居たら巻き込まれる！

逃げねえと……」

「ボンベ。アタシは、どうすれば良いと思うんだい？」

「……へっ？ いやだから、逃げた方が」

「アタシは、どうするべきだと、思うんだい？」

〈若干、八つ当たり気味にかけた声で部下が怯えたが、手に取るように分かった。言わなくても、自分は誰よりも分かっているのだ。今、自分がどうするべきなのか。

で、カメラがこの視点の方の背後に……手が震えているぞ？ そんな弱々しい姿を見せるな……好きになるぞ？ (脅迫) まあこの人はそんな姿見なくても野郎どもになっちゃう！ (キモさの極み) になるので。

「姉御……」

「ここで退いたら、海賊としては愚か、アタシ自身が終わる気がするんだよ……そんなの、耐えられる訳ないだろう？」

〈故に、自分はこう、号令を下すのだ。

「総員！ 腹あ決めな！ 海を支配すると勘違いしてる馬鹿共に、海賊をコケにした小僧！ 全員に一発かましてから！ アタシたちは堂々と！ 真っ直ぐに！ この場からトングズラするんだよ！」

いや逃げはするのか……？ (困惑)

「——つて結局トンズラはするんですかい!？」

「そりゃあそうだ! マトモに相手するのは馬鹿の所業だからね。ただ、惨めに逃げるんじゃない! 目に物見せてから、アイツ等を一つ馬鹿にして逃げるんだ! 『どうだ、お前らなんてこんなもんなんだよ』つてね!」

〈そう言つて、一発の弾丸が号砲の様に打ち放たれ、それに突き動かされる様に、船員たちが船の各所へと散つていく。そうだ。彼女の……船長の、フランシス・ドレイクの号令だ。ならば従わずして何がこの船の一員か。

「ペ、ペリカン号が持ちますかね!？」

「此奴はゴールデン・ハインドだつて言つてんだらうこのトンチキ!」  
「あでえつ!？」

〈序でにボンベは殴られる。これはもう船の風物詩だ。

つけものが許されないみたいなものだね。分かる分かる。ところでつけものつて実はボーボボの最初から最後まで出たキャラなんですよね。あの独特のキャラクター……嫌いじゃないわ!

「よおし! 行くよ野郎どもお! 目標はあのウストラトンカチ共の戦いの真つただ中! どてつぱらを食い破つて、堂々と逃げ切つてやろうじゃないか!」

〈目の前の神話を見紛うばかりの大海戦に、真つすぐと立ち向かう選択肢を選べるのは。唯の蛮勇か、それとも……そこにしかない、活路を見出した故なのか。いずれにせよ、彼女の操る船は、混沌渦巻く大海原へと、一直線に突っ込んでいく——

……と、言つた所で画面は暗転。どうやら特異点はその後から続く話の様です。いやでも、もう終わつとるやん(至言) あの三勢力の大海戦にカルデアがドレイクさんと挑む的な事だったじゃんか! じやんか! ! ! !

それが、それが次回予告的な部分で全部終わつてるとか許されませんよクオレハ、ちよ、これは心火を燃やしてぶつ潰すしかあらへんし……第六特異点とは訳が違うんやぞ!

〈——貴方がカルデアスの前に立ったのは、そばを味わう暇も無く

すべてかき込んだ挙句盛大に喉を詰まらせ、キャットとメドゥーサの介護を受けた後の事だった。特異点に向かう前にまさかここまで消耗するとは、等と考えていると……皆の前にロマーニが立った。

「——さて、次の特異点に向かう準備が整った訳だけど、今一度この特異点の状況をおさらいしようかと思う……詳しく調査した所、面白い結果も出たしね。レオナルド」

「はいはい。先ず此方を確認してくれたまへ」

〈そして、その傍らのダ・ヴィンチが、空中に何らかのデータを投影する。地図と、そこから伸びたグラフだ。

そのデータが何なのか分からないんじゃない！（脳筋極振り）

「我々が観測している特異点上の情報だ。で……事が起こったのは、つい先日だ。今度表示するグラフが、その時の情報を纏めたものになる。驚く事なかれ、だぜ？ 諸君。正直私も目を疑ったんだから」

〈そして次に表示されたグラフに……貴方達は目を剥いた。明らかに、グラフが変化している。グラフが、此方の方が段違いに高い。凄まじい反応だ。

「ドクター、これは？」

「済まない藤丸君、詳細は分からない……しかし、こうして特異点を外部から観測している僕らからでも分かる程の、とても、とても大きな異変が起きた、と言うのは多分間違いないと思う」

「大きな異変ですか……考えられるのは、やはり聖杯関連の何かでしようか」

どう考えてもさっきの次回予告の所だと思うんですけど（事実）

まあ、F G Oの予告的な流れは、決して決着を見せないのが伝統予告ですから……方が一、ドレイク船長が合流する前に死んでたらどうすれば良いんでしょうか（震え声）

「そう考えるのが妥当だろうね。ただ、もう一つ、可能性があるとするればとんでもないイレギュラーが次の特異点に居るのを、僕らは知ってる」

「——前回の特異点から、殴り込んだ二人のサーヴァント」

〈そう、イスカンダルと孔明。彼らが次の特異点で何をしでかした

のか。それによっては特異点内部の惨状がどのレベルまで行っても可笑しくは無いという話である。

「前回と変わらず、一切の油断を捨ててかかって欲しい。で、その上で二人共、今回同行してもらおうサーヴァントは決まったかな？」

「まあ、大丈夫です。俺はマシユ、ジャンヌとセイバーを」

「藤丸は、第一特異点からずっと戦ってくれているレオニダスを休ませ、マシユは同行させないという選択肢がないので、自然の残りのメンバー、という事になった。そして、貴方もそれに合わせ……と言訳でもないがメドゥーサが休みとなって居る。」

『——悪寒が……するんです……』

セプテムから何らかのセンサーが綺麗に反応したかのような危険回避。まあオケアノスの下姉さまと彼を見たら、下手するとメドゥーサさんネガティブモンスターになっちゃうのでね。メドゥーサ三姉妹ホンマめんどくさいな（歓喜の表情）

「了解。じゃあ同行サーヴァントは、新たに来てくれたサーヴァント二人と、レオニダス、メドゥーサを入れ替えた残りのメンバー！ 今回の目標は、第三特異点の解決と、第二特異点より聖杯を略奪して逃走したイスカンドル一味の撃破！ 二つの目標の解決は難しい任務となるだろうが……必ず成し遂げて欲しい！」

「了解！ という声と共に、コフィンに入る貴方達。その先に待つ、第三の特異点の姿とは……果たして。」

〈アンサモンプログラムスタート 霊子変換を 開始します〉

〈レイシフトまで〉

〈3〉

〈2〉

〈1〉

〈全行程 クリア グランドオーダー 実証を 開始します〉

「……っし、問題なくレイシフトか。康友、無事か？」

「無事だ、と返し、周りを見回し……先ず貴方が凍り付く。その姿を見て、何事かと首を傾げ、同じように周りを見た立香が、同じように凍り付いた。」

——えっと、皆さま。カメラワークからお判りでしょうが、とんでもない事になりました。え？ どういう事かって？

「おうてめーら……密航者か？」

「一つは、レイシフトしたその先が、まさかの……船の上。しかも、その旗には罽毼。海賊船。要するに敵の真つただ中。まあ、それはいい。それはまだいいのだが問題は……」

「ま、マシユ達が……いない!!!」

「頼もしい仲間たちが、自分達を除いて誰も居ない、という事だった。」

## 孤独な船出 その二

皆さんこんにちは、ノンケ(酒呑オルタ)です。酒呑が小柄な分、反動で色々デカくなったとかいうトンチキ説物凄いガバガバだけど好き。だけどバラキーが許すかな?! 普通に酒呑関係だし許しそう。

前回は、大物王様と小物王様が特異点海上にて衝突。それを見ていたドレイク船長、まさかのその中に乱入。そしてどうなったかは……まあ、それは特異点までのお楽しみという事になりました。そしてホモ君達のレイシフト……なんと……!」

「……康友」

「あぁ。と思わず気の無い返事を返す。ちょっと、最初からあまりにもクライマックス過ぎて思考が追い付いていない。何が起きているのか、もう考えるのを直ぐにでもやめたいレベルだ。

それはこつちが言いたい事なんですけど、何やってんだアイツ等……(孤独のレイシフト) いや、多分マシユ達がそんな悪い事をするとは思えないので、多分レイシフトで事故でもあったんだと思われます。多分ですけど。

「てめえらどつから入って来たって聞いてんだよ!」

「これが、レイシフト失敗って奴か……成程な。ちゃんとしつかりとレイシフトの準備をしなけりやならないって言うのが良く分かったよ……!」

「おい、何を愚痴愚痴言ってる! さっさと答えろ!」

「取り敢えず、全員ぶちのめしてからだな……得物は?」

「バットなのだが、いよいよもってボロボロだったので置いてきた。コレからの戦いにはついてこれそうにない……と言うかもうついてこれないとロマニからNGが出てしまっている。つまり、久しぶりのステゴロである。」

「まあ拳も使わねえと鈍るからなあ。んじゃあ……!」

「やろうってのか! はっ、上等だよお前ら、ぶちのめしてやるってんだ!」

「こつちが何人居ると思ってんだ? さっさと袋叩きにして、魚と鮫

の餌にしてやるよ」

「ああん!? 生意気な事言ってくれやがって、おいゴルア! (船から)降りろ! お前らが魚の餌を努めるんだよ! 量が沢山必要なもんだしね、皆纏めて、海の肥料にしてあげるからね♡ 覚悟しろ(豹変)」

「ただやるのもつまんねえな……一つ、スコア勝負と行こうぜ」

「ゴキリと首を鳴らす立香に、ハンデは居るかと問い返す。その首が横に振られるのを見てから、貴方は体の底の力を開放し……額に雷の角を顕した。」

「つなんだコイツ!? おかしなもの生やしやがった!」

「化け物かつ!? ソイツだつ、その角付いてる方を優先的に潰せ!」

「そつちの優男は大したことは無さそうだから放っておいて大丈夫だ!」

あつ (察し)

「——ほーん? 大したことない優男と来たか。上等だテメエ、海の下底に沈めるだけじゃ済まさねえ、やるぞ康友! 血祭だ!」

「化け物呼ばわりも許せねえよなあ!」

「お主らが化け物と呼んだその力見せてやろうではないか……乱力無双とは俺の事!」

「いや何処の星熊か君は(即選択) まあ角が生えてるし、似たようなもんだろ、とかいう雑な理由でこれを選びましたねさてはスタッフ。でもまあ実際似たようなもんやろ。船の上に血の雨を降らせてやるってんだよ!」

「という事で、相手はエネミー、海賊です。人間の海賊なので、数は多いですが、実力自体は大したことない、経験値のうまチヨコミルクです。」

「死ねオラア!」

「先ずは海賊くん一号、調理方法は……左の裏拳から繋いで、右の重たいフック! 更にもう一発! バットで戦うよりもいいラツシユ具合ですねえ! 連続で拳を叩き込み続けるのは本当に気持ちがいい! 後執拗にボデイも!」



「ぐぶあつ!？」

「な、なんだこのガキ!? ガキとは思えない位えげつない喧嘩慣れしてやがる……油断してると死ねるぞ!」

お前らとは潜ってきた修羅場と言うものの差が違う……未来のお前らを芸術品にしたんだよ! (先読み) で、バット装備じゃない素手のホモ君ですが、まあ良い感じに使い物になります。

バットよりは火力堕ちますけど、小回りが利くようになって回避重点のスタイル……いや、寧ろコレはホモ君のスタイルにこつちの方がしつくりくるんですよね。

「ほげっ……!？」

「かすりもしねえだと、なんだこいつ……!？」

絶対☆裏切りヌルヌルな動きです。いや、地雷って訳じゃなく、本当にヌルヌルと躲すというか。無駄が無いんですよ。バット持ってた時は、もつと直線的に躲してたんですけども。アレですね、アイシールドで例えると、バット時がセナ、今がパンサー君です。

「お、おいこつちもこつちだぞ! やべえっ! 鋭い、ヤバイっ! 普通に、重いぞコイツのパンチ!」

「つうか、重いつて言うか、鋭いぞっ!? やべえ、一発でだ! どいつもこいつも! あっさり沈む! 全部急所狙いだ! 喧嘩慣れっていうレベルじゃねえ! どつちもどつちだチクシヨウ!」

で、久しぶりに藤丸君のバトル見たんですけど、凄い、マジで一発、全部心中線ドストライクですよ。無駄の無い一発で確実に命を刈り取って行ってます。こ、コレがクリティカル番長として成長してる藤丸君ですか (感動)

「くそっ、一体何処から入り込んで来たってんだ! こんな疫病神が二匹!」

「しかたねえ、もう少しつきや数ねえが……鉄砲持ってこい!」

オオン!? お前遠距離武器は許されないでしょうが! そんな悪い事する子は、先生がお仕置しないと…… (使命感)

後、遠距離を使おうとして、そうやって準備してる暇があるんですかあ……? その一瞬でねえ、こうやって、ホモ君があ! 拳入れ

てえ！ ホモ君があ！ 壁の端い！ カウンターQTE読んでエ！  
(大嘘) まだ入るう！ ホモ君があ！ 近づいてえ！ ホモ君が決  
めたあああああああ！ (クソデカアツパー)

「なんて……やろう……だ……」

「だ、ダメだつ！ 扉前に立たれた！ 銃が取りにいけねえ！」

銃を取りに行きたくば俺を倒してからにするんだな……お主らの  
その貧弱な拳でそれを為せるというのであれば、やってみると良い。  
ただしその頃には、君達は八つ裂きになって居ると思うが？ (虚刀流)  
「——おいおい、寂しいじゃんか。そうやってさあ。俺を無視して  
さあ、そんなことされると、暴れたくなっちゃうじゃないか！」  
「えっ……ぼびんっ」

そしてその一瞬で藤丸君からのストレートが顔面一発でダウンさ  
(伝説の暗殺拳) 良いコンビですよねえ…… (恍惚)

「つたく、数だけが多いなあ此奴ら！」

「か、数だけは!? テメエ、舐めた口訊きやがって！ こうなったら切  
り札だ！ 彼奴を解き放て！ 船が多少壊れても構わねえ！」

「分かった！ えつと、こっちのドアだっけか……!?」

「馬鹿ソツチは塞がれてる方だろ！ 逆だ逆！」

あつ、待つてくださいいよ(遅すぎた願い) チクシヨウ、そんな切り  
札とか出されたら面倒くさいじゃないですか……

「何をするつもりだ……っ!」

「はっ、直ぐ来るぜ。アイツはとんでもなくすばしこいからなあ！」

もうお前は死んだもどうぞくぺえん!」

〳男が笑った瞬間、その背後から飛び出した何者かによって、船の  
端まで吹っ飛ばされてしまった。余りの出来事に呆然とする暇も無  
く、それは、此方を見据えて、ニンマリと笑った。それは、顔の無い、  
触手の様な毛の這う顔をしていた。

イーターくん！ ソウルイーターくんじゃないか！ 良いっす  
ねえ、丁度素材が欲しかったんですよ！ HEY YOU 油を寄こ  
すんだよ、それが素材として必要なんです！ お願いします貴方の体  
に何でもしますから！ (轢殺宣言)

「おおお……」

「此奴は、マジで、やべえぞ……偶然、なんでか弱ってた、所をへへつ……捕まえられたんだよ。本来なら……俺達を、一掃する……レベルの……」

「漸く手ごたえのありそうな相手が出て来たじゃねえか！　なあ康友！　いっちょよ、派手にブチかまそうぜ！」

では……一瞬、失礼いたしました。ジョインジョインジョインホモオタイムオブレットビューションバトローワンデッサイダステニーボディボディアップパーストレートヒダリミギジャブジャブジャブコアシエンゴイレルゼヤストモガンドウゴキトメテバーストヨンデキメターー！

はい、処理完了でございます。

おつ？　素材は……黒獣油、取り敢えず二つですか。ハイハイ了解いたしました。素材も順調に集まっていますね。

「……で？」

「「降参させて頂きます」」

「よし。取り敢えず、この船は貰うから、サポート頼むぜ」

「「ウィツス！　船長！　一生ついていきます！」」

俺にいい考えがあるからついてこい（大嘘）　そしてホモ君じゃなくて藤丸君が船長と呼ばれるのか……どっちかと言えば、この船の船長に相応しいのは顔面ヤクザのホモ君だとは思いますが。まあいいか（適当）

と言った所で、今回は此処までとなります。ご視聴、ありがとうございました。

## 大海賊のシマへ その一

皆さんこんにちは、ノンケ（良）です。サーヴァントとしての性能も、良なんですけどあんまり評価されてないの、カナシイ……カナシイ……（届かぬ願い）強化での再評価をお願いしたい所です。二ターンくらいはタゲ取り効果頂戴♡

前回は、軽く海賊船の船員君を全員ぶちのめし、軽く皆を号泣させまして、船を占拠いたしました。ざあこ♡ ざあこ♡ でもって、此方の船、頂きましてございます。よーしこれで皆を探すぞー。

「……しっかし、どうすっかなコレから、実際」

＜正直それではある。流れで船を制圧したものの、だからと言って何か変わる訳でもないのである。現状、サーヴァントの皆と合流できる当てはないし、そんな状況で船を走らせたところと言う話である。特異点は、この広がる大海原全てなのだから。

（規模が）デカすぎんだろ……こん中から、逸れたサーヴァント達と合流するとか中々の……藤丸くん、良い眺めだなー？（現実逃避）「仕方ない。ここは地道に探していくしかないだろう……って、普通なら言うんだけどもサーヴァントの皆とあんまり離れてるとなあ。ダメなんだよなあ、康友、お前の通信の方は？ やっぱりダメか？」

＜一応会話の間も続けてはみたが、全くもって反応なしである。どうやらレイシフトトラブルに遭ったのは自分達の方らしく、その影響か、通信もままならない。いよいよもって完全孤立の状況だ。

「天は俺らを見放した……あー、今猛烈にマシユに会いたい。あの子いい子過ぎるからなあ、今頃、こんな感じの海賊野郎に会って、良い人だと思ってホイホイついていたりしたら、ああああああああああああああ不安だああああああああああ」

＜もう完全に後輩を心配する体育会系の先輩である。不安なのはわかるが、余りにも露骨に悲鳴を上げすぎやしないだろうか。取り敢えず仲間にした野郎どもが怪訝な視線を向けているのが余りにも痛々しいというか。

限界オタクじゃねえか。多分本当にそう言う事になってたら間違

いなく、藤丸君が東城会幹部としての迫力を発揮してしまうので……えっ？ 幹部はホモ君の方？ ホモ君は近江連合の幹部だから。

「えっと、頭。お仲間を探してるんですかい？」

「探してる！ 大切な仲間が六人程！ 何か知らねえか!? 人が集まりそうな場所とか色々よお!? 知ってなかったら鮫の餌にしてやるからよお!」

「いやそんな無茶な!」

「コレは本当に無茶である。流石にやり過ぎではないかと言おうと思っただが、しかし無理だと悟って諦めた。完全に目が据わってしまった。多分、自分が何を言おうと絶対に此奴は実行するという凄味があった。

「鬼やあ!?!この船長!前の船長の方がよっぽどチョロかった!」

「テメエ今なんて言った!?! 頭! 副船長でもいいや! 鮫の餌にするなら此奴らをやってくれ!」

「安心しろ、そんな時は皆纏めて海の底だ」

海的那→こ←に沈めてやるんだよ、1000メートル(深海) もうそれは圧縮されてただの肉塊になってると思うんですがそれは……?

「で?」

「えーっと……こ、こころへんで、普通に船を止められる場所自体が限られてるもんで、其処に向かえば、もしかしたら、誰かと会えるんじゃないか、って」

「そうかつ! よしでかした、鮫の餌は勘弁してやろう!」

「へいつ、助かりました!」

君さつき迄、船長だった人だね。なんで藤丸君の下で下っ端やってる方が全然イキイキしてませんか?

「しかし、普通に止められる場所が少ないってのは……?」

「最近こころ辺の海で起こった、大戦の所為ですよ。その所為で、こころ辺の海賊の縄張りはズタズタなんだよ」

「——凄かったぜ。まるで本物の嵐でしたよ頭!」

「へえ。嵐か」

「いやあ、正直な話、俺達はあの嵐を見て、いつそいで逃げ出した口でしてね。たった一隻対海を埋め尽くすぐらいの大艦隊だったつてのに、マジで互角つてなもんで！」

「……それは尋常の話ではない。間違いない、その一戦をカルデアは観測したのだろうと思われる。イスカンドルが居たのは……一隻か、それとも大艦隊の方か。恐らくは後者だろうなとは思った。」

「化け物染みてる戦いだつたつすよ。マジで。バカデカイ大男が、とんでもない得物で船を一撃で沈めて、その周りを沢山の光の矢やら槍やらがどんどん飛んでいつてるんだよ。艦隊の方も、まあ一糸乱れぬつての!?! あんな動きを船が出来るなんてなあ」

「兵隊纏めて動かすのも事だつてのに、アレは、もう凄い通り越して気持ち悪いつて奴だつたぜ頭! 一隻を徐々に、綺麗に包囲しつつ、砲弾を叩き込む。まるで魚の群れ!」

予告でもやってましたけど、アルゴノーツとイスカンドル幻の水軍との光と闇の激しいバトルでしょう? プレイヤーに見せろつて言つてんだYO! 言つてんの! ねえ!?! プレイヤーに見せろつて言つてんだYO! 「しかし、その中でも一番すごかったのは、やっぱり途中で出た化け物と、その中を突っ切つて全部をかっさらつて行つちまった、あの船だと思つてヤッパリ」

「化け物?」

「そうだよ! 天をぶち抜くデツカイ目玉の塊みたいな柱! 肉の塊! それが、一隻の船の方からよきつと! いやあ、ビビつたビビつた! あれを見て逃げようつて思つた時、俺らの隣を抜けていつた船が一つ!」

「肉の柱。目玉。それを聞いて、立香と目を合わせる。恐らくは、この特異点の……互いに頷いて、再びその戦いについて語る船員に目を戻す。その顔は、酷くキラキラと輝いている様に見えた。」

「あの船の舳先に立つたあの女船長の、あの凜々しい事! ついこの船捨ててついでいきなくなつちまつたくらいですよ!」

「女船長?」

「……ああ、そうだ! そいつ! そいつが今拠点にしてる島だつた

ら、そのお仲間とも合流できるかもしれないって話なんですよ、頭！」

確か原作オケアノスも、第一戦の後はドレイク船長の元へ案内して貰えたので、その流れは継承してるんですね……まあ、原作って言うてる時点で、もうここも大分違うんですよねえ。誰がマスター孤立させろって言ったあ!? アアン!?

「どうにも、その女船長、自分でその島を中立の場所って公言してるみたいで、俺達零細海賊にとっちゃ、マジで投げ所みたいなどころなんですよ……その分、使ったらアガリを収めなきゃならないんですけど」

「まるでヤクザの様なやり口だ。しかし、その中立地帯を設定してくれたのはとてもありがたい。香子たちと合流できる可能性が跳ね上がったというものだ。」

「じゃあ取り敢えずはそこを?」

「ここからはちよいとかかりますが、まあ俺らもそろそろ陸に戻って体を休めなきゃいけねえなと思ってたところですし、はい、そうなります」

「そうと分かれば善は急げだ。野郎共! その中立地帯に血反吐吐いても走れ!」

「「アイアイサー!」」

そして藤丸君もイキイキしてらっしゃる。マシユが見たらちよつとショック受けちゃうから落ち着いて差し上げる。なんでしよう、藤丸君もホモ君も武闘派ですから、こういう悪党とかを纏めるのは性にあつてるんでしょうか。

「……所で元船長」

「アイっす」

「その戦い、どっちが勝ったんだ結局」

「詳細は分からないんですけど、結局大艦隊の方が勝ったと。ただ、勝者は正直その女海賊だと思えますよ、多分ですけど」

「なんでだ?」

「一隻の方に致命的な一発叩き込んで、その沈没に巻き込んで大艦隊

の方にもデカイ傷与えて逃げてったって話ですから。いやあ、俺らみたいなのとは、マジで格が違うって奴ですよ。ガハハ」

◁その話が確かなら、その女海賊は文字通り規格外の存在だ。サーヴァント同士の衝突とも考えられるようなその戦いで、両方から文字通り、勝利を奪い去って行ったのだから。サーヴァントだとすれば、間違いなくトップサーヴァントの一角だろう。

「その人にも、会いたくなってきたな。その人の名前は？」

「ドレイクっていう奴です！ 多分、ああいう奴が皆をあつと言わせる、大事件を起こすんじゃないかな」

◁思わず目を見開いた。その名前は、如何に英雄にそこまで詳しくない自分達とて知っている。歴史の授業では、間違いなく必須になるレベルの名前だ。世界史では、嫌と言う程覚えさせられた。

世界史、ホント覚えるの辛かったなあ……（懐古） それは兎も角、どうやらあの後、ドレイク船長はド派手にイस्कンダルとイアソンをコケにして逃げ切れた模様です。さす姉御。アルゴノーツにも、伝説の征服王にも、海の上じゃ引けを取りませんねえ！ いや実際彼女のスータスを見ると、格上のヘラクレス君とイस्कンダル相手の方が強いまであるっていうチート格上潰し性能。

「……いきなりの大物が来たなあ」

◁その言葉に思わず頷いた。ドレイクは数あれど、海賊のドレイクと言えただだ一人。ジャンヌ・ダルク。イस्कンダル。にもならぶ、圧倒的な海の伝説。スペインの無敵艦隊を破った、海賊の頂点と言ってもいい大英雄。フランシス・ドレイクだろう。

——と言った所で、今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。



## 大海賊のシマへ その二

皆さんこんにちは、ノンケ(水着メアリー)です。水着姿はメアリーの方が好きなんですよね。でもロリコンっていう烙印は押さないで。違うんです。普通に水着のデザインが良い感じがするんです。

前回は、船の野郎共をしばき回した挙句、情報寄こさないと鮫の餌……うーんコレは許されない悪役ムーブ。でも冷静に考えると、彼らも船に乗り込んで来た二人を大人数でぶつ殺そうとしたんですよね……あれ？ 丁度いい措置では？

「……思えば不思議な話だよな。俺達の知ってるドレイクってのは、男性だった。歴史の授業でもそう教わったし。セイバーにしてもそうだ。アーサー王なんだろう？ 男の筈なんだけどなあ」

Fateじゃそんなの日常茶飯事だからね。というか、元の性別の方、半分くらいしかいらっしやらないと思います。もうちよつと偉人の性別にも敬意を払って、どうぞ(建前) そのアレンジ誉れ高い(本音)

〈そう言つて、立香が遠くの空を見つめている。その拳を、そつと下ろし。何をしてもない。彼が考えているのは、歴史の妙なのだろうか。それを考えるのは確かに浪漫ではあるのだが……

〈乱戦最中の今やる事じゃねえなあ！ もうちよつと集中しろこの馬鹿！

ええ…… (困惑) そんな最中にやる事じゃないっていうのが完全に正論で草も生えないんだ。そして、今戦ってるのは、海魔ですね。正に海のステージにピッタリなモンスターなんですけど、(9は)ちよつと多いねー。

「しようがねえだろこれで何日目だと思ってるだ此奴らとシバキあうの!?! つたく、ブヨブヨして、殴るのも気持ち悪いし……! おおやだやだ」

「とかいって、藤丸君 ホモ君 頭と兄貴が一番仕留めてるじゃないですか」

「それとやる気とは別の話だつてんだよ」

〈そう言つて、立香は近場の海魔の足を掴んで振り回し、甲板に叩

き付けてから、只管に踏みつけていく。何度か踏み潰し、ぐちゃぐちゃと音がした頃にその動きを止めた。貴方も、馬乗りにしながらミンチにする作業を漸く停止する。

うっわ、ホモ君の顔がめちやくちや真っ赤に染まってる……これが全部返り血ちやんですか(恐怖) いやあ、チンピラからヤクザに完全進化してますねクオレハ……

「しかし、本当に襲撃が多いですねえ」

「アンタの言った通り、本当に魔の海って奴なんだなあ」

「頭と兄貴が居なけりや、大分きつかったんですけどね、ここ通るのは。でもま、二人が居てくれるんで、最短距離を突っ切れたんで、もうすぐ着きますよ」

〈なんだらう、貴方としては海産物をボコボコにする予定は無かった。なんだったら、雄大な海に抱かれてクルーズを楽しむ積りですらあった。しかし、結果はこれである。結局の所、自分たちの人生は血なまぐさいままなのだろうか。〉

「遠くを見ながら手に持った肉をグチャグチャするお前も中々だよ……」

ホントにね。もう極道通り越して完全に快樂殺人貴のそれだったと思います、表情が。態とではないと思うんですけども、コレはまごう事無き変態カルデア屋。これで変態って言うヒソカっぽい。

「——片付いたか!」

「ういっす!」

「さーせん! ちよつと腕齧られました! 包帯とつてきます!」

「馬鹿野郎! そんなん唾つけときや治るだろうが! 贅沢言ってるじゃねえ! 使うんだったら最低限の長さで、重ねて、ひもで縛ってけよ!」

「流石頭! ツンデレ!」

「誰がツンデレだ! やるとしたら俺の愛する後輩のマシユだけだつての!」

〈なんかなんも考えず勢いで言ってると思われるが、これは録音しておいた方が良かったらうか。主にこれからの主導権を握る為にも。〉

そして先輩を慕っている後輩ちゃんに、先輩の現実を見せつける為にも。

鬼みたいな事考えてて草も生えない。『先輩最低です』って本気で言わせようとしているのが怖い。しかもそれが親友相手っていうのが余計怖い。

「——おう康友、お前余計な事マシユに漏らしたら戦争だぞ。覚悟しろお前」

◇分かった分かった、やらんから安心しろ兄弟。

◇上等だこの野郎。禿げた頭のヘッドバッドの威力思い知らせてやるってんだ！

ほらあ、いきなり殺し合いになるじゃん。仲が良いからこそ軽々に殺し合いになって血反吐吐き散らすじゃん。いやー流石に主人公補正を持つてる藤丸君相手はちよつと……馬鹿野郎お前俺は勝つぞお前！（過激化）

「おーし、やるぞやるぞ。久々に白黒はつきりさせてやる。俺とお前のどつちが強いのかのよお！ 覚悟しろてめえー！」

「ちよ!? 頭!? 兄貴!? なにやってんすか、片付けしてくださいよ！」

船員君の方がマトモで草も生えない。ちよつとあの二人矯正してくださいよ！ 多分船員君がボロカスにやられる未来が見える見える……

「オラ行くぞ、血反吐撒き散らして碎け散れこのはげええええええー！」

◇取り合えずいきなり殴り飛ばしてくる立香に、貴方もカウンターを叩き込んでみる。血反吐撒き散らせと言ったのだから、お前も吐き散らせと言わんばかりに拳を連続で叩き込んでいく。もう何だったら海魔のドロツとした血も纏めて叩き付けてやった。

「生ぐさっ!? このクソがッ！ 海魔のなんか叩き付けたなお前！」

「てめえええええゆるさああああん！」

お前初めてか海魔は？ なあ。良く味わって食べるんだぞ？ 口に押し込んでやるからな？ 味わって食えよ？ 温めもヨロシクウ

！（堂島の龍並感） 藤丸君の顔面が爆発しちゃう！

「このやろつ、この禿えっ！ その角へし折ってやる！」

〽折れるならやってみろっ！

〽掴んでみなあ！ 痺れるぜえ！

角をスタンガン扱いは流石にNG。バラキートかに怒られちゃうからね……というか角の生えた状態のヘッドバッドって雷属性乗るんですね。今更ステータス画面見て初めて知りました。まあ使い所さんが無いので一生利用は出来ないと思いますけど。

あ、因みに今操作は一切してません。完全にイベントって感じですよ。

「頭ー！ やつちまえー！ 今日も一発だ！」

「兄貴そこそこ！ ストレート！ アッパー！ さっきのボディーク効いてますよー！」

「どっちに賭ける!？」

「いやーやつぱ頭かなあ……ステゴロだったらあつちの方がカッコいいし」

〽不毛な殴り合いに、船上は盛り上がりを見せ、周りからは好き勝手にヤジやら応援やらが飛んで来る。貴方達のどちらが勝つかの賭け迄始まっている始末だ。見世物になって居る事に関しては物申したかったが、今は目の前の相手に集中するべきだろう。

「ちっ、相変わらず、ステゴロも十分強い……っ」

「二人共それが終わったら頼むから片付け手伝ってくださいね！ はいはい、掛け金はこっちだぞ！ 10以下は受け付けねえからな！」

常識人船員君可哀そう。本当に可愛そう……いやお前胴元やってるやんけ！ 良し、コレは粛清。

「さーて、集まった金は、ドレイク船長へのアガリとして渡すとして後は、あの人たちをどうやって止めるかな。そろそろ到着する……っただけじゃ止まらないよなあ、もうあの勢いになっちまうと……っ？」

〽——そんな、熱くなる船上で気づいたのは周りを俯瞰して見れる

立場にあつた、胴元の元船長だつた。その耳に響く、大きな羽ばたきの音。陸地に近づいたからか、大型の鳥でも飛んでいるのか。しかし……そう思つて覗き込んだ望遠鏡の先に、彼は見た。

ん？（イベントの香りを察知）

「おーん……んんんっ!?!」

「どうした?」

「……頭あつ!? アニキイ!? ちょっと、マジで、いったん喧嘩止めてください! お願いしやす! 頼みますから! ホント! こつち、こつち来てえ!」

〈素つ頓狂な声が上がつた。思わず顔を見合わせ、拳を引いて元船長の所に駆けつける。立香に手渡される望遠鏡。それを立香が覗き込んだ瞬間……顔色が変わつた。

「——なんだ、あのデカいのは。こつちに向かつてくるぞ」

「と、鳥じゃないですよねアレ!? 絶対違いますよね!? なんか吼えてますし!?!」

「ああ、違う。そもそもシルエットが……ちよつと待て、早い、もう来るッ!?!」

〈——言うや否やの事だつた。一陣の風が、船の上を駆ける。凄まじい風が甲板に押し寄せ、櫓に腰かけていた船員達は転げ落ち、立っていた船員は皆等しく押し倒されてしまった。無事だつたのは、立香と貴方、そして元船長の三人だけだ。

スーツ、えー、8割くらい（戦力の壊滅具合） 何か急に來たみたいですよ。うーん空を飛んでこれだけの風を巻き起こすと、マジでワイバーンオリジナルでも來ましたかね。だとしたらマズいですよ。普通に強敵なんですよねアイツ。クリティカル乱発とか、無敵連打とか、あんまりされると……

「くっ……な、んだ……!?!」

〈天を仰ぎ見る。その先に……見えたのは巨大な翼。人一人飲み込むのも余裕な程の顎、そして爛々と輝くその瞳。緑の鱗。そして……口から洩れる、火の粉。ワイバーンなどではない。アレは間違いない。

「……うそ、だろ?」

「どどどどどどつ、ドラゴンだあああああああ!?!」

わつつはつぶん? (精神崩壊)

……えー、と言った所で、今回は此処までとなり、マス……はあー

……次回は、ドラゴン討伐戦……すうううううううううううううう

……ウアア!! オレモイツチャウウウウ!! ウウウウウウウウ

ウウウウウウウウウウウウウウ! イイイイイイイイイイイイ

イイイイイイイイイイ!!

## 大海賊のシマへ その三

皆さんこんにちは、ノンケ（ポールドンサーぐっさま）です。あの宝具見た時、それにしか見えなかったのは俺だけではない筈だと思います。あと項羽様から貰った槍を投げたり色々使ってますけどそれは大事にしてるんですかね……？

前は、ホモ君と藤丸君、宿命の殴り合いが始まると思って居たら、ドラゴン君が『そんなんでも良いからさっさと人理修復せい』と言わんばかりに戦いの邪魔に飛んで来てくれました。お疲れ様です！

「——嘘だろ？」

＜思わず貴方も体が止まる。船の上に着陸してもおかしくない距離で、ホバリングしているその巨体に……しかし、直後、貴方達は誰よりも早く思考を取り戻し、一瞬で構えを取った。

＜立香！ 跳べ！

＜俺が飛ぶ！ 立香！ 合わせてくれ！

跳びそうなイメージがあるのは……まあ、多分藤丸君の方でしょう。ホモ君は大抵踏み台になるのがお似合いなので。ホモ君の扱いは緑甲羅と同等です。もしかしたらヨツシーかもしれない。

「クソツたれ、やるしかねえか！ 良いか康友、絶対に容赦するな、弾丸みたいに弾いてぶつける位じゃねえとビクリともしねえぞ！」

「……あつ、えつ、頭っ!? 兄貴!? なにする気ですか!？」

「アイツを追い払う！ 良いか、俺が吹っ飛んだら急いで帆を張って出せ！ 良いな！」

＜そう言っつて、貴方が構えたのは拳。足では不安定、正確に狙うには拳の方が丁度いいだろう。渾身の力を込めて深く貯め、其処に立香が走って向かって来た。跳躍するタイミングは見えている。タイミングを合わせるその動きにすら気を払わず……拳を突き出した。

＜跳べ……いや飛べっ立香！ 流星に成れ！

＜必殺フジマルミサイル着火！ 射出！ 当たれええええええ！

威力はミサイルの方がありませんが、爆ぜた後帰ってこれなさは

うなので選択肢は上です（特攻宝具並感）

「おおおおらあああああっ！」

「す、すげえ！　まるで人間大砲じゃねえか、頭！　一直線じゃあー！」  
　　＜渾身の拳と、跳躍の勢いで、正に弾丸の如く飛びだした立香は、そのままの勢いでドロップキックをその顔面にブチかます。カルデア製の靴の強度を信じての事だろうか。そしてそのままにドラゴンの顔面を蹴飛ばして、そのまま船に向かって再跳躍をかけ……

「おし着地も完璧！　十点十点十点！　とくらあ！　っしやああー！」

「言ってる場合じゃないですよ!?　今全力で船出してますけど、あんな振り切れるわけがないでしょうよ！　この船、別にそこまで速いって訳でもありませんし！」

「何を弱気な事言ってるんだ野郎共！　ドラゴン如き、俺達カルデア海賊団に振り切れない道理はねえよ！　時間稼ぎは出来たから行けるはずだ！　やってみせろ！」

　　いや藤丸君、それこそブラックパール号でも無けりやあんな全力で飛んで来るような高速ドラゴン屋振り切れないよ、全く困ったものじゃ……（困惑）

　　ところでジャックが英霊化って誰でも考えられると思いますが、んですが実は格を考えるとくろひー、姉御、菌茎マンは当然、アンメアとバーソロにも圧倒的に劣るんですよアイツ……なんだお前情けねえな船長系のくせによお（侮辱）

「し、しかし……！」

「逃げるって言ったなら逃げる！　逃げらんなきや俺達の物語は此処で終わりだっただよそれが嫌なら死ぬ気で逃げろ！」

　　＜この元船長、中々ノリが良いな……とか考えつつ、さて打ち落とすにせよ、どうするかを貴方は考える。どうせここで負けを選べる立場では無いのだ。勝たねばこの世界は終わる。船を守り、自分達は無事に退却をするしかないのだ。

「――ああ糞、最悪だ！　頭あー！」

「どうした!?!」

「前方に、群れです！　奴らの！　どうやらここ最近、子分を潰されま





「上手く行つた！ 海魔にヘイト向いてくれたか！ お前ら！ 今の内に距離稼げ！」

∟立香の狙いは、どうやら群れの海魔に狙いを向ける事だったらしい。明らかに怒り心頭のドラゴンは、そのまま海から此方へと向かうとしていた海魔の群れに、真つ赤な輝きを浴びせかけた。

あゝ海の蒸発する音おゝ。もう熱量の差で大爆発してるんだよなあ……そして吹っ飛ぶ海魔君達の死骸、肉片。物騒！

「うつわ……」

「急げ急げ！ 風を捕まえろ！ そうじゃないと振り切れないぞ！」

「つてそうだった！ 野郎共！ 急いで風に乗るぞ！ 島まで行けば、取り敢えず海の藻屑になるのだけは避けられる！」

ここで沈んじやええば間違いなく死んじやうからね。成程、生き残りをかけるのは生物として当然の（無言のビンタ）——目標が低い（天狗面）せめて勝つ事を考えるんだよ180度（発想の反転）

「——み、見えて来た！ 島だ島！ いけますぜ頭！」

「お前ら！ やれるぞ！ 逃げ切れる！ 陸地に付いたら、そのドレイクつてのにも手伝つて貰つて……それで！」

「な、なんか希望が見えて来た……！」

∟船は風を受けて進む。ドラゴンは海魔に釘付けになっている……これなら間に合う。そんな希望を、船の上の船員皆が、抱き始めている。そんな、そんな時だった。貴方がふと振り向いた後ろで……ドラゴンが、天に向けて一声鳴いた。

「……なっ、なんだあ!?!」

「で、デカイ遠吠えしやがって、犬の何とやらか!?!」

犬の何とやらはもう脳死発言の極みなのよ。せめて負けだとか、遠吠えだとか。勝利のハイテンションで頭はムーミン野郎になつてるんですかさては？ ふ、しかしコレはね。間違いなく『やったな』（完全勝利UC）

∟しかし、貴方のその瞳が捉えたのは、負け犬の遠吠え、とは完全にかげ離れた光景だった。ドラゴンの奥、其処から向かつてくる、黒い、群れ。

〈野郎……どうやら配下に召集かけたみたいだな。

〈おいおい、ヘッドがダチ公にカチコミの要請かけてんぞ兄弟！

だから『やったか』とか言っちゃいけないですね。皆は、言わないうようにしようね！　そしてお父さんお母さんと一緒に、生きようね！　（ホモ君との約束）

「——ああくそ、マジだよっ！　さっきので呼びやがったか!？」

「えっ!?　何の話!？」

「ワイバーンだよ！　どうやら本気で怒って、群れでリンチの構えになつた模様だ！　クツソ野郎が、近づいて来るぞ!」

「うわぁホントだ!?!　っていかもう、そ、傍まで……包囲されていますけど頭!？」

〈悪夢だ。完全にやられた。どうやらあのドラゴンには、自分の手が空いていないのなら、仲間に任せるといふ知恵があつたらしい。間違ひなく十頭以上は居る。これを二人だけで追ひ払うのは無理だと、貴方もあつさりと悟れてしまった。

「だが……それでも突破するしか……!」

〈そんな状況でもなお、立香は奮起し、拳を構えたが……しかし、その直後、後方から巨大な羽ばたきが聞こえる。時間稼ぎのそれも、どうやらさして意味は無かつたと見える。後方から、此方の甲板目掛けて、飛んで来る一匹の竜が。

ク　ソ　デ　カ　D　O　R　A　G　O　N　画面いっぱいの大迫力ドラゴンに、思わず投稿者もげっそり。ああ……申し訳ありません皆様。どうやら私、このゲーム初めてのリトライを、ここで使用する事に……

〈それに向けて、歯を食いしばり……拳を、構える。立香も、貴方も。それでも、諦める事だけはしたくない。まだ、大切な仲間たちと、合流すら出来ていないというのに。

「——先輩っ!」

「させはしません!」

「狙いは前方の大物!　ぶっばなしなあ!」

〈その時だった。藍色の流星が、飛んで来たドラゴンの横つ面を思

い切り張り飛ばし、そして船に集っていたワイバーンに、黒の光弾が着弾、追いついていく。そして……無数の砲弾が、一撃に怯んでいた竜の体を正面から押し返す。

つよい。

「ドクター！ 先輩たち！ 発見しました！」

「もう大丈夫です！ マスター！」

＜甲板に響く、重厚な金属音と、ふわりと広がる藤色のスカート。絶望の淵の貴方達の前に降り立ったのは、貴方達二人がこの旅で手に入れた、大切な相棒で、仲間。マシユと香子だった。＞

——と言った所で、今回は此処までとなります。ご視聴、ありがとうございます。

## 大海賊のシマへ その四

皆さんこんにちは、ノンケ（鬼ゲーマー）です。一つだけ明らかに異質なスキル。唯の夜更かしをあそこ迄カッコ良くできるDWに、本当に感服した覚えがあります。次の水着イベも楽しみにしてるぜ。

前回は、ドラゴン君に遭遇。藤丸君ミサイルだとか、海魔ヘイト作戦だとか、奇策に奇策を弄して逃げ切りを凶りましたが……やはりドラゴン君は強かった。追いつかれてしまった。だが、そこに現れた影は、紛れも無く！

〽目の前の二人の姿に、思わず眼の前が潤む。余りにもカッコ良く、余りにも頼もしくて。しかし、それはカッコ悪いと、せめて顔をそむけると、既に近くには、別の船が横付けされていた。

「——姉御！ 竜ですよ竜！ またドエライもんが出てきましたね!?!」

「はっ、あのカチコミより凄い者なんて無いだろうよ！」

「ああそりゃあそうでした！」

〽その船に乗っている船長らしき影に貴方は視線を止めた。女船長が、かのドレイクと言っていた。となれば、あのマゼンダの髪の女性が……

姉御ーっ！ 俺だーっ！ 背中をバシッと叩いて『しゃんとしなっ！ 野郎共！』って言うてくれー！ 後ドラゴンも打ち落としてくれー！（他人任せ）しかし、つくづく普通の船と全然迫力が違いますよね、姉御の船。オーパーツ染みている……とか言っ居たらそのドラゴン君がお怒りの模様。炎めっちゃ漏れてる……！

〽竜が天に吠える。自らを邪魔する不屈き者に、その怒りをモロに乗せて叩き付けんと上空から、船上に突っ込み、そのまま船諸共破壊する勢いで突撃するドラゴン。

「——先輩っ！」

「マスターー！」

〽しかしさせない。マシユの盾が、ドラゴンの叩き付けを弾いて流す、香子の黒い一条の閃が、貴方達に釘付けになって全く、何も考

えて居なかつただろう、そのドラゴンの瞳を容赦なくえぐって見せたのだ。

「ご無事でよかったです……やっさんも、本当に」

「つてあのマスター!? どうしてそんな血塗れに……!?! お顔まで!

ま、まさか何処かお怪我を! あ、ああああああ……」

突如としてやって来た援軍香子さんがあつと言う間に顔面蒼白になってダウン!? そういえばホモ君未だ返り血を拭いていませんでした。香子さんには余りにも刺激が強すぎてしまった模様です。

「ちよ、おい大丈夫か!?!」

「——全くマスター。レディーにそんな血化粧を見せるもんじゃないよ。せめて顔だけでも拭わないと」

〈そんな貴方の腕に抱かれて意識を失った香子に代わり、隣に降り立ったのはデオン。ドラゴンに対し、怯える事も無くその切っ先を……向けない。完全にその剣を下ろしてしまっている。どうして、と問う貴方の視線に、デオンは肩を竦めて見せた。

「何、直ぐに決着は付くさ。どうやら、暴れるタイミングを見失って、溜まっているサーヴァントがいらっしやるようだからね」

「——おい、マスター」

ああっ……(怯え) も今日は、すげえきつかったゾ、何であんなんきついんすかね、もう(怒) 止めたくなくなりますよなん、じゃけんもう帰りましょうねえ(避難)

……ダメ? ワカリマシタ、q、(思考停止)

「お、オルタ!?!」

「戦わせるために呼んでおいて、初めから待てをさせるとは。随分と私をコケにしているようだな……詫びる積りがあるなら魔力を寄せ、速攻で終わらせてやる」

〈黒い旋風が、その剣によって巻き起こされる。明らかにバイザーの奥の目、瞳孔が開いていた。コレはダメだと悟ったのか、立香は大入しく、令呪の刻まれたその腕を高く掲げて見せた。

「分かった……一発で頼むよ」

「当然だ。纏めて蹴散らしてやる」

「そして、その黒い聖剣の掲げられる先には……巨大なドラゴンと、その周りに呼び寄せられた幾体ものワイバーン。オルレアンでも見た悪夢の光景だが、そんな事を気にする素振りなど欠片も無く、無造作に聖剣を軽く投げ、掴み直し、構えた。

「や、止めてオルタちゃん！ そんなの撃つたらこの船壊るるゝゝほあく！ ほあく！ この船壊れちゃあゝゝう！ 皆水底に沈む沈む沈むっ！（水着クリス朝）」

「令呪を持って、我が剣に命ずる！ その聖剣の輝きで、竜の群れを蹴散らしてくれ！」

「――卑王鉄槌、極光は反転する」

「放たれる黒い輝きは、蒼天すら染め上げるのではないだろうか。其は騎士達の目指した輝ける栄光では無く、冷徹な王の意思によって放たれる竜の息吹。宝具種別は、堂々の対城宝具！」

「光を飲め！」

「一步踏み込む。その勢いで、甲板が悲鳴を上げて、ひび割れた。しかしここから先の一撃は最早それぞれの騒ぎでは済まない。貴方は、咄嗟に声を上げる。隣の船へと全力で跳べ、と。そう言っ、貴方は香子を抱えこんで飛び移った。

「ホモ君が香子さんを抱えている横で、何の躊躇いも無くマシユが藤丸君の事を抱え上げて、そして藤丸君の表情が完全に死んでいるのがもう笑う。どう？（マシユの腕の中）気持ちいい？（棒読み） まあ

（棒読み）

「エクスカリバー・モルガアアアアアアン！」

「解き放たれる竜の焰は、先ず船の縁を容赦なく焼き尽くし、更にそのまま、船の一部を容赦なく削り取って行く。しかし直線状のドラゴンの群れはそれどころの騒ぎではない。直線状、その黒い輝きが過ぎ去った後には……何も、残らなかった。

「まあ、そうなるな（HYUG師匠）」

「……ひえー」

「本当に、味方で良かったと思うよ……」

「私もそう思います。先輩。特異点Fの時と全く遜色のない破壊力で

す」

「全員が何もなくなった空を眺め、そして、ただただ圧倒されていた。凄まじい、の一言に尽きる。城どころか、町一つでも軽々消し飛ばす、と言われても全く嘘だとは思わず寧ろ当然とすら思ってしまうだろう。」

「——正に、暴君と呼ぶにふさわしい暴力の渦だね。アレは」

「にやはは、やはり勝つのは暴力、暴力、暴力なのである。そして暴れた後は食事がベスト！ という事でキャットの気まぐれアクアパッツアは如何か？」

「いやアクアパッツア気紛れはマズいと思うんですけど。二重の意味で……でもキャットなら凄い美味しそうな感じにしてくれそう。よし、キャットの気まぐれに任せようかな！（猫馬鹿）」

「……アクアパッツアってあれでしょ？ 水で煮た奴。あんなん気紛れに作ろうが大して味変わんないと思うけど」

「それは偏見だよ。幾らなんでも」

『——まあまあ、話はそれくらいで。本造院君、本当に無事でよかった！ いやあ、此方のレイシフト時のミスでこんな苦労背負わせてしまつて、申し訳ない。せめて何かしらの形で報いる事が出来れば良いんだけど……』

「そこまでのピンチでもない、とだけ返してから、貴方は現在の状況をロマニに問いかける。曰く、彼らはキャプテン・ドレイクの船に直接レイシフトしていたらしく、そこから彼女の助けを借りて、自分達を探していたらしい。」

因みに、F G O 本家では、名もない海賊船に着陸したのが始まりだったので、実は本家寄りのムーブをしてピンチに陥ってるのがホモ君達で、一切の無駄を省いて楽をしたのがマシユ達、って感じですよ……普通逆では……？（危険な気付き）」

『探していた、というか彼女の提案で君達が立ち寄る可能性の高い場所、彼女が仕切っている島に向かっていたんだけどねん』

「おいボンベ！ 海に落ちてる奴らを引き上げな」

「へいっ！」



〈そしてその彼女と、初めて目が合った。そうすると、一瞬小首を傾げてから、つかつかと此方に近づいて来る。

「……ウチにこんな野郎共いたっけか……?」

「ああゴメン違うんだ。彼が私、キャット、そしてシキブのマスターなんだよ。ちよつと人相が悪いのは……まあ、ご愛嬌って事で」

「ああ！ 此奴が！ いやーそうかそうか！ 人を何人か魚の餌にしてそうな顔してるなとか思ってた済まないねえ！」

〈……良いんです、とだけ貴方は返した。この顔については、もう半分諦めてしまっている。しかし、カルデア組所属若頭、とだけ頭に浮かべてその横に自分の顔を据えると、なんだかとても様になって居るのがとても悲しかった。

〈称号『カルデア組』を獲得しました。

この称号の条件どこ……ここ……? (困惑) キャラクターのAP

Pが一定以下だととれるとか? ホモ君のAPPってそんな低いのか!? まあチンピラハゲですし致し方ないか (掌ドリル)

「その詫び、って訳じゃないけども。アンタ等は大事な客人として全力でもてなすよ。とりあえずは……ま、アタシのシマへ、ご案内とくらあー!」

ドレイク船長からのご招待、と言った所で今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。

## 大乱の跡 その一

皆さんこんにちは、ノンケ（あけちくん）です。どのゲームでも大抵彼のキャラクターは変わらないんだな、とBASSARA、FGOをプレイして思いました。〇。どっちも白い髪だし、どっちも信長公大好きマンだし。

前回はカルデアメンバーと合流。そしてお怒りオルタさんの一発によつてドラゴン君は一発討伐！ 序にカルデア海賊団の船も沈没。まあ、発射の台座になつてくれただけでもよしとしたい所です。

さて、画面は島のジャングルっぽい所をホモ君達が行進している所からのスタートとなります。前方にはオルタ、そしてデオン。ホモ君と藤丸君の傍らにはキャットとマシユ、その後ろに香子さん。でもつて殿はジャンヌ。そして、自分達の前に行くのは……

▽——先頭に行くドレイクは、この広大なジャングルを、まるで自らの庭の様にすると抜けていく。ここが彼女のシマ、と言うのは疑いようも無いだろう。

「しかし、その子達のリーダーだつていうからどんなゴツイのが出てくると思ったら、存外と拍子抜けつて言うか。片方は優男だし、もう片方はリーダーつて言うか鉄砲玉の方が似合いそうな面してるし」

「……実際、マスターは鉄砲玉の様な事ばかりするので困っているのですよ」

「あつはつはつはつはつはつ！ 見た目にそぐわずつて奴かい！」

ホモ君の頭自体が弾頭みたいなもんやし……まあ角があれば突撃でも適当にすればダメージ与えられそうではあります。闘牛かな？

狂牛でしょ（ケルト並感） ウィルスに侵されたホモ君とか極限化しそう（XX並感）

「まあ、でも良い土産を連れて来てくれたし。その辺りは感謝だね」

「土産つて俺らですかい姉御！」

「そうそう！ そこそこ根性ありそうだし、丁度いいつて奴さ！」

▽そんなドレイクは、貴方達の率いていた海賊団も、一緒に引き受けてくれるほどの懐の深い大英傑だった。香子の言う事には、少し乱

暴な部分が無い事も無いのだが、それでも悪い人ではないとの事。

『しかし、君達もたくましいよねえ。サーヴァントが居ない状況で尚、普通にマスター二人で海賊船を乗っ取っているんだから。もう少しサーヴァントに頼るって事を覚えようよ君達は』

頼るに頼れない状況だったんですけど（半ギレ） そりゃあサーヴァントの皆と一緒に楽しく海賊船制圧したかったんですけど（全ギレ） というか香子さんと船上デートしたかったですけど（欲望）

「——ここを抜けた先だよ。まあ、食料と酒には困らないからその辺りは安心しな！」

「いやー、しつかし久しぶりの陸だな。最近はもう、ここら辺をうろつく艦隊の対応でてんてこ舞いでしたからねえ」

「ま、今日の奴らを沈めなかつたら、この島でも休めなくなるところだったけど。ったくマシユとシキブ達には、負けた挙句、命まで世話になったんだ。この借りを返すまでは出来る事はしてやるつもりさ」

ん？ 今、何でもするって言ったよね（ホモは難聴） 何でもするとは一言も言っていないだろいい加減にしろ！ ドレイク船長がちよつと魅力的すぎるからね、難聴気味になるのも多少はね？ お前さてはノンケかよお！ 普通に姉御と冒険したいだけなのになんでノンケやらホモの話になるんですかね……？（自問自悩）

「……マシユ、何かあったの？」

「あ、いえ。先輩たちから聞いたお話と、流れは同じです。急に船にレイシフトし、襲い掛かって来た皆さんを返り討ちにして……それで、襲い掛かって来た船を、ドレイクさん達と協力して撃退したんです」

「襲い掛かって来た船？」

「ええ。それなんですけど、少々と特殊な話に……あつ、見えてきました」

「そう言いながら抜けた森の先……そこには、それなりに大規模な野営地があった。流石にセプテム、ローマ帝国の物と比べると見劣りするが、逆に言えば、一海賊がこれだけの規模の物を展開しているのだから、それが驚きと言えそうだが。」

「——ようこそ。あたし達のねぐらへ。男臭いだらうけども、まあそ

の辺りは我慢してくれや。後、野郎共が変な事したら言いな。取りあえず樽に詰めるからさ」

「二」そつ、そげなことせんがな姉御!!」二」

「お前ら全員視線がお空に泳いでるけど？ 本当に大丈夫かい？」

そして君達ヨーロッパ出身だろうにどうして日本の方言チツクになつて居るのか。取り敢えず全部脱いで貰える？（ヤキ入れ準備）

つたく、香子さんら女性陣に手を出そうものなら二度とエロ同人に出演できないレベルの肉塊に変えちゃうからねっ☆（ウインク）

「つたく、済まないねえ、ウチのアホウ共はこんなんだけど、ちいとばかり我慢してくれや。海賊なんてどいつもこいつも、欲望に忠実なものだからね」

「は、はあ……」

「さて、そつちの二人にも話した方が良いかい？ この海の事。おかしくなつたこつちを解決にしに来たんだから、さ？」

＜貴方と立香は、一度顔を見合わせると、木箱にどっかりと腰を下ろした彼女に向けて頷いて見せた。どういう事かと問い返すつもりもない。迷いも無く頷いた二人の様子に、彼女はニヤリと笑つて見せた。

「良いねえ。迷いも、不安も無い。気持ちのいい野郎共じゃないか。そんな奴になら酒も進んで口も良く滑るってなもんだ」

「何言つてんすか！ 姉御はそんなん関係無く酒煽つてますよ！」

「はっはっはっ、ボンベ、お前酒の肴取つてきな。勿論素潜りでね」

「ええっ!？」

ボンベ君はいつつも一言多い。もうちよつと何とかならなかつたんですかね言い方。まあどうせ言い方を変えた所で多分余計な事をボロッと零すのは変わらないとは思いますが、全く困つたもんじゃ……

「すまない。で、今の海の状況だったね。さて、何から話したもんか……先ずは、あの乱痴気騒ぎ、からかな」

＜そう言つて、先ずは手元のジョッキをグイッとあおり、酒を喉に通してから、彼女は改めて口を開いた。

「乱痴気騒ぎ？」

「そう。急に現れて、この辺りを仕切ろうって暴れ出した二つの馬鹿共の戦争だよ。この辺りの海全部を巻き込んだの、まあそりゃあ、デカイデカイドンパチさ。この辺りの海はその前からちよつとおかしかったけど、それで完全に歯車がいかれたのさ」

ドンパチっていうか、ドゴンバギンっていう擬音が似合うレベルの World! War! だと思うんですけど姉御。

〈二つの馬鹿共……？ と今度は貴方が口にしたのに、彼女は軽く頷いた。

「先ず、その一戦で負けた方。一隻でどんな海賊だって一捻りだった、たった一隻の船と超人共。えっと、確かなんだったかな」

「姉御！ アルゴなんたらですよ！」

「ボンベさん、アルゴノーツです。それと、なんで濡れてるんでしょうか。後その腕のタコ、何方でとってきたんですか？」

「それです！ アルゴノーツですよ！」

もう潜って来たのか……？ 姉御の命で海まで……？ あまりの姉御への忠誠心に涙ちよちよぎれそうになります。後頭にウニ突き刺さってますけどどんだけ深く潜ったんでしょうねこの人。まあそれは置いておくとして、結局イアソンくん負けたのか。フルメンバー、ではないせよあの二人が揃ってなお。

「化け物みたいな大男もメツチャ暴れてましたけどねえ。いやもう、途中までは本当に無双つてもんでしたけど、イヤー船長を狙われてからはジリ貧でしたねえ」

「見事なもんだった。本当に一瞬、その大男が他の船に構ってて、どうしようもなくなった所に、正に一瞬で乗り込んだのさ。船長を一撃でズバツと。全く、船の上で馬乗り回すなんざ、常識外れにもほどがある」

〈その言葉に、思わず顔をしかめてしまう。そんなチートみたいな事するモンスターには、貴方は一人しか覚えがない。

「赤髪の大男だったよ。益荒男って言うのが、ピッタリの奴だったね。あの金髪の船長と違って、まあ」

「……紅い髪。マスター。恐らくは」

「…イスカンドルだろう。間違いなく。」

「…ブーディカさん!? なにしてるんですか!? マズいですよ!」

お前ブーディカさんの訳ないだろいい加減にしろ! ブーディカさんはママ味溢れた見勅的な女性だルルオオン!? まあ、馬捌きは多分とてもお上手だと思えますけど。序に言えば夜の馬乗りも（ry  
「……イスカンドル様かと思いません、マスター」

「…若干哀しそうな、残念な者を見るような表情で見られ、此方まで悲しくなってしまう。紅い髪と言われ、ちよつと勘違いしてしまっただけなのだが。」

お前、あんな美人を赤ひげの遅いオヤジと間違えるとかそんな表情されても文句言えないんだよなあ。女性へのデリカシーをもうちよつと持つてどうぞ、どうぞ、ど う ぞ（極み吼える投稿者）

「ああ! そうだそうだ! あの赤髪、そんな名前だったね確か! イスカンドル」

「そのイスカンドル様が決着を?」

「まあ、そんなもんだよ。大男も、船長狙われだしてから、一気に動きが鈍くなって、後はまあ総崩れ。つっても、その赤髪の方も大分船沈められてたから、完全に痛み分けて感じだったけどねえ……」

「…ただ、と彼女は一つ、言葉を置いた。その表情は、余り良いモノとは呼べない。」

「そう簡単に終われば、話も楽だったんだけどね……」

——と、続きが気になる所で今回は此処までとなります。ご視聴、ありがとうございました。

## 大乱の跡 その二

皆さんこんにちは、ノンケ（小物IASN）です。彼には二つの顔がある。しようもない小悪党の時の面と、それなりにカッコいい『船長』としての面と。どうして前者にも人気があるのか、これが分からない。

前回は、島に案内して貰ってイスカンドル対アイソン対ドレイクのリザルトを聞きました。どうやら試合に勝ったのはイスカンドルの模様ですが、どうやら勝負に関してはまだまだあるようで……後ボンベ君は凄い頑張っていました。

「まだ、何かあるんですか？」

「負けがほぼ決まったアルゴの船長が、最後の最後にヤケを起こした……」

アイソン船長、もう嫌っていうまでメツチャボロカスにされたんだよ（断定系） アイソンくんさあ……俺達だって幕引きぐらい選ぶぜ、クツチャクツチャ。立つ鳥跡を濁さず、知らないのお？（煽り）

「……化け物と呼んだのさ。それも、特大のね。自分の船を道連れに呼び出したのは目玉だらけの肉の塊。それが、周りに広がってた船をドンドン吹き飛ばして、戦場は大荒れと来た」

「肉の塊、目玉ツ……!? そ、それでその怪物は!?!」

「ドレイクさん曰く、それはこの海に今でも存在していると」

＜セプテムで、ロムルスが潰していたあの巨大な柱。孔明の言っていた条件にも当てはまる悪魔。それが、この特異点にもいるらしい。島の一つに落ち延びてそこで根を張ってるって話さ。そんでその島からはドンドン魔物やら何やらが出てくるようになった……お陰で、ここいらの海は魔の域と化したって訳だよ。ったく、最後に余計な置き土産置いていきやがって」

＜本当に良い迷惑だ、とぼやきながら、もう一度彼女は手元のジョッキの酒を煽った。美味しそうには、到底見えなかった。

こんなクソマズそうに酒飲む姉御とか……いや、変態ドレイク筋金入り厄介オタク黒ひげくんだったらそれすらも楽しみかねない気が

する。怖い怖い。あの黒ひげが真顔でドレイクがマズそうに酒飲んでいるのを見つめてるんでしょ？ うんしつくり来る。無表情で深い深いッ！（強調）瞳で見つめている気がする。

「それで、勝った、イスカンドル側の軍勢は？」

「勝者側の特権と言わんばかり、まあここらの海域で幅利かせ始めたよ。一つ、特大の島を拠点、縄張りにしてね。この辺りで、アイツ等のシマになってないのは、目玉が居座ってる所と、アタシたちの島、で後小さい所ポツポツあるくらいかね」

「本当に、この海の覇者……なのですね。征服王、イスカンドルは」

「かなりの強敵なのは間違いない。しかし、警戒を強める此方を他所に、響めていた彼女の表情が一気に変わっていった。何かを思い出したのか、ダムが決壊したかのように一気にゲラゲラと笑い始めたのだ。

「いいや、覇者じゃあないさ！ アタシたちが！ その覇者の野望！ 残念ながらへし折って差し上げた訳だからねえ！ あっはっはっはっはっはっ！」

姉御!? どう考えたってよおお前よおなあいきなり躁に入るなあとかって思うだろなあ普通よお!? でもこんだけ何々大笑してるっていうのは……もしかして、何かやっちゃいました？（なろう並感）「いやー、その殴り合いにアタシ達も殴り込んでやったのさ！ アルゴの船長が間抜け晒すちよつと前位にさあ！」

「乗り込んで、どうしたんですか？」

「もしかして、余程のお宝でも奪ったんですか姉御！」

ホモ君まで何か姉御って呼び始めましたけど？ どうしたんですか？ さては野郎共って呼んで欲しくなっちゃったかな君は。眼帯付けるか？ アクセサリ、ダ・ヴィンチちゃんに作ってもらおう？

「そうだと！ 余程大切だったお宝をねえ！ 野郎共！」

「そう言っつて、彼女は手下に声をかけて……持ってきたそれに、貴方達も、そして事前に話を聞いていたであろう、マシユ達も目を見開いた。特に、セイバーオルタの反応は、露骨と言って良かった。

「……馬鹿な、聖杯、だど？」



「ははははっ！ この盃、凄いもんだよ！ 酒と食料を幾らでも吐き出してくれるのさ！ 全部黄金つてのは趣味が悪いけどね」

「凄い、どころの騒ぎではない。聖杯である。特異点を維持する魔力リソースの塊。自分達が回収すべき品である。思わず貴方は立香と目を合わせてしまう。」

あれっ？ 聖杯はまあ、良いんですけど。姉御の聖杯って、確か胸の辺りから勝手に出てくるとかそんな感じだったと思うんですけど。みんな？ アレかな、RPGの開発スタッフがその辺り改変したのかな……？

「いやあー、アイツ等の持っていた、コイツを搔っ攫ってやった時は本当に痛快だったよアタシは！ 目を丸くしてたもんさ！ 船諸共乗り付けて乗り込んで、あの大男の横っ面張り飛ばして、奪い取ってやった！」

「せ、聖杯を搔っ攫う……凄いですね」

「目を丸くしているのは立香も同じことである。いきなり目の前に聖杯を出され、搔っ攫ってきた、である。この世で最も豪快な略奪だと思われる。サーヴァント相手に普通の人間がそれをやらかしたのが凄まじいのだが……余りの偉業に、それすら薄れるレベルだ。」

それに、確か姉御の聖杯って、ポツチャマ……じゃなくてポセイドン……（海神）を沈めたことで聖杯に認められて、的な事では無かったでしたっけ。流石にアトランティスの事もあって、今つじつまを合わせに行きましたかコレは。」

『……おかしいなあ？ ボクの目と耳が可笑しくなつてなければ、いま目の前の方、聖杯を略奪して来たって言った？ でその証拠の品を目の前に出した？』

『はいはいロマニはお休みしようね……うん。まあ凄まじい事態だよね。それが出来るって言うのは、普通の人間じゃ不可能だと思うんだけど。君つてもしかしてサーヴァントだったりする？』

「あん？ なんだいそれ？」

「どうやら、サーヴァントではないようだが。だとすれば、普通の人間がサーヴァントを出し抜いて聖杯を奪った、ということんでもない

事態である。事態がどんどん膨らんでいくのだが……

「——あー、もしかして。サーヴァントっていうのは、イスカンダル、とかいう奴とか可笑しな力持つてる奴らの事かい？」

『そうそう。まあ、分かりやすく言えば超人だね』

「あー。そいつらに力が通じたのは……もう一個のお陰さ」

成程。もう一個ね……なんて？

『えっ、今なんて言った？』

「だから、奴らが持ってたみたいなのを、アタシは元々持ってたんだよ。此奴が無かったら、あの大嵐は生き残れなかったと思うね。ほれ」

＜そう言つて、彼女の胸元が輝けばそこからせりだして来る、もう一つの黄金の輝き。それが一体何なのか。一度実物を見せられている貴方達には、容易に理解が出来てしまった。間違いない、それは

……

「「せつ、聖杯!? しかももう一個!」」

まるで聖杯のバーゲンセールだな……因みに伝説に残るガチ聖杯はまあ数あんまりありません。FGOみたいな『聖杯って呼べるだけの魔力リソース』は幾らでも、と言う程ではありませんが、数はあります!」

「いやー、凄いいもんだろう?! 姉御は多くの大冒険を乗り切つて来た大船長! ぶっとんだお宝の一つや二つだつてあるってもんだ!」

「趣味が悪い盃だけだね」

「いいじゃないですか! 開けぬ七つの夜、災禍の中より浮上せり、幻の海底都市アトランティス!」

「その都市を拠点にしてた、『オリュンポス十二神の名の下に、この世界をうんぬんかんぬん』言つてたデカブツ相手に大立ち回り! もうこりゃあ世界も一つ救つたんじゃないかっての末のお宝ですぜ!」

＜いや、間違いなく世界を一つは救っているだろう。キャットは貴方の膝の上でくつろいでいるから気にしてないが、他はもう顎も外れんばかりの勢いである。

「ああん? んな大したもんじゃないだろうよ。ポセイドンを名乗つ

た大馬鹿野郎が船乗りとして勘弁ならんから、足引つ搔けてスつ転ばしてやった。お宝も貰つて、序に都市諸共海の底！ 最高つてなもんだ！」

「いやー姐さん、もうちよつとカツコイイの鳴り潜めないと、一生独身ですぜ！ そつちの方が俺達とすればありがたいこつたですけど」

「余計なお世話だよボンベ。もう一回潜つてきな」

「へいっ！」

もしかしてボンベさんの名前の由来つて、いっつも海に潜らされるからなんじゃ……それは兎も角。どうやらキツチリこの特異点でもぼせいどんくんは船長にやられていた模様です。お前いっつもドレイク船長にしてやられてんな。オリユンポス十二神として恥ずかしく無いの？

『バイタルチェック。其処の海賊の皆は素面で、嘘吐いた様子も無しだよん』

「あ、あわわわわわ……た、大変です先輩！ ドレイク船長たち、嘘吐いてません！ この特異点は、一度人類定礎が崩壊しかけて、それを、通りすがりの、ドレイク船長たちが、ノリと勢いで解決して、こんな結果に！」

～ついでに、その後にあつたイスカンダルとアルゴ号、だったか。その戦争でもどうやら勝利の栄光を搔つ攫つて行つたらしい。正に人類神話と呼ぶべきに相応しい大活躍である。本当に人間なのだろうか、この人。

まあ船長だし（ドレイク信者）サーヴァントの中で、ギル様、ヘラクレス、そう言ったトップサーヴァントに対する言わばジョーカーを持つてるの姉御とテスラ博士くらいなんだ！ 皆も、ドレイク船長の船に乗り込んで、すこれ（命令形）

そんな船長の武勇伝二つが組み合わさつた所で、今回は此処まで。次回は、この二つの聖杯……どうすんだよお前よお（自問自答）

## 魔の海 その一

皆さんこんにちは、ノンケ（障害エレファント）です。カルナと幸せになって♡ なれ（恐喝） 絶対に幸せにさせるからな（決定事項）カルナの召喚が出来なかったって言う無念があります。でもアルジュナは居ます。オルタも居ます。なんで???（困惑）

前は、ドレイク船長の武勇伝を聞きながら、聖杯やなんかを奪った事をお聞きしましてございます。で、その聖杯に関してなんですけど……なんと船長、もう一個お持ちでした聖杯。まるで聖杯のバーゲンセールだな。

『……聖杯の持ち主が、敵から聖杯を奪い、聖杯を手に入れた……聖杯聖杯……あーもう色々限界寸前まである気がする！ 無理無理カタツムリー!』

「ど、ドクター、大丈夫ですか?」

「まあ、そうなくても不思議じゃない気がするよ。僕もちよつと、驚いてるし。まあ何人が驚くどころの騒ぎじゃない人たちがいるけど……」

「そう言っつて、デオンが視線を向けたその先に、二人は居た。天を仰いで、そのまま立ち尽くすセイバーオルタと、岩に背を預け、燃え尽きた様子のジャンヌオルタである。」

「……聖杯とは……国とは……私の……願いととは……」

「はっ、聖杯一つで調子に乗って、イスカンダルから聖杯盗んで、挙句の果てにポセイドンと来たもんよ。私って、スケールの小さい悪党だったのかしらね。所詮は贋作は、真作に勝てないって事なのかなあ……ねえ、マスター?」

「じゃ、ジャンヌ。気を確かに」

あつ、ラスボス二天一流のお二人……そっかあ、サーヴァントでもない普通の人間の姉御でまあスケールでド派手に負けて、しかも聖杯二つとかいう圧倒的戦果まで見せつけられて。うん、まあ。ドンマイ!

「……どうしたんだい? その二人」

「うむ、今はそつとしておくのだなビッグパイレーツ。お主は大切な物を奪って行ったのだ。其処の二人を♡キャッチ。そしてそのまま♡ブレイクン。スマツシユウケればそのままお外なのだな」

♡キャットですら哀愁漂う目を向ける有様だが……しかし、取り敢えずあの二人のケアは立香に任せ、取り敢えず、貴方はロマニに問いかける。コレは、聖杯を回収してお仕舞いなのか、と。

『……いや、話を聞く限り、それは無いと思う』

「何故だい？ 彼女は、聖杯を二つ持っている。一つはイスカンダルが持ち込んだものとはいえ、もう一つは確実にこの世界を乱した聖杯じゃないのかい？」

『いや、もう一つ可能性がある。彼女の持っているアレは、この世界に元々あった、そうだね……正当な聖杯、と言う可能性があるかな』

「正当な聖杯、でございますか？」

『そう。特異点を創り上げた悪しき聖杯とは別モノだ』

♡曰く、その悪しき聖杯と、この特異点にもとも存在した正統な聖杯が互いに影響し合って、この特異点はここまで乱れているのかもしれないというのがロマニの見解だった。

『レフ・ライノールが各特異点に配置した聖杯は、こうした乱れが起きるのを狙った可能性もあるね。まあ、その辺りは置いておくとして』  
「つまり、ドレイク船長がもっている聖杯を回収しても、この特異点の異常は」

『解決できないと思う。当然ながらも一つを回収しても』

それは外部から持込された違法聖杯だからね。聖杯に違法も無いも無いやろ（正論） そもそも冬木から始まったF a t eの中で違法じゃない聖杯なんて無かったらいい加減にしろ!!（極論）

因みに確かマトモな聖杯ってアポクリの聖杯、位だったと思います。多分ですけど。原典からZERO、聖杯奇譚に至っては聖杯、爆弾に改造されてますし。

「——おーい、結局、アタシのコレはどうすればいいんだい？ アンタ等にはまあ、色々世話になったから、別にこれ位ならくれてやっても良いけど」

「ああ、すまないキャプテン・ドレイク。其方の、外に出しっぱなしの聖杯は回収させてもらっただけで。貴女が持つている聖杯に関しては貴女の物だ。私達がどうこうはしないから大丈夫」

「気にしないでおくれ。どうせそんなもん幾つも持つてたらやっかみも多い。だつたら誰かにくれてやった方が良いだろう?」

「取り合えず、問題のセプテムの聖杯は回収できた。コレに関してはドレイクに感謝したいほどであるが……まだ、この特異点でやる事は残っている。」

『それと、此方との共同戦線の話は考えてくれたかな。キャプテン』

「あー……まー、ごちゃごちゃした事は分からないけど、要するにこの可笑しな海をどうにかするのに手を貸せて事だろう? それはこつちも願つたりだよ」

因みに、ここでドレイクに力を借りず、自力で海を行くルートもあるにはありますが……メツチャ効率が悪いうえ、それでなんか手に入るか、と言えば実績位なもので、エンジョイするのであれば普通にドレイク船長に頼りましょう。

因みに、特異点の行き方に寄つては、例の菌莖オジサンにお味方して頂ける事もあります。ヘラクレスと菌莖が揃つてるのでアガルタ前日譚みたいな感じになりますけど。

「それにあの猫……だか人間だか分かんない奴。アイツの料理の腕は、正直期間限定とはいえありがたいんだよ。上手い飯ほどやる気の出る事は無い!」

「にやはは、食べ盛りの悪ガキに、フードで積極的に殴り掛かる推奨プレイ!」

「戦力では無くキャットの料理の腕の方が評価される、というのはちよつとばかり複雑ではあるが、しかし。自分の自慢のサーヴァントが褒められて悪い気はしない。」

キャットはフォックスだから、料理を褒められるのがサーヴァントとしての誉れであるからして（矛盾螺旋）因みにキャットは今さっきから料理を片手に右往左往しております。パッションかわいい（思考停止）

「つはあく！ 本当に美味しい飯に美味しい酒！ 最高だね！ 良し良し！ 今日から、仲間って言えばいいのかね……まあ良いかその辺りはどうでも！ 仲間になった此奴らに乾杯だよ！ オラ飲め飲めえ！」  
くそして酒樽に沈められるボンベ。隣に居たのが速攻で頭を掴まれドボンである。マシユが悲鳴を上げて助けに入ったが、物凄い幸せそうに酒に溺れ、崩れ落ちていた。

『——さて、僕らは冷静に状況のチェックをするよ。くれぐれも酒に飲まれないよう』

「次だ。次の酒を注げ。途切れさせるな」

「ぼせいどんがなんだってーのよばかやろー！」

『……っすうううううううううううううううううううううううう』

『うーん、もうボロカスに酒に？ まれてる上、何人が彼女たちの手によつて天に飛ばされてるねえ。コレは正に惨状』

ロマニの額に、怒りのマークが見える見える（千里眼）ロマニだつて、偶にはカツコつけて進めたいと思つた所でこの酒飲みたちである。

「えーと……マスターと藤丸様、マシユ様と私、デオン様はお手すきですけど」

『も う い い よ ！ ！ お 酒 飲 ん で 寝 て れ ば ！ ？ ！』

くそ言い捨てて、とうとうロマニは泣きだしてしまった。まあ、コレに関しては余りにもタイミングが悪かつたという事で、貴方も何か言う事も無く、キャットの方にそつと歩き出した。どうせ宴、飲む積りは無いが、喰わねば損である。

どうやらこの特異点での拠点フェイズの模様です。セプテムでは特に拠点フェイズで特筆すべき事……一応香子さんのナンパイベントがありましたね。まあでもナンパろーまへがクツソ情けない所為で大したことは無かつたですけど。

「にゃは、おやご主人！ お主も食べねえ食べねえ！ 喰わねば戦は高楊枝！ 小さな先つぽに一点力を入れれば中折れ必須、本懐を果たす為にはスタミナをエクシードチャージである！ という事で、先ず

はこれである！」

「そう言つて出てきた一品目はまさかのたこ焼きである。えっ、どうやって作ったの？ だとか、凄いいソースピッカピカやね、とか、色々と言いたい事あるのだが……最大の疑問、何処からそのたこ焼きを入れる、木の皮的な器を持つてきたというのか。」

「キャットの料理は七不思議、百鬼夜行に魑魅魍魎、どんなところで最高のサービスでござる。ニンニン」

恐らくは、具材のタコはさつきボンベさんが取つて来たタコだと思われます。結構大きかったですし。あ、美味しい。そして体力回復が大きい。流石キャット。あ、そうだ。ウチのサーヴァントの定期行事、おせんべ渡ししてなかったね。加えてホラ。

「む、コレはキャットへの御褒美力。醤油の香るカチカチせんべい、ご主人の渡す絆の架け橋、とはいえキャットは余り濃いものは宜しくないのだが食べる！」

「ガリガリつと豪快に食べきつて、何を思い出したか、キャットが此方に視線を向けた。」

「そう言えばご主人よ、煎餅のお礼のキャットの気まぐれアドバイス。海に生きるは魚とその餌とその提供者。料理人がおらねば素材を活かす事叶わぬ。海を知るは海に生きた者のみ。敵は小物大物だけではない。あーはん？」

「……まるで意味が分からんぞ！（正直） いえ、それであつさり切り捨てるのは良くありません。ここはしっかりと解説してみましよう。皆もチャレンジしてみてね！ ……因みに投稿者は結局途中で断念致しました。キャットの言語は複雑怪奇……」

「おーい猫のねーちゃん！ こっちにも料理頼むー！」

「おうさー！ あ、ご主人には特別めにゆ〜も用意している故、楽しみにするがヨイ。キャットは飼ひ猫故、ご主人を依怙贖して甘やかすのも是非も無しである」

「そう言つて、につっこにこの笑顔でキャットは給仕に戻つていった。取り敢えずたこ焼きを齧つてみた。上手い。そうしてもう一個に手を伸ばしたのだが……なんか、普通のたこ焼きに交じつて、なんか青



い触手が飛び出ているモノが混ざっているのだが。

フアツ!?

◁…折角だし、食べてみるか。

◁◁いや、流石にこれは…ちよつと…

非常に新鮮で、非情に美味しい(大嘘)何かの模様です…つはああああ(クソデカ溜息) 食えば良いんだろう!?! 良いよ、来いよつ!  
! 胃にダメージかけて胃に!(ゴーカイジャー) 太いつ!(ダメー  
ジ)

◁意を決してかぶりついてみる。口の中で咀嚼し、味を確かめ、そして余韻を残しながら飲み込んで、貴方は眩いた。見た目より、圧倒的に美味さが勝つのが理不尽だな、と。青空の先を見つめながら。

◁称号『虚数適正』を獲得しました。

…ええ?(困惑)

今回は、ここまです…??

## 魔の海 その二

皆様こんにちは、ノンケ（夏の魔法少女）です。今年はジャックかクロエか。何方にせよ荒れるぜ、実装されれば……特にクロエは多分、マジで大事件レベルで血（金）がガチャに流れると予想されますよ。

前は、ドレイク船長にお仲間にして貰って、で一番重用されるのがキヤットと言う。そんな後ろで、元ボス二人の何かが粉々に打ち砕かれた挙句、二人はヤケ酒に走って居ました。後セプテムの聖杯漸く回収です。

さて、暗転から画面がオオン！と出てまいりました。スツゴイ煩そうですね……いや、画面がもう大分うるさいとは思うんですけど。いや、相当静かですよ？ どっちだよ（右往左往）

「……二人共、大丈夫？」

「サーヴァントに二日酔いは存在しない。心配は不要だマスター」

「はっ、大丈夫って心配されてるのはアンタの精神状態じゃないの？

昨日は大分無様を晒してたからねえ！」

「その言葉、そっくりそのまま返すぞ、戦車女」

～宴の夜、開けて翌日の船の上だが……早速空気が最悪レベルである。昨日確実に精神的なダメージを貰っていた二人が、復帰そのままの勢いで火花を散らしている。元から相性が宜しく無いのもあるが、状況も合わさって、色々とクライマックス状態だ。

「……舐めた事言ってくれるじゃない。特異点を潰す前に、アンタを潰して、しっかり上下関係叩き込んだ方が良さそうね。冷血女」

「面白い事を言うな。試してみるか？」

「あーもうストップストップ！ 二人とも落ち着いて！」

やべえよ……やべえよ……空気が干上がってるのに二人の迫力で心が赤ン坊になっちゃう！（精神異常）オルタさん達許して！ 藤丸君のマインド壊れる！ 守って！ マシユちゃん！ 彼の癒しを

まかせせるわ貴女に。

「ドクター！ 助けて！」



◇改めて。海の状況を聞かせて欲しいんだけど。キャプテン。

まあ、こつちが聞いたのはイアソンくんがヤケ起こして、でイスカ  
ンダルも大打撃を受けて、でドレイク船長が完全勝利したってだけで  
すし。また過去の話してる……でそこでポセイドンがクソ雑魚だっ  
たって言う事も聞いた。また神の話してる……昔はそれなりにふさ  
ふさだったんですよ。また髪の話してる……

「——いいだろう。そんなくらいしつかりこつちの目を覗き込めるなら  
上等だ。先ずはこの地図を見な」

◇そう言つて広げたのは……どうやら、この海域の地図の様だ。し  
かも素人目に見ても恐ろしく正確に描かれている様に見える。通信  
先のダ・ヴィンチが地図を見た瞬間に一つ口笛を吹いたのも、この地  
図の価値を裏付けている様に見えた。

「ここ、この右下の方にあるのがあたし達の島だ。で、この右上の方の  
島に、例のデカイ柱が陣取っている。ここら辺は、ここらの海賊共  
にとつちや進入禁止の魔の海だって言われてるよ」

えー、海賊島がドレイク船長。でもって地図に記された島が……  
えっ？ そこに目玉野郎が居るんですか!？ まって、其処にこの特異  
点の鍵が二人程いらつしやるんですが。

「でもって、この左の、この辺り……ここ一帯は全部、英霊艦隊のナワ  
バリさ」

◇英霊艦隊。聞き覚えの無い名前だ。しかし香子たちは違うよう  
で、その名前に、ピクリと反応する者が何人か。

「英霊艦隊……確か、ドレイク様を襲っていた船たちも、そう呼ばれて  
いました」

「ま、あのイスカンドルの率いる船団だよ。分かりやすく言えばね。  
あの目玉野郎に半分近く沈められたけど、それでもこの近海を派手に  
牛耳ってるのは奴らさ。それでも満足しないで何やら色々やってる  
みたいだけ」

いやそれより広すぎないナワバリ????? 特異点の半分をナワバリに  
してらつしやいますけど、なんなの? ? ? ? ? F G O R P G の特異点は、全  
部 F G O よりも状況を悪化させないと気が済まないの? ?

「……イスカンドル様の言葉が本当であるなら、恐らく狙いは、呼び出された例の」

「貴方もその言葉に同意した。恐らくは、その怪物が聖杯を所有し、未だ特異点を維持しているのだろう。イスカンドル達が聖杯を所持しているのであれば、速攻で特異点を解決して帰っているだろう。」

「で、その英霊艦隊の規模だけど……正直、アタシ達と比べたら頭痛がしてくるレベルさね。艦隊っただけあって、文字通り国が所有するレベルの数が揃ってる」

「とうとうと」

「間違いなく百の大台には乗ってるよ。あの船と戦う以前は、間違いなくその倍近くはあったって言うのが、悪夢だよね」

「十四万!? (反射的反応) 十四万も船が居たら特異点が丸ごと船で埋まるだろいい加減にしろ! 数字が出たら十四万!? (二撃決殺) というのはホモの悪癖、ハッキリ分かんかね」

「凄い数ですね……」

『——しかし、それだけの数の船だ。巨大な生物の動きが鈍重になる様に、肥大化しすぎた軍隊の動きも、鈍くなるものじゃないかい?』

「そう言ったのは、やはりグルジアでの軍師経験が光る、ダ・ヴィンチである。彼女曰く『自分の軍師的ステータスは全部B+。基本は何でもできる、万能の天才なのさ』との事である。」

「……その指摘は間違っちゃいないけど、アイツ等に関してはそれが当て嵌まらないよ」

『ほう?』

「確かに、鈍いっちゃ鈍い。だが気にする程のものじゃないんだ。馬鹿みたいな数の船を動かすだけの……三人の『提督』が揃ってるんだからね」

「ダ・ヴィンチちゃんの万能の天才っていうのは実際ヤバイ。軍師的ステータス全部B+って、下手な本業よりも有能まである。それは兎も角、イスカンドル側に味方が増えた様です。三人は、どういう集まりなのかな。提督ウ……」

『提督?』

「そうさ。そのうち二人は、コンビの女海賊。確か……アン・ボニーとメアリー・リードだったかね」

『——なんてこった。その名前、海賊としてはトップクラスの名前じゃないか……!』

〈ロマニが呻いたような声を上げる。曰く——アン・ボニー&メアリー・リード。世界で最も有名なコンビの海賊。そして、最も有名な女海賊。ジョン・ラカムという船長の元で悪名を上げた、カリブに名を馳せる一角である。〉

そして対マスターガチ捕食勢の一角。あの人たち、他と違ってギャグじゃ通用しないレベルで藤丸君に迫るんですよね……

『特異点で、彼女たちを仲間にしたんだ。海に対する専門家を得る為に!』

「なんだ? アンタ等、アイツらを知ってるのかい?」

『厄介な相手、というだけですけれど……』

「はっ、厄介。確かに厄介さね。あの二人は。だけど……三人の提督の中で、一番厄介なのは、別に居る」

〈そう言つて、彼女が地図の上に出したのは、一人の男の似顔絵。黒い髭に、鋭いフック系の爪、大柄な体にコート一枚を羽織った姿は、まさに理想の海賊と言つていい。その似顔絵の上に……彼女はナイフを突き立てた。〉

「黒髭……エドワード・ティーチ。かの英霊艦隊が筆頭提督サマだよ」  
うわでた。

来ましたよあの黒髭野郎。まさかこの特異点で提督まで出世しやがるとは、なんだその偉そうな……お前の出世が嬉しかったんだよ!  
(大胆な黒髭推しはホモの特権)

お祝いをしつつ、今回は此処までとなります。ご視聴、ありがとうございました。

## 黒髭惨状 その一

皆さんこんにちは、ノンケ（バニ王）です。私、バニ王は何方かと言えば藤丸君を搾り取ってしまう方だと思いますが如何か。何の話をしてるかって？ ナニの話をしてるんだよ！ 後、第二再臨止めどなく好き。

前は、イस्कन्दルが登用したのは、三人の海賊。アンメアと黒ひげ。どうして海での戦いのノウハウがないイस्कन्दルがオケアノスで派手な戦いを見せつけているのかを悟りました。

『正直、私達は彼らの水軍のノウハウに関して付け入るスキがあると考えていたんだ』

『史実、彼らは東の果ての海、オケアノスに辿り着くことは無かった。地上に置いては彼らに並ぶ者は居なかったけど、海に出れば彼らも無敵の軍隊とは呼べない』

＜しかし、その軍隊の弱点を、本当に特異点で人材を登用する事で埋めたのだ。それが伝説に名高い大海賊、黒ひげ、エドワード・ティーチと、世界でもっとも有名な女海賊、アン・ボニー&メアリー・リード。まるで赤壁の曹操の如くである。

『流石は征服王。不可能と分かれば即座に人材登用とは』

『足が軽やかどころの話じゃないよねえ』

空気が暗い暗い、Don't Cry（気さくなホモ） しかし、まさかドレイク船長では無くティーチの方を登用するとは思ってませんでしたけど……アレかな。アンメアと一緒に居たからそっちの方がお得だと思ったのかな。

「因みに、その二人の実力はドレイク様から見て、如何ほどの……」  
「女海賊二人は、組んでりや相当に厄介なのは分かる。ただあの、ティーチとかいうクソ野郎は別格だよ。色んな意味でね」

＜……昨日以上にドレイクの表情は険しい。余程の強敵だったのだろうか。と思ったが、しかしコレは……何方かと言えば、嫌悪感を前面に出しているような気すらする。

「ど、ドレイク船長がそこまで言うなんて。歴史に名高い大海賊黒髭。

「一体どんな方なんでしょうか……！」

「あー、なんだ。盾の嬢ちゃん、その色の薄いご婦人は、合わない方が良いと思うけど。ありやあ筋金入りの本物だ。危ない、つて一言で表せりやあ、まだマシな方だと思っただけだよ……」

「そう言つて、ドレイクが溜息を吐いて、水平線上に視線を向けた……その時だった。彼女の表情が、突如として厳しいモノへと変わる。」

「いやー、あの黒髭、マジで危ない奴だからなあ。今の所、初見の視聴者さんには黒髭は『ドレイクのマニア』っていう情報しか伝わってないですよ。あ、履修済みの方はもうお分かりだと思いますけど……で、姉御どうしました？」

「——いや、まさか、だけど……」

「どうしたんですか？」

「……来やがったか、噂をすれば！ 野郎共！ 配置に付きな！ 変態髭野郎のお出まじだよ！ 何隻見える！」

「えつと……四隻！ 間違いありません、あのヤロウも居ます！」

「アレが居るのは見りやあ分かるってんだよアホウ！」  
「ドレイクが指し示したその先に、漸く貴方達の目にもそれが写った。水平線の向こうから迫ってくるそれは、間違いなく、海賊船である。その数は確かに四隻。そして、その中の一隻、明らかに異様な形の船が。」

「まさか」

「そうだよ。噂の髭が直ぐにこっちに來たらしい。つたく、この前はマシユ達が味方してくれたから楽だったけど、数も質も跳ね上げて來やがった！」

「あーそうですねえ。一隻、とんでもない重裝備積んだ船がありますねえ！ ありますあります……黒髭氏は、自分の船を徹底的に強化するタイプなので、ハリネズミみたくなるんですよ。だから凄く分かりやすいというか。」

「つ、二人共！ 戦闘準備！」

「——ふん。良いだろう。今は目の前の敵を殲滅する方が先だ」



「命拾いしたわね、ブリテンの暴君サマ。アレ相手に油断すると、まあそこそこは危険だったのは分かったからね」

「先ほどの立香の勢いに圧されたのか。予想以上にアツサリと和解した二人、そしてマシユがそれぞれの武器を構える。それと同時にキャットとデオンが式部を守り、貴方を挟んで立った。」

「——マスター、油断しちゃダメだ。あの船に乗っているのは普通の人間じゃない」

「<< どういう意味? 」

「<< もしかして、あそこに乗ってる全員……幽霊とかゾンビ船員とか!? 幽霊船? 」

全く関係ありませんが、投降者は現在開催中のカルデアスリラーナイトを非常に応援しております。水着イリヤにアビーと、超強力メンバーがずらりとガチャに集結。皆、回そう! (媚びをウルク) 因みに作者は四万円分回しました。結果? 察しろ (蒼白)

『いや、それの方が未だマシまでであると思うよ。あそこに乗ってるのは……全員が、サーヴァント、というか。準サーヴァントと呼ぶべき人間たちだ。到底信じられないとは思うけど』

「<< その言葉に、目を見開く。」

『戦ってみれば分かる。到底普通の人間とは言えないからね。無理だと思ったらサーヴァントの皆に任せて後ろに下がってくれ』

「そんなに強いのか? ドクター」

『少なくとも、サーヴァントに攻撃が通るレベルで強化はされている……というより、アレは……強化? 』

「<< ロマニが何か考え込んでいるが、要するにアレは強化された人間、と考えればいいのだろうか。であれば、自分とさして変わりはないだろうと判断し……貴方はそつと、その拳を構え、取り敢えず自らの額に雷電を纏わせた。」

ロマニの考察は後で聞けると思いますので、大暴れしてやるよ(半ギレ) しかし船が四隻纏めて突っ込んで来られても非常に困るのでちよつとは手加減して♡ (我が儘第三王女)

「——おうおうBBA! ここで会ったがひやああくねんめえ! あ

ん時の借りを、海賊的に返さにやらぬと戻ってまいったぜ！ 居るかあ！」

「うるせえっ！ ここに居るってんだ髭モジャ！」

「吠えて一蹴、ドスの利いた叫び声に、ドレイクは欠片も怯まない。『あの旗は……間違いない。アレは黒髭の船だよ！ 海賊史上もつとも有名、尚且つ最悪の海賊！ よりにもよって、一番厄介な相手が一番最初に……！』」

海賊史上もつとも有名、最悪の○ いや、ロマニの言ってることは間違つてはいないんですけども。意外と早く堕ちてるんですよこの黒髭。どういう意味で堕ちて居るかと言えば、まあ、この後だと思えますよ。

「その時、貴方の視界に入ったのは。正に、似顔絵通りの大男が一人。しかし、その凶暴な視線は、似顔絵では、到底表現しきれなかつただろう。」

「前回と違って、こっちには先生もついてるんじゃない！ 今度こそお主のハートを鷲掴みにして引きずり出して……むむっ!？」

「瞬間、黒髭の瞳が此方に向いた。睨みつける……と言うよりは目をカッと見開いて一点に視線を集中させている。その視線の先には、マシユと、香子だろうか。その表情は互いを行き来するたびに表情が、緩み、締めりを繰り返すのが、なんだろう、気持ち悪い。」

「思わずホモ君も 気持ち悪い 発言。仕方ないね。あの表情を見ていると実際オウエツ！（素直）」

「……儂げ系純粹美少女と……間違いない、俺には分かる……あの清楚系のご婦人、間違いなく神作家！ とんでもねえお宝二人！ ——ドユフツ」

「なんか聞こえた。というか、全体的になんか聞こえる。主に、あの迫力の有る面からは考えられないレベルの、悍ましい発言が。なんだろう。ドレイク船長が、絶対に会わせるなど言っていた意味が分かりそうになったところで……」

「ドユフフフフフフ!! テwんwシwヨwんw上wがwつwてw来wたw w wしかも神作家の方、年齢範囲外なれど雰囲気は花丸元気！」



## 黒髭惨状 その二

皆様こんにちは、ノンケ（きんせいのあくま）です。ウルクの守護女神とか言ってますけど、君ね、特異点でマシになって尚、あの凄まじい数のやらかしを起こして、それで守護は嘘でしょ。

前回は、俺は大海を行く……海賊系ですかね。で、その勢いで海賊系の集い見たくなりました。しかしながら、あの黒髭野郎、全くもって容赦つてもものをしないっていう。もうちよつと配信に配慮して欲しい。

「うっせえ！ 海に落ちろオっ！」

＜あまりのシヨック。黒髭のその面で、エゲツナイ発言。しかし流石は百戦錬磨の女海賊ドレイク、カルデアの面々が度肝を抜かれているその一瞬にも、気を抜くことなく、抜き放った二丁拳銃で、続こうと飛び込んだ有象無象を薙ぎ払った。

「はっ！ く、くそっ。しまった、とんでもない精神攻撃を受けた……！」

「いかん！ シキブのフェイスがブルーベリー、収穫時である！ 啖呵切つて担架運んで来るのだな！」

「へっ、俺達は兎も角姉御に敵うと思うなよ！ お前ら！ 急いでタシカだあ！」

ここでちゃんと啖呵切る辺り、ボンベ君、本当にノリいいですね。姉御の一言を聞いたら文字通り海の中飛び込んでいますし。それは兎も角として……ホモ君の顔こわっ！ 名探偵かな？（うさみちちゃん）

＜……取り合えず、あの大海賊黒髭が、ああいう性格だったのは、いい。歴史上の人物の真相と言うのは色々ある。ドレイクが女性だったり、そういうのはある。それは問題ではないのである。

「結構数が来たな。康友、一つやってやろうぜ、派手によっ！ ……康友？」

＜そんなのは、どうでも良いのだ。今の貴方の頭の内に燃え盛るの

は、憤怒の炎である。自分をずっと支えてくれる恩人サーヴァントであり、か弱いご婦人に、なにを呪詛の如き言の葉を聞かせてくれるというのか。

◇テメエは生かしておかなくていいタイプだな。オツケーだ。

◇コロス。オマエ、オレ、ミンチニク。ユルサヌ。

良し、選択肢上である。マジでミンチ肉にしても仕方ないレベルではあるが、其処はちよつとシリアス維持する方向で、オナシヤス！  
あつ、角のバチバチレベルが多分過去最高に！

「つてオイ康友!? 何突つ込んでんだ!？」

◇体の中に燃え盛る、何時もより大分、こう、分かりやすい怒りのパワーを四肢に注ぎ込んで誰よりも早く、真つすぐに飛び出した。まるで自分の体が大爆発したかのような、もう何も怖くない。寧ろ怖がる前にあの髭面をぶん殴る事しか考えられない。

「ご主人のボルテージが香子ダウンでマツハである!？」

「マスターッ！ 幾らなんだってそれは無茶に過ぎる!？」

そう言われても操作が出来ないんですね……（半泣き）  
これは完全に頭に血が上ってるっていう奴。

「あん?？」

「船長には近づかせん!？」

「一人で特攻とか、舐めた真似してくれやがって!？」

◇突つ込んで来る二人の敵兵。確かに、連合ローマの時の兵士と比べると、動きが良い様に見える。強化されているとは、どうやら嘘ではないようだ。だが、それがどうかしたのかと言う話である。

「ぐっ」

「げえっ!？」

◇突つ込んでくる馬鹿二人の首を軽く掴み取り締め上げて……続ける乗り込んで来そうだった男共に向けて投げつける。全力だ。頭を弾頭代わりに相手のみぞおちに叩き付けてやった。

やってる事が勇次郎なんよホモ君……まあ体とかは兎も角として、顔面の迫力に関しては間違いない顔面暴力。とはいえ、雑魚の実力がそこ迄でもなかったように見えますけどムービー戦闘はなあ、イマイ

ち当てにならないんですよね。飯食えば傷だってアツサリと治す堂島の龍だって、ムービー銃には敵わないっていう法則がありますから。

「おおー、良い威勢でちゅねー……で？ それでこの黒髭がビビると思っただかよ人間の若造風情が。とつとと死ね」

＜明らかに油断している。相手はサーヴァントだ。たかが人間程度、一発で殺せるような怪物なのだ。それを相手も自覚しているからこそ、油断をしているのだろう。だからこそそこにこそ、付け込む隙がある。

＜ギリギリまで引きつけて避ける。

＜さらに踏み込んで、振られる前に一気呵成にかち込む。

今のホモ君に引くとか避けるとか、そんな弱気な選択肢は必要ねえんだよ！ つべこべ言わずに突っ込めホイ！（チチンパイパイ）という事で直行して殴り殺す積りで参ります。まあ絶対ダメージ与えられませんけど、それでも行くんだよお!!

「あらああんっ!!」

＜サーヴァントの全力で振り抜かれてしまえば、避ける事も敵わず確実に死ぬだろう。しかし、油断した動きに、ほんの僅か、ほんの僅かの際が出来た。其処につけ込んで、貴方は思いつきり足を踏み込んで、加速し……拳を振りかぶった。

「ちよちよっ!」

「——マズいっ……させるかっ!」

＜思い切り、拳を振り切った。最高の手応えだがしかし、ダメージは全くと言つていいほど入っていない事は分かっている。しかし、香子を怯えさせたその罪への制裁は、せめてこのマスター自身の手で、と……思った瞬間、金属音が響き渡る。

「……つち、楽にマスターとサーヴァントを潰すチャンスだと思っただがよお?」

「幾らなんでも騙される訳ないだろう。マスターに踏み込める、ギリギリの隙を作っておいて。露骨が過ぎるぞ」

＜貴方と黒髭の間に、剣が差し込まれていた。そして、その辺りか

ら金属の何かが貴方の目の前に弾け飛んで来て……ちらりと見れば、貴方のどてつぱらのすぐ近く、剣が、密かに差し向けられた銃口を阻んでいたのだ。

あつぶえ!?(恐怖)

「ご主人回収!」

「直後、キャットが跳んで来て貴方を抱え上げて逃げ出した。とんぼ返りとはまさにこの事だが、貴方の脳髓は完全に冷め切っていた。今、下手を打てば、自分は死んでいた。今までの特異点で、一番の死の危機だった。」

「そういう所だぞ黒髭(半ギレ) 前半のアホみたいな振る舞いから、そのままのテンションで人をあつさり殺すっていう、このクレイジーっぷりは、多分他のサーヴァントの皆様では絶対に真似できないっていうのが分かります。」

「ったく、気持ちちは分かるけど熱くなり過ぎでしょ。そのまま野垂れ死にたいっていうなら止めないけどね」

「あ、危ない……肝冷やさせんなお前!」

「頭に浮かんだ冷や汗を拭いて、済まないと返す。今まではサーヴァントの脅威を分かっているからこそ、あくまでおちよくつたり、多少気を引いたり、程度であったのが、今回は完全に間合いに引き込まれてしまっていた。」

「……マスター。気持ちちは分かるけど、君は指揮官だ。もう少し、冷静に動き給えよ」

「頭冷やせよハゲ野郎……!」

「……そうだね。ありがとうデオン。今のは、流石に無謀に過ぎた。そうだぞハゲ野郎。(ストレートな罵倒)」

さて、ホモ君が冷静さを取り戻してくれたところで改めて戦闘開始です。この髭野郎が早速髭らしいクレイジーでクレバーな動きをしてくれたので、倍返ししていきましょう。

「——んー、しかしこの数のサーヴァント相手にマトモに戦うのはちよつときちー、だから鱒狙いで行った訳ですなー。って事で先生方! よろしくお願いしやす! 拙者はちよつとマシユちゃんを舐め

回すように見るので忙しいので……」

いや速攻で逃げるやん黒ひげくん。さて、この黒髭が先生方、というとなると、私の脳裏には二騎のサーヴァントが思い浮かんでいる訳ですが……あつ、言って居たらもう乗り込んできました。

「いやー船長も仕事してくれよー。戦力にならない訳じゃないんだから……」

「ウウウウウウウウウアアアアアアアアアアアツ!!!」

「ってちよい！ エイリークさん!？」

＜戦力を分析するまでも無く、速攻で一騎が突っ込んで来る。長柄のトマホークを構えた男。何時も何時も、特異点の最初の相手はバーサーカーと決まっている様だ。

＜狂戦士には猛獣をぶつけんだよ！ キャット頼む！

＜激流を制するは静水……デオン！ 相手の攻撃を凌いでくれ！

よし、いつも通り下選択肢が狂ってるから下選択肢を、ってアツブナ!? 上選択肢が狂ってるやんけ!? そういう選択肢トリックを仕掛けてはいけない（戒め） 今反射で上選んでましたよ！

「分かった！ キャット、マスターの事を頼むぞ！」

「任せるのだな」

＜言って走り出したデオンは、エイリークと呼ばれた狂戦士の前に立ち……するりとその脇をすり抜けた。と、思った直後、その肩口に紅い一線が走る。一瞬の間に叩き込まれた斬撃は、その狂戦士の足を止めるには十分だったらしい。

「—————」

「どうした？ 掠つても居ないぞ」

デオン君ちゃんマジで白百合の盾……と言った所で、今回はここまです。ご視聴、ありがとうございます。



## 黒髭惨状 その三

皆さんこんにちは、ノンケ（浮気者ダーリン）です。アモーレミオはね、ホント。二部五章でボロツボロ泣かされるきっかけになりましたからね。許さねえぞ。絶対に幸せになるんだぞ。

前回は、香子さんに酷い事（当社比）をしやがった黒髭野郎に復讐すべくちよつとホモ君が全力を出した結果、普通に不意打ち貰ってぶつ殺されそうになりました。その後の対応も含め、デオン君ちゃんにはホントに感謝しかない。

「あーあーもうエイリーク氏ったら、早い、早いのよ！　こういう時、慌てた方が負けでござるの軍艦巻！」

「慌てるって言うか、荒れてるって方が正しいと思うけど」

＜そう言つて、なんて事の無い雰囲気です。黒髭の傍らに佇む男が、手にした槍を構え、一つ溜息を吐いた。どうやら、此方に突っ込んで来るつもりもないようだ、

どうやら向こうはエイリーク氏をぶつけて様子見の模様です。と、いか勝手にぶつかり稽古しにいらっしやってるんですけど、しかし、此方もデオン君ちゃんが窓際行つて……対処されているからね、気持ちよくINさせはしないですよ。

「――だけど、こっちは待つてやる必要はない。セイバー！　頼む！」  
「ったく、命令無視して突っ込んでやろうと思つたくらいよ。さっさとぶつ壊してきてやるつての！　……つてはあ!?!」

「了解」

＜恐らく、船への引火を避ける意味もあつてなのだろう、ジャンヌでは無くセイバーを突撃させる立香に、ジャンヌ・オルタが食つて掛かっている。そんな立香の視線は、何処か明後日を……というか、ドレイク船長の方を見ている。助けを求めているのだろうか。

「――死ね」

「ひゅいつ!?　ストレートな殺害予告!?　お願い先生見て聞いて！」

美少女からの超ストレートな殺害予告が！　嬉しくない訳じゃないんだけど、されど恐怖が勝つのでお助け妖精！」

「はいはい……つたく、こんなモンスターの手をやる予定なかったんだけど」

「黒い魔力を纏って振り下ろされた剣を、伸ばされた槍が辛うじて受け止めた……否、受け止めたなら、その動きは止まるはずだが、剣は槍の男の傍らに落ちていく。というより、槍の穂先で、そつとその軌道を逸らしたのだ。」

「——ほう？」

「いやー、なんつうパワーだよ。オジサンびびっちゃうなあ」

「そのパワーを往なしておいて良く言う。この後の戦いからは怯える、程度では済まないと思え槍使い」

ところでオルタちゃんの剣が叩き付けられた先の甲板がザツクリいったんですけど、ジャンヌでもオルタでも大して変わらなかったんじゃないですかねクオレハ……まあそれは兎も角として。」

『な、なんだあの槍使い……あのアーサー王の斬撃を、往なすなんて！』

並大抵の腕じゃないぞー！』

「おうおうおうおう！ テメエら、この人を誰だと心得る！」

「そんなロマニの疑問に答える様に、黒髭が一步前に出て堂々と言うより威圧的に言う。船長と言うかももう完全にチンピラのような感じだが、先程の様に、一瞬で本気になれる黒髭だ。それすらフェイクに……いや、コレはマジなのだろうか。」

「この人はなあ……！」

「ハイハイ船長、三下ムーブはそれくらいで。わざわざ敵に正体バラして不利背負いこむ事無いでしょうよ」

「えーっ、黒髭自慢したいーい。したいしたいーい」

「そんな徹底的に油断させようとしたって、さっきので凡そバレてるでしょうに」

「えっ、拙者そんなセコイ真似してるように見えたの……シヨック……」

「もしかして素?! だとしたら余計にタチ悪いなオイ！」

何漫才やってだコイツら（困惑） そんな油断も隙も晒してちや……ダメだろ（大輪の笑顔） 隙突いて、やっっちゃうよ？ やっっちゃう

よ!?! やつちやいましょうよ! (自己診断) という事で容赦なく  
キヤット、GO!

「にやおおん! 油断大敵マツハゴーゴー!」

「——つておい! 止めなさいつて!」

〈しかし、容赦ないこの不意打ちも、何と今しがた受け止めたセイバーの剣、その勢いを活かし、穂先とは逆の、石突をキヤットに振りぬく事で迎撃する。驚くべき事に、セイバーの剣の行き先も、するりと逸らして。

Lancer Is God (正直な感想) これが雑兵相手つて

いうなら話も分かるんですけどもこの離れ業をやる相手が一流の英霊二人つて言うのが問題ですよね。まあ実際この人はゴツドみたいなもんやし……

「にやんと!?!」

「ふん、先程から小賢しいマネを」

「いやあぶっちゃけた話、白兵戦ならオジサン、まだまだ粘る自信はありますけどね」

「——じゃあ白兵戦じゃなけりやあ良いのかい、髭面二号!」

〈直後だった。その声を聴いて、オルタとキヤットが左右に分かれる。その後ろにはしつかりと拳銃を構えたドレイクと……ニンマリと笑ったオルタの姿。

「つと、コイツは」

「——ドレイク船長からお墨付きは貰った」

「くれぐれも他燃やすんじゃないよ!」

「はいはい……一転集中して燃やすなんてあんまり慣れちゃいないから、保証はしないわよ!! 喰らいなさい!」

おお! さつき藤丸君がドレイク船長に視線を向けたのはそういう布石だったと。ナイスウ! (建前) ナイスウ! (本音) これは真名発覚する前にオジサンは退場ですな間違いない……

「——はい先生罰点追加ね」

〈だが直後、狙われた、ランサーと思しきサーヴァントが背中から思い切り蹴飛ばされてしまう。それで完全にドレイクとジャンヌの

奇襲が乱れ、おまけにその奥から、構えられた拳銃が狙うのは……ド  
レイク、でもなく。ジャンヌ、でもなく。

「しまっ」

「……っ！ させませんー！」

＜立香。しかし、それを見抜いていた盾兵、マシユの手によってその凶弾は弾かれる事となった。一瞬の、針の穴の様な行動の隙を見抜いた黒髭の慧眼を褒めるべきか、それともマシユの成長を褒めるべきか。

マシユでしょ（本音） 両方でしょ（建前）

「マスターを直接狙うなんて！ 許しません……！」

「フイ〜ヒヒヒヒヒ！ お守り系盾少女の凛々しい姿が拙者のハートを震わせる！ 燃え尽きる程萌えでヒート！ そして飛び散る少女の汗！ 刻む興奮と血液のビート！」

「……なんなんでしょう、今までにないほどの危機感を感じます！  
先輩！」

＜マシユが、戦闘中にマスター呼びをやめて先輩呼びに回る程の黒髭の迫力。美少女に対しての執着心が暴走しているのが分かりやすい。やっぱりさつき殴りつけたのは間違いないと思いたいのだ。

目に見えて頬が緩んでいるのが（キモさのレベルの振れ幅）やはりヤバイ。今からお前に罰を与えるからな（半ギレ） マシユをそういう目で見えた罪の重さはツツパリオツパゲドンですよ。

「うーん美少女からの冷たい視線、ご褒美！」

「——いやー船長、すみませんねえ。油断しました」

「全く、ご褒美で機嫌が良く無かつたらお仕置にこめかみにズドン  
でしたぞー。頼みますよ大先生、仕事して下さい」

＜しかし、デオンがエイリークを抑えていて、マシユは守りに重点を置いているからこそ実質二対四の状況で尚、彼らは見事拮抗して見せているのだから恐ろしい。そしてその状況で、彼らは余裕を持っている。

「つつてもよお、船長。もう終わってるでしょうが仕込みは。オジサンそれまで時間稼いだだけで仕事はしてるでしょうに」

「……まあ？ そうなんですけどね？」

「あつ、姉御っ?! ヤバいです!」

「——その圧倒的な余裕の訳は、直ぐに明らかになる事になったが。おや、マストの上の見張りの人か、なんかギャーギャー叫び出してるんですけど、一体何が……オオン?! 何時の間にか我が方を取り囲む四隻の船が!?! 我が城、包囲されました! (半ギレ)」

「いやー、見事に嵌ってくれて感謝感激でござんす! んー賢過ぎて拙者無敵過ぎ〜」

「いやー、上手い事いったねえ」

「完全にはやられた。いつの間にか、黒髭の船、そしてその配下の船によって、ドレイクの船は完全に包囲されてしまっていた。そしてその四隻全ての砲台は一点、この船を狙って、その口を鈍く光らせていた。」

「——と言った所で、今回は此処まで。ご視聴、ありがとうございますました。」

## 黒髭惨状 その四

皆さんこんにちは、ノンケ（恐竜姐さん）です。アレで第六天魔王の関係者とか、これには思わずノツブも大混乱。どっちかと言えば、ケツアル姐さんの関係者な気がする。恐竜的な関係で。

さあて混乱する状況深まる前回、直接ドレイク船長の船に乗り込んで来ての殴り愛だったんですけども。しかし状況が一変しましたどうやら向こうさんにとってはその白兵戦こそが困だったようで……

「——やってくれるね」

「賭けでござったけども、BBAがアツサリと乗ってくれて助かったって奴ウ？ いやー拙者もこういうのはあんまり好きじゃないんですけどお〜？」

「せ、船長……！ どうします?!」

「撃つんじやないよ！ 撃つたら向こうも撃ち返して来る！ 頭数で負ける以上、今は勝ち目はない！」

▽——四方には、黒髭の配置した船が近寄って来ていた。乗り込んでの直接の始末かと思えば、狙いはこの船の包囲。目先の戦闘に、気を取られていて、完全に貴方と立香、カルデアのメンバーは油断していた。ドレイクも、悔し気にその手の拳銃を腰の辺りに収めた。

「テメエら！ 頭数で攻め立てるとか卑怯だぞ！ 相手より圧倒的に多いサーヴァントぶつけておいてそのセリフは小物が過ぎやしませんかね……（一転守勢） そう言う事もあると思って諦めて、どうぞ。」

「いやあ、BBA。頭数で負けるから、勝ち目のある白兵戦に持ち込もうと、敢えて誘いに乗ったっしょ？」

「……はっ、お見通しして訳かい。中々に、賢しい」

「拙者、腐つても提督様なわけですし？ クレバーに抱き締めてやる必要も出てくるわけでゴザル、ドウフフフフフフフフフフフフフフフ」

「いやしかし、流石黒髭。ふざけている様に見えて、マシユちゃんへの射撃が合図になってるとか。シリアスモードの此奴つて終始強敵なんですよね。孔明並みに頭が切れて、しかもライダーの中じゃ白兵

戦が強い方で。ぶつちやけアキレウス君とかよりも厄介つちや厄介です。

「はいはい、全員武器構えないでー。下ろすだけでいいからね。下手に武器置かれて、そこから油断突かれる方が面倒だし。それに……抑えるなら、マスター二人の方が楽だしなんでね」

〳石突の先で貴方を、穂先で立香を狙いつつ、敵方のランサーが他のサーヴァント達を牽制する。黒髭が甲板上を制している、その僅かな間にするりとサーヴァントの間を抜けてマスター二人を穿てる位置に立っていた。

「――調子に乗ってくれる」

「なんとでも。この位置からなら、何があろうとどつちかは確実に潰せるんでね。まあ悪いけど、コレで詰みってやつだ」

なんだこのランサー!?! 他人の間合いに勝手に、不法侵入ですよ不法侵入! 間合いには不法侵入するのがデフォだと思っただけ(常識感) 笑顔でやってる事が脅しのそれです。そんなんだからヤクザパロの常連なんやぞこのオジサン。因みに常連のお仲間はおルタニキとビリーが多い気がします。偶にいぞーさん。

ってそんな事はどうでも良いんだ! 普通にマスターの命握られちゃってるよバイバイ……こ、ここはカルデアの裏をかけるメンバー筆頭、デオン君ちゃんに戦って頂かないといけない。デオン君ちゃん! キツイ一発頼みます!

「ウウウウウウウツ……!」

「あー……そのバーサーカーさんはそのままでもいいよ」

〳デオンはバーサーカーに抑えられ、黒髭の背の向こうにセイバーオルタとキャット。此方には最低限のサーヴァントしかおらず、香子はいっつ目覚めるか分からない。状況は最悪である。

あつ……(震え声) そうでした。デオン君ちゃんのお陰であの凶悪バーサーカーを抑えられている事に気が付きました。コレだからホモの記憶領域は8bitとか言われるんですよホントに。

「さて船長。取り敢えず制圧したから、仕事してくださいな」

「あいあいっ! 黒髭、いつきまーす!」

お前何処のニュータイプ？

「——という事で、BBA!」

「なんだい？」

「聖杯返してちょー!」

「そう言われて返すバカが居ると思うかい、髭」

「——この状況で良くその啖呵切れますなあ。逆に感心するまである。まあ真似したくはねーけどなー、ハハッ……おいBBA」

「ガチャリ。その音を起点に、先ほどまでの緩んだ表情から一転……黒髭の表情が変わった。ガツと目を開き、相手を威圧する、厳しい、鋭い表情に。ドレイクの目の前に差し出されたのは……黒髭の拳銃。」

「流石に調子に乗り過ぎじゃないでつ？」

「はっ、自分達が有利な状況で調子に乗る馬鹿に従う程、私は物分かり良くないんだ。合図一つで、私の船を沈められるのがそんなに楽しみかい？」

姉御!? その顔面に拳銃突きつけられた状況でそのセリフ吐けるのは凄いですけど、状況考えましょう!? 下手すると全滅しますぜ! もうちょつと、こう『調子に乗って居ていて実に滑稽であそばせますわ(脳味噌溶解お嬢様口調)』的な感じで。あれもしかしてこっちの方が煽り性能高いまである？」

「それにね……」

「んー？」

「アタシは、不利にも不利、そんな状況から逆転するのは嫌いじゃないのさ。覚えておきな『黒髭坊や』」

「少し、小馬鹿にしたように黒髭を笑いながら、腰に手を当てるドレイク。そんなドレイクに……黒髭は激昂する事も無く、真つすぐな瞳で見つめ、呟いた。」

「——俺を坊や呼ばわりか、はっ、流石にキャプテン・ドレイク」

「そうさ。アンタの海賊ぶりなんて、アタシに比べりゃ、まだまだだよ……アタシはキックじゃ済まないからね」

……ところで、今ドレイク船長がお手を当てる辺り、さつき、



其処に拳銃収納してませんでしたっけ。そんな所に手を当てて、何が目的だ!?(恐怖) ンモノか!?! 金か!?! (海賊流)

「――まずっ」

「遅いっ!」

◇直後、自らの服をぶち抜いて、先に撃鉄を下ろしたのはドレイクの銃。その弾丸の向かう先は、なんと黒髭でも、エイリークでも、『ランサー』でも無く……未だ構えられたままの、マシユの盾! 弾かれた弾丸の向かう先は……一点、黒髭の頭蓋!

跳弾での不意打ちとはやりますねえ! そして黒ひーも流石にこの状況で一切の動揺も無く自分の引き金を引くのが遅れた模様。しかし、この不意打ちは

「ったく、危ないなオイ! ったくこの状況で――」

「くつちやべってる暇なんて無いだろうが! おらっ! 鉛玉のプレゼントだよ!」

「おわっ!?!」

◇その一発は、辛うじて黒髭の傍に戻ったランサーが凌いだ、がそんな事関係ないとばかり更に銃をブチかます。今度はランサーに向けてと、黒髭に向けてもう一発ずつ。それもランサーが見事に弾くが……

「――良いぜBBA。海賊つてのはそうでなくつちやなあ!?! しゃあ! こうなったら海賊らしく、この船沈める勢いで、マシユちゃん神作家ちゃん、略奪品としてこの胸の中に抱き締めて頂いていっつちやおくかなくふひひwwww あ、序に聖杯も――」

「――ほう、大きく出たな髭」

「ご主人が解放され、キャットは檻から解き放たれた。残念無念また来週」

「あつ (察し)」

◇だがランサーが庇った黒髭の、その更に後ろには……ずっとセイバーとキャットが居たのだ。完全にランサーを釘付けにした状況下、咄嗟に手に持っていた拳銃で、装甲の薄そうなキャットの動きを阻害は出来たが、もう片方は、もうどうにもならない。

黒髭Ⅱサン、ウカツ！ ワズカの油断で、一発自摸アンブツシュ！  
イヤーツ！ 黒髭Ⅱサンはしめやかに一刀両断！（一刀両断とは  
言っていない） あからさまに重傷なのである！

「グ、グワーツ！ セイバーⅡサングワーツ!?」

「先ず貴様だ。小賢しいマネをしてくれた礼に、全力で屠つてやる」

「いやだこれ黒髭ちゃん死ぬパターン？ だがしかし、黒髭は生き汚  
いってのが良い子の常識！ つーわけで……次オマエツ！」

＜背後からの致命傷。それでも黒髭は、その視線をあえてセイバー  
から外した。狙いは貴方。その手に持っていた拳銃を、今度は思い切  
り投げつける。普通なら弾くのも簡単だろうが、やったのがサーヴァ  
ントならとんでもない脅威。

流星に拳銃くらいなら弾けるでしょ（適当） とか思ってたましたけ  
ど、コレもムービー銃なのか（諦め） 投げつけるムービー銃とは一体  
……？

「させぬっ！」

＜キヤットがカバーに入ってくれて助かった……と思っただが、それ  
は同時に、黒髭に逃げ場を与える場所を与える事になる。セイバーの  
横をすり抜け、自分の船へと轉身しようとする黒髭……だが。

「――逃がすと思うかい？」

「はあい、チエックメイトよ！」

「総員、撃てええええええええっ！」

＜その黒髭の足元に、ドレイクの号令と共に、弾丸が突き刺さり……  
直後、轟音と共に両脇の大砲が火を噴いて、同時に、黒髭の船と反対  
の位置の船から焰が上がる。それは、状況が逆転した事を、これ以上  
なく示していた。

や っ た ぜ 投稿者、チンピラハゲマスター。

完全勝利UCへ雪崩れ込みそうな所で、今回はここまでとなりま  
す。ご視聴、ありがとうございます。

## 荒れる大海 その一

皆さんこんにちは、ノンケ（銀河一の流星スカウト）です。彼女が登場した直後、私の胸に、こう、言い表せない「ときめき」が宿った気がしました。アメリカン。ボンキュッボン。カウガール……分かるだろう？ 君達。

前は、ドレイク脅迫！ ゴールデンハインド包囲の裏技！ クインアンズリベンジ号の船長、黒髭から申し渡された、示談の条件とは……!?! なお姉御の機転で、一発でぶち壊されましたけどね。

……それにしても。

「やってくれますなあ!?!」

「あーっ、この子達は良い子ちゃん達、ではあつたけど……船長さんの方の悪辣さは見誤ってたねえ。まさか、味方に一切の躊躇なく銃弾ブチかますって」

＜一瞬の機転で、二隻に砲弾が直撃、一隻は、オルタが放った焰で今も後ろで着々と燃え盛っている。ニヤリと笑うドレイクの、その後ろ姿が、初めて会った時よりも大きく見えるのは、決して気のせいでは無いだろう。

「味方じゃないさ。味方の武器。アンタ等と違うんだ、嫁入り前の女の体に傷付けるわけがないだろうアホウ共」

船長かっけええええええええええッ！ かっこよすぎる！ 文句なし！ マシユの盾に跳弾させて黒髭を狙い、その一瞬で状況を打開、黒髭に合図させるまでも無く三隻を沈めるっていう。初めから狙ってたんすねえ（感心）

「ふっ、甘いぞBBA……拙者達にはまだエイリーク氏が」

「――僕とキャットで制圧したよ」

「流石に前後から罅られ犯罪行為、いかに強力なサーヴァントでもなすすべ無しにダウンさ〜」

「■■■■■■■■……!」

「オオオオオオオンおったまげ〜!! まるで悪党の様なやられ方!」

超スピード!?! (困惑) あ、あの……エイリークの活躍どこ……バー

サーカーっぽい大暴れどこ……どこ……？（無念の声） た、確かにドレイク船長が凄い大暴れしてる方にイベントカメラは向いてましたけど、だからって全カットとかこれマジ？ 扱い雑過ぎるだろ……（静かなる憤怒）

「いやー……ダメだ。やられましたね。コレ。どうします船長？」

「はっ、たかがお付きの船が三隻沈められただけでえく？ ノリが良くないなく先生。もっとここはヒットアップして、リビドーを穴と言う穴からドバーツ！ つと！」

「——いいや、ここまでだ髭。分けだよ」

しかし、形勢逆転したこの状況。彼女は戦うでも無く、彼らを選べるでもなく。彼女は、ここで『分けで終わらせる』と言う選択肢を選んだ。

「こつちはそつちの船三隻沈めた。それで十分。これ以上勝ったら、勝ち過ぎだ。今丁度良い所で、こつちも終わらせたい」

「ほーん？」

「これから先の事を考えたら、勝ち方つてものを考えなくちゃいけないからね」

コレはカツコイイ悪党。十年後には天下とつてそう（小並感） 結局初代では若干小物化した訳ですけども……実際狂犬の兄さん手に入れたんだから十年後には天下とれたと思うんですけど、なんでダメだったのか。風間さんが有能だったんでしょ（当然の指摘）

「アンタの所相手にあんまりド派手な勝利飾ると、それこそ戦争の火ぶた切ったつて事になりかねないからね。私だつて馬鹿じゃない」

「なになにBB A、もしかしてびびつてんの？」

「勝つにしても、段取りが居るつて話だよ。ただ考え無しに突っ込んで勝てる程、アンタ等を甘く見ちゃいない——アンタも、そつちの方が都合がいいだろう？ 自分の体引きちぎつてでも、命かけてでもアタシとやり合いたいつてなら、止めないけど？」

あつ（察し） あ、姉御ツツツツ！ その挑発はマズいですよ！

く、黒髭が本気になつちゃうヤバイヤバイ……あああ目が、黒髭君の目が！ キマってる！ 目が！ 目が大変な事になつてる！ ド

レイク姉さんをめっちゃ見てる！ 黒髭君はオタク性と凶暴性で一直線になつてるようなバーサーカーなんだから！

「——どうする?」

「へへへ……BBAだったらお誘い上手じゃないの！ 思わず黒髭おじさん、ロリじゃないのに反応しそうになつちやつたZE☆ もうつ、そんなに拙者とデートしたいのでつか?」

「ジョークは良い。やるかやらないかを決めな」

〈自らのノリを一閃するドレイクに、黒髭はその口を閉ざし、そして、彼女を真顔のまま見つめ……一つ、ニヤリと笑った。だが、笑っているのは口元だけで、その瞳が笑っていないのは、誰が見ても明らか。

「んー、今回はNOセンキューで。拙者もこんなかわゆいおにやのこと出会って速攻死んでお別れとかテンション駄々下がりですし?」

べつ、別にBBAの情けに甘んじた訳じゃないんだからねっ!? 勘違いしないでよねっ!」

「喧しい。やらないならさっさと失せな。アンタの船は沈めてないんだから」

「あーそんな怒らないでBBA。更年期でちゆか?」

〈しかし、それ以上に目が笑っていないのは……煽られているドレイクだった。その黒髭の煩い口を、最早何も言わずにこめかみに拳銃を押し付ける……否、押し付けるというかゴリツと銃口を擦り付ける事で黙らせた。

ひえっ……ドレイク姉御のこんな無表情初めて見たゾ……コレに比べたら黒髭なんてナオキですよナオキ！ でもこの圧力に耐えられてる黒髭君も凄いと思った（小並） 実際自分がこうなったら涙流してシヨンベン漏らし、命乞いをするしか出来ないと思うので。

なんなら姉御を下から睨み返してる黒髭君の度胸がお太い！ でもドレイク姉御の怒りの表情もお太い！（カツコ良き） お太い双壁に挟まれてオツパゲドン！（限界化）

「へいへい。仕方ない、先生。引き上げるでござるよー……エイリーク氏は任せた」

「いやあ、助かるねー。こっちの船長さんと違つて話の分かる船長さんなのは。こっちはマジで頭のネジが弾け飛んでるからねえ」

「そう言つて、跪いた状態から立ち上がる黒髭、そしてランサー。未だ警戒する剣を下ろさぬセイバーに対し、立香が軽く手で合図を出せば、不承不承と言つた様子でセイバーがゆつくりと彼らの退路を開ける。」

「——いいの?」

「船長がこう言つてるんだ。寧ろ逃がさないと船長の顔を潰す事になる。だからその炎仕舞つてくれない、オルタ」

「ま、そんなクソみたいに甘々のマスターちゃんがどうしても言うなら? ハツ、私も従いますけど。私としては、ここで全力で潰しておいた方が楽だと思つたよ? 直ぐにでもねえ」

「そもそもここで黒髭と某防衛線おじさんを薪にしたら、間違いなくドレイク船長の引火しちゃうからね。それこそドレイク船長がムカチャツカフアイアーウィツカーマンとして倒壊して来ますので。」

「おおこわ……全員が物分かり良い訳じゃなさそうだねこりや……はいはい、言われなくてもさっさとおさらばしますから」

「——つと、そういえば。おい髭。ちよつと待ちな」

姉御? (反応の敏捷なる事隼の如し)

「ひよ?」

「忘れてたよ。海賊が海賊に勝利したつてんだから、戦利品の一つでもないとかツッコかないからねえ。その腕にしてる高そうなやつ、アタシに寄りこしな」

「……」

「何時でもこうやつて見逃される、と思つてナメられても困るからね」

姉御? (二刀流) あの、そんなくろひー挑発しちやつたらあの、くろひー嬉しがつちやいますよ? 覚醒しちやいますよ!! 牙剥いちやいますよ?」

えつと、さつきからなんでこんな投降者が慌てるかと言えば……まあこの特異点のかなり重要な(大嘘)ネタバレになりますけど……あの、黒髭つて、その、姉御の海賊としての側面とかもう大好物な姉

御フリークなんすよ。それがどの程度か、っていうのはまあ後程って感じですけども……ダメダメダメ……（魂の懇願）

〈ドレイクが指差した先。黒髭の腕には三つほど腕輪が嵌っている。それとドレイクの間で何度か視線を往復させた後、やけに素直にその腕輪の一つを取って、ドレイクに投げ渡した。

「いやあBBAとはいえ海賊のマナーくらいは覚えていたようで！

くろひーめっちゃ安心しちゃったんだけど、マジアンジーでゴザル超えてギザル、ギザル退化してギザに付け加えて拙者の股間がピラミッド覚醒！」

「おう黙ってさっさと帰れ。強調するんじゃない。一個減らすぞ」

「ひえっ……おじさんのきんのたまが……」

あ、皆さんコレジョークの類だと思ってるでしょ？ コイツマジでエレクチオンさせてもおかしくないレベルだから。この特異点に関して、この黒髭君の行動指針を理解してないとマジでピンチまであります。

テストプレイで『黒髭とドレイクが特異点で手を組んだ挙句、もう既に特異点を解決するレベルで大暴れしていてどうすればいいか困った』とか言う事もあれば『黒髭君がドレイクとの邪魔されないように真っ先にイアソンやらポセイドンを始末して、聖杯所持者同士の地獄みたいな大抗争を繰り広げ続けた跡地』やらもあって……オタクの海賊がどれくらい厄介なのかを悟りました。

「……」

〈——結局最後まで、おどけた態度を崩さなかった黒髭だが……貴方は。それが全てでない事を容易に理解できていた。黒髭を見つつ、貴方が同時に視界に入れていたのは、自分のサーヴァントのデオンだ。

「——ふう」

〈漸く一息を吐いた彼は……バーサーカーを打ち倒してからというもの、ただ一人だけに対してその鋭い視線を向け続けて決して剣を収める事をしていなかった。謎のランサーを含め、では無く。黒髭ただ一人に対して、その警戒心を全力で注ぎこんでいた。

全然どうでもいいですけど黒髭を警戒して睨んでる凜々しいデオ  
ン君ちゃんのカツコいい事この上なくない？（同調圧力）可愛いん  
だけど、でもキリツとするとあつと言う間に凜として華かなくなって言う  
レベルのカツコ良さ好き（語彙全滅）もう罪（方針転換）可愛カツ  
コいいとか重罪だよ？（ホモコップ出勤）もう俺のマイルームで拘  
留確定だわ（キモさ1000%シャツチョ）

「マスター、平気かい？ ケガとかは？」

「全然平気。デオンこそ大丈夫かい？」

「<>うむ。麻呂は無事である。そこもとこそ、その美貌に傷でも付い  
ておらぬか。」

「おっ？ 古典かぶれかな？（指摘全一） とうるか君の古語擬き知  
識ともなつてないよね君の発言（厄介勢） これは……今からお前に、  
古典を教える……そんな暇ないやろお前んプレイイ！（選択肢上）  
今できる事を全力でやって勝つために盤面をととのえるんだよ！  
（とくさんか？）」

「大丈夫だよ。それよりも……僕としては、とんでもない無茶をした  
マスターに色々言いたい所はあるけどね」

「何の事かな……？（アミバ） いやあ前回の暴挙はちよつとね……  
あの、ホモ君に全面的な責任があるので何も言えないと申しますか  
……うん。デオン君ちゃんのジト目は可愛いから甘んじて受け入れ  
よう（変態紳士） だって……あの、ジト目がアレなんだもん。美遊  
ちゃんのなデフォルメ目なんだもん。そりゃあ可愛いよ……」

「ちよーそー！ いちやついてるんじゃないDETH！ きやわゆい  
王子様系男の娘のジト目とかご褒美貰ってこの禿え!!」

「おーい船長？」

「はっ!? つい……あーなんだ。このままで済むと思うなよおーつ  
!？」

「<>……そのジト目は即座に黒髭に向けられたが。その視線に若干身  
悶えしつつ「ほおひいん！ <>、ご褒美頂いちゃいました……!」と  
かしながら撤退してる辺り、本当にヤバいのか普通にロクでもないオ  
ヤジなのか……分からなくなってしまう貴方だった。」



「……本当に、最後までアレだったね、あの海賊」

否定は出来ないのをござる……濟まぬ黒髭氏……許しておくれ  
……

と言った所で、今回は此処までとなります。黒髭氏が終止不穏な気がしないでも無いですけども、まあ取り敢えず先送りに出来たという事で、一つ。ご視聴、ありがとうございました。

## 荒れる大海 その二

皆さんこんにちは、ノンケ（そう言う所だぞ村正）です。あの雑なノリ本当に好き。めっちゃ好き。下総でもメツチャ重要な位置で大活躍してて、アルターエゴとして出て来た時はマジで……興奮させてくれるねえ（にっこりにこ）好きだよそういう貌（いちめん）

前回は、取り敢えずドレイク船長の方針に従いまして、取り合えず勝ち過ぎはキャンセルだ（断定系）でもこつちが引く代わりに向こうにも後ろ向かせたんだよ百八十度（完全勝利）尚、こつちが退いて貰った感じだとの事。

「ったく、近場に島が見つかって助かったよ……あの髭野郎が、とんでもない野郎を船に入れてくれやがって、お陰でまた補修しなきゃならんんじゃないか」

「——決して黒髭を、無傷で追い返せたわけでは無かった。サーヴァントの……特に、船体に一切の容赦なく踏み込み、その斧を振るったバーサーカー……エイリークの手によってダメージは間違いなく受けていたのだ。」

因みに甲板に結構ヒビやら傷が入っております。足場が沈めば自分もヤバいかもしれんと言うのに流石はエイリーク氏え……バーサーカーここに極まれり。

『そりゃあとんでもないとも。かの英雄の名はエイリーク……海賊の原典の一つ、ヴァイキング達を率いた血濡れの王様。その凶暴性に関して言うなら、そのクラスにピツタリと呼べる』

『奥様もヤバイ、とは有名だけど。本人自身も決して弱い英霊じゃない。歴史の古さだけで考えるなら今の所、相当な脅威だとも』

「カルデアの頼れる参謀二人の意見も一致しているが、貴方にとって脅威はそちらではない。唯一人。危機によって沈静化したとはいえ、貴方の胎の奥には未だ、煮えたぎる様な焰が息づいているのだ。」

「あの髭は俺が直接処刑する。許さねえ。」

「香子さんに下卑た視線を向けた罪、万死に値する……落とす。男の急所を」

グチグチと抜かしてるホモ君の額には、因みにですが角がしつかりと生えております。コワイ！ どうやら香子さんに対する黒髭の変態発言が余程許せない模様。お前がグンヒルドかよお!?(困惑) とはいえ面白そうなので石投げちやお! (選択肢下)

「お、落ち着け康友。香子さんも、今は何ともないだろうか?」

「そ、そうですよマスター……少々と衝撃が強すぎて、あの、足に来てしまいましたけど実害はありませんし……取り合えず角を収めてくださいまし」

「……姉御、アイツ、角生えてますけど」

「別に構わないだろう、角位」

〈ならばお前は堪えられるのか、と貴方は立香に詰め寄った。たじろぐ立香に、貴方は続けて問いかける。耐えられるのか……マシユが、あの髭に口説かれている光景を想像してみろ、と目を血走らせながら言い放つ。

こわい(震え声) 目を血走らせ、角迄生やしてチンピラ超えて最早変質者の域。(香子さんをたぶらかされてますから) 何の問題ですか? 何の問題も無いね(妥協完了) とはいえね、喧嘩っ早い(確信) のホモ君とは違い、藤丸君は喧嘩っ早い(当社比)なのでこんな挑発(概念)に乗る訳がないと思うんですけど(フラグ)

「えっ……マシユが……? マシユが……」

「——どうしたんですか? 先輩」

「マシユが、あの髭に……言い寄られて……」

〈立香が、マシユに視線を向ける。それに反応してマシユが小首を傾げたのが見えた。そして……そのマシユの表情が、真つ青な物に変わっていくのを見て、貴方は自分の思いが立香に届いた事を悟った。——ぶっ殺す。生殖機能をマトモに使い物にならなくしてやる。いや、そもそも男性ホルモンを分泌する器官を臓物から引きずり出してやる」

「先輩!？」

「あーこりやダメだね。誰か水持ってきてきな」

「水で冷めますかね……?」

冷めないと思います（呆れ） 何だったらあんまり熱いモノに水ドバー!!（迫真） つとしても大爆発D Aー! D A D A ツ D A! にしたって藤丸君挑発に乗りやすすぎるのである。イアソンが未だ居るかどうかは分かりませんが、もしいたとすれば彼の挑発に耐えられる気がしません。

「許さねえ……マシユを汚させやしねえ、コレが……俺の、エゴだとしても、俺は絶対にマシユを守るんだ、そう決めた! あんな野郎に、マシユをやるかあああああ!!」

「ど、ドクター! 大変です! 先輩が錯乱してしまいました!」

『……錯乱、ではないんだけどね。うん。その。えっと……まあ、そっとしておいて』

「どうしてですか!?!」

〈貴方は立香の元にゆつくりと歩みを進める。良くぞ覚醒した、我が友よ、と笑いを浮かべながら、堂々と接近していく。共にあの悪鬼黒髭を処すべし、と肩に手をかけようとしたその時……真横からとんでもない量の水が横つ面を張り飛ばした。

……幾ら普通の水で収まらなそうだからって言って風呂桶レベルの持つてくることは無いと思うんですけど（名推理） 二人共海から引き揚げられたみたぐしよぬれよ?」

「ハイハイその辺りにしときな。アンタ等、今にでも誰かしらに襲い掛かりそうな顔してたよ。気持ちは分かるけど、その子達を心配させるんじゃない」

「はわわわわ……ど、どうしましょう! マスターが! マスターが!」

「ど、ドクター! 先輩にメンタルチェックを!」

ヤダもうめっちゃ可愛い……（語彙力死亡） じゃなくて、ドレイクネキ『それ以上いけない』ありがとナス! あのまま行ったら間違いないマスター二人してチンピラ面でプレイするとか言う地獄みたいな絵面になっちゃうから……（震え声）

「……」

〈……正直、若干熱が乗り過ぎた、と言うのは否定できなかった。二

人を心配させるほどにブチ切れると言うのは最早本末転倒。いつの間にか角も引つ込んで、腹の底の熱も収まっている。どうやら気持ちも落ち着いたようだった。

〈すいませんでした……ドレイク船長

〉香子さん、ゴメン。

(上の選択肢)違う違う、そうじゃない。謝るのは大分心配かけた自分の相方の方だルルオオン!? コレだから田舎少年は……(差別発言) 藤丸君は垢ぬけた都会系ボーイって言っても仕方ないと思うんですけど、この禿は似合わないカルデア通常礼装と言いつかお上り臭い要素が出て来てるんですよ……

「い、いえ。私の事を心配して怒って下さったのですから、それについては特に何も言う事はございません……はい」

「寧ろ、女としては思う所ありのオスが己の為にムカチャツカ大噴火しているのはハッピーターン迄ある気がするのだな?」

「キャット様!」

〈一方の立香は、静かに。そして、綺麗に土下座をマシユに決めていた。流石相棒、と貴方は優しい笑みを浮かべたが……外野にとつては完全に茶番である。ツインオルタが、溜息をつくのも仕方なかった。

「つたく、アンタ等生娘じゃないんだから、そんな髭一人に一々ギャーギャー言ってるんじゃないわよ。肝っ玉の小さい」

「なんだ、貴様の事を言っているのか?」

「私が肝っ玉が小さいって言うなら、燃やすわよ黒いの」

「お前も十分に黒いだろうが。全く、違う。私が言っているのはそうではない」

「じゃあなんだってのよ」

「生娘の方だ」

〈……そのツインオルタも、いつの間にか旗と剣を派手に打ち合わせていたが。何故かジャンヌの方がエライ真っ赤になっていたが、それが何故かは貴方には良くわからなかったのである。

こんなハッキリ表示されてるのに?(下衆顔) とはいえ、ここで

ホモ君がオルタ組に絡んでいたら、マジム力つくなコイツう……すわわっ！（斬首）とかなっても仕方ないと思うのでとつまりすとこ……（適切距離）

「はいはい、その辺りにしとくれ。これ以上船を傷つけられてもたまらんからね」

『……もしかして、船、結構ダメージ受けてます？』

「何びびってんだい。航海に支障はないよ。精々これ以上傷つくなら目の前の島に泊まる時間が増えるだけだ。それでも構わないなら好きにやつとくれ」

『それは勘弁してもらいたいかなあ！』

〳という事で、ドクターの悲鳴に応え、手の空いていたデオンとキャットがオルタズを確保し、引き剥がす事と相成って……その間にも、ドレイクは手にした海図を眺めていた。

「この島は地図に載って居なかった……つっても距離的に……この辺りか。まあ、中継点としちや上等、つて所かね」

「姉御、もうちよいで接岸ですぜ」

「分かってる。アンタ等、接岸したら船直すの手伝ってもらおう……つて、未だやってんのかいその二人は!?」

キャットとデオン君ちゃんを以てしても苦勞する大乱闘スマッシュブラザーズオルタズの喧嘩

の收拾。一万人くらい姉妹が居そう（超電磁並感）

「はなせゴラア！ 止めるのを止めろオ！」

「……」

「ええい、このっ！ ぼ、僕らは気にせず！」

「この暴れ馬二頭を抑え込むのにちよつとばかりかかる故な！」

『……あーえつと、キャプテン。その。そういえば！ その地図の島に我々は元々向かっていた事は分かるんだけど、具体的にはどうして其処を目指したんだい？ 話を聞く限りでは、其処は間違いなくこの海で一番荒れている所だと思っただけだ』

〳……白い目で此方を見ているドレイクに対し、話題を逸らすようにロマニはドレイクに話を振った。

『僕らの様な素人でも、そんな一番荒れている所にいきなり突っ込ん

でも大した成果は上げられない、と言うのは分かる』

「……露骨な話題逸らしたねえ。まあ良い。別にアタシは、そこでひと暴れしようと思ってた訳じゃない。この海の、現状が知りたかったのさ」

——と言った所で、今回は此処まで。ご視聴、ありがとうございます。

## 荒れる大海 その三

皆さんこんにちは、ノンケ（真夏の皇帝陛下）です。TEOGAやらなにやら好き勝手言われてますけど、最終再臨の水着は本当に可愛いと思うんですよ。真面目な話。第一再臨に関してはなんで査定通ったんですかね……（呆れ）

前回は、ホモ君が激怒、諫めようとした藤丸がホモ君に『あんな髭面オヤジにマシユを取られてもええんか』とか煽られて激怒し、それがツインオルタにも飛び火しました。コレが連鎖爆発ちゃんですか。「——正直、具体的に艦隊がどんくらい減ったか。で、今は規模を維持できているのか、それとも減り続けているのか……色んな船の奴らから話は聞いているけど、それで詳しい所が分かる訳でもない」

〜故にこそ、今の主戦場たる場所での海がどうなっているかの詳しい状況を知りたかったと、ドレイクは言う。

『主戦場？』

「さつき話しそびれたけどね。あのデカイ化け物が居座ってる島には、イスカンドルの艦隊もカチコミをかけようとしてるんだよ。アイツ等的には、あの化け物までキツチリ始末するつもりらしいね」

特異点解決しよう、って言う事らしいですからね。そりゃあ、あの目玉柱君を見逃す訳ないっていうのはOK牧場？（激ウマギャグ）

「とか思ってたら、あの黒髭だ……ここから、向こうの戦況が二つ考えられる」

「二つ。状況を考えれば、一つ目は厄介払いと言った所か？」

「へえ、分かっているじゃないか黒い剣士さん。そうだ。今、私達が目指してる戦場は想像以上に荒れている……そこに余計な闖入者を増やしたくないから、尖兵を配置して、周辺を見張らせてた可能性が一つ」

流石オルタ化したとはいえ円卓の騎士王ですねえ！ 戦況を見る目が太いぜ……因みにほんへではその要素がどうしても薄い模様。騎士王様が本気で指揮取っても許される相手はチートBANZOKUだけだからね、しょうがないね。

「こっちはラッキーさ。向こうさんはまだまだ敵同士で殴り合ってく



れるんだ。幾らだつて付け入るスキは出来るし、どつちかを利用して、もう片方を潰す事だつて夢じやないだろうよ。そう上手くいくは、吹く風次第だけどね」

……全然関係ないんですけど、そんなBANZOKUと騎士王の戦いから漁夫の利搔つ攫おうとして、しかも偉大なる神祖ロムルスやらネロちやまが築いた偉大なる帝国をバックにして？ せた土地の国に不用意に戦いを挑んだ挙句に、自分の土地を明け渡す事になったクツソ情けない皇帝がいらつしやるようです。

皆も漁夫の利を得られるとテンション上げた挙句、ボロ負けするのは……やめようね！

……弁護しておく、ルキウス君は、アーサー王を良い所まで追い込んだのは間違いないので、ボロ負けではないんですけども、実際漁夫の利狙った挙句に負けたのは事実つて言う。ルキウス君エ……まあ、それは兎も角。

「もう一つは、なんなんだい」

「——もう鬪いが終わつて、こつちから聖杯を奪い取る為に尖兵を送つて来た可能性だ。だとしたら最悪だよ。まだまだ敵はガンガンこつちに来る。下手すると、海賊が丘で死ぬとか言う冗談みたいな事になりかねないつてね」

「そう言つて、ドレイクはカラカラと笑うが。此方としては笑い所にはならない」

『えっと、確率的には何方が高い、とかは』

「分からん。詳細を知らないからね。結局はどつちしかないんだから、風向きが良い方に向く事を祈つておきな」

『運否天賦かあ……いやだねえ……』

いやだねえ……（同調）しかし、実際あの目玉つてそれなりには強いんですよ。ローマでは戦う事無く神祖に捻り潰されましたけどww（ダイソウゲン）いえーい終局特異点のレフ見てるかー!? 偉大なる神祖を操った挙句、瞬殺されたレフ・ライノール君見てるかー!? 役目を果たせなかつたレフ君見てるかー!? フラーツシュ！（ライト煽り）

「そんな事言つたつて行くしかないし、行けば分かるんだからがたがた言うんじゃない。取り敢えず、今はこの島で船を直すのが先決だ。そら、お前たち、上陸するよ！ 準備しなあ！」

「へいっー」

「そう言つてドレイクが船の上で指揮をしているのを、貴方は黙つて見つめている……積りだったのだが、トントンと肩を叩かれる。ふと振り返れば、其処にはニッコニコの笑顔で此方を見つめる、デオンと……香子の姿。」

「さて、マスターはいつもの、だよ」

「デオン様から話をお聞きしました……ますたあ？ 今日、いつも以上に激しく参りますので、少し、船内へ。大丈夫です。ボンベさんにお話は通してありますので」

あつ（察し） ちよつとこちら辺に上手いラーメン屋の屋台来てるらしいっすから、俺はこれで失礼しますね〜（目逸らし） ダメ？

よ、横浜家系の凄い美味しいラーメン屋の屋台（重要）なんだけどなあゝ???? ダメですか、はい……

という事で、ホモ君はいつも通りの事になりました。流石にサーヴァントを思つての行動とはいえサーヴァントに対しカチコミをかけたのは無茶だった模様です。

「絶望と共に目を閉じ、ゆつくりと二人の処刑人の後ろに続く。ふと、貴方の視線の向こうにキャットの姿が見えた。助けを求めて手を伸ばすが、頑張れ、と言いたげにガッツポーズをするばかり。」

「終わればキャットマッサージで癒すので、先ずはラブ&ウィップを受けるがヨイ」

「自分がやった事とは言え、本当に先ほどの自分を全力で恨んだ。どうしてそんな無茶をしてしまったのか。しかもやった事の重さでは今までの中でも最高だ。帰ったらドクターに精神の治療をやつて貰おうか、と真剣に考え始めていた。」

まあコレで特異点で無茶するのも何度目だカス（半ギレ）って感じですからねえ。そろそろ自重させた方が良い、と言うのは間違いないと思えますけど……

「――だから、貴方には聞こえなかったのだろう。」

『……本当に不注意だけだと思ukai?』

『うーん……一応ちよつと調べてみようか。幾らなんでも、ちよつと精神が不安定すぎるかもしれないし。ごく普通の高校生だったのが、ずつと戦場に立ち続けてるんだ。そう言う症例』

「などと、ダ・ヴィンチとロマニが話しているのが。」

「多分不注意だけだと思うんですけど(名推理) そんな、なんか特異点を解決する中で不調が出たとか、そんなホモ君のミスに言い訳を与えてはいけない(戒め) つか言い訳が無い方が普通に不注意で済みますからお願いします……やめてください……アイアンマン……(心当たりがありまくり投稿者)」

「という事でちよつとカ……ツトオ……」

「お疲れ様である、ご主人。そら、キャットの優しいマツサージである。心を開いて受け止める。癒しを受け入れるのである。残念ながらご主人に拒否権は無い。徹底的に蹂躪してやるのである」

「蹂躪、と言う強い言葉とは裏腹に、彼女の優しい手つきの肩のマツサージは、ずつと正座をして縮こまっていた体には最適な癒しとなった。飴と鞭、とはよく言うが、愛の鞭もその後の飴も極上と言うのはそうそうない経験だ。」

「飴と鞭で躰けられるとかホモ君はシヨタかなにか? ハゲシヨタ完全に田舎少年やんか(偏見) なおスケベな事は殆ど考えず大抵ブチ切れてガンたれている模様。田舎少年が一気に特攻服のヤンキーに……それがお説教と優しいマツサージで躰けられる訳ですよ。あれっ? 案外……いいゾコレ(雑食)」

「それは置いておいて。画面は船上から、船が止められた砂浜に移行してますね。藤丸君は……未だオルタズの間に入ってるのか(困惑)」

「さつきは船の上だった……ここは船の外だ。止められる謂れは無い」

「さつきの言葉訂正させるまで、止まる訳には行かないのよ。退きなさいマスター」

「お嬢様方! お嬢様方! 困ります! あーっ! あーっ! 困り

ます！ 困ります！あーっ！ 困ります！ お嬢様方！」

〽黒の王と黒の聖女の間挟まれてクツソ情けない悲鳴を漏らす立香は放っておくとして。多分マスターの近くにいるマッシュがっかりサポートするだろう。という感想と共に貴方は視線をドレイクに向け直した。

〽船長、これからどうするんです？

〽船長、向こうも盛り上がってるし折角だし俺達も盛り合いますよ  
うか。

クツソ汚いウィットの利いたジョークは申し訳ないがNG（鳴咽）  
お前風情がドレイク船長と盛り合える訳がないんだよなあ。身の程を知って、どうぞ。しかもそれオルタ達を見て言ってるってことは殴り合いたいって事なんでしょうか。猶更身の程を知ってどうぞなんだよなあ……あつ（操作ミス）

〽船長、これからどうするんです？

〽船長、向こうも盛り上がってるし折角だし俺達も盛り合いますよ  
か。

「ははっ、その猫と一緒にかい？ 面白い事言うじゃないか。気に入った。ケツの穴一個増やしてやるからこっち来な」

〽冗談です。と貴方は顔を青ざめさせながら返す。疲れていた所  
為か、ちよつとした下ネタを挟み込みたくなつたのだが、ネタどころの騒ぎじゃ済まなくなってしまう勢いだった。ドレイク船長にこの類のジョークは死に繋がると、貴方は一つ賢くなった。

「……彼奴も俺達と同じ道辿ってんなあ」

「ガチでケツの穴増やされた奴も居るからなあ……」

「お前も、姐さんが幾ら綺麗だからって、下手な事するのやめろよ」

操作ミスなんです……（震え声） しかもケツの穴増やされてる奴  
が実際に居るのか……（大困惑） 命知らずすぎないですかね姉御の  
船の船員。

「それは兎も角、だ。取り敢えずこの辺りで資材と食料！ 調達して  
から出発する！ テメエら、気合入れて探すんだよ！」

「「ウィっす！」」

「そう言った船員たちが四方に散っていく。自分達はやらなくていいのか、と問う貴方の問いに『お客様にやらせるような事じゃないよ』と笑うドレイクだったが……そうもいかない事態が、そう時間も立たないうちに、起きてしまった。」

「——あつ、姉御っ！ エライもん見つけました！」

「なんだ!?! 果物の群生地でもあったか？」

「違いやす！ 足跡ですよ！ しかも、ドエライデカイ足跡です！」

「この島、なんか居ますよ間違いなく！」

……何それコワイ。

と言った所で、今回は此処まで。ご視聴、ありがとうございました。

## 傷付いた雷光 その一

皆さんこんにちは、ノンケ（真夏の花嫁）です。シグルドさんと全力でギシアンしないと許さんからな。ドスケベなお楽しみしないと許さんからな。香子さんが見ただけで失神しつつメモはしつかり残すようなエゲツない事しないと許さんからな。なんだったら某サイドで男子向けランキングトップ取る位淫語やらハートマークやら乱舞するようなスーパー薄い本展開しないと許さんからな。俺達に敗北感超えて恍惚感与えるような事しないと許さんからな。

前回は、ドレイク船長の御説明、が終わった途端にホモ君が連行。あたりまえだよなあ!? しかしながらそれ以上にちよつと不穏な流れが。その後、キャットからマツサージを受けつつ上陸した結果……なんか、コワイ！ 跡が付いておりました。

「……足跡、ですね。しかも、相当に大きいです。人間の足跡……とは思えません」

「オイオイオイオイヤバいんじゃないすかこの島あ!? 姉御オ！ちよつとこの先入りたくないんですけど姉御オ!」

「馬鹿言ってるんじゃない。食料の確保だって、板材の確保だって必要だつてのにここで逃げる選択肢はない!」

「姉御オオオオオオオ!」

ボンベ君の声があまりにも悲惨。まあ一般通貨船員のボンベ君にとつては確かにそんな化け物が居ますよ、って宣言されている様な所に突つ込みたくはないんですけど。しかし逃げるな……俺達を置いて逃げるなあああああ!!（長男）

「つつつても、実際どうなんだい?」

『ちよつと待ってくれ……あつ、見つけた。森の奥に反応がある。二つ……しかもこれはサーヴアント反応だ!』

「サーヴアント……つてのは、アンタ等が説明してたあの超人共の事か。それが二となると……まあ、アタシとアンタ等ならやれる、と考えていいか?」

「確かに、ドレイクとカルデアの戦力があれば、サーヴアントが二

騎相手でも勝つ事は出来るだろう。しかし……

「そのサーヴァントが敵、っていう確証はないからなあ」

「あん？ どういうこった？」

「サーヴァントだから無条件に敵って訳では無くて。そもそもそうだったら俺達もキャプテンと敵対してるし。味方、敵、中立、特異点には色々な立場を持ったサーヴァント達が居る」

「……成程ね。そりゃあ厄介なこった」

だから『こんにちは、聖拳『月』！』とはいかない訳ですね（震え声） 実際中立のサーヴァントに喧嘩吹っ掛けた挙句、それがトップサーヴァントだったらそれだけで戦力が激減する可能性もあります。ソースは第七特異点にて、最強クラスの善神相手に戦力が整ってるからと言って『よっしゃ！ RTAしたろ！』とか高をくくってゴミカスみたくボコボコにされた挙句永遠ルチャENDに追い込まれた俺氏。

『場所は特定できてるから、何時でも行けるけど。どうする船長？』  
「行かないって言う選択肢はないよ。食料、船の修理材、色々必要な物を揃えなきゃならんって言うのもあるし、そいつらが敵かどうかも見極めたいからね。引き込めそうなら引き込みたい……違うかい？」  
『コレクト！ という事で我々カルデアも、最大限協力させてもらおう』

∠ダ・ヴィンチの言う通りである。現地のサーヴァントを味方につけて、戦力を増やして戦いを優位に進める、と言うのはカルデアの基本方針だ。ここで一気に二騎を味方につけられるなら、これ以上のラッキーは無い。

「ええっ!? や、やっぱ行かないと駄目すか!？」

「馬鹿野郎！ アンタ等海の男がそんなビビり散らしてんじゃないよ！」

「ヒイヒイヒイ！ すいませんすいませんやりませす！」

なあホンマ情けない……ボンベ君を見ろよ！ もう『何言っても無駄だな』って悟って彼方を見つめてるんだぞ！ お前らもそれくらい諦めが良くなるんだよあくしろよ。勝負を諦めないくらい諦めが良

くなるんだよ（意☆味☆不☆明）

〽そうして数分……否、オルタズの諍いを立香が収めるのにかかった時間を加算して、十数分後。貴方達は、反応があつた森の奥を目指して進んで……

「——ええい、さつきから多すぎなのよ！ このっ！ 裾引つ張つてんじゃない!!」

「サルやら狼やら、妙に強い野生動物がこんな……！ 尋常じゃないぞー！」

「キヤットには聞こえる、『女神を守れ』というビーストハウリングが。こやつらは既にファンボーイ、熱量は極限レコンキスター！」

「獣の狂信者とは、悪い冗談だ……この先のサーヴァントの仕業か」

〽——居たのだが。森に入った途端にコレである。どこからともなく現れる獣たち。種類は千差万別、見かけた獣は疾うに百を超えている。幸い、大して強くもないので適当に追い払うだけで済むのだが……

やーちよつとこつち来ないで！ あつぶえ、ホモ君が肉体派で助かった……つい殴り飛ばしてしまいましたが、ムービー画面からシームレスに操作可能になるのはマナー違反だと思えます（半ギレ）

しかしマジで四方から獣畜生が迫ってきますね。ジャンヌが愚痴りたくなるのも分かる気がします……オラアツ！ お手ツ！（右フック） お代わりツ！（左フック） 躡ツ！（右ストレート） 日光観光ツ！（アッパー） 見ざるツ！ 言わざるツ！ 聞かざるツ！（右右左コンビネーション） 左右確認、ヨシツ！

「——へっ！ 鈍いぞ、ワンコロ！」

「先輩、油断は禁物です！ 一発で逃げてくれますが、四方八方から来るので一瞬の油断が命取りになります！」

「分かつてるって！」

そしてキルレシオ……ならぬ撃退レシオが跳びぬけて高いのが其処の藤茄子コンビですよ。マシユの盾でバツと纏めて吹っ飛ばし、その生き残りを藤丸君が殴り倒す。良いコンビですねえ！ 将来アイコンタクトだけでやり取りできてそう（満面の笑み）



そんなホモ君はと言えば、香子さんからの援護バフが今入りましたので……狩りの時間だオラア！（怒涛攻勢）それ以上はいけない、と言われても！ 君達を殴るのをやめなさい！ 泣いても殴るのをやめなさいよりはマシだと思います（小並）

「マスター、前方！ 急いで突破してくれ！ その辺りに敵が集中して来てる、一旦離脱しないと危ない！ 香子も、早く！」

「デオン様、申し訳ありません……！ マスター、参りましょう！」

〈頷いて、貴方は香子をひよいと抱え上げた。はえ？ と困惑の色を隠せない香子だがしかしそんな事を気にしている余裕はない。急いで真つ直ぐ走り出し……ついでに低く突っ込んで来た狼を前蹴りで打ち落とした。〉

そしてデオン君ちゃんから前進指令。囲まれるまで暴れてるとか周り見とけハゲ！ 数が多いからしつかり対応してないと死んじやうダルルオ！（情緒不安定）とか脳内漫才やってる暇はないので、取り敢えず狼君は伏せ（暴力の姿）

〈——貴方が前進し、突き抜けたその先には、既にキャットとセイバーが、更なる突破口を開いている所だった。〉

「む、ご主人が一番槍か」

「急いで先に行け。どうやらこの先には獣共が居ないらしい……恐らく、この獣共をけしかけた親玉が居るのだろう」

「安心するがいい。ソロ活にはせぬ。あつと言う間にパーティーメンバー全員が揃った」

〈頷いて、その先へと走り出す。それに続き、立香とマシユが、続いてドレイクと海賊たちが抜けてくるのがちらつと見える。前衛組は殿として残ったようだが、彼等なら大丈夫だろう……とか思ってる内に、全員貴方達の隣を並走していた。〉

「——全く、オルレアンじゃ分からなかったけど、こういうサーヴァントだったのね、バーサーク・セイバーって。あんな獣でも幻惑して逃げ切れるとか」

「あの時は君が暴走させていたんだろうが。本来は攪乱なんかを得意とするサーヴァント何だよ。次は私の使い方を間違えないで貰いた

いね。元マスター？」

「もう二度とやらないから安心なさい」

どうやら、デオン君ちゃんの宝具を炸裂させて離脱した模様です。確率的に低いとはいえ、性別動物関係なく通じる有能宝具だからね、とうかデバフが高確率的中敵がガバガード衣だどどんな高難易度もこんな(あいまい)緩くなっちゃいますからね。笑っちゃうぜ！

「お見事です！ デオン様！」

「ふふ、ご婦人に褒められて悪い気はしないね。ありがとう、シキブ」  
　　貴方も、流石俺のサーヴァント、お見事……と言おうとして、だがその動きを止める。何者かが藪をかき分け、貴方達の前に出て来たのが、がざりと鳴った音で分かったからである。

「——来たわね……私がこんな事する羽目になるなんて。目が覚めたら、とんと文句言ってあげないと」

お。この声は。前特異点でも聞いたボイスですが、しかしちよつと声の調子が向こうより勝気、というか活発的と言うか。そんな感じがします。どうやらこの特異点の初の野良サーヴァントに遭遇した模様です。

「あ、貴女は——」

「悪いけど、ここから先は通さないわよ。通るって言うなら……私の下僕になってからにしないさい。この無礼者共！」

　　——その少女は、輝くパープルの髪を二つに括った、実に美しいサーヴァントである。普通なら一目見ただけで骨抜きにされてもおかしくないであろうが……しかし、貴方はその姿を見ていた事があつたせい、耐性が付いていたのだ。

　　……ステイン？

　　……特異点を跨いで登場とは、随分と出たがりなんだなあこの人。  
　　メメタアツ(カエルの潰れる音)

　　と言った所で今回は此処まで。ご視聴、ありがとうございました。

## 傷付いた雷光 その二

皆様こんにちは、ノンケ（七色水着少女）です。宝具を初めて見た時、真面目な話ですしそしてクソ失礼な話ですが『おっ、コレはバカの発想かな???'』と思ってしまうましたよね。綺麗だけど。

前回は、未開の島に謎の巨人の足跡を見た！ 森を切り開き突き進む取材班を阻む様に立ちはだかる無数の獣たち！ 彼らの妨害を、現地案内ガイド、そして暴力を得意とする取材スタッフの協力の先に、伝説の女神が降臨する！

〽——ここから先は通さない。言葉の意味を問う暇も無く、彼女は構えた弓に矢を番えて此方へと……というか、貴方ただ一人を狙って引き、放ってきた。しかしその仕草が其処迄素早く無かつたのと、貴方自身の反射神経が動きを上回り、何とか躲す事も出来た。

「ま、マスター!? 大丈夫ですか!」

〽だ、大丈夫。危ない、何とかなった……しかし

〽いきなりの弓とは、随分手荒だな……ステンノさんよ

いやあ、アレ食らってたら間違いなく完全に何でもするようになってたと思います。そんな事したらホモの格好の餌食になっちゃうだろ！ 皆『ん?』『ん!?』『ンンン!?』『今なんでもするって……』『拙僧は聞き逃しませんでしたぞお!』とかなるに決まってるんだ。俺は詳しいんだ。

あ、それとその方ステンノ様じゃないんですよホモ君……よし、ここはあえて煽る為にも選択肢下で行きます（愉悦顔）

「——私は私<sup>ステンノ</sup>じゃないわよ！ 適当な事言っ私を惑わせようとしたってそうはいかないんだから！ そのハゲ！」

〽……コレで特異点でのハゲノルマは達成しただろうか。等と考えながら、貴方は目の端の涙を振り切った。哀しくなんてない、哀しくなんて無いんだ、と自らに言い聞かせながらも、彼女の言葉の意味を考える。

〽え、だって……何処からどう見てもステンノ様ですけど。

〽寧ろそれでステンノ様じゃないって一体誰なんですか貴方。

知らないのですか……!?! ステンノ様と双璧を為すサーヴァント界のアイドルと呼ばれるお方。寧ろ攻撃性能で買われてしまつてステンノ様を超えて、アーチャーサーヴァント界限でも飛びぬけた採用頻度を誇る……この方を!?

「アンタ等に教える必要ないわ。ここで私の前に倒れるのよ! 喰らいなさい! 特にその男二人! あの子には近寄らせないわよ!」

「完全に名指しなのが解せない、と思つたら、何故か立香迄狙つてきている。ここに来ている男二人が完全に狙い撃ち。しかし、迂闊な事はしないでほしいと、どうしても思つてしまうのは仕方ない。

「ふん、そんなひよろ弾で狙つてくるとは……挑発している様な物だな。マスター、切り捨てて構わんな」

「ちよつ!?! オルタ!?!」

「――矢を一閃、切り裂いたのは、セイバーオルタの黒い剣。貴方は兎も角、立香のサーヴァントの二騎は何方かと言えばあまり容赦が無いタイプのサーヴァントである。敵に対しては頼もしい彼女達二人だが、こういう状況では些か相性が宜しくない。

相性が宜しく無いどころの話ではないんですけど（ド正論）喧嘩売つたら即処断を地で行く方ですよ? あくもくどうすつかなあ（この致命的な相性）俺もなあ……多分どうしようも無いと思うんですけど。それにこちらの王だけじゃなく大炎上ドラゴンウィッチ迄いるって言う。マズいですよ!

「くっ……!」

「先に仕掛けたのは貴様だ。ただ無様に死ぬが良い」

「待つてオルタ待つて!?! 早すぎるから! 話が! せ、せめて手加減して!」

「案の定、黒い大剣を構え、ズン、ズンと足音が聞こえそうな歩き方でステンノ……? へと迫っていくのが余りにも迫力があり過ぎる。多分、このままでは本当に切り捨て御免になるのは明らかだ。立香が彼女の目の前に立ちはだかるのも仕方ない。

「何故だ。アレだけの数の獣をけしかけて置いて、敵意が無いとは言わせんぞ」

「あ、あるかもしれないけど！ でも、俺達を狙った刺客なら、あんな表情はしないと思うんだよ！」

＜そう言って振り返る立香。その先のステンノ（？）の表情は……余りにも必死に過ぎた。汗をかいて、口元をきゅつと引き締めて、震える手で矢を番える。自分達を狙って、仕掛けて来たにしては、余裕が無すぎる。

非常に申し訳ないけど勃起するくらい可愛いと思った（下衆並感）可愛い女の子がああいう表情するのが良いんですよ！ 因みにコレを友人に朗々と語った所、中学生来の友人を一人失う事になりました。哀しいなあ……

「……新兵であれば、あんな表情程度幾らでもするが」

「サーヴァントでしょ!?! 新兵とは訳が違うよ！ と、兎も角、一旦、一旦待つてお願い！ ろ、ロマニからも何か言ってくれ！」

『ええっ!?! 僕ウ!?!』

＜自らのサーヴァントを止める為とは言え、ロマニを頼るといふ暴挙（極限なまでに失礼）に出る程に、今の立香は追い詰められているようである。流石にセイバーオルタ相手は厳しいどころの騒ぎではない。

『ちよっ!?! 藤丸君!?! 藤丸君!?!』

「Dr. 何か、私にあるのか」

『えええっ!?! い、いやあ、そのですね……あのですね……げ、現状を考えれば、もし敵意を持つてたとしてもこっちに引き込めれば戦力になるから無駄な殺生は避けた方が良くないんじゃないかなあ〜後そんな綺麗な子をズンバラリンとするのは見たくないかなとか』

ドクター頑張つて（他人事）ちよっところにいるホモハゲではちよつと、立香君のサーヴァントを御せないし……ホモ君のサーヴァントはコミュ力不足のハゲチンピラにも優しい初心者用みたいな優しいサーヴァントしかいないからね、しょうがないね。やっぱりオルタ系を御せるのはコミュニチート藤丸君なんだよなあ！（露骨過ぎる主人公よいしょ系投稿者）

「……!」

「そ、そっちの、えっと、ステンノさんのそっくりさんも！ こっちは、其方を攻撃する意思はない！ ちょっと、会いに来てただけなんだ！ 少しで良い、話を聞いて欲しいんだ！ 頼む！」

「そう言つて、ドクターに一瞬、セイバーを任せた立香が、少女の前に出る。少したじろぐ少女に対し、貴方は、何か説得できる材料がないか、頭を全力で巡らせて……思い出した事があつた。もし、彼女が、本当にステンノではないのなら……」

「メドゥーサ、と言う名前に心当たりは!?」

「メドゥーサ、と言う名前に心当たりは!?」

「……お姉さん。妹さんは此方でお元気にしてますよ。っと、ここで必死に頑張る藤丸君を尻目に選択肢。上にしても下にしても大して変わらないように見えますが……分かれてるって事はそういう事ですよねえ(ねっとり) ここはじっくり、舐め回すように選択肢見ていきますか。」

「上の選択肢はあ、非情にシンプルで、非情に美味しい……(単純すぎる感想) 彼女もステンノと同じメドゥーサちゃんの姉妹なら、もしかしたら反応するのではないのでしょうか(迫真棒読部)」

「で、下の選択肢は……おっ?(嗅覚) これはっ! 匂い立つなあ……見えるぞ、彼女が『っ! メドゥーサに何したの!? アンタ等! 脅す積り!?!』とか言い出して苦悶の表情を浮かべる未来が……コレは曇らせ隊大歓喜ですねえ……(ニッコリ)」

「メドゥーサ、と言う名前に心当たりは!?」

「い、妹さんはお元気にしてますよ！」

「ま、上なんですけどね(真顔) そりゃあ交渉するのに相手を脅すのは最悪の手段ってハッキリ分かんだね。エンジヨイするんだったら平和的な解決する方が良いに決まってるんだよなあ!」

「メドゥーサ? アンタ、メドゥーサを知ってるの?」

「喰いついた。と貴方は内心ガッツポーズを取った。そこから、彼女は自分のサーヴァントとして良い関係を築けている、カルデアで様子を見ている彼女に誓つて、貴方に手を出す事はしない、と貴方は彼女に語った。」

「……一っただけ聞いわ。あの子はどうしてここに居ないの」

「ちよつと疲れが出てしまっているんです。」

「嫌な予感がすると全力で辞退しました。」

「コレは下です（即答）」

「ちよつ!? 康友!?!」

「——ああ、本物ね。間違ひなく駄妹だわ。ふーん、そうなんだ。今度会ったらしつかりとその辺りを根掘り葉掘り聞かないとね……!」

「此方に対する敵意が失せていく。どうやら説得には成功した模様だ。その代わり、自分のサーヴァントを叩き売ってしまった気がするが……しかし、これは仕方ないと判断する。今はそれよりも、言葉の意味を訪ねなければならぬ。」

「——この先は通さない。あの子には近寄らせない……今、此方で観測した所、君の奥にサーヴァント反応が見られた」

「……」

『その反応が、若干弱まっているのも分かっている。傷ついているんだとしたら、僕らで治療が出来るかもしれないんだ。信用して、通して貰えないか……えつと、貴女は……』

「——エウリユアレ、よ」

「その言葉に、彼女は少しためらった様子を見せてから……自らが出て来た藪の奥を一度見つめて、ゆつくりとその場から退いた。彼女——エウリユアレに視線を合わせれば、力無く頷いて。それを確認してから、そつと、藪をかき分け貴方は先へと進む。」

「まあ、ここに彼女が居たんですから、凡そは想像つきますよね。この先に居るサーヴァントは。まあ彼はなんだかんだ言つて頑丈だから大丈夫やろガハハ（フラグ）」

「——そして、其処には……体の半分が焼けただれた、浅黒い肌の大男が、力無く横たわっていたのだった。」

「……ファツ!? うしくん!? マズいですよ!?!（掌グレンラガン）」  
「どうしてこんな事に……次回、ちよつと事情を彼女から聞いてみましょう。ご視聴、ありがとうございました。」

## 傷付いた雷光 その三

皆さんこんにちは、ノンケ（謎のヒロインZ）です。このマイナーチエンジキヤラ、まさか後に霊衣と言う形で出てくるとは思わず……。だからこそ霊衣と言うシステムに心底感謝した俺氏です。一番好きな霊衣はネロちやまの体操服です。

前回は、本来エイリーク氏が居たであろう島に、まさかのエウリュアレ様が上陸。ホモ君と藤丸君を狙いました。そのまま下僕になっても良かったんですけど、しかしながら人理修復が出来ないので頑張って耐え抜きました……。牛くん!?（唐突）

う、牛くんがヘラクレスに出会ってもいないのに散々たる有様に……。誰が一体こんな事を！ いや、やった犯人は凡そ分かるんですけども。

「こ、これは……」

「……アステリオスは、私を庇ってこうなったのよ。霊核にこそダメージは入ってないけど重症な事には変わらないの……。本当に……馬鹿な子よ」

∠そこに横たわっていた巨大な男……。アステリオス、と呼ばれた彼は、酷い火傷を負っていた。サーヴァントであれば、魔力があれば回復するのだろうが、野良のサーヴァントでは回復もままならないのだろうか。

「私を庇った、って？」

「……そもそも私達は、元々は別の島に居たのよ。けど、ある時、可笑しな目玉の塊みたいな化け物が現れて……。無差別に島中を破壊してきて、そこからこの子と一緒に逃げ出そうとして……。けど、逃げきれなかった私を……。アステリオスが……」

やっぱりな♂ やっぱり許しちゃいけないあのクソツたれ目玉野郎（素直な暴言） しかし、そこでアステリオスがやられたとすれば、ここに来るなんてまず無理だったと思うんですけど、どうやって……

「……それでも、アステリオスは……。必死になって、泳いで、私を、乗



せて……傷に怪異水は染みるでしょうに……つらく……ない……なんて……わかり、やすい……うそをつ」

＜そう言つて泣き崩れるエウリユアレは、ステンノとはそっくりの格好をしていても、全く違う少女なのだという印象を貴方に抱かせる。必死になって、彼を守っていた理由もコレで分かった。

◇——ドクター、カルデアの礼装の回復でこの傷は癒せるかい。

◇最悪香子さんの宝具を使うしかないか……ドクター？

最悪でもなんでも治せるなら何でもするに決まってるんだよなあ!? おう来いやホモ共、今だったら全て受け止めてやるぞ（なんでも受け止めるとは言っていない）

『——大丈夫だ。二人の礼装を重ね掛けすれば行ける。霊核に至っていない傷ならね。安心してくれ女神エウリユアレ。彼は、必ず僕たちの手で癒す』

「……ホントでしょうね」

『女神に嘘は吐かないとも。二人共、準備を』

＜貴方と立香は頷いて、アステリオスの傍に近寄った。礼装の回復機能を起動させれば体中にあつた火傷の跡が、あつと言う間に薄れ、消えていく。カルデアの技術の結晶は伊達ではない。そして、傷が塞がった所為か、その眼が、薄く開いたのが分かった。

「……う」

「アステリオス！ 大丈夫!？」

「えう……りゅあれ……?」

「もう！ 馬鹿なんだから！ 無茶して！ もう！ このっ！ このこのっ！ 二度とあんな事するんじゃないわよ！ 次やったらホント！ オシオキよっ!」

メツチャ嬉しそう（小並感） 後アステリオスの巨体にポカポカ両手をぶつけてるエウリユアレちゃんグツソ可愛いのもう少し見つけて居たいと思います。

「……姉御、話聞かなくていいんですかね」

「野暮な事言つてんじゃない。今は、そつとしておいてやんな」

「んー、まあ、そうですね。流石にコレに水差す程、俺らも人でなし

「じゃないですし」

「——で？ マスター、話聞いた方が良いんじゃない？」

「二人でなしが居たあつ!？」

うーん(棒読み) 邪ンヌちゃんさあ……まあ、確かに話が進まないから、突破口を開くのは良い事かも知れないけど、それにしたって流れのぶった切りの勢いよ。もう一刀両断とかそのレベルじゃないでしょ。

「い、いやあ、まあそうなんだけど……」

「つたく、なに遠慮してんのアンタ。元々からそいつ等を引き入れられるかどうかを確かめる為に来たんでしょように」

「……もう少しくらいあのままにしておいてあげたら、と思わないでも無いんだけど」

「何言ってるのよ。面倒はさつさと済ませて、後は二人きり、つて方がいいでしょうよバーサーク・セイバー」

〈……驚くほどの正論に、場が微妙な空気になるが……しかし、そこから勇気をもって先ずマッシュが切り出した。

「あの、お二人共。お邪魔して大変に申し訳ないのですが、少しばかり、お時間を頂けないでしょうか」

「……そこの黒いの、嫌いよ。全く……まあ良いわ」

「くっ……!?! だつ、誰が黒いのですつてえ!?! このガキい!」

「ふっ、くくくっ、落ち着けそこの黒いの。凶星だからと言って余り威圧してやるなよ」

「アンタもよ」

「……!?!」

何だこのコント!? さっきまで凄い威圧感を放っていたセイバーオルタ迄完全オチ要因に! こ、これがFGOの魔力というものなのか……! 違います(断言) そんなクソみたいな魔力持つて……いや持つてるな大分。ギャグ落ちの魔力とか言う悪夢。多分カニフアン以来の悪夢なんだよなあ……そしてそっからさらにパワーアップしたグラカニとかいう核爆弾。たのしかった(脳死)

〈一つ、溜息を吐いてから、改めてエウリュアレはマッシュに向き直

る。先ほどアステリオスに泣きついていたのが嘘だったのではないか、と思われる程に余裕のある表情で此方を見つめている。

「要するに私達に協力しろっていうんでしょ？ 嫌よ」

「そ、そこを何とか！」

「ふん、アステリオスを治したからって、あつさりと協力して貰える、と思つて居るのが本当に浅はかね。まあ、少なくとも、話を聞くだけはしてあげるけど」

「——えうりゆあれ、だいじょうぶ、……？ けがとか、してない」

＜しかし、そんな彼女の態度を一変させたのは、コレは交渉決裂か……？ という会話にスルッと割り込んで来たアステリオスである。その若干おぼつかない声を聞いた途端にエウリュアレは、ピタリと停止した。

おやどうなされましたエウリュアレ様？ 止まるんじゃない！

犬の様に（ry！ 近くに居るのは牛くんだけだね（大爆笑） なんだよお、アステリオスに対してクソ雑魚ナメクジじゃねえかお前ん女神い！

「……あー、大丈夫よアステリオス。あの、今はこっちの奴らとちよつと話をしてるからもうちよつと待っててくれないかしら？」

「だいじょうぶ、ほんとう、に？ ああ、よか、った」

「うんうん。あの、大丈夫だから、そんなギョつてしなくてもいいから」

＜……恐らくは、此方に舐められない様に、女神としての威厳を見せようとしたのだろうとは思う。ステンノも、プライドの高い女神ではあつた。しかしエウリュアレの場合はアステリオスが傍にいた。

「それ、で。そのの、ひとたち、は？」

「あー、アナタを、治したやつら。別に気にしなくていいわよ。そいつらが勝手に治したんだもの……で！ 話を戻しましょうか。私はそもそも戦える訳じゃないし、この子は病み上がり。そんな二人を戦わせようっていう……」

「——たすけて、くれたのか。ぼくを。えうりゆ、あれ。おれい、いわなきや」

「ああうんそうね取り敢えずお礼は後で良いから」

「で、でも。ぼく、おれい、なんていうの……はじめて、だ。なんて、いうんだっけ。えうりゅあれ、は。もうおれい、いったんだもんね。ぼくも、ちゃんと……」

「だあああああもうありがとうって言うのよ良いわよ良いわよ協力してやるっての何よ私がバカみたいじゃないのもう！」

〈彼を相手に、エウリュアレは全く、女神らしい態度を保っていない。まるで無垢な弟にたじろぐ、姉の如くである。〉

何だこのコント!?(二天一流) ほ、ほんへよりエウリュアレちゃんがアステリオスに甘い……!! まあ命がけで守って、頑張つて海を渡つて、起きて尚、エウリュアレちゃんを気に掛ける小さい(概念)ナイトさんだからね。ぽつかぽかだ! 一気にあつたまるぜ、これ!(ハートフルFGO)

「ううううあすてりおすのばかあああああああ」

「? えうりゅあれ、どうしたの? おれ、なにかした?」

「あーいや、えつと……アステリオス、で良いのかな。君は何もしてないと思うから大丈夫だと思う。ただ、そつとしておいてあげて」  
「??」

〈どうにも特異点とは思えぬ程に、緩んだ空気が、木々の間、彼が寝ころんでいた寝床には漂っているのである。〉

小首を傾げる牛くんが可愛い所で、今回は此処までとなります。エウリュアレちゃんと牛くんを味方に付けられて、狂いそう……! (歓喜に咽ぶホモ)

## 王の領域へ その一

皆様こんにちは、ノンケ（巖窟王セレクト）です。水着霊衣のなかでは多分一番好きですよ……とか思ってたんですけど、その次にエミヤと蘭陵王の霊衣が来ちゃってね。上位争いですよ今の所。でも上半身裸でもカッコいいのは反則だよ巖窟王。

前回のうらすじ（形式変更） エウリユアレとアステリオス君が、仲間になった！ しかし仲間になるまでは、カルデアの誇る最強クラス初期礼装が活躍したり、エウリユアレがカッコつけようとしてアステリオスのお陰でどうにもならなかったり、色々、ね。

「——じゃあやっぱり。アンタ等は、この地図の島から来たよ。間違いないね」

「ええ。元々はこの子……アステリオスが住んでいた迷宮があつて、そこで私は保護して貰っていたのよ。あの島、色々元から危ない奴とかもいたから」

「で、目玉の化け物が現れた時に逃げ出して来たよ」

「そうよ……暫くは、アイツの攻撃も凄いでたけど、最終的には追い出されて。つたくアステリオスの迷宮諸共ぶちこわしてくるとか、何なのよあの目玉！」

「彼……アステリオスの別名は、ミノタウロス。伝説の迷宮の怪物という事だったのだがしかし、先のエウリユアレとの対応と、元々メドウーサと言う神話の女怪が存在するカルデアである、なんてこたあ無かった。

「しかし、あの伝説のミノタウロスの迷宮も吹っ飛ばすなんざ……もう驚き過ぎて何も感じなくなって来ましたよ、俺は」

『……僕たちとしては、サーヴァントの宝具ぶち壊しの事実にひっくり返りそうだよ』

『宝具はね、伊達じゃないんだ……あの目玉の柱は相当だったのが確定だよ』

出会う前に確認する柱の目玉の能力。アイツ等、真面目な話サーヴァント以上の神秘持ちのぶつといモノ♂ですからね。直径何メー

トルあるんだあのぶつといモノ♫……

「だ、ダ・ヴィンチちゃん。ドクター、大丈夫ですか？」

『……うん。大丈夫大丈夫。ちよつと常識が揺らいただけだから。しかし、それ程のレベルの神秘を持つとなると……本当に限られてくるね。そう言った存在が』

『それこそ神か悪魔か、なんちゃって』

『レオナルド、冗談はやめてしつかり考察しよう』

間違つてはいないんだけどなあ。神か悪魔か……成程、すなわち神にも悪魔にでもなれるマジンガーだな（確信） ZかZEROによつて規模が違います、まあ人理焼却程度ですしZでしょう。ZEROが出張つてきちゃったら人理修復どころか初手人理定礎完全改変でどうしようもなくなつてしまつてしまいますからねえ！

「それで、その目玉野郎が大暴れしてた時、船で大挙して押し寄せて来た奴らは居なかつたかい？」

「いたわよ。馬鹿みたいな数の船でどんどんどんどん。なんか、二人組の女が来ててなんか海賊っぽい恰好で。沢山の兵士が、そいつらの周りでなんか歓声上げてたけど……でも何日前かの事なんて分からないし、今どうなつてるかは分からないわよ」

「……二人組の女海賊、それは間違いないかい」

「ええ、真つ先に島に降り立つてたし」

「二人組の女海賊、と言うのはアン・ボニーとメアリー・リードの海賊コンビだろう。その事を聞いたセイバーとドレイクの反応は、実に劇的だった。」

「——成程ね。コイツあ最高だ」

『何かわかつたのかい、キャプテン』

「フン。これで分からない方がどうかしている。どうやらイスカンドルは最適解を選んで攻勢を仕掛けた様だな」

「どういう事だ？（KRYUちゃん）」

「……アンタ等だけ理解してないで、説明なさい。マスターちゃん達もポカンとしてるでしょうよ」

「確かに。お前は兎も角、他を置き去りにするのは些か宜しくないか」

「おい、私は兎も角ってどういう意味だ。燃やすわよ」

「今、再びのオルタバトルが開始される前に、先手を打って口を開いたのはドレイクであった。彼女は、オルタ達の激突を遮る様に、彼女たちの間に態々進み出ると立香の方を向いた。」

「話を聞く限り、どうやらその島で指揮を執っているのは、女海賊二人の様だ。それだけの化け物を、総大将自ら率いず、部下に任せて自分は来ていない……それは何故か、と言う話だ」

「奴らは勝った後、ここら辺で幅を利かせ始めた。化け物を追撃しつつ、周りにも手を出す必要があった。それが何でかは分からないけど、総大将自らが指揮を執ってやってるんだろう。だが、コレはラツキーだ」

「……各個撃破のチャンス、って事？」

「総大将が孤立してる……討ち取る絶好の機会って事か。」

「うーん、コレはどっちが正解なのか……間違えたらセイバーさんに滅っ（魔力放出）されちゃ居そうなんで、丁寧に吟味をdヒヤア我慢できねえ首置いてけ！ 大将首だろうお前!?（選択肢下）」

「間違っではない、が。それよりも各個撃破の機会と考えるべきだろうな」

「そもそも前提として、アタシはこうなるとは想定していなかった。この地図の島に、向こうさんの総大将が率いて、あの目玉の化け物を叩き潰しに来てると思ってた。それだったらアレも叩き潰されてる可能性もあったと思うけど、どうやらそうじゃない」

「イスカンドルは、ヤバイ奴を叩ける時に叩かず、どこるかそれ以外にも視線を向けている。そしてこの広い場所をカバーする為に、戦力を分けているのが伺える。黒髭が戦力を率いて此方に来たのも、コレで説明がつく」

「戦力を分散して、イスカンドルは各地に放っている。」

「黒髭はさっきここら辺に居た、女海賊共は目玉の睨み、総大将も別の場所。そんな頭がバラバラになってる状態……絶好だ」

「我々が何処で暴れて居ようと、三者、又は二者が同時にやって来る事は先ずない」

「雑魚を始末して逃げ出して、雑魚を始末して逃げ出してを繰り返しても、逃げ出せる公算が高まる。島の状況を見て、どうするか決める積りだったけど、もうそんな必要も無いって訳だ!」

戦力の逐次投入とむやみやたらな分散は愚策って、それ一番言われてるから。あの戦上手のイスカンダルがそんな事するなんて想像も出来なかったけど……弘法もナントカのナントカ(ふいんき)って言うし。

「じゃあ、行き先は変更?」

「まあそうだね。例の島の近くは通るけど、狙いは奴らのナワバリの方に変更だ。シマを荒らして、やって来た奴らを順繰りに潰す。何時までも通じるもんじゃないと思うが、それでも今は攻めるチャンスだ……異論はあるかい?」

◇ドレイクが指し示したのは、地図に描かれた島とは反対方向にある、広大なエリア。征服王、イスカンダルが支配するエリアだった。『僕らとしては、その目玉の正体も知りたい所だけど……』

『まあキャプテンの方針に異論はないさ。第二特異点での借りを返すって言う意味でも悪い事ではないと思う』

「——という事で、此方にも異論ありませんキャプテン」

この辺にい……ガードの甘い、敵本拠地があるんですけどお……行きますせんか!? あつ、行きてえなあ(自己肯定)……行きましょうよもう(半ギレ) 行こう、行こう。そう言う事になった。

征服王の脇が甘いとか、絶好のチャンス過ぎるんでここはブツコミ一択。えっ? 罨である可能性? ヘーキヘーキ、ヘーキだから(コレが油断と、YOU揉んだ……)

「よーし! 野郎共! 次の行き先は決まった! となれば今夜中に船の補修を済ませるんだよ! 明朝、奴らのナワバリに出発だ! シマを荒らして、略奪し放題だよ! 気合入れなあ!」

「ウオオオオオオオ!!」

◇ドレイクの号令にて、海賊達が氣勢を上げる。そんな中で、少し所在なさげにしていたアステリオスと……その上に乗って話を聞いていたエウリュアレの元に、改めてドレイクは近寄った。



「んで、アンタ等は どうする?」

「どうするって。協力はしたわよ、私達」

「そうじゃなくて。アタシ達の船に乗らないか、って言う話さ」

「……はあ!?!」

協力する（船に乗るとは言っていない）でしたからね……ここで船に乗るって言うてくれるとありがたいんだけどな——俺もなー。

「なんでアタシたちが」

「なんだい、協力してくれたんだから、その序で乗ってくれたっていいじゃないか。そいつらの話を聞いたら、アンタ、そんなナリでも女神なんだろう?」

「誰がそんなナリよ! 喧嘩売ってんの!?!」

「ははっ、悪い悪い。まあ、アレだ。女神を乗せた船、なんてちよつと縁起がいいじゃあないかい。アタシ達はアンタを守る、アンタは船の縁起を担いで、序に、興が乗ったらちよいと助けてくれりゃあいい。それに、後ろのアステリオスも、大歓迎さ」

〈そう言われたアステリオスは、不思議そうに首を傾げた。

「ぼく、も」

「そうだ。迷宮の雄牛、伝説通りなら、良い体持ってるだろう? 水夫としても戦力としても上等じゃないか、ええ? アステリオス! アタシとしては、どっちも欲しい逸材だよ」

うるせえ! 行こう! (先行入力)

「……」

「ふん。いかにも海賊らしい、品の無い誘い方ね。そんなんで女神を誘うなんて——」

「——ぼく、いつてみたい。えうりゆあれ」

「ちよつ!?! アステリオス!?!」

〈振り向いたエウリュアレの視線の先、アステリオスは、不思議な表情をしている。大層困惑してはいるが、しかし僅かに、その中には笑みが見えた。

「たすけて、もらって。それに……こんなふうに、さそわれたの、はじめて、だった」

「あのね。そんなんでホイホイついて言ったらアンタ」

「えうりゆあれは、いや、なの」

「あーっ……ああもおおおおおお!!」

▽——その後、若干癩癩を起こしながらも巨牛に自らを肩車させた女神が『良い、女神を乗せるなんて感涙にむせび泣くのね!』などと  
言いつつ、船に乗る事を承知したのは、言う迄も無かった。

アステリオスに甘いでちゅねえ!?(煽り)

と言った所で、今回はここまでとなります。ご視聴、ありがとうございます。  
ございました。

## 王の領域へ その二

皆さんこんにちは、ノンケ（オリジナルイシユタル）です。髪が青色になったらもう凜ちゃんには見えなくなりましたが、逆にもう、某正義の味方に欠片も遠慮しなくていい気がしてくる気がする（貪欲ス пейシユ狙い勢）

前回のうらすじ（形式変更続行） エウリユアレ様に聞き込みを行って、現状理解したドレイク船長とセイバーさんがイスカンダル痛恨のプレイミスを指摘しました。兵へイ征服王鈍ってるう!?

——さて、我々ドレイクチーム、只今地図に載った島の近くを撫でる様に進んでおります。でもって今我々はどうしているかと言えば……

「——乗り込んで来るよ!! アステリオス! 迎撃任せる!」

「まか……せろ!!」

「頼むぜ! 用心棒!」

◁今、何名かが乗り込んだ一隻の影に隠れ、接近してきたもう一隻が既に真横に付けている。しかしそうして乗り込んだ兵士たちは、畏れに二の足を踏む事となった。ゴールデンハインド号には、剛腕無双の迷宮の番人が守りを固めているのである。

「なっ、何だコイツ……!?!」

「ふっと、べ!!」

カッキーン。うしくん、ここで敵船員を遥か彼方の空へとブレイクスルー。申し訳ないがパスポートを持っていないお方の搭乗はキャンセルだ。上半身と下半身を綺麗に切断しないだけ有情だと思って頂けると……あ、まーた無許可で立ち入って来てるし。そんな事しなくていいから（本心）

「怯むな! 続け続けえ!」

「両腕に一人づつしがみ付け! 船の船員はどれだけ多くても物の数ではない! あの化け物だけが脅威だ! アイツを集中して潰せえ!」

「誰が物の数じゃないだとオ!? 隙だらけだあ!」

〈確かに、船から降りてくる敵の動きは、今までの人間の兵士と桁が違う。まるで全員が鍛え上げられたプロボクサーの様に俊敏だ。しかし……そんな彼らでも、集団で囲まれて四方から拳銃を叩き込まれてしまえば、流石に耐えきれない。

「——がっ」

「きつ、貴様等あ!?!」

「アステリオスばかりに集中してるからだっつてんだ! テメエら!

お上品な兵士さん達に海の戦い方ってもんをご享受してやれ!

授業料は要らねえ、お前らの命と、金になる武器を置いていけや!」

大 乱 闘 ○ マ ッ シ ュ ○ ラ ザ ーズ 凄 い 凄

い、アステリオスに集ろうとした人たちを、さあ、ロープが下からグイッと引き摺り倒して、銃の鉛玉が顔面にドーン! (総統閣下) わあ、顔面がぐちゃぐちゃだあ……(震え声) 此方からは見えないんですけど、顔面に凄い数の鉛玉がぶち込まれてるんですよえ。

『む、向こうは大丈夫そうだね……さ、こっちはこっちで集中しよう』  
〈——一方、貴方達が乗り込んだ船の敵も、そろそろ数も少なくなってきた。そもそも、如何にサーヴァント擬き、とはいえその実力はそこまで高くない。一応、サーヴァント相手に攻撃が通る様に調整されている……程度のモノである。

「この……な、なんだ……剣、の、一振りで……」

「全く……つまらん。雑兵風情が、私の前に立ち塞がるな。散れ、消えろ!」

「ぐあああああつ!?!」

〈オルタが豪快な剣捌きで、残る敵を薙ぎ払う中、船の中をキャットが跳梁跋扈し、無数の爪の傷跡を、船、人体関係なく残している。沈まない様に手加減して欲しい、とは言ったが、本当に手加減しているのだろうか。

「あはははははははっ!」

「いっ!?!」

「ぎあつ……と、止める……そこの……毛玉……を、あ……う」

「ひいつ!? ど、どうなってるんだ、おい、アイツどこに行つたんだよ

!？」

「その壁だよ！ さつき壁際に弾き飛ばされたんだ！」

因みに、音は『ドゴン』『ベギン』『ドンガラガツシャン』って言う  
音声がガトリングみたく絶えなくガンガン響いております。そ  
の中に挟まる剣を振りぬくブオンって音も凄い耳に残ると思いまし  
た（傍観者並感）

「……集中って言っても、最初にジャンヌと式部さんが遠距離攻撃で  
崩してくれてからはもう作業だよねコレ」

『まあそれは否定しない。遠距離攻撃で陣を乱してから、機動力のあ  
る騎兵と十三港の歩兵で蹂躪する。お手本みたいな戦い方だと思っ  
よう。軍師経験者からしても太鼓判を押してあげよう』

『油断はできないよ。二人共敵の船の上なんだから……って言っ  
ても、その二人には力強い護衛が付いているからなあ。油断しても誰一人  
通れないか……僕らはもう一方に集中するかい？』  
『そっちの方が良いだろうね』

〈そうなのである。目の前の地獄絵図を何とか潜り抜けて、何とか  
侵入者を叩きだそうとしても、その次は護衛のプロフェツショナル二  
人である。実際、オルタに吹っ飛ばされる勢いで此方に切りかかって  
来た猛者も、マシユに叩き落される結果に終わっている。

あつ、目の前の人型の穴ってそう言う……オオン!? 効かねえぞオ  
ラア！ 正拳突きからやり直して、どうぞ。

「——ふん。十把一絡げ、だな」

「くああああ……実の所、眠くなってきたのである」

〈——そして大方の想像通り、キャット、セイバーの大暴れの結果。  
本当にあっさりと殲滅される結果に終わった。純粋な戦術で勝利し、  
しかも圧倒的なパワーを持つサーヴァントが各々の役割を完璧に果  
たした結果、この地獄絵図は生まれ、そして速攻終わった。

「船はこのまま放置で宜しいのでしょうか」

「いや、キャプテンがどれくらい物資を積んでるか確認しておけて」  
「……海賊の流儀をマスターに教えるのは些か感心できないんだけど  
なあ」

「<< そんな俺だつて別に海賊流に染まるつもりじゃあ……」

「<< オラオラ財宝と食い物を奪え野郎共！ チヤチャツとなあ！」

もう染まつてる！（手遅れ）　ホモ君自体がもう完成されてる様な  
蛮族みたいなもんやし……（目逸らし）　ホラ、見てください、前蹴り  
で敵の船のドアをぶち破るのがこんなに似合うマスターなんて他に  
居ませんよ。ホラ！　ホラ！　実際やつてるところやつて扉をブチ  
やぶつていくの、楽しいんですよ（蛮族の血）

「……やっさんは、その……」

「そうなつちやうよねえ……マスターはそう言うのに慣れちやうと  
やつちやうよね。気性的に慣れちやうよね。仕方ない、僕がブレーキ  
役を……」

「——マスター！　いけません！　あんまり乱暴するのは、めつ！  
です」

<<デオンが突つ込む前に、香子がその後について言った。香子の冷  
静な対応の仕方は、最早何年も何年も彼を支えて来たかのような慣れ  
を感じさせるが……実はまだ三か月ギリギリ経っているかどうかの  
付き合ひである。慣れすぎな気がしないでもない。

「居たなあ。ブレーキ役。既に」

「……もはや母親だよな。あそこ迄行くと」

「あつ、ちよつとシユンとした感じのやつさんが出てきました。どう  
やら無事に香子さんにお叱りを受けた模様です」

田舎の方に居るタイプの、オカンに叱られて『あつすみません』つ  
てなるヤンキーじゃんかよ……（震え声）　お前そんなナリしておい  
て僂げ系オカンに負けるとか、君じゃ話にならないから、主人公交代  
してきて……（ド無茶）

<<……優しく、ペン、と頭を叩かれただけでとても悲しくなつてし  
まったのはなんでだろうと。僂げ系美人にそうされてしまうと  
『あつ、やめなきや』と思つてしまうのはなんでだろうと。そんな事を  
考えつつ。

「もう、マスターったら……そんな落ち込んだ様にして、しっかり船内  
からいろいろ持ち出しているではありませんか」

「〜とはいえ、船内の食料の入ったらしき袋を、二つほど失敬しているのは最後までせめて蛮族を最後まで貫いた結果である。とはいえ、他には樽やらなんやら色々あるので貴方が盗……蛮族した物の数など微々たるものではあるが。」

蛮族するつてなんだよ（小さな疑問）

「お帰り、つてもう失敬した後だったか……」

「ま、まあ頼まれた確認に関しては終わった、という事で。船の物資の事に関してはキャプテンに任せて、我々はゴールデンハインド号に戻りましょう。また何時、敵の船が来るかも分かりませんし」

「〜——実際、ゴールデンハインド号がイスカンダルの領域に近づいていくと、巡回している敵の船と衝突する事が増えてきた。今回の衝突で、既に五回目。敵船に乗り込んで撃退するのも慣れたものである。」

「おつ、終わったかい！ 物資の方はどうだった！」

「潤沢でございまーす！ ドレイク様——」

「様はやめとくれー！ つし、野郎共！ 船に乗り込んで物資を奪えるだけ奪いな！ 砲弾に火薬、食料！ あつて困るもんじやないよ！」

「ウオオオオオオオオ！」

ヴォースツゲエ略奪……それは兎も角、どうやらホモ君達は既に敵の領域に侵入している模様です。というか、余りにもスムーズに略奪しているの草も生えない。海賊だからねしようがないね……

「船長、次はどうする？」

「んー、まあまた適当にブラつくしかないだろう。どつか目的地がある訳でも無い訳だしねえ。まあ目的地が無くても、こうやって敵をぶっ飛ばしてりや何時かは……」

「——姉御！ ちょっと来てください！ 此奴ら、ただの哨戒じゃありやせん！」

「〜これから先の展望など無い状態で、後どれだけ敵を叩き潰すのか。そんな事を考えていた貴方達の耳にボンベの声が聞こえてきたのは、そんな時だった。」

……と言った所で、今回は此処まで。次回はボンベ君が何かしら見つけたので、そこからですかねえ。さて、ただの哨戒じゃないというのは何なのか。



## 幕間の物語：イスカンドル 本拠地にて

「——ライダー。定時報告だ。島の中心の目標に動きは無し。今回は挑発行動を織り交ぜたがやはり無反応の模様だ」

「おう。ご苦労。しっかし、ここまで待ちに入られると、どうしようもないのう」

「仕方ない。それがあそこに自らを配置した理由だろうからな」

砂浜に設置された、特別大きなテントの中で。征服王イスカンドルは干し肉を齧りながら孔明の報告を聞いていた。彼にとって、どんな豪勢な料理よりも、趣向を凝らした料理よりも、新しい開拓を狙った料理よりも。こうして戦場で、シンプルなテントの中で、箱か、石にでも腰かけて齧る、干し肉が一番舌に合った。

贅を尽くした料理が嫌いな訳ではないが、結局の所、自分は戦の渦に身を置いているのが一番性に合っているのだろうと……そう考えた時、ふと眼の前の軍師はどうなのだろうと考えた。

「……どうした、ライダー」

「なあ坊主、お主、美食を極めようと思った事、あるか？」

「び……？　なんだ一体急に。激務で疲れているのか？　休むか？」

「いや、そうではないんだが。ふと思つてな。で、どうだ」

そう聞かれた孔明は、少し寂し気……と言うより、若干呆れも混じった決まりの悪い表情を浮かべ、少し考えてから口を開いた。

「期待していたのであれば生憎だが。葉巻を吸うのに慣れてしまったせい、食に関してはそのままで拘ることは無くなってしまったよ。まあ気に入りの店くらいはあったが」

「又ハハハハ！　そうかそうか！　なんだかんだ言つて似た物同士ではないか！」

こんな事を考える位には、疲れているのも、また確かなのかもしれない……と思考を終わらせ、改めて思考を切り替える。この特異点において、当初の予定はもう跡形もなくなっている状態だ。

要因は、色々ある。アルゴノーツに、来るカルデアへの対処の準備、そして抵抗勢力の存在と、彼らが秘する物。

「それと、例の抵抗勢力についてだが」

「ん？ 何か動きがあったか」

「ああ。いつも通りの動きだがなあ」

「では報告せんでも良いだろうよ……」

「仕方あるまい。報連相は戦術の基本だからな」

「余とてどんな報告も笑って受け止められる訳ではないぞ、軍師よ」

「思い切り顔を顰めて貰おうか。巡回中に三隻が被害を受けた。おまけに、被害は船のみ船員にほとんど被害なし。いつも通りマストと帆、船体の一部を狙って、修理可能なレベルで破壊している」

「だーっ！ またか！ ええいここまでゲリラ戦に徹されると逆に清々しいわい！」

干し肉を噛み千切りつつ、征服王は現代のサラリーマンの様に天を仰いだ。敵は自分達に被害を与えようとしているのではない、此方の手から逃れ、そして徹底的に此方への嫌がらせを行う事で、事態が収束するのを防いでいるのだ。

資源は無限ではない。有限の資源では、船を新しく拵えるのも一苦労だ。この海は広いがそれでも、何百隻と船を作れるほどに資源がある訳ではない。だからこそ、修復出来る船は修復して再び使い回す事で、限りある資源を節約しつつ、陣営を回していく必要があるのだが……

「修理した船も、そのままのパフォーマンスを發揮できる訳ではない……私の中に眠る孔明の知識を生かして、船の修理にも出来るだけの事はしているのだがな。全く、向こうには相当資源の運用に詳しい者が付いていると見える」

「——正直な所、聖杯に船の資材は頼っていたからのう……やられた！」

「使える資源は使うべきだが、しかしそれに頼り過ぎたというのは否定しきれん」

聖杯があれば話も違うのだが……しかし、自分達が所持していた聖杯は、突如乱入して来た女海賊に奪われたままだ。全てを聖杯に頼り切りにしていた訳ではないが、無くなった今、大きな痛手を被ったの

は確かなのである

「全く、陸とはやはり勝手が違う！ オケアノス、やはり余が目指した海とは別物とはいえ挑み甲斐があるのは確かだ！」

「お前が海を目指したのは闘争の為ではないだろうに」

「はっはっはっはっはっ！ 全くもってそうだがなあ！」

「それでどうする」

「——仕方あるまい。本拠地を開けるのは避けたかったが……余と、ティーチの奴の二人で追い込みをかける。余の膝元で、これ以上暴れられるのは勘弁を願おう」

敵は例の反抗戦力一つではない。そろそろ自分達を追ってくるであろうカルデアにも意識を割かねばならない。というより、今特異点で敵対している勢力は、全てカルデア相手の前座の様な物なのだから、ここで苦戦するのは余り宜しくないのだ。

「そうだな。と言うより、今までが消極的過ぎたのだ。お前らしくもない」

「まーそう言われちまうと、余も立場が無い訳だが……言い訳をさせてもらえるなら、この海と言う、経験した事のない戦場を見ておきたかった、というのもある」

「消極的どころか弱気な発言だな？ ライダー」

「馬鹿を言え。どんな征服者とはいえ無知では勝てぬ。地道な積み重ねを行って、その成果で戦での勝利を掴むのだ。かの黄金の英雄王ですら、個人は兎も角、群の戦ではその前提を覆す事は出来ん。いや、寧ろ奴こそ、そう言った手間は惜しまんであろうが」

「……それは確かにそうではあるがな」

故にこそ、かの提督三人の力を借りて、イスカンドルはかの戦で勝った。時期的に、決戦を仕掛けざるを得なかった時に、足りぬ経験を、現地の海を知る者達の力で補った。積み重ねを行えないのなら、それが一番だった。

「——しかし、その積み重ねは終わった。多少は、海での戦いにも慣れた。サーヴァントは成長せぬ、とは言いが。しかしこうして得た知見を活かすのも、紛れも無き成長と言う話だ」

「サーヴァントの成長は能力面での話だ。記憶やその経験値が成長等しないのであれば我々は当時の事以外、何も覚えられない木偶の坊だよ」

「全くもってその通り……まあそれで心配の一つは潰れた訳だが、もう一つはどうしようもないか、我が軍師」

「其方はもう諦めるしかあるまいよ」

「はあー……世知辛いもう。まさか、余が人材不足に悩まされるとは」  
王の軍勢をずっと維持するのは元から不可能である。臣下を一人くらい呼び出して統治を任せる、というのは不可能ではないが、結局の所、余り遠距離まで宝具が展開できる訳でもない。あくまで、嘗ての臣下たちは宝具の力によって呼び出されるのだから、宝具の縛りから抜け出す事は出来ない。

「いつそ、私が残ろうか」

「馬鹿を言え。お主が単独で残って、其処を狙い打たれば目も当てられん。ただでさえ戦力を分散しておるのだ、これ以上はいかん」

「しかしだな」

「それに……余らがこころへんをナワバリとしているのは、要するに監視網を引く為だろう。最悪、本拠地が狙われたならば、近くの兵を纏めて引っこ抜いて詰めさせるのも不可能ではない」

「最終手段だぞそれは」

一応、孔明とて、むやみやたらに自分達の支配区域を広げたかった訳ではない。今もイスカンダルを狙う勢力を監視する為の、網を広げる為だ。それがあからこそ、近くに敵が居たとしても、彼らがイスカンダルを直接狙う事は出来なくなっているのだ。

「だが、それを壊すという事は……」

「余を狙いやすくなる。だろう？　しかし、此方としては、霊脈上に設置した拠点を使い物にならなくなるのも正直厳しい事に変わりはない。余が自分を自衛出来る以上、向こうに自衛の戦力を割くのは当然ではないか」

「拠点は建て直せばいいが、お前は生き返らせる事は出来ん」

「なあに、貴様が傍に居る以上、そうそう死ぬことはあるまいよ！」

そう言つて豪快に笑うイスカandalに、呆れたように顔を顰める孔明……その孔明の元に滝の様な汗をかいて、息を切らせ、一人の兵士が走り込んで来たのは、そんな時だったのである。

「——コ、コウメイ様！ は……っはあ……緊急！ 緊急でございませう！」

「何事だ」

「つ、ぐ、はあ……ティーチ、提督……からの、連絡で……フランスス・ドレイクと交戦した、との事」

「そうか。その様子だと、目標は敵わなかつた様だな……」

——態々戦力を割いてまで黒髭を別行動させ、かの女提督、フランスス・ドレイクを追撃し聖杯を奪還する作戦。此方に所属しているサーヴァント三騎での作戦だ。まさかそれが失敗するとは……可能性として考慮はしていたが、低いとは思つて居た。

「不可能を成し遂げる女海賊、侮つていたつもりはなかつたが……」

「そ、その。ティーチ提督曰く、しくじつたのはフランスス・ドレイクだけの力ではない模様で……」

「……協力者がいたのか」

「はい。自分達と同じような存在が六人は乗つていて、どれも見慣れぬ異邦人との事」

——多くのサーヴァント。一瞬イスカandalに視線をやり、それに応えて頷く姿を見て孔明は確信する。遂に、来るものが来たのだ。しかも、最大の脅威と結びつく形で此方に対して牙を剥いた。

カルデアの襲来だ。

「ご苦労だった。少し休んでくれ」

「承知しました……ふう……はあ……」

テントの外へと歩いていく兵士を見送つてから、孔明は改めてイスカandalに向き直つて言葉を続ける。もはや一刻の猶予も無い事を悟つたが故に。

「——阻止するべきは、領海内の反抗勢力との合流、か？」

「一刻の猶予も無い。出るぞ。反抗勢力を叩き、アークの所在を確かめる。カルデアにアークを所持されれば実に厄介な事になりかねん」

— 征服王が、動き出す。

## 嘗ての大戦から その一

皆さんこんにちは、ノンケ（曲がれ……）です。いよいよここに乗せるサーヴァントが思いつかなくなってきたので、ネタが尽きた場合の、新たなアイサツが欲しい所ではあります。ところでふじのんつて和風美人の式とはある意味対極に位置するタイプの美人な気がしないでも無いです。でも欧州系つて訳でもない、『和風欧州美人』つて感じなんですよ。第三再臨の和装？ なんのこったよ（すつとぼけ）

前回のうらすじ（形式強行） うしくんに挑む哀れな一般兵士が居た。黒セイバーさんに吹っ飛ばされる哀れな一般兵士が居た。キャットに弾かれた哀れな一般兵士が居た。しかし一番哀れなのは海賊の皆さんに蜂の巣にされた一般兵士だと思った。

＜ボンベがドレイクに差し出したのは……紙片だった。それを持ったドレイクは……一気に顔を顰めた。

「……読めん！」

「へい！ 俺も読めません！ ですからなんか、特別な奴らなのかと！」

「馬鹿かお前は！ 相手と国が違ったら文字が違って読めなくても当たり前だろうが、もうちよつと考えないと脳味噌がスカスカになるよ！」

「酷いっ!?!」

＜何という酷い罵倒で沈んだボンベは放っておいて、ドレイクは此方に向けて振り向いたそして、その口から出た名前は……立香や、ここに居るカルデアのメンバーでは無く、まさかの。

「おい、ロマニー！ 聞いているか！」

『……うん、うん？ うええっ!?! ぼ、僕ですか!?! あっ、はい！ 聞いてます!』

ドクター！ 君の出番だ！ 少々荒っぽい手段を持つてお孫さんを半殺しにする位戦いながら檻から出しそう。でもそのポジションだと暗黒空間に塵となつてばら撒かれるんですがそれは。まあ終局

特異点が暗黒空間みたいなもんやし……

「アンタ、確か医者だけど、学者崩れだともか言ってたね」

『え、ええ一応ですけど、一応研究者でもありますはい』

「じゃあコレ、読めるかい？」

『えっ、と。読めはしませんけど解説は出来ます、はい』

「なんだハッキリしない！ 読めるか読めないかで返事するんだよ！」

『何とか読めると思いますハイ！』

くそのロマニの返事に、ヨシ、と一言呟いて、その紙をホログラムのロマニの前に堂々と差し出した。

「読んで内容を教えな」

『はい喜んでっ！ ダ・ヴィンチ！ キャプテンのオーダーだ！ 超

特急で行くよ！』

『私は例の一件の解析に忙しいからそっちはそっちで頑張っつてねえん』

『えっ？』

はえく……めっちゃ梯子外されて草も生えない。

『後、それ一見する限り大分訛りだとか個人独自の言い回しとか混ぜたタイプの古い言語だから解説するのちよつと苦勞するかもしれないけど、私はこっちで手いっぱいだから』

『……おのれレオナルドおおおおお!!! チクショウ！ ぼくひとりだつてできるもんね！ やっちやうもんね！』

ロマニが壊れちゃった……ホモガキみたい（無礼千万）ロマニのホモガキ化は需要ありそう（偏見）メスガキ化はもつと需要ありそう（世界の歪み）俺はガンダムだつて名乗る不審者に両断されそう（三重そう）

とはいえね。まあカルデアは優秀ですから。そんな昔の言語位あつさりと解説してくれると思うので、お茶でも飲んで待つて——

『終わったよ！！！！』（クソデカボイス）

ウオビツクリした!? 鼓膜なくなるからやめてく（震え声） とうかあの、アステリオス君がびっくりしてるんですけど。毛がバリツ



バリ逆立ってなんかフカフカ具合が十倍くらいになってるの笑う。

……と言うか笑わないとコワイ。アステリオスがビツクリした時点で、エウリュアレさんの目が一瞬で険しくなったんですがそれは……

「お、おう。お疲れ。早かったね?」

『怒りに任せたら大分早く出来ましたよ! 今表示できるようにしますんでね! もう少々お待ちいただければ幸いですよええ!』

「そうかい。あー、なんだ。まだ待ってないからそんな焦らなくても大丈夫だよ」

『お気遣いなくー!!』

◁かのドレイクが気圧される程のロマニの勢い。貴方の側に表示されているダ・ヴィンチは涼しい顔をしている辺りが若干物悲しい。完全に空回っているようにしか見えない。ダ・ヴィンチも仕事をしているのだから、仕方ないと言えば仕方ないのだが。

『こちらです!』

「おうご苦労さん。有効に使わせてもらおうよ」

『是非! 具体的には其処の人の心の分からない天才が嫉妬するくらいにガッツリ有効活用して頂ければと!』

「そ、それは約束できないけど」

でもって、ロマニが画面に表示した解説内容ですが……『巡回海域内で例の反抗勢力を発見。追撃したいが船員の疲労も限界なので、一旦陸に上がって疲労をどうにかしてからになる』と言ったような内容が書かれていますね。反抗勢力とは(哲学風)

「……私達、の事でしうか」

「恐らくは違います。マシユ様。この方々が巡回する海……すなわち、イスカンドルの領域の何処か。私達がここに入って来たのは、ここ数日です」

「例の、と言うには些か時間が足りんな」

「——成程ね。向こうが戦力を分散してんのは、したいからそうしてやる訳じゃなくてそうせざるを得なかったって事かい」

◁ドレイク曰く。向こうはその反抗勢力を見つける為に、四方八方

に戦力を派遣した。その結果として、自分の勢力圏を持つ事になったのだろうとの事。計画的な行動に見えなかったのは、実際に計画してやっていた訳ではないと考えればストーンと腑に落ちる。

「だとすりゃあやっぱりこっちに来たのは間違いじゃなかったね」

「どういう事でしよう」

「敵の敵は味方ってね。アイツ等が敵として探してる奴らを、こっちの味方として引きこめりゃあ上等だ。各個撃破がよりやりやすくなる」

ちな敵の敵は味方理論は別に明確な根拠がないガバ理論なんだぜ！ 皆は用法用量を守って正しく使おうね！ 因みにドレイク船長が言えばどんな理論でも状況に埒を開ける為のカギになるからドレイク船長だけは用法用量を守らずドバーツと限界突破しても許されるからそこは勘違いしないようにな！

まあそれは兎も角として、その敵勢力に関して、私二つの心当たりがあるんですけどもね。問題はドツチモドツチモ……結構、クセが強い事なんだよね。うん。

「良くやったよロマニ！ コレは解読してよかった！」

『そう言って頂けると幸いだよ』

「——でもって、そのお嬢さんに関しては私は特にサポートはしないからあんた自身で解決しなよ」

くえつ、と言ったその直後だ。ロマニのホログラムの前に立ったのは……間違いなく額に怒りのマークを浮かべた女神様である。何が有ったのか、と言いたくなるほどの鋭い視線だ。貴方は思わず一步退いて、ダ・ヴィンチに話しかけた。

くく……しばらくちよつと、ロマニの代わりに頼む。

くくロマニは暫くダウンするかもしれない。ダ・ヴィンチちゃんおねがいします。

あつ、ふーん……ロマニはもうダメみたいですね……

『はいはい。全くロマニも迂闊なもんだ。腹が立ってもちゃんと周りを見ないと』

「——ちよつとアンタ、いきなりあんな声量で怒鳴るとか、どういう積

り？ 私の耳を潰す積りなの？ ねえ。迷惑、って言葉を知らないのかしら？」

『えっ、いや、あの、そう言う訳では』

「どうしたのそのなっさけ無い声。さっきの音量は何処へ行ったのかしら？」

「——ここからしばし、ロマニはしつかりと絞られる事になるだろう事は想像に容易かった。自分に対しての無礼に怒っている、と言うように見えなくてもないが、アステリオスがビツクリした瞬間に表情が一変したのを見れば一目瞭然である。」

『あつ、あのっ……そ、そのですね……』

「怒りで我を忘れていた、なんて言い訳をする積り？ それが通ると思っているなら本当に愚かね。コレで医術を嗜んでる者、なんて名乗ってるの？ おこがましいと思わない？ どこぞの医神に恥ずかしいと思わないのかしら？」

『……すみません……』

「謝る声が小さいわね。もつと全員に聞こえる様に、さつきみたくはつきり言いなさいなドクター？ ねえ？」

「コレは触らぬ神に祟りなし。立香はマシユと楽しそうに話ながら自然とロマニから離れているので、貴方もそれに倣うべきかと思う。」

美人に怒られるのって一番怖いよね！ まあそんなロマニは置いておいてですね……今はホモ君がやる事も無いので、さて、近くに居たキャットを捕まえて耳でもモフリながらこの特異点に来てからの素材回収状況でも確認してみましよう（癒し成分補給）

「んん？ 何だご主人？ にやおっ!？」

「ヨシ！（確認完了） 確保。最近はね、エンジヨイ成分が不足している、と思つて居たので、ここらで補充を、と。敵をキツチリ倒してるので集まりは悪くないですねえ！」

「……あのマスター」

「ご、ご主人。いきなり積極的なのはキャットとしては♡高鳴るエクスタシー、されどは、話の流れからしていきなりぶった切りでキャラがブレているのだな？」

「良いのである。良いのである。と論しながら、キャットのさらさらとした髪感触やモフモフとした耳を少し嗜みながら出来る限り意識を逸らす。後で土下座でも何でもする覚悟なので、今は力を貸してほしかった。」

「良いんだよ別にエンジジョイプレイだぞ（言い訳） エウリユアレさん怖いやめてください……（本音）」

「ほら、もっとしつかりと言いなさい？ 言い訳でも良いわよ？ じっくり聞いてあげるから。今日は機嫌が良いのよ」

『はっ……はあっ……！』

『——はいはい、女神エウリユアレ、そこまで。此方の周辺探知に反応アリだ』

「——姉御おおおお！ 旗です！ 黒髭の旗が見えます！」

「そんなどうにも締まらない空気を切り裂いて、征服王のお膝元に近づいた事を改めて確かめさせるように、それは再び現れた。」

「メトメガアワー瞬間BBAだと気づいた！ リベンジマッチでござるの鉄火巻！」

「黒髭、再びの惨状である。」

「うわあ、イベントがハチャメチャに押し寄せてきてなんだか大変な事になっちゃったぞ。」

「そんなイベントを捌くのもプレイヤーの腕だと思うので、次回はキツチリ黒髭君を絞めていききたいと思います。ご視聴、ありがとうございます。ございました。」

## 嘗ての大戦から その二

皆様こんにちはノンケ（バニ王）です。薄い本出張率が余りにも高すぎるモンスターだと思えます。言い方は若干アレですけど、一から三まで、再臨がどれもこれも凄い可愛いのが悪い。そしてどのウスⅡ異本も股間に宜しくないんですよ……

前回のうらすじ（海賊上等） ボンベ君がドレイク船長によって沈められ、ドクターが大爆発を引き起こし、それに怯えたアステリオス君が大分フカフカになりました。そしてドクターがエウリュアレ氏に怒られている最中……まさかの黒髭氏登場。お前さてはオルレアンのデオン君ポジションだな？

『サーヴァント反応は……二騎！ 黒髭と、傍らに居た未だ正体不明のランサー。それに他の生体反応に関しても今までの船よりも多い。結構本腰入れて来たねえ』

「ふん、今度は随分とデカイ船で来たじゃないか……全員！ 準備しなあ！ 前回はいきなり乗り込んで来られたからね、次はそうはいかない。こっちの大筒、出来るだけぶち込んでやるってんだ！」

∠ドレイクの号令に応え、船員が準備を始める……既に、ゴールデンハインド号の持つ破壊力は良く分かっている。先の戦闘で、やって来た船は三隻。その内の一隻は、最初の砲弾の撃ち合いで、ゴールデンハインド号の正確な射撃を持って海の藻屑と化した。

しかし、黒髭の奴、相変わらず自分の船じゃないですよねえ。見た目がウニみたいな船なんで見れば分かるんですけど……さては舐めプか？ コレは舐めプです間違いない良し、そんなうんこ野郎には正義の鉄槌でオシオキをしなければいけないんだ（確信）

「……黒髭……きやがったかあ……！」

ほら、藤丸君もこんなに元気に！ ニッコニコですよホラあ！

サーヴァントに人間は敵わない？ 関係ない関係ない、いっぺんぶちのめして皆に捕まえて貰って跪かせて、悠々と股間を引き千切れれば良いんだよ上等だろ。それをしたらこっち側が悪党!!（倫理観が）壊れるなあ……

「——待ちな。乗り込んでぶちのめしたいのは分かるけど、先ずはアタシらの仕事さね」

「姉御オ！ 弾込め、終わりましたあ！ 何時でも行けますぜ！」

＜その声に頷いて、ドレイクがその視線を黒髭の船に向ける。鋭い視線は彼の船を鋭く射抜き、最早視線のみで沈められそうなほどに。その迫力に、船員全員の表情も自然と引き締まった。

「先ずは船首砲門！ もうここで沈める積りで良く狙いな！」

「——おー、やっちゃおう!? やっちゃいます!? この前は火薬のにおいがちよつと足りなかつたですからなあ！ あ、準備は出来てまつか？ 宜しい！」

「そのドタマ、吹っ飛ばしてやるよー！」

「ブチかませえ！」

＜——互いの船首からブチかまされた砲弾はしかし、何方にも直撃することは無かつたのである。此方に飛んで来た凶弾は、香子の陰陽道が。そして、向こうに飛んでいった此方の一撃はなんと……

「いや、ダメでしょ冷静に考えて。そんな事させちや」

＜船の側面に突き刺さった自らの槍の上に立った、ランサーの蹴りによって、綺麗に彼方まで蹴っ飛ばされたのである。

何気に強いですね……（畏怖） 槍の上に立って砲弾蹴り飛ばすとか、お前は何を言っているんだ（何か言ったとは言っていない） しかも全力で、とかじゃなくてホント軽くサッカーボール蹴飛ばす位の感じですよ。頭おかしい……（誉め言葉）

「ウホ、コレは良いディフェンス。先生、サッカーとか興味ありません？」

「おじさんGKが向いてると思うんだよなー……じゃなくて。船長、あんまりおじさんに無茶させないで貰いたいんだけど？ おじさん守るのが得意ってつたって、あんまり曲芸染みた事させるのは勘弁してくれ」

「んもう！ 先生ったら謙虚なんだからあん！ でもでもお、くろひーとせんせいわ、ズツ友だよ……これからもガンガン酷使無双するからね！」

「勘弁してくれ」

でも投降者がおじさん手に入れたらおいらも防御面全部任せる。酷使無双する。だれだつてそーする。俺だつてそーする。いやぁーデオン君ちゃんは防御タイプだけど、どっちかと言うと防諜だとかそつち方面が特に強いからなぁ……防衛戦術つてなるとやつぱりおじさんなんだよなぁ!? おじさんしか勝たん!

「——な、なんだあのオッサン。あんなところで砲弾を蹴っ飛ばすとか」

「ビビんな! あの程度は奴らにとっては普通だよ!」

「あーそうだよなぁ……」

「……期待させて申し訳ないのですが、私達はあぁいった事は出来ないと思います」

〈一瞬、期待を抱いたボンベの顔色が絶望に再び叩き落された。凄スピードの顔色の変遷も仕方あるまい。あのランサーのサーヴァント、恐らく単純な体術ならば此方に居るサーヴァントで対抗できるのは、ケモノの敏捷性を誇る、キャットだけではないだろうか。

『あ、あのサーヴァントの身の軽さ……もしかしてクー・フリーンか!? アイルランドの光の御子にして、克蘭の猛犬!』

『あの身のこなしを見るとねー、そう見えなくもないけど多分違う。それに、クー・フリーンがあんなに長生きしたつて伝承は聞かないし』  
『あつ、そうかぁ……』

ロマニはMUR大先輩だった……? いや、別にそんなアホ面晒してはいませんがドクターは。とはいえランサークラスで有名なものとなると限られますし、ヒントが無いんですよねー、このランサーに關してはマジで。

「……なに、あの汚いの」

〈えつと、まあ。敵です。はい。

〈分かりやすく言えば俺が全力で始末しようと思った男。

〈立香と共に、急所を引き千切るという誓いを立てた。アイツの。

下の選択肢以外何も見えない……! あーっ……見えないっ……聞こえない……つまり選択肢は一つしか存在しないっ……!」

「おや、おやおやおやおや!? 甲板に見えるは……ひゃっはあああああああ真正ロリ八犬伝! お宝も増えて黒髭氏大歓喜! 野郎共! 奪え奪ええええええ!」

「提督! まだ距離が遠いです! 無理です!」

「うるせえ! 大砲に詰めてでも飛ぶんだよお前ら! 気合入れろオ!」

「そんな事したら汚い髭のハンバーグが出来上がるだけです! 御考え直し下さい!」

「ああん!? はんば……えっ? 拙者がまず飛ぶ前提なの……?」

「……黒髭の船はどうやら提督に厳しい模様である。そしてそんなやり取りをしている間にも、此方が向こうを叩き潰す準備は整っている。それすなわち接近されるよりも先に一気呵成に叩き潰す事。」

「セイバー! 魔力放出使って魔力固めてぶっぱなして! 船速攻で沈めて!」

「ふっ……なんだ、私のマスターらしくなって来たではないか。その容赦の無さ、嫌いではないぞ。寧ろ気に入った!」

「ジャンヌは接近してきた黒髭を焼け! 逃がさないでね!」

「……良いけど、アンタ性格変わり過ぎじゃないちよつと!」

「真正ロリ発言をした時点でマシユに悪影響は確定。近寄せはせん!」

藤丸君さあ……(ANIMA) 表情がホモ君寄りになって来るよ? 混沌悪はホモ君だけで良いんです。お願いですから君まで混沌悪に走らないでください。許して。誰か藤丸君を癒してあげて。「——という事だ。一瞬で船を両断して終わりにしてやる。慈悲は無い!」

「あれー!? なんか海賊のロマンの乗り込み略奪を一刀両断する勢いなんですけどあの黒い剣士のお嬢ちゃん!」

「死ね!」

「解き放たれる黒い波動が、初手必殺とばかり海を引き裂いて迫る。船を一刀両断するが如くだ。コレが直撃すればジャンヌが此方に近寄って来る敵を焼き尽くすだけで良くなってしまうのだが……まあ



それでいいか、と貴方の思考も若干物騒になっていた、しかし。

「うわっちよ来た来た来た来た、何というデュエツは先行有利の法則!?」

「まったく仕方ないねえ……船長が碌な事言わないからそう言う事になるんだけどお！」

それは全くもってそう。まあ藤丸君が物騒になったのは、凡そホモ君が吹き込んだ諸々の所為なんですけどね、初見さん。

＜そんな黒い波動の前に、やはり立ち塞がるのは未だ船の横、突き刺さった檣の上に立つランサーである。彼はなんと……槍を引き抜いた続けざまに、船の側面を足場にして飛んだ、弾丸の如く。その黒い波動目掛けて。

「まったく……おじさんは曲芸師じゃねえってのに！」

＜——衝突。黒い波動に穂先を叩き付け、僅か一瞬の拮抗を持つて……ランサーはその黒い波動を払い除け、そしてその反動を活かし、まるで軽業師の如く、船の上に飛び、戻っていったのである。

「——嘘だろ。オルタの斬撃を！」

『は、払い除けた……アーサー王の斬撃を!? しかも、空中で!? 待つてくれ、あのサーヴァント、もしかして、もしかして……黒髭より、向こうの方が厄介だったりしない!?!』

＜貴方達の視線の先、天に輝く太陽の元、金色の穂先が、まるで此方を威嚇するかのキラキラと輝いているのが、見えた。

お、おじさんカッコ良すぎませんかね。オルタの魔力の波動を空中で往なすとか、もうそれは神話の住人なんよ……神話の住人だったわ

(池沼)

と言った所で今回はここまでとなります。次回は、その神話の住人おじさんとバトルする事になると思います……いやだねえ(震え声)

## 嘗ての大戦から その三

皆さんこんにちは、ノンケ（若フェルグス）です。あんなに良い子がどうして育ったら型月界のスーパー性豪おじさんになってしまうのか。時の流れと言うのは余りにも残酷ですねえ……それを言ったら他にも色々いるんですけど。

前回のうらすじ（希臘無双） どうやら今回主に活躍するのがおじさんって事は分かった。後、黒髭氏マジで自重……しかし、後エイリーク氏が居なかったのはなんでなのかと小一時間……

「ええい！ お前たち！ こうなったらこっちから乗り込んでぶっ飛ばすわよおん！ やあっておしまいう準備をなさい！」

「承知!!」

「うーんノリが悪い。どうにかありませんかね先生」

「どうにもならないでしょ。後、一つアドバイスさせてもらえば……」

▽——目の前に、黒髭の船が迫ってきている。最初の砲撃戦は分けて終わった。ならば次は一気に接近して叩く……セイバーの攻撃が終わった直後のドレイクの迅速な判断は正に電の様で、真っ先に風を捕まえ、ゴールデンハインド号は敵船の懐に入っていた。

「……もう来てますよ」

「早ッ!? どういう判断力!？」

馬鹿じゃねえ!? ここまで近づいてしまえば、サーヴァントの皆だけでもしつかり乗り込めるっでもんです。さあ行こうぜ。あ、うしくは船でお留守番オナシヤス！ センセンシャル！

▽アステリオス達を残した、残りのサーヴァントとマスター一人。そしてドレイクの計九人がハインド号の甲板を蹴って飛ぶ。貴方が香子を抱え、最後に飛び乗った時には……大量の兵士が、甲板の上で剣と木の板の様な盾を構えて立っていた

「はっ、随分と派手な歓迎じゃないかい。ヒゲ」

「そりゃあかわいこちゃん達が大笑して押し寄せてくるんですから、全力も出さないといけないってもデユフフフフ……アレツ？ 女神の様な真正ロリは？ 拙者の夢の体現者は？」

「アレだけの変態発言をしておいて、連れてくると思ってたんのか」  
「お言葉を聞きたいかい? 『あんな悍ましい物に近寄りたくも無い』ってよ」

「ああつ!? 黒髭氏が死んだ!? この人でなし!」

甲板に滂沱の涙を流しながら蹲る黒髭氏の姿の余りにも情けない事、これにはヘクトール氏も思わず反吐を吐きそうな面。

「そ、そんな……拙者の……拙者のドリーム……」

「あー、何だ。ここに蹲ってる船長とは思えぬ物体は放っておいてくれ」

「一応、船長の筈なのだが、物体とか呼ばれている。貴方も立香も、めっちゃ残念だけではない恐ろしい人物である事は分かっている——その金玉をぶつ潰さないとは言ってない——のだが、とてもそうには見えない。」

謎の黒い物体Kがなっさけない唸り声を上げてらっしやいます。暫くお待ちください。野太い男の汚い男泣きが、BGMとして響いております。えー、若干鼻水を啜る音も響いております。

「……ねえ、もう焼いて良いかしらアレ」

「良いんじゃないかい? そこに居る奴をステーキにしてやんな」

「いやーんBBA容赦なさスギイ!? 怖すぎイ! 拙者もうね、逃げる」

「はっ、ここがお前の船だろう……何処に逃げらっただい?」

「えっ、何処ってそりゃあ、当然のように先生の後ろでございませうが」

「そう言っただけはランサーの後ろにその身を隠す。いや、隠すというよりはその後ろに陣取る、と言った方が正しいか。周辺の兵隊が脇を固め、これ以上の侵入をさせるまいと剣を構えている。」

「はっ、そんな雑兵でどうにか出来ると思っただいのかい?」

「ま、なると思っただい? 今まで戦ってきたとは、別物の活躍してくれると、おじさんは期待してるね」

「なら……アタシも、ウチのお客様も、舐められたもんだ!」

「ここでドレイク船長が小銃をぶっぱなす! 挨拶代わりですねえ!! はい、という事でね、敵船制圧RTA、よーいスタート(棒読み)

因みに弾丸は当然の様におじさんに弾き飛ばされていました。

「蹴散らしてくれる」

「先手必勝ってね！」

＜ドレイクの一発と共に前に出たのはやはり現カルデアの誇る二大前衛オルタズ。セイバーの一撃がまず、敵の兵隊の前衛を薙ぎ払わんと剣を腰だめに構えて迫り……

「——ようし、兵士の皆さん、今ですよー！」

「つなに!？」

＜——その剣が……凌がれた。サーヴァントの攻撃が。なんと、セイバーの体勢がアツサリと崩されてしまったのである。

……なんだあのデツカイ壁♂ と、言うかどっから生えたそんなもん!? セイバーさんを弾き飛ばすとか、どういうからくり!? あ、いや待って、そーいや盾を持ってましたね（鎮火）

＜剣を持っていた筈の兵隊たちが号令に合わせ剣を捨て、盾を構え、シールドバッシュを行った。まるで壁が迫るかのように揃えられて。剣の衝突のタイミング、そして、踏ん張る位置をずらされ……力を発揮出来ないまま押し返されてしまう。

「……ッ、小癩な」

「そんでお嬢さんも隙だらけってねっ！」

「つあっ……!？」

＜その崩れた体勢にランサーが付けこんで、長い柄を叩きつける。流石に直撃は無かったがそのまま一気に押し返される。ならばとジャンヌが続いて突っ込もうとしたがその足元を弾丸が打ち抜く……黒髭の援護射撃だ。

「っ！ ヒゲエー！」

「だってそちらのお嬢ちゃん好きにさせてたらお船が燃えちゃうし……」

「今から燃やしてやってもいいんだけど！」

「いやだからやめろってんだい！ バースデーケーキになっちゃうでしょ！ ダメよ邪ンヌちゃん、めっ！」

いやその怒り方はおかしい。まあでも、実際この戦場で邪ンヌって

凄いジョーカーになり得えます。通常攻撃、及び設定からして炎を撒き散らす彼女は木造船をアツツウイさせるので、足場を破壊する……因みにそれをしたらホモ君達も水底ですけど。馬鹿な、浸水だど……!?

「ちいつ……！　此奴ら……っ！」

「ほいじゃあ投げ槍部隊、やっちゃって！」

＜その直後、船の後方より、山なりに飛び来るのは……なんと投げ槍。船の上で!?!と驚く暇も無く、貴方と立香、そして香子の事をマシユとデオンが守る。キャットは身軽な動きで何と言う事も無く躲していた。

あつぶえー！　ふ、船の上で投げ槍を!?　やったらあ！（半ギレ）文字通りの質量の雨でゴリ圧すとかおじさんお前頭ダインスレイブかよお!?　というか、ご自身の船に風穴が空きまくってますけどそれはどうなんですかね。

「マスターっ!?!」

「残念。隙だらけですよー」

「っ、調子乗んなー！　ランサアアアア！」

＜更に、一瞬後ろに気が取られたジャンヌに、続いてランサーが柄での一撃、しかし打たれて崩されてばかりではない、と旗でコレに応戦し、一瞬ランサーの動きを抑え込む。そこに割り込む……セイバーの黒い剣。

「其方に気を取られているのが命取りだ。散れ」

「——いや案外そうでもないっすよっとお！」

＜しかしその直前、一歩大きく下がったランサーが剣を受け、流す。そしてそこから槍を横向きに構え、突撃するように押し込んだ。一歩前線に出ていたセイバーと、その後ろのジャンヌを纏めて突き飛ばしてしまう。

「っ、ちよつと……冷血女。コイツ」

「容易くは抜けんか。どうやら、守りに関しては、此方より明らかに上の様だな」

「いやあ、ギリツギリで耐え凌ぐのが得意なだけなんで、そんなねえ

？」

ジャンヌとセイバーの攻撃を凌いで、しかも押し返すとかしとい  
て、『ただ』耐え凌ぐのが得意……？ 謙虚すぎるのもうんこ野郎って  
いう言葉を知らないのかな？ 知る訳ないだろホモカス（自虐）

『——やっぱり、彼の強さはあの身体能力じゃないみたいだね』

「つと！ うわつと！ な、何が!？」

『軍師視点で言わせてもらうと、彼の強さは、守りの強さと……卓越し  
た指揮。兵の動きでサーヴァント四騎を封じ、突出して来たサーヴァ  
ント二機も、自分の防御で抑える事を想定してた……恐らくは、彼は  
戦士としてじゃない、指揮官として名を馳せた英雄だ』

——と言った所で、今回はここまでとなります。

ご視聴、ありがとうございました。

## 嘗ての大戦から その四

皆さんこんにちは、ノンケ（真夏の愛情満点ランサー）です。正直、ランサー清姫の方が可愛いと思うのは私だけではないと思うのです。どっちも可愛いんだけどね？ でも多分ノーマルな愛情はこっちの方が……（濁し）

前回のうらすじ（船上決戦） 防衛戦が得意と言うのは伊達では無く、ランサーの奇策がカルデアの誇るサーヴァント達の足並みを乱してくれやがりました。アッキーが爆発するのも分からないでもない化け物である。

「と、取り敢えず……宝具を、展開します！ 皆さん、私の後ろに！」  
『恐らくは、こつちがどう動くか、どういう行動をさせるのか……それを理解していたんだと思うよ。彼らが乗り込んで来た時、だから彼は派手に動かなかつた。勝てればそれでよし、負けても、後につながる情報を得る事も出来る、ってね』

「——ダ・ヴィンチちゃん」

「立香の緊迫した声が聞こえる。取り敢えず、マシユの宝具、『ロイド仮想宝具』 疑似展開／デア人理の礎』を展開させる事に成功し、槍の雨を凌いでいるので問題は無い、のだが……」

『それは戦士としてではなく、大軍を率いる帥としての戦い方だ。彼は、此方とマトモに戦うという手立てを捨てて、此方の動きを完全に封じる戦い方を選んだ訳だ』

「で、長々と語ってるけど、打開策は?！」

『無い!・こつちが反撃に出ようとするのを確実に潰すレベルで槍が降って来てるよ!』

救いは無いね（諦め） ……救いは無いんですか!?(勝利への飽くなき執着) そりゃあ救いも求めますよ、目の前で、マジでマシンガンかな?ってレベルでズドドドって音立ててぶつかってるんじゃない!! マシユの盾が無かつたらと考えると怖い所の騒ぎではありません。いやー状況次第ではそう厳しくなかつたと思うんですけど。

「……ジャンヌ達が居れば」

〈立香の悔し気な視線の先には……見事分断される形となった、ジャンヌとセイバーの姿。

「マスターの所にサーヴァーント四人釘付けにして……私らの相手だけするってわけ!? 随分とビビりじゃないのオッサン!」

「いやー流石に数の差が有り過ぎるんで。弱点突くのは基本でしょつと!」

「二人で私達二人を捌いておいてよく言う——つち!」

「ハイハイ黒い剣士様、油断してるとそのお綺麗な顔に穴開いちやいますよー」

ほんまそれ（半ギレ） 邪ンヌの炎か、オルタの魔力解放さえあれば、突破しつつ相手に突っ込むって言う事も出来たと思うんですけど、それが出来ないって言うね。

「それも、計算の内だったんだろう。槍の雨を突破できるレベルの、瞬間的な破壊力を持った二人を自分で引き受けつつ、此方を拘束する。だから、最初からこちらに仕掛ける事はしなかった」

〈ダ・ヴィンチちゃんの言うとおり、自分達の戦力を見抜いたうえでの作戦だったのだろう。別に無理矢理突破できないことは無いが、しかしそれで自分達マスターが傷ついたりしたら洒落にもならない。故に……護られるしかない。

〈自分の弱さに……反吐が出そうだ。

〈——クッソ

下の選択肢はクッソシンプルですけど、コレは自分の無力さを加味した上のたった一言だと思われます。ホモ君の曇り顔みたーい（選択肢下）

「悔しいのは分かる、でも今は堪え時だよマスター。必ず機会は訪れる。いや、僕たちで勝機を見出すんだ。故にこそ怒りを抑え、冷静に、だ」

〈デオンに肩を叩かれて、手をそつと捕まえられて。そこで初めて、血が滴る程に、手を握りしめていたのに気が付いた。無意識の内だった。多少怒っていたのは間違いないがそれでも、苛立ち、程度の積りだったのだが。



「ですが、この状況。どうやって勝機を見出せば宜しいのでしょうか……?」

「……打開できるとしたら、やはり前線で戦ってくれてる二人なんだろうけど。黒髭とあのランサーの所為で攻め切れてない」

「せめて、エドワード・ティーチの援護射撃だけでも崩せれば……!」

くろひーを睨むホモ君の顔、良いゾ〜コレ(満面の笑み) 主人公は艱難辛苦を乗り越えてこそだよなあ? お? どうだ? ウレシイだろオ? エンジョイ&エキサイティング! 忘れちゃダメだよ?

(笑顔)

……まあ似非愉悦部ごっこは置いておいて。実際、この状況を打開するって、一体どうするべきなんでしょうか。それこそ不可能を可能に……ん? (雷速)

「――アタシが行く」

「ど、ドレイク船長!? 何を」

「何もへちまも無いよ、盾の嬢ちゃん。そっちの三人は其処のハゲの下に付いてる、で盾の嬢ちゃんはフジマルの護衛。じゃあ……自由に動けるのはアタシだけさね」

〈拳銃を二丁、改めてその手に構えなおし。ドレイクは黒髭を一度にらみつけると、再び此方に視線を向ける。〉

「何より、あのクソツたれに一発ブチかましたかった所なんだ。ここは任せてもらおうか」

ここでまさかの姉御のエントリー! でも姉御、アンタサーヴァントちゃう、パンピーや! こんな力強いパンピーが存在するはずないんだよなあ(鎮火) とはいえ、サーヴァントではない人間でないのは間違いないです。そんなん突っ込ませるとか、いや、そんなん許されへんし……

「だけど、一人じゃ……!」

「――いや、一人だからこそ、良いのかもしれない」

〈そんな無謀としか言えないようなドレイクの提案に頷いたのは……まさかのデオンだった。全員の驚愕したような視線がデオンに向かう中、たった一人だけドレイクが、ニヤリと笑った。〉

デオン君ちゃん!? 何言ってるんですか!? マズいですよ!

「二人に対して飛んで来る槍を、複数で狙って払い除けるなら、抜けられる可能性も十分に高まる。状況を打開する鍵になって貰う、というのは無茶な事じゃない」

「ですが……!」

「ああ。だが、それをやるべきはドレイク船長じゃない……僕だ」

「<そう言つてドレイクの前で腰を上げようとしたデオンに対し……しかし、ドレイクは銃を向け、その動きを制した。」

「——ドレイク」

「お客様を突つ込ませたとなつたら、それこそキャプテンの名が廃るってなもんだよ。協力してる関係なんだ。譲ってもらおうよ、ここは」

「で、ですがドレイク様……あの様な無数の槍の中を、突つ切るなんて……!」

「ここで日和つて守られてばかり。なんて伝えたら、アタシは船の野郎共の良い笑いものになるつてんだ——頼むよ。私にやらせちゃあくれないかい」

「<絶対ダメだ。デオン。頼む。」

「<——船長。やれますか?」

「つとここで選択肢。ここで選択したキャラクターが槍の雨を潜り抜けていくことになるのですが、普通に考えてデオン君ちゃんの方が良いですよ。頑丈さとか、普通の人間と比べ物にもなりません。動きも良いし……(パアン)音も良い(無関係)」

「ですがこれはエンジョイプレイなんですよね。そんな効率だけでプレイしてちゃいけない……いけない……? 船長とタイマン張るべきは船長つてハッキリ分かんだね。」

「<絶対ダメだ。デオン。頼む。」

「<——船長。やれますか?」

「つ、マスター」

「誰に口きいてんだい。ムカついた奴は、カミサマだろうとぶん殴つて来たんだ。この程度なんてことは無い」

「……僕たちが行った方が、成功率は高いんだよ」

「何ふざけた事言ってるんだい。寧ろ、陸育ちのアンタよりは上手くやるとも。こっちは海で過ごし、海で戦い抜いた海のプロフェツショナルだよ？ そんなアタシより、船の上での戦いに慣れてるって言うなら、話を聞いてやるが？」

＜その言葉に、デオンが目を見開く。何も言えなくなったその顔を見て、ドレイクはしてやったり、と言わんばかりに笑った。

「——そんじやあまあ行ってくる。援護、任せたよ！」

それじゃあ船長、オナシヤス！ 俺達がすっかり援護するから行けよなあ！ オラアオラア!! 突うずるっこんでえ！

＜盾の横から飛び出したドレイクが、槍の雨の中に突っ込んでいく。どんだん飛んで来る槍の間を……すり抜けない真っ直ぐ突き抜けようと最短のルートを行く。そんな真っ直ぐな突撃では、槍の直撃コースに入るのも当然で……

「この木何の木やる気アリ！ サポートするはキャットの気まぐれメニユーである！」

「ドレイク様は、やらせません……！」

＜しかし、降ってくる槍の雨はキャットが、香子が、見事に打ち落とす。対空防御に支えられ、ドレイクは真っすぐ、真っすぐ。最短距離を突っ切り……突如として拳銃を空中にぶっぱなす。向かう先にはロープが一本。帆を手繰り寄せる為のロープだろうか。

「いよいよっしょおー！」

「——つてしまった!?!」

ワツシヨイ！ 切れて垂れ下がった船の謎ロープにドレイク船長が飛びついて、シーターザン！ 敵の真上を堂々横切って、クロヒゲⅡセンチョの元へと、ダイレクトエントリーだ！

「こつち向けえ！ ぶち抜いてやるよ黒髭え！」

「げえっ!?! BBA！」

＜ロープから手を離し、宙を舞うドレイクが、飛び込む様な姿勢から二丁拳銃をぶつ放す。その銃声が、黒髭の船での戦いの第二라운드의幕開けを告げる。

あからさまにビジュアル重点なのである！（ドレイク船長カッコいいです）

と言った所で、今回は此処までとなります。ご視聴、ありがとうございました。

「——やってるねえ」

「援護は……ギリギリ届きそうか？」

「でも味方っぽい船諸共巻き込みそうだし、もうちよつと待ってよう。なあに、機は必ず訪れるさ」

〈——そんな、戦いを見つめる者達が居る事も、誰も知らずに。

……おや？

## 逃れし者たち その一

皆さんこんにちは、ノンケ（ちーちゃん）です。千代女ちゃんだからちーちゃんやね！とか言う本物の紳士の発想。後ちー!?とか言いそうなのが見える見える……かわいいね♡ 酒呑と仲良くして♡

前回のうらすじい……（太陽失墜） 槍で固めて固めて……んん、ゆるさーん！ 落ち着き給え。微妙に落ち着いた。太陽を落とした女、ドレイク船長のエントリーだ！ ドーモ、クロヒゲIIサン。テメロツソ・エル・ドラゴ、デス。

「ええいつ!? 普通あの中突っ切つてきますか！」

「——後ろ向いてる場合かしら？ ジェントルメン？」

「つてうおわあっ!?!」

∠宙で吹き上がる竜の焰が、ランサーの意表を突いた。結局振り回された槍にかき消されてしまったが、その一瞬の油断を嘲るようにジャンヌは笑っていた。そして、その前に踏み込んで仕掛けるは……黒い剣士。最上段の一撃を、辛うじて槍の柄は受け止めた。

「そんなちやちな炎に構っている場合か？」

「いやあ、構わざるを得ないでしょ……っ！」

「あらそう？ じゃあもつと構つてちようだいな。私、ちよつと甘え盛りなのよ」

∠しかし、その拮抗状態から弾かれる様にして、ランサーは体勢を崩し——しかし、ギリギリのところ、胴の辺りから燃え上がった焰を躲す事に成功した。

うっわあ。たいへんそーだなあ（他人事） 実際、あの二人を一人で相手にするとか普通だったら詰みの筈なんですけどね。どこでも発火可能な移動砲台に、滅多な事では怯まない重戦車。タンクとキャノンが揃った理想的なタッグなんですよね、この二人。さっきまでは黒髭の絶妙な援護もありましたが……

「血反吐ぶちまけるオー！」

「はっ、随分海賊らしいじゃないかヒゲエ！」

「——はっ、いかんいかん、鎮まれ拙者のパイレーツ魂ああやっぱ無理だわぶち抜いてやるぜドレイクウ！」

◀その後方、ライダーのサーヴァント、世界でもっとも有名な海賊、エドワード・ティーチに対するは、ただの人間……否、この時代を一度救い聖杯に認められた、『生きた英雄』たるフランシス・ドレイク。「股間ぶち抜いてやる！」

「狙いがガチ！ 拙者を女にする積りい!?!」

「はっ。安心しろ、鮫の餌になっちまえば女も何も関係ないってんだ！」

ブツソウ！ じゃなくて。ドレイク船長が黒髭の動きを制してるので、もう援護も出来ません。後は……オルタズがどうやって状況を打開してくれるかにかかっています。見たーい、ランサーが崩れる処見たいーい

「はっ、折角整えた盤面崩されて、どうしようもないって？ 随分と弱気ねえ！」

「弱気じゃないっての！ 幾ら頭数揃うって言ったって、オタクらが一暴れしたら全部吹き飛ばでしょうが！ こうならないように徹底的に固めに行っただってのに、普通突っ込もうと思えますかね!?!」

◀それはドレイクを侮っての発言だったのか、あるいは、どんな超人とてそんな無茶をするとは思わなかった故の発言だったのか……何れにしても彼が整えた難攻不落の布陣は崩れた。

「っ、船長!?! そっちどうです!?!」

「オラアツ！ ヤクザキック！」

「遅い！ それにアンタ海賊だろうが！」

「おっしやる通り！ という事で海賊らしくー♪」

「そんな目つぶし程度、慣れてるんだよ。一昨日来な若造！」

「……あーこれ駄目そうだなっうわちや!?! くおっ!?! よ、容赦ないねー」

◀焔に一瞬でも気を取られれば剣が間合いに切り込んで来る。剣を切っ先で防ぐことに夢中になれば、燃え上がった焔が甲板を舐める。もはや何方も、黒髭の援護により動きを封じられる事も無い。ならば

……後は人数有利がモロにでる、というもの。

つまり？ 数の暴力で押し切れる、という事……!? アアーイイ！  
アツイイヨイヨイヨ……（歓喜の声） オルタとジャンヌがガラ空きになれば、自然こつちからの指示も通るってもんです。覚悟の準備しておいてください（ワザップ）

「——セイバー！ ランサーを抑えてくれ！ ジャンヌう！ その間に兵士をやってくれ！ そうすれば！」

「はっ、なっさけ無い命令だこと！ あんまりにも哀れで……」

〈隙が出来れば、後は何方でも。暴れてしまえば、問題は無い。立香の声を聴いて阻止せんと前に出ようとしたランサーを、今度はセイバーが押し留める。やられっぱなしではないぞと言わんばかりに、その一瞬を突いて……紅蓮の焰が、奔る。

「ぐあああああああつ!!」

「お情けで聞いてあげたくなくなっちゃうような、良い悲鳴よ、マスターちゃん？」

つしやあああつ！ 向こうからも悲鳴上がってますねえ！ コレは勝ちパターン入りましたわ。耐えて耐えてからの逆転はカルデアの黄金勝利パターン。キン肉マンパイセンも太鼓判押してくれるってそれー。

で、槍が止まって、マシユの宝具も解除。つしやあ操作可能！ 動けるようになっちゃえばこつちのもんだ。動けさえすれば神様だつて殺して見せる……

「ニヤツハツハツハアアアアアアア！ 猫も転がり四方八方！ ストレスフルを脱したらスツキリと参ろうぞ！」

「香子はマスターから目を離さないでくれ！」

「分かりました！」

〈自分は子供ではない。と主張したいが……取り敢えず今は、甲板上の兵士を全員ぶつ倒すのが最優先だと、貴方は拳を固め……ふと、甲板の上に転がった普通の槍に視線を向けた。どうやら投げ槍ばかりでは無く、数合わせて普通の槍も投げていたようだ。

「……マスター、どうなさったんですか？」

「それを持ち上げ……貴方は穂先をへし折った。それを見てぎよつとした表情の香子に貴方は、コレに札をお願いしたいと突きつける。そうしたら、どういう事なんだろうかという目で見られてしまう。

「そりやそうよ（半ギレ） 敵の槍をもって、急に穂先へし折って、じゃあコレちよつと強化イイすか？ とかやられてみなさいよ。そりやあ誰だつて『何言つてんだコイツ』ってなると思います。」

「……もうちよつと、良いモノを使った方が宜しいと思いますけど」

「<<取り合えず得物が欲しいんです！」

「<<長くて、使いやすいと思つて……硬いですよ！」

長くて硬い物を突き付けるとかお前セクハラオヤジかよお!? しかも焦げ茶色の、先がとがつてる……ダメでしょう!? めっ! ほら、お隣の藤丸君はわがまま言わないでおてでぶん殴つてるでしょう!? 見習いなさい!

「おおっしやらああ!」

「ぐべえっ!」

「先輩落ち着いてください! 表情が暴れている時のやつさんそつくりです!」

「昔からこんなんだよおマシユウ! 良い子は真似しちやいけないよお! どっこい正一! 男は黙つてステゴロタイマン、殺しはナシ!」

「先輩がとても活き活きとしてらっしやいます……注意した方が宜しいのでしょうか」

ホモ君普段どんな目で見られているんでしょうか……ホモヤクザでしょ（ド直球悪口） 気にはなりますが、取り敢えずは強化して貰つたこの槍で、目の前に迫ってくる敵を殴り倒すのが先決でしょう。言つてもサーヴァント四人が解き放たれたのですから、自分が何もしなくても制圧は近いでしょうけどそれはそれとして敵兵をホームランダービーするのは止めません。

<<——船上は、完全に貴方達が主導権を握り返した。しかし、その状況であっても、ランサーは特別、焦った様子を見せない。

「いっやあ、好き勝手やってくれます事」



「余裕そうだな」

「余裕って言うか。仕事は果たしたし……船長が切り上げてくれるかはまた別だけど」

無理でしょ(真実) もーカトラスを振り回し、ぶっぱなされる拳銃にもお構いなし。お前本当にライダーかよお!? って言うレベルの暴れっぷり。どっちかと言えばバーサーカーだと思うんですけど(名推理)

「……仕事?」

「ま、ヒント上げるとすれば。なんでおじさんはたった一隻で勝負を挑んだのか、って言う話。それと、ここまでオタクらの戦力を分析したんだ。同じ轍は、踏まないよね」

∨……瞬間、セイバーが海を振り向いた。それに合わせ、ランサーが一步下がる。ジャンヌの炎を躲しつつ……ドレイクと黒髭の間に割り込んで。ドレイクを槍の一払いで後ろに下がらせた。

「——おい。退け」

「ハイハイ船長その辺に。急いで下がらないと、こつちが巻き込まれますよ……兵隊共も、既に退去を始めてますし」

「……えっ!? もうそんな時間!? いっけなくいシンデレラの魔法が解けちゃう解けちゃう! くろひー熱くなりすぎちゃった!」

「ってなもんで。そろそろ撤退しますよ船長——どうせ、そいつ等は詰みなんだ」

詰みい!? 何が詰みだよーお前が罪を背負うんだよおー(中二病を込めた棒読み) 結局作戦失敗したって言う罪をなあ!?

と言った所で今回はここまで。次回はおじさん討伐戦のラストです。もうここまで来たらね、完全勝利まではあと少し。後はサーヴァントの皆さんの力で踏みつぶしてもらってください。俺の勝ち。明日までに、何で負けたか、考えておいてください。

## 逃れし者たち その二

皆さんこんにちは、ノンケ（強化版うしくん）です。正直な話なんです、あのうしくんカッコいいから実装して欲しい。でも、あんなつらそうなくんを見るのも悲しいので実装せずお休みしてもらいたい、と言うのもまた本音。

前は、ランサー殿の守りの布陣をぶち壊してやったぜ。んぎもどいいいっ！ どうやらなんか負け惜しみ染みた事も言ってますが、そんなんむしむしい！ 負けた理由考えて来てくれましたか？ ほいじゃ、頂きます（勝利宣言）

「——どうせ、そいつ等は詰みなんだ」

＜その言葉は、この状況にも余りにも似合わない一言だった。船の兵士は順調に駆逐されて、残るは僅かな手勢と、自分達のみ。詰み、と言う言葉が似合うのならば、寧ろランサーの側ではないだろうか、と思ってしまう。

そうだよ（便乗） そっちは二人、こっちは六人十一人。サーヴァントという決定的な兵力の差がある以上、こっちの勝ち揺るぎません。それでもこっちが負けるっていうなら、ほならね？（強調） 証拠を見せてくださいって話ですよ？

「はっ？ 詰み？ アンタ等自分の現状を分析できてないんじゃないの？ どう足掻いてもアンタ等、詰みよ？」

「まあ確かに、真っ向から殴り合うんであれば、おじさん達、相応に詰んでるのは間違いないと思うけど……ただね。俺達は別に一隻の船しかない訳じゃあないんだ。こっちには数が有るの、忘れてない？」

＜そう言ってランサーが指で指し示す先、水平線上看える影。それは……船だった。それもこれと同型の大きさであるように見える。だが……それを見て尚、ジャンヌはその言葉を鼻で笑い飛ばす。

「ふん、それがどうしたのよ。一隻援軍連れて来たところで、そんな脅威でも何でもないわ。寧ろ、ササツと撃退して上げましょうか？ アンタを潰してからね」

「いやいや、おじさんだって、そんな数でどうにか出来る程、アンタ等

を侮ってないよ」

じゃあ二、三隻かな？（嘲笑） 所詮ね、そんな雑兵が乗った船が幾ら来たところで馬鹿野郎お前俺は勝つぞお前（大爆笑）

「だからまあ、とりあえずは結構な数をね、頑張つて準備してみました。どうぞどうぞ船の戦力の暴力をご賞味ください。ほら、まだまだ来ますよ」

「……は？」

ん？（疑問形） つすうう……そう言えばセイバーさん。先ほどから船の縁から一体何を見つめてらっしゃるのか。ずっと無言なんですから分らないんですよね。

「あ、アレは……!？」

「二隻、三隻、おいおいおいおい、ちよつと待て、ヤバいぞ、まだ来る!？」

「ぼつ……馬鹿じゃないの!? アンタら、だからってあんなアホみたいな数!」

〈それは、十数隻にも及ぶ数で、此方を押し潰すように迫つて来たのである。正に艦隊だった。数の暴力の力は、正に狂気。一隻に向けての火力では到底ない。それはサーヴアントが乗った船相手であつても例外では無かつた。

ヌツ（絶命） あのー……スイマセ〜ン、木下ですけど、太すぎるしーちきんは許してもらえませんか！（土下座） 俺の負け（掌大回転） やるやん（負け惜しみ）

……冗談は兎も角として、とんでもない数がずらりと並んでますけど馬鹿じゃないんですかあの数。たった一隻を潰す為にここまでの戦力を向けてくるとか、ちよつと状況がナオキです!」

『此方でも確認できた! 八隻! 総計八隻の艦隊だ!』

「――ドレイク! 船に引き上げよう! 撤退だ!」

「ああ! 流石にあんなの真つ向から相手出来やしない! ったく、随分と過大評価されたもんだよ!」

〈急いで引き上げる全員を、余裕を持った態度で見つめるランサー。彼が、最後まで決して慌てて居なかつたのは、コレが理由だつたのだ

ろう……であれば。ここまで来れば分かってくる。あの防御の布陣の目的が。

「ま、この前の戦いで、アンタ等の实力は分かった。それなら、それなりの数をぶつけないといけない。でもま、そんなもんをずっと行動させてたんじゃ、それこそ目立ってやられる可能性もあったんで……先ずは、捕捉してから集結させる方式が良いかな、と」

「いやあ、見事ハマりましたなあ」

「で、後は俺達が、アンタ等を釘付けにしている間に船に寄って来て貰う、つてな」

呆れる程有効な戦術だな……（震え声）

「せいじゃあま、もし生き残れたら、またお会いしましょう」

「ほいだば、BBA!! アデュー！」

＜黒髭たちの言葉を背に、貴方達は敵船の上を駆け抜ける。言いたい事は沢山あるが、今は目の前に迫る大戦力をどうにかするしかない。そもそもどうにか出来るかも、今は定かではないのだが。

「——あ、姉御オ!? どうします!？」

「今は尻尾撒いて逃げるんだよ! その間に反撃の手立てを探す!

……若しくは何とか振り切る! 帆を広げな! 風を捕まえろ!」

「う、うつす!」

にいげるんだよおオオオ! 実際逃げる間に何かを思いつけるかで色々決まる気がするんですよ。と言うか、二、三隻じゃダメだから八隻くらい投入しよ♡とか言うのは征服王の許可して良い戦略じゃないのよ……

『セイバーさんの宝具で迎撃するかい!?』

「無理だ。この前も見ただろう。アレは壊しても構わん船だったからやったが、海の上のしかも母船の上で撃てば……どうなるかは想像してみろ」

『わーさっすがアーサー王だなあ絶対に撃たせられないや!』

＜となれば、他に遠距離を穿つだけの出力を持った宝具……と思っただが、誰も居ない。そもそも大出力の火炮を持つ、セイバーが例外寸前なのだ。

『となると、一隻ずつ乗り込んで速攻で潰して……出来るかなキャプテン』

「出来る出来ない以前に、それしかない。と言いたい所だけでも、現実的じゃないね」

「と、すると？」

「一応、この船は後ろにも砲台を乗っけてる。それで牽制しつつ逃げるしかないか」

「でも、さつき反撃の話をしてたって事は……逃げ切れるかい？」

「お察しの通りさ！」

あー逃げるのも厳しいって事かあ……まあアレだけいけば、砲台からガンガン弾をぶっ放してれば何時か当たりそうな物でもありますし。

『……最悪、マシユを中心として防御を固めれば、被害を最小限に抑えられる、かも』

「いけるかい？」

『砲弾相手も、船の上での防御もやった事も無いから不安要素しかないけどー』

「ったくなんとも曖昧なこった！　ボンベ！　腹あ括りな！　こっから先は地獄だよ！」

「ひええええええ！　姉御と一緒に居るといつつもこんなんですね！」

「なんだい、そりゃあアタシが疫病神とでも——!？」

く——そんなドレイクの言葉をかき消すように、敵の砲台が轟音を吐き出した。空気を弾き飛ばしながら、無数の凶弾がゴールデンハインド号の少し横に、特大の水柱をぶちまけた。その数、ざっと見ても、十数本はある。

「……つと、もう来やがったか!？」

『話し合ってる余裕もない！　藤丸君、令呪を切ってくれ！　マシユに再度宝具の準備を！』

「了解……っ！」

「敵船の監視を怠るんじゃないよ！　砲撃の兆しが有ったら知らせな！」

……皆様ここでお気づきでしょうが、ホモ君のパーティは基本的に遠距離を破壊できる人も居なけりや、広範囲を防御できる人も居ません。何が言いたいかと言えば、このカルデア大ピンチの状況にて、役立たずにて候。香子さんが遠距離出来るって？ 投げ槍とは速度が圧倒的に違う上に威力も桁違いだろいい加減にしろ！

「——ん？」

「どうした！ 次弾、来るか!？」

「あ、いえ……なんか、今キラツと光ったのが、海に落ちたような……？」

彗星かな？ (KM—Y) 違うな、彗星はもつと、パーって……そもそも大気圏にこんなサイズの彗星が降つてくるとかキリ様か何か？

「はあ？ アンタ何を見てるんだい！ 船を見てろ！」

「い、いえ。その敵の船の傍を掠めて落ちて……あ、もう一発！ また一発！ なんだ、なんだってんだ？」

＜彼の言う通りのモノを、貴方も一瞬、その眼に捉えていた。彼方から飛んで来る、眩い輝きを伴った流星が……数えて四つ。海に落ちていくのを。それに目を取られた——その一瞬の後、一筋の光が

——イイイイイイイイ……ッドン……!!

＜船の側面を、貫いたのだ。

ファツ!! つ、貫いたどころか船がへし折れてるんですがそれは……ん？ なんか、未だもう一発……いや、待って、一発どころじゃ済まない位輝きが

「……なんだありゃあ？ アンタ等の仲間の援護射撃か何かか？ 大砲か？」

『い、いや僕ら大砲なんて所持してませんし、そもそも僕らが派遣してるメンバーは其処で全部ですし』

「それじゃあ、一体誰が」

＜困惑する船内。だが、それだけでは終わらない。空の彼方、無数の煌めきが瞬いたかと思った、その時……頭の中に響く、少女の声。

——力を貸します。どうか、切り抜けてください——

＜その言葉に何かを返す前にその無数の輝きは、無数の光条と化し

て、先頭に行く何隻かの敵船の上へと降り注いだ。船を纏めて破壊する程では無く。しかし、確実にマストを、帆を、船体を、ハチの巢の如く変えていく。

イツパイイツパイ……勇次郎……（感嘆符）

と言った所で、ジェットコースターな展開ですが今回は此処まで。えー次回はあの援護射撃がどなたかを調べる所から、スタートですかね？

## 逃れし者たち その三

皆さんこんにちには、ノンケ（乳白色の底から）です。でっかいとは正にこの事だと思いました。後、渴愛のエゴが凄く肥大化するの情緒がめっちゃくちやに体の疲れに効きます。凄く好き。最高。文句なし。

前回のうらすじ（横合強襲） ドレイク船長迫真のインターセプターと、ランサーの防衛崩壊……しかし、その先に待っていたのは時間を稼がせてもらって悪いな、援軍を呼んで来たぜ!! 尚横合いからの弓やら石やらで粉碎された模様。

〳〵——自分達の船の前で、突如として味方の船がハチの巣にされたり、一隻など二つにへし折れて沈んでいったのだ。後ろの船が先に踏み込もうと思わず、寧ろ引き返そうと思うのは、当然と言えるだろう。「——に、逃げ帰ってますぜ。姉御」

「ああ。助かった、って所だね。でもって。一応確認するけど、本当にアンタ等じゃないんだね。アレをやったのは」

〳〵コレに関しては、マジで心当たりがないです。

〳〵ホント ホント オレ カルデア カルデア ウソツカナイ

いや草。めっちゃ片言の選択肢があるんですけど。え、そんな関係ないでしょ（猪突猛進）面白い、と言う選択肢を選んでこそエンジョイプレイ。偶に無難な選択肢してるって？ つべこべ言わずに選べホイ。

「……どうなんだい」

「あの、なんで俺に？」

「そつちのハゲは本気で答えてるのか分からん」

「本気だと思えますよ……ちよつと、冗談を絡ませてますけど」

「冗談を挟んで貰っちゃ困るだけだね。アタシとしては」

〳〵因みに、カタコトで話している途中には、既に貴方は香子に正座をさせられていた。別に何か無茶をしたわけでもないのになぜ……とは思わなかった。かなり深刻な状態だったところにめっちゃ茶化



しに行つたのは大分罪だと自分でも分かつていた。

「マスター。そう言う事はしてはいけません。め、です」

「……悪いマスターじゃないし、サーヴァントとの信頼関係を築こうとしてくれるから、寧ろマスターとしては良いとは思うんだけど、突撃癖と突然の暴走さえ治ればなあ」

「猫は気紛れ、ご主人も気紛れ……つまりご主人はキャットの眷属だった……?」

ガバガバキャット理論は申し訳ないがNG。それは兎も角、ホモ君がちよける、又は特攻する↓香子さんが正座させる↓叱る、の流れがもう定着して来てんのホント草も生えない。そろそろホモ君も声かけられただけで正座するくらいには躡けられてそう。

『少なくとも、僕たちは何もしてないのは、本造院君の言う通りだよ』  
「そうかい。となると……おいボンベ、さっきの援護攻撃が飛んで来たのは、一体どの辺りだい」

「えっと……向こうです姉御。しっかし、偉い数の矢でしたねえ」

「矢もそうだけど、何だったんでしよう、あの流星みたいな……コントロールはノーコンでしたけどね。というか、四回も外すって……」

外したんやないで。態と当てなかつたんやで……と言うか、マジで四発外すんだあの技って。演出だと思つてました。最初ボチャン、つて音がしたとき一体何事かと思つたんですよ。

で、多分あの馬鹿みたいな量の矢にも心当たりが、ありまあす!

多分ですけど、凄い狩りの得意な猫ちゃんがね、めっちゃ火い吹くうう……

「もしかして、今のをやった方々と言うのは、船の紙片に描かれていた……?」

「反抗勢力の可能性はあるね。僕らが交戦してるのを見つけて力を貸してくれた。都合よく考えるならそんな感じ、かな」

「そう言うデオンに、では。と香子は少し……不安げな表情で尋ねる。」

「都合よく考えないのであれば?」

「……その反抗勢力も、こっちに敵対してて、でもイスカンドルを潰す

為に利用したいって所、かな」

カルデアを利用するとか、なんだその偉そうな……すわわっ！（反抗的態度） まあそんな偉そうに出来る立場ではないですけど。やってきた所業を考えたらこっちが従順になるまでやられても何の不思議もない気がします。

「……とはいえ、さっきの声みたいなのは、力を貸すって言ってたんだ。素直にこっちと協力するつもりがある、と考えようじゃないか」  
＜思い出す、テレパシーの様に脳内に直接語り掛けてきたあの声。力を貸す。というのは本当なのだろうか、と……少なくとも、あの破壊力は間違いなくサーヴァントであるのは間違いない、と思うが。

『アレだけの遠距離からの攻撃を行ってくるサーヴァントだ。アーチャー、かな』

『……』

『アレ？ どうしたのロマニ。物凄いい顔してるけど大丈夫？』

『いや……いや……あの石、ってというか……アレ……見覚えがある、ってというか』

あっ……（察し） 賢い。ロマニはね、その片割れのサーヴァントとお知り合いですからね。しかも大分、大分に古い。凄い因縁もありますし。まあ父親があんなうんこ野郎（正確な分析）だったらそれはそうなんですよ。

「そんな凄い顔してるの？」

『なんか昔に置き忘れて来たデカイ犬のフンを今さら見つけてしまった、又は踏んでしまったみたいだな。とんでもなく渋い顔してるよ』

＜いやどんな面なんだろうかと思ってしまう。というか、一体何を見てそんな表情をしてしまったのか。取り敢えず、新しいサーヴァントと接触するまでには元気になってくれるだろうか。

『とはいえ、敵がこのまま合流を許すかどうかは分からない。向かうにしても、警戒は最大限していった方がいいだろうね』

「戦闘準備は何時でも整えるようには伝えるさ。よーしお前ら！ 舵を切りな！ さっき攻撃が飛んで来た方向を目指す！ 見張り！ いいかい、未だ敵がうろついているかもしれないんだ、気い抜くんじや

ないよお！」

「「ウツスー！」」

「——かくて、カルデア及びドレイク一行は、謎の援護射撃をして来たサーヴァントと思われる相手。それらが居ると思われる方向へと船を進め……恐らく、これではないかと言う島を、直ぐその視界に捉える事が出来た。」

下手な引き延ばしが無いスムーズな到着＋1145141919点。途中のサーヴァントとの絡みを作って貰えない——1145141709点。総じて＋810点。

それは兎も角（話題転換）結構スムーズに仲間を集められてるんですが実は……一人……足りない……？（困惑）あのこの先に居ると思われる二人の他に、ほんへではその前に出会うはずのサーヴァントが一人いる筈なんですけどあつれれー？ おかしーぞー？（死神）

「——姉御！ 島の岸！ 誰かがこっちに手を振ってやすー！」

「どんな奴だい！」

「……緑の髪で、杖をもつて……なんか、ナンパな奴です！」

『ごばあっ!! ぐ、げえ……!』

「Dr, ロマン!？」

「流れるように吐血したロマニと、心配の声を上げるマシユを他所に、近づくにつれて貴方もその男を確認する事が出来た。軽装で、ナンパ……という表現が正しいかは分からないが、少なくとも超の付くイケメンである事は確かだ。」

「……何なんだ一体。まあいいや。どうやら歓迎してくれてるらしいからね。取り敢えず浜に寄せるよ！ 上陸準備！」

「「ウツスー！」」

ロマニがこうなるのは予定調和だから……（震え声）

「その人物が、貴方達の前に姿を現したのは、ゴールデンハインド号が浜へと無事上陸に成功し、船員を下ろしている時であった。まるで此方を警戒する様子も見せず、無警戒に此方へと歩み寄って来た。」

「——いや、良かったよ無事で。頑張つて援護した甲斐があったってもの」

「と言つても、アンタ等の援護あつてこそだけどね……何者だい？」  
「んー、色々通り名はあるけど今はどれを名乗つてもね。つて事で、唯のダビデとだけ名乗つておこう。それと、僕の愉快的仲間たちが、後三人程」

「ダビデ、と名乗つた男の視線の先、此方に歩み寄ってくる少女と、女性が一人ずつ。少女の方は、薄い蒼で、ダビデの物よりも豪華な杖を一本その手に抱え。もう一人の方は……立香が速攻で反応した。

「オルレアンのバーサーク・アーチャー!？」

「……私を知っているのか。しかし、そんな不吉な名前で知られている時点で、ロクな出会い方では無かつたと見えるな。アタランテだ」

別名子供執着おばさん（宣戦布告） 実際そのレベルで凄子供達を庇護しようとしているからね、弁解出来るならしてみろやオラアン!?

子供好きだろうお前!？ 子供と遊んでけお前え！

「で、此方は」

「——えっと、仲間。と呼ばれるのもちよつと複雑なのですが」

——で、問題はこつちですよこつち。君、なーんでここに居るかなあ……

「かのコルクスの王女、メディア。僕らの名誉参謀だよ」

「メディアです。よろしくお願ひいたします。皆さま」

「アイソンくんが肉の柱（意味深）になつて今、そつちに居ると思つたんですが。まさかのアイソンくん単独で放置!？」

色々深まってきました今回の特異点。今回は此処までとなります。

ご視聴、ありがとうございます。

## 女神の旗の下に その一

皆さんこんにちは、ノンケ（トリ子）です。個人的には凄い魅力的なのは間違いないんですけども、いやあ、同じ時期に出て来たガウエ子があんまりにもあんまりだった……彼女がいなければ、多分間違はなくぶつちぎって人気出てたと思いますね。

前回のうらすじい（戦力合流） ロマニの絶望……それは、突如として彼の前に現れた謎の羊飼いだった！ 後、ケモノ耳ねーちゃんも居ましたけど。で、最大の問題点が一人程……あのお、奥様、何故ここに？

＜ダビデ——ユダヤ人の王。あの魔術王、ソロモンの父親でもある……というのがまくし立てたロマニの解説だったが……凄いスピードだった。弾丸の様だった。形相は鬼の如しであった。

『言つとくけどね！ そんな良い人物じゃないよー』とのドクターロマンティックからのお言葉です。なんか荒れてるねえ』

「ど、ドクターは本当にどうなさったんでしょうか」

『うーん分かんない。怖いよねえ』

まあ、FGO既プレイヤーにとってロマニの態度は『ああ……うん……』っていう物なんですよね。まあ、色々と持つてる何かがね、大爆発してるんですよ今。声すら出さないうって言うのは（鬱憤）サイコガン……!!

「……なんだ、一体」

「同じ猫科としてお主に親近感が!! 分からぬかこのリビドー!!」

「いや……すまん……全くもって私には分からぬのだそのリビドー……」

「そうか。キャットの涙はナイアガラである」

「……あの、なんだ。この娘はどうすればいいのだ」

＜ちよつと自由な子なだけで悪い子ではないんですとだけ返してお。問題は其処の可愛い猫耳コンビではないのだ。問題は……デオンが先ほどから視線を向けている、キャスター、メディア。彼女は彼のアルゴノーツのメンバーなのだ。

そうなんですよねえ。

アルゴノーツ。人類史の中で英雄が集まる集団はいくつかあります。皆さんご存知クソデカアルトリア感情サークルの円卓や、百八人燕青クラスが存在するとか言う英霊の物量集団梁山泊、あのアストルフオを輩出した変態集団十二勇士。その一つ。

メツチャ分かりやすく言うとヘラクレスの所属してた会社で社長夫人してたのがこの人です。

「……あ、あの……」

「ああすまない。気にしないでくれ。周辺に気を張っているだけさ」

「そう、なんですか？ 気にし過ぎかな……」

気にし過ぎじゃないですよバリツバリに観察してらっしゃいますよデオンくんちゃん。ドレイクの証言では、この海の覇権を握る為にイस्कンダルと殴り合った勢力という事でカルデアと協力きつかったすねえ……ああも今日は、すげえきつかったゾ、何であんなきついいんすかね〜も〜。お前（等が目玉の化け物呼び出したから）じゃない!!

「ふふ、彼女。気になるかい？」

「気にならない方が嘘だろう？」

「即答、か。流石はキャプテン・ドレイク。彼女が気になるだけの情報を掴んでるとは。ただの脳筋海賊とは訳が違うね。やはり、僕らが手を組む相手として君を想定したのは間違ってたなかつた」

「それは、この先に居るって言う頭目の意見かい？」

「ダビデは、貴方達を『頭目』の元へ案内する、と言った。ユダヤの王ダビデ、純血の狩人、アタランテ。そしてメディア。この四人が従うレベルの頭目。一体、どんな英霊なのだろうか。」

「いや、僕らの頭目はそんなのを考えるような性質じゃなくて」

『——待った。この先に反応を見つけた……と、ロマニから報告だよん。コレは凄いね。セプテムのステンノ、そしてエウリュアレと同じ、神霊の反応だ。相当微弱だけど。後なんだろうこの、凄いなんとも言えない微弱なオマケみたいな反応は』

おー神霊。というかオマケみたいな反応で凡そ誰かは想像がつき

ました。晒してんだよなあ、あの無残な姿をよお！（滂沱）

「えうりゆあれ、とおなじ……めがみ、さま？」

「ふん。どんな女神だって私より可愛くはないわよアステリオス？」「う？」

＜エウリユアレの謎のマウントは、果たしてアステリオスに効果があるのか。それは兎も角、これだけの格の英霊三騎を纏めているのが神霊、というのはなんともしっくりくる。一体どんな相手なのか——「……はっ、なんか美女との出会いの予感がする!!」

「だーりん？」

「つてしまった墓穴ほったうひえっ待って待って絞らないでアーツ!？」

＜——そんな思考は、突然の悲鳴によってかき消されてしまった。思わずホログラムのダ・ヴィンチと目を合わせ、それから傍らの香子と目を合わせる。香子は『んー……これは駄目じゃないでしょうか』と言うような表情をしていた。

そうでしょうね。ダビデ君もこれには迫真の苦笑い。凄いぜ、ただの会話でここまでの『ええ……（困惑）』っていう顔させたの黒髭……いやゴメン、黒髭よりは全然マシだと思いましたが今のは撤回させて頂きます……あの、今画面越しでもなんかあつヤバイこれ死ぬわって感じの視線がこっちに突き刺さった気が。うん。ただのオカルトだな！（震え声）

「……オイダビデ」

「いやあ、言わんといて貰えないかなあ。大爆笑したい所んだけど一応お客人の前だから堪えてるだけで」

「大爆笑したいのか」

「いやあ、あんなアビシヤグな奥様いらっしやってまだ他を求めようとするのがね。それで制裁が加えられるならそりやあ男としては大爆笑さ」

コレはダビデ過ぎる発言。とはいえ全くもって同じような意見を、二部五章を見た人だったら抱くと思うんですよね。お前はアルテミスと一生添い遂げるんだよ、幸せになるんだよオウあくしろよ（ブー

ケトス全力)

「——あら？ ダビデ、誰か居るの？」

「おやおや、麗しき奥方様、邪魔してしまつたかな？」

「大丈夫よ。寧ろ私とダーリンの熱々カップルっぷりを見て欲しいくらいー！」

「相変わらずお熱い事で……では、ご紹介しようか」

〈そう言つて、ダビデが指し示したその先に居たのは……白い髪的女性と、それにめつちやくちやにもまれてくちやくちやにされる熊のぬいぐるみっぽい何か。

「……えつ、なんこれ」

『あ、そのクマの人形からだ。微弱な魔力反応が出てるの』

「と、というか。あのお人形、呻いてはいませんか？ もみくちやにされる度に」

「ジャパニーズお手製呪いの人形。オプションで毛が伸びたり、自動おしゃべり機能も付けられるが如何なものか？」

「えつ、日本つてそんな神秘に塗れた悍ましいサービスをやつてたのかい……？」

そんな訳がない（激怒）でもノツブとかの弾けつぷりを見てるとやつてそうなのが否定できない日本人のHENTAI性。そんなんやから日本系の怪談やらオカルトがやはりヤバイ（確信）外国の色々アレですけど、なんというか、ニチニチしてますよね日本のそう言う系。嫌だねえ……

「まあ呪われた人形というのは間違つてないかもしれないけどね。それは兎も角として此方の美女こそが、僕らの頭目……アルテミス様だ」

〈——思わず全員の表情が『は？』と言つた感じになつた。エウリュアレは勿論、無表情で気難しそうなのがデフォルトなセイバーですら、少し口を開けて呆けている。全く動じて居ないのは、何も分かつてなさそうなアステリオス位である。

「やつほー。あ、こっちはダーリンよ！ 私の愛しい愛しい旦那様！

どうどう？ ビックリするくらいイケメンでしょうー！」



「……どうも、ご紹介にあずかりましたダーリンでございます。イケクマです」

出、出。 Fate 界限一の純愛カップル奴。はい。このサーヴァント界限でも一番に変態的な成り立ちを誇るサーヴァント。綺麗な奥方が主体のサーヴァントではあるんですがそのオマケのクマの人形が重要ではない訳ではありません。

「まあ、こっちのクマは後で紹介するとして」

「オイコラ」

「結構なネームバリューだろう？ 流石にこの海の実力者が皆サーヴァントって言うならアルテミスって言う名前に怯んでくれると思って。正直、渡したくないモノがあるから彼女の庇護を受けてるんだ。で、アタランテはといえば」

「……」

「先ほどからキャットに絡まれていたアタランテが、全く声を出さなくなっていると思えば……アルテミスの方を向いて、そつと膝をついている。」

「知っているだろう？ 彼女はアルテミスの信者……と言うか、まあそういう系だね。彼女が居るとなれば、そのもとに馳せ参じるのが基本ってことさ」

「……うむ」

その辺りの複雑な事情は後で話すとして恐らくはダビデは例の厄ネタに関する事だと思います。で、もう一つ、なんですけど……

「要するに、アルテミス、っていうデカイ名前に集まった寄せ集めって訳かい。成程ね。なら、もう一人、アンタはなんでここに居る？」

「……」

「そうだろう？ アルゴノーツのメンバー様よ」

「——腹の底を見透かす様なドレイクの視線が、メディアアへと突き刺さった。」

ドレイク船長がバチバチしている所で、今回はここまで。

次回は……メディアアさんにかつ井だして事情聴取からです。ご視聴、ありがとうございます。

## 女神の旗の下に その二

皆様こんにちは、ノンケ(ゴールデンレトリバー系サーヴァント)です。最強メスガキ系のトリ子ちゃんですらぶち壊し得る鬼の属性モリモリサーヴァント。完全にプレイヤーの性癖を抉り取りに来たつて言うキャラクターしてますよね。

前回のお……うらすじ(熊男致命) アルテミスに居る三人は、どういう集まりなのかな? ただの寄せ集めなんだよなあ(確信)

冗談は兎も角、ダビデは礼の物、アタランテは完全にアルテミス信者(強制) じゃあ……メディアさんは?

「アンタは、イスカンドルとこの海の覇権争いをしてた奴らだ」  
「……」

「このカルデアの奴らの言う事を信じるなら、アンタ等も私たちの敵の可能性は高い。それがこっちと協力しようって言う姿勢を見せるのが、不思議だと思っても仕方ない。そうは思わないかい?」

「そう言われたメディアは、少しうつむいて、目を伏せて……しかし、しばし経ってから彼女はゆっくりと顔を上げた。

「……私は、この特異点をどうしよう、と言う気持ちはありません。そもそも、あの方に敵対する事も出来ませんから。ですが」

『ですが?』

「イアソン様の吊い……それだけは、したいと思ってるのです」

いや、肉の柱を呼び出したの君でしょうが……(震え声) 君以外アナン呼び出せないでしょうが! お前が! イアソンを! 生贄に! あのビック・ミート・ランスを! 呼び出したんだろうがい! そうはならんやろって? なつとるから! こういう事になってんのやろがい!

「イアソン。アルゴノーツの船長。メディアの夫。ロマニが、アルゴノーツについて解説していた中に出て来ていた男。あのアルゴノーツをまとめ上げた男だ。船が沈んだ時点で船員が全員無事と言う話はないと思うが……」

「……敵討ちでもする積りかい?」

「そんな建前を使うつもりはありません。ただの私情でございます……あの征服王にせめて一矢を、と。それだけで」

「彼女自身、僕らの様に問題を解決するために呼ばれたサーヴァントと敵対する立場である事は分かった。その上で……彼女はそれでも僕らに協力する事を選んだんだ。その心意気は汲んであげて欲しいかな」

「だから！ それをやったのは！ お前やろがい！ ほんへではイアソン様『一体なにされたんだろう俺。なんでいきなり妻に背中刺す刃されてるんだろう』って顔なさってたんですよ!? 君が一矢報いるべき相手は！ お前じゃい！」

「——いや、いいさ。私達に敵対するつもりが無いって言うならそれで。アンタがまだこの海の主導権を握るのを諦めないなら、結局最後にはアタシ達と衝突する訳だし。敵になった奴を味方にするなんて、それこそ海賊稼業じゃよくある事。アタシは問題ないよ」

「——そう言つて此方を伺う目は、『アンタ等はどうかなんだ』という問いを投げかけている様に見えた。」

「元は明確な敵だった相手を信用できるか、つて？」

「おや、アタシは何も言っていないけど？ そう言ってる風に見えたかい？」

「いや、そう言うつもりはないけど……どうだい相棒？ お前の意見を聞かせて欲しいんだけど」

「<< 良いんじゃないの？ 味方が増える。良い事！」

「<< ふっ……もし愚かにも向かってくるのならその時は全身全霊にて相手になるまでよ。」

「んおおーいっすねえ下の選択肢……下の選択肢からネタ展開になる匂いがぶんつぶんするぜえ……超選ぶぜえ！ いやーホモ君のカッコいいところみたいーい（邪悪な笑み）絶対オチは見えてると思っうんですけど（即鎮火）」

「——マスター？」

「< 即正座だった。いたずらに怖がらせちゃいけないでしょう、と言った香子に視線を取られている間にデオンに優しく肩を抑え付け

られ強制された。そしてキャットに腰に抱き着かれ逃げられなくなった。連係プレイが極まっていた。

「いいですか。折角協力して下さる、と言う方に対して全身全霊で相手になるなどと余りにも乱暴な物言い。香子は哀しゅうございます」「ゴロゴロゴロゴロ……」

「前方は香子、後方にキャット。完璧に包囲されている貴方を他所に、立香は『良し』という一言だけで済ませてメディアに向き直る。メディアは呆然としていた。

「あ、あの、其方の禿げた方は……?」

「あー大丈夫です。アイツは何時もあんなんですから。兎も角、こつちもメディアさんが加わるのは大歓迎！　なんか凄い人みたいだし！」

「な、なんか凄い人……」

スツゴイ曖昧で草も生えない。あれ？　ホモ君だけじゃなかったっけ、脳味噌が凄い残念だったマスターって……？　マスターなんてみんなどつか残念やろ（暴論）　俺の中での例外はペペさんだけです（鋼の意思）

「せ、せんばい……ちよつと、あんまりにも」

「ははっ。なんか凄い人か。ま、そんなくらい適当な方が良いのかもね。オーケイオーケイ。アタシらに異論はないよ。此奴らの言う通り。戦力はあるだけいい。贅沢は言ってられないってね」

「えつと、期待されてるので、頑張ります?」

「——その他に気になる事が無いというのは嘘になる。だが、今は新しく仲間が増えた事を純粋に喜ぶべきだろう。」

「んー……なんか纏まって良かった?　で良いのかしら?」

「まあそんな感じですけど。興味なさそうだねえ我が頭目様は」

「貴方達の問題だもの。私が割りこんでどうこうする必要もないでしょ?　それよりは私ダーリンとイチヤイチャしたいもん!」

ダーリン以外には意外にも（激ウマギャグ）冷静なアルテミス様ホントすこ。アキバでもメツチャ頭切れてましたし。まあ彼女は本体が本体ですからねえ。ホントは頭良いのにダーリンに全部振ってる

のが激ウマポイント。

「はっはっはっ、我らが頭目様は相変わらずな事だ！」

「――で、そつちでカラカラと笑ってる王様は、一体何を渡したくなくてここに居るんだい？ お宝かい？」

「あー……それに関しては……なんだ。また何れって事で」

「女一人に話させてアンタは話さないってか。アンタもロクデナシかい？」

「いやーやめてくれないかなあその認定。否定はできないから」

いやお前はロクデナシやろ（語録無視）

「……言っても使い物にならない物だから、話さないだけだよ」

「はっ、何処までホントなんだか。キツチリ自分の胎の中割って見せたそつちのお嬢さんの方が未だ信頼できるんだが？」

「いやあーそう言われると何も言えないなあ！」

＜使い物にならない、と言うのはどういう事なのだろうか。とは思う。もしかしたら聖杯なのだろうか。とか考えてみたが、聖杯を使う物にならない物、とは言わないのではないだろうかとは思う。

「何時か話すから、勘弁……と言う事で！ 今はこうして手を結べたことを喜ぼうじゃないか、麗しいキャプテン・ドレイク」

「……」

「いやホントそんな暇まないでいただけるとありがたいんだけども」

まあダビデが持つてるのはマジで役に立たない自爆専用の爆弾みたいなもんやし……そんなもんをなんで持つてるかって言うのは、まあ、何れダビデがキツチリ話してくれると思うので私は黙っておきます。

「あー……そうだ！ 折角、我々が出会って同盟を結べたんだ！ 那のお祝いでもしようじゃないか！ うんうん、それがいい！」

「露骨に話題を逸らしたね」

「逃がしてくれないなあ」

「……まあ良いさ。偶には派手にやりたいし、その話題逸らしに乗ってやろうじゃん」

＜そう言ってドレイクは後ろに待機している船員達に声をかけた。

奪い取った物資も使って派手にやる、と言うお言葉に、野郎共は大騒ぎで船へと戻っていった。今日はどうやら派手な騒ぎになりそうだ。

『ダビデ関連で怪しい物かー』

「ダ・ヴィンチちゃん、心当たりある？」

『ある事はあるけど、確信とまではいかないね。ただ、マジで私の想像している物だとしたら……』

◇◇したら？

◇◇分かってるよ。どうせヤバイもんなんですよ？

ネタバレ禁止い!? お前情緒知らずのモンスターかよお!? そりゃあオチが見えてても言わないのが華つてもんですぜホモハゲチンピラ（怒りの罵倒） 選択肢はまあ当然のように上で。

と言った所で、今回はここまで。

次回は宴会……になるのでしょうか。もしかしたらサーヴァントとの交流回になるかもしれません。

## 海賊の宴 その一

皆さんこんにちは、ノンケ（裏切り湖ナイト）です。アレ？ 君も  
う使ったつけ……？ 確認したいんですけど、それをするのも面倒く  
さいレベルで話数が増えてしまいました。そろそろ最初に使った  
サーヴアント一覧が欲しい所さんです。まあそれはそれとして（閑話  
休題） お前マジで生前の行為含めて未だに人妻に拘ってるのは逆に  
敬意を表したくなりますけど……自重しようね？

前のお、うらすじい……（魔女詰問） お前があ！ 裏切つてえ！  
イアソンがあ！ 肉の柱になってえ！ 決めたのである。多分で  
すけど。全然違う。兎も角メデアさんが仲間になったんだよ！  
「——じゃあ、奪い取った奴らの物資で！」

「「かんぱーい！」」

～なお乾杯と言ったのは貴方、立香、そしてキャットだけ。マシユ  
及び香子はきよろきよろとしてあまりにも可愛いだけ、アタランテ、  
及びオルタ組は仏頂面のまま、アタランテとテオンは静かに盃を掲  
げ、アルテミスはクマのぬいぐるみ——オリオンを弄っている。

「たのしそーねー、ダーリン」

「そうだなー……楽しみたいから離してくんね？」

「それはダメー♡」

「……今でも信じられないわよ。アレがオリオンって。ただのちっこ  
いクマのぬいぐるみじゃないの。何をどうなったらああなるの。何、  
私が贗作だから分からないの……？ 教えなさいよユダヤの王」

「曰く、『ダーリンが心配になったから！』だそうだよ」

ホントそんな理由で下界に降りてきた女神様草オブ草。直情的過  
ぎませんかね……？ でもそこら辺、あんまりにもめんどくさいヒロ  
インとかよりは分かりやすく好き。めんどくさカワイイヒロイン  
は嫌いかって？ ううん、大好きSA☆！

「……砂糖漬けみたいな回答ね。吐きそうだわ」

「んー。だーりん、ってなに？」

「う、うむ？ 私か？ だーりん……なんと説明すればいい？」

「伴侶の事よアステリオス。あのクマとあの女神は熱々つて事」

「!! ふ、ふうふ……! おにあい、つてやつ、だ!」

「いや、何処で覚えたのよそんな言葉」

〈……今見ているだけでも、迷宮の番人たる巨人に、ギリシャ伝説の女神、ユダヤ人の王様とバラエティが豊かすぎる。コレが人類修復と言う旅路なのか。何か違う気がするがそういう事しておく。

「おい。ドンドン肉を持ってこい。全く腹に溜まらん。質より量だ」

「いや干し肉だからそりゃお腹にはたまらないとは思うんだけど。フルーツの方が良いんじゃないかな」

「このキツめの塩味の付いたジャンク具合が好みだ」

「ああそう……」

〈……よく考えてみたらカルデア側も、黒い騎士王と伝説のスパイが、食事について会話している時点で中々であつた。今も自分の隣で、可愛らしく干し肉を齧り「からいです……」と日本最高峰の女流作家が呟いている時点で中々であつた。

うおおおおおおおおお!!(大興奮) ……凄い(カワイイ!)女だ。からいです、つてちよつと尻すぼみしていくのが個人的な萌えポイント。余り可愛い言葉を使うなよ。ママに見えるぞ……? いっそママにするぞ……? (脅迫) こんなハゲチンピラのママに強制的にさせられるとか香子さん可哀そう。  
「うう……まさかのキャットの出番なしとは……」

「仕方ないですよ。急に決まった宴会で、速度が優先されましたから。いかにキャットさんが料理について明るいとはいえ、タイミングが合わないのでは仕方ありません」

「うぐぐ……直ぐに作れる三分キャットクッキングの放送を検討するべきか」

「三分でお料理が出来るんですか! マシユ・キリエライト……目からうろこです……」

〈世の中の大半の三分クッキングは微妙に嘘が混ざっているというか。でもタマモキャットだったら本当に三分クッキングできそうなのが凄い。



「ふふ、皆さま楽しそうですね。マスター」

◇◇うん。皆打ち解けて行けると良いねえ。

◇◇それは間違いないが……楽しんでる美しい貴方を見るのが一番良い。

これ以上香子さんに正座させられるのもかわいそうなので、まあ流石に上を選んであげましょう。実際ホモ君がクツソ寒い口説き文句を言うのは見たくありませんし（無礼）もう大分仲良くなっているとありますが。

「そうですね」

◇◇そう言つて、香子と共に談笑するメンバーを見つめてみる。そうして見つめていれば折角タイミング、打ち解けて欲しいから少しサポートしてみる事にする。そうして貴方が視線を向けたのは……

◇◇ジャンヌ・オルタの居るグループ

◇◇セイバー・オルタの居るグループ。

◇◇タマモキヤットの居るグループ。

おつ、コレは交流フェイズ。やっぱりFGOといえば絆上げと絆ボイスですよ。カルデア・ランチタイムは俺達の青春。という事で、さっきの会話から、一番人数の多かったであろうジャンヌ・オルタの居るグループにちよっつかいかけてみませんか？ いっちゃんいましてよーうよ！

「——お？ ジャンヌの所行くのか、俺も行くよ」

◇◇貴方がジャンヌ達の方に足を向ければ、マシユの隣に座っていた立香も腰を上げた。自分のサーヴァントの方に向かうのであれば、やはり気になるものだろうか……とか考えつつ、貴方はジャンヌに声をかけた。

「——あら、マスターちゃんにハゲ。こんばんは」

「……えっ、自分の仲間をハゲ呼ばわり？」

「此奴がハゲ呼ばわりされるのは何時もの事。だから良いのよ」

「つるつる、してる。ぴかぴかで、きれい」

うしくんの無垢な一言！ ホモ君に致命のダメージ！ 凄いですよ、イベントムービーでも何でもないのに口から真っ赤な鮮血を吐き

出すホモ君。こういうプレイヤーキャラ虐めにも細かいですよねF  
GORPG。

あつ、うしくんが凄い申し訳なきような表情をしている。ごめんね  
うしくん。このクソチンピラホモの精神力がクソ雑魚ナメクジな所  
為で……

「…………ふくくくつ」

「良いわよでつかいの。もっと言つてやんなさい」

「えっ、でも、やすとも。ちだらけだよ？」

「嬉しいと血を吐くのよそのチンピラは」

「えっ!?!」

純粹無垢なうしくんを騙すな(半ギレ) 人間がなあ! そんな可笑  
しな性癖をなあ! ゆゑるゝさゝん!!(無言リボルケインクラツ  
シュ失敗投稿者) そんな事したら邪ンヌが爆散しちゃうだろ! そ  
うされるだけの事をしたんだよ、彼女は…………!

「いや、そんなことは無いから安心してくれ。後ジャンヌはある事な  
い事をアステリオスに吹き込まないでくれ」

「ちよつと揶揄っただけよ? 気の置けない仲間の間のじゃれあいと  
か、慣れておいた方が良いでしょう? お節介つてやつ。そうお節  
介」

「いや明らかに康友への悪意百パーセントだと思っただけだな」

〈おのれジャンヌ。コレが竜の魔女のやり方か…………茶番は兎も角。  
貴方は、エウリュアレに声をかけた。楽しんでるかい? と。他は  
兎も角として、彼女としては、騒がしい場は合わないのではないかと  
思つてしまったから。

「…………まあ、そこそこね。悪くはないわ」

〈そうか、意外だね。

〈やっぱリアステリオスが居るから?」

あつ、その選択肢出しちゃつたら下だよ下(激震) 明らかに上を選  
ばせる気のないスタッフに感謝…………っ! 圧倒的感謝…………!

「…………!」

「…………ほくへっ」

「ほらアステリオスこれ食べてなさいフルーツそこそこ美味しかったからね？ ホラ量もあるからいっぱい食べなさいいっぱいね」

∟物凄い勢いでフルーツをアステリオスに持たせてから……エウリュアレは改めて此方に向き直った。とても凜とした、正に女神、と呼ぶのが似合う。そんな表情をしながら。だが先ほどの態度から考えるに、それを素直な気持ちで見るのは難しかった。

「ふ、私は女神よ？ 捧げられた宴は最低限楽しむ位の礼節は弁えてるわよ？ それが愚かな人間たちに関する物だとしても、ね。ええ。慈悲深いでしょう？ 私は。ひれ伏して奉つても……」

「ゴイツ、入れ代わり立ち代わり構ってくる野郎共に一喜一憂してたアステリオス見て凄い優しい笑み浮かべてたわよ。ギリギリ女神としての体裁は保つてたけど、アレは誰にだってわかるわね。間違いな

く

アイ・オブ・ザ・エウリュアレ  
「女神の視線!!!」

「どわっ!? ちよっ!、ちよっ、宝具撃つんじゃないわよ!」

だいぶ喜んでんじゃんアゼルバイジャン（感謝の五体投地）ほんへよりもエウリュアレちゃんの態度が露骨でウレシイ……ウレシイ……もつとイチャイチャして♡ しろ（豹変）あんまり尊いから気持ちよくなってきたな……（参拝）

あ、うしくーん! うしくんはどう？ 楽しい？（下衆顔）

「アステリオス。エウリュアレ、楽しそうか？」

「う？ うん！ えうりゆ、あれ。うれしそう、だ！ ぼくに、ほしにく、たべさせてくれて、たのしそうだった!」

「アステリオスウウウウウウ!! 今すぐ私を担いで砂浜へ!! 星が見たくなったわ急に! ええなんでかしらね!」

「え？ わかつ——」

∟ああいや良いんだアステリオス。彼女はどうかやら酔ってしまったらしい。それでここから離れたくないのにそんな事を言っているのだろう……優しく介抱して上げなさい。貴方は満面の笑みでそう言つて、立香と共にその場を後にした。

「あ、ちよ、アステリオス。大丈夫だから。酔ってないから。酔ってな

いから」

「酔ってる奴ほど酔って無いって言うらしいわよ」

「本当に覚えてなさいよこのハゲエエエエエ!!!」

——立香君もニッコニコ！ ジャンヌの所に行って良かったです  
！（小並感）

と言った所で今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。

## 海賊の宴 その二

皆さんこんにちは、ノンケ（アルテラ・サンタ）です。も、もうサーヴァントが居ない……どうすればいいのか……そうか！ サンタだ！ 悟った。でアルテラサンタを見返してみた。設定で頭大爆発した。二部六章と同じゲームのキャラクターか本当に？ 何も分からない……

前回のうらすじ（番人必殺） 邪ンヌ、うしくん、女神様と交流いたしました。尚一番いいダメージを叩き込んでくれたのは牛くんの模様。無垢な子供の無邪気な一発程、正直ダメージが大きいというのを悟らせてくれました。

「……ジャンヌ達、楽しそうで良かったな」

〳〵心に傷は負ったがな、と冗談を混ぜて言葉を返す。それがまるきし冗談と言う訳でもないが……無垢な言葉ほどダメージの大きいものはないというごく当たり前の常識を、貴方はこんな常識はずれな特異点で改めて学ぶことになった。

「まあ、康友の心のダメージと引き換えに、あの三人は楽しそうにしていたんだから。取り敢えずセーフとしておこうぜ。他の人を笑顔にできたんだから。それが男の勲章つてもんだよ。なあ相棒」

〳〵アステリオスが喜んでくれてよかったぜ。

〳〵ジャンヌの全力全開の悪意が無ければパーフェクトだったんだけどもなあ

自分の苦しみの理由を他人に押し付けてはいけない（戒め） という事で選択肢は当然のように上です。まあ、邪ンヌが割と原因である可能性が無い訳ではないんですけれどもねえ。何時かスカート引きずり降ろす位はやってやる（小並感）

「そうだなあ……あ、そうだ。もう一組位、見て回るか？ そろそろお開きの時間だろうし最後に一つ。どこ回る？」

〳〵セイバー・オルタの居るグループ。

〳〵タママモキャットの居るグループ。

〳〵もう寝る。

無慈悲な一番下の選択肢よ……でも、やっぱり僕は、セイバーオルタ（MKMT）。というか、デオン君ちゃんと会話がしたいんですよ。キャットは自分から距離を詰めて来てくれるので絆も上がりやすいんですけども。デオン君ちゃんは案外と護衛としての距離を保ってるので、逆に絆が上がりづらい。

ここでガッツリ絡み合って、二人で盛り合って、絆塗れになろうや（糞チンピラ）

「よし、じゃあ行こうか……それに、デオンが干し肉を独占しようとするセイバーをそれと無く抑えてくれてるしマジで止めよう流石に。もうあれ何十枚とかそういうレベルじゃないぞ」

「――サーヴァントは塩分過多になるのだろうか。分からないが……間違いなくその後には空腹になる人は出てくると思われるので止めないといけないというのは間違いない。ここはマスターとしてしっかりサーヴァントを御すべき場面だろうか。」

「オルター、オルター、そろそろ干し肉齧るのストップ―」

「……む、マスターか」

「マスターも一緒じゃないか……って、どっちも僕らにとってはマスターだから、これじゃ混ざってしまうね」

「ハゲ呼ばわりは勘弁してくださいと言わなきゃかと思っただが、流石に常識人枠のセイバー二人がそんな心を抉る様な真似はしないと信じているので、余計な事は言わず、マスターでいい、それよりも楽しんでる？ と声をかけた。」

入って（行くから覚悟して）どうぞ。お邪魔しまーす（無許可） 藤丸！ セイバーの脇を固めろ！ 俺はセイバーの脇を固める！

どっちもセイバーなんだよなあ……マスターとマスターに挟まれてセイバーがマスターになる可能性が……？（オセロ風） デオン君ちゃんがマスターになってくれるならサーヴァントやっていいかも（即落ち）

「ああ。こうやって屋外で焚火を囲むのも久しぶりだ。昔はこうやって、野宿をする事も多くてね」

「へー……セイバーはどうだったの？」



けてるぞ!!! よかった…世の中まだまだ捨てたモンじゃ（ry

＜そう言つて此方を向いたデオンの言葉に、少しドキリとする。一応、そういう意図が無かつたわけではないのだが、ここまでスパツと見抜かれるとは。流石に人の目を搔い潜る能力を極めたサーヴァント。

「ふふ、分かるとも。心を読んだ…つて訳じゃないけど。わざわざ君が一番信頼している香子の元を離れて、色んなところを回つてるんだ。これを期に親睦を深めようと思つて居るんじゃないか、と邪推しても何もおかしいことは無い」

＜＜そこまで分かつてるなら話は早い。リードしてくれよ、王子様＞＞じゃあ単刀直入に。朝までは無理でも、色々訊いたり聞かせたりしよう。

盛つたり盛り合わなかつたりしろ（選択肢下）

「良いとも。そうだね、何から話そうか…：僕の生前の事でも良いし、セプテムで、潜入していた時の事でもいい。あの時話さなかつた雑事でも、話のタネくらいには、なるだろうからね」

＜――目の前で燃える焚火の前で、貴方はとめどもない事を話した。嘗てのフランス時代での事、宿敵の様な男がいた事。麗しいご婦人方と戯れた記憶、それを少し照れながら話すデオンは、なんだか新鮮だった。

「マスターに聞かせる話じゃないんだけどね…：恥ずかしいものだろう？ 甘つたるいラブロマンスなんて他人に聞かせるの」

＜＜ヒューー！ キスとか普通にしてたんだろうなあ？ プレイボーイ？

＜＜ドンドン聞かせてくれ。そんな話をサラツと聞けるくらい良い男だからな、俺

ヴォエ!?! カア気持ちわりい…：なんだお前え…：お前は所詮、人理保証期間カルデアの補欠員なんだよ！ お客様の言う事には絶対服従なんだよ！（傀儡） 選択肢下つて言われたら犬みてえに選択肢下を舐め回すんだよ、わかつた!?!

「…：ふふ、そうだね。マスターは良い男だよ。色々見た目について



言われるけど、その胸の内の熱さに触れれば、そっちもそう悪くない物に見えてくる。僕みたいだね」

∨そう言つて笑うデオンに、貴方は笑顔で返す。結局、貴方達は立香とセイバーの命がけの鬼ごっこが終わるまで話続け、立香の『康友！ H E L P！』という助けの声に応える事は終ぞなかつたのである。

可哀そうだけど、コレ戦争なのよね……お前から切り出したケジメ案件なんだからキツチリキャツチするんだよあくしろよ。あつ、いよいよ魔力放出で藤丸君が飛んだ！ この人でなし！ でも俺はデオン君ちゃんと話し合うので忙しいから……

∨話を終えた貴方と、何故かボロボロになってしまっている立香。二人が合流した時……同時にカルデアからの通信が入った事に、二人は顔を見合わせ、直ぐに通信を立ち上げた。

ん？

『——やあ、楽しんでるか二人共』

『取り敢えず宴を邪魔するのも忍びないから、最低限の人数で先ずは共有してから皆に伝えて貰おうと思つてね。未だ解析中の部分も多い。そして、結果が出たからこそ、更に調べる部分が増えたというものもあるから、先ず一区切りの今に』

∨——それは曰く。例の、『島に巢食うバケモノの反応』の解析に、一つの答えが出た、という事で……ここから離れて話を聞くにせよ、取り敢えずは護衛が必要か。貴方は香子、立香はマシユに目を向けた。

——と言つた所で、今回は此処まで。ご視聴、ありがとうございました。

## 悪魔の証明 その一

皆さんこんにちは、ノンケ(ご飯山盛りオカン系騎士)です。円卓の騎士は山盛りご飯の事しか考えないのか(失礼) とはいえガウエインはマッシュマンだし……セイバーがああ表情をするのも致し方ない気がいたします。雑でしたの一言に込められた負の感情ってなんだよ……(困惑)

前ッ回!! のうらすい……(宴会堪能) 皆宴会を楽しんでいる所に、ホモ君が仲の橋渡しに向かいました。結果として、うしくんもエウリユアレちゃんもジャンヌも元気になって、引き換えにホモ君が血反吐を吐きました。ヨシ! NOダメーじだな!! あ、後ロマニが報告があるそうです。

〳――宴会が盛り上がっている、そこから少し離れた先の砂浜近くにて。貴方と立香、マッシュと香子の四人は、ロマニからの報告を聞いていた。と言うのも、ここに居る途中で寄った島で探知した、例の目玉柱の反応を解析していたのだが……

『――正直、信じたくはないレベルの結果が出ちゃってね』

『他のメンバーには後で話すとして……で、ロマニ』  
『結論から先に言おう。あの反応、僕は様々なサンプルと比較し、解析を試みてみたんだけど……何度比較しても、同じ結果を出さざるを得ない。その例の目玉の柱は、伝説上に語られる、本当の悪魔の反応だった』

〳悪魔。サーヴァントや、レイシフト。特異点。もういよいよ行く所まで行った気がしてしまう。こうなれば天使も出てくれば面白いな。とかまで考えてから、流星に真面目な方向に舵を切った。ロマニが信じたくないという程の怪物なのだろうか、悪魔と言うのは。

「……なんか、悪魔って言うのと凄く狡猾なイメージがあるけど」

『うーん。悪魔の伝承は色々あるけど……魔術世界における悪魔の存在と言うのは、一種の病気と言うか。ウィルスというか。そんな感じの、実体のない存在なんだ。その筈なんだけど、それがガッツリ実体を持つてるっていうのが、ね?』

型月における悪魔と言うのは人に取り付いて頭を野獣先輩にする能力があります(大嘘) より正確に言えば、人の願いに取り付いてその願いをひでにした上で成就させようとしてきます。ひでが成就するとかヴォエツ!?

『……もし本物の悪魔だとして、気になるのは、あの孔明の言っていた名前だ』

「フラウロス、って名前?」

『そう。この前は解説し損ねてしまったソロモン七十二柱。その一柱であるフラウロスだとも。序にその七十二柱辺りも解説しているか』

✓——そもそも、ソロモンと言うのは、今サーヴァントして味方になっているユダヤ人の王でありエルサレムを続べた愛されし者、ダビデの息子である。知恵者として知られ、シバの女王から財宝を賜った逸話が有名であった。

『また、ソロモンのもう一つの渾名……魔術世界においては、表の功績よりも重視されるのが魔術王としての名前だ。魔術師としての彼は、後続に大きな影響を与えた二つの魔術書を書いた事で有名でね。一つは『ソロモンの大きな鍵』、そしてもう一つ』

『ソロモンの小さな鍵』、またはゲートティア、と呼ばれる魔術書。そこに記されていたのが彼が契約したという七十二柱……フラウロスを含む、悪魔の事だ』

大きな鍵が別にどうでもいい書物って訳ではないんですけどね。因みにF G O R P Gでは条件を満たせば写本を手に入れる事も出来ます。と言うかプレイヤーにとって活かしやすいのは大きな鍵の方に乗ってる護符なので、やり込み極まりプレイヤー兄貴姉貴は此方の方がおなじみだと思います。

因みにホモ君が使うことは無いと思います。腐つても鬼種の魔持ちですから、護符でバフを一々つけるよりも全力でぶん殴った方がやりやすいです。

「私も基礎知識は知っています。契約した悪魔から力を借りる術式が乗っているだとか」

『借りる事の出来る力は千差万別。財を成す方法、姦淫について、失せ者探しなど様々な事が出来て、その悪魔の形も千差万別なのさ』

『獅子、三つ首、ドラゴン……まあ、悪魔に決まった姿形は存在しないから、それは兎も角として。その目玉の柱がソロモンの七十二柱の一つなら相当な脅威と思われるのは間違いない。何せ、名前付きの神秘の塊。高位の幻獣種を凌ぐレベルだろう』

◇◇ 高位の幻獣種ってどれくらい？

◇◇ ふーん……かんいんってどんな意味なのドクター

あつ、もう下以外見えなくなっちゃったゾ……教えてドクター。姦淫ってなんですか？ マシユが居る目の前でさあ、語ってくれよボーイ！

『えっ』

『おや？』

「……姦淫、の意味ですか？ それは……確か」

「——オウヤストモオマエオモテデロボチコロシテヤルカラヨオ……！！」

◇——ドクターを揶揄う積りで言った一言。しかし、其処に釣られたのはまさかの貴方の相棒である。目を爛々とさせながら彼は無言で拳を構えて見せる立香を見て、コレは地雷を踏んだと悟った貴方は、取り敢えず撤退を選ぶことにした。

しまった!! マシユには超過保護タイプの先輩が居たのを忘れてた！ 立香の目が攻撃色になっている……鎮めなきや（ナウシカ並感）とはいえもう殴り合う事は確定しているので久しぶりに対人戦をしてみましようか。

く力……ツトオ!!

ま、カットなんですけどね（容赦ゼロ） だって……藤丸君と只管にしばき合う絵なんて全く映えませんし、血なまぐさいだけですし。詳細を凄じ雑に言うとなると、最終的にホモ君は角を生やす大事になりました。

「……テメエ次に可笑しな真似しやがったら灰にするぞ」

「せ、先輩とやっさんの殴り合い。初めて見たんですけど、凄まじかつ

たです……！ コレが親友通しの」

『鬼気迫るとはこの事だよねえ。両方お互いを喰らい合う、ケモノの如しだったよ。いやーお酒の良いツマミになった』

『……こわい』

「……」

くロマニが泣いている。そこまでの殴り合いでも無かった気がするのだが、とは立香の言である。組み付いて恐ろしい殴りあいを演じたおかげか、物凄い血飛沫が舞い上がっていたのは間違いないが。因みに基準として、香子は余りの凄惨さに気絶していた。

「中断しちゃってごめん。続けてくれないかな」

『うん。ロマニが完全にビビりあがっちゃったからこつからは万能の天才、ダ・ヴィンチちゃんか解説役に回るよん。で、さっきの続きだけど……高位の幻獣は、それこそサーヴァントに匹敵する。中には上回る種も存在するけど基本はそんな感じ』

FGOのエネミーの中には、それこそバフモリモリに持ってサーヴァントをまっくのうち！ まっくのうち！ まっくのうち！

まっくのち！ して四肢欠損どころか霊基粉碎迄持つて行くバケモノとか居るんですよ。スプリガン系とか。キメラ系とか。大蛇系とか。皆嫌いかい？ うん！ 大嫌いSA☆

くサーヴァントの恐ろしさは、貴方も立香も身を持って知っているのだ。人間の中ではそれなりに腕利きの自分達ですら、本気、全力のサーヴァントを相手には、不意打ちを併用しても全く歯すら立たない。

「それを上回るレベルの……」

「竜種、それと同レベルと考えるべきでしょうか。流石に純血には劣るにせよ」

「オルレアンのアブニールと同レベル……？」

「いえ、先輩。それは流石に上に考えすぎです。アブニールは竜種の中でも上位も上位の怪物です。サーヴァントが……そうですね。戦闘機一機分だとすると、アブニールは凡そ十機編成レベルです」

く……想像するだに悪夢だった。自分達はそんなのをオルレアンで

相手にしていたというのか。ジークフリートと言うファブニールに  
対する切り札が無ければどうなっていたというのか、考えたくもな  
い。

因みにそんな怪物相手に藤丸君は剣を持ってぶっ刺しにいった  
んですけど、その辺りどう？ (感想) 出そう？

「……幾らジークさんがボロボロにして……最後の一押し……だとし  
ても俺……康友と同レベルの無茶を……!?!」

『うーん今更。まあ、アレに関してはタイミングが完璧すぎた、という  
事で』

∟何故無茶の基準が自分なのか。正直非常に文句を言いたい所だが  
……とりあえずはもう一つ話を聞かないといけない。

∟じゃあ、その悪魔の強さは？

∟ファブニールが十機……じゃあ、悪魔は？

十四万!?! (反射神経) サーヴァント十四万機分とかもうそれはO  
LTと人類悪七つのチームか何か? 多分光の戦士とか七兄弟とか  
読んで来ないとどうしようもないレベルだと思うんですけど。

『そうだねえ……凡そ五機分、かな?』

「それでも十分すぎる脅威ですね」

「全く、サーヴァントのバーゲンセールだな……吐き気がしてくるぜ」

Mツパゲ王子!?! 藤丸君がグミ撃ちをする日が来るのか……髪が  
青くなるまで鍛えれば多分サーヴァントにも間違いない勝てるよう  
になると思います (確信) あれ? そう言えばお供がハゲ……成程、  
Mツパゲ王子だな藤丸君は! (確信)

——と言った所で、今回は此処まで。藤丸君にSSGS覚醒フラグ  
(幻覚)が立った重要な回でしたね(発狂済み) 幻覚は兎も角として、  
どうやら敵が見えて来たのは間違いないので、重要だったのは間違  
いとは思いません。

ご視聴、ありがとうございました。

## 悪魔の証明 その二

皆さんこんにちは、ノンケ（お姉さん系マーリン）です。可愛い可愛いマーリンなんですけれども、どうにもロクデナシ臭がぬぐえぬ女。おいお前、どうやってプーサーを王にした!! 言え!! エッチな事をしたんでしょうが!! あの黄金の王を筆おろししたんでしょうが! いえっ! おらっ! ちんちん亭!

前回のあら……うらすじい……（訂正完了） マシユにドスケベないやらしい事を教えマシユ！（同人誌） マシユ清純警察だ！（人類最後のマスター） 何が目的だ！（殺意全開） 立香あ!! ホモオ!! こんな感じですよ。

「……なんか、血が砂浜に点々としてるんだけども何だこれ」

「さあ。砂浜とかズツタズタだし、夜の間には獣同士が食い合ったんじゃないの? あ、ホラ。向こうにも血が飛び散ってるし」

「だとしたら凄まじく気性の荒い獣なんだろうなあ……」

▽ エロを望んだ獣と、後輩を守ろうとした獣の殺し合いであった。勝ったのは何方だったのか全く覚えていないが、最後はお互いに派手に互いの喉首の締めになったのはギリツギリで覚えていた。

「……本当に大丈夫ですか?」

「うん。ケガもそんな深い物じゃないと思う。僕の見たり、の感想だけ」

「そう心配しすぎるのもいかぬ。男は河原でイカ臭い本を取り合って殴り合う位、逞しいのがベストな塩梅。それ以上は薄口すぎて逆に塩分濃度が濃くなってしまふのである」

『それはしようゆの話じゃないかなあ……』

あながち間違っていないのが困る。実際イカ臭い話題に触れようとしたホモ君とそれを止めようとした藤丸君の殴りあいです。むつつりの方が案外濃い性癖してるって言うのも、正しい事は正しいんでしようけども……お前は一体何を言ってるんだ（自己判断に依る覚醒）

『さて、船長はこの島で船を修理してから出発するらしいから、僕ら力

ルデアも、それに協力する事になる。で、僕らに任せられた任務は二つ』

『一つは船の資材探しと食料の確保。もう一つは、この島の脅威の排除。先ほど、野生動物の群れが生息しているのを目撃したらしいから、一つ強く当たって蹴散らして此方に向かってこないようにする、と言う話だ』

＜エウリユアレが獣共を魅了して、此方へ向かわせてきた時よりはやりやすそうだ。そう貴方が漏らすと、エウリユアレは少しばつの悪そうな顔をした。

「別にけしかけた訳じゃないわよ……ただ、私とアステリオスに近づくと、怪しい奴を潰せって命令しただけで」

「けしかけてんじゃん」

「守ってくれればそれで良かったのよ。でも予想以上に張り切ってますって」

『いやあー女神様からのお熱いコールとなると、そりゃあやる気だつて満々にもなるよねうんうん。僕も命を燃やして向かって行っちゃうなあ』

ロマニが向かって行つたところで、多分ホモ君か藤丸君の指先一つでダウンが関の山でしょうね。因みにロマニを殺すにはマジ☆マリの正体を教えるだけで十二分です。多分自分からひでぶつ、と言つて爆散するでしょう。

『——まあ、要するにエウリユアレ神の所で慣れた簡単な任務って事で、どっちがどっちに行く?』

＜レツツ！ 木材収集！

＜獣狩りの夜を始めるとしようか……

さて、何方を選んだかで展開が変わりそうな選択肢ですか……コレはね、余りにも分かりやすいですよ私には。多くのRTA走者兄貴姉貴を見て来ましたからね。一見楽そうな選択肢には当然のように罠が待ち構えてる、ハッキリ分かんだけ。

という事で、選ぶべきは下。ある程度のリスクを最初から背負つて World War しよう！



「じゃあ俺が木材と食料か。セイバーが居てくれれば沢山木材を持ち帰れそうだ」

「私を木こり代わりに使うとは、良い度胸だなマスター」

「えっ、単純に力持ちだからいっぱい運べるんじゃないかと思っただけど……あのすいません、その聖剣を仕舞って頂けると」

「昨日の二の舞になりそうな愚かなマスターは放っておいて。此方は此方で仕事に向かう事にする。ダ・ヴィンチ曰く、此方には島に住んでいて、獣等の場所を把握しているアタランテ、メディアが付いて来てくれるらしい。」

「狩りせず獣を追い払う、など初めての経験だが……まあ、無茶と言う訳ではない。森の中では私の方が、何かと上手い事やれるだろうからな」

「追い払った所には獣避けの結界を張りますので、お任せください」

しかも獣を追い払うためのプロフェッショナルが二人も！ 勝つたな（確信） 強力なNPCが二人、護衛、援護、攻撃にそれぞれ強いサーヴァントを仲間に、隙の無い完璧な布陣で、望むのがただアニマルを追い払うだけ。こんなクソ雑魚ミッションで失敗するやつとかおらんやろwww（盛大なフラグ）

「よし。私が先導して、獣が徘徊しているエリアに連れて行く。獣全部を追い払っていきはキリがないからな。此方の浜に繋がるルート辺りだけを潰していく事にする」

『此方でも野生動物の反応はモニタリングしておくから、見つけたら報告するよん』

「バックアップも万全。サーヴァント五人を投入する、大掛かりな獣の追い払い作戦が開始された。アタランテの足取りに一切の迷いは無く、ドンドンと森の奥へと突き進んでいく。ダ・ヴィンチが獣の生命反応を捕らえたのは、ほんの直ぐ後の事だった。」

「さあ、狩りの時間だア！ こんな獣風情に負けてるようじゃ、人理修復を志すマスターチャンとしては失格なんですね。さくつと攻略していきましよう……オオン!?（直撃）」

「キキッ!! キキキキッ!!」

……ふーん、成程ね。まあ、泥団子一つぶつけられたくらいでね。怒る様じゃプレイヤーなんてやってられませんよ。今度こそ慢心を捨てて あ、いて。あ（棒読み）

……じゃあオラオラ来いよオラア!!（一気豹変）あつたまきた、そのサルウ……!! コレは許されない、顔面に拳をぶち込んで修正しないと、お前みたいな三流アニマルの相手はもうごめんだ。二度とこの世界に居られないようにしてやる（過激派）

怒りの力……ツトオ!!

ㄟ滅ㄟ

ああ、あ、あ、ああああああああ（動物虐待に感激する人間の屑）そりゃあ泥団子顔面に叩き付けられれば水の皇女だってブチ切れるもんですよ。角だつて生えても仕方ない。

「……お前が獣の様だつたな」

＞否定は出来ない。とはいえ、あの泥団子が一体何を使って作られたものなのかを悟った時点で、貴方は一切の容赦をやめたのである。敵にソロモン王が居るのなら、こっちはハンムラビ法典を適応して対抗する。目には目を、歯には歯を。

「ちよつと待つててくれ。水を取つてくる」

「……ご主人。ちよつと臭いのである」

「正に動物らしい攻撃の手段でしたね……」

うんこ野郎だ！（ストレート） いやもうホント臭いんで、もう無理です（迫真） 何という理性の欠片も無い野生感溢れる攻撃をこんな所で受けるとは……閻魔亭のウツキー達つてまだ理性的だつたんすね（感心）

因みに某フロムゲーよろしく糞叩きつけられたら毒、とかそう言う鬼の様な仕様では無く只臭く、テンションが下がっているだけです。お陰でデバフ掛かつてるんだよなあ!!

〳色々と限界寸前になりながら水を浴びて。顔や何やらについた汚れを落とす。団子が新鮮だったお陰でこびり付いたりすることも無くさつと落とせて、カルデアの服にも自浄作用があるので、匂い自体は残らなかつたのが幸이었다。

「……ごめんなさいマスター」

「えっと、あの、他意が有る訳では、無いんですけど」

「消し切れたといってもキャットトの鼻にはピンピンに伝わるBAD・スメル」

〈ただ、女性陣から若干距離を置かれるようになったのは間違いなく。あのサル共は必ずわが手で処すと決めた貴方……だが、それと同じくらいに真剣な表情をしながら、森の奥を睨みつける女性がいる。

〈〈どうしたんだ、アタランテ。

〈アタランテ……もしかして、俺って臭い？

そんな直接的な事を聞いていくのか……（困惑）自分で傷つきに行くとかお前精神状態おかしいよ。まあ、容赦なく傷つけに行くわけですけどね（選択肢下）

「……いや、汝が匂う訳ではない。見ろ」

〈そう言つてアタランテが指し示した先に見えたのは……赤い、何か。そして錆び臭い香り。間違いない、血痕だろう。そしてその近く。視界に入ったそれを見て、貴方は咄嗟に香子に近づいてその目を塞いだ。

「これは、酷いな」

「……っ！」

「ううむ。腸、首、ズツタズタであるな。狩る、と言うより……血に酔った殺し方。獣でもこうはせぬというもの」

さ、サルウ……（慟哭）

「先ほどから、幾らなんでも獣たちの血の気が多すぎるとは思ってたが、どうやら我々より先に、この森で獣を狩り始めた連中がいるらしい」

「……味方、だとは思えないね」

「目についた者を片端から、と言うやり方だ。話を通じるかどうかも分からん」

〈森に潜む、謎の侵入者。その殺戮の後は、アタランテの見つめる先、森の奥へ向けて点々と続いているのだった。

やだ怖い……やめてください……！アイアンマン！

と言った所で、今回はここまで。ちよつとサルウ！ にそう言う事をするのは止めて差し上げろ（震え声） 次回は、こんな悪い事をする変態クソ侵入者に正義の鉄槌を下しに行かねば。ご視聴、ありがとうございます。

## 悪魔の証明 その三

皆さんこんにちは、ノンケ（ダイエット頑張った）です。あの子のお腹を、むにゅつとしてやりたい。渾身の力で。むにゅうつ、と。あの子は可愛い反応を見せて下さる筈なんですよ。最高の一発をくれてやりますよ。あの腹に。その為にもね、是非、引き籠もって美味しいモノを食べさせてやるんだ（ニコニコ）

前回いいいのおおおお……うらすじい……（唸り）サルの仕事により、トンデモナイ勢いでホモ君がぶちきれたわけですが。しかしそれだけでは無く、ちよつと奇妙な事が分かりまして……

「——ここもだ。獣の気配が明らかに減っている。それに、コレだ」  
「ウム……血のフレグランズ。瓶に詰めて売れば獣共があつと言う間に集るのが目に見えるとんでもないレベルの鮮血ぶり。先ほどよりも間違いなく濃い」

「それに、この幹……先ほどよりも暴れ方が激しいね、凄いえぐれ方だ」

▽——謎の侵入者は、どうやら余程の大暴れをしている様だ。そして、もしこれが敵方の刺客だとすれば、この容赦の無い暴れ方は間違いないくエイリークだろう。どうやら獣を吹き飛ばしつつ、この森を徘徊しているらしい。

「足跡も複数人分あるな。兵隊も大分連れて来たを見た」

『ロマニと一緒にサーチしたけど、サーヴァント反応は未だ移動中だ。と言うか相当数の兵隊らしき反応も後ろをついて来てるから、エイリークが突き進んでいるのに合わせて大移動してるみたいだね……ただ数が数だねえこれは』

「そんなに人数がいるのか」

『この前の船で換算したら、三隻分は居る。この前沈められた艦隊の残りがここまで追いかけて来たのかな。そう考えると』

三隻イ!? ええやん（震え声） 団体さんのお付きつて奴だ。あれ、つて事はこの前の凄まじい追跡をエイリークさんがやってのけたと……!?!（震え声） まあ冗談ですけど。バーサーカーにそんな細か

いマネは出来ませんよ（呪殺一步手前）

「数だけならこっちの何倍も居る訳か……」

『一応、こっちの状況はロマニに伝えた。数が数だから、援軍を待った方が良いと思うよ。向こうは、一人一人は大したことは無いけど、サーヴァントに攻撃が通るレベルの神秘を備えた強力な兵隊を有してる。油断していると全滅もあり得るし』

「——という事だけど、どうするマスター？」

〈〈援軍を待つ。〉〉

〈〈待ってる間に他のこっちが不意打ちを受けたりしたらマズい。こっちから仕掛ける。〉〉

ほう、ここで選択肢ですか……大したものですね。しかし、選択肢次第では藤丸君が重傷負ったりするんでしょうか。このゲームの怖い所は、単独行動してる藤丸君が確率次第で普通に死にかねない所なんですすよねえ。

となると、少しでも死にかねない可能性を排除するのは、主人公（ホモ）としては当然の事だと思うんですけど。

〈〈援軍を待つ。〉〉

〈〈待ってる間にこっちが不意打ちを受けたりしたらマズい。こっちから仕掛ける〉〉

〈——援軍を待って戦いの主導権を相手に渡すよりも、多少戦力的に不利でも、確実に主導権を此方に握りに行きたい。そう思った貴方は真っ先に声を上げた。〉

「成程。一理あるな。敵の方が数は多い。数の力で探索されて、包囲された挙句に各個撃破、と言う可能性も無いではない」

「ダ・ヴィンチ。僕らが向こうに奇襲を仕掛けたとして、勝てるかい」  
『……不可能ではない、と思う。幸い、こう言った森の探索が得意なアタランテが此方には居る。森という地で利を得ているのは此方だし、向こうはサーヴァント一騎、こっちは五騎。質は此方が圧倒的有利だ』

サーヴァントが五人も居れば、雑兵が何人居ようが誤差だよ誤差！強気に行く事こそカルデアのマスターの特権なんだよなあ!？」

「——なら、より敵を撃退しやすい形に持ち込もうか。香子、君とメデア、マスターの三人は此処で待機。と言つてもただ待つてる訳じゃなくて、待ち受けて、迎撃する為の陣地を構築して欲しい……可能かい？」

「そこまでの霊地ではありませんし、時間もかけられないので上等な陣地が構築できる訳ではありませんが……陣内で戦う皆様を最低限サポートする程度であれば」

「十分だ。今すぐお願いしたい、二人とも」

〈成程。もう確実にぶち壊しに動くつもりだ。キヤスター二人で構築された陣地に、バーサーカーと雑兵を誘い込んで迎撃する等、殺意の塊である。デオン・ド・ボーモン卿。伊達に貴族をやっていた訳ではない頭の切れ。〉

「分かりました、全力を尽くします」

「了解しました！ メデアさん、拙い腕前で申し訳ありませんが……！ 出来る限りサポートさせて頂きます！」

「いえ、頑張りましょう！ 紫式部さん！」

「アタランテ、タマモキヤットは陽動と誘引を、サポートは僕がやる。ダ・ヴィンチ、マスターへの状況の報告を頼む……任せたまえ」

『モニタした状況を伝えればいい訳だ。任せたまえ』

——という事で、ここでホモ君はお使い係です。色々木とかに印を刻む係です。つっても移動して指定されたスポットをインタラクティブしていくだけなんで、そこまで必死こく必要も無いとも思います。

という事で

—カ……ットオ！

「……」

「……」

〈貴方が指示を受けて刻んだ印が、輝きを持って繋がっていく。特異点Fでも、オルレアンでも見た工房作成だが、やはり規模が違う。大したものは作れない、というメデアの言葉だが、正直冗談ではないだろうかと思ってしまう。〉

「——ふう、こんな物ですか。拙い陣ではありますが」

「いえー！ 霊地にも恵まれず、しかもこの短時間でここまでの物を築き上げたのが物凄いです！ お見事ですメディア様！」

「いえいえ……」

メディアの恐ろしい所は、まだ二段階の変身を残してる所だと思えます（フリーザ様並感） 即席陣地、普通の陣地、でもって、メディアさんが持てる魔術の粹を集めて築き上げた『神殿』。戦闘能力五十三万位ありそう。

それに香子さんもしっかりキャスターなので、メディアさんの細かい指示にも的確に反応してたのが凄いと思った。

「ダ・ヴィンチ様！ デオン様達は！」

『今接触した。でもって……良し！ サークヴァント反応が喰いついた！ 三人を追いかけて来てる。アタランテが今確実に滅らしに行ってる。キャットの攪乱も順調、順調』

＜サーヴァント三人を追いかけて行った先が、更にサーヴァント二騎が待ち受ける構築済みの防衛陣地。相手を一撃で殺しうる虎口、殺し間だ。敵からすれば悪夢でしかないだろうとは思うが。申し訳ないが、ここは殲滅されてもらおう。』

『……準備は良いかい。エイリークから引き剥がした兵隊がそろそろ来るよ。ちよつとずつ殲滅していこう』

「了解しました！ マスター、ご準備を！」

「が、頑張ります！」

という事で再び集団戦ですけど、どうやら最初は香子さんとメディアの二人と戦う様ですけど……これは……後になるにつれサーヴァントが増える奴じゃな？（冷静沈着） 後になるにつれて兵士君達の被害量が増えていくだけっていう。成程、一番兵士君達にとって突破しようと思うならここだけという事でしようね。

（カカロットオ!!（偶にはNormal））

ま、容赦なくカットするんですけどね（冷酷） だって、ちよつと硬くなっただけでセプテムの兵士君達と大してモーションも何も変わらないんですもの……戦い方も大して変化もないし……因みに直接戦ってくれたのは香子さんで、メディアさんは、全くもって、戦って



くださいませんでした……(syamu) やっぱり自分のサーヴァントがNo. 1!!(半ギレ)

「——っ!? だ、ダメだっ! やはりエイリーク様を呼んでこないと全く歯が」

「おやおや、ハイボーイ。どこへ行くこうというのかね?」

「……ほぎやあああああっ!?」

〈とんでもない悲鳴だった。そりゃあ、その背後に、一瞬でサーヴァントが現れたのであるが故、相手にとつてはもはやジョークだと思いたいレベルだろうが……申し訳ないが手は一切抜かない。

く力……ツトオ!!く

もはや画面に写す必要すらない……幾ら群れようと、サーヴァント三騎相手に戦いを挑むこと自体が無謀……! さて、残るはエイリーク氏、貴方だけだ……つて、もうデオン君ちゃんとアタランテにボコられてるうー!?

「……予想以上に嵌ったな」

「ああ。私が引き付けて居れば、全く君の援護とか気にしなかったしね。正にバーサーカーと言った感じの戦いぶりだった」

〈デオンの前で、まるでハリネズミの如く矢が盛られたエイリークが膝をついている。どうやら引き付け……をやってくる間に削り切られてしまったようだ。流石バーサーカー。攻勢に出ている間は兎も角、防御に関しては相当隙があるらしい。

「とはいえ、マスターを近くに寄せずに勝てるなら、其方の方が良いだろう。私がトドメを刺すから、アタランテは万が一の場合を頼む」

「承知した。狩りの最後に油断する訳には行かないからな」

「——■」

いやー、しかしエイリーク氏。ほんへの第三特異点においては結構どうでもいい扱いをされてしまつて残念な覚えがあったんですが。今回も、奇襲を仕掛けようとして返り討ちと言う、大分な扱いになつてしまつて……申し訳ナス!!(介錯)

〈デオンがゆっくりと近寄っていく。確実に仕留めんと、剣を突き

の構えに据えて……だがデオンが、一步を踏み込んだその時……貴方の背筋を悪寒が走った。マスターとしての感覚か？ 否、貴方の体に流れる、血が応えたような感覚だった。

◇◇ 避けるー！ デオン！

◇◇ 下がれ二人共！ なんかヤバイ！

……んっ？ (恐怖) やべえよ……やべえよ……!?

えー、唐突に表れた謎の選択肢を目の前に、今回はここまでです。

あのー、エイリーク氏、何をするつもりなんでしょうか……？



ることなくその風圧でデオンを後方迄吹っ飛ばしたことになる。

あれーおかしいねエイリーク氏筋力そんなにないのにね……現実逃避は止しましょう。なんか、エイリーク氏から、陽炎の如きなんかのふいんき（変換できない）が立ち上ってるのがプレイヤーにもハッキリ見えています。

「ちいつ！ 何処にそんな力を隠し持っていた！」

＜ならばと、二の矢として待機していたアタランテの弓が、次々とエイリークに迫る。陣地の援護を受け、威力も万全の矢に向けて、エイリークが行った事と言えば、振り上げた斧を、思い切り振り下ろしただけ。

「■■■■ツ!!」

「——なあつ?!」

「そ、そんな……一振りで、あんな数の矢を?!」

＜ただそれだけで、矢はあつと言う間に様々方向を変えて、四方へと飛んで行ってしまったのだ。デオンを吹っ飛ばしたパワーは、ただの隠し玉ではない。

あ……ああ……悪魔たん……!!

「■■■■ーツ!!」

＜デオンを吹き飛ばし、更にアタランテが無数に放つ矢をも纏めて弾き飛ばす様などんでもない剛力。バーサーカーとはいえ、常軌を逸した圧倒的な馬力。その理由は……突如としてその体にまとわりついた、焔の如き魔力の高まりだろうか。

『——馬鹿な、エイリークに対して行使されてるこの、この出力は!?!』  
「皆様、お気を付けてください！ 恐らくは、神殿内の私と同等のとんでもない出力の支援魔術が行使されています！ あのサーヴァントに向けて！」

誰が何をやってるかはもう凡そ分かりました……奥様!? 何してんすか！ 止めて下さいよホントに！

「——魔術ではない。そんなニオイがするゾ」

「きや、キャット様。ニオイ、ですか？」

「分からぬかシキブ。この香り、お国は違えど、日ノ本でも主流のワ

ザ。ドロドロラブサスペンスの準レギュラーすなわち……呪術の系統ナリ」

〽そのキャットの発言を継いだのは、ダ・ヴィンチ。

『呪術……エイリーク……ブラッドアクス！ 間違いない、グンヒルドだ！』

「ぐ、グンヒルド？」

『ある意味では、彼よりもエイリーク本人よりも有名な、彼の妻。呪術師の中でも人類史にその名を遺す稀有な人物、魔女グンヒルド！ なんてこった、単純な魔術の実力ならトップクラスの人物による支援魔術とはね……!?!』

またの名をエイリークガチ勢。

えー真面目に話しますと、エイリーク氏には、それは大層大層出来た奥様がいらつしやいまして、その奥様と言うのが、座に居ながらにしてエイリーク氏を操るレベルのバケモンキャスターなんです。多分マーリン、メデアさん、キャストリア、スカデイさんと同レベルのバケモンだと思われます。

ですけど、奥様はそんな明確にエイリーク氏に支援を行ったことは無いんですけど……

「え、えつと！ メデア様！ 私、キャスター素人なのですが、あんななどんでもない出力の支援の術をかけられた相手に立ち向かうのは……!」

「今の戦力では陣地が有っても抑え切れる気がしません！」

『——そう思っても藤丸君の方には連絡してある！ こつちに向かって来てるよ！』

〽とんだ隠し玉である。事こうなれば仕方ない。撤退のし時か……とはいえ放置したままもマズい。取り敢えず兵隊はあらかた片付けたので、後はエイリーク一人を引き付けて置けば、何とか他のメンバーと合流し、撃退することも出来るかもしれない。

〽ダ・ヴィンチちゃん、立香はどっちからこつちに来てる。

〽ダ・ヴィンチちゃん。立香はどれくらいでこつちに着く。

おつ、また選択肢。でも大して変わらないように見えるのは私だけ

で……ちよつと待つて!?(怯え) こ、これ選択肢下、上の会話的に引き付けて置く的な選択肢に見える……見えない? こんな暴走状態のエイリーク氏をここで抑え込むとか無茶オブ無茶。エンジヨイプレイなら無理をせず上を……スウー……エンジヨイ&エキサイティング、忘れちゃダメよ? (選択肢下)

『もうちよつとかかるよ……って、何をするつもりだい?』

〈逃げて逃げて逃げて。無傷のまま、と言うのは流石に良くない。折角の迎撃用の陣地をそのまま捨てるのも勿体ない。出来る限り活用してから撤退するべきではないか、と貴方は考えて……香子に視線を向けた。』

香子さん、君の出番だ! 香子さんにお孫さんをお半殺しにするような荒っぽい方法が取れる訳ないだろ! いい加減にしろ! 実際、香子さんのスペックでエイリーク氏を封殺するのは難しいとは思いますが……

「えっ、あの、何でしょうマスター」

〈鍵は、俺のキャスターだ。彼女を軸にエイリークを攻略する。その貴方は言い放つ。その直後、吠えて向かって来たエイリークの攻撃を……今度はデオン、そしてキャットが割り込んで止めた。』

「——力もにばーいにばーい! そう容易くはさせにやい!」

「マスター、ここで戦う、と言うなら指示を。彼女なら、状況を打開できるとは思えないだろうか?」

まーた俺のキャスター発言。君、遠坂さんちのお嬢さんと違って一切可愛げが無いんですからそんな勘違い竿男セリフ言われたら情緒壊るる〜!! あ〜(反吐) そんなんだつたら土方の兄ちゃん達と盛り合った方がサイコガン……! (過大評価)

〈今使われているのがキャットの言う通り呪術なら。恐らく、それを最も理性的に分析できるのは誰であろうか。メディアは、魔術のエキスパートだが、相手の術が呪術である事を見抜けていなかった、故に呪術にそう詳しい訳ではないのだろう。となれば。』

「わ、私にあの呪術の解析をしろ、と!?!」

〈香子の使う陰陽術は、呪術の系統に連なる物だ。マスターとして、

その程度の知識は人理修復の間に叩き込まれている。それを扱うだけの知識のある香子なら、アレを解析し弱点を見つける事も出来るのではないかと。

こ、このホモツ！ 意外、理性的！ 間違はなくマスターとして——成長しているツ！（ワムウ並みの分析力）プレイヤー的にはずつとフィジカルを鍛えてただけなんすけどねエ（筋肉信者）流石に最低限、態々トレーニングを積むまでも無いサルでもわかる知識程度なら自動習得させてくれるRPGゲームの鑑。なおそれ以上は専用の訓練が必要な模様。これもRPGゲームの鑑。

「しかし……っ」

「——分かりました。今度は、私がシキブさんのサポートをします」

「め、メディア様!？」

「私は、おば様から魔術の手ほどきを受け、それなりには魔術にも明るいですが……逆に言えば、それ以外にはそこまで詳しいという訳でもありません。一定の分野に特化した者は、逆に言えば他の分野にはどうしても疎くなってしまう物なのです」

∨メディアの視線が、真つすぐに香子に向かう。

「専門家がいるのであれば、その力をお借りするのは、寧ろ魔術師としては当然の事です。シキブさん」

「……」

個人的には香子さんの見所さんが増えれば何でもいいです（思考放棄）君がナンバーワンにあるんだよあくしろよ。

「……マスター。私。出来ると思えますか。そんな大それた任務」

∨——貴女にしか出来ないと思う。寧ろ貴女以外に、俺が信じられる専門家はいない。そう貴方は、香子の瞳を覗き込みながら告げる。そうハツキリと言われた香子は……一つ呼吸をしてから、言った。

「皆様、援護をお願いします。出来るだけの事は、してみたいので」

——よう言うた。それでこそ日本屈指の作家や。

という事で、今回はエイリーク氏の攻略法を探る戦いになります。グンヒルド奥様の術を果たして破る手段は見つかるのか。分からない……何も分からない……

## 悪魔の証明 その五

皆さんこんにちははノンケ（マーボー神父）です。FGOのアレも一応サーヴァントなので……実装するなら柴田殿をお先にオナシヤス！ センセンシヤル！ 何だったら六周年サーヴァントは柴田殿で決定！ 以上解散！ そんな事したら暴動起きるって？ 貴様等あ！ 大柄フルアーマー大剣武者に興奮しないと申すか！ オイは恥ずかしか！ お主ら纏めてチエストにごわす！（過激派）

前回のうらすじ（魔女援護） グンヒルド奥様は魔女。エイリーク氏が大好き♡ そんな大切な旦那様のエイリーク氏がピンチになっちゃったわ！ いっけなーい、全力で援護援護♪ なおそれでこっちは大ピンチだよ！ 香子さん、見解をお願いします！

「——出来得る限り、敵方を暴れさせつつ、此方に来ないように抑えてくださるとありがたいです！ 支援呪術の動きが見たいので！」

「簡単に言ってくれる……とはいえ、熟すのが僕らの仕事か！」

「キャットのワイルドセンスが、今解き放たれる！ すなわちスーパークャット！」

＜二人が一气呵成に剣と、爪を日に煌めかせ突っ込む。そして、それよりも早く飛ぶのはアタランテの矢。二人の突撃を援護するように向かう矢は、やはりエイリークによってアツサリと弾き散らされるが……

「甘い。その動きが隙だ」

「キャット！」

「ウム！」

＜振り切ったその一瞬の隙……なんと、二人が選んだのは斬撃では無く、打撃。デオンの蹴りがエイリークの側頭を捕らえる。筋力Aのシャイニング・ウィザードである。たまらずぐらついた体にキャットのタツクルが押し込まれた。

オリオンの言葉を借りるのであれば、しっかりと膝小僧がテンブルを捕らえてる辺り容赦ゼロだなと思いましたが（まる）

と言うかデオン君ちゃんは何処でシャイニング・ウィザードを覚え





しないとそのままちぎれてもおかしくない位斧をブンブン丸してる  
エイリーク氏に太刀打ちできそうにありません（恐怖）

このまま、安定して勝ちを拾いに行きたいので、確実に詰める為にもアタランテさんにも援護してもらって、エイリークの暴れっぷりをキャンセルだ。

「……援護、と言ってもな。アレだけの至近距離で戦っているのだ。狙いをつけて放ったとしても、誤射する可能性は捨てきれんぞ」

アーチャーはん!?（絶望） なにいつてはるんですか!? まずうございませんのこれは!?

……よくよく考えてみればあんな英雄同士の乱戦に弓で援護をぶち込もうとした俺が可笑しかった（反省） ほうれんそうはしっかりしろって言うのは現代社会の常識なんだよなあ（遠い目）

「私は一射に集中した方が良いだろう。其方が知らせて、私がそこで退いた一瞬で撃つ、と言うのが理想だが……一つ間違えれば、エイリークの猛攻に押し切られる可能性も十分ある。理想的な機会というものを、見極められるか?」

〽——断れる状況か、今が。オーライ、任せろ。

〽ちよつと厳しいかもしれない。

んー、香子さんはずーつとエイリーク氏にお熱（ある意味）なので、香子さんのサポートは受けられません。というか、そもそもこの状況で香子さんにサポートしてもらうこと自体がちよつと厳しいですけど……やるしかないんですよねえ。

〽——断れる状況か、今が。オーライ、任せろ。

〽ちよつと厳しいかもしれない。

「良い返事だ。やって見せろよ、小僧」

まあ適当な所でデオン君ちゃんとキヤットに一旦下がるように指示をするだけなんですけどね。ただエイリーク氏のタゲを引いている状況で迂闊に隙を見せたらあつと言う間にこつち来て皆殺しって言う。わは（某クズパパ）

しかし、実際どうしたもんでしようねえ。エイリーク氏の行動を拘束しつつ、こつちに来ないように……あつ（知将覚醒） そうだ。

デオン君ちゃん、ちよつとスキル、はい、よいいスタート（棒読み）  
「——了解した！ マスター、礼装での援護を頼む！」

あ、いっすよ。マスター全力で仕事しちゃうぞー……ゲームだから  
良いですけど、スキル発動した途端にエイリーク氏がデオン君ちゃん  
に磁石みたく引き寄せられていくのがコント見たくて笑うしかない  
というか。

「ず、随分としつかり引き寄せられたな……？ アレはあ奴の……し  
かし、これなら背後に隙だらけ。狙いやすいというもの……！」

まあ、その動きが致命的なんですけどね、初見さん。必殺必中のギ  
リシヤの狩人が居る時に背中晒しちゃうとか、笑っちゃうんですよね  
……（必殺確定）

「喰らえッ！」

背中への傷は戦士の恥だ……だから積極的に傷を付けに行くね♡

人間の屑確定みたいな発言してますけど、戦場では躊躇った者から死  
んでいくってそれ一。すなわち一撃で背後から仕留めるのも決して  
間違っていない。

「——■■■ッ!？」

「悪いが、卑怯とは言うまいな」

「■■■■……■■■■!! ■■■■■オオオオ!!」

「つな、んだと!？」

おや、どうされましたか？ アタランテさん……あれっ？ ちよつ  
と待って!? アタランテさんのヒットした矢が、勝手に……!?（驚愕）  
抜けて……!?（恐怖） どうか傷も塞がっているんですがそれは。  
パワーアップに加えてリジエネ持ちはデーモン止めてえ……（サブ  
タイトル回収） ねーもうホント辛い!

「くっ、この。ならば今の内に出来る限り矢を打ち込んでやる……!!」

「——いえ、恐らくそれは無駄かと」

「<更に一撃を加えようと、矢を番えたアタランテを……後ろから此  
方へ向かってきた香子が制した。」

香子さん!？」

「……それは、私の矢では殺し切れないというのか」

「いいえ。そうではありません。そもそも、恐らくですが、多少の傷程度では全く怯まないでしょう」

「どういう事だ。もしや……奴の術の詳細が分かったのか？」

「メディアさんに協力していただいたおかげで、想定以上に早く。恐らく、彼にかけられた呪術は二つ。一つは今見せた、体を治癒する物。それは分かりやすいので良いのですが……もう一つ、剛力を付与するあの呪術。あれが、不可解だったんです」

「〜曰く、呪術は他者を呪い、破滅させる事に特化しているのだという。呪う、と言う字を使つて言うのは伊達ではない。他者を治癒する程度であれば兎も角として、強化するのは、得手ではない筈なのだ。」「そこで、メディア様のお力を借りて、魔力の流れを調べました……すると、あの魔力の流れは、どうやら体に直接作用している、と言うよりは、彼の在り方に作用しているのではないかと、」

「あり方？」

「バーサーカー、という位は、己を狂気の縁に置く事でその力を増している、と聞きました。であれば……彼の狂気を更に煽る事で、間接的に力を高めているのではないかと」

「故に、暴走しているのと同然。多少の攻撃でも意に介さず、永遠に暴れ続けてしまうのである。自らの体が傷ついているのも構わずに。」

「はえースツゴイ強引な強化……奥様、わりかし旦那様の事派手に使い潰してて草も生えないんですけど。エイリーク氏を使役して良いのはグンヒルド奥様だけだって言う話ですね。エイリーク氏の体はエイリーク氏の物だと思っんですけど（名推理）」

「そして……故にこそ、回復の術式を纏めてかけているのではないかとも思います」

「どういう事だ？」

「アレだけの呪術二つを同時に重ね掛けるのは正直、膨大なリソースを食います。頑強なサーヴァントにかけるには過剰なレベルの回復など、言わずもがな。しかし、必要なのです。どこまでも狂い、己の体の崩壊など気にしない程に暴れまわるエイリーク様には」

……なるほど？

と言った所で、今回はここまでとなります。ご視聴、ありがとうございました。

## 悪魔の証明 その六

皆様こんにちは、ノンケ（巨人王）です。そろっそろスルト君とかの実装されてないけどサーヴァントっぽい人達も投入していく所存。しやあつ！ 次の休みまではサーヴァントシリーズで持たせるぞ！

前回のううらあすうじい波あああああ!!（斉天大聖） エイリーク氏、まさかの奥様の支援によるスーパーバイキング人化。強い。勝てない……本当にそうかな？ それは違いますわ！ 香子はん!? 「ただ強化している訳ではないのか？」

「いいえ……狂気を煽り、その出力を上げているのであれば、限界を超えた動きをしても関係なく暴れ、自滅する可能性も十分にあります。だからこそ、それを補佐するだけの術を行使する必要があります」

〽——確かに大暴れしてるエイリークは、それこそ腕をとんでもない勢いで振り回し大地を叩き割る勢いで走り出している。それこそそんな恐ろしいパワーを発揮して、体がもつのか……香子は、もたないという結論を出した。

「だからただの治癒ではなく、常時治癒の術なのでしょう。どれだけの力量があればそんな真似が出来るのか、香子には定かではありませんが……しかし分かる事があります」

「……それは？」

「長時間は持ちません。絶対に。どれだけの力量の術者でも、どれだけの貯えが有っても決して。その分、短時間であれば、誰であっても蹴散らす事が出来るだけの力を発揮して来るでしょう」

内実はスーパー野菜人というよりは海王拳だったという事ですか（誤字） 恐らくはよんべえ位だと思います（GKU） でもよんべえでもベジータの様には負けてられませんで香子さん！ 言え、対策を！

「故にこそ、ぶつかってはなりません。このまま時間を稼げば……」  
「向こうから勝手に自滅していく、という事か」

〽——結果として、こうして戦わず、兎に角相手をここに張り付ける戦い方は、間違っただけではなかった、という事である。もし、立香と



「——転がったな。悪いが其処だ。メディア、貫いた後は頼んだぞ！」  
「お任せください！」

んー？ おつ、アタランテさんここで天に向けて弓矢を……ってまさか、コレは曲射でそれで空中から降り注いでくる関係上……ギャアアアアエイリーク氏イイイイイ!? ちょ、蝶の標本みたく地面に！ これにはグンヒルド奥様失神案件。

更にメディアさんが何かしら矢におまじないをかけ、地面とエイリーク氏は幸せなキスをして終了。鬼かな？

「これで……位置固定、完了です！」  
「暫し動かぬ絵画と化して貰おうか」

お前を貼り付けにしたんだよ！（容赦ゼロ）そして矢から飛び出すあの輝きは、正に初代ステイナイトでセイバーを拘束した！ あの！ 皆さん！ UBWで白いドレスのセイバーさんが拘束されていたアレですよ！ 撮影しなきゃ（使命感） やっぱり将来はああなるメディア・リリイさんですねえ!! ……ん？ ちよつと待て、なんかエイリーク氏から……

「これで、暫くは……！」  
「——いや、待てー！」

靄が染み出て拘束具に入っちゃう入っちゃう入っちゃう（停止不能） これもグンヒルド奥様の妨害でしょうか。

……それは兎も角として、エイリーク氏の体から染み出てくる黒い靄って、エイリーク氏が焦げてるように見えてちよつとクスツと来てしまいます。まあアンデルセンとシエイクスピアが可哀そうな象（イヴァン雷帝）で遊んでるし多少のユーモアもね？

「こ、拘束が……消えていく！」  
「そう簡単に時間は稼げんか」

しかし、ゲームプレイヤーの性として強力なサーヴァントは手元に引き戻す癖がついているお陰で、デオン君ちゃんとキャットは既に戻って来てくれています。コレでエイリーク氏が突っ込んで来ても抑える事も容易いです。

「——いや、十分だ。これで、もう一回仕切り直し。幾らでも時間を稼



いであげよう」

「キャットの無敵モード！ 金色のスターでピッカピカである！」

「ほう……：：：～  
「ほう……：：：：：：：：：：：：：：～  
「接近してくるまでなら、援護射撃もしてやる」

「次の拘束は、より強く……！ つて香子さん？」

でもその拘束でじたばたしてるエイリーク氏を逃がす必要も無い。お分かり？（Jack Sparrow） 今まで香子さんがただ待機してただけと思いか。香子さんはな……この陣地をフルに生かして砲撃をチャージしてたんだよ！

「皆様……少々派手に参ります！ おさがりを！」

「な、なんか一杯あるけど……もしかしてアレを全部？」

「三十六計逃げるがキャット」

「えつと……皆さん、コレは……」

「うむ。まあ撃ち込むに越したことは無いであろうな。立てなくなるほどに砲撃が叩き込まれば、動けなくなるのは間違いないだろう。時間稼ぎには十分……ではないか？」

～—— 一歩一歩、下がる他のサーヴァント達。その様子を見て、物凄しい申し訳なさそうな表情をしているのは香子である。一発一発は大したことは無いので、見た目とは裏腹にただの豆鉄砲のグミ撃ちであるのは、貴方と香子だけが知っている。

ベジータ!? 香子さんがM字ハゲは申し訳ないが全力でNG。まあ香子さんの胸は綺麗なM字の曲線を描いて（殴打）……さーて、しつかり仕事しようかなあ。まだもしかしたら殴打係として仕事する時が来るかもしれないので。

「……奥義とか、切り札とか、物凄い威力では無いんです……ごめんなさい……メディア様のおっしゃる通りなんです……」

～あつ、コレはついでに泰山解説祭も発動しているな。というのは表情の更なる悪化を見て貴方だけが悟っていた。

ホント絶妙に嫌なタイミングで発動すんなあ。シリアスの、相手の気持ちを読みたい時とかには一切仕事せず、その代わり『ここで心を読むのはマジで申し訳ない』『心を読んでしまつて物凄い恐縮してし

まう』的な場面で気持ち悪く、inして下さるので（皮肉）

「……と、兎も角！ 参ります！」

∠無数の弾丸が、術が、次々にエイリークに殺到していく。初弾が直撃してからは断続的に響き渡る爆発音。見た目は派手だが、その内実は案外そうでもない。しかしながらコレだけの数がまだギリギリで拘束されている体に直撃し続けているのだ。先ず動けない。

『全く相手の反応が乱れても居ないのが笑えるけど……まあ、足止めになってるし、それにそろそろ、心強い味方も到着するから、その道しるべには十分だろう』

『』

『つと、言ってる間にか』

おっ

「おう、また派手にやってるなあ」

『……その割にはその中心の反応全く揺らぎもしてないけど!? ホントにレオナルドから話を聞いた通りのモンスターなんだなあ』

「その割には随分と見掛け倒しの攻撃の様に見えるが」

「すごい……！」

主人公チーム、漸く、遅れての御到着です。

さー光の時、これまで!! 反撃開始だ。お前を芸術品にする準備をしたんだよ！ といった所で、今回は此処までとなります。ご視聴、ありがとうございます。

## 作家の見る海原 その一

皆さんこんにちは、ノンケ（魔女な奥様）です。エイリーク氏を活躍させるために態々出張って来てくださったのが本当に凄い。尚全くセリフが無いのは仕様なんでしょう。それともまだキャラが決まってないという大人の事情からなんでしょう。個人的には凄く上品な『貴族かな?』って言う位の人なのに、夫に關係した途端にヤンキー染みた素が漏れるとかだと最高なんですけど。

前回のうらすじ（普通一徹） エイリーク氏の海王拳を封殺したのは、ぼくの夏休みでした……蝶の標本をぼくの夏休みで知ったのは良い思い出。因みに虫相撲はオニクワガタゴリ圧した記憶が有ります。あ、そう言えば香子さんが最後にボッコボコにしていきましたよね。

さて、藤丸君達も合流し、いよいよエイリーク氏と激突……!? と言うタイミングではございますが、香子さんのあの一斉射を喰らってなお全く怯まないとかダンプカーか何か?（震え声） 短時間では本当にどうにもならない怪物っていうのがハッキリわかりますわね（淫夢令嬢）

「——で? 康友、アレ勝てる相手か?」

「無理。時間稼いで自滅を待とう。と貴方が言えば、立香はあつさりと頷いてマシユをデオンの隣に並べた。それに合わせて、貴方はキャットを一步下げた。流石に攻撃を得意とするキャットを足止め役に起用するのは無理があると思って居たのだ。

「っし、マシユ! お願い!」

「了解しました、マシユ・キリエライト。エイリーク・ブラッドアクス強化形態に対処します!」

メイン盾来た! コレで勝つる! と、確定は出来ませんが、まあ十分防御陣形は形成できたと思います。デオン+マシユとか言う防御のお手本みたいな布陣、本当に頼りになります。とはいえ、こっからさらに三戦目が有るとかこれマジ? エイリーク氏との戦い長すぎだろ……

『——いや、どうやらその必要はない模様だ』



〈——退いていくエイリーク。彼とは、何れこの特異点にて活動する、イスカンドルを叩く時にもう一度激突する事になるのは、間違いないだろう。』

『その激突の機会までに、彼を攻略する手段を考えればいい』

『……そうは言っても、君から送られて来たデータを見る限り絶望的なんだけども。えっ本当に何これ。馬鹿なんじゃないの?』

『それを解析して、対策を見出すのも私たちの仕事じゃないかいロマニ』  
『レオナルド、君は兎も角僕は木っ端魔術師だよ? 神代クラスの魔術師に何をどうしろって言う話なんだよねえ』

いやー、ですけどロマニの言う通りなんですよねえ。FGOの厄ネタは数多くあれど間違いなくその中でもトップクラスの厄ネタがグンヒルド奥様ですからね……彼女の支援魔術、ぜんぜんバカにできないんですよ。

『私だって魔術に関しては木っ端も良い所だよ。それでも私達がやらなきゃ、藤丸君達は私達より魔術に関してはトーシロなのに体張ってくれてるんだよ?』

「そうです。マスターもやつさんも若干心配になる位に体を張って下さってるんです!」

『それに関しては僕褒めちやいけないと思うんだけども』

ごもつとも(反省) でもプレイヤーに取っては直接攻撃は大切な手段でございますので、これからもロマニ様に置かれましては地獄の様な状況にて胃を痛めて頂ければ幸いにてございます(犯罪予告)

『とはいえ、まあ全くその通りだ。子供たちが頑張っているのに我々大人が弱音を吐く訳には行かない。やってやろうじゃないか……と、意気込む前になんだけど』

「どうしたの」

『集合時間をとつくに過ぎてる気がするのでドレイク船長の元に戻ろうか。ホラ』

〈よく見てみれば、天は既に茜色に差し掛かってきている。よく考えてみれば獣を蹴散らすだけのミッシヨンの筈が、エイリークに乱入されて時間を消費した結果がこれである。』

……あつそうかあ(理解) おつ、そうだな。エイリーク氏が悪い！  
(責任転嫁)

く帰還カツ……トオ！く

「……やられたね。アタシらが分散した所を叩こうとするとは。呑気に船直そうとしてた、アタシの認識が甘かったってか」

『いや、今回は偶然向こうが襲撃してきた時に此方がバラバラだっただけだったと思います。此方全員を相手取る為に、以前の三倍近くの戦力を率いて、更にはエイリークにも強化策を授けていたようですよ』

まあ、あの人数とエイリーク氏の全力をもつてすれば全員集結しても叩けた、って言うか全滅まで追い込めそうな勢いでしたし……暴力！ 暴力！ 暴力！ ！ やはり暴力は全てを解決する。解決されてはいけない(戒め)

「ほーん。そんな強かったのかい、あの斧野郎」

『概算ですが、単純なパワーはアステリオスの全力並みにまで跳ね上がった、しかもそれを常に維持していました』

「ぼく、とおなじ。じゃあ、ぼくがいたら、とめ、られた？ えうりゅあれ」

「違うわ。もし力自慢のアンタが居ても止められなかったって言う話よ」

「う、そう……」

〈結論としては、対策が出来るまでは逃げて逃げて逃げて、兎も角まともに相手をしないというのが基本だろう。』

『あのレベルの強化と回復速度を維持する術は、どう足掻いても長続きしないというのが専門家の結論なので』

「……長続きするようになったら？」

『それまでに此方の首脳陣が何かしらの対策を思いつく事をお待ちいただければ』

誰も、対策を考えついていないのである……！ ふぎけんじゃねーよオオイ!! そんなパーフェクトモードのヘラクレスみたいな奴に対策なんて出来る訳ないだろ、いい加減にしろ！

「……」

「あら？ どうしたのダビデ。考え事？」

「あーいや……そう言えば、アルテミス様の宝具で打ち落とせるんじゃないかな？ なんて思っただけで。神霊の力をもってすれば、普通のサーヴァントであれば……」

「んー、無理ね」

『「無理ですか」!？」』

「ダビデの、あつそうなの、的な声と。ロマニの、えつマジですか、的な声が揃う。余りにも綺麗に揃ったその声に、アルテミスはあくまであつけらかんと返す。

「私、こうやって現界するのに霊基大分落としちゃってるし。話を聞いている限り、どれだけ見積もりを甘く計算しても多分無理。効果はあると思うけど、足止めが精一杯かなー」

『まじかー……こっちの想定してたプランの一つが潰れた……』

「わりいな。俺が本体として出て来れてたらどんな野郎だって一捻りなんだが」

『……今からでもオリオン本体を呼べないかなあ』

FGOの全てがヌルゲー化するグラウンドダーリンの召喚は申し訳ないがNG（アルテミス基準） 実際、この特異点にオリオン本人を呼ぶのは過剰戦力レベルです。ガチで超高難易度のヘラさん相手です度良いレベル。

そんなおねがいダーリン（物理）したい程に難易度の上がっている今回の特異点。とはいえセプテムの城壁程絶望感が無いのも間違いないです。特異点によつては強化の割合もそんなでも無い、的な法則でもあるのでしょうか……

そんなメタな予測をしつつ、今回はこの辺りでお別れとなります。

ご視聴、ありがとうございます。

## ??? 視点：海賊島にて

「……エイリーク氏、結局追い詰めきれずかあー。精神コマンド倍プッシュするべきだったのではー孔明氏？」

「いや、精神コマンドの無駄遣いは基本的に下策……では無くて。グンヒルド嬢の強化呪術を精神コマンド扱いするのは、流石にマズいだろうティーチ提督。如何に君とて戦闘継続とはいかんぞ」

「ホント奥様怖いでちゅよね。泣いちやう」

——恐らくはもう手遅れで、背筋にハッキリとした悪寒が走ったのは、孔明には隠す事にした。恐ろしい、訳ではないが無駄に問題を拗らせるのも宜しくはない。自分がトップであればまだしも、今はそうではない。精々の如く傍若無人に振舞うのも悪くはないが、ある程度周りに合わせる知恵が無い訳ではないのである。

「とはいえ、彼女に協力を仰いだ試験運用は成功した。後は、実行に移すだけだ」

「というか、人理を救う戦いに旦那を投入して活躍させるっていう大義名分一つであそこ迄協力的になるとかエイリーク氏何というリア充……」

「その代わり、彼の呪われ具合は極まっているが。そうなりたいか？」

「いやー何という愛情メガトンボム。ブラックホール生みそう」

「出来ない、と言いつれないのが彼女の恐ろしい所だが……いや、話題がズレたな。それでティーチ提督。どうだ。例の計画、実行に移せそうか？」

そう目の前の軍師に言われ、黒髭は今までの船の様子を思い出す。今までの兵士の性能を考えて、アレを基本として考えれば、確かに。「いけますぞー。ホントにカタログスペック通りに出せるならですけどー」

「そうか。であるなら大丈夫だ。先ほどのエイリークの戦闘の記録から、いよいよよひな形は完成した。後は出力するだけ。実物が出来上がらなければ……という心配もいらん。協力者からは太鼓判を押されている」



「……奥方も凄い事考えるでござるよなあー。容量が無いというか」  
「先の実験を強化して兵力として運用するのもここに繋がっているのだから、用意周到なのは間違いないだろう」

彼女曰く、人間を模したものを作るために、人間の動きをしっかりとトレースする必要はある。という事でアレですら実験の為に運用していたにすぎないのである。

「しっかりとモデリングしてる辺りモデラーの鑑」

「評価点はそこなのか……？」

「トーンでしょ!! 形が伴わなきゃ中身も伴いませんぞー。健全な魂は南斗やらつて言うじゃないのですの」

「……健全な肉体に宿る、だ」

「そーそーそれぞれ。器をテキストに作るとか言い出してたら即却下でしたぞー」

彼は、自分一人が居ればある程度は何とかなる、と思って居る類の者ではない。寧ろ自分の手足となって動くような人材がしっかりといた方が何かと楽に戦えるだろうというタイプの人間である。

故に今回の兵士の補充作戦、それなりの質の物だと分かって、正直ほつとしているというのが正直な所だ。あの残忍非道の黒髭様が何を言うか、というのは分かっているが。

「後は、船か……コレに関しても、改めて製造するしかない訳だが」

「拙者の船はー？」

「常時稼働に出来るレベルの魔力を搭載するにはもう少しかかる。とはいえ、量産型サーヴァントの生産体制が整って来たのだから、其方も直に整うだろう……新海賊島、ヴァイキング・トルトゥーガ島はもう完成間近だ」

「いやー、本当に見事ですわなー。この前まで唯の要塞だったのに」

目の前の軍師が整えたこの拠点も、それ相応に固い砦ではあったのだが……エイリークの素性を知ってから交渉を開始した相手と言うのが、想像以上の魔女であったのは間違いなく。大軍師と古き魔女の合作の要塞が、今や完成間近となっている。その完成度と比べれば、先の城塞も見劣りするというもの。

「しかし、量産体制、本当に大丈夫なんですか？」

「グンヒルド嬢に協力を仰いで作り上げたこの城塞を余り舐めない方が良い。今は聖杯を用いずとも、量産するのは容易い」

「これは戦略ゲーやりこんだゲーマーの笑い」

「……まあ、最上級ユニットを量産するのはやり込み要素の一つではあるが」

それは兎も角、と軍師は咳払いを一つ。

「戦力の立て直しが終わったら、今度は此方のターンだ。カルデア、島の魔神柱、二つの勢力を纏めて叩き潰す」

「つつても、その立て直し時間かかるんとちゃいますー?」

「完全な立て直し、となるとな。しかし質を上げた兵力と船も強化の目途は立っているのだから、数は最低限で十分だ」

その目が……当然ながら、自分の船も戦力として当てにしている、というのを言外に告げていたのである。そこまで強大な戦力として数えられるのも正直、面倒だと思わないでもない。自分の上司は、自分より圧倒的な力を持っているサーヴァントなのだから、そつちを主軸にすれば良いのではないかと思ってしまう。

「——ま、仕事任されてる分、最低限は働きますけどー。拙者は別に特異点がどうかさそうのには興味ないんで……そこ、分かってごさいます?」

「当然だとも。海賊にして、我々の水軍を率いる君に対する報酬は最大限に支払うさ」

「たのみますぞー。ありきたりな金銀宝石とか、もう拙者の目からはアウト・オブ・眼中ですからな」

とはいえ、報酬はある。それを受け取りさえすれば……軍師と、総大将のいう、人理修復の旅に付き合うのも、構わない。海賊流の荒っぽい略奪を許可してくれるのであればという事はないが。

「——お主ら! ここにおったか! 探したぞ!」

「……ライダー……いきなり大声を出して入ってくるんじゃない! 耳が潰れる!」

「おおっ? そうか? そこ迄大声を出した覚えは無いんだがのう

……まあ良い。残りの提督共も戻って来た。早速、軍議と行こうではないか！ ほれほれ早く来い！ 又ハハハハハハッ!!」

——確か、そいつ等は例の島の守りに回していたという話だったのを覚えているが。呼び戻した、という事はその島は取り敢えず放っておいていい、と言う結論になったのか。それとも。取り敢えず、今考えても仕方ないので、先ずは目の前で『仕方ない』と言った風に腰を上げた軍師についていく事にした。

「——これからのおおよその流れは、こんな感じになる。と言っても、全ては戦力の補充計画が済んでからだ。それまでは引き続き、今の任務に従事してくれ」

「閑職に回されたヘクトール氏物凄く可哀そう……」

「と言つてもものう。陸地で、相手を足止めするのが有効だと分かつたのだ」

「ヘクトールをあの島の鎮護に回すのは必然だとは思うが」

「それは正論」

あのエイリークの数少ない抑え役だったのだが。新規に補充される兵隊の屈強さに期待するしかないだろうか。最悪、膝撃ち抜いてでも……等と考えていたら、誰よりも真つ先に隣の二人が立ち上がった。

「おや？ お二人共もう離席ですか？」

「なんですの離席って……今言われた任務に就くだけですわ。先行で量産されていた者を見て、どんな感じなのか把握する必要がありますので」

「今までの奴らよりも荒くれだったりしたら扱いを気を付けないといけないから」

「——その辺りに関しては問題は無い。上の命令を順守するように調整はしてある」

それはそれで若干、物足りない所が無い気がしないでもない。少しくらい反骨心がある奴の方が、火事場においては予想だにしないパワーを発揮する事もあるのだが。海と言うのは何処まで行っても荒

れるのが確定している以上、画一的に指令を遂行するだけでは僅かに足りない部分が出てくる。

「そうですか？　でしたらまあ……」

「じゃあ猶更さつきと向かうよ。ここに居たらソイツのいやらしい目線に晒される事になるからね……全く、何時でも真面目にやって欲しいよね」

それは否定はしない。とはいえ、手を出す積りも無いが。幾らなんでも目の前の二人に手を出すとか難易度が高すぎる。その二人がそこら辺の輩よりも良い女であるのは、余りにも分かりやすいが。

「では二人共。カルデアの追討任務、任せるぞ」

「ええ。お任せくださいな。何時までもその変態を筆頭、何て呼ばせていられますんから。さっ、行きましようメアリー」

「オーケー、アン」

正直な所、自分が筆頭、等と呼ばれているのは、彼自身『何故だろう』とは思っているのである。別にそこそこ海について知っていたのは確かだが……提督、等と言うのも少しこそばゆい。そう呼ばれるべきは……寧ろ……

「———すみません、拙者もちよつと離席——」

「お？　何だ、二人には負けておられん、とばかりやる気を出したか？」

「ん、まあそんな所ですな。それでは」

———そんなお上品な理由じゃない。

思い出してしまった。あの鬨いを。自分の目の前で、あつさりと不利な状況を覆して見せた伝説を。自分とサシでやり合った伝説を。生きた、生きている、生き続けている、自分にとって、最高の……

そこまで考えて、ふと自分の掌から血が溢れているのに気が付く。少し興奮しすぎて、掌を破いてしまっていたらしい。

「いけない……我慢できなくなっちゃまうなあ」

自分の番は未だ来ない。ならば、せめてその時まで……エドワード・ティーチは、牙を研ぎ続けるのだ。

## 作家の見る海原 その二

皆さんこんにちは、ノンケ(白)です。彼女と、妖精騎士ランスロットは厳密には違うんではないかと思つて居ます。しかし、あのデザインがえげつないレベルでカッコイイって言うのは私の魂に響き渡りました。

前回の、あらあつ!? すじい……(役満振込) エイリーク氏撤退の末、取り敢えず対策を色々考えなきやどうしようもなくなつてしまふ。ヘラクラス居ない! やったー! とか思つたら代わりにノルウェー産のヘラクラスがやってまいりました。産地の違う英霊とかパツク詰めされてそうで嫌だな。

……さて、ここまで見ていた皆様。恐らくは、ツツコミたい方はいっぱいいっぱいゆうじろうだとは思いますが。一人、明らかに誤魔化してる方がいらつしやるんですよ。なんか神様の力とか充てにしてよお!(恫喝)

チツ、馬鹿じゃねえの(侮蔑) まあその野郎のケツは今度掘りに行くとして、今は取り敢えず、目の前のゲームを熟すとしましょう。

「おーい! 板足んねえぞ! もっと持つてこい馬鹿野郎が!」

「こつちだつて足りねえんだよ我慢しろ!」

「良いよもう頼らねえつてんだ! アステリオスー! こつちに新しい木材を頼む! 超特急だ!」

「まか……せろ!」

〽とんでんかんとんでんかん。沢山の木材が、ドンドンと船の上に持ち上げられていく。大活躍しているのは、その巨大な体軀を活かして、荷運びとしての役割に従事しているアステリオスだ。

「全く、私を置いてあんな泥臭い仕事を……」

「エウリュアレちゃん! またちよつと打ち落としてくれや! さつきから、ウミネコの野郎が!」

「……アタランテに頼みなさいよ!」

せこそことウミネコを打ち落とすエウリュアレちゃんが見れるのはFGORPGだけ! しかし、何というサーヴァントの無駄遣いで

しようか。ビスビス飛んでいくハートの矢がお気軽に飛んでいるウミネコ君を打ち落とす、そんなフレンドリーな下姉さまの事が好きだったんだよ!

「全くもう……」

「いやー助かったぜ! アタランテの姉さんは森の方に獲物狩りに行ってるからなあ!」

「……ふん、まあ良いけど。って今度はこっちに、ええいつ!」

楽しそうですねえエウエウ……アステリオス君と一緒に頑張れてうれしいねえ。凄く楽しそうだねえ。ほら動くと、動くと当たらないだろ! 動くと当たらないだろ!! (ウミネコ狩り) しているエウエウを見ていると、本当に笑顔が心の底から溢れてくる感じがしています。

「——楽しそうですね。エウリユアレ様達」

＜そうだな。と傍らの香子に返した。キャットはアタランテと共に狩りに、デオンはドレイクに付き合わされて、立香との手合わせ勝負に参加している。香子とは暫くぶりの二人きりと言う奴だ。

「マスターは、藤丸様と共に訓練に臨まなくて良かったのですか?」

＜誘われたのは立香の方だし。

＜海をじつと見たくなったんだ。ここに来てからはじっくり見る機会も無かったし。

つと、ここで選択肢。んー上の選択肢は会話打ち切っちゃう感じがしますし、どうちゆる? 女性と会話するのにウカツⅡセンタクシを選ぶのはセブク案件。ここは丸い選択肢を選びたい。という事で、先生、良い眺めだなー? (選択肢下)

「……そうですね。海。落ち着いて見る機会というのは有りませんでしたね。ずつと、どうにもバタバタとしていて」

＜そう言つて、海を見つめるその姿。香子は、海を見た事があるのか? と貴方は尋ねた。そう言われた香子は、ゆるゆると首を横に振つて答えてくれた。

「いいえ。そもそも、生前はずつと宮中に居りましたので……このように、雄大で、何処までも広がる蒼。一色なのに、とても胸に来る美しさ。海を題材とした物語が、多く書かれているのも分かります……」

いとおかし、ですね」

〈〈いとおかし！

〈〈うーむ、いとおかし、分かるような、分からぬような。

まだ俺の会話ターンは終了してないZE☆（選択肢下）

「そうですか？ 何分、古い表現なので、馴染みが無いのでしょうか……ええと、何と言えば宜しいのでしょうか」

〈暫し、香子は貴方の疑問に答える為に頭を捻り……

「……一番簡単に言い表すのであれば、感動した、とでも言うのが一番正しいのでしょうか。本当に正確に言うのであれば、違う、のですが……少し複雑すぎますから。今この時に心動かされた、と言う風にしおきますようか」

昔の日本語複雑すぎる問題（半ギレ）でも香子さんが言うならどんな複雑な古典でも全部許す。美人は正義だと思えます。

「この様な時に、少し不謹慎かもしれないですけど……ふふふ。この特異点に来る事が出来て、本当に良かったです。こんなにも美しい景色を、見る事が出来ましたから」

〈〈……うん。本当に綺麗だよ。この海。

〈〈不謹慎なんかじゃないさ。そんな事を言う奴はバットでぶん殴ってやる。

香子さんの喜びは万物よりも優先させるべき、古事記にもそう書かれているとワイトも証言しているってハッキリ分かんだね（複合形）  
とはいえ、下の選択肢は幾らなんでも暴力的過ぎるので申し訳ないがNG。まあしつかり上を選んでいきましょう。

最近、ちよつと下選択肢を選び過ぎて、混沌・悪寄りになってしまっている気がしないでもない。最悪ホモ君がハジケリストになってしまいます。混沌悪のハジケリストとか悪夢でしかないんですけどそれは。

「ええ。本当に……」

〈海を見つめる綺麗な横顔を眺めつつ……ふと、なんか視界に見えるた者あり。その麗しき顔を独占してると思ったら、どこぞのグリーンヘアがその顔を眺めていた。取り敢えず立ち上がって、その後頭部に

蹴りを静かに、そして正確に叩き込んだ。角を生やして。

「ほおおおおおっ……!? お、可笑しいなあ……一応、サーヴァント  
なんだけどなんで君の蹴りはこんな頭に響くんだろう……ケガと  
かはしてないけど」

「……って!? ダビデ様!?!」

「やあやあお嬢さん。その海を見つめるその横顔、アビシヤグだね」

「は、はあ。どうも、なのでしうか」

何をとぼけよるか、このスットコドツコイが……香子さんになんば  
しよつと！ せからしか！ 如何に王とて許せぬ！ おいがお主を  
介錯しもす！ もう何時代の何処の方なのかサツパリなんですがそ  
れは。もしかしたら江戸っ子の最終形態かも知れない。流石にちや  
きちやきしすぎじやありませんかね……?」

「えつと。あのところでダビデ様、何故ここに……」

「ああ申し訳ない。ちよつと暇になって、更に浜には美しいご婦人が  
居るとなればああもうこれはやるしかないかな、と。現代で言えばナ  
ンパヴオツツ!?!」

＜容赦なく後頭部に更に一発。今度は、回転と足先のスナップを利  
かせたりもしてみた。結構鞭のように良い音がしていたりもした。  
スパアン！ と物凄い音がしたのである。マジの全力だった。

「……一応、僕協力者なんだけど、それに対してこの扱いはどうなんだ  
い?」

＜扱うに足る品行方正な所をお見せください王よ

＜セクハラオヤジに対する仕置きに対しては丁度宜しいかと、陛下。

おつ、辛辣う!! でも丁度宜しいかと思えます陛下。ええ。

「うーんまごう事無き正論で何も言えない。僕自身は別にそこまでの  
事をしている積りは無いんだけど、周りからの目を考えなかつたこと  
は無い。王様だからね……しかし、その僕に痛みを与えるレベルの剛  
力と角……と言うか、何で生えてるの角」

＜……この流れからそこに持って行くのは、正直マジか、と言うし  
かないというか。此方にとっては話題の温度差があり過ぎてちよつ  
と、いやどうなんだろうという話である。ダビデにはその事が一切わ



かっついていなかったからこそ、質問したのだろうか。

「……何と申しますか……その」

「ん？ どうしたんだい、そんな言いよどんで」

〈言いよどみもする。それが分かったら此方も苦労はしていないのだから。全くと言っているいい程、この特異点に来るまでその正体の僅かな所も見えて来ていないと来ている。

こんな不穏な力使うしかないとか、カルデアの人材不足は深刻ってそれー。ま、私がそういうキャラクターにしたんですけどね、初見さん（確信犯） もうちよつと反省してどうぞ（呆れ）

「……なら、専門家、っぽい人も居るんだし、その人に聞いてみたら？」  
「専門家？」

「うん。メデアアちゃんって凄い魔術師なんですよ？ 知識も豊富なんじゃないかな。そういう方面に関しての」

……だから、ダビデ先生に関しては、そうやって全力でシームレスにギャグとシリアスを行き来するのは止してくださいまし（お嬢様）  
さっきの分の疑いも兼ねて掘らせて（意味深）頂きますが？

と言った所で、今回は此処までとなります。ご視聴、ありがとうございます。ございました。

## ーに宿る その一

皆様こんにちは、ノンケ(妖精王オベロン)です。彼に関してはちよけらんねえ。本当に最後までオベロンは、六章の俺らの保護者だった……テイターニア、見つけてやりたかったなあ……無力な俺を許してくれ……絶対にオマエをカルデアに招待するから……六周年絶対に実装されるんだぞ……! (懇願)

前のお、あらまし(類義語) 香子と海を見つめるデート回。偶にはほのぼの、のんびりと、海眺めるだけでも良いよね! とか思ったら緑のアビシヤグ野郎が突然の割り込み。コイツ『ガツ、ガイアツツツ!!!』されねえかなあマジで……とか思ってたらまさかの方向からぶん殴られてしまいました。

「へ? 私、ですか?」

「そうそう。疑問に思ったら直ぐ解決、と思つてさ」

『……なんでこの人が連れて来てるのかは分からないけども。まあメディアさんに意見を求めるのは間違いないと思う。という事ですみませんお願いします』

〈急に押しかけられて、とんでもないレベルで迷惑全力だったろうが、しかしもうそう言う流れなので、もうここは覚悟決めて頂くしかないのである。取り敢えず、全部をぶちまけるのは時間がかかるので、ある程度概要を話したのである。〉

実際、あの流れでメディアさんに『マスターの謎の角の事について教えてくださーい』つてなるのはもう事故だと思えるレベルの急速話題展開だとは思いますが。グッピーが大量死しているのを横目に、取り敢えず、オナシヤス!

「……成程、未だに正体が分からぬ。ですが」

「その特徴から、恐らくは鬼、それに類する物なのではないか、とは私達も想像しているのですが……様々な検査でも、全く成果が上がらず」

『折角だし、神代の魔術師からの見解もお聞きしたいな、と』

〈そう言われ、メディアは一つ考え込んでから……首を振ってから

申し訳ない、と一つ謝った。

「私も、皆さまと同じ結論を出すのが精一杯です」

「そうですか……」

「ただ、なのですが。私の師匠はそう言った怪物にはある程度詳しい方です」

えっ!?! 同じ値段でキユケオーンを!? それは兎も角。まあ、オケキヤスちゃん人は人を怪物に変える薬を作ったり、怪物に変えたりと色々やってはいるんですよ。で、そういう事をする為にはそういう類の存在には当然ながら詳しくないと、そんな事は出来ない訳です……

「混血の存在についても。師匠が言うにはそう言った者は内なる獣性に常に悩ませることが多い、と。しかし……話を聞いた限りではそうではない」

「というところ？」

「内なる獣性、というのは往々にして言葉にし難い手当たり次第の渴望、のような事が多いのですが。貴方のそれは指向性を持っている様な……理性を?がすのではなく、理性諸共が、纏めて引き込まれる……感情、の類の様な気がしました」

「――思い返してみれば。セプテムのあの時、自分は怪物の様に、暴れ、狂っていただろうか。否、違う。間違いなく、冷静に、確実に。敵を葬っていた、らしい。それは確かに彼女の言う通り、混血のそれとは少し違う気がする。」

『な、成程……そんな視点から。成程なあ』

「お役に立てたでしょうか」

『本当に! あと、序に其処のセクハラオヤジに、女性に近寄れなくなる護符とか作って頂ければ本当にありがたいのですが!』

「いや、幾ら彼女が凄いきゃस्ताーだからってそんな……」

「あ、そう言った薬、無い訳では無いですよ」

「ちよつと用事を思い出したからここらで失礼するよ!」

おらっ! 逃げるなっ! 姦淫の罪の象徴出せ! 女性問題に悩まないように丁寧に塗り込んであげるね♡ 絶望しろ。エルサレム。

まあ、それは兎も角として……しかし、予想だにしないタイミングで予想もしない所から予想もしない発言が飛び出して、しかも一つ主人公について進行するって言う。てえめえ！（ダビデ）なあにしてんだあー!?（誉め言葉）

〈——ダビデが脅威から逃げるようにスタスタと砂浜を立ち去って。メディアも『負傷した人が出ていないか見てくるのでコレで』と離れて行って。残されたのは、香子と貴方とロマニ。取り敢えずメディアに言われた事について、ロマニがもう一度口を開いた。

『うーん……混血である可能性は捨てきれないけど、メディアさんが言った通りそれ以外の可能性も考えた方が良いのかなあ』

「……感情」

『ん？ どうしたの式部さん』

〈何か、『感情』と言う言葉に思う所あり……と言った表情の所に、そうロマニに問われた香子は、一つ間を置いてから、彼女は呟いた。

「ああいえ。メディア様の感情、と言う言葉に、少し思う所が」

『ふむ。何かしら思いついたのかな』

「以前のマスターの豹変、人の感情がまるで別人の如く変わる、と一点に置いて、世界各国にてもっとも有名な現象の一つが有るのは、ロマニ様もご存知かと」

『……そうか！ 憑依現象か！』

〈憑依現象？〉

〈つまりこの本造院康友はシャーマンの王になる器だった……？〉

オーバーソウルは型月世界の魔術師卒倒必死の技術だと思えます。魂を実体化させるとか実際サーヴァントの領域なんですよね……封印指定不可避。封印指定できるかも怪しいかもしれないっていうw

w w

あ、選択肢は当然上で。

『簡単に説明すれば、体を誰か……この場合は人間以外の何かに乗っ取られる事だね』

「以前悪魔などが主に行う行為として説明されていましたが、思い出して」

『そうなんだよ。憑依した悪魔などを引つpegがす為の職業もある位、メジャーな心霊現象。前に悪魔と一緒に説明しておけばよかったね』  
　　〱逆にこの憑依現象を利用し、精霊や果ては神を人間に降ろし、交信し知識を乞う、その憑依した者の力を大いに振るう、と言った類の事もしていたとロマニは語った。これは魔術世界では、降霊術と呼ばれる体系に連なる術の一つとして認識されているのだという。

『まあメジャー過ぎて、若干陳腐過ぎる、という揶揄する人も居ないではないけど』

「確かサーヴァントの召喚術も、降霊術に属する物、でしたっけ」

『厳密には違うんだけど、まあ似たようなものだよ。死者を呼び出すって言う点においては……って、話がズレたね』

　　因みにもものっせいネタバレをすると、実際サーヴァント召喚は元は降霊術の一つだったのは間違いありません。具体的にはどんな術だったかって？　俺に伝えてどうすんだよそんなこと!!（詳しくはF GOをプレイして確かめてくれよな！）

『で、憑依現象は西洋においてはこんな感じだけど。式部さんが気になってるのは』

「はい。日本の憑依の類でございます」

『日本においても、神を他人に降ろす、というのは共通していたのは記憶しているけど』

「しかし日本に悪魔という概念は有りませんので。人に取り付き乗っ取る、という悪行を働くのは……」

　　〱——鬼。又は悪霊、怨霊の類であるという事である。

「そう言った輩に体を乗っ取られた人が尋常ならざる力を操る事もあるのは、やはり西洋と同じで。そして、怨霊の類に取り付かれた方の変わり果てた形相を指して、『まるで鬼の様だ』と表現する事もあります」

『……成程、言われてみれば本造院君の症状にそっくりだ』

　　鬼の様な形相、って言うか普通に角生えてますけど（困惑）　いや、ホモ君の顔は普通にチンピラチックで怖いですし、彼の顔が怖いのはそういう魔術的な原因だった可能性が微レ存……？

『普通憑依された人間、というのは特別何かしらの力を有してる訳ではない』

「血から反応が出ないのに、マスターが力を発揮していたのは」

『本造院君の体に何者かが取り付いていた可能性がある……、正直ゾツとしない話ではあるね』

〈少しロマニは考えるそぶりを見せて……それから、彼は貴方の方を向いて、少し険しい顔をしながら告げた。

『……血に由来する、自らの力で制御可能な物であれば。僕らも、非情に心苦しいけど緊急の事態だ。頼る事も考えられた。けど……』

『——誰かに憑依されていた、となれば話は別だね』

ふあっ?! 何だお前(素)

『つてレオナルド?! 聞いていたのかい!?!』

『そりゃあ彼の症状を調べているのは君かも知れないけど、彼のモニタリングを主に行っているのは主に私だからね。彼の話が出るとなればそりゃあ口も出すよ』

〈曰く。貴方の通信を主にダ・ヴィンチが受けていたのは、彼女の万能の天才としての才能をフルに生かし、自分にもしもの事が無いよう、しっかりとバイタル等を確認しておくためだったらしい。

『ロマニに二人分、しかも一人は普段よりしっかりと注視しなくちゃいけない、そんな負担はちよつと荷が重すぎるって事でね』

『僕が情けないみたいない方はやめてくれないかな』  
『事実だろ?』

ダ・ヴィンチちゃんの言葉のナイフがロマニの臓物を抉りだす。哀しそうなロマニのダメージはさらに加速した! ロマニ泣かないで。どうか逝かないで(遙か未来への布石) あ、皆劇場版FGOソロモン見ようね(唐突で謙虚な宣伝)

『それは兎も角、そう言った可能性が出てきた以上、本造院君にその力を使わせるのはNGを出すしかない。緊急事態だから、と言って君に負わせてしまうリスクの許容、それを遥かに上回っているからね』

——うせやろ(言語崩壊)

と言った所で……今回は……ねえやだ! 小生(力の制限)やだ!

自由を！ 自由を！ ホモハゲに自由を！

## ーに宿る その二

皆さんこんにちは、ノンケ（新選組の眼鏡）です。正直な話、なぜ山南さんを実装しなかったのか。後黒光りAV出演可能性おじさんとかも。めっちゃド失礼で草も生えないのはご愛嬌という事で。

前回のう……っ、うらっ……（嗚咽）……折角の……覚醒要素を……ダ・ヴィンチちゃんに……う……う……う……あんまりだ……HEEE EYYYYY!! あアアアあんまりだアアアア  
AHHYY AHHYY AHHYY HOOOOOOHHHH  
HHHH!! おおおおおれエエエエのオオオオオオ  
でエエエエがアアアアア……!!（実力的な概念）

……はい（即鎮静化）まあ、調子に乗り過ぎてしまったと言えれば間違いないそうなんですけども。明らかに厄ネタだと分かった鬼種の魔発動を『ママエアロ』の精神で何とかしてきた結果がポジとなつて一転攻勢してきた結果なので……はい。

で、画面では、ホモ君が海を見て黄昏ている様子が見えます。哀愁漂うホモハゲとかものあわれでいとおかし。ほんの僅かですが情緒とかマジすか（棒読み）

「姉御ー、船長室に回す木がありません」

「あー？ 別にいいよ。出来るだけ船の修理に回しな」

「姉御ー、鮎底の修理に回す木がありません」

「そうかいそうかい……こういう馬鹿が出てくるからね（ズドオン!!）」

「ちよっ!? 姉御!? ノーモーションで一発ぶち込むのはちよつと勘弁してもらえませんか!? 怖すぎるんすけど!？」

そしてその隣で飛び交う怒号。ホモハゲのアンニユイ風味なんかまるで関係ねえ!! とばかりの勢いに思わずプレイヤー君もニッコリ。オラ、落ち込んでるんじゃねえよ、落ち込む前にお前も頑張らだよ!!（無茶振り）

いや、まあ急にそんな『お前なんか変なもんに取り付かれてるかもしれませんぜ』とか言われた挙句『それ使っちゃダメ』と言われたホ



モ君も、色々複雑ですからね。その心中たるや……もう、ぷももえんぐえびぎおんもえちよつちよちやつさつ！ですよ（理解放棄）でもそれって、メドゥーサさんにも言われてませんでしたか？（指摘）  
「——マスター、もうそろそろ夕飯が出来上がるとの事ですが」

＜そう言われ、貴方は肩口越しに香子に頷いて見せた。危険な能力の制限指令が出ただけなのだから……特に何も思う事も無く、それは当然の事なのだという風に、特に動揺をしてる様子も見せず。

「……その、マスター」

＜ん？ どうしたん？

＜>どうしたのそんな暗い顔を……まさか俺の夕飯に何か混ぜ物がない!?

言いにくいからと言って何かイタズラされていると決めつけてはいけない（戒め） まあそれは兎も角、どうやらホモ君はそんなショックは受けてない模様です。良し、これからもこき使っても大丈夫そうだな！（ド鬼畜） リアルな話、覚醒が使えなくなった程度で育成諦めて後方に下げると、原作主人公の圧倒的主人公補正付き成長速度について行けないからね、しょうがないね。

あ、選択肢は上で。食事に文句付けるとかゴミクズ以下の所業なので。

「大丈夫……ですか？」

＜そう香子に問われ、何が？ 等ととぼける事はしなかった。何か得体のしれない者が取りついているかもしれない……当人にとって、洒落にもならない仮説を示したのは香子なのだから。気にしている部分も、きつとあるだろう。

「私の言った事は、あくまで仮説にすぎませんし。そうだと決まった、事ではございませんから。あの、あのですね」

＜大丈夫。正直特異点とか来てる時点で今更だよ。

！！  
＜骨やらデカイキメラやらと殴り合うよりは全然何てことないから

それはそう（一撃必殺） それはそう（二撃決殺） それはそう（参歩必殺） そもそもそんな奴らと殴り合ってたらゴースト一

匹に取り付かれたくらいで動じる事も無いと思います。という事で選択肢は荒んだ下あ!!!

「そ、それはそうなのですが、それとは何か違う様な……」

〈ちよつとどうなんでしょう、的な表情の香子に、取り敢えず未だこちら辺で海を見て居たいから、と言つて一旦戻つて貰う事にする。

いやそれは全くもってそうだと思います(手の平超高速大回転を穿つドリル) やっぱり精神的な事と肉体的な事は違う、というか平安美人の言う事は全て正しい(漏れた本音)、ハッキリ分かんかね。

……しかし、普通に夕食に行けばいいモノを、このハゲなんでまだ海を見てるんですかね。もしかして自分の親戚みたいな赤いハゲを波間に見つけて観察している可能性が？

〈——正直な話、今の情けない顔を、皆に見せたくなかつただけで。海を見たいだとかそんな理由は嘘っぱちも良い所で。

……あつ(察し)

〈何も思わない、等と。そんな訳がない。自分に良く分からない何かが付いていて、その所為で行動を制限され。単純に理不尽と思うだけなら、それで済めばまだマシなほうではあつて。体の中に渦巻く感情は、まるでマーブル模様の渦だ。

(表情が) やべえよ……やべえよ……メツチャ険しいよ……どうすんだよ、コレ……もうこれFGOじゃなくて如くじやん……今すぐタバコをマズそうに吸い始めても全く違和感ないまである気がします。

確かにこんな顔香子さんに見せちゃいけないですよねえ。香子さん泣いちゃいますよ間違いない。心配じゃなく恐怖で。

〈怒りは当然の様にある。それは、この状況に向けてでもあつて、自分自身に向けてでもあつて。ただ、彼の胸中に渦巻くのはそれだけでもなく。得体のしれない恐怖がある。消し難い不甲斐なさがある。

『——良いかい。どんなピンチのタイミングでも、迂闊な能力の発動は禁止とする。コレは絶対に守っておくれ』

〈そして……それを、表に出せない理由がある。腹の中で留めておかねば。ダ・ヴィンチちゃんがそう言ったのは、此方を慮つての事だ。任務遂行を考えて無駄な消耗を避けるための事だ。正しいのは、間違

いない。けれど……

あれっ？ おかしいな……楽しい楽しいエンジョイプレイの筈なのに、どうしてこんなに主人公君の表情が曇っているんでしょーか！

暗い暗い暗い！ Don't Cry……（小さな気遣い）

＜無力になるのが怖い訳じゃない。もし、もし自分が何も出来なくて、どうしようもなく詰んでしまう事があったら。此方の戦力は十分に揃って来てる、とはカルデアの職員たちも言っている。ちっぽけな自分が居ない所為、なんて事がある筈も無いのだけど。

＜それで納得出来たら苦労しねえんだよ……！

＜＜いっつも事態つてのは、最悪を更新していきやがるもんだ。

（無力感と恐怖の間で揺れる姿が）見える見える……感情って言うのは正確に言葉で言い表せる物ばかりじゃないってそれー。こういうどうしようもない感情でもどかしがるのは型月主人公の特権。つまり型月主人公人権をホモ君は得た。Q, E. D (大嘘) その理屈で行くとホモ君は自分殺しを体験しないといけないんですがそれは。

＜ほんの僅か。一ミリ、いや、マイクロレベルの差。それで負ける事なんて幾らでもある。ずっと、自分と拮抗して来た相棒との喧嘩なんて、いつもいっつも、紙一重の差でボロカスに負けて居たものだ。

紙一重でもボロカスに負けるとか言うこの矛盾螺旋。というかホモ君は基本的に藤丸君に負ける側なのか……やっぱり原作主人公こそが至高。オリ主人公は批判的的。それくらいで丁度良いんだルオオン!? (原作過激派)

＜だが、その紙一重の僅かな可能性の為に、巨大なリスクを抱え込むのか？ メドゥーサに言った言葉は嘘っぱちだったのか？

キヤットの言った通り、このまま吹っ切った方が良いのではないか。しかし……心の中には、色々な思いが渦巻いて、そして消えていく。

「――スター？ マスター？ 聞こえて居るかい」

＜そうして考え込んでいた所為か、どうやらもう一度迎えを寄こされてしまったようだ。後ろにはデオンが、月の光に照らされて立っていた。

あ、デオン君ちゃんオツスオツス！ ごめんね、セプテムで覚悟完

了したかと思つたら上からの命令一つでウジウジし始めちやつて……こういう時藤丸君なら取り敢えず目の前の事に取り組もうとするんでしようが。やつぱり優柔不断なホモハゲはダメだな！（プレイ中の自分の事棚上げする人間の屑）

「……」

「＜此方を見つめてくるデオンに、ゴメン、とだけ返して立ち上がる。今更こんな風に迷うのは余りにも情けない事は間違いない。メドゥーサに言われた言葉と、ダ・ヴィンチからの禁止令に一体何の差があるというのか。同じように返せばいいだけではないのか。」

「マスター、立たなくていい。少し、僕と話をしないかい？」

「＜そんな風に考えていた貴方に、デオンは……そう言つて、貴方の隣に腰を下ろして来たのだ。」

「……と言つた所で、今回は此処まで。」

メドゥーサさんにアレだけハッキリ言葉を返しておいて上司に言われたら『えっ』とかなつちやうクツソ情けない腰抜けチンピラに、次回デオン君ちゃんがかツコ良く喝を入れてくれるんでしょ、俺は詳しいんだ。

「そんな次回の展開を楽しみにしつつ、ご視聴、ありがとうございます。」

## 苦悩を許さぬ双戟 その一

皆さんこんにちは、ノンケ(ねこ!!!)です。マシユレベルで『あつ、このサーヴァント頼りになる』と思つたのは初めての経験でした。というか、他のサーヴァントが癖が強すぎたりする中、あそこ迄素直で真つすぐに経験豊富で全く闇が無いサーヴァントって貴重ではありませんか……？

前回までのうらすじ(原点回帰) ホモ君が禁止令に精神的動揺でメドゥーサさん申し訳ありません!! もうちよつと精神的に強いと思つて居たよ君は(嘲笑) デオン君ちゃん、喝入れてやってください!!

「——ダ・ヴィンチから、話は聞いてる」

「どれくらい? と聞くつもりも無かつた。そういうのだ、凡そ全てを聞いたのだろう。となれば、言い訳をするよりも、先ずは……虚勢の一つでも張っておくべきか、と口を開こうとして、しかし。」

「唐突な話だけど、マスター。私は君をもう少し、その……なんだ。馬鹿だと思つて居たんだ。それを謝罪させてくれ」

「いきなりそんな事を言われ、続く言葉を発する事が出来なかつた。いきなり言葉が辛辣で草あ!! というか基本的に紳士で真面目なデオン君ちゃんの口から『馬鹿』つていう言葉が出てくること自体が……でもイケメンボイスと、ちよつと困つた表情で口から洩れるその言葉に不覚にも(r y 全く、どうして僕をこんな困らせるんですか(責任転嫁))

「あー、その、びっくりしたよね。でも、馬鹿にした訳じゃないから、その辺りは誤解しないで貰えると、嬉しい……かな」

「馬鹿と言われて馬鹿にしていけないとはコレ如何に。というか、デオンが言う言葉から一番離れているであろう発言に完全に脳みそが停止している状況、そもそも何を言い返す事も出来ず……デオンは、無言を肯定と受け取つたのか、話を続ける。」

「マスターは、まず考えるより走り出して、その上で怒られるタイプだと思つてた。それも決して悪い事じゃない。考えすぎて行動する事

が出来ないよりは、全然良い事だと私はおもう」

〽……褒めてもらってる、って事で良いのかな？

〽そう言われるのは嬉しいけど、素直に喜んで良いモノか。

は？ デオン君ちゃんに褒めて貰って喜ばないとか贅沢者かよ？

無条件に喜んで当然だと思っただけ（理不尽） お前どう？

やっぱ僕は、王道を行く……即感謝ですかね……？

「うん。それを踏まえて、だ。君はダ・ヴィンチに言われた事で悩んでいる。けど今までに、君が似たような事を他の誰かに言われてこなかった、とは僕は思えない。それでも君はあの力を使い続けて来た」  
〽そう言っつて、デオンは、此方の瞳を真っ直ぐに見た。

「その説得を振り切るだけの、覚悟が君に有ったからこそだろう。そんな君は今、ダ・ヴィンチに言われた事でとても悩み続けている。そして、以前の様に吹っ切る事の出来ない自分に、酷く不満を抱いているんじゃないかな」

〽——その目は、まるで此方の心の底まで、真っすぐに見通しているのか。自分の心の内をズバズバと言い当てられ、貴方は目を丸くしてしまふ。

はえーデオン君ちゃん凄いですね。というか、オラアてつきり、前はデオン君ちゃんに精神的調教を受けて従順になるまでやられると思っつてたんですけど……なんか、ホモ君の精神分析を行ってない？

クトウルフTRPGかな？

「ふふ、凶星なんだね。驚いた顔して……人の心の隙間をも縫って潜入するのが私の仕事だからね。それなりに、詳しくもなるのさ」

〽デオンは少し自慢げに笑った。

「そう言っつた悩みを相談された事もある。いろんな職業を色々と渡り歩いて来たからね。とはいえ、その気持ちは分かる、なんて無責任な事を言うつもりはないけど」

悪戯っぽく笑うデオン君ちゃんに不覚にも（ry もうダメなんですよね。プレイヤーも、ほんへではデオン君ちゃん愛好家ですから。そんな『大丈夫、僕が付いてるよ』って今にも言い出しそうな優しいスマイルされたらホモになっちゃう!!（盛大なるタイトル詐欺）

「一つ、言わせてもらおうとするなら……君が他の誰かに言われた言葉と、ダ・ヴィンチの禁止令に大きな違いはないよ。それに間違いはない。何方も、君を氣遣つて言った言葉だろう」

「……それは、全くもつてその通りだ。ダ・ヴィンチも、メドゥーサも、その点においては共通している。なのに片方だけの言葉を聞くというのは、全くもつて道理に合わぬし性に合わぬ。けど今何故か、その自分の考えに何故か従えない。」

「なのに、もう片方の言葉には全く迷わず、もう片方の言葉にはこうして、迷う事しか出来ない……両者の言葉に差が無いのなら、ちよつと厳しい言い方にはなるけど、後は君に問題がある、というしかないだろう」

「うっ……それは。」

「ぐうの音も出ない正論」

ホモ君には問題しかないってそれ一。突撃癖、暴走癖、チンピラフェイス、サンシャインハゲ、ホモ（言い掛かり） 正論なので選択肢は下です。

「——それで、君はその悩みをどうしたい？」

「流石はサーヴァント。人生経験豊富だな……」と思つて居たその時。そう、デオンに問われた。真つ直ぐに、目を見つめられたまま。「私にとつてそれを教える事は簡単だ。君が望むなら、答えても構わない。けど、君がもし自分でその答えを出したい、というのであれば、私は無粋な口出しをするつもりはないから」

おつ、煽るじゃん（挑発耐性E） そんなん『えっ、教えて貰っちゃうの？ そうなのー？ だっさーい。わたしいー、マスターが苦しみ藻掻いてもー、しっかり答えを出すカッコいい所みたいなく？（光のメスガキ？）』とか言われてるようなもんじゃない。心のやる気が隆起する（漢の魂）

「そう言われ、貴方は考える。今彼は、確実に此方を氣遣つてくれている。それくらいは分かる。本当に苦しいのであれば答えを教えなくてもらう事は出来るだろうが、教えて貰つて解決したとして。また同じように悩む事が無い、とは言えない。」

◇◇(……ここで自分で解決しないでどうすんだ俺)

◇◇(ここで迷っている余裕はないんだ。幾ら情けなくても……!)  
さあここで選択肢。けど……ここで自分で解決しないとか言い出す様な、日和つてる奴いるう!? 居ねえよなあ!?(流行りに秒速且つ脳死状態で乗っかる人間の屑にして動画投稿者の鑑)

◇◇心の奥底で、一つ覚悟を決める。答えをそう簡単に出せないのもう分かり切っている事だ。しかし、今までは、その事に悩むその覚悟すら出来て居なかった。ならば。今ここで……!!

◇◇……そうだな。大丈夫だ、問題ない。自分で答えを出すさ。

◇◇大丈夫じゃないな。大問題だ。一番効率の良いやり方を頼む。いややっぱりダメだ。

金髪で白い鎧付けてそう(小並感) ホモ君剥げてるから金髪もクソもありませんけれども。とか下選択肢の掌返しの勢いに笑っちゃうんですよね……こんな選んだら混沌属性からもう逃げられないZO♡

取り敢えず当然の様に選択肢は上田(Don't来い超常現象)

「——そう言うと思つたよ。君は何方かと言えば、切り開くタイプの人だからね」

◇◇デオンは、少し笑顔を深くして……ゆつくりと立ち上がった。

「苦しい時は、話くらいは聞く。幾ら自分で乗り越えようと、覚悟を決めたにしてもそれで潰れてしまつては何の意味も無い。私は、君のサーヴァントで、そしてこれから世界を救おうと英雄の如く足掻く、君の先達でもある。力になるよ」

デオン君ちゃん……!!! ハーナキソ、もう泣いてる(早漏)で、このいい話の流れで言うのも何ですけど……ストレス値の上昇で動きにデバフがかかりました(半ギレ) いや、そこ迄バカ高い訳では無いんですけれども。そりやあ自分で抱え込んで考えるんだから、そうなるのは必然だけでも。セプテムでは少なくともこう言う事が無かつたのでイヤーきついっす(素)

「——さ、もうそろそろ暗い。夕食の時刻も過ぎてしまふ、一緒に行こう。万が一敵性存在と遭遇したりする可能性も……」



いやー、デオン君ちゃん、今デバフがかかった状態つすよ？

そんな状態で、覚醒封じられたホモ君が戦える訳がないじゃないですかーやだーアハハハハハハ……あの、冗談にもならないので本当にそんな『アレは……?』的な表情をなさるのはSo Bad (適当)

「……馬鹿な、夜だぞ。そんな中を……!? マスター!! 戻ろう!!」

僕たちの船のじゃない、アレは間違いなく敵の船だ!!!」

∠デオンが指差したその先……暗がりには灯る、オレンジと赤の輝きに照らされて……黒髭が登場していた船と同レベルの大きさの大型船が、此方の島へ向けて進軍して来ているのが貴方の目にもハッキリと見えていたのだ。

……今回は、ここまで……フウ……です……ハアアアアア……

!!!

もうね、俺キレル (絶望への叛逆)

## 苦悩を許さぬ双戟 その二

皆さんこんにちは、ノンケ（物語絶対守るマン）です。あのヤロウ……!! あのヤロウが……!! どういう風にあのヤロウなのかは、現在絶賛配信中のFGO第二部第六章のエピローグを見て、確かめましょう!!! 因みにプレイヤーはアイツの事を知っているからこそ奴とはずつと敵対すると決めました。

コレはあくまで一マスターとしての意見なので皆様はあの超絶ドル箱サーヴァントと是非仲良くして上げてください。

……それは兎も角全開のうらすじ（変態クソ土方）君は楽な道を行く？ それとも険しいけど正しい道を行く？ そんなもん……答えは決まってると思うんですけど。とか思ってたらまさかの奇襲。行動が早い。

＜デオンが半ば冗談で護衛の下りを言ったように、ドレイクと、デオンたちの居る場所はそう離れて居ない。急げば直ぐに合流する事も難しくないだろう。

「こういった船を進めるのに夜は適さない。現代とは違う。それでもこの夜闇の中を突っ切ってというのは……!! マスター、下がって!!」

＜だがしかし。そんな合流を許さぬ、とばかり……その目の前の海岸に、小舟が乗りつけて来たのだ。驚いて足を止めるデオンと貴方の前に輝くのは、盛り上がった筋肉と、鈍く輝く大振りのハンドアックス。そして毛皮の街頭と、角飾りの兜。

＜え、絵に描いたような蛮族……!!

＜はっ、見た目が派手になった所で!! やってやる!!

うわあ!! 急にスカイリムもビックリな蛮族ヴァイキングを出すな!!（驚愕）しかし両手に斧、更にはこ、こんなエロ同人誌の竿役でしか出ないようなゴリマツチョヴァイキングとか恐怖でしかない。俺もう逃げる（敗北主義者）いやマジで覚醒も出来ずデバフもかったホモ君じゃ普通のエネミーにも負けますから。

「邪魔を……っ！」

　　その直後、デオンの剣が先手必勝とばかりに切り込んだ。筋力Aの剛剣が敵の雑兵を薙ぎ払う……そう、思ってたのだが。しかしながら違った。何とその剣の一撃を、斧と腕で、体を張って一人が受け止めて、止めて見せたのだ。

　　ウォ……バーサーカー……（ドン引き）

「……なるほど、今までの数頼みの兵隊とは違うってことかい！」

「——オオオオオオッ!!!」

　　そして動きを止めたデオンに、文字通り全てを捨てても構わぬと言わんばかりに前のめり突っ込んで来た、次のヴァイキング。しかし、デオンの動きに対し、仕留めるにはその動きは幾らなんでも鈍重に過ぎる。

「……膂力も、尋常を遥かに超えてる、か」

　　だがその一撃は、その鈍重さに見合う程のパワーを……ただ一撃で、砂浜に大きな割れ目を作り出す程の、破壊力を持ち合わせていた。耐久力、パワー、どれを取っても以前の多少強化した程度の英霊擬きとは桁が違う。

　　砂浜壊れる（震え声）　サーヴァントの膂力が基本イカレてるだけで、そんな斧一つで砂浜あっさり割っちゃいけないんだって。それだけのパワーを発揮するのに現代魔術師諸兄がどれだけ苦労する事か、なんだろう。考えて貰って良いですか（HRYK構文）

　　基本的に1145141919時間（概念）位は最低でも魔術に捧げているんですよ。貴方には分からないでしょうねえ!!（八つ当たり）

「マスター……君はこの先に行ってくれ。ここは僕が引き受ける。流石に今のマスターを守りながらこれだけの質と数と両立した奴らを倒せるか、と言われれば」

　　そう言われ、どうしても歯噛みしてしまう。能力が使えれば。そもそも、絶対に使えない訳ではない。ならば……そう思ってたこととした貴方を、デオンの更なる言葉が制したのである。

「使っては、いけない。答えを出さなまま状況に流されて使うのは、

最悪だよ」

——という事で、ゲームから覚醒を封じられ、能力にデバフがかかった状態で。ここからデオン君ちゃんの援護を受けつつ、何とか逃げ出す事になりました。ウツソだろお前wwww逃げる事しか出来ないとかwwwwんんwwww屈辱ですぞwwww……そんな状態で勝てる訳ないだろ！ 馬鹿野郎お前俺は逃げるぞお前（逃げ腰）

ああっ、しかし……動きが鈍いつ!! いや、普通 of 速度に戻っただけとも言えるんですけど、覚醒後の速度に慣れてしまふとちよつと……リージョン使った後にデススリンガー使うと明らかに遅く感じるといふか……エンティティ様に捧げ物しなきゃ……

「——っ!!」

いやああああそんな事言つてたらホントにキラーが！ 止めて！ 未だ発電機一台しか回つてないの！ 許して♡ 舐めるな、戦つてやる（サーチ&デストロイ）

「させるかっ!!」

「……（ドサツ）」

ふえええええ……首が飛んだよう……（幼女化） 幾ら頑丈つて言つたつて、受け止める姿勢が整つて無ければこんなものですね。んで、デオン君のパワーを考えた場合、今のホモ君が此奴らを倒すには？

んー、普通の人間とサーバーアントとの間の火力はまあ凡そ師団レベルで差がありますので普通に三十人力くらいのホモ君に当て嵌めて……それを考えると……ダメだコイツ。

つてん？ ヴァイキングが倒れ込んだ砂浜にアイテムが……

「——マスター、その斧を!! 何も無いよりはマシだろう!!」

あつ、ドーナツみつけ！ いただきまーす！（武装完了） 今のホモ君は武器一つでも十二分に違いますからね。デオン君ちゃんありがとナス!! よーしこれで沢山のヴァイキングさんの頭をかち割るぞー！（無邪気な殺意）

く移動力……ツトオ!!く

「——野郎共!! 一気に切り込むよ!!」

「マスケット銃兵は後方から援護を。メアリーの部隊を送り届けるのです」

「舐めんな!! 野郎共、崩させるんじゃないよ!!」

「——既に、貴方が到着した頃には、敵の船が浜辺に寄せて、無数の敵兵がドレイク達に襲い掛かっていた。しかし、その先に立ちはだかるのは、歴戦の海賊達を引き連れる、心優しき巨人と、女神。そしてユダヤの王。」

「やらせ、ない……!」

「アステリオス、あんまり前に出るんじゃないの。前で戦うなんてそのひよろいのにでも任せておきなさい」

「僕アーチャーで遠距離での戦いの方が得意なんだけどなあ……?」

そんな事言いながら杖で海賊達をシバキ回しているのは何処の王様なんですかね……? 羊共を沈黙させるのはお手の者、打って、捌いて。コレはカラテを教えられてますわ。

「ジャンヌ! セイバー! その調子! 後ろは気にせず一気に切り崩して!! マシユはドレイク船長を!」

「そんな中、防御ではなく、攻撃に打って出ているのは立香と二人のオルタ。大剣の一撃で一気に敵の群れに罅を開け、そこから敵の波に染みこむのは紅蓮の恩讐。浸透戦術とは正にこの事だろうか、多分違う。」

セルフツツコミとは馬鹿じゃねえ!! おっ……すうっげ……(掌返し) 実際人の群れをこんがり焼いていくジャンヌの炎は綺麗なんて詩的表現(概念)をしたいのも間違いはないと思いますけど。それは兎も角、俺の大切なサーヴァント達は、つてアレ? 炎の中に綺麗な毛並みが見えたんですけど?」

「此方の旗印の一つであるドレイク船長の元を守るマシユ。香子は、その傍でセイバー、ジャンヌと共に敵に切り込むキャットを援護している。急いで彼女に駆け寄った。」

「——マスター! ご無事で!!」

「ご無事でじゃねえええええ!!? 藤丸君!! 何キャットを纏めてジャンヌの焰であぶってるんですかねえ……!!? おい誰のサーヴァ

ント炙ったと思っただこの野郎、ああ!?(黒塗りモード) ホント、どう落とし前つけるんだよ?

「キヤット様は……ほ、本当に楽しそうに……戦いとはファイヤーリンボダンスであるとか言って飛び込んでいってしまったけど……平気そうですね」

あつ、ご自分でやりに行っただんですか。でも楽しそうならオツケーです(秒速掌大回転ドリル)

◇◇ 余裕だ、香子さん援護を！ 切り込むぜ!!

◇◇ ……ああ!! 何とかね!!

よしっ!! ここはホモ君の出番やな！ 任せろーバリバリ……しちやアカン!! (戒め) 今ホモ君が弱体化してるって言ってるでしょうが!! 田舎少年は突撃の事しか頭がないのか…… (呆れ)

これは上選択肢を選ぶとジャガーマン道場へ直行する流れだと思います。ふ、FGORPGにはジャガーマン道場も実装されていますからね。ブルマシトナイ(レアバージョンでプリズマ☆イリヤ)を見た奴は上の選択肢を選ぼうね。まあ私はね、死なずのエンジョイプレイを推奨しておりますので当然下で。

◇◇ 余裕だ、香子さん援護を！ 切り込むぜ!!

◇◇ ……ああ!! 何とかね!!

「今の所、敵は海岸から上陸しようとしています、此方の戦力を突破できていません」

「——康友!! 丁度良い所に！ キヤットさん呼び戻してくれ！

ジャンヌの火力が発揮しきれない!!」

あ、普通に邪魔だったんですか……

と言った所で、今回は此処まで。次回は、砂浜の戦闘に突入するかなと思われます。ボスサーヴァントは……まあ、船の上に見える真つ赤なナイスバディ海賊を見れば、凡そ察しは付きますね。

ご視聴、ありがとうございました。

?

## 苦悩を許さぬ双戟 その三

皆さんこんにちは、ノンケ（まだ見ぬ水着万能の天才）です。今年の、水着は、もう荒れると分かっています。だって水着ダ・ヴィンチちゃんで配布なんですよ？ もうそれこそがっぽりと稼げるような強力な水着サーヴァントが……コレは課金拳三倍を使わざるを得ない。持ってくれよ、オラの体っ!! 個人的には、静謐ちゃん、アナスタシア様、エレちゃんを希望します。

前回のあらす……うらすじ!!（綱の意思）、めっちゃムツキムキなヴァイキングがデオン君ちゃんを襲う!! しかしただのやられ役じゃねえ!! 率いるのは向こう側の最後のサーヴァントと思われる謎のサーヴァント二人!!

「——では行ってまいる。任せよご主人。白百合の庭園はキャットが守るー!」

「庭園……」

「今この戦場を担当しているのは立香だ。という事で、キャットをデオンの救出に向かわせつつ此方は香子と共に立香のサポートに回る事にした。それで、具体的に何をするかといえば。」

「それでは、此方も始めましょう。キャスター様達は、森の方へと境界の最後の確認に向かったとの事です」

「要するに伝令役であった。メディアとアタランテは、浜のキャンプを保護するための境界を張るために席を外している状態だ。彼女らを連れて取って返し、戦場に参戦するのが香子、そして貴方に託された任務である。」

「チクショウ、俺は使いつぱかよ!! 随分と舐めた事言ってくれやがって……ブリバリにかつ飛ばす事が出来りやあ、あんな力カシ、ツパツかましてしまいに出来るって言うのによお!!（チンピラ全開）」

「とはいえ（即鎮静）今のホモ君ではどう足掻いても屈強なヴァイキング達にやわらかスマホされて尾張ツ! 平定! されそうなのでそれが一番と思います。」

「取り敢えず、こっちはこのまま切り崩しに向かうから。遠距離担当

がさらに加われれば向こうを総崩れに……」

「——そうはさせないよ」

　その時だった。立香に向けて飛び掛かる、小柄な影。ヴァイキング達の、屈強な体の後ろから飛び出したその——白い少女の姿に。思わず、目を見開き、しかしその一瞬。二人の間に割り込んだのは、セイバー。

「随分と舐めた真似を……!!」

「っ、ありがとう!」

「油断するな。マスター、一旦下がれ」

「いや、ダメだ。下がったら向こうに勢いづかせちゃう。このまま!」

「——上等だっ!!」

……こっわ!?! あの押し寄せるヴァイキングの隙間からいきなり現れるとか、アサシンか何か?(純粹な疑問符) こんなデツカイカトラスを構えて現れるアサシンとか悪夢なんだよなあ。

「ふーん、上手に避けるんだね。でもそれなら僕らの餌食だ」

「何……?」

　直後の出来事だった。乾いた破裂音が浜に響き。ぐらりと、セイバーの体が揺らぎ、体勢が崩れそうになり……しかし、漆黒の鎧が砂浜を抉る程踏みしめられ、そのまま倒れず何とか踏みとどまった。

「——成程、良い一発だな。危うく頭蓋に穴を開けられそうになった」

……ひ、額が切れてらっしやる。男前が上がったんじゃないか?

あつ、スイマセン唯のジョークです。

「へえ、アンの狙撃を捌くんだ。中々勘が鋭いじゃないか」

「とはいえこれが最後のチャンスだったぞ。小娘」

「大丈夫、チャンスは僕がまた作れば良いだけだ。その機会を、アンは外さない。それに今ので……退路も断ったよ」

えっ? うわあっ!?! いつの間にかヴァイキングが周りを!?! 止めて! 私達の事乱暴するつもりでしょう!?! 物理的に!! 物理的に!!

　——アン、というその名前。貴方には心当たりがあった。アン・ボニー。イスカンドルの艦隊の提督を努める二人の女海賊の片割れ



だ。そして、その片割れの名前は……メアリー・リードと言った。

〈成程、とんでもなく可愛らしいアンタがメアリー・リードで。

〉船の上の赤いナイスバディが、アン・ボニーって訳か。

ホモ君？ ホモ君？ どうしたの？ 急に気持ち悪くなるじゃん

？ どうしてメアリーかアンを急にナンパしようと思ったんですか？ 馬鹿なんですか？

「……何？ 僕に興味あるの？ 特殊なせーへきってやつ？」

「ま、マスター？」

〈小粋なジョークだ、と貴方は返す。傍らの相棒と、目の前のメアリーに対して。場を和ませようと思ったただけなのだが……盛大に滑ってしまったのだから、せめて格好を付けるだけはしておきたかった。

「ふーん、それにしても目が本気に見えたけど」

ホモ君!? ホモ君!? マズいですよ!? 君ってそう言うご趣味をお持ちの方でしたっけ!? そんなクソ野郎を主人公にしておくわけにはいかない……つまりは再走案件という事で宜しいか？ ダメでしょう (半ギレ)

「メアリー。何を敵と話しているの？ ホラ前」

「っと。不意打ちなんて、マナーが悪いね、君」

「……のんびり立ち話などしているからだ」

それは全くもってそうだと思います。

「全く。貴方達！ そんな焔に負けてないで、もう一度武器を構えなおしなさい」

〈アンの号令が響き——なんと、焔で崩れそうだった海賊たちが態勢を立て直した。ジャンヌの焔の破壊力は、貴方達が一番知っているのだ。しかしながらそれを受けて言葉一つで問題なく、とはいかない筈だというに。ゆつくりと、髭モジャの大男達は立ち上がる。

「どう？ 中々でしょ？ 僕たちの兵隊も」

「ああ。どうやら、ただの木偶ではないようだ」

木偶は木偶でも、多分アミバが改良したタイプの木偶じゃないですかこの耐久力は。誰か世紀末救世主呼んで来い (激ギレ) もう斧

持ってても二度と打ち込む気にならないねえ……（震え声）

「つち!!」

〱ジャンヌが舌打ちを一つ。今度は直接船の上を狙おうとして……彼女のの上に黒い影が躍った。アンを狙った動きを、完璧にメアリーが読んでいたのだろう。セイバーの動きを完全に無視し、回り込むその動き、思考に一切の余地なし。

「させないよ」

「っさせるか!!」

〱とはいえその不意打ちは、何方かと言えば妨害目的。その一手は、振り回した旗で払い除ける。咄嗟に剣ではなく旗を使ったのは接近戦では間違いなく、此方の分が悪いと踏んだからこそ。

プレイヤー目線、ヴァイキングの頭を八艘飛びの如くピョンピョンと跳ねていくメアリーちゃんの姿が見えて居ました……ええ……（困惑）牛若ちゃんのお株を軽率に奪うじゃないか。

ゲームだとモーション改修とかも無いので印象ないかもしれないけど、結構敏捷高いんですねアンメア。油断していると予想だにしない軽快な動きでズバツと解決（V3）

「私に背を向けて別の敵に突っ込むとは、良い度胸だな」

「背を向けた積りは無いよ。対応するのは、不可能じゃない」

「——ええいつ!!」

そして飛んで来るアンの遠距離射撃。連携が完璧すぎる。狙ったようにセイバーの動きを狙撃で制するっていう。嫌らしいのは、頭とかじゃなくて足元とかを狙ってる所なんですよね。

なんでか？ 恐らくですが、直感による危機察知が働かないようにって、足に当たるかもしれないっていうギリギリを狙ってます。

RTAにて、冬木のセイバー突破時に、サーヴァント任せチャートを取った兄貴姉貴が良くセイバーさんの気を惹きつける為にする戦法ですね。CPUがやるんじゃない（半ギレ）

「どう？ 強そうな騎士様。そこまで強そうでもない海賊に翻弄される気持ちは」

「ああ、蛮族狩りをしていた時の事を思い出す……実に、腹立たしい物

だ!!!」

「暴威の具現を相手取ってなお全く押し負けない。針の穴を通す様な援護射撃の援護を受ける、荒々しく、しかし鋭いカトラス捌き。セイバーの突進力を策などで受け流すのではなく、真っ向から受けるのが、一体どれだけの難行なのか。」

「——って言っても、僕らはそろそろお暇するんだけどね」

「何?」

「最初の奇襲でダメなら、徹底的に相手の足止めをするのが基本だよ  
ね?」

「——つしまった!? 船が!!」

「上がる悲鳴。その方向には、ドレイクのゴールデンハインドに群がる、敵の兵。瞬間やられた、という気持ち胸に過ぎる。足を、潰された!!」

「なんでしょう、ゴールデンハインド号はボロボロにされる宿命でも背負ってるんですかね?」 と言った所で、今回は此処まで。ご視聴、ありがとうございますございました。

「……いやダメだろ船燃やしちやあ!! オイゴラア!! 降りろオ!!」

(遅れ杉田状況把握)

## 苦悩を許さぬ双戟 その四

皆さんこんにちは、ノンケ（ウオッチャー）です。モビー・ディックだとか色々真名考察されてますけど、ストレンジフェイクをあんまり知らないので発言が出来ない罫。でも番人って言うクラスはめっちゃカツコいいと思った。

前回のウ・ラ・ス・ジ♪（GOU風） 強襲!! アン&メアリー!!

尚ホモ君のお好みはメアリーの模様。それはプレイヤーの選択次第でどうとでもなるのでつまりプレイヤーはスマートな体形の方が好みという事で。ホモの鑑がこの野郎……（自画自賛）

〈——ドレイクが、拳銃を乱射する。直撃し、落ちる者は何人かいるが……それでも、ゴールデンハインド全体に敵は張り付いている。マズい。引き剥がさねば。そう思った時に既に、貴方は行動を始めようとして……しかし、踏みとどまった。

『能力の発動は禁止する』

〈ダ・ヴィンチの言葉が脳を過る。もしこのまま突撃した所で、今の自分に何かできるだろうか？ 幾度となく無茶をしてきたが、しかし……

まあ今回ばかりは諦めて大人しくしているのも悪くないと思います。プレイヤー的には経験値も積みたい所ではありますが、それでも死なない方が優先ではあるので。

「ボンベ!! 船の奴らはアタシ達で引き剥がすよ!!」

「えっ!？」

「船に取り付いてるのはそう多くない! こっちの方が頭数は多い! それに一番きつい所は任せてるんだ、これ以上頼ったらアタシらの立場もクソも無いだろうよ!!」

〈直後、ドレイク達が船に向けて突っ込んだ。相手は、ジャンヌの焔に耐えるレベルの相当頑丈な相手だ。頭数が上でも、勝てるような相手だろうか……

『——多分無理だ』

「あつ、ロマニ様!!」

Dr!! さつきから黙ってたと思ったらどうしたドクタア!!  
ずつと黙りっぱなしだったなあドクタア!! だけでもこのタイミン  
グで話しかけてくるって事はきつといい報告だと信じてるぞドク  
タア!

あ、凄いどうでも良いですけど村正あ! 凄い好き。

『遅れてごめん。敵兵の分析を行ってたんだ!』

「という事は、何かわかったのですか」

『ああ。とはいえ良い報告ではないんだけどね……良く聞いてくれ。  
アレはこの前まで戦っていた敵兵とは、訳が違う。この前のが英霊擬  
きなら今回ののは、超精巧に量産された英霊そのものだ』

えっ (何それは) 英霊擬きでもなんでそんな物を作ってるんだ馬  
鹿野郎、つて言うレベルだつてのに、お前発想がノツブ(侮辱)かよお  
!?

「そ、そんな事出来るものなんですか!」

『普通は無理。とはいえ向こうには、超級のキャスターの援護が有る。  
不可能と言いつつ切れないのが、魔術師の辛い所だ……』

奥様が化け物(ド直球)

『純粋な性能的には僅かに出力が上がった程度しか違いはないけど  
……問題はその耐久性だ。伊達に英霊じゃない、神秘を得た攻撃以外  
じゃマトモに傷もつかない!! 多分、ドレイク船長以外じゃ太刀打ち  
できるかどうか』

〈つまり、ボンベ以下、船員達には……一瞬、貴方は手元に視線を  
向けた。その手に握られているのは彼らから強奪した斧だ。未だ消  
えてはいない。彼らが持っていた武器だ。少しくらいヴァイキング  
達にも、通用するかもしれない。』

〈——先ずは、行動あるのみ、か。』

〈ロロマニ、この斧なら通じるか!』

ホモ君!! 無茶できる体じゃないって言ったばかり  
じゃないですか!?(言っていない) えっ、でもコレ選択肢どっち選んで  
もカチコミかけそうな雰囲気なんですけれども……と、取り敢えず下  
を。

『えっ？ その斧、は。うん、確かに十分な神秘を纏ってる。というか、その斧って敵の武器を強奪して来たのかい？ だったらまだ……ってまさか』

「まさか、ご自分で戦いに出向くお積りで!？」

〈お積りもお積りだ。一人でも太刀打ちできる人数が増えたなら、結果は変わるかもしれないだろう。それに、自分が動けば状況も多少は動くだろう。』

『いやいやいやいや!! 前までのイケイケモードとは訳が違うんだよ!?! 普通に大怪我どころか……』

「いけません！ 本当にかねません!!」

〈ここで船が壊されたら、どっちにせよジリ貧で削り殺されるだけだ!!

〈そ、そうかな……

それは全くもってそうですけど、って何日和る選択肢が出てんだあ!?! とぼけちゃって……（不安定精神）男がやるって決めた、貫くときは貫かにかいかなぞ（イニ義の選択肢上）……あつ（正気）

「そ、それは……」

『とはいえ、君が加わった所で、何が出来る訳でも……』

『——いや、本造院君はどっちかと言えば、シキブと一緒に動きたいんじゃないかな』

〈そんな時、話していた三人の声に加わった四人目……万能の天才、ダ・ヴィンチの言葉に貴方は頷いた。』

「……へ？」

『式部。君、いつもマスターが単騎で特攻して、置いて行かれるのに慣れてるかもしれないけど、本来サーヴァントはマスターの近くに居るものだよ?』

「あ」

あ……成程、自分が動けば状況も動くって言うのはそう言う事でしたか。香子さんの他のサーヴァントは別のエリアで独立行動しますけど、それ普通の事じゃないですからね。こうやって香子さんみたくマスターの傍を離れないのが、普通のサーヴァントとマスターの

陣形なのは間違いありません。

『……成程、つまり自分諸共式部さんと陣地転換をしたい、ということか』

「ちよつと言葉が足りなかったかな、とは反省はしている。しかしながらこの状況で単騎で特攻する程、馬鹿ではないのは流石に信じて欲しかったなあ、とは思ってしまうのだけでも。」

『それならオツケーだ。式部さんの援護を受けた状態なら……それでも大分ギリギリだけど本造院君の言う通りでもある。ドレイク船長の船を落とされる訳にはいかない』

「では」

『うん。本造院康友、紫式部兩名で、ゴールデンハインド号の護衛に向かってくれ!』

「よし! サーヴァントの援護があれば安心だな! 勝ったぜ風呂呂入って……アレー香子サーン? おかしいね何処にもいないね(事実確認) もしかして、シナリオ上は援護して下さるけど、ゲーム上は戦場には俺一人という可能性が?」

「え、えつと……どうしましょう。バリツバリに能力が下がっている状態であんなゴツイ奴らと斧一本で殴り合う事になるようです。しかもシステムの方からススメを受けたような状態で……ふ、ふふふふ……ふふふふ……」

「ふざけるな!! ふざけるなあ!! バカヤロオオオオオツ!!!」

「マスター! 援護はお任せください!! マスターには指一本触れさせません!」

「あ、とはいえしつかり香子さんの射撃は飛んで来ると。それはありますがたいですけれどもね……はい(諦め) ぼやいてないで、詳細不明のヴァイキング戦に移りたいと思いますハイ。どの程度のダメージを叩き込んで来るかも分からないので、こうなったら基礎的なスキルを上手い事活かしていきたいと思います。」

「そもそも、元からが相手の攻撃を捌きながら、従順になるまでやるのがコンセプトのキャラメイクしてるので、多少火力が落ちた所で致命傷で済んでますので。」

「オオオオオッ!!」

ふ、所詮は獣、喋る理性すら残っておらんか……ヤーナム仕込みの戦闘技術、見せてやるって言ってんだよ!! ホラホラホラホラ(突進) オオン!! (回避) アオン(被弾) ん? ファッ!? (掠っただけのダメージの多さに目を見開く投稿者) クウーン…… (援護を受けつつクツソ情けない撤退) 援護が無ければ即死だった。

だめだね(淫夢) 幾ら若い頃からヤーナム育ちでも、マジで火力がフロムゲーボス並の屈強な男どもに突っ込む無謀はしたくありません……

「っそがあ!! 船から離れやがれっ!」

「ボンベえ! 熱くなるんじゃないよ!! っつても……!! くっそ、シロアリみたく船をぶち壊しやがって!!」

でもこのまま放っておくと、船の再建造とかいうほんへより難易度があがるまであるんでここは船をしっかり守るっ (再突進)

とはいえ、真っ向から突撃してもどうしようもない事は悟りました。フロムゲーのボスだって真っ向勝負で勝てる相手なんて存在しませんし。冷たい谷のボルドが量産されている勢いで行きましよう。悪夢かな?

香子さんの援護は間違いなく相手に刺さっているのをそれを活かしつつ……というか、香子さんの援護の方が普通に敵を倒しているまでありませけど。アレ? もうホモ君無理して突っ込まなくても良くない……?」

と言った所で、今回は此処までとなります。

今回は、恐らく船防衛戦の途中から、ですかね。量産型冷たい谷のボルドを狩り殺してやろうと思います。匂い立つなあ……

ご視聴、ありがとうございました。



## 苦悩を許さぬ双戟 その五

皆さんこんにちは、ノンケ（サマースタイルエミヤ）です。夏イベの時に思った事なんですけど、あれだけのジャンクフードを作って、もしあれをセイバーオルタが見て居たら一体何を思ったのでしょうかとは思いました。ええ。

前回のうらすじ。ロスリックの高壁を攻略最中で、霧を発見しそこへ侵入した所、ボスの冷たい谷のボルドが押し寄せてきました。どうやって攻略しようかなあとか考えて……コレはダークソウル3のうらすじじゃねえか!! まあ数がちよつと違うだけで大した違いはないな（大嘘）

——さて、このステージなんですけど。戦え（るのが基本的にプレイヤーキアラ一人で、敵のタゲは全部こつちに向いてきます。つまり敵の集中砲火を何とか一人で捌いてダメージを叩き込むしか）ないです。

一方で、香子さんの援護攻撃は一発一発がしつかりと直撃するだけのしつかりとした誘導性能と、それなりに重い威力もあります。因みに間違いなくホモ君より高いです威力。

つまり、このステージの攻略の最短は、何もせず、香子さんに全てを任せて全滅させるまで逃げ回っているのがうーんサイコガン……

!!

「ヲオオオオオオオッ!」

——でもそんなんエンジヨイプレイじゃねえよなあ!?

という事で、先程迄絶望していた私ではありますが、寧ろ絶望しながら実況はマイナスなので『良し! 人間スイカ割りするチャンスや!』と思つて結構頑張つてみる事にしました。という事でまず一発!! やっぱり人間皆示現とタイ捨は学んでいるので全力全開で兜をしつかりと叩き割つていくウ!! 超! エキサイティング!!

「ツグウ……」

おや!?! 大丈夫か大丈夫か（白々しきMAX） 痛そうでちゅねー

?（煽り） そのまま（意識） 落ちろっ!

「……グオオオオオアアアアアッ！」

だめだね(撤退) 嘘やろ、こちとらドタマカチ割っているって言うのに何でそんなにお元気なの貴方は。アレなの、脳味噌の中までカチカチなの？ 文字通りの脳筋ってやつなんですか？

「マスターっ！」

「……っ!？」

あっ(驚愕) 式部さんの遠距離射撃で、一撃でヴァイキング君が沈みました。いやホモ君が頭かち割ってるのも多少……多少……分かりませんが、関係ある気がしないでもあります(不安) まあそれは兎も角、一撃ですよ！ 一撃！

これホモ君必要かって？ 多分必要じゃありませんけどエンジンジョイプレイと主人公成長の為に絶対に必要(手の平超高速ドリル)

「ヌオオオオオオッ！」

「ゴオオオオアアアアア!!」

おうやられたからって言ってコンビで襲ってくるな。二人に勝てる訳ない大だろ！(事実陳列罪) ええい、どいつもこいつも数の暴力に頼ってきやがって……そんな事する奴はな……一歩下がって……

「ゴギユエツ!？」

こうだぞ!!(自滅誘発) 倒れちゃったねえ……そしてこうだぞ!!(頭蓋二連撃) こうだぞ!!(ダメ押しストンプ) はーっ、はーっ、はーっ……というか、ここまでやらないと倒れて下さらないのがウザすぎる。硬すぎない？

このエネミー、攻撃力も高いんですけど、と言ってもまあホモ君が能力発動させていればそんなダメージを負わずに済むんですよ。このダメージは、とんでもないレベル弱体化してるからこそそのダメージなんです。何も特殊要素も無い主人公の喰らうダメージなんて凡そこんなもんです。イッ タッ イッ イッ タッ イッ ……グスン……(本音)

それは置いておいて、本当の問題はこの硬きなんですよね。三章から特殊耐性バフ付けてるんじゃないやねえぞオオン!?

状況は、最悪の一途だった。立香達が敵の大勢を押し留めてはいるが、それでも船の方に流れていく人数にまで手は回らない。キャツ

トが救出に向かった方面は、完全に敵の兵隊で寸断されている。となれば……

「——姉御！ 此奴ら……！」

「分かってる！ アンタ等は下がりな！ ……オイ、ヤストモ！ マシユ！ アイツ等の相手が出来たら付き合え!! 何とか船から出来るだけ多く引っぺがす!!」

「わ、分かりました!!」

「残る僅かな戦力で、どれだけの敵を引き剥がせるかに、かかってくるのだ。」

あ、ちよつと待つてください。ドレイク船長とマシユちゃんが戦線に参加してくれました。助かった……タゲ取ってくれる味方が増えるだけでもオウケイ……(恍惚) 後はプレイヤースキル次第ですね。

「たんまり喰らいな!!」

「突貫します!!」

あつ、いえ訂正します。プレイヤースキルを發揮しないとホモ君が要らない子と化しますねクオレハ……ドレイク船長は普通に遠距離持ちですし、マシユはこつちの倍近く機動力が有るって。で、香子さんの援護も飛んで来る、と。

つまり……ホモ君の意義が消失、じゃな？ (名推理)

「やあああああつ!!」

「ゴツ……！」

「ウグウツ」

ああマシユの突進でもう何人が蹴散らされている!! 仕事しなきゃ……(使命感) 粉碎! (近くの敵に一撃) 玉砕! (斧の刃が)

大喝采!! (全力逃走) ぶ、武器が折れたあ!?

ちよ、あの、武器には耐久値が有るとは言えここまで凄いスピードで消耗しますか普通こんな物!! こんなあ……!! 仕方ない、さつきマシユちゃんが吹っ飛ばしてくれたヴァイキング野郎から斧を拝借して、でもって改めて、今俺の斧を粉碎してくれた相手の頭蓋を大喝采!!

「つたく、漸く少しは減って来たけど……」

「ドレイクさん！ 船に取り付いていた敵が此方に！」

「数が減って船が壊し切れなくなつたと見るや一気にこつちかい！  
つたく、機会に機敏なこつて！」

そしてお代わりされる屈強な髭。ホント要らないから、大丈夫です  
から。そんな沢山来ないでください。もう十分だ、もう十分だよ……  
!! ホモ君に経験値を山ほど食わせたいのは山々なんですけども、そ  
の為に昏睡何事かされるのはNG。

「とはいえ、残りもそれなりに減ってる……!!」

「一気に、粉碎します！」

とはいえ、マシユちゃんとドレイク船長がタゲ取ってくれてるの  
で、そう簡単に大乱闘スマッシュブラザーズに持ち込まれることは無  
いとは思いますが、敵の数は多いですが、冷静に一人ずつ、ホモ君に出  
来るレベルで……アレ？

「——っ!？」

「あれっ？」

マシユちゃんとドレイク船長の隣をすり抜けて……ちよつと待つ  
てください！ 何で屈強な男の方々は此方に来ていらつしやるん  
ですか？ 何やってんだアイツ等……マシユちゃんとドレイク船長に  
背を向けるとか、後ろから切りつけられて指先一つでダウンのフラグ  
なんですよね。笑つちやうぜ!!

「逃げようってのかい！」

「逃げる……っ?」

ホラホラ、ドレイク船長からのバックアタック喰らってますよ。大  
変でちゆねえ〜？ やはり単純思考しか出来ぬ雑兵よな。貴様等は、  
ここで潰されるのが似合い……スイマセンなんでこつちにドンドン  
近づいているんですか？ ドレイク船長に撃たれてるんですよ反応  
してどうぞ。

いや、でもドレイク船長に弾丸喰らってるにしては、ぜんぜん……

「——どういう事だ、何で後ろの奴らが足止めて……!？」

「いけません!! 彼らは逃げようとしているのではなくて！」

あれー、可笑しいね（味方が）誰も居ないね。またフィールドで単

騎な訳なんですけれども。まあ、香子さんの援護もありますし、きつと何とかなると思います。そら、今にも香子さんのお札が……お札が……？

飛んでこない、だと……？ よく見たら周りのヴァイキングに阻まれてる？

「ウオオオオツ!!」

「ゴオオオアアア!!」

「ツシャアアア!」

あつ、待つて油断してたら掴まれ……押し倒された!? やだ、積極的なねアナタたち……ちよ、何処触ってんでい! 何処触ってんでい!

いや真面目に腕とか足とか抑えられて、ちよ、動けなくなっちゃつ……たあ!? えっ待つてください。やだ〜! 逞しい男の人に囲まれて、ホモ君が大ピンチ〜!! いったいどうすればいいのー!? いや真面目な話、目の前に陣取ったヴァイキングが斧を振り上げているのをどうすれば良いんでしょうか。

「やつさんを狙って……! うっ!」

「マスター!! マスター!!」

なるほど……と言った所で、今回はここまでなんですけれども。死なないで本造院! まだチャンスは残ってるんだから!! (大嘘) ……まあ要するに死ゾ (絶望)

今回は……キャラメイク、からやり直しかなあ……ご視聴、ありがとうございました。

## 苦悩を許さぬ双戟 その六

皆さんこんにちは、ノンケ(半神の血絶対許さないマン)です。バーサーカーのヘラクレスは結構優しいオジサンというイメージが有ったのですが、向こうはどっちかと言えば血気盛んな若い衆って感じですね。後あの顔に被ってる布結構奇天烈じゃありません？ なんてあんなもんを被っているのは、書籍をチェック!!

前回は、割と派手な襲撃を喰らった挙句、船がっ……!! ホモ君も殆ど役立つことなくボロカスになって終わりそうです。というか、今までで一番被害受けたんじゃないですかね、アン&メアリーのコンビに。さーて、新キャラ作らなきゃ…… (TRPG並感)

とか言ってる場合じゃねえ!! 結構動画映えしそうな(禁止済み)生まれを引いたんだから、そう簡単に諦めてたまるか! 何か、何か無いか……!! 絞れ、マスターとして今まで特異点を潜り抜けて来たその頭脳をマスター、マスターとして……! ええい折角の白いマスター礼装を汚しておいてマスターもクソも無いとは思いますが。——ってマスター礼装が有るやんけ!! わ、忘れてた。今使うべき

は……まずは緊急回避イ!!

「ヌウウウウウン!!」

「——っ!!」

——ドズウウン……

……よしっ(適当) 取り敢えず、頭はかち割られなかったですね。いやー頭狙いの海外産薩摩で助かりました。当たると痛いぞく?(当然) じゃあ(そうならない為に) もういつかーい(瞬間強化)

掴んでんじゃ……ねえよオラアン!! 払い除けてえーの……ぶっ壊してやる!!(示現の一太刀) っしや瞬間強化で、流石の威力! 今度は一発で倒れ、て……くれてません(半ギレ)

「……はっ、はあ……マスター!? マスター!? ご無事ですか!!?」

「ご無事でございまーす! (SZEさん) 一瞬の隙を縫っての反撃が出来るっていうのは今まで練り上げて来たプレイヤースキルのタマモですねえ!! (一文字足らず) いや普通に礼装の性能のお陰だと

思うんですけど（名推理）

「よ、良かった……!!」

「邪魔です!!」

「オラオラあー！ 救出部隊のお通りさね!!」

こうして救出部隊が間に合ったのも礼装様のお陰なんだよ!! 本  
当にありがたいです礼装様♡ 大感謝♡ オラッ、崇め奉れ!! ピエ  
トロ大聖堂（TNTNTN亭語録）

所で、お気に入りなので偶にこの語録を使いますけど、本当にコレ  
が正しいのかは分かりません。きつとみんなの心に様々なTNTN  
亭がいらつしやると思いますので、皆も語録を使う時はそれぞれの心  
の御本尊に従って行動しましょう（詐欺師）

「はっ、しかしあそこから逃げ切るとは根性あるじゃないか！ 見事  
だよー!」

「香子さん！ やっさんを回収して一旦下がります！ 敵の狙いは  
……!」

「承知しています！ マスターはやらせません!」

いやーしかし、もうあと一步遅れてたら普通にゲームオーバーまで  
ありましたねえ。下手な一手は身を亡ぼす。視聴者の皆様も、油断に  
は気を付けよう!!（ゆうさく）

∨——貴方が離脱したその直後、無数の敵がどどどと此方に向け  
て雪崩れ込んで来るように突っ込んで……纏まったそこに大量に弾  
丸がぶち込まれ、あつと言う間に数人が倒れ伏し、残った面々も、香  
子の援護攻撃が悉くなぎ倒す。

「っは、ざまあ見ろってんだ!!」

「マシユ様！ 急いでマスター此方へ!」

「はい!!」

∨そんな光景が、一瞬でぐるんと入れ替わり……何時の間にやら貴  
方は香子の腕の中。というか、視界が真っ暗で、この感触な辺り、も  
しや。ある事実を想像した貴方は急いで藻掻いて脱出しようと動き  
出したが……全くもって動けない。サーヴァントの膂力、凄し。

そしてセクハラにも気を付けよう!!（ゆうさく連弾） 何女性にデ

レデレしてんだよお前ノンケかよお!? (事実陳列罪) ノンケをノンケって言って何が悪いってんだオラアン!? (逆切れ)

「セイバアア!」

「これで……終わりだっ!!」

〈そんな蠢いている貴方の耳に、響く轟音。ここに居る貴方に届く程の威力、恐らくはセイバーの魔力放出だろうか。その音に驚いたのか、一瞬緩んだ腕の拘束から抜け出して見た、その先には、宙に舞い……そして華麗に着地するメアリーの姿。

「——おいしいおいしい」

「ちっ、ちよこまかと鬱陶しい。避けるな、痴れ者」

「酷い言い方するなあ。数はそれなりにも減った、兵隊の調子も確かめられたし君達の船にもダメージが与えられた。となれば深追いは禁物って奴さ」

おお、セイバーの攻撃を見事受け流して脱出。流石に敏捷A。じゃないですよね(激震) 人様の船に手を出してくれやがって、海ガキがよお! お前(ら)を芸術品に仕立てや……仕立てあげてやんだよ(カツコつけようとして囁む実況者の屑)

しかしもう戦闘画面は終わってしまっている、これ以上の追撃は不可能という事になってしまいます。オッロレッロルラァ!! (怒りの解説不能)

「あら、無事に航出して逃げようって訳? 逃がす積りだと思ってるなら、ちよつと甘いわね、海賊」

「大丈夫。君が船を焼こうとしたその時は、アンが君の体に風穴を開けてる時だから」

〈その言葉と共に、ジャンヌの足のすぐ隣……浜の砂がパァン、と弾けた。それは警告だとしても言うかの様に、船の上の赤い少女のマスケット銃から、白い煙が上がっていた。尤も、彼女が狙っていたのは足ではなくそちら側に握られていた剣だったのだろうか。

「……アンタ等あ」

「ふふっ、ごめんあそばせー! 手癖の悪いお嬢さんにはそれくらい激しいしつけをした方が宜しいかと思ひまして——!」



「手癖どころかアンタ発砲してるじゃないの!!」

「僕らの船を燃やそうとしてるのは君の方だろうか？ そっちのセイバーのお嬢さんも」

あつ、腰だめに剣を構えようとしてたのがバレちゃってる。そしてホモ君なら見られただけで『死』って画面に出そうな位の眼光を醸し出している。

「……お嬢さん、だと。随分と虚仮にしてくれる」

あつ、怒ってるのそっちなんですか。

「まあ兎に角、ここはコレで終わりにしようじゃないか。これ以上やり合えば、君達も僕達も間違ひなく無事じゃ済まないだろう」

「無事で済む積りで来たと？」

「戦いには流れというものがある。僕らとしては、ここで命まではかけたくないんだ」

＜そう言つて不敵に笑うメアリー。しかし、此方としては敵の幹部を削るチャンスなのだから、逃がす理由はない……そう思つて居たのだが。真つ先に追撃しそうな動きを見せていたセイバー本人が、剣を下ろしてしまった。

「良いだろう。さっさと行くがいい」

「うん。ありがとう。そう言つて貰えてうれしいよ」

セイバーどん！ 追撃しもつそ！ オイはあの女海賊二人を許す事なんできん!! オイら全員で総がかりぞ!! 船を砕かれたのだから、あ奴らの全身の骨を砕いてやらねばならんぞ!!

「——冷血女、どういう積り」

「冷静に考えろ。ここで奴らを追い詰めすぎれば、逆に死兵となつて掴みかかってくるやもしれん。隙を突かれ、数を減らされれば、その分奴らとの決戦に不利になる」

「その分、ここで奴らを減らせばいいでしょうが」

「向こうは船持ちだ。此方が減らされた挙句、普通に逃げられる可能性もある」

＜ここは、広大な海だ。如何に此方がサーヴァントを大量に抱えているとはいえ、海の上で好き勝手出来る事は出来ない。翻つて、相手

は船を持つ海賊だ。確かに……不利は否めないだろう。

「地の利は向こうにある。心底腹立たしいが、見逃して貰っているのは此方だ」

「ツチー！」

「マスター。それで構わんな」

「——うん。船長も被害を確認したい、って」

成程。ドレイク船長のお達しならしやうがないね。実際奇襲を受けてサーヴァント二人とは合流できず、船は半壊、セイバーさんの言う通り、無理に戦った結果、主力、又はマスター二人を海の藻屑にされてしまったらゲームオーバーになってしまいますし。

「とはいえ、良い報告が出来そうだよ。初めてカルデアに致命的な一発を与えられた」

「お褒めの言葉頂けますわねえ？」

「どっちかと言えば報酬の方が欲しいけど。それじゃ、カルデアの皆さん。僕たちはこれで。今度は……これ以上にしっかりと切り込むから。覚悟しててね？」

～メアリーが軽々とどび、船の上に飛び乗った、その直後敵の船が浜から出発する。その船の背中を眺めつつ……貴方は、駆け寄ってくるデオン、キャットを見てから、改めて浜で先ほどよりも痛々しい姿をさらす、ゴールドデンハインド号を見た。

……ツスウウウウウウ……フウウウウウウウ……第三特異点のホームと言っても過言ではないゴールドデンハインド号が破壊されたんですけど、どうすればいいんでしょうか（半ギレ）もう嫌……（状況を確認して絶望するプレイヤー）

と言った所で、今回は此処までとなります。

このゴールドデンハインド号の修復を急いで行わないとマズいので、さて、いよいよドラゴン狩りフェイズでしょうか？ ご視聴、ありがとうございました。

## 幕間：海神の都へと

——被害はそこそこだと思いたかった。

実際船体だけで考えるなら、被害はそこまで大規模という訳ではない。だが致命的なのはそれ以外だ。海賊船として、必要な火力が、全くもって根こそぎやられている。ここまで徹底的だと、賞賛してやりたい位である。

「……こりやあ、やられたねエ。派手に」

『どうですかキャプテン・ドレイク。航海に関して支障等は……』

「まあアンタ等の仲間と一緒に頑張って対処してくれたからね。それくらいは何とかなるけども……問題は武装面だ。全部やられちゃまっている」

砲台は徹底的に歪ませられ、弾薬庫の火薬は軒並み海行きだ。マトモに使えるのはどれだけ残っているかを考えるだけで、頭が痛くなってくるレベルだ。攻撃能力を失うだけで済んだ、と言いきればどれだけ楽か。

「正直、この船の有様じゃあ、無理だね」

『無理というのは……』

「戦力を纏め次第、奴らに挑む計画を立てる積りだったんだろう？正直、それ以前の状態になっちゃったのは否めない」

『……そう、ですか。敵の船の装備を奪うというのは？』

「考えたけど、船に合わない装備を積みこんでも待ってるのは碌でもない結果だけだ」

船のバランスというのは本当に緻密なバランスの上に成り立っている。敵船の装備を奪って自分の船を立て直す、って言うやり方が通じるなら、海賊はもつと栄えていたかもしれない。基本的には船諸共鹵獲しなければ、その船の設備を使える事は先ずない。

「暫くは、海を進めるだけの棺桶だね、こりやあ」

『……ここは、敵の領内と考えると』

「致命的、どこの騷ぎじゃないわね。だったら敵の船諸共奪う？」  
「それが一番現実的だけど……敵も馬鹿じゃない。こつちに大人しく

船渡してくれる訳もないだろう。最悪、火を放って逃げる位はするさ」

そんな愚かな真似、理性のある人間がするか？　する、とドレイクは言い切るのに何のためらいも無かった。海賊、というロクデナシ共を相手にして来たからこそ。追い詰められた人間はそれこそ自壊に相手を巻き込む位の事は軽くするだろう。

しかし、だからと言ってこの棺桶に命を預けられるか、と言えば。と思つて周りを見れば、周りにはとんでもない超人ばかり。

「……むしろこのまま棺桶で、アンタ等に攻撃担当して貰った方が普通に戦えるんじゃないかね、アタシら」

「いやいやいやいや船長、諦めないで」

「んー？　私、船の砲台よりは正確にビシビシって撃てるけどー？」

「おいアルテミス、アルテミス、そう言う問題じゃないんだよ」

いかんいかんと頭を振って考え直す。クマのぬいぐるみの言う通りではある。敵と戦うのにも、戦力は少しでも多い方が良いのだ。戦うのは可能、とかそういう話ではない。ここで船の武装をどうにかしないという選択肢はハナから存在しないのだ。

「……って言つてもねえ。船体は兎も角、武装に関しては替えが効くかって言う話なんだ。船に合う様な砲台を持つて来ないと」

『んー……設計と作るだけなら私も出来るけど、量産となるとねえ。材料がない』

「ああ!?　作れはするのかい!?　ったく、とんでもないねえアンタ等の所は！」

『出来なきやないのと変わらないさキャプテン・ドレイク』

それは全くもってそうだが。

「ロマニ、何とかならない？　修理とかできない？」

『いやあ……無理なんじゃないかな。多分僕らに出来るのは、ドロドロに溶かすか、粉々に砕くか、ぺちゃんこにするかくらいだと思うよ』  
「いやあートドメ差したい訳じゃないからなあ……」

その言葉を聞いて、黒い二人がなんか凄い顔をしていて、盾を持った少女が首を傾げているのが少し気になったが。ドレイクとしては

其処に突っ込むのは正直藪蛇だったので取り敢えずスルーする事にした。

という事で、砲台に関しては、同じものを調達するのは先ず無理だという事は間違いないだろう。となれば、方法は限られている。

「船を調達するのは無理。となれば」

「新しい武器を調達するしかないって事かい船長。そうだな。武器を調達しないって言う選択肢はねえからな」

言葉を継いだのは、禿げた男、ヤストモ。野郎共と同じ空気を感じる男が、バシツと拳を打ち鳴らしている。

「つってもよ相棒。そんな武器なんて何処にあるって言うんだ？」

「案外その辺りにでも転がってるんじゃないか？ 特異点にサーヴァントが呼ばれるみたいにさ」

「あのなあ……お前の頭みたくツルツルの弾丸はそう無いんだよ」

「おう俺の頭をツルツルと申したか。さては戦争か？」

……で、なんかいきなり取り合えずぶん殴りあい始めた男子二人は置いておくとして。やはりあの禿げ頭は血の気の多い性質らしい。でもって、周りが特に何も言わないのは慣れている証拠だろうとデオンは判断した。

「マシユ、適当な所で仲裁に入っておけ」

「は、はい」

「あいや待たれヨ、マシユマロ娘。仲違いを破壊するのはキャットの役目なのだな」

「えっ？」

「まあまあ、キャットに任せておこう……それで、藤丸が言ってた事も間違いじゃないだろう。こんな砲台なんて、そう簡単に転がってる訳もないが。誰かありそうな場所を知っている人は居るかい？」

多分マシユの性格では仲裁が上手く行くかどうか微妙だったから変わったな、という辺りは、流星に付き合いの薄いドレイクにも分かった。

で、話を再開したデオンの言葉に……女神アルテミスは小首を傾げ、エウリュアレはハテナマークを浮かべるアステリオスの肩の上、

明らかに興味がなさそうな顔で空を眺めている。ダビデ、アタラントの二人は黙って首を振って、メディアは申し訳なさそうに頭を下げた。

『んー、となれば色々巡ってみるしかないか。しかし、その間は常に敵の襲撃に気を張らないといけない訳で……きついかなあ、やっぱり』  
「最悪船自体の武装面は諦めると仮定して、時間制限を設けて探すのが良いと思う。そうじゃないといつまでも探し回って、無駄に消耗するだけだと思っし」

『うーん……キャプテン・ドレイク。何か意見は?』

「……まあ、アンタ等が砲台の分の戦力になつてくれるのは疑いようもないしね」

本音を言えば、自分の船だ。しつかりと武装迄整え直したい、という欲がないかと言えばウソになるが。しかし現状、それが難しい、というのはこの海を渡って来た彼女が一番よく知っている。

「——本当にか?」

「おやマスター。じゃれ合いの時間は終わったのかい?」

「揶揄うのは止してくれ。恥の感情くらいはあるんだ……で、話を聞いていた限り。真っ先に行かなきゃならん場所、見逃してる気がしないでも無いんだが?」

そんな空気に……どうやらあの猫っぽいのに制圧されたのか、ヤストモが口を挟む。言葉に全員が頭に疑問符を浮かべ……それを気にせず、彼は此方に視線を向けた。

「アタシかい?」

「そうだとも。なあ船長。その胸の聖杯、確かポセイドンだか何だかを、ソイツの居た町諸共ぶっ潰して奪った。間違いないな?」

「ん? ああ。そうだ」

思い出す。あの訳の分からん、海神を語る不届き者。十二神の復活だか何だかを掲げて暴れ回った。多少やつかいではあったが、最後には派手に海の底に沈めてやった。アトランティスとかいう町と一緒に。

「で、ソイツが居た場所は、紛いなりにも神様が居た町な訳だ。したら

何かしらとんでもない武器の一つも眠ってるんじゃないかね」

——その言葉に、全員がはっ、と息を呑んだのが分かった。

「そっから奪ったのは、財宝とかだけな訳だし？ 武器、奪った？」

「い、いや。それは……全く」

「んじやあ現状、武器か何かが埋まってそうなのはその辺りしかないか？ 海を割いたり天候を操ったり。そんなバカみたいとか」

『——そこまでは無いかもしれないけど、確かに！』

神の都の武器。そう言われると、なんだか凄そうなものが埋まっている気がしないでもない。どうせ他に候補地も無いのだ。ドレイクの中で、既に向かうべき場所は決まった。久しぶりに海賊らしい事が出来るかもしれない。

「となれば、もう一回行くかい？ ボンベ！」

「ええっ!?! い、いやアレとぶつかったのってどの辺りだったかなんぢゅ……!」

「辿っていきやあ思い出すだろ！」

目標は決まった。

ドレイクは、野郎共に指示を出しつつ……ふと、ハゲ頭の方を見た。誰も彼も忘れていたというのに、何故このタイミングで、しかもそのハゲ頭が思い出したというのか。自分ですら忘れていたというのに。

「あたた……けど、よく覚えてたな相棒。そんな事」

「んー、あー。いや、俺も別に覚えてた、って訳じゃないんだよ。覚えてたらさっき言ってただろうし」

「そりやあそうか。じゃあなんで急に？」

「なんつうか、感じた。的なの？」

「感じた？」

その彼は、髪の毛の無い頭を、ガシガシと搔くばかりである。

「ああ。なんか、海の向こうから。こう、首筋の辺りにビビビッと来た」

「……なんだそれ」

「なんか凄そうなもの埋まってる場所がないか、ってみんなが悩んでいるのを見て、チャンネルが……合った、って感じで。急に思い出し

「ただよ」

「いやそれヤバくね？」

「ヤバいかなあ？」



## 伝説の都を目指して その一

皆様こんにちは、ノンケ（海水浴楽しみ岩窟王おじさん）です。いつでも『やってみせろよ、マスター!!』構文してくれるおじさん好き。力を貸そう、じゃなくてやってみせろよ、の辺りがもう狂おしいほど好きなんだ……だから妖精王よりも俺は巖窟王派なんだ分かるか!? この思いがよお!? オオン!?

URASUZI（ドシンプル） ドレイク船長の船の装備を調達する為に、アトランティスに舵を切る事になりました。第三特異点で全く触れられなかったアトランティスに、まさかここで触れる事になるうとは。読めなかった（ry リハクの目は基本節穴定期。

「——イヤッ！ キツイぞ!! ヤバいぞ、この戦力！ 敵船、側面に回り込んで来るぞ！ アトランテさん!!」

「ええい！ 酷使してくれるではないか！ 他のアーチャーにも頼れ！」

∨ 無数の矢が、只管に天から降り注ぐ……という事はないが、しかしアタランテの矢が、敵の船の甲板の敵を確実に射貫く。一撃必殺で確実に仕留めてはいるが、しかしそもそも敵の総数が多い故か、何人か仕留めても船の動きは止まらない。接近してくる。

「さつきからエウリュアレもアルテミスも、序にセイバーも限界まで酷使してこのザマなんですよー！」

「ええい、最大火力の一角はどうなっている!!」  
「——うっさいわね！ 今復帰したつての!!」

∨ 直後、乗り込んで来ようと接近していたであろう船から上がる火柱。先ほど敵の砲弾を弾き返したは良いが、それまでの疲労も祟ってダウンしていた、ジャンヌがどうやら戻って来ていたようだった。

……のっけから鉄火場。勘弁、して下さいってつたじゃないですか（言つてない） いやしかし、そこかしこでアーチャーが弓を打ち、セイバーさんが魔力放出をブチかまして敵船に確実に傷を付けていつている。そしてそれにも全く動じないレベルで三隻くらいこっちに迫って来ると。はは、ワロス（激怒）

「つたく！ こつちの情報伝わるの早すぎない!？」

『寧ろ敵側が大きく弱体化したという情報を共有できず逃したなんて、間抜けな話が出て来てくれるような相手じゃないさー!』

「ああそう！ そりゃあようございました!!」

「話している場合じゃないでしょう！ 早く船を燃やしなさい黒い!」

「命令してんじゃないチビ女神!」

「――あの島から、取り敢えず船で出航して早何日か。恐るべきは敵の広大な情報網と言えば良いのか。すぐさま追手は船の目の前に現れ、此方をここから逃がすまいと熱い攻勢を仕掛けて来た。今回で、それも何回目か。」

成程、今はその追撃戦の真つ最中と……あのさあ……（呆れ）そんな時にプレイの手綱を渡さないでいただきたいんですけど（半ギレ）  
どうしてプレイヤーを困らせてばかりだというのはかRPG君は。本家を見習って？（半ギレ）イヤ本家の難易度も大概なのでやっぱりやめて?」

「うう……あんまり……やく、に……たてない……」

「アンタは足場になつてれば十分よアステリオス！ 後、こちら辺に居る奴らから、しっかり私を守る事!」

「いやー、アーチャーなのに弓持つてなくてごめんねー」

「そんな事言ってる暇があるなら船の上の敵をどうかしてくれダビデー!」

「しかも、敵の全てを容易く払い除けられているかと居れば、案外そうではない。無理矢理沈むのも覚悟で此方に突っ込んで来て、兵隊が乗りつけても来ている。甲板の上でも大乱闘だ。」

「外も内もお祭り騒ぎ！ キャットは騒がしいのは大歓迎!!」

「行つてる場合か！ マシユ！ ドレイク船長は宜しく!」

「マスターも喜々として突っ込んでいかないでください!!」

藤丸君も元気そうで宜しいですが、しかしながらホモ君と一緒に君もぶち壊されると非常に困る人材ですから冷静になつて行動してどうぞ（必死）

で、船上にも普通に敵が居るのは普通にもうちよつと考えて欲しい普通に(三重必死) 当然の如く船の上に敵寄せちやいけないの、分かるこの罪の重さ。砲台が無いから動き止められないから仕方ないね(手の平秒速ドリル)

「船の上は大混乱か……マスター、ここで敵が近寄ってくるのを待つか、こつから一気に突破するのか。どうする?」

「船の被害は全力で減らす。数も少ない。突破策だ。」

「人員の被害を全力で減らす。待機で相手が突っ込むのを待とう。」

人員よりも船の耐久性が大切ってハッキリ分かんたね(選択肢上)

これはお館様に喝を入られますね間違いない……人は石垣って言葉を知らないのかよ?(煽り)

「了解! キヤット! 一気に引き裂くぞ!!」

「にゃっはー!! キヤットのふいーばーたーいむ!! かーにばる時である故に、第二巻も皆買うのだゾ!」

「一閃。文字通りキヤットの爪が、屈強な男共に閃きと共に致命の傷を刻む。そして、それで体勢が崩れたと見るや、更にデオンが切り込んで、その奥の頭蓋を兜諸共、鋭く、深々と貫き、深紅を撒き散らす。」

「どうした!? 僕は一人に怯えるか! 竦むか!」

「又オオオオオツ!!」

煽り耐性ゼロじゃん(嘲笑) 大振り、大上段、威力を重視した積りか? そんな無能が叫ぶなよ、神経が苛立つ……(過敏反応) もう一人、敵がいらつしやる事をまさかご存知でない!?

「見つけた隙間にねじ込む癒し系殺意猫パンチ!!」

「ごきゅ、と重い音がした。キヤットの臂力で全力で殴られたのだ。如何に量産型の英霊とはいえ、流石にダウンである。しかし……問題は今さつきキヤットが切り裂いた輩の方だろう。もう既に、立ち上がって来てる。」

「……本っ当に硬いな!」

「この粘り強さは真夏の蟬にも匹敵しよう! 最期の命を懸けてのプレイは、異種族同士のワビサビ・エレメンツ!」

「意味が分からない！」

とはいえ、一撃必殺じゃないと普通に立ち上がってくる辺り、今までのワイバーンだとかアンデットだとかとは格が違った。九回で良い（攻撃回数） 因みにコレは弱点をクリティカルで突いたホモ君の基準なので、サーヴァントなら普通に切っただけでも三回で潰せるとは思います。多分。

因みに真夏の蟬のラストアタックは、今の所一発も被弾した事はありません。

「——何をやっている？」

＜そんな、ゾンビの様に立ちあがる敵を、後ろからの黒い一撃が塗り潰す。そこには大剣を振り切ったセイバー・オルタの姿が。

「すでに海は大勢が決したぞ。此方も早く決着を付けろ」

「……簡単に言ってくれるけどね。僕は君みたいな圧倒的な火力は無いんだよ」

「私とてこれを好き勝手に発揮できる訳ではない」

＜そう言つて、二人のセイバーはすれ違い様……互いの後ろに迫つて居た海賊を切り捨てた。片やしなやかな白百合、片や凶暴な黒い暴君、双剣は、今嵐となつて、甲板の上の敵を悉く切り捨てる。

……思うんですが。

何方のサーヴァントも、通常の聖杯戦争なら召喚した時点で勝ちを確信するレベルのサーヴァントだというのに、それが二人がかりでかかって来るって、私が相手側プレイしてたらクソゲーだと思うしかないです。

取り敢えず彼女たちのサンドバッグと化したヴァイキング君達には黙とうをささげるとしましょう。なまんだぶなまんだぶ。

「——にやつと！ 嵐から避難し、猫は主人で丸くなる」

＜実際、キャットがこうして自分の傍らでゴロゴロと戯れていても、もう全く問題は無いだろう。一突き、一薙ぎで、まるでおもちゃの様に吹っ飛んでいく。相手は一応、サーヴァントクラスの強敵なのだ。

「マスター！ 此方の処理、終わりました……って、どうしてキャット

様と戯れてらっしゃるのでしょいか……」

「向こうの処理が終わったからって言うって、暴君様が暴れ出した。偶には猫を吸いたくなる時だって……ある。」

ホモ君がキヤットを吸ったらそれはもう犯罪ですが、けど面白い選択肢が合ったら選ぶのが基本だよなあ!? それに、フォウ君に懐いて貰えて喜んでるくらいには動物と触れ合いが無いので、猫吸いとかにも憧れてるんじゃないかねえの!?

「……キヤット様を吸う……!? い、いけませんマスターそんな事!!」

「キヤットは寧ろキヤットである」

「……!?」

「何を愉快な事やってんだいアンタ等……終わったら、甲板の修理に力貸しとくれ。ったく、こんなんで持つのかねエ」

「そう言つて水平線の彼方を見つめるドレイク。その先にあるであろう目的地、海神が治めていた伝説の都、アトランティスへ到着するまでは、まだ、まだ。圧倒的に時間がかかりそうである……」

と言った所で、今回は此処までとなります。

ご視聴、ありがとうございました。

## 伝説の都を目指して その二

皆さんこんにちは、ノンケ（水着こるでー）です。もうね。衝撃的過ぎてひらがなですよひらがな。引けたかつて？ そもそも未だ引いてすら居ないんじゃない!! これからの勝利を祈って、小説は頑張って書いていくゾ〜？

前回のお……うらあすじい!! 島から脱出したその先で、敵がものつそい数が待ち構えて居ました。それだけ。実際、敵の猛攻を凌いだだけで……いやホント、ああいうこまい戦闘はすつ飛ばして欲しかったんですけれど。それとも、アレが結構重要な伏線だったりした……？

〈武力、というのは抑止力になるというのは、間違いない事実だ。

「何とか退けたけど、正直キツイね」

「コレでもう、島から出て五回目。全く途切れる事が無いですね。先輩達は今のところ大丈夫そうですけど、問題は……」

「ああ。その度に追い返しちや居るが、何処まで持つか」

〈それを証明していたのが、先程の襲撃だろう。ゴールデンハインド号の戦力が落ちたという事実が広がった結果、あの規模の襲撃が頻発するようになったのである。もはや数で押し潰す事も難しくないだろう、と言わんばかりに。

あ、成程。さっきの戦闘は、あのレベルが頻発してるって言うのを示す指標だったとふんぶん……えっ、さては地獄？

「ボンベの奴は……まあ、まだ何とかやってるが、他がね」

「消耗が激しいですか」

「ああ。うちらはどっちかと言えば、攻めてぶつ潰す事が多い。というか、海賊なんてみんなそんなもんだ。ずっと追い立てられるのなんて慣れちやいないさ」

〈マシユは、何方かと言えばずっと船員やドレイクの防衛を担当していたからこそ、船員達の疲労に気づいたのだという。肉体的、というよりは、精神的な物ではあるうが。しかし精神的な疲労でも、致命的なミスにつながる可能性は十分にある。

「……あまり時間をかけて移動する事は難しいでしょうか」

「あ、あの……今すぐに心を元気にする薬なら、その、色々覚えが  
ありますけど」

「そんなものがあるのかい？」

「はい。ただ、少ししたらちよつと疲れすぎちやう副作用は、ありま  
すけど」

「それじゃだめじゃないかい！」

クスリみたいっすね……（ドストレート）ちよつとはオブラート  
に包んでどうぞ。実際神代位昔だと、麻薬も精神を高揚させる薬とし  
て魔術師が利用してそう……してそうじゃない？ でも使うべきは  
いまではないのは一目瞭然なんだよなあ。

「じゃあ何処かで休むしかないか？」

「つつても、どつか上陸して休んでる時に、またぞろ船を襲われでもし  
たら、流石にわかるだろ。アンタも」

「その時は、動く事も出来ない、文字通りの棺桶が出来上がるかもしれ  
ないかあ。マスターの俺らは当然、サーヴアンの皆も、水面は流石  
に移動……」

〈一瞬、立香とセイバーの目が合ったが、彼女も無言で首を振った。  
という事で、船が無ければ此方も一切の行動は不可能という事であ  
る。なら、海の上で逃げている方が未だ安心、まであるという事だ。

「せめて……もうちよつと、早く移動する手段でもあれば」

「うーむ、風でも吹かせてみるか？ 僅かなりとも速さは上がる。そ  
の代わりにキャットは丸くなって指先一つでダウンだが」

「フオウ……」

『サーヴアント一騎使い潰してのブーストとか贅沢通り越して愚か  
じゃないかな』

わあいせかいすくうたたかいにふさわしいごうかなやりかただ  
なあ……ふぎけんな！（超激怒）キャットを使い潰して世界を救  
うとか、そんなやり方でしか救えない世界なんか滅びてしまえば良い  
……良くない……？（テロ思想）

「そ、それでしたら私が。風を吹かせる位であれば」

「……アンタでも大して変わらないでしょ。その船長が言ってるのは、要するに根本的にスピードの違い……ワープって奴？ それくらいの手段って事。ちよつと速さ上げたくらいで解決したら世話ないわよ。で？ そこ神様タチはなんか出来ないのかしら？」

「アステリオス、その黒いの、潰しても良いわよ」

「え……？」

「あー嘘よ、嘘。だからそんな悲しい表情しないでちようだいアステリオス。止めて」

いつもの女神とうしくんの可愛らしいコントは取り敢えず置いておくとして……空を飛ぶだとか、それこそ、ストーム・ボーダーレベルの船じゃないといけないって事ですネクオレハ。

『近道とありませんか。キャプテン・ドレイク』

「あるっちゃ有るが、どうせそこは抑えられてる。向こうだって、そんな最短の道通してくれるほど甘くないよ」

『そう、ですよねえ……ああ、考えれば考える程ドツボに嵌る……!!』

とはいえ、そんなチート手段をそう簡単に手に入れられる訳もなく。だからと言って近道なんて生ぬるい手段が簡単に出来る訳でもなく。つまり一体どういう事かって？ 考えるな、感じろ。なんだつたら競うなツツツ!! 持ち味を生かせツツツ!!! 俺達の持ち味とは……？ (哲学)

「うう……私に出来るのは先輩達を守る事くらいです……」

「それが一番大切な事だよマシユ。マシユはそれで良いんだ」

「イチヤついてないでなんか冴えてる案を出しなさいよその色ボケマスター」

「ボケッ!？」

〈とはいえ、ジャンヌの言う通りではある。今は状況を打開するために全員が知恵を絞る時だ。と言つても、そう簡単に案が出れば、苦労はしないのだが。貴方も先ず船全体を見回してヒントを探してみる事にした。〉

〈〈取り合えずキャットに注目してみる。〉〉

〈〈女神エウリュアレに何か逆転の秘策が……？〉〉



◇ 全てを火力でねじ伏せれば良いんじゃないかな。

一番下が地雷臭しかしないんですけどオ!? どうしてそんな火力一点特化な馬鹿選択肢を俺が選ぶと思ってる居たのか間抜けがあ!

……いや選ばないから。選ばないからそんなバカみたいな選択肢。

大体ね、幾ら俺がエンジンジョイプレイヤー信者とはいえね。そんな筋肉は全てを解決するみたいないなバカみたいな事、する訳ない……無くない……? 無い……よし(選択肢下)

◇ 何を考える事があるろうか。大抵の事は火力で解決が出来る。それを皆知らない訳ではあるまい。そして、瞬間火力に置いて最強は……恐らくは、船の縁に背中を預けて目を閉じている彼女だろう。

「——なんだ? 私か?」

◇ 全てを暴力で粉碎するつもりはないか?

◇ 暴力! 暴力! 暴力! って感じでやってみませんか?

KもSも要らない。必要なのはただただ暴力(脳筋) 昔っから暴力で全てを粉碎する手段は王道にして常道にして上策ってそれ一番言われてるから。それをセイバーに頼むのはあり寄りのありだと思います。

「……私の宝具で立ち塞がる全てを粉碎しようというのであれば、流石に脳筋が過ぎるぞ貴様」

◇ それは全くもってそうだとは思う。しかし、この脳筋思考で思いつく手段と言っても、それしかなかったのだ。真面目な話。何とか力技で全てを粉碎できないか。カルデアのすべてのリソースを、今こそセイバーへ注ぎ込むときではないか。

「大体、船を足場にして撃って、反動で船が潰れでもしたら、本当に詰みだぞ」

あつ……(伝説級の閃き) そう言えば、セイバーちゃんの宝具にはそれ相応の反動がしっかりと搭載されてたっけなあ……はえー、スツゴイ馬鹿……(ストレートな罵倒) コレだから型月にわか(自虐)「そうだぞ、セイバーの宝具の反動は陸地じゃないと……とても……」「? どうなされました、マスター?」

「いや、なんか、なんか、頭の隅をチラッと、何かが過つたような」

――一瞬の静寂の跡、ポン、と立香の手の音が船上に軽く響く。その表情は正に天啓を得たかの如く、目はカッと見開かれ、その目はキラキラと何処までも輝いている。瞬間、彼は一瞬でセイバーの傍に近寄って、その手を握りしめた。

「セイバー!!!」

「な、なんだマスター」

「君だ！ この危機を突破できるのは君しかない！ 船長！ 最短ルートを取って下さい！ 行けます、突破できますよ!!!」

「……はあ!？」

「俺に良い考えがあります!!」

……なんか、藤丸君が閃いたみたいですね。

でもさ。藤丸君。基本的にそのセリフは、大抵ロクでも無い作戦を思いつく、某ロボット司令官のセリフでね。フラグ以外の何者でも無いのよ……期待して、いいんでしょうか。ダメだと思います（自戒）と言った所で、今回は此処までとなります。

次回は……藤丸君の秘策とは一体何なのか。本当にマトモなプランなのか。もしマトモなプランじゃなかったら、どんな事をしようというのか。皆で震えながら待ちましよう。ご視聴、ありがとうございます。

## 伝説の都を目指して その三

皆さんこんにちは、ノンケ（サマーな海賊紳士）です。です。です（威圧） 皆！ 黒髭はフレンドガチャからドンドン排出されるお財布に優しいライダーサーヴァントでしかもバフ盛性能に女性限定で全体超回復、男性でも全体大回復、更に回数性の永続ガッツと自バフの組み合わせスキル迄持つてる超優秀サーヴァントなので引こうね？ そしてマジで見てくれ俺のライダーのカッコ良さをよお!! 俺の推しなんだよお!!!

……ふう、気を取り直して前回の裏スジ（正式名称） もう、もう心が持たない……エヴァの最終回レベルで精神崩壊する!!（大嘘） 早くここを抜けて目的地に辿り着かなきゃ（使命感） 私に良い考えがある（無い）

「——見えてきたぞー！ やはり、敵船がたむろしているな!!」

「いよいよだね。ふ、気合が入って来たよお！」

「あの一、だね。本当にやるのかい？ ダビデ的にはちよつと幾らなんでも無理無茶無謀なんじゃないかなーと思うよ」

『……非常に、非情に不愉快だけど、僕も同感だね。これダメなんじゃないかと』

〈視線の先には……前回の襲撃よりも確実に数の増えた船が、此方の船の進行を邪魔するように配置している。間違いなく、コレを突破しようと考えればそれ相応の被害が出るのははや目に見えている。」「けどやらないと、こつちが多分持たないし……メディアさんと、香子さんのサポートもしつかりある。何とかなるよ」

「が、頑張りますっ！」

「……私、こんな天外魔境の修羅場を体験するのは初めてですが……がんばります」

で、えつと……画面上、船の上。ジャンヌ、颯め面。エウリユアレ。颯め面。デオン、颯め面。マシユ、覚悟完了。香子さん。諦め顔。デオン、諦め顔。成程。マストの上のアタランテ、でもって船の後ろにいるセイバー・オルタ、それとキャットアステリオスアルテミス为天

然組以外は全員『はえースツゴイ馬鹿……』って表情を為さってる時点でどんな作戦を考えたか推して知るべし。

「姉御オ!? ホントに! 本当に大丈夫なんでしょうねえ!」

「ボンベ……」

「姉御……!!」

「骨は拾ってやるから覚悟決めな」

「やっぱダメだあああああああ!? チクショウ! せめて一人くらい良い女を抱いてから死にたかった!!」

◁今から、敵陣を突破しようとする船上は、既に絶望に包まれ切っていた。立香の作戦を考えれば当然と言えば当然である。相棒の無茶に慣れていた貴方としてはもう絶望を振り切って『楽しもう』という心持ちになり切って、水平線上などを眺めていた。

「うーんマスターの目がとても透き通ってるのだな。コレは間違いないお悟りパラダイスモード。もはや今のマスターには恐ろしい者無し! そしてキャットがマスターのその悟りを崩しに行くマールである!! という事で撫でろご主人」

◁ああ……いいよ。ブラッシングもしようか。

◁ああ。任せろ。夢心地にしてやるからさ。

あつ、選択肢下でキャットちゃん赤くなってるうくく。(煽り) 可愛いじゃないですかあ、真正面から口説かれたらよわよわなのホント可愛い。食べちゃいたい。お前の事が好きだったんだよ!! (大胆な告白はハゲの特権)

「オイ康友。じゃれるのもその辺りにしておいて、用意しとけ。振り落とされるぞ」

『だいじょーぶ。計算上、そんなに振り落とされてポンポン落ちるなんてないから。多分だけどー』

「じゃあそのままが良いか?」

「良くないです!!」

◁叱られたので、取り敢えずキャットと離れ、船に取り付けられたロープにしがみつく。コレを握りしめて居なければ、これから先がとんでもなく危ないというのは間違いないと思うので。

で、そう。これ。

船の色んな所に所狭しと括りつけられた、このロープ。何なんでしょう。サーヴァントの皆全員それを掴んだり、自分に巻き付けたりと。エウリユアレミたく、しっかりアステリオスが掴んでるって言う例外もありますけど。

—どおん!! どっ　ズドン!

『……えーではこれより、作戦を実行に移す』

〈——敵船が、此方へと威嚇射撃を始める音が聞こえている。それに合わせ、船の上に響く、ロマニの声。明らかに『ダメでしょコレ……』という声色の彼は、せめて船員の皆が無事に済む様にとでも言いたいのか、祈る様に手を合わせていた。

『と言つても、船の皆に僕から通達するのはたった一つなんだけど……いや、真面目な話で頼むから、振り落とされなくて。ただそれだけだ。僕がお願いするのは』

「——ふ、それは振り落とす程の勢いを出せ、というフリ、か?」

『違います!!』

本当に何をする積りなんですかねえ!? (緑茶) オルタさんがニッコニコなんですよマジで。この中でたった一人だけ楽しそうなのが、凄くない。というか、邪ンヌの顰め面が一番凄い時点でどんな凄いのがね……

「良いかい! 限界まで寄せな! 距離足りなくて袋叩きとか言うバカみたいな事は絶対にするんじゃないよ! 覚悟決めな!!」

「姉御オ!! どれくらいギリギリか教えてくませえ!!」

「下手して指が飛ぶ限界までだあ!!」

「分かりました! ただのチキンレースっすね! 骨髄く覚悟決めます!!」

〈帆に風を受け、船は進む。そしてそれに合わせる様に……セイバーが、腰だめに黒い聖剣をゆつくりと構えた……敵とは反対、風が吹いて来る、その方向に。更に、帆の近くに腰に縄を何重にも巻いたメディアがスタンバイする。

「う、うう……上手くいくでしょうか……」

「上手くいかねば我々が海の藻屑になるだけだ。そう難しい事でもあるまい」

「難しい事だと思えます……!!」

……えっ!? 敵とは逆の方向に聖剣を!? 出来らあっ!! (条件反射) それは兎も角として、いや本当にできらあっ! ってしてしまっただとして、何が目的だ!! ンモノか!? 金か!? (海賊並みの思考) 物でも金でも今の状況は解決できないと思うんですけど (名推理) 「おい魔術師、後どれ位だ!」

『えーつと……もうそろそろです! その速度のままで行けば後……三十秒前後!』

「聞いたなお前らあ! 何秒まで行く!」

「四十秒ギリギリまでえ!!」

『三十秒で十分なんですよドレイク船長!』

〈基本的にチキンレースで生きてるのが海賊なのだろうか。とか考えながら、貴方はロープをしつかりと掴み……しつかりと呼吸を整える。万が一振り落とされでもしたら洒落にもならない。

「いいか、もうちよつとだ! もうちよつと近づいたらだぞ!」

「ひいひいひい神様! お慈悲をおおおお!!」

やだあ……阿鼻叫喚…… (震え声)

「——いや、十分だ。全員、ロープを掴め。後は私がやる……メディアア、準備は良いか」

「は、はい!! 行きます! ただ一回限りしか持たないので!」

「分かっている。一回で決める」

〈——展開されるメディアアの魔法陣。それは、船の船尾に展開されている。空間転移の魔術すら使える神代の魔術師。近場で、方向も変えられず、刻印した場所にしか使えない門を開く魔術……しかし、今それはセイバーの聖剣と組み合わさる事で、奇跡を可能にした。

「っし……セイバー!! 令呪も乗せる! 全力でもってぶっ放せ!!」  
「良いだろう」

敵の方向じゃなくて、船尾に展開……でもって、現状で船が向かう先は敵船の居る方向という事ですか。あつ、そっかあ (無知の知)

「——卑王鉄槌、極光は反転する」

〈黒の聖剣が、黒い破壊の輝きを撒き散らす。しかしそれは今、眼前の敵を粉碎する為ではなく、己の船を天へと送るための、羽とする為に解き放たれようとしている。天上を行く船の如く!!

「全員!! 衝撃に備えなあ!! 飛ぶぞおお!!」

「やっちやえセイバー!!」

「先輩! ロープをしっかりつかんでください!!」

「光を? み……天へと翔べ!! 『約束されし勝利の剣』!!」

〈——一瞬とんでもない衝撃が船を襲い……驚きだった。驚愕だった。貴方もロープを掴んでいたが、マジで振り落とされるくらいのもんでもない風だとかを受けて……今、間違いなく、ゴールデンハインド号は。

「二と、飛んだあああああ!!」

何の光!?! (近からず)

と、というか……コレ、コレまさか……船が。跳んでる……!?

あつ、もう後ろに敵の船が! 凄い! ドンドン雲が流れてる!

今、私達……聖剣の出力で、飛んでる! (夢見る乙女) 成程、藤丸君

は船を傾け、破壊しかねない出力をこうやって利用しよう。コレは

IQ114514 (確信)

と、凄い策が成功した所で。今回は此処まで。

ご視聴、ありがとうございます……所で、これ着地はどうするんでしょうか。

## 伝説の都を目指して その四

皆さんこんにちは、ノンケ（真夏の薄着ドラゴン殺し）です。胸元はだけるあの大胆さが凄いい好きです。あのあの衣装、背中もザツクリ空いてる筈なんですよね。そう考えるとあれ？ ジークさんはもしやセクシー枠？

前回のうらすじ……全開！ 近道を突破する為にまさかの、セイバーの宝具を推進力として圧倒的な加速して、無理矢理に突破しました。船の上でまず放てない、というのであれば、それを逆に利用してやればいいんだよ!! でも貴方、それで突破したとしてもその後は……？

＜眼下の船の船員が、啞然、としているのは容易に想像できた。正に弾丸の如く空の彼方へと飛んでいく船など、誰が想像できるだろうか。というか、どうしてそんな発想に至ったのか。

主人公特有の爆弾脳味噌……ですかねえ……（一般原因探求者）

主人公と申します者は基本的に目的達成の為に手段を択ばないつてそれ一。一つ間違えると藤丸君が悪役になってしまいうんですがそれは。勝てば官軍負ければ賊軍だからね、勝ち続ければ非難は受け付けないゾ。悍ましかるや汎人類史……!!

＜戦わず、一瞬で相手の攻撃すらすり抜け、そのまま最短距離を突っ切るウルトラC。正直な話、ロマニは秒速で却下を出したが、それでも立香はゴリ押しした。一切のリスクを負わずして事を成し遂げようなどと、おこがましいのではないか。

『ここはリスクを負ってでも戦う時だ。絶対に』

『下手すると船が空中分解しかねないぞ!』

『船全体にバリアーっていうか……そう言うのが張れば!』

『そんな都合の良い超凄腕キャスターが居る訳……居る……訳』

＜……という事で、メディアは船の中心。帆の辺りで待機する事になった。そこを起点に結界を張り、船を守護し……それと同時に、その結界で、着水の衝撃を何とか和らげるためにと、色々メディアと香子とで話し合って、術式を構成し、こうして挑んでいある。



素晴らしかるや汎人類史……!!(掌返し) ついさつき、着水に関してどうするかと言つてたのを、ちゃんと解決している+1145143643641919810点(大喝采)……うん、そこは解決してはあるんですけど。

∨——しかし。天を往き、何者にも追いつけぬ程の速度で離脱する、尋常を超えたとんでもない一手だとしても、完璧な作戦、という訳ではない。

「——っ!!」

「っあっ……せん……ぱい……っ!!」

∨寧ろ、その逆である。ロマニが出した計算結果では、船の保護と、着水時の衝撃を和らげる、その二つの役割を持った結界。それを構築するだけでも相当なりソースだ。船員の安全迄手が回らないというのが現実で。この飛ぶ際の暴風は各自で耐えるしかないのだ。

なんでロープ? と思つてましたけど、いやー船の上が地獄同然。風が全てをもう色々フツ飛ばそうとすげえハリケーン……! 甲板の上に荷物は一切なく、多分ですけど全部船の中に詰めているんでしょうね。

だって、船の上で皆ヨツンヴァインで耐え凌いでるんですよ。サーヴァントの皆さんはまあ、体の頑丈さが良い感じに作用してるんですけど、船長と船員の皆さんは大変そうです。

∨——この作戦で一番つらいのは一般人枠。要するに、自分と立香だ。全員、吹っ飛ばされないだけで精いっぱい。自分の身は、自分で守り抜くしかないのだ。

∨ゆ、歪む……何かガツ!!

∨髪が少ない分抵抗も少ない……っ! 耐えろっ……!!

そんな中ホモ君はガマガエルみたいな顔状態になりつつ、必死に風に耐え凌いでる訳です。真ゲ対ネオゲの最初で、イーグル号の加速に押し潰された軍人さんみたいな感じになっています。コレはAPP3。

「——つたく、後、どんくらいで……!」

「これは……きついなっ!」

「SNS映え必須の景色である!!」

〈各々、様々な表情を見せ、この暴風吹き荒れる地獄のような甲板にて、耐え凌いでいるのは間違いなかった。

「ダーリン大丈夫?」

「大丈夫だけど……なんでお前は平気そうなんだよ」

「えうりゆあれ……っ!!」

「……アステリオス、そんなにしなくても全く苦しくも無いしビクともしないから安心なさい」

〈……一部、全くに気にしていないのは居るが、それは多分例外だ  
と思いたい。というか貴方としては、オリオンがアルテミスの豊かな  
双丘に体ごと挟まれて全く反応していないのが凄いと思った。慣れ  
ているのだろうか。

スケベハゲがこの野郎……!! (怒髪天) ホモ君のスケベな注目点

は兎も角、アルテミスさんが何も苦しそうにしてないのが(ネタバレ)  
である事を如実に示していて(ネタバレ)が凄いい好き俺としてはも  
う……パチュリー、ウツ!! (申東N)

「ぐう……う……」

「あと、どれくらい……!?!」

〈そんな地獄の様な耐久に耐えて、耐えて……だが、貴方の目に映つ  
たのは、それからの解放ではなく、更なる苦難が待ち構えているとい  
う地獄。水面が、ドンドンと近づいて行っているのが、チラリと見え  
た!!

へー、テーマパークに来たみたいだぜ。テンション上がるなあ

(船飛びの流儀) メツチャハテナマーク大量に浮かべてそう。

「!!!」

「ああ……最悪ねっ……!!」

「そおおおいん!! こらえろおおおおお——」

〈世界が、水面に向けて加速していく。その世界が……ゆっくりと  
なっているのに、今気が付いた。悟った。コレは、間違いない。走馬  
灯という奴だ。世界が減速して見えるのは本当だったのか……等と  
思って居た直後の事。

「ドバアアアアシャアアアツオオオオオオン!!!」

▽轟音と共に。全ては暗転した。

……ツスウウウウウウ……さて、一応DLCの出生一覧を見直しておきましょうかね。えっと、次は光の戦士とか、秘密結社の改造人間とかも良いっすねえ。うんうん。

さて（覚悟完了） 取り敢えず次に進めましょうか。ゲームオーバーって出てきたら爆笑して再走です（半ギレ）

▽——どれくらい時間が経ったのだろうか。分からない。兎も角、貴方はゆつくりと目を覚まし……もにゅん、と何かに突っ込んだ。そしてそれが最近感じた感触である事を思い出して……退いた。逃げた。

「あつ!! マスター、気が付かれたのですね……! 良かった」

▽やはり想像通りだった。香子に膝枕された挙句、起き上がりで……突っ込んだらしい。取り敢えず土下座はしておいて、チラリと脇目で甲板を見回しておく。

どうやら助かったみたいですね。いやー信じてましたよハゲのホモは頑丈、へーきへーき、へーきだからって。まさか再走しようとか思ってる訳が無いんだよなあ……自分の作った主人公を信じられないプレイヤーー居るウ!? 居ねえよなあ!?

で、その周りは……酷い。ドレイク船長を囲んで船員達が喜んで男泣きしてたり竜の魔女が黒の暴君に襲い掛かって居たりマシユと藤丸君がホモ君と同じようになってたりと。

「……突破こそしたが……突破、こそしたが……!!!」

「アタランテの姐さん!! 大丈夫ですかい!!」

「大丈夫なように見えるか!! 藤丸に伝える!! 次からはもうちよつと優しいやり方を思いつけとな!!」

▽それは同意したかったが、しかし、実際窮地を脱する事が出来たのも間違いない。アレだけの数の敵、本来相当な被害を出して突破する事になったのが……と、ここまで考えて、ふと思ひ出す。船の被害はどうだったのか。

「——アンタ等! 良くやってくれた! 船の被害も最小限! 最短

の道突っ切って例の場所も目の前だ！ 本当に助かった！」

◁——やったぜ。

◁◁っしやあああああっ!!

やっ た ぜ(洗脳完了) はっ、つい反射的に上選択肢を……と  
いうか、どうして上選択肢が汚いんですか……まあそれは兎も角。

今回は、無事に敵の領域を突破し、逃げ切った所で終わりになります。ホント、一応の解決策が上手くいつて居て助かったと申しますか……とはいえ、コレで漸くアトランティス跡地は目と鼻の先。

どんな風に船を強化するのか。楽しみです。ご視聴、ありがとうございます。ございました。

## 薄暗い海の底に その一

皆さんこんにちは、ノンケ（水着コルデー第一再臨が一番好き）です。皆さん。ありがとうございます。引けました（完全勝利） いやー、勝ちもうした。もう他は誰も欲しがりません。寧ろもっとコルデーが欲しいまでである。というか普通にド有能サーヴァントなのクツソ嬉しいです。

前回は、敵船を振り切ってその先へッ……！ なお一切の被害は考慮に入れて居ない模様です。着水しただけで皆ボロカスになるようなプランでしたが、ハッハア!! 辿り着いたぜえ!! お宝だらけの新天地によお!!（ついてない）

……さて、前回ドレイク船長が眼の前だ、という事を言っただけで、私プレイヤーマンも便乗して『目と鼻の先』なんて言いましたけど、事実は分かりません（オオツ!?） 皆様がふざけんな!!と思うの間違いはないとは思いますが……出来れば今回で、アトランティスまでたどり着きたい所ではありますが。

「——と、言っただけは良いけどねえ。まあ直ぐ出発出来るような状態でも無いかな」

「ええ……船内の荷物はぐっちゃぐちゃで、整理したりしないと」「一応、どつか穴開いてないかどうか確認しな。ダメージは境界とかで減らせたにしてもやっぱり、一切受けてない訳じゃないからね!」「へいー」

◇ドレイクの指示を受けて、四方八方に散る船員達。船の精密チェックが終われば航海再開だ。その間、一応追撃等の可能性を考えて、サーヴァント及びカルデアメンバーで監視を行いつつ、ロマニからの報告を聞いていた。

『ええつと……測定の結果なんだけど、このままの速度で行けば、そう時間もかからず到着できる辺りの距離にあったよ。ドレイク船長の言っているアトランティスらしき場所』

「ふーん。与太じゃなかったのね」

「いや与太だと思っただの。だったらなんでここまで全く反対一つも

しなかったの」

「どうせどこに向かうのかも分からない状態でしたし？」

与太かと言われているの草も生えない。いやまあ、ドレイク船長の偉業はね。ポップコーンを齧って笑いながら聞いても何の違和感も無いとんでもない与太の類と言われても不思議ではないんですよえ……

『まあその与太な可能性が完全に否定された訳だけ』

『私達の測定の結果、マジでちよつとした島一つくらいのがデカイ都市……かどうかは分からないけど、建造物が沈んでるのが確認できた』  
　　<島一つ。それだけ巨大な都市を、其処に存在した海神諸共沈めたのだから、本当に豪快な冒険譚だ。正にこの海に認められた大海賊だと言えるだろう。ドレイクは。だがそんな大海賊を以てして、この特異点には苦勞している訳なのだが。』

「おお……海中の財宝的な……」

『そう、なんだけど……問題は此処から。プランとしては、キャスター組のサポートを受けて海中に潜って何かしらを回収する、っていう積りだったんだけど。正直に言って良いかな』

『全く魔術的な反応に引つかかるものがない。いや、この街の建築全体に凄い神秘の反応がこう、グワーツと広がってはいるんだけど、それは多分……』

<都市そのものが身に纏う神秘なのか……

<つまりこの海は、神秘が濃密に煮詰められたジュースの様な物！

L.C.Lかな？（苦笑い）海全体がそんな事になってたら間違いないなくマスターが濃い神秘に侵されて倒れてると思うんですけど。というかそんな第七特異点もMURみたいな表情になる様なおっそろしい特異点は存在してはいけない（戒め）

あつ、選択肢は当然下で（ボケたがり三郎太）

『だとしたら汲んで来てほしいかな!! カルデアのスゴイリソースになるし!!』

『という事で、多分だけど、都市全体が神秘の塊なんだと思うんだよね。流石に海神様がおわした都市は格が違うねえ』

「じゃあ、武器になりそうなものは？」

『この反応の中に埋もれてる可能性は十分にあるけど。ここから詳しい場所を探るのはまず無理だと思うよ』

〈とはいえ、それで諦めてしまうのは流石に笑い話にもならない。しかし、何処から何を探すべきなのか、こうなつてしまつたら。

「見つかる事を祈りたいけど……式部さん、何か感じる？ キャスター的な何かで」

「ええつと……申し訳ありません。私は特に何も。晴明様であれば、何かしら感じ取つていたやもしれないのですが」

『というかこんな濃い魔力だとかの中から何かを感じとるのは魔術師とかそう言う類の人物じゃないよ。どっちかと言えば野生の獣的な、直勘？ とかの方がそう言うのを察知しやすいんじゃないのかな』

この中で天性の直勘を持ち合わせているのは……野性的な感覚に近いものが……成程分かりましたよ。俺様のIQ364364級の頭脳がはじき出した結論は……うしくんだな！（フルスイングボケ）まあ良く分からない小ボケは兎も角、セイバーさん。如何でしょうか。

「私の直感はその様に使えるものではない。危機回避等が主な用途だ。寧ろ其方の突撃女の領分ではないのか？」

「はっ、私に啓示なんて降りる訳ないでしょ。呪いで物を探すのとか出来ないの？」

「……失せ物を探すのであれば兎も角……申し訳ありません」  
「あつそ」

〈どちらにしても、一筋縄ではいかないようだ……となれば、この広大な海の底に沈んでいる広い都市から武器を探し出すとなると、ほぼ手探りで探す事になるだろう。どれだけ時間がかかるか、分かつたものではない。

トレジャーハントで海に潜るとは。夏イベントも先取りしているというのかこの特異点は……!!（戦慄）そんなわけないじゃん（嘲笑）

「何か……何か……康友、何か感じないか？」

〈立香に話題を振られ、ふと考え込む。一応、ここを思い出したのは自分なのだ。思い出させられた、という方が、貴方的にはしつくり来たのだが。それを考え……ふと、貴方は海の方に視線を向けた。〉

〈何を感じ取ったんだろうな、俺は。〉

〈んー……何を言いたかったんだ、お前は。〉

そうなんですよね。ホモ君が何かしら感じ取って、思い出したからここに来たんであって。実際ここが一番確率が高かったのは間違いないですけど。おう、感じ取るんだよ360度全方位。

取り敢えず、選択肢は下にでも……

〈ふと、そんな風に呟いた直後だった。バチリ、と久しぶりの感覚が頭を過る。え、という間もなく、頭に流れ込む……大量の映像。頭痛がする。吐き気がする。思わず、貴方は甲板に膝をついてしまった。〉

……ファツ!?

「マスター!？」

『な、どうしたんだい本造院君……つて、角が!』

「つ……結界を張ります、少し、お手伝いを!!」

〈そう言った香子に手をかざし、止める様に告げた。その代わりに、手を握っていて欲しいと。一瞬、彼女は何か言いたげにこつちを見て……しかし、最後には手を握った。そのぬくもりに集中し、先ずはしっかりと意識を保ち。それから頭の中に目を向けた。〉

〈……コレは……〉

〈……ドレイク、船長……が

か、勝手に能力が暴走を!? 厄ネタどころの騒ぎでは無かった……? (震え声) 鬼種の魔ってこんな事が出来る能力じゃないんですよ。それこそ、同種と感応するくらいはF G O内でもあったんですけども。

〈海を駆ける、深紅の船。そこに威風堂々と拳銃を構える大海賊。それを必死になって捕らえようとして……しかし、届かない。まるで海に加護を受けたかのように、自分の手からすり抜けていく。〉

『はっ!! どうした海の神様! 賊一人捕らえられないたあ、随分と



情けない!!』

◇余りにも自由で。その姿が。敵だと言うのに……一瞬、見惚れてしまった。天馬を乗りこなす、あの少女の様に。自分が手籠めにした、あの力強い女の様子に。だが、届かないのだ。それどころか、碎かれる。敵意と、混ざり合ったその感情は……やがて。

『——ドレイク』

◇——恨みにも等しいものとなったのだ。

……うっわ(ドン引き) 気持ち悪いモノを見た気がします(フオウ君騙り) 何が一番気持ち悪いって、ドレイク船長の、瞳を凄めつちや見つめてるんですね。この、この映像を見ていた某か。まあ、誰かは分かり切ってる気がしますけど。

「康友!?! おい、大丈夫か!?!」

◇海の底だ。

「えっ?」

◇海の底に、ある。確実に。探れ。とんでもないモンが、眠ってる。残骸が。

所で。あの、い、一体君は何を感じ取っているんでしょうかホモ君。角が無理矢理生えた拳句、なんか埋まってるって。それはもう電波の所業なんです、それはお判りでしょうか。ゼロは何も答えてくれな  
い……

と言った所で今回はここまで。ご視聴、ありがとうございます。

## 薄暗い海の底に その二

皆さんこんにちは、ノンケ（沖田オルタ……!?）です。正直煉獄が擬人化ってwwwとか思ってたんですけども……アレツ？ 待つて？ 食べちゃいたいくらい可愛いんですけど、それは反則では無いですか？ ええ？

前回のお……うらアバンストラッシュ!!（名作を汚していくスタイル）海の都を発見!! しかし目ぼしいお宝は無いかもしれない……そんなバカな話あるか！ しかしながら、ここでホモ君がまさかの反応!!

『……角の反応、収まったけど……どういう事だい、コレは？』

『暴発って感じじゃなかった。それに、本造院君、海の中に残骸とか言ってたけれど。何か、感じたのかい？』

∨——誰かの記憶、というよりは、恨みか。それを感じ取ったと貴方は二人に返した。愛憎入り混じる、相当な物だ。しかも……ドレイク船長に向けての物で。それが何者なのかは貴方は全く分からなかったが。

「……ロマニ様、マスターの体調等に異変はありませんか？」

『特にない、と思う。こつちから観測する分には、だけでも』

「そう、ですか。マスター、大丈夫ですか？」

∨∨立てはするから、何とか大丈夫だと思うけども。

∨∨頭痛がするぜ……コレが船酔いか……

絶対違う（確信） もっと船酔いについて勉強して欲しいですが、それは兎も角としてアレだけの映像を頭脳に叩き込まれて『あたまたいたい』で済むのは流石ホモ君、普通はクウーン……（失神）で幸せなキスが出来ず終了。頑丈なのはハゲの特権。

「ふ、船酔いにしては遅すぎると……ってそうでは無くて!!」

「なんで急に角生やしたんだよ?!!」

∨自分の意思ではなく勝手に生えたんだ、と返す。別に生やしたくて生やした訳では無いのだ……しかし、ダ・ヴィンチとロマニの言う通り、勝手に暴発した、というよりは何かに応答して出た、と言った

感じが正しいか。

『……霊媒体質を持つ人の中には、勝手に霊が降りて、その人の意思ではない言葉をしゃべりだす何てこともあるけど、その類かな』

『うーん……どうなんだろう。それにしても時間が短すぎるんじゃないかな』

申し訳ないがホモ君をカレンちゃんと一緒にするのはNG。アレは悪魔が降りてくるタイプだから全然違うんだよなあ……これは型月俄かが出ましたね間違いない。型月おじさん許して!!

◀今は自分の事を解析している場合じゃないだろう、と貴方は声を上げた。今は海の底を探れと。その声に反応したのは、貴方が声をかけたロマニとダ・ヴィンチではなく……ドレイクだったのだが。

「どうしたんだい？　なんか揉めてるみたいだけど」

「揉めてるって訳じゃなくて……なんか康友が見つけたんですよ」

「ああん？　見つけたあ？　目当てのお宝か何かかい？」

◀お宝かどうかは分からないけども。

◀なんか沈んでるのは間違いない気がする。

……しかし、何が沈んでるって言うんでしょうか。この辺りに。ほんへではドラゴンを素材に船を強化していたのは覚えているんですが。それ以上に豪快な強化策でもあるんでしょうかと……まさか、まさかねえ？　（フラグ）

「フーン……そっちの見解は？」

「なんかあるんじゃないか、っていうのは……まあ」

『いや、何かあるのは確認したよ』

◀——その時、ドレイクと立香の間にダ・ヴィンチの声が割り込んだ。

「何？」

『今、ちよつと調査方法を変えてね。調べてみたんだけど……都市の上何か巨大な物が転がってるのが確認できた。それがいったい何かは分からない。ただ、少なくともガラクタでは無いのは間違いないよ』

なんだあの巨大なモノ♂……そのデカイモノが一体何なのか、つて

言う話ですよ。問題は。いやもう、ここまで来て、生半可な武器はプレイヤーが冷めるつてもんで。せめて神代クラスの神秘を纏った武器だとか。

「ほう？ ソイツあ良い情報を聞いたな」

『といつても、サイズが凄い。幾らサーヴアント、と言つても引き上げられるかどうかって言えば……』

「成程。普通のやり方じゃ無理って訳か」

〈——という事で、近場の島に船を泊めて、この中で一番剛力に優れるアステリオスに引つ張って貰うプランで行くことになった。問題は引つ張るだけの綱やら何かを準備しなければいけない訳だが。

「まあここら辺はアイツ等のナワバリとかではないから、問題はない。あの辺りを塞いでた奴らも、ナワバリからは結構離れた所まで出て来てたからね」

取り敢えず休んでたと思つたら襲撃を受けるみたいなのはいやもう限界つすよ（棒読み） いやもうホント痛いんでもう無理です（棒読み）

で、今度はその近隣の島まで移動になるので。

〈移動力……ツトオ!!〉

「——アンタ等あ！ ここが大舞台前の最後の休みだと思いなあ！

カチコミかける準備をしたら、全力でぶっ飛ばしに行く！」

「へい！ 船長!!」

「相手はこの海を牛耳る化け物共だ！ ちょっとでも隙があったら、気合入れて英気を養うんだよ!! 良いかい!!」

「へい！ 船長!!」

〈ドレイクの号令が響き、全船員が動き出す。それを見届けたドレイクが此方へと戻って来るのに合わせ、ロマニが口火を切った。

『では、海中の遺物回収作業に関するブリーフィングを開始したいと思います!!』

「おー!!」

「わー、わー」

「……」

〈上から、結構ノリの良い人達。普通に反応を返してくれる良い子達。そしてそう言うノリについて行けない、またはついてくるつもりのない大人の方々、である。最後の反応でロマニが若干しょぼんとなったが、それは兎も角。〉

兎も角らないでください。頼みます。貴方がもうちよつとしつかりして下さるととっても皆締まると思うんですけれども。まあ、それは兎も角としても、しかしメンバーが壮観ですね。

カルデアの面々と、この特異点で出会った頼もしい仲間たちに加え、本来だったら欠けてる筈のうしくんと、そして壊滅したイアソンの海賊団からメディアさんも参加と。勝ったな（フラグ）

『で、作戦を実行するにあたり、メンバーは三つのグループに分けたいと思う。まずは事前準備、及びサポート班。コレは道具作成を得意とするキャスターのお二人、それと、万が一、万が一の敵襲の時の護衛としてタマモキヤット。それと本造院君をここに』

「わ、分かりました」

「頑張ります!!」

「うむむ、キヤットの理性放棄に任せると良い!」

〈それは任せちゃいけない奴やねえ……〉

〈任せろ!! 太くて長くて逞しい特別製の奴を作ってやるからよお!!

そして積極的にセクハラはしていくスタイル(屑) だって、この選択肢選んだだけで香子さんとメディアさんの赤面が見られるんだもん……カワイイ!! (絶叫) そしてその発言を聞いてキヤットが舌なめずりをするのが……セクシー……ヒロインッ! (迂闊に依存すると墮落する隠喩)

キヤットに『俺をお世話お願いします』とか冗談で言ったら一か月後にはキヤットから逃れられなくなってる気がする。あの可愛さで、恐ろしい程のタマモ属性だったりすると私の股間のエクスカリバーに悪いです。

『続いて海中での作業を担当する班。ここに関しては、アタランテ、アルテミス、ダビデ達が担当する……』という事で、宜しいんですね。

女神アルテミス』

「うん。ダーリンが『ここが一番お前活躍出来るだろ』って」

「アタランテに関しては、アルテミスが居るから、後泳ぎに関しても、狩人としてある程度の技量があるとの事だったので。ダビデは……完全に他に回せないで消去法ではあったのだが。」

『了解しました。そして地上での引き揚げ作業に関しては、筋力A組が担当する事になる訳だけど……あの、女神エウリュアレは本当にここで宜しいんですか？』

「良いわよ。どうせ何処行っても大して変わらないし。だったらアステリオスの肩にでも乗っておくわ」

「……まあ、肩に羽毛が乗ったくらいで気にするうしくんじやないでしょうし。そもそもエウリュアレと一緒に居た方がパワーを全然発揮できるでしょうし、コレは間違っていない気がしますね。」

『——で、ドレイク船長は、船員達を率いて各班のサポートを。コレで文句が無ければ早速、行動を始めたいと思います！』

と言った所で、今回は此処まで。

次回は、最終決戦に向けての準備を始めたいと思います。ご視聴、ありがとうございました。

？

## 大準備 その一

皆さんこんにちは、ノンケ（やんちゃシノビ）です。全国のお稚児趣味をマジで狂乱させたんじゃないかと思えます。あの靈衣は。元々から小太郎君はそう言う趣味の方をおびき寄せるようなキャラでしたけど。

前回はうらすじ（体言止め断定系） 海の中に残骸が！ マスター本造院、お許しください！ ここら辺は敵のテリトリー外だ！ だったら引き摺りだせばいいだろ!! 後は皆で集まって仕事開始！

「……所で、前回何も言及されてないと思ったらいつの間にかドレイク船長のグループに組み込まれていた件について、ロマニ」

『いや、マシユは基本的にこの特異点の重要人物のドレイク船長と、マスターの君を護衛するのが基本だから、必然的にドレイク船長と一緒に行動するのが普通だと思っただけで。うん』

「あの、藤丸様、何故マスターを小脇に抱えて……」

「……ええ……?（困惑） やったぜ、役割分担もすっかり出来てるし上手く行きそうやな!! とか思える最後だとか思ってたらこのザマですよ。ロマニくんさあ……（くつちやくつちや）」

「だったら口に出せやアアア!! くらえっ! 康友経由の太陽光!!」

『うわああああっ!! まぶしいいいいいいっ! 目があ!』

「ま、マスター!?!」

「……気になっていた所を突っ込むのは正しいと思う。しかしながら、なぜ自分の頭を反射鏡代わりに使っているのか。しかもなぜそんな綺麗に反射できてしまっているのだろうか。」

「おうゴラ、俺に何の恨みがあるってんだこの野郎。」

「侮辱された、という事は侮辱し返しても構わないという事だな? 多分恨みは何も無いと思います。近場に良い感じに光を反射できるだけのつるつるっぱげがあつたから使っただけで……コレは第六章でも不敬やらかしますね間違いない。そう言う所やぞ。ホモ君に対し

ての対応？ コレであってるんじゃないですかね（適当） まあ不満もあるでしょうし、しつかり相棒同士で殴り合ってもろて。

「えっ、いや侮辱したつもへぶうっ!？」

『ええっ!? ちよ、今ベゴンってえげつない音が!？』

＜怒りのドストレートが立香に突き刺さる。貴方に一切の容赦はない。仲がいいからこそその容赦の無い拳だ。取り敢えず、恨みも乗せて何時もと同じくらいの重さ（当社比）でぶん殴ってみた。良い手応えだった。

コレは腰入ってるパンチ。容赦なき杉田で笑っちゃうぜ!! 音聞いたマシユちゃんが目をまん丸にして、香子さんがちよつと涙目になってるのがその威力を良く表していると思います。

＜口の端から、良い感じに血を垂らしながら……派手によるめいた立香が、上体をゆっくり立て直す。やはり倒れはしなかったが。結構良いダメージを喰らった模様だ。

「……悪かったとは思ってるんだ。ああ、正直。お前がそのハゲ頭気にしてるのも承知してるよ。長い付き合いだし。親しき仲にも礼儀あり。間違いないなあ、ああそうだ」

『あ、あの二人共……?』

「にしたってよお。今のは、結構効いたぜ……? そっちこそ、多少のいたずらに返すにしては渾身すぎやしねえか？」

＜此方の視線と、向こうの視線が交錯する。完全に、目が良い感じに据わっているのが分かった。ゴキゴキと、首を鳴らす。後ろから声がかかったのが聞こえたが、関係ない。もうこうなってしまうば……血を血で洗う殴り合いの開始だ。

あのーすみませーん。木下ですけどー、（準備に）まーだ時間かかりそうですかねー?（煽り） まあ殴りあい宇宙始めたらとんでもないタイムロスになるのである程度まで行ったら止めて欲しいのは間違いないありませんけども。

……ん?（気づき） あっ（察し）

「——お二人共」

「——そ、其処までになさってください!!」



〈踏み込めば互いに必殺の間合い。叩き潰す、と思つて歩み寄つた瞬間、立香の頭にごチンと盾が落ち、貴方は地面に顔面を強かに打ち付け、しかもガッツリ両手両足を拘束されてしまう。

『手加減はしてあげて……つて遅かつたか』

「今は仕事を優先する場です。私闘はご法度ですよ。それに、今のは先輩が悪いですからしつかりと反省をしてください」

「ま、マスターも少しばかり力を籠め過ぎだと思ひます……」

〈砂場に埋まり、頭部が哀しい程にスイカっぽい事になっている立香と、砂場に埋まりナスカの地上絵の如く無様を晒す貴方は、二人してごめんなさい、とだけ呟いた。ジャンヌ・オルタが『馬鹿な事やつてないで手伝いなさい』とだけ言った。

いや全くごもつともだと思ひます。どうしてこんなバカみたいな事を俺達はやっていいのか甚だ疑問ではございます。皆頑張つて仕事をしている最中の皆様の輪から外れてこんなことしてるんだから恨みを買つてもドツチモドツチモ（必然）

「……姉御、楽しそうですね」

「馬鹿言つてないで、埋まつてる方を連れ戻してきな」

「へー」

ああ、藤丸君が引っこ抜かれて……ひっこ……ひっこ……抜けないんですけど（困惑） マシユちゃんしつかりと埋めた所為で藤丸君が、波にちよつとずつ沈んでいっています。塩辛い！ とか悲鳴を上げてます。ふはっ、馬鹿じゃねえの（目糞鼻糞を）

「マスターも、早く縄の製作に取り掛からないと。三人共お待ちですよ」

〈〈了解。

〈〈こうやって砂浜に寝っ転がつてるのも悪くないんだよね。

目糞の分際でサボるんじゃねえぞオラァン!? 選択は容赦なく……上だよ（久しぶり淫夢） というか、顔面からしつかり砂浜に伏せてるって言うのに流暢に言葉を喋れているというのか。

「ではキャットが抱えていく故、暴れん棒で聞かん棒のご主人はしつかり縛り上げて夏の魔物にならぬよう封淫必須である」

「わ、分かりました、しつかり縛って……えっ？ あれっ!!? あの、キヤット様!」

「???」  
「キヤット流奥義、空気読みキヤット。泰山解説祭に完璧に合わせる」

「!!」二人がなんか会話しているが、砂で眼が潰れているのでどうなっているのか全く分からない。分からないが、口いっぱい砂を詰められると間違いなく拷問になる、という事だけは分かった。

どんな棒なんやろなあ……（すつとぼけ）香子さんが真っ赤になつてる所を見ると、田舎少年が大好きな類の事なんやろなあ……（知らんふり）

「あ、お二人共。ご用事終わりました?」

「はい……」

「うむ。ご主人がお魚加えたドラ○もんだった故、愉快に苦勞したのである」

「ドラ……?」

「キヤットのにはアレを猫と呼ぶのはNG。肉球が足りぬ、出直して参れ」

あの青狸に猫要素を求めようというのが無茶なんだよなあ……まあそれは兎も角としてもきて。ホモ君は、うしくんが扱う為のデカイデカイ特別頑丈なロープを作成するグループで仕事をする事になってます。と言っても何をすれば良いのか。

「そ、それで。何から始めましょうか」

「ええつと。先ずは使えそうなツタを採集する所から、ですね。採取は私と香子さんでやるので、キヤットさん達二人は……」

「>」そう言った直後、此方に近づいて来る、草をかき分ける音。一瞬張り詰める空気。それを切り裂く様に……飛び出して来たのは、獣や肌色のおかしい海賊……恐らくはゾンビの類である。

「採取の邪魔をする敵を、排除して頂ければ!」

「ウムウム了解。キヤットとご主人のタッグ暴力で暴力! 調理!

晩餐会である!」

「えっ……ふ、腐肉を食べるのであればそう言った知識も……」

「メディア様。キャット様の言葉を真に受けてはいけないと思いません」

「いつも思考が暴走してるようなもんやし(適當)で、我々は基本的にKBSしてればいいという事で……ヨシッ！ いつも通りだな！ (思考停止)」

「数は数体。大した敵でも無い。どうせ能力を使えないのだから、こちら辺で少しばかり能力頼りになる前のケンカの勘を、取り戻すのも悪くないだろう。貴方は、ゆっくりと拳を構えた。」

「ご主人もやる気十分!! ところでケダモノ相手の経験は如何ほどか」

「山に居た時は、これ位のケダモノ相手なんてザラだよ。」

「町でチンピラに絡まれるのと大して変わんねーや。」

「チンピラは君なんだよなあ…… (選択肢下)」

「成程、気合十分。ではご主人。キャットが先行する。お手とおかわりはしっかりと使いこなすのだゾ?」

「犬の芸が通じる相手かどうかは正直微妙だが……構わない。暴力で教育してやればちんちんでもやる様になるだろう、と凶暴な笑みを浮かべ。先陣切って突っ込んでいくキャットの後に続いた。」

「——と言った所で今回は此処まで。ご視聴、ありがとうございます。」

## 大準備 その二

皆さんこんにちは、ノンケ（夏の魔王）です。今回のイベント、ドレイク船長が色々言われてますけど、夏休みにテンション上がっちゃって童心に若干戻ったように見えるのでとても良き良き良き良き良きなんですけど誰か同意して下さいる人はいないか……!! 居ないですね、はい（落涙）

前回は、もう体力限界までホモ君と藤丸君の死闘が……! という茶番をしている間にも着々と準備は進み、お二人は確実に足手まといになっていました。さて、次は海に沈んだ残骸を引き上げる……ロープを作る所からだな!!

「ロープの素材、集まりましたー……って物凄い数積みあがってますー!」

「今夜の飯のタネ、しっかりと叩いてミンチにしてマントル迄ぶち込めば立派なハンバーグである! 因みに味は保証できヌ」

〈正直、正に山の如しという程にうず高く積まれている。コレは間違ひなく大戦果と言っても差し支えは間違ひないだろう……といっても、これらはキャットが仕留めたのだが。そりゃあサーヴァントと人間では力の差がありすぎなので、当然だった。

「凄いですねえ」

「はい。キャット様は私などよりもよほど強いですし。マスターも勇猛果敢な方でありますから……それでも戦いの場に自ら出向いて欲しくはないのですけれど」

人理修復という大いなる目的の前にはマスターの安全なんていうちんけな要素は必要ないってハッキリ分かんだね。というか、スケルトンやら歴戦の勇士やら、他にも何やら色々相手にして来たんですから、今更ケダモノとゾンビにビビってるようじゃ型月主人公失格ってそれ一。

「しかしその手のツルのなんと多い事、島に取り付く寄生虫、取り除くには煙で燻するのが定番なのだな♪ 愛の炎で着火して見るかご主人」

〈寄生虫って言うか、小さい虫を払うのは煙が定番だよ。

「そんな事よりご婦人方が溜息を吐くレベルでぶつといのをだな。」

「いや、そもそも品性が型月主人公的に失格レベルだったわ（選択肢下）お前が選んでるんだよなあ!? 自分から品性を下げて、責任を他人に擦り付けるプレイヤーの屑が居ますね……（白目）というか、士郎君しかりジーク君しかりザビーズしかりぐだーずしかりで型月主人公そっち方面の品性行儀良スギイ!? あ。愛人とか作ってるろくでなしじいさんは除く。なんであの人だけ馬鹿みたいにただれているのか……」

「では、ここからコレを編んで一本の綱の代わりにするのですが……やはりそのまま織り込んでも強度に不安があるので、色々と細工をします。それで、次はその為に必要な素材……の代用品を取りに行きたいと思います」

「だ、代用品ですか」

「本来の素材がこの辺りにあるとは思えないので……」

「く、薬品やら、そう言うのを作るのに必要らしい。神代の魔術師は、そう言った薬学にも詳しいようである。」

「最高の品でなくても効果を発揮させるやり方も、しっかりと習っていますから」

「私も、多少は陰陽道のそう言った部分を齧った事はありますが」

「ふふ、私のは少々と凄いですよ。何しろ、あのキルケ―叔母さまから習ったものですから。とはいえ……あの方に比べると、どうしても劣ってしまいますけど」

魔術師って、本来は研究職ですからね。そう言う薬学知識は基本、なんだそうです。寧ろお師匠がその道に関しては、多分敵側にいらつしやる奥様ですら並び立つ事は不可能レベルの怪物なので、メディアさんはそっち方面に特化してて当然というか。

あと、序に補足しておくとかユケオーンも魔術的な食事としての一面もあるっちゃあるので、オケキャスさんがお得意なのも当然と言えましょう。ばそうなんだそうです。

「だが一スタックに固まって動くのは余りにも非効率。RTAプレイヤーはリスクも冒してマンボ、流れを二つに分けて回遊すべきでは？」

キヤットは訝しんだ」

「え、あ。ハイそうですね。私達は四人居ますので、二人二人で分ければ……」

「〜となると、メディアが一番素材について詳しいので、彼女が最も色々な所を回る事になるだろう。重要なのはメディアの方だ。其方にキヤットを回し、後は香子と自分が動くのが良いだろう。と貴方は判断した。」

「ウム。それが良からう」

「ではキヤットさん。よろしくお願いします。えっと、香子さんにもメモを……」

「……読めるんでしようか、私」

「幾ら平安女流作家で伝説レベルの文章を極めていても、ギリシヤ語を流暢に話して書いて出来たらそれはもう色々ヤバイ気がするので残当。」

「——では、行ってまいりますので。お二人もお気をつけて」

「しつかり守る故、任せるバリバリ!!」

「〜とりあえず止めて! とだけ返しておいた。頼りになるサーヴァントではあるのだがどうしても不安を煽るセリフが過ぎる。余りにも失礼過ぎる感想ではある気がするが……後は、しつかりと仕事に集中しよう。」

「参りましたようか、マスター」

「〜あいよー」

「〜ふ、野山で山草を取った日々が懐かしい事よなあ……」

「最初の山籠もりを物凄く擦るやんか。まあホモ君も藤丸君も若干野性味あふれてた方が主人公としても魅力あふれますよ。だってほんへの藤丸君にしてもちよつと綺麗すぎるといいうか、もつと糞まみれになろうや(極端)」

「しかし、凄いですね。この島に詳しいという訳でもないのに、気候とか、島の植生からだけでどんな植物があるのか、凡そ分かるなんて」

「メディア曰く、薬草をどのように使うのか、何処でとれるのか、どんなものと組み合わせれば使えるのか……と、言ったような事を習得

していくと、自然環境についても、勝手に詳しくなっていくのだそうだ。

「二つの学問を、様々な事に応用していく。そしてそのまた逆も……言葉で言うのは容易いですが、その難度は想像を遥かに超えていきます。それが出来るメディア様は、真の賢者なのでしょう」

「そうだね。凄いやね。」

「でも香子さんだって負けてないさ。」

嘘つけただのバーサーカーだゾ（確信）ハーゲンティ君無限パンケーキの悲劇を忘れてはならない。賢い時は賢いけど、間違いなく今のメンバーの中でぶっちぎりやべーやつなのは間違いなしだと思います。

で、それを踏まえ、サーヴァントの中でも間違いなく常識を理解してる香子さんの方がプレイヤー的には嬉しいんですね。アマゾネスの女王とかネー無理……（制御）

「そう言ってもらえると、嬉しいですが……もし、メディア様程賢ければ、マスターの体についても、何か案の一つでも、出せたかもしれないせんし」

「別にそれは香子のやるべき事ではないから気にしないでもいいだろう、と貴方は言葉を返した。そもそも、コレに関しては自分の問題なのだから知恵を貸して貰っているだけでも望外の幸運なのだから、と。」

まあ、マスターとサーヴァントの関係性があつたとしても、マスターの体を最優先で癒すんだよ、あくしろよ。とか口が裂けても言うてはいけません。サーヴァントとマスターの関係は協力者、従僕を使うなんて驕ってはいけないうってハッキリ分かんかね。

「それは、私がマスターを、助けたい。と思つて居ますから。マスターとして、貴方は私に誠実に接してくださいますから。その誠意には、出来るだけの事を。そう思つては、いけませんか？」

「そう言われてしまうと……何も返せない。人の善意を無下にするのは流石に。こんな顔面ではあるが、一応人情派で生きていきたい。

人情派って言うか任侠派やろ（鼻ホジ）

「……」

「ふと、香子と目が合う。自分を見つめている。目の覚めるような美人にじつと見つめられて、少し座りが悪くなって目を逸らしてしまい……でも、彼女は此方を見つめるのをやめた様子は無かった。」

「えっと……なんででしょうか。」

「もしかして、俺の肉体美に見惚れちゃった？」

「ヴおえっ！（拒否反応）申し訳ありません。下選択肢のあまりの気持ち悪さに吐き気を催してしまいました。この気持ち悪さは、勲章ですよ……（皮肉）香子さんを口説こうとか考えてらっしゃる……？」

「えっと……なんででしょうか。」

「もしかして、俺の肉体美に見惚れちゃった？」

「いい、いえそんな事は……マスターは、やはりその肉体を活かしたいと、何時でも積極的に前に出て行ってらっしゃいますよね」

「香子さん、顔赤くなってますよね……？（ねっとり）筋肉はウケが良い時と悪い時とハッキリ分かりますけど、香子さんにはウケが良いみたいですねエ……？」

「それは兎も角。まあ前線に出て殴りあいした方が経験値もガンガン溜まりますし。エンジョイプレイ全力の私のスタイルがホモ君に全面的に出ているだけなんですけども。」

「そもそも、後ろに引き籠もるのが性に合わない、と少しおどけた様子で言った貴方に、香子は……何故か少し険しい視線を向けた。」

「——本当にそれだけですか？」

「と、言いながら。」

「……あれっ？ 急にシリアス回？」

「と言った所で、今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。」



## 大準備 その三

皆さんこんにちは、ノンケ（水着カイニス）です。体が女性かどうかとか言われてますけれど、態度とか色々和多分全サーヴァントの中で一番漢らしい方だとイベントを見てて思いました。肉体に囚われているから！ 一番大事な事が分からないんだよ！（うろジユドー）女性でも男性、男性でも女性。それで良いじゃないですか……!! 前回で終わっても良い……だから、ありったけのうらすじを……!! キャットとメディアさん、香子さんとホモくんに分かれて素材探索を開始しました。久しぶりの香子さんとのデート回。皆で楽しもうぜ!!

「——本当にそれだけですか?」

〈香子の視線は、鋭く貴方を射抜く。睨んでいる訳ではない。表面的な表情ではなくその視線は……自分の内に向けられている様に、貴方は感じた。慣れない視線に思わず、一歩下がってしまう。どうしたのだろう、急に。〉

「いいえ。本当にそれだけでしたら、あそこ迄前に出る必要はありません。それだけではない、というのが、一番正しいのではないかと香子は、思っております」

お、可笑しい。キャツキャとしながら島デートだと思って居た（大嘘）というのに……いきなりのシリアス展開!? 早い、早いよ!!（一年戦争並感）もうちよつと前振りとかありませんか!?

「……マスターは、以前おっしゃってました。『自分達の世界は自分達で守る』と。そう思って居るからこそ、マスターは何時でも前に出るのですね」

〈それは……間違いない。と貴方は言った。自分達が住んでいる世界だというのに、自分達で解決する事すらせず、過去の偉人に任せきり。それは、余りにも他力本願に過ぎるのではないか。今の時代に生きる人間として、恥知らずが過ぎるのではないかと。〉

この方針はホモ君としても、ずつと貫いてきたんでしようねえ。私がホモ君を前線に出していたのもそれが原因だったんだよ!!（でつか

い嘘) それは兎も角として、正直前線に出ているのは割と『ぶん殴つてやるんだよ!!』的な闘將拉麵男的なテンシヨオオン!? で行っている可能性も無きにしても非ずで。

「それは、恐らく立派な心掛けです。將として、後に続く兵を鼓舞するのは、何よりも真つ先に將が立ち向かう姿に違いありません。貴方が將であれば、それは賞賛される行いであるでしょう……しかし」

◇香子の視線は、相も変わらず鋭い。

「貴方は、將ではありません。今の貴方は、帥なのです。將を率いる立場なのですよマスター。お分かりですか」

◇すい……曜日……?」

◇すい……餃子……!!」

クツソ寒いボケかますのは(雰囲気的に)マズいですよ! しようがない、せめてマトモな選択肢を使うしかないというか……ちよつと待ってくださいどうしてどちらにもネタ選択肢なんですか……!」

「マスター、ちよつとそこに座って下さい」

◇あつ、迂闊な事言ったな……と貴方は察してしまったが、しかしサーヴァント相手に逃げる事は先ず不可能だ。取り敢えず、貴方は大人しく正座し、香子のお叱りを受ける事になってしまった。

やっぱりね。そりゃあこのシリアスな雰囲気になつてる時に全力でちよけに行ったら誰だつて『は?(激震)』つてなるわよ。誰だつてそーなる、俺だつてそーなる。でも俺だつてすいとか言われたらあのボケをスルト思います(ゲツテル)

「——良いですか。帥とは將帥の事です。軍の頂点にある者。將よりも替えの利かぬ立場にある者。マスターは、我々サーヴァントという將の、その上の立場になるのです。それを分かっていますか?」

◇十分わかりました。だけ答えた。というかそれだけしか言えなかった。しつかりとお説教されて、完全に逆らえなくなっていた。

「……あまり分かっておられないようですね。分かりました。香子も心を鬼にしてマスターを説得させて頂きます」

香子さんが心を鬼になってあんまり怖くなさそう。寧ろカワイイものである。ぶんぶんしてる香子さんを想像すると不覚にも(ry そう

言う事ばかり言ってるから俺の品性はいつつもEーなんだよなあ……

「マスターとは、サーヴァントを現世に繋ぎ止める為の楔です。極論、マスターが居なければサーヴァントはこの世に存在する事すら出来なくなるのです。貴方は、存在するだけでも、この人理修復にて大きな役割を果たしていると言えます」

「それはロマニからしつかりと説明された事があるので良く知っている。本来サーヴァントが活躍する場である聖杯戦争においても、それは同じで。本来マスターは、サーヴァントを前線に立たせ、自分は後方の安全地帯に隠れ、指揮を執るのが基本なのだ。」

「ですが、サーヴァントはマスターの近くにおいて、その力を最大限に発揮する事が出来ます。此度の聖杯戦争で、マスターがサーヴァントと同じ場に出てきているのもまた聖堂にして王道である事に、間違いはないでしょう……」

「——しかし、と香子の瞳は殊更に、自分の瞳の奥を見通すように。サーヴァントの運用方法は正直諸説と言うしかない気がします。それぞれに様々な利点が存在し、何だつたらどれにも明確な弱点があり。そもそも Fate に完璧なサーヴァントなんて存在せえへんし……（目逸らし）きのこ大先生も型月はじゃんけん（うるおぼえ）と申しておりますが故。」

「ここで最初に立ち返りましょう。マスターは、この世界に我々を繋ぎ止める楔。マスターとしてサーヴァントの力を発揮させる為に前線に立てば、その分貴方が倒れる確率は高まります。そうならぬように、私達は全てを賭けて貴方をお守りしますけれど」

「貴方を見つめる彼女の表情は、実に険しい。マスターが前進しすぎれば、守り切れぬ事もあります。もし、マスターが倒されてしまったらどうなるか。それはお分かりになるとおもいます」

余計な主人公の居ない普通の人理修復の始まりですねえ!!（食い気味）いや、自分で作ったキャラに余分な、とか言っちゃう。だから俺の品性は（ry

「貴方に紐づけられたサーヴァントは、デオン様、メデューサ様、キャット様の四名です。もし貴方が欠ければ。その四名は人理修復から脱落しかねません。もし脱落しなくても……マスターが欠けた分の負債は、藤丸様に向かう事になるでしょう」

因みにそれがほんへです。おかしいな……ほんへが一番のハードモードとか藤丸君の人理修復何か間違ってるよお……いやもう限界っすよ（迫真） 映画ソロモンを見たら迫真にもなりますわ……

〈……確かに。今は自分と立香でそれぞれのサーヴァント達と連携を取っているが、自分が居なくなれば？ 特異点に連れて行く全てのサーヴァントに、未だ未熟なマスター一人で気を張らなくてはならないのだ。

「少なくとも、マスターは今。戦力的に役立てるような事もありません。以前であれば別です。しかし、もうその力は余りにも危険故に、もう使う事は出来ないと、それを御自覚なさってください。そうなった時……」

〈その先は、言われなくても分かった。今までの様に、真っ先に、飛び出すべきなのか？ マスターとして。下がる事を覚えるべきではないのか？

〈……で、でも。

〈立香は、前に出て戦ってる。アイツは……

うーんこの。それも全くもって正論ではあるんですよ。ホモ君だけじゃないですからね真っ先に突っ込んで相手のルツを掘ってるのは。何というホモの鑑。負けちゃいられないですよねえ……（ねつとり）

「マスターよりも、藤丸様は前に出ない事を覚えていらつしやいます。というより、マスターは前に出過ぎなのです。藤丸様と比べても。諫められた回数は、藤丸様よりもマスターの方が多い。それを分かかっていらつしやらないのですか？」

〈……否定は出来ない。自分はずっと、前に出ては香子や、サーヴァントの皆に叱られて来た。今までは、あの奇妙な力があつたからこそ、許された部分があつた。しかし、アレがこんな非常事態で尚、頼

れるかどうか怪しい、と判別された今は？ どうだ？

ちよつと調べてみたんですが、ホモ君が単独で暴れて怒られた回数と、藤丸君とセットで怒られた回数って前者の方が多いつて言う。馬鹿じゃねえ!? (ドストレート) コレは猪ですれ間違いない……

「……マスターは、今まで自分が世界を、救わねばならないと前に出てきました。ですが楔として、前線に立つだけでも、貴方は人理修復の旅に十分貢献しているのですよ」

〈——ふと、少し優しい表情になって、香子はそう言った。

「無理をなさらず、落ち着いて。前を向いて、戦いに臨みましょう。マスター」

〈だが、それが……何処か、突き放す様な言い方に聞こえてしまったのは。果たして気のせいだったのだろうか……貴方には、分からなかった。

……うーん。なんでしよう、今まで割と自由にやっても許されたのが、ガチ説教を貰ってしまった気がします。おかしいな何時こんなフラグ立てたんですかね……デオン君ちゃんから出された宿題にも未だ答えを出していないというのに。

と言った所で、今回は此処まで。

ご視聴、ありがとうございます。

## 幕間の物語：女流作家の葛藤

『彼を説得するのは、君に任せたいと思う』

香子に、ロマニはそう切り出した。藤丸から貸してもらったその通信端末から映し出されたその表情は暗く、そして硬い。そんな表情で告げる彼、というのは……言われなくても分かっていた。

本造院康友。彼女のマスターである。

「説得、というのは」

『分かっているだろう、式部さん。貴女も……今、彼は前線に出るだけの能力を失っている。しかしそれでも前線へ出て戦うのをやめて居ない。正直、余りにも危険に過ぎるんだよ。彼を失うのは、大きな痛手となりかねないんだ』

彼は、基本的に後ろに隠れて指示する事を、『ただそれだけでは臆病』とする、何方かと言えば将と言えるタイプの人間であり。そして、自分達の世界は自分達で救わねばならない、とあの燃え盛る特異点の中でも言える程に正義感も強い事を、共に戦い続けていた香子は良く知っている。

だからこそ、あんな異常な能力が芽生えて尚、ここまでその能力を恐れる事も無く使い続けて、前線に立つ事も、恐れなかった。だからこそ……それが問題になっている。

『僕らとしては、彼は一般人として、日常に返す事もちゃんと考えている。この戦いに勝つために、彼を怪物に仕立て上げる様なやり方をするつもりはない』

「だから、能力の発動は……」

『解析は続ける。だけど、もう二度と許可することは無いと考えて貰って大丈夫だ』

ロマニは、マスターの安全を第一に考えているのだと、それは間違いないだろう。魔術師の中でも、彼はとびきりの優しい人間だ。

『だからこそ、今やるのは。彼をどうにか最前線から下げる事だと思うんだ……』

「で、ですけど」

『彼の心意気を否定する事になるかもしれない。彼は誰よりも真つ先に立ちむかう、強い心を持っている……僕らの行動は、彼の気持ちを、押さえつける事につながるのかもしれない。それは気が進まないのは、分かるよ』

そうではなくては言わないだろう。こんな他者の心までしつかりと慮った発言は。それでもこうして話しているというのは……

『けれど君だって、彼をそのまま戦わせる事が危険な事は、間違いなく危ない事だと分かっていると思うんだ』

「そ、それは……その」

『しかし、僕らが言っても、多分……でも、一緒に戦場を駆け抜けた君なら』

自分で説得するのではなくて、こうして間違いなく説得できると踏んだ相手に即座に頼めるのも、美徳だろう。マスターは本当にいい仲間にも恵まれているのだと、彼の言葉を聞いていると分かる。

『頼む。紫式部。君に——』

——その言葉に、頷いたのは。必然だったのだろう。

「……香子さん」

「さ、そろそろ薬草を探しに参りましょうか。メディア様に届けねばなりませんし」

「う……ああ、分かつ、つた……」

反論したい、そんな気持ちもあるだろう。だけどそれを封殺する為に、ズルい言い方をしてしまう。こんな意地悪に言葉を使った事など無いが……しかし、自分の頭脳が、未だ未熟で、されど若さに溢れたこのマスターを言葉で抑える事が難しくない事を、既に分かっている。分かっているのだ。

平安の時代。人の悪意や野心に満ち溢れた宮廷内に比べれば。このマスターの何とわかりやすい事だろうか……と、思いはするが。

「(そこまで誰かを口で言いくるめるなんて、得意じゃないのに……)」

堂々とマスターと話し、口先一つで言いくるめるだけの、度胸などが自然と湧いてきたのだ。それは……彼が心配だから、その行動を諫

めるだけの勇気が湧いてきたのか。いや、理屈は今はどうでもいい。「(でもマスターが、コレでもし無茶をしない様に、なつて下さるというのであれば。私は……私、は……)」

——一瞬。思い出すのは燃え盛る、あの特異点。

『今、ここに生きる俺達が！ 戦わないで！ どうすんだよ！』

勝てるはずも無い、自分より圧倒的に強い怪物にたつた一本の得物を構えて突撃していった、あの横顔を思い出す。目の前の巨大な脅威に対し……歯を食いしばって、前を向いて走り出す。圧倒的な脅威が怖くない筈がない。だが、その恐怖をも乗り越える程に強い覚悟を持って彼は。

「(本当に、コレは……良い事なんでしょうか)」

——少し、揺らいでしまう。彼が下がった方が守りやすい。藤丸にも負担をかけずに済む。カルデアのリソースも消費せずに済む……メリットは、明確に多い筈だ。多い筈だというのに。

それでも彼をこうして縛るのを手放しで良しと思えないのは、どうしてなのだろうか。

後ろを振り向く。彼は、少しうつむいて、香子の後を続いで……

「——薬草、ゲットだぜ!!」

いや、野草を探して居ただけの様だった。右手に持った草を堂々と天に掲げ、宝剣を天に翳すが如き立派な立ち方。やっぱり結構元氣なのかな、と思って……ふと、彼をよく見て首を振った。目が少し、揺らいでる。

取り敢えず、気持ちを切り替える為の空元気、なのだろう。言外に『お前は無力なのだから黙って下がっている』と言われたのだから、当然だろうか。

「えっと、マスター。其方の草。多分違います」

「えっ、特徴そっくりだけど……？」

「そっくりですが、恐らく別の種です。それも気を付けなければいけない類の」

「……ツスウウウウウ……もしかしなくても、毒草だったりしませんか？」



「メモにはそう書いてあります」

「ふぎけんな!! (声以外も迫真)」

物凄い勢いで叩き付けられる草だが、別にそこまで危険な毒草ではない。とはいえそれは伝える必要は無いだろう。危険と思ってくれる分にはそれでいいだろうから。それにこういう会話で互いの緊張を解して、少しずつ元気を取り戻してもらうのも必要だろう。

「何れにせよ、マスターに無茶をして貰う訳には行けないのだから」  
きつと彼にとつては、それが一番辛い事なのは間違いないだろうから。気晴らしくらいは年長者の自分が、振っても構わないだろう。

「……ああ、本当にあの術が恨めしい」

今こそ。心を覗き。少しでも彼の心の奥底にある物を理解して、その強張りを解き解す事が出来るかもしれないというのに、と。マスターとサーヴァントは、互いに助け助けられ、が理想だろう。

「(ああ、いつそ)」

『余計な事なんて考えず、自由に、貴方は自分の思うが儘に生きてください』と、言ってしまったら、どうなるだろうと考える。

きつと、彼は活き活きとするのが目に見えて、思わず少し笑ってしまった。藤丸と共に敵の中に突っ込んで。互いがどれだけ相手を打ち取ったかを自慢し合って、最終的に喧嘩を初めて……

「——香子さん」

「あ、はい」

「今度こそ、コレで間違いない?」

「え? その……少しお待ちくださいね」

想像力豊かなのが少し災いしてしまったが……しかし、美しい光景である事は間違いなかった。活き活きと、こんな時であるからこそ、何れに地上に返す為に、心を豊かに保つのは必要な事ではあるだろうと。

「間違いないと思います」

「おお、ソイツはいい。結構群がって生えてる所を見つけたからさ」

「本当ですか? でしたら、早めに終わるかもしれませんね」

「ただ……一種類だけそんな大量に要るかな」

「えっと、全て取り切る事は前提なのですか……？」

「まあ多いに越したことは無いと思っただけ。まあ一応は植生とか、  
そう言うのに悪影響あつたりしたら、まあ……ダメだしね」

こうした会話で、そう出来ればいいのだが。

祈りながら……香子は、彼と共に島の鬱蒼としたジャングルを歩いていった。きつと、きつといい方向に向いてくれ、と。

## 大準備 その四

皆様こんにちは、ノンケ（夏のなきこさん）です。正直に言います。この夏のサーヴァントで一番スケベだと思えます。正直な話。ああいう健康的な色気つて、一番下半身に悪い気がするんですけども。どう思います皆様？ ちなみに私は初日に全てを賭けて大回転してしまったのを本気で後悔するくらいには来しました。

前回は……香子さんに強く諭されてしまつて……でもそんなんで納得できたら、ホモで実況なんざやってねえんだよ!! でも全てが正論過ぎて何もどうしようもないというのが哀しい事態。

さて、前回香子さんに優しく諭された結果、ホモ君のテンションがスツゲエ低くなつてる、ハッキリ分かんだね（絶望）普通に能力にデバフが更につきました（二重の絶望）おかしいな……セプテムまではこういうデバフつかかなかつたんですけどねえ……急に本気出してくるやんRPG君。

「——わあ、大量ですぬ!」

「というよりもはやオーバーキル。植生など気にせぬ力押し収穫……さてはご主人、何か奥底にため込んだモノありだな？ キャットが癒すゾ?」

「??」

とはいえ、仕事は仕事。薬草集めはしっかりせねばなりません……お陰で勢いに任せ過ぎてちよつと取り過ぎてしまつたり、一回間違えて毒草取つたりしてしまつて。コレは根流し不可避

〈何時かお願い出来るかな、なんてジョークを……いや、割と本音で返事を返しつつ貴方は纏めておいた大量の薬草を、どさつと地面に置いた。取り敢えず指定された奴を、出来るだけ取つて見たのだが。〉  
「えつと、これだけあれば足り……ますよね。多分間違はなく余ると思うのですが」

「はい。しっかりと余りますが。失敗する可能性もあるので、予備はあるに越した事はありません。だから大丈夫です!」

さては聖人か?（名推理）

こんな勢いでとんでもない量の薬草を叩きつけられて『大丈夫、予備として使う事が出来ます！(にっこり)』って即座に言えるメディアさんは人間の鑑。イアソンはひで。もうちよつと奥様を大事にして差し上げる(憤怒)

「ツルに薬品を染みこませれば、準備は完了。後は編むだけです！」

〈良し、俺達の手で、最高のロープを作り上げてやる……！〉

〈全てを込めて……ロープを……作る……何が有っても……!!!〉

スゲエ覚悟完了するじゃん(苦笑) 幾らススメられてもロープ一本作るのにここまで覚悟完了しちゃうのは些かオーバーでは無いのでしょうか……何を情けない事を(情緒不安定) 大和魂を見せてやれ!!(プレイヤー特有の命令形)

(選択肢下)

「す、凄いやる気ですね……」

「そ、そうとなれば頑張りましたよう! ハイ!!」

「うーむカツコいい様に見えてイマイチカツコが付かぬこの雰囲気。しかしながらご主人らしさは100%の癖の強すぎるハイポーション。思わず吐瀉である」

〈ハゲ頭チンピラの時点で見た目には余りにも癖が強いのは許して欲しかった。ってそうでは無くて。まあロープづくりに関しては、確かに義務としてのやる気もあるがしかしそれ以上に……それ以上に……

この点々に何かしらの思いが見え隠れしている気がし過ぎて、あ、そっかあ……(スルー安定)としか言えないゾ。香子さんに心配されて嬉しいねえ! 元気になっちゃうねエ!? ちがう? そう……(無関心)

「マスター?」

〈何でも無い。〉

〈ふふ、なに武者震いよ……心配めされるな……

下選択肢は全く聞いて無いんですけれども。そもそも何に対する武者震いなのかお聞かせ願いたい位なんですけれども。

〈カツ……トオ!!〉

という事で全てをスルーしてカットしてロープの運搬終了後です。いやーもう、アホほど細かい作業が入って見所さんも無い場面が続いたので派手にカットです。見所さんが無い場面を映すとか変態投稿屋が入り込んでるんですけど、不法侵入ですよ不法侵入！（完全意味不明）

「——おー、結構時間かかった分、良い仕上がりにゃないか」

「本当に大きいねえ。まあこれだけデカイ綱じゃなければ彼のパワーには耐えきれないかな。土台。ただ僕には扱え切れない奴だね！」

「自慢できるような事か？ まあ任せろ。コレを持って海に潜ってくるのだろう？」

＜余裕そうなアタランテには申し訳ないが、海底まで潜るのは流石のサーヴァントでも困難どころの騒ぎではない。多分可能まである。メディアさんにしつかりとサポートして貰わないと。

「という事で、メディア様。引き続きお願いします」

「お任せください。直接の作業が出来ない分、張りきらせて頂きます！！」

さて、という事で引き揚げ作業はアタランテさん達に任せて、ホモ君は休憩するかサーヴァント達と会話して、ボロカスになった精神面を回復したい所です。要するにストレスゲージを減少する作業ですが。

ホモ君は基本的に精神力に比べて肉体面が貧弱すぎるだろ……（嘲笑）なので、ストレスでデバフが付いてるともうクソ雑魚ナメクジです。ちゃんとケアしないと（必死）

という事で、マスターとしてサーヴァントとの交流パートです。と言っても、デオン君ちゃんは作戦の準備中なので話せません。

＜キャットと話す。

＜香子と話す。

で、さつき香子さんとはバッチリお話（お説教）してもらったので、ここは癒しを求めて哺乳類に助けを求めましょう。キャット!! 君の出番だ!!（クソデカ迫真ジジイボイス）

「——お、こつちだご主人。ちこうよれ」

〈キャンプ代わりの焚火の傍、キヤットがいつの間にかその手に串にささったビッグな肉を構えて、手招きをしている。コレが本当の招き猫……ではなく。キヤットの言うままに貴方はゆつくりと腰を下ろした。

「にゅふふふ、お疲れのご主人には、キヤットの愛情百パーセントジューシービーフを喰らう権利をやろう。喰らえばたちまち元気百倍一気軒昂！ 粉碎！ 玉碎！ 人理天驚ラブラブキヤットである！！」

君には最初っから一目ぼれしてるから大丈夫だよ（ニッコリ） 気持ち悪さ百パーセントの発言は置いておいて……ご飯を作ってくれキヤットは優しいなあ!!（確信） 実際の話、こうやってグッドコミュニケーションションしてればストレスもドンドン下降しますので……あ、ありがてえっ……!!

〈肉を思いつきり口にはおぼって食いちぎれば、広がる肉の旨味が、ググつと体に染み渡る。労働をした後の食事は、最高に美味しいのは昔からの鉄則。ちよつと、心の緊張が解れた気がした。

「食うがよい食うがよい。ほれ、フルーツもあるゾ？」

〈何から何までありがとう。

〈……因みに何処から持ってきた奴なの？  
キヤットの持ってきた物を疑うとかコイツ最低だな！ オイは情けなか！ お主の首、介錯しもつそ!!（超高速チエスト思考）  
「……」

〈意味深にほほ笑むだけのキヤットに、ちよつとだけ不安になったが、甘酸っぱい果実を食べれば気にならなくなつて……ひとしきりガツガツと食べすすめている貴方に、キヤットはふいに声をかけて来た。

「——ご主人にとつては、ソールBADな時期やもしれぬがしかし。今は考え、悩み抜くときであるゾ？ 若い時の苦労はバーゲンセール、たたき売りにバナナを叩き付けるまでがデフォルトなのだな」

〈そう言われ、キヤットの方を向く。何時もはニコニコ笑顔のキヤットが、真剣な目で此方を見ていた。

こ、これは……世にも珍しいキャットのシリアスモード!? ホモ君を元気づけてくれているのでしょうか。ああ、ストレス減少の音おっ!!

「シキブとて、ご主人に清姫モードでアンチン狩りのつもりなし。寧ろお主にとつての宝、海賊に奪われるなかれ……そして、その思いをどうするかも、お主次第である。キャットは、ご主人がどうしようとも、ついて行く故ナ」

〈……そう言われて、再び肉を手渡される。そのキャットの手が、とても、力強く、頼もしく感じたのは、決して気のせいではないだろう、と貴方は思った。

——と言った所で今回は此処まで。

香子さんの言葉にどう向き合うか、キャットも『しっかり考えてやれ』といってくれたので（言っていない）プレイヤーもホモ君をしっかりと導いていこうと思います（経験値第一主義）

ご視聴、ありがとうございました。

## 大準備 その五

皆さんこんにちは、ノンケ（水着お栄さん）です。個人的に、サバフェスから実装されるサーヴァントに法則が出て来た気がします。で、多分ラスベガスの水着サーヴァントのテーマは……『黒歴史』ですよね。間違いなく。

前回の裏（省略形） ロープが出来上がりました。それまでにホモ君のメンタルがボロカスになったり、その八つ当たりや薬草を全力で収穫して見たりと、ヤバイですね。マスターメンタルケアをキャットに依頼したくらいです。

＜……どんな選択をするのかなんて。決まっている筈だった。だというに、それでも、と言い切れない。口が開かない。今更、『下がるべきなのだろうか』という思いが首を擡げる。本当に、何故なのか。

「——人、フジ——が」

＜食事をして、少し心が落ち着いて。時間もある今、考える。香子の言葉に、ダ・ヴィンチの言葉に、心揺れる訳を。自分は、それでも前から下がらない。とは口を開けない。何がいけない。何が、引つ掛かる。

で、前回キャットに問いかけられた事で、ホモ君が考える人と化しております。頭頂部が禿げているからでしょうか、凄く似ている……似てない……？ ないです（無慈悲） そんな事はどうでもいい。呼ばれてますよ？

＜それがどうしてか。考えて……考えて……しかし考えようとする度に、ふにつとした感触が肩を揺らす。どうしたというのか。考えさせてくれ、と言おうと思ってキャットの方に顔を向け——

「——おーい!!」

「ご主人。フジマルが呼んでいるぞっ。」

＜ありがとうキャット。ちよつと行ってくるよ。あ、お肉ありがとうね。

＜センキュウ俺のセクシーキャット。俺のカッコいい所見ててくれな。



秒速で掌返しするな（半ギレ）　こんな意志薄弱だからメドウーサさんと、ダ・ヴィンチちゃん達相手で態度が違うんやぞ。もうちよつと精神に努力値振ってホラホラ。精神に努力値を振るためにぶち殺すエネミーって誰……ゴースト……？

まあそれは取り敢えず置いておいて、選択肢は上で。下みたいな気持ち悪い選択肢キヤットに聞かせる訳……あつ（選択ミス）

∟ありがとうございますキャット。ちよつと行ってくるよ。あ、お肉ありがとうございますね。

∟センキュウ俺のセクシーキャット。俺のカッコいい所見ててくれな。

「ウムツ!?　せ、セクシーとは……此度の御主人は積極的なのだな?」

「……なにやってんだ?」

「さあ」

多分どうでもいい事だと思うんですけど（名推理）　どうでも良いつて言うのは言い過ぎにしても、ホモ君には選択ミスでとんでもない恥をかかせてしまった事、お詫び申し上げます……（お詫びに見せかけた最上級の侮辱）

∟——で。立香が何故自分を呼んでいたというのかと言えば。どうやらアクシデントが発生したらしい。彼が指差した先には……浜辺の前で立ち往生する、海中作業班の三名+ぬいぐるみ。

「……マズいな、まだ居るか」

「全く。ただでさえ強敵が多いつて言うのにねえ……アレかな。元神様のお膝元つて言うのが関わってるのか」

「まあ一匹一匹はそこまでも無いが。しっかしどいつもこいつも海の中ってのが」

アタランテさん達が、どうやら立ち往生している様です。のんびりしてる間にもメディアアさんのサポートを受けて海に潜って……もう終わってる!!（ホモガキ）という展開を想像していたのですが

少なくとも、あの中でアタランテさんは最も運動能力が高く、水中でも問題なく活躍出来ると思います。それが止まってる、となると……

「——連れて来たよ」

「お、助かった。いやー御覧の通りさ。海の中に潜ろうとした旅人を引き摺り込む、意地の悪い奴がいてね」

「そう言っただビデが指差す先には……海から生えた触手に、貝殻。どうやら近海に住む海の化け物らしいが……しかし、そこまで数が多いとは思えない。質に関しても、先の襲撃には及ぶべくも無いだろう。」

「でも向こうは海中のプロだからねえ。出来る限りは引きつけておきたいんだ。それに」

「ちよつと面倒なのが……援護、アレ相手に追いつくと思う？　ダーリン」

「お前分かって言ってるだろ。無理だよ幾らなんだって。雑魚は兎も角として、あの一匹だけめっちゃ硬い。射抜く前に水に潜られるよ」「水中じゃまず間違いないく敗北すると思うけどどうする？」

「サーヴァントを水中で無敵と勘違いしてはいけない（戒め）『母なる海』というものは普通にどんな超人であつても優しく包み込んで拘束し、人間の真の安全をがんじがらめにする……（タンカス並感）恐怖とは正しく、『母なる海』からやってくる……（コズミックホラー概念）」

「という事で、今回の仕事は水生生物共の排除です。波打ち際に敵を引き付けて壊滅させるつもりで戦う、という事で。」

「よし、キャット波打ち際海の家即席キッチンである!!　壺焼きにたご焼き、何でもござれの最高メニュー!　具無しのカレーはご愛嬌!!」

「……か、カレーって具無し、ってあるんでしょうか?」「海の家では定番である!!　ナスビ入りもありである!!」

「さあ、こつから大量のヒトデと貝を料理、そして腹ペコ黒王に（冤罪）料理をお出しするまでが終わりです。戦闘開始からタイマースタート。FGO海の家開業RTA、はーじまーるよー（変貌）  
くカ……ツトオ!!」

「……で、何故これ私に出した」

「大仕事前の差し入れである。味はキャットの舌先三寸」

「成程。味など何も気にしない量で押しつぶす嗜好か。何という料理への暴力。気に入ったぞ、全て喰らい尽くしてくれる」

〈視界の中で、うず高く積みあがった謎の海産類に噛み付くオルタ。その後ろで、メディアからかけられた魔術の説明を受けるアタランテ。先ほどまでの激闘が嘘のようかと思う程に平和だ。

はい。

まあそんな無駄な殴り合いは容赦なくカットする訳ですが。だってあいつ等殻を盾に遅滞戦術ばかり取るから……録画ファイルの容量も無駄な時間もデケエなお前（貶して直させる）

「おう、お疲れー……ってなんだいコレ」

「これから大海原に立ち向かう海の男たちへの差し入れである！

キャットの信条を投げ捨てた徹底的な大量生産重視故、キャット工場長はライン生産に拘った」

「何の話だ一体。あ、いやでも案外、美味いじゃないか」

〈通りすがりのドレイクがそれらを軽く摘まむ傍らで、若干微妙な表情で、目の前の大量に積み上げられた海産物を眺める、デオンとジャンヌ。コレは一応セイバーだけではなく、この二人含む引き上げ班への差し入れな訳なのだが。

「……先に行きなさいよ」

「まあ、構わないけど……構わないけど」

「さっきからそればかりね」

「そりゃあ、ぼ……私だって一応人間だからね。躊躇する時だってあるさ」

〈そんな二人の横で、何も気にしてなさげなアステリオスが、「うま、うま」なんて言いながらゲソを食いちぎり、特大のヤドカリ爪の肉を貪っているのが、平和だ。肩の上のエウリユアレが「ねえ大丈夫アステリオス、ねえ」なんて言っているのが猶更平和だ。

うーんまるでイベント特異点の如し……イベント特異点は条件を満たしていると発生するのですが、セプテムとオケアノスの間では発生しませんでした。オケアノスの次は発生して欲しいっすねえ（更なる

困難を望むホモの鑑)

「……」

「ふと、そのアステリオスの後ろを通り過ぎながらゲソを齧るドレイクが、海の方を見つめている事に気づく。海、というより、泊められている自分達の船を見つめているのだろうか。」

「まったく、みすばらしい姿に、させられたもんだねエ」

「そうみたいっすね。明らかに『忌々しい』って表情で船を見つめる辺り、やっぱり船をやられた事には一定以上の恨みを持っている模様です。やっぱり自分の船に誇りを持つてる立派な船長なんやな、って……」

「キャプテン？」

「……ああ、盾の嬢ちゃんか。どうした？」

「ボンベさんが報告があるそうで」

「そうかい。すまないね。もうちよつとしたら行くって、伝えといてくれ」

「どつかりと腰を波打ち際の岩の上に降ろし。ドレイクは、未だ船を見つめている。在りし日の船の栄光を見つめているのか？ だが、それにしても……その瞳は、余りにも鋭く熱に満ち溢れている様に、貴方には見えていた。」

「ヤダ怖い……止めてください……アイアンマン……！」

ドレイク船長って、女性サーヴァントの中でも飛びぬけて迫力のある表情をすると思います。男性サーヴァントは除く。アイツ等パワー見溢れる表情する人多すぎ。スパさんの爽やかな笑顔ですらビッグバン級のインパクトありますからね。

で、ドレイク船長の怖い表情をバックに今回はここまでとなります。ご視聴、ありがとうございました。

## 大準備 その六

皆様こんにちは、ノンケ（ブラックドッグ）です。ベリルは苦手な  
んですけど、相手の心臓、というか一部を取り込んで相手の能力をコ  
ピーするとかいう厨二心をくすぐるために存在している様なトンデ  
モ能力。誇らしくないの？（賞賛）

前回の裏（スジ）。前回の事についてちよつと考えていたホモ君で  
すが、考えているだけで時間を使える訳もなく。困ってたアタランテ  
姐さんの作業を手伝いしてました。一方のドレイク船長は含む物が  
ある様子で……？

〽——ドレイクの視線は、険しいままである。

前回から引き続き!? だからやめてください……アイアンマ（ry  
やめんかあ!!（カン☆コーン）如何にコレがエンジンプレイと  
言えど、怯えるだけで終わるなかれ。原因を追究してから。何事も。  
という事で、取り敢えず何があったかを見てみましょう。

「……引き上げられるのかい？」

『ええつと……申し訳ありませんキャプテン。一応お聞きしたいんで  
すけれど、このプランがダメだった場合は……』

「言つとくけどもう一回準備し直す時間は無いと思つとくれ。相手の  
シマじゃないにせよ」

『追撃はいずれ来る、ですよね……代案を考えとかないとなあ』

〽とはいえ、今回は原因がはつきりしていた。海中からの引き揚げ  
作業が、上手くいくかどうかにかに暗雲が立ち込めてきたためである。だ  
が原因は、前回で排除した外的要因からの妨害ではなく、さりとて準  
備不足でも無い。

「しかし。そんなデカイブツだったとはねえ。間違いないのかい」

「ああ。正直な話、一度潜つて確認した時は目を疑ったぞ……何かの  
残骸である事は間違いないがそれでも、その一部は我々の船より間違  
いなく大きい」

成程、ゴールデンハインド号より大きい残骸が海の中に沈んでいる  
と……これ無理ゾ（最速最小の諦め）なんでそんなバカみたいなサ

イズのもんがポコポコと海の底に沈んでいるとか。分かる様に説明しろ（半ギレ）

「そんなもんがこの世に存在していたとは驚きだ！ それとも未来じゃ普通なのかい!？」

『普通ではないね』

「万能の天才のお墨付きか！ こりゃあ傑作だ！」

「――アタランテが潜って確認したそのブツは、想像を遥かに超えて大きかった。最大サイズが少なくとも五十メートル以上あるというところでもない大物だ。如何に怪力を誇るアステリオス、神代の魔女メディアの援護を受けても、引き上げられるかが怪しいという目算が出てしまった。」

『計算上は行ける、という話だったんですけど。スイマセン、此方の目算が甘かったというしかなく……ホントどうしようかなあ……代案って言うてもなあ』

『ドラゴンの素材でも集めて船を強化して見るかい?』

『その素材になりそうなドラゴンは最初に王様が消し飛ばしてしまっただよなあ』

成程、あの黒い聖剣の一撃ですら布石だったとはたまげたなあ。絶対違うと思うのでそれは置いておくとしても、そうなるとどうやって引き上げればいいのか。

海が得意なサーヴァントですか……もしやこちらで現地召喚を実行すればポセイドンとの縁でカイニスさんが前倒しで呼べる可能性が……?（鬼畜の所業）んな事やったらマジで殺されるまであると思うのでやりませんが。ワンチャンスで水着メルトが来てくれれば、と思います。ラスベガス行かなきゃ（使命感）

「……絶対に不可能なのかい?」

『いえ、そうではありませんが』

「だったらやって見るしかないだろうよ。他にやり様も無いんだ……なあ、アステリオス」

「そう言ってドレイクから視線を向けられ……その時に備えて食事で英気を養っていたアステリオスが顔を上げる。彼は不安そうな顔

一つ見せず、深く、頷いた。

「ぼく、ちからは、つよい。ぜったいに、もちあげる！ まかせて！」

「……安請け合いしちゃって」

アステリオス君は良い子だなあ!! (号泣) そんな一切曇りの無い瞳で言われちゃったら任せちゃうに決まってるんだよなあ……他のサーヴァントに頼ろうなんて弱気なプレイヤーをユルシテ……ユルシテ……

∨フンス、とガッツポーズまで取って見せるアステリオス。その隣で、セイバーが不敵に笑い。ジャンヌ・オルタも仕方なし、と言いたげに肩を竦めてみせた。

「つて事だけど？」

『……そうですね。一番苦労する役割を負わされている彼らがそう言ってくれるなら。僕らも出来る事をやりましょうか。レオナルド』  
『お任せください、この天才が見事奇跡を成し遂げて見せましょう……なんてね？』

セイバーが余裕そうな笑みを浮かべんのは解釈一致な気がします。FGOのオルタって案外と表情豊かなんですね。で逆に、ちよつとヤンキー的な、ちよつとそっけない態度なのも凡そ解釈一致です。それはまあ良いとして。

∨——アタランテの水中作業は想像以上に長引いた。想像を遥かに超えたブツをしつかりと固定する為に、急遽タマモキヤット、そしてダビデに、次のステップで仕事をする予定だったデオンまで駆り出される始末。

「……突撃女。しくじるなよ」

「アンタこそ……つていうか、アタシ達は完全にオマケでしょうよ。アイツのパワーに大体かかっているんだから」

「まあ、それはそうだが」

∨そして、ダ・ヴィンチ発案の滑車やら、何やら。アステリオスの怪力を最大限効率よく出力出来るようなとんでもない数の機構。ドレイクと藤丸のサポートチームが作り上げたそれらで浜が埋め尽くされている状況にて……いよいよ、始まる。

ダ・ヴィンチちゃんは基本的に便利だなあ……彼女がいるだけで、基本的にサポートアイテムや、礼装に関してはホントに心配しないでいいので。だからこそ六章で一時とはいえ離脱されるのが痛いんですよね。絶対離脱させねえ（鋼の意思）

「アステリオス、無茶するんじゃないわよ」

「……だいじょうぶ、まか、せろ……」

＜そして、メディアからの万全のサポートを得て。遂に……巨人が動き出す。セプテムに置いてとんでもない剛力を誇った、ダレイオスですら、彼の前には膝を屈せざるを得ない剛力の英雄。

「ぼくは、つよい、かいぶつだ!!」

＜アステリオス<sup>雷</sup>が、皆の期待を背負い……綱をしつかりと、掴んだ。

あとアステリオスくんが、自分で自分を力強く『かいぶつだ!』つて言うの、負の部分も纏めて肯定してるみたいで大好きo f 大好き侍。そしてエウリュアレちゃんがアステリオス君を心配そうに見つめているのも大好き侍。

プレイヤーのキモい感想はどうでもいいとして。さあ、目の前で、アステリオスくんがググつと綱を……引つ張った! そして動いたっ!! 結構腕の筋肉が盛り上がっています。もう腕も千切れよつて勢いでやっている様には見えません! 余裕があります! 良い筋肉してんねサボテンね(大いなる誤解) いや、強い君はレスラーだ(二刀流)

「ふんっ……!!」

「……まあ、多少のサポート程度には、なっていると……!」

「信じたい、けど……っ!!」

＜そのパワーの凄まじさは、引つ張っているオルタ二人の余裕の無さを見れば分かる。ジャンヌは兎も角として、セイバーは魔力放出によるサポートをしてもなお、である。それだというのに。

「よい、しよっ!!」

＜アステリオスは、まだまだ余裕とでも言いたげにグイグイと綱を引つ張っていく。長さは相当だ。島中のツルを、使っているかもしれないレベルの長さだというのに、それをガンガン引つ張って、縮めて



いくのだ。

……良く考えてみれば、沖合の海中に沈んだ巨大なブツを、筋肉隆々の大男が長い長い綱で海から引つ張り出すって、うお、急にすげえ物語……！ 神話かな？ こんな神々しい光景作っておいて怪物を名乗るとか各方面に失礼だよな。英雄って名乗り上げてから誇らしげに凱旋しろ。可愛いね♡ エウリユアレといちゃつけよ。

「見えて来たぞ!!!」

∨——それが姿を現したのは、予想よりもずっと早かった。海に揺らぐ、影。それがあつと言う間に、ガリガリと、海岸を削り、海原を割って……

「……こ、れは」

『なんだ……!?!』

「……多分だけど、コイツは」

うー……うー……んちよつと待つてくださいい凄じい見た事がある気がするものが出てきた気がしますねえ!!! デカいとか、そんなのは今はどうでも良くて。この青いボディに流線型の形……!!!

「船、じゃないかい?」

ほ、ポセイドン(真体)だアアアアア!? 正確にはその残骸だアアアア!?

——と言って所で今回はここまで。えつと、衝撃のブツが現れたんですけど。ポセイドン(海神)君は、この真体の残骸を触媒として呼ばれた……?」

ご視聴、ありがとうございました。

## 其の船の名は その一

皆さんこんにちは、ノンケ（巨神海洋クソ雑魚メンタル神様）です。ドレイクに二回とも敗れて、それだけならまだしも二回目は悲鳴を上げるだけのおもちゃと化したクツソ情けない神なのは間違いないんですけども……星の開拓者だけでも無く、当時の海の最強を破って、海全体を制覇していたって言う逸話も相まって、海って言う要素に対して凄いい特攻を得ていた可能性もあったというか。海神だったのがマズかった。

前回は、余りにもデカすぎんだろ……な残骸を皆で頑張って知恵を出し合い、牛くんたちと海の底にあったガラクタを引き上げたんですが……その挙句とんでもない化け物が現れました。ポセイドンはアレに呼ばれたんすねえ（感嘆）

「――次が上がるぞおー!! 丸太準備しろお!!」  
「間に噛ませろ! ミスんなよ!」

▽浜の上に並んだ無数の丸太が、転がり……その上を、金属製の何かのパーツが滑っていく。先人の知恵、コロ。単純と侮る事なかれ、古くは古代エジプトから使われている歴史ある運搬法であり、現代でも使われる事がある実績もある。

「マシユー! 気を付けてねー!!」  
「フオウー!」

「大丈夫です、マシユ・キリエライトはパワフルですから、先輩!」  
▽そんな運搬法には、丸太が大量に必要故、マシユも一緒になって丸太の運搬に駆り出されている。一人で一本丸太を当然に普通に運ぶその筋力は、やはりサーヴァント故なのだろうか。その後ろで、運搬用の道具を使って丸太を運んでる立香が若干情けなく見える。

女の子が汗を流して働く健康的な魅力が大好きです（唐突）マシユのスーツは本当にえっちちですからね。魅力も倍増ってもんです。お前ノンケかよお!?

で、ホモ君もこういう手伝いは積極的にしていきましょう。こういう所からの経験値が、後々のレベルアップにつながります。道具う!?

温い事言ってるじゃねえ、素手で行け素手でエ!! あっあっ、スタミナの減りが目に見えて大変な事になっちゃってるヤバイヤバイ…… (即道具落ち)

「お、ちよいこの丸太中腐ってるぞ!」

「仕方ねえだろ! 取り敢えず突貫で準備した奴なんだから一々確認なんて出来るか!」

「姉御お! すいやせん、丸太一本使えません!」

「ああ!? ったく仕方ない……おい!! 追加頼むよー!」

〈余りにも巨大すぎる故、陸地の上に引きずり出すにも一苦労である。巨大な残骸は、態々陸地の上にもまで出してから解体し、細かいパーツに分けてから運搬している。それ故丸太の運搬はフル稼働。その間にも、アステリオスは悠々と海から残骸を引っ張ってくる。〉

「ったく……それで、どうだった? 何か分かったのかい?」

『——アレ自体の解析結果としては……』

『とんでもないテクノロジで作られたんだなって言う事しか分からなかった! うん! 万能の天才にも不可能があるんだねって事を知れて良かった!!!』

「ああ、ソイツあ大変良かった事で」

〈一方の解析班は、イマイチ振るわなかったご様子だが。〉

テクノロジは外宇宙製のモノなんでね。地球とはそもそも技術体系が違う。エネルギー反応やら防御方法は兎も角として、どうやって作られたとかそう言うのを解析しようっていうのが可笑しな話ですな。

「じゃあ使えないのかい?」

『いや、そうではない』

『ふふ、作り方や素材を知らずとも、その活かし方が分からない訳じゃない。どういう風に使えば船を強化できるか……何処のどんなパーツが今、残骸として転がっているのか。そう言ったのは既に理解できているとも!!』

「……そこまで分かっているのにどうやって作っているのかは分からないか。まあ不思議なもんだねえ、アレは」

現代におけるダマスカス鋼と似てますね。加工自体は出来るものの、元のウーツ鋼からダマスカス鋼を作り出す技術は失伝して……って言うのはどうでもいいですね。使いりやええねん（暴論）  
「というか、あんなもんどやって使うんだい」

『ふふ、それに関しては、既にこの万能の天才が設計図を書き始めているからね。期待して待っていてくれたまえ。まあ大半に関しては神代の魔術使い、メディアさんに頼りきりになるだろうけども』  
「えっ?」

〈引き揚げ作業に引き続き、メディアの続投が決定した。ふと思うのだが、この特異点において、密かに一番活躍しているのはメディアなのではないのだろうか。〉

酷使無双（ド直球） キヤスターというのは得てして酷使される者なんですよね。中国然り、東欧然り、ブリテン然り、妖精国然り……妖精国は滅ぼしていい染みなので、アルトリア顔にしておきましょうか。はい。

兎も角キヤスターは基本的に酷使無双されるのは変わりないです。特にメディアさんとかは戦闘面ではない魔術的な能力では群を抜いてヤバいので、つまりほんへとは違い戦闘だけでは済まないこのゲームにおいては……オラツ、酷使！（十三面待ち）

『さて、後で設計図に関しては見せるとして……今は、全ての残骸の回収と、その中でも使えなさそうなパーツの選定が急務だね』

「ああ? 使える奴と使えない奴があるのかい」

『うん。残骸は残骸だからね。劣化の激しい部分も当然あるから』  
「つたく、まるでお宝を見つけた時みたいだねエ」

〈——しかし、それが終われば。ドレイクの見つめる先にあるゴールデンハインドは、決戦に向け、更なる進化を遂げる事になる。遂に、反撃の準備が、整う事になるのだと。〉

まあポセイドンの真体がボロカスになったのってもう何百とかそんなレベルでない位昔ですから。全部使いちゃったらもうポセイドンだけでええやんとなってますし。ここはひとつパーツ選定でもしねえか? すんべすんべ。

まあその前に引き揚げ作業の継続ですけど。

く作業力……ツトオ!!く

く——全員が必死になって引き上げた大量の残骸は、浜辺を埋め尽くす勢いの量だった。とはいえ、この中で使える、と判断されたのは。

『うーん、残骸の内、半分か』

「案外少なかったね。ダ・ヴィンチちゃん」

『正直、これだけのテクノロジーで構成されたモノがここまでダメーシを受けてるとは思ってなかったけど……コレは劣化、というよりは破壊された時に、使い物にならなくなるまでボロボロにされたって方が正しいだろうね』

くそして、そうなってしまった衝撃の事実。こんなサイズの船……か何かと、戦った何かが居たのだという。それこそ、どこぞの星雲からやって来た光の巨人だとかそのレベルじゃないと想像出来ないのだが。

光の巨人(アルテラ) 実際あれって、ウルトラマンだとかそのレベルが出張る案件らしいです。ライダー助けて! (ヒーロー違い) オーマなジオウなら何とかしてしまいたいような気がしないでも……それは兎も角。

「それはいい。んで? 行けるのかい?」

『……うん、ギリギリ想定内だ! という事で此方が船の改良のプランになる。確認して見てくれたまえ!!』

くだが、それでも半分が使えるのなら、と。ダ・ヴィンチが準備していた凶案が空中に投影され……ドレイクが思わず顔を顰めた。

「なんだこりゃ!?!」

『神秘を纏った素材が多いからね。それらを触媒に、高速で移動する為の術を各所に仕込んだ特別製の体……デザインも、序にカッコ良くして見たよん♪』

「……まあ、気に入らない訳じゃないけど正直」

く船体は殆ど赤だったのが、蒼と赤のコントラストに。さらに船の全体は、普通の拳銃の弾丸の様な形状から、ライフル弾に近い姿へと変わり、シャープに。船の様々な場所は、金属の装甲らしきものに

よって覆われている。

原型ないやん(ド直球) でも良い格好だぜえく?(誉め言葉) 昔の船を現代回収しました、って言う感じが出て居てこう、ロマンあふれる格好をしています。というか明らかに突くウゝゝ事を意識した角が船の船体に付いてるのがセクシー……へロイン!!(ラムアタック中毒)

「で? 砲台は?」

『ふふん……無い!!』

「おい」

『けど、搭載できる場所はある。それこそ、この船なら、相手の船から奪った砲台でも全然使えるとも。どうだい、キャプテン・ドレイク……武器を潰してくれた相手から、武器を強奪するつもりは、ないかい?』

▽———そう言われたドレイクの様子は、先程のちよつと困惑した表情から一変し。獰猛な鮫……獲物を発見したそれに変ったのである。

「……成程ね」

『お気に召して貰えたようだ』

「ああ。出来ない事を出来るようにして、無理矢理に解決するのは。それにアタシ好みのやり方で解決できるつてのはね。流石は万能の天才、かい?」

『ふふん。もつと褒めてくれても、構わないよ?』

ダ・ヴィンチちゃんは凄いなあ……(感嘆符) だから二部開幕で死なないでクレメンス……(魂の願い)

と言った所で、今回は此処までとなります。

次回は、船の改修になりますが……ホモ君は多分やる事無いので……何しようか全然決めてないゾ……(池沼) ご視聴、ありがとうございました。  
?

## 其の船の名は その二

皆さんこんにちは、ノンケ(たまご)です。カツコ内にはまつつつたく関係ないのですけれどもそろそろハロウィンイベント再開して欲しいんですよ。多分F G Oの中で二千万のERIちゃんファンがハロウィンイベントを待ち望んでいらつしやる気がすると思うんだけれども。アルトリアに続いて二人目の全七騎を制覇するサーヴァントとなる事を待ち望んでおります。

前回のうらっ!!! (省略) お船の強化プランが決定! 帆も何もクソもいらねえんだよ!! って言うハイテク船になりかねませんが、さて船の改修が間に合うのだろうかという話。メディアさん、オナシヤス!!

「……私、船を造ったことは無いんですけど……えっと」

『ダイジョーブ! この万能の天才に任せたまえ!! ほら、この『ダ・ヴィンチちゃん著作・サルでも出来る神話レベルの船の作り方』を、式部と一緒に読めばあら不思議!! 君達纏めて、あつと言う間に船大工!!』

「私船大工にはなりたくありません!!」

「……やれるだけは、やってみます」

「割とハッキリ『やりたくありません』と言えるタイプのメディア。そして、やれないとは言わず出来る事をやってみるといふ香子。恐らく、そっくりなように見えて、案外とメディアは強い子なのだろう。

『……レオナルド曰く、『道具作成は案外応用が利くから大丈夫!!!』って言う話だったけど、本当に大丈夫なんだろうか』

「それは言っても仕方ないだろう。向こうにはアステリオス含め、応援が行っているからそれが上手くいくことを信じよう……所で君の所の船大工の意見は?」

『何とかしないと鮫の餌』

「……それはどっちが言ったんだろうね」

どっちが言ったにせよ悲しみが広がるのは間違いないと思いました (小並感)

さて此方、ドレイク船長を基本として、ホモ君、の傍らには向こうに行つてしまつた香子とキャットの代わりにデオン君ちゃん。で、ほんへ主人公君とマシユちゃんは基本的にセットで、そしてダビデも何故かここに。

「取り敢えず頭脳労働は全部僕に任せるつて。それに……まあ、うん」  
「？」

「いや、何でもない。ささ、会議を始めようじゃないか」

『……そうだね。じゃあ改めて。船のスペックを考慮しつつ、今まで後回しにしていた問題に目を向けていく事にしたいと思う』

〈そう言つて、ロマニが表示させたのは……この海域のマップ。今まで旅している間に丁寧丁寧丁寧にマップピングをしていたらしい。そして、その中に点が一つ表示される。それは今まで自分達がほぼ接近すらしていなかった……

「この島は……」

『性能チェック代わりに、この島に巣食う謎の生物を潰す。というか……僕らにとつて本来の敵はそっちなんだよ。正直』

「魔神柱……だっけ？ 孔明が言つていたのは」

あ、そうかこのカルデアは、魔神柱の姿形も全く見た事無かつたんでしたっけ。全く唐突に現れた第三勢力にボッコボコにされる敵役恥ずかしくないの？ 恥を知つて欲しいですが、恥を知らない種壺野郎だから仕方ないね（風評被害）

『そうだ。孔明の言つた事が本当かどうか、僕としては疑わしいけど……そこに強力な敵性反応があるのは間違いないんだ。カルデアの一員として、この特異点を形成している原因として間違いない相手を、見逃すわけにはいかない』

「つつても、この島のコイツについては……」

『キャプテン・ドレイクも詳しい事は分からない、ですよね』

〈ドレイクから聞いて分かつている事は……その島は、文字通り化け物共の巣窟となつていてという事である……それは、海岸線も同じこと。先に殲滅した水生生物共の群れとはやはり数が違う。

『その魔の海を突破出来るだけの性能があるか。そして突破できるだ



けの性能があれば』

「本番にも、問題なく臨めるって訳かい」

『はい。それに、イスカンダルの艦隊と、何処で決戦する事になるかも分かりません。不安要素は、減らしておくに限ります』

不安要素扱いされる目玉柱くんエ……今の所、セプテムでは黒幕としてすっかり君臨していた……っばいですが、敗北。今回は企みをカルデアの前で披露する前に敗北。負けてばかりじゃねえかお前ん家い!!

本来はカルデアを苦しめる強敵の筈なのに、どうしてこんな事に……えっ? 柱君は大して怖くなかった? ヘラクレスの方が厄介? そう……(無関心)

「で? その肝心の化け物に関しては、どうやって討伐するつもりだいい?」

〈そう話すロマニに対し、問いかけたのはダビデ。〉

『此方にはサーヴァントが大量に居る。その戦力なら確実に行ける筈ですよ。ダビデ王』

「へえ。凄い自信だなあ」

『寧ろ、これだけの戦力で討伐出来ない相手などそう居ないと思うのですが?』

「ああ、そこを疑ってる訳では無いんだけど……一応僕も、王族だったからね。万が一の事を考えてしまうのは悪い癖なんだよ」

まあ言うてこっちサーヴァント何人いるって言う話ですからね。そもそも牛くんが脱落していない時点で、戦力としてはもう過剰レベルです。うしくんは実質バッファローマンみたいなもんですし、千二百万パワー。ええっ!? エウリュアレちゃんと組んで二千万パワーのトレインを!? それただエウリュアレちゃんを肩に乗せて走り回るだけなのでは? スグルは訝しんだ。

〈ダビデは、通信先のロマニを見つめながら続ける。〉

「そもそも、島から未だ一步も動かない相手に対して、不安要素という発言自体が、不思議と言えば不思議だ」

『……何がおっしやりたいので?』

「当ててあげようか。君は島に居る存在を計りかねている。その上で、君の中の常識やデータで倒せる、と思いたいだけだと思っんだ」  
　　＜そう言われたロマニは……明らかに表情を顰めていた。凶星、なのだろうか。大してそんな表情をするロマニに対し、ダビデはクスクスと笑って見せる。

「まあ、僕としても、こんな一騎当千の英雄だらけならそう考えて仕方ないよね。とは思っただから。責めてる訳じゃないんだよ」

『……』

ろ、ロマニが。上はチベスナ、下は牙を剥くゴリラみたいな、イケメンをドブに投げ捨てたとしてもない表情に、うっそだろお前（ダイソウゲン） ニヤメロン!! そんな表情しちゃいけない!!

「だから、僕としては一つ。提案があるんだ」

『……何ですか提案って』

「いやあ。前に言っただろう？ 僕が女神アルテミスの元に居たのは保護してもらいう意味合いもあるっさ。それに関する物を、今使うのが良いんじゃないかなって」

　　＜それに、ロマニが少し不満を薄め、困惑の方が強くなったのを見て取ってか、彼は更にするりと言葉を続けた。

「僕の宝具には、めっちゃ使い勝手が悪い宝具があっただね。その場所が僕が把握しているんだけど……」

『使い勝手の悪い宝具？』

「うん。『契約の箱』っていうんだけど」

『……はあ!?!』

……そう言えばヘラクレスをぶっ殺すのに使えるところでもない宝具がまだ一個あるのを忘れてましたね。でもアレって使い勝手E—位の糞みたいな物だったような。

『アークって……あの!?!』

「……えっと、ロマニ。あの、って言われても俺は分からないんだけど」

「先輩には私からご説明させて頂きます」

　　＜——マシユ曰く、ダビデが都を構えた際に、其処に運び込まれた

物。モーセが授かった十戒の石板、それを収めた伝説の箱。又は聖櫃。ユダヤ教に置いては、聖遺物と同等以上の価値と歴史を持つ品である、との事。

「まあ伝わってるほどいいもんじゃないよ。僕以外が触れたら問答無用で死ぬし」

〽死ぬんですかい!?

〽聖なる箱とは一体何だったのか……うごごご

それは全くもってそうだと思います。アークって言えば、沢山の映画で扱われたような結構メジャーな題材なのに、どうしてそんな誰でも絶対殺すマンミたいな悪辣な宝具へと変わってしまったのか。コレガワカラナイ。

「でも、相手が動かないって言うなら、それを引っ張っていつてぶつけてやれば良いんじゃないかって、思う訳だ」

『……問答無用で殺す、ですか』

「物騒だよねえー。で、船が出来る前にそれを収納する部屋というか。そう言うのが欲しいカナって、言うのもあって。だって、アークに關してはマジで触ったらヤバイし。運ぶにしても専用の部屋とか無いと、呪われるかなって」

えっ!?! アークをドレイク船長の船に乗せて!?! 出来なあっ!!(尻切れトンボ)

と言った所で今回はここまで。船の試運転で柱をへし折りに行くという話が、なんだかとてもない話になってきました。結局アークの犠牲になる奴は出て来るんやなって……ご視聴、ありがとうございました。

## 幕間：煮えたぎる海賊

その光景、正に御前会議と言えるだろう。

ライダー、イスカンドルを中心に傍に控えるキャスター、諸葛孔明。そしてその前にずらりと並んだサーヴァント達。ライダー、アンとメアリーにその間に堂々と立つ黒髭。その後ろに、バーサーカーのエイリークと、ランサーのヘクトールが控える。

そして、イスカンドルの後ろには……彼らが独自に作り上げた巨大な海図。そこに書き込まれている情報は、最早海図を別の絵画か何かに仕立て上げる程に多い。

「——さて、お主ら。いよいよ決戦の時だ!!」

「と言つても、度重なる襲撃と、我々の誇る二人の提督の強襲で、戦力はほぼそがれていると言つても良い。此方が有利に立っているのは、間違いない」

「ふふ」

「一歩リード、かな？ 黒髭船長？」

そう言つてメアリーに挑発されるが。肝心の黒髭はと言えば……呑気に鼻をほじつて掘り出した中身を吹き飛ばすなどしている。完全にどこ吹く風、といった印象だ。

「……コイツは」

「が……油断をする事はしないで欲しい。未だ、向こうのサーヴァントは一人たりとて討ち取れていない状態なのは間違いない。それに、此方の最悪の懸念である、ダビデの宝具は未だ見つからないとなれば。巻き返される恐れは十分にある」

その言葉に、少し顔を顰めていたメアリーも、改めて表情を引き締め直す。

所詮サーヴァント風情、等と彼らは油断しない。故にこそ、こうしてわざわざ作戦会議の時間を設け、確実に詰ませる為の手立てを模索しているのだから。

「つつてもー」

そんな中……メアリーに代わって口を開いたのは、黒髭である。

「こっちの方が数的に圧倒的有利つしよ。負け筋なんてあるウー？」  
「ある。幾らでもあるとも。筆頭提督殿。その一つとして……」

そう言つて孔明が指し示したのは変生したイアソンが陣取る島。そこには、島のほぼ中心辺りに、バツテンが描かれている。他には、沿岸部にも様々な文言が書かれ、どれだけ彼らがその島を調べて居たか……一目瞭然だった。

「——ここに立て籠もられると、我々としては厳しい」  
「立て籠もるウー？ あんな島にでつか？」

「そうだ。アレは確かに動きもせず、しかし島に侵入した相手を徹底的に攻撃してはいるのだが……いふなればそれだけだ。島の端など、文字通り目の届かない位置には攻撃してこない。結局の所、アレも万能ではない」

もし、アレから逃れられるような場所に立て籠もられたりすれば。自分達は二つの難敵を同時に相手にする事になる、と。眉間に皺を寄せた険しい顔を見れば、どれだけ厳しい事になるかは、凡そ想像もできるといふ者だ。

「ほへへ」

「……それに、相手はあのキャプテン・ドレイクだ」

その孔明が。より、警戒しているのは。

「——あーうん、まあそうつすね。BBAつすね」

「圧倒的有利に立った相手を覆す。そんな分かりやすい英雄譚を持ち合わせた英雄。生きた人物とはいえ、聖杯に選ばれた人物。それがどんな難行によつて為されたかは、此方も把握しきれていないが……一度は、我々もしてやられた」

やはり、敵の頭目の一人。されど、本来の最大の敵であるカルデアではなく現地人であるフランシス・ドレイクをこそ、警戒しているのだ。

「二度目もある、という事ですか？」

「そうだ、アン・ボニー。あの手の英雄は、二度三度と起こして来る奇跡。」

「に、二度三度」

「そうだ。英雄と呼ばれるものは、常に奇跡の一つや二つや三つや四つ、起こしてこそだ。というより、常に奇跡の様な人生を送ってきているだろう、君達の様な輩は」

「んー、否定はしません♪」

アン・ボニーとメアリー・リードの生き方は、正に波乱万丈と言っしかない。それを本人達も十分自覚しているからこそ。普通に何も言う事はせず、取り敢えず黙って撤退したのである。

「……だが、キャプテン・ドレイクに関しては、君達以上だ」  
「へえ」

「彼女は嘗て、イギリスの女王の元、スペイン艦隊を撃破した。一隻の船をではない。艦隊を、だ。数の暴力を、個人の資質が食い破った、史上でも類を見ない、伝説と呼んでいいだろう」

——当時のスペイン艦隊は、最強の名を欲しいままにしていた。オスマン帝国を破り、新大陸からの富を得て、圧倒的な数を誇っていたスペイン艦隊のその総数、空前絶後の百三十隻。装備は全て最新鋭。行くところ敵なしの、そんな艦隊を当時の周辺国は、『無敵艦隊』と呼んで恐れた。

だが……その無敵艦隊を。たった一瞬の隙に付け入り、巧みな策で食い破って見せたイギリスに雇われた、海賊が一人。

「キャプテン・ドレイクは決して単騎で絶対的な力を持つ英雄ではない」

「……ええ」

「……ふーん」

「だが、奇跡の様な人生にさらに奇跡を上塗りして生きている様な、そんな英雄だ。文字通りただの英雄よりも、一つ、二つも格上の英雄に間違いはないだろう」

そこまで孔明は語り。ふと、先程から完全に黙り込んでしまった黒髭の方にすつと目を向けて。

思考を、止めた。

「——よーするにBBAには油断しちゃいけないと。まあ年寄りも基本的に悪知恵働きますからなー、死にゲーでも最後の詰めは重要、孔

明の罫には気を付けろ!! 格言ですなあ!!」

言葉はするする、と回っていつも通り……に、見えるだけだ。

口は裂けたかと思う程開かれ、三日月に開いた口から覗くその歯は獲物を食いちぎる食人鬼の如く。限界まで見開かれたその目は、完全に瞳孔が開き切って、一瞬睨まれているのかと錯覚する程。

だが、恐ろしいのは見た目ではない。それだけの迫力のある顔を見せて置いて、だが彼は間違いなく『歓喜』に打ち震えているのだと、分かかってしまう。

「船長、顔、顔」

「つといけないいけない……紳士フィルター全ツ開!!」

本当に一瞬だけ……あつと言う間に何時もの顔に戻ったが。

しかし、隣のアンは怪訝な表情を見せているし、メアリーは額に手を当ててヤレヤレと言った風に首を振っている。

「ティーチ提督? 些か血の気が昂り過ぎているのでは?」

「んー? いやあ、楽しい楽しい略奪タイムが近いですからなあ、海賊としてはやっぱり胸も股間も躍るといいうか」

「いーよ誤魔化さなくて。ただ、本番でビビる様な事だけはやめてよ。提督」

——一瞬、交わる二つの視線。

「合点了解! 不詳黒髭、メアリーさんの為に、漢見せるでござる!!  
って事で拙者はこちら辺で。作戦には無条件で白旗上げちゃうので」

「はいはい。というか、今の状態じゃ作戦云々なんてどうでもいいだけですよ」

「そうともいうく……行きますぞーエイリーク殿。あ、先生はどうぞこのまま」

「はいはい」

それを最後に、黒髭は会議室に背を向けて歩き出す。止めようとした孔明だが、イスカンドルの手に動きを制され、大きなため息一つを吐いてやめた。というより、孔明も元からポーズとして止めようとしただけであるが。

「全く、とんでもない狂犬！ 故に頼りになるわあの男！」

「私は心配というしかない……本番、どんな事になるか不安だ」

「だが、故にこそドレイクにぶつけるのはあの男しかおるまい。余でも、其処な二人の提督ですら、役者不足よ」

「それに関しては否定しないよ」

思わず、今更ながら首を孔明は撫でた……先ほどの黒髭からは、濃密な殺気すら感じられたのだ。落ちた、と錯覚しそうになるほどに。自分の主を、最高の王であると、彼は疑ってはいない。だが。

この海において。あの海賊に敵う存在など、居るのだろうかと思ふ事はあるのだ。

「——しねーよ立て籠もりなんて。じゃあ箱か？ それもあり得ねえ、博打みたいな暗殺なんぞ、あの女がする訳がねえ……あるとすれば、真っ向勝負、の中に奇策を見出して来るだろうな」

くつくつと、黒髭が笑う。根深く被っていた皮がはがれてしまう程……限界寸前だ。

「今はカルデアが指揮を執ってるが、そろそろBBAに指揮を預ける筈だ……今までは場当たりの戦いに身を委ねて来たが、次はそうもいかねえ。馬鹿じゃねえなら、BBAに指揮を執らせるメリツトの方がデカいと気が付くはずだ……！」

そう言った時は。

掌に力がこもる。胸が躍る。心が弾む。誰でも良いから、ドタマをぶち抜いてやりたくなくなる。この性根だけは死んでも治らなかつたが……寧ろ治らなくて良かった、と彼は思つて居た。

「奴を、殺る」

この燃え滾る殺意は、きつと彼女にぶつけるに相応しい物だと思ふから。



### 其の船の名は その三

皆さんこんにちは、好きなスキルはカリスマ系。ノンケです。取り敢えず、一通りキャラクターは擦ったので、もうちよつと自由の範囲を広げてみようと思います。カリスマ系って絶対に腐らないのでありがたいです。一番好きなカリスマはエリちゃんの奴。範囲がバカ広の上に腐らないカリスマ。さては神かな？

前回の氏（中抜き） ダビデのアークをどうすんの？ あそーれもーつてもーつてもーつてもーつてもーつてもーつてもーつてもーつてもーつて！ 後船の改修。前半が凄い省略されましたね……「——で？」

「……大変申し訳なく思つて居るよ、うん」

『船長をスルーして勝手に相談を進めた事、大変申し訳なくなつております』

「触れただけで死ぬような品物を、アタシの船に、相談も無しに、ね。呪われるかもしれないかな、じゃねえんだよ。オイ優男。アンタの顔を呪われたみたくしてやろうか」

「やっ……」

という事で、さつきからちよつと進んだ後。ドレイク船長の逆鱗に触れた愚か共が正座しております。いや、可笑しいなと思つたんですよ。なんでドレイク船長をスルーして呪われた箱を船に乗せる相談をしているのかなど。まずいですよ！（正論）

「つたく。ソイツは使えるブツなんだね」

「うん。扱い方を間違えなければ……大丈夫、だと思ひます。はい」

「あん？ だと思ひう？」

「間違いなく大丈夫ですはい」

＼ユダヤの民を導く偉大なる王も、伝説の海賊を相手にはどうやらただの三下と化す模様である。ブチ切れドレイク船長のド迫力で、思はず貴方も背景のモブと化し、全力で関わる事を放棄している。

「……まあ火薬も扱い方一つで普通に人も死ぬ。それとおんなじ類だと思ひうかね」

「そうそう!! 火薬とかの方が広範囲を吹っ飛ばせるから余計に危険  
まである!! それを考えれば『契約の箱』は触れなければセーフ!!  
安全!!」

「ドタマフツ飛ばされなくなかったら、それ以上無駄口を叩くんじや  
ないよ」

「あつ、はい」

拳銃のキレが凄い!! クルっと回って気付いた時には眉間に銃口  
!! これは陸軍の二等兵ですね……RYOMA!! (ライダー違い)

『……ふっ』

「笑ってるんじゃないよ元凶その二」

『はいっ申し訳ありません』

〈そしてもう片方は、一応人類の歴史を背負う組織の責任者……の  
筈だったというのに。ユダヤの王様と共に完全にしわしわ電気ネズ  
ミである。下手に逆らったら間違いなく確殺ストンプが待つて居そ  
うだ。

「……つたく……こつからは私が仕切つて話を進める。良いね」

『はい……』

キヤーアネゴー (震え声) まあロマニが仕切るよりもなんか絵に  
なってる気がするのでコレはコレで良いと思います。というかドレ  
イク船長が仕切ると決まった途端に藤丸君の雰囲気若干パリツと  
したのが草も生えない。

「んで、だ。その箱、だっけか。面白い、ぶつけてやろうじゃないか」

「賛成するなら僕が怒られた意味ってある!?!」

「はーん、船の持ち主に筋通さないのは問題無い訳だ?」

「なんでもないです!!」

〈真つ当な正論であつと言う間に一瞬で再び黙らされるクツソ情け  
ないクソ雑魚羊飼いが其処に居た。

「船の一室をその保管庫に変えるとして……どうやって引き上げる  
かは、自分で言いだしたんだから考えてあるんだろうね」

「あー、うん。一応は考えてるけども」

つてそうですよ。『契約の箱』ってマトモに触るのも無理だと思っ

レベルの厄ネタですから、それをどうやって持って行くかとなれば正直……ひでにでも運ばせればいいんじゃないですかね（適当）そんなの『契約の箱』が汚れちゃうだろいい加減にしろ!! ユダヤの方大激怒案件。

「アレって、一応ちよつとだけ動かせるんだ」

「ほー?」

「専用の呪文とか色々唱えろとね。手元に引き寄せられる。それを応用すれば行けるんじゃないか、なんて」

「じゃあ置く為の部屋にアンタを置いて、そこで箱の管理を任せればいい訳だ」

「スツゴイ雑じゃないか!?!」

「<というか、ダビデしか『契約の箱』に触れない以上はそうなるのはほぼ必然だとは思うのだが。そんなどうでもいい事は置いておくとばかり、ドレイクは今度はロマニの方へと視線を向けた。」

「まあ直近の方針はコレで良いとして、だ。カルデアの総大将」

「そ、総大将……ではないんですけど。それで、はい。なんでしょう」「予行演習を終えた後、アタシ達にはデカイ本番が待ってるだろう。それに関しては」

「あ、え、えっと」

遂に予行演習呼ばわりされる柱君エ……でも結局の所、圧倒的な個、しかも移動しない砲台タイプとなれば『契約の箱』の餌食なんですよね。アレの最大の弱点って、動く敵にはまず当たらない、っていう致命的な物なので。それが解決出来てしまうと……そうだお前チエストだからな（一撃必殺）

で、その予行演習を終えた後の本番というと、要するにイスカンドルおじとの決戦ですがさて。

「肝心の本番に関して、案はあるのかい?」

『案、と言われましても……兎に角、あの、上手い事敵本隊との接触は避けて……総大将の居る、本拠地だけを……的なの?』

「そんなテキストなのは案とは言わないんだよこのタコ!!」

『申し訳ありません!!』

「適切なというかフワフワというか。何方にせよ、怒られても仕方ないレベルの受け答えではあった。」

「まったく……それに。本隊との激突を避けるなんざ無理に決まってるだろう」

『む、無理ですか!?!』

「無理だよ。本拠地に居座るにせよ、こっちに戦力と共に突っ込んで来るにせよ、必ず本隊が近くでガツチリ固めてるに決まってるだろう」  
『ぐうの音も出ない本音』

「フオウ……」

フオウ君もよう呆れとる。寧ろイスカンダルが向こうから全軍を率いて押し寄せてくると思うんですけど。ふんどし締めて。大漁旗構えてそう。寧ろ敵の数の方が大量まであるんですけど。根流ししなきや……（使命感）

「——實際船の性能を見なけりゃ詳しい事は分からんとはいえ、大まかな方針だけでも決めておいた方が良さそうだ」

「その心は、キャプテン・ドレイク」

「当然。奴らの懐に飛び込んでぶち壊す。基本はそこからだよ」

「——全員、その直後にドレイクの方を向いたのだ。信じられない、というたつた一言が皆の頭を過っていた。」

「……真っ向勝負!?!」

「懐つてのはアイツ等の領域の事だよ。流石に真っ向勝負なんかするかい。間違はなくこっちが負けるに決まってるだろそんな事したら」  
「あ、そういう」

船長だつたら風に助けられて真っ向勝負でも勝てそうな気がしないでもないです。夜討ち先駆けは武士の誉れ。鎌倉武士かな？ 鎌倉節だね（言葉遊び） 遊んでんじゃねえぞオオン!?!

「集団を少ない数で仕留めるなら、基本的に状況をぶち壊して、掻き乱してどきくさ紛れに頭を取る。それが基本だ」

『そ、それって僕が考えてた……』

「アンタのは一切戦わない前提だろうが」

『あつ、はいそうですね』

「ドレイク曰く。巨大な敵を相手に、一切戦わないのは不可能。一当てして、相手の体勢を出来るだけ乱し、そこからどうやって相手の攻勢を潜り抜けて行くか。それが基本なのだそうだ。」

「それで、だ……おい、さっきの海図を出しな」

『あ、はい分かりました』

完全にロマニが助手見なくなつてて草も生えない。

「——良いかい、この海域。この、奴らが支配してる海域でどういう戦い方をするかで全てが決まる。確か、この辺りの情報は記録してたんだな？」

『は、はい。一応、周辺の海域だとかは、一通り』

「ならそれ全部寄せ。たとえアイツらが無敵の艦隊だろうが、決して叩き潰せないことは無い。アタシが、船の船長として。アンタ等を絶対に勝たせてやる」

——と言った所で、今回は此処まで。コレは太陽を落とした女ですわ。

次回は、ドレイク船長のプランを聞きたい!! から。ご視聴、ありがとうございました。

## 其の船の名は その四

皆様こんにちは、好きなエネミー、一番目はエルダーグール。ノンケです。エルダーグールって初めて出て来た、『らしい』クトウルフ系クリーチャーで。思い出深いんですよね。私はクトウルフ系が好きなので。もつといあ！いあ！したクリーチャー増やそうぜと常日頃から思ってる次第です（真顔）

前回のウーラオス（誤字） ロマニとダビデがセットでシバかれたこと以外は、殆どドレイク船長がカッコいいだけの回でした。そういうのでいいんだよ、そういうので。FGOなんてカッコいい自分の推しの英雄を見るゲームだってハッキリ言われてるから。

「——極端な話だ。選択肢は二つ。一つは、今までのやり方で行くか、もう一つは……大きくやり方を変えてみるか、って話」

「やり方を変える、と申しますと」

「正面からぶち抜く。奴らをね」

「それが出来れば世話は無い……とは、誰も言わなかった。ドレイクの目は、明らかに真剣そのもの。何も考えずに発言したとは、思えなかったからだ。」

「いずれにせよ、『総大将を潰す』っていう方針は殆ど変わりやしないけどね」

「真正面から総大将を潰す、というのは……土台無理じゃないかい？」  
「いや、そうでもないさアタシとしては、アレだけ硬くしかも速いっていう情報が出てるなら。案外話は違うかもしれないと思ってる」

ドレイク船長迫真の視線が獲物を狙う野獣の視線なので、多分、多分ですけど、適当言ってる事は無いと思います。ドレイク船長がそんな汚い（確信）視線する訳ないと思う方。ご安心ください。全力で比喩です。

とはいえ、あんまり無謀な作戦で全滅とかもうこのゲームを恨むしかないレベルなんですか……それはどうなんでしょうね。船長？

「どういう事だい？」

「単純さ。だったら相手が態勢を整える一瞬の隙につけ込んで、一気

にケリを付けるって言う話。文字通りの電撃戦」

「……それこそ、考え無しの突撃なのでは？」

「いいや違うさ、フランスの騎士さんよ。海は地上とは違う。ほんの僅かな速度の差、船の固さが、実は相当デカイ差になって現れる。優秀な船乗りと優秀な船一隻に、普通の船乗りと普通の船十隻がしてやられたなんて、よく聞く話なんだよ」

〈海の上の戦いは、おおむね地上の戦いとは違う流れになる。馬鹿程に戦いが伸びる事もあれば一瞬で全てが海の藻屑と化す。何方に流れるにせよ、ある程度極端になりやすいのだという。〉

「船って言うのは、準備に時間がかかるし、けどあっさり沈む。そりゃあ海の上って言う本来あり得ない所に無理矢理箱浮かべて人乗せようってんだからね」

「えつと……そんな事言つて良いんですかね。船長が」

「船長だからこそだよ。船っていう物の本質を理解してる必要があるのさ」

〈故にこそ。ほんの僅かな船の差が、大きく出るのが海だ。だからこそ。圧倒的大差のある船であるならば……全ての船を振り切つて一点突破も難しくないのだという。〉

MSの性能が戦力の決定的差だつて偉い人も言つていたので間違つては無いとは思いますが。言つて無かつた？ 言つて無くても事実はなつていたので。そうじゃなきや白い悪魔なんて生まれませんよ……。

という事で強化した船の性能に乗つかつてのゴリ押し戦術こそが勝利への道の模様です。ゴリ押し戦術も使う機会をしつかり見極めればいい。世界の戦争なんて割とゴリ押し戦術多いので。

「そう言う訳で、その船の性能次第だ。アンタ等には期待してる」

『んーとはいえなあ。一応加工できない訳じゃないにしても、劣化して漸く加工できるレベルの素材だ。未知数過ぎて、何とか形に出来たレベルになるか、それとも大幅強化になるか。分からないのが万能の天才として悔しいねえ』

「ふーん。それ程のもんだとは。そんなもんが、奴のいた海に埋まつ

てるとは。あのポケが神様だつていうのもあながち……」

〈その神様の遺産をガツチリ利用しに行くというのは、罰当たりと言えば罰当たりな気がしないでもないが。しかし今、自分達にはそれだけの強大な武装が必要と言えば必要なもので、そこは許して欲しい。「つー訳だ!! こっから向こうに攻め込むまでの準備期間、徹底的に船を仕上げるのが第一段階! 船の出来次第に寄っっちゃアタシ達は海の藻屑だ! 気合入れて仕事しな!」

——という事で、ここからなんですけど普通に作業任務が続きます。ただ、それだけを映してもつまらないだろうと開発者側の皆様も配信者映えを考えてくれたのか、ここで自由行動という名の絆イベントの機会も一緒に頂きました。

さて、何方さんと交流いたしましょうか。

と言つても、このタイミングなら一番新入りのキャットが良いでしょうね。という事でキャットー!! 俺だー!! 肉球でモフモフしてくれー!! うおおおおおキャットおおおおおうおおおおおおつ!! (聞きなれたサイレンの音)

「ぬ? ご主人? どうしたのだ?」

〈当然。キャットとデートさ!

〈作業を手伝おうかなつて思つて。

とはいえキモい選択肢を選ぶのもアレなので大人しく下にしておくとして……ここで日和る辺りはやっぱりエンジョイプレイヤーですね。ガチの恋愛攻略プレイヤーだったら上の選択肢をきつと迷わず選んでいたでしょう。ヴォエツ! (自己嫌悪)

「ふむふむ? 別に構わヌが……? キャットの作業は超ド級、最早ご主人では周回遅れも視野なのだな」

〈確かにサーヴァントの馬力と人間の馬力では比べるべくもないが……しかしながら、此方には特殊パワーが! と、そこまで言おうとして、貴方は自分の能力が制限されているのを思い出した。

〈くっ、これでは俺がただの無力なハゲチンピラではないか……ッ!

〈とはいえ人間の力を舐めてはいけない。重い荷物とてこの通り!!



一応下選択肢を選んでおきましたが、皆さまは大人しく上を選んでおきましょう。サーヴァントの皆の足手まといになるだけなので（現在進行形）くっ、幾ら能力値に補正をかけているとはいえ、人間の能力なんてこんなもんか……っ！

まあこういう事も筋力とかを上げるトレーニングにはなるので悪くはないですが。プレイヤーキャラは苛め抜いてこそだよなあ!？」

「……ご主人」

「必死になって持ち上げて。それでもどうしようもない……やはり人間は無力なのか。そう思っただけであきらめかけた所で。貴方の肩にゆっくりと手が置かれた。首を傾げた瞬間に貴方は、なんでかキャットに担がれていた。」

「うー……どうして荷物じゃなくてホモ君を担いでしまうのか。というかホモ君の担いでる荷物諸共持ち上げてるんですがそれは……流石サーヴァント。偉い人間なんぞよりもよっぽど頼りになるというもんです。」

「というか、なんで持ち上げられているんでしょうか。もはや主人を説得できぬから主人諸共荷物持った方が早いと思われたんでしょうか。」

「まあまあ、取り敢えず良いではないか良いではないかお主……悩んでいるのがあんまりにも丸見えだゾ？」

「悩んでなんかないません。私は賢いので。」

「何に悩んでいるというのか……貴女は教えてくださるのか。」

「どうして質問に質問で返す必要があるのか分かりますけども。だからといってフレンズになるのも違うと思うんですよね。」

「こんなゴツイホモハゲがフレンズになったらお友達泣いちゃいますよマジで。という事でホモ君には殺人鬼にブチ切られて粉砕される役目を背負って頂きましょうか。という事で選択肢下。」

「構わぬ構わぬ。誤魔化すでない。この女将キャットに全てを委ねるがヨイ……具体的ににはいきうなどで温もりティ溢れる抱き締め方をしてやるゾ？」

「正直キャットの肉球は魅力的ではあるのだが。そんな悩んでいる

様に見えるだろうかと貴方は笑った。頑張つて仕事も出来ている訳であるから、そんな滅茶苦茶に悩んで手にもつかない、という訳では無いのだけでも。

「にゅふふ、不思議という顔をしておるな？ キャットは海千山千のコミュ強者。ご主人が落ち込んでいるのなんて丸つとキャット、お見通しである。酒が進めばお通しも出す故楽しみにして参れ？」

酒は一切飲んでいませんけど。

あのタマモの切り離れた尾の一部という事で流石のキャットです。人の心を見抜く事にかけては他のサーヴァントよりも先んじているという事でしょうか。ホモ君が悩んでいるとかそう言う情報一切……いや、もしかしたら能力を封じられた事について悩んでいるのかもしれない（適当）

∨……実際、悩んでいる事があるのは確かだ。けど、それはデオンに自分で解決すると言いきった事だから。と貴方は話し。それを、キャットは何処か楽しそうに尻尾と首を振りながら聞いていた。

「流石ご主人、自分で解決しようと言うのは当たり前、正しき事よのお」

老人っぽい……老人ぽくない？（真正直） これもまた大化生として長生きして来たタマモの分け身らしい要素と言えない事も……あつ、なんででしょう。何処か遠くで呪われたような気がしないでもないのだから以上は止めておきましょうか。

「……されどお主、健康意識のスムーズージーばかりでは心は満ちても腹は満ちぬ。ジャンクフードも腹のうるおいには必要ダゾ？ のう、お主……アドバイスが欲しい力？」

欲しいっ！（強欲で貪欲な壺）

と言った所で、今回はここまで。次回はキャットのアドバイスを貰う所からですな。

ご視聴、ありがとうございました。

## 其の船の名は その五

皆さんこんにちは、エクスカリバーより、ロンゴミニアドの方が好き、ノンケです。基本的に武器ジャンルでは槍が好きなんです。とは思いますが。でもどうしてか槍は悉く噛ませ犬にされるのがどうにも納得がいかず……武器の王を舐めるな、

前回のあらすじ(疾風怒濤) ドレイク船長曰く、海は船の性能でゴリ押せるとの事であればそうしようという事になりました。ではその準備をしようと頑張るついでにキャットと戯れて居たら『丸ツとお見通しだゾ?』との事。流石年の功ですねぇ!! アツタマモさん決してあなたが歳を取っているとかそう言う……

▽——アドバイスが欲しいか? という言葉に対して……貴方は首を縦にも横にも触れなかった。自分で解決する、というなら。アドバイスを貰うというのも、あまり良い事ではないのではないか。しかし……答えは出て居ない。

「にゅふふ、お忠言に悩むか。実に若い悩みであるのう……若い事は良い事である。勢い任せに牛丼を掻きこみコーラで流し込む、そのままに悩みも呑み込み切れぬ、その何とも言えぬ律義さもGOOD」  
確かにそれは若い……じゃなくて。

ただの交流イベントの筈なのに、どうしてキャット姉さんに自分の悩みを相談しているのでしょうか。絆上げてそう言う事じゃないんですけど。もっとこう、ラブはイベントは無いものか。あ、無い。はい。

「されどそれで悩み続けるのは些かBAD。もっとクレイジーに、もっとストライクに、さもなくばお主が牛丼になって紅シヨウガ塗れ、美味しく頂かれて終わりでゴザル」

▽流石にそれは勘弁いただきたいのだが。そんなに肉は付いてないし、付いていても筋肉なのでそこまで美味しい訳でもないだろうが。それよりも、自分の悩み事に気を取られていたら怪我をしそうになるのは、間違いない。

「聞いたからとて解決するかはご主人次第。キャットのお得アドバイ

ス、今なら九割引きでお得もお得であるぞ？ 聞かなきゃ新春損損シヨである！」

〽アドバイスを聞いてみる。

〽男は黙って孤独に生きるべし。

選択肢にまでどうしてそんな脳筋馬鹿みたいな選択肢が……選ばなくていいしエンジョイプレイでも効率重視していききたいので当然上なんですよね（流水が如し）

……所で、この選択肢次第でホモ君の死亡確率が高まるとかありませんよね。いや、やるんですよFGORPG。BBホテツプちゃんとか仲間にしてますとね？ 選択肢次第で即ガメオベラなんて日常茶飯事な訳ですよ。

因みに一緒に居るとガメオベラる可能性のあるサーヴァントは、バゲ子、アビー、酒吞と後は……あのすみません、もうこれ羅列してるだけで大分時間とるのでやめますね。少なくとも十数人はいます。危ないサーヴァントばかりじゃねえかお前ん人理修復ウ!! 「ウム、では猫からの贈り物、ゴールデン猫缶である、ありがたく拝領するがよい……ズバリ！ 向き合う事！ お主はそれを本当に理解して来た！」

〽向き合う事。それは、自分だろうか。それとも……分からない。しかし、もつとわからないのは。理解して来たという言い方。理解していない、というのであれば、話の流れからわかるが。

「故に！ である！ 深淵は常にお主を見返し、深淵を理解したからこそアイデア問答無用大成功SAN値ゼロ、心理分析も手遅れなのだな」

それはもうキャラシート破棄しろってレベルの状態なのではないんですかね。とは思えないので恐らくキャットの比喩表現だと思えます。もしかしてフォーリナーハーレム作ろうとしたのかな？ それなら納得！ とか思った方、もう手遅れなのでCOCとFGO、繰り返して、やろう！

「という事でお主、先ずは理解した事を理解する事より始めるべし」

〽なんだか禅問答の様なアドバイスだが……キャットの目は、酷く

真剣だ。どうやら、至極本気の事を言っているらしい。貴方は、取り敢えずその言葉に頷いた。

「――どうだ？ キャットアドバイス、お主の心にGOODになったかね？ 修行僧よ」

ホモ君は剥げてるけど坊さんじゃないってそれ一。こんな角生やして喜々として動く骨とかドラゴンとかぶっ潰すハゲなんて間違はなく破戒僧だと思うんですけども。求道者としてもうちよつと高潔にならなきゃいけないのかもしれない……

うるせえ!! ホモ君のレベルをもつと上げないといけないんだよオ!! それに比べりや高潔さなんてクソですよクソ！（人類悪顕現）

＜＜参考になりそうだ。

＜＜うーむちよつと曖昧過ぎるやもしれん。

という事で高潔にはなれませんが、取り敢えずホモ君には自分の事を見つめ直していただくとします。おらっ！ 振り返れっ！ 振り返りつてどうやれば良いんですか（指示待ち人間） 上の選択肢選んでおけばいいですか。

＜……取り合えず、参考にしてみる、とだけ返した貴方に、キャットは何度が頷いた。今はそれでいい、とでも言いたげに。それからもう一度丸太を担いで……

「所でこの丸太、一体何に使うかキャット疑問。ご主人は分かるか？」

＜思わずズツコケた。さつき迄アレだけ饒舌に色々語っていたのが急に頼りなく見えてきてしまうのは……それもキャットらしいと言えばらしいか。折角アドバイスを貰ったのだから貴方はこれまで以上に頑張らねばならぬと、再びクソ重たい丸太を担ぎ上げた。

まあ屈強な船一つ作るのにデカイ丸太が何の役に立つかと言われると確かに不思議っちゃ不思議ですよね。とはいえドレイク船長の船は元から木製なので、ベースを強化する為にも木材は必須なのでしようかと。

さて、取り敢えず船を完成させるまで何はともあれ素材集めなので……お船完成までは豪快にカットしましょうか。

くカ……ツトオ!!く

という事で、完成いたしました。メツチャキヤスター（主にメデイアさん）をこき使つて出来上がりしました改修型ゴールデンハインドでございませう。因みにどういう風に製作されたのかは全く分かりません（正直） だつてずっと素材集めさせられてただけなんでもんよ……

とはいえ完成した船を見れば素材を集めた甲斐もあるつてもんです。紅い船体を基準に前面に金属光沢を放つ蒼い装甲が美しく、マス卜部分なんかも蒼い金属で補強されていたりしてます。なんかオーパーツっぽい雰囲気が出てカッコいいと思つた（コナミ）

「壮観だねえこりゃあ……ここまで豪快に金属で覆われてると」

「確かに。でもコレ、マトモに海を走るんですかい？」

「ダ・ヴィンチ？」

くドレイクの問いに、ホログラムに浮かんだダ・ヴィンチがサムズアップで返した。

『風を受けて走る船だけど、その風を受けた時に風の力を倍増、いやそれ以上にさせる術式を組み込んである。この素材そのものが相当に神秘を身に纏つてる素材だから出来た荒業だけど、速さは保証するとも』

「ほーん。普通の船よりは速い、と考えて良いんだね？」

『間違いなく二倍近くは速く走れるさ……と、断言したいけど。あくまで計算上の話だからね。実際はもうちよつと落ちると思うよ』

「十分。他の船のより速く動いて、固い。それだけでも脅威だ」

ブースターとか付けないで風の力を増幅させて加速するついでに辺りが魔術っぽいなと思ひました。基本的に魔術はそんな滅茶苦茶な事を簡単に出来る訳ではないです。滅茶苦茶な事をやるには凝つた術とかが要りますし。

とはいえ、風の力を倍増させる、つて言うのも結構な魔術だとはダ・ヴィンチちゃんも言っている通り。正に最終決戦に相応しい兵器と言えるでしょう。

「で、これには全員を乗せても全く問題はないのか？」

『アステリオスを含め、船員全員載せてもビクともしないさ、それに……この船は全員を乗せる前提で設計してあるからね』

「というと？」

『船にサーヴアントが乗っているその数だけ、この船は強化されるのさ』

〈その言葉に、ドレイクがちらりとダ・ヴィンチの方を見る。不敵に笑うダ・ヴィンチの表情は、明らかに自信アリ、とばかりに満面の笑み。カルデアのメンバーですら、そんな仕掛け全く知らない。

「そりゃあ凄いね」

『口で説明すると長くなっちゃうからしないけど、その強化具合はとびきりだとも。ドレイク船長の作戦を聞いてから、余り持久戦とかを考えない、文字通り短期決戦仕様になってるからね』

なんか黒髭みたいな船の性能してんなお前。まあそんな事姉御が知ったらこの船ぶち壊しにしかねないので多分言っても言わないと思いますけど。

「成程、良い細工だ。万能の天才ダ・ヴィンチ作の名に恥じない名作だ」

『そうだろう？　そして作品を作り上げた者として、この船には新しい名前を与えて欲しいんだ。君の手でね。船長』

「……そうだねえ」

〈蒼い鋼に覆われた赤い船体を見上げ……ドレイクは一瞬、顎に手を当てて、それから得心したように呟いた。

「——いいや、名前は変えない。ゴールデンハインドで行く」

『おや、そうなのかい？』

「奴らには……元の船を滅茶苦茶にされたからね。そのリベンジだ。ゴールデンハインドでやってやらなきやあ、気が済まない」

〈そう言い切ったドレイクの瞳には……燃えるような輝きが、宿っている様に見えた。

と言ったドレイク船長のリベンジ宣言を背後に、今回はここまでとなります。ご視聴、ありがとうございました。